小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第17集

三子塚遺跡群　　宮ノ反A遺跡群　　大塚原遺跡群

東下原・大下原・竹花・舟窪・大塚原

―― 長野県小諸市東下原・大下原・竹花・舟窪・大塚原遺跡発掘調査報告書 ――

1994. 3

小諸市教育委員会

報告書抄録

ふりがな	みつごづかいせきぐん ひがししもはら おおしもはら みやのそりえーいせきぐん たけのはな ふなくぼ おおつかはらいせきぐん おおつかはら
書名	三子塚遺跡群　東下原・大下原　宮ノ反A遺跡群　竹花　舟窪　大塚原遺跡群　大塚原
副書名	長野県小諸市東下原・大下原・竹花・舟窪・大塚原遺跡発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第17集
編著者名	小渕武一・金子浩昌・平川南・古尾屋知浩・花岡弘他
編集機関	小諸市教育委員会
所在地	〒384　長野県小諸市相生町三丁目3番3号
発行年月日	西暦1994年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
みつごづかいせきぐん 三子塚遺跡群 ひがししもはらいせき 東下原遺跡	こもろし ひらはら 小諸市大字平原 ひがししもはら 字東下原	20208	151	36°18′36″	138°27′51″	19910513- 19910619	632m²	国道141号線 バイパス建設
みつごづかいせきぐん 三子塚遺跡群 おおしもはらいせき 大下原遺跡	こもろし ひらはら 小諸市大字平原 おおしもはら 字大下原		151	36°18′30″	138°27′36″	19891125- 19891219 19900405- 19900523	8,367m²	
みやのそりいせきぐん 宮ノ反A遺跡群 たけのはないせき 竹花遺跡	こもろし みかげ 小諸市大字御影 しんでん たけのはな 新田字竹花		193	36°18′15″	138°27′38″	19900524- 19901109 19910902- 19911031	5,785m²	
ふなくぼいせき 舟窪遺跡	こもろし みかげ 小諸市大字御影 しんでん ふなくぼ 新田字舟窪		194	36°18′08″	138°27′50″	19911021- 19911212	3,375m²	
おおつかはらいせきぐん 大塚原遺跡群 おおつかはらいせき 大塚原遺跡	こもろし みかげ 小諸市大字御影 しんでん おおつかはら 新田字大塚原		197	36°18′05″	138°27′56″	19910619- 19910831	1,936m²	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
三子塚遺跡群 東下原遺跡	集落跡	古墳時代後期 平安時代	竪穴住居址　2 掘立柱建物址　5 溝址　1 土抗　1	土器・石器品・炭化材	
三子塚遺跡群 大下原遺跡	集落跡	古墳時代前期・後期	竪穴住居址　13 掘立柱建物址　10 溝址　5 土抗　1	土器・金属製品・石製品・土製品・炭化材	
宮ノ反A遺跡群 竹花遺跡	集落跡	古墳時代～平安時代	竪穴住居址　114 掘立柱建物址　86 溝址　6 土抗　8	土器・金属製品・石製品・土製品・銭貨・動物遺体・炭化種子・炭化材	遺構の密度が高い土製模造鏡、「富寿神宝」、漆紙文書、円面硯などが出土
舟窪遺跡	集落跡	古墳時代後期～平安時代	竪穴住居址　21 掘立柱建物址　33 ピット　2 土抗　1	土器・金属製品・石製品・炭化材	飛鳥II～III期の畿内系暗文杯が出土
大塚原遺跡群 大塚原遺跡	集落跡	古墳時代後期～平安時代	竪穴住居址　35 掘立柱建物址　52 溝址　3 土抗　1	土器・金属製品・石製品・動物遺体・炭化材	遺構の密度が高い飛鳥II期の畿内系暗文杯、円面硯が出土

小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第17集

三子塚遺跡群　　宮ノ反A遺跡群　　大塚原遺跡群

東下原・大下原・竹花・舟窪・大塚原

―― 長野県小諸市東下原・大下原・竹花・舟窪・大塚原遺跡発掘調査報告書 ――

1994. 3

小諸市教育委員会

右：本来の文書（裏焼）第１断片

左：別の紙に転写されたもの　第２断片

竹花遺跡出土漆紙文書

序　　文

小諸市教育委員会
教育長　矢　嶋　正　一

国道141号バイパス建設に先立ち、平成元年～３年にかけて、三子塚遺跡群東下原・大下原遺跡、宮ノ反Ａ遺跡群竹花遺跡、舟窪遺跡、大塚原遺跡群大塚原遺跡の五遺跡の調査が行われました。これらの遺跡は、市内東南部の平原区、一ッ谷区に位置し、田切り地形にはさまれた台地上に存在します。

調査の結果、古墳時代～平安時代の竪穴住居址189棟、掘立柱建物址186棟などが見つかりました。中でも、竹花遺跡では竪穴住居址114棟、掘立柱建物址86棟とそれぞれ全体の60％、46％を占め、集中が窺われます。

一方、出土遺物では、県下で二例目の漆紙文書をはじめ、全国的でも数少ない鈴鏡を模した土製模造鏡、大井郷の一端を示すと考えられる「大井」と書かれた墨書土器、カジキ類の椎骨などが特筆されます。また、古墳時代から平安時代の土器では、駿河、甲斐、武蔵、畿内地方との交流、関連が明らかとなりました。これらの資料から、彼我の地との人々の往来を偲ぶことができます。本書が、古代史研究に少しでも稗益となれば幸いです。

調査にあたられた小渕武一団長をはじめ、調査員、参加者の皆さん、御多忙中にもかかわらず、玉稿を賜りました平川　南先生、金子浩昌先生に厚く御礼申し上げ、序に代える次第であります。

例　　言

1　本書は、平成元～３年にわたり発掘調査された、長野県小諸市大字平原字東下原、字大下原・西下原所在の三子塚遺跡群東下原遺跡、同・大下原遺跡、大字御影新田字竹花所在の宮ノ反Ａ遺跡群竹花遺跡、大字御影新田字舟窪所在の舟窪遺跡、大字御影新田字大塚原所在の大塚原遺跡群大塚原遺跡の発掘調査報告書である。

2　本調査は、佐久建設事務所の委託を受け、小諸市教育委員会が実施した。

3　本調査は、小渕武一を調査団長とし、花岡　弘、星野保彦を発掘担当者とし、長野県考古学会員、有識者を調査員とし、地元平原区、一ツ谷区、御代田・小諸広域シルバー人材センターのご協力を得て実施した。

4　遺構実測図の作成は、次の者が行なったほか、新日本航業株式会社の協力を得た。
小渕武一、井出喜八、鳥居　亮、太田史夫、小野山　清、松本甲子雄、山浦　実、相場さ代子、佐藤君代、伴野有希子、柳沢宏幸、小山内玲子、小田中　光、柏木建司、片瀬欣仕、片瀬七郎、児玉明聡、小林真樹、小林善然、小山　玲、塩川拓也、土屋岳宏、中村輝幸、林　通人、山崎雄貴、星野保彦、花岡　弘

5　遺構実測図のトレースは、太田史夫が行なった。遺物実測図の作成・トレースは、岡田悦子、塩川峰子、古谷里江、花岡　弘が行なったほか、株式会社パスコ、有限会社やまいちやの協力を得た。

遺構・遺物の写真撮影は、小渕武一・鳥居　亮・太田史夫・星野保彦・花岡　弘が行なった。

本書の執筆は、第Ⅱ章１を小渕武一が、他を花岡　弘が行なった。

本書の付編については以下の各位より玉稿を賜わった。
平川　南・古尾谷　知浩　「竹花遺跡第４号土坑出土の漆紙文書について」
金子浩昌　「竹花・大塚原遺跡出土動物遺体の種類」
浅麓環境施設組合　「竹花遺跡第66号住居址出土土器付着物の組成分析結果について」
パリノ・サーヴェイ株式会社　「竹花遺跡第40号住居址出土炭化米の同定・計測結果報告」
パリノ・サーヴェイ株式会社　「土器に塗付された黒色物質の成分分析」

パリノ・サーヴェイ株式会社　「大下原遺跡第8号住居址・竹花遺跡第4号住居址から検出された赤色物質の素材について」
パリノ・サーヴェイ株式会社　「大塚原遺跡第2号住居址出土の青色物質の素材について」
パリノ・サーヴェイ株式会社　「過去の植物利用について」

9　本書の編集は、太田史夫・花岡　弘が行ない、小渕武一がこれを校閲、監修した。

10　本遺跡の出土資料は、小諸市教育委員会の責任下に保管されている。

発掘調査および報告書作成に際しては、次の方々に御指導・御配慮・御協力を賜わった。ここに御芳名を記して厚く御礼申し上げる（50音順、敬称略）
市川隆之、市沢英利、市村元昭、植田　真、臼田武正、大谷祐司、岡田耕一、角張淳一、加藤修司、児玉卓文、小山岳夫、佐藤正雄（静峰）、杉江　敬、立花　実、田中広明、田野倉武男、辻本崇夫、堤　隆、鶴原　明、寺島俊郎、服部敬史、原　明芳、福田健司、松村恵司、水田稔、柳沢光義

（関係機関）　御代田町教育委員会、浅麓環境施設組合、株式会社パスコ、パリノ・サーヴェイ株式会社、新日本航業株式会社、有限会社やまいちや、有限会社堀籠重機

凡　　例

1　各遺構の略号は、次のとおりである。
竪穴住居址――SB　掘立柱建物址――ST　溝址――SD　土坑――SK　ピット――P

2　遺構実測図の縮尺は、次のとおりである。
竪穴住居址・掘立柱建物址・土坑・溝址断面――1/80　カマド――1/40　溝址――1/200（但し、第23図は1/160、第61図は1/500、第62図は1/400）遺構全体図――1/500（但し、第28図は1/400）

3　遺物実測図の縮尺は、次のとおりである。
土器――1/4　土器拓影、石器、鉄製品、土製品――1/3　土製・石製紡錘車、玉類、銅製品、銭貨、石製模造品――1/2（但し、第65図2は2/3）　打製石鏃――2/3　石臼などの大型品――1/6（但し、第372図は5は4/15、第544図2は1/5）

4　遺構平面図における点のスクリーントーンは、竪穴住居址ではカマド・炉址・焼土を、掘立

柱建物址では柱痕を示す。他のスクリーントーンは、次のものを表わす。

——粘土　 ——灰

5　土器実測図において断面を黒塗したもの、点のスクリーントーンを貼付したものは須恵器・青磁を表わす。

他のスクリーントーンは次のものを表わす。

——黒彩土器・墨痕　 ——黒色土器　 ——灰釉陶器

——赤色塗彩・朱墨

6　水糸レベルの原点は、次のとおりである。

東下原遺跡——737.838m、大下原遺跡——730.781m・730.977m・731.211m、竹花遺跡——724.699m・725.532m・727.138m・724.978m・728.684m・729.301m・729.505m・728.584m、舟窪遺跡——732.448m・732.588m・732.868m、大塚原遺跡——730.601m

7　図版中、遺物の縮尺は、次のとおりである。

土器・石臼等——約1/4　砥石、石器、鉄製品——約1/3　土製・石製紡錘車、石製模造品、玉類、銅製品、打製石鏃、銭貨——約1/2

8　図版中では遺物番号を簡略化した。例えば、第25図1は25－1と表わす。

9　出土土器一覧表の法量は、上から口径、高さ、底径の順に記載し、——不明、（　）現存値あるいは推定値、●丸底を表わす。

10　土層および遺物胎土の色調は『新版　標準土色帖』の表示に基づいて示した。

本文目次

巻頭図版
序　文
例　言
凡　例
本文目次
付表目次
挿図目次
図版目次
I　発掘調査の経緯……1
1　調査に至る動機……1
2　調査の概要……2
3　調査の経過……3
4　調査の方法……3
II　遺跡の概観……5
1　遺跡の自然的環境……5
2　遺跡の歴史的環境……7
III　層　序……10
IV　遺構と遺物……11
1　東下原遺跡……11
(1)　竪穴住居址……11
1）第1号住居址……11
2）第2号住居址……12
3）第3号住居址……15
4）第4号住居址……16
5）第5号住居址……17
6）第6号住居址……19
(2)　掘立柱建物址……20
1）第1号掘立柱建物址……20
2）第2号掘立柱建物址……20
3）第3号掘立柱建物址……21
4）第4号掘立柱建物址……22
5）第5号掘立柱建物址……22
(3)　溝　址……23
1）第1号溝址……23
(4)　土　坑……24
1）第1号土坑……24
(5)　遺構外出土遺物……24
2　大下原遺跡……29
(1)　竪穴住居址……29
1）第1号住居址……29
2）第2号住居址……30
3）第3号住居址……32

4）第4号住居址……33
5）第5号住居址……34
6）第6号住居址……35
7）第7号住居址……37
8）第8号住居址……39
9）第9号住居址……40
10）第10号住居址……42
11）第11号住居址……43
12）第12号住居址……45
13）第13号住居址……46
(2) 掘立柱建物址……48
1）第1号掘立柱建物址……48
2）第2号掘立柱建物址……48
3）第3号掘立柱建物址……49
4）第4号掘立柱建物址……50
5）第5号掘立柱建物址……51
6）第6号掘立柱建物址……51
7）第7号掘立柱建物址……52
8）第8号掘立柱建物址……52
9）第9号掘立柱建物址……53
10）第10号掘立柱建物址……53
(3) 溝　址……54
1）第1号溝址……54
2）第2号溝址……54
3）第3号溝址……58
4）第4号溝址……58
5）第5号溝址……58
(4) 土　坑……59
1）第1号土坑……59
(5) 遺構外出土遺物……59
3　竹花遺跡……62
(1) 竪穴住居址……62
1）第1号住居址……62
2）第2号住居址……63
3）第3号住居址……64
4）第4号住居址……66
5）第5号住居址……67
6）第6号住居址……71
7）第7号住居址……72
8）第8号住居址……74
9）第9号住居址……75
10）第10号住居址……76
11）第11号住居址……78
12）第12号住居址……80
13）第13号住居址……83
14）第14号住居址……85
15）第15号住居址……86
16）第16号住居址……86
17）第17号住居址……88
18）第18号住居址……89
19）第19号住居址……90
20）第20号住居址……92
21）第21号住居址……94
22）第22号住居址……96
23）第23号住居址……98
24）第24号住居址 ……101
25）第25号住居址 ……102
26）第26号住居址 ……105
27）第27号住居址 ……106
28）第28号住居址 ……109
29）第29号住居址 ……111
30）第30号住居址 ……112
31）第31号住居址 ……114
32）第32号住居址 ……116
33）第33号住居址 ……119
34）第35号住居址 ……120
35）第36号住居址 ……122

36) 第37号住居址 ……125
37) 第38号住居址 ……126
38) 第39号住居址 ……129
39) 第40号住居址 ……130
40) 第41号住居址 ……132
41) 第42号住居址 ……133
42) 第43号住居址 ……135
43) 第44号住居址 ……137
44) 第45号住居址 ……138
45) 第46号住居址 ……141
46) 第47号住居址 ……143
47) 第48号住居址 ……144
48) 第49号住居址 ……146
49) 第50号住居址 ……149
50) 第51号住居址 ……151
51) 第52号住居址 ……151
52) 第53号住居址 ……153
53) 第54号住居址 ……154
54) 第55号住居址 ……157
55) 第56号住居址 ……159
56) 第58号住居址 ……160
57) 第59号住居址 ……161
58) 第60号住居址 ……162
59) 第62号住居址 ……165
60) 第63号住居址 ……169
61) 第64号住居址 ……170
62) 第65号住居址 ……172
63) 第66号住居址 ……173
64) 第67号住居址 ……175
65) 第68号住居址 ……177
66) 第69号住居址 ……178
67) 第70号住居址 ……179
68) 第71号住居址 ……181
69) 第72号住居址 ……182
70) 第73号住居址 ……183
71) 第74号住居址 ……184
72) 第75号住居址 ……186
73) 第76号住居址 ……187
74) 第77号住居址 ……189
75) 第78号住居址 ……190
76) 第79号住居址 ……194
77) 第80号住居址 ……195
78) 第81号住居址 ……201
79) 第82号住居址 ……202
80) 第83号住居址 ……203
81) 第84号住居址 ……204
82) 第85号住居址 ……206
83) 第86号住居址 ……210
84) 第87号住居址 ……211
85) 第88号住居址 ……212
86) 第89号住居址 ……213
87) 第90号住居址 ……215
88) 第91号住居址 ……216
89) 第92号住居址 ……217
90) 第93号住居址 ……218
91) 第94号住居址 ……220
92) 第95号住居址 ……222
93) 第96号住居址 ……223
94) 第97号住居址 ……224
95) 第98号住居址 ……225
96) 第99号住居址 ……226
97) 第100号住居址……227
98) 第101号住居址……228
99) 第103号住居址……229
100) 第104号住居址……230
101) 第105号住居址……232
102) 第106号住居址……234
103) 第107号住居址……236

104) 第108号住居址……237
105) 第109号住居址……238
106) 第110号住居址……239
107) 第111号住居址……240
108) 第112号住居址……242
109) 第113号住居址……243
110) 第114号住居址……245
111) 第115号住居址……246
112) 第116号住居址……248
113) 第117号住居址……249
114) 第118号住居址……250
(2) 掘立柱建物址 ……251
1) 第1号掘立柱建物址 ……251
2) 第2号掘立柱建物址 ……252
3) 第3号掘立柱建物址 ……253
4) 第4号掘立柱建物址 ……254
5) 第5号掘立柱建物址 ……254
6) 第6号掘立柱建物址 ……256
7) 第7号掘立柱建物址 ……259
8) 第8号掘立柱建物址 ……259
9) 第9号掘立柱建物址 ……259
10) 第10号掘立柱建物址 ……262
11) 第11号掘立柱建物址 ……262
12) 第12号掘立柱建物址 ……263
13) 第13号掘立柱建物址 ……263
14) 第14号掘立柱建物址 ……264
15) 第15号掘立柱建物址 ……265
16) 第16号掘立柱建物址 ……265
17) 第17号掘立柱建物址 ……265
18) 第18号掘立柱建物址 ……266
19) 第19号掘立柱建物址 ……267
20) 第20号掘立柱建物址 ……268
21) 第21号掘立柱建物址 ……269
22) 第22号掘立柱建物址 ……269
23) 第23号掘立柱建物址 ……270
24) 第24号掘立柱建物址 ……270
25) 第25号掘立柱建物址 ……271
26) 第26号掘立柱建物址 ……271
27) 第27号掘立柱建物址 ……272
28) 第28号掘立柱建物址 ……273
29) 第29号掘立柱建物址 ……274
30) 第30号掘立柱建物址 ……275
31) 第31号掘立柱建物址 ……276
32) 第32号掘立柱建物址 ……276
33) 第33号掘立柱建物址 ……276
34) 第34号掘立柱建物址 ……280
35) 第35号掘立柱建物址 ……281
36) 第36号掘立柱建物址 ……282
37) 第37号掘立柱建物址 ……283
38) 第38号掘立柱建物址 ……283
39) 第39号掘立柱建物址 ……283
40) 第40号掘立柱建物址 ……285
41) 第41号掘立柱建物址 ……285
42) 第42号掘立柱建物址 ……286
43) 第43号掘立柱建物址 ……286
44) 第44号掘立柱建物址 ……287
45) 第45号掘立柱建物址 ……288
46) 第46号掘立柱建物址 ……288
47) 第47号掘立柱建物址 ……289
48) 第48号掘立柱建物址 ……289
49) 第49号掘立柱建物址 ……289
50) 第50号掘立柱建物址 ……289
51) 第51号掘立柱建物址 ……290
52) 第52号掘立柱建物址 ……290
53) 第53号掘立柱建物址 ……291
54) 第54号掘立柱建物址 ……292
55) 第55号掘立柱建物址 ……292
56) 第56号掘立柱建物址 ……293

57）第57号掘立柱建物址 ……294
58）第58号掘立柱建物址 ……294
59）第59号掘立柱建物址 ……294
60）第60号掘立柱建物址 ……295
61）第61号掘立柱建物址 ……296
62）第62号掘立柱建物址 ……296
63）第63号掘立柱建物址 ……297
64）第64号掘立柱建物址 ……298
65）第65号掘立柱建物址 ……298
66）第66号掘立柱建物址 ……299
67）第67号掘立柱建物址 ……300
68）第68号掘立柱建物址 ……300
69）第69号掘立柱建物址 ……301
70）第70号掘立柱建物址 ……302
71）第71号掘立柱建物址 ……302
72）第72号掘立柱建物址 ……302
73）第73号掘立柱建物址 ……303
74）第74号掘立柱建物址 ……304
75）第75号掘立柱建物址 ……305
76）第76号掘立柱建物址 ……306
77）第77号掘立柱建物址 ……306
78）第78号掘立柱建物址 ……306
79）第79号掘立柱建物址 ……306
80）第80号掘立柱建物址 ……307
81）第81号掘立柱建物址 ……309
82）第82号掘立柱建物址 ……309
83）第83号掘立柱建物址 ……309
84）第84号掘立柱建物址 ……309
85）第85号掘立柱建物址 ……310
86）第86号掘立柱建物址 ……311
(3) 溝　址 ……311
1）第1号溝址 ……311
2）第2号溝址 ……312
3）第3号溝址 ……312
4）第4号溝址 ……313
5）第5号溝址 ……313
6）第6号溝址 ……314
(4) 土　坑 ……315
1）第1号土坑 ……315
2）第2号土坑 ……316
3）第3号土坑 ……316
4）第4号土坑 ……317
5）第5号土坑 ……318
6）第6号土坑 ……319
7）第7号土坑 ……319
8）第8号土坑 ……319
(5) 遺構外出土遺物 ……320
4　舟窪遺跡 ……367
(1) 竪穴住居址 ……367
1）第1号住居址 ……367
2）第2号住居址 ……368
3）第3号住居址 ……370
4）第4号住居址 ……371
5）第5号住居址 ……373
6）第6号住居址 ……373
7）第7号住居址 ……374
8）第8号住居址 ……376
9）第9号住居址 ……377
10）第10号住居址 ……377
11）第11号住居址 ……379
12）第12号住居址 ……381
13）第13号住居址 ……381
14）第14号住居址 ……385
15）第15号住居址 ……386
16）第16号住居址 ……388
17）第17号住居址 ……390

18）第18号住居址 ……392
19）第19号住居址 ……393
20）第20号住居址 ……394
21）第21号住居址 ……395
(2) 掘立柱建物址 ……396
1）第1号掘立柱建物址 ……396
2）第2号掘立柱建物址 ……396
3）第3号掘立柱建物址 ……397
4）第4号掘立柱建物址 ……398
5）第5号掘立柱建物址 ……398
6）第6号掘立柱建物址 ……400
7）第7号掘立柱建物址 ……401
8）第8号掘立柱建物址 ……402
9）第9号掘立柱建物址 ……404
10）第10号掘立柱建物址 ……405
11）第11号掘立柱建物址 ……406
12）第12号掘立柱建物址 ……407
13）第13号掘立柱建物址 ……408
14）第14号掘立柱建物址 ……408
15）第15号掘立柱建物址 ……409
16）第16号掘立柱建物址 ……409
17）第17号掘立柱建物址 ……409
18）第18号掘立柱建物址 ……410
19）第19号掘立柱建物址 ……411
20）第20号掘立柱建物址 ……411
21）第21号掘立柱建物址 ……412
22）第22号掘立柱建物址 ……413
23）第23号掘立柱建物址 ……414
24）第24号掘立柱建物址 ……414
25）第25号掘立柱建物址 ……414
26）第26号掘立柱建物址 ……414
27）第27号掘立柱建物址 ……415
28）第28号掘立柱建物址 ……416
29）第29号掘立柱建物址 ……416
30）第30号掘立柱建物址 ……416
31）第31号掘立柱建物址 ……418
32）第32号掘立柱建物址 ……418
33）第33号掘立柱建物址 ……418
(3) ピット ……419
1）第1号ピット ……419
2）第2号ピット ……420
(4) 土　坑 ……420
1）第1号土坑 ……420
5　大塚原遺跡 ……427
(1) 竪穴住居址 ……427
1）第1号住居址 ……427
2）第2号住居址 ……428
3）第3号住居址 ……430
4）第4号住居址 ……432
5）第5号住居址 ……434
6）第6号住居址 ……436
7）第7号住居址 ……437
8）第8号住居址 ……439
9）第9号住居址 ……440
10）第10号住居址 ……442
11）第11号住居址 ……444
12）第12号住居址 ……446
13）第13号住居址 ……447
14）第14号住居址 ……449
15）第15号住居址 ……451
16）第16号住居址 ……452
17）第17号住居址 ……453
18）第18号住居址 ……454
19）第19号住居址 ……456
20）第20号住居址 ……457
21）第21号住居址 ……459

22）第22号住居址 ……460
23）第23号住居址 ……461
24）第24号住居址 ……461
25）第25号住居址 ……462
26）第26号住居址 ……463
27）第27号住居址 ……464
28）第28号住居址 ……464
29）第29号住居址 ……465
30）第30号住居址 ……466
31）第31号住居址 ……467
32）第32号住居址 ……468
33）第33号住居址 ……470
34）第34号住居址 ……471
35）第35号住居址 ……472
(2) 掘立柱建物址 ……475
1）第1号掘立柱建物址 ……475
2）第2号掘立柱建物址 ……476
3）第3号掘立柱建物址 ……477
4）第4号掘立柱建物址 ……477
5）第5号掘立柱建物址 ……477
6）第6号掘立柱建物址 ……478
7）第7号掘立柱建物址 ……479
8）第8号掘立柱建物址 ……479
9）第9号掘立柱建物址 ……480
10）第10号掘立柱建物址 ……480
11）第11号掘立柱建物址 ……481
12）第12号掘立柱建物址 ……481
13）第13号掘立柱建物址 ……481
14）第14号掘立柱建物址 ……482
15）第15号掘立柱建物址 ……483
16）第16号掘立柱建物址 ……484
17）第17号掘立柱建物址 ……484
18）第18号掘立柱建物址 ……485
19）第19号掘立柱建物址 ……485
20）第20号掘立柱建物址 ……485
21）第21号掘立柱建物址 ……486
22）第22号掘立柱建物址 ……487
23）第23号掘立柱建物址 ……488
24）第24号掘立柱建物址 ……489
25）第25号掘立柱建物址 ……490
26）第26号掘立柱建物址 ……490
27）第27号掘立柱建物址 ……491
28）第28号掘立柱建物址 ……492
29）第29号掘立柱建物址 ……492
30）第30号掘立柱建物址 ……492
31）第31号掘立柱建物址 ……493
32）第32号掘立柱建物址 ……494
33）第33号掘立柱建物址 ……495
34）第34号掘立柱建物址 ……496
35）第35号掘立柱建物址 ……497
36）第36号掘立柱建物址 ……498
37）第37号掘立柱建物址 ……499
38）第38号掘立柱建物址 ……500
39）第39号掘立柱建物址 ……500
40）第40号掘立柱建物址 ……501
41）第41号掘立柱建物址 ……502
42）第42号掘立柱建物址 ……502
43）第43号掘立柱建物址 ……503
44）第44号掘立柱建物址 ……503
45）第45号掘立柱建物址 ……504
46）第46号掘立柱建物址 ……504
47）第47号掘立柱建物址 ……504
48）第48号掘立柱建物址 ……506
49）第49号掘立柱建物址 ……506
50）第50号掘立柱建物址 ……507
51）第51号掘立柱建物址 ……507
52）第52号掘立柱建物址 ……509
(3) 溝　址 ……510

1）第1号溝址 ……510
2）第2号溝址 ……511
3）第3号溝址 ……512
(4) 土　坑 ……512
1）第1号土坑 ……512
2）第2号土坑 ……513
(5) 遺構外出土遺物 ……513
V 総　　括 ……525
(1) 土器群の様相 ……525
(2) 石製品・金属製品・土製品 ……530
(3) 文字関係資料 ……534
(4) 自然遺物について ……537
(5) 遺構の変遷 ……538
付編1 竹花遺跡第66号住居址出土土器付着物の組成分析結果について ……587
付編2 竹花遺跡第40号住居址出土炭化米の同定・計測結果報告 ……589
付編3 大塚原遺跡第2号住居址出土の青色物質の素材について ……593
付編4 土器に塗付された黒色物質の成分分析 ……598
付編5 大下原遺跡第8号住居址・竹花遺跡第4号住居址から検出された赤色物質の素材について ……604
付編6 竹花遺跡・大塚原遺跡出土動物遺体の種類 ……609
付編7 過去の植物利用について ……613
付編8 竹花遺跡第4号土坑出土の漆紙文書について ……628

付表目次

第1表 周辺遺跡一覧表……9
第2表 文字関係資料一覧表 ……535
第3表 時代・時期別遺構一覧表 ……542
第4表 出土土器一覧表 ……543

挿図目次

第1図 遺跡の位置（1：50,000）……1
第2図 調査区（1：10,000）……4
第3図 遺跡付近の地質図……5
第4図 遺跡と周辺遺跡分布図（1：10,000）……8
第5図 層序模式図……10
東下原遺跡
第6図 第1号住居址実測図……11
第7図 第1号住居址カマド実測図……12
第8図 第2号住居址カマド実測図……12
第9図 第2号住居址実測図……13・14
第10図 第3号住居址実測図……15
第11図 第3号住居址カマド実測図……16
第12図 第4号住居址カマド実測図……16
第13図 第4号住居址実測図……17
第14図 第5号住居址実測図……18
第15図 第5号住居址カマド実測図……18
第16図 第6号住居址実測図……19
第17図 第6号住居址カマド実測図……19

第18図　第１号掘立柱建物址実測図……20
第19図　第２号掘立柱建物址実測図……21
第20図　第３号掘立柱建物址実測図……21
第21図　第４号掘立柱建物址実測図……22
第22図　第５号掘立柱建物址実測図……22
第23図　第１号溝址実測図……23
第24図　第１号土坑実測図……24
第25図　第１～６号住居址、遺構外出土土器実測図……25
第26図　石製品実測図……26
第27図　土器拓影図・石製品実測図……27
第28図　東下原遺跡遺構全体図……28
大下原遺跡
第29図　第１号住居址カマド実測図……29
第30図　第１号住居址実測図……30
第31図　第２号住居址実測図……31
第32図　第２号住居址カマド実測図……31
第33図　第３号住居址実測図……32
第34図　第３号住居址カマド実測図……33
第35図　第４号住居址カマド実測図……33
第36図　第４号住居址実測図……34
第37図　第５号住居址実測図……35
第38図　第５号住居址カマド実測図……35
第39図　第６号住居址実測図……36
第40図　第６号住居址カマド実測図……37
第41図　第７号住居址実測図……38
第42図　第８号住居址実測図……39
第43図　第８号住居址カマド実測図……40
第44図　第９号住居址実測図……41
第45図　第９号住居址カマド実測図……42
第46図　第10号住居址実測図……43
第47図　第11号住居址実測図……44
第48図　第12号住居址実測図……45
第49図　第13号住居址実測図……46
第50図　第13号住居址カマド実測図……47
第51図　第１号掘立柱建物址実測図……48
第52図　第２号掘立柱建物址実測図……49
第53図　第３号掘立柱建物址実測図……49
第54図　第４号掘立柱建物址実測図……50
第55図　第５号掘立柱建物址実測図……51
第56図　第６号掘立柱建物址実測図……51
第57図　第７号掘立柱建物址実測図……52
第58図　第８号掘立柱建物址実測図……52
第59図　第９号掘立柱建物址実測図……53
第60図　第10号掘立柱建物址実測図……53
第61図　第１・４・５号溝址実測図……55・56
第62図　第１～３号溝址実測図……57
第63図　第１号土坑実測図……59
第64図　第２・５・９・11・13号住居址、第５号溝址
出土土器実測図……60
第65図　金属製品・石製品・土製品実測図・縄文土器拓影図…61
竹花遺跡
第66図　第１号住居址実測図……62
第67図　第２号住居址実測図……63
第68図　第２号住居址カマド実測図……64
第69図　第３号住居址カマド実測図……64
第70図　第３号住居址実測図……65
第71図　第４号住居址実測図……66
第72図　第４号住居址カマド実測図……67
第73図　第５号住居址実測図……68
第74図　第６号住居址実測図……69・70
第75図　第５号住居址カマド実測図……71
第76図　第７号住居址カマド実測図……72
第77図　第７号住居址実測図……73
第78図　第８号住居址実測図……74
第79図　第９号住居址実測図……75
第80図　第９号住居址カマド実測図……76
第81図　第10号住居址カマド実測図……76
第82図　第10号住居址実測図……77
第83図　第11号住居址カマド実測図……78
第84図　第11号住居址実測図……79
第85図　第12号住居址実測図……80
第86図　第13号住居址実測図……81・82
第87図　第13号住居址炉址実測図……83
第88図　第14号住居址実測図……84
第89図　第14号住居址カマド実測図……85
第90図　第15号住居址実測図……86
第91図　第16号住居址カマド実測図……86
第92図　第16号住居址実測図……87
第93図　第17号住居址実測図……88
第94図　第18号住居址実測図……89
第95図　第18号住居址カマド実測図……90
第96図　第19号住居址実測図……91
第97図　第19号住居址カマド実測図……92
第98図　第20号住居址カマド実測図……92

第99図　第20号住居址実測図……93
第100図　第21号住居址カマド実測図……94
第101図　第21号住居址実測図……95
第102図　第22号住居址カマド実測図……96
第103図　第22号住居址実測図……97
第104図　第23号住居址カマド実測図……98
第105図　第23号住居址実測図……99・100
第106図　第24号住居址実測図……101
第107図　第24号住居址カマド実測図……102
第108図　第25号住居址実測図……103・104
第109図　第26号住居址実測図……105
第110図　第26号住居址カマド実測図……106
第111図　第27号住居址実測図……107・108
第112図　第27号住居址カマド実測図……109
第113図　第28号住居址実測図……110
第114図　第28号住居址カマド実測図……111
第115図　第29号住居址カマド実測図……111
第116図　第29号住居址実測図……112
第117図　第30号住居址実測図……113
第118図　第31号住居址カマド実測図……114
第119図　第31号住居址実測図……115
第120図　第32号住居址実測図……116
第121図　第33号住居址実測図……117・118
第122図　第32号住居址カマド実測図……119
第123図　第33号住居址カマド実測図……120
第124図　第35号住居址実測図……121
第125図　第36号住居址実測図……122
第126図　第37号住居址実測図……123・124
第127図　第36号住居址カマド実測図……125
第128図　第37号住居址カマド実測図……126
第129図　第38号住居址実測図……127・128
第130図　第38号住居址カマド実測図……129
第131図　第39号住居址実測図……130
第132図　第39号住居址カマド実測図……130
第133図　第40号住居址実測図……131
第134図　第40号住居址カマド実測図……132
第135図　第41号住居址カマド実測図……132
第136図　第41号住居址実測図……133
第137図　第42号住居址実測図……134
第138図　第42号住居址カマド実測図……135
第139図　第43号住居址カマド実測図……136
第140図　第43号住居址実測図……136
第141図　第44号住居址実測図……137
第142図　第44号住居址カマド実測図……138
第143図　第45号住居址実測図……139・140
第144図　第45号住居址カマド実測図……141
第145図　第46号住居址カマド実測図……141
第146図　第46号住居址実測図……142
第147図　第47号住居址実測図……143
第148図　第47号住居址カマド実測図……144
第149図　第48号住居址実測図……145
第150図　第48号住居址カマド実測図……146
第151図　第49号住居址カマド実測図……146
第152図　第49号住居址実測図……147・148
第153図　第50号住居址カマド実測図……149
第154図　第50号住居址実測図……150
第155図　第51号住居址実測図……151
第156図　第52号住居址実測図……152
第157図　第52号住居址カマド実測図……153
第158図　第53号住居址カマド実測図……153
第159図　第53号住居址実測図……154
第160図　第54号住居址実測図……155・156
第161図　第54号住居址カマド実測図……157
第162図　第55号住居址実測図……158
第163図　第56号住居址実測図……159
第164図　第56号住居址カマド実測図……160
第165図　第58号住居址実測図……161
第166図　第59号住居址実測図……162
第167図　第59号住居址カマド実測図……162
第168図　第60号住居址実測図……163・164
第169図　第60号住居址カマド実測図……165
第170図　第62号住居址実測図……166
第171図　第63号住居址実測図……167・168
第172図　第62号住居址カマド実測図……169
第173図　第63号住居址カマド実測図……169
第174図　第64・68号住居址実測図……171
第175図　第65号住居址実測図……172
第176図　第65号住居址カマド実測図……173
第177図　第66号住居址実測図……174
第178図　第66号住居址カマド実測図……175
第179図　第67号住居址実測図……176
第180図　第67号住居址カマド実測図……177
第181図　第69号住居址実測図……178
第182図　第69号住居址カマド実測図……179

第183図　第70号住居址カマド実測図 ……179
第184図　第70号住居址実測図 ……180
第185図　第71号住居址実測図 ……181
第186図　第71号住居址カマド実測図 ……182
第187図　第72号住居址実測図 ……183
第188図　第73号住居址実測図 ……184
第189図　第74号住居址実測図 ……185
第190図　第74号住居址カマド実測図 ……185
第191図　第75号住居址実測図 ……186
第192図　第75号住居址カマド実測図 ……187
第193図　第76号住居址実測図 ……187
第194図　第76号住居址カマド実測図 ……188
第195図　第77号住居址カマド実測図 ……190
第196図　第77号住居址実測図……191・192
第197図　第78号住居址実測図 ……193
第198図　第78号住居址カマド実測図 ……194
第199図　第79号住居址カマド実測図 ……194
第200図　第79号住居址実測図 ……195
第201図　第80号住居址カマド実測図 ……196
第202図　第80号住居址実測図……197・198
第203図　第81号住居址実測図……199・200
第204図　第81号住居址カマド実測図 ……201
第205図　第82号住居址実測図 ……202
第206図　第82号住居址カマド実測図 ……203
第207図　第83号住居址カマド実測図 ……203
第208図　第83号住居址実測図 ……204
第209図　第84号住居址実測図 ……205
第210図　第84号住居址カマド実測図 ……206
第211図　第85号住居址実測図……207・208
第212図　第85号住居址カマド実測図 ……209
第213図　第86号住居址実測図 ……210
第214図　第87号住居址実測図 ……211
第215図　第87号住居址カマド実測図 ……212
第216図　第88号住居址実測図 ……213
第217図　第89号住居址実測図 ……214
第218図　第89号住居址カマド実測図 ……215
第219図　第90号住居址実測図 ……216
第220図　第91号住居址実測図 ……217
第221図　第92号住居址実測図 ……218
第222図　第93号住居址実測図 ……219
第223図　第93号住居址カマド実測図 ……220
第224図　第94号住居址実測図 ……221
第225図　第94号住居址カマド実測図 ……221
第226図　第95号住居址カマド実測図 ……222
第227図　第95号住居址実測図 ……222
第228図　第96号住居址実測図 ……223
第229図　第97号住居址実測図 ……224
第230図　第97号住居址カマド実測図 ……225
第231図　第98号住居址実測図 ……225
第232図　第99号住居址実測図 ……226
第233図　第99号住居址カマド実測図 ……227
第234図　第100号住居址実測図……228
第235図　第101号住居址実測図……228
第236図　第101号住居址カマド実測図……229
第237図　第103号住居址実測図……230
第238図　第104号住居址カマド実測図……231
第239図　第104号住居址実測図……232
第240図　第105号住居址実測図……233
第241図　第105号住居址カマド実測図……234
第242図　第106号住居址実測図……235
第243図　第106号住居址カマド実測図……236
第244図　第107号住居址実測図……236
第245図　第108号住居址実測図……237
第246図　第109号住居址実測図……238
第247図　第109号住居址カマド実測図……239
第248図　第110号住居址実測図……240
第249図　第111号住居址実測図……241
第250図　第111号住居址カマド実測図……241
第251図　第112号住居址実測図……242
第252図　第112号住居址カマド実測図……243
第253図　第113号住居址実測図……244
第254図　第113号住居址カマド実測図……245
第255図　第114号住居址実測図……246
第256図　第115号住居址カマド実測図……246
第257図　第115号住居址実測図……247
第258図　第116号住居址実測図……248
第259図　第116号住居址カマド実測図……249
第260図　第117号住居址実測図……249
第261図　第118号住居址実測図……250
第262図　第118号住居址カマド実測図……251
第263図　第１号掘立柱建物址実測図 ……252
第264図　第２号掘立柱建物址実測図 ……253
第265図　第３号掘立柱建物址実測図 ……254
第266図　第４号掘立柱建物址実測図 ……255

第267図　第５号掘立柱建物址実測図 ……255
第268図　第６号掘立柱建物址実測図 ……256
第269図　第７号掘立柱建物址実測図……257・258
第270図　第８号掘立柱建物址実測図 ……260
第271図　第９号掘立柱建物址実測図 ……260
第272図　第10号掘立柱建物址実測図 ……261
第273図　第11号掘立柱建物址実測図 ……262
第274図　第12号掘立柱建物址実測図 ……263
第275図　第13号掘立柱建物址実測図 ……264
第276図　第14号掘立柱建物址実測図 ……264
第277図　第15・16号掘立柱建物址実測図 ……265
第278図　第17号掘立柱建物址実測図 ……266
第279図　第18号掘立柱建物址実測図 ……266
第280図　第19号掘立柱建物址実測図 ……267
第281図　第20号掘立柱建物址実測図 ……268
第282図　第21～23号掘立柱建物址実測図 ……269
第283図　第24号掘立柱建物址実測図 ……270
第284図　第25号掘立柱建物址実測図 ……271
第285図　第26号掘立柱建物址実測図 ……272
第286図　第27号掘立柱建物址実測図 ……272
第287図　第28号掘立柱建物址実測図 ……273
第288図　第29号掘立柱建物址実測図 ……274
第289図　第30号掘立柱建物址実測図 ……275
第290図　第31号掘立柱建物址実測図……277・278
第291図　第32・37号掘立柱建物址実測図 ……279
第292図　第33号掘立柱建物址実測図 ……280
第293図　第34号掘立柱建物址実測図 ……281
第294図　第35・36号掘立柱建物址実測図 ……282
第295図　第38号掘立柱建物址実測図 ……284
第296図　第39・40号掘立柱建物址実測図 ……285
第297図　第41～44号掘立柱建物址実測図 ……286
第298図　第45号掘立柱建物址実測図 ……287
第299図　第46～48号掘立柱建物址実測図 ……288
第300図　第49・50号掘立柱建物址実測図 ……290
第301図　第51～53号掘立柱建物址実測図 ……291
第302図　第54号掘立柱建物址実測図 ……292
第303図　第55・56号掘立柱建物址実測図 ……293
第304図　第57・58号掘立柱建物址実測図 ……294
第305図　第59・60号掘立柱建物址実測図 ……295
第306図　第61号掘立柱建物址実測図 ……296
第307図　第62・63号掘立柱建物址実測図 ……297
第308図　第64号掘立柱建物址実測図 ……298
第309図　第65号掘立柱建物址実測図 ……298
第310図　第66号掘立柱建物址実測図 ……299
第311図　第67・68号掘立柱建物址実測図 ……300
第312図　第69～71号掘立柱建物址実測図 ……301
第313図　第72号掘立柱建物址実測図 ……303
第314図　第73号掘立柱建物址実測図 ……304
第315図　第74～76号掘立柱建物址実測図 ……305
第316図　第77～79号掘立柱建物址実測図 ……307
第317図　第80～82号掘立柱建物址実測図 ……308
第318図　第83号掘立柱建物址実測図 ……310
第319図　第84・85号掘立柱建物址実測図 ……310
第320図　第86号掘立柱建物址実測図 ……311
第321図　第１号溝址実測図 ……312
第322図　第２号溝址実測図 ……312
第323図　第３号溝址実測図 ……313
第324図　第４・５号溝址実測図 ……314
第325図　第６号溝址実測図 ……315
第326図　第１号土坑実測図 ……316
第327図　第２号土坑実測図 ……316
第328図　第３号土坑実測図 ……317
第329図　第４号土坑実測図 ……317
第330図　第５～８号土坑実測図 ……318
第331図　第１～５号住居址出土土器実測図 ……321
第332図　第５～８号住居址出土土器実測図 ……322
第333図　第９～11号住居址出土土器実測図 ……323
第334図　第13・14号住居址出土土器実測図 ……324
第335図　第16・19～22号住居址出土土器実測図 ……325
第336図　第23～26号住居址出土土器実測図 ……326
第337図　第26・28～32号住居址出土土器実測図 ……327
第338図　第32・33・37号住居址出土土器実測図 ……328
第339図　第37～39号住居址出土土器実測図 ……329
第340図　第40～44号住居址出土土器実測図 ……330
第341図　第45～47・49号住居址出土土器実測図 ……331
第342図　第49・50・53～56号住居址出土土器実測図 …332
第343図　第56・60号住居址出土土器実測図 ……333
第344図　第62～65号住居址出土土器実測図 ……334
第345図　第65～67号住居址出土土器実測図 ……335
第346図　第67～71号住居址出土土器実測図 ……336
第347図　第71・74・75号住居址出土土器実測図 ……337
第348図　第75・76号住居址出土土器実測図 ……338
第349図　第77号住居址出土土器実測図 ……339
第350図　第77号住居址出土土器実測図 ……340

第351図　第78・80号住居址出土土器実測図 ……341
第352図　第80・81号住居址出土土器実測図 ……342
第353図　第81～83号住居址出土土器実測図 ……343
第354図　第84・85号住居址出土土器実測図 ……344
第355図　第85・87・89・90・92～94号住居址出土土器実測図…345
第356図　第94・96・97・99号住居址出土土器実測図 …346
第357図　第103・105・106号住居址出土土器実測図……347
第358図　第107・108・110・111・113・115・116号住
居址出土土器実測図 ……348
第359図　第118号住居址、第６・21号掘立柱建物址、自
然流路、第１・２・５号土坑出土土器実測図 …349
第360図　第２号土坑出土土器実測図 ……350
第361図　第２～４号土坑出土土器実測図 ……351
第362図　第４号土坑・遺構外出土土器実測図 ……352
第363図　鉄製品実測図 ……352
第364図　鉄製品実測図 ……353
第365図　鉄製品実測図 ……354
第366図　鉄製品実測図 ……355
第367図　金属製品・土製品・石製品実測図 ……356
第368図　石製品・土製品実測図 ……357
第369図　石製品・土製品実測図 ……358
第370図　石製品実測図 ……359
第371図　石製品実測図 ……360
第372図　石製品実測図 ……361
第373図　石製品実測図 ……362
第374図　石製品実測図 ……363
第375図　石製品実測図 ……364
第376図　石鏃実測図・土器拓影図 ……365
第377図　石製品実測図 ……366
舟窪遺跡
第378図　第１号住居址実測図 ……367
第379図　第１号住居址カマド実測図 ……368
第380図　第２号住居址実測図 ……369
第381図　第２号住居址カマド実測図 ……369
第382図　第３号住居址実測図 ……370
第383図　第３号住居址カマド実測図 ……371
第384図　第４号住居址カマド実測図 ……372
第385図　第４号住居址実測図 ……372
第386図　第５号住居址実測図 ……373
第387図　第６号住居址実測図 ……374
第388図　第６号住居址カマド実測図 ……375
第389図　第７号住居址カマド実測図 ……375
第390図　第７号住居址実測図 ……376
第391図　第８号住居址実測図 ……377
第392図　第９号住居址実測図 ……378
第393図　第10号住居址実測図 ……379
第394図　第11号住居址実測図 ……380
第395図　第11号住居址カマド実測図 ……381
第396図　第12号住居址実測図 ……382
第397図　第12号住居址カマド実測図 ……383
第398図　第13号住居址実測図 ……384
第399図　第13号住居址カマド実測図 ……385
第400図　第14号住居址カマド実測図 ……385
第401図　第14号住居址実測図 ……386
第402図　第15号住居址実測図 ……387
第403図　第15号住居址カマド実測図 ……388
第404図　第16号住居址実測図 ……389
第405図　第16号住居址カマド実測図 ……390
第406図　第17号住居址カマド実測図 ……390
第407図　第17号住居址実測図 ……391
第408図　第18号住居址カマド実測図 ……392
第409図　第18号住居址実測図 ……393
第410図　第19号住居址実測図 ……394
第411図　第20号住居址カマド実測図 ……394
第412図　第20・21号住居址実測図 ……395
第413図　第１号掘立柱建物址実測図 ……397
第414図　第２号掘立柱建物址実測図 ……398
第415図　第３・４号掘立柱建物址実測図 ……399
第416図　第５号掘立柱建物址実測図 ……400
第417図　第６号掘立柱建物址実測図 ……401
第418図　第７号掘立柱建物址実測図 ……402
第419図　第８号掘立柱建物址実測図 ……403
第420図　第９号掘立柱建物址実測図 ……404
第421図　第10号掘立柱建物址実測図 ……405
第422図　第11号掘立柱建物址実測図 ……406
第423図　第12・13号掘立柱建物址実測図 ……407
第424図　第14・15号掘立柱建物址実測図 ……408
第425図　第16号掘立柱建物址実測図 ……410
第426図　第17・18号掘立柱建物址実測図 ……411
第427図　第19・20・22～24号掘立柱建物址実測図 ……412
第428図　第21号掘立柱建物址実測図 ……413
第429図　第25号掘立柱建物址実測図 ……415
第430図　第26・27号掘立柱建物址実測図 ……416
第431図　第28～30号掘立柱建物址実測図 ……417

第432図　第31号掘立柱建物址実測図 ……418
第433図　第32号掘立柱建物址実測図 ……418
第434図　第33号掘立柱建物址実測図 ……419
第435図　第１・２号ピット実測図 ……420
第436図　第１号土坑実測図 ……421
第437図　第１～４・７・９・11号住居址出土土器実測図…422
第438図　第11・12号住居址出土土器実測図 ……423
第439図　第13・14・16・17号住居址出土土器実測図 …424
第440図　第18・20号住居址、第１号土坑出土土器実測図…425
第441図　鉄製品・土製品・石製品実測図 ……426
大塚原遺跡
第442図　第１号住居址実測図 ……427
第443図　第２号住居址実測図 ……429
第444図　第２号住居址カマド実測図 ……430
第445図　第３号住居址実測図 ……431
第446図　第３号住居址カマド実測図 ……431
第447図　第４号住居址実測図 ……432
第448図　第４号住居址カマド実測図 ……433
第449図　第５号住居址実測図 ……434
第450図　第５号住居址カマド実測図 ……435
第451図　第６号住居址実測図 ……436
第452図　第６号住居址カマド実測図 ……437
第453図　第７号住居址実測図 ……438
第454図　第７号住居址カマド実測図 ……439
第455図　第８号住居址実測図 ……439
第456図　第８号住居址カマド実測図 ……440
第457図　第９号住居址実測図 ……441
第458図　第９号住居址カマド実測図 ……442
第459図　第10号住居址カマド実測図 ……442
第460図　第10号住居址実測図 ……443
第461図　第11号住居址カマド実測図 ……444
第462図　第11号住居址実測図 ……445
第463図　第12号住居址実測図 ……446
第464図　第12号住居址カマド実測図 ……447
第465図　第13号住居址実測図 ……448
第466図　第13号住居址カマド実測図 ……449
第467図　第14号住居址実測図 ……450
第468図　第14号住居址カマド実測図 ……451
第469図　第15号住居址実測図 ……452
第470図　第16号住居址実測図 ……453
第471図　第17号住居址実測図 ……454
第472図　第18号住居址実測図 ……455
第473図　第18号住居址カマド実測図 ……456
第474図　第19号住居址実測図 ……457
第475図　第19号住居址カマド実測図 ……458
第476図　第20号住居址実測図 ……458
第477図　第20号住居址カマド実測図 ……458
第478図　第21号住居址実測図 ……459
第479図　第21号住居址カマド実測図 ……460
第480図　第22号住居址実測図 ……460
第481図　第22号住居址カマド実測図 ……461
第482図　第23・24号住居址実測図 ……462
第483図　第25号住居址実測図 ……463
第484図　第26号住居址実測図 ……464
第485図　第27・28号住居址実測図 ……465
第486図　第29号住居址実測図 ……466
第487図　第29号住居址カマド実測図 ……467
第488図　第30号住居址実測図 ……468
第489図　第31号住居址実測図 ……469
第490図　第32号住居址実測図 ……469
第491図　第32号住居址カマド実測図 ……470
第492図　第33号住居址実測図 ……471
第493図　第34号住居址実測図 ……472
第494図　第34号住居址カマド実測図 ……473
第495図　第35号住居址実測図 ……474
第496図　第１号掘立柱建物址実測図 ……475
第497図　第２号掘立柱建物址実測図 ……476
第498図　第３・４号掘立柱建物址実測図 ……477
第499図　第５号掘立柱建物址実測図 ……478
第500図　第６～８号掘立柱建物址実測図 ……479
第501図　第９・10号掘立柱建物址実測図 ……480
第502図　第11号掘立柱建物址実測図 ……481
第503図　第12号掘立柱建物址実測図 ……482
第504図　第13～16号掘立柱建物址実測図 ……483
第505図　第17・18号掘立柱建物址実測図 ……484
第506図　第19号掘立柱建物址実測図 ……486
第507図　第20号掘立柱建物址実測図 ……487
第508図　第21号掘立柱建物址実測図 ……488
第509図　第22号掘立柱建物址実測図 ……488
第510図　第23号掘立柱建物址実測図 ……489
第511図　第24・25号掘立柱建物址実測図 ……490
第512図　第26号掘立柱建物址実測図 ……491
第513図　第27号掘立柱建物址実測図 ……492
第514図　第28号掘立柱建物址実測図 ……493

第515図　第29・30・32号掘立柱建物址実測図 ……494
第516図　第31号掘立柱建物址実測図 ……495
第517図　第33号掘立柱建物址実測図 ……496
第518図　第34号掘立柱建物址実測図 ……497
第519図　第35号掘立柱建物址実測図 ……498
第520図　第36号掘立柱建物址実測図 ……499
第521図　第37・39号掘立柱建物址実測図 ……500
第522図　第38号掘立柱建物址実測図 ……501
第523図　第40・41号掘立柱建物址実測図 ……502
第524図　第42号掘立柱建物址実測図 ……503
第525図　第43～45号掘立柱建物址実測図 ……505
第526図　第46号掘立柱建物址実測図 ……505
第527図　第47・48号掘立柱建物址実測図 ……506
第528図　第49号掘立柱建物址実測図 ……507
第529図　第50号掘立柱建物址実測図 ……508
第530図　第51・52号掘立柱建物址実測図 ……509
第531図　第１号溝址実測図 ……510
第532図　第２号溝址実測図 ……511
第533図　第３号溝址実測図 ……512
第534図　第１・２号土坑実測図 ……513
第535図　第１・２・４・５号住居址出土土器実測図 …514
第536図　第６～８・10・11号住居址出土土器実測図 …515
第537図　第11～13号住居址出土土器実測図 ……516
第538図　第13・14・16・17号住居址出土土器実測図 …517
第539図　第18・19・22号住居址出土土器実測図 ……518
第540図　第22・28・30号住居址出土土器実測図 ……519
第541図　第30・33・35号住居址、第７・15号掘立柱建物址、遺構外出土土器実測図 ……520
第542図　鉄製品実測図 ……521
第543図　金属製品・石製品実測図 ……522
第544図　石製品実測図 ……523
第545図　土器拓影図 ……524
第546図　第Ⅰ・Ⅱ期の土器 ……525
第547図　紡錘車の材の変遷 ……530
第548図　紡錘車の大きさ ……531
第549図　鉄製品の種別 ……532
第550図　鈴鏡と土製模造鏡の分布 ……533
第551図　墨書土器の種類 ……535
第552図　遺構毎の樹種分布 ……537

付図１　第Ⅲ期～第XV期の土器
付図２　大下原・竹花・舟窪・大塚原遺跡遺構全体図

図版目次

巻頭図版　竹花遺跡出土漆紙文書
本文中図版
現地説明会（竹花遺跡）
遺構
東下原遺跡
図版１　第１～６号住居址　第１・２号掘立柱建物址
図版２　第１号溝址　第１号土坑
大下原遺跡
図版２　第１～６号住居址
図版３　第７～13号住居址　第１号掘立柱建物址
図版４　第２～４・９号掘立柱建物址　第１（南・中央・北）・２号溝址
図版５　第３～５号溝址　第１号土坑
竹花遺跡
図版５　第１～４号住居址
図版６　第５～12号住居址
図版７　第13・14・16～21号住居址
図版８　第22～29号住居址
図版９　第30～33・35～38号住居址
図版10　第39～42・44～47号住居址
図版11　第48～55号住居址
図版12　第56・58～60・62・63、64・30・68、65号住居址
図版13　第66・67・69～74号住居址
図版14　第76～83号住居址
図版15　第84～91号住居址
図版16　第92～99号住居址
図版17　第100・101・103～108号住居址
図版18　第109～116号住居址
図版19　第117・118号住居址　第２～７号掘立柱建物址
図版20　第８・10・12・13・18～20・31・32号掘立柱建物址
図版21　第38・39・45・51・54・55・57・60号掘立柱建物址
図版22　第61・64・66・70・72・73・76・80号掘立柱建物址
図版23　第83・86号掘立柱建物址　第１～６号溝址
図版24　第１・４～８号土坑

舟窪遺跡
図版24　第１・２号住居址
図版25　第３～10号住居址
図版26　第11～18号住居址
図版27　第19～21号住居址　第１～３・５・６号掘立柱建物址
図版28　第７～10・12・13・15・16・18号掘立柱建物址
図版29　第21・25・30号掘立柱建物址　第１号土坑
大塚原遺跡
図版29　第１～４号住居址
図版30　第５～12号住居址
図版31　第13～20号住居址
図版32　第21～28号住居址
図版33　第29～35号住居址　第１号掘立柱建物址
図版34　第２・５・11・12・17・20～22号掘立柱建物址
図版35　第23・25～28・31・33～36号掘立柱建物址
図版36　第38･39･50号掘立柱建物址　第１～３号溝址　第１・２号土坑
遺物
東下原遺跡
図版37　第１～５号住居址出土土器
図版38　出土遺物
図版39　出土遺物
大下原遺跡
図版40　第２・５・９･11･13号住居址、第５号溝址出土土器
図版41　出土遺物
竹花遺跡
図版42　第１～５号住居址出土土器
図版43　第５～８号住居址出土土器
図版44　第９～11号住居址出土土器
図版45　第13・14号住居址出土土器
図版46　第16・19～22号住居址出土土器
図版47　第23～26号住居址出土土器
図版48　第26・28～32号住居址出土土器
図版49　第32・33・37号住居址出土土器
図版50　第37～39号住居址出土土器
図版51　第40～44号住居址出土土器
図版52　第45～47・49号住居址出土土器
図版53　第49・50・53～56号住居址出土土器
図版54　第56・60号住居址出土土器
図版55　第62～65号住居址出土土器
図版56　第65～67号住居址出土土器
図版57　第67～71号住居址出土土器
図版58　第71・74・75号住居址出土土器
図版59　第75・76号住居址出土土器
図版60　第77号住居址出土土器
図版61　第77号住居址出土土器
図版62　第78・80号住居址出土土器
図版63　第80・81号住居址出土土器
図版64　第81～83号住居址出土土器
図版65　第84・85号住居址出土土器
図版66　第85・87・89・90・92～94号住居址出土土器
図版67　第94・96・97・99号住居址出土土器
図版68　第103・105・106号住居址出土土器
図版69　第107・108・110・111・113・115・116号住居址出土土器
図版70　第118号住居址、第６･21号掘立柱建物址、自然流路、第１・２・５号土坑出土土器
図版71　第２号土坑出土土器
図版72　第２～４号土坑出土土器
図版73　出土遺物
図版74　鉄製品
図版75　鉄製品
図版76　鉄製品
図版77　出土遺物
図版78　石製品・土製品
図版79　石製品・土製品
図版80　石製品
図版81　石製品
図版82　石製品
図版83　石製品
図版84　石製品
図版85　出土遺物
図版86　石器
図版87　動物遺体
図版88　動物遺体
図版89　動物遺体・第40号住居址出土炭化米（一部）
舟窪遺跡
図版90　第１～４・７・９・11号住居址出土土器
図版91　第11・12号住居址出土土器
図版92　第13・14・16・17号住居址出土土器
図版93　第18・20号住居址、第１号土坑出土土器
図版94　出土遺物
大塚原遺跡
図版95　第１・２・４・５号住居址出土土器

図版96　第６～８・10・11号住居址出土土器
図版97　第11～13号住居址出土土器
図版98　第13・14・16・17号住居址出土土器
図版99　第18・19・22号住居址出土土器
図版100　第22・28・30号住居址出土土器
図版101　第30・33・35号住居址、第７・15号掘立柱建物址、
遺構外出土土器
図版102　鉄製品
図版103　金属製品・石製品
図版104　石製品
図版105　縄文土器片・弥生土器片
図版106　材の顕微鏡写真(1)
図版107　材の顕微鏡写真(2)
図版108　材の顕微鏡写真(3)
図版109　材の顕微鏡写真(4)
図版110　材の顕微鏡写真(5)・種実遺体(1)
図版111　種実遺体(2)
図版112　植物珪酸体

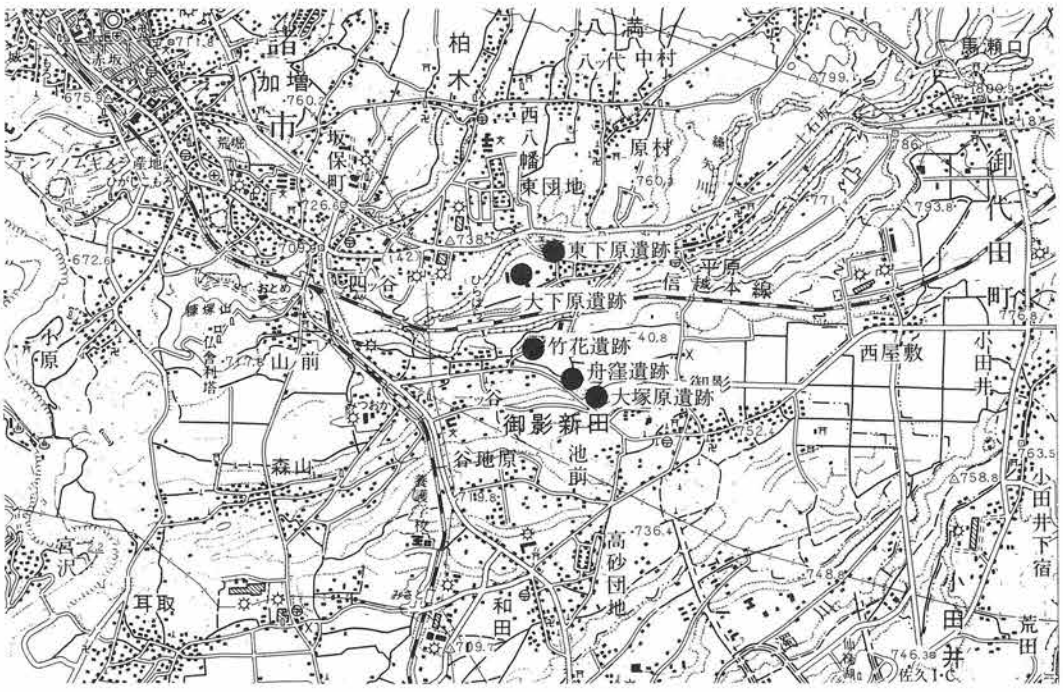
Ⅰ　発掘調査の経緯

1　調査に至る動機

佐久建設事務所は、国道141号線の交通量の激増による危険と渋滞の緩和、佐久インターからのアクセス道路として、国道141号線バイパスの新設を計画した。

この予定路線内には、北から三子塚遺跡群東下原遺跡、同・大下原遺跡、宮ノ反Ａ遺跡群竹花遺跡、舟窪遺跡、大塚原遺跡群大塚原遺跡、谷地原遺跡群池ノ前遺跡、和田原遺跡群和田原遺跡、中原遺跡群鎌田原遺跡が存在する。このうち、和田原・池ノ前遺跡については昭和60年（1985年）に試掘を、和田原・鎌田原遺跡については昭和63年（1988年）に発掘調査を行なった（小諸市教育委員会　1986『和田原・池ノ前』、同　1989　『和田原・鎌田原』）。

他の遺跡については、平成元年（1989年）１月13日、長野県教育委員会文化課指導主事児玉卓文先生の御指導を受け、佐久建設事務所と協議を行なった。その後、小諸市教育委員会は、佐久建設事務所の依頼を受理し、平成元年11月25日から大下原遺跡の調査に着手した。



第１図　遺跡の位置（１：50,000）

2　調査の概要

○遺 跡 名　三子塚遺跡群東下原遺跡、同・大下原遺跡、宮ノ反Ａ遺跡群竹花遺跡、舟窪遺跡、大塚原遺跡群大塚原遺跡

○所 在 地　長野県小諸市大字平原字東下原747－１、748－１・２、749－１、750－１、753番地（東下原遺跡）、大字平原字大下原636－１、637－１、643－１、648－３・４、655－１、659－１、661－２～５番地、大字平原字西下原783－１、784、785－１、787－２～６番地（大下原遺跡）、大字御影新田字竹花1441、1442、1441－１、1445－１、1446－１、1450－１番地（竹花遺跡）、大字御影新田字舟窪1729－２、1752－１、1753－１、1755－１、1757－１番地（舟窪遺跡）、大字御影新田字大塚原1850、1859－１・４・５・11番地（大塚原遺跡）

○調査期間　平成元年11月25日～平成３年12月12日

○調査に関する事務局の構成組織は下記のとおりである。

山田英男	小諸市教育委員会教育次長	（平成３年４月１日付転任）
高見沢勇	〃	（平成４年３月31日付退職）
中沢一晃	〃	（平成４年４月１日付就任）
宮崎龍太郎	〃 社会教育課長	（平成３年４月１日付転任）
古平菊敏	〃 〃	（平成４年５月１日付転任）
依田茂美	〃 〃	（平成４年５月１日付就任）
武藤勝光	〃 社会教育課長補佐、社会教育係長	（平成２年４月１日付転任）
荒井章雄	〃 社会教育係長	（平成３年10月１日付転任）
清水隆夫	〃 社会教育課長補佐、社会教育係長	（平成３年10月１日付就任）
前田洋子		

○調査団の構成組織は下記のとおりである。

顧　問	中村幸則	小諸市教育委員会教育委員長	（平成２年10月１日付退任）
	美斉津昌夫	〃	（平成４年10月１日付退任）
	関　三郎	〃	（平成４年10月１日付就任）
	依田公一	小諸市教育委員会教育長	（平成元年12月31日付退任）
	矢嶋正一	〃	（平成２年１月１日付就任）
団　長	小渕武一	小諸市文化財審議委員長	
副団長	井出喜八		
担当者	花岡　弘	小諸市教育委員会学芸員	
	星野保彦	〃	

調査主任　鳥居　亮（大下原遺跡）

調査員　太田史夫、小野山　清、高瀬武男、松本甲子雄、山浦　実

調査補助員　相場さ代子、佐藤君代、伴野有希子

参加者　大池せつ子、岡田悦子、岡村照子、小山内玲子、小山澄恵、塩川峰子、田中タツ子、古谷里江、松村泰子、柳沢宏幸、吉野安子　〔小諸・御代田広域シルバー人材センター〕飯森健太、岩佐正雄、大熊家寿子、木内文雄、小林永一、清水喜代治、清水せつ、白鳥信雄、関　武夫、遠山正一郎　〔大学生・高校生〕小田中　光、柏木健司、片瀬欣仕、片瀬七郎、児玉明聡、小林真樹、小林善然、小山　玲、塩川拓也、土屋岳宏、中村輝幸、林　通人、山崎雄貴　（遺物整理作業を含む）

3　調査の経過

各遺跡の調査期間は、次のとおりである。

東下原遺跡　平成３年５月31日～６月19日

大下原遺跡　平成元年11月25日～12月19日、平成２年４月５日～５月23日

竹花遺跡　平成２年５月24日～11月９日、平成３年９月２日～10月31日

舟窪遺跡　平成３年10月21日～12月12日

大塚原遺跡　平成３年６月19日～８月31日

なお、調査終査終了後から平成５年度において報告書作成作業を行なった。

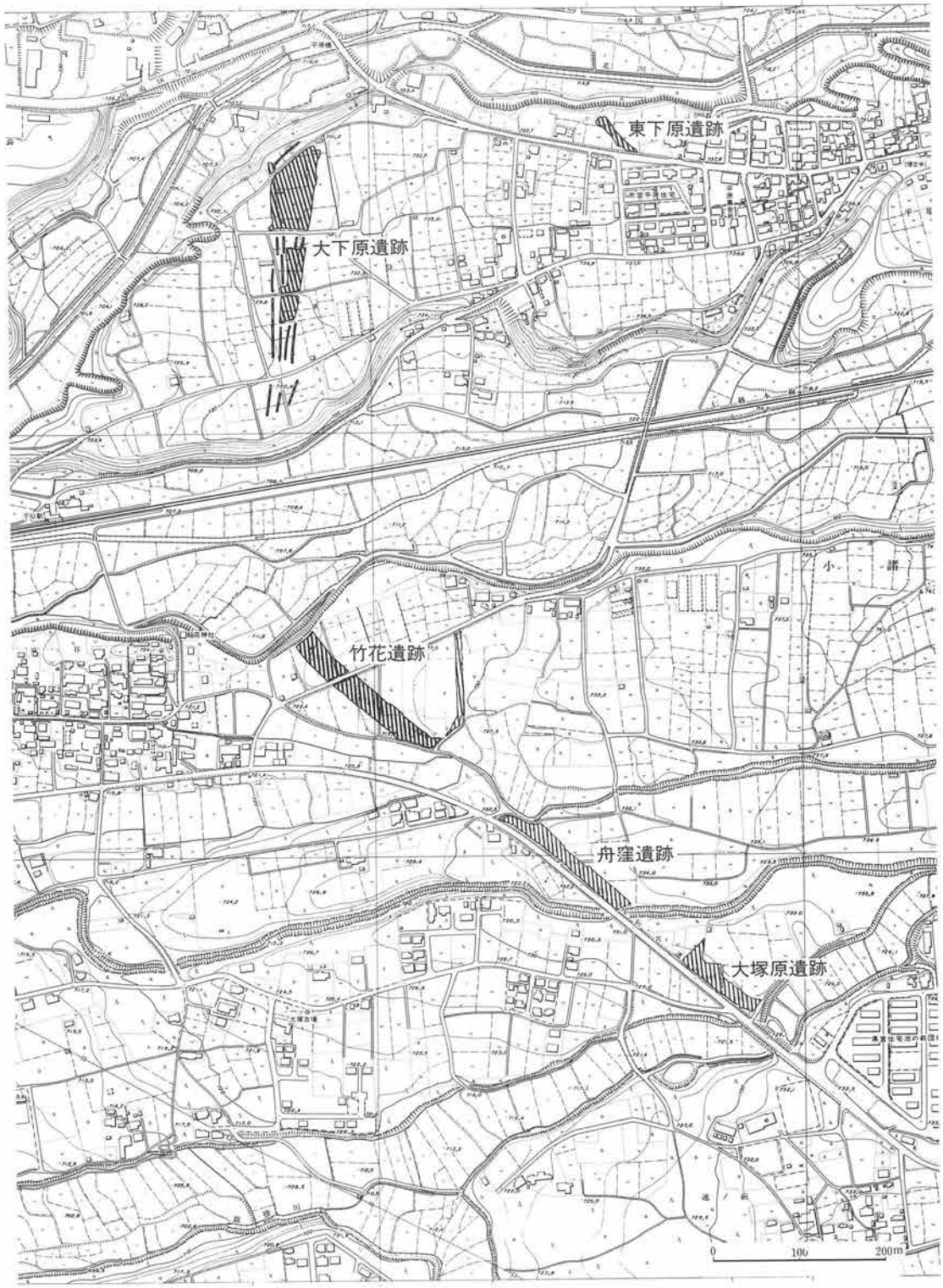
4　調査の方法

調査対象地域内に試掘トレンチを設定し、全体層序第II層上面まで重機により掘り下げを行なった後、遺構の確認を行なった。

排土については、試掘トレンチにより確認し、遺構が検出されなかった場所を排土置場としたが、竹花遺跡、大塚原遺跡などでは遺構が全面に及んだため、搬出を行なった。

グリッドは、国家座標第Ⅷ系を用い、25m四方のグリッドを設定した。

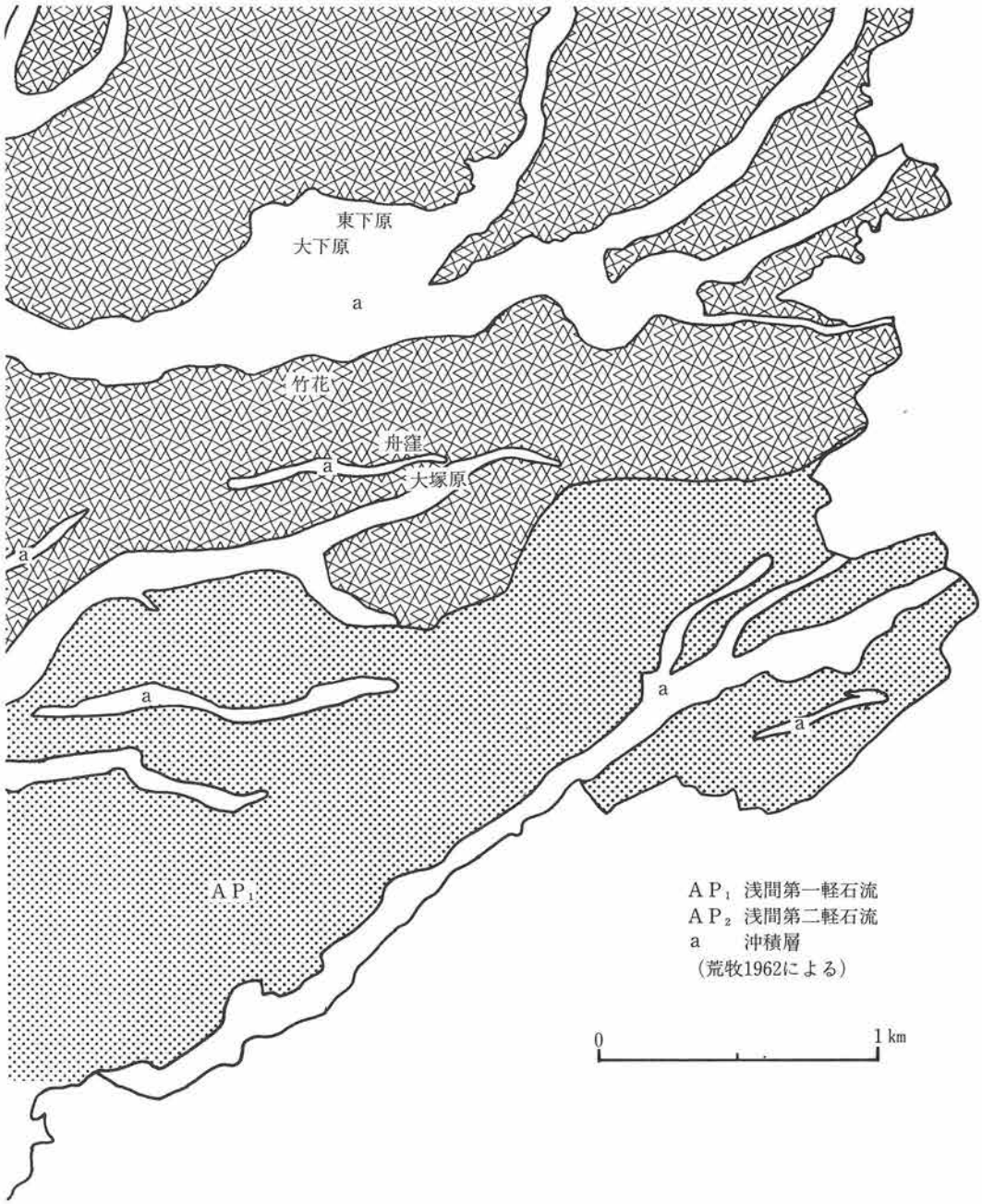
現地説明会（竹花遺跡）



第2図　調査区（1：10,000）

II　遺跡の概観

1　遺跡の自然的環境



第３図　遺跡付近の地質図

今回発掘調査の対象になった地籍は、三子塚遺跡群の東下原、大下原、宮ノ反A遺跡群の竹花、舟窪、大塚原は大塚原遺跡群に属している。

これらの5遺跡は、四つの谷（田切り）に囲まれた形の3つの台地にある。この台地の形成されたのは、この地籍の北東方向に聳える標高、現在2,560mの三重式成層火山の浅間山の噴火活動により流出した第一軽石流、さらにその上に第二軽石流の堆積により形成された地層である。この地層の基盤は、千曲層群の上に黒斑火山の爆発による塚原泥流が堆積した。その後に地盤の沈降があり、その上に上記の灰流が堆積したものである。

この地層は、きわめて軽しょうで凝結性も乏しく崩壊しやすい層で、一度（ひとたび）すこし強い流水があれば侵蝕されて深い谷ができる。一旦、谷ができると側壁も次々に侵蝕が進み谷底が拡大し、凹形の谷を形成する。

谷の平坦地には細流などがあり、次第に水田が開発され稲作が行なわれるようになっていった。

谷の左右は高台となり乾燥して、原野や山林になり畑地として利用されるようになったと思われる。このため、住環境に適するためか遺跡がある。

この付近の水便は、宮ノ反A遺跡群の北方には繰矢川があり、その支流の水利がある。その他の谷の平坦部には大きな湧水は見られないが細流があり、それを利用して水田耕作がはじめられたと思われる。江戸期になり御影用水が開発され、水利は次第に便利になり水田はさらに拡張され、近年には農業構造改善によりさらに整備され、地形も変化した。

遺跡付近の植生は、台地の平坦部はほとんど耕地化や宅地になり、平地林の大きなものは全然見当たらない。しかし、高台のところどころには小さな林も見られるが、それらは田切りの谷と高台の斜面の崖錐地帯に残っているものが多い。ここの植生は、木本の高木では、アカマツ、カラマツ、クヌギ、コナラ、カスミザクラ、ケヤキ、オニグルミ等で亜高木や低木では、ガマズミ、ヤマウルシ、ヌルデ、ニシキギ、ダンコウバイ、ノイバラ等蔓性のものには、ノダフジ、クマヤナギ、アケビ、ツルウメモドキが生えている。高台地帯は、前述のようにかつては平地林や原野だったと思われるが、今は畑地として利用されているが作物は時の移り変りに従い変遷がある。

養蚕が盛りの頃には桑畑として、養蚕業が衰えると野菜栽培や果樹栽培が行なわれる。果物では、モモ、リンゴ、ブドウ、テウチグルミ等が栽培されるようになった。

畑地は、ナズナ、セイヨウタンポポ、タネツケバナ、カタバミ、スベリヒュウ、アカザ、ノボロギク、チガヤ等。水田地帯は、オオミゾソバ、セリ、コナギ等、湿地に適応した植物が多い。

これらの耕地も休耕田や耕作されない畑地が多くなり、植生も帰化植物のハルシオン、ヒメジョオン、ヒメオドリコソウ、セイヨウタンポポが群落をなし、さらに近年は、アレチウリ、オオブタクサ、ハキダメギク等が猛威をふるい植生は変化しつつある。

2　遺跡の歴史的環境

市内の遺跡立地を概観した場合、東南部地域においては、佐久平に特有な田切り地形をひかえた台地上に位置する場合が顕著である。

今回、調査対象となった遺跡を中心とする地域では、宮ノ反A遺跡群のほぼ東端にあたる宮ノ反遺跡が調査されているにすぎない[1]。以下、周辺遺跡について、調査成果、詳細分布調査の結果[2]をもとに、時代・時期別に概観してみたい。

まず、縄文時代では、三子塚遺跡群・宮ノ反遺跡群・大塚原遺跡群といった遺跡がある。縄文時代の遺跡の調査例はなく、宮ノ反遺跡の調査では、遺構は検出されなかったが、東下原、大下原、竹花、大塚原の各遺跡で土器片、石器が出土している。これらの遺跡は、縄文時代中期後半から後期初頭（加曽利E期から堀ノ内期）に認められる遺跡数の増加と関連するものと考えられる。以上のほか、時期的に不明であるが、谷地原遺跡群から打製石斧が出土している。

弥生時代については不明であるが、宮ノ反遺跡で中期の栗林式土器壺の胴部破片、後期の箱清水式土器甕の胴部破片が出土している。

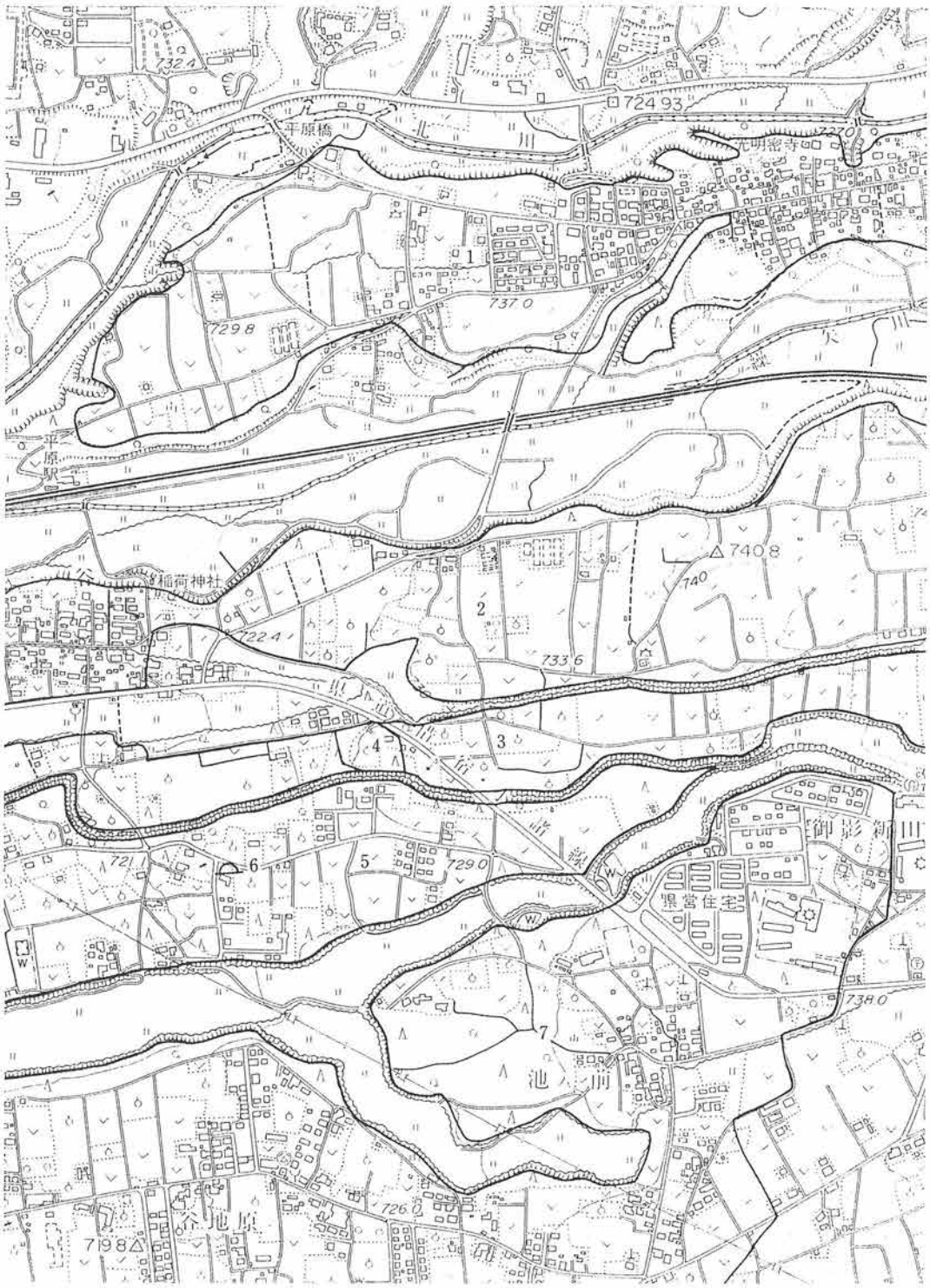
古墳時代前期にはいると、台地上にも確実に竪穴住居址が認められるようになる。これまでの調査からすると、概して、2・3棟の単位と考えられる。第4図の範囲には含められなかったが、初頭の住居址が和田原遺跡で4棟検出されている[3]。和田原遺跡では、在地系の土器とともに東海地方西部、東海地方東部以東の土器が出土している。小型丸底土器を伴出しない段階である。後述するように、この段階に併行すると考えられる住居址が竹花遺跡で、小型丸底土器を伴出すると考えられる段階の住居址が大下原遺跡で各々検出されている。続く中期の段階も調査例がなく、後述するように竹花遺跡で2棟検出されている程度である。

後期にはいると、田切りをひかえた台地上の遺跡分布が顕著となってくる。また、この時期はいわゆる後期古墳群の築造と大きく関連する時期でもある。これまでの調査成果からすれば、後期でも6世紀後半の頃からと考えられる。宮ノ反遺跡では、後期後半と考えられる住居址が4棟検出されており、土器類のほか、第4号住居址から滑石製と土製の丸玉が出土している。

古墳時代後期後半から奈良時代にかけての外来系土器では、いわゆる畿内系暗文を持つ杯が関口B遺跡第34号住居址[4]から、畿内地方のものに極似した小型甕が第37号住居址から出土しており、今回の調査でも数点出土している。

一方、古墳では、一ッ谷大塚古墳がある。昭和50年に市指定となった円墳で、径11～14m、高さ2mを測る。内部主体の詳細については不明であるが、横穴式石室を有するものであろう。今回調査された大塚原、舟窪遺跡との関連が窺われる。

続く奈良時代の調査例は、近年の調査により集積されつつある。特に、佐久市西屋敷を中心とする、前田・鋳師屋・野火付・十二・鋳物師屋の各遺跡で検出された奈良・平安時代の竪穴住居



第4図　遺跡と周辺遺跡分布図（1：10,000）

第１表　周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	立地	縄文	弥生	古墳	歴史	中世	近世	備考
1	三子塚遺跡群	大字平原字三子塚・東丸山・中原・寺裏・改居祖・東居祖・西居祖・入居祖・丸山・居祖添・下原・大下原・東下原・西下原・		○	○	○	○			平成元・２年発掘調査
2	宮ノ反Ａ遺跡群	大字御影新田字宮ノ反・池尻・塚ノ前・竹花・一丁田				○	○			昭和59年・平成２・３年発掘調査
3	舟窪遺跡	大字御影新田字舟窪・反田・向原				○	○			平成３年発掘調査
4	舟窪館跡	大字御影新田字舟窪						○		
5	大塚原遺跡群	大字御影新田字大塚原・大字耳取字大平・下平				○	○			平成３年発掘調査
6	一ツ谷大塚古墳	大字御影新田字大塚原1936				○				
7	谷地原遺跡群	大字御影新田字池ノ上・谷地原		○	○	○	○			昭和60年一部試掘調査

址の総数は429棟以上、掘立柱建物址は387棟以上である。鋳物師屋遺跡では、奈良時代初めの溝で囲まれた掘立柱建物址群が検出され、注目される(5)。また、土器編年では、御代田町前田遺跡の調査成果として奈良時代四期区分の編年が提出され、より詳細なものになってきている。また、他地域との関連では、関口Ｂ遺跡第16号住居址に続き、竹花遺跡でも甲斐型土器が出土しており、山梨との交流を窺わせる資料も徐々に蓄積されつつある。

平安時代では、先述したように年代幅を有するが、古墳時代後期と並び、遺跡数において一つのピークを形成するようである。また、奈良時代と同じく該期の土器編年の細分資料も徐々に増加しつつある。宮ノ反遺跡では、若干の幅を有するが、前葉の住居址が５棟検出されている。

降って、中世の城館跡では舟窪館があり、土塁が巡らされているが、詳細については不明である。

註

(1)　小諸市教育委員会　1985　『宮ノ反』

(2)　小諸市教育委員会　1987　『長野県小諸市遺跡詳細分布調査報告書』

(3)　小諸市教育委員会　1989　『和田原・鎌田原』

(4)　小諸市教育委員会　1991　『関口Ａ・関口Ｂ・下柏原』

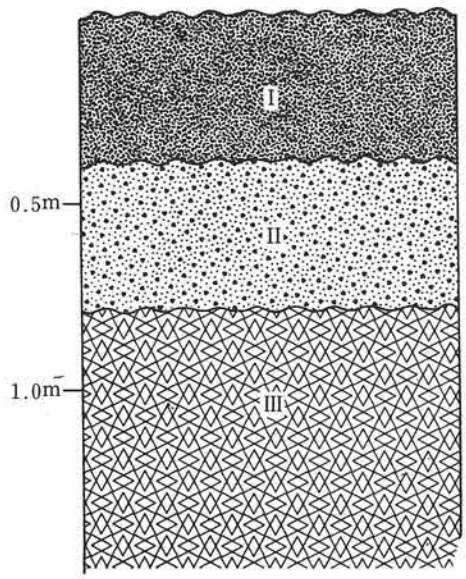
(5)　これらの成果をもとに奈良時代の村落生活が描かれている。牛山佳幸　1989「第三章　律令政治の展開と信濃　第四節　奈良時代の村落生活」　『長野県史　通史編　第１巻原始・古代』　長野県史刊行会

III 層　　序

第Ⅰ層　黒褐色土層（10YR2/2）

第Ⅱ層　明褐色土層（7.5YR5/6）

第Ⅲ層　にぶい黄橙色土層
（10YR7/4）



第５図　層序模式図

東下原遺跡、大下原遺跡、竹花遺跡、舟窪遺跡、大塚原遺跡は、いずれも南北を田切りにはさまれた台地上に位置する。

標高は、およそ720～730m代である。

第Ⅰ層は、耕作土層で、層厚は30～70cmであるが、場所により15cmと薄い個所も存在した。

また、大下原、竹花、大塚原遺跡では浅い谷が認められた。

第Ⅱ層は、浅間第２軽石流（AP_2）の頂部にあたる。遺構の確認は、本層上面において行なった。ϕ0.5～20cm前後のパミスを含み、締っていない。なお、第２図で、大下原遺跡は沖積層となっているが、大下原遺跡も第２軽石流上に位置する。

第Ⅲ層は、にぶい黄橙色を呈し、ϕ0.5cm前後のパミスを含む。第Ⅲ層に比べ、締っている。

軽石流のうち、浅間第１軽石流（AP_1）は、その後に流出した浅間第２軽石流（AP_2）との間に厚さ約10cmの黒褐色土があることから、両軽石流の噴出には数百年の隔たりがあったと考えられている[(1)]。また、二つの軽石流は、1.0～1.1万年前に浅間火山の硬質安山岩マグマの活動により噴出されたものとされている[(2)]。

註

(1)　田中邦雄監修・降旗和雄編　1979　『長野県地学のガイド』　コロナ社

(2)　註(1)の文献に同

IV　遺構と遺物

1　東下原遺跡

(1)　竪穴住居址

1）第1号住居址

遺構（第6・7図、図版1）

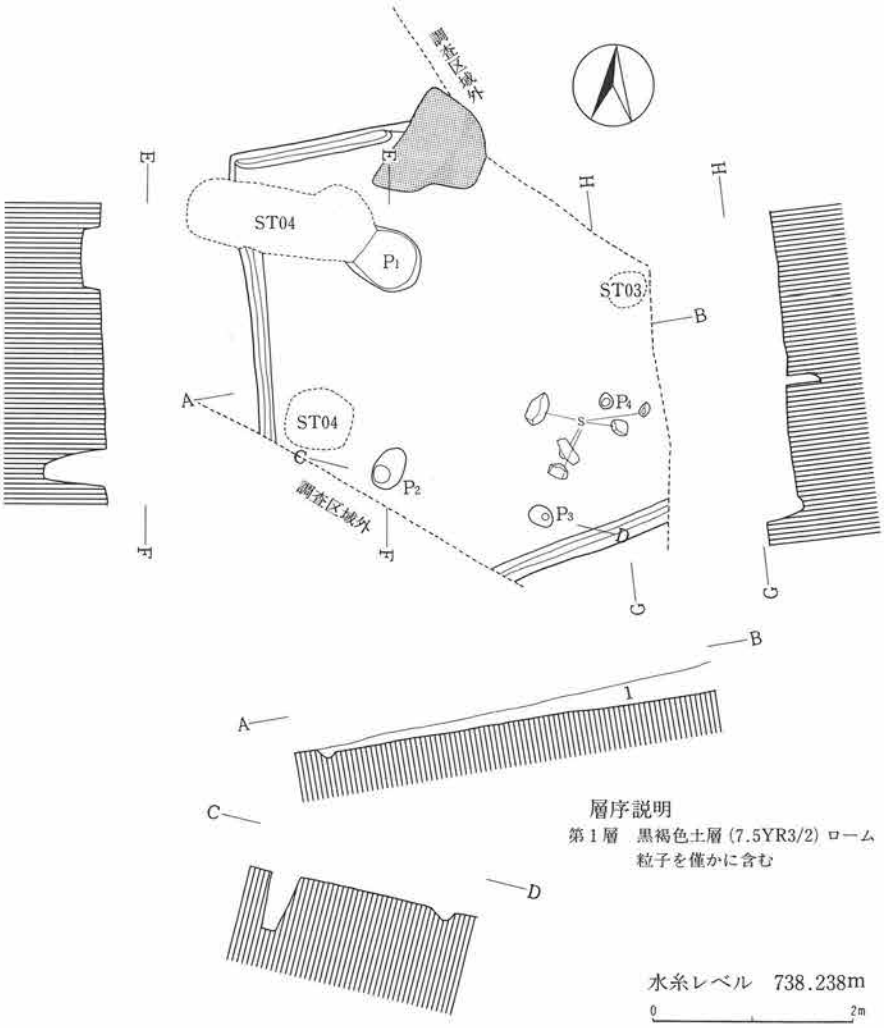
本住居址は、B－2グリッドに位置する。第3・4号掘立柱建物址と重複関係を有し、第3・4号掘立柱建物址により切られている。

カマドを中心とする主軸方位は、N－11°－Wを示す。

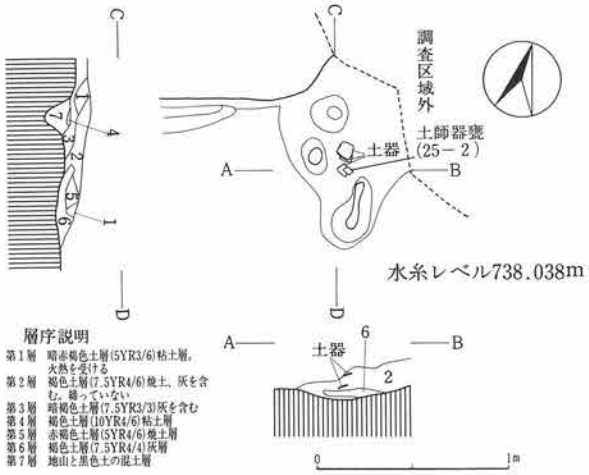
東西は調査し得た部分で405cm、南北478cmを測り、平面プランは隅丸方形を呈するものと思われる。

確認面からの壁高は、6～34cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置するものと思われるが、遺存状



第6図　第1号住居址実測図



第7図　第1号住居址カマド実測図

態は悪い。おそらく、暗赤褐色および褐色の粘土を主体に構築されていたものと考えられる。

ピットは、4基検出され、P_1・P_2が主柱穴、P_3は出入口部の施設に関連するものと思われる。

周溝は、北西コーナで切れるが、おそらく全周していたものと考えられる。

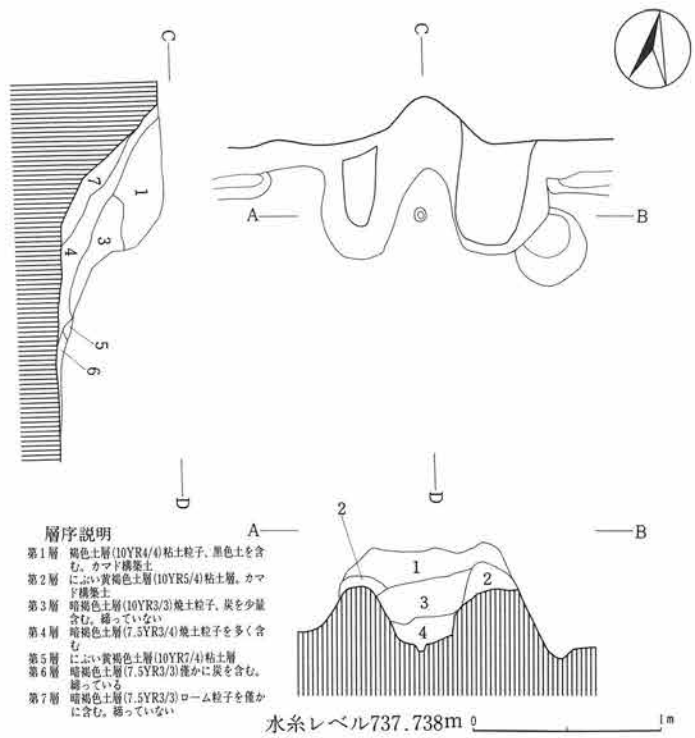
遺物（第25・26図、図版37・38）

土師器片、須恵器片が出土している。このうち、図示したものに、黒色土器杯1点、土師器甕底部2点、石製品1点がある。石製品は、安山岩製の石臼の破片である。

本住居址の所産期は、古墳時代後期と考えられる。

2）第2号住居址

遺構（第8・9図、図版1）



第8図　第2号住居址カマド実測図

本住居址は、B－2グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

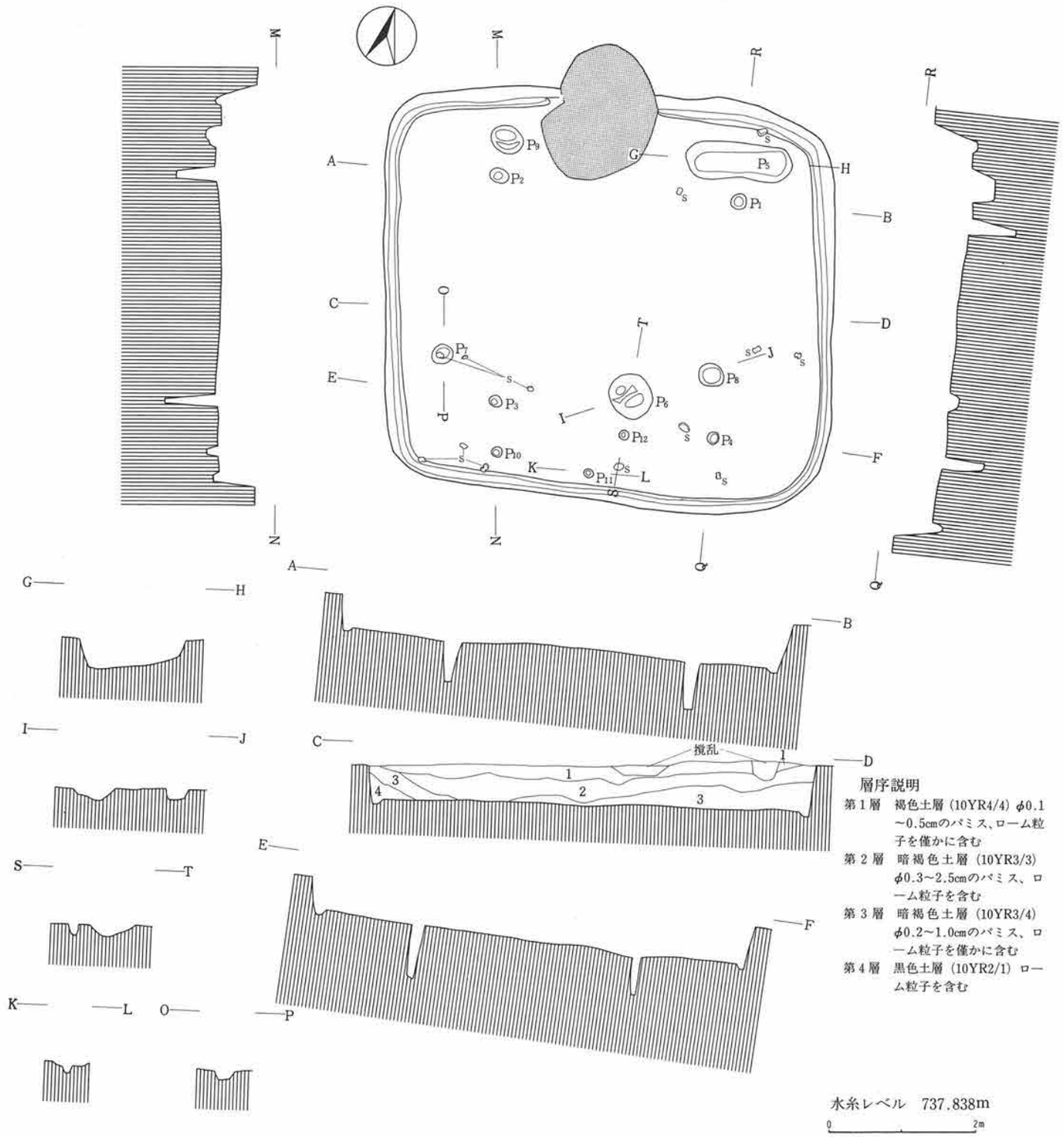
東西610cm、南北556cmを測り、平面プランは隅丸方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、N－12°－Wを示す。

確認面からの壁高は、44～64cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。袖部は、地山を掘り残して袖芯とし、褐色土とにぶい黄褐色を呈する粘土を用いて構築されていたと考えられる。

ピットは総計12基検出さ



第9図 第2号住居址実測図

れた。このうち、P_1～P_4が主柱穴、P_5が貯蔵穴と考えられる。また、周溝はカマド部分を除き、全周する。

遺物（第25～27図、図版37～39）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、縄文土器片、石製品が出土している。図示したものに、土師器杯３点、小型甕・壺各１点、黒色土器杯２点、高杯脚部１点、石製品12点がある。石製品には、編み物用の錘、紡錘車、臼玉がある。錘は、10cm前後の河原石の側面に明瞭な凹みを作出している。重さは、２－316ｇ、３－289ｇ、４－309ｇ、５－250ｇ、６－257ｇ、７－261ｇ、８－233ｇ、９－263ｇ、10－222ｇで、平均は267ｇである。紡錘車、臼玉は滑石製で、紡錘車の重さは65.3ｇを量る。

縄文土器片は、覆土出土で、中期後半～後期のものであろう。

本住居址の所産期は、古墳時代後期に比定される。

３）第３号住居址

遺構（第10・11図、図版１）

本住居址は、A・B－２グリッドに位置する。

他遺構との重複関係はない。

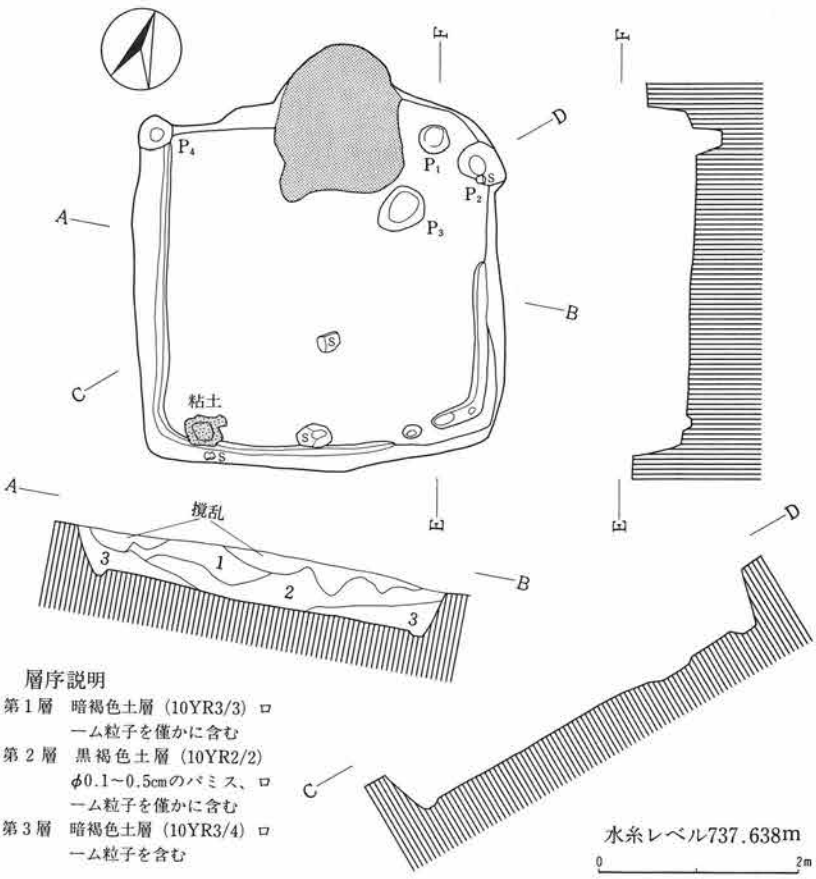
東西365cm、南北365cmを測り、平面プランはやや不整な隅丸方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、N－18°－Wを示す。

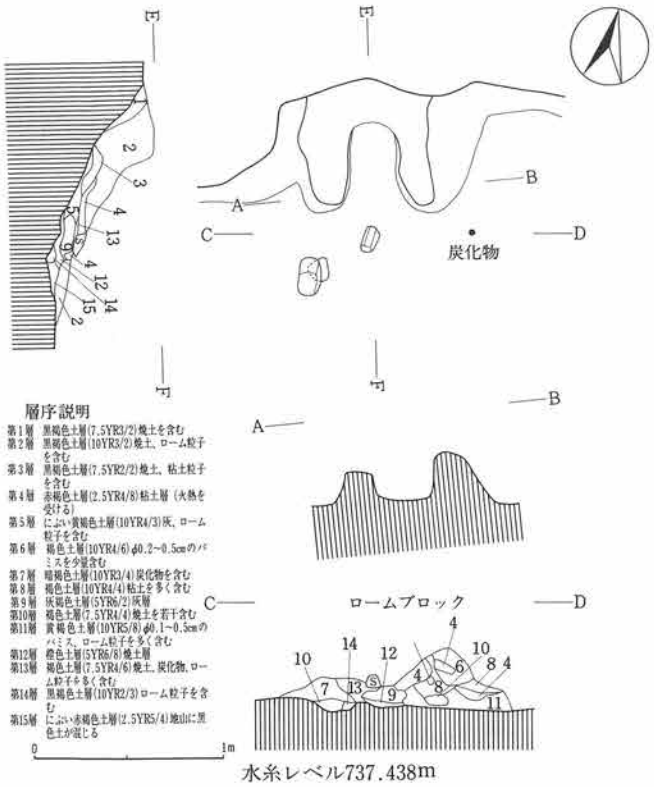
確認面からの壁高は、38～48cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。

遺存状態は悪いが、地山を掘り残して袖



第10図　第３号住居址実測図



第11図　第３号住居址カマド実測図

部芯とし、褐色の粘土および加工した軽石を用いて構築されていたと思われる。

ピットは総計４基検出されたが、柱穴については明確でない。

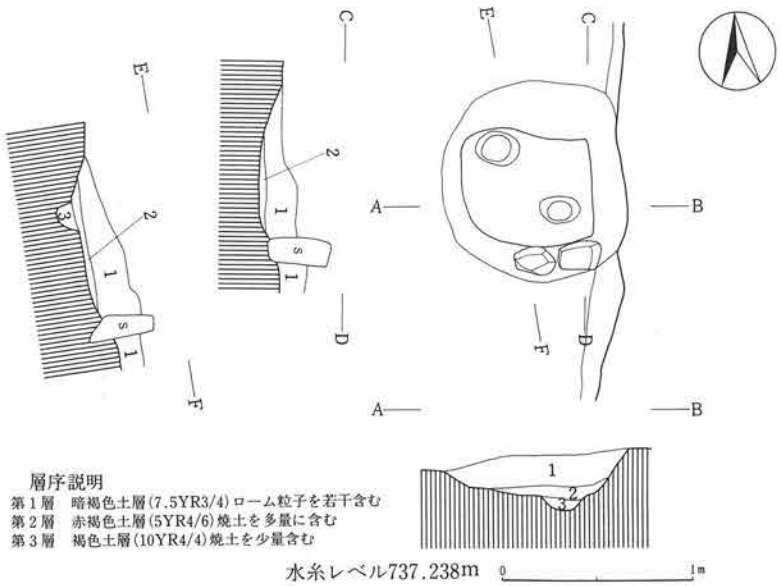
また、南西コーナー付近で粘土塊が認められた。周溝は、東南・西壁にかけて巡らされていた。

遺物（第25・26図、図版37・38）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、石製品が出土している。図示したものに土師器杯２点、甑、短頸壺、甕、石製品各１点がある。短頸壺は須恵器の模倣であろう。

本住居址の所産期は、古墳時代後期に比定されよう。

４）第４号住居址



第12図　第４号住居址カマド実測図

遺構（第12・13図、図版１）

本住居址は、Ａ－１グリッドに位置する。

第５号住居址、第１号溝址と重複関係を有し、第５号住居址、第１号溝址を切っている。

東西336cm、南北336cmを測り、平面プランは隅丸方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、E－8.5°－Sを示す。

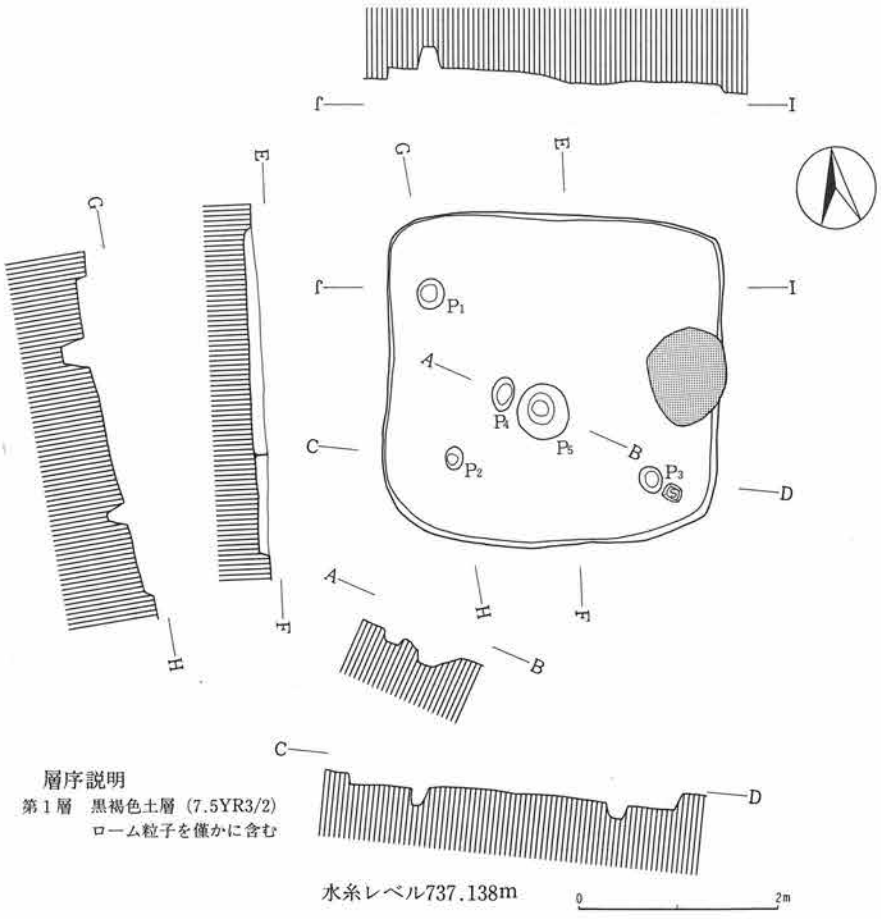
確認面からの壁高は、7～18cmを測る。

カマドは、東壁ほぼ中央部に位置する。

遺存状態は悪い。おそらく加工した軽石を芯として構築されていたものと思われる。

ピットは総計5基検出された。

このうち、P_1・P_2・P_3の3基が主柱穴と考えられる。また、周溝は確認されなかった。



第13図　第4号住居址実測図

遺物（第25図、図版37）

本住居址からは、土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土している。このうち、図示し得たものは、土師器杯1点である。

本住居址の所産期は、平安時代に比定される。

5）第5号住居址

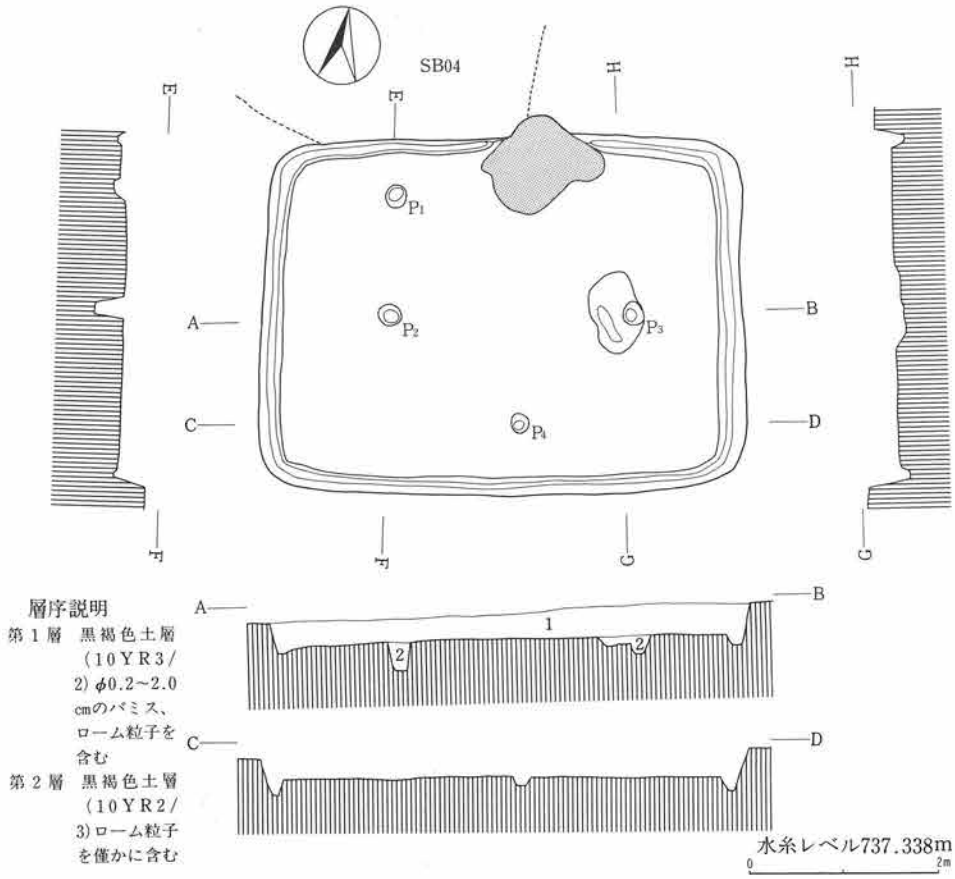
遺構（第14・15図、図版1）

本住居址は、A－1グリッドに位置する。第4号住居址と重複関係を有し、第4号住居址により切られている。

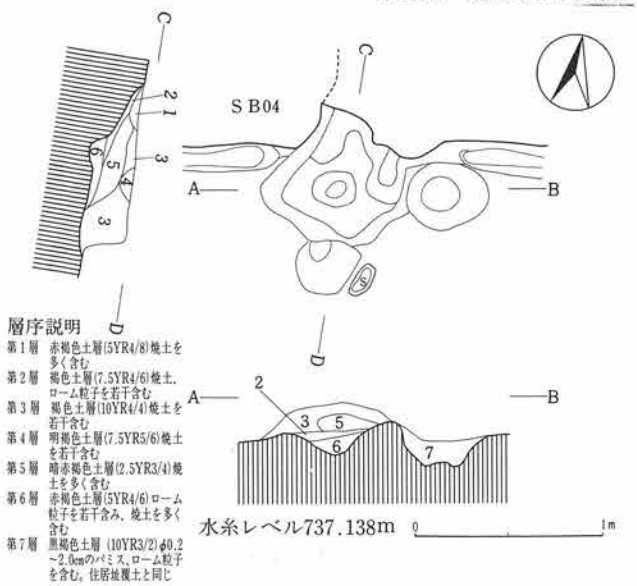
東西509cm、南北382cmを測り、平面プランは東西に長い隅丸長方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、N－11.5°－Wを示す。確認面からの壁高は、18.5～32cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置するが、遺存状態は悪い。



第14図　第5号住居址実測図



第15図　第5号住居址カマド実測図

本住居址の所産期は、古墳時代後期に比定されよう。

ピットは総計4基検出された。

このうち、P_2・P_3の2基が主柱穴、P_4は出入口部の施設に関連するものであろう。また、周溝はカマド部分を除き、全周していた。

遺物（第25・27図、図版37・39）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、縄文土器片が出土している。このうち、図示したものに土師器杯、黒色土器椀、縄文土器片がある。黒色土器椀は混入であろう。縄文土器片は中期のものと考えられる。

6）第6号住居址

遺構（第16・17図、図版1）

本住居址は、A－1グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

大半が撹乱を受けており、残存部から推して、東西約338cm、南北約303cmの隅丸方形プランを呈するものと思われる。

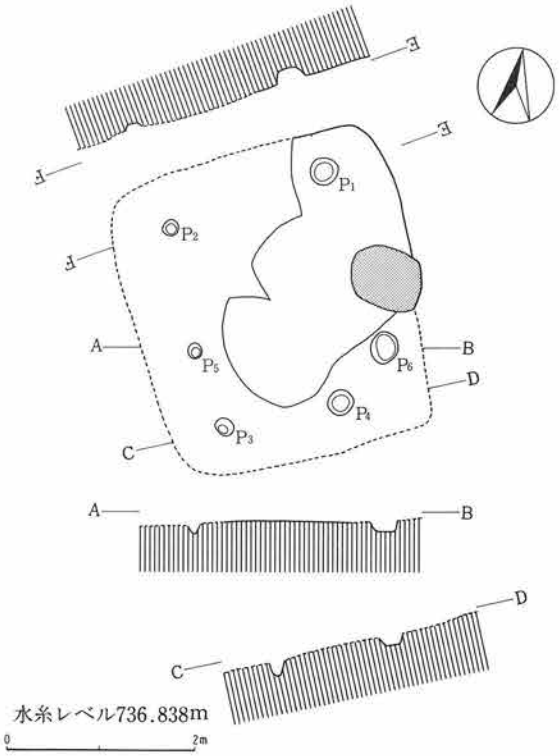
カマドを中心とする主軸方位は、N－66°－Eを示す。

カマドは、東壁ほぼ中央部に位置するものと思われるが、遺存状況は悪い。

おそらく、加工した軽石を主体に構築されていたものと考えられる。

ピットは総計6基検出された。このうち、P_1・P_2・P_3・P_4の4基が主柱穴、P_5は出入口部の施設に関連するものと思われる。

また、周溝は残存部においては確認されなかった。



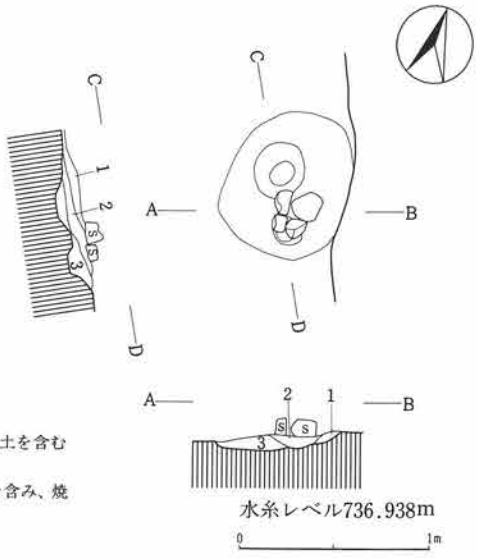
第16図　第6号住居址実測図

遺物（第25図、図版38）

本住居址からは、土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土している。

このうち、図示したものは、土師器小型甕、甕の2点である。いずれも、全器形を窺えないが、おそらく長胴を呈するものと思われる。

本住居址の所産期は、古墳時代後期に比定されよう。

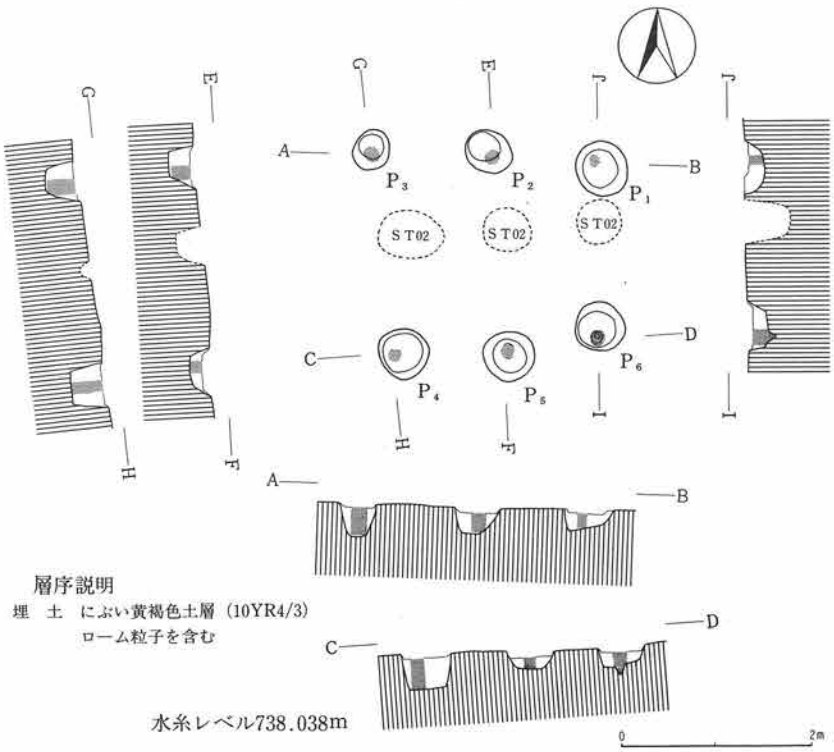


層序説明
第1層　褐色土層(10YR4/6)φ0.2～1.0cmのパミス、ローム粒子、焼土を含む
第2層　赤褐色土層(5YR4/6)焼土を多く含む
第3層　暗褐色土層(7.5YR3/4)φ0.1～0.3cmのパミス、ローム粒子を含み、焼土も若干含む

第17図　第6号住居址カマド実測図

(2) 掘立柱建物址

1）第1号掘立柱建物址



第18図　第1号掘立柱建物址実測図

遺構（第18図、図版1）

B－2グリッドに位置する。

第2号掘立柱建物址と重複関係を有する。

東西261～296cm、南北223～270cmを測り、平面プランは、長方形を呈する。

2間×1間の側柱式建物で、南北軸の方位は、N－7°－Wを示す。

柱間は、東西82～112cm、南北209～230cmを測る。ピット掘形の平面プランは、円形、楕円形である。

遺物

P_1・P_6から、土師器片、黒色土器片が出土している。このうち、P_6からロクロ整形の黒色土器杯の破片が出土していることから、平安時代以降の所産と考えられる。

2）第2号掘立柱建物址

遺構（第19図、図版1）

B－2グリッドに位置する。第1号掘立柱建物址と重複関係を有する。

東西260～263cm、南北264～289cmを測り、平面プランは、長方形を呈する。

2間×1間の側柱式建物で、南北軸の方位は、N－3°－Wを示す。

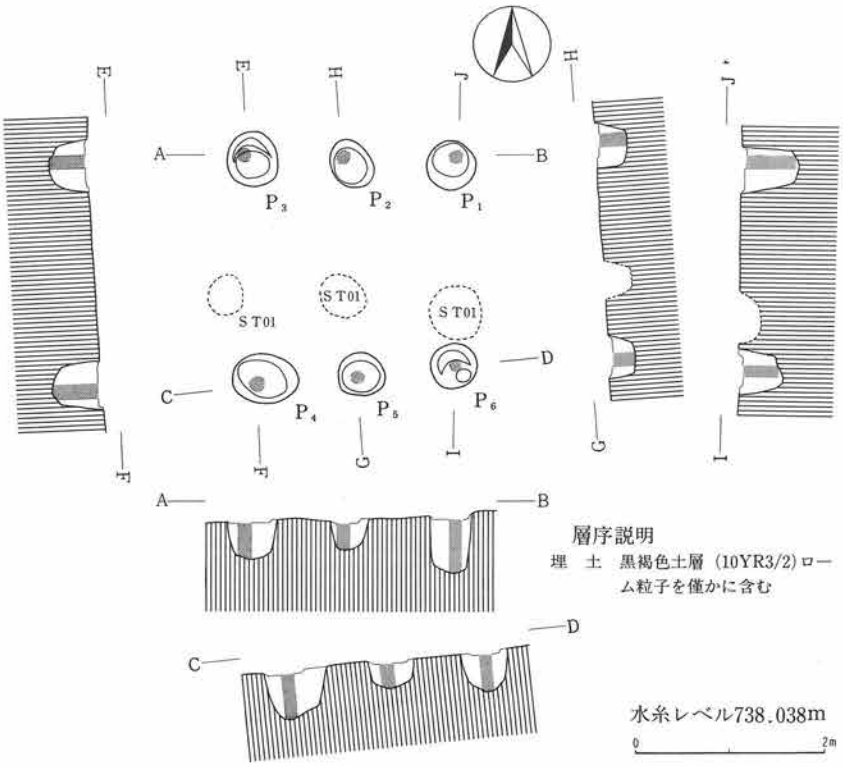
柱間は、東西91～106cm、南北209～229cmを測る。ピット掘形の平面プランは、円形、楕円形を

呈する。

遺物

P_2・P_3・P_4から、土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土している。

このうち、P_2から、底部へラキリ後手持ちへラケズリのなされた須恵器杯の破片が出土していることから、第1号掘立柱建物址よりも古く奈良時代以降の所産と考えられる。



第19図　第2号掘立柱建物址実測図

3）第3号掘立柱建物址

遺構（第20図）

B－2グリッドに位置する。第1号住居址と重複関係を有し、第1号住居址を切って構築されている。

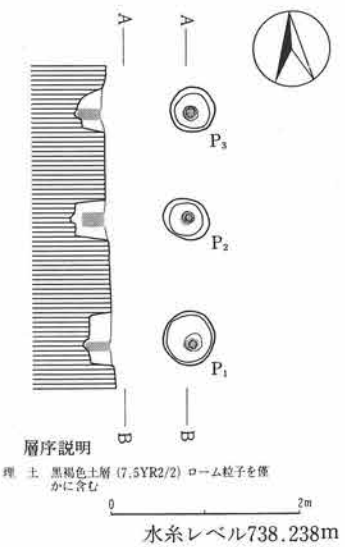
3基のピットが確認されただけで、全体は不明である。

南北軸の方位は、N－3.5°－Eを示し、柱間は、98～120cmを測る。

ピット掘形の平面プランは、円形、楕円形である。

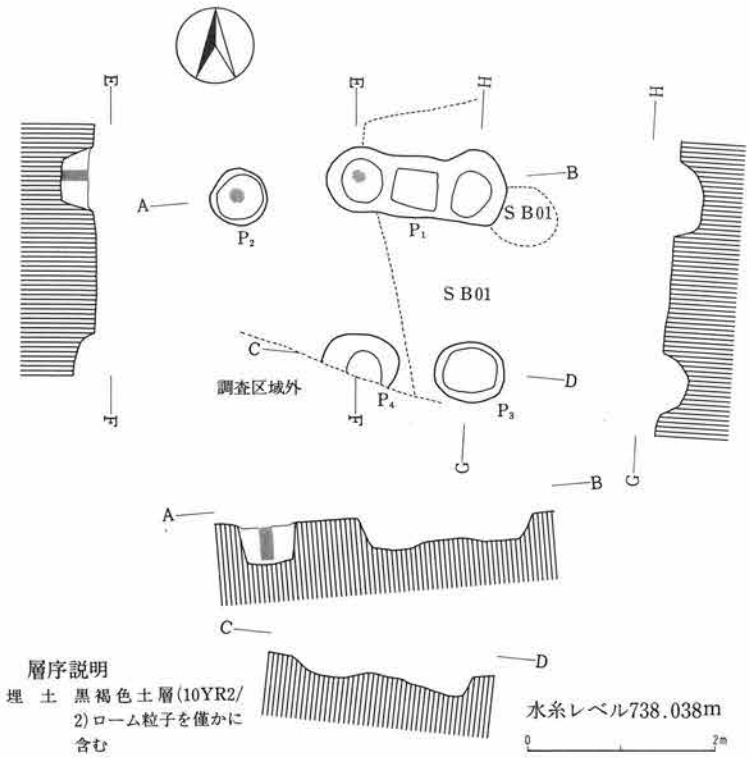
遺物

P_2・P_3から、土師器片、須恵器片が出土している。このうち、P_2から武蔵型土器甕の破片が出土していること、重複関係から奈良時代以降の所産と考えられる。



第20図　第3号掘立柱建物址実測図

4）第4号掘立柱建物址



第21図　第4号掘立柱建物址実測図

遺構（第21図）

B－2グリッドに位置する。第1号住居址と重複関係を有し、第1号住居址を切って構築されている。

4基のピットが確認されただけで、全体は不明である。

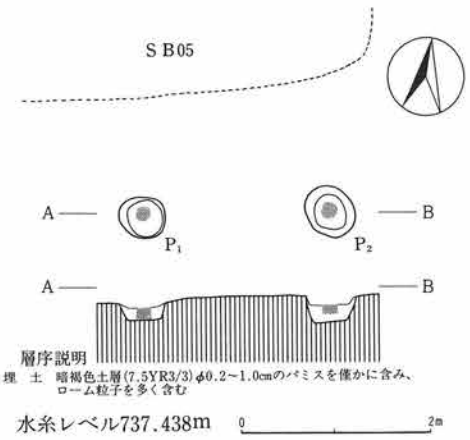
南北軸の方位は、N－1.5°－Wを示し、柱間は、114cmを測る。

ピット掘形には、円形、楕円形の外、溝持ちのものも認められた。

遺物

P_1・P_2から、土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土している。本遺構の所産期は、出土土器片、重複関係から奈良時代以降と考えられる。

5）第5号掘立柱建物址



第22図　第5号掘立柱建物址実測図

遺構（第22図）

A－1グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

2基のピットが確認されただけで、全体は不明である。柱間は、182cmを測る。

遺物

古墳時代後期～奈良時代と考えられる甕の破片が出土していることから、一応、古墳時代後期～奈良時代以降と考えておきたい。

(3) 溝　　址

1）第1号溝址

遺構（第23図、図版2）

本遺構は、A－1グリッドに位置する。第4号住居址と重複関係を有し、第4号住居址に切られている。

東西に延びる遺構で、調査区域内において調査された部分は、約7mの範囲である。

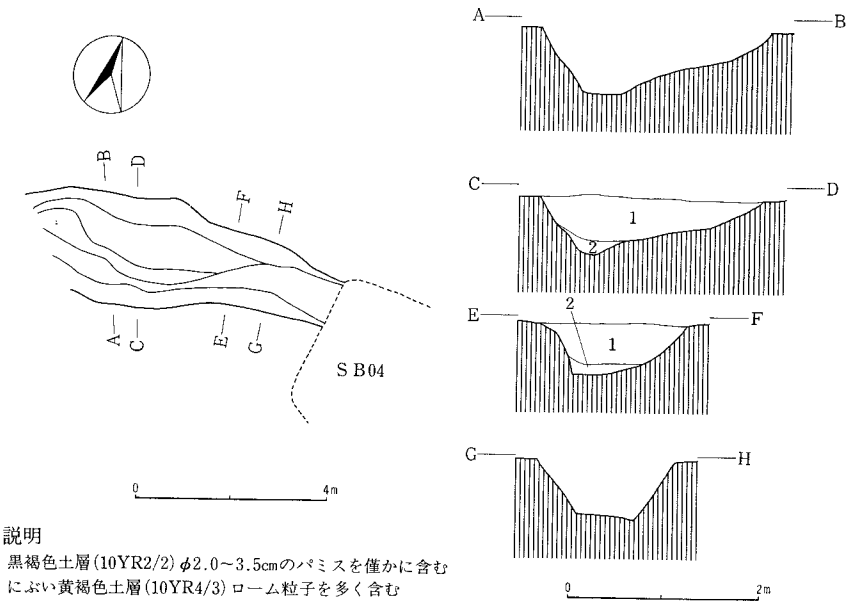
遺構覆土は2層に区分され、第1層の黒褐色土層（10YR2/2）が大半を占める。底面には砂の堆積は認められず、水の流れた痕跡は認められなかった。

溝の掘形は、逆梯形状で、テラス状となる個所も認められた。

溝巾は108～240cm、深さ55～73cmを測る。

遺物

出土遺物は皆無である。所産期については、重複関係から平安時代以前と考えられる。



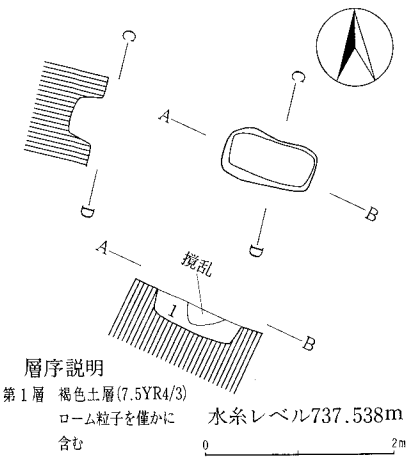
層序説明
第1層　黒褐色土層（10YR2/2）φ2.0～3.5cmのパミスを僅かに含む
第2層　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）ローム粒子を多く含む

水糸レベル736.938m

第23図　第1号溝址実測図

(4) 土　　坑

1）第1号土坑



第24図　第1号土坑実測図

遺構（第24図、図版2）

B－2グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

東西98cm、南北50cmを測り、平面プランは隅丸長方形を呈する。

長軸方位は、E－19°－Sを示す。

遺構覆土は、上部で撹乱を受けるが、褐色土により充填されており、確認面からの壁高は、20～26cmを測る。

遺物

土師器片、須恵器片が出土している。このうち、底部に糸切り痕を持つ土師器杯の破片が見られることから、本遺構の所産期は、平安時代以降と考えられる。

(5) 遺構外出土遺物

遺物（第25・27図、図版38・39）

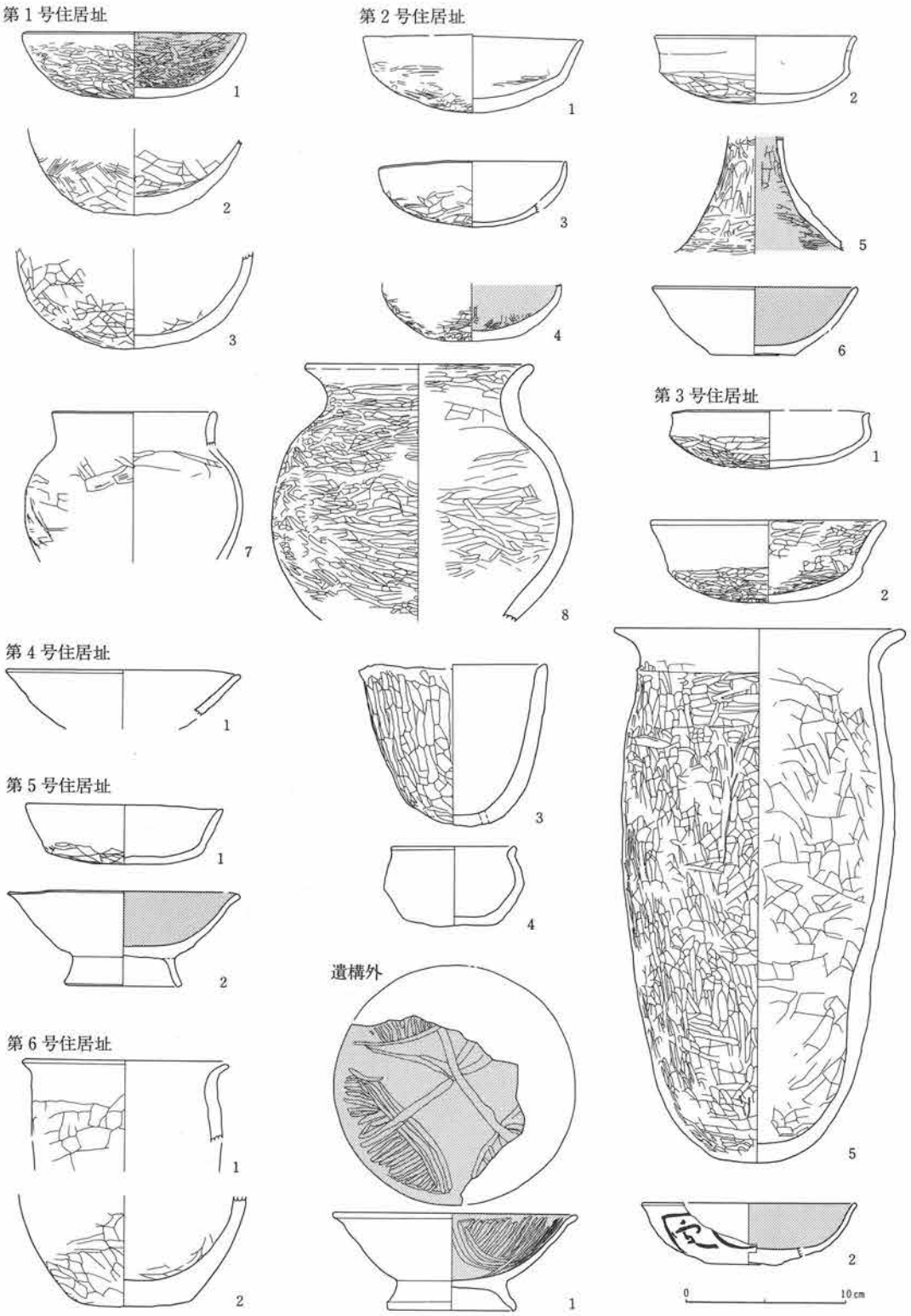
遺構外出土遺物で図示したものには、縄文土器、土師器、黒色土器、石製品がある。

縄文土器（第27図7）は、沈線による区画内を刺突文で充填するもので、後期の所産と考えられる。

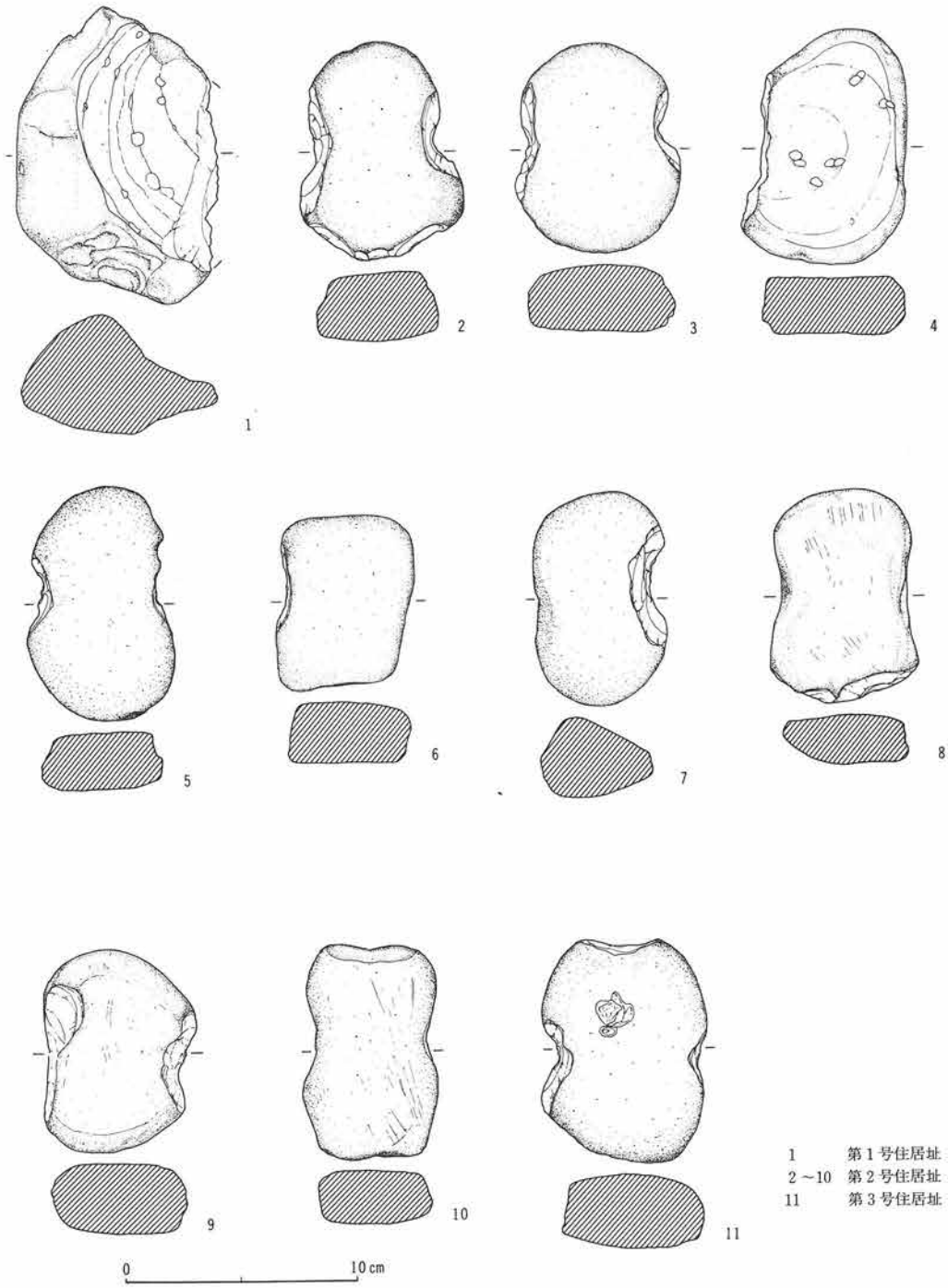
土師器（第27図8）は、内面に櫛歯状工具による調整がなされる。他の部分は、内外面ともヘラミガキが行なわれる。ヘラミガキは、古墳時代中・後期の土器に見られる調整に似るが、時代・時期は確定できない。器種は、すり鉢であろうか。

黒色土器には椀と杯がある。椀（第25図1）は内面に暗文が施される。杯（第25図2）は、外面に「屈」？の墨書がなされる。いずれも、平安時代の所産である。

石製品には、打製石鏃（第27図12）がある。チャート製で、重さ2.25ｇを量る。

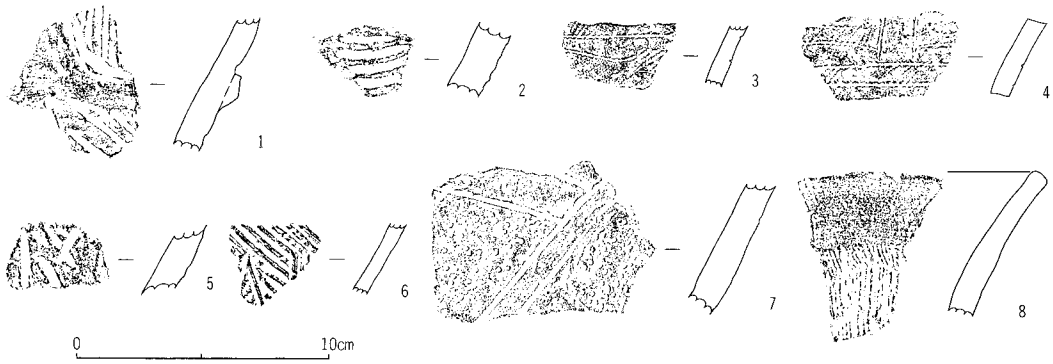


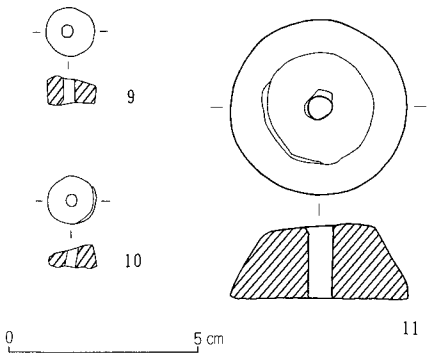
第25図　第1～6号住居址、遺構外出土土器実測図

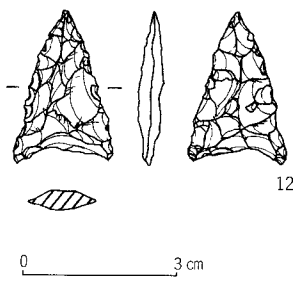


1　　第1号住居址
2～10　第2号住居址
11　　第3号住居址

第26図　石製品実測図

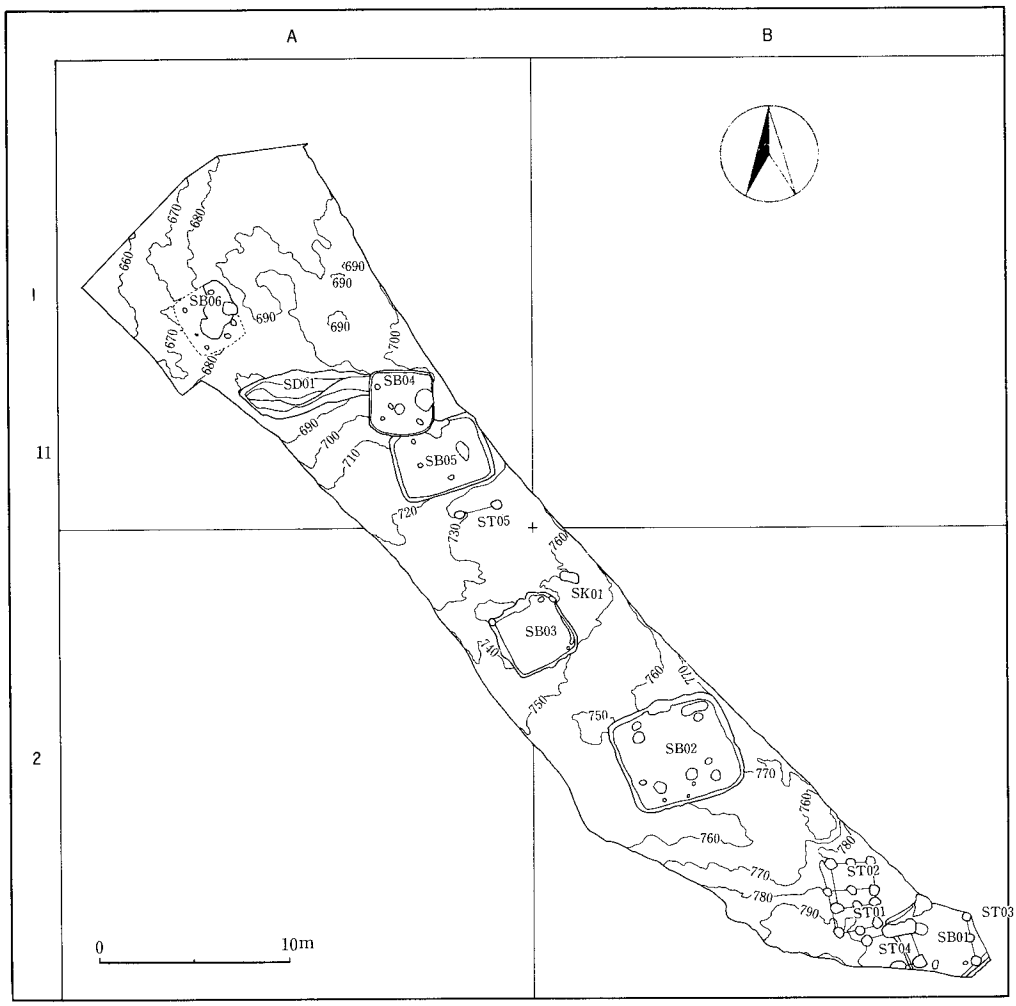






1～5・9～11　第2号住居址
6　第5号住居址
7・8・12　遺構外

第27図　土器拓影図・石製品実測図



第28図　東下原遺跡遺構全体図

2　大下原遺跡

(1)　竪穴住居址

1）第1号住居址

遺構（第29・30図、図版2）

本住居址は、B・C－7・8グリッドに位置する。第1号土坑と重複関係を有し、第1号土坑を切って構築されている。東西515cm、南北505cmを測り、平面プランは隅丸方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、N－13°－Wを示す。確認面からの壁高は、60～77cmを測る。

住居址覆土は8層に区分され、自然堆積と考えられる。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。軽石を袖芯とし、褐色（10YR4/6）を呈し、粘土を主体とする構築土により築かれていたものと思われる。

ピットは総計4基検出され、主柱穴と考えられる。周溝は検出されなかった。

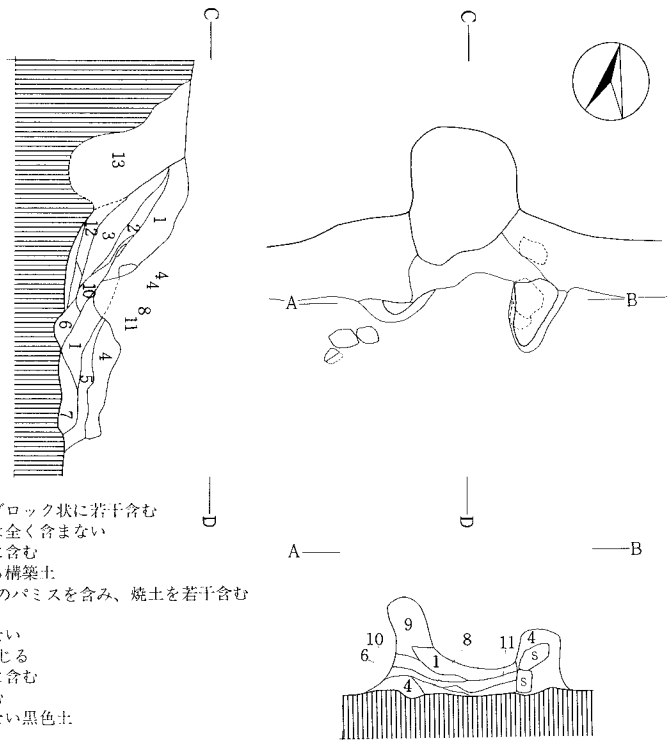
また、本住居址は焼失住居と考えられ、南部で禾本科植物の炭化材が検出された。

遺物（第65図、図版41）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、石製品が出土しているが、土器片の量は少ない。

図示したものは、石製品（第65図）1点である。磨石として用いられたものと考えられる。

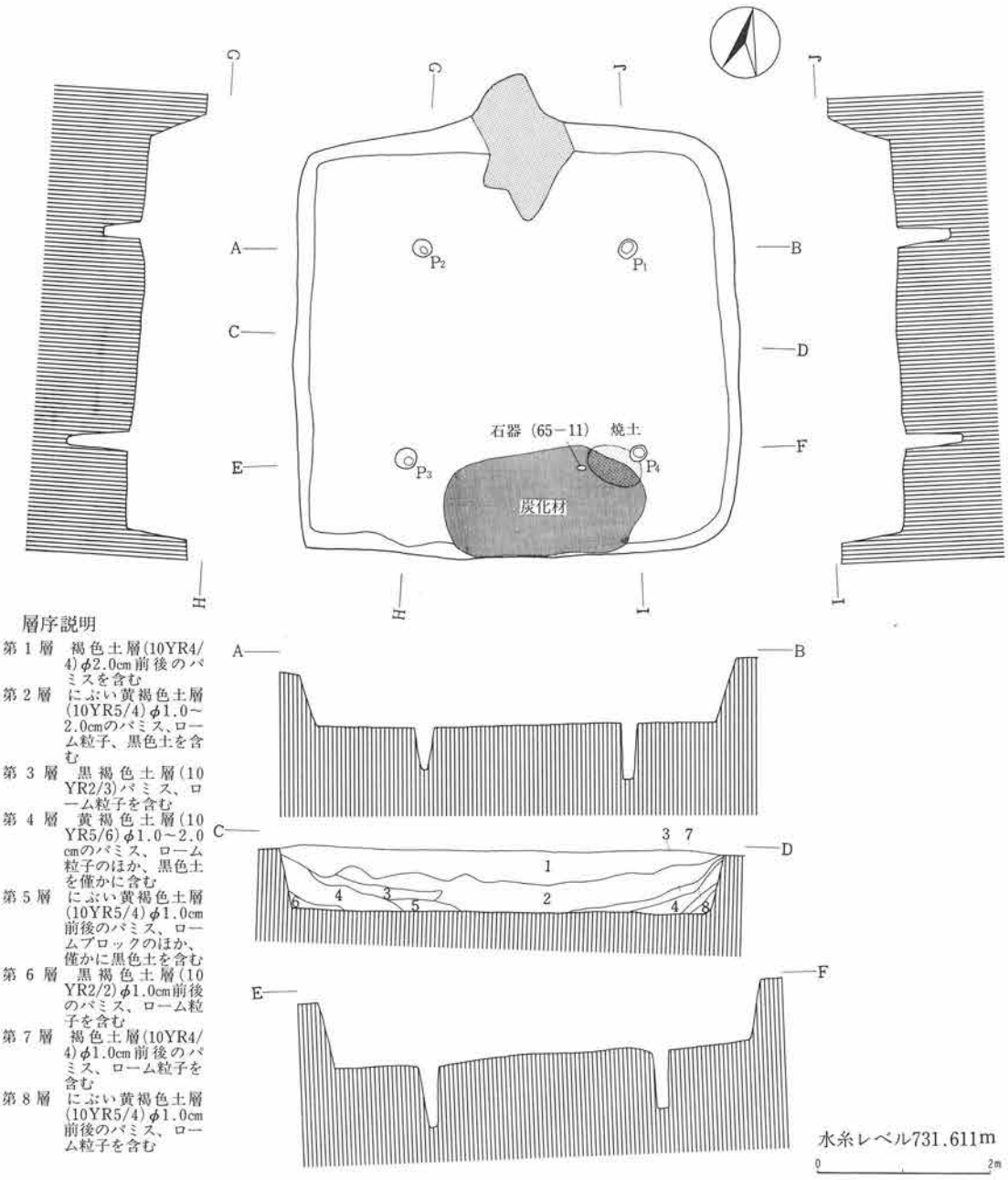
本住居址の所産期は、出土土器片から古墳時代後期に比定される。



層序説明

第1層　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）焼土をブロック状に若干含む
第2層　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）焼土等は全く含まない
第3層　暗赤褐色土層（5YR3/3）焼土を多量に含む
第4層　褐色土層（10YR4/6）粘土を主体とする構築土
第5層　赤黒色土層（2.5YR2/1）φ2.0～5.0cmのパミスを含み、焼土を若干含む黒色土
第6層　暗褐色土層（10YR3/3）焼土等は含まない
第7層　褐色土層（7.5YR4/6）粘土、焼土が混じる
第8層　暗赤褐色土層（5YR3/3）焼土を多量に含む
第9層　褐色土層（10YR4/4）粘土を多量に含む
第10層　黒褐色土層（10YR2/3）焼土等は含まない黒色土
第11層　明褐色土層（7.5YR5/6）灰層
第12層　黒褐色土層（7.5YR3/2）焼土、炭化物を若干含む
第13層　褐色土層（10YR4/6）パミス、ローム粒子を含む埋土（構築土）

第29図　第1号住居址カマド実測図



第30図　第１号住居址実測図

２）第２号住居址

遺構（第31・32図、図版２）

本住居址は、Ｃ－８グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

東西352cm、南北339cmを測る小型の住居で、平面プランは隅丸方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、N－18°－Wを示す。

確認面からの壁高は、37～46cmを測る。

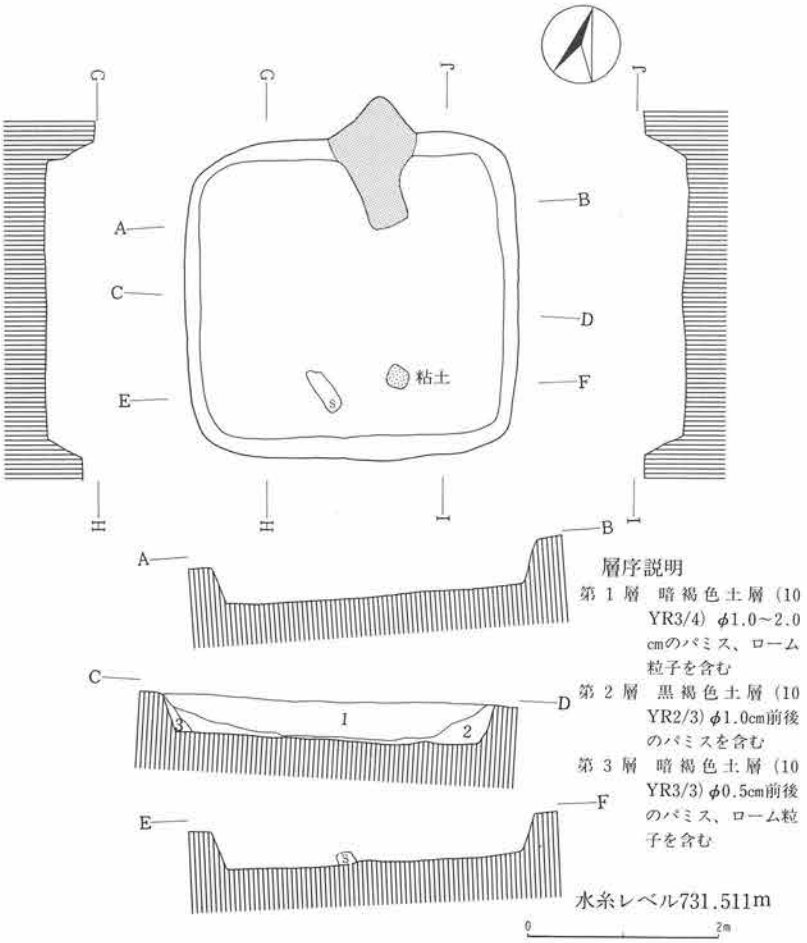
カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。遺存状態は悪い。おそらく、明褐色（7.5YR5/6））を呈する粘土を主体として構築されていたと思われる。

また、火床部では軽石製の支脚石が認められた。

住居址覆土は3層に区分され、自然堆積と考えられる。

ピット、周溝は検出されなかった。

また、南部では約50cmの安山岩と粘土が認められた。



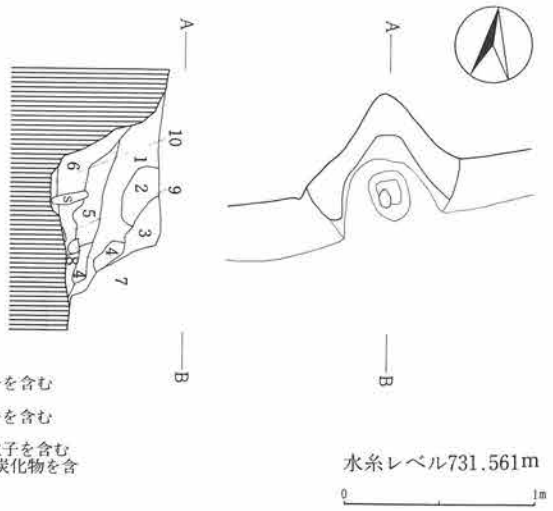
第31図　第2号住居址実測図

遺物（第64・65図、図版40・41）

土師器片、黒色土器片、鉄製品が出土している。土器片の量は少ない。

図示したものには、黒色土器杯（第64図1）と鉄製品で鎌（第65図1）がある。

本住居址の所産期は、出土土器から古墳時代後期に比定される。



層序説明
第1層　暗褐色土層（10YR3/3）φ0.5～1.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第2層　褐色土層（7.5YR4/4）粘土粒子を多く含む
第3層　暗褐色土層（10YR3/4）φ0.5～1.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第4層　明褐色土層（7.5YR5/6）粘土層
第5層　褐色土層（7.5YR4/4）φ0.5cm前後のパミス、粘土、焼土粒子を含む
第6層　暗褐色土層（10YR3/4）φ0.5cm前後のパミス、焼土粒子、炭化物を含む。締っていない
第7層　明褐色土層（7.5YR5/6）粘土ブロック（第4層に同じ）
第8層　黒褐色土層（10YR2/3）φ0.5cm前後のパミスを少し含む
第9層　赤褐色土層（5YR4/8）焼土層
第10層　褐色土層（10YR4/4）φ0.5cm前後のパミスを含む。粘性はない

第32図　第2号住居址カマド実測図

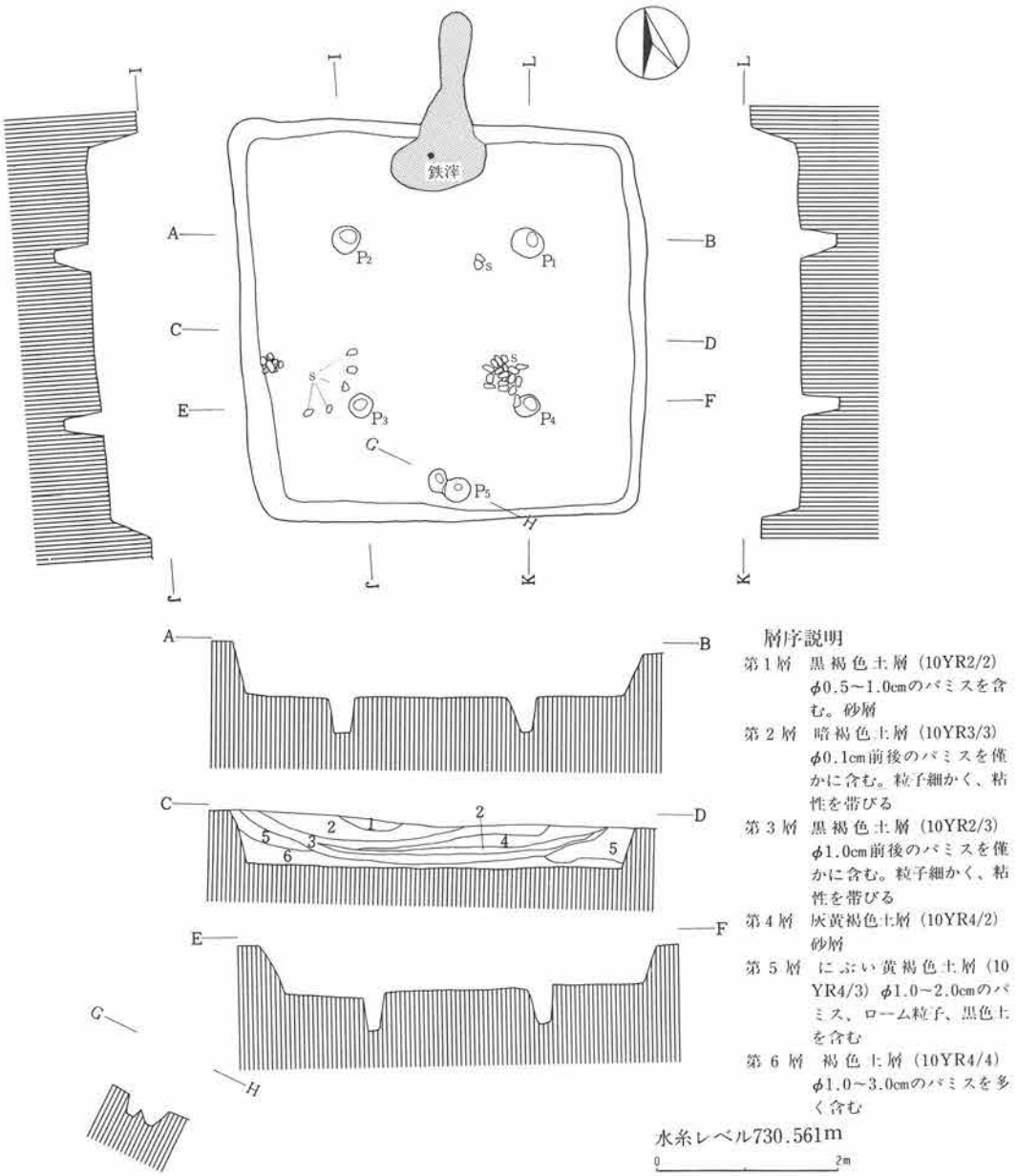
3）第3号住居址

遺構（第33・34図、図版2）

本住居址は、B－9グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

東西447cm、南北438cmを測り、平面プランは隅丸方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、N－15°－Eを示す。確認面からの壁高は、41～59cmを測る。



第33図　第3号住居址実測図

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。地山を掘り残して袖芯として、にぶい赤褐色（5YR4/4）粘土を主体とする構築土、軽石を用いて築かれていたものと思われる。また、煙道部は117cmと長く、特徴的である。

住居址覆土は6層に区分され、自然堆積と考えられる。

ピットは総計5基検出された。このうち、P_1～P_4が主柱穴、P_5は出入口部の施設に関連するものであろう。

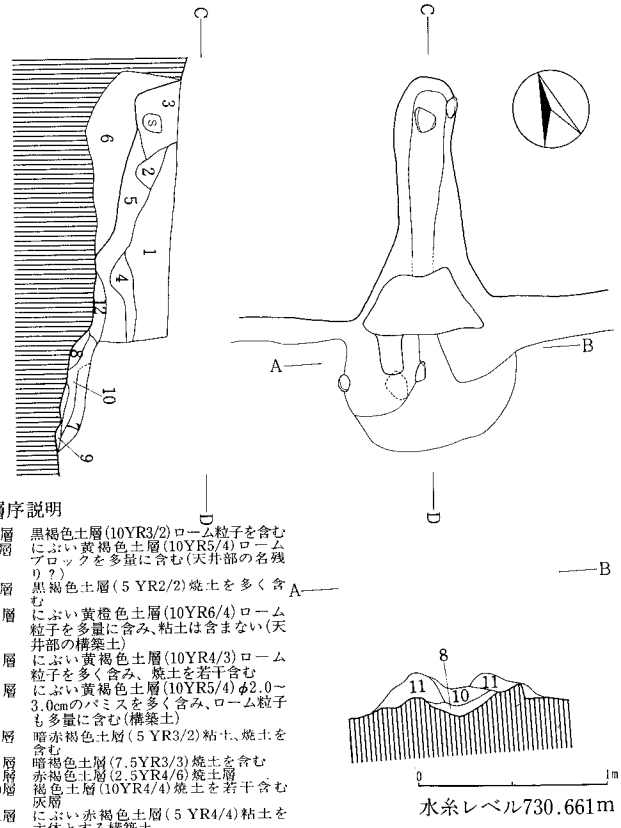
また、床面で4個所、礫の集石が認められた。

周溝は検出されなかった。

遺物

土師器甕の破片、鉄滓各1点のほか、編み物石として使用されたと考えられる礫が出土している。

本住居址の所産期は、出土土器片から古墳時代後期に比定される。



層序説明

第1層　黒褐色土層(10YR3/2)ローム粒子を含む
第2層　にぶい黄褐色土層(10YR5/4)ロームブロックを多量に含む(天井部の名残り？)
第3層　黒褐色土層(5YR2/2)焼土を多く含む
第4層　にぶい黄橙色土層(10YR6/4)ローム粒子を多量に含み、粘土は含まない(天井部の構築土)
第5層　にぶい黄褐色土層(10YR4/3)ローム粒子を多く含み、焼土を若干含む
第6層　にぶい黄褐色土層(10YR5/4)φ2.0～3.0cmのパミスを多く含み、ローム粒子も多量に含む(構築土)
第7層　暗赤褐色土層(5YR3/2)粘土、焼土を含む
第8層　暗褐色土層(7.5YR3/3)焼土を含む
第9層　赤褐色土層(2.5YR4/6)焼土層
第10層　褐色土層(10YR4/4)焼土を若干含む灰層
第11層　にぶい赤褐色土層(5YR4/4)粘土を主体とする構築土
第12層　褐色土層(7.5YR4/4)焼土、灰を含む

第34図　第3号住居址カマド実測図

4）第4号住居址

遺構（第35・36図、図版2）

本住居址は、B－9・10グリッドに位置する。

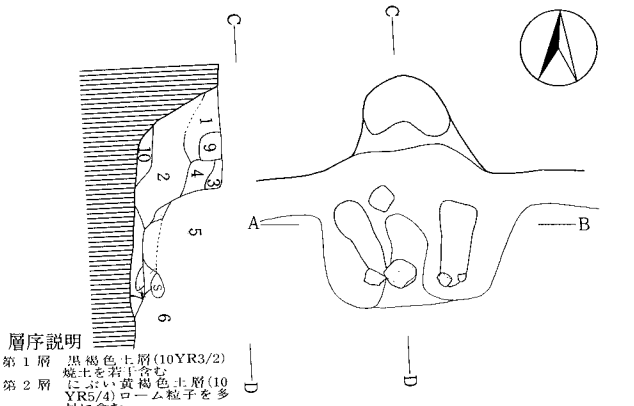
他遺構との重複関係はない。

東西269cm、南北280cmを測る小型の住居で、平面プランは隅丸方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、N－15°－Eを示す。

確認面からの壁高は、38～51cmを測る。

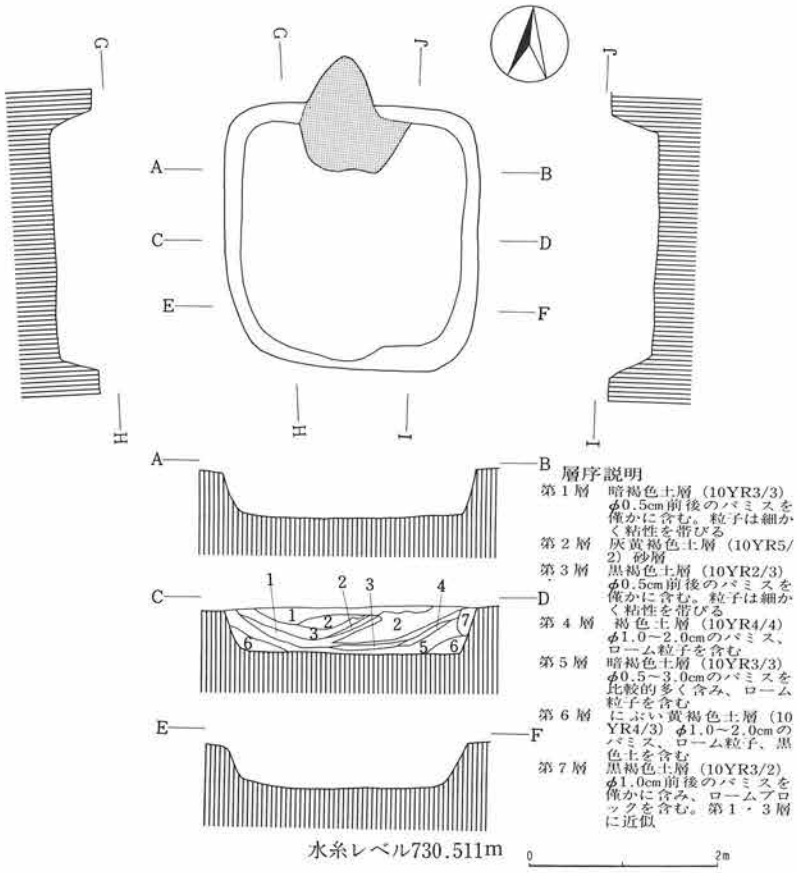
カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。



層序説明

第1層　黒褐色土層(10YR3/2)焼土を若干含む
第2層　にぶい黄褐色土層(10YR5/4)ローム粒子を多量に含む
第3層　暗褐色土層(10YR3/3)住居址覆土
第4層　褐色土層(10YR4/4)ローム粒子を多く含み、焼土を若干含む(第2層と似ている)
第5層　黒褐色土層(10YR3/2)焼土を多く含む
第6層　黄褐色土層(10YR5/6)ローム粒子を多量に含む(ブロック)
第7層　褐色土層(7.5YR4/4)焼土・炭化物を多く含む
第8層　黒褐色土層(10YR3/2)黒色土とロームの埋土
第9層　褐色土層(10YR4/6)ロームを主体とする構築土(天井部)
第10層　黒色土層(10YR2/1)焼土等は含まない黒色土
第11層　明黄褐色土層(10YR7/6)ロームを主体とする構築土(地山に近似)

第35図　第4号住居址カマド実測図



第36図　第４号住居址実測図

遺存状態は比較的良好であった。第９・11層に見られるように、ローム及びロームを主体とする構築土、軽石により築かれていたものと思われる。

住居址覆土は７層に区分され、自然堆積と考えられるが、砂層（第２層）が認められ、埋没過程で砂の流入のあったことが看取された。

ピット、周溝は検出されなかった。

遺物

出土遺物は皆無であり、所産期については確定できないが、住居址覆土に第３号住居址第４層と同様の砂層が認められることから、一応、第３号住居址と同じく、古墳時代後期と考えておきたい。

５）第５号住居址

遺構（第37・38図、図版２）

本住居址は、Ｂ－９グリッドに位置する。他遺構との重複関係はないが、北西コーナーで撹乱を受けている。

東西は調査範囲内で230cm、南北305cmを測る。平面プランは、おそらく、不整な隅丸長方形を呈するものと思われる。

カマドを中心とする主軸方位は、Ｎ－4.5°－Ｗを示す。確認面からの壁高は、11～22cmを測る。

住居址覆土は２層に区分され、自然堆積と考えられる。

カマドは、北壁に位置する。遺存状態は悪い。おそらく、軽石を袖芯として構築されていたものと思われる。

ピットは１基検出されたにとどまる。このピットを中心に鉄滓が出土している。ピット覆土は

パミス、粘土粒子を含む暗褐色（10YR3/4）土で、工作用のピットの可能性もあるが、火熱を受けた個所は認められなかった。

また、柱穴、周溝は検出されなかった。

遺物（第64図、図版40）

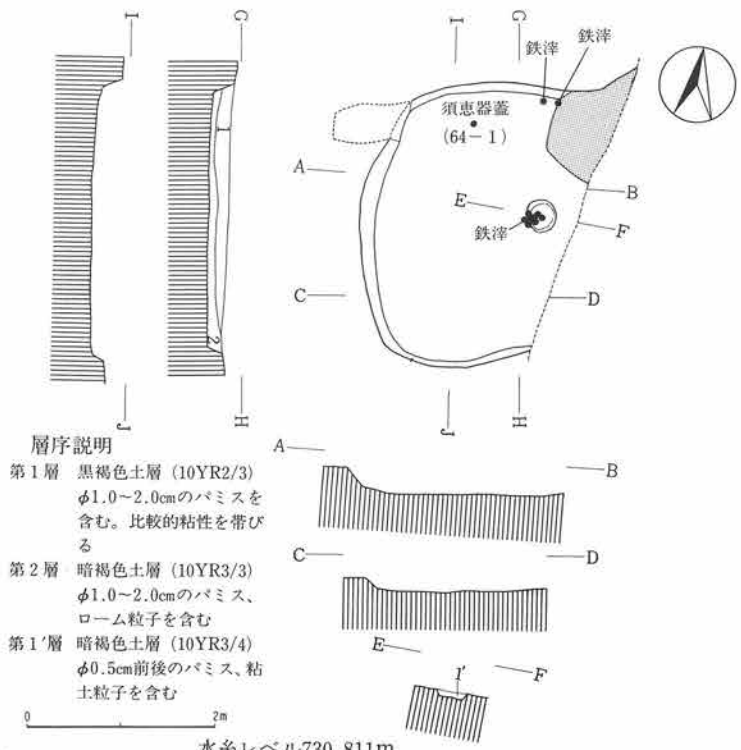
土師器片、須恵器片、鉄滓が出土している。

土器片の量は少ない。

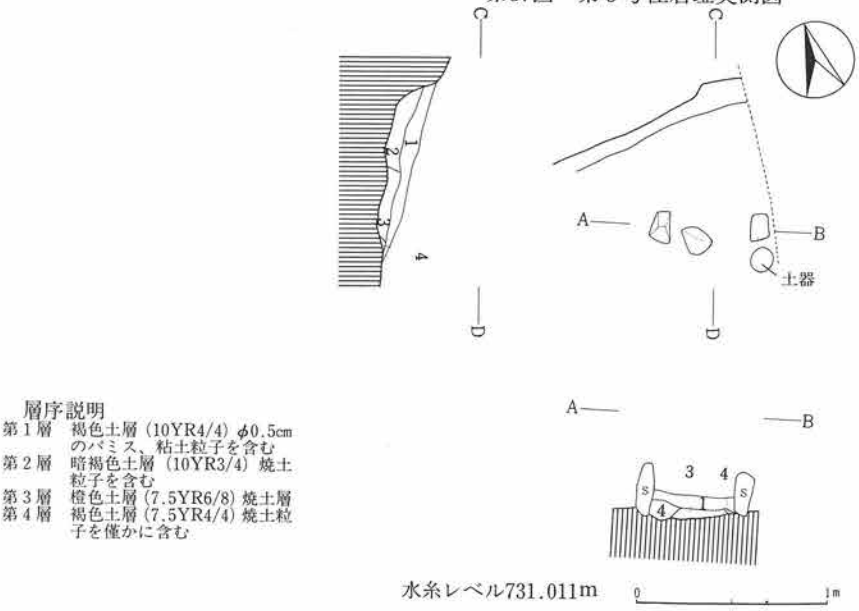
鉄滓は総計10点出土している。

図示したものに、須恵器蓋２点がある。

本住居址の所産期は、古墳時代後期に比定される。



第37図　第５号住居址実測図



第38図　第５号住居址カマド実測図

６）第６号住居址

遺構（第39・40図、図版２）

本住居址は、Ｂ－８・９グリッドに位置する。第１号溝址と重複関係を有し、第１号溝址によ

り切られている。

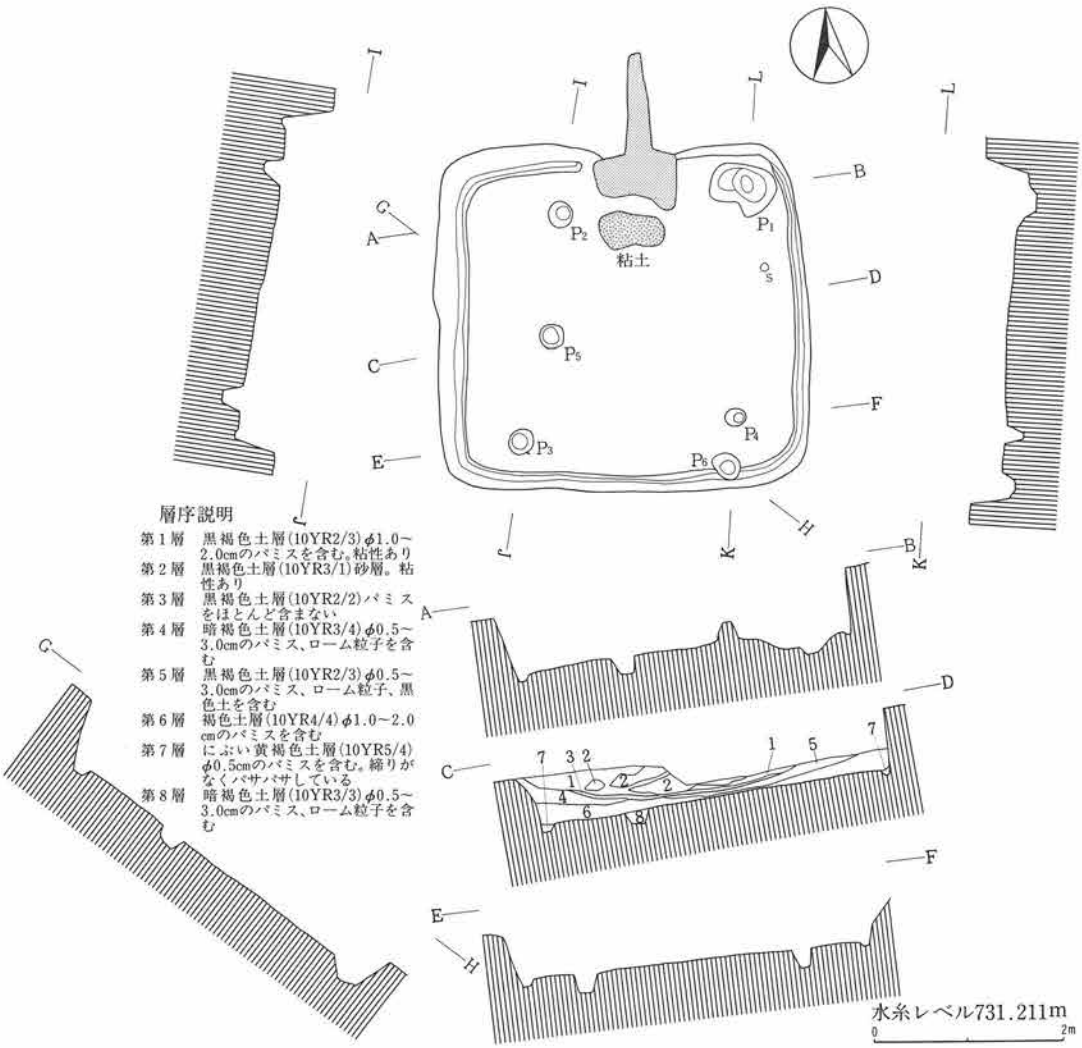
東西394cm、南北366cmを測り、平面プランは隅丸方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、N－2°－Eを示す。確認面からの壁高は、28～67cmを測る。

住居址覆土は、8層に区分され、自然堆積と考えられる。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。遺存状態は比較的良好であった。袖部のうち、右袖は地山を掘り残し芯とし、左袖は地山と明褐色（7.5YR7/6）粘土を用いて芯としている。また、煙道部は114cmと第3号住居址と同様に長いのが特徴的である。また、カマド前庭部では、カマドに用いられたと考えられる粘土が認められた。

ピットは、総計6基検出された。このうち、P_1～P_4が主柱穴と考えられる。また、P_1は規模・



第39図　第6号住居址実測図

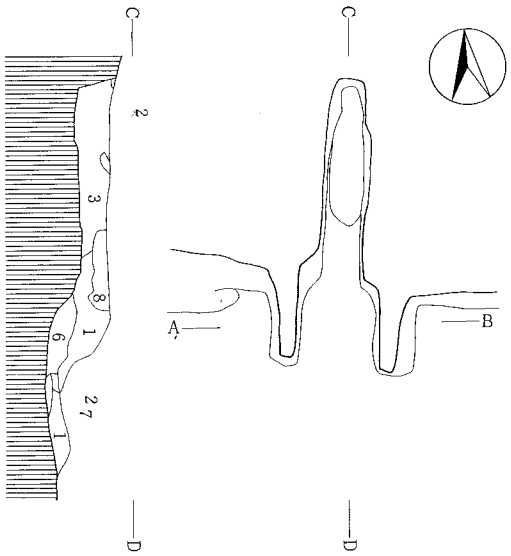
位置から推して、貯蔵穴を兼ねるものかもしれない。

周溝は、カマド部分、北壁東側を除き巡らされている。

遺物

礫が1点出土したのみで、土器片は認められなかった。

本住居址の所産期については、重複関係、形状から古墳時代後期と考えておきたい。



層序説明
第1層　褐色土層（10YR4/6）φ0.5cm前後のパミス、焼土粒子を含む
第2層　黄橙色土層（10YR7/8）地山に近似
第3層　黒褐色土層（7.5YR3/2）φ0.5～4.0cmのパミス、焼土、炭を含む
第4層　明褐色土層（7.5YR5/6）粘土層
第5層　黄褐色土層（10YR5/6）φ0.5cmのパミス、ローム粒子を含む。構築土
第6層　赤褐色土層（5YR4/6）焼土粒子を多く含む。炭を少し含む。締っていない
第7層　暗褐色土層（7.5YR3/4）焼土粒子、炭を含む
第8層　明黄褐色土層（10YR7/6）地山に近似。締っていない
第9層　赤褐色土層（5YR4/8）焼土層
※　左袖は地山と第4層のサンドイッチ

第40図　第6号住居址カマド実測図

7）第7号住居址

遺構（第41図、図版3）

本住居址は、C－3グリッドに位置する。第1号溝址と重複関係を有し、西壁部を第1号溝址により切られている。東西は調査区域内で230cm、南北440cmを測る。平面プランについては不明である。長軸方位は、N－15°－Eを示す。確認面からの壁高は、0～20cmを測る。

住居址覆土は3層に区分かれるが、大半を第1層の黒褐色（10YR2/2）土が占める。

西側ほぼ中央で焼土が検出され、炉址と考えられる。地床炉で、炉縁石は認められなかった。

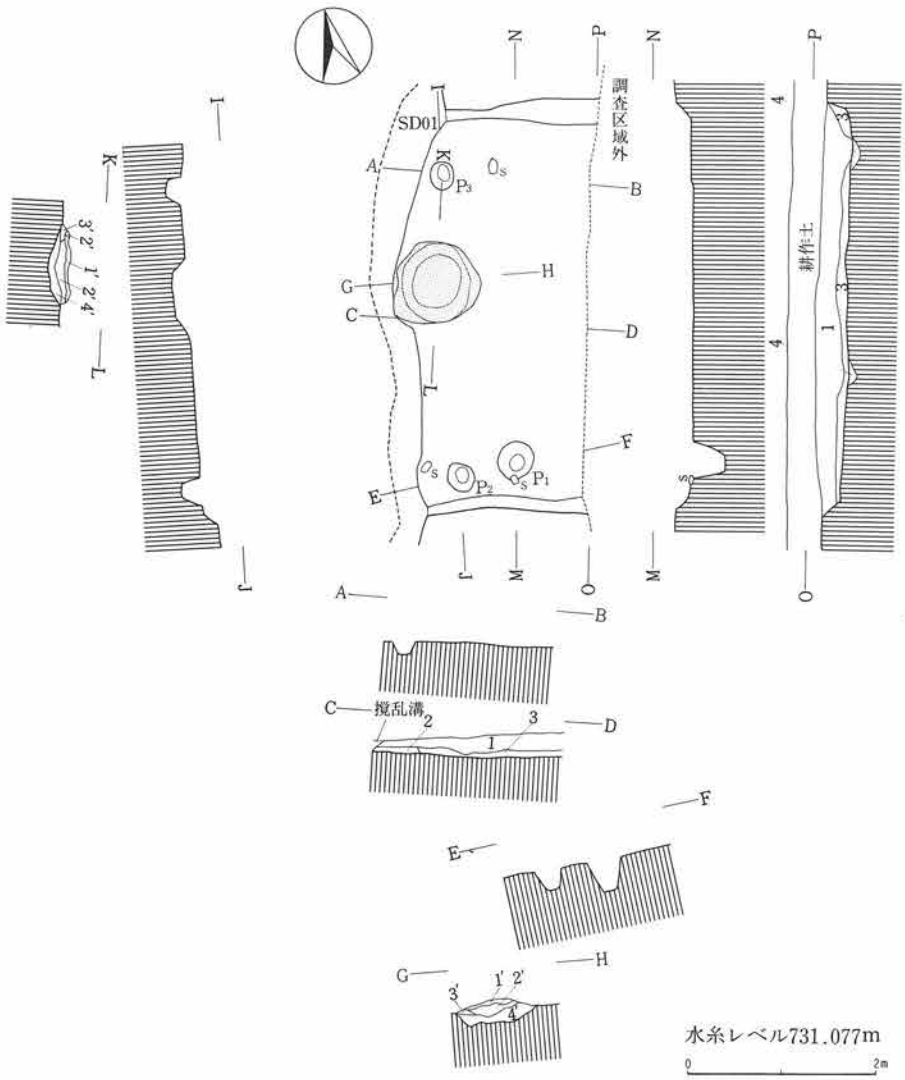
ピットは総計3基検出された。一応3基とも柱穴と考えておきたい。

周溝は、調査範囲内では検出されなかった。

遺物（第65図、図版41）

土師器片、黒色土器片、河床礫、砂岩の剥片が出土している。このうち、図示し得たものは管玉の未製品と考えられる石製品1点（第65図2）である。石質は碧玉と考えられる。

本住居址の所産期は、出土土器片から古墳時代前期に比定される。



層序説明

第1層　黒褐色土層(10YR2/2)φ0.5～1.0cmのパミスを少し含み、粘性を帯びる
第2層　赤褐色土層(5YR4/6)焼土層
第3層　黒褐色土層(7.5YR3/2)φ0.5～3.0cmのパミス、ロームブロックを含む
第4層　黒褐色土層(7.5YR2/2)埋土。粒子細かい

炉　址

第1′層　黒褐色土層(10YR2/2)住居址覆土。第1層に同じ
第2′層　赤褐色土層(5YR4/8)φ0.5～4.0cmのパミスを含む。焼土層
第3′層　黒褐色土層(10YR2/3)パミス、焼土粒子を含む
第4′層　褐色土層(10YR4/4)パミス、焼土粒子を含む。焼土

第41図　第7号住居址実測図

8）第8号住居址

遺構（第42・43図、図版3）

本住居址は、C－3グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

東西は調査区域内で215cm、南北427cmを測る。平面プランは、おそらく隅丸方形を呈するものと思われる。

カマドを中心とする主軸方位は、N－7.5°－Wを示す。

確認面からの壁高は、52～64cmを測り、壁は比較的緩やかに立ち上がる。

住居址覆土は、9層に区分され、自然堆積と考えられる。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置するものと思われるが、遺存状態は悪い。おそらく、軽石とにぶい黄褐色（10YR4/3）を呈する粘土層を主体に構築されていたものと思われる。

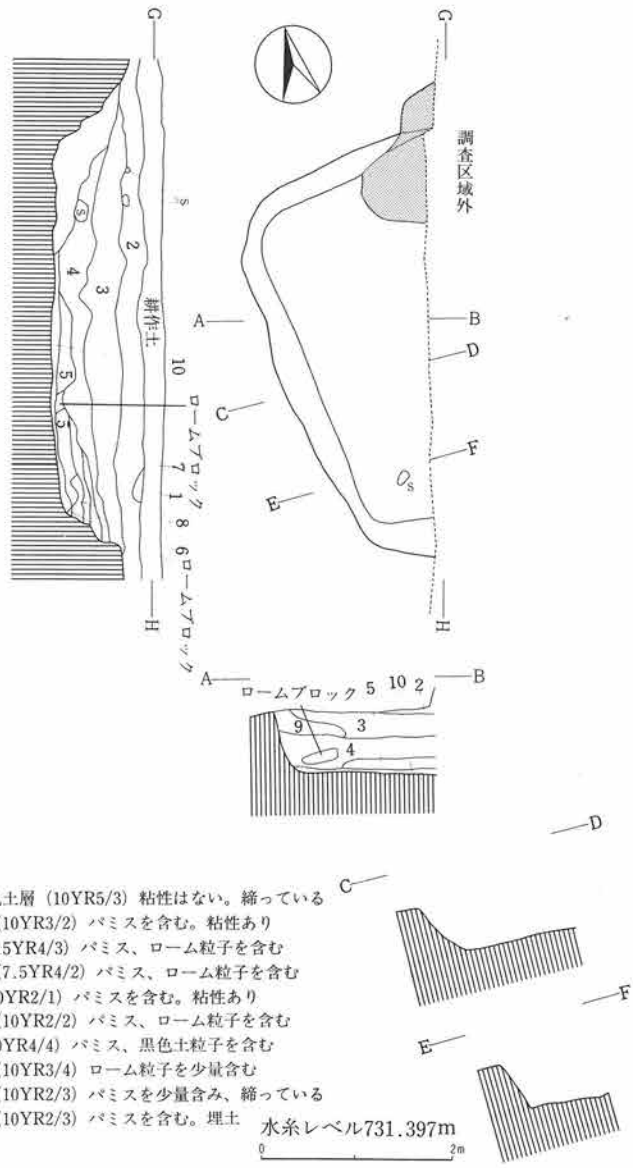
ピット、周溝は検出されなかった。

遺物

土師器片、黒色土器片、河床礫、赤色顔料が出土しているが、図示し得るものはない。

赤色顔料は、床面直上から出土したもので、詳細については後述する。

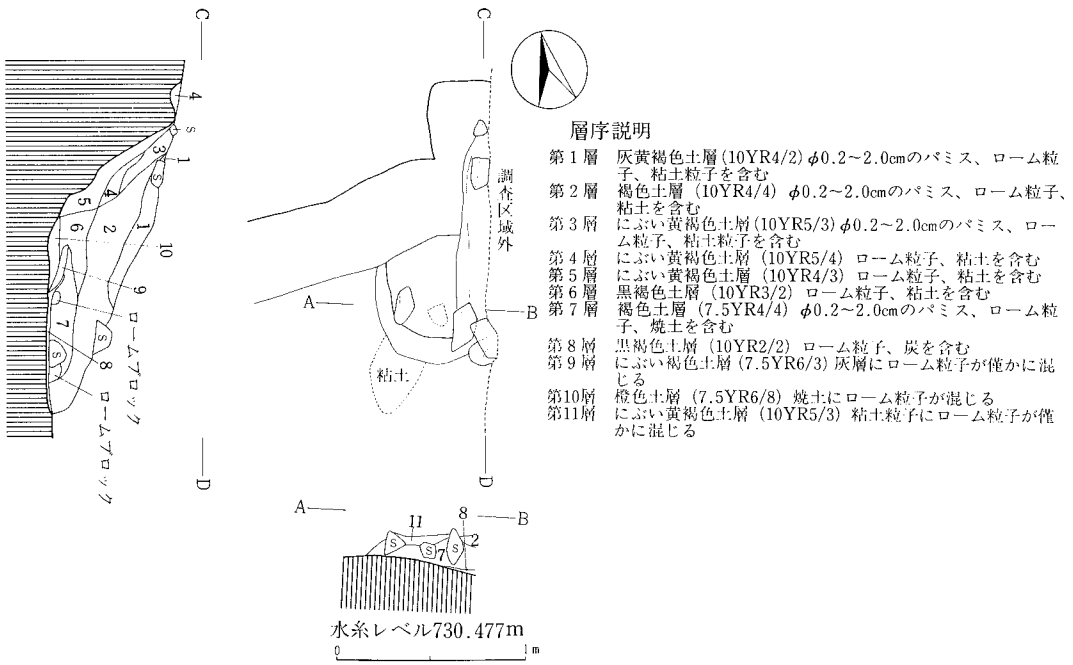
本住居址の所産期については、出土土器片から古墳時代後期に比定される。



層序説明

第1層　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）粘性はない。締っている
第2層　黒褐色土層（10YR3/2）パミスを含む。粘性あり
第3層　褐色土層（7.5YR4/3）パミス、ローム粒子を含む
第4層　灰褐色土層（7.5YR4/2）パミス、ローム粒子を含む
第5層　黒色土層（10YR2/1）パミスを含む。粘性あり
第6層　黒褐色土層（10YR2/2）パミス、ローム粒子を含む
第7層　褐色土層（10YR4/4）パミス、黒色土粒子を含む
第8層　暗褐色土層（10YR3/4）ローム粒子を少量含む
第9層　黒褐色土層（10YR2/3）パミスを少量含み、締っている
第10層　黒褐色土層（10YR2/3）パミスを含む。埋土

第42図　第8号住居址実測図



第43図　第８号住居址カマド実測図

９）第９号住居址

遺構（第44・45図、図版３）

本住居址は、Ｃ－３グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

東西529cm、南北417cmを測り、平面プランは、東西に長い隅丸長方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、Ｎ－１°－Ｅを示す。

確認面からの壁高は、63～81.5cmを測り、壁は比較的急に立ち上がる。

住居址覆土は、９層に区分され、自然堆積と考えられる。また、部分的に褐色（10YR4/4）土により貼床を行なっている。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。遺存状態は良好であった。加工した軽石を用いた石組カマドで、構築土には粘性の強い暗褐色（10YR3/4）土が使われていた。

ピットは、総計６基検出された。このうち、P_1～P_4が主柱穴、P_6は出入口部の施設に関連するものと思われる。

周溝は、カマド部分、北壁東部、南壁で２個所以外に巡らされていた。

床面は、全体的に堅緻であった。

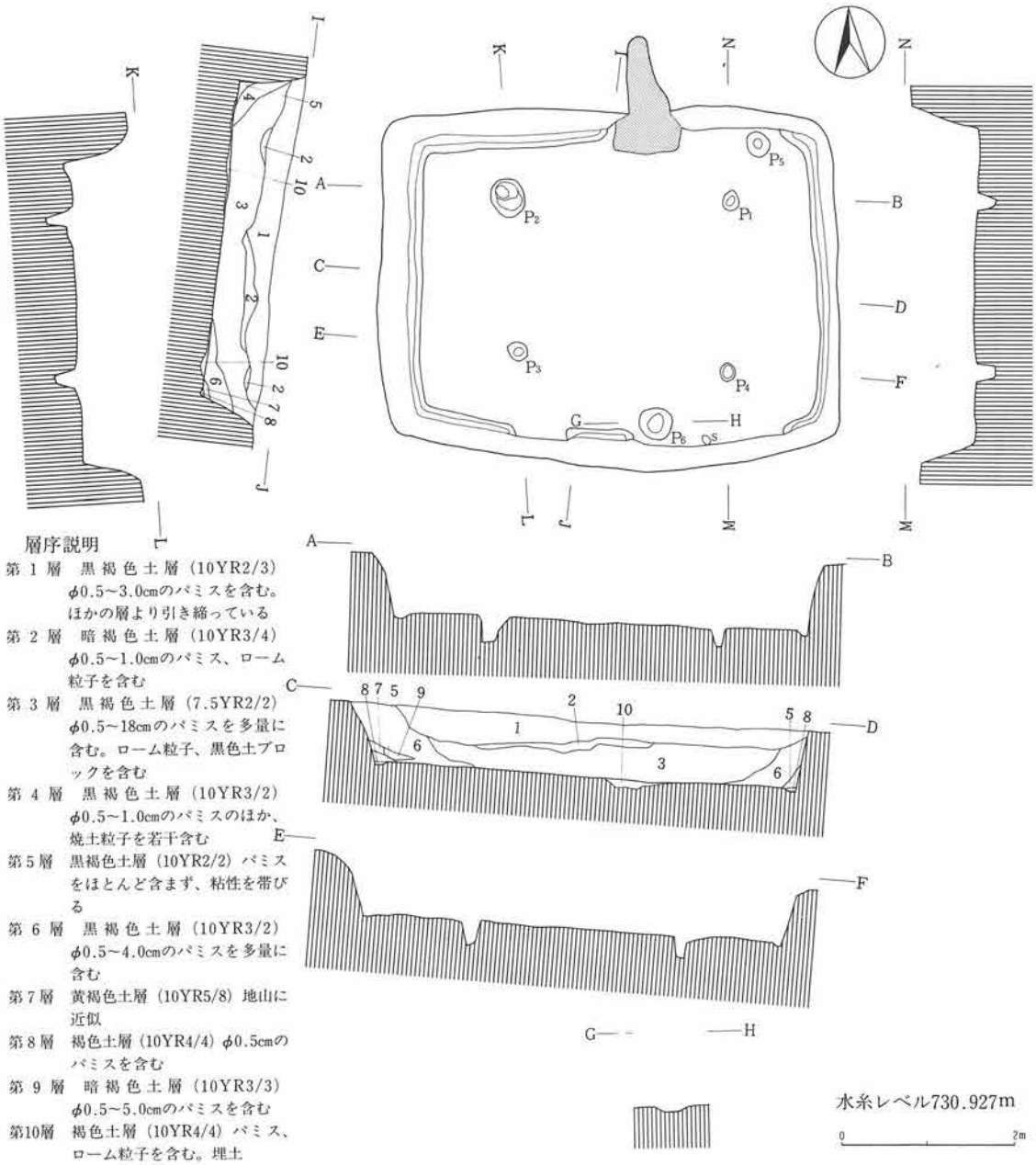
遺物（第64・65図、図版40・41）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、縄文土器片、河床礫のほか、鉄滓が１点カマド内から出土している。このうち、図示したものには、土師器甕と縄文土器片各１点がある。

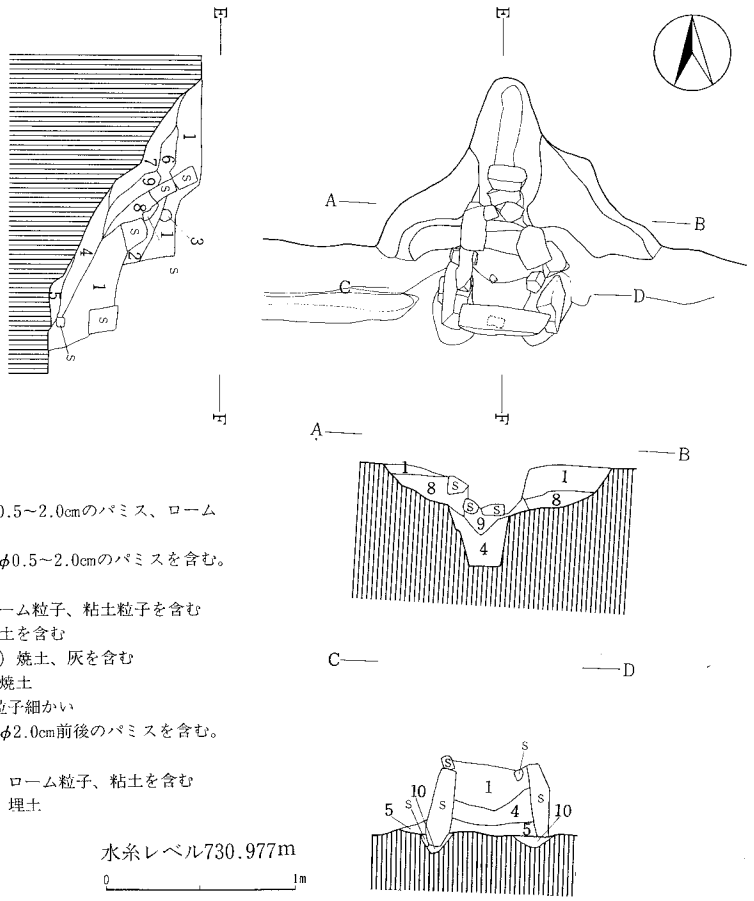
土師器甕（第64図１）は、球胴を呈するものである。

縄文土器片（第65図15）は、住居址覆土から出土したもので、縄文時代中期後半から後期の所産であろう。

本住居址の所産期は、古墳時代後期後半から奈良時代と考えられる。



第44図　第９号住居址実測図



層序説明

第１層　暗褐色土層（10YR3/3）φ0.5～2.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第２層　暗褐色土層（10YR3/4）φ0.5～2.0cmのパミスを含む。粘性はない
第３層　褐色土層（10YR4/4）ローム粒子、粘土粒子を含む
第４層　褐色土層（10YR4/6）焼土を含む
第５層　暗赤褐色土層（５YR3/6）焼土、灰を含む
第６層　赤褐色土層（５YR4/6）焼土
第７層　褐色土層（7.5YR4/4）粒子細かい
第８層　暗褐色土層（10YR3/4）φ2.0cm前後のパミスを含む。粘性強い（構築土）
第９層　暗褐色土層（7.5YR3/4）ローム粒子、粘土を含む
第10層　暗褐色土層（7.5YR3/3）埋土

第45図　第９号住居址カマド実測図

10）第10号住居址

遺構（第46図、図版３）

本住居址は、Ｃ－５グリッドに位置する。調査範囲のうち、南部大半をコンクリート水槽により壊されている。

東西は調査区域内で165cm、南北378cmを測る。平面プランは、おそらく隅丸方形を呈するものと思われる。

長軸方位は、Ｎ－10°－Ｗを示す。確認面からの壁高は、58.5～66cmを測る。

ピットは、統計３基検出された。このうち、P_1・P_2の２基が主柱穴と考えられる。

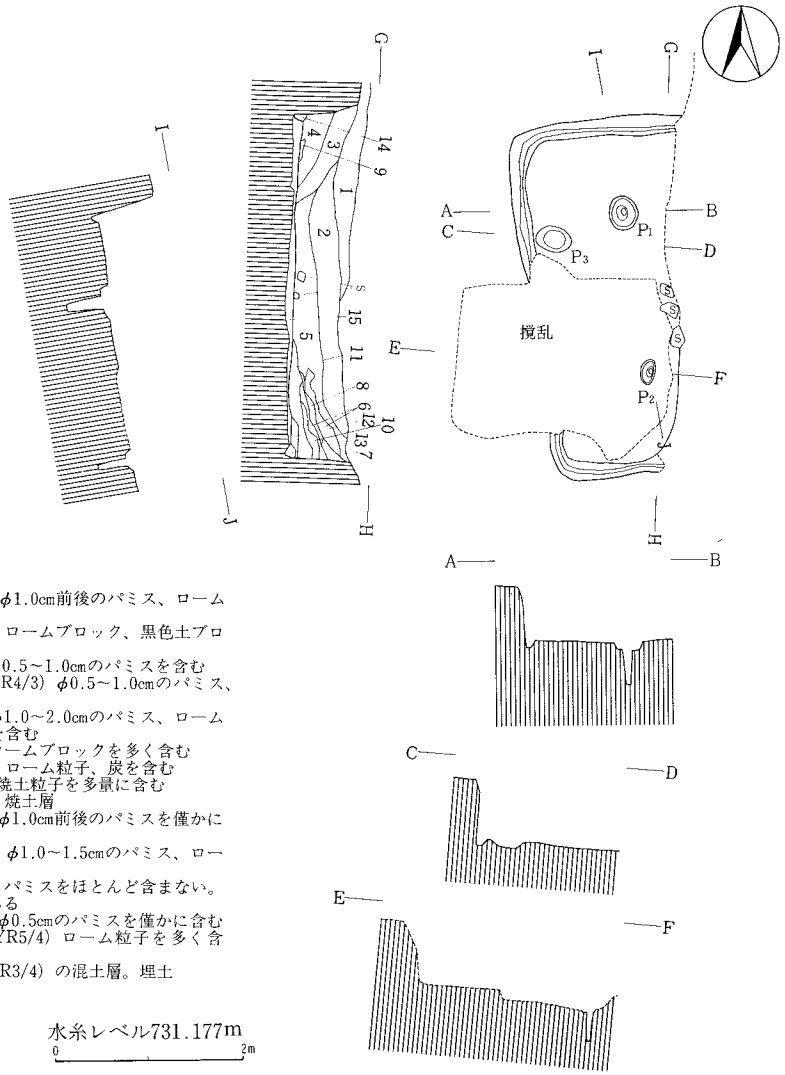
周溝は、残存部からすれば全周していた可能性が強い。

遺物（第65図、図版41）

土師器片、黒色土器片、鉄製品が出土しているが、図示し得たものは鉄鏃と考えられる鉄製品

1点にとどまる。

本住居址の所産期は、出土土器片から古墳時代後期に比定される。



層序説明

第1層　黒褐色土層（10YR3/2）φ1.0cm前後のパミス、ローム粒子を含む
第2層　暗褐色土層（10YR3/3）ロームブロック、黒色土ブロックを含む
第3層　褐色土層（10YR4/4）φ0.5～1.0cmのパミスを含む
第4層　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）φ0.5～1.0cmのパミス、ロームブロックを含む
第5層　黒褐色土層（10YR2/3）φ1.0～2.0cmのパミス、ローム粒子のほか、僅かの炭を含む
第6層　褐色土層（10YR4/4）ロームブロックを多く含む
第7層　暗褐色土層（10YR3/3）ローム粒子、炭を含む
第8層　褐色土層（7.5YR4/4）焼土粒子を多量に含む
第9層　赤褐色土層（5YR4/8）焼土層
第10層　暗褐色土層（10YR3/4）φ1.0cm前後のパミスを僅かに含み、黒色土を含む
第11層　黒褐色土層（7.5YR3/2）φ1.0～1.5cmのパミス、ローム粒子を含む
第12層　黒褐色土層（10YR2/2）パミスをほとんど含まない。ほかの層に比べ粘性がある
第13層　黒褐色土層（10YR2/3）φ0.5cmのパミスを僅かに含む
第14層　にぶい黄褐色土層（10YR5/4）ローム粒子を多く含む。締っていない
第15層　地山と暗褐色土層（10YR3/4）の混土層。埋土

第46図　第10号住居址実測図

11）第11号住居址

遺構（第47図、図版3）

本住居址は、C－3・4グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

東西375cm、南北363cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。

長軸方位は、N－24°－Wを示す。確認面からの壁高は、25～31cmを測る。

住居址覆土は、3層に区分され、自然堆積と考えられる。床面は全体にわたって、7cm前後、

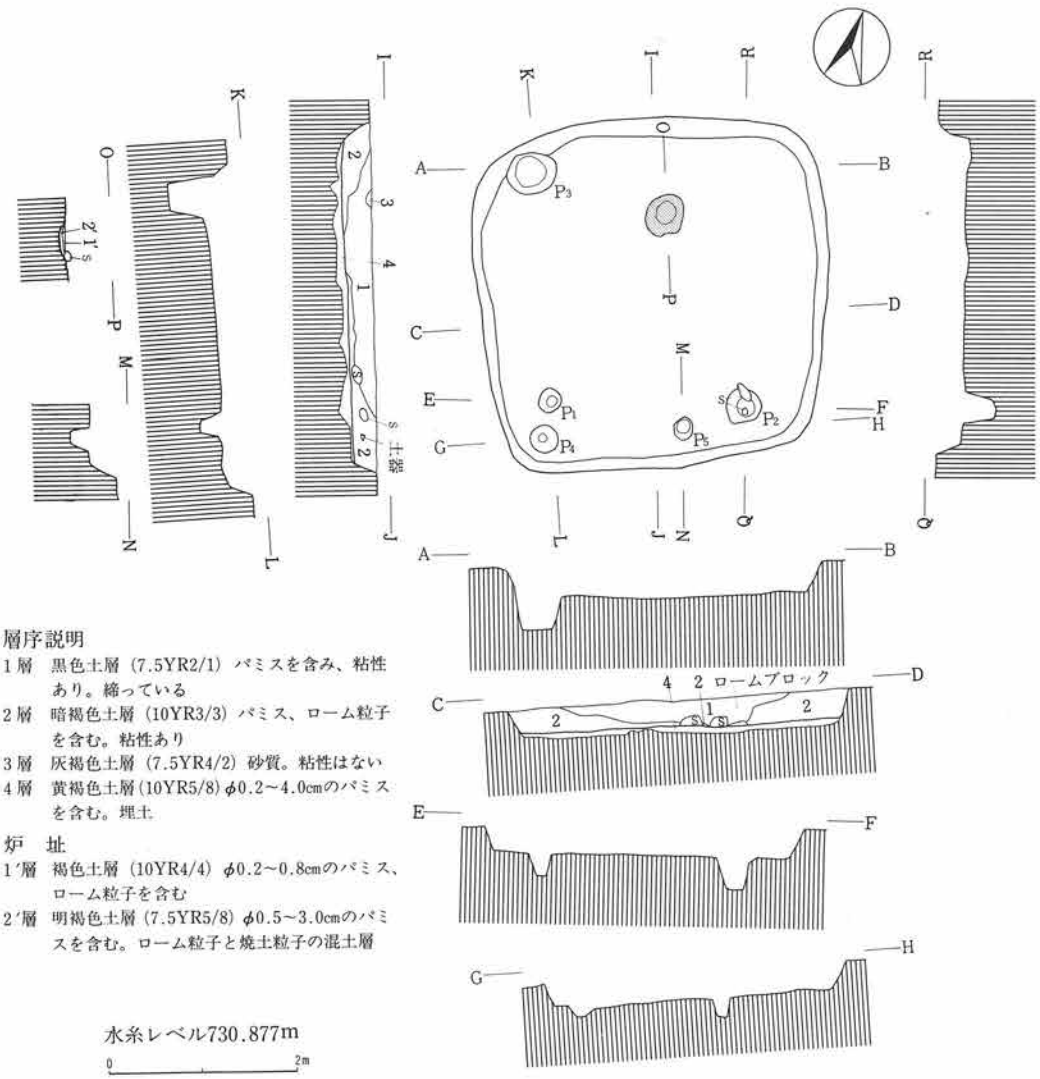
黄褐色（10YR5/8）土により貼床がなされる。

炉址は、住居址北部ほぼ中央に位置する。床面を約６㎝掘り込んだ地床炉である。

ピットは、総計５基検出された。このうち、P_1・P_2の２基が主柱穴と考えられる。P_3は、貯蔵穴的な機能を有するものかもしれない。また、P_5は出入口部の施設に関連するものであろう。

遺物（第64・65図、図版40・41）

土師器片、土製品が出土している。土器片の中には、赤色塗彩されたもののほか、小型丸底土器の破片も認められたが、図示し得たものは大型精製鉢１点である。土製品はP_5から出土したもので用途は不明である。本住居址の所産期は、古墳時代前期に比定される。



第47図　第11号住居址実測図

12）第12号住居址

遺構（第48図、図版３）

本住居址は、Ｃ－５グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

東西425cm、南北394cmを測り、平面プランは、やや不整な隅丸方形を呈する。

長軸方位は、Ｎ－３°－Ｅを示す。確認面からの壁高は、16～26cmを測る。

住居址覆土は、２層に区分されるが、大半は第１層の暗褐色土である。

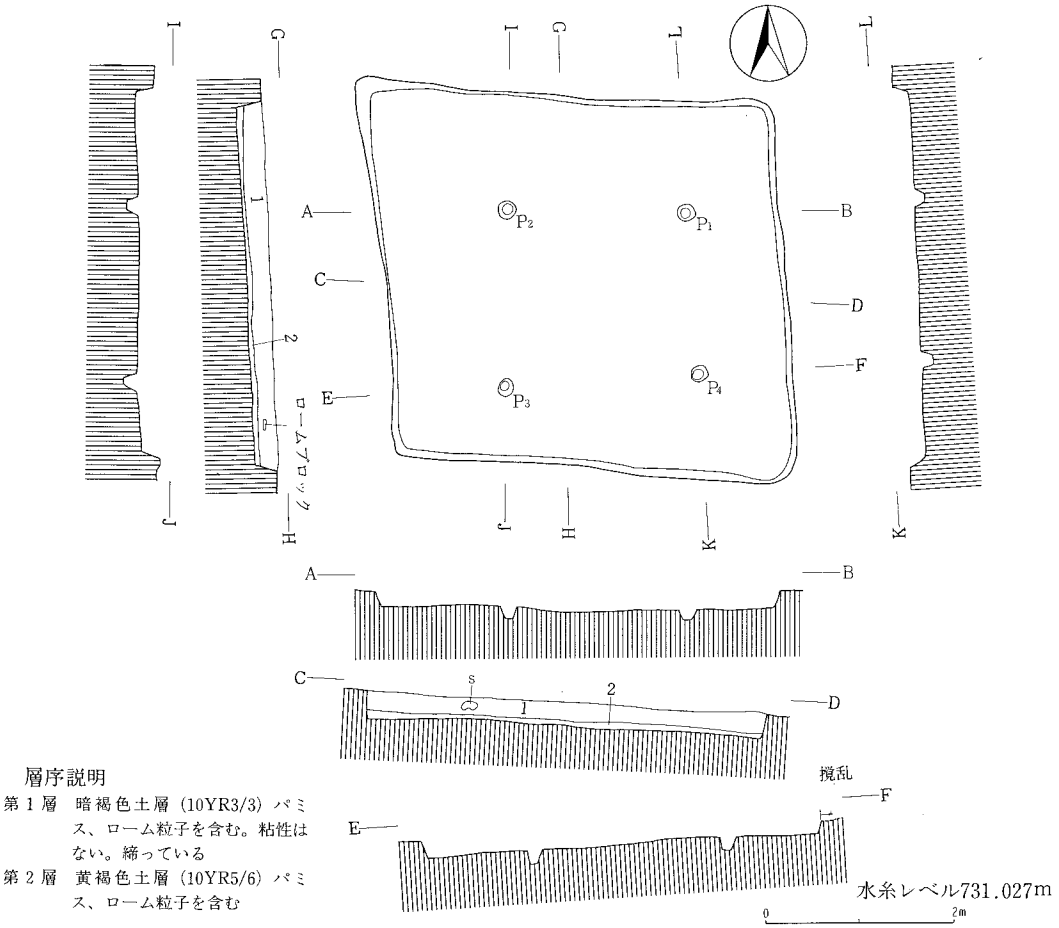
カマド、炉址は検出されなかった。

ピットは総計４基検出された。いずれも主柱穴と考えられる。

遺物（第65図、図版41）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、鉄製品が出土している。このうち、図示し得たものは、刀子と考えられる鉄製品１点である。

本住居址の所産期は、ヘラキリ後手持ちヘラケズリがなされる須恵器杯底部の破片が認められ



層序説明

第１層　暗褐色土層（10YR3/3）パミス、ローム粒子を含む。粘性はない。締っている

第２層　黄褐色土層（10YR5/6）パミス、ローム粒子を含む

第48図　第12号住居址実測図

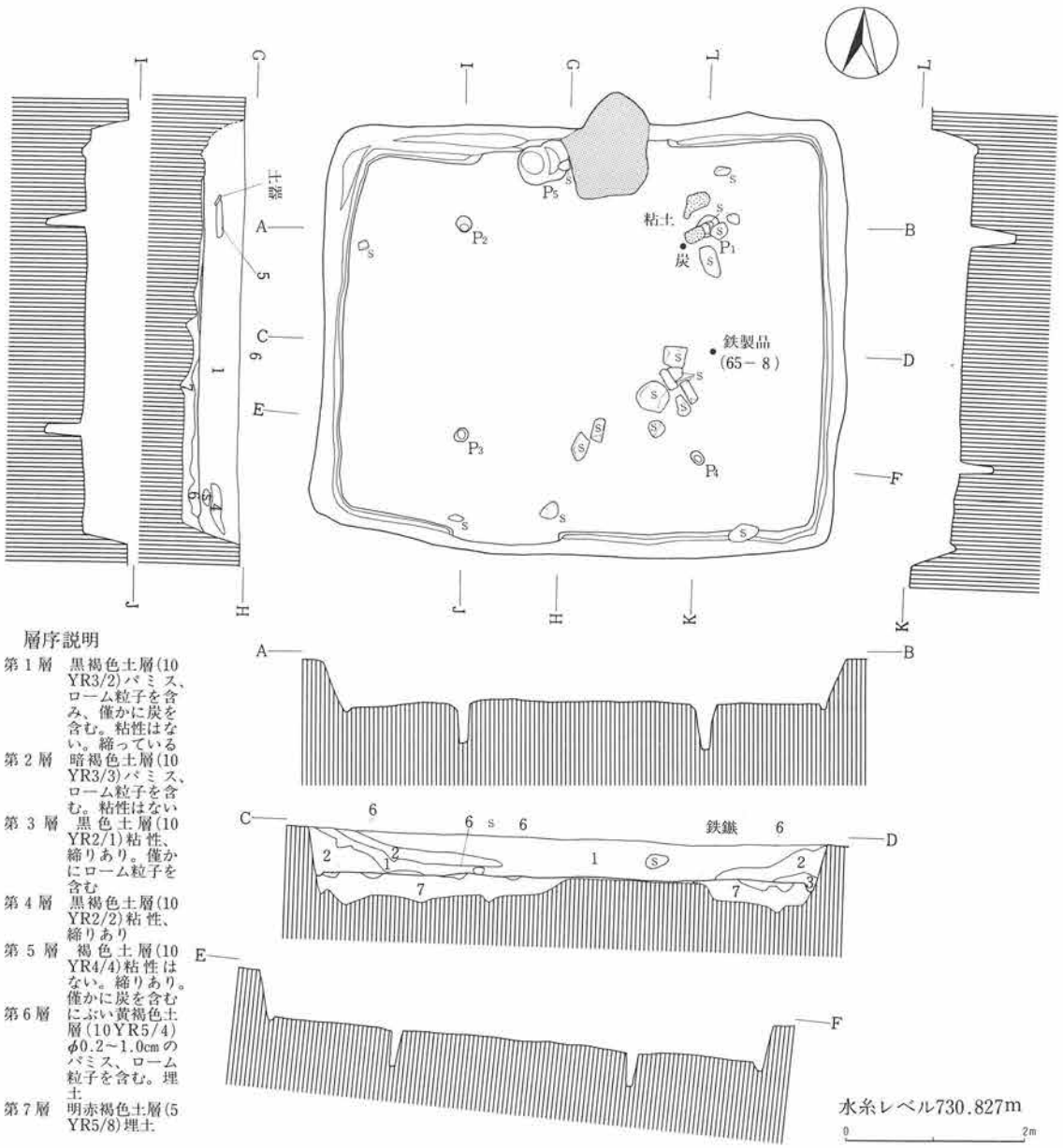
ることから、一応、奈良時代に比定しておきたい。

13）第13号住居址

遺構（第49・50図、図版３）

本住居址は、Ｂ－４・５グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

東西590cm、南北482cmを測り、平面プランは、東西にやや長い隅丸長方形を呈する。



層序説明

第１層　黒褐色土層(10YR3/2)パミス、ローム粒子を含み、僅かに炭を含む。粘性はない。締っている

第２層　暗褐色土層(10YR3/3)パミス、ローム粒子を含む。粘性はない

第３層　黒色土層(10YR2/1)粘性、締りあり。僅かにローム粒子を含む

第４層　黒褐色土層(10YR2/2)粘性、締りあり

第５層　褐色土層(10YR4/4)粘性はない。締りあり。僅かに炭を含む

第６層　にぶい黄褐色土層(10YR5/4)φ0.2～1.0cmのパミス、ローム粒子を含む。埋土

第７層　明赤褐色土層(5YR5/8)埋土

第49図　第13号住居址実測図

カマドを中心とする主軸方位は、N－4°－Wを示す。確認面からの壁高は、43～55cmを測る。

住居址覆土は、5層に区分され、自然堆積と考えられる。掘形は壁際が深く、にぶい黄褐色(10YR5/4) 土、明赤褐色（5YR5/8）土により貼床がなされている。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。遺存状態は比較的良好で、加工した軽石、褐色(10YR4/6) 粘土を主体に構築されていた。

ピットは、総計5基検出された。このうち、P_1～P_4が主柱穴、P_5が貯蔵穴と考えられる。

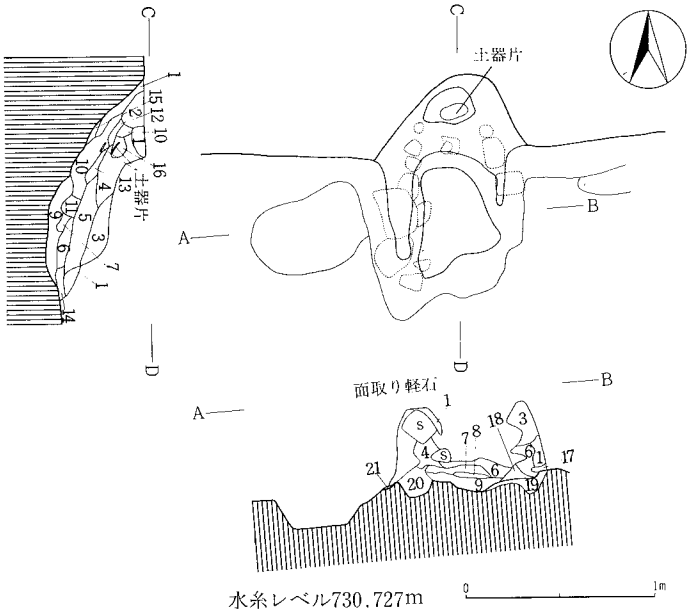
また、周溝はカマド部分を除き、全周していた。

遺物（第64・65図、図版40・41）

土師器片、黒色土器片、鉄製品が出土している。このうち、図示したものには、土師器杯、甕、黒色土器高杯、須恵器蓋各1点、鉄鏃2点がある。鉄鏃のうち、8は貼床構築土内から出土したものである。本住居址の所産期は、古墳時代後期に比定される。

層序説明

第1層　褐色土層（10YR4/6）粘土層。カマド構築材
第2層　黒褐色土層（10YR2/3）焼土粒子、灰を含む
第3層　暗褐色土層(10YR3/3) φ0.5～3.0cmのパミスを含む。住居址覆土。パサパサしている
第4層　暗褐色土層（10YR3/4）粘土粒子を比較的多く含むほか、焼土粒子を含む
第5層　暗褐色土層（10YR3/4）第3層に似るが、粘土粒子、焼土粒子、炭化物を含む
第6層　暗赤褐色土層（5YR3/6）焼土粒子を多量に含むほか、炭を含む
第7層　橙色土層（7.5YR6/8）灰層
第8層　明黄褐色土層（10YR6/6）灰層
第9層　明赤褐色土層（7.5YR5/8）灰層
第10層　暗褐色土層（10YR3/4）焼土粒子を含む。粒子細かい
第11層　明褐色土層（10YR3/4）焼けた粘土を多く含む
第12層　褐色土層（10YR4/4）粘土粒子を多く含むほか、焼土粒子を含む
第13層　暗褐色土層（7.5YR3/4）焼土。灰を含む
第14層　黒褐色土層（10YR3/2）焼土粒子を僅かに含む。パサパサしている
第15層　黒色土層（10YR2/1）パミスを含まない。締っている。構築土
第16層　黄褐色土層（10YR5/6）粘土層
第17層　黒褐色土層（10YR2/3）炭、焼土、粘土粒子を含む
第18層　暗褐色土層（7.5YR3/4）焼土を含む
第19層　暗褐色土層（7.5YR3/3）焼土粒子、黒色土を含む
第20層　褐色土層（7.5YR4/4）焼土を含む
第21層　黒褐色土層（10YR2/3）引き締っている

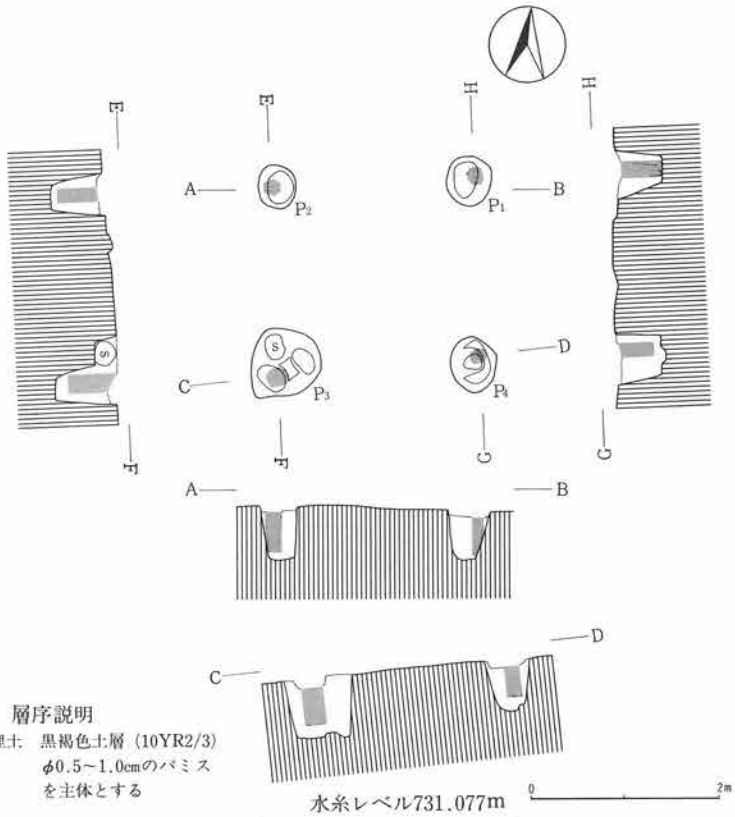


第50図　第13号住居址カマド実測図

(2) 掘立柱建物址

1）第1号掘立柱建物址

遺構（第51図、図版3）



第51図　第1号掘立柱建物址実測図

B－2グリッドに位置する。

他遺構との重複関係はない。

1間×1間の側柱式の掘立柱建物で、東西263cm、南北253cmを測り、平面プランは正方形を呈する。

柱間は、東西で194～199cm、南北で176～184cmを測る。

南北軸の方位は、N－9.5°－Wを示す。

ピット掘形の平面プランは、楕円形・不整形である。

埋土は、黒褐色土を主体としているほか、P_3では礫が認められた。

遺物

P_3から古墳時代後期の土師器長胴甕の破片が1点出土している。したがって、本遺構の所産期は古墳時代後期以降と考えられる。

2）第2号掘立柱建物址

遺構（第52図、図版4）

B－2グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

1間×1間の側柱式の掘立柱建物で、東西211cm、南北192cmを測り、平面プランは正方形を呈する。

柱間は、東西で136～141cm、南北138～142cmを測る。

南北軸の方位は、N－3°－Wを示す。

ピット掘形の平面プランは、楕円形・双円形である。

埋土は、黒褐色土である。

遺物

本遺構からの出土遺物は皆無であり、所産期については明らかにし得なかった。

3）第3号掘立柱建物址

遺構（第53図、図版4）

C－2グリッドに位置する。

他遺構との重複関係はない。

1間×1間の側柱式の掘立柱建物で、東西268cm、南北272cmを測り、平面プランは正方形を呈する。

柱間は、東西181～189cm、南北185～198cmを測る。

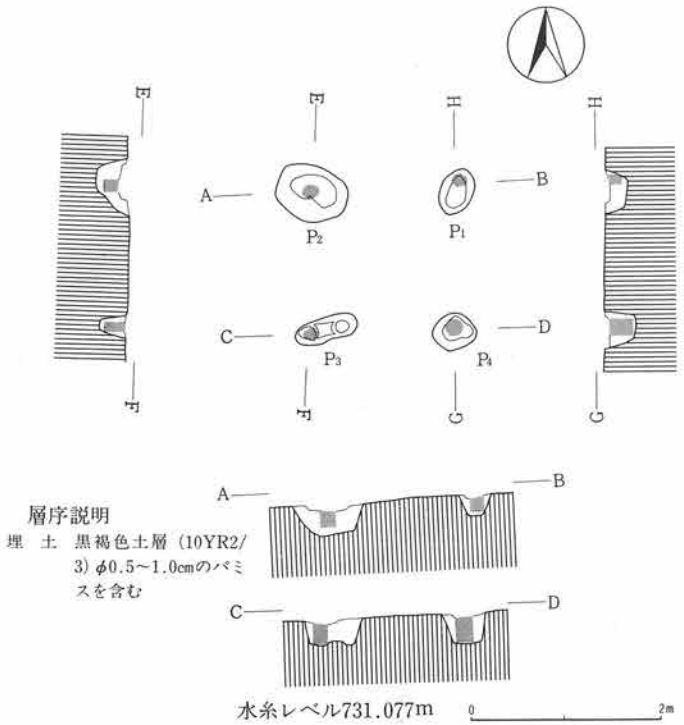
南北軸の方位は、N－11.5°－Wを示す。

ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

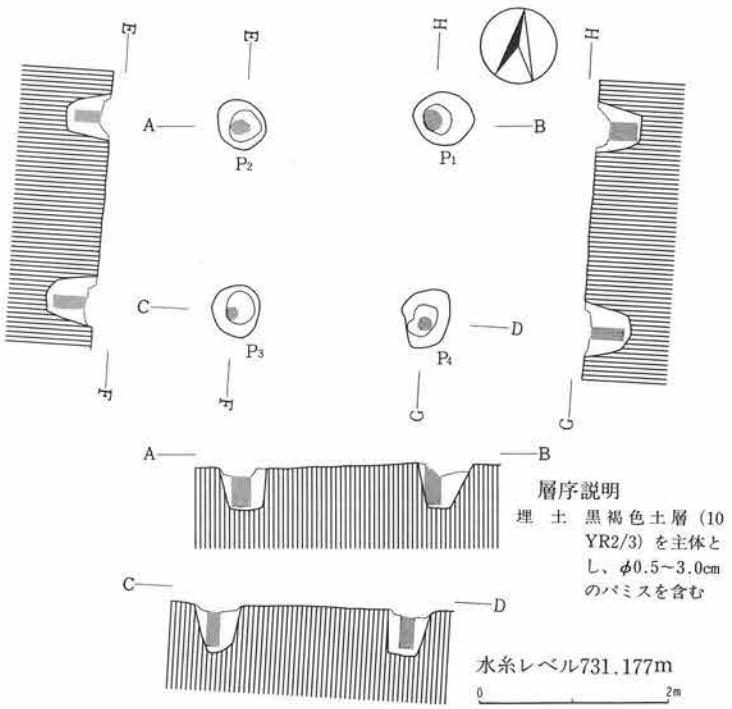
埋土は、黒褐色土である。

遺物

P_2・P_3から土師器片が出土している。最も新しい様相を示すものとして、古墳時代後期後半～奈良時代に比定される甕の口辺部があることから本遺構の所産期は、古墳時



第52図　第2号掘立柱建物址実測図



第53図　第3号掘立柱建物址実測図

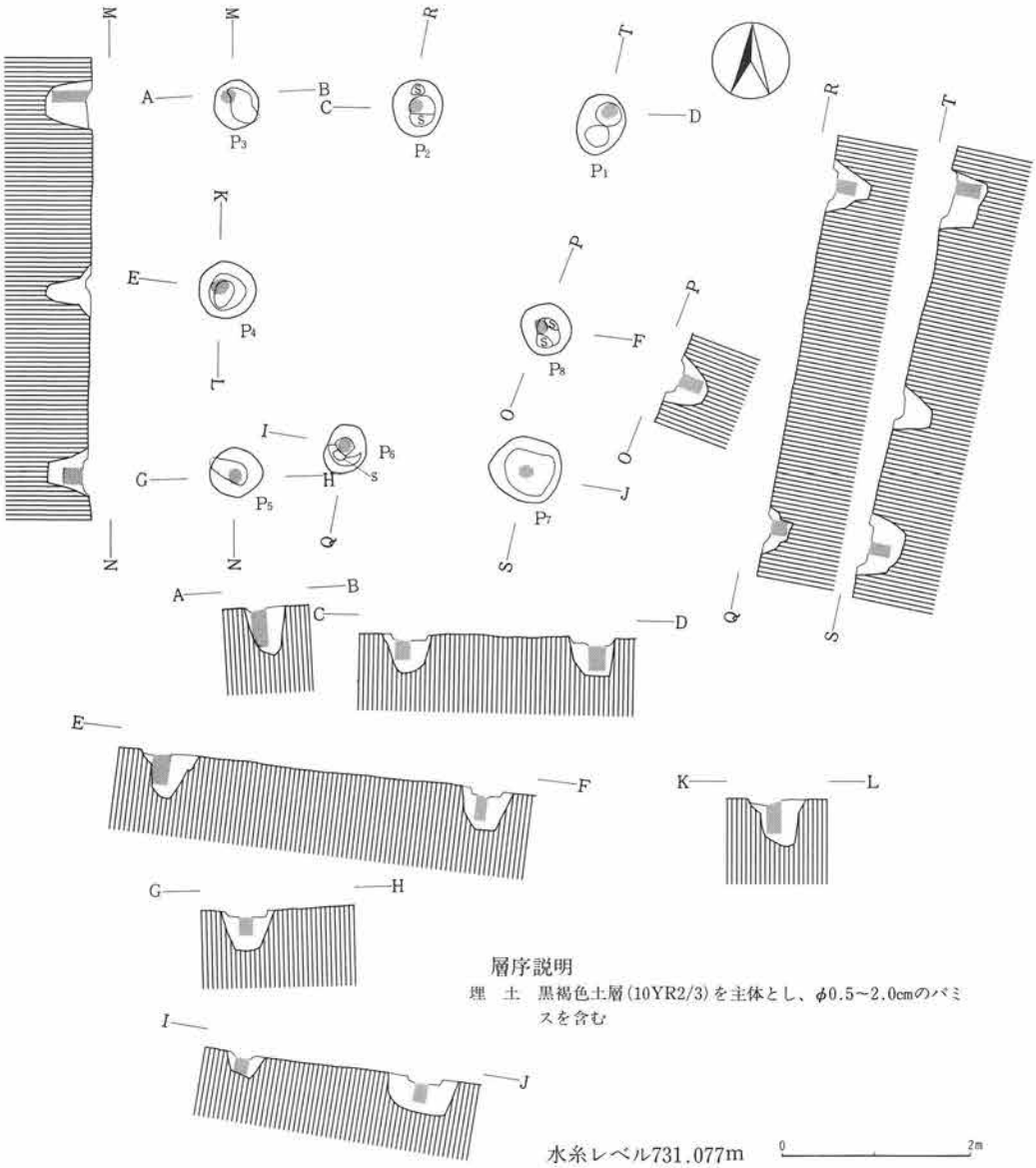
代後期以降と考えられる。

4）第4号掘立柱建物址

遺構（第54図、図版4）

C－3グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

2間×2間の側柱式の掘立柱建物で、東西433cm、南北445cmを測り、平面プランは不整な梯形を呈する。柱間は、東西で106～186cm、南北140～226cmを測る。



第54図　第4号掘立柱建物址実測図

南北軸の方位は、N－1°－Wを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

埋土は、黒褐色土を主体としている。

遺物

P_1から土師器甕の小片が出土しているが、時期を特定できず、本遺構の所産期についても不明である。

5）第5号掘立柱建物址

遺構（第55図）

C－4グリッドに位置する。第1号溝址と重複関係を有し、第1号溝址に切られている。

東西286cm、南北318cmを測る。

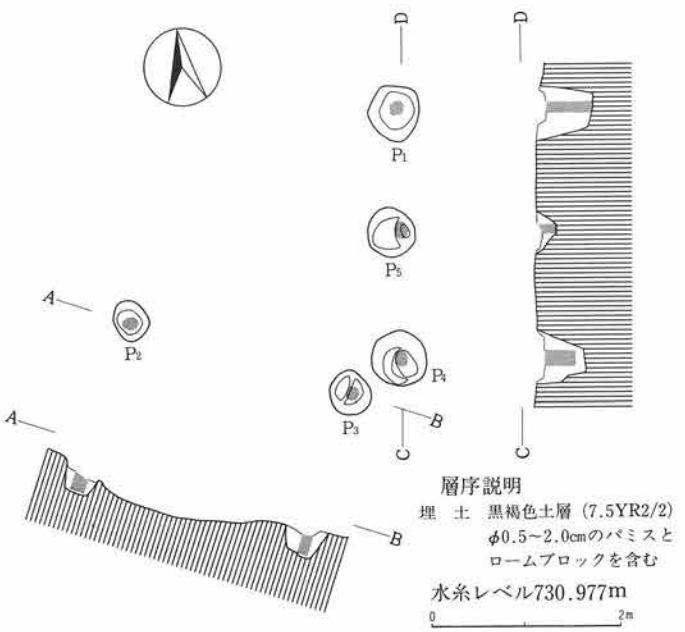
5基のピットが検出されたが、全体については不明である。

柱間は、東西230cm、南北113～119cmを測る。

南北軸の方位は、N－7°－Eを示す。

ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

埋土は、黒褐色土である。



第55図　第5号掘立柱建物址実測図

遺物

P_4から土師器片が出土しているが、時期を特定できず、本遺構の所産期についても不明である。

6）第6号掘立柱建物址

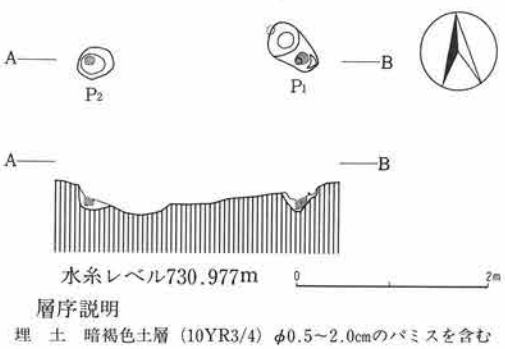
遺構（第56図）

C－4グリッドに位置する。

第1号溝址と重複関係を有し、第1号溝址により切られている。

東西252cmを測る。2基のピットが検出されたのみで全体については不明である。

柱間は、213cmを測る。南北軸の方位は、N－



第56図　第6号掘立柱建物址実測図

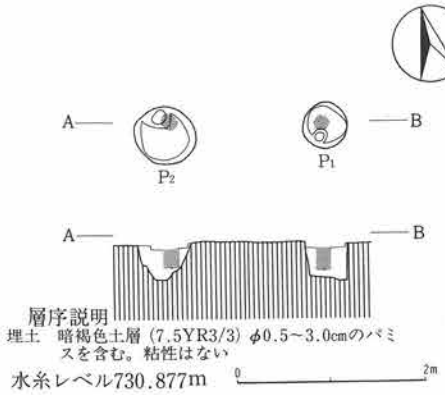
2°－Wを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

埋土は、パミスを含む暗褐色土である。

遺物

出土遺物は皆無である。本遺構の所産期については、重複関係から奈良時代以前と考えられる。

7）第7号掘立柱建物址



第57図　第7号掘立柱建物址実測図

遺構（第57図）

C－4グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

東西220cmを測る。2基のピットが検出されたのみで全体は不明である。

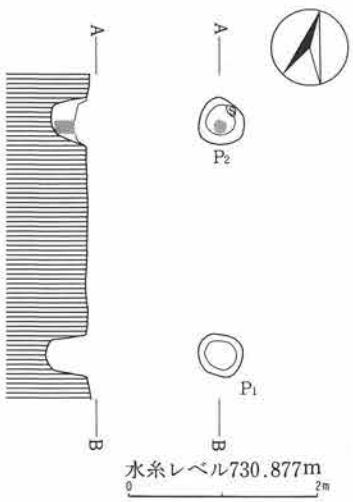
柱間は、144cmを測る。南北軸の方位は、N－15.5°－Wを示す。

ピット掘形の平面プランは、円形である。埋土は、暗褐色土である。

遺物

出土遺物は皆無である。本遺構の所産期については明らかにし得なかった。

8）第8号掘立柱建物址



第58図　第8号掘立柱建物址実測図

遺構（第58図）

C－4グリッドに位置する。

他遺構との重複関係はない。南北297cmを測る。

2基のピットが検出されたのみで全体については不明である。南北軸の方位は、N－16°－Wを示す。

ピット掘形の平面プランは、円形である。また、P_2内では礫が1点認められた。

遺物

P_1・P_2から土師器片が出土しているが、時期を特定できず、本遺構の所産期についても不明である。

9）第9号掘立柱建物址

遺構（第59図、図版4）

B－3グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

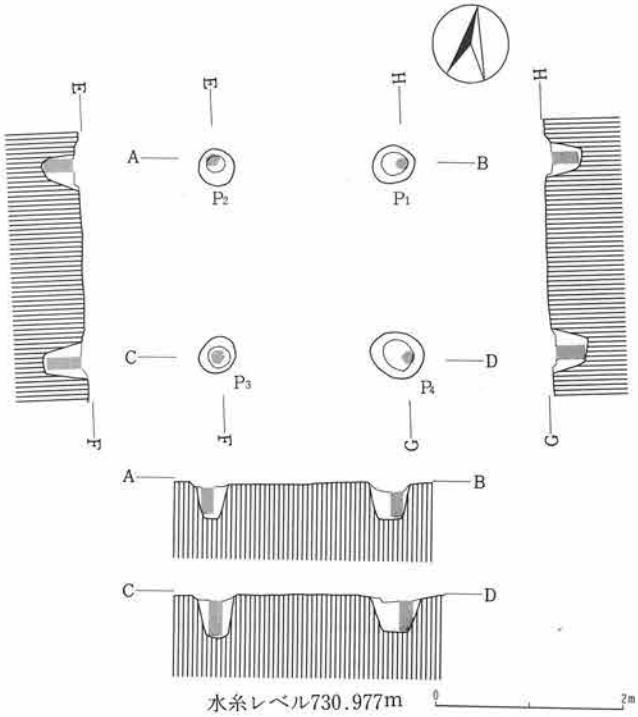
1間×1間の側柱式の掘立柱建物で、東西239cm、南北246cmを測り、平面プランは正方形を呈する。

柱間は、東西で187～188cm、南北193～197cmを測る。

南北軸の方位は、N－9°－Wを示す。

ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

埋土は、パミスを含む黒褐色土である。



層序説明
埋　土　黒褐色土層（7.5YR3/2）φ0.2～1.5cmのパミスを含む

第59図　第9号掘立柱建物址実測図

遺物

本遺構からの出土遺物は皆無であり、所産期については明らかにし得なかった。

10）第10号掘立柱建物址

遺構（第60図）

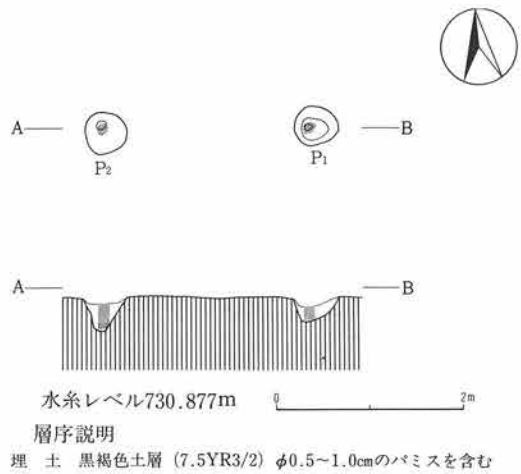
B－3グリッドに位置する。

他遺構との重複関係はない。東西270cmを測る。2基のピットが検出されたのみで全体は不明である。

柱間は、206cmを測る。南北軸の方位はN－6°－Eを示す。

ピット掘形の平面プランは、円形である。

埋土は、パミスを含む黒褐色土である。



層序説明
埋　土　黒褐色土層（7.5YR3/2）φ0.5～1.0cmのパミスを含む

第60図　第10号掘立柱建物址実測図

遺物

P_1から黒色土器杯の破片が1点出土し

ている。体部は、手持ちヘラケズリがなされ、口辺部との境に鈍い稜が認められることから、古墳時代後期の所産と考えられる。したがって、本遺構の所産期は古墳時代後期以降に比定されよう。

(3) 溝　　址

1）第1号溝址

遺構（第61・62図、図版4）

本遺構は、B～D－1～9グリッドに位置する。第6・7号住居址、第5・6号掘立柱建物址、第2号溝址と重複関係を有し、第6・7号住居址、第5・6号掘立柱建物址を切って構築されている。第2号溝址との先後関係は不明である。

南から北にほぼ直線的に延びる遺構で、調査区域内において調査された部分は、約164mの範囲である。

遺構覆土は、耕作土（第1層）を除き、6層に区分されるが、大半は第2層の暗褐色土により充塡される。

溝の掘形は、逆梯形状で、一部テラス状となる個所も認められた。

溝巾は204～480cm、深さ8～54cmを測る。

遺物（第65図、図版41）

本遺構からは、土師器片、黒色土器片、須恵器片、縄文土器片が出土している。このうち、図示したものに、縄文土器片2点がある。

本遺構の所産期は、出土土器中に糸切り底を有する須恵器杯の破片が認められること、重複関係から奈良時代後葉以降と考えられる。

2）第2号溝址

遺構（第62図、図版4）

本遺構は、B～C～6グリッドに位置する。第1・3号溝址と重複関係を有する。第3号溝址に切られているが、第1号溝址との先後関係は不明である。

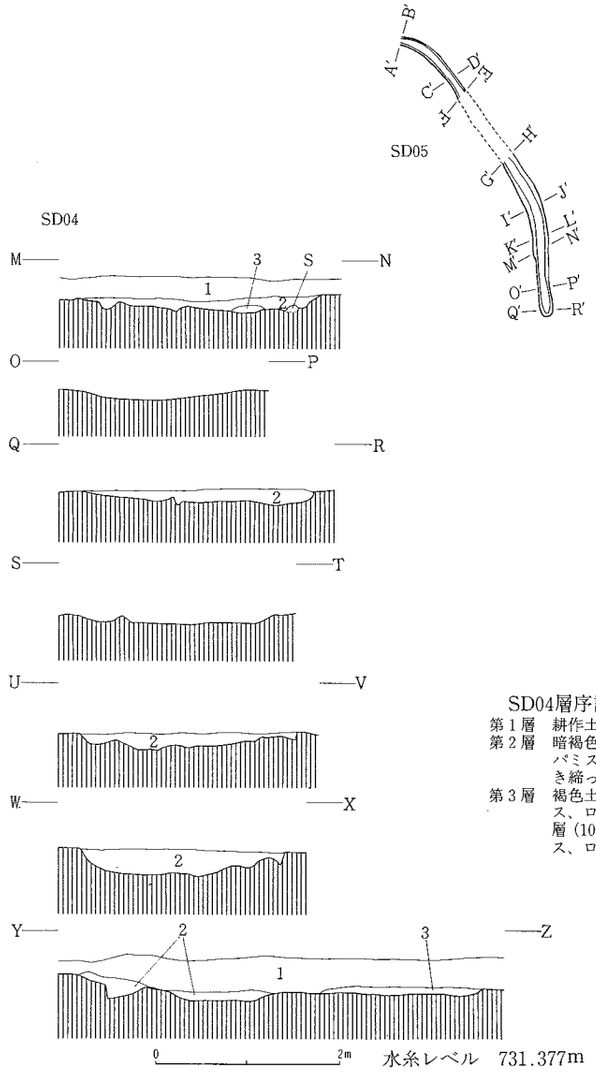
東から西に延びる遺構で、調査区域内において調査された部分は、約14.2mの範囲である。

遺構覆土は、2層に区分されるが、大半は第1層の黒褐色土により充塡される。

溝の掘形は、逆梯形状である。溝巾は、100～140cm、深さ20～26cmを測る。

遺物

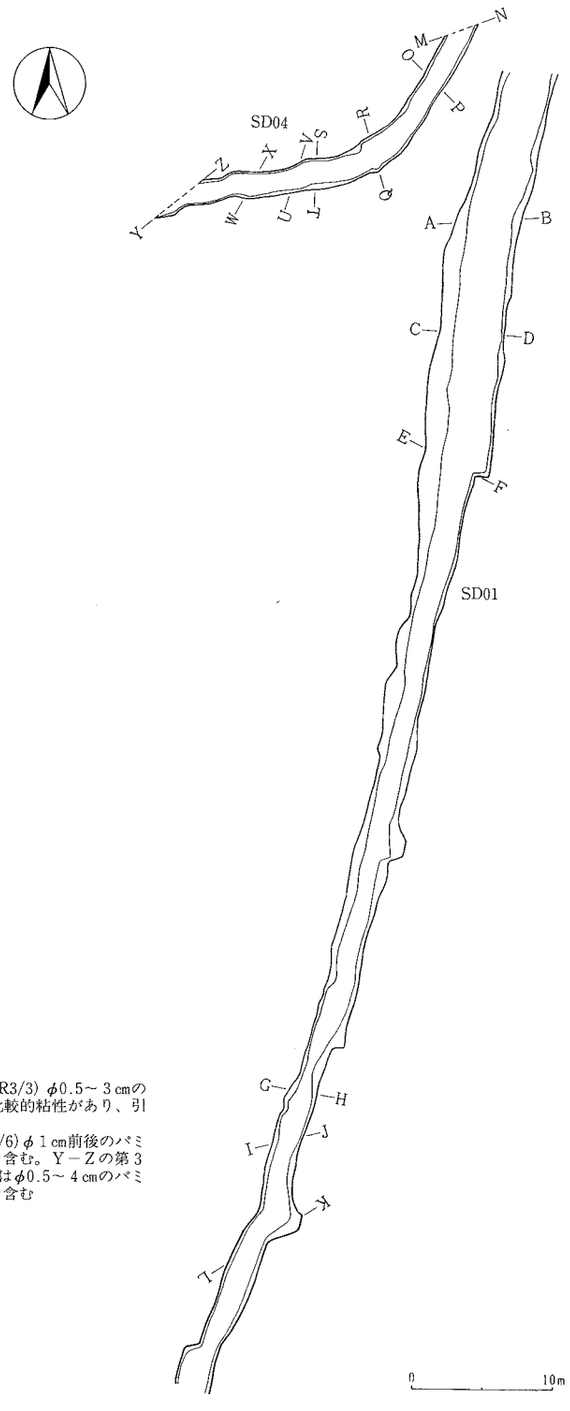
本遺構からの出土遺物は皆無であり、所産期についても明確でない。



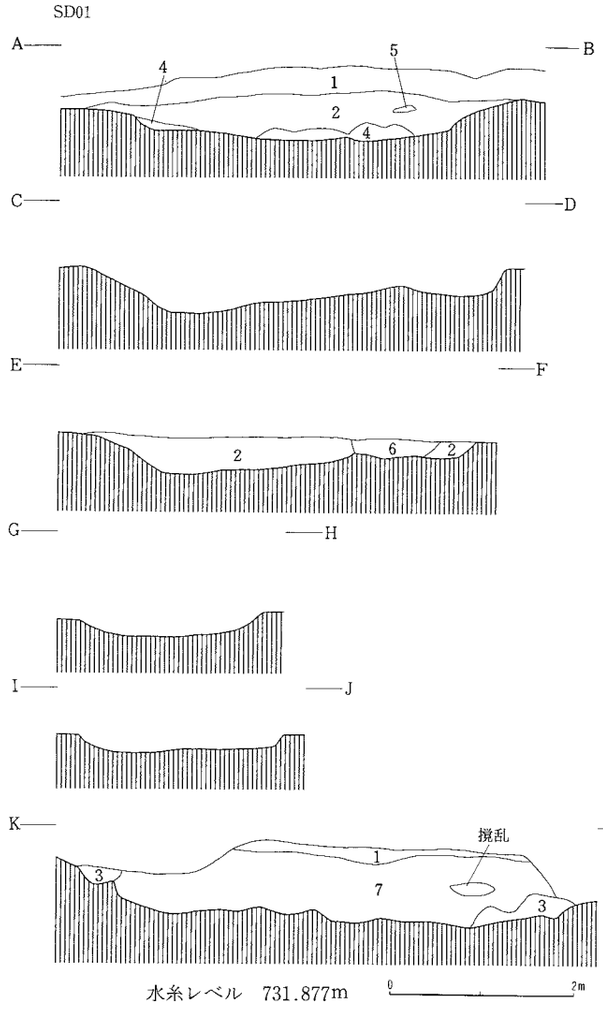
水糸レベル　731.377m

SD04層序説明

第１層　耕作土層
第２層　暗褐色土層（10YR3/3）φ0.5～３㎝のパミスを含む。比較的粘性があり、引き締っている
第３層　褐色土層（10YR4/6）φ１㎝前後のパミス、ローム粒子を含む。Ｙ－Ｚの第３層（10YR4/6）にはφ0.5～４㎝のパミス、ローム粒子を含む



第61図　１・４・５号溝址実測図



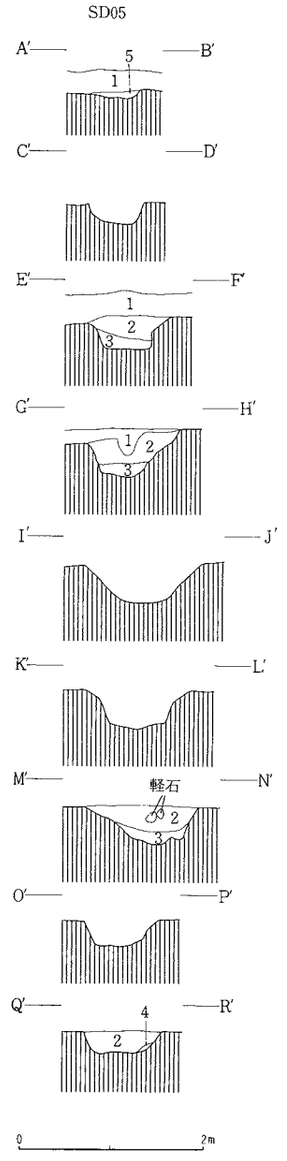
水糸レベル　731.877m

SD01層序説明

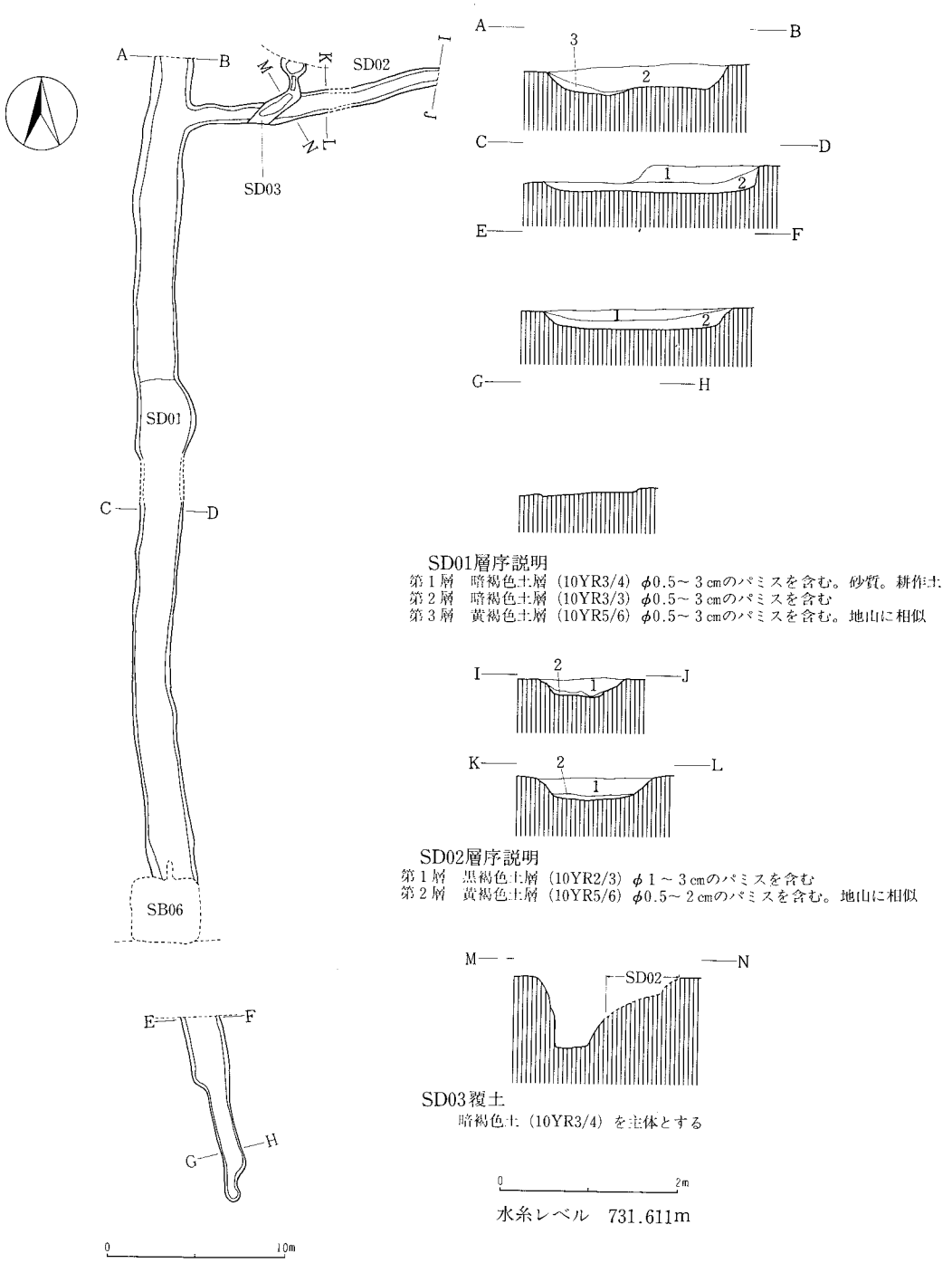
第１層　暗褐色土層（10YR3/4）粘性はない。耕作土
第２層　暗褐色土層（10YR3/3）パミスを含む。粘性はない。締っている
第３層　黄褐色土層（10YR5/6）パミス、ローム粒子を多く含む。粘性・締りともにない
第４層　褐色土層（7.5YR4/4）パミス、ローム粒子を含む。粘性はない
第５層　にぶい黄褐色土層（10YR5/4）ローム粒子を含む。粘性はない
第６層　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）パミス、ローム粒子を含む。粘性はない
第７層　暗褐色土層（7.5YR3/4）パミス、礫、ローム粒子を含む。粘性・締りともにない

SD05層序説明

第１層　暗褐色土層（10YR3/4）粘性はない。耕作土
第２層　黒褐色土層（10YR2/3）パミス、ローム粒子を僅かに含む。粘性はない。締っている
第３層　暗褐色土層（7.5YR3/3）パミス、ローム粒子を含む。粘性はない
第４層　褐色土層（10YR4/4）第２層にローム粒子が多量に混入したもの。粘性はない
第５層　黄褐色土層（10YR5/6）パミス、ローム粒子、黒色土ブロックを含む。粘性はない



水糸レベル　730.981m



SD01層序説明
第１層　暗褐色土層（10YR3/4）φ0.5～３cmのパミスを含む。砂質。耕作土
第２層　暗褐色土層（10YR3/3）φ0.5～３cmのパミスを含む
第３層　黄褐色土層（10YR5/6）φ0.5～３cmのパミスを含む。地山に相似

SD02層序説明
第１層　黒褐色土層（10YR2/3）φ１～３cmのパミスを含む
第２層　黄褐色土層（10YR5/6）φ0.5～２cmのパミスを含む。地山に相似

SD03覆土
暗褐色土（10YR3/4）を主体とする

第62図　第１～３号溝址実測図

3）第3号溝址

遺構（第62図、図版5）

本遺構は、B－6グリッドに位置する。第2号溝址と重複関係を有し、第2号溝址に切っている。

北東から南西に延びる遺構で、調査区域内において調査された部分は、約4.5mの範囲である。

遺構覆土は、暗褐色（10YR3/4）土を主体とするが、下部では砂の堆積が認められた。

溝巾は、60～120cm、深さ60cm前後を測る。

遺物

本遺構からの出土遺物は皆無であり、所産期についても明確でない。

4）第4号溝址

遺構（第61図、図版5）

B～C－1・2グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

東から西に延びる遺構で、調査区域内において調査された部分は、約28mの範囲である。

遺構覆土は、褐色（7.5YR4/3）土である。

溝巾は、160～260cm、深さ12～28cmと浅い。

遺物

本遺構からは、土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土しているが、図示し得るものはない。

本遺構の所産期は、出土土器片から奈良時代以降と考えられる。

5）第5号溝址

遺構（第61図、図版5）　A－2・3グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

南から北にほぼ直線的に延びる遺構で、調査区域内において調査された部分は、約23mの範囲である。

遺構覆土は、3層に区分されるが、大半は第2層の黒褐色土により充塡される。

溝の掘形は、概ね逆梯形状を呈する。

溝巾は、60～132cm、深さ8～56cmを測る。

遺物（第64・65図、図版40・41）

本遺構からは、土師器片、須恵器片、縄文土器片が出土している。このうち、図示したものは縄文土器片、頸部に2孔を有する土師器甕各1点である。

本遺構の所産期は、出土土器から古墳時代後期以降と考えられる。

(4) 土　　坑

1）第1号土坑

遺構（第63図、図版5）

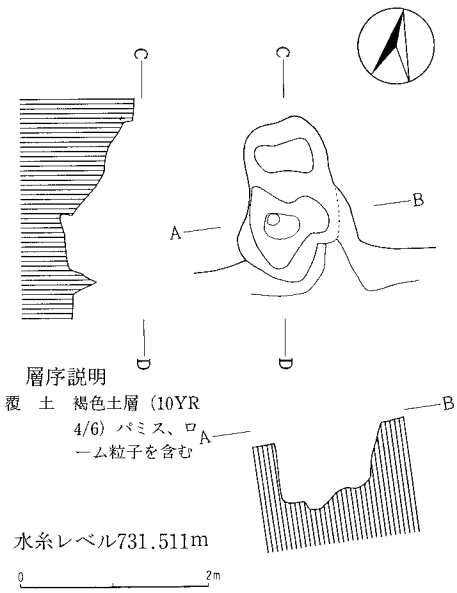
B－7グリッドに位置する。第1号住居址と重複関係を有し、第1号住居址に切られている。

東西107cm、南北177cmを測り、平面プランは不整形を呈する。

長軸方位は、N－12.5°－Eを示す。

遺構覆土は、ローム粒子、パミスを含む褐色(10YR4/6）土で、深さは、79cmを測る。

位置からすると、ちょうど第1号住居址カマド煙道部に当たるため、当初、カマド掘形として掘られた可能性もあるが、明らかにし得なかった。



第63図　第1号土坑実測図

遺物

本遺構からの出土遺跡は皆無である。

本遺構の所産期については、重複関係から古墳時代後期以前と考えられる。

(5) 遺構外出土遺物

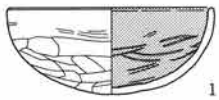
遺物（第65図、図版41）

遺構外出土遺物で図示したものには、縄文土器片、石器、石製品、金属製品がある。

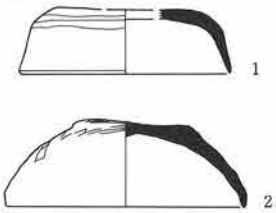
縄文土器は、中期後半から後期にかけてのものであろう。同じく、縄文時代の所産と考えられるものに打製石斧がある。石製品は、滑石製管玉で孔は貫通していない。

金属製品は2点あり、いずれも銅製であるが、用途は不明である。

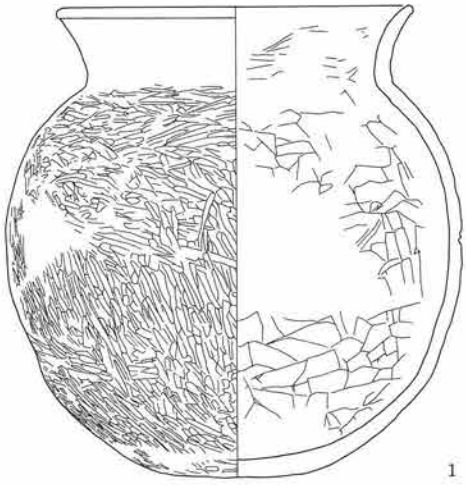
第2号住居址



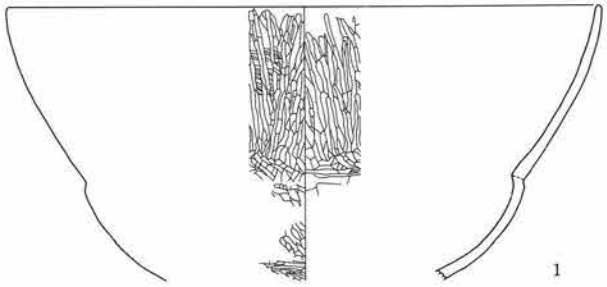
第5号住居址

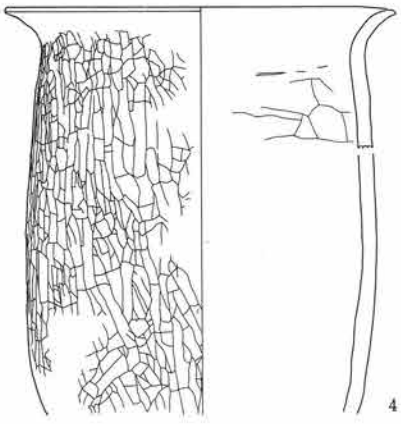


第9号住居址

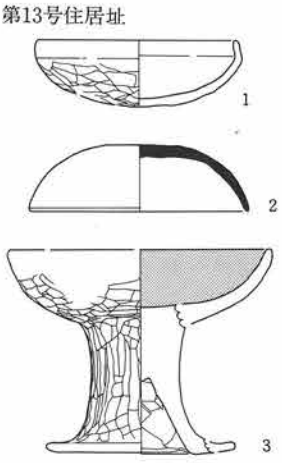


第11号住居址

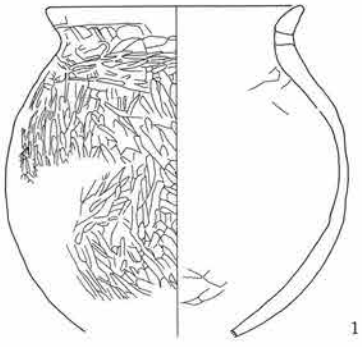




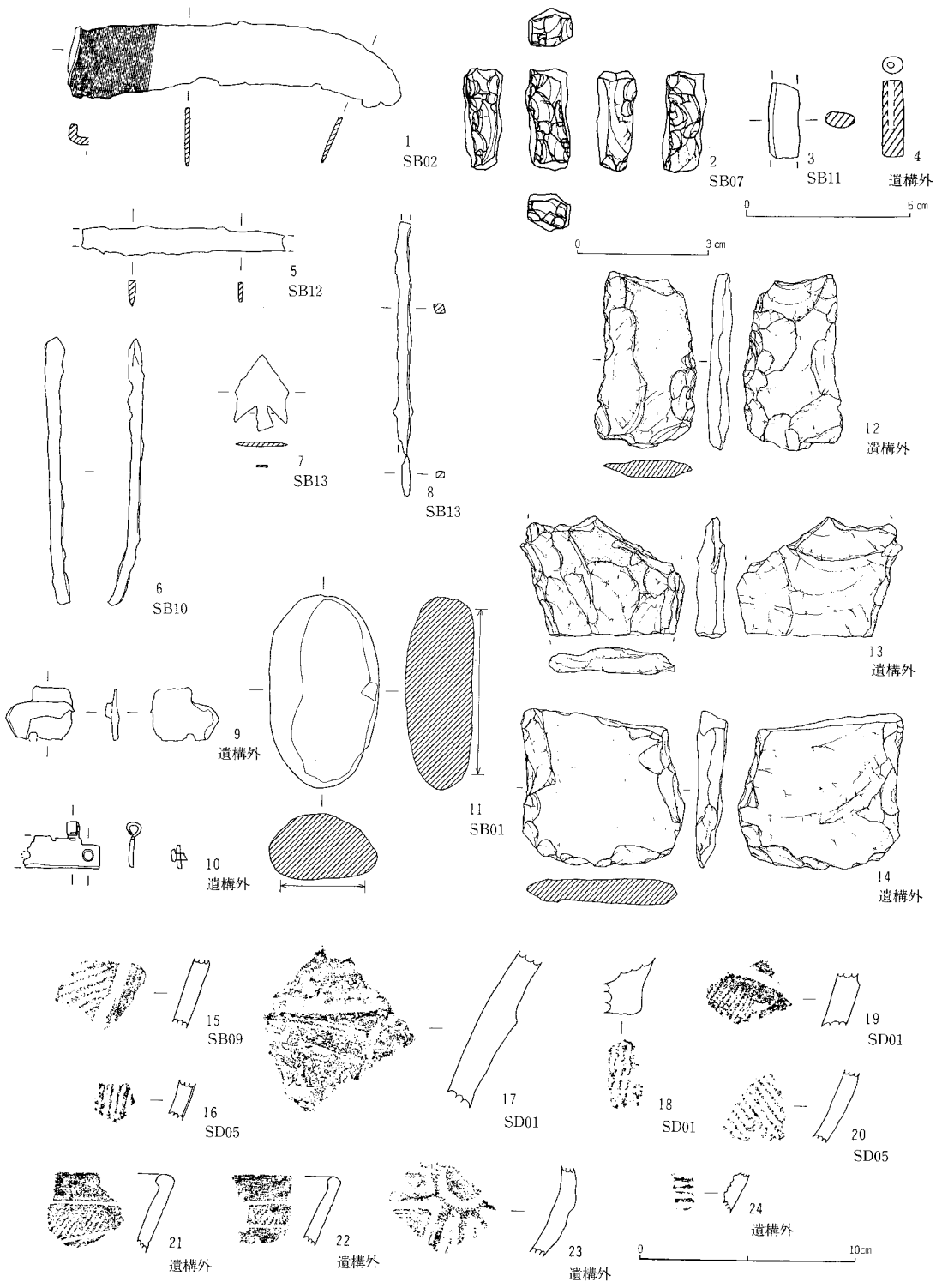
第13号住居址



第5号溝址



第64図　第2・5・9・11・13号住居址、第5号溝址出土土器実測図



第65図　金属製品・石製品・土製品実測図・縄文土器拓影図

3　竹花遺跡

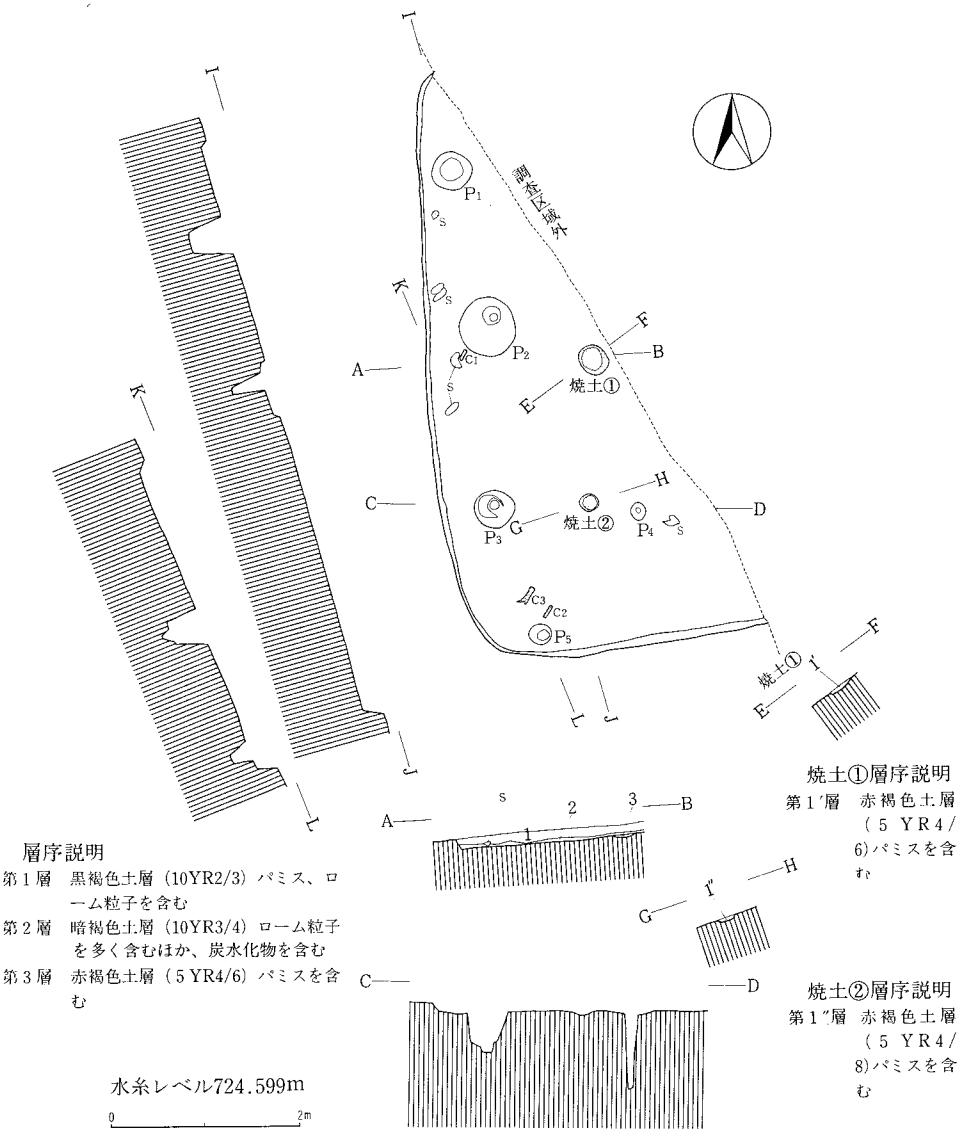
(1)　竪穴住居址

1）第1号住居址

遺構（第66図、図版5）

本住居址は、B－1グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

東西は調査区域内で294cm、南北640cmを測る。平面プランは、おそらく、南北に長い隅丸長方



第66図　第1号住居址実測図

形を呈するものと思われる。南北軸の方位は、N－5°－Wを示す。

住居址覆土は、3層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、6～24.5cmを測る。焼土は2個所で検出され、炉址と考えられる。地面を浅く掘り込んだ地床炉である。

ピットは総計5基検出された。このうち、P_1～P_3が主柱穴であろう。周溝は、検出されなかった。

遺物（第331・370図、図版42・80）

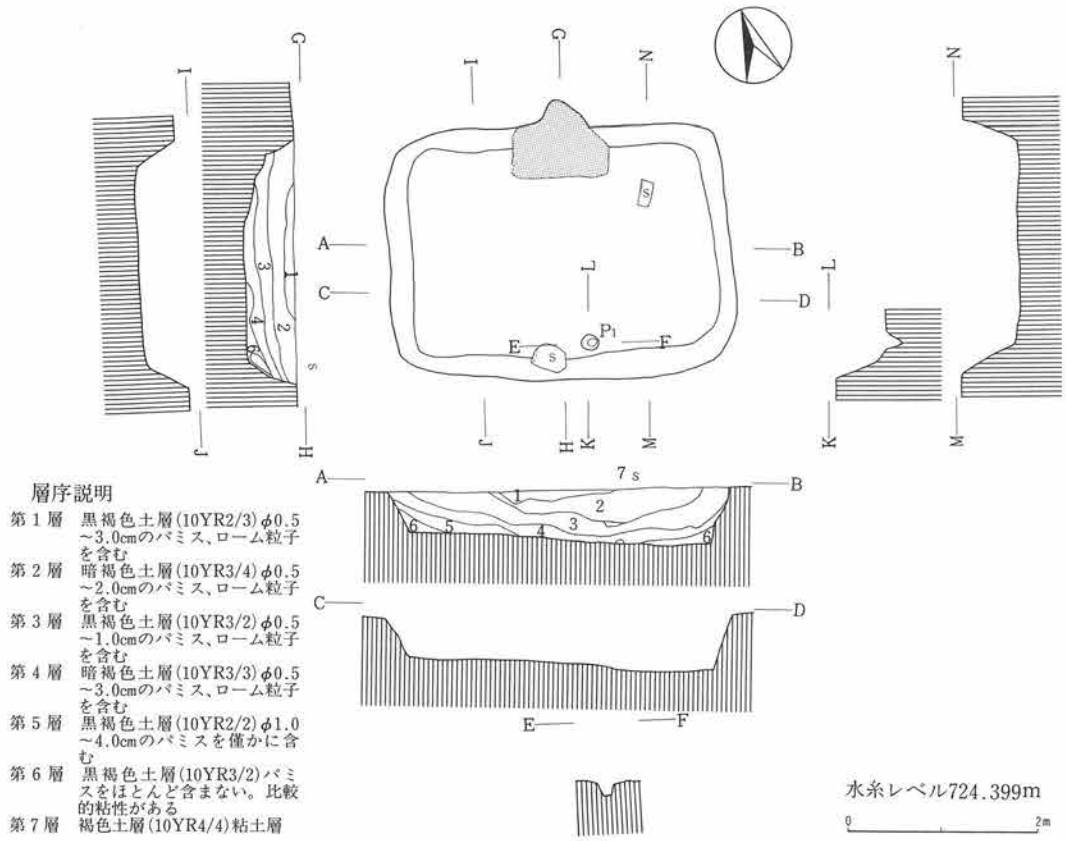
土師器片、石製品、炭化材が出土している。土器片の量は少なく、図示し得たものは土師器甑、磨石各1点である。本住居址の所産期は、出土土器片から古墳時代中期に比定される。

2）第2号住居址

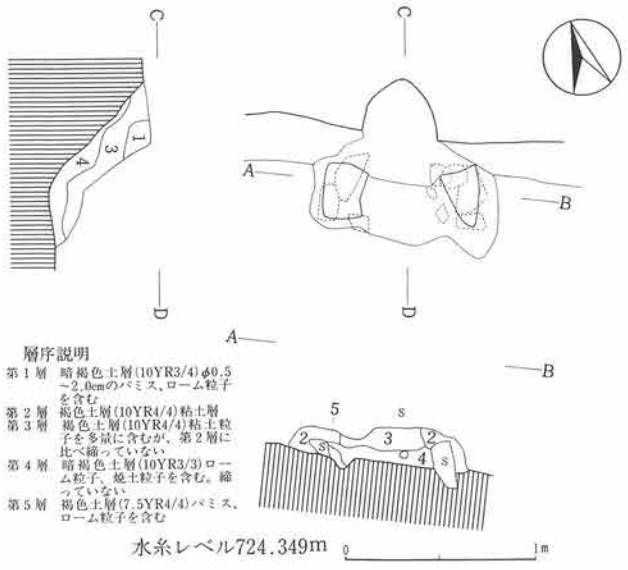
遺構（第67・68図、図版5）

本住居址は、A・B－1・2グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

東西358cm、南北265cmを測り、平面プランは、東西に長い隅丸長方形を呈する。



第67図　第2号住居址実測図



第68図　第２号住居址カマド実測図

カマドを中心とする主軸方位は、Ｎ－20°－Ｅを示す。

住居址覆土は、７層に区分され自然堆積と考えられる。

確認面からの壁高は、43～61cmを測る。

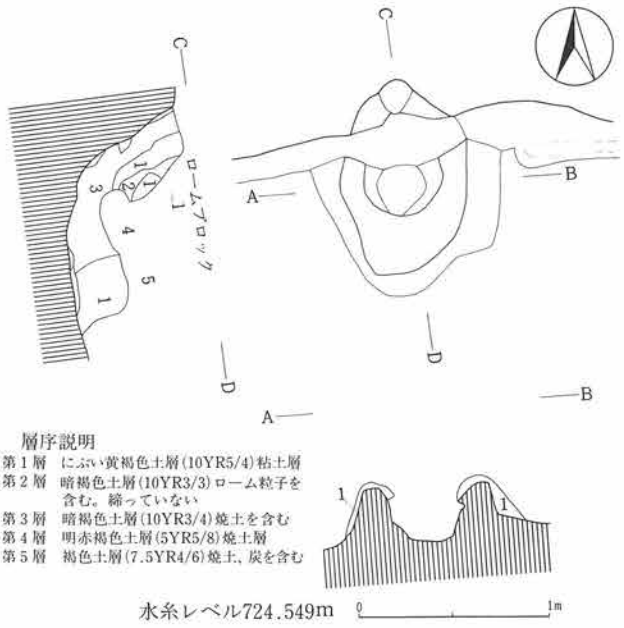
カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。遺存状態は比較的良好であった。集塊岩、軽石を袖芯とし、褐色(10YR4/4)粘土により構築されていた。また、住居址西北部では焚口部の天井石として用いられたと考えられる加工した軽石が認められた。

ピットは、南壁下ほぼ中央部で１基検出され、出入口部の施設に関連するものと思われる。

周溝は、検出されなかった。

遺物（第331図、図版42）

土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土している。このうち、図示し得たものは、須恵器蓋１点である。本住居址の所産期は、平安時代に比定される。



第69図　第３号住居址カマド実測図

３）第３号住居址

遺構（第69・70図、図版５）

本住居址は、Ｂ－２グリッドに位置する。第６号住居址と重複関係を有し、第６号住居址を切って構築されている。

東西457cm、南北444cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、Ｎ－３°－Ｗを示す。

住居址覆土は、一部撹乱を受けるが、８層に区分され、自然堆積

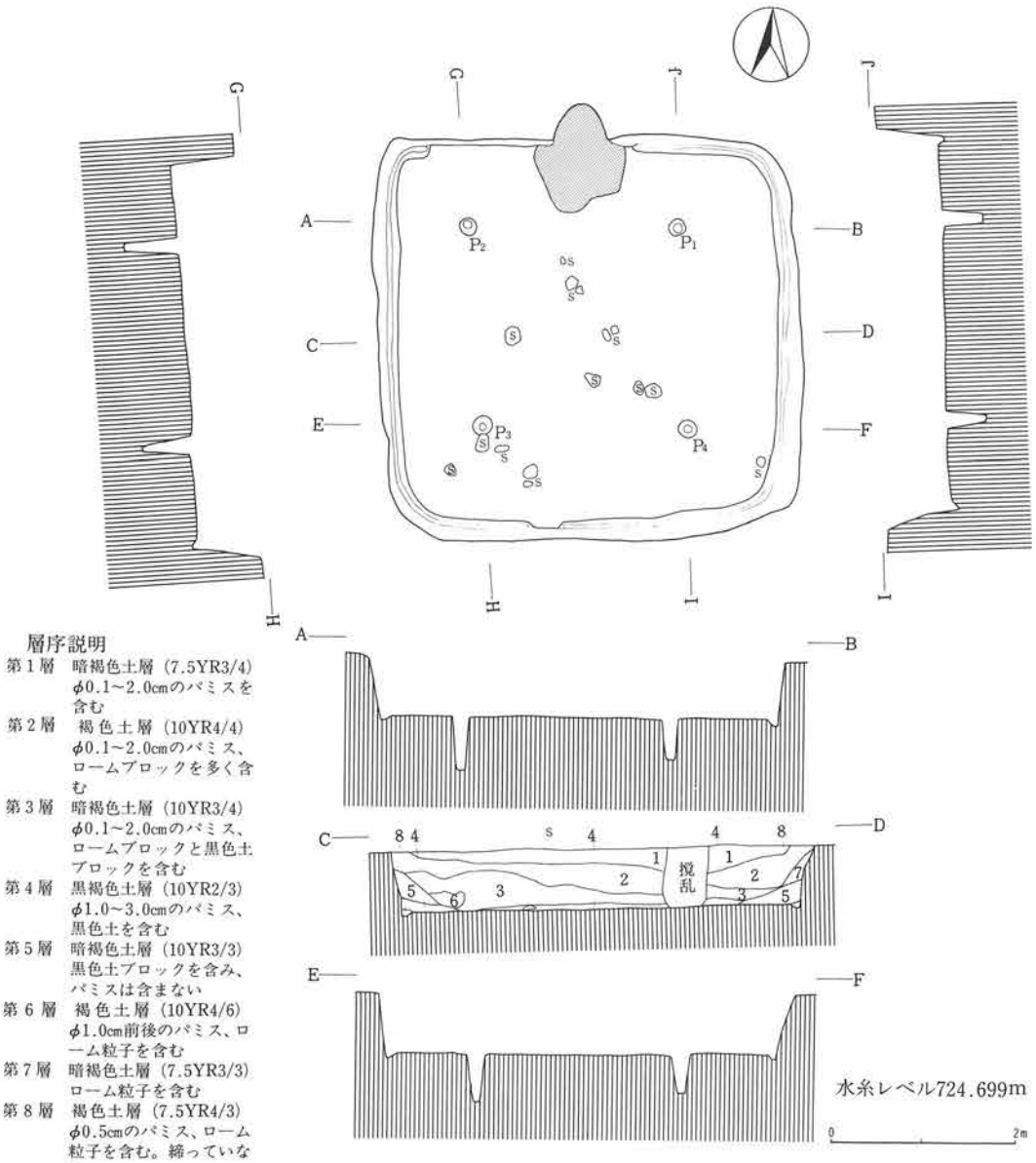
と考えられる。確認面からの壁高は、65.5～72cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。遺存状態は、比較的良好であった。地山を掘り残して袖芯とし、にぶい黄褐色（10YR5/4）粘土により構築されていた。

ピットは、主柱穴4基が検出された。また、周溝はほぼ全周する。

遺物（第331・370図、図版42・80）

土師器片、須恵器片、石製品、炭化物が出土している。図示したものには、土師器甕、鉢、甕、



層序説明

第1層　暗褐色土層（7.5YR3/4）φ0.1～2.0cmのパミスを含む
第2層　褐色土層（10YR4/4）φ0.1～2.0cmのパミス、ロームブロックを多く含む
第3層　暗褐色土層（10YR3/4）φ0.1～2.0cmのパミス、ロームブロックと黒色土ブロックを含む
第4層　黒褐色土層（10YR2/3）φ1.0～3.0cmのパミス、黒色土を含む
第5層　暗褐色土層（10YR3/3）黒色土ブロックを含み、パミスは含まない
第6層　褐色土層（10YR4/6）φ1.0cm前後のパミス、ローム粒子を含む
第7層　暗褐色土層（7.5YR3/3）ローム粒子を含む
第8層　褐色土層（7.5YR4/3）φ0.5cmのパミス、ローム粒子を含む。締っていない

第70図　第3号住居址実測図

石製品がある。石製品は軽石製の凹石である。炭化物はカマド内から出土したもので、炭化種子である。同定結果については後述する。本住居址の所産期は、古墳時代後期中葉に比定される。

4）第4号住居址

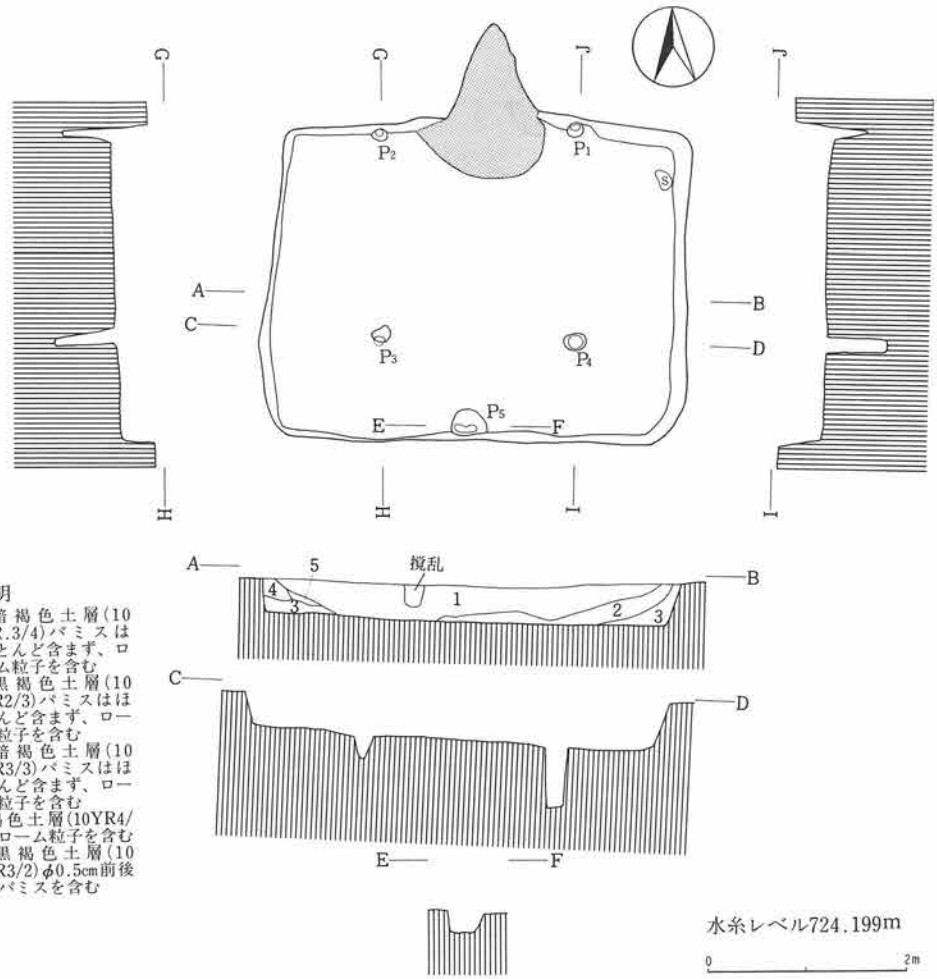
遺構（第71・72図、図版5）

本住居址は、A－1グリッドに位置する。第8・12号住居址と重複関係を有し、第8・12号住居址を切って構築されている。

東西414cm、南北335cmを測り、平面プランは、隅丸長方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、N－2°－Eを示す。住居址覆土は、一部撹乱を受けるが、5層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、33～54.5cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置するが、遺存状態は悪い。おそらく、軽石および暗褐色(10YR3/4) 粘土により構築されていたものと思われる。



層序説明
第1層　暗褐色土層(10YR.3/4)パミスはほとんど含まず、ローム粒子を含む
第2層　黒褐色土層(10YR2/3)パミスはほとんど含まず、ローム粒子を含む
第3層　暗褐色土層(10YR3/3)パミスはほとんど含まず、ローム粒子を含む
第4層　褐色土層(10YR4/4)ローム粒子を含む
第5層　黒褐色土層(10YR3/2)φ0.5cm前後のパミスを含む

第71図　第4号住居址実測図

ピットは、総計５基検出された。

このうち、P_1～P_4が主柱穴、P_5は出入口部の施設に関連するものであろう。

周溝は、検出されなかった。

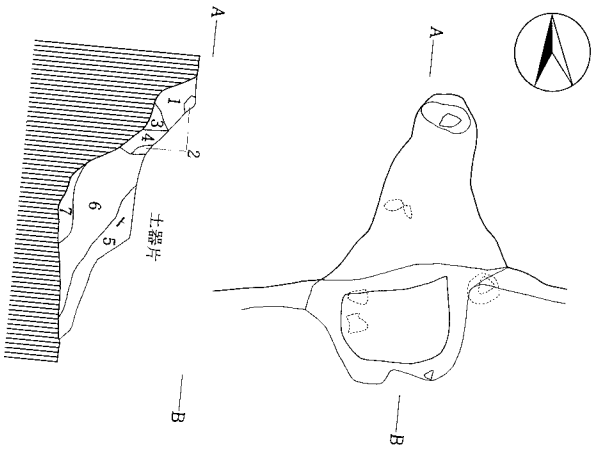
遺物（第331・370図、図版42・80）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、石製品、鉄滓が出土している。

図示したものに、墨書土器２点、石製品がある。墨書土器は、２点とも黒色土器杯で、１は「光」と判読できるが、２は不明である。

石製品（第370図３）は、軽石製で用途については明確ではない。

本住居址の所産期は、平安時代に比定される。



層序説明
第１層　黒褐色土層(10YR2/3) パミスは含まず、粘土粒子を僅かに含む
第２層　暗褐色土層(10YR3/4)粘土層
第３層　褐色土層(10YR4/4)ローム粒子を多く含むほか、焼土粒子を少量含む
第４層　褐色土層(7.5YR4/4)ローム粒子、焼土粒子を多く含む
第５層　黒褐色土層(7.5YR3/2)粘土粒子を含む
第６層　黒褐色土層(10YR3/2)ローム粒子を含む。締っていない
第７層　暗褐色土層(7.5YR3/4)焼土粒子を多く含む

第72図　第４号住居址カマド実測図

５）第５号住居址

遺構（第73・75図、図版６）

本住居址は、Ｂ－２グリッドに位置する。第76号住居址と重複関係を有し、第76号住居址を切って構築されている。

東西400cm、南北375cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、Ｎ－５°－Ｗを示す。住居址覆土は、５層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、54～62cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。遺存状態は比較的良好であった。加工した軽石および褐色（7.5YR4/4）粘土を主体として構築されていた。また、煙道部では、土師器長胴甕の破片が用いられていた。

ピットは、総計７基検出された。このうち、P_1～P_6の６基が主柱穴、P_7は出入口部の施設に関連するものであろう。

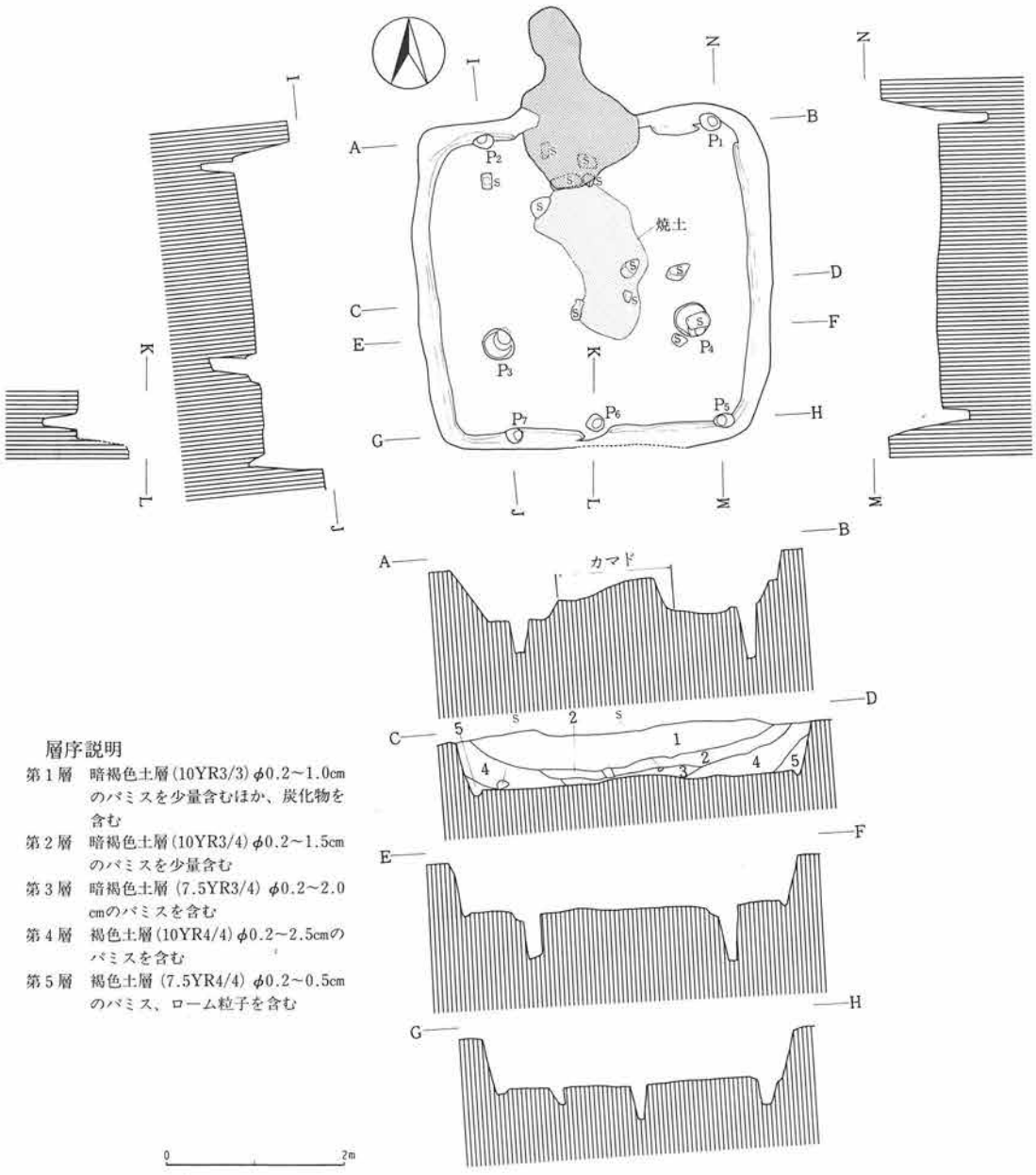
周溝は、カマド部、南壁中央部を除きほぼ全周する。

遺物（第331・332・374図、図版42・43・82）

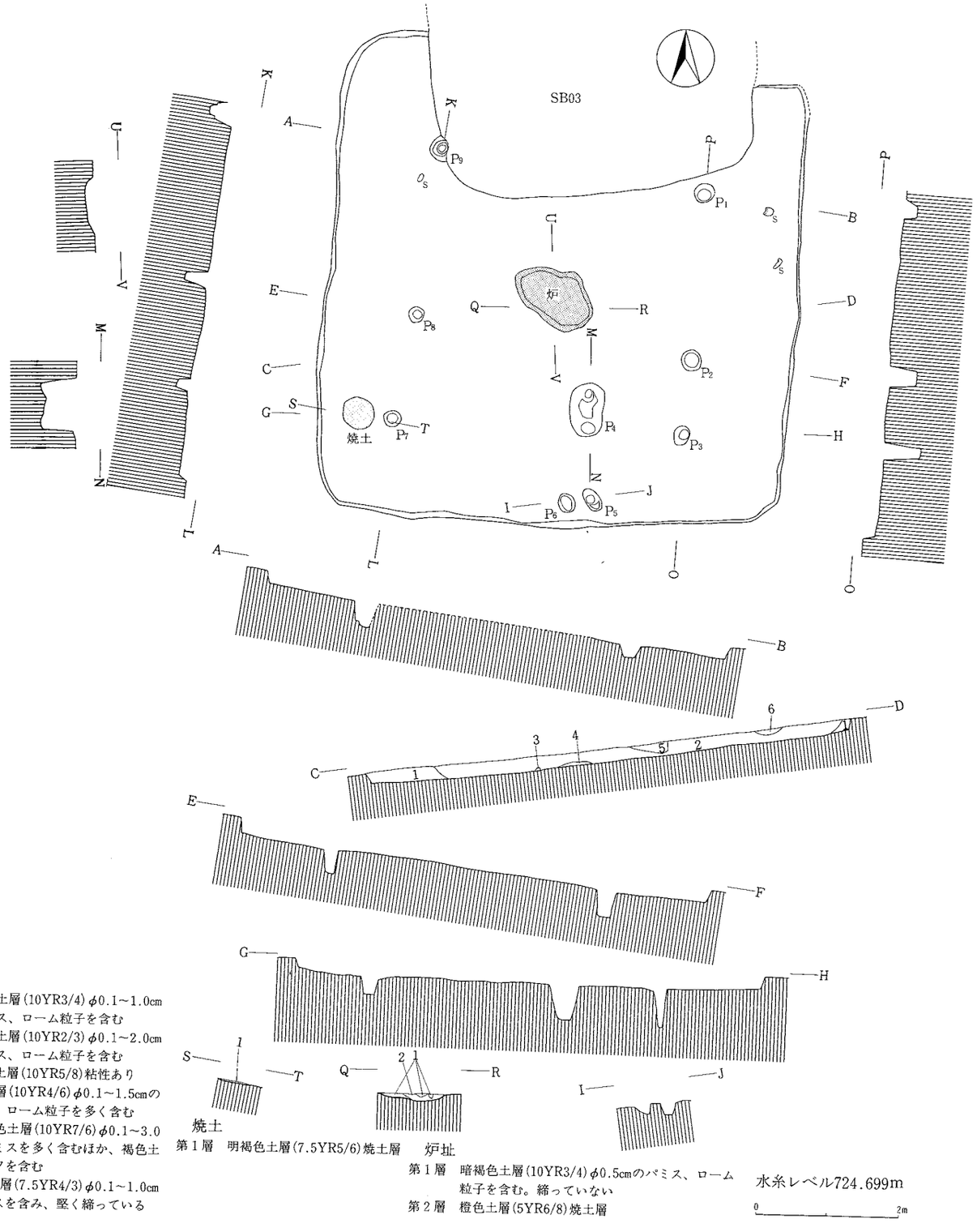
土師器片、黒色土器片、須恵器片、石製品のほか、自然遺物として炭化材がP_3から出土してい

る。このうち、図示したものに土師器長胴甕２点、須恵器四耳壺、石製品として石臼(第374図１)がある。炭化材については、後述する。

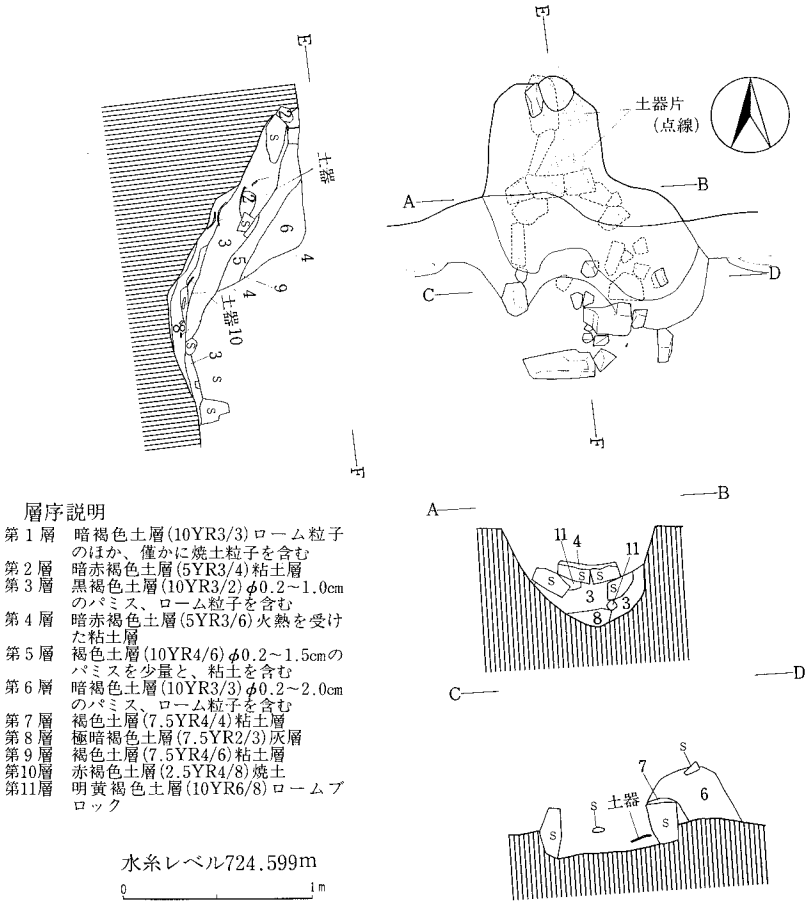
本住居址の所産期は、奈良時代後葉～平安時代初めに比定される。



第73図　第５号住居址実測図



第74図　第6号住居址実測図



第75図　第5号住居址カマド実測図

6）第6号住居址

遺構（第74図、図版6）

本住居址は、B－2グリッドに位置する。第3号住居址と重複関係を有し、第3号住居址により切られている。

東西667cm、南北675cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。

南北軸の方位は、N－8.5°－Eを示す。住居址覆土は、6層に区分され、自然堆積と考えられる。

確認面からの壁高は、12～21.5cmを測り、他の住居址と比較すると浅い。

炉址は、住居址中央部に位置する。また、南東部においても焼土が検出され、炉址の可能性もある。いずれも浅い掘り込みである。

ピットは、総計9基検出された。このうち、P_1～P_4・P_7～P_9の7基が主柱穴、P_5・P_6は出入口部の施設に関連するものであろう。

周溝は、検出されなかった。

遺物（第332・363・367図、図版43・73・77）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、鉄製品、石製品、炭化材がある。このうち、図示したものに土師器杯２点、甕１点、黒色土器杯１点のほか、鉄製品として鎌、石製品として滑石製の石製模造品がある。石製模造品は、勾玉形のものである。炭化材は、炉址・P_1から出土したもので後述する。本住居址の所産期は、古墳時代中期に比定される。

７）第７号住居址

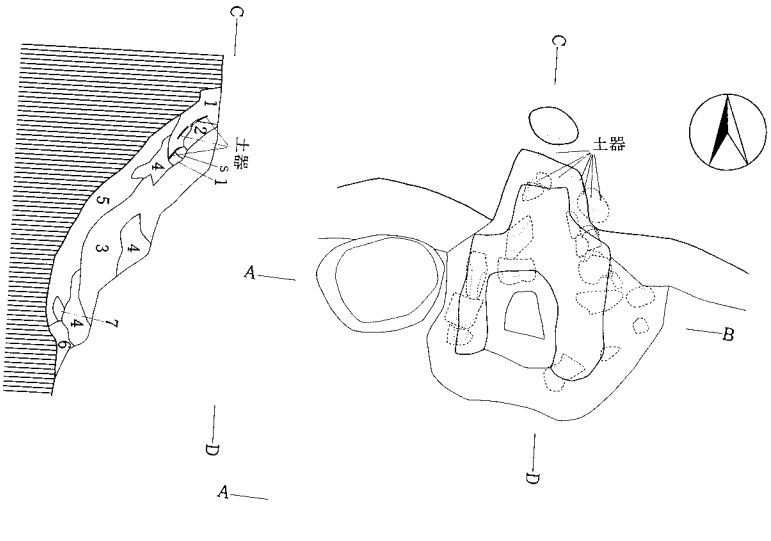
遺構（第76・77図、図版６）

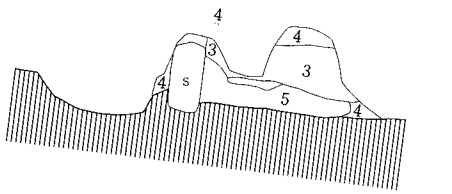
本住居址は、Ａ・Ｂ－１グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

東西559cm、南北580cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、Ｎ－６°－Ｅを示す。住居址覆土は、５層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、55～93cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。遺存状態は比較的良好で、加工した軽石を袖芯とし、褐色(10YR4/4、4/6)粘土を用いて構築されていた。また、煙道部では土師器長胴甕の破片が認められており、煙道に用いられた可能性がある。

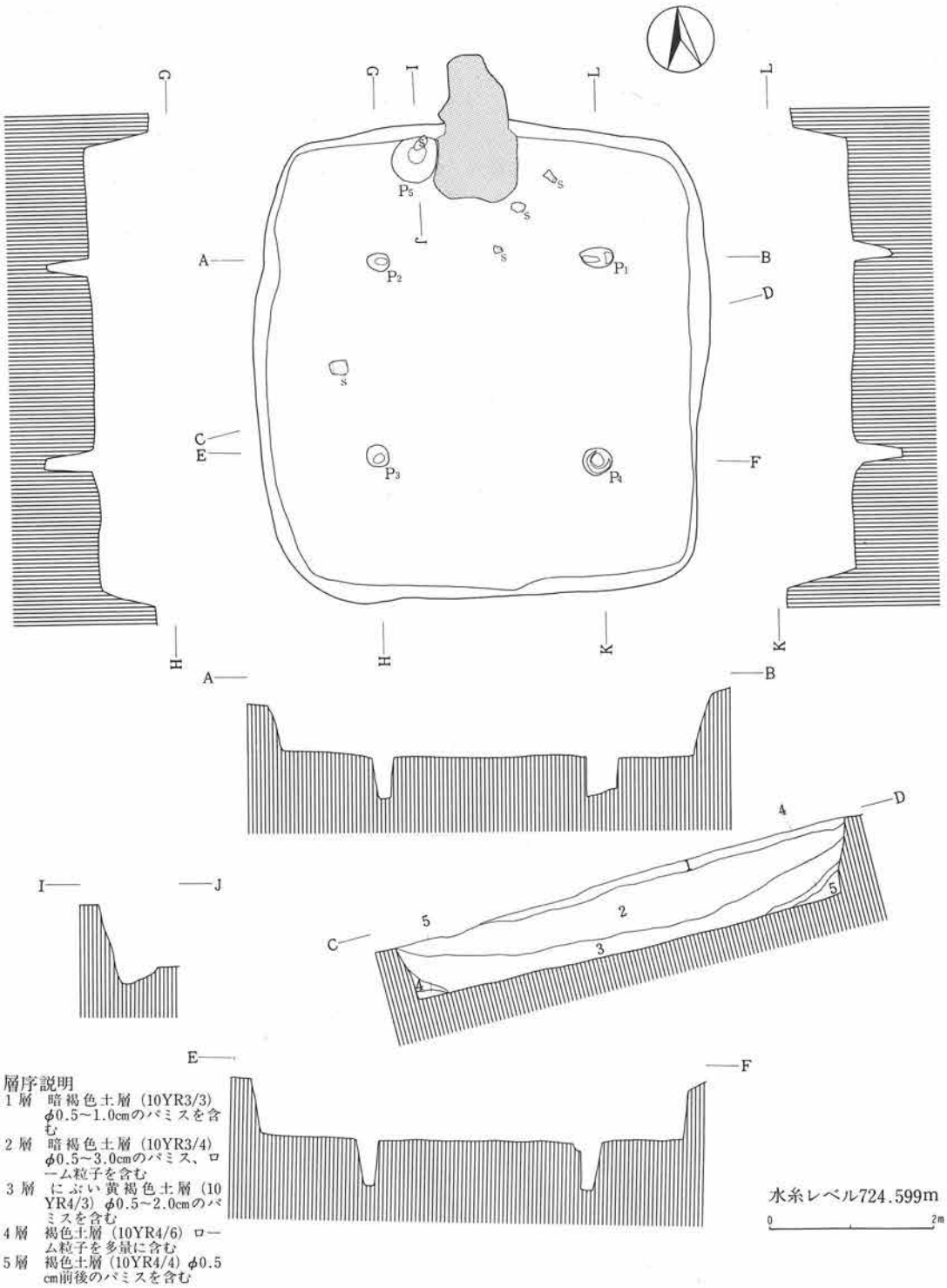




層序説明

第１層　暗褐色土層(10YR3/3)粘土粒子、焼土粒子を含む
第２層　褐色土層(10YR4/4)粘土層
第３層　暗褐色土層(10YR3/4)φ0.5cm前後のパミスを含む。締っていない
第４層　褐色土層(10YR4/6)粘土層
第５層　褐色土層(7.5YR4/4)焼土粒子、灰のほか、僅かに炭を含む
第６層　暗褐色土層(10YR3/4)φ1.0cm前後のパミス、粘土粒子を含む
第７層　明赤褐色土層(5YR5/8)焼土層

第76図　第７号住居址カマド実測図



第77図　第7号住居址実測図

ピットは、総計５基検出された。このうち、P_1～P_4が主柱穴、P_5は位置、規模などから貯蔵穴であろう。また、P_1は、形状からすると割材が用いられていた可能性がある。なお、周溝は検出されなかった。

遺物（第332・363図、図版43・73）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、灰釉陶器片、鉄製品、炭化材が出土している。このうち、図示したものに土師器長胴甕１点のほか、鉄製品として刀子がある。炭化材は、カマド内から出土したもので後述する。

本住居址の所産期は、奈良時代前半に比定される。

８）第８号住居址

遺構（第78図、図版６）

本住居址は、Ａ－１・２グリッドに位置する。第４号住居址、第１号溝址と重複関係を有し、両遺構により切られている。

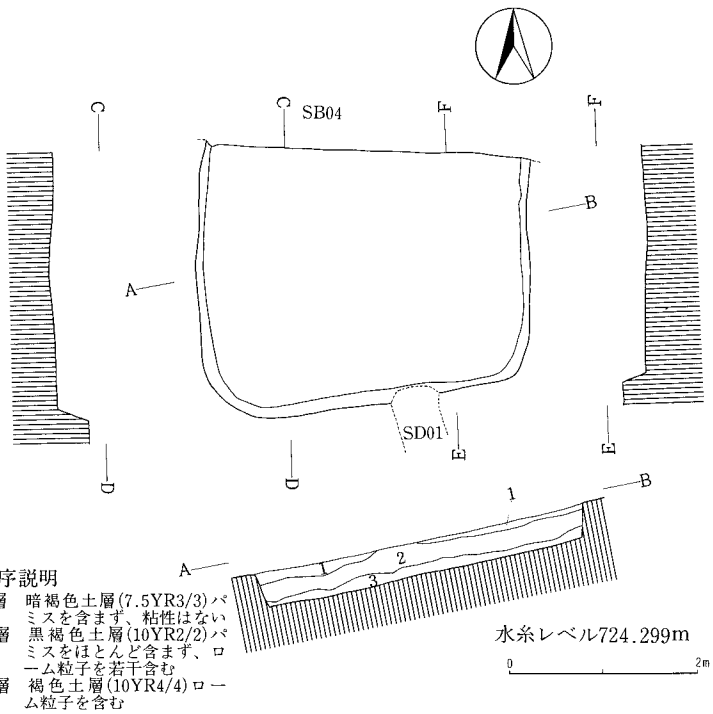
東西353cm、南北は残存部で300cmを測る。平面プランは、おそらく、隅丸方形を呈するものと思われる。

南北軸の方位は、Ｎ－７°－Ｗを示す。

住居址覆土は、３層に区分される。確認面からの壁高は、26～37cmを測る。

カマドは、北壁に設けられていたと思われるが、第４号住居址に切られているため不明である。

また、柱穴、周溝等の施設は確認されなかった。



層序説明
第１層　暗褐色土層(7.5YR3/3)パミスを含まず、粘性はない
第２層　黒褐色土層(10YR2/2)パミスをほとんど含まず、ローム粒子を若干含む
第３層　褐色土層(10YR4/4)ローム粒子を含む

第78図　第８号住居址実測図

遺物（第332図、図版43）

土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土している。

このうち、図示したものに土師器甕、黒色土器杯、軟質須恵器杯がある。

また、墨書土器の破片があるが、文字は不明である。

本住居址の所産期は、平安時代に比定される。

9）第9号住居址

遺構（第79・80図、図版6）

本住居址は、A・B－1グリッドに位置する。第10・12号住居址と重複関係を有し、第10・12号住居址を切って構築されている。

東西313cm、南北350cmを測り、平面プランは、南北にやや長い隅丸長方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、N－3°－Wを示す。住居址覆土は、3層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、17.5～48cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置するが、遺存状態は悪い。おそらく、加工した軽石および明褐色（7.5YR5/6）粘土を主体として構築されていたものと思われる。

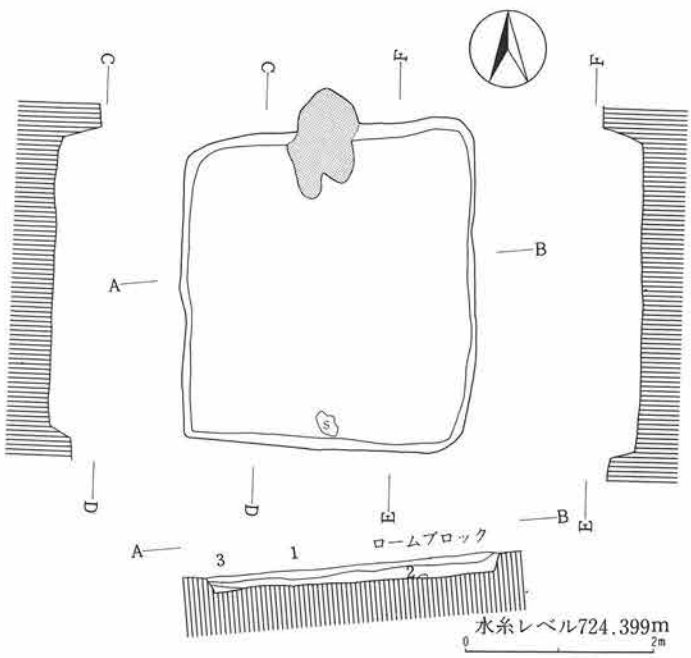
柱穴、周溝等の施設は確認されなかった。

遺物（第333図、図版44）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、灰釉陶器片、鉄滓が出土している。このうち、図示したものに土師器甕1点、黒色土器杯5点、椀1点、須恵器杯3点がある。

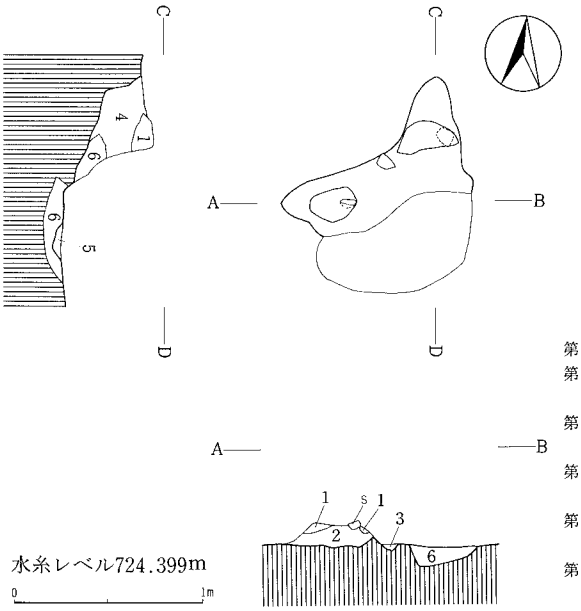
墨書土器は5点あり、文字の判読できたものには、「安」（7）、「□身」（9）がある。

本住居址の所産期は、平安時代に比定される。



層序説明
第1層　暗褐色土層(10YR3/4)φ0.5cmのパミス、ローム粒子を含む。粒子荒い
第2層　暗褐色土層(10YR3/3)φ0.5～1.0cmのパミスを含む
第3層　褐色土層(10YR4/4)ローム粒子を多く含む

第79図　第9号住居址実測図



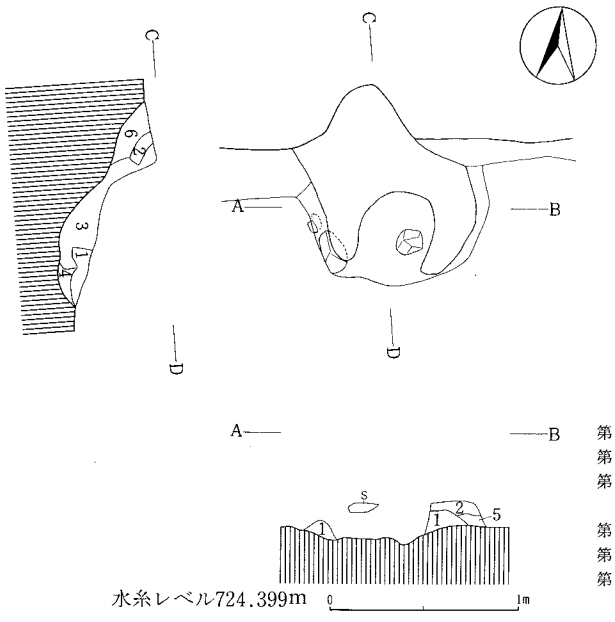
層序説明
第1層　明褐色土層(7.5YR5/6)粘土層
第2層　黄褐色土層(10YR5/6)ローム粒子を含む
第3層　褐色土層(7.5YR4/3)ローム粒子を含む
第4層　黒褐色土層(10YR2/3)ローム粒子を含む。粘性はない
第5層　にぶい赤褐色土層(5YR4/4)焼土、炭化物、灰を含む
第6層　褐色土層(10YR4/4)焼土、炭化物を含む

第80図　第9号住居址カマド実測図

10）第10号住居址

遺構（第81・82図、図版6）

本住居址は、A・B－1グリッドに位置する。第9号住居址と重複関係を有し、第9号住居址



層序説明
第1層　にぶい黄褐色土層(10YR5/3)粘土層
第2層　暗褐色土層(10YR3/3)粘土粒子を多量に含む
第3層　黒褐色土層(10YR2/3)粘土粒子、焼土粒子を少量含む
第4層　暗褐色土層(10YR3/4)焼土を多く含む
第5層　黒褐色土層(10YR2/2)僅かに炭化物を含む
第6層　黒褐色土層(7.5YR2/2)僅かに粘土粒子、焼土粒子を含む

第81図　第10号住居址カマド実測図

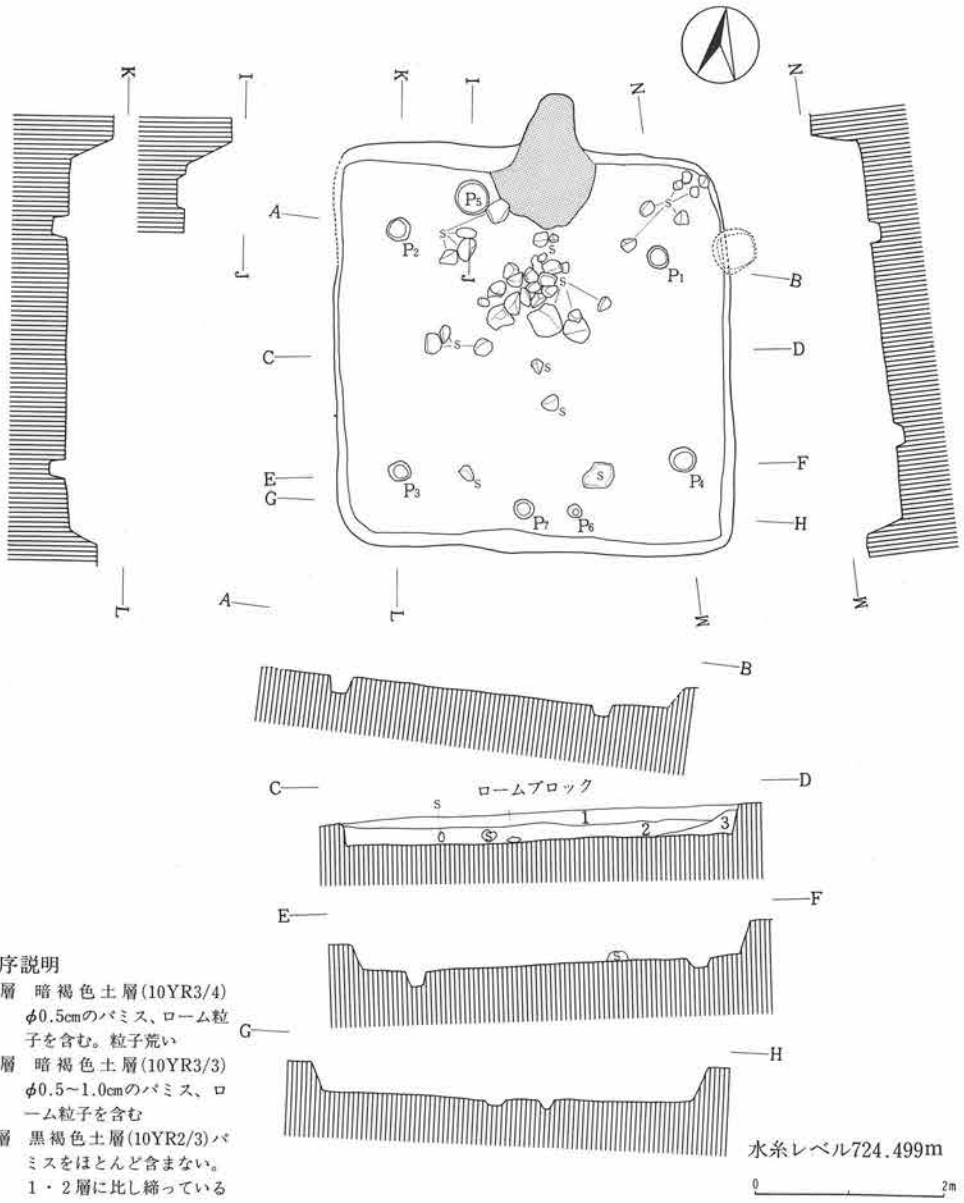
に切られている。

東西419cm、南北425cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、N－11°－Wを示す。住居址覆土は、3層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、25～54cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置するが、遺存状態は悪い。おそらく、加工した軽石およびにぶい黄褐色（10YR5/3）粘土を主体として構築されていたものと思われる。

ピットは、総計7基検出された。このうち、P_1～P_4が主柱穴、P_5が貯蔵穴、P_6・P_7の2基が



層序説明

第1層　暗褐色土層(10YR3/4)
φ0.5cmのパミス、ローム粒子を含む。粒子荒い

第2層　暗褐色土層(10YR3/3)
φ0.5～1.0cmのパミス、ローム粒子を含む

第3層　黒褐色土層(10YR2/3)パミスをほとんど含まない。1・2層に比し締っている

第82図　第10号住居址実測図

出入口部の施設に関連するものと思われる。

また、住居址覆土中央～床面直上にかけて多量の礫が認められた。そのほとんどが河床礫であり、軽石は１点だけであった。

遺物（第333・363・368図、図版44・73・78）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、鉄製品、石製品のほか、自然遺物として獣骨が出土している。このうち、図示したものに黒色土器杯、須恵器蓋、杯、長頸壺のほか、鉄鏃の茎部と考えられるもの（第363図３・４）、軽石製紡錘車がある。紡錘車は、重さ90ｇを量る。

本住居址の所産期は、平安時代に比定される。

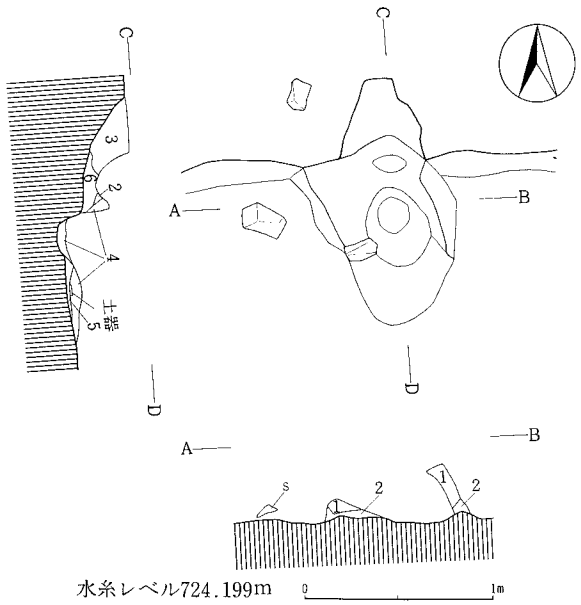
11）第11号住居址

遺構（第83・84図、図版６）

本住居址は、Ｂ－２グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

東西485cm、南北490cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、Ｎ－４°－Ｅを示す。住居址覆土は、４層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、27～50cmを測る。



層序説明
第１層　褐色土層(10YR4/4)粘土層
第２層　黒褐色土層(10YR2/3)φ0.5～1.0cmの小礫を含む
第３層　黒褐色土層(10YR2/2)ローム粒子、粘土粒子を僅かに含む
第４層　暗褐色土層(10YR3/3)焼土、炭化物を含む
第５層　明褐色土層(7.5YR5/6)焼土層
第６層　暗褐色土層(10YR3/3)粘土粒子を多量に含む

第83図　第11号住居址カマド実測図

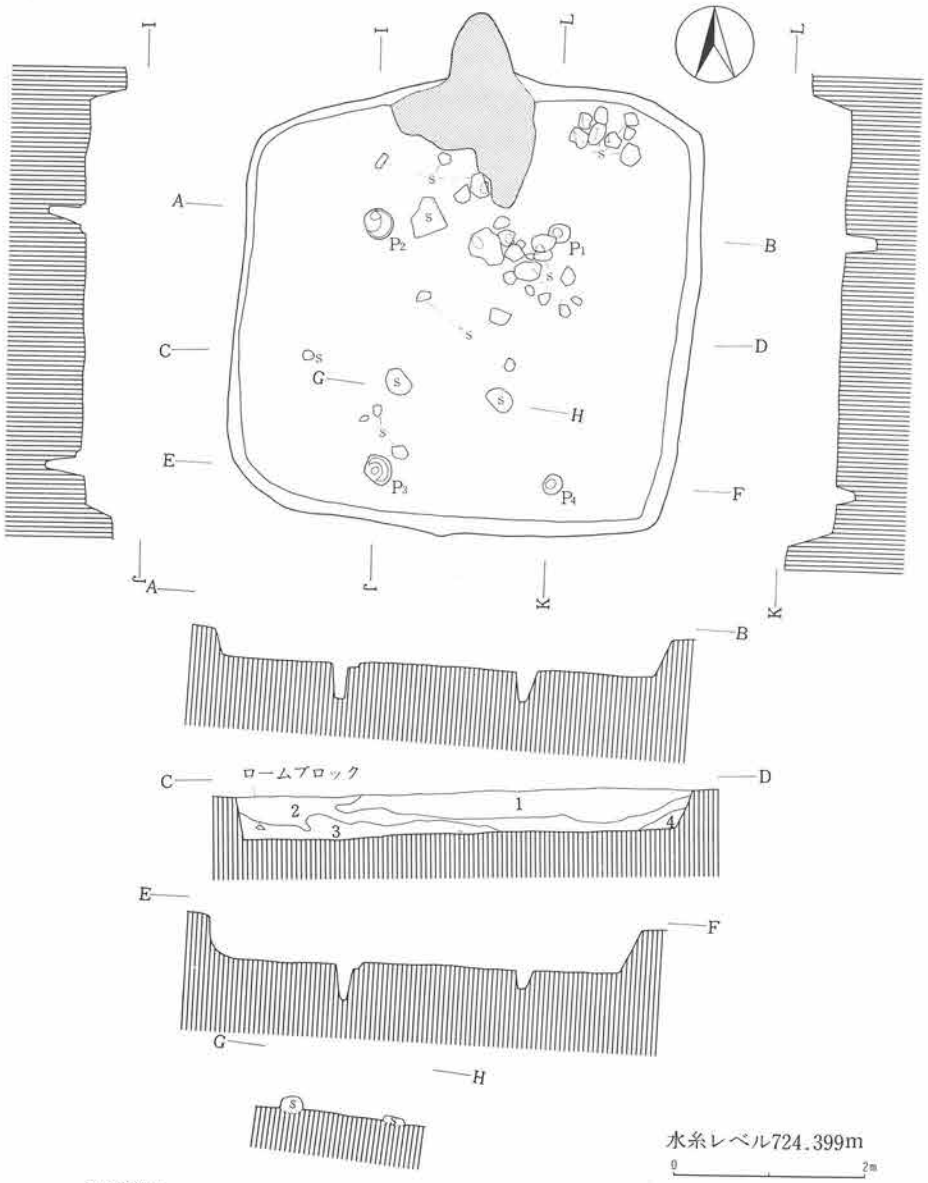
カマドは、北壁ほぼ中央部に位置するが、遺存状態は悪い。

おそらく、小礫を含む黒褐色(10YR2/3)土を袖基部とし、加工した軽石および褐色(10YR4/4)粘土を用いて構築されていたものと思われる。

ピットは、総計４基検出され、主柱穴と考えられる。

周溝は、検出されなかった。

また、第10号住居址と同様に住居址覆土中央部から床面直上にかけて多量の礫が認められた。中には、第84図断面Ｇ－Ｈに示したように住居使用時に設置されていたと考えられる礫も存在していた。



層序説明

第1層　黄褐色土層(10YR5/6)φ0.2～0.5cmのパミスを含み、締っている。粘性はない
第2層　暗褐色土層(10YR3/4)φ0.2～1.0cmのパミスを多く含む。粘性はない
第3層　暗褐色土層(7.5YR3/3)φ0.2～0.5cmのパミスを僅かに含むほか、ロームブロックを含む
第4層　暗褐色土層(10YR3/3)φ0.2～0.5cmのパミスを僅かに含む。粘性はない

第84図　第11号住居址実測図

遺物（第333・376図、図版44・85）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、縄文土器片、炭化材が出土している。このうち、図示したものに土師器甕、黒色土器杯、皿、須恵器杯、軟質須恵器杯がある。黒色土器皿（第333図４）の口辺部外面には「久郷久久伴？菊久□」の墨書が認められる。縄文土器片（第376図９・10）は、中期後半のものであろう。炭化材は、カマド内から出土したもので後述する。

本住居址の所産期は、平安時代に比定される。

12）第12号住居址

遺構（第85図、図版６）

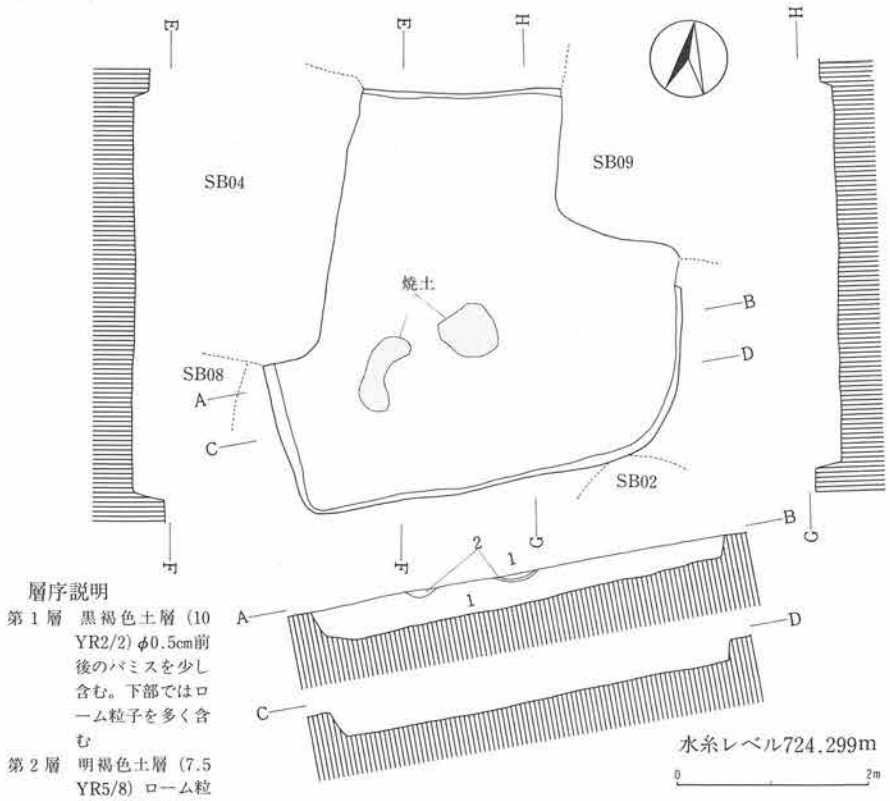
本住居址は、Ａ－１グリッドに位置する。第２・４・８・９号住居址と重複関係を有し、第２・４・８・９号住居址に切られている。

東西450cm、南北420cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。

南北軸の方位は、Ｎ－16.5°－Ｗを示す。住居址覆土は、２層に区分されるが、第１層の黒褐色（10YR2/2）土が大半である。確認面からの壁高は、13～28cmを測る。

住居址ほぼ中央部南寄りで焼土が検出されただけで、カマドについては不明である。

ピット、周溝は検出されなかった。

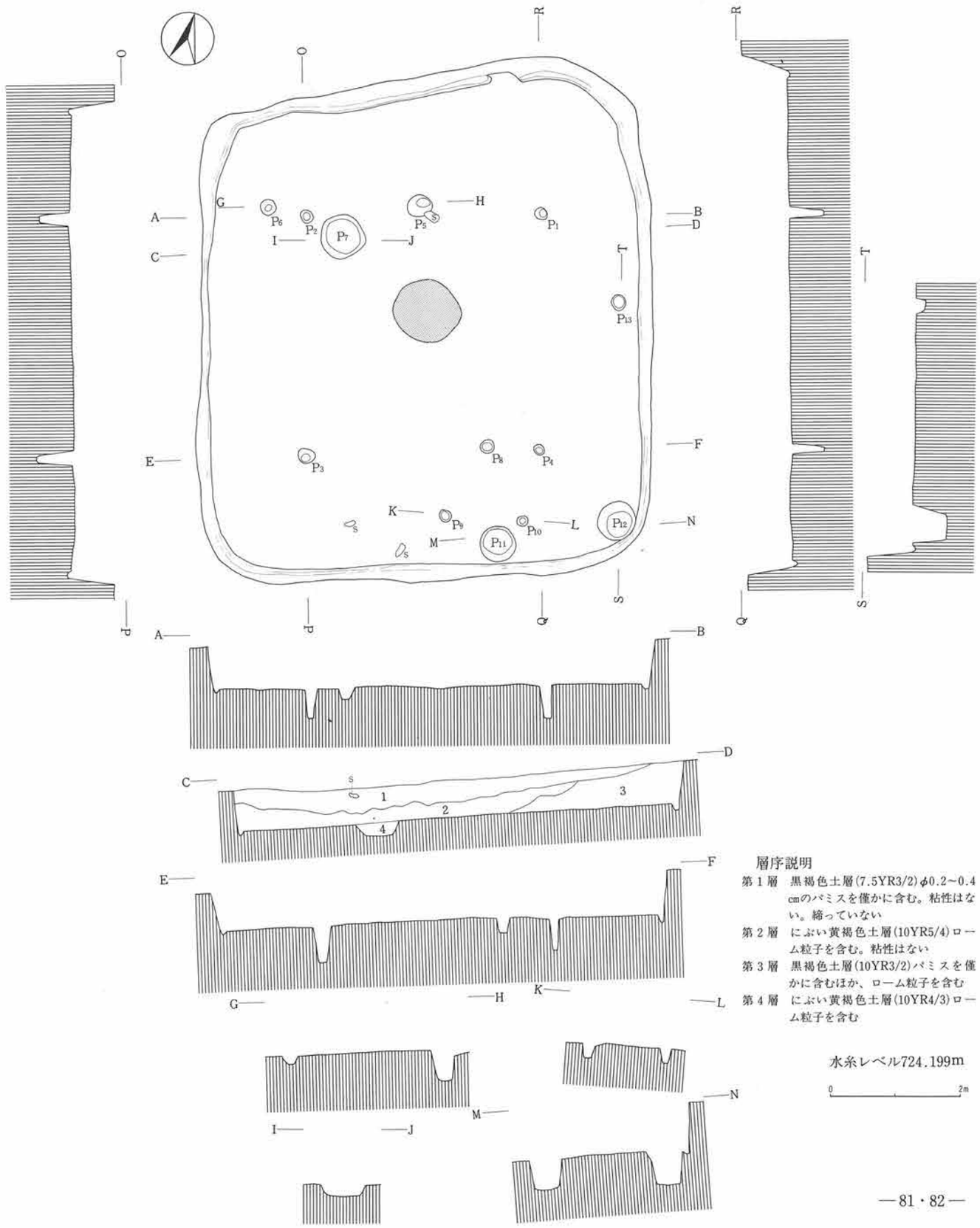


層序説明

第１層　黒褐色土層（10YR2/2）φ0.5cm前後のパミスを少し含む。下部ではローム粒子を多く含む

第２層　明褐色土層（7.5YR5/8）ローム粒子を多く含む

第85図　第12号住居址実測図



層序説明

第１層　黒褐色土層(7.5YR3/2)φ0.2～0.4㎝のパミスを僅かに含む。粘性はない。締っていない

第２層　にぶい黄褐色土層(10YR5/4)ローム粒子を含む。粘性はない

第３層　黒褐色土層(10YR3/2)パミスを僅かに含むほか、ローム粒子を含む

第４層　にぶい黄褐色土層(10YR4/3)ローム粒子を含む

水糸レベル724.199m

0　2m

第86図　第13号住居址実測図

遺物

土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土しているが、図示し得るものはない。

本住居址の所産期は、出土土器片中に「コ」の字状の口辺部を有する土師器甕の破片が認められることから、平安時代に比定しておく。

13）第13号住居址

遺構（第86・87図、図版７）

本住居址は、Ａ－１・２グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

東西699cm、南北772cmを測り、平面プランは、南北にやや長い隅丸長方形を呈する。

南北軸の方位は、Ｎ－16.5°－Ｗを示す。住居址覆土は、４層に区分され、自然堆積と考えられる。

確認面からの壁高は、59～76cmを測る。

炉址は、住居址ほぼ中央部に位置する。床面を浅く掘り窪めた地床炉である。

ピットは総計13基検出された。このうち、P_1～P_5の５基が主柱穴、P_9・P_{10}は出入口部の施設に関連するものであろう。また、P_7・P_{11}・P_{12}は貯蔵穴的な機能をもつものかもしれない。

周溝は、北壁の一部を除き、ほぼ全周する。

遺物（第334・363・370・374・376図、図版45・73・80・82・85）

土師器片、縄文土器片、鉄製品、石製品のほか、鉄滓が住居址覆土から出土している。

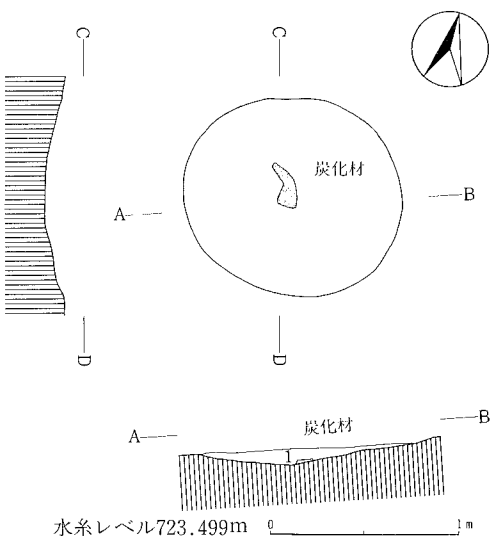
このうち、図示したものに土師器小型器台、高杯、壺、甕、台付甕、縄文土器片、鉄製品、石製品がある。土器では、第334図２・４に示した在地の土器に、小型器台（第334図１）、Ｓ字状口縁台付甕（第334図３）、縄文を施文された壺（第334図５）といった外来系土器が伴出している。

縄文土器（第376図11･12）には、第11号住居址出土土器片に極似したもの（11）と、後期と考えられるもの（13）がある。

鉄製品（第363図５）は、鉄鏃の茎部であろう。

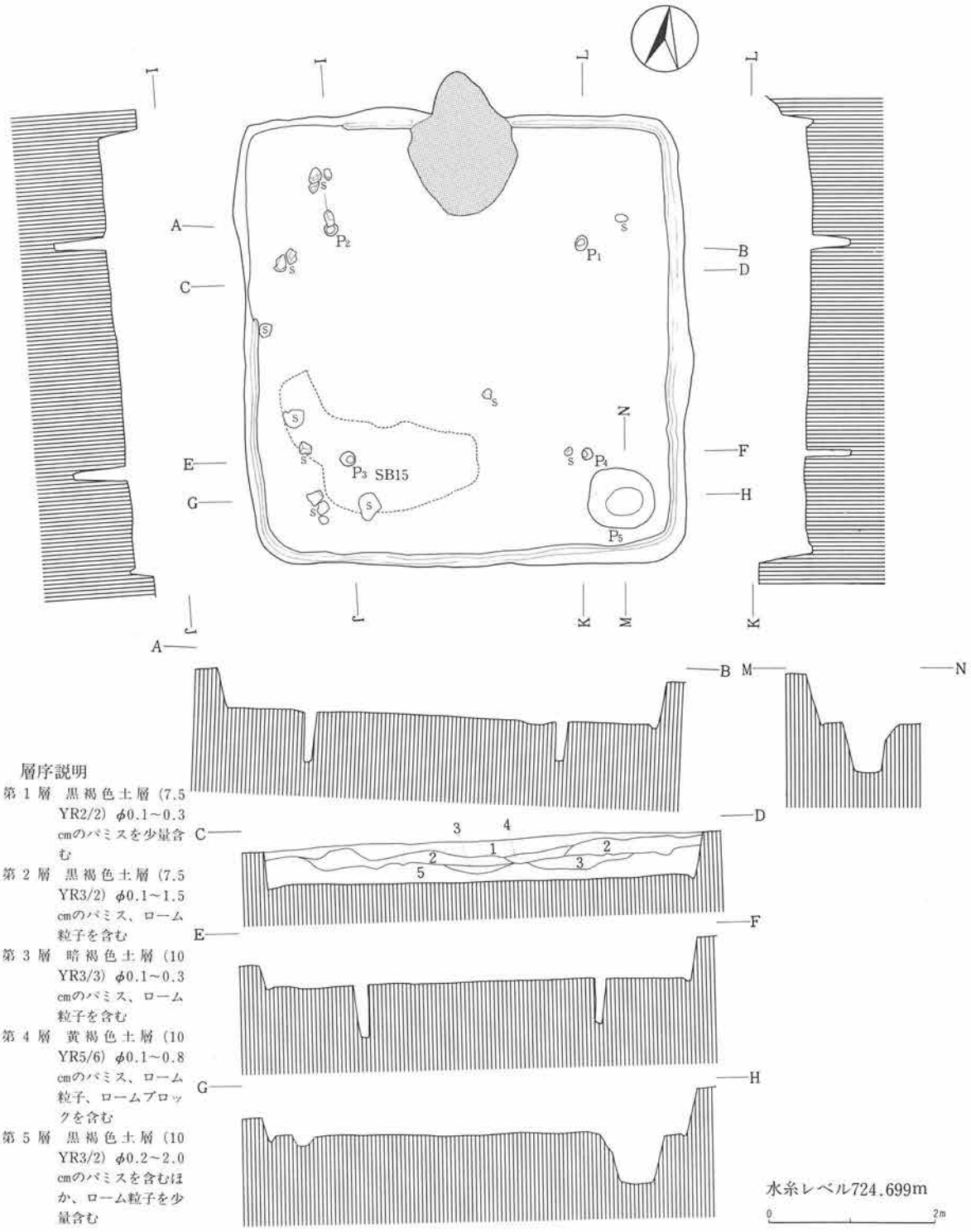
石製品（第370図４）は、凝灰岩製の砥石で重さ219ｇを量るものと砂岩製の大型品がある。

本住居址の所産期は、古墳時代初頭に比定される。



層序説明
第１層　褐色土層（7.5YR4/3）ローム粒子を含む。粘性はない

第87図　第13号住居址炉址実測図



第88図　第14号住居址実測図

14）第14号住居址

遺構（第88・89図、図版７）

本住居址は、Ｂ－２・３グリッドに位置する。

他遺構との重複関係はない。

東西546cm、南北560cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、Ｎ－５°－Ｗを示す。

住居址覆土は、５層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、21～61cmを測る。

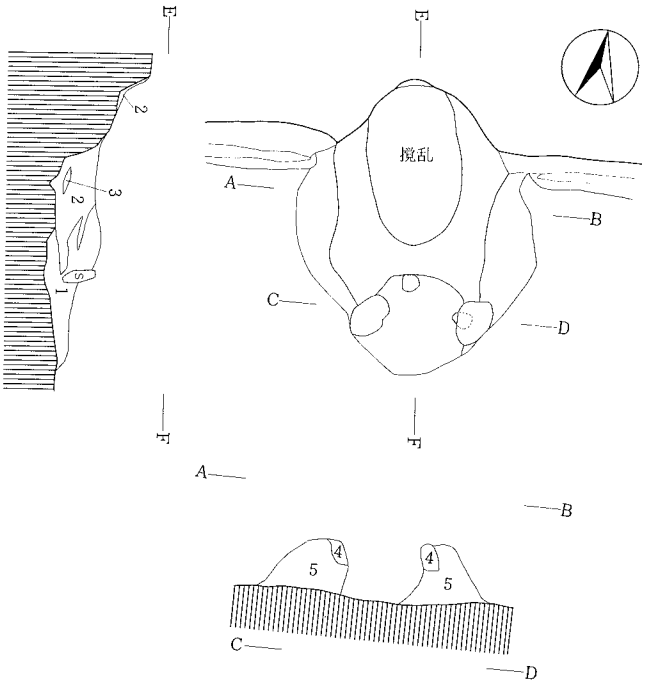
カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。遺存状態は撹乱を受けているが比較的良好であった。

焚口部両袖には加工した軽石を用い、袖部は黒褐色（10YR2/2）土と明褐色（7.5YR5/8）粘土により構築されていた。また、火床部では、軽石製の支脚石が認められた。

ピットは総計５基検出された。

このうち、P_1～P_4が主柱穴、P_5が貯蔵穴と考えられる。

周溝は、カマド部分と北壁西部から西壁北部を除き巡らされていた。



層序説明
第１層　褐色土層(7.5YR4/6)焼土。灰層
第２層　黒褐色土層(10YR2/3)焼土粒子を含む
第３層　褐色土層(10YR4/6)焼土粒子を含む
第４層　明褐色土層(7.5YR5/8)粘土層。火熱を受けている
第５層　黒褐色土層(10YR2/2)φ0.5～1.0cmのパミス、粘土粒子を含み、締っている
第６層　黒褐色土層(10YR3/2)φ0.5cm前後のパミスを含む。埋土

第89図　第14号住居址カマド実測図

遺物（第334・363・367図、図版45・73・77）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、鉄製品、土製品のほか、自然遺物として獣骨が出土している。このうち、図示したものに土師器杯８点、ミニチュア土器１点、鉄製品、土製品各１点がある。土師器杯には、素縁のものと須恵器模倣の２種がある。また、ミニチュア土器は、小型甕を模したものであろう。

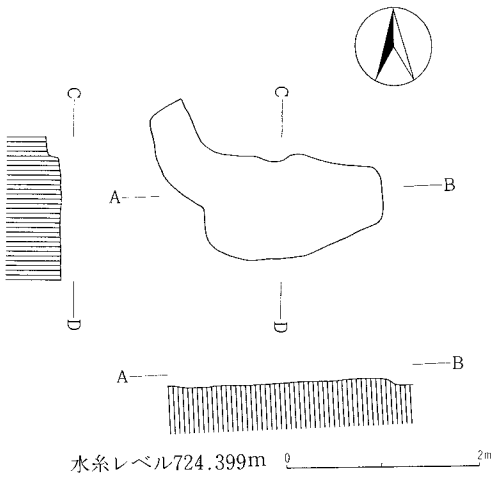
鉄製品（第363図６）は、鉄鏃である。土製品（第367図24）には、丸玉がある。

獣骨は、カマド内と床面から５cm程高いレベルで出土しており、種別については後述する。

本住居址の所産期は、古墳時代後期中葉に比定される。

15）第15号住居址

遺構（第90図）



第90図　第15号住居址実測図

本住居址は、Ｂ－３グリッドに位置する。

第14号住居址と重複関係を有し、第14号住居址を切って構築されている。当初、確認面では第14号住居址との重複関係が把えられず、第14号住居址の掘り下げ途中、非常に堅緻な面が認められたため、住居址床面と考え、その範囲を記録した。したがって、速断し難いが、ここでは、一応、住居址として扱っておく。

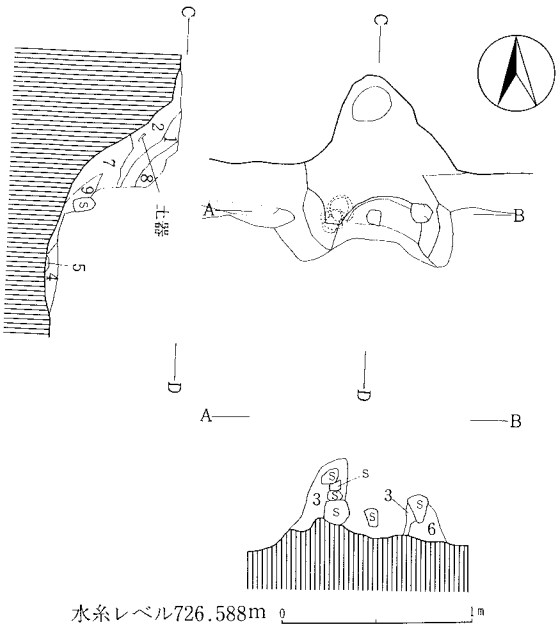
記録し得た部分は、東西約250cm、南北104cmの範囲である。焼土等は検出されなかった。

遺物

出土土器片は、第14号住居址として扱った。したがって、所産期については、第14号住居址との関係から、古墳時代後期中葉以降としておく。

16）第16号住居址

遺構（第91・92図、図版７）



層序説明

第１層　暗褐色土層(10YR3/4)焼土粒子を含む
第２層　褐色土層(7.5YR4/4)粘土粒子を含む
第３層　明黄褐色土層(10YR7/6)粘土層
第４層　褐色土層(10YR4/4)粘土粒子、灰を含む
第５層　橙色土層(7.5YR6/8)焼土層
第６層　暗褐色土層(10YR3/4)パミス、ローム粒子を含む
第７層　褐色土層(10YR4/4)焼土粒子を含む。締っていない
第８層　にぶい黄褐色土層(10YR5/4)パミス、ローム粒子、粘土粒子を含む
第９層　黄褐色土層(10YR5/6)灰層

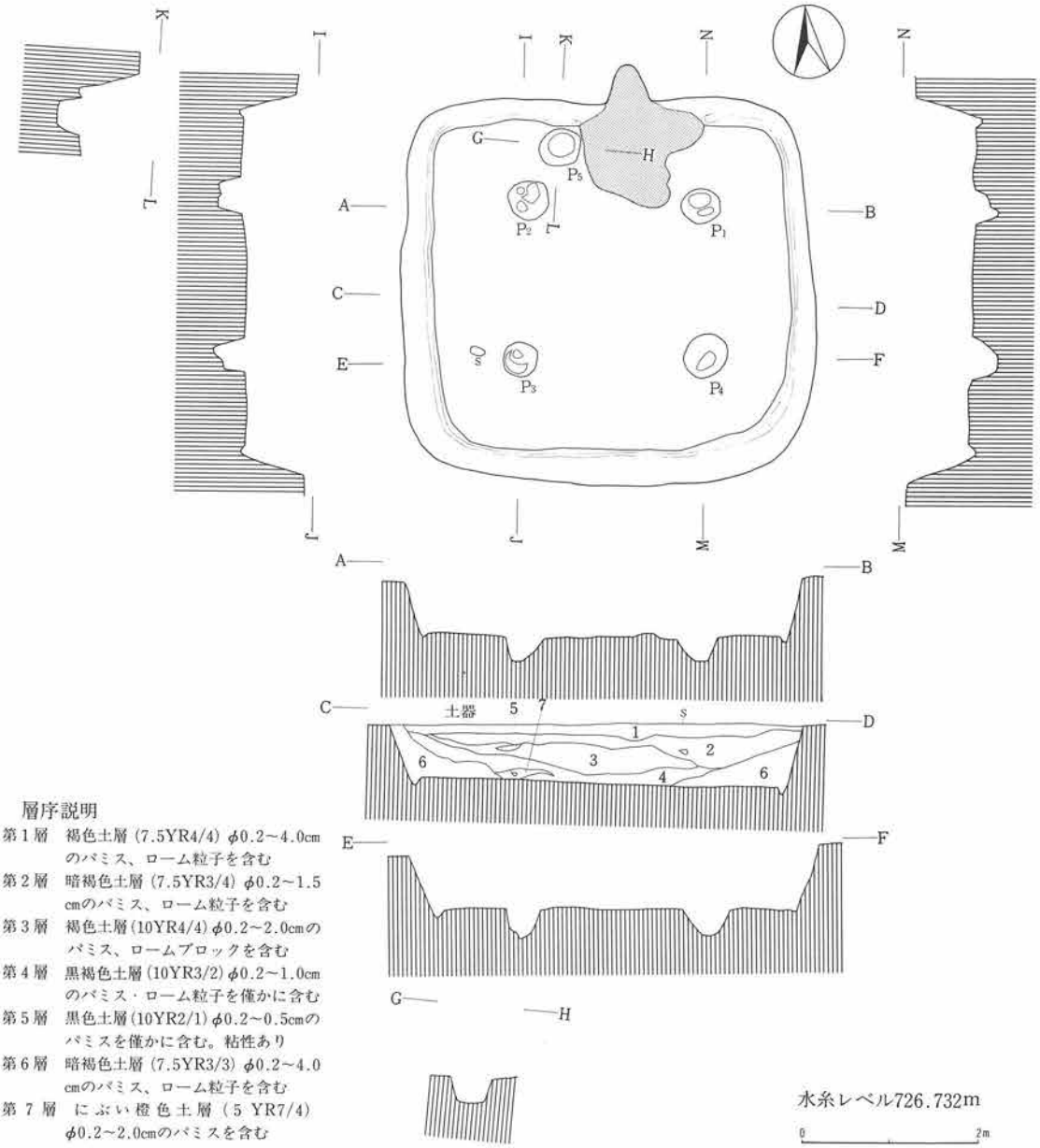
第91図　第16号住居址カマド実測図

本住居址は、Ｅ－４グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

東西467cm、南北438cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、Ｎ－６°－Ｅを示す。住居址覆土は、７層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、57～75cmを測る。

カマドは北壁ほぼ中央部に位置する。暗褐色(10YR3/4)土および軽石を袖芯とし、明黄褐色(10YR7/6) 粘土を用いて構築されていた。



層序説明

第１層　褐色土層（7.5YR4/4）φ0.2～4.0cmのパミス、ローム粒子を含む

第２層　暗褐色土層（7.5YR3/4）φ0.2～1.5cmのパミス、ローム粒子を含む

第３層　褐色土層(10YR4/4)φ0.2～2.0cmのパミス、ロームブロックを含む

第４層　黒褐色土層(10YR3/2)φ0.2～1.0cmのパミス・ローム粒子を僅かに含む

第５層　黒色土層(10YR2/1)φ0.2～0.5cmのパミスを僅かに含む。粘性あり

第６層　暗褐色土層（7.5YR3/3）φ0.2～4.0cmのパミス、ローム粒子を含む

第７層　にぶい橙色土層（5 YR7/4）φ0.2～2.0cmのパミスを含む

第92図　第16号住居址実測図

ピットは総計５基検出された。このうち、P_1～P_4が主柱穴、P_5が貯蔵穴と考えられる。また、周溝は、カマド部分を除き、全周していた。

遺物（第335・377図、図版46・86）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、石製品のほか、自然遺物として獣骨が出土している。このうち、図示したものは土師器杯と砂岩製の打製石斧である。このほか、図示し得なかったが砂質凝灰岩製の砥石の破片も出土している。

本住居址の所産期は、古墳時代後期後半に比定される。

17）第17号住居址

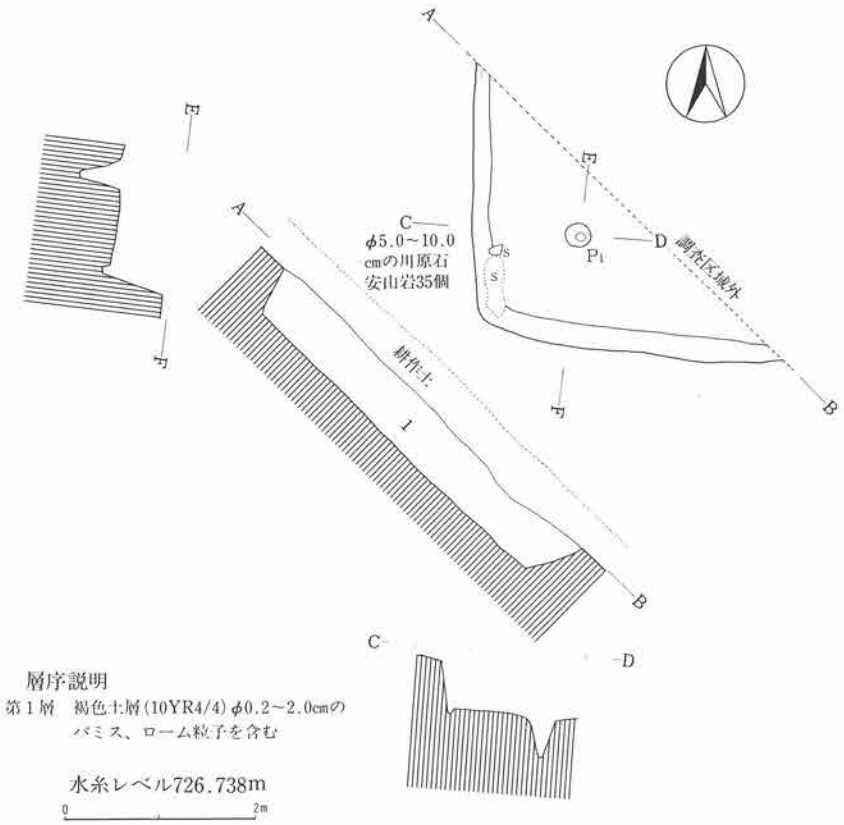
遺構（第93図、図版７）

本住居址は、４－Ｅグリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

大半が調査区域外で、調査し得た範囲では、東西318cm、南北280cmを測る。

住居址覆土は、褐色土により充塡され、確認面からの壁高は、50～63.5cmを測る。

柱穴と考えられるピットが１基検出されたほか、周溝は調査範囲では巡らされていた。



第93図　第17号住居址実測図

また、南東コーナーでは、φ5～10cmの河床礫、安山岩の集石が認められた。

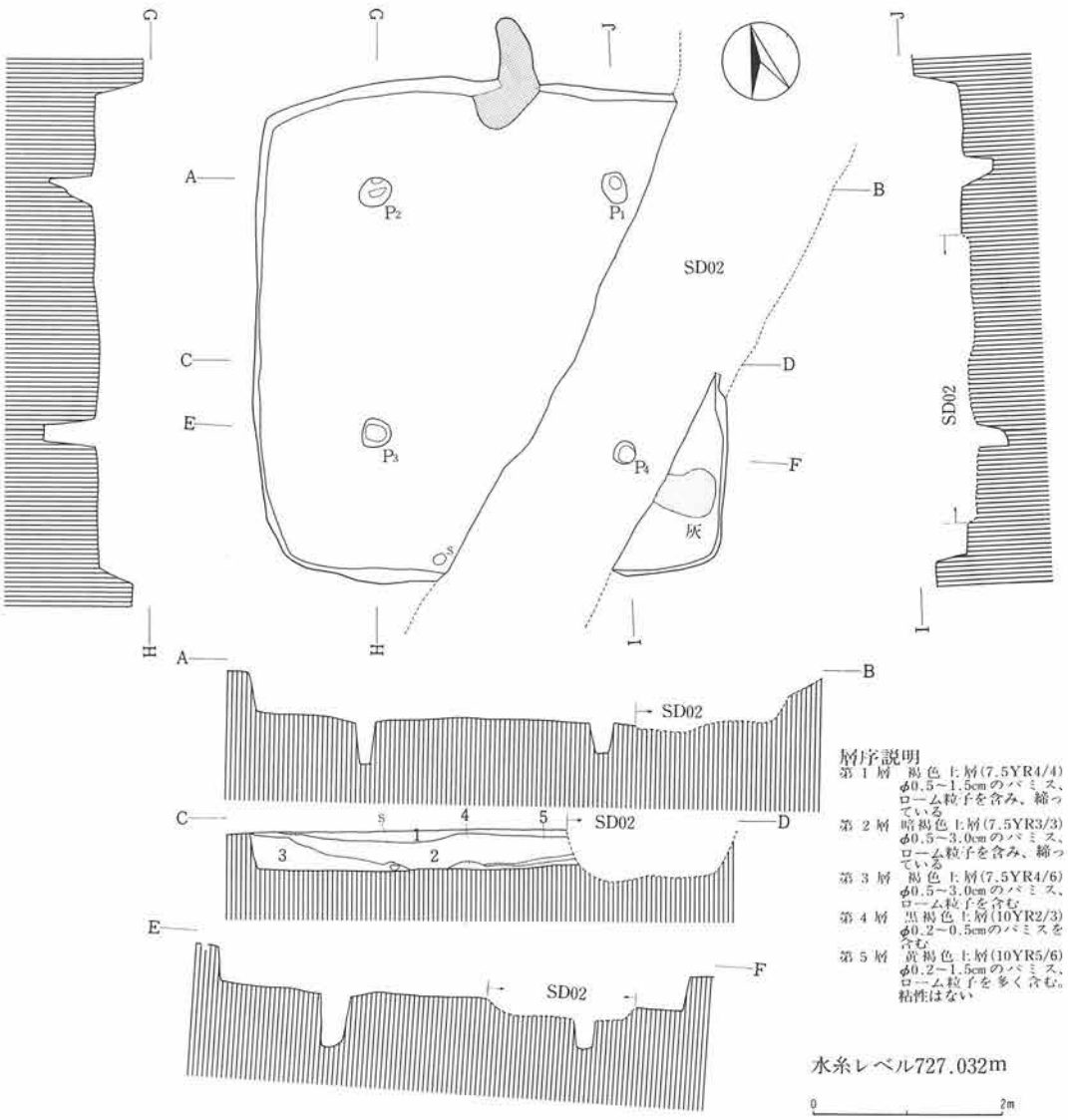
遺物

土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土しているが、図示し得るものはない。

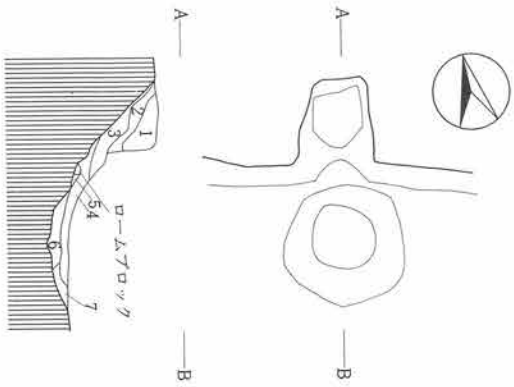
本住居址の所産期は、出土土器片から平安時代に比定される。

18）第18号住居址

遺構（第94・95図、図版7）



第94図　第18号住居址実測図



水糸レベル727.032m

0 1m

層序説明
第1層　褐色土層(7.5YR4/4)φ0.5～1.0cmのパミスを含む
第2層　褐色土層(10YR4/6)粘土層
第3層　暗褐色土層(10YR3/4)ローム粒子、粘土粒子を含む
第4層　にぶい黄橙色土層(10YR6/4)灰層
第5層　暗褐色土層(10YR3/3)炭化物のほか灰を少量含む
第6層　明褐色土層(7.5YR5/8)焼土層
第7層　褐色土層(10YR4/6)焼土粒子を含む

第95図　第18号住居址カマド実測図

本住居址は、E－5グリッドに位置する。

第22・44号住居址、第2号溝址と重複関係を有し、第44号住居址を切り、第22号住居址、第2号溝址に切られている。

東西503cm、南北540cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、N－16°－Eを示す。

住居址覆土は、5層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、31.5～51cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置するが遺存状態は悪い。おそらく、褐色(10YR4/6)粘土を主体として構築されていたものと思われる。

ピットは主柱穴と考えられる4基が検出されたが、周溝は確認されなかった。また、南東コーナーで灰が認められた。

遺物（第370図、図版80）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、石製品が出土している。図示し得たものに磨石がある。「コ」の字状に近い口辺部を有する土師器甕の破片、底部糸切り後外周回転ヘラケズリがなされる須恵器椀の破片が認められることから、本住居址の所産期は奈良時代後半に比定される。

19）第19号住居址

遺構（第96・97図、図版7）

本住居址は、D－4グリッドに位置する。第25号住居址と重複関係を有し、第25号住居址を切って構築されている。

東西476cm、南北503cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、N－10°－Eを示す。住居址覆土は、4層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、30～47cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置するが遺存状態は悪い。おそらく、軽石、安山岩とにぶい黄橙色（10YR7/4）粘土により構築されていたものと思われる。

ピットは総計7基検出された。このうち、P_1～P_3・P_6が主柱穴、P_5は出入口部の施設に関連するものであろう。周溝は検出されなかった。また、カマド部分から南部にかけて軽石などの礫

が認められた。

遺物（第335図、図版46）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、石製品のほか、自然遺物として獣骨が出土している。この

層序説明

第1層　暗褐色土層（7.5YR3/4）
φ0.2～3.0cmのパミスを含む

第2層　褐色土層（7.5YR4/4）
φ0.2～1.0cmのパミスを含み、ローム粒子を少量含む

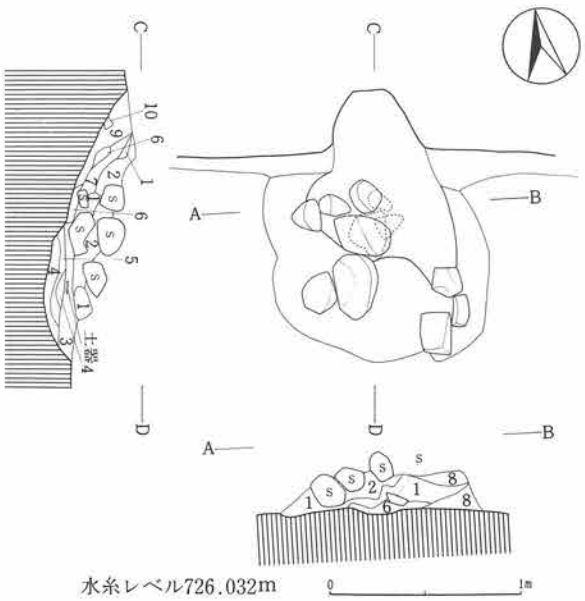
第3層　褐色土層（7.5YR4/6）
φ0.2～1.0cmのパミス、ローム粒子を含む

第4層　黒褐色土層（7.5YR3/2）
φ0.2～2.0cmのパミスを含み、締っている

第96図　第19号住居址実測図

うち、図示したものに須恵器蓋、短頸壺、黒色土器椀がある。

本住居址の所産期は、平安時代に比定される。

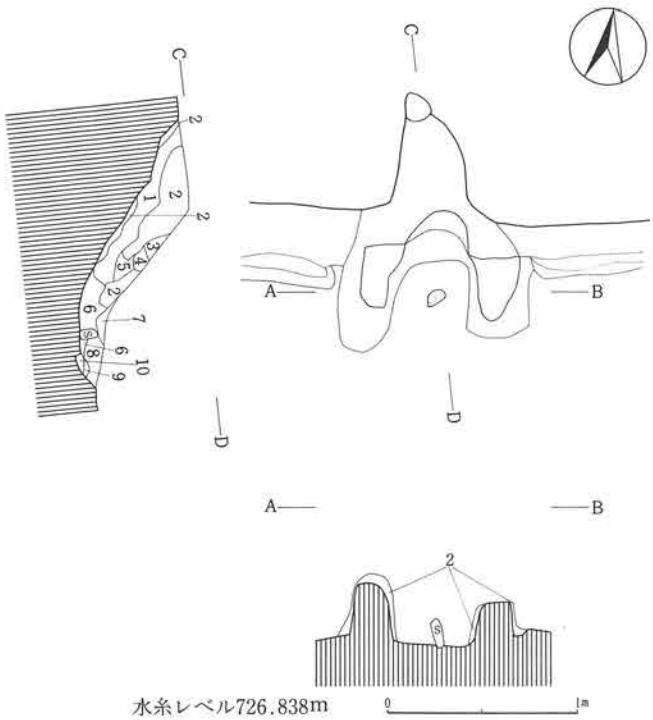


層序説明
第1層　にぶい黄橙色土層(10YR7/4)粘土層
第2層　暗褐色土層(10YR3/4)パミスを含まない。締っている
第3層　暗褐色土層(7.5YR3/4)灰、炭化物層
第4層　橙色土層(7.5YR6/8)焼土層
第5層　明褐色土層(7.5YR5/6)灰層
第6層　黄褐色土層(10YR5/6)ローム粒子、粘土粒子を含む
第7層　暗褐色土層(10YR3/4)炭化物を含む
第8層　褐色土層(10YR4/4)パミス、粘土粒子のほか、僅かに炭を含む
第9層　暗褐色土層(10YR3/3)パミスを含む
第10層　暗褐色土層(10YR3/4)粘土

第97図　第19号住居址カマド実測図

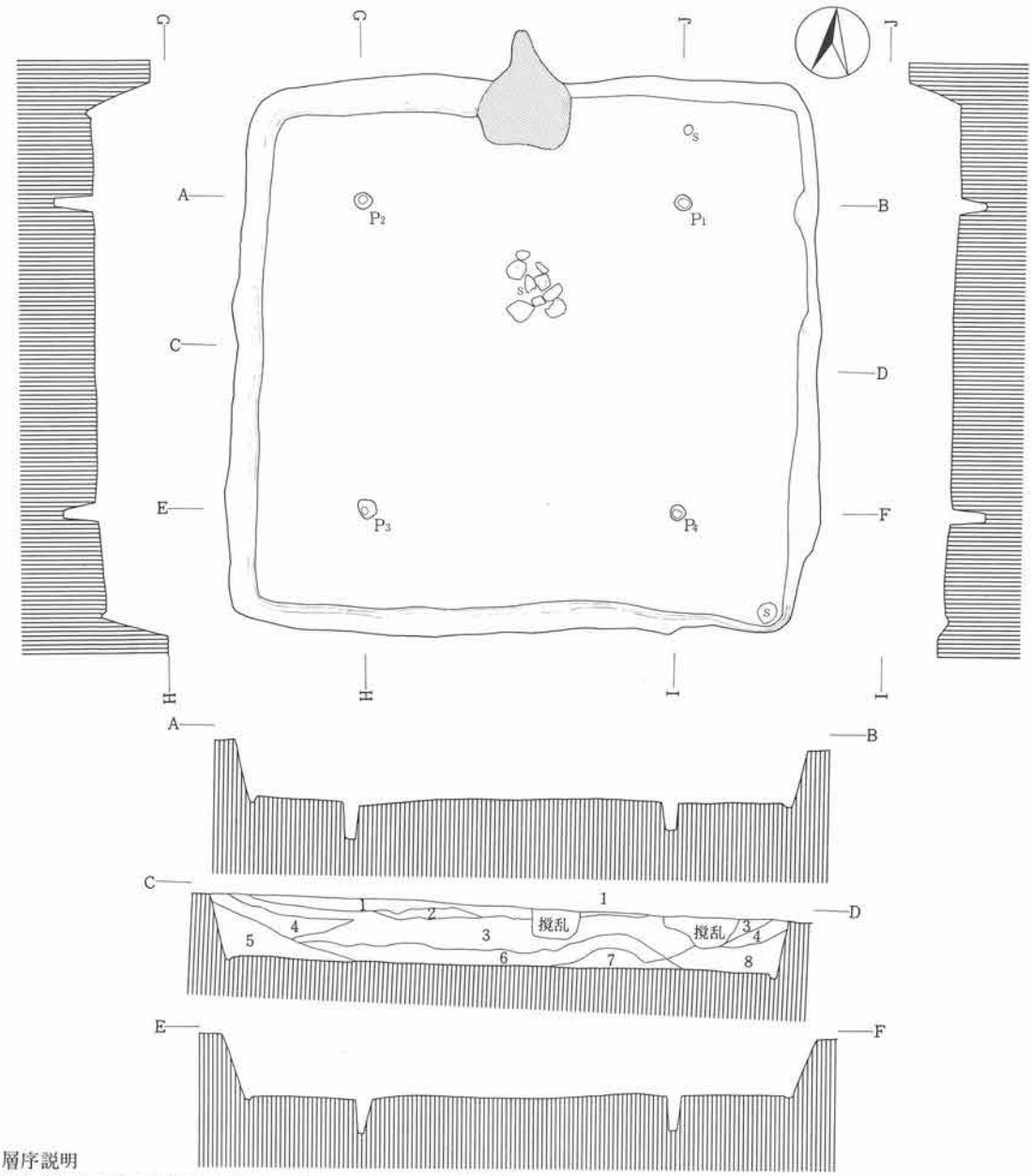
20）第20号住居址

遺構（第98・99図、図版7）



層序説明
第1層　黒褐色土層(10YR2/3)焼土粒子を含む
第2層　にぶい黄褐色土層(10YR5/4)粘土層
第3層　褐色土層(10YR4/4)φ0.5cm前後のパミスを含む
第4層　褐色土層(7.5YR4/4)パミス、ローム粒子、炭を含む
第5層　暗褐色土層(10YR3/4)焼土粒子を含む
第6層　暗褐色土層(10YR3/4)灰層。締っていない
第7層　赤褐色土層(5YR4/8)焼土層
第8層　暗褐色土層(10YR3/3)焼土粒子、灰を含む
第9層　黄褐色土層(10YR5/6)灰層。締っていない
第10層　にぶい黄橙色土層(10YR7/3)灰層。締っていない

第98図　第20号住居址カマド実測図



層序説明

第1層　暗褐色土層（7.5YR3/3）φ0.1～0.5cmのパミス、ローム粒子を含む
第2層　にぶい橙色土層（7.5YR6/4）φ0.2～2.5cmのパミス、ローム粒子を含み、締っている
第3層　にぶい黄褐色土層（10YR5/4）φ0.2～3.0cmのパミス、褐色土ブロック、ローム粒子を多く含む
第4層　暗褐色土層（10YR3/4）φ0.2～2.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第5層　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）φ0.2～1.0cmのパミス、ローム粒子を含む。締っていない
第6層　黒褐色土層（10YR2/3）φ0.2～1.5cmのパミス、ローム粒子を含む
第7層　黄褐色土層（10YR5/6）φ0.2～0.8cmのパミスを僅かに含み、ローム粒子を多く含む
第8層　褐色土層（7.5YR4/3）φ0.2～0.8cmのパミス、黒色土ブロック、ローム粒子を含む

水糸レベル726.932m

0　2m

第99図　第20号住居址実測図

本住居址は、E－4・5グリッドに位置する。第22号住居址、第2号溝址と重複関係を有し、第22号住居址、第2号溝址に切られている。

東西660cm、南北630cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、N－6°－Wを示す。住居址覆土は、8層に区分される。確認面からの壁高は、57.5～74cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。遺存状態は比較的良好で、袖部は地山を掘り残して芯とし、にぶい黄褐色(10YR5/4)粘土により構築されていた。また、火床部では、加工した軽石製の支脚石が認められた。

ピットは主柱穴4基が検出された。周溝は、カマド部分から東壁北側を除く範囲で認められた。

遺物（第335図、図版46）

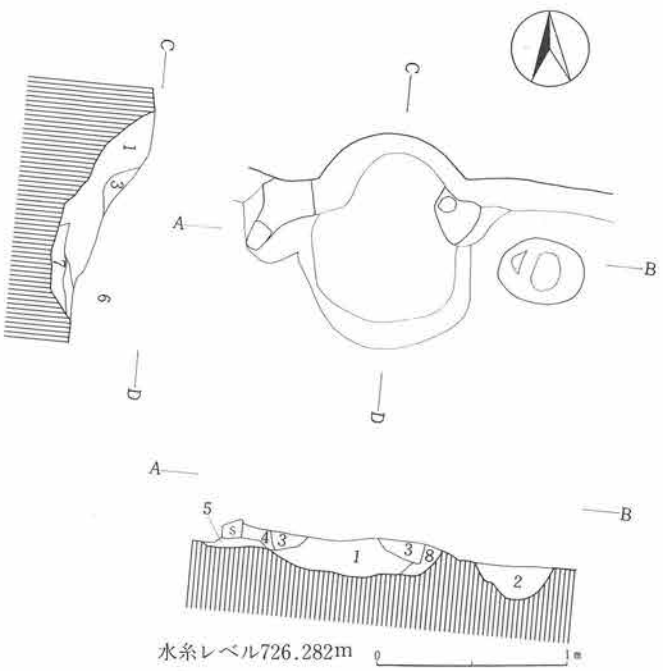
土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土している。このうち、図示したものに土師器杯1点、甕3点、須恵器杯1点がある。

本住居址の所産期は、古墳時代後期後半に位置する。

21）第21号住居址

遺構（第100・101図、図版7）

本住居址は、D・E－4グリッドに位置する。第23・25号住居址と重複関係を有し、第23・25



層序説明
第1層　暗褐色土層(10YR3/4)φ0.5cmのパミスを少量含むほか、焼土粒子を含む
第2層　暗褐色土層(10YR3/3)焼土粒子、炭化物を含む
第3層　黒褐色土層(10YR2/3)φ0.5～1.0cmのパミスを含む。締っていない
第4層　暗褐色土層(10YR3/3)粘土層
第5層　暗褐色土層(10YR3/4)粘土粒子、灰を含む。締っていない
第6層　橙色土層(7.5YR6/6)灰層
第7層　明褐色土層(7.5YR5/8)焼土層
第8層　暗褐色土層(10YR3/4)φ0.5cmのパミス、焼土粒子を含む

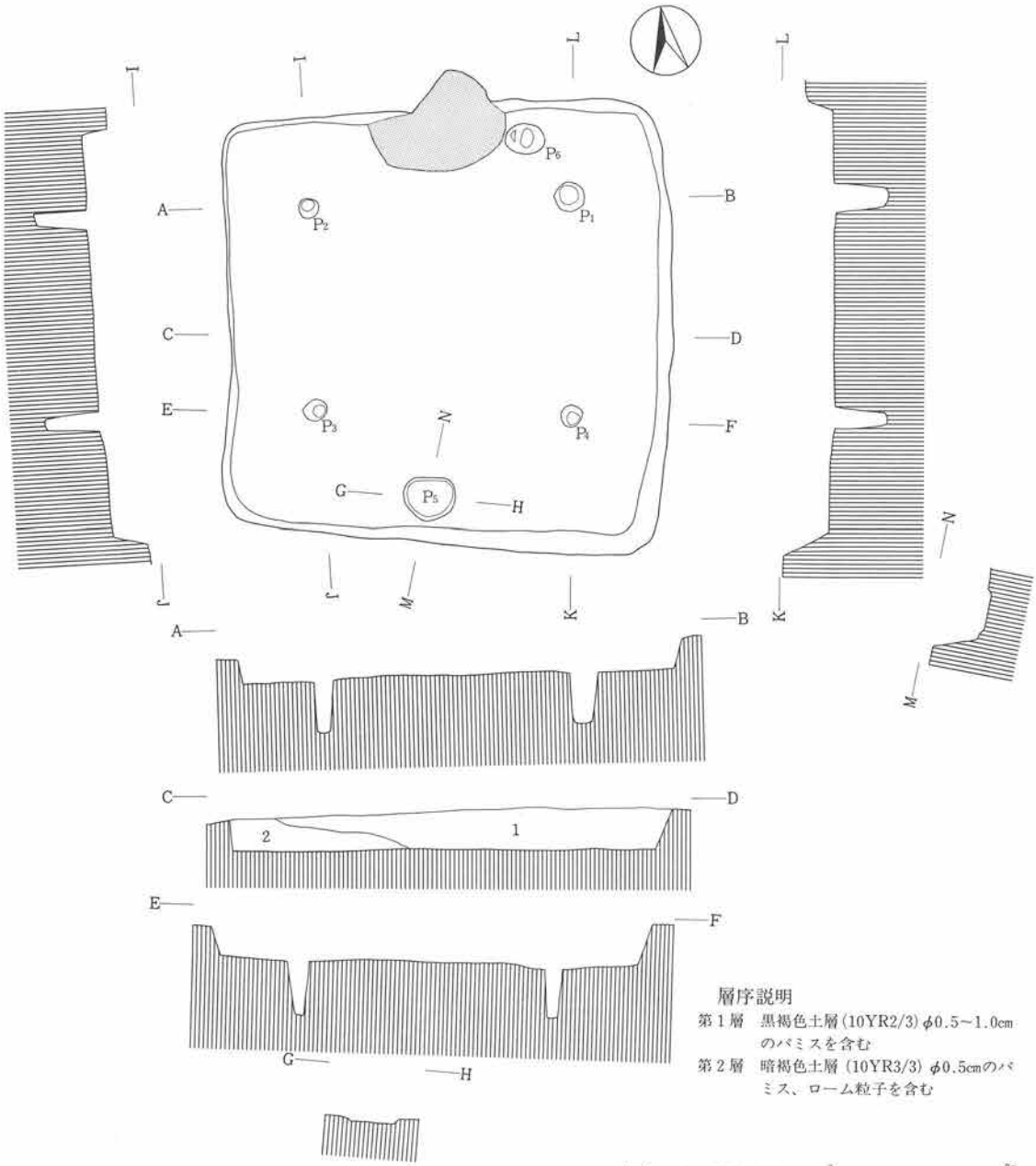
第100図　第21号住居址カマド実測図

号住居址を切って構築されている。

東西512cm、南北498cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、N－6.5°－Eを示す。住居址覆土は、2層に区分される。確認面からの壁高は、28～54cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置するが、遺存状態は悪い。おそらく、加工した軽石を袖部芯



第101図　第21号住居址実測図

とし、暗褐色（10YR3/3）粘土により構築されていたものと思われる。

ピットは総計6基検出された。このうち、P_1～P_4が主柱穴、P_6が貯蔵穴、P_5は出入口部の施設に関連するものであろう。なお、周溝は検出されなかった。

遺物（第335・363・374図、図版46・73・83）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、鉄製品、石製品のほか、自然遺物として南部から炭化種子が出土している。このうち、図示したものに須恵器蓋、甕、鉄製品として鎌(第363図7)、石製品として砂岩製の砥石がある。

なお、炭化種子については後述する。

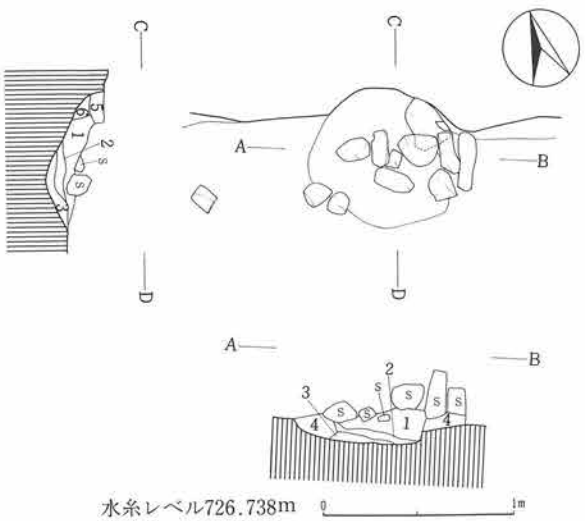
本住居址の所産期は、須恵器杯底部破片に糸切りと糸切り後外周へラケズリされる2種があること、「コ」の字状に近い口辺部を有する土師器甕の破片が認められることから、奈良時代後半に比定される。

22）第22号住居址

遺構（第102・103図、図版8）

本住居址は、E－5グリッドに位置する。第18・31号住居址、第2号溝址と重複関係を有し、第18・31号住居址を切り、第2号溝址に切られている。

東西427cm、南北398cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。



層序説明
第1層　暗褐色土層（10YR3/4）粘土粒子、焼土粒子、灰を含む
第2層　褐色土層（10YR4/4）灰層
第3層　赤褐色土層（5YR4/8）焼土層
第4層　暗褐色土層（10YR3/3）粘土粒子を含む
第5層　黄褐色土層（10YR5/6）地山に相似。黒色土粒子を含む。
第6層　暗褐色土層（10YR3/4）パミス、ローム粒子を含む
※Sは全て軽石

第102図　第22号住居址カマド実測図

カマドを中心とする主軸方位は、N－12°－Eを示す。住居址覆土は、8層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は46～63cmを測る。

カマドは、北壁東寄りに位置する。

暗褐色（10YR3/3）土を袖基部とし、加工した軽石を主体に構築されていたと考えられる。

ピットは総計7基検出された。このうち、P_1～P_4が主柱穴、P_5～P_7は出入口部の施設に関連するものであろう。

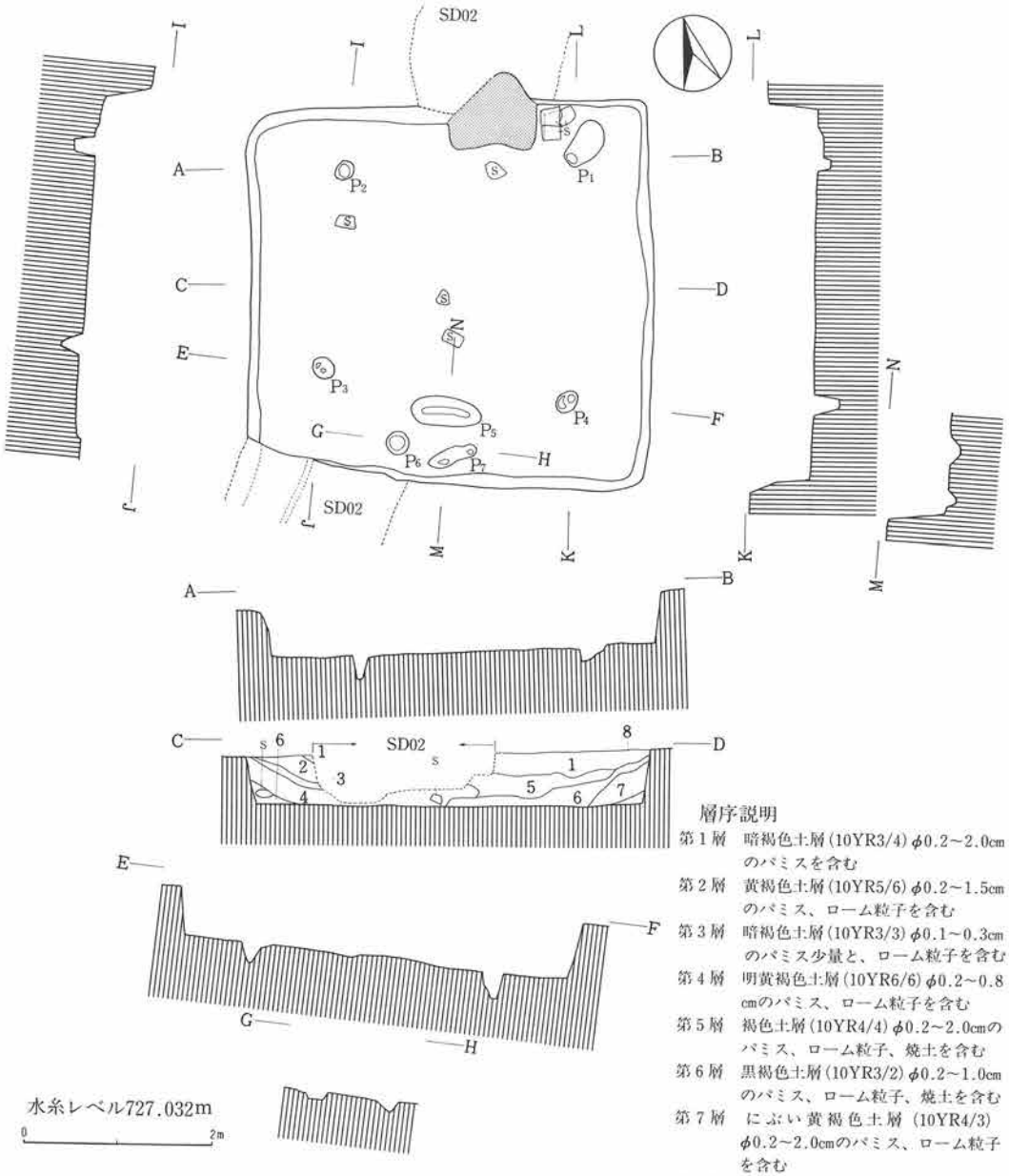
なお、周溝は検出されなかった。

遺物（第335・363・374・376・377図、図版46・73・83・85・86）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、

縄文土器片、鉄製品、石製品、獣骨が出土している。このうち、図示したものに黒色土器皿、椀、土師器甕、鉄製品として刀子、石製品として石臼と砂岩製のピエスエスキーユ、縄文土器片がある。

本住居址の所産期は、平安時代に比定される。



層序説明

第1層　暗褐色土層(10YR3/4)φ0.2～2.0cmのパミスを含む

第2層　黄褐色土層(10YR5/6)φ0.2～1.5cmのパミス、ローム粒子を含む

第3層　暗褐色土層(10YR3/3)φ0.1～0.3cmのパミス少量と、ローム粒子を含む

第4層　明黄褐色土層(10YR6/6)φ0.2～0.8cmのパミス、ローム粒子を含む

第5層　褐色土層(10YR4/4)φ0.2～2.0cmのパミス、ローム粒子、焼土を含む

第6層　黒褐色土層(10YR3/2)φ0.2～1.0cmのパミス、ローム粒子、焼土を含む

第7層　にぶい黄褐色土層(10YR4/3)φ0.2～2.0cmのパミス、ローム粒子を含む

第8層　黒褐色土層(7.5YR3/2)φ0.2～1.0cmのパミス、ローム粒子を含む

第103図　第22号住居址実測図

23）第23号住居址

遺構（第104・105図、図版８）

本住居址は、Ｄ・Ｅ－４グリッドに位置する。第21号住居址と重複関係を有し、第21号住居址に切られている。

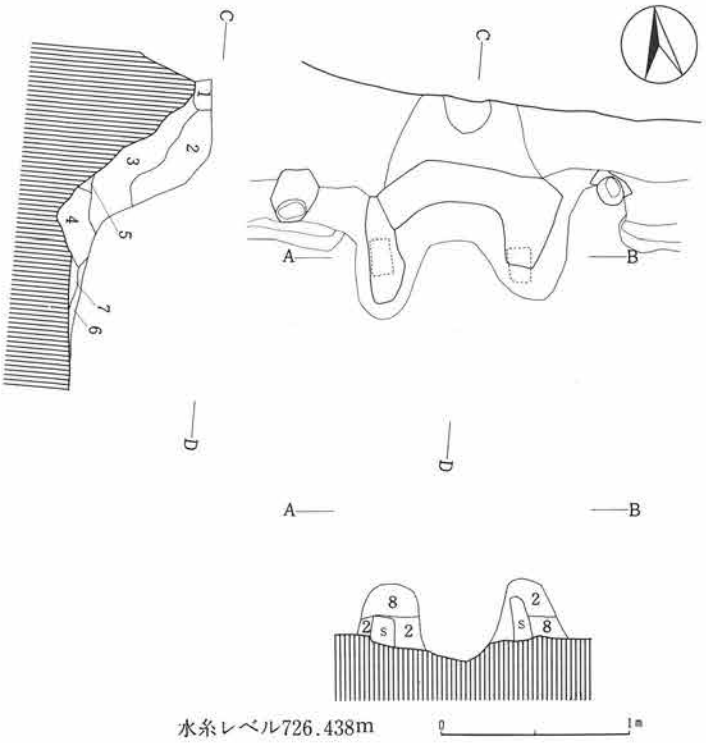
東西572cm、南北560cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、Ｎ－11°－Ｅを示す。住居址覆土は、６層に区分される。

確認面からの壁高は、59～96cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。遺存状態は比較的良好であった。袖部芯には加工した軽石を用い、にぶい黄橙色（10YR6/4）粘土および褐色（10YR4/4）土により構築されていた。

ピットは総計８基検出された。このうち、P_1～P_4が主柱穴、P_6が貯蔵穴、P_5が出入口部の施設に関連するものであろう。また、周溝はカマド部分、南東コーナーを除く範囲で検出された。



層序説明
第１層　褐色土層(10YR4/4)φ0.5cm前後のパミス、粘土粒子を含む
第２層　にぶい黄橙色土層(10YR6/4)粘土層
第３層　褐色土層(7.5YR4/4)粘土粒子、焼土粒子を含む。締っていない
第４層　褐色土層(7.5YR4/6)焼土粒子を多量に含むほか、灰を含む
第５層　明黄褐色土層(10YR6/6)地山に相似するが、締っていない
第６層　にぶい黄褐色土層(10YR5/4)焼土粒子、灰を含む
第７層　にぶい黄橙色土層(10YR7/4)灰層
第８層　褐色土層(10YR4/4)パミス、粘土粒子を含む

第104図　第23号住居址カマド実測図

遺物（第336・367図、図版47・77）

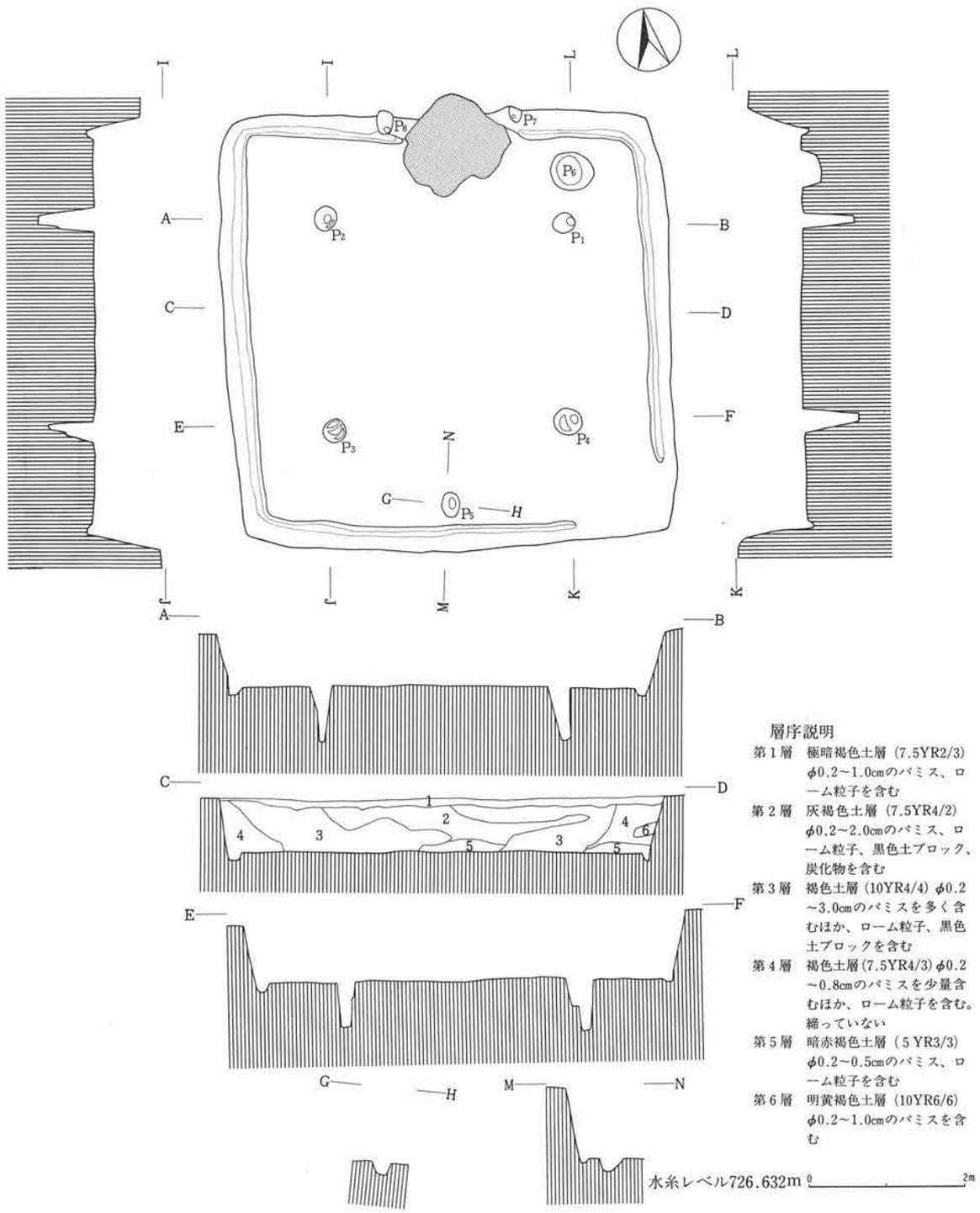
土師器片、黒色土器片、須恵器片、青銅製品、石製品が出土している。

このうち、図示したものに黒色土器杯、須恵器杯、円面硯のほか、青銅製品、石製品がある。円面硯は、復原実測したもので第１号土坑出土のものに胎土・文様とも相似する。

青銅製品のうち、第367図16は足金具、17はカマド袖部内から出土したもので刀装具の一部と考えられる。

石製品（第367図25）は、碧玉製の管玉である。

本住居址の所産期は、奈良時代前半に比定される。



層序説明

第1層　極暗褐色土層（7.5YR2/3）φ0.2～1.0cmのパミス、ローム粒子を含む

第2層　灰褐色土層（7.5YR4/2）φ0.2～2.0cmのパミス、ローム粒子、黒色土ブロック、炭化物を含む

第3層　褐色土層（10YR4/4）φ0.2～3.0cmのパミスを多く含むほか、ローム粒子、黒色土ブロックを含む

第4層　褐色土層（7.5YR4/3）φ0.2～0.8cmのパミスを少量含むほか、ローム粒子を含む。締っていない

第5層　暗赤褐色土層（5YR3/3）φ0.2～0.5cmのパミス、ローム粒子を含む

第6層　明黄褐色土層（10YR6/6）φ0.2～1.0cmのパミスを含む

第105図　第23号住居址実測図

24）第24号住居址

遺構（第106・107図、図版８）

本住居址は、Ｅ－４・５グリッドに位置する。第39号住居址、第２号溝址と重複関係を有し、第39号住居址を切り、第２号溝址に切られている。

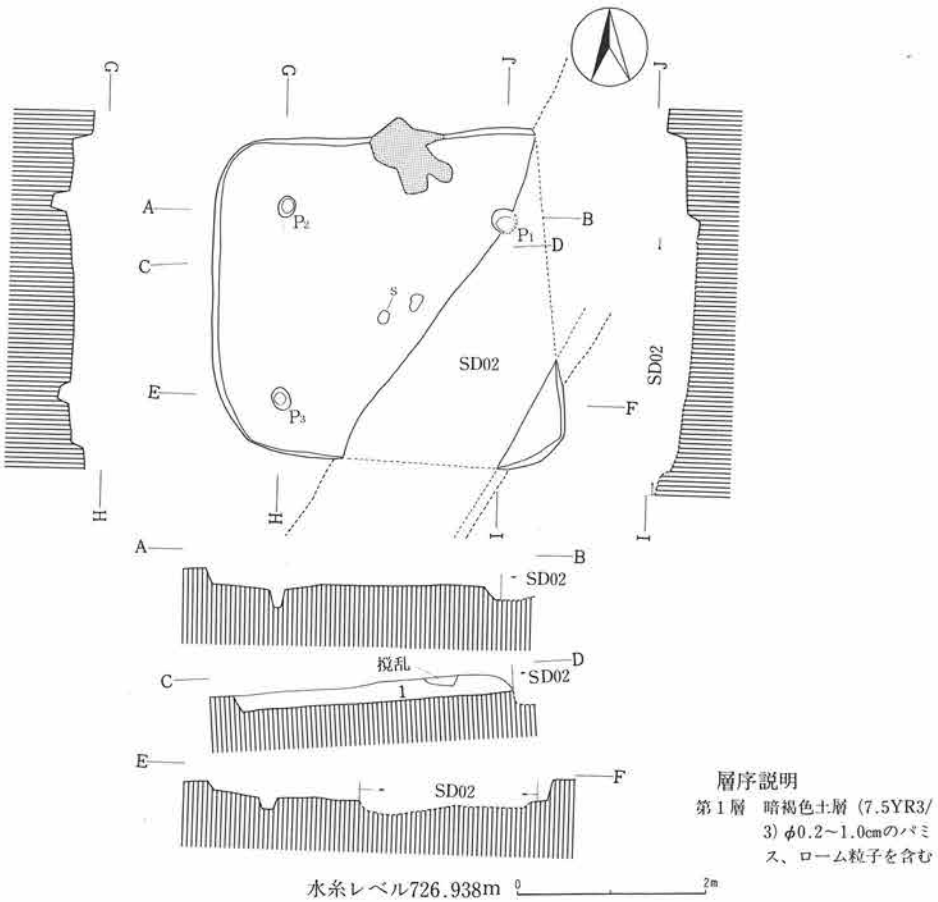
東西372cm、南北340cmを測り、平面プランは、やや不整な隅丸方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、Ｎ－６°－Ｅを示す。住居址覆土は、一部撹乱を受けるが、暗褐色土により充塡されていた。確認面からの壁高は、10～21cmを測る。

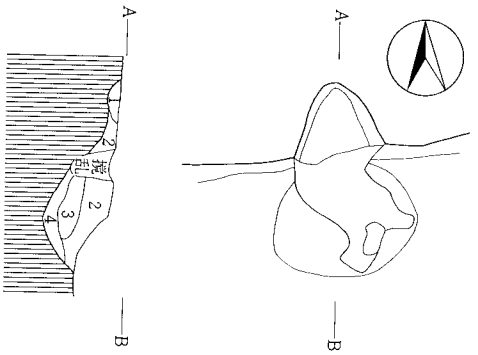
カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。撹乱を受けていることもあり、遺存状態は悪い。おそらく、軽石と粘土により構築されていたものと思われる。

ピットは主柱穴と考えられる３基が検出された。おそらく、４基存在したものと思われるが、南東部は第２号溝址に切られているため不明である。

なお、周溝は検出されなかった。



第106図　第24号住居址実測図



水糸レベル726.838m　0　1m

層序説明
第1層　黒褐色土層(10YR2/3)粘土粒子
第2層　褐色土層(10YR4/4)φ0.5cmのパミス、粘土粒子を含む。堅く締っている
第3層　黒褐色土層(10YR2/3)焼土粒子を含む
第4層　明褐色土層(7.5YR5/6)焼土層

第107図　第24号住居址カマド実測図

遺物（第336図、図版47）

土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土している。黒色土器片には、内外面黒色処理したものも認められる。

図示し得たものは、底部糸切り未調整の須恵器杯1点である。

本住居址の所産期は、平安時代に比定される。

25）第25号住居址

遺構（第108図、図版8）

本住居址は、D・E－4グリッドに位置する。第19・21・28・30号住居址と重複関係を有し、第28・30号住居址を切り、第19・21号住居址に切られている。

東西702cm、南北690cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。

南北軸の方位は、N－9°－Eを示す。住居址覆土は、8層に区分される。確認面からの壁高は、54～78cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に設置されていたものと思われるが、痕跡をとどめていなかった。

ピットは総計8基検出された。このうち、P_1～P_4が主柱穴、P_8は出入口部の施設に関連するものであろう。周溝は、北壁中央部を除く範囲において認められた。

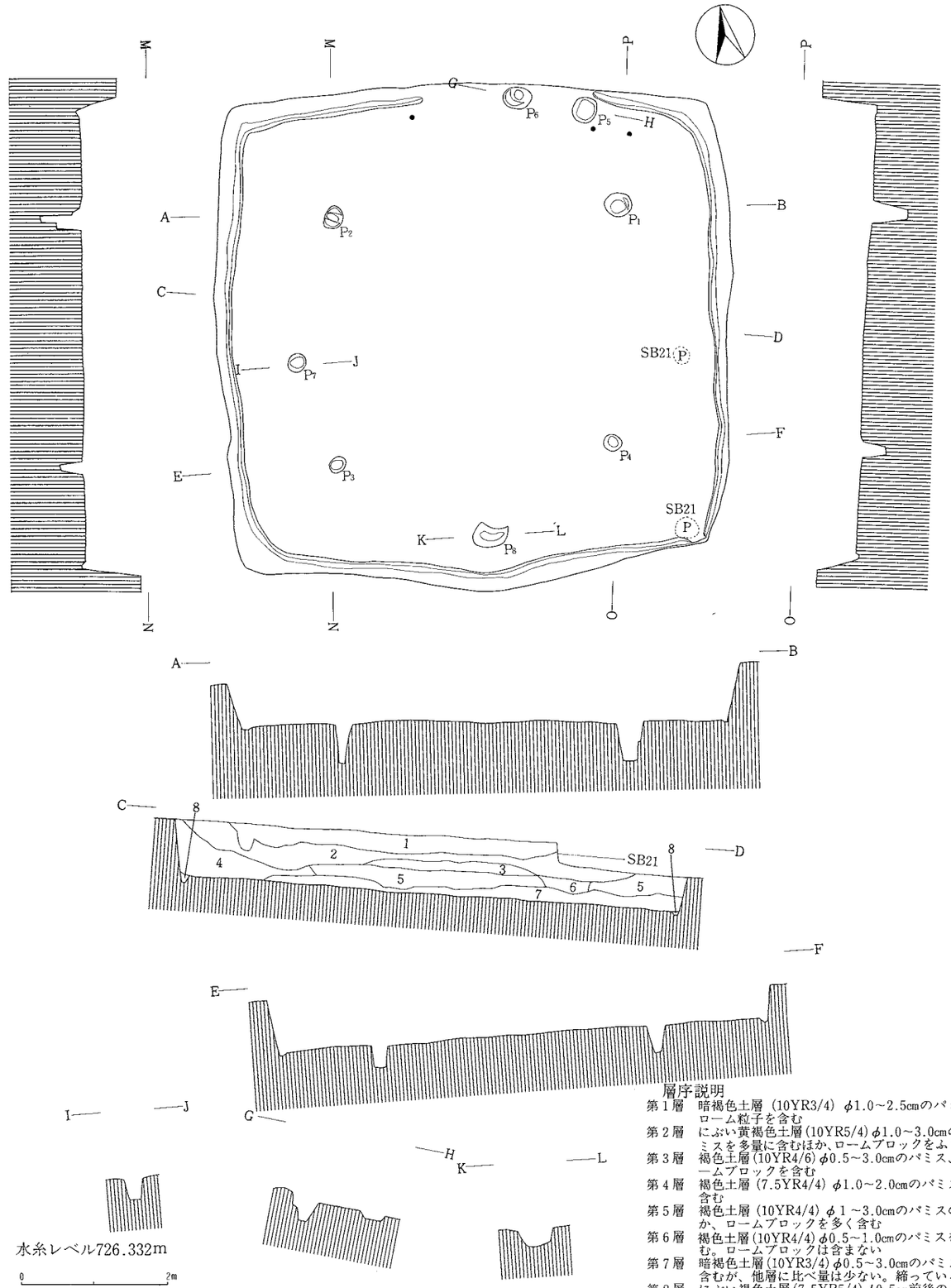
遺物（第336・363・368図、図版47・73・78）

土師器片、須恵器片、鉄製品、石製品、鉄滓が出土している。このうち、図示したものに土師器長胴甕・小型甕壺、須恵器椀各1点、鉄製品3点、石製品2点がある。土師器小型甕は、器形、調整、胎土ともに在地の土器と異なっている。

鉄製品（第363図）には、鉄鏃（9・10）と轡の一部と考えられる環状のもの（11）がある。

石製品（第368図2・4）は、軽石製の紡錘車で、重さ102、188gを量る。

本住居址の所産期は、奈良時代前半に比定される。



層序説明

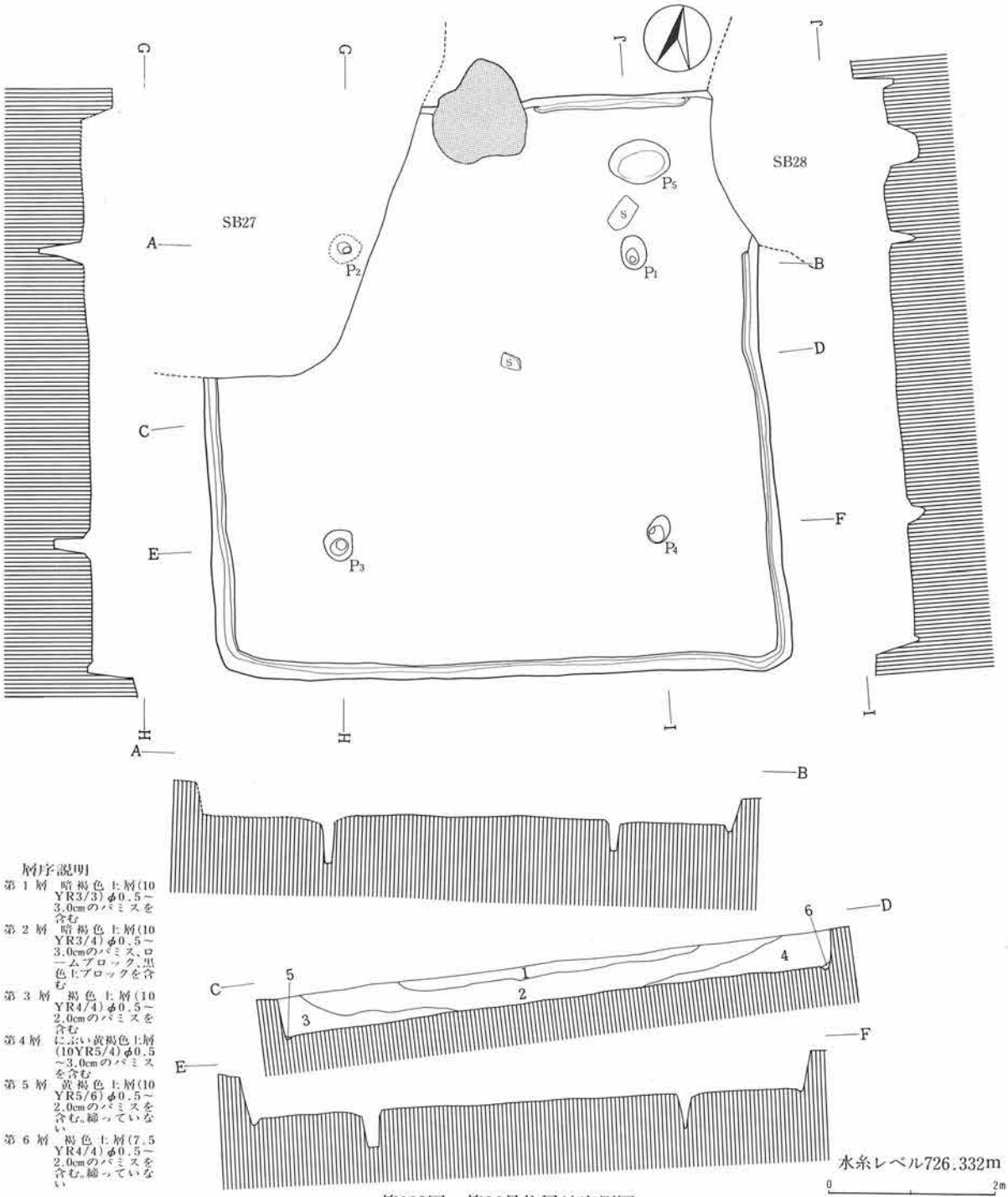
第1層　暗褐色土層（10YR3/4）φ1.0～2.5cmのパミス、ローム粒子を含む
第2層　にぶい黄褐色土層(10YR5/4)φ1.0～3.0cmのパミスを多量に含むほか、ロームブロックをふくむ
第3層　褐色土層(10YR4/6)φ0.5～3.0cmのパミス、ロームブロックを含む
第4層　褐色土層（7.5YR4/4）φ1.0～2.0cmのパミスを含む
第5層　褐色土層（10YR4/4）φ1～3.0cmのパミスのほか、ロームブロックを多く含む
第6層　褐色土層(10YR4/4)φ0.5～1.0cmのパミスを含む。ロームブロックは含まない
第7層　暗褐色土層(10YR3/4)φ0.5～3.0cmのパミスを含むが、他層に比べ量は少ない。締っている
第8層　にぶい褐色土層(7.5YR5/4)φ0.5cm前後のパミスを含む。締っていない

第108図　第25号住居址実測図

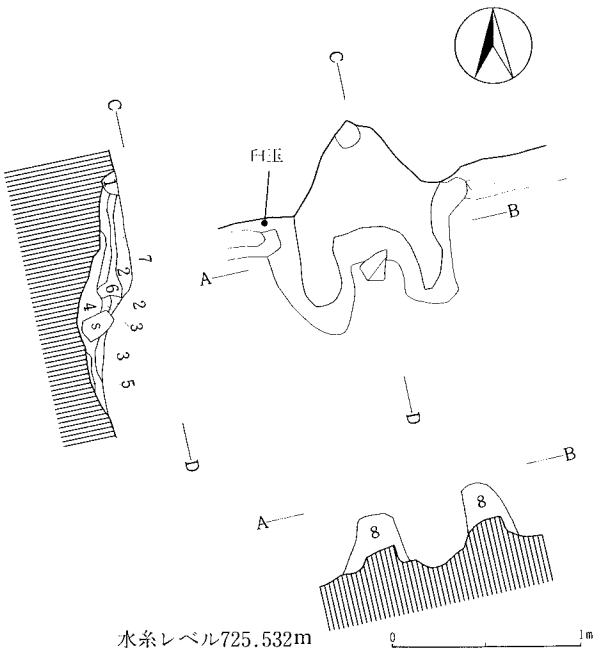
26）第26号住居址

遺構（第109・110図、図版８）

本住居址は、Ｄ－４グリッドに位置する。第27・28号住居址と重複関係を有し、第27・28号住



第109図　第26号住居址実測図



層序説明
第1層　暗褐色土層(10YR3/4)φ0.5cmのパミスのほか、焼土粒子を僅かに含む
第2層　褐色土層(10YR4/4)粘土粒子、焼土粒子を含む
第3層　褐色土層(10YR4/6)焼土粒子、灰を含む
第4層　明黄褐色土層(10YR6/6)灰層
第5層　橙色土層(7.5YR6/8)焼土層
第6層　明赤褐色土層(5YR5/8)粘土層。火熱を受ける
第7層　暗赤褐色土層(5YR3/4)焼土を多く含む
第8層　黄褐色土層(10YR5/6)粘土層

第110図　第26号住居址カマド実測図

居址に切られている。

東西675cm、南北697cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、N－8°－Wを示す。住居址覆土は、6層に区分され、自然堆積と考えられる。

確認面からの壁高は、32～52cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。遺存状態は比較的良好で、地山を掘り残して袖部芯とし、明赤褐色（5YR5/8)、黄褐色(10YR5/6)粘土により構築されていた。また、火床部では、加工した軽石の支脚石が認められた。

ピットは総計5基検出された。このうち、P_1～P_4が主柱穴、P_5は貯蔵穴と考えられる。

周溝は、カマド部分を除いて全周していたと思われるが、第27号住居址に切られているため不明である。

遺物（第336・367図、図版47・77）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、石製品が出土している。このうち、図示したものに黒色土器杯、椀、土師器小型甕、球胴甕がある。石製品（第367図26）は、カマド付近から出土した滑石製臼玉である。

本住居址の所産期は、古墳時代後期中葉に比定される。

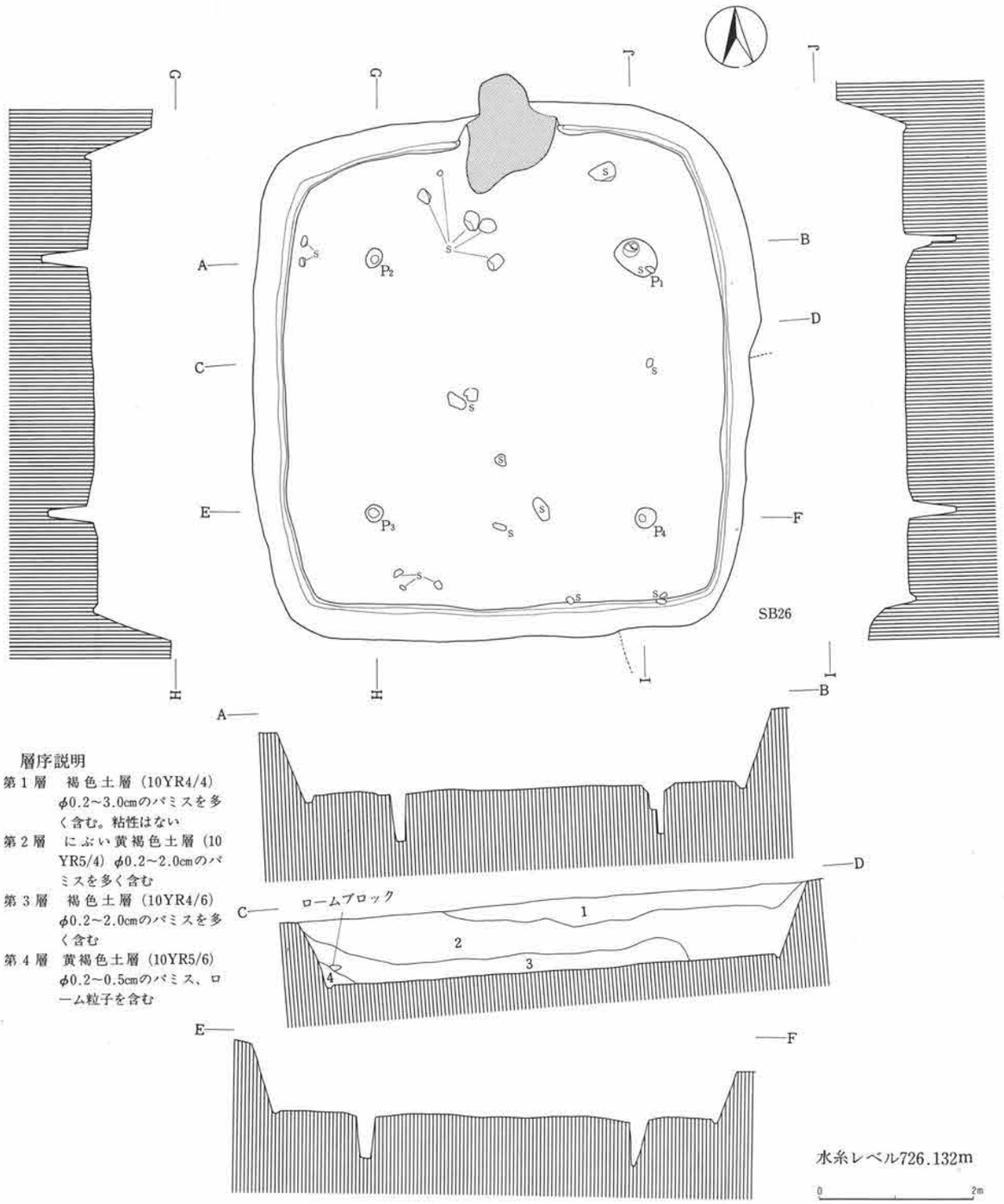
27）第27号住居址

遺構（第111・112図、図版8）

本住居址は、D－4グリッドに位置する。第26号住居址と重複関係を有し、第26号住居址を切って構築されている。

東西673cm、南北688cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、N－1°－Eを示す。住居址覆土は、4層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、82～103cmを測る。



層序説明

第1層　褐色土層（10YR4/4）φ0.2～3.0cmのパミスを多く含む。粘性はない

第2層　にぶい黄褐色土層（10YR5/4）φ0.2～2.0cmのパミスを多く含む

第3層　褐色土層（10YR4/6）φ0.2～2.0cmのパミスを多く含む

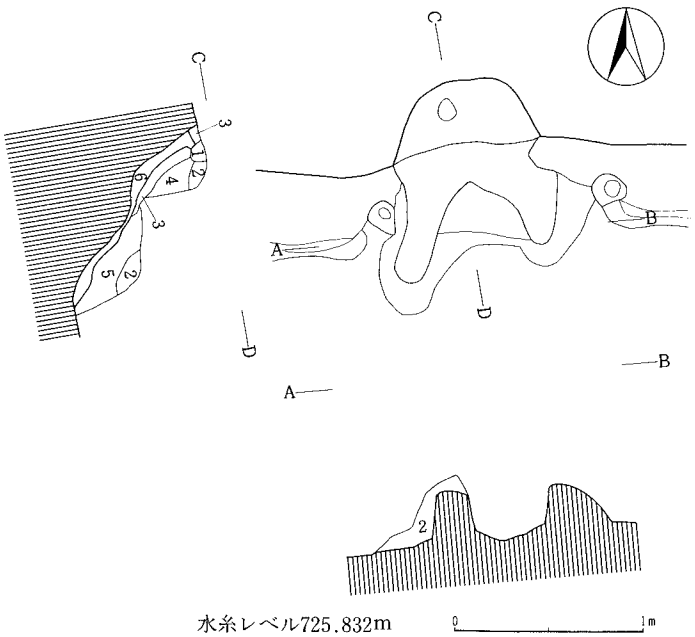
第4層　黄褐色土層（10YR5/6）φ0.2～0.5cmのパミス、ローム粒子を含む

第111図　第27号住居址実測図

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。遺存状態は比較的良好で、地山を掘り残して袖芯とし、にぶい黄褐色（10YR5/4）粘土により構築されていた。

ピットは総計4基検出された。いずれも主柱穴と考えられる。

周溝は、カマド部分を除き全周していた。



層序説明
第1層　褐色土層(10YR4/4)φ0.5cm前後のパミス、粘土粒子、焼土粒子を含む
第2層　にぶい黄褐色土層(10YR5/4)φ0.5～1.0cmのパミスを少量含む。粘土層
第3層　褐色土層(7.5YR4/6)粘土層
第4層　暗褐色土層(10YR3/4)φ0.5cmのパミス、粘土粒子、焼土粒子を含む
第5層　にぶい黄褐色土層(10YR4/3)焼土、灰を含む。締っていない
第6層　暗褐色土層(10YR3/4)φ0.5～1.0cm前後のパミス、ローム粒子を含む。掘形埋土

第112図　第27号住居址カマド実測図

遺物（第363図、図版73）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、鉄製品、鉄滓が出土している。

このうち、図示したものは鉄製品2点で刀子（第363図13）と鐙金具（第363図12）がある。

本住居址の所産期は、古墳時代後期後半に比定される。

28）第28号住居址

遺構（第113・114図、図版8）

本住居址は、D－4グリッドに位置する。第25・26号住居址と重複関係を有し、第26号住居址を切り、第25号住居址に切られている。

東西563cm、南北546cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、N－5.5°－Eを示す。住居址覆土は、3層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、27.5～48cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置するが遺存状態は悪い。袖部は、地山を掘り残して袖芯としにぶい褐色（7.5YR5/4）粘土により構築されていたものと思われる。

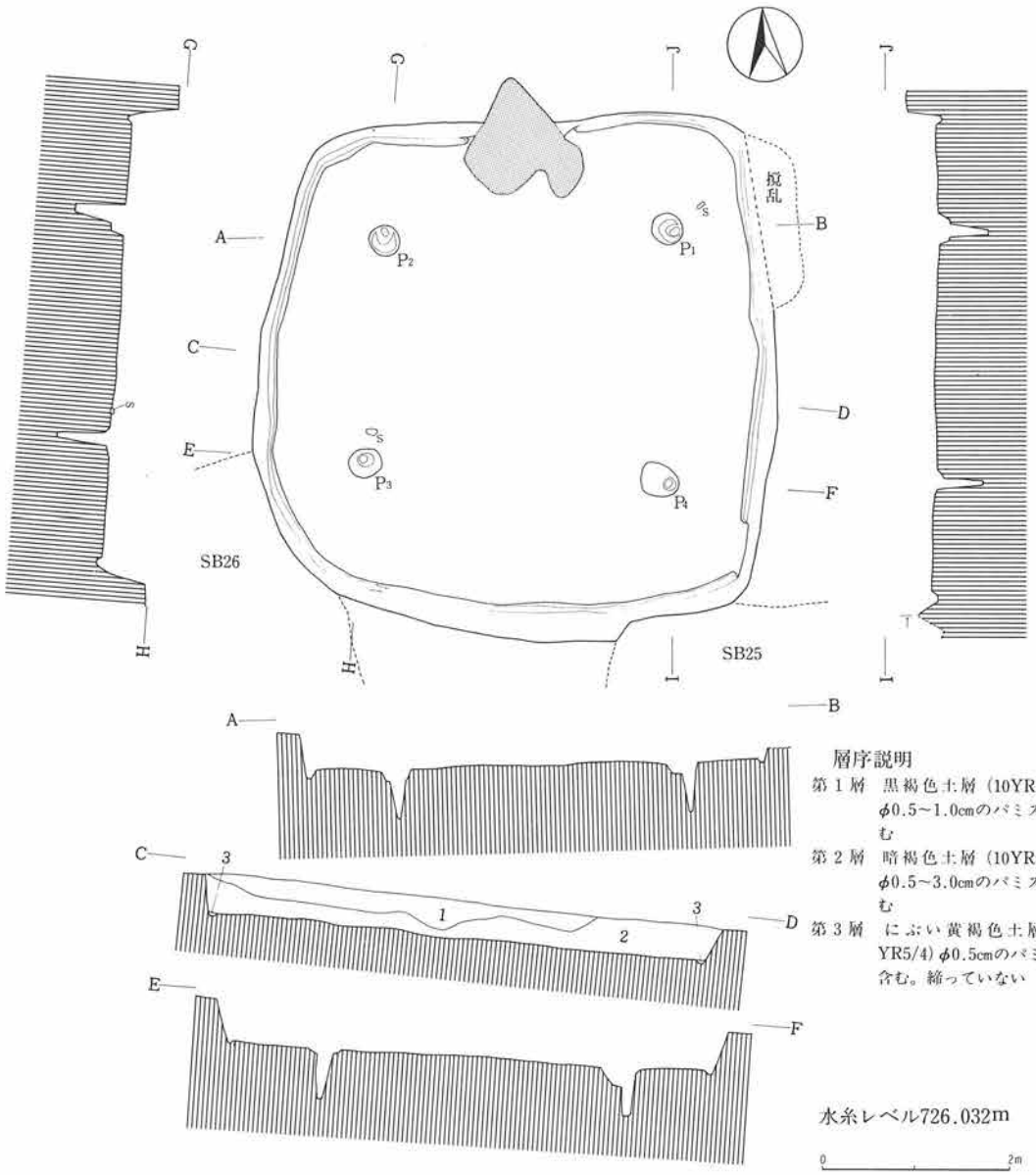
ピットは主柱穴と考えられる4基が検出された。

周溝は、カマド部分、南東コーナー付近を除く範囲で認められた。

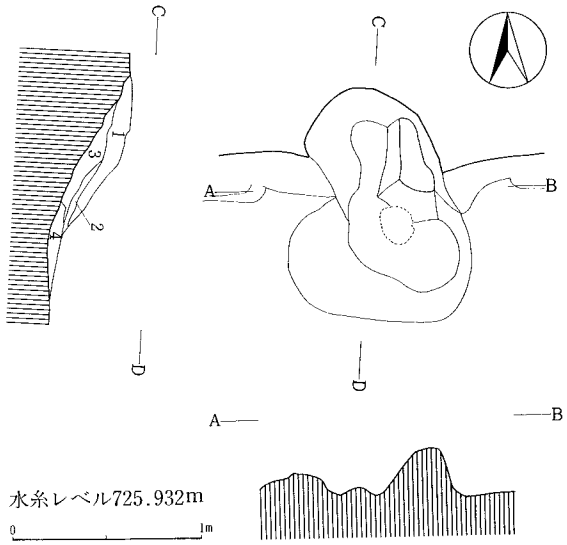
遺物（第337・363図、図版48・73）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、鉄製品、石製品が出土している。このうち、図示したものに須恵器杯１点、鉄製品３点がある。鉄製品には、刀子と考えられるもの(14)、釘と考えられるもの（15)、鎌（16）がある。

本住居址の所産期は、奈良時代前半に比定される。



第113図　第28号住居址実測図



層序説明
第1層　にぶい褐色土層(7.5YR5/4)粘土層
第2層　暗褐色土層(7.5YR3/3)φ0.2～2.0cmのパミスを含む
第3層　にぶい赤褐色土層(5YR4/4)焼土層
第4層　にぶい黄橙色土層(10YR6/3)灰層

第114図　第28号住居址カマド実測図

29）第29号住居址

遺構（第115・116図、図版8）

本住居址は、E－5グリッドに位置する。第31号住居址、第3号溝址と重複関係を有し、第31号住居址を切り、第3号溝址に切られている。

東西376cm、南北410cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。

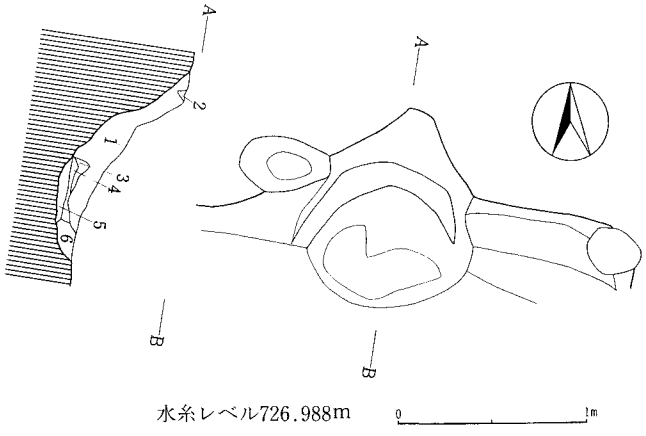
カマドを中心とする主軸方位は、N－11°－Eを示す。住居址覆土は、暗褐色(10YR3/4)土1層である。確認面からの壁高は、35～51cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置するが遺存状態は悪い。

ピットは総計5基検出された。

このうち、P_1～P_4が主柱穴、P_5が貯蔵穴と考えられる。

周溝は、検出されなかった。



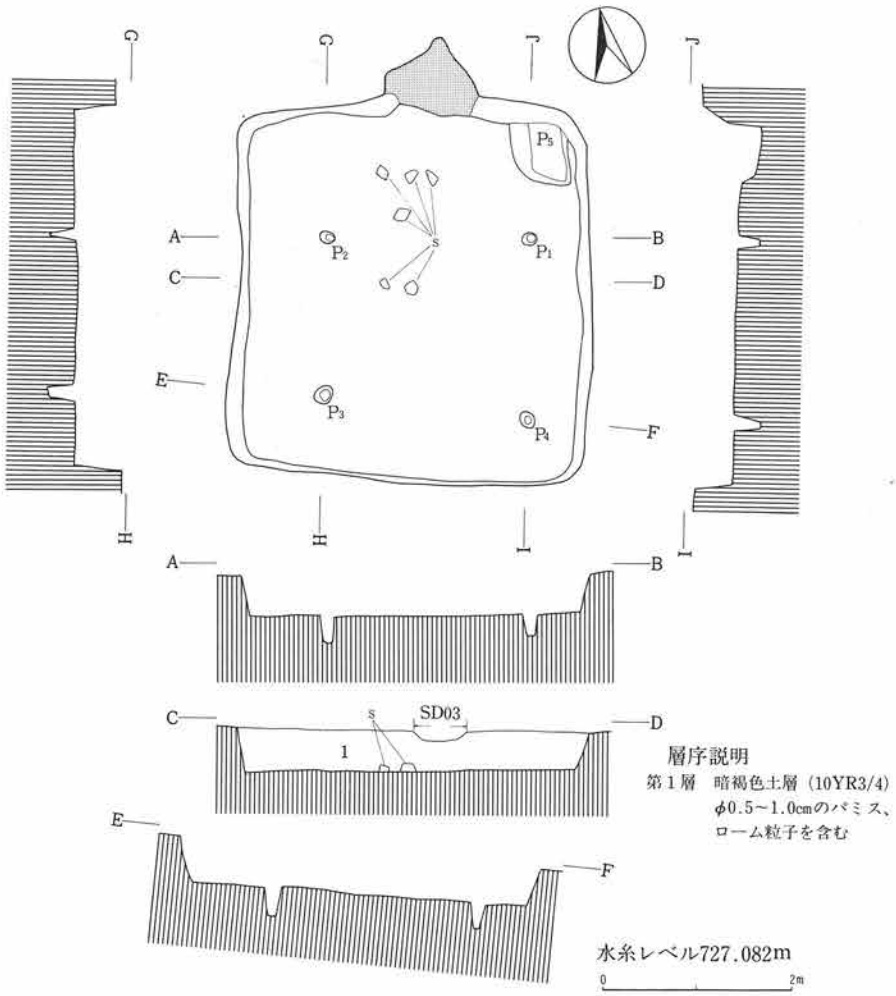
層序説明
第1層　暗褐色土層(10YR3/4)φ0.5cmのパミスのほか、粘土粒子、焼土粒子を含む
第2層　明黄褐色土層(10YR6/6)地山に相似
第3層　明褐色土層(7.5YR5/6)灰層
第4層　明褐色土層(7.5YR5/8)焼土層
第5層　褐色土層(7.5YR4/4)灰層
第6層　黒褐色土層(10YR2/3)炭化物を含む

第115図　第29号住居址カマド実測図

遺物（第337・364・368図、図版48・74・78）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、灰釉陶器片、鉄製品、石製品が出土している。このうち、図示

したものに須恵器蓋、土師器甑のほか、鉄製品として鉄鏃（第364図１）、石製品として紡錘車（第368図３）がある。土師器甑は、杯の転用で、焼成後底部に穿孔している。紡錘車は、軽石製で重さ12.5ｇを量る。本住居址の所産期は、平安時代に比定される。



第116図　第29号住居址実測図

30）第30号住居址

遺構（第117図、図版９・12）

本住居址は、Ｄ・Ｅ－４グリッドに位置する。第25・64号住居址と重複関係を有し、第25・64号住居址に切られている。

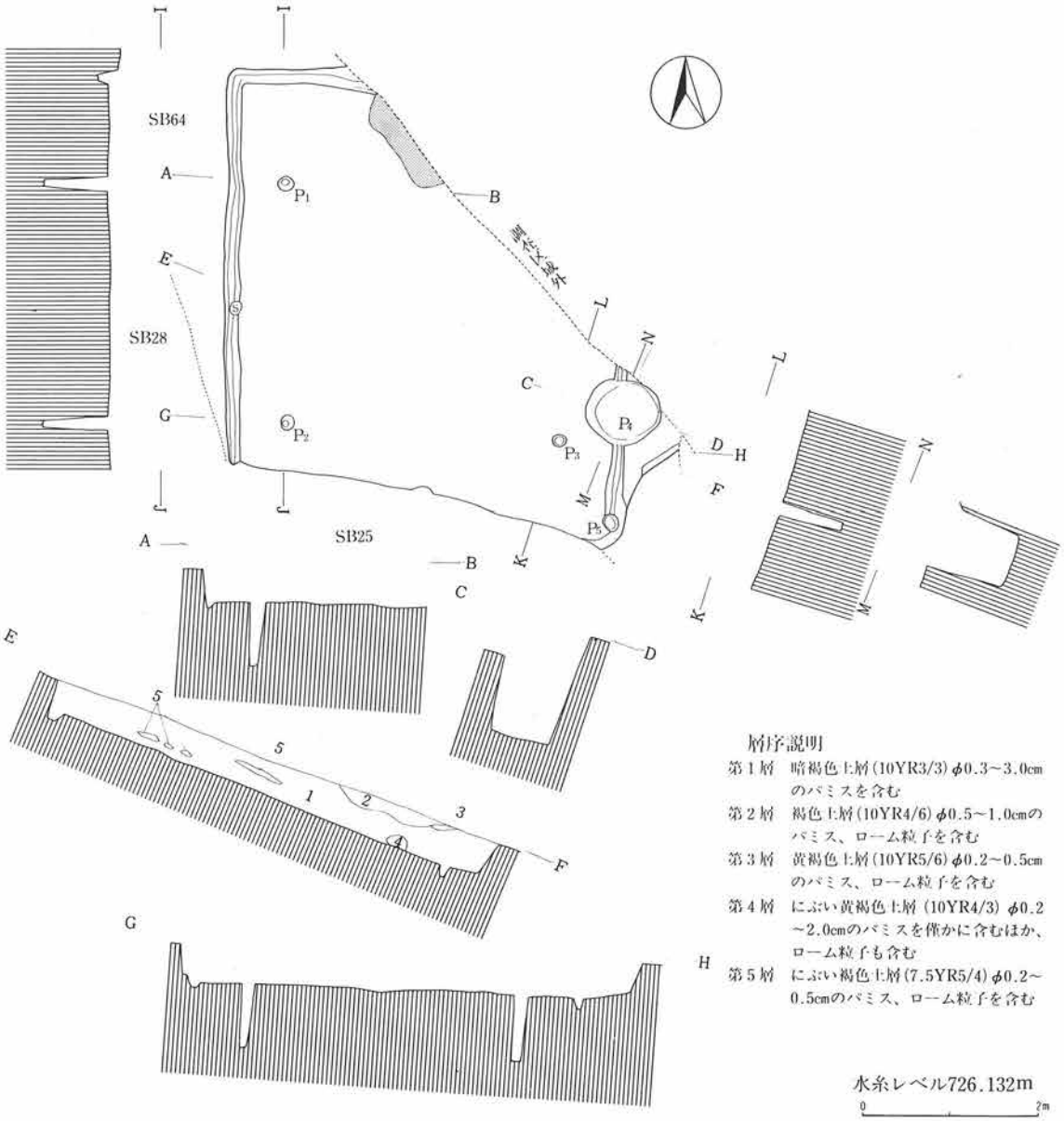
東西458cm、南北は残存部で453cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、Ｎ－4.5°－Ｅを示す。住居址覆土は、５層に区分されるが、大

半は第１層の暗褐色（10YR3/3）土が占める。確認面からの壁高は、29～51.5cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。調査範囲内では遺存状態は悪く、焼土・灰の範囲を示した。

ピットは総計５基検出された。このうち、P_1～P_3が主柱穴、P_4は位置に疑問を残すが、住居



第117図　第30号住居址実測図

址に伴うものと判断した。貯蔵穴的な機能を有するものであろう。周溝は、カマド部分を除きほぼ全周していたものと思われる。

遺物（第337・364・367図、図版48・74・77）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、鉄製品、石製品、鉄滓が出土している。このうち、図示したものに土師器杯2点、鉄製品2点がある。土師器杯（第337図）には、素縁で底部にヘラ記号の認められるもの（1）と外稜口辺を有するもの（2）がある。鉄製品（第364図）は、目釘穴のある刀子様のもの（2）と不明品（3）がある。石製品（第367図27）は、蛇紋岩製の丸玉である。

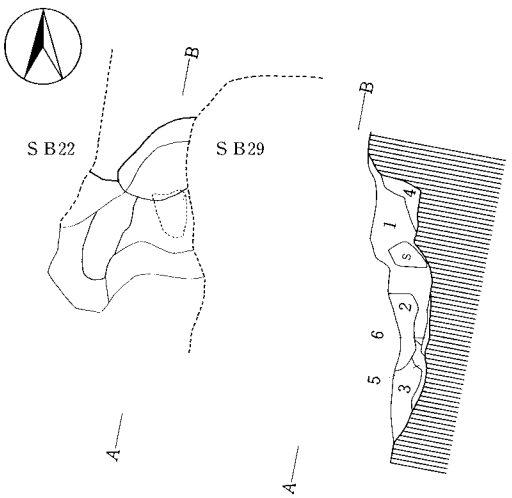
本住居址の所産期は、古墳時代後期中葉に比定される。

31）第31号住居址

遺構（第118・119図、図版9）

本住居址は、E－5グリッドに位置する。第22・29・32・44号住居址、第3号溝址と重複関係を有し、第44号住居址を切り、第22・29・32号住居址、第3号溝址に切られている。

東西582cm、南北は残存部で546cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈するものと思われる。



水糸レベル726.438m　0　1m

層序説明
第1層　褐色土層(10YR4/4)粘土層
第2層　暗褐色土層(10YR3/3)φ0.5～1.0cmのバミス、黒色土ブロックを含む
第3層　褐色土層(7.5YR4/4)焼土粒子、灰を含む
第4層　にぶい黄褐色土層(10YR4/3)φ0.5cmのバミス、ローム粒子を含み、締っている
第5層　褐色土層(7.5YR4/6)灰層。焼土粒子を含む
第6層　暗褐色土層(10YR3/4)焼土粒子を僅かに含む。締っていない

第118図　第31号住居址カマド実測図

カマドを中心とする主軸方位は、N－7°－Eを示す。住居址覆土は、7層に区分される。

確認面からの壁高は、55.5～67cmを測る。

カマドは、北壁に位置する。地山を掘り残して袖芯とし、褐色(10YR4/4)粘土により構築されていたものと思われる。

ピットは主柱穴と考えられる3基が検出された。周溝は、残存部から推してカマド部分を除き全周していたものと思われる。

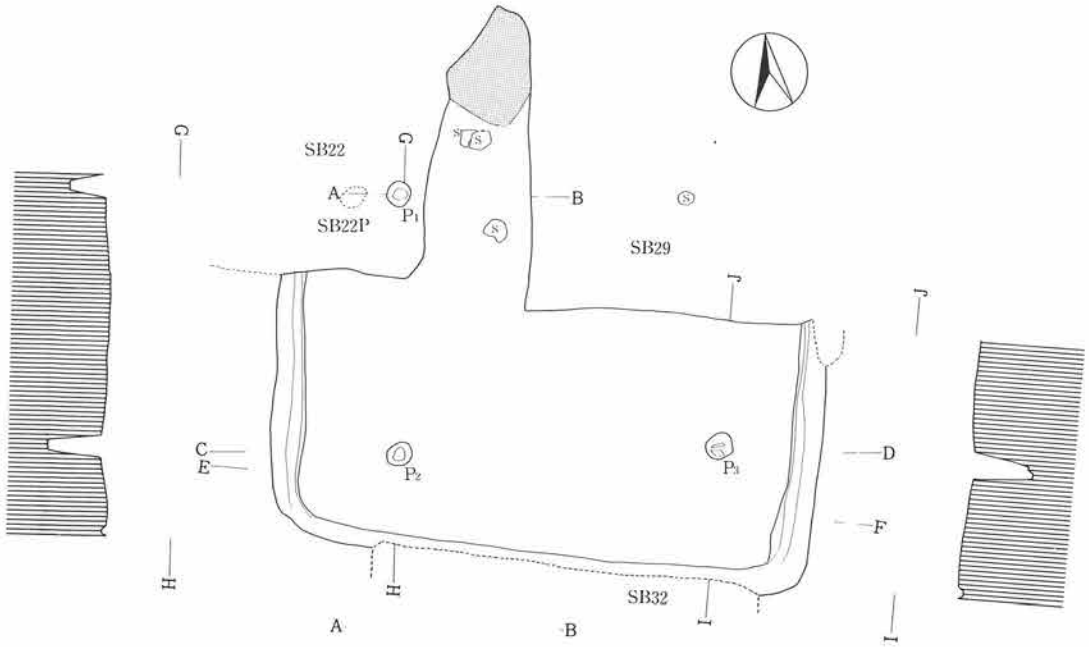
遺物（第337・364図、図版48・74）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、鉄製品が出土している。このうち、図示したものに須恵器杯・高杯、土師器杯、鉄製品がある。

土師器杯は、墨書土器と判断したが、内面ということもあり、明確でない。

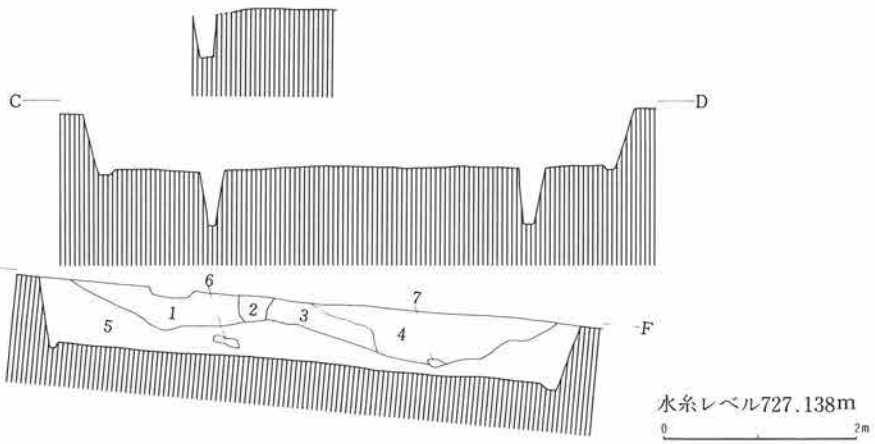
鉄製品は、「U」字状を呈するもので馬具の一部ではないかと思われるものと刀子2点がある。

本住居址の所産期は、土器片中に底部ヘラキリの須恵器杯の破片が認められることから、奈良時代前半に比定される。



層序説明

第1層　褐色土層(7.5YR4/3)φ1.0cm前後のパミスを含む
第2層　褐色土層(7.5YR4/6)φ0.5cm前後のパミスを少量とローム粒子を含む
第3層　褐色土層(7.5YR4/4)φ0.2cm前後のパミス、ローム粒子を含む
第4層　褐色土層(7.5YR4/4)φ0.5~1.0cmのパミスを含む
第5層　褐色土層(7.5YR4/4)φ0.2~0.5cmのパミスを含む
第6層　黒褐色土層(7.5YR2/2)ローム粒子を含む
第7層　黒褐色土層(7.5YR3/2)ローム粒子を含む



第119図　第31号住居址実測図

32）第32号住居址

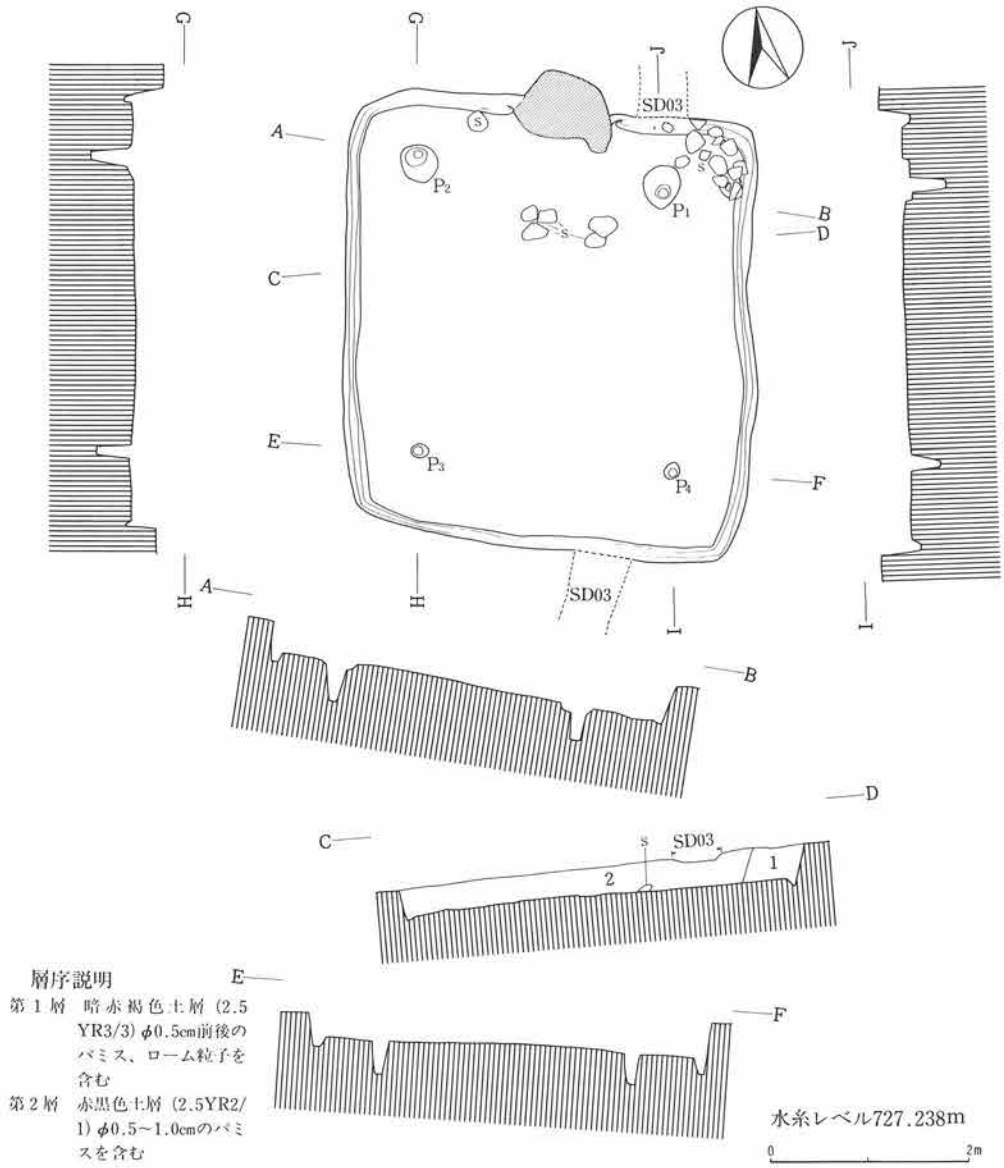
遺構（第120・122図、図版９）

本住居址は、Ｅ－５グリッドに位置する。第31・33・44号住居址、第３号溝址と重複関係を有し、第31・33・44号住居址を切り、第３号溝址に切られている。

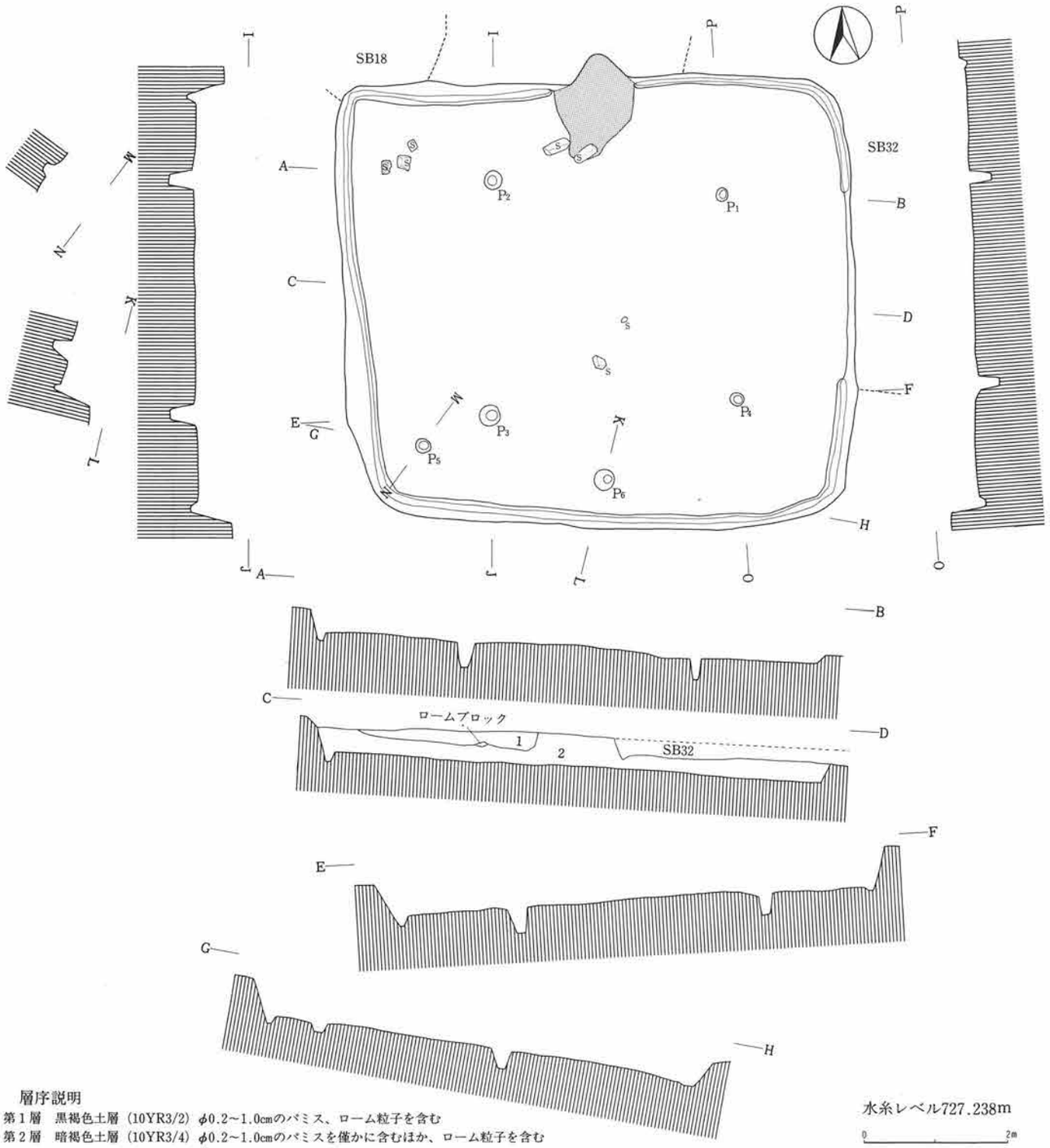
東西406cm、南北450cmを測り、平面プランは、南北にやや長い隅丸長方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、Ｎ－17°－Ｅを示す。住居址覆土は、２層に区分される。

確認面からの壁高は、21～38cmを測る。



第120図　第32号住居址実測図



層序説明
第1層　黒褐色土層（10YR3/2）φ0.2～1.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第2層　暗褐色土層（10YR3/4）φ0.2～1.0cmのパミスを僅かに含むほか、ローム粒子を含む

水糸レベル727.238m

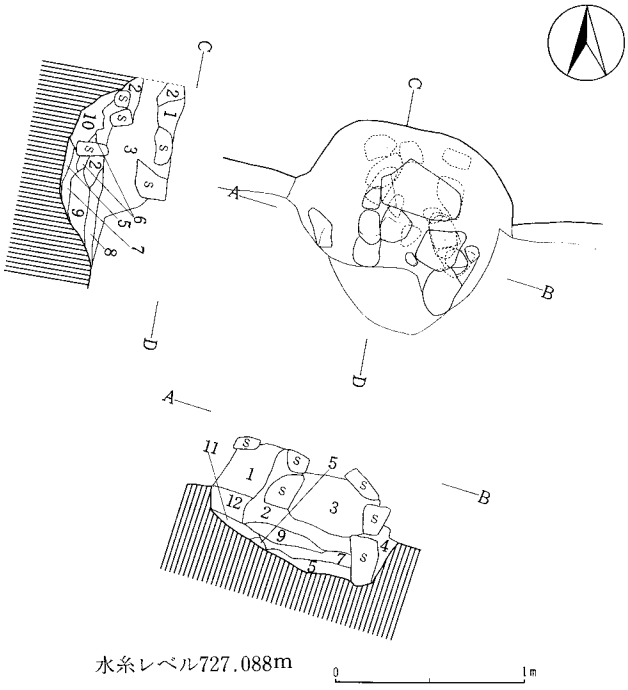
0　2m

第121図　第33号住居址実測図

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。遺存状態は、比較的良好で、軽石・集塊岩・安山岩と褐色(10YR4/6)粘土を用いた石組粘土カマドであった。

ピットは主柱穴と考えられる4基が検出された。

周溝は、カマド部分を除き全周していた。



層序説明
第1層　暗褐色土層(10YR3/4)φ0.5cm前後のパミスを含む
第2層　褐色土層(10YR4/6)粘土層
第3層　暗褐色土層(10YR3/3)焼土粒子、炭化物を含む。締っていない
第4層　黒褐色土層(10YR2/3)ローム粒子を含む
第5層　明褐色土層(7.5YR5/8)焼土層
第6層　黒褐色土層(7.5YR3/2)灰層
第7層　黄褐色土層(10YR5/6)灰層
第8層　暗褐色土層(10YR3/3)φ0.5cmのパミス、ローム粒子を含む
第9層　暗褐色土層(10YR3/4)ローム粒子、焼土、灰を含む
第10層　暗褐色土層(10YR3/4)焼土粒子を含む。締っていない
第11層　黒褐色土層(10YR2/3)パミスを含まない。締っている
第12層　褐色土層(10YR4/4)粘土粒子を含む

第122図　第32号住居址カマド実測図

遺物（第337・338・364図、図版48・49・74）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、灰釉陶器片、鉄製品、鉄滓、獣骨が出土している。

このうち、図示したものに土師器杯・甕、黒色土器杯・椀、須恵器杯・長頸壺、鉄製品がある。墨書土器は4点あり、文字が判読できたのは、「子」(第338図1)1点である。鉄製品は、紡錘車の軸と思われる。

本住居址の所産期は、平安時代に比定される。

33）第33号住居址

遺構（第121・123図、図版9）

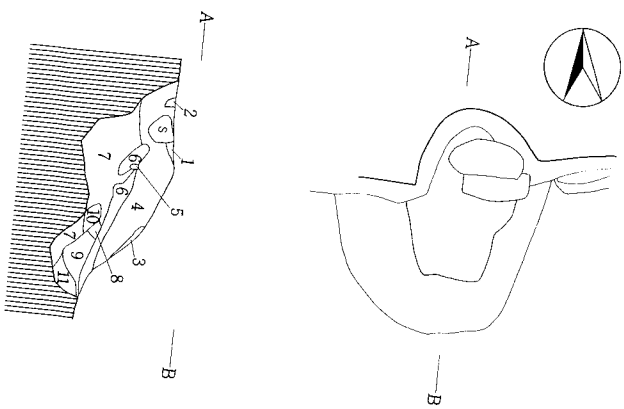
本住居址は、E－5グリッドに位置する。第18・32・44号住居址、第3号溝址と重複関係を有し、第44号住居址を切り、第18・32号住居址、第3号溝址に切られている。

東西714cm、南北641cmを測り、平面プランは、東西に長い隅丸長方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、N－1°－Eを示す。住居址覆土は、2層に区分される。

確認面からの壁高は、11～56cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置するが遺存状態は悪い。おそらく、加工した軽石、粘土により構築されていたものと思われる。



水糸レベル727.038m

0 1m

層序説明

第1層　暗褐色土層（7.5YR3/4）焼土を少量含む
第2層　明赤褐色土層（5YR5/6）φ0.3～0.4cmのパミス、粘土粒子を含む
第3層　褐色土層（7.5YR4/6）焼土を少量含む
第4層　褐色土層（7.5YR4/3）φ0.1～0.5cmのパミスを僅かに含むほか、炭化物を少量含む
第5層　黒褐色土層（7.5YR3/2）焼土を少量含む
第6層　暗赤褐色土層（5YR3/6）φ0.2～1.0cmのパミスを僅かに含むほか、灰を含む
第7層　暗褐色土層（10YR3/3）φ0.2～0.5cmのパミスを少量含むほか、ローム粒子、粘土、灰を僅かに含む
第8層　にぶい黄橙色土層（10YR7/4）灰に焼土が混じったもの
第9層　にぶい黄橙色土層（10YR7/2）灰層。焼土を少量含む
第10層　明褐色土層（7.5YR5/8）焼土にローム粒子、灰が混じっている
第11層　にぶい黄橙色土層（10YR6/4）φ0.3～1.0cmのパミス、ローム粒子、焼土、灰を含む

第123図　第33号住居址カマド実測図

ピットは総計6基が検出された。

このうち、P_1～P_4が主柱穴、P_6は出入口部の施設に関連するものであろう。

周溝は、カマド部分および東壁下を除く範囲において認められた。

遺物（第338・367・377図、図版49・77・86）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、石製品、鉄滓が出土している。

このうち、図示したものに土師器杯・甑・甕、黒色土器高杯、須恵器杯のほか、石製品として滑石製模造品、砂岩製打製石斧がある。砂製模造品には、鏡1点と臼玉13点がある。臼玉13点のうち、11点がカマド内出土である。

本住居址の所産期は、古墳時代後期中葉に比定される。

34）第35号住居址

遺構（第124図、図版9）

本住居址は、D－3・4グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

東西463cm、南北444cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。

南北軸の方位は、N－3°－Eを示す。住居址覆土は、3層に区分され、自然堆積と考えられる。

確認面からの壁高は、24～35cmを測る。

炉址は、住居址北東部および南西コーナー付近の2個所に位置する。

ピットは総計7基検出され、このうち、P_1～P_4の4基が主柱穴と考えられる。

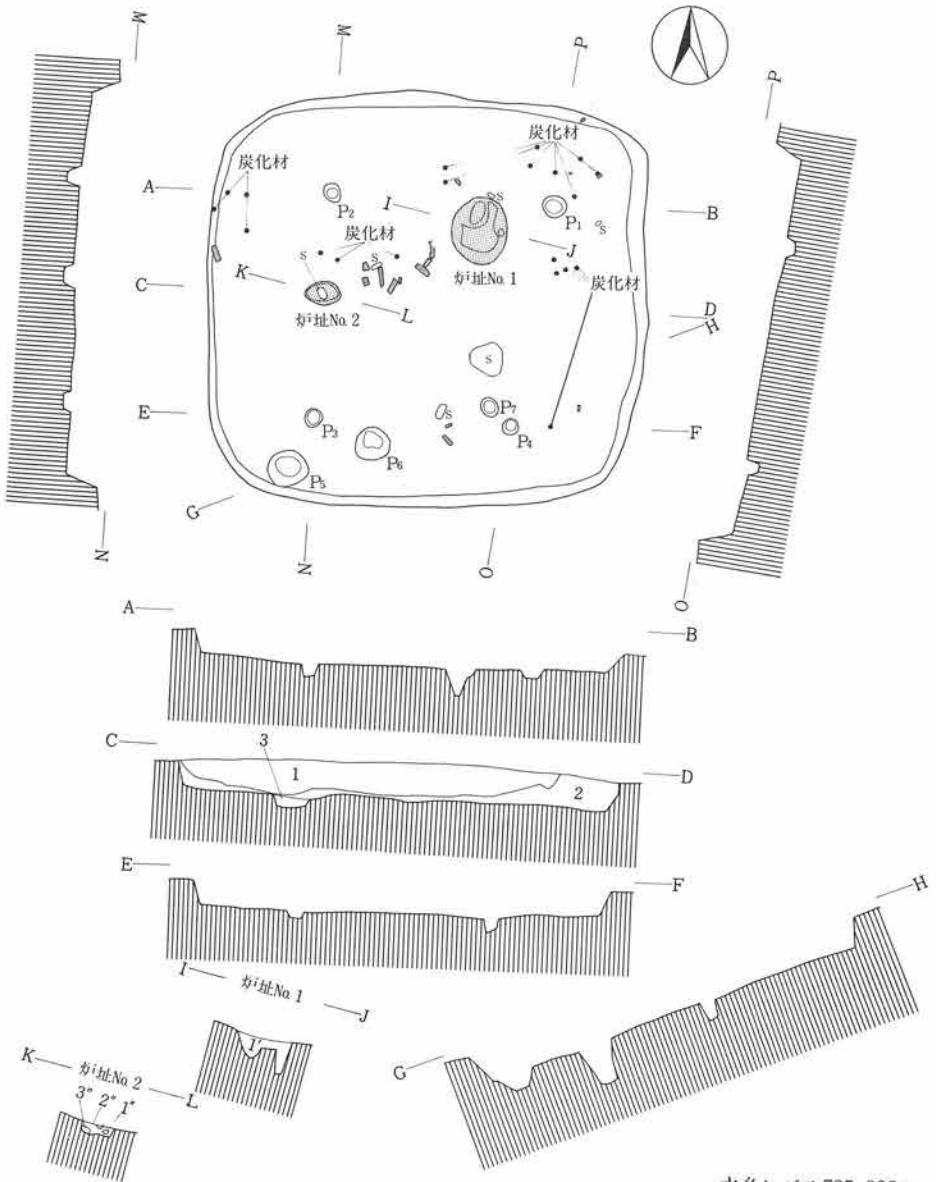
焼失住居と考えられ、床面より3～10cm上のレベルから床面にかけて炭化材が認められた。材については後述する。なお、周溝は確認されなかった。

遺物（第374図、図版83）

土師器片、黒色土器片、石製品のほか、自然遺物として炭化材が出土している。このうち、図

示したものに砥石として用いられたと考えられるものがある。

本住居址の所産期は、古墳時代初頭に比定される。



層序説明

第1層　黒色土層(7.5YR2/1)φ0.3～1.0cmのパミス、ローム粒子を僅かに含む
第2層　暗褐色土層(10YR3/3)φ0.3～2.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第3層　にぶい赤褐色土層(5YR4/4)焼土層

炉址No. 1
第1'層　黒褐色土層(10YR2/3)φ0.5～1.0cmのパミス、ローム粒子を含む

炉址No. 2
第1"層　明褐色土層(7.5YR5/8)焼土を含む
第2"層　にぶい赤褐色土層(5YR4/4)焼土を含む
第3"層　褐色土層(7.5YR4/6)焼土を含む

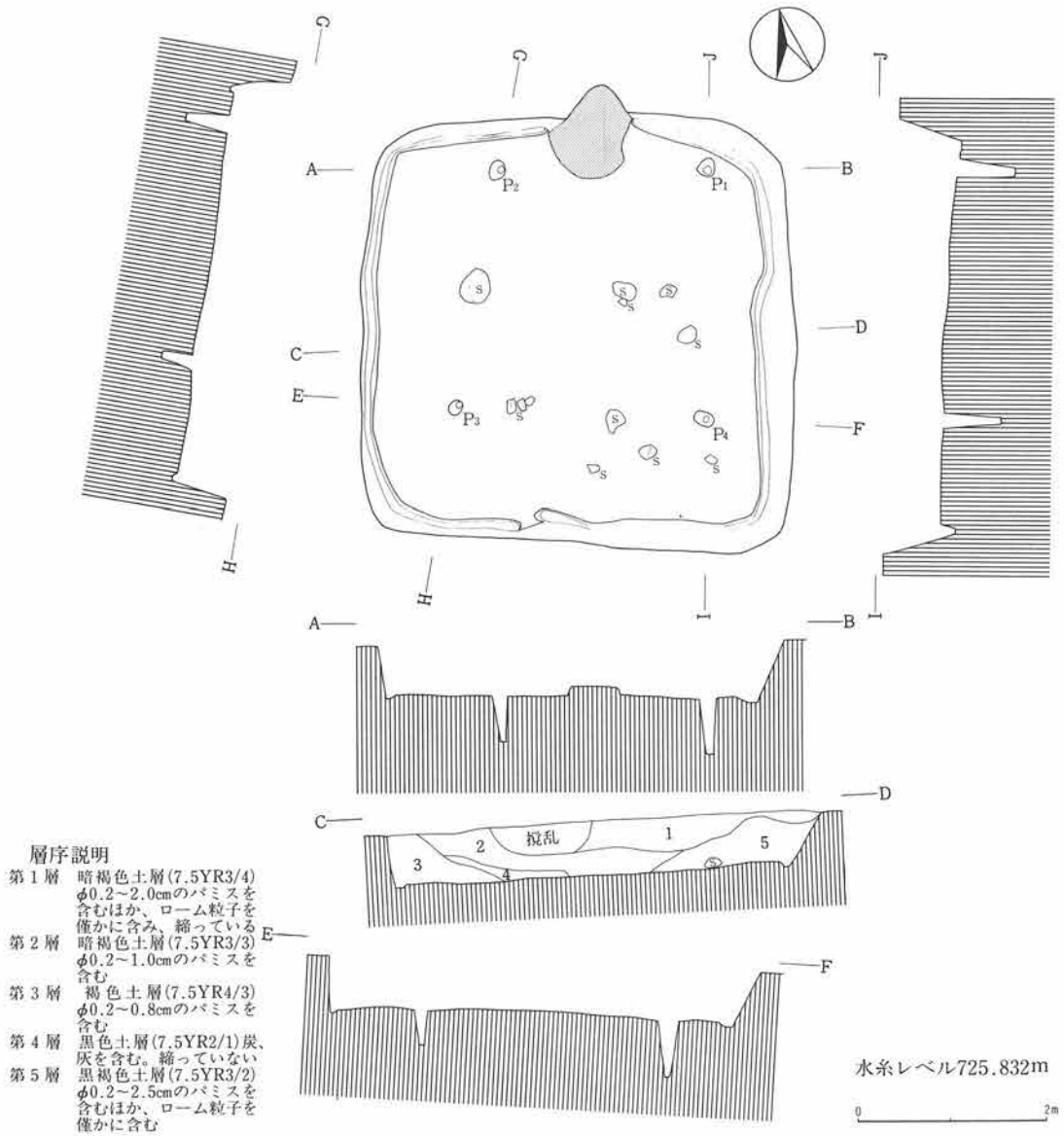
第124図　第35号住居址実測図

35）第36号住居址

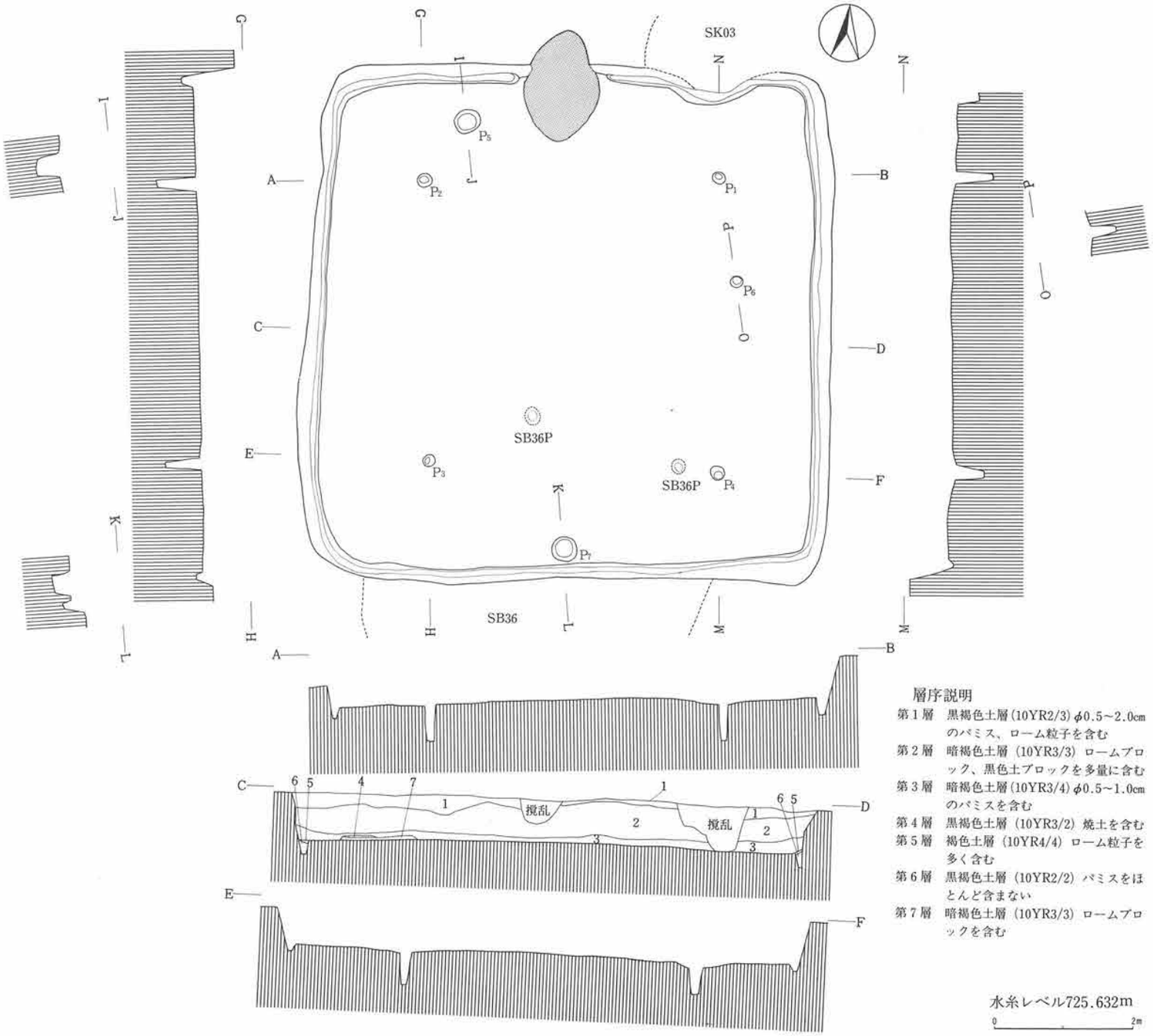
遺構（第125・127図、図版９）

本住居址は、Ｃ・Ｄ－３・４グリッドに位置する。第37号住居址と重複関係を有し、第37号住居址を切って構築されている。

東西468cm、南北456cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。



第125図　第36号住居址実測図



第126図　第37号住居址実測図

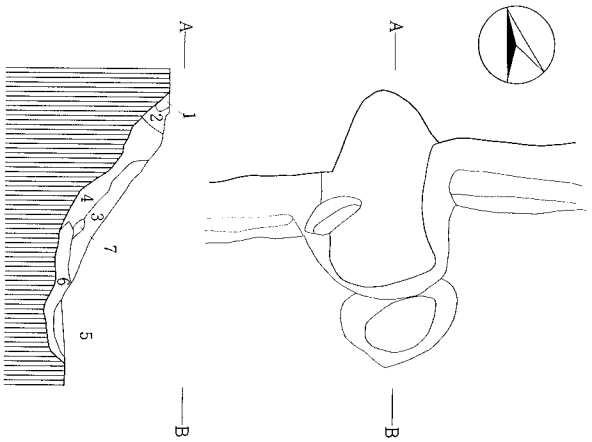
カマドを中心とする主軸方位は、N－14°－Eを示す。

住居址覆土は、5層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、56～63cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置するが遺存状況は悪い。おそらく、軽石、にぶい橙色(7.5YR6/4)粘土により構築されていたものと思われる。

ピットは主柱穴と考えられる4基が検出された。

周溝は、カマド部分を除きほぼ全周していた。



層序説明
第1層　にぶい橙色土層(7.5YR6/4)粘土層
第2層　暗褐色土層(10YR3/3)φ0.5cmのパミスを含む
第3層　褐色土層(10YR4/6)粘土、焼土粒子、炭のほか、僅かに炭化物を含む
第4層　褐色土層(7.5YR4/4)焼土粒子、炭を含む
第5層　暗褐色土層(10YR3/4)φ0.5cmのパミスを含む
第6層　橙色土層(7.5YR6/8)焼土層
第7層　橙色土層(7.5YR6/6)灰層

第127図　第36号住居址カマド実測図

遺物（第364・370・374図、図版74・80・83）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、鉄製品、石製品、鉄滓が出土している。このうち、図示したものに鉄製品、石製品がある。鉄製品は（9）は刀子、(10) が鎌で、（8）は不明である。石製品には、石臼、磨石がある。

本住居址の所産期は、土器片中に「コ」の字状を呈する口辺部の土師器甕が出土していることから、平安時代に比定される。

36）第37号住居址

遺構（第126・128図、図版9）

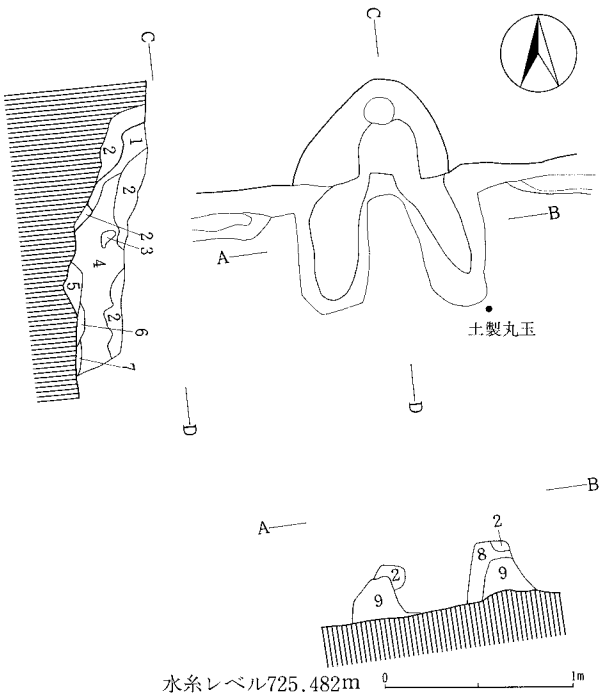
本住居址は、C・D－3・4グリッドに位置する。第36号住居址、第3号土坑と重複関係を有し、第36号住居址、第3号土坑に切られている。

東西758cm、南北750cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、N－6°－Wを示す。住居址覆土は、7層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、33～64.5cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。遺存状況は、比較的良好であった。暗褐色(10YR3/3)および明黄褐色（10YR6/6）土を袖芯の構築土に用い、黄褐色（10YR5/6）粘土により構築されていた。

ピットは総計7基検出された。このうち、P_1～P_4が主柱穴、P_5が貯蔵穴、P_7が出入口部の施設に関連するものと思われる。



層序説明

第1層　褐色土層(10YR4/4)ローム粒子のほか、焼土粒子を僅かに含む
第2層　黄褐色土層(10YR5/6)粘土層
第3層　赤褐色土層(5YR4/6)焼土層
第4層　褐色土層(7.5YR4/4)焼土、炭、炭化物を含む
第5層　にぶい黄褐色土層(10YR5/4)灰層
第6層　にぶい黄橙色土層(10YR7/3)粘土層。堅緻
第7層　黄褐色土層(10YR5/6)灰層
第8層　暗褐色土層(10YR3/3)ローム粒子を含む。粒子は細かい。袖構築材
第9層　明黄褐色土層(10YR6/6)φ3.0cm前後のバミスを多量に含む。地山と褐色土(10YR4/4)を僅かに含む混土層。袖芯構築土

第128図　第37号住居址カマド実測図

周溝は、カマド部分を除き、全周していた。

遺物（第338・339・364・367・368・376図、図版49・50・74・77・78・85）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、縄文土器片、鉄製品が出土している。このうち、図示したものに、須恵器杯、土師器甕、縄文土器片、鉄製品、石製品、土製品のほか、自然遺物として獣骨がある。

須恵器は、底部糸切り未調整のもので混入品であろう。また、縄文土器片は、後期の所産である。

鉄製品は、紡錘車である。

石製品には、黒曜石製の石鏃、凹石がある。石鏃は、重さ0.8ｇを量る。

土製品は、紡錘車と丸玉である。

なお、獣骨については後述する。

本住居址の所産期は、古墳時代後期中葉に比定される。

37）第38号住居址

遺構（第129・130図、図版９）

本住居址は、Ｄ－４グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

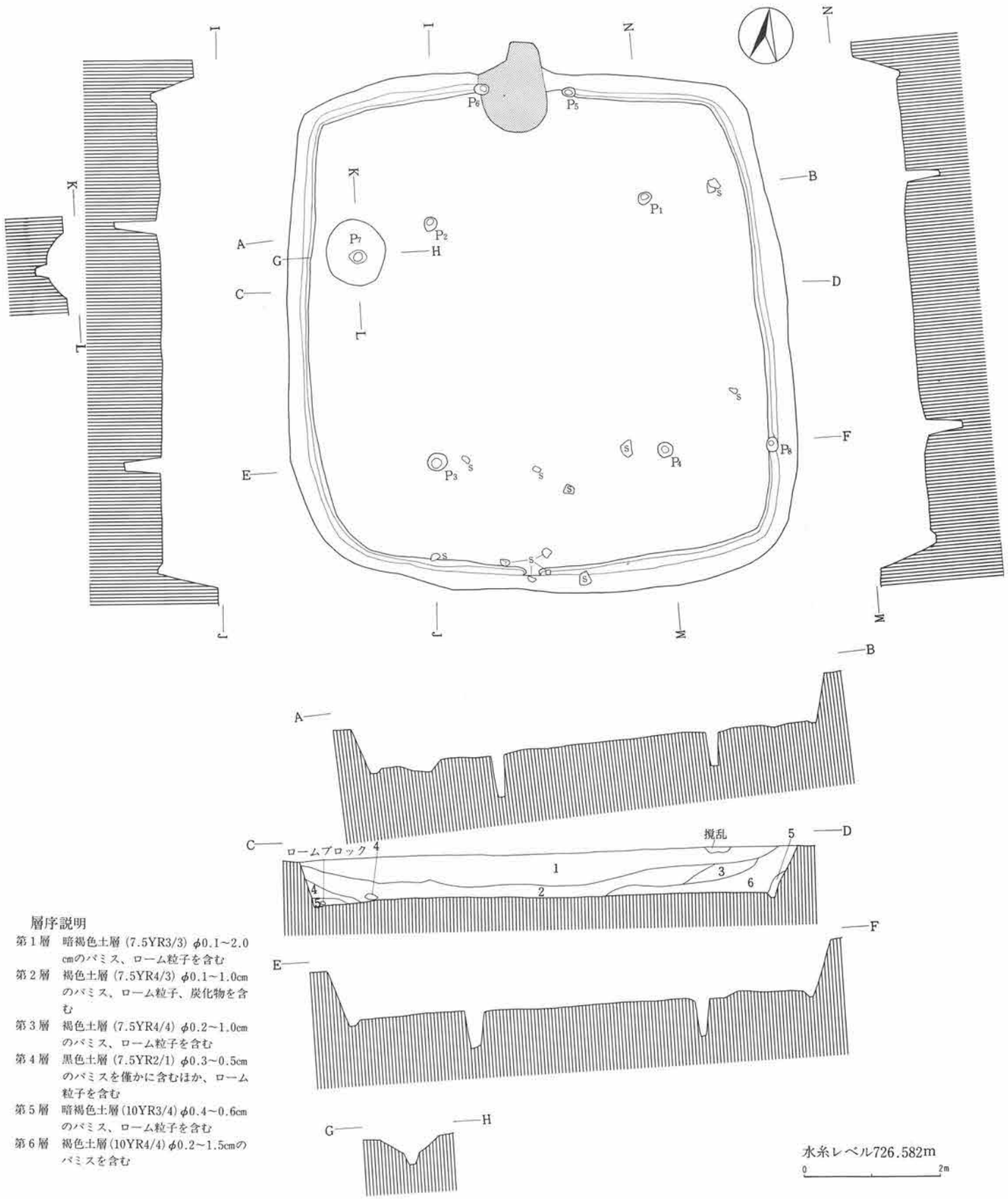
東西735cm、南北750cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、Ｎ－15°－Ｗを示す。住居址覆土は、６層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、52～79cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。遺存状態は、比較的良好であった。焚口部に軽石を用い、袖基盤には褐色（10YR4/4）土を使用し、その後、橙色（５YR6/6）粘土により構築していた。

ピットは総計８基検出された。このうち、P_1～P_4が主柱穴である。

周溝は、カマド部および南壁中央部を除く範囲で認められた。



層序説明

第1層　暗褐色土層（7.5YR3/3）φ0.1～2.0cmのパミス、ローム粒子を含む

第2層　褐色土層（7.5YR4/3）φ0.1～1.0cmのパミス、ローム粒子、炭化物を含む

第3層　褐色土層（7.5YR4/4）φ0.2～1.0cmのパミス、ローム粒子を含む

第4層　黒色土層（7.5YR2/1）φ0.3～0.5cmのパミスを僅かに含むほか、ローム粒子を含む

第5層　暗褐色土層（10YR3/4）φ0.4～0.6cmのパミス、ローム粒子を含む

第6層　褐色土層（10YR4/4）φ0.2～1.5cmのパミスを含む

水糸レベル726.582m

0　2m

第129図　第38号住居址実測図

遺物（第339・364・370・371図、図版50・74・80）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、鉄製品、石製品のほか、自然遺物として炭化材がある。

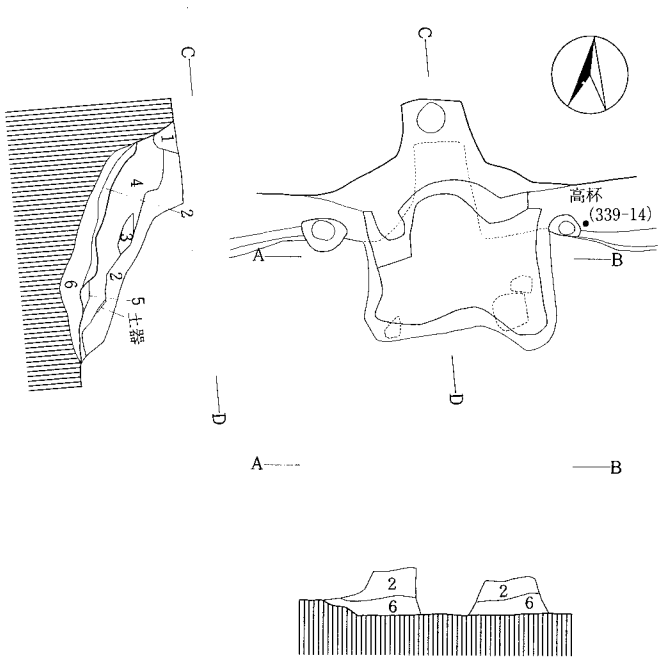
このうち、図示したものに土師器杯・甕、黒色土器杯・高杯、鉄製品、石製品がある。炭化材については後述する。

土器では、小型の黒色土器高杯が目につくほか、図示し得なかったが、畿内系暗文を有する土師器杯の破片も認められた。

鉄製品には、刀子（12）、鉄鏃（13）、鎌（14）がある。

石製品は、凝灰岩製・安山岩製の砥石（第370図９）と安山岩製の凹石（第371図１）である。

本住居址の所産期は、古墳時代後期後葉に比定される。



層序説明
第１層　褐色土層(7.5YR4/4)φ0.5～1.0cmのパミス、粘土粒子を含む
第２層　橙色土層(5YR6/6)粘土層
第３層　明褐色土層(7.5YR5/6)焼土層
第４層　褐色土層(7.5YR4/4)粘土粒子、焼土粒子、灰を含む。締っていない
第５層　明褐色土層(7.5YR5/6)灰層
第６層　褐色土層(10YR4/4)φ0.5～1.0cmのパミス、粘土粒子のほか、黒色土、ロームブロックを含む。堅緻

第130図　第38号住居址カマド実測図

38）第39号住居址

遺構（第131・132図、図版10）

本住居址は、Ｅ－４グリッドに位置する。第24号住居址、第２号溝址と重複関係を有し、第24号住居址、第２号溝址に切られている。

東西340cm、南北256cmを測り、平面プランは、東西に長い隅丸長方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、Ｎ－15°－Ｗを示す。住居址覆土は、３層に区分される。

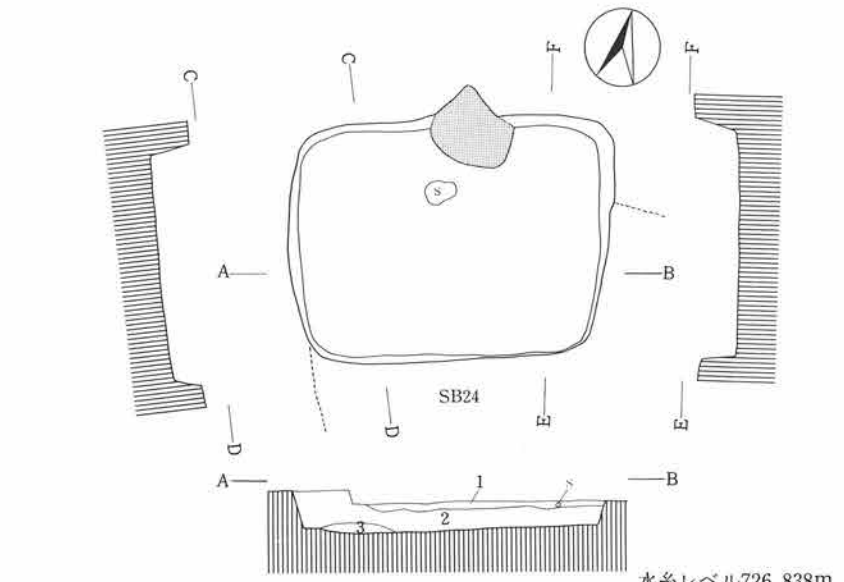
確認面からの壁高は、37～51.5cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。遺存状態は、比較的良好であった。地山と褐色(7.5YR4/4）土の混土を袖芯とし、軽石および明褐色（7.5YR5/6）粘土により構築されていた。

ピット、周溝は検出されなかった。

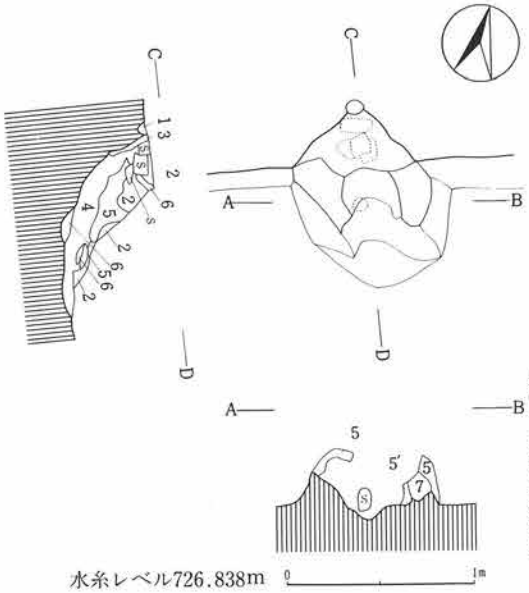
遺物（第339図、図版50）

土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土している。このうち、図示したものに土師器杯・小型



層序説明
第1層　褐色土層（10YR4/4）φ0.2～3.0cmのパミス、ローム粒子、焼土を含む
第2層　暗褐色土層（10YR3/3）φ0.2～2.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第3層　黒褐色土層（10YR3/2）φ0.3～1.0cmのパミスを含む

第131図　第39号住居址実測図



壺・甕がある。

本住居址の所産期は、古墳時代後期後半に比定される。

層序説明
第1層　褐色土層(10YR4/4)ローム粒子を含み、締っている
第2層　暗褐色土層(10YR3/4)パミス、焼土粒子を含む。締っていない
第3層　明褐色土層(7.5YR5/6)粘土層
第4層　褐色土層(7.5YR4/6)粘土粒子、焼土粒子、灰を含む
第5層　褐色土層(10YR4/6)粘土層
第5'層　赤褐色土層(5YR4/6)第5層の火熱を受けたもの
第6層　赤褐色土層(2.5YR4/8焼土層)
第7層　地山(黄橙色土層10YR7/8)と褐色土層(7.5YR4/4)の混土。袖芯

第132図　第39号住居址カマド実測図

39）第40号住居址

遺構（第133・134図、図版10）

本住居址は、D・E－4・5グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

東西370cm、南北388cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。

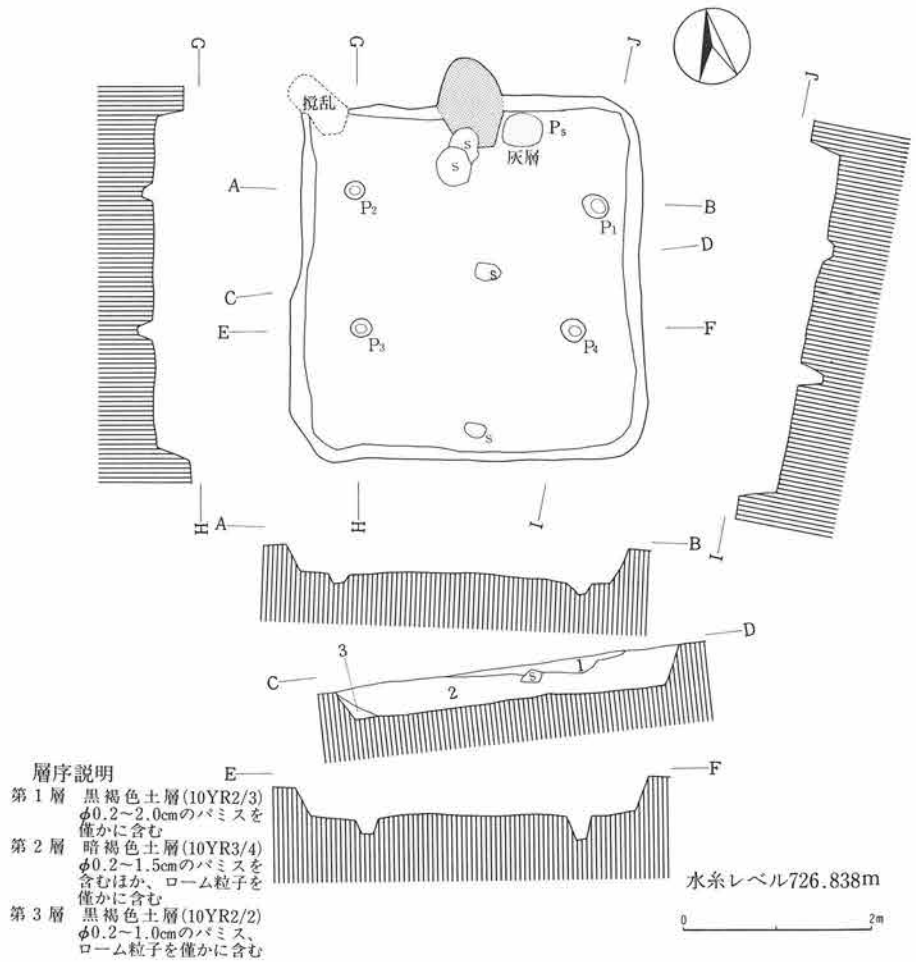
カマドを中心とする主軸方位は、N－14°－Eを示す。住居址覆土は、3層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、26～42.5cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置するが、遺存状態は悪い。おそらく、軽石および粘土により構築されていたものと思われる。

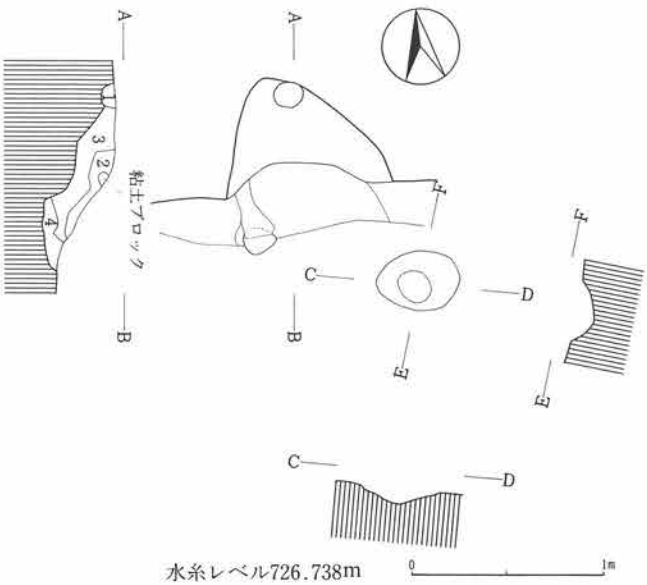
ピットは総計5基検出された。このうち、P_1～P_4が主柱穴、P_5は灰落としの機能を有するものと思われる。なお、周溝は検出されなかった。

遺物（第340図、図版51・89）

土師器片、黒色土器片、須恵器片のほか、自然遺物として炭化米が出土している。このうち、



第133図　第40号住居址実測図



図示したものに、黒色土器杯、土師器甕がある。

炭化米は、カマド付近から出土したもので、詳細については後述する。

本住居址の所産期は、奈良時代後葉に比定される。

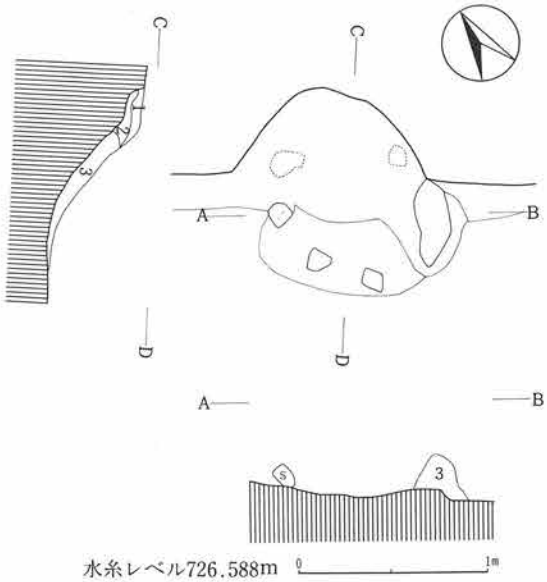
層序説明
第1層　暗褐色土層(10YR3/3)ローム粒子、焼土粒子を含む
第2層　暗褐色土層(10YR3/4)φ0.5cm前後のパミスのほか、僅かに粘土粒子を含む
第3層　暗褐色土層(7.5YR3/3)粘土粒子、焼土粒子、灰を含む
第4層　にぶい黄褐色土層(10YR5/4)灰層

第134図　第40号住居址カマド実測図

40）第41号住居址

遺構（第135・136図、図版10）

本住居址は、D－5グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。



層序説明
第1層　暗褐色土層(10YR3/4)φ0.5～1.0cmのパミス、黒褐色(10YR2/3)の粘土を含み、比較的締っている
第2層　黄褐色土層(10YR5/6)φ0.5cm前後のパミスを含むほか、ローム粒子を多く含む
第3層　褐色土層(10YR4/4)粘土層
※Sは全て軽石

第135図　第41号住居址カマド実測図

東西504cm、南北は調査範囲内で355cmを測る。

カマドを中心とする主軸方位は、N－28.5°－Eを示す。住居址覆土は、2層に区分され、自然堆積と考えられる。

確認面からの壁高は、26～50cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置するが遺存状態は悪い。おそらく、加工した軽石および褐色(10YR4/4)粘土により構築されていたものと思われる。

ピットは、主柱穴と考えられる2基が検出された。周溝は、検出されなかった。

遺物（第340・364・367図、図版51・74・77）

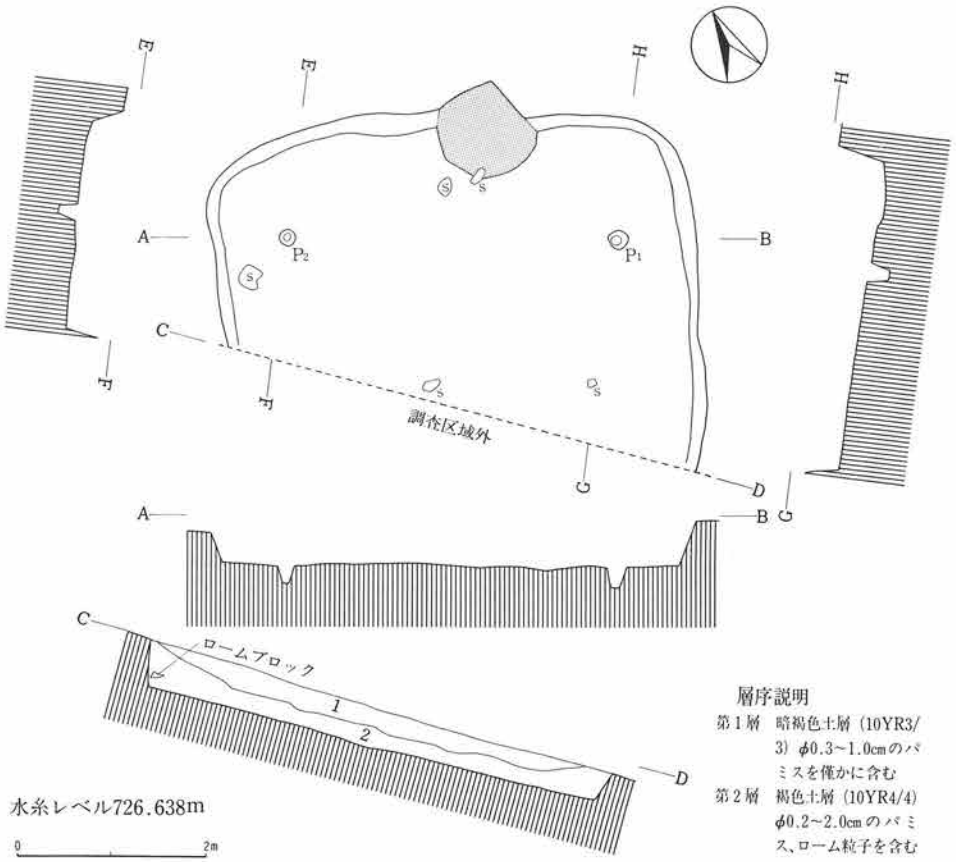
土師器片、黒色土器片、須恵器片、灰釉陶器片、金属製品、鉄滓が出土している。

このうち、図示したものに土師器甕、黒色土器杯・皿・椀、灰釉陶器椀、金属製品２点がある。

墨書土器が19点と多いのが特徴的である。文字が判読できたものに、「西」(３)、「茂」(７)、「川」(９)、「之」(11) がある。

金属製品には、刀子（第364図15）と金環（第367図18）がある。金環は、鍍金の部分がほとんど剝落している。

本住居址の所産期は、平安時代に比定される。



第136図　第41号住居址実測図

41）第42号住居址

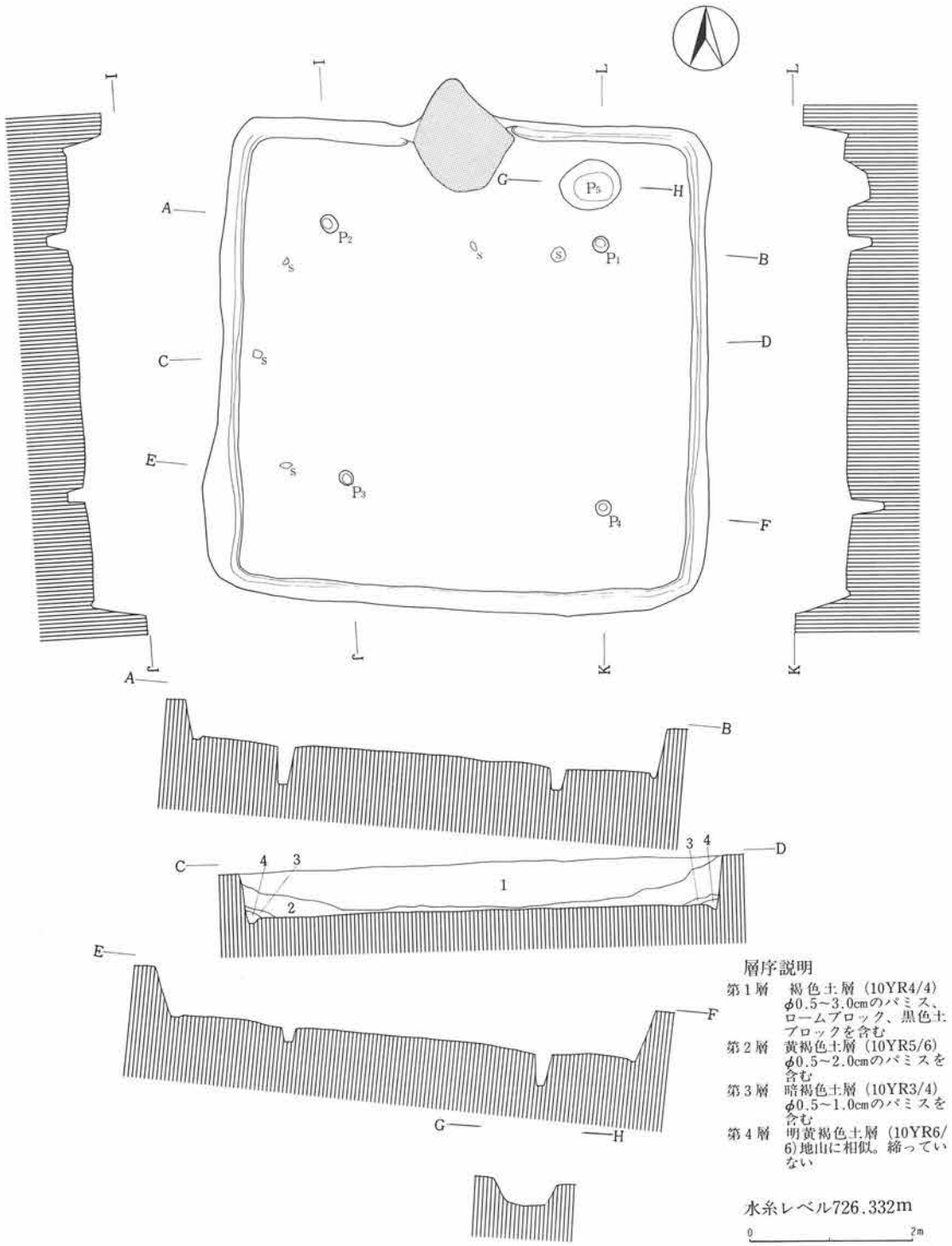
遺構（第137・138図、図版10）

本住居址は、Ｄ－４グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

東西600cm、南北610cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、Ｎ－4.5°－Ｅを示す。住居址覆土は、４層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、43～66cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。遺存状態は比較的良好であった。明黄褐色（10YR6/6）

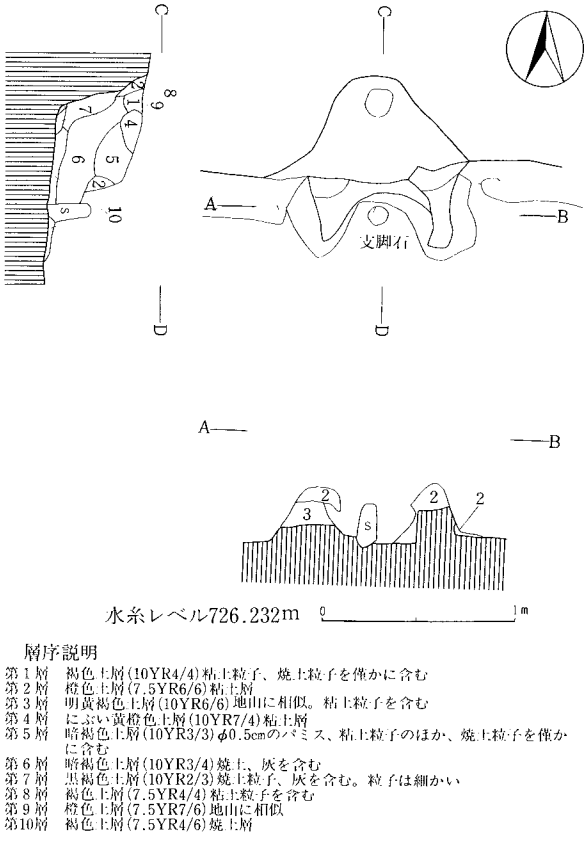


第137図　第42号住居址実測図

土および地山を掘り残して袖芯とし、橙色（7.5YR6/6）、にぶい黄橙色（10YR7/4）粘土により構築されていた。また火床部では軽石製の支脚石が認められた。

ピットは総計５基検出された。このうち、P_1～P_4が主柱穴、P_5が貯蔵穴と考えられる。

周溝は、カマド部分を除き全周していた。



層序説明
第１層　褐色土層（10YR4/4）粘土粒子、焼土粒子を僅かに含む
第２層　橙色土層（7.5YR6/6）粘土層
第３層　明黄褐色土層（10YR6/6）地山に相似。粘土粒子を含む
第４層　にぶい黄橙色土層（10YR7/4）粘土層
第５層　暗褐色土層（10YR3/3）φ0.5cmのパミス、粘土粒子のほか、焼土粒子を僅かに含む
第６層　暗褐色土層（10YR3/4）焼土、灰を含む
第７層　黒褐色土層（10YR2/3）焼土粒子、灰を含む。粒子は細かい
第８層　褐色土層（7.5YR4/4）粘土粒子を含む
第９層　橙色土層（7.5YR7/6）地山に相似
第10層　褐色土層（7.5YR4/6）焼土層

第138図　第42号住居址カマド実測図

遺物（第340・364・367・368図、図版51・74・77・78）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、鉄製品、石製品が出土している。

このうち、図示したものに土師器球胴甕、鉄製品、石製品がある。

鉄製品（第364図16）は、刀子である。

石製品には、滑石製臼玉（第367図43）と滑石製紡錘車（第368図６）がある。

紡錘車は、重さ70ｇを量る。

本住居址の所産期は、古墳時代後期後半に比定される。

42）第43号住居址

遺構（第139・140図）

本住居址は、Ｅ・Ｄ－５グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

調査し得た部分で、東西297cm、南北275cmを測る。

カマドを中心とする主軸方位は、Ｎ－３°－Ｅを示す。住居址覆土は、６層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、73～76.5cmを測る。

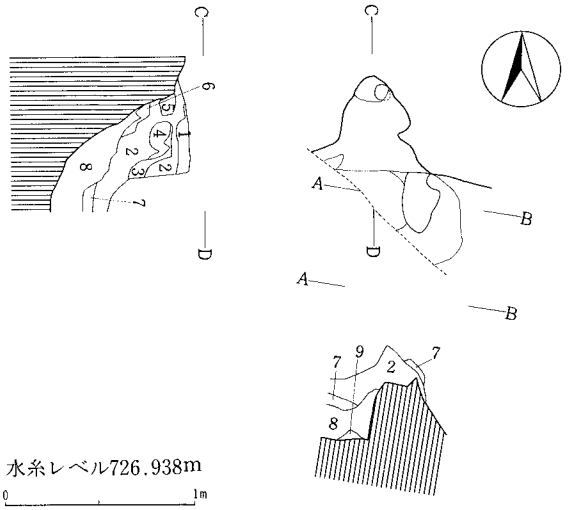
カマドは、北壁ほぼ中央部に位置すると思われる。全体を調査できなかったが、遺存状態は比較的良好であった。地山を掘り残して袖芯とし、橙色（7.5YR7/6）粘土により構築されていた。

ピットは主柱穴と考えられる１基が検出された。また、周溝は北壁、東壁下で部分的に認められた。

遺物（第340・367図、図版51・77）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、金属製品が出土している。このうち、図示したものに黒色土器杯と金属製品として金環（第367図19）がある。

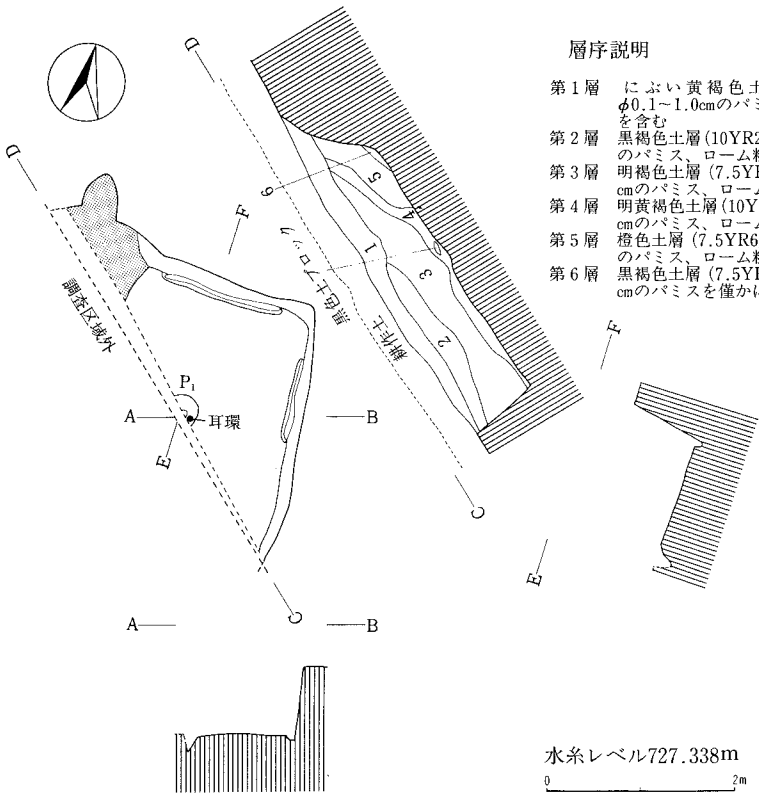
本住居址の所産期は、古墳時代後期後半に比定される。



層序説明

第1層　橙色土層(7.5YR7/6)粘土層
第2層　明褐色土層(7.5YR5/6)φ0.1～0.5cmのパミス、ローム粒子を含む。粘性はない
第3層　明赤褐色土層(5YR5/6)粘土層
第4層　黒褐色土層(10YR3/2)φ0.1～0.3cmのパミスを含む。締っていない
第5層　極暗赤褐色土層(5YR2/4)黒色土ブロックを含む
第6層　黒褐色土層(10YR2/2)締っていない
第7層　明赤褐色土層(2.5YR5/8)焼土層
第8層　黒褐色土層(10YR2/3)　締っていない
第9層　褐灰色土層(10YR4/1)灰層

第139図　第43号住居址カマド実測図



層序説明

第1層　にぶい黄褐色土層（10YR5/4）φ0.1～1.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第2層　黒褐色土層(10YR2/3)φ0.5～1.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第3層　明褐色土層（7.5YR5/6）φ0.2～1.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第4層　明黄褐色土層(10YR6/6)φ0.2～1.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第5層　橙色土層（7.5YR6/6）φ0.2～0.5cmのパミス、ローム粒子を含む
第6層　黒褐色土層（7.5YR3/2）φ0.3～0.5cmのパミスを僅かに含む

第140図　第43号住居址実測図

43）第44号住居址

遺構（第141・142図、図版10）

本住居址は、Ｅ－５グリッドに位置する。第18・31・33号住居址、第２号溝址と重複関係を有し、第18・31・33号住居址、第２号溝址により切られている。

東西・南北とも推定値で、各々473cm、460cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。

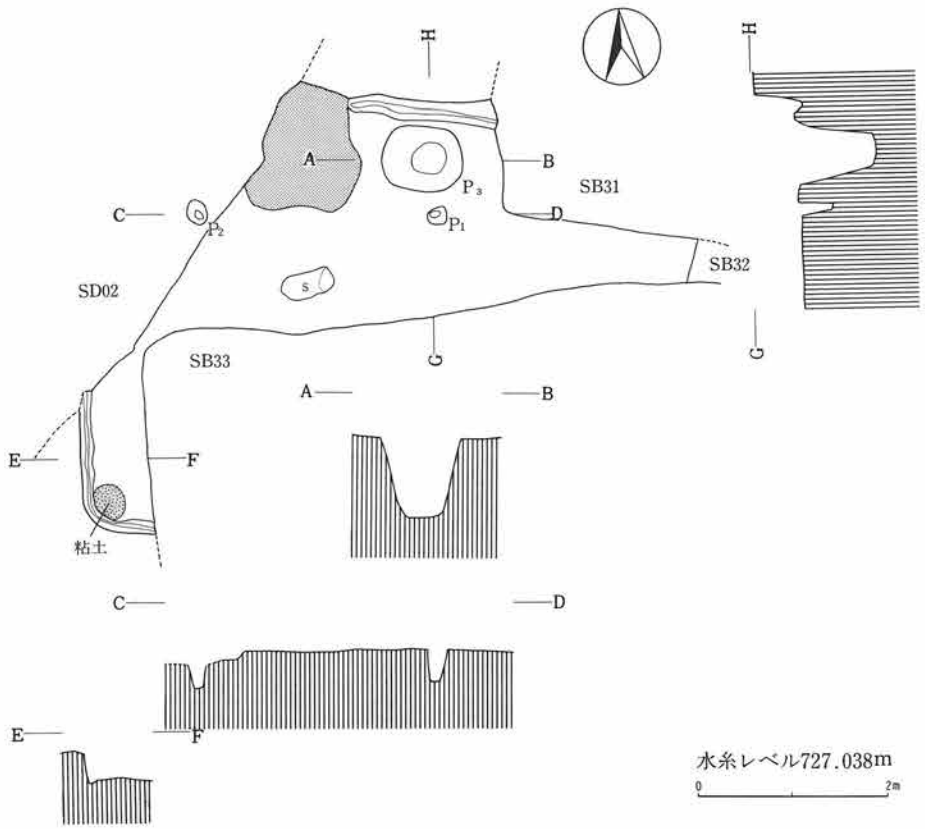
カマドを中心とする主軸方位は、Ｎ－５°－Ｅを示す。確認面からの壁高は、26～41cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。遺存状態は、比較的良好であった。地山を掘り残して袖芯とし、橙色（7.5YR6/6）粘土により構築されていた。また、焚口部および支脚石には加工した軽石が用いられていた。

ピットは総計３基検出された。このうち、P_1・P_2が主柱穴、P_3は位置・規模から貯蔵穴と考えられる。周溝は、カマド部分を除き、残存部で認められたことから、おそらく全周していたものと思われる。また、南東コーナーでは粘土が認められた。

遺物（第340図、図版51）

土師器片、黒色土器片、須恵器片のほか、自然遺物として、炭化材、カマド内から獣骨が出土



第141図　第44号住居址実測図

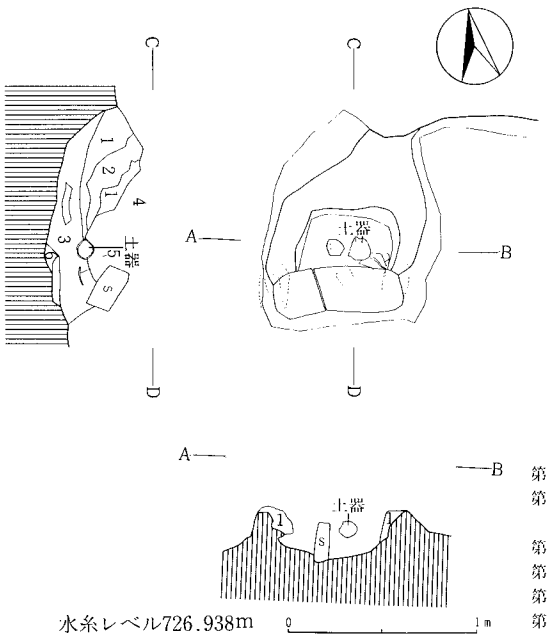
している。

このうち、図示したものに土師器杯・小型甕・長胴甕・手づくね土器、須恵器蓋がある。

土師器小型甕・長胴甕・手づくね土器がカマド内から、須恵器蓋が貯蔵穴内からの出土である。

獣骨については後述する。

本住居址の所産期は、古墳時代後期中葉に比定される。



層序説明
第1層　橙色土層（7.5YR6/6）粘土層
第2層　褐色土層（10YR4/6）φ0.5cm前後のパミス、粘土粒子、若干の炭を含む
第3層　褐色土層（10YR4/4）焼土粒子を含む
第4層　にぶい黄橙色土層（10YR7/3）灰層
第5層　橙色土層（7.5YR6/8）焼土層
第6層　暗褐色土層（10YR3/4）ローム粒子を含む。パミスは含まない

第142図　第44号住居址カマド実測図

44）第45号住居址

遺構（第143・144図、図版10）

本住居址は、F－6グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

東西785cm、南北766cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、N－1°－Eを示す。住居址覆土は、3層に区分される。

確認面からの壁高は、20～50cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。遺存状態は、比較的良好であった。地山を掘り残して袖芯とし、にぶい黄橙色（10YR6/4）粘土を主体に構築されていた。

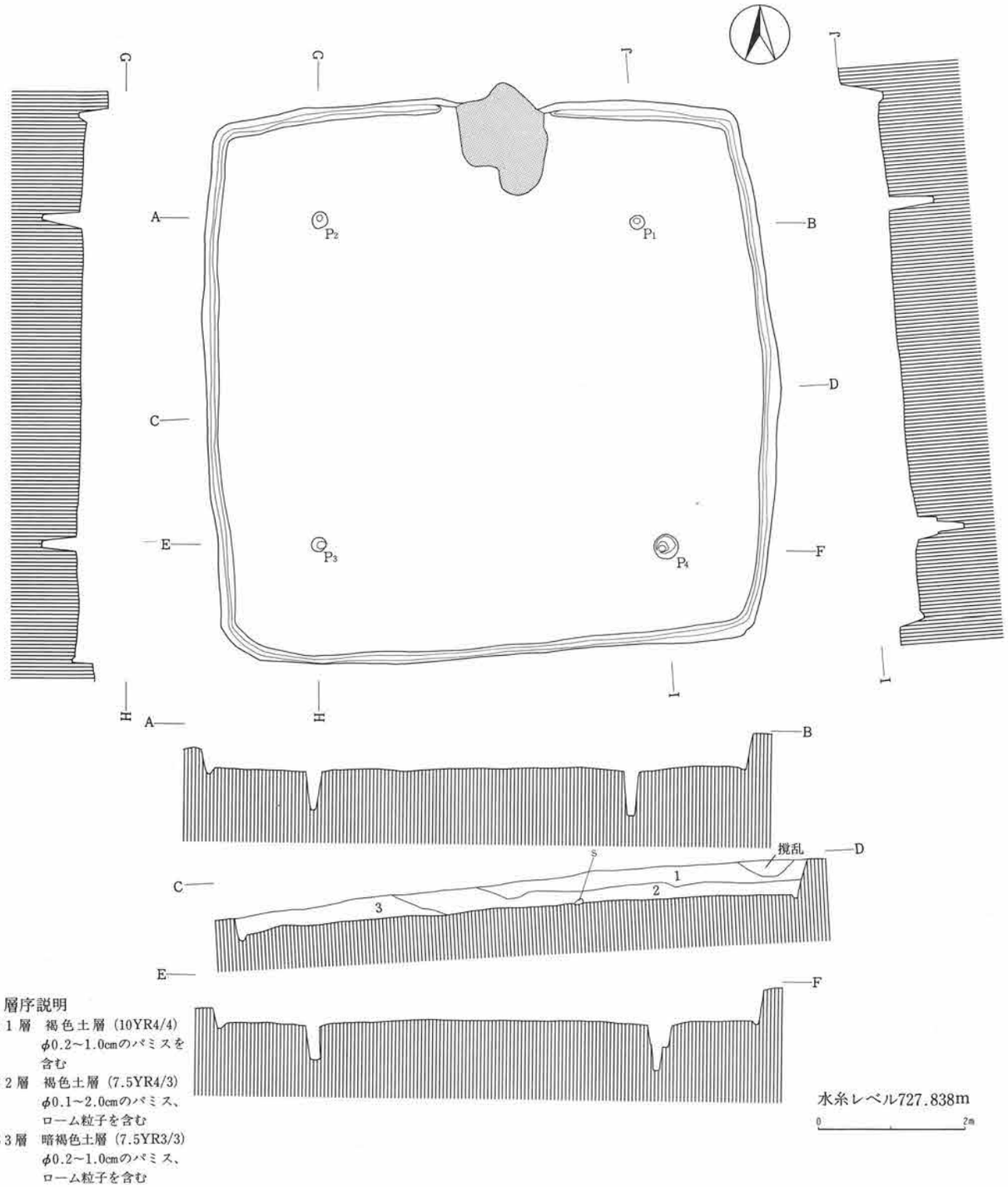
ピットは主柱穴と考えられる4基が検出された。

周溝は、カマド部分を除き全周していた。

遺物（第341図、図版52）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、灰釉陶器片が出土している。このうち、図示したものに、土師器鉢・甑・小型壺、黒色土器高杯がある。甑は2点出土しているが、2は焼成前に底部に穿孔された複数孔を焼成後に打ち欠き、孔径を大きくしている。また、5は瓠形とも言える器形で、稀有な例である。

本住居址の所産期は、古墳時代後期中葉に比定される。



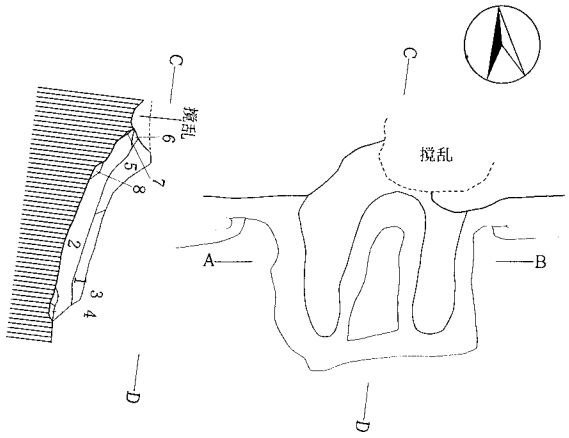
層序説明

第１層　褐色土層（10YR4/4）
φ0.2～1.0cmのパミスを含む

第２層　褐色土層（7.5YR4/4）
φ0.1～2.0cmのパミス、ローム粒子を含む

第３層　暗褐色土層（7.5YR3/3）
φ0.2～1.0cmのパミス、ローム粒子を含む

第143図　第45号住居址実測図



層序説明

第1層　明褐色土層(7.5YR5/6)焼土粒子を多く含む
第2層　にぶい黄褐色土層(10YR5/4)焼土粒子、ローム粒子を含む
第3層　明黄褐色土層(10YR6/6)灰層
第4層　明褐色土層(7.5YR5/8)焼土層
第5層　褐色土層(10YR4/4)φ0.5cm前後のパミスを含む。揃っていない
第6層　明黄褐色土層(10YR7/6)地山に相似
第7層　褐色土層(10YR4/6)粘土層
第8層　褐色土層(7.5YR4/4)粘土層
第9層　にぶい黄橙色土層(10YR6/4)粘土層

第144図　第45号住居址カマド実測図

45）第46号住居址

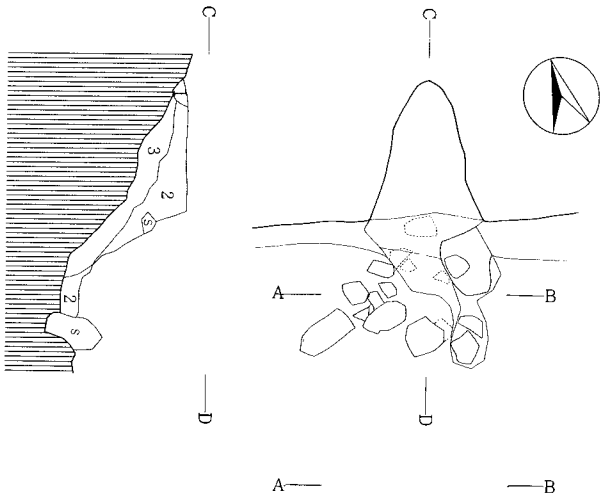
遺構（第145・146図、図版10）

本住居址は、F－6グリッドに位置する。第51号住居址と重複関係を有し、第51号住居址を切って構築されている。

東西388cm、南北392cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、N－7°－Eを示す。

住居址覆土は、暗褐色（10YR3/4）



層序説明

第1層　暗褐色土層(10YR3/4)ローム粒子を含む
第2層　褐色土層(10YR4/4)粘土層
第3層　暗褐色土層(10YR3/3)φ0.5～1.0cmのパミス、ローム粒子を含む。締っていない
第4層　褐色土層(10YR4/6)灰層。炭化物を含む
第5層　明褐色土層(7.5YR5/6)焼土層
第6層　にぶい黄褐色土層(10YR5/4)粘土層

第145図　第46号住居址カマド実測図

土層1層である。確認面からの壁高は、44～70cmを測る。

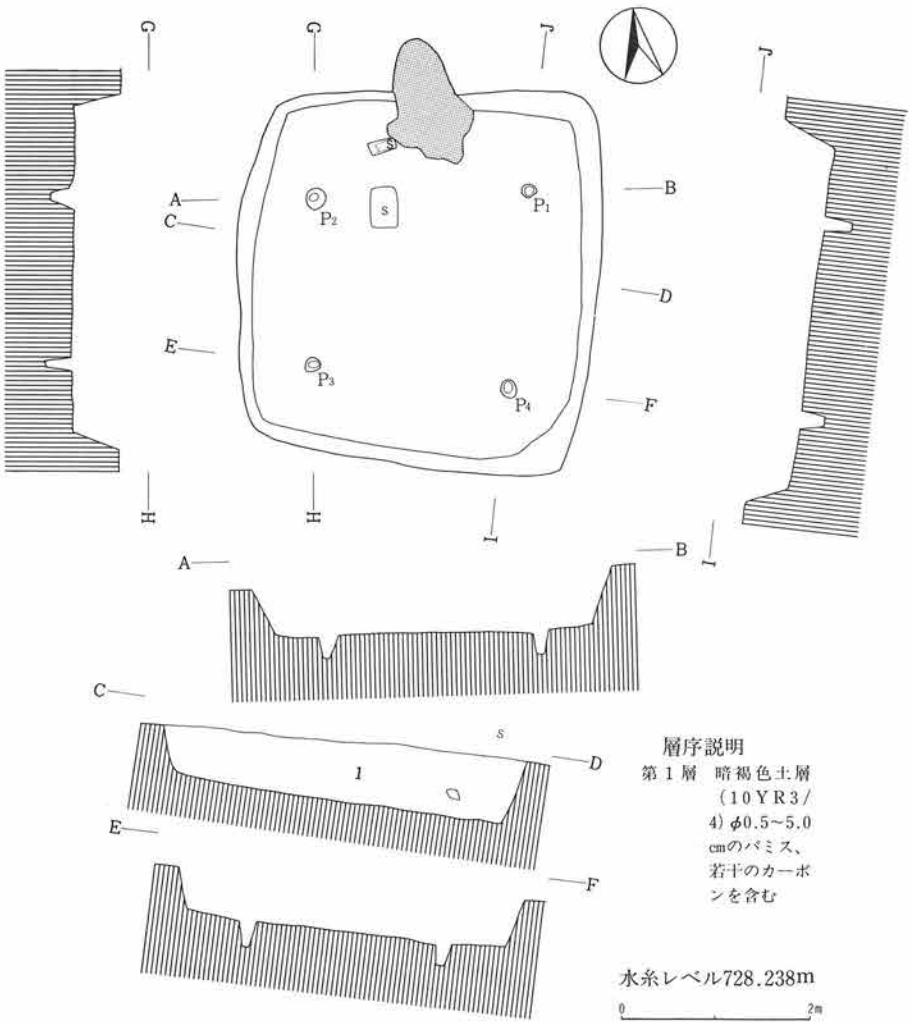
カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。加工した軽石および褐色(10YR4/4)、にぶい黄褐色(10YR5/4) 粘土により構築されていた。

ピットは主柱穴と考えられる4基が検出された。なお、周溝は検出されなかった。

遺物（第341・364・376図、図版52・74・85）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、鉄製品、石製品のほか、自然遺物として獣骨が南部から出土している。このうち、図示したものに須恵器杯3点と、鉄製品2点、石製品があり、獣骨については後述する。鉄製品には、刀子（第364図17）と紡錘車の紡軸と考えられるもの（第364図18）がある。石製品は、黒曜石製の石鏃である。

本住居址の所産期は、土器片中に黒色土器椀の破片が認められること、重複関係から平安時代



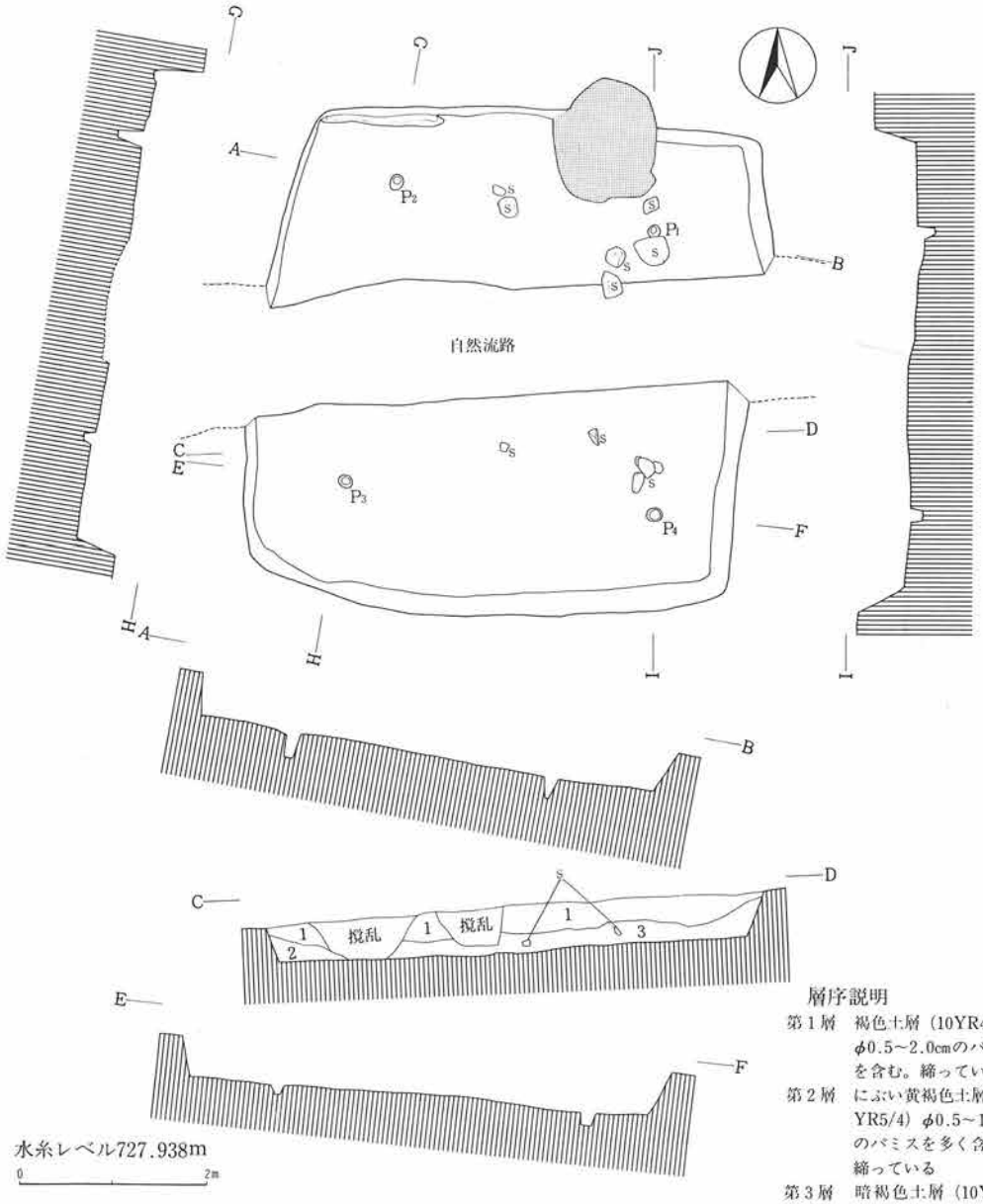
第146図　第46号住居址実測図

に比定される。

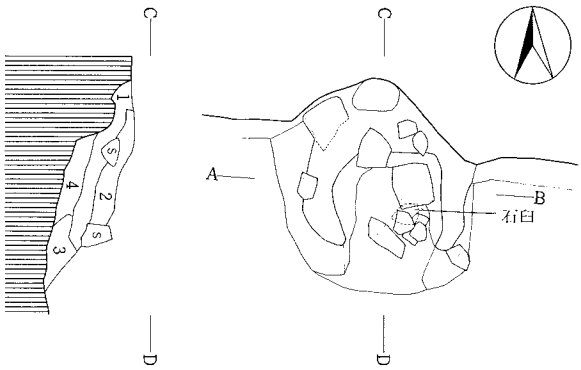
46）第47号住居址

遺構（第147・148図、図版10）

本住居址は、F－5・6グリッドに位置する。第48・50号住居址、自然流路と重複関係を有し、第48・50号住居址を切り、自然流路に切られている。



第147図　第47号住居址実測図



水糸レベル727.738m　0　1m

層序説明
第1層　褐色土層(10YR4/4)粘土粒子を含む
第2層　にぶい黄褐色土層(10YR5/4)粘土層
第3層　明褐色土層(7.5YR5/6)焼土層
第4層　にぶい黄褐色土層(10YR4/3)焼土粒子、灰を含む

第148図　第47号住居址カマド実測図

東西530cm、南北545cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、N－11°－Eを示す。

住居址覆土は、3層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、38～48cmを測る。

カマドは、北壁東寄りに位置する。

遺存状態は比較的良好で、軽石、安山岩、集塊岩とにぶい黄褐色(10YR5/4)粘土により構築されていた。

ピットは主柱穴と考えられる4基が検出された。

周溝は、北壁下で部分的に認められた。

遺物（第341・364・374図、図版52・74・83）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、鉄製品、石製品、鉄滓のほか、自然遺物として炭化材、獣骨が出土している。このうち、図示したものに黒色土器杯4点、鉄製品4点、石製品1点がある。図示した土器は、4点とも墨書土器で、判読できたものには「□家」（第341図1）がある。鉄製品（第364図）には、鍬鋤先(19)、鉄鏃(20)、刀子(21)と不明品(22)がある。石製品（第374図7）は、石臼である。

本住居址の所産期は、平安時代に比定される。

47）第48号住居址

遺構（第149・150図、図版11）

本住居址は、F－5・6グリッドに位置する。第47・50号住居址と重複関係を有し、第47号住居址に切られ、第50号住居址を切って構築されている。

東西478cm、南北505cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、N－1°－Eを示す。確認面からの壁高は、9～51.5cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置するが遺存状態は悪い。おそらく、軽石および粘土により構築されていたものと思われる。

ピットは総計5基検出された。このうち、P_1～P_4が主柱穴、P_5は出入口部の施設に関連するものであろう。周溝は、検出されなかった。

遺物（第364・374図、図版74・83）

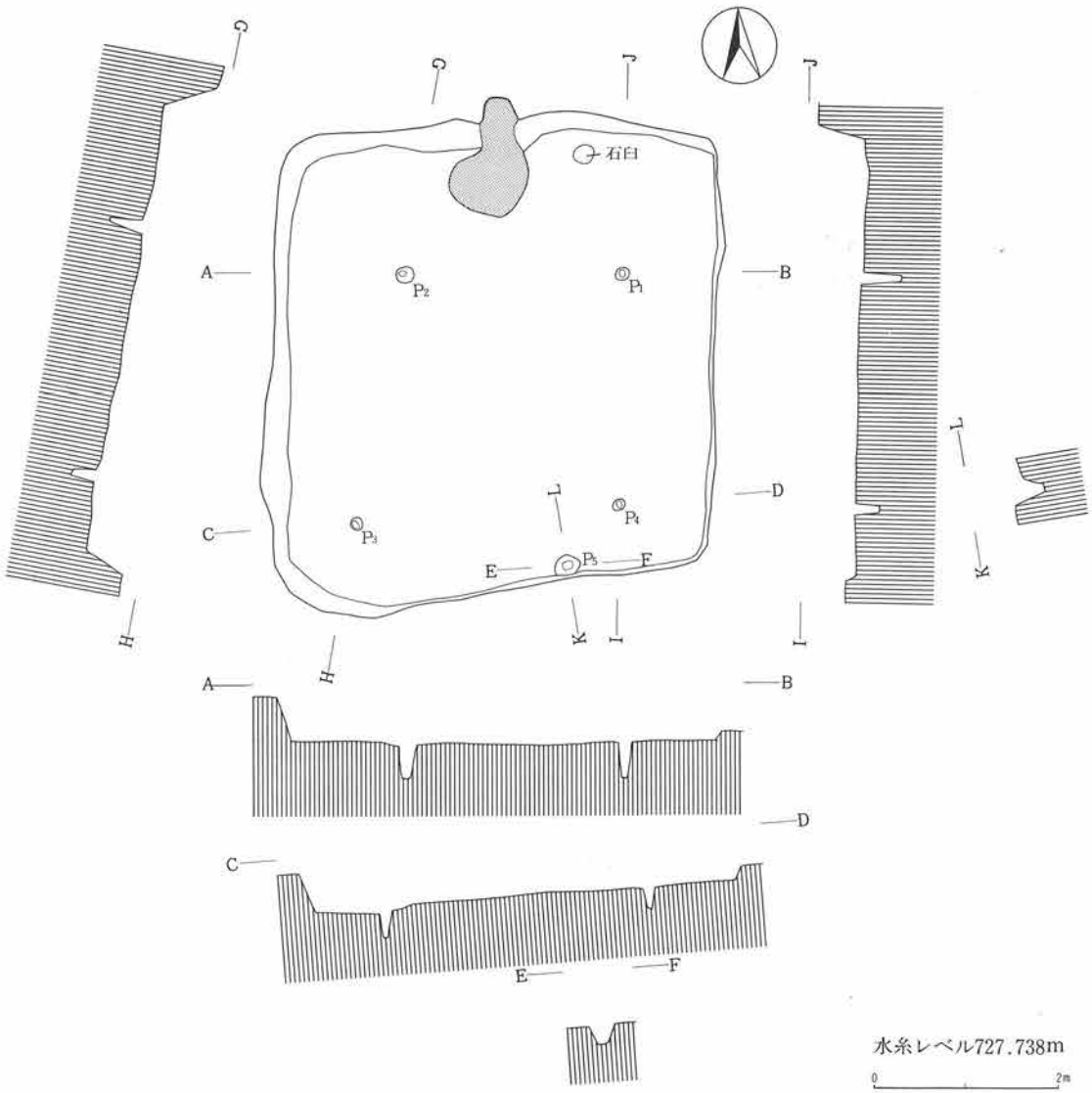
土師器片、黒色土器片、須恵器片、鉄製品、石製品、鉄滓のほか、自然遺物として住居址北部から炭化種子が出土している。このうち、図示したものに鉄製品３点と石製品１点がある。

鉄製品（第364図）は、刀子（23・24）と馬具の一部と考えられるもの（25）である。

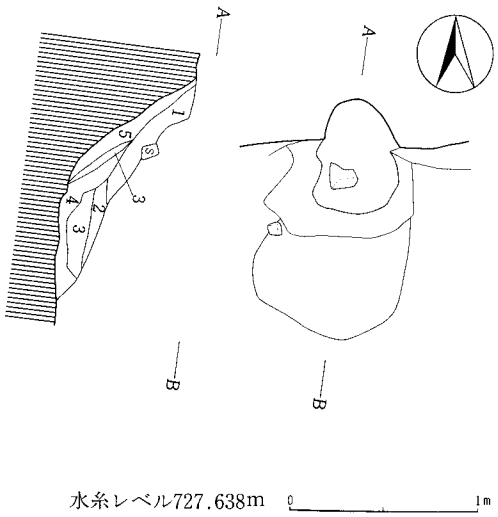
石製品（第374図８）は、河床礫を用いた石臼である。

なお、炭化種子については後述する。

本住居址の所産期は、出土土器の中に、底部ヘラキリと糸切りの須恵器杯の破片が認められることから、奈良時代後半に比定される。



第149図　第48号住居址実測図

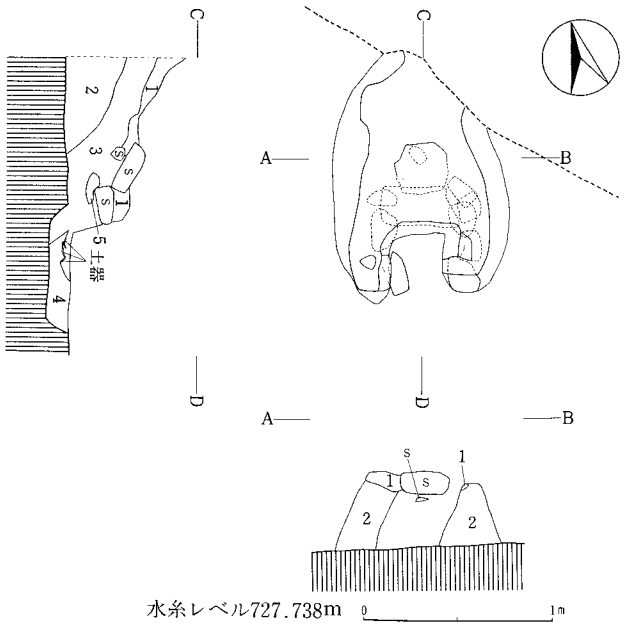


層序説明
第1層　にぶい褐色土層(7.5YR5/4)φ0.2～0.4cmのパミスを含む
第2層　褐色土層(7.5YR4/3)φ0.1～0.5cmのパミスを含む
第3層　明赤褐色土層(7.5YR5/8)φ0.5～0.8cmのパミスを僅かに含むほか、粘土を多く含む
第4層　にぶい赤褐色土層(7.5YR5/4)φ0.2～0.5cmのパミスを僅かに含むほか、焼土を含む
第5層　黒褐色土層(7.5YR3/2)φ0.3～0.5cmのパミスを僅かに含む

第150図　第48号住居址カマド実測図

48）第49号住居址

遺構（第151・152図、図版11）



層序説明
第1層　にぶい褐色土層(7.5YR5/4)粘土層
第2層　暗褐色土層(10YR3/4)φ0.5～1.0cmのパミスのほか、僅かに粘土粒子を含む。袖構築土
第3層　黒褐色土層(10YR2/3)φ0.5～1.0cmのパミスのほか、僅かに粘土粒子を含む。
第4層　褐色土層(10YR4/4)僅かに焼土粒子を含む。締っていない
第5層　暗褐色土層(10YR3/3)粘土粒子を含む

第151図　第49号住居址カマド実測図

本住居址は、F－5グリッドに位置する。第55・58号住居址と重複関係を有し、第55・58号住居址を切って構築されている。

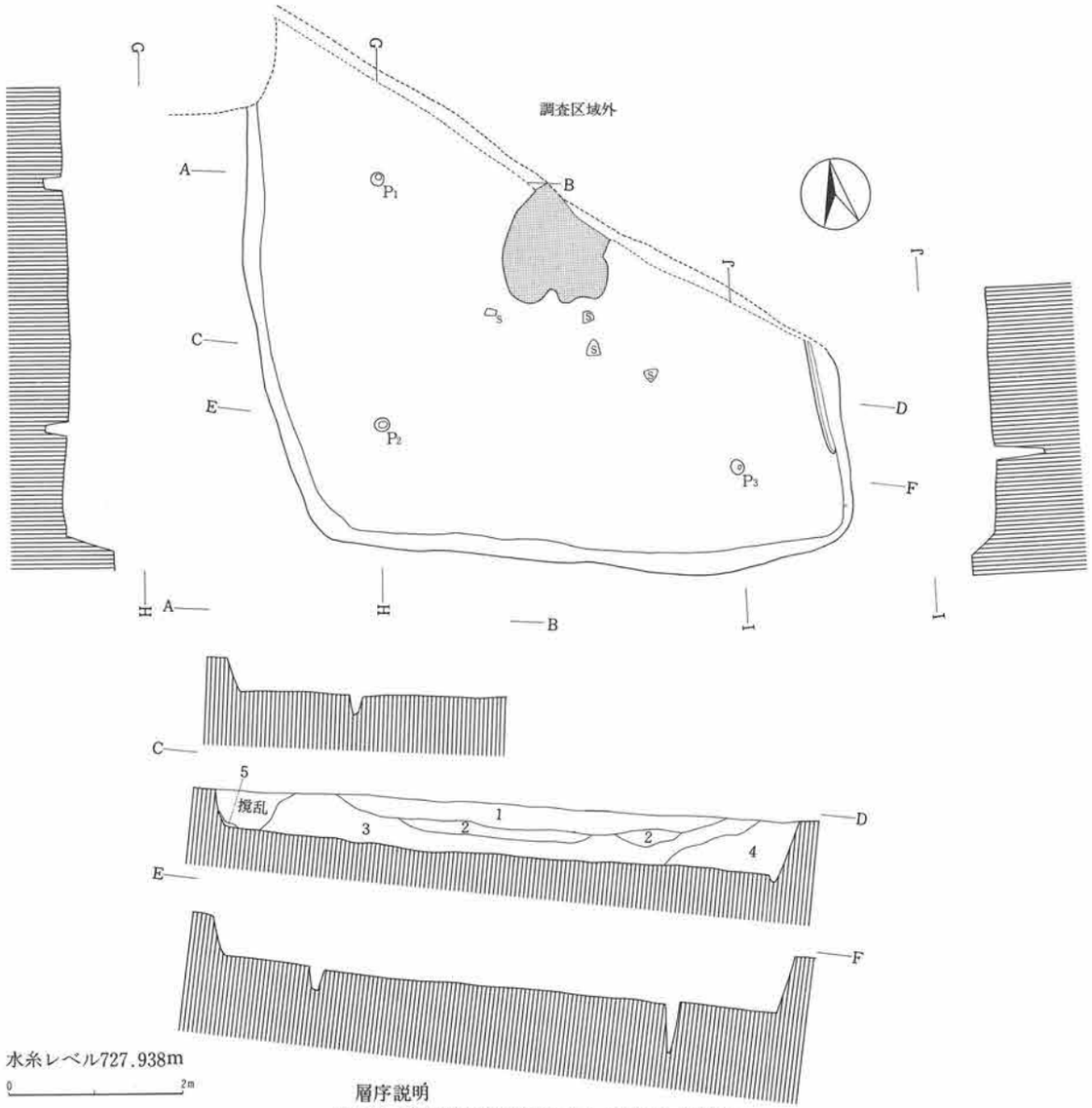
東西600cm、南北は調査し得た範囲で510cmを測る。

カマドを中心とする主軸方位は、N－16.5°－Eを示す。

住居址覆土は、5層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、28～67cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置するものと思われる。カマドの位置からすると北壁西側が露呈するはずであるが、確認面および掘り下げ段階においても明確にし得なかった。

カマドの遺存状態は、比較的良



層序説明

第1層　褐色土層(10YR4/4)φ0.5～1.0cmのパミスを含む
第2層　暗褐色土層(10YR3/3)黒色土ブロック、灰を含む
第3層　暗褐色土層(10YR3/4)φ0.5～2.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第4層　褐色土層(7.5YR4/3)φ0.5～1.0cmのパミス、ロームブロックを含む
第5層　にぶい黄褐色土層(10YR5/4)φ0.5～3.0cmのパミス、ローム粒子を含む

第152図　第49号住居址実測図

好であった。軽石および暗褐色（10YR3/4）土を袖芯に用い、にぶい褐色（7.5YR5/4）粘土により構築されていた。

ピットは主柱穴と考えられる3基が検出された。周溝は、東壁下で部分的に認められた。

遺物（第341・342・364・365・370図、図版52・53・74・75・80）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、灰釉陶器片、鉄製品、石製品、鉄滓のほか、自然遺物として炭化種子、獣骨が出土している。このうち、図示したものに土師器杯・甕、黒色土器杯・椀、軟質須恵器杯、須恵器横瓶、灰釉陶器椀、鉄製品、石製品がある。土器では、第41号住居址に次いで墨書土器の出土が多く、文字の判読できたものに、「大井」（第341図2）、「寺」もしくは「守」（6）、「下」（9）がある。

鉄製品（第364・365図）は、鉄鏃（26）、刀子（27・1・2）、鎌（28・29）、不明品（3）の7点である。石製品（第370図6）は、凝灰岩製の砥石で重さ110gを量る。

自然遺物の炭化種子、獣骨については後述する。

本住居址の所産期は、平安時代に比定される。

49）第50号住居址

遺構（第153・154図、図版11）

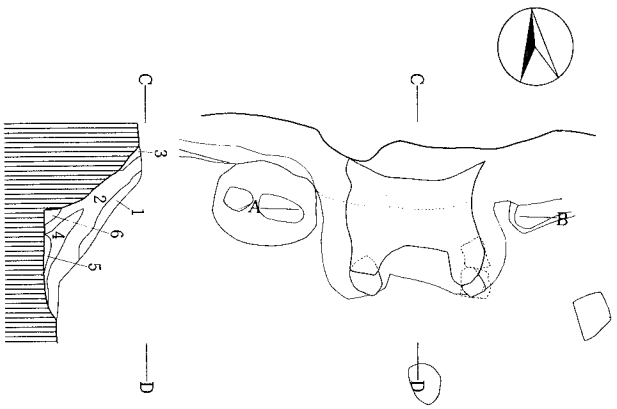
本住居址は、F－5グリッドに位置する。第47・48号住居址と重複関係を有し、第47・48号住居址に切られている。

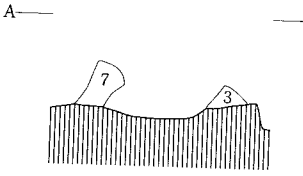
東西540cm、南北472cmを測り、平面プランは、東西に長い隅丸長方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、N－10.5°－Eを示す。

住居址覆土は、2層に区分され、自然堆積と考えられる。

確認面からの壁高は、43～57





層序説明
第1層　褐色土層(7.5YR4/4)粘土粒子を多く含む
第2層　暗褐色土層(10YR3/4)粘土粒子、焼土粒子を含む。締っていない
第3層　明赤褐色土層(5YR5/6)粘土層
第4層　明褐色土層(7.5YR5/6)灰層
第5層　明赤褐色土層(5YR5/8)焼土層
第6層　暗褐色土層(10YR3/3)粘土粒子を含む
第7層　褐色土層(10YR4/4)粘土粒子を含む

水糸レベル727.638m　0　1m

第153図　第50号住居址カマド実測図

cmを測る。カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。遺存状態は、比較的良好で、褐色（10YR4/4）土および軽石を袖芯とし、明赤褐色（5YR5/6）粘土により構築されていた。

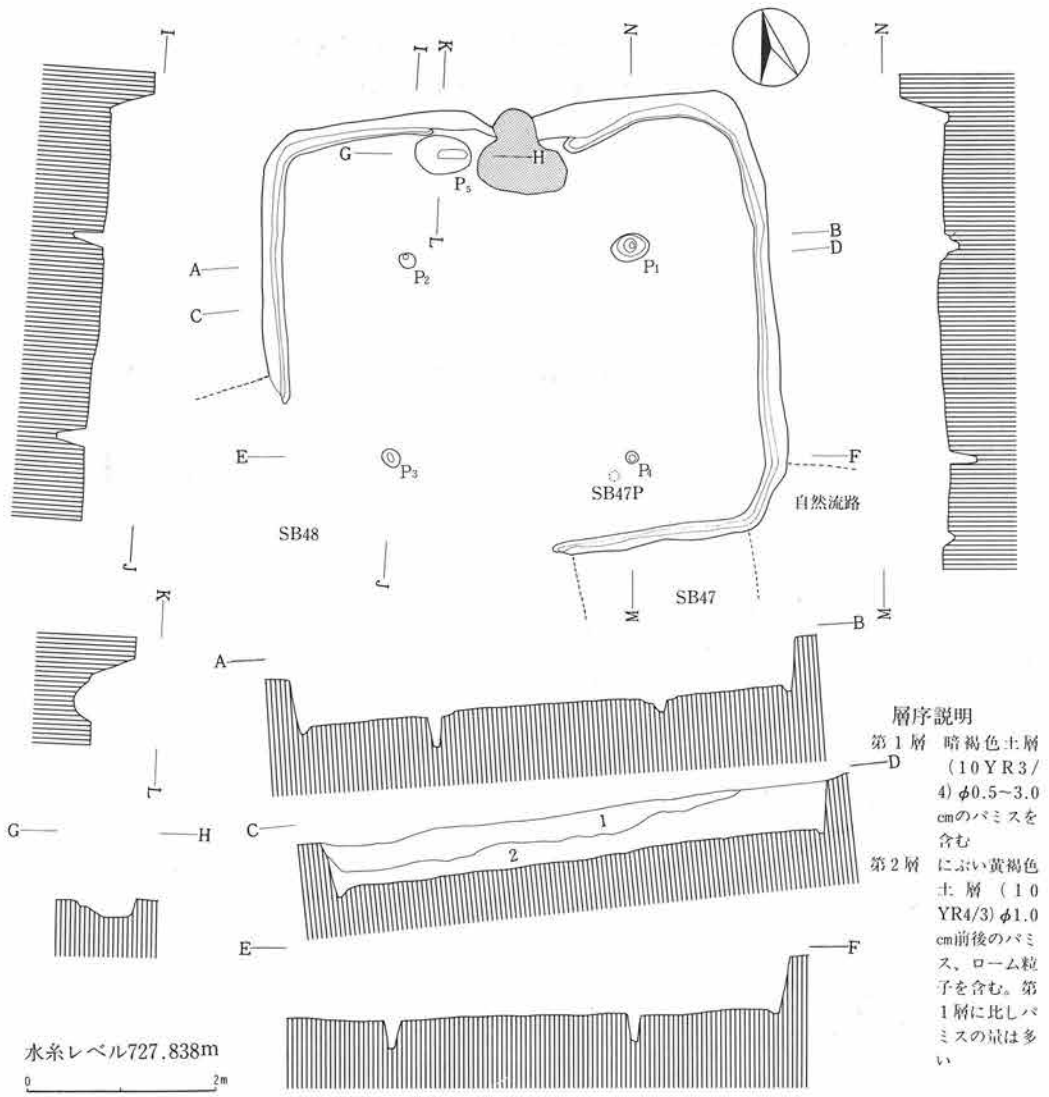
ピットは総計5基検出された。このうち、P_1～P_4が主柱穴、P_5が貯蔵穴と考えられる。

また、周溝は、カマド部分を除き全周していたものと思われる。

遺物（第342・365図、図版53・75）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、鉄製品、鉄滓が出土している。このうち、図示したものに須恵器椀、鉄製品がある。鉄製品（第365図9）は、刀子と考えられる。

本住居址の所産期は、奈良時代前半から中葉に比定される。



第154図　第50号住居址実測図

50）第51号住居址

遺構（第155図、図版11）

本住居址は、F－6グリッドに位置する。

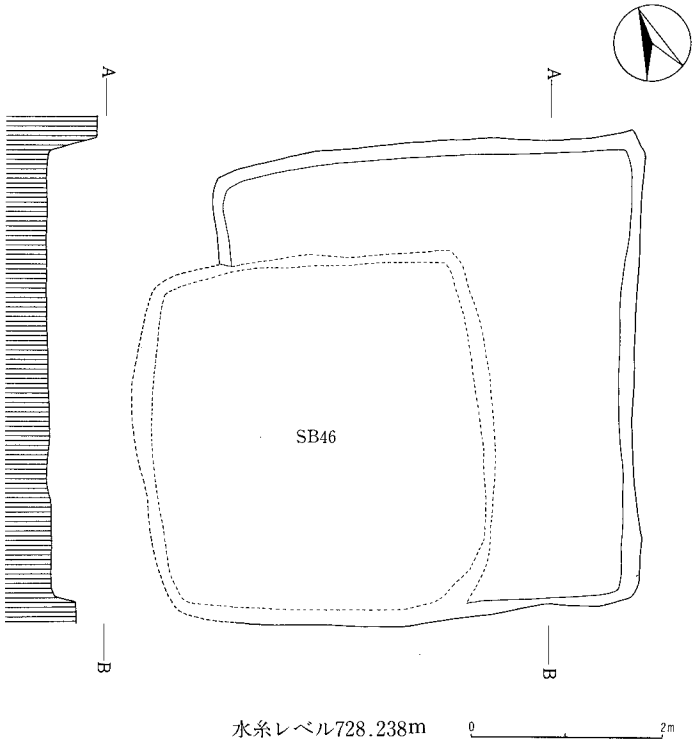
第46・54号住居址と重複関係を有し、第54号住居址を切り、第46号住居址に切られている。

東西445cm、南北495cmを測り、平面プランは、南北にやや長い隅丸長方形を呈する。

南北軸の方位は、N－23°－Eを示す。

確認面からの壁高は、22～50cmを測る。

カマド、焼土、ピット、周溝等の施設は確認できなかった。



第155図　第51号住居址実測図

遺物

土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土しているが、図示し得るものは皆無である。

本住居址の所産期は、重複関係および出土土器片から奈良時代前半に比定される。

51）第52号住居址

遺構（第156・157図、図版11）

本住居址は、F・G－6グリッドに位置する。用地の関係から、西側と東側を2年度にわたり調査した。第99号住居址と重複関係を有し、第99号住居址を切って構築されている。

東西425cm、南北452cmを測り、平面プランは、不整な隅丸方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、N－16.5°－Eを示す。住居址覆土は、黒褐色（7.5YR3/2）土1層である。確認面からの壁高は、3～31cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置するが、遺存状態は悪い。おそらく、褐色（7.5YR4/4）粘土を主体として構築されていたものと思われる。

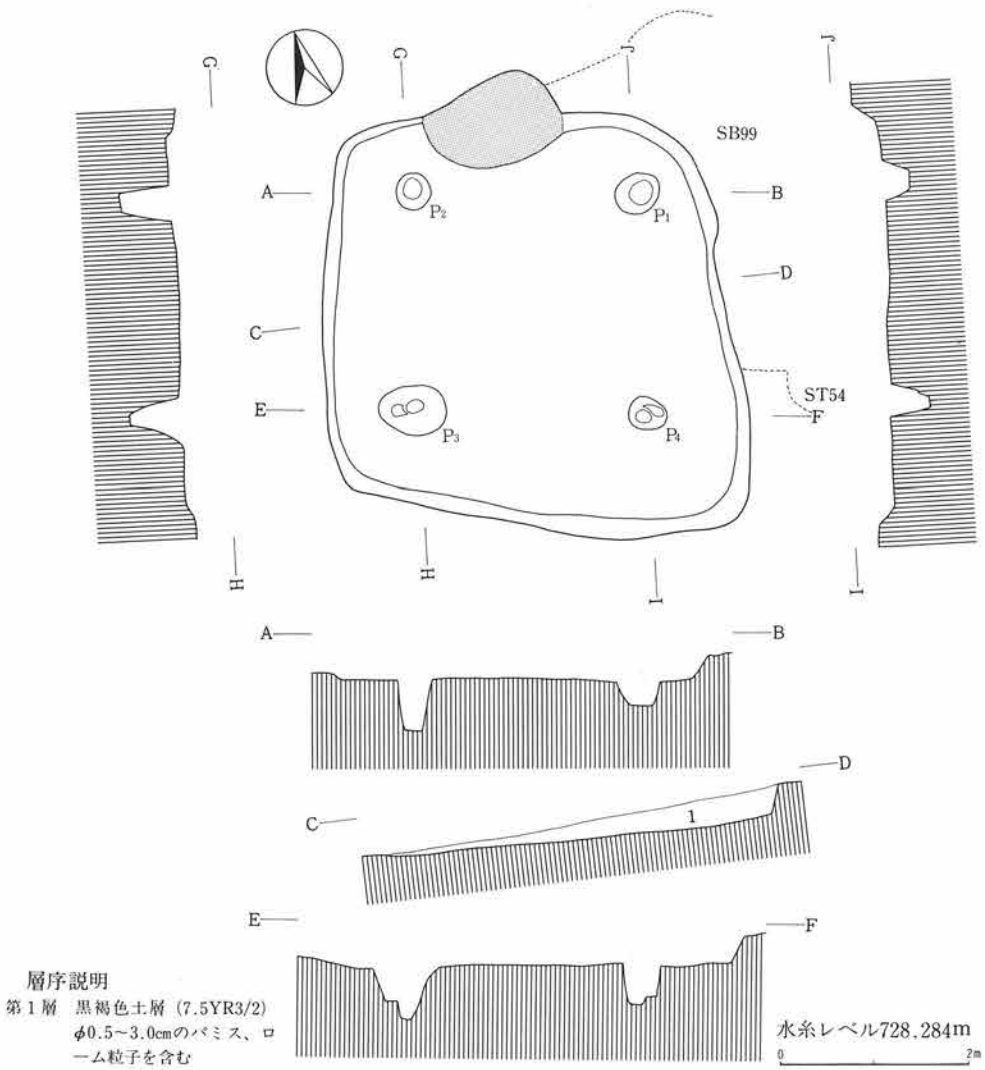
ピットは主柱穴と考えられる4基が検出された。なお、周溝は検出されなかった。

遺物（第365図、図版75）

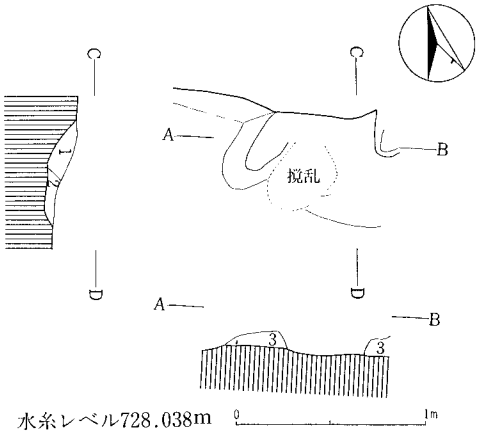
土師器片、黒色土器片、須恵器片、灰釉陶器片、鉄製品が出土している。このうち、図示し得たものは、鉄製品１点にすぎない。

鉄製品（第365図10）は、刀子である。

本住居址の所産期は、出土土器片から平安時代に比定される。



第156図　第52号住居址実測図



層序説明
第１層　暗褐色土層(10YR3/4)焼土、灰を含む
第２層　褐色土層(10YR4/6)灰層
第３層　褐色土層(7.5YR4/4)粘土層

第157図　第52号住居址カマド実測図

52）第53号住居址

遺構（第158・159図、図版11）

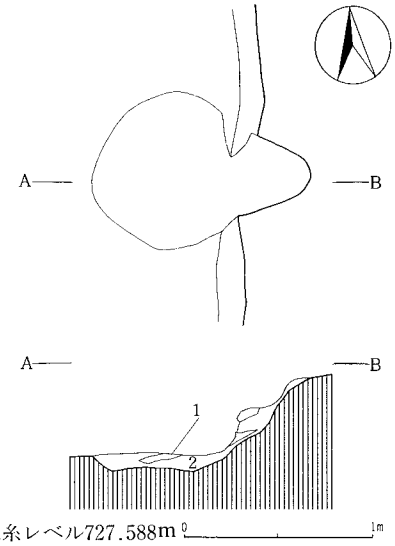
本住居址は、Ｆ－５グリッドに位置する。第78号住居址と重複関係を有し、第78号住居址を切って構築されている。

東西508cm、南北430cmを測り、平面プランは、東西に長い隅丸長方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、Ｎ－３°－Ｓを示す。住居址覆土は、４層に区分されるが、第１層の黒褐色（7.5YR4/2）土が大半を占める。確認面からの壁高は、19.5～43cmを測る。

カマドは、東壁南寄りに位置するが、遺存状態は悪い。おそらく、明褐色(7.5YR5/6）粘土を主体として構築されていたものと思われる。

ピットは総計５基検出された。このうち、P_1～P_4が主柱穴、P_5が貯蔵穴と考えられる。なお、周溝は検出されなかった。



層序説明
第１層　明褐色土層(7.5YR5/6)粘土層
第２層　褐色土層(7.5YR4/4)φ0.5cm前後のパミス、焼土粒子を含む

第158図　第53号住居址カマド実測図

遺物（第342・365図、図版53・75）

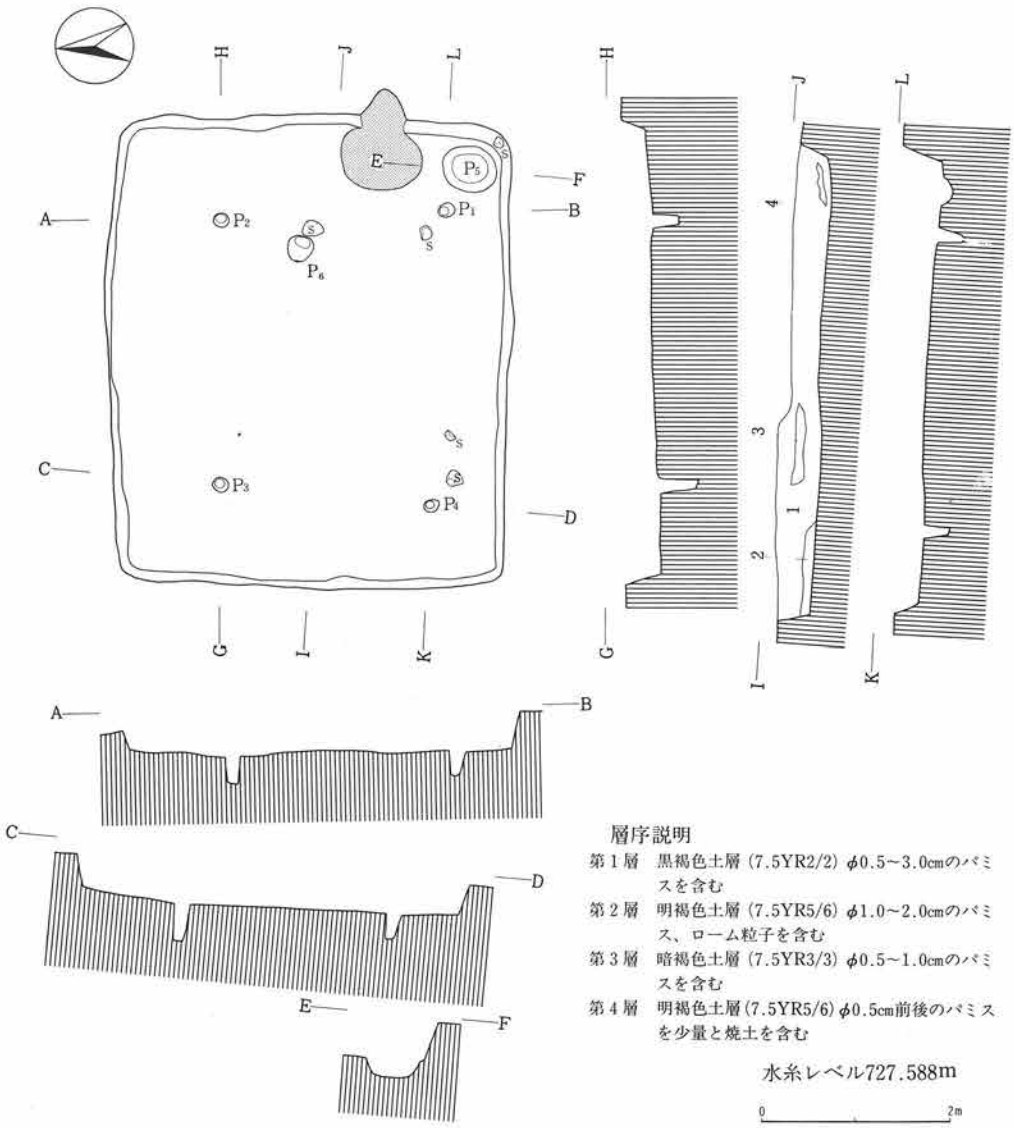
土師器片、黒色土器片、須恵器片、灰釉陶器片、鉄製品のほか、自然遺物としてカマド内から炭化種子、獣骨が出土している。このうち、図示したものに軟質須恵器杯、鉄製品３点がある。

鉄製品（第365図）には、紡錘車（４）、

刀子（5）、火打金具（11）がある。

なお、自然遺物については後述する。

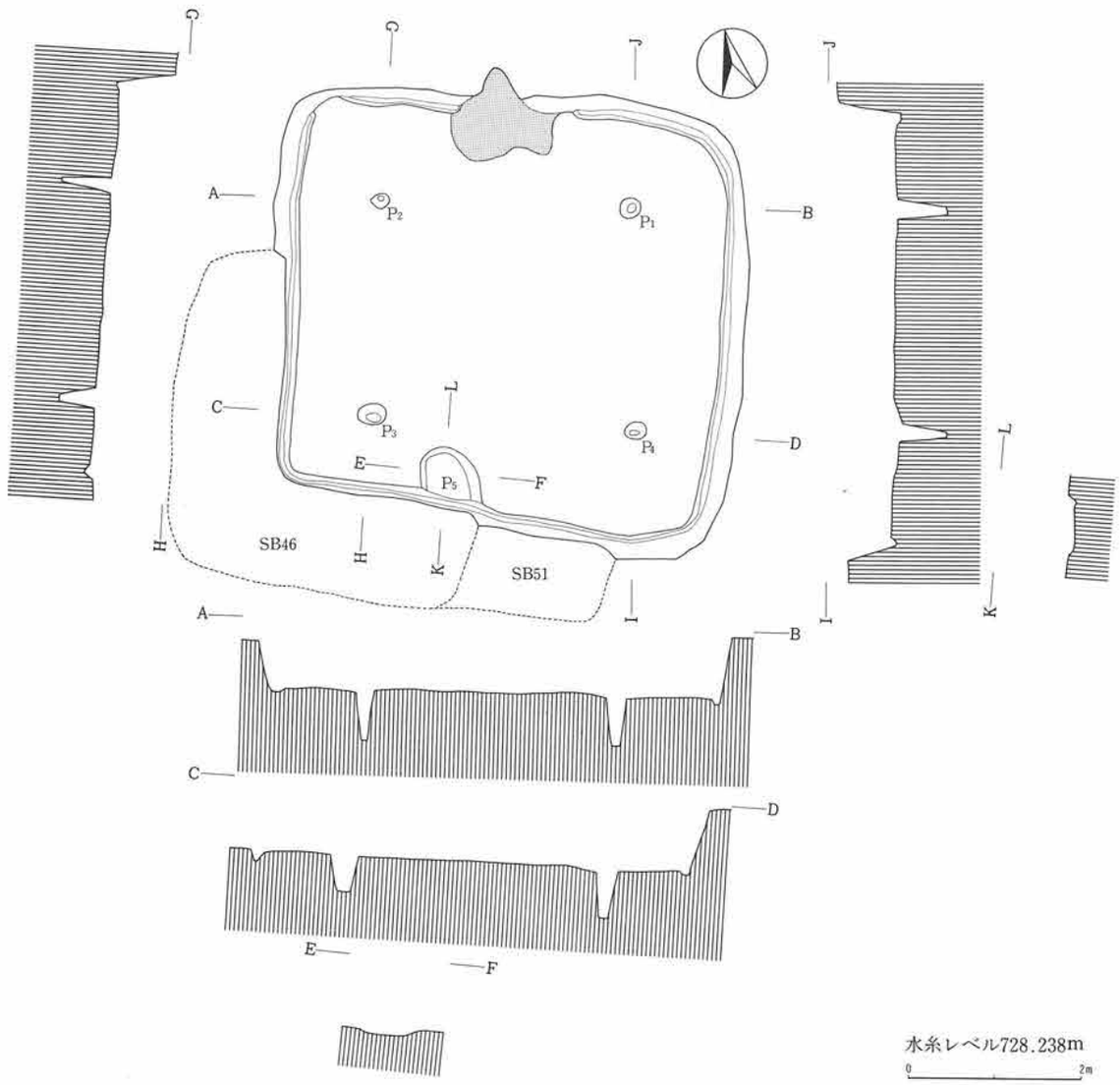
本住居址の所産期は、平安時代に比定される。



第159図　第53号住居址実測図

53）第54号住居址

遺構（第160・161図、図版11）



第160図　第54号住居址実測図

本住居址は、Ｆ－６グリッドに位置する。第46・51号住居址と重複関係を有し、第46・51号住居址に切られている。

東西550cm、南北530cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。

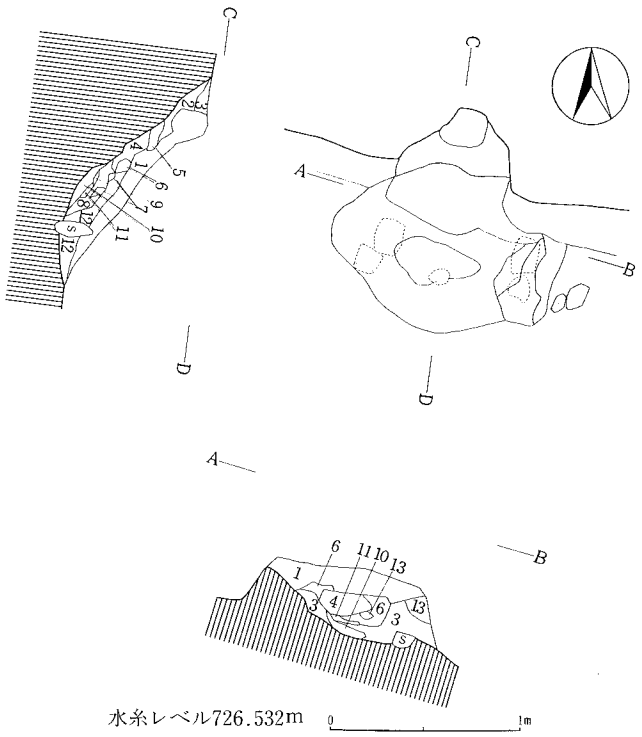
カマドを中心とする主軸方位は、Ｎ－15.5°－Ｅを示す。確認面からの壁高は、49～71cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。遺存状態は、比較的良好で、加工した軽石を袖芯として、褐色（7.5YR4/6）粘土により構築されていた。また、火床部では軽石製の支脚石が認められた。

ピットは総計５基検出された。

このうち、P_1～P_4が主柱穴、P_5は出入口部の施設に関連するものと考えられる。

周溝は、カマド部分、北西コーナーを除いた範囲で認められた。



層序説明

第１層　褐色土層(7.5YR4/4)φ0.2～0.8cmのパミスを含む。粘性あり
第２層　暗赤褐色土層(5YR3/4)粘性はない
第３層　褐色土層(7.5YR4/6)φ0.1～0.5cmのパミスを含む。粘土層
第４層　暗褐色土層(7.5YR3/4)ローム粒子を含む。粘性はない
第５層　明褐色土層(7.5YR5/8)ロームブロック
第６層　赤褐色土層(5YR4/8)焼土層
第７層　暗赤褐色土層(5YR3/6)焼土層
第８層　赤褐色土層(5YR4/6)粘性のない焼土層
第９層　にぶい赤褐色土層(5YR4/4)焼土層
第10層　にぶい黄橙色土層(10YR7/2)灰層
第11層　褐灰色土層(10YR4/1)灰層
第12層　褐色土層(7.5YR4/3)φ0.1～2.0cmのパミスを含む
第13層　にぶい褐色土層(7.5YR5/4)粘土層

第161図　第54号住居址カマド実測図

遺物（第342図、図版53）

土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土している。このうち、図示したものに土師器杯・小型甕、須恵器杯がある。土師器杯は、畿内系暗文を有するものである。

本住居址の所産期は、奈良時代前半に比定される。

54）第55号住居址

遺構（第162図、図版11）

本住居址は、Ｆ－５グリッドに位置する。第49・78・83号住居址と重複関係を有し、第49・78・83号住居址に切られている。

東西611cm、南北は調査範囲内で500cmを測り、平面プランは、おそらく隅丸方形を呈するものと思われる。南北軸の方位は、Ｎ－８°－Ｅを示す。

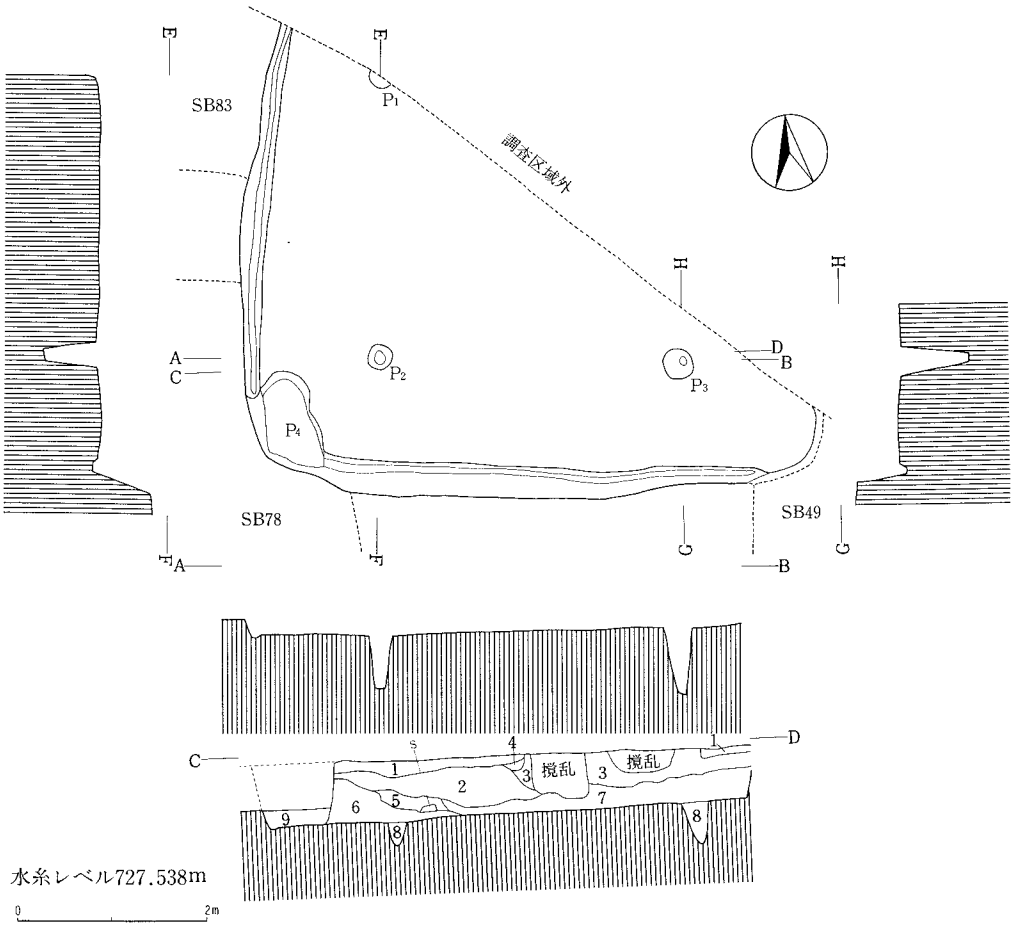
住居址覆土は、９層に区分される。確認面からの壁高は、17～54cmを測る。

ピットは総計４基検出され、このうちP_1～P_3の３基が主柱穴と考えられる。周溝は、おそらく全周していたと思われる。

遺物（第342・365・367図、図版53・75・77）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、石製品、鉄製品、鉄滓のほか、自然遺物として獣骨が出土している。このうち、図示したものに須恵器蓋、黒色土器高杯、石製品、鉄製品がある。

石製品（第367図44）は、滑石製の臼玉である。鉄製品（第365図６）は、麻皮剝器の一部に似る



層序説明

第１層　暗褐色土層(10YR3/4)φ0.2～3.0cmのパミスを僅かに含む
第２層　黒褐色土層(7.5YR2/2)φ0.2～2.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第３層　暗褐色土層(10YR3/3)φ0.2～0.5cmのパミスを僅かに含むほか、ローム粒子を含む
第４層　暗褐色土層(10YR3/3)φ0.3～0.6cmのパミスを僅かに含むほか、ローム粒子を含む
第５層　黒褐色土層(10YR3/2)φ0.2～0.5cmのパミスを僅かに含むほか、ローム粒子を含む
第６層　黒色土層(10YR2/1)φ0.2～0.4cmのパミスを僅かに含む
第７層　黒褐色土層(10YR2/2)φ0.2～1.0cmのパミスを僅かに含むほか、ローム粒子を含む
第８層　褐色土層(10YR4/4)φ0.2～1.0cmのパミスを僅かに含むほか、ローム粒子を含む
第９層　褐色土層(7.5YR4/4)第78号住居址の床構築土、φ0.5～3.0cm前後のパミスを含む。締っている

第162図　第55号住居址実測図

が明確でない。獣骨については後述する。

本住居址の所産期は、古墳時代後期後半に比定される。

55）第56号住居址

遺構（第163・164図、図版12）

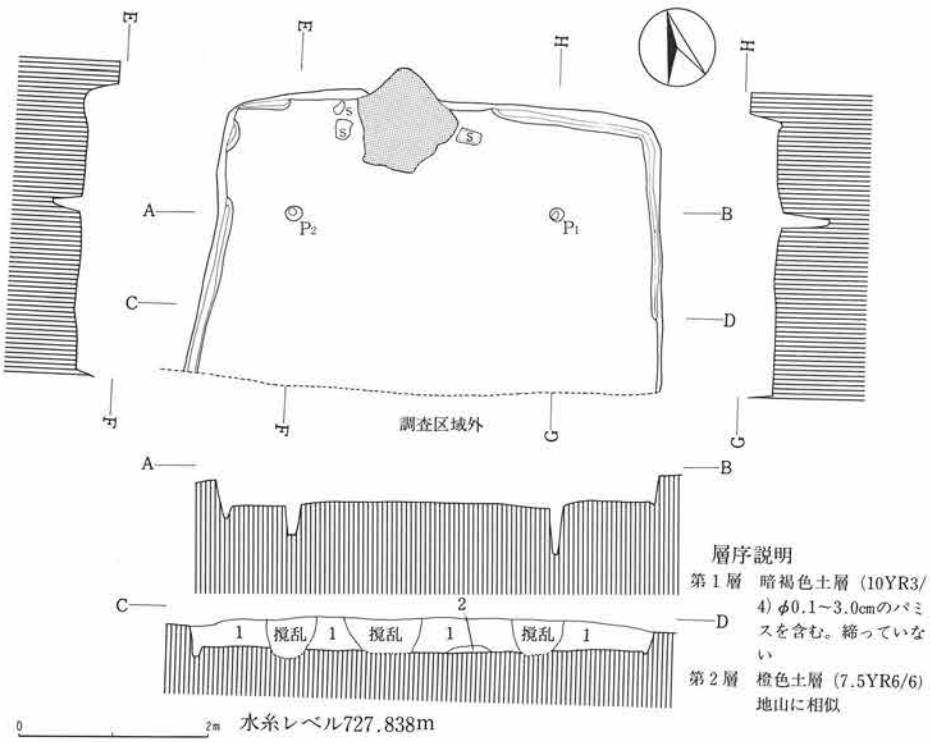
本住居址は、F－6グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

東西497cm、南北は調査範囲内で298cmを測り、平面プランは、おそらく、隅丸方形を呈するものと思われる。

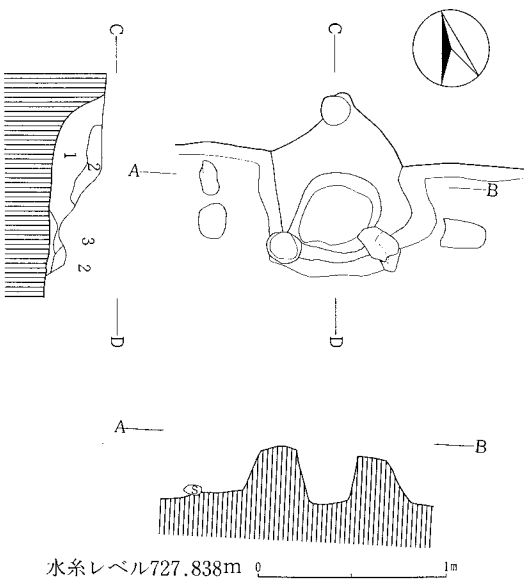
カマドを中心とする主軸方位は、N－15°－Eを示す。住居址覆土は、2層に区分されるが、大半を第1層の暗褐色（10YR3/4）土が占める。確認面からの壁高は、21～30cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。地山を掘り残して袖芯とし、軽石、安山岩および褐色（10YR4/4）粘土により構築されていたものと思われる。

ピットは主柱穴と考えられる2基が検出された。周溝は、カマド部分を除き、断続的ではあるが廻らされていた。



第163図　第56号住居址実測図



層序説明
第1層　褐色土層(10YR4/4)φ0.5cm前後のパミス、焼土粒子を含む
第2層　明褐色土層(7.5YR5/6)粘土層
第3層　褐色土層(10YR4/6)灰層

第164図　第56号住居址カマド実測図

遺物（第342・343図、図版53・54）

土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土している。このうち、図示したものに黒色土器杯、土師器鉢・球胴甕がある。

土師器鉢（2）は、松本平・善光寺平で見られる器種であり、知見する範囲では、佐久市前田遺跡H37・90号住居址に次いで三例目である。外面に煤の付着が見られることから、煮沸具として用いられたものと思われる。

本住居址の所産期は、古墳時代後期中葉に比定される。

56）第58号住居址

遺構（第165図、図版12）

本住居址は、F－5グリッドに位置する。第49号住居址と重複関係を有し、第49号住居址に切られている。

東西359cm、南北345cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。

南北軸の方位は、N－7°－Eを示す。住居址覆土は、黒褐色（10YR2/3）土層1層である。

壁高は、5～11.5cmを測る。

カマドは、おそらく北壁中央部に位置したと思われるが、痕跡をとどめていない。

ピットは総計3基検出されたが、柱穴は明確でない。このうち、P_2の底面では、炭化物、灰が認められた。また、P_3は出入口部の施設に関連するものと思われる。

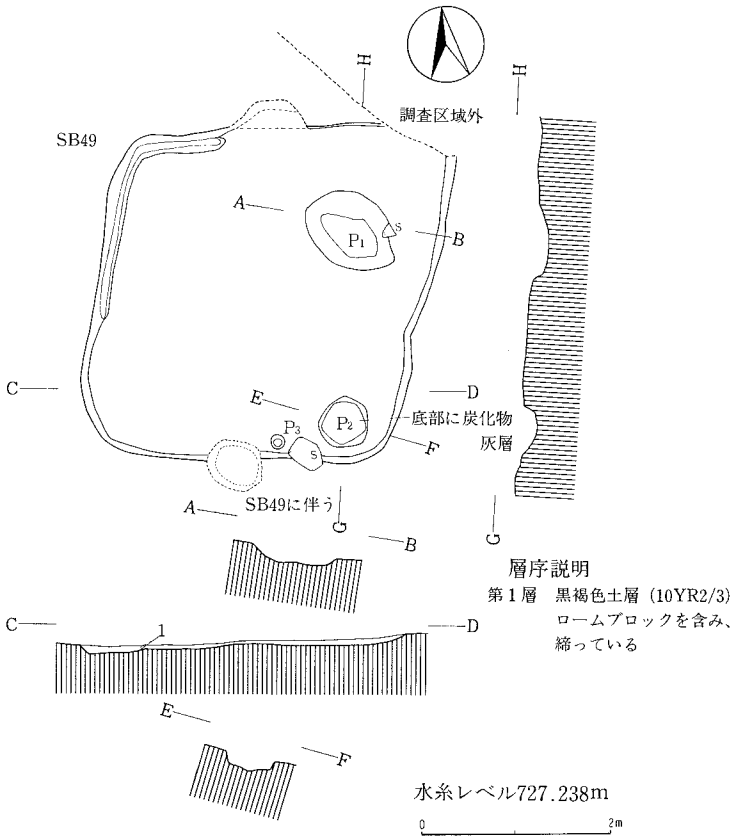
周溝は、西壁下から北壁下にかけて認められた。

遺物（第365図、図版75）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、緑釉陶器片、灰釉陶器片、鉄製品が出土している。

このうち、図示したものに鉄製品（第365図7・8・12）3点がある。刀子（12）のほか、7・8ははっきりしないが、おそらく、7が紡錘車の紡軸の一部、8が鉄鏃の茎部と思われる。

本住居址の所産期は、平安時代に比定される。



第165図　第58号住居址実測図

57）第59号住居址

遺構（第166・167図、図版12）

本住居址は、E－5グリッドに位置する。第60号住居址と重複関係を有し、第60号住居址を切って構築されている。

東西281cm、南北230cmを測る小型の住居址で、平面プランは、隅丸長方形を呈する。

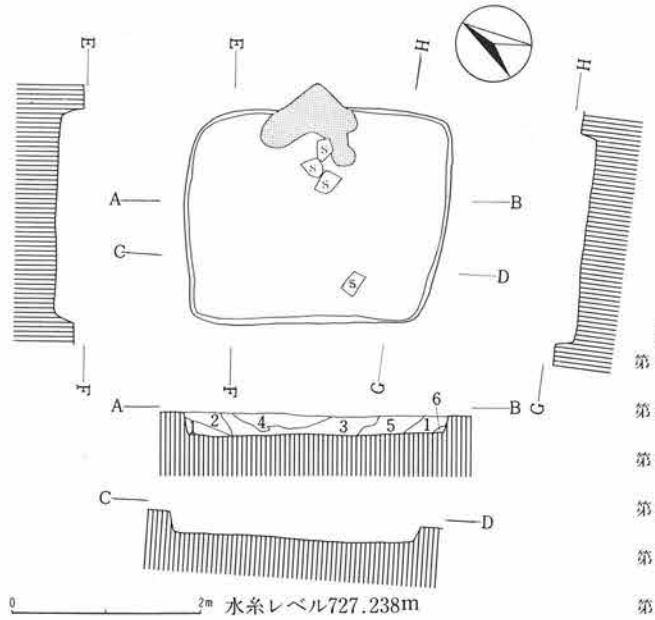
カマドを中心とする主軸方位は、N－34°－Nを示す。住居址覆土は、6層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、17～25.5cmを測る。

カマドは、東壁ほぼ中央部に位置する。加工した軽石を袖芯とし、明黄褐色（10YR6/6）粘土により構築されていた。

ピット、周溝は検出されなかった。

遺物

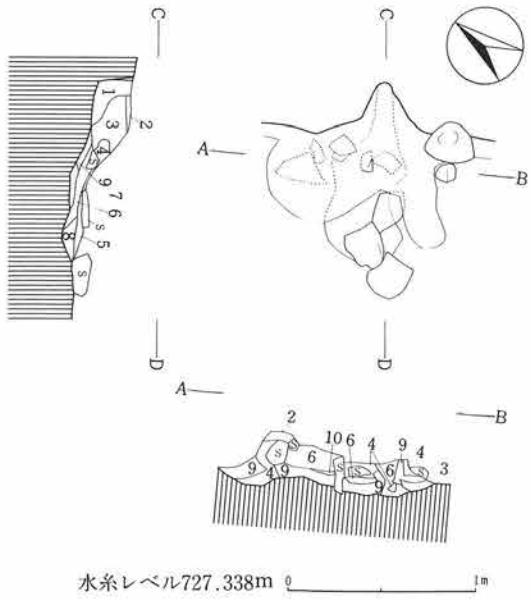
土師器片、黒色土器片、須恵器片のほか、自然遺物として住居址北部から獣骨が出土しているが、図示し得るものは皆無である。なお、獣骨については後述する。



本住居址の所産期は、出土土器片中に、須恵器模倣の系譜上にある土師器杯の破片が見られることから古墳時代後期後半に比定される。

層序説明
第1層　黒褐色土層(10YR2/2)φ0.1～0.8cmのパミス、ローム粒子を含む
第2層　暗褐色土層(10YR3/4)φ0.2～1.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第3層　黒褐色土層(10YR2/3)φ0.1～0.8cmのパミス、ロームブロックを含む
第4層　暗褐色土層(10YR3/3)φ0.1～1.2cmのパミス、ロームブロックを含む
第5層　暗褐色土(7.5YR3/4)φ0.1～1.2cmのパミス、ローム粒子を含む
第6層　褐色土層(7.5YR4/4)締っていない

第166図　第59号住居址実測図



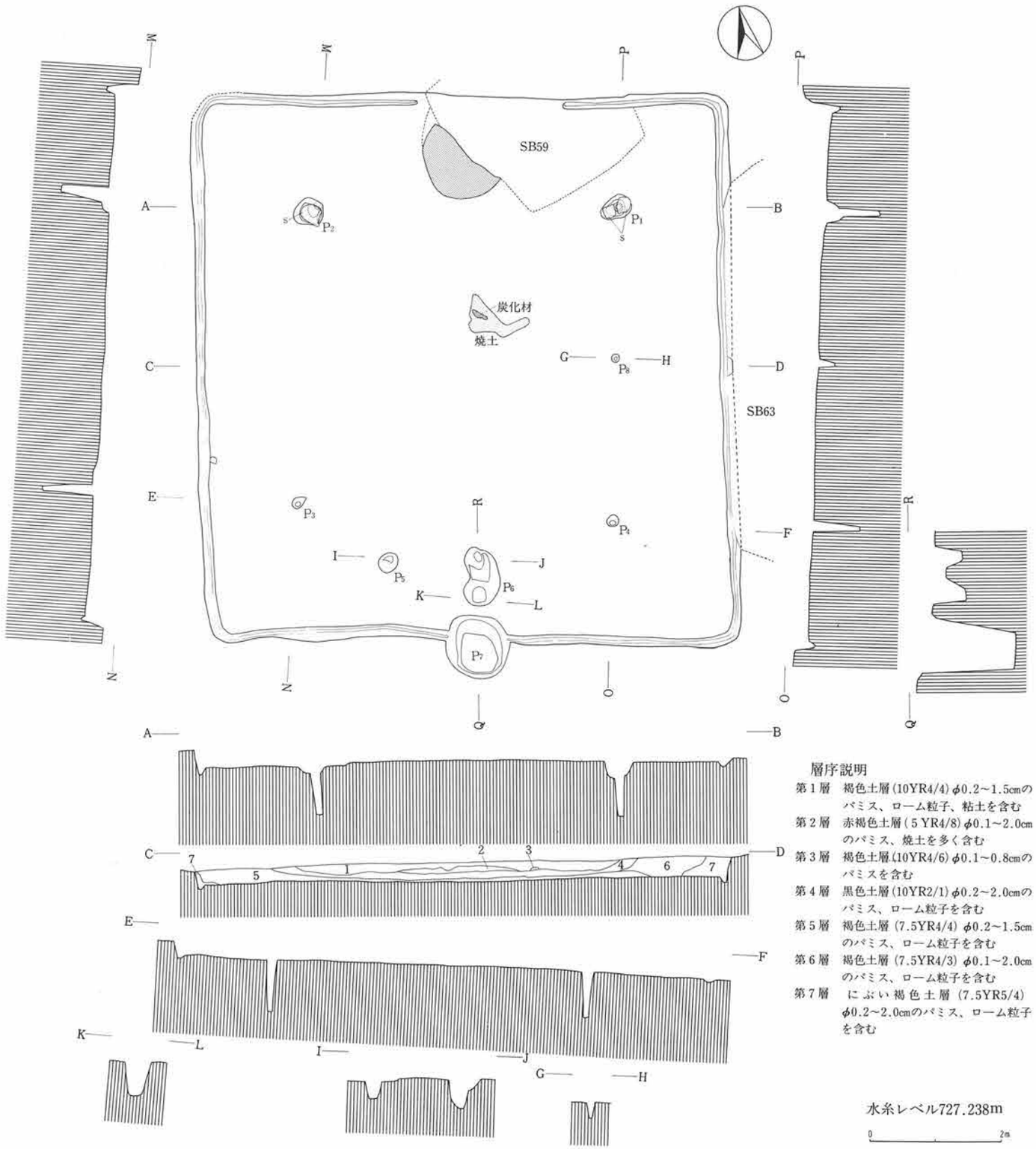
層序説明
第1層　暗褐色土層(7.5YR3/4)φ0.1～0.5cmのパミスを僅かに含むほか、ローム粒子を含む
第2層　褐色土層(10YR4/4)φ0.1～0.2cmのパミスを含むほか、ローム粒子を多く含む
第3層　暗褐色土層(7.5YR3/3)ローム粒子を含む
第4層　橙色土層(2.5YR6/6)
第5層　黒褐色土層(7.5YR3/2)灰、焼土を含む
第6層　褐色土層(10YR4/6)灰、焼土を含む
第7層　橙色土層(7.5YR6/8)焼土層
第8層　暗褐色土層(10YR3/4)φ0.1～0.5cmのパミス、ローム粒子を含む
第9層　明黄褐色土層(10YR6/6)粘土層
第10層　にぶい褐色土層(7.5YR5/3)灰層

第167図　第59号住居址カマド実測図

58）第60号住居址

遺構（第168・169図、図版12）

本住居址は、E－5・6グリッドに位置する。第33・59・62・63号住居址と重複関係を有し、第33・59・62・63号住居址に切られている。



第168図　第60号住居址実測図

東西814cm、南北829cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、N－13°－Eを示す。

住居址覆土は、7層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、21～33cmを測る。

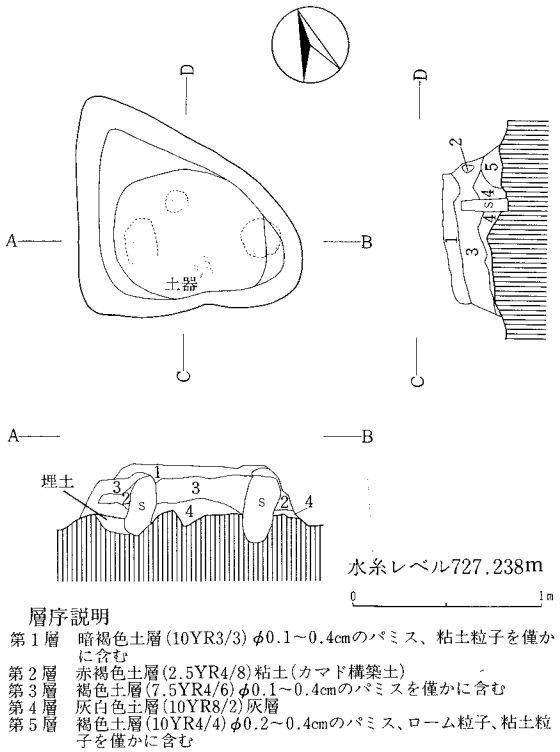
カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。

およそ半分を第59号住居址に切られているが、遺存状態は比較的良好であった。

軽石を袖芯とし、赤褐色（2.5YR4/8）粘土により構築されていた。また、火床部では、軽石製の支脚石が認められた。

ピットは総計8基検出された。このうち、P_1～P_4が主柱穴、P_7はいわゆる張り出しピットである。また、P_5・P_6は出入口部の施設に関連するものであろう。

周溝は、カマド部分を除き全周していたものと思われる。



層序説明
第1層　暗褐色土層(10YR3/3) φ0.1～0.4cmのパミス、粘土粒子を僅かに含む
第2層　赤褐色土層(2.5YR4/8)粘土(カマド構築土)
第3層　褐色土層(7.5YR4/6) φ0.1～0.4cmのパミスを僅かに含む
第4層　灰白色土層(10YR8/2)灰層
第5層　褐色土層(10YR4/4) φ0.2～0.4cmのパミス、ローム粒子、粘土粒子を僅かに含む

第169図　第60号住居址カマド実測図

遺物（第343・371図、図版54・80）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、石製品のほか、自然遺物として炭化材が出土している。このうち、図示したものに土師器杯・高杯・甕がある。杯・高杯（1～4）には、素縁のもの（1・2）と外稜口辺を有する須恵器模倣のものがある。石製品は、軽石製で中央部に凹みを有する。

炭化材については、後述する。本住居址の所産期は、古墳時代後期中葉に比定される。

59）第62号住居址

遺構（第170・172図、図版12）

本住居址は、E・F－5グリッドに位置する。第60・63号住居址と重複関係を有し、第60・63号住居址を切って構築されている。

東西・南北とも残存値で、それぞれ400cm、403cmを測る。

カマドを中心とする主軸方位は、N－17.5°－Eを示す。

カマドは、北壁中央部に位置していたものと思われる。軽石および暗褐色(10YR3/3)土により構築されていた。

ピットは主柱穴と考えられる２基が検出されたが、周溝は検出されなかった。

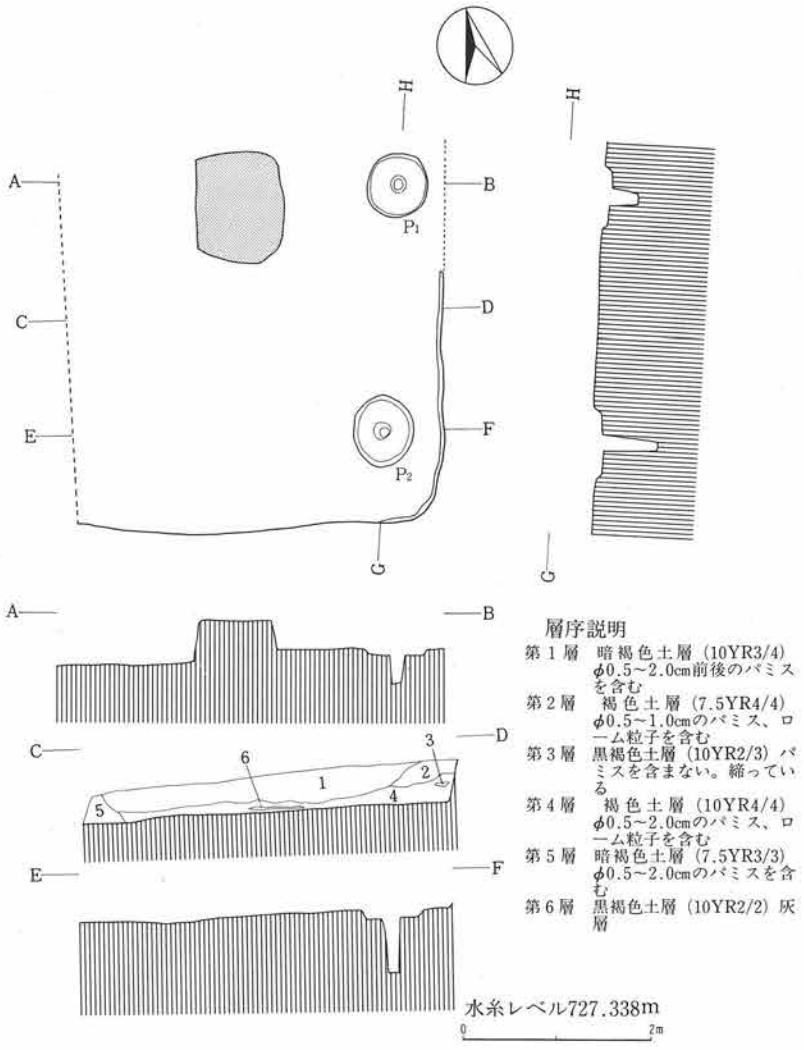
遺物（第344・365・377図、図版55・75・86）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、灰釉陶器片、鉄製品、石製品、鉄滓のほか、自然遺物として炭化種子が出土している。このうち、図示したものに土師器杯・甕、黒色土器杯・皿、須恵器杯・椀、鉄製品６点がある。墨書土器は４点出土しているが、文字の判読できたものは「成」（第344図14）１点である。

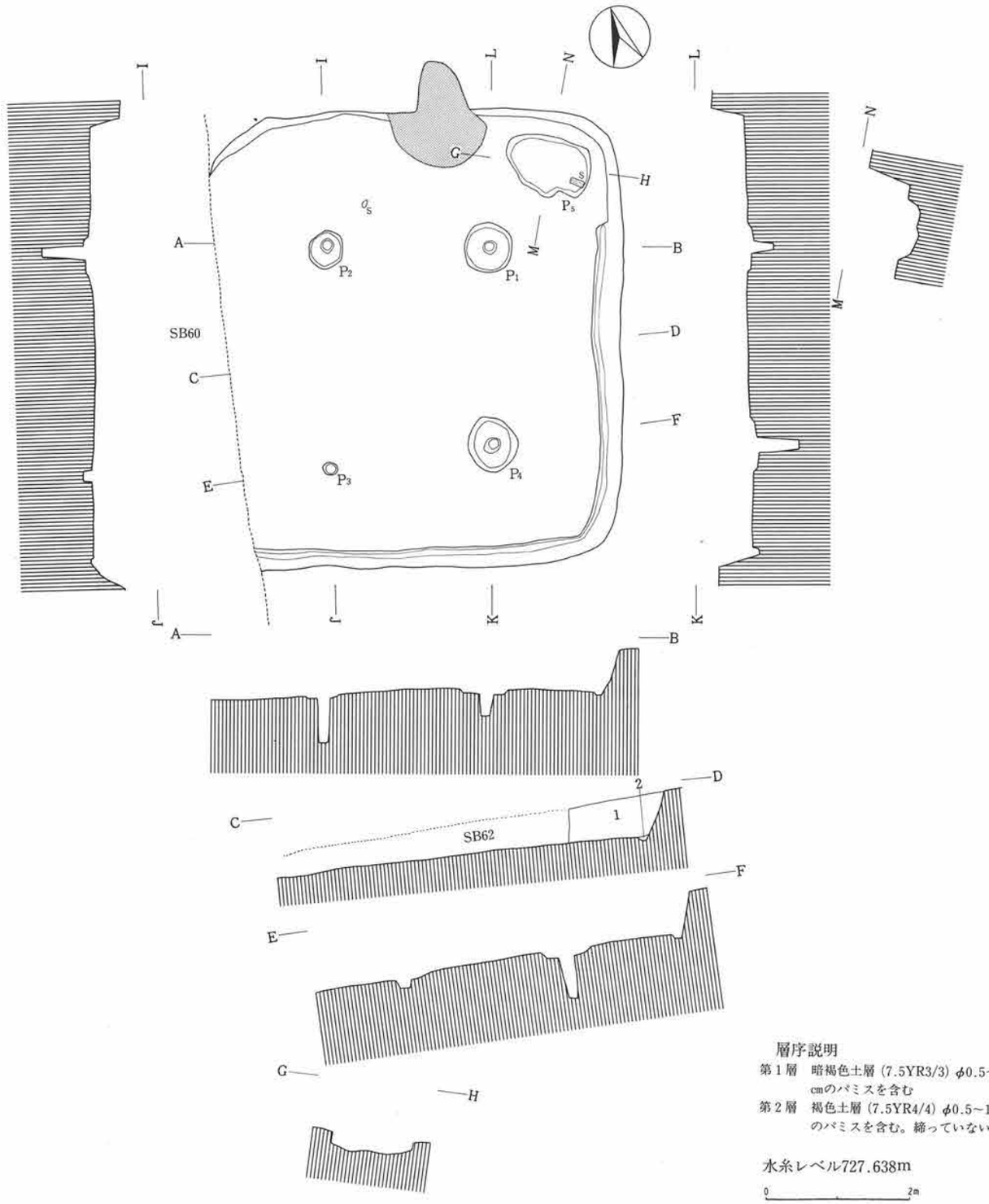
鉄製品（第365図）は、鎌（13）、刀子（15）が確認できたが、他は不明である。

なお、炭化種子については後述する。石製品（第377図３）は、砂岩製の打製石斧である。

本住居址の所産期は、平安時代に比定される。



第170図　第62号住居址実測図



層序説明

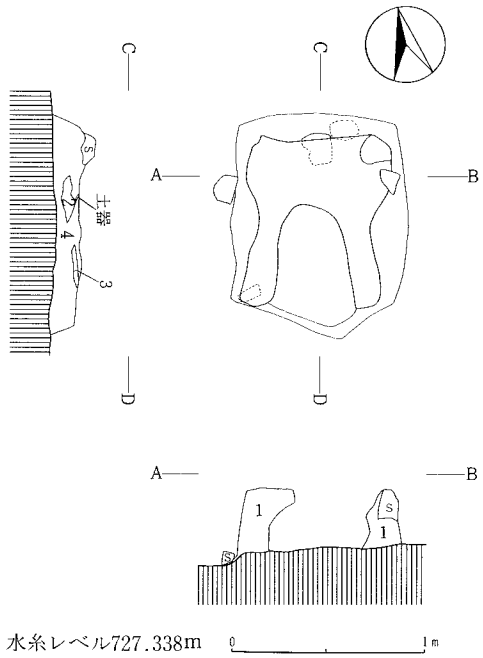
第1層　暗褐色土層（7.5YR3/3）φ0.5～2.0cmのパミスを含む

第2層　褐色土層（7.5YR4/4）φ0.5～1.0cmのパミスを含む。締っていない

水糸レベル727.638m

0　2m

第171図　第63号住居址実測図



層序説明
第１層　暗褐色土層(10YR3/3)φ0.5cm前後のパミスを僅かに含むほか、粘土粒子を含む。締っている
第２層　明褐色土層(7.5YR5/8)焼土層
第３層　黒褐色土層(7.5YR2/2)パミスを含まない炭化物層
第４層　黒褐色土層(10YR2/3)φ0.5～1.0cmのパミスを含む。締っていない

水糸レベル727.338m　0　1m

第172図　第62号住居址カマド実測図

60）第63号住居址

遺構（第171・173図、図版12）

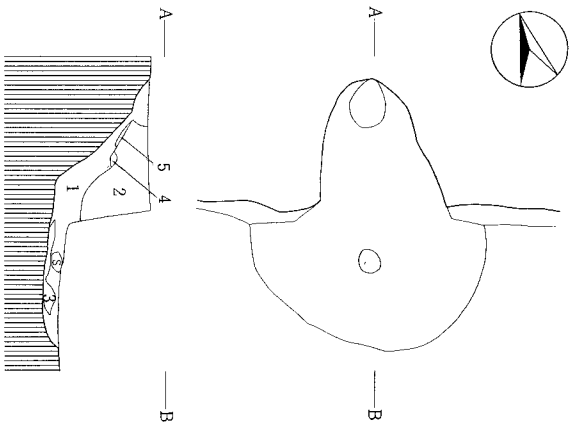
本住居址は、E・F－5・6グリッドに位置する。

第60・62号住居址、第１号土坑と重複関係を有し、第60号住居址、第１号土坑を切り、第62号住居址により切られている。

東西は残存部で515cm、南北609cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈するものと思われる。

カマドを中心とする主軸方位は、N－17°－Eを示す。住居址覆土は、２層に区分されるが、大半を暗褐色（7.5YR3/3）土層が占める。確認面からの壁高は、38～56cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置するが、遺存状態は悪い。おそらく、軽石および褐色（7.5YR4/4）粘土により構築されていたものと思われる。



水糸レベル727.488m
0　1m

層序説明
第１層　褐色土層(7.5YR4/4)φ0.5cm前後のパミスのほか、僅かに焼土を含む
第２層　暗褐色土層(10YR3/4)φ0.5cm前後のパミスを含む
第３層　明褐色土層(7.5YR5/8)焼土。灰層
第４層　褐色土層(7.5YR4/4)粘土層
第５層　黒褐色土層(10YR2/3)粘土粒子を含み、締っている

第173図　第63号住居址カマド実測図

ピットは総計５基検出された。このうち、P_1～P_4が主柱穴、P_5は貯蔵穴と考えられる。

また、周溝は、東壁下から南壁下にかけて認められた。

遺物（第344・365・377図、図版55・75・86）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、青磁、鉄製品、石製品、鉄滓のほか、自然遺物として獣骨が出土している。図示したものに須恵器蓋・杯・椀、黒色土器杯、青磁椀、鉄製品５点、石製品がある。

須恵器杯には、底部ヘラキリと糸切りのものが認められる。また、須恵器椀は、糸切り後外周回転ヘラケズリを行ない高台を貼付している。

青磁椀は、混入品と考えられる。竜泉窯産で12世紀後半に比定される。また、墨書された黒色土器杯の破片が１点あるが、文字は不明である。

鉄製品（第365図）には、刀子（20・23）、鉄鏃（19）、釘（22）のほか、環状を呈するもの（21）があるが、用途は不明である。石製品（第377図５）は、砂岩製の打製石斧である。

鉄滓は、カマド内からの出土である。また、獣骨は、カマドおよび住居址北部・南部から出土しており、詳細は後述する。

本住居址の所産期は、奈良時代後半に比定される。

61）第64号住居址

遺構（第174図、図版12）

本住居址は、Ｄ－４グリッドに位置する。第28・30・68号住居址と重複関係を有し、第28・30・68号住居址により切られている。

東西・南北とも残存部で、それぞれ520cm、774cmを測る。平面プランは、残存部から推しておそらく、南北に長い隅丸長方形を呈するものと思われる。

南北軸の方位は、Ｎ－15°－Ｗを示す。住居址覆土は、８層に区分される。

確認面からの壁高は、26～39.5cmを測る。

ピットは、西壁で１基検出されたにとどまる。一応、住居址に伴うものと判断した。

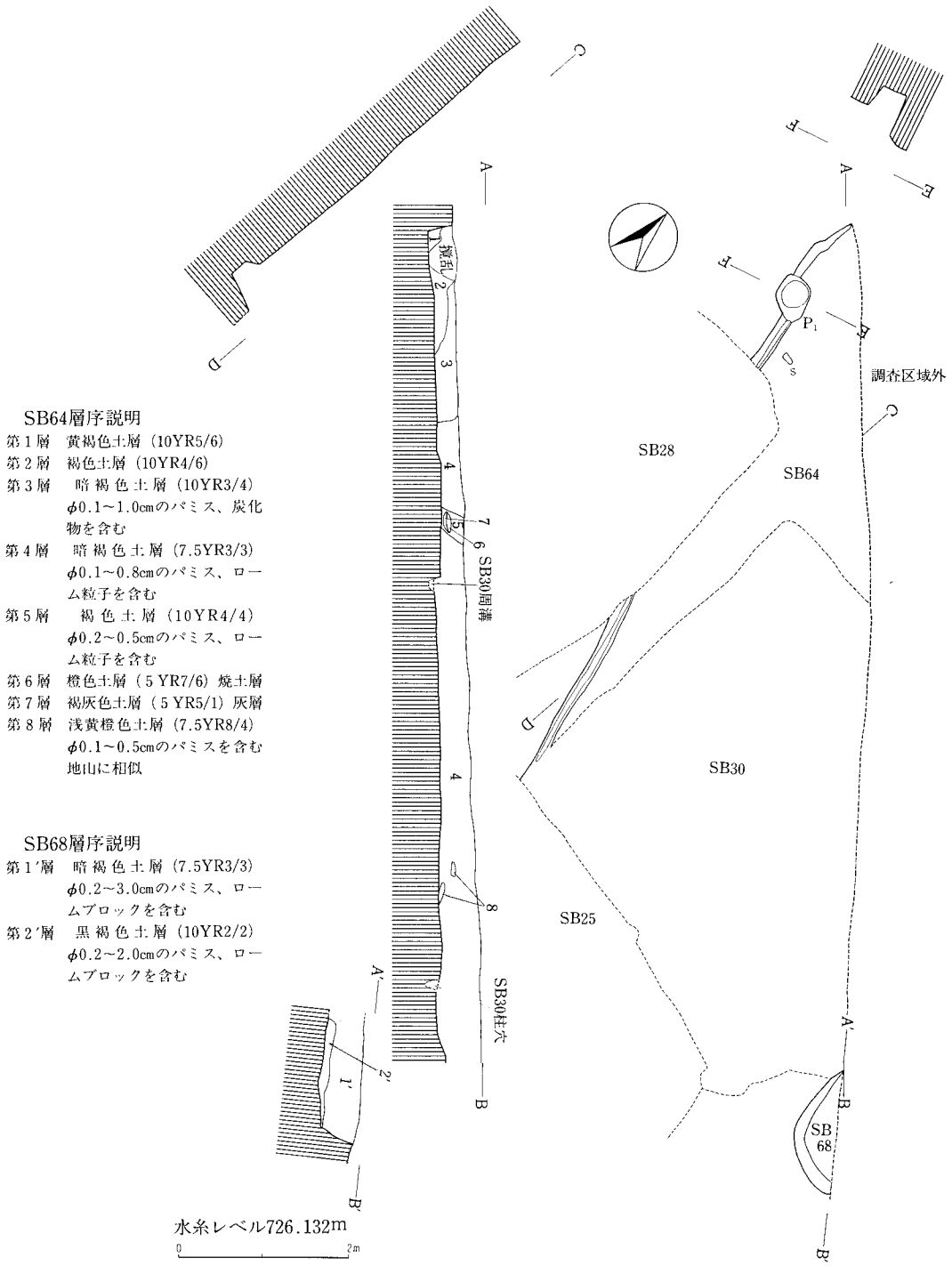
周溝は、西壁下で認められた。

遺物（第344・371図、図版55・80）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、石製品が出土している。このうち、図示したものは黒色土器杯１点、石製品２点である。底部は、糸切り後外周手持ちヘラケズリされるもので、外面に「川」もしくは「三」の墨書文字が認められる。重複関係から推して、混入品と考えられる。

石製品（第371図）は、磨石（４）、軽石製品（３）である。

本住居址の所産期は、重複関係から、古墳時代後期中葉以前と考えられる。

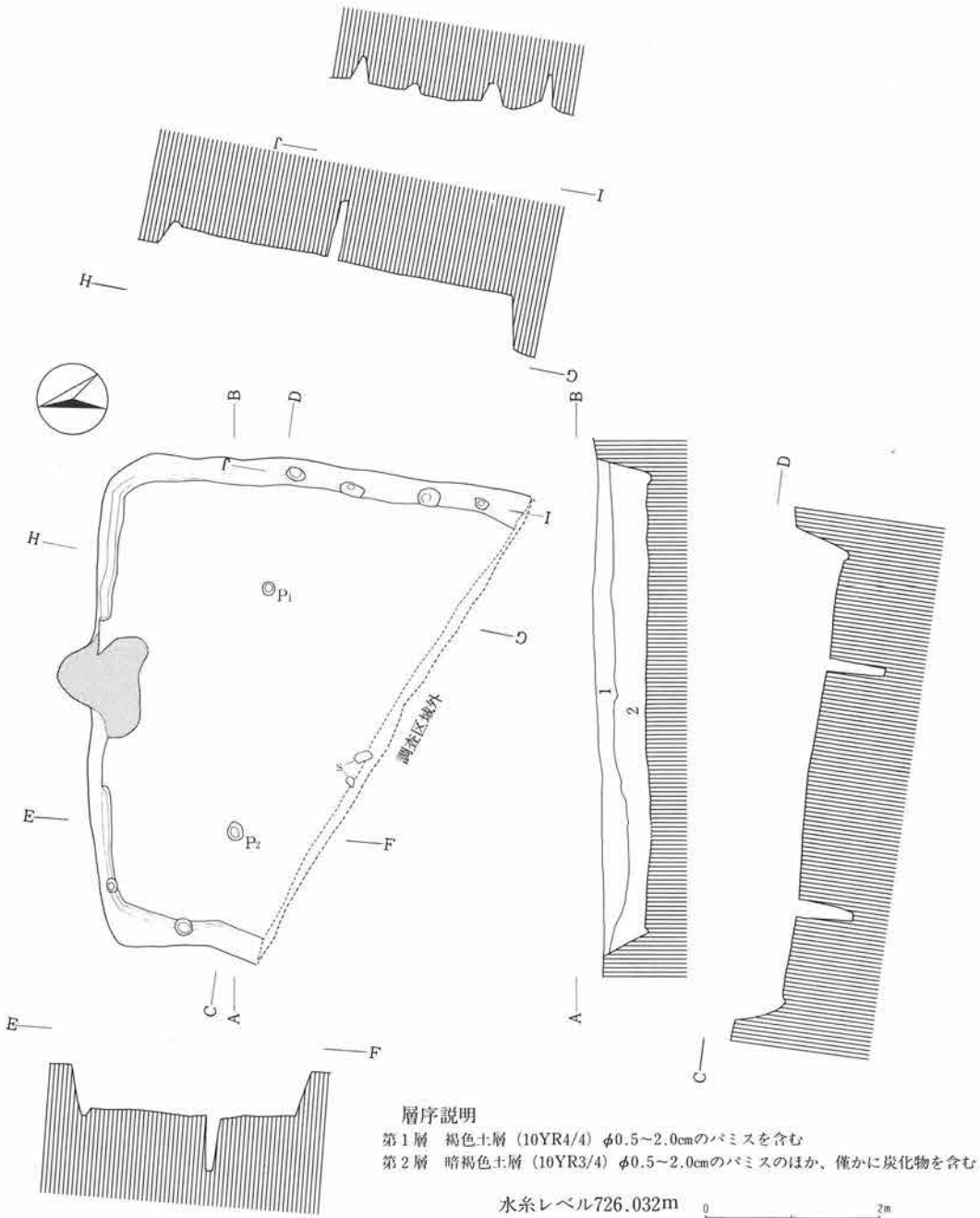


第174図　第64・68号住居址実測図

62）第65号住居址

遺構（第175・176図、図版12）

本住居址は、C－4グリッドに位置する。第66号住居址と重複関係を有し、第66号住居址を切



第175図　第65号住居址実測図

って構築されている。

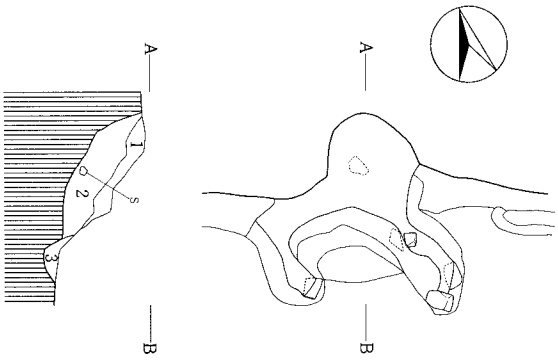
東西580cm、南北は調査範囲内で491cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈するものと思われる。

カマドを中心とする主軸方位は、N－22°－Eを示す。住居址覆土は、2層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、24～58cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。

加工した軽石を袖芯とし、粘土により構築されていた。

ピットは主柱穴2基が検出されたほか、周溝内で支柱穴と考えられピットが6基検出された。また、周溝はカマド部分を除き、全周していたものと思われる。



層序説明
第1層　褐色土層(7.5YR4/4)
第2層　暗褐色土層(10YR3/4)φ0.5cm前後のパミスを含む
第3層　明褐色土層(7.5YR5/8)粘土粒子、焼土粒子を含む

第176図　第65号住居址カマド実測図

遺物（第344・345・376図、図版55・56・85）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、縄文土器片のほか、自然遺物として、炭化種子、獣骨がある。このうち、図示したものに土師器杯、黒色土器高杯・皿、須恵器杯・高杯、縄文土器片がある。土師器杯(1)は、畿内系暗文を有するものである。須恵器杯には、底部ヘラキリと糸切り未調整のものがある。また、墨書土器の破片が1点あるが文字は不明である。縄文土器片は、後期の所産であろう。なお、自然遺物については後述する。

本住居址の所産期は、奈良時代後半に比定される。

63）第66号住居址

遺構（第177・178図、図版13）

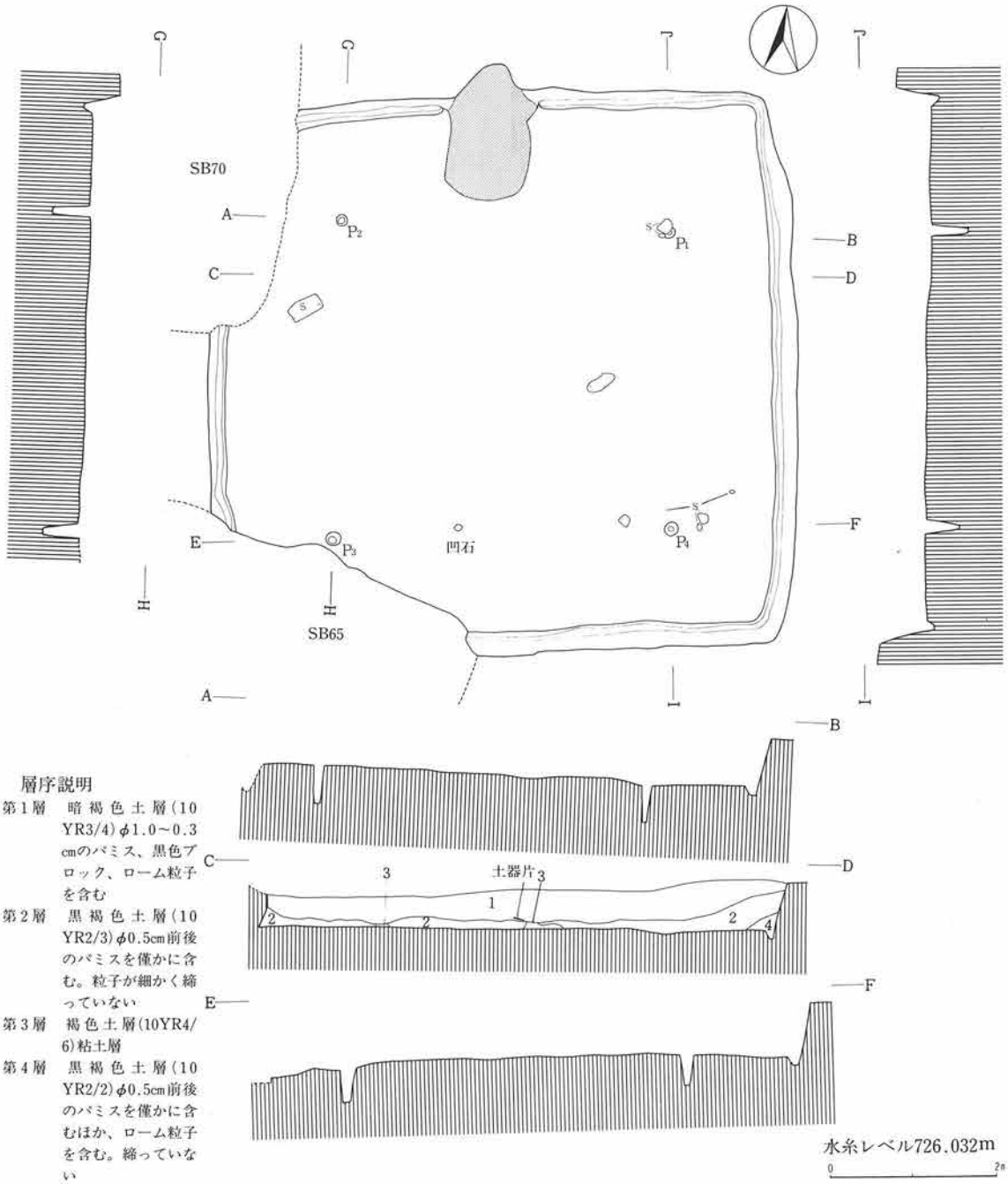
本住居址は、C・D－4グリッドに位置する。第65・70号住居址と重複関係を有し、第65・70号住居址により切られている。

東西708cm、南北672cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、N－2.5°－Wを示す。住居址覆土は、4層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、33～65.5cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。遺存状態は比較的良好で、明黄褐色(10YR6/6)土を袖芯とし、にぶい褐色（7.5YR5/4）土により構築されていた。

ピットは主柱穴と考えられる4基が検出された。周溝は、カマド部分を除き、全周していたものと思われる。



第177図　第66号住居址実測図

遺物（第345・365・367・371・376図、図版56・75・77・80・81・85）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、弥生土器片、金属製品、石製品、土製品、鉄滓、炭化材、獣骨が出土している。このうち、図示したものに黒色土器杯・高杯・小型甕、土師器甕、金属製品、石製品、土製品がある。

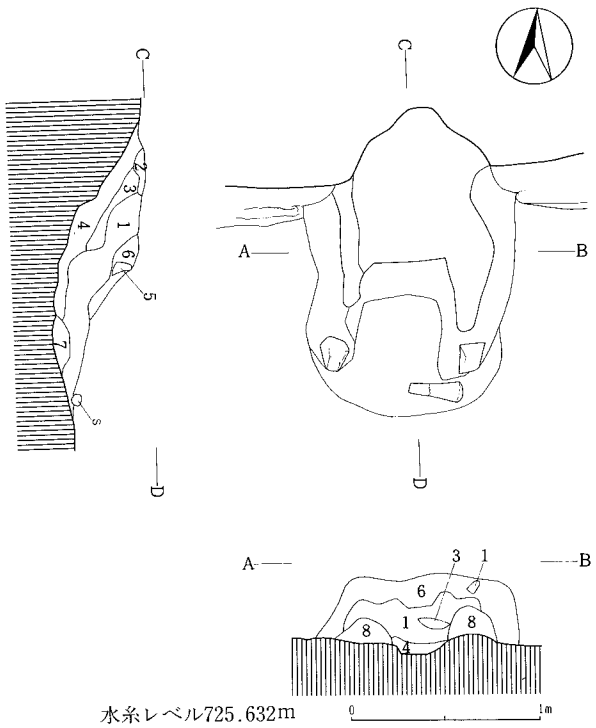
金属製品には、鉄鏃と考えられるもの（第365図24）、鎌（第365図25）と青銅製の刀装具（第367図20・21）がある。

石製品には、滑石製臼玉（第367図47）・石錘（68）と砥石（第371図6）、軽石製品（5・9）がある。砥石は、軽石製で重さ27.5gを量る。土製品（第367図45・46）は2点あり、土製丸玉である。

弥生土器片（第376図17）は、後期の壺の頸部破片で、T字文が施される。

なお、自然遺物の炭化材、獣骨、小型甕の付着物については後述する。

本住居址の所産期は、古墳時代後期後半に比定される。



層序説明
第1層　赤褐色土層(5YR4/6)φ0.2～1.0cmのパミスを僅かに含むほか、粘土粒子、焼土粒子を含む
第2層　赤褐色土層(5YR4/8)粘土粒子を含む
第3層　褐色土層(7.5YR4/4)粘土粒子を含む
第4層　褐色土層(10YR4/6)φ0.3～0.7cmのパミス、粘土粒子を僅かに含む
第5層　にぶい黄褐色土層(10YR4/3)粘土粒子を含む
第6層　にぶい褐色土層(7.5YR5/4)φ0.3～1.0cmのパミス、粘土粒子を僅かに含む
第7層　灰白色土層(7.5YR8/2)焼土粒子を含む。灰層
第8層　明黄褐色土層(10YR6/6)φ0.5～1.0cmのパミスを僅かに含む

第178図　第66号住居址カマド実測図

64）第67号住居址

遺構（第179・180図、図版13）

本住居址は、C－4グリッドに位置する。第69・70・73号住居址と重複関係を有し、第69・70・73号住居址を切って構築されている。

東西488cm、南北は調査範囲内で453cmを測り、平面プランは、南北に長い隅丸長方形を呈するものと思われる。

カマドを中心とする主軸方位は、N－31.5°－Eを示す。住居址覆土は、4層に区分れるが、大半を第1層の黒褐色土層が占める。確認面からの壁高は、30～63cmを測る。

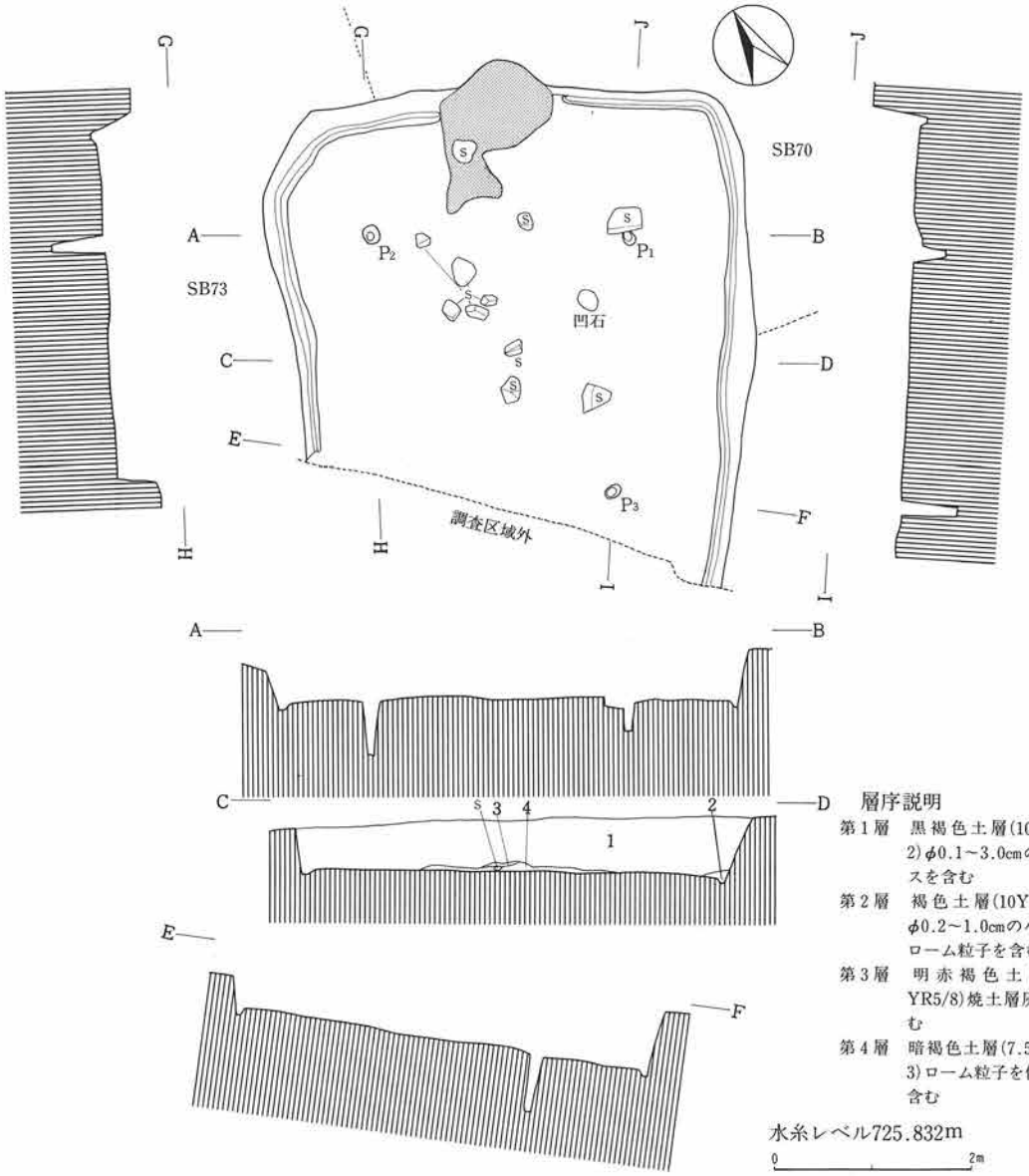
カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。遺存状態は、比較的良好であった。加工した軽石を袖芯とし、赤褐色（5YR4/6）および明褐色（7.5YR5/6）粘土により構築されていた。

ピットは主柱穴と考えられる4基が検出された。周溝は、カマド部分を除き、全周していたものと思われる。

遺物（第345・346・365・366・371・374図、図版56・57・75・76・80・83）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、鉄製品、石製品、鉄滓のほか、自然遺物として、炭化材、獣骨が出土している。図示したものに黒色土器杯、須恵器蓋・杯・椀、鉄製品、石製品がある。

土器には、墨書土器のほか、ヘラ記号の認められるもの、転用硯がある。墨書土器には、「足」



第179図　第67号住居址実測図

（9）、「光」（14）がある。

また、ヘラ記号が認められるものが3点（9・11・12）あるが、12についてははっきりしない。

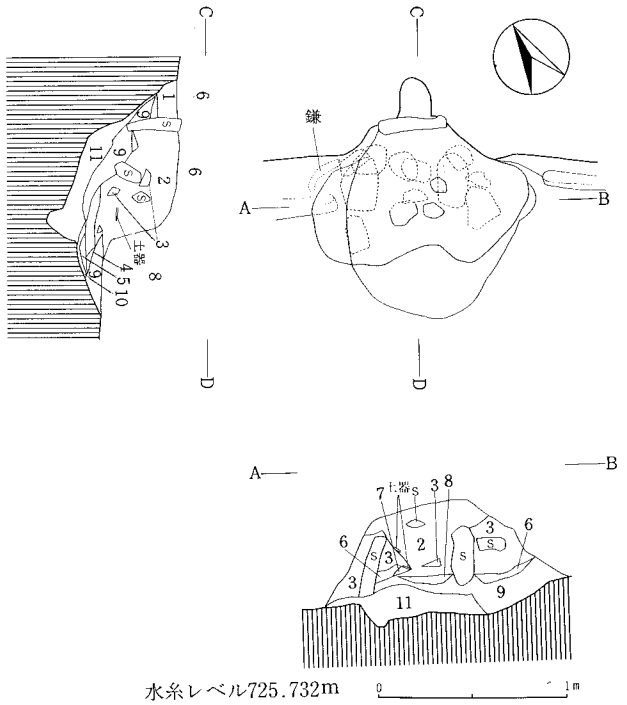
13は、須恵器杯を朱墨硯に転用したものである。

鉄製品は多く、9点出土している。鎌（第366図3・4・7）、紡錘車・紡軸（第366図1・2）、馬具（第365図27、第366図6）、火打金具の一部と考えられるもの（第366図5）、釘と考えられるもの（第365図28）がある。

石製品は、軽石製品（371図7）と石臼（第374図9）である。

自然遺物の炭化材、獣骨については後述する。

本住居址の所産期は、奈良時代後半に比定される。



層序説明
第1層　暗褐色土層（10YR3/3）φ0.1～0.3cmのパミスを含み、締っている
第2層　褐色土層（7.5YR4/4）φ0.2～2.0cmのパミスを含み、締っている
第3層　赤褐色土層(5YR4/6)粘土層
第4層　褐灰色土層(7.5YR4/1)灰層
第5層　浅黄橙色土層(7.5YR8/3)灰層
第6層　明褐色土層(7.5YR5/6)粘土層
第7層　赤褐色土層(2.5YR4/6)焼土層
第8層　明赤褐色土層(5YR5/8)焼土層
第9層　褐色土層(7.5YR4/6)φ1.0cm前後のパミスを含む
第10層　橙色土層(5YR6/8)焼土
第11層　暗褐色土層（7.5YR3/4）φ0.1～1.5cmのパミス、ローム粒子を含む。締っていない

第180図　第67号住居址カマド実測図

65）第68号住居址

遺構（第174図、図版12）

本住居址は、E－4グリッドに位置する。第64号住居址と重複関係を有し、第64号住居址を切って構築されている。

調査し得た部分は僅かで、東西85cm、南北95cmの範囲である。

南北軸の方位は、N－11°－Wを示す。住居址覆土は、2層に区分される。確認面からの壁高は、39～44cmを測る。

調査範囲内では、ピット、周溝は検出されなかった。

遺物（第346図、図版57）

土師器片、黒色土器片が出土している。このうち、図示したものは土師器杯1点である。

丸底で、外稜口辺を有する。

本住居址の所産期は、古墳時代後期中葉に比定される。

66）第69号住居址

遺構（第181・182図、図版13）

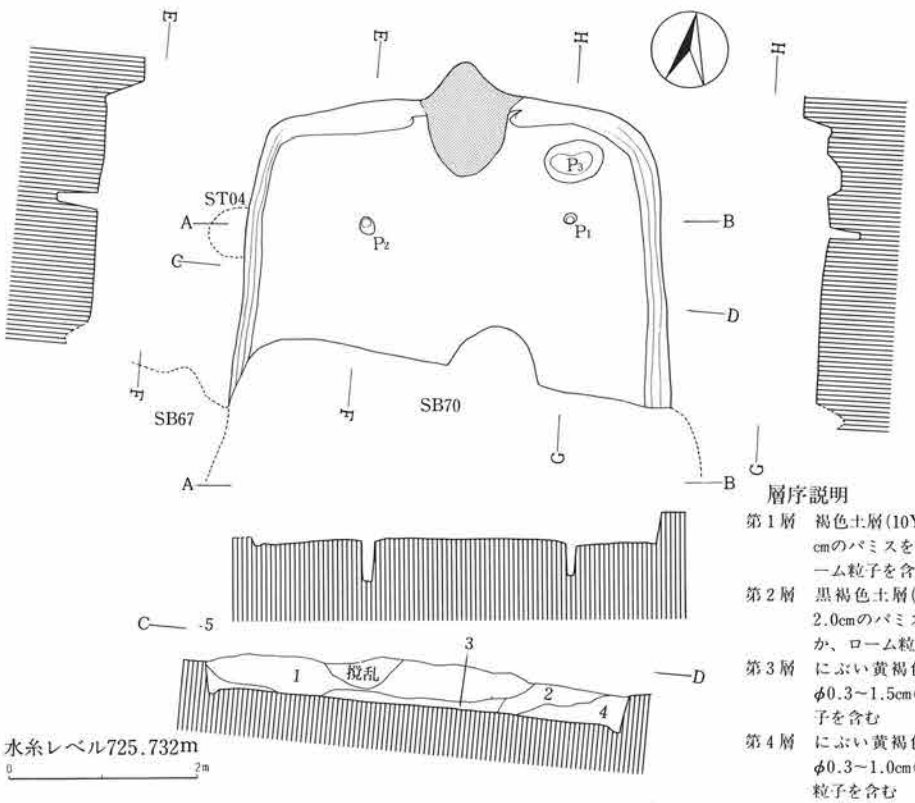
本住居址は、C－4グリッドに位置する。第67・70号住居址と重複関係を有し、第67・70号住居址に切られている。

東西450cm、南北は残存部で304cmを測り、平面プランは、おそらく、隅丸方形を呈するものと思われる。

カマドを中心とする主軸方位は、N－10.5°－Wを示す。住居址覆土は、5層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、27～38cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。地山および第8層と軽石を袖芯とし、褐色（10YR4/4）粘土により構築されていた。

ピットは主柱穴と考えられるP₁・P₂の2基と、貯蔵穴と考えられるP₃の3基が検出された。



層序説明

第1層　褐色土層(10YR4/4)φ0.2～1.5cmのパミスを多く含むほか、ローム粒子を含む

第2層　黒褐色土層(10YR2/3)φ0.1～2.0cmのパミスを僅かに含むほか、ローム粒子を含む

第3層　にぶい黄褐色土層(10YR4/3)φ0.3～1.5cmのパミス、粘土粒子を含む

第4層　にぶい黄褐色土層(10YR5/4)φ0.3～1.0cmのパミス、ローム粒子を含む

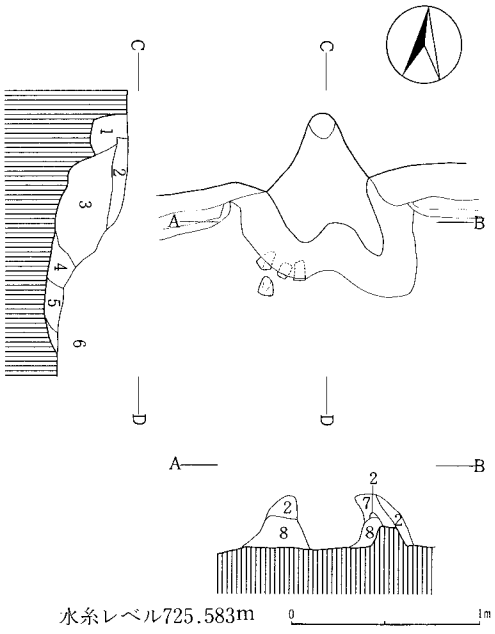
第5層　黒褐色土層(10YR2/2)ローム粒子、炭化物を僅かに含む

第181図　第69号住居址実測図

遺物（第346・366・367・376図、図版57・76・77・85）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、弥生土器片、鉄製品、石製品が出土している。図示したものに黒色土器杯、土師器椀・甑・甕、後期弥生土器片、鉄製品２点がある。

鉄製品（第366図）には、刀子と用途不明のもの（８）がある。石製品（第367図69）は滑石製の石錘の破片である。本住居址の所産期は、古墳時代後期中葉に比定される。



層序説明
第１層　暗褐色土層(10YR3/3)焼土粒子を含む
第２層　褐色土層(10YR4/4)粘土層
第３層　暗褐色土層(10YR3/4)φ1.0cm前後のパミス、焼土を含む
第４層　にぶい黄褐色土層(10YR4/3)焼土を僅かに含む
第５層　黒褐色土層(10YR2/3)パミスをほとんど含まない
第６層　暗褐色土層(10YR3/4)φ0.5cm前後のパミス、ローム粒子を含む
第７層　暗褐色土層(10RY3/4)粘土粒子を含む
第８層　カマド芯地山(黄橙色10YR7/8)を主体とし褐色土層(10YR4/6)との混土層

第182図　第69号住居址カマド実測図

67）第70号住居址

遺構（第183・184図、図版13）

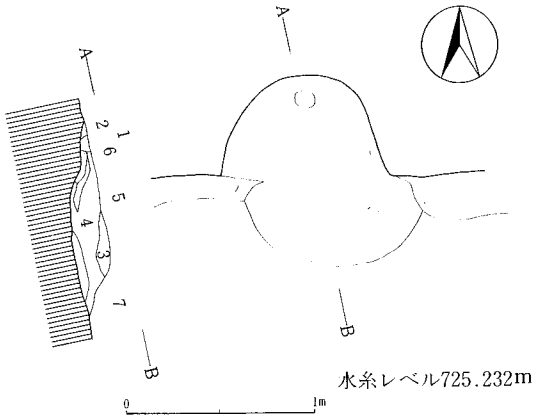
本住居址は、Ｃ－４グリッドに位置する。第66・67・69号住居址と重複関係を有し、第69号住居址を切り、第66・67号住居址に切られている。

東西530cm、南北478cmを測り、平面プランは、隅丸長方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、Ｎ－２°－Ｗを示す。住居址覆土は、２層に区分され、確認面からの壁高は、56～76cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置するが、遺存状態は悪い。おそらく、褐色(10YR4/6、7.5YR4/6)粘土を主体として構築されていた。

ピットは主柱穴と考えられる４基が検出された。また、周溝は、カマド部分を除き全周していた。



層序説明
第１層　褐色土層(10YR4/4)焼土粒子を含む
第２層　褐色土層(10YR4/6)粘土層
第３層　褐色土層(7.5YR4/6)粘土層で火熱を受ける
第４層　褐色土層(10YR4/4)焼土粒子、炭を含む
第５層　明褐色土層(7.5YR5/6)焼土、炭、灰を含む
第６層　暗褐色土層(10YR3/4)焼土粒子を僅かに含む。締っていない
第７層　明褐色土層(7.5YR5/8)焼土層

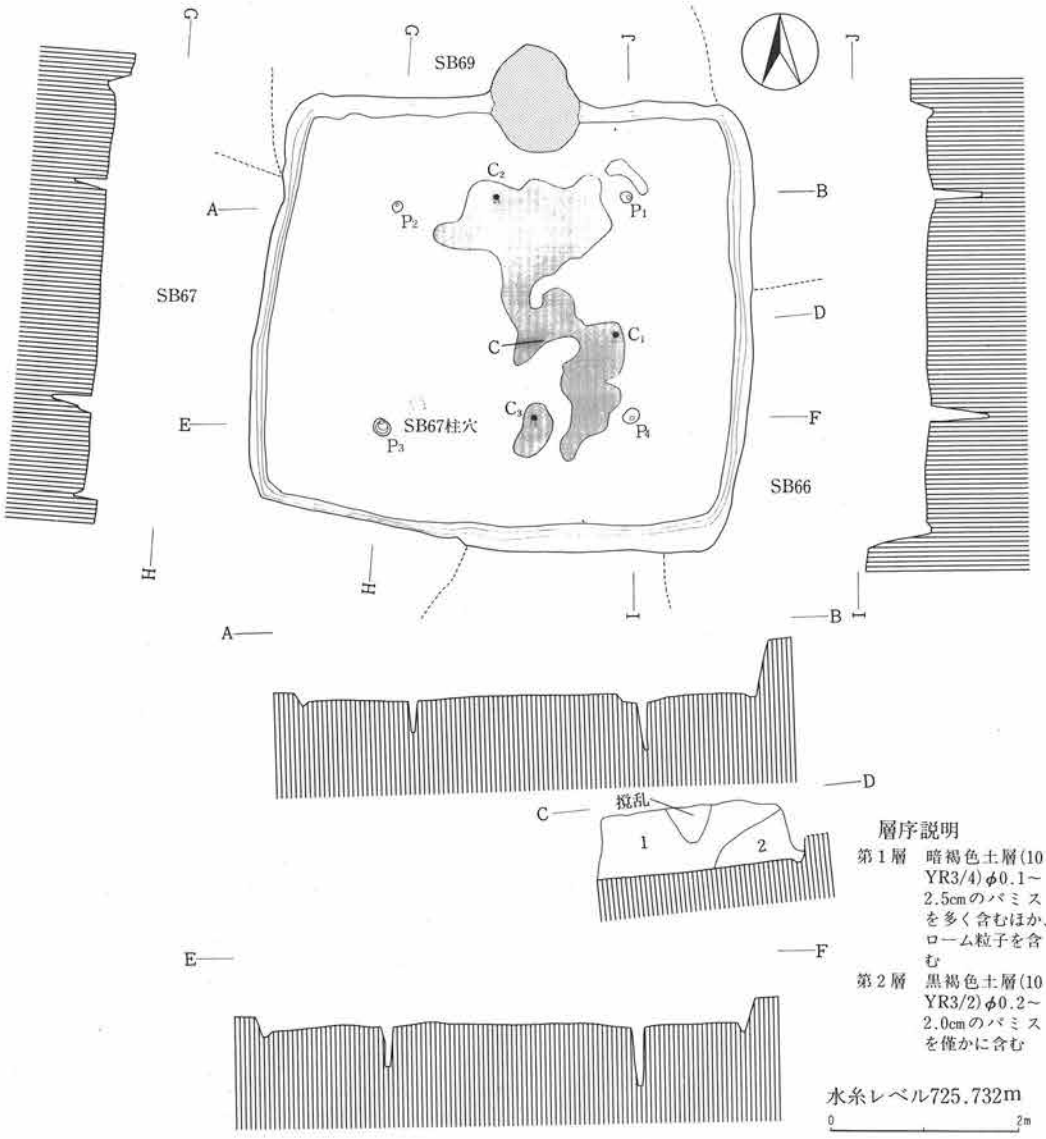
第183図　第70号住居址カマド実測図

本住居址は、焼失住居と考えられ、住居址中央部を中心に炭化材が認められた。

遺物（第346図、図版57）

土師器片、須恵器片のほか、自然遺物として炭化材が出土している。このうち、図示したものに須恵器杯、土師器甕がある。須恵器杯は、混入品であろう。また、炭化材については後述する。

本住居址の所産期は、古墳時代後期後半に比定される。



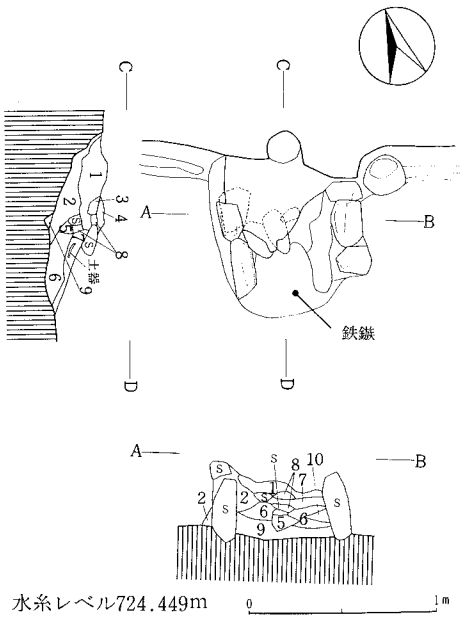
第184図　第70号住居址実測図

68）第71号住居址

遺構（第185・186図、図版13）

本住居址は、Ｂ－３グリッドに位置し、第76号住居址と重複関係を有し、第76号住居址を切って構築されている。

第185図　第71号住居址実測図



層序説明
第1層　極暗褐色土層(7.5YR2/3)焼土粒子を多く含む
第2層　暗褐色土層(10YR3/4)φ0.1cm前後のパミスを含む。貼ったもの
第3層　褐色土層(7.5YR4/6)粘土ブロック
第4層　暗赤褐色土層(5YR3/6)粘土層
第5層　赤褐色土層(2.5YR4/6)焼けた粘土
第6層　黄褐色土層(10YR5/6)灰層
第7層　暗赤褐色土層(5YR3/4)粘土層、焼土、炭化物を含む
第8層　黒褐色土層(10YR2/2)ブロック状
第9層　明赤褐色土層(5YR5/8)焼土
第10層　黒褐色土層(10YR2/3)灰層

第186図　第71号住居址カマド実測図

東西468cm、南北464cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、N－18.5°－Eを示す。住居址覆土は、4層に区分され、確認面からの壁高は、23～66cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。

遺存状態は比較的良好で、袖部に軽石、天井部に河床礫を用いた石組粘土カマドであった。

ピットは総計5基検出され、このうち、P_1～P_4が主柱穴と考えられる。また、周溝は、カマド部分を除き、全周していた。

遺物（第346・347・366・371・375・376・377図、図版57・58・76・81・84・85・86）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、縄文土器片、鉄製品、石製品のほか、自然遺物として獣骨が出土している。図示したものに土師器杯・甕、須恵器杯・皿、黒色土器高杯、縄文土器片、鉄製品、石製品がある。土師器甕には、他地域産と考えられるもの(第347図2・3)がある。縄文土器片は後期の所産である。

鉄製品は、鉄鏃である。石製品（第371・377図）は、砂岩製の打製石斧（第377図7）と凝灰岩製の砥石（第371図8・10）がある。

本住居址の所産期は、古墳時代後期後半に比定される。

69）第72号住居址

遺構（第187図、図版13）

本住居址は、B－2グリッドに位置する。第3・6号住居址と重複関係を有し、第3・6号住居址に切られている。

東西は調査範囲で438cm、南北569cmを測る。平面プランについては、不明である。

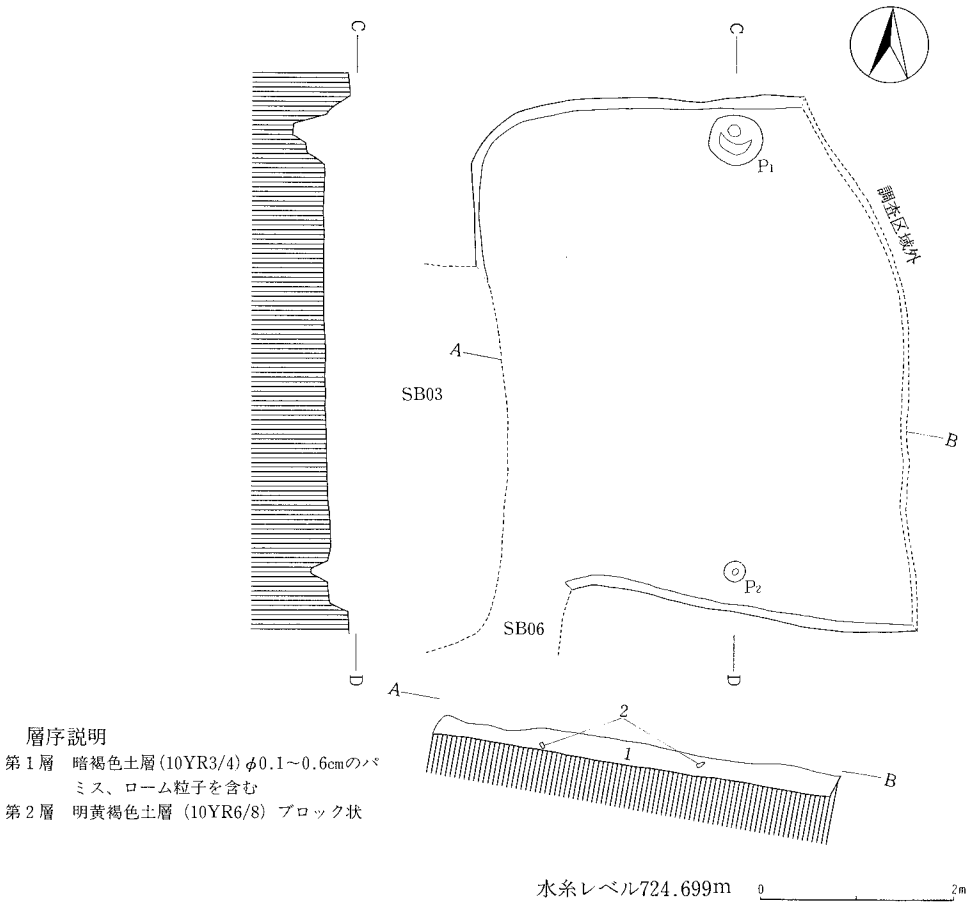
南北軸の方位は、N－4°－Wを示す。住居址覆土は、暗褐色（10YR3/4）土が大半を占める。

確認面からの壁高は、14～25cmを測る。ピットは主柱穴と考えられる2基が検出された。また、カマド、炉址、焼土、周溝は検出されなかった。

遺物（第366・377図、図版76・86）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、鉄製品、石製品が出土している。このうち、図示したものは鉄製品１点である。「U」字形を呈するものであるが、用途は不明である。石製品は、粘板岩製のピエス・エスキーユである。

本住居址の所産期は、重複関係および出土土器片から、古墳時代前期に比定される。



第187図　第72号住居址実測図

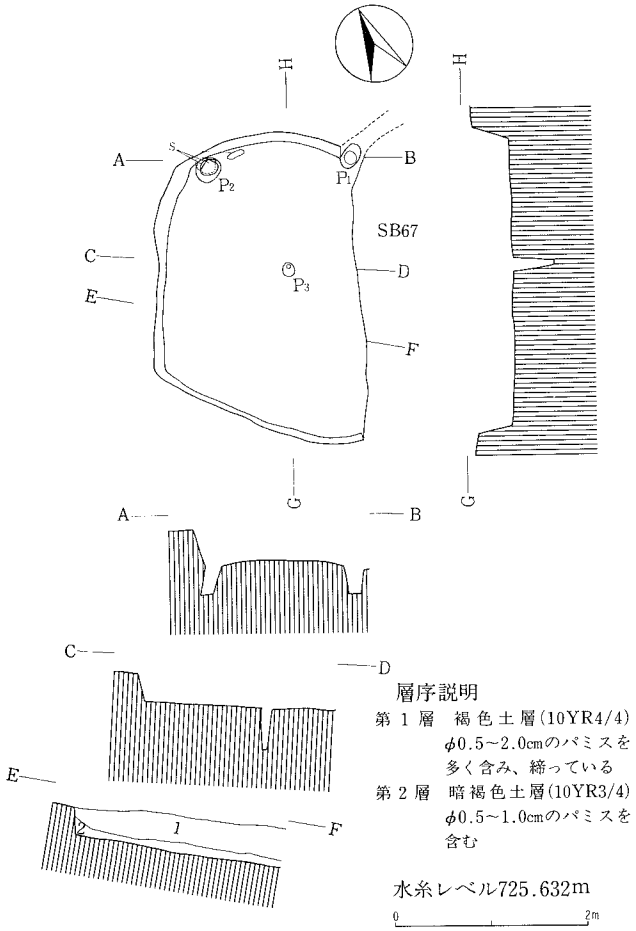
70）第73号住居址

遺構（第188図、図版13）

本住居址は、Ｃ－４グリッドに位置する。第67・75号住居址と重複関係を有し、第75号住居址を切り、第67号住居址に切られている。

東西は残存部で210cm、南北326cmを測り、平面プランは、おそらく、東西に長い隅丸長方形を呈するものと思われる。

南北軸の方位は、Ｎ－27°－Ｅを示す。住居址覆土は、２層に区分され、自然堆積と考えられ



第188図　第73号住居址実測図

る。

確認面からの壁高は、28～43.5cmを測る。

ピットは総計3基検出された。このうち、P_3が主柱穴と考えられる。

P_1は、29cmとやや深いがカマドに関わるものかもしれない。

P_2の上部からは河床礫が2個出土している。

なお、周溝は検出されなかった。

遺物

土師器片、須恵器片が出土しているが、図示し得るものは皆無である。

本住居址の所産期は、重複関係から奈良時代に比定される。

71）第74号住居址

遺構（第189・190図、図版13）

本住居址は、C－4グリッドに位置する。第75号住居址と重複関係を有し、第75号住居址を切って構築されている。

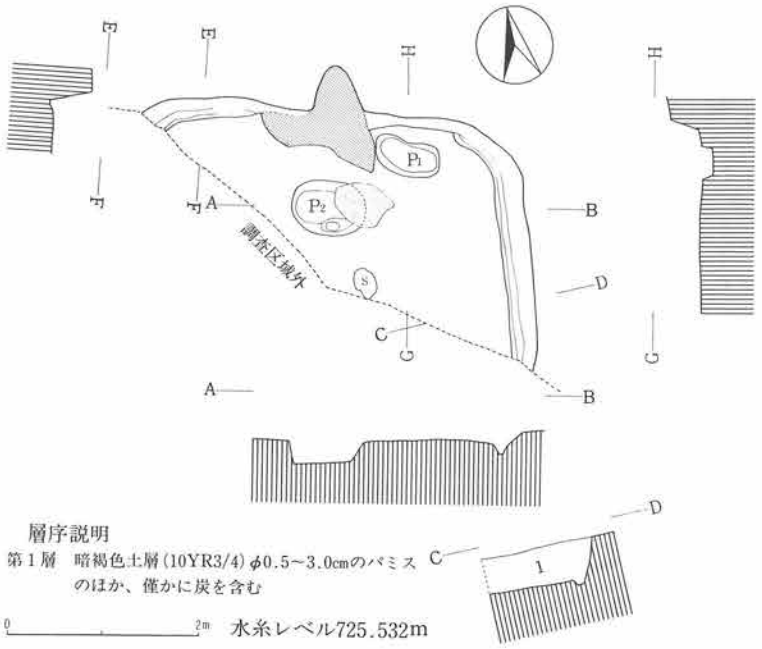
東西390cm、南北は調査範囲内で276cmを測る。平面プランについては不明である。

カマドを中心とする主軸方位は、N－18°－Eを示す。住居址覆土は、暗褐色(10YR3/4)土1層である。確認面からの壁高は、14～42cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。地山を掘り残して袖基部とし、軽石および褐色(10YR4/4)粘土により構築されていた。

ピットは2基検出されたが、主柱穴は調査範囲内では確認されなかった。2基のピットのうち、P_1が貯蔵穴、P_2は灰落としの機能を有するものであろう。

周溝は、カマド部分を除いた範囲で検出され、おそらく全周していたものと思われる。



第189図　第74号住居址実測図

遺物（第347・366図、図版58・76）

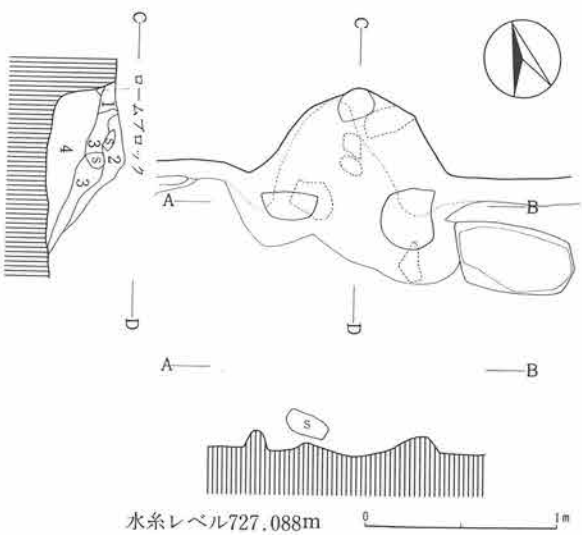
土師器片、黒色土器片、須恵器片、鉄製品、鉄滓のほか、自然遺物として炭化種子、炭化材が出土している。

図示したものに須恵器杯、土師器甕、鉄製品３点、石製品がある。１の須恵器杯は、４の土師器甕内部に入れ子状になっていたもので、外面に墨書がなされるが文字は不明である。

鉄製品（第366図）には、先端部を欠くが工具と考えられるもの（12）、紡錘車(13)、刀子(14)の３点がある。石製品は、凝灰岩製の砥石で重さ484ｇを量る。

炭化種子、炭化材はカマド内から出土したもので後述する。

本住居址の所産期は、平安時代に比定される。



層序説明
第１層　黒褐色土層(10YR2/3)φ0.5cm前後のパミスを含み、焼土粒子を僅かに含む
第２層　暗褐色土層(10YR3/3)φ0.5cm前後のパミス、粘土粒子を含む
第３層　褐色土層(10YR4/4)粘土層
第４層　暗褐色土層(10YR3/4)φ0.5～1.0cmのパミス、焼土を含む

第190図　第74号住居址カマド実測図

72）第75号住居址

遺構（第191・192図）

本住居址は、C－4グリッドに位置する。第73・74号住居址と重複関係を有し、第73・74号住居址に切られている。

東西621cm、南北は調査範囲内で450cmを測る。平面プランは、おそらく、隅丸方形を呈するものと思われる。

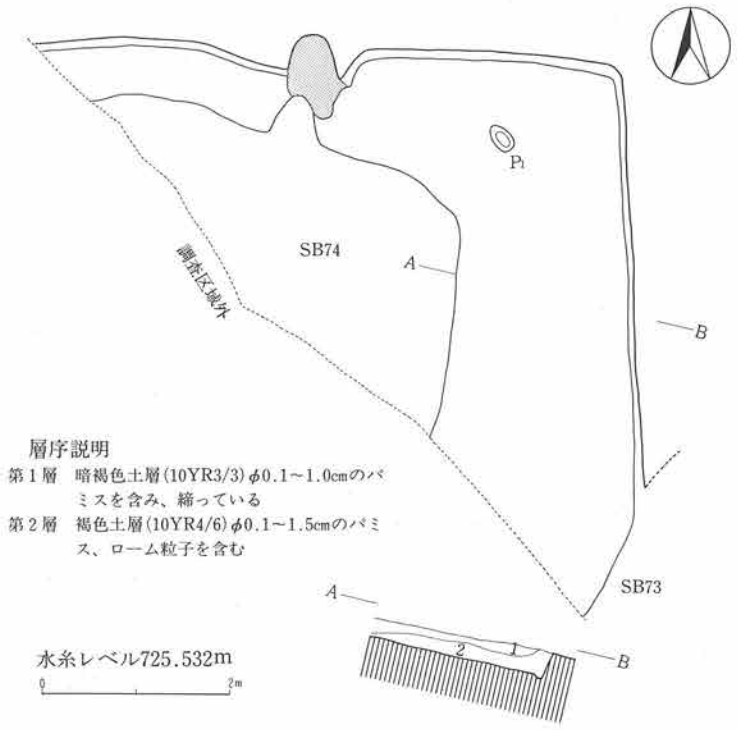
カマドを中心とする主軸方位は、N－3°－Eを示す。住居址覆土は、2層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、27cm前後を測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。右袖部は地山を掘り残し、左袖は地山を僅かに掘り残し、褐色（10YR4/4）土と軽石によりそれぞれ袖芯として、明褐色（7.5YR5/6）粘土により構築していた。

ピットは主柱穴と考えられる1基が検出された。なお、周溝は検出されなかった。

遺物（第347・348・366図、図版58・59・76）

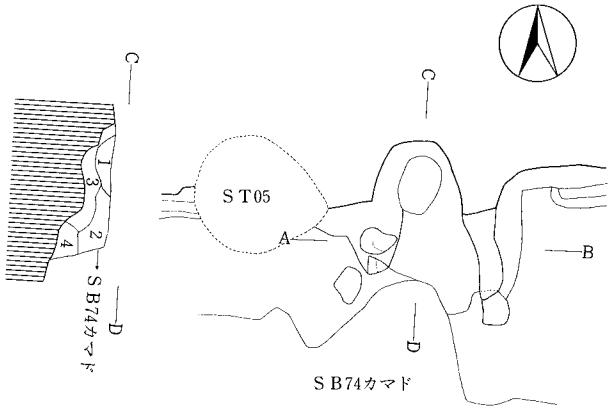
土師器片、黒色土器片、須恵器片、鉄製品、鉄滓が出土している。このうち、図示したものに土師器杯・小型甕、黒色土器高杯、鉄製品がある。



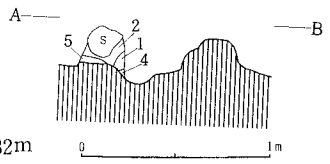
第191図　第75号住居址実測図

鉄製品（第366図15）は、釘であろう。

本住居址の所産期は、古墳時代後期中葉に比定される。



層序説明
第１層　暗褐色土層(10YR3/3)焼土粒子、炭を含む
第２層　暗褐色土層(10YR3/4)φ0.5～1.0cmのパミス、焼土粒子を含むほか、粘土粒子を多く含む
第３層　明褐色土層(7.5YR5/6)φ1.0cm前後のパミスを含む。粘土層
第４層　黒褐色土層(10YR2/3)焼土、パミスを含む
第５層　褐色土層(10YR4/4)φ0.5cm以下のパミスのほか、粘土粒子を含む



第192図　第75号住居址カマド実測図

73）第76号住居址

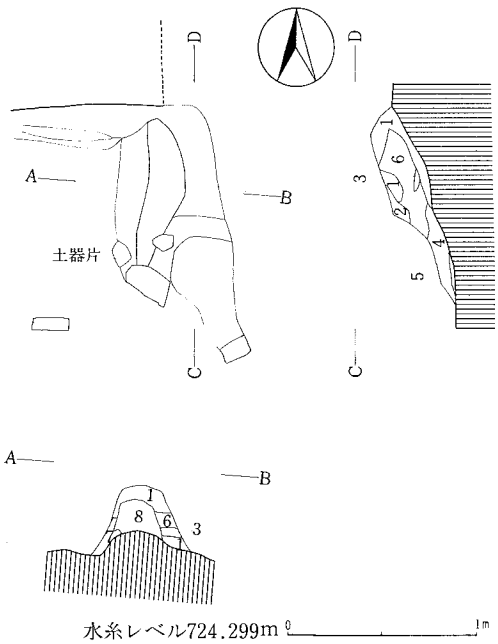
遺構（第193・194図、図版14）

本住居址は、Ｂ－２・３グリッドに位置する。

第５・71号住居址と重複関係を有し、第５・71号住居址に切られている。

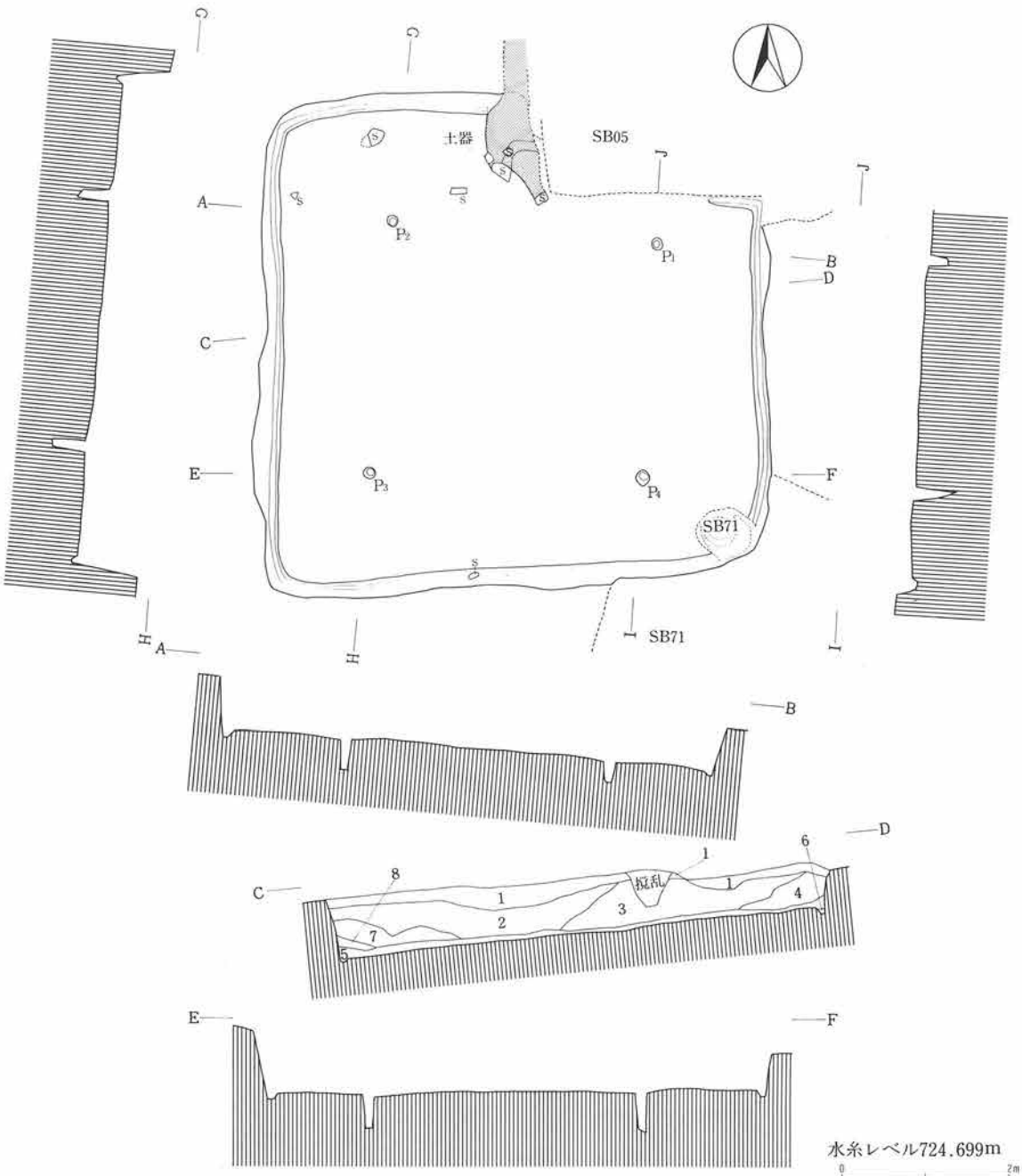
東西613cm、南北594cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、Ｎ－5.5°－Ｅを示す。住居址覆土は、８層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、43～85.5cmを測る。



層序説明
第１層　褐色土層（7.5YR4/4）φ0.2～0.5cmのパミスを含む。下部は貼ったもの。粘土層
第２層　暗褐色土層（10YR3/3）φ0.2～0.5cmのパミスを含む
第３層　明黄褐色土層（10YR6/8）ロームブロック。粘性なし
第４層　褐色土層（7.5YR4/6）灰層
第５層　明赤褐色土層（５YR5/8）焼土
第６層　明褐色土層（7.5YR3/4）φ0.2～0.8cmのパミス、ローム粒子、炭化物を含む
第７層　黒褐色土層(10YR2/2)φ0.2～0.5cmのパミス、ローム粒子を含む
第８層　黄褐色土層（10YR5/8）地山に相似した構築土で、僅かに黒色土を含む

第193図　第76号住居址カマド実測図



層序説明

第1層　黒褐色土層（10YR2/2）φ0.5～2.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第2層　暗褐色土層（10YR3/4）φ1.0cm前後のパミス、ロームブロックを含む
第3層　黒褐色土層（10YR3/2）ロームブロック、黒色土ブロックを含む
第4層　暗褐色土層（10YR3/3）φ1.0～2.0cmのパミスを含む
第5層　黒褐色土層（7.5YR3/2）φ0.5cm前後のパミスを含む
第6層　褐色土層（10YR4/4）地山に相似。締っていない
第7層　褐色土層（10YR4/4）φ0.2～1.2cmのパミスを含む
第8層　黒色土層（10YR2/1）ローム粒子を含む

第194図　第76号住居址カマド実測図

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。第５号住居址に切られているため、調査し得たのは、およそ1/2の範囲である。地山を僅かに掘り残し、黒褐色（10YR2/2）土および黄褐色（10YR5/8）土を袖芯とし、褐色（7.5YR4/4）粘土により構築されていた。また、加工した軽石も認められたことから、軽石も構築材として使われていたものと思われる。

ピットは主柱穴と考えられる４基が検出された。また、周溝は、カマド部分を除き全周していたものと思われる。

遺物（第348・366・371・376図、図版59・76・81・85）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、鉄製品、石製品、鉄滓が出土している。このうち、図示したものに土師器杯・高杯・甑・甕、黒色土器杯、鉄製品、石製品がある。

鉄製品（第366図16）は、刀子で、一部に、木質部が残存している。石製品には、石臼（第371図12）と黒曜石製の石鏃（第376図３～５）がある。

本住居址の所産期は、古墳時代後期中葉に比定される。

74）第77号住居址

遺構（第195・196図、図版14）

本住居址は、Ａ・Ｂ－２グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

東西647cm、南北617cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、Ｎ－9.5°－Ｗを示す。住居址覆土は、６層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、52.5～63cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。遺存状態は良好で、地山を掘り残した上に暗褐色（7.5YR3/4）土を載せて袖芯とし、明褐色（7.5YR5/6）粘土により構築されていた。また、焚口部・支脚石には軽石が用いられていた。

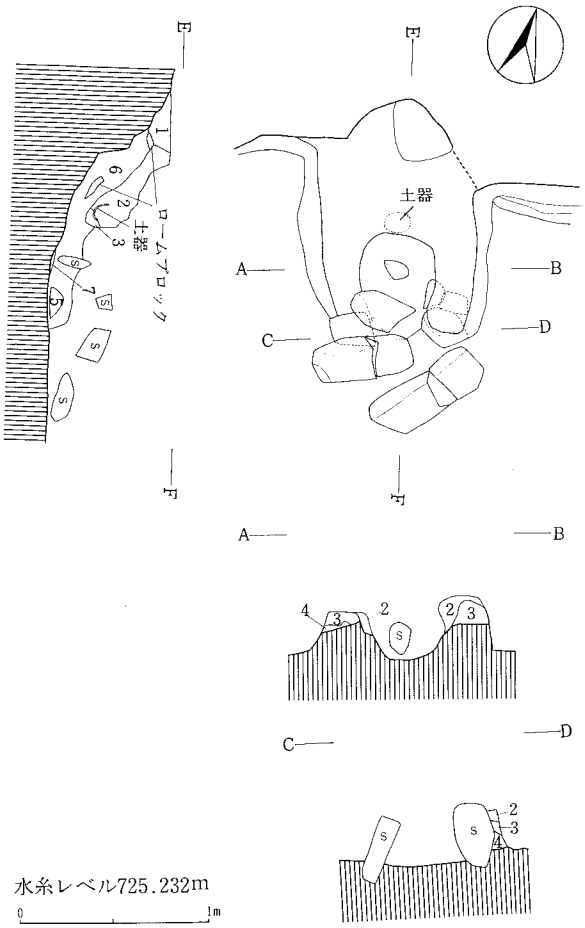
ピットは総計６基検出された。このうち、P_1～P_4が主柱穴、P_5が貯蔵穴、P_6は出入口部の施設に関連するものであろう。また、周溝は、カマド部分を除きほぼ全周していた。

本住居址は、焼失住居と考えられ、炭化材のほか、多くの遺物が出土している。

遺物（第349・350・367～369・371・375・376図、図版60・61・77～79・80・84・85）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、縄文土器片、石製品、土製品、鉄滓のほか、自然遺物として炭化材が出土している。このうち、図示したものに土師器杯・椀・甑・甕、黒色土器杯・椀・高杯、縄文土器片、石製品、土製品がある。杯には、素縁のものと外稜口辺を有するものとがある。

石製品（第367図）には、滑石製の臼玉（48～57）と剣形あるいは鏡形の石製模造品の一部と考えられる破片（58）と磨石（第371図11）、研磨痕を残すもの（第375図２）がある。臼玉は10点出土しており、第33号住居址の13点に次いで多い。



層序説明
第1層　褐色土層(7.5YR4/6)焼土粒子を多く含む
第2層　明褐色土層(7.5YR5/6)粘土層
第3層　暗褐色土層(7.5YR3/4)粘土粒子を含む
第4層　褐色土層(7.5YR4/4)φ0.5～1.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第5層　にぶい黄橙色土層(10YR7/2)灰層
第6層　褐色土層(10YR4/6)焼土、炭化物、灰を含む
第7層　赤褐色土層(5YR4/8)焼土層
※S…全て軽石

第195図　第77号住居址カマド実測図

土製品には、丸玉(第367図58)、紡錘車(第368図9)、土製模造鏡(第369図6)がある。土製模造鏡は、鈴鏡を模したもので、カマド右袖脇から出土している。鈴の部分は2個しか残っていないが、痕跡から六鈴鏡と考えられる。紐の部分は剝落している。また、鏡面はヘラ描きの斜走沈線で表現されている。

縄文土器片は、後期の所産であろう。

炭化材で同定を行なったものは総て建築材と考えられるが、詳細については後述する。

本住居址の所産期は、古墳時代後期中葉に比定される。

75）第78号住居址

遺構（第197・198図、図版14）

本住居址は、E・F－5グリッドに位置する。第53・55号住居址と重複関係を有し、第55号住居址を切り、第53号住居址に切られている。

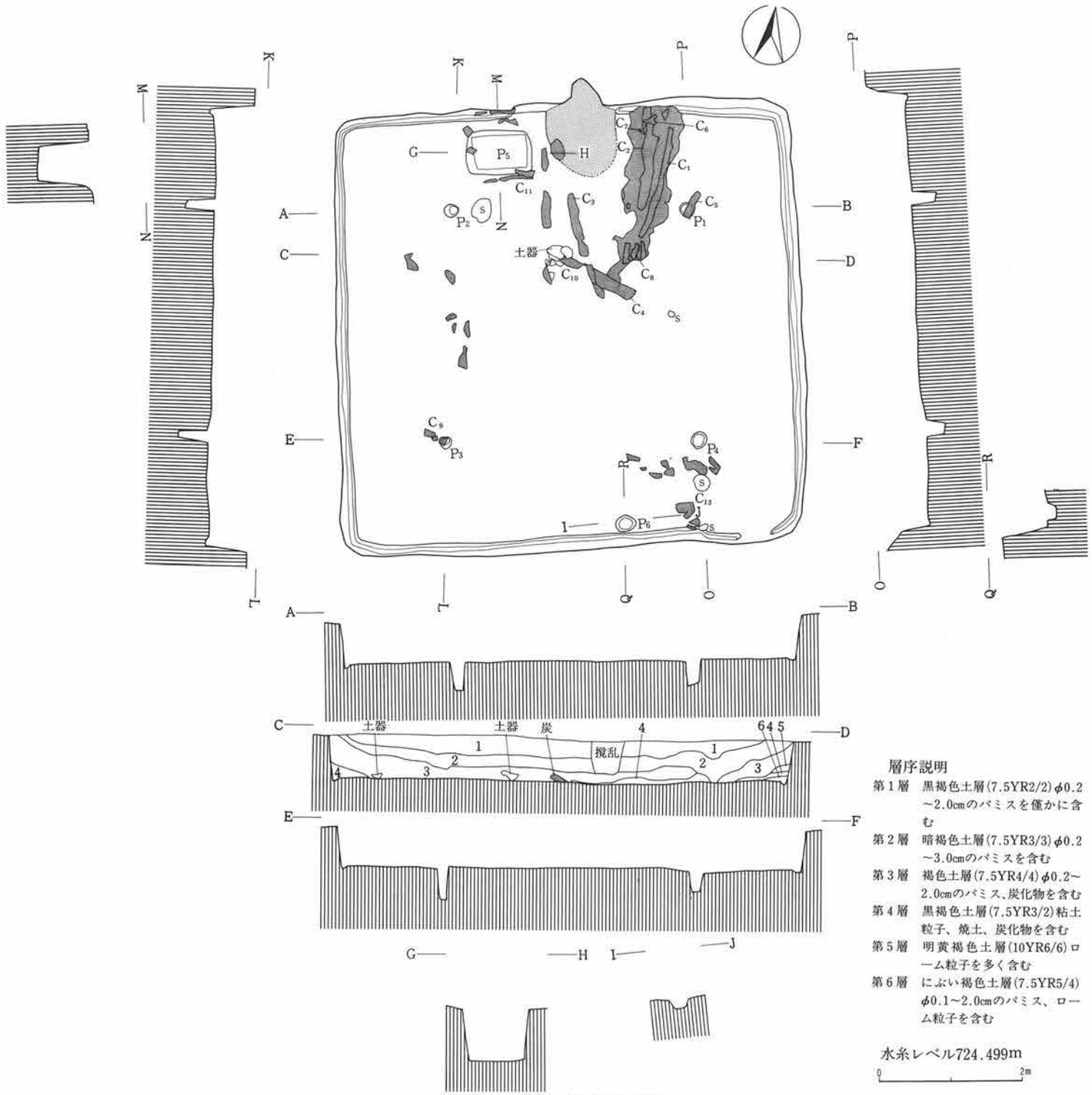
東西460cm、南北495cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、N－7°－Eを呈する。住居址覆土は、5層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、26～44cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。暗褐色（10YR3/4）土、褐色（10YR4/4）土および軽石を袖芯とし、明褐色（7.5YR5/6）粘土により構築されていた。また、火床部では軽石製の支脚石が認められた。

ピットは総計6基検出された。このうち、P_1～P_4が主柱穴、P_6が貯蔵穴と考えられる。

周溝は、カマド部分を除き全周していた。また、住居址ほぼ中央部では、礫が埋設されていた。



第196図　第77号住居址実測図

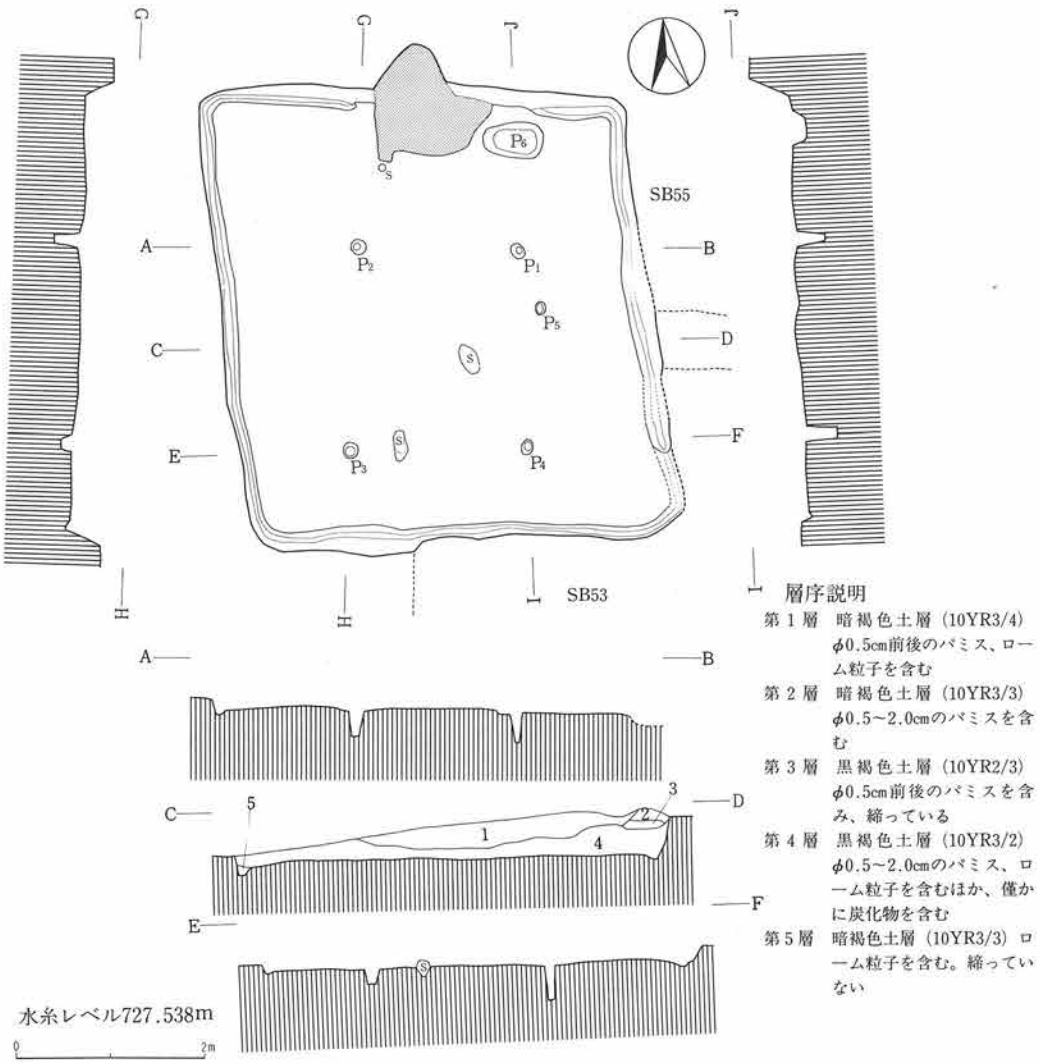
遺物（第351・366・372図、図版62・76・81）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、鉄製品、石製品のほか、自然遺物として獣骨が出土している。このうち、図示したものに黒色土器杯、須恵器杯、土師器甕、鉄製品、石製品がある。

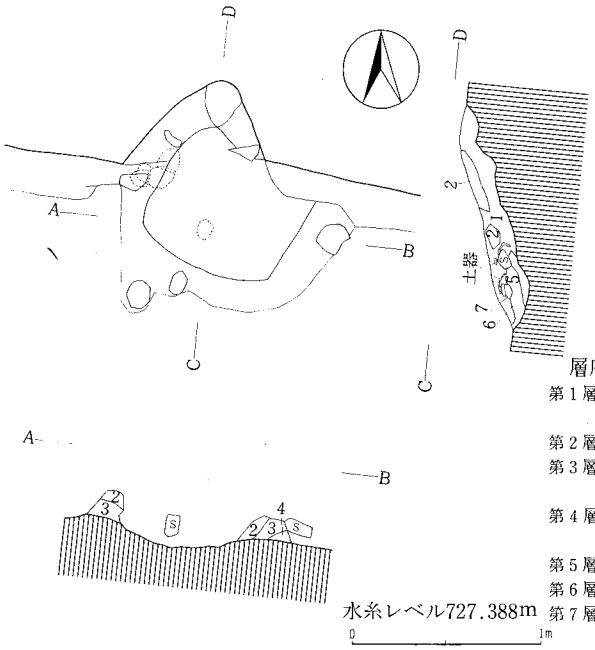
鉄製品（第366図17）は、用途不明である。石製品（第372図）は、砥石と軽石製品である。砥石は、砂岩製で重さ110ｇを量る。軽石製品はいずれもカマドから出土したものである。

獣骨は、カマド前庭部から出土したもので、後述する。

本住居址の所産期は、平安時代に比定される。



第197図　第78号住居址実測図



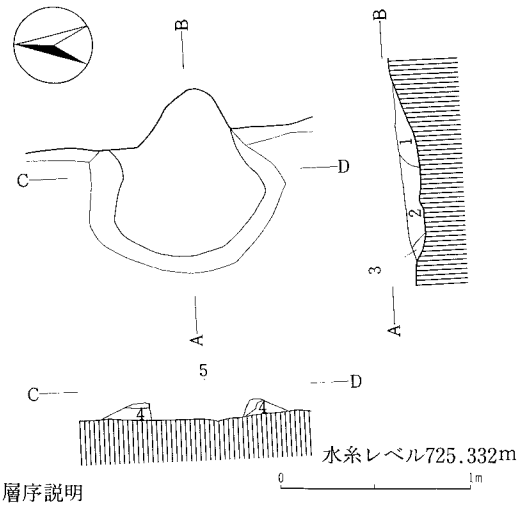
層序説明
第１層　黒褐色土層（10YR2/3）ローム粒子のほか、僅かに焼土を含む
第２層　明褐色土層（7.5YR5/6）粘土層
第３層　暗褐色土層（10YR3/4）φ0.5cm前後のパミスを僅かに含むほか、粘土を含む
第４層　褐色土層（10YR4/4）ローム粒子、パミスを含む
第５層　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）灰層
第６層　明褐色土層（7.5YR5/8）焼土層
第７層　褐色土層（10YR4/6）焼土層

第198図　第78号住居址カマド実測図

76）第79号住居址

遺構（第199・200図、図版14）

本住居址は、Ｃ－３グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。



層序説明
第１層　黄褐色土層（10YR5/8）焼土粒子を多量に含む
第２層　黒褐色土層（7.5YR3/2）焼土粒子、炭化物を含む
第３層　明黄褐色土層（10YR7/6）灰層
第４層　にぶい黄橙色土層（10YR7/4）地山に相似。黒色土を含む。袖芯
第５層　橙色土層（2.5YR7/8）粘土層

第199図　第79号住居址カマド実測図

東西378cm、南北345cmを測り、平面プランは、隅丸方形プランを呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、Ｅ－６°－Ｎを示す。

住居址覆土は、黒褐色（7.5YR3/2）土層、１層である。確認面からの壁高は、３～９cmを測る。

カマドは、東壁ほぼ中央部に位置するが、遺存状態は悪い。おそらく、にぶい黄橙色（10YR7/4）土を袖芯とし、

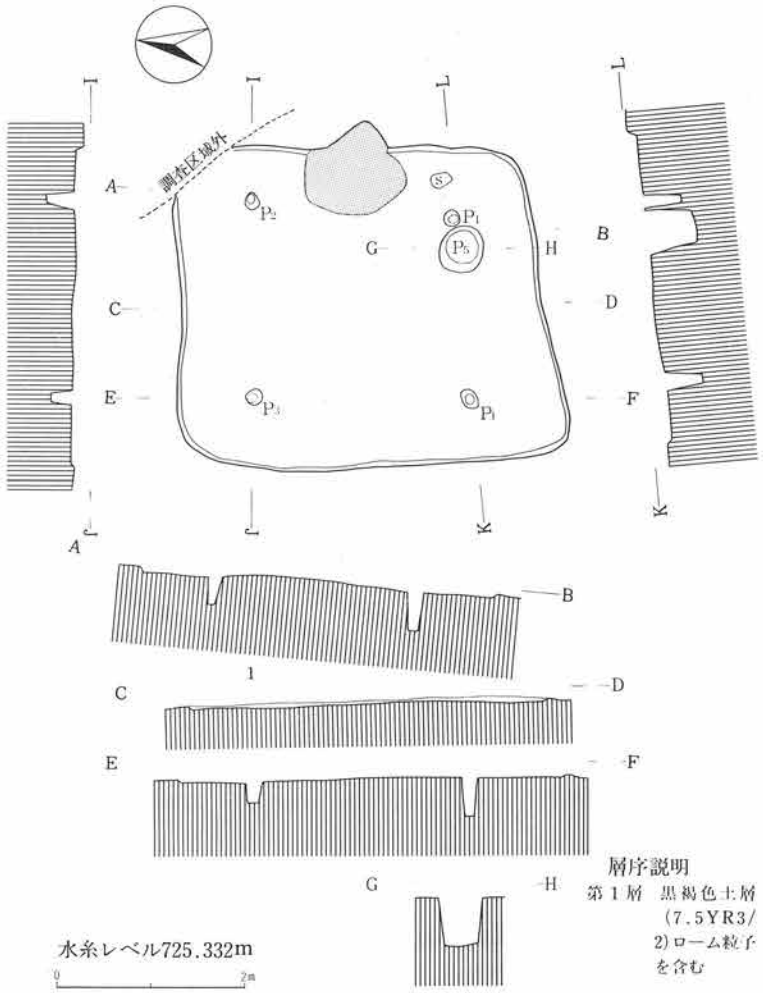
橙色（2.5YR7/8）粘土により構築されていた。

ピットは総計５基検出された。このうち、P_1～P_4が主柱穴で、P_5は掘立柱建物址に伴うものかもしれない。なお、周溝は検出されなかった。

遺物

土師器片が出土しているが、図示し得るものは皆無である。

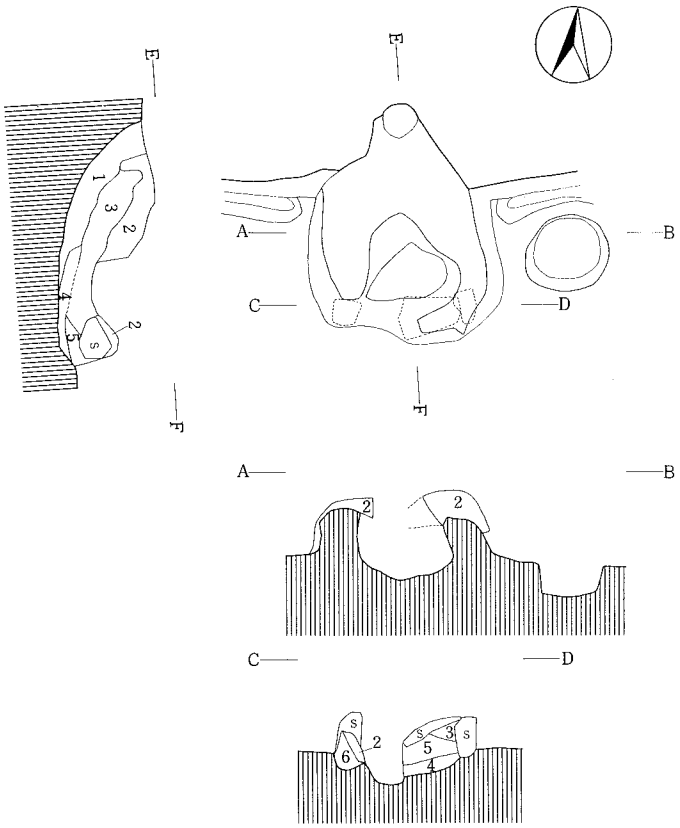
本住居址の所産期は、出土土器片から平安時代に比定される。



第200図　第79号住居址実測図

77）第80号住居址

遺構（第201・202図、図版14）



層序説明
第1層　黒褐色土層(10YR2/3)粘土粒子、焼土粒子を含む
第2層　褐色土層(7.5YR4/4)粘土層
第3層　暗褐色土層(7.5YR3/4)焼土を多量に含む
第4層　にぶい褐色土層(7.5YR5/4)灰層
第5層　暗褐色土層(10YR3/3)焼土粒子を含む
第6層　褐色土層(10YR4/6)φ0.5～3.0cm前後のパミスを含む

第201図　第80号住居址カマド実測図

本住居址は、C－3グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

東西602cm、南北619cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、N－14°－Wを示す。

住居址覆土は、9層に区分され、自然堆積と考えられる。

確認面からの壁高は、36.5～63cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。遺存状態は良好であった。焚口部には加工した軽石を用い、地山を掘り残して袖芯とし、褐色(7.5YR4/4)粘土を用いて構築されていた。

ピットは総計9基検出された。このうち、P_4～P_7が主柱穴、P_1が貯蔵穴、P_8は出入口部の施設に関連するものであろう。周溝は、カマド部分を除き、断続的ながらほぼ全周していた。

また、本住居址は焼失住居と考えられ、南部を中心に炭化材が認められた。

遺物（第351・352・368・372・376図、図版62・63・78・81・85）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、縄文土器片、石製品、鉄滓のほか、自然遺物として炭化材が出土している。図示したものには土師器杯・鉢・甕、黒色土器杯、須恵器高杯、縄文土器片、石製品がある。土師器杯には、黒彩土器（第351図2）がある。縄文土器片は、後期の所産である。

石製品には、砥石、紡錘車、磨石がある。砥石は凝灰岩製で重さ521ｇ、紡錘車は滑石製で重さ48.5ｇを量る。磨石は、軽石製である。

炭化材は、建築材と考えられるが、詳細については後述する。

本住居址の所産期は、古墳時代後期中葉に比定される。

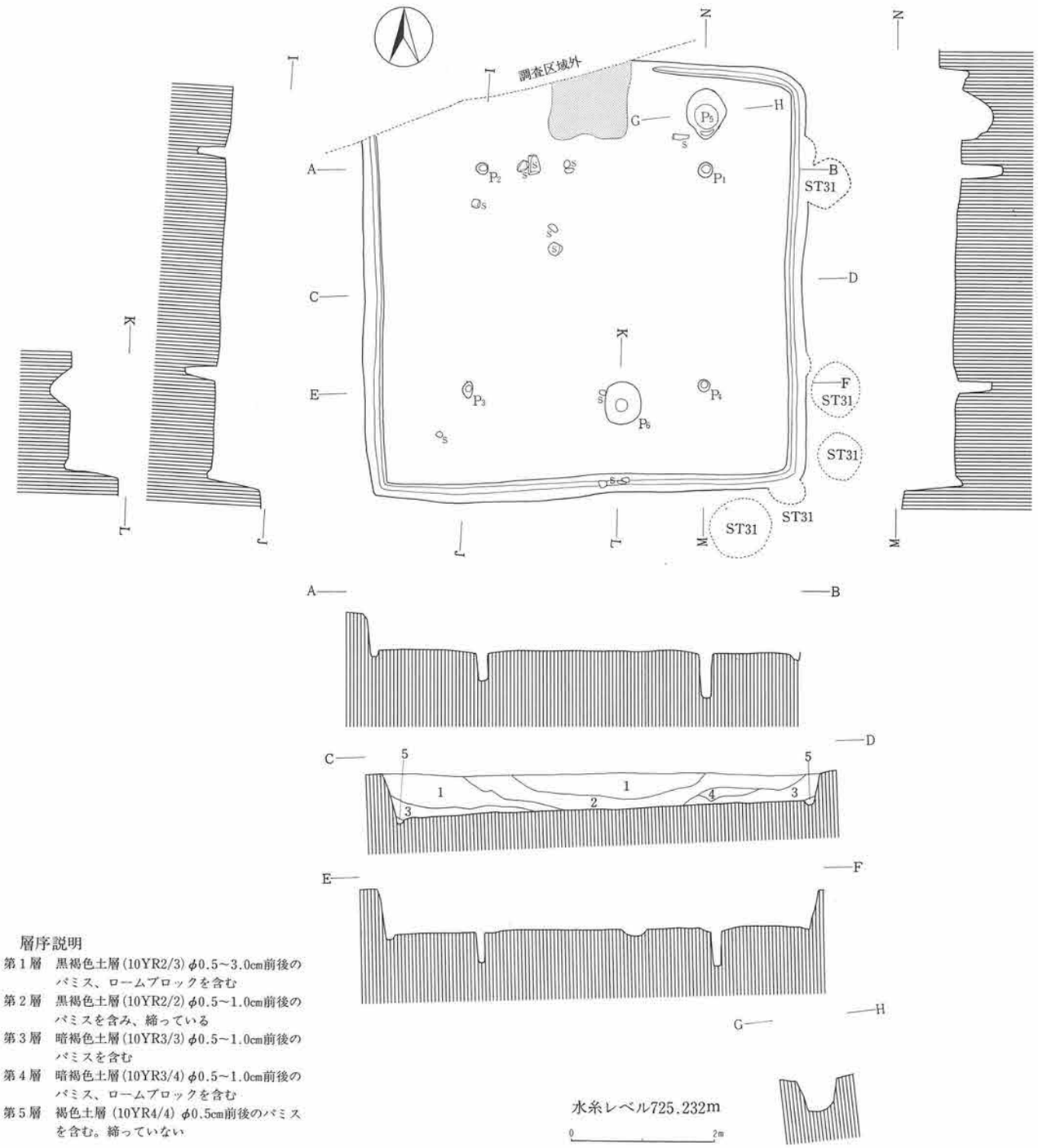
水糸レベル725.132m

0 2m

層序説明

第1層　黒褐色土層（10YR3/2）ローム粒子を含む
第2層　黒褐色土層（10YR2/2）ローム粒子を含む
第3層　暗褐色土層（10YR3/3）φ0.2～0.5cmのパミスを僅かに含むほか、ローム粒子を含む
第4層　灰黄褐色土層（10YR4/2）ローム粒子を含む
第5層　暗褐色土層（10YR3/4）φ0.2～1.2cmのパミスを僅かに含むほか、ローム粒子を含む
第6層　黒色土層（10YR2/1）ローム粒子を含む
第7層　黒褐色土層（10YR2/3）φ0.2～0.5cmのパミスを僅かに含むほか、ローム粒子を含む
第8層　黒色土層（7.5YR2/1）ローム粒子を僅かに含む
第9層　黒褐色土層（7.5YR3/1）ローム粒子を含む

第202図　第80号住居址実測図



層序説明

第1層　黒褐色土層(10YR2/3) φ0.5～3.0cm前後のパミス、ロームブロックを含む
第2層　黒褐色土層(10YR2/2) φ0.5～1.0cm前後のパミスを含み、締っている
第3層　暗褐色土層(10YR3/3) φ0.5～1.0cm前後のパミスを含む
第4層　暗褐色土層(10YR3/4) φ0.5～1.0cm前後のパミス、ロームブロックを含む
第5層　褐色土層 (10YR4/4) φ0.5cm前後のパミスを含む。締っていない

第203図　第81号住居址実測図

78）第81号住居址

遺構（第203・204図、図版14）

本住居址は、C－3グリッドに位置する。第31号掘立柱建物址と重複関係を有し、第31号掘立柱建物址により切られている。

東西609cm、南北598cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、N－15°－Wを示す。住居址覆土は、5層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、37～72cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。遺存状態は、良好であった。焚口部には加工した軽石を用い、地山を掘り残して袖芯とし、褐色（7.5YR4/4）粘土を用いて構築されていた。

ピットは総計6基検出された。このうち、P_1～P_4が主柱穴、P_5が貯蔵穴と考えられる。

周溝は、カマド部分を除き、全周していたものと思われる。

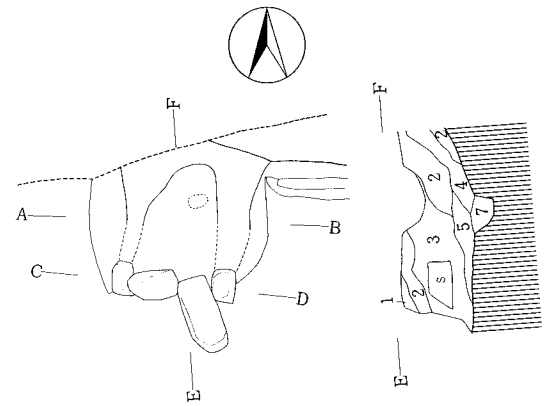
遺物（第352・353・366・372図、図版63・64・76・81）

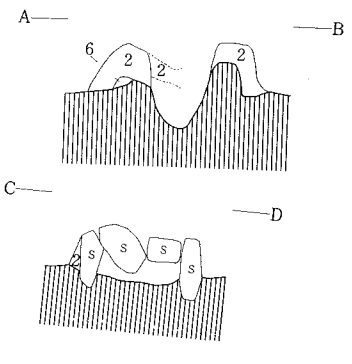
土師器片、黒色土器片、鉄製品、石製品、鉄滓が出土している。このうち、図示したものに土師器杯・甕、黒色土器杯・小型甕、鉄製品がある。土師器杯には、赤色塗彩されたもの（第352図4）がある。また、甕ではハケメ調整されたものが目立つほか、木ノ葉底を有するもの（第353図2）がある。

鉄製品は、鉄鏃（第366図18）が1点出土している。

石製品（第372図6）は、軽石製の石臼の一部と考えられる。

本住居址の所産期は、古墳時代後期中葉に比定される。





層序説明

第1層　暗褐色土層(7.5YR3/3)φ0.5～1.0cm前後のパミスのほか、粘土粒子を含む(住居址覆土)
第2層　褐色土層(7.5YR4/4)粘土層
第3層　暗褐色土層(10YR3/3)φ0.5cm前後のパミスのほか、粘土粒子、焼土粒子を僅かに含む。締っていない
第4層　極暗褐色土層(7.5YR2/3)焼土を含む
第5層　浅黄橙色土層(10YR8/3)灰層
第6層　黒色土層(10YR2/1)ローム粒子を含む
第7層　黒褐色土層(10YR2/2)焼けた粘土、灰を含む。締っていない

水糸レベル724.782m

0　1m

第204図　第81号住居址カマド実測図

79）第82号住居址

遺構（第205・206図、図版14）

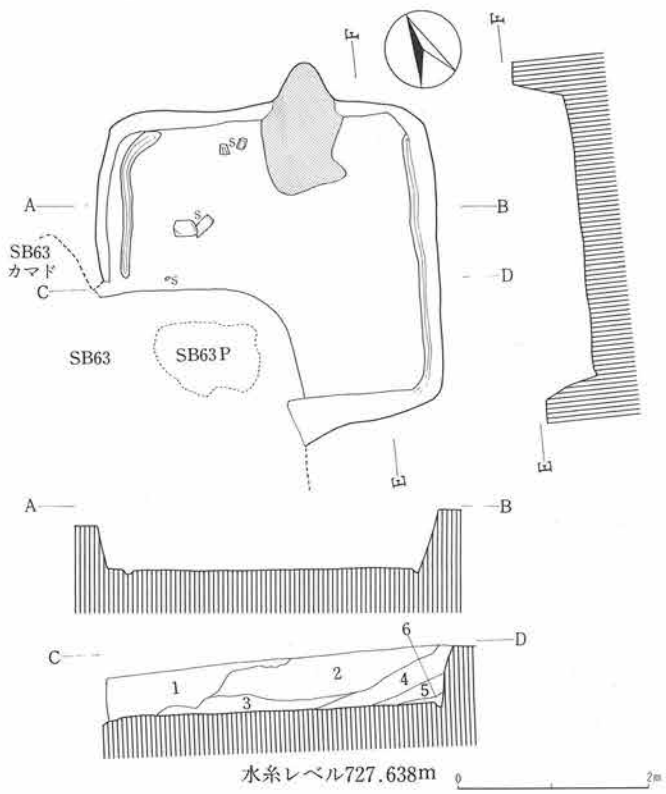
本住居址は、Ｆ－５グリッドに位置する。第63号住居址と重複関係を有し、第63号住居址に切られている。

東西362cm、南北340cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、Ｎ－23°－Ｅを示す。住居址覆土は、６層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、45～63cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。遺存状態は、比較的良好であった。暗褐色（10YR3/4）土および加工した軽石を袖芯とし、明褐色（7.5YR5/6）粘土により構築されていた。

ピットは検出されなかった。また、周溝は、カマド部分を除き、ほぼ全周していたものと思われる。



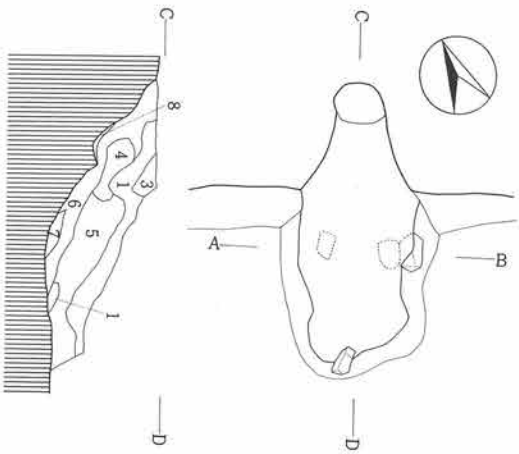
層序説明
第１層　褐色土層(7.5YR4/4)φ0.5～2.0cmのパミスのほか、僅かに炭化物を含む
第２層　暗褐色土層(10YR3/4)φ0.5～3.0cmのパミス、ロームブロック、黒色土ブロックを含む
第３層　褐色土層(10YR4/4)φ0.5～3.0cmのパミスのほか、黒色土ブロックを多く含む
第４層　黄褐色土層(10YR5/6)φ0.5～2.0cmのパミスのほか、ロームブロックを含む
第５層　黒褐色土層(10YR2/3)パミスを僅かに含む
第６層　褐色土層(10YR4/6)地山に相似。締っていない

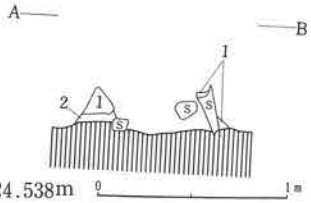
第205図　第82号住居址実測図

遺物（第353図、図版64）

土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土している。このうち、図示したものは黒色土器杯１点である。黒色土器杯は、カマド横から出土しており、丸底で、底部は手持ちヘラケズリ後粗いヘラミガキがなされる。

本住居址の所産期は、古墳時代後期後半に比定される。





層序説明
第１層　明褐色土層(7.5YR5/6)粘土層
第２層　暗褐色土層(10YR3/4)φ0.5cm前後のパミス、ローム粒子を含む
第３層　にぶい黄褐色土層(10YR4/3)φ0.5～1.0cm前後のパミス、粘土粒子を含む
第４層　褐色土層(10YR4/6)φ0.5～3.0cm前後のパミス、粘土を含む
第５層　褐色土層(10YR4/4)φ0.5～5cm前後のパミスのほか、粘土粒子を含む
第６層　暗褐色土層(7.5YR3/3)焼土粒子を含む
第７層　黄橙色土層(10YR7/8)灰層
第８層　黒褐色土層(10YR3/2)φ0.5cm前後のパミスを含む。堅緻。貼った層
　　第４～第７層は締っていない

水糸レベル724.538m　0　1m

第206図　第82号住居址カマド実測図

80）第83号住居址

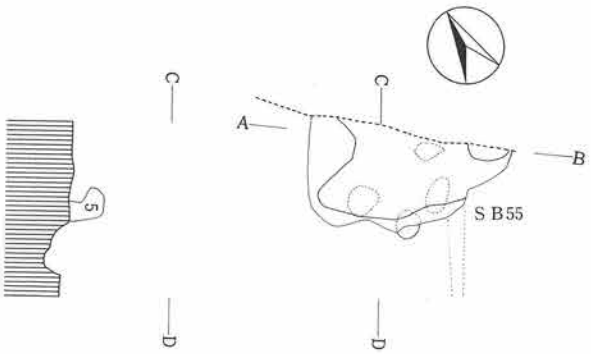
遺構（第207・208図、図版14）

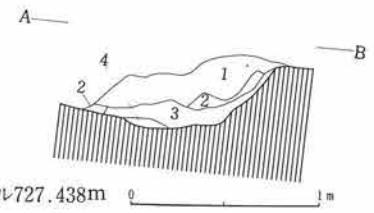
本住居址は、E・F－5グリッドに位置する。第55号住居址と重複関係を有し、第55号住居址を切って構築されている。

調査し得た範囲は、東西489cm、南北325cmを測る。

カマドを中心とする主軸方位は、E－15°－Sを示す。

住居址覆土は、3層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、22～33cmを測る。





層序説明
第１層　暗褐色土層(10YR3/4)φ0.5cm前後のパミスのほか粘土粒子を僅かに含む
第２層　褐色土層(7.5YR4/4)粘土層
第３層　褐色土層(10YR4/6)焼土、灰を含む
第４層　明褐色土層(7.5YR5/8)焼土層
第５層　黒褐色土層(10YR2/3)φ0.5cm前後のパミスのほか、ローム粒子を含む。堅緻。カマド袖

水糸レベル727.438m　0　1m

第207図　第83号住居址カマド実測図

カマドは、東壁ほぼ中央部に位置するものと思われる。黒褐色（10YR2/3）土および軽石、安山岩を袖芯とし、褐色（7.5YR4/4）粘土により構築されていた。

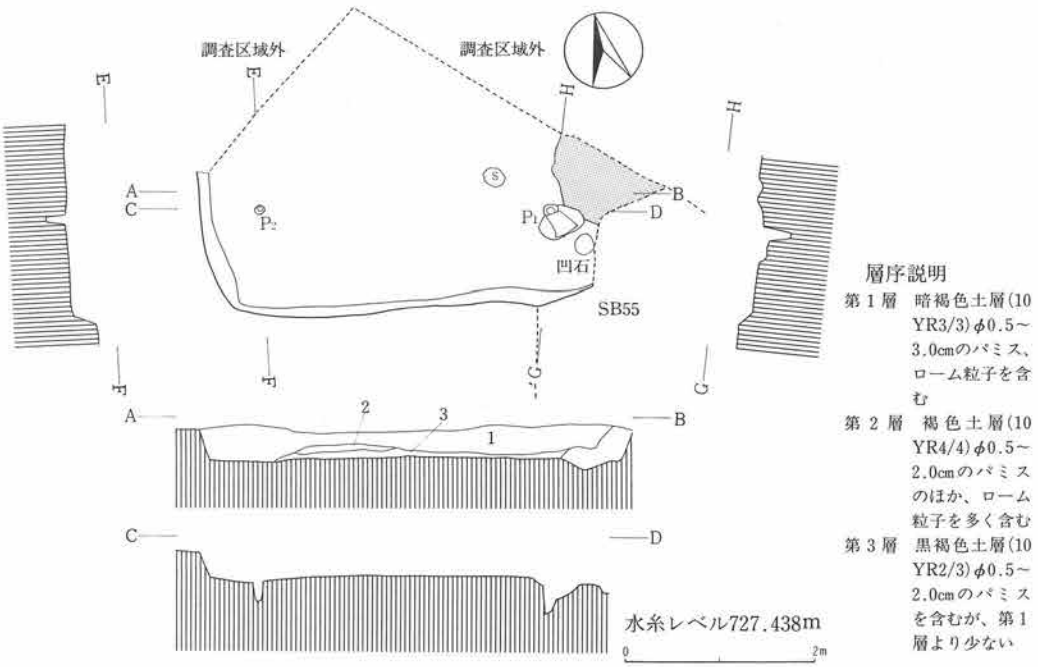
ピットは主柱穴と考えられる２基が検出された。また、周溝は調査範囲内では認められなかった。

遺物（第353・375図、図版64・84）

土師器片、須恵器片、石製品、鉄滓のほか、自然遺物として獣骨が出土している。このうち、図示したものに須恵器杯・甕、石製品がある。

石製品（第375図３）は、石臼である。

本住居址の所産期は、平安時代に比定される。



第208図　第83号住居址実測図

81）第84号住居址

遺構（第209・210図、図版15）

本住居址は、Ｃ－２・３グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

調査し得た範囲で、東西419cm、南北220cmを測る。

カマドを中心とする主軸方位は、Ｎ－11°－Ｗを示す。住居址覆土は、４層に区分され、自然堆

積と考えられる。確認面からの壁高は、33～45cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。遺存状態は、比較的良好であった。焚口部には加工した軽石を用い、地山を掘り残して袖芯とし、第３・４層を主体として構築されていたものと思われる。

ピットは主柱穴と考えられる１基が検出された。周溝は、調査し得た部分から推して、カマド部分を除き、全周していたものと思われる。

遺物（第354・367図、図版65・77）

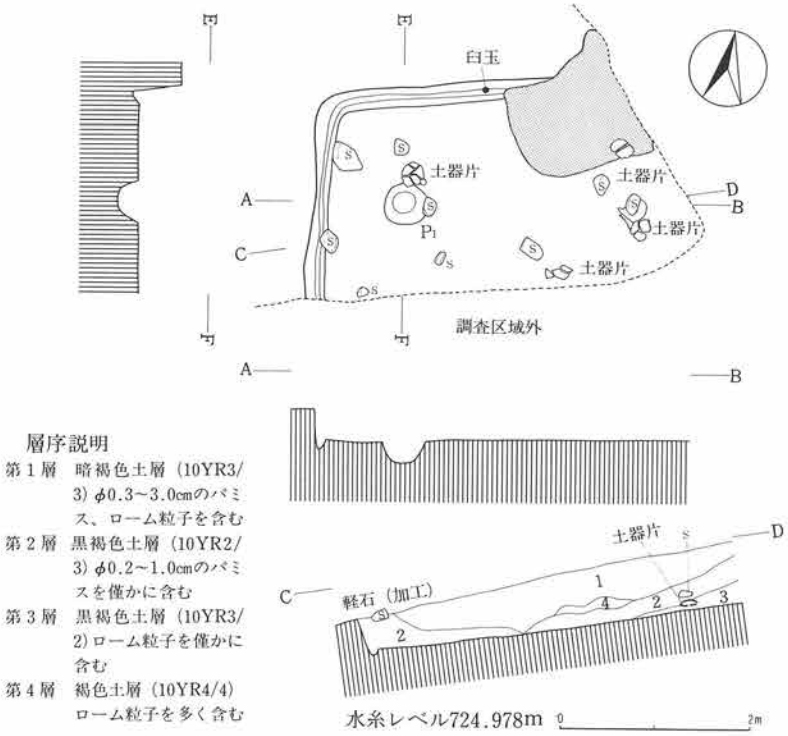
土師器片、黒色土器片、石製品のほか、自然遺物として炭化材がカマドから出土している。

このうち、図示したものに土師器杯・甕・甑、石製品がある。

石製品（第367図60）は、滑石製の臼玉である。

炭化材は、薪と考えられ、詳細については後述する。

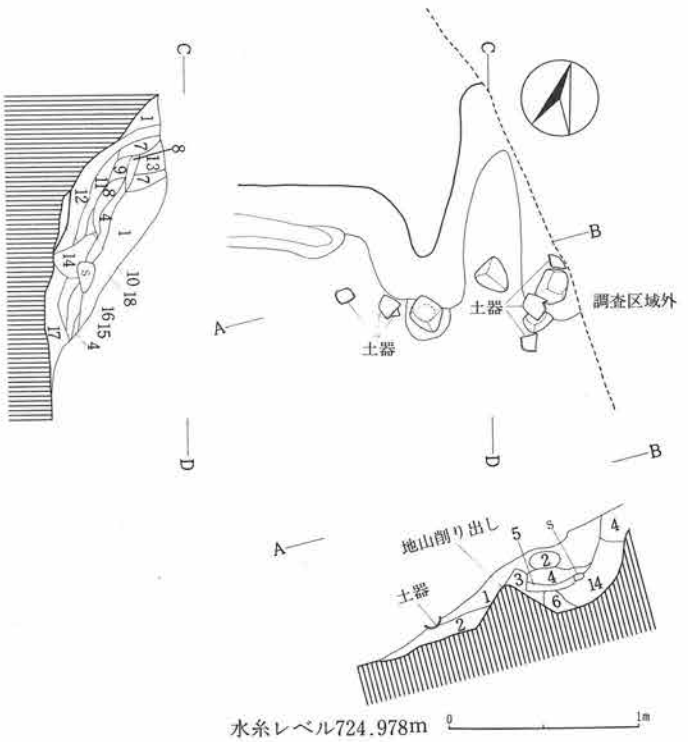
本住居址の所産期は、古墳時代後期中葉に比定される。



第209図　第84号住居址実測図

層序説明

第１層　暗褐色土層（10YR3/4）ローム粒子、粘土粒子を含む
第２層　黒褐色土層（10YR2/3）ローム粒子、粘土粒子を含む
第３層　赤褐色土層（2.5YR4/8）粘土粒子を多く含む
第４層　明赤褐色土層（2.5YR5/8）粘土粒子を多く含む
第５層　暗赤灰色土層（2.5YR3/1）灰を多く含む
第６層　褐色土層（7.5YR4/4）ローム粒子、粘土粒子、焼土、灰を多く含む
第７層　にぶい赤褐色土層（５YR4/4）粘土粒子を多量に含む
第８層　褐灰色土層（５YR4/1）灰層
第９層　褐色土層（7.5YR4/3）灰を多く含む
第10層　極暗赤褐色土層（５YR2/4）粘土粒子を多く含む
第11層　暗褐色土層（7.5YR3/3）粘土粒子、灰を含む
第12層　褐色土層（10YR4/4）粘土粒子を多く含む
第13層　暗褐色土層（7.5YR3/4）ローム粒子、粘土粒子を含む
第14層　暗赤褐色土層（５YR3/4）粘土粒子、焼土粒子、灰を含む
第15層　にぶい黄褐色土層（10YR5/4）粘土粒子、灰を含む
第16層　明褐色土層（7.5YR5/6）灰層
第17層　明赤褐色土層（５YR5/8）焼土層
第18層　暗褐色土層（10YR3/4）φ1.0cm前後のパミス、ローム粒子を含む（埋土）



第210図　第84号住居址カマド実測図

82）第85号住居址

遺構（第211・212図、図版15）

本住居址は、Ｂ・Ｃ－２・３グリッドに位置する。第46号掘立柱建物址と重複関係を有し、第46号掘立柱建物址に切られている。

東西665cm、南北624cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、Ｎ－１°－Ｅを示す。住居址覆土は、４層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、43～79cmを測る。

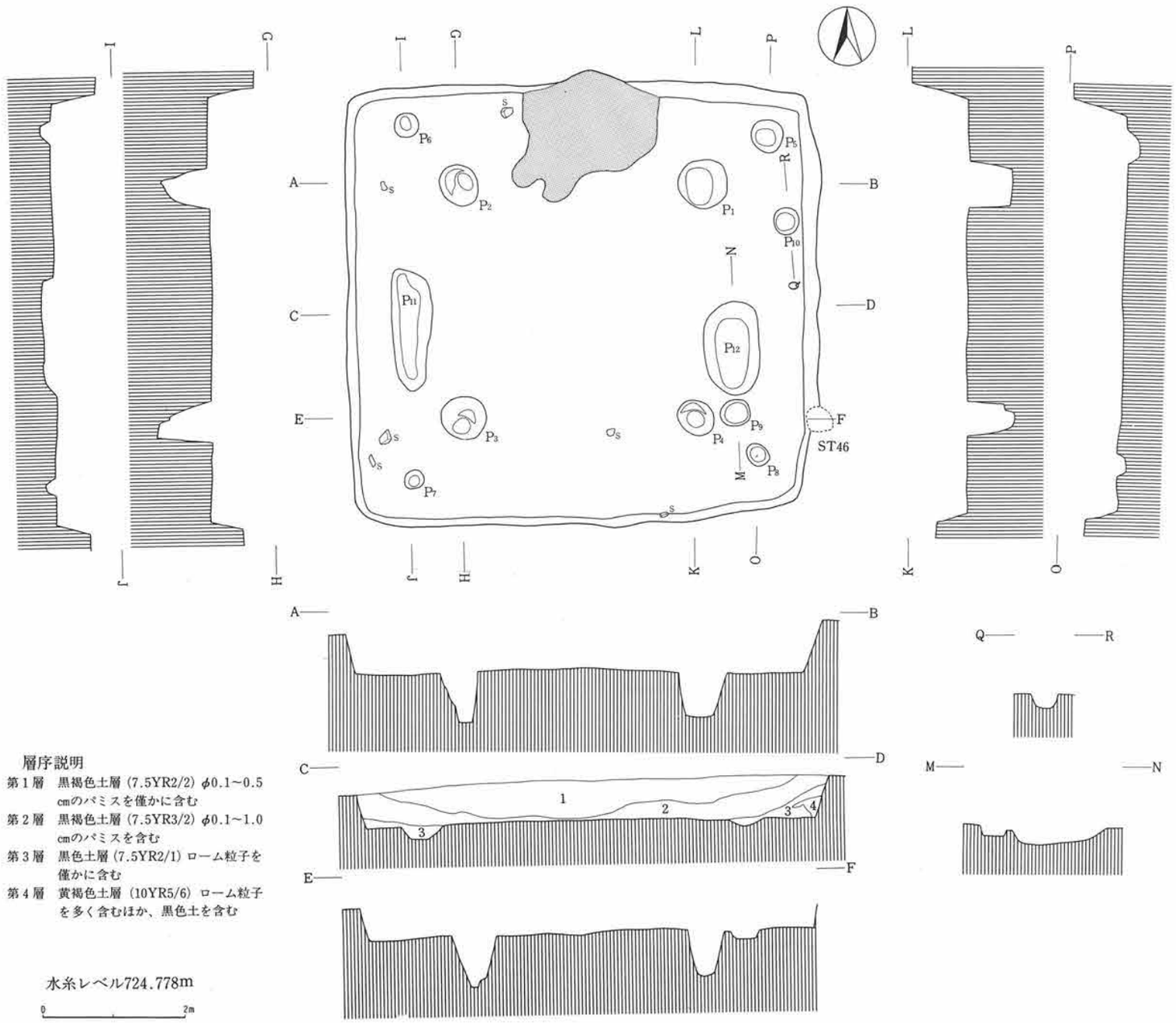
カマドは、北壁ほぼ中央部に位置するが、遺存状態は悪い。

ピットは総計13基検出された。このうち、P_1～P_4が主柱穴、P_{13}が貯蔵穴と考えられる。

なお、周溝は検出されなかった。また、カマド付近で炭化材が認められたことから、焼失住居の可能性がある。

遺物（第354・355・366・367図、図版65・66・76・77）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、鉄製品、石製品のほか、自然遺物として炭化材、炭化種子



層序説明

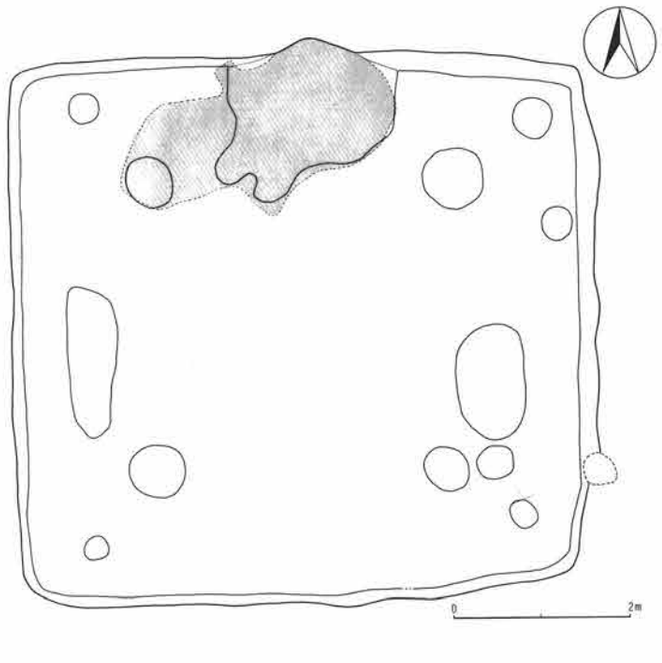
第1層　黒褐色土層（7.5YR2/2）φ0.1～0.5cmのパミスを僅かに含む

第2層　黒褐色土層（7.5YR3/2）φ0.1～1.0cmのパミスを含む

第3層　黒色土層（7.5YR2/1）ローム粒子を僅かに含む

第4層　黄褐色土層（10YR5/6）ローム粒子を多く含むほか、黒色土を含む

第211図　第85号住居址実測図



第85号住居址炭化材分布図

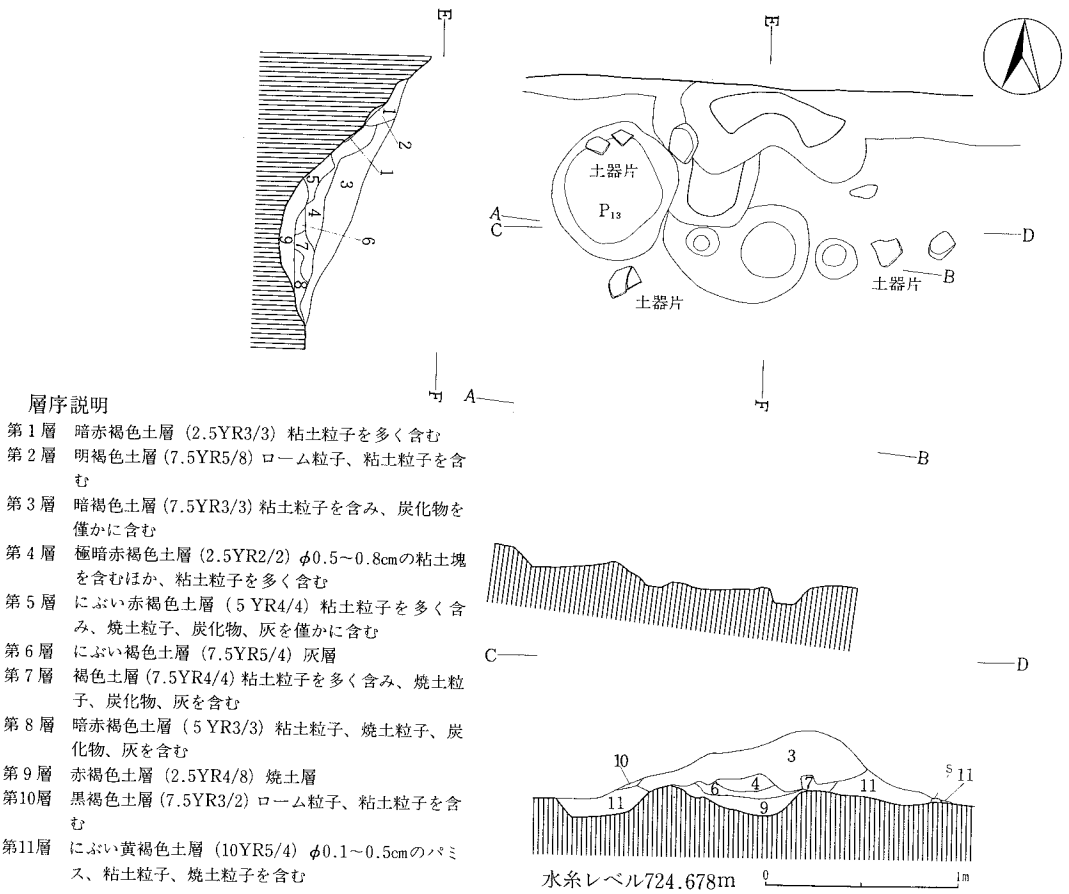
獣骨が出土している。このうち、図示したものに土師器杯・椀・手づくね土器・高杯、黒色土器杯・椀、鉄製品、石製品がある。土師器杯（第354図２・３）および土師器椀（第355図２）は胎土・調整とも極似しており、同一の製作者による可能性が強い。

鉄製品（第366図19）は、刀子の一部と考えられる。

石製品（第367図61）は、滑石製の臼玉である。

自然遺物については、後述するが、炭化材は、カマド内から、炭化種子は、住居址北部から、それぞれ出土している。

本住居址の所産期は、古墳時代後期中葉に比定される。



層序説明

第１層　暗赤褐色土層（2.5YR3/3）粘土粒子を多く含む
第２層　明褐色土層（7.5YR5/8）ローム粒子、粘土粒子を含む
第３層　暗褐色土層（7.5YR3/3）粘土粒子を含み、炭化物を僅かに含む
第４層　極暗赤褐色土層（2.5YR2/2）φ0.5～0.8cmの粘土塊を含むほか、粘土粒子を多く含む
第５層　にぶい赤褐色土層（５YR4/4）粘土粒子を多く含み、焼土粒子、炭化物、灰を僅かに含む
第６層　にぶい褐色土層（7.5YR5/4）灰層
第７層　褐色土層（7.5YR4/4）粘土粒子を多く含み、焼土粒子、炭化物、灰を含む
第８層　暗赤褐色土層（５YR3/3）粘土粒子、焼土粒子、炭化物、灰を含む
第９層　赤褐色土層（2.5YR4/8）焼土層
第10層　黒褐色土層（7.5YR3/2）ローム粒子、粘土粒子を含む
第11層　にぶい黄褐色土層（10YR5/4）φ0.1～0.5cmのパミス、粘土粒子、焼土粒子を含む

第212図　第85号住居址カマド実測図

83）第86号住居址

遺構（第213図、図版15）

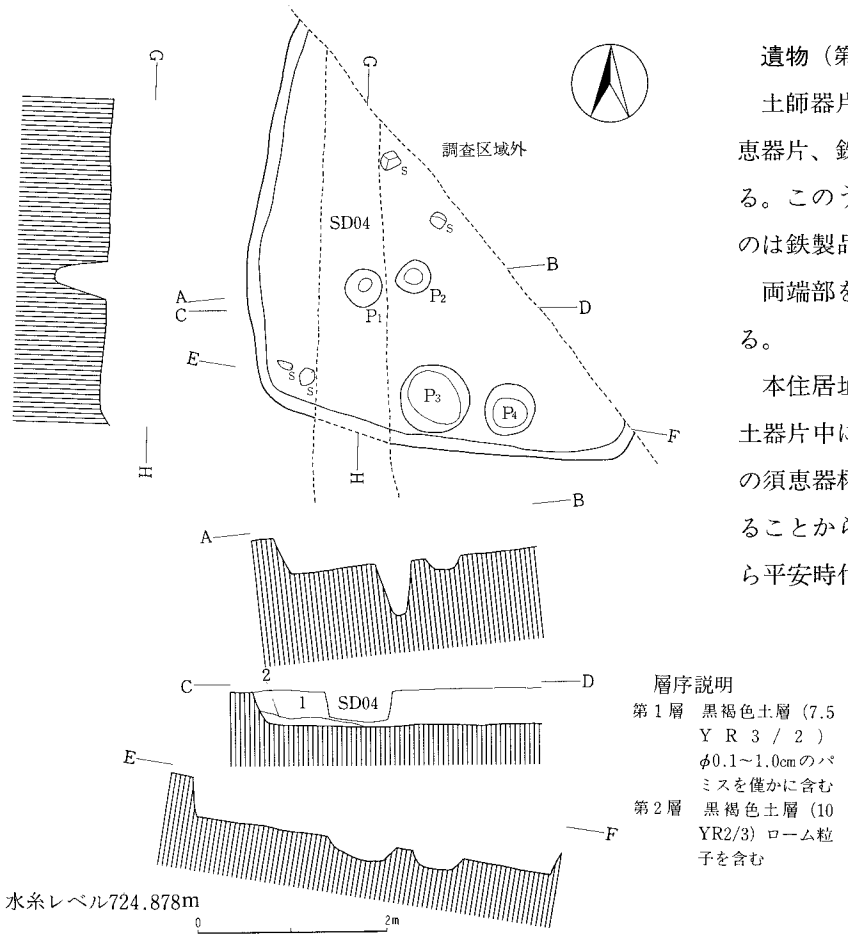
本住居址は、C－2グリッドに位置する。第4号溝址と重複関係を有し、第4号溝址に切られている。

東西400cm、南北は調査し得た範囲で405cmを測り、平面プランは、おそらく、隅丸方形を呈するものと思われる。

南北軸の方位は、N－8°－Eを示す。住居址覆土は、2層に区分され、自然堆積と考えられる。

確認面からの壁高は、32～41cmを測る。

ピットは総計4基検出された。このうち、P_1が主柱穴、P_3・P_4は出入口部の施設に関連するものと思われる。なお、周溝は検出されなかった。



第213図　第86号住居址実測図

遺物（第366図、図版76）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、鉄製品が出土している。このうち、図示し得たものは鉄製品1点である。

両端部を欠くが、刀子である。

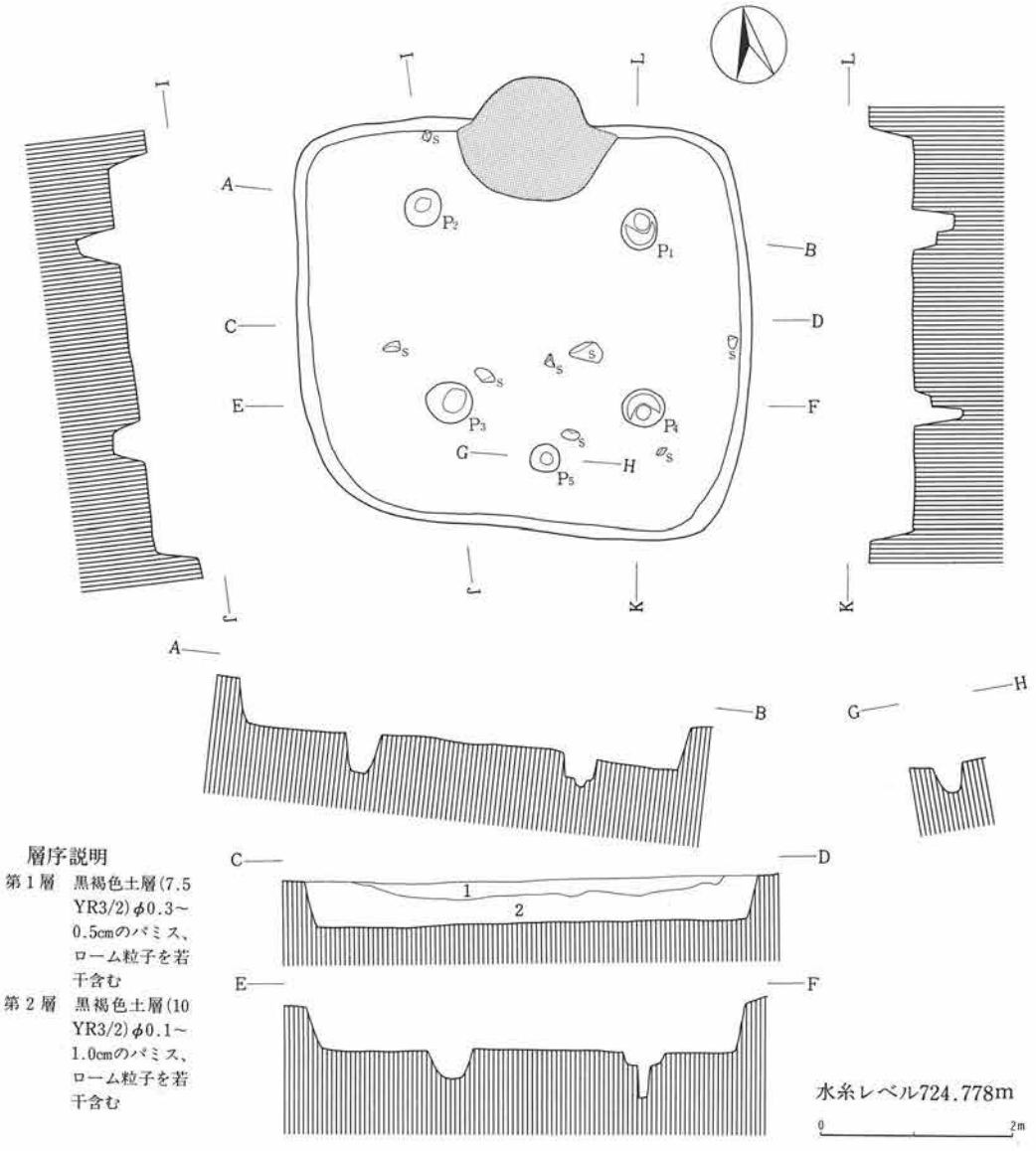
本住居址の所産期は、出土土器片中に底部糸切り未調整の須恵器杯の破片が認められることから、奈良時代後葉から平安時代に比定される。

84）第87号住居址

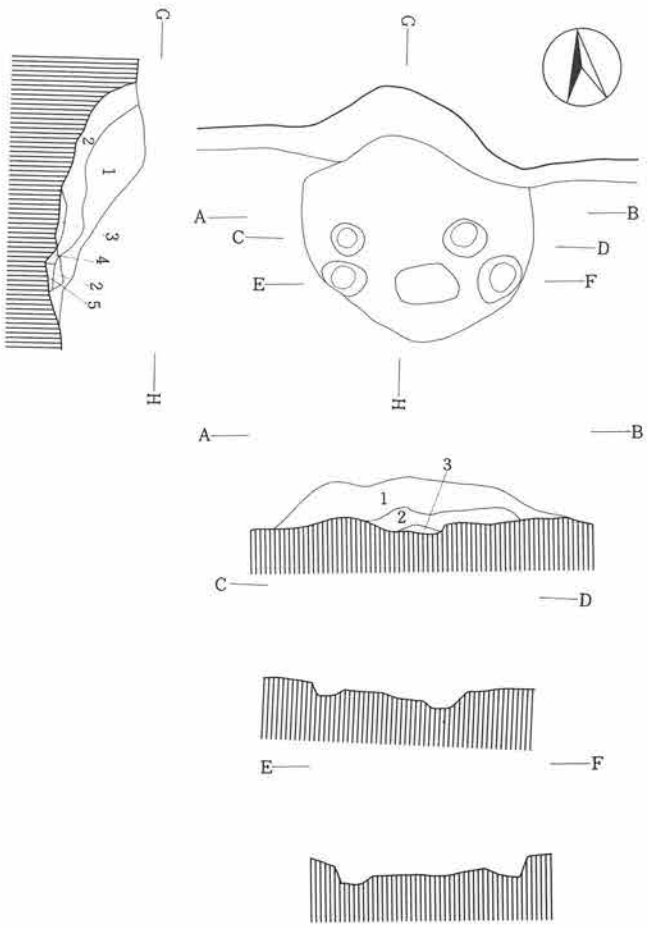
遺構（第214・215図、図版15）

本住居址は、Ｂ－２グリッドに位置する。第90号住居址、第43号掘立柱建物址と重複関係を有し、第90号住居址を切り、第43号掘立柱建物址に切られている。

東西481cm、南北441cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。



第214図　第87号住居址実測図



水糸レベル724.578m　0　1m

層序説明
第1層　暗褐色土層(7.5YR3/3)φ0.5cm前後のパミス、ローム粒子、粘土粒子を僅かに含む
第2層　褐色土層(7.5YR4/4)粘土粒子、灰を含む
第3層　にぶい黄橙色土層(10YR7/3)灰層
第4層　明赤褐色土層(5YR5/6)焼土層
第5層　赤灰色土層(2.5YR4/1)灰層

第215図　第87号住居址カマド実測図

カマドを中心とする主軸方位は、N－14°－Eを示す。

住居址覆土は、2層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、44～50cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置するが、遺存状態は悪い。

ピットは総計5基検出された。

このうち、P_1～P_4が主柱穴、P_5が貯蔵穴と考えられる。

なお、周溝は検出されなかった。

遺物（第355図、図版66）

土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土している。このうち、図示したものに黒色土器杯、須恵器杯がある。

本住居址の所産期は、奈良時代後半に比定される。

85）第88号住居址

遺構（第216図、図版15）

本住居址は、B－2グリッドに位置する。第89号住居址、第42号掘立柱建物址と重複関係を有し、第89号住居址を切り、第42号掘立柱建物址に切られている。

調査し得た範囲で、東西255cm、南北381cmを測る。南北軸の方位は、N－5.5°－Wを示す。

住居址覆土は、3層に区分される。確認面からの壁高は、50～60cmを測る。

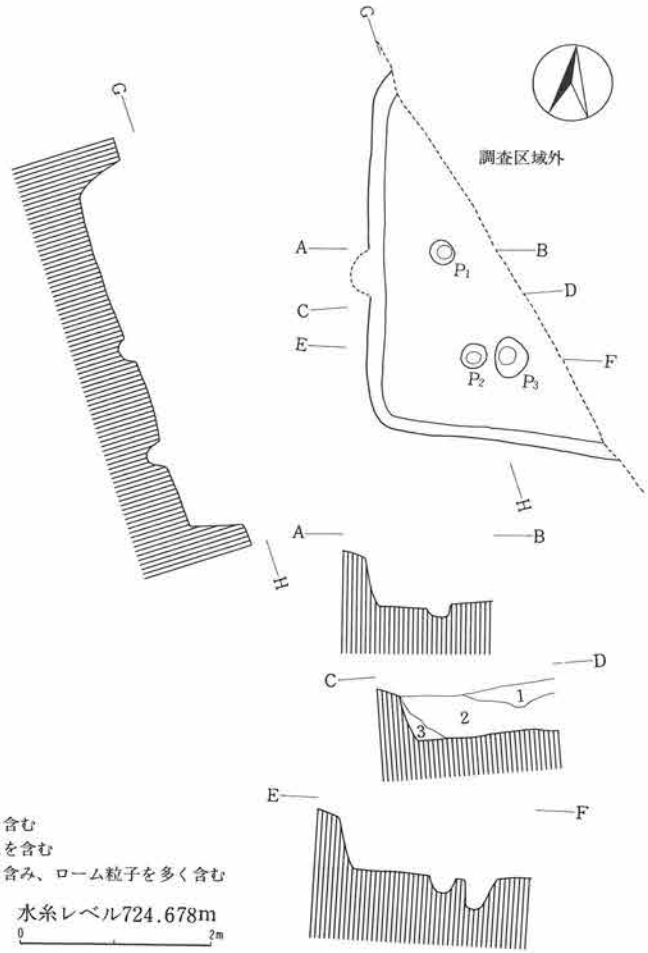
ピットは総計3基検出された。このうち、P_3が主柱穴と考えられる。

周溝は、調査し得た範囲では、検出されなかった。

遺物

土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土しているが、量は少なく、図示し得るものは皆無である。

本住居址の所産期は、重複関係および出土土器片から平安時代に比定される。



第216図　第88号住居址実測図

86）第89号住居址

遺構（第217・218図、図版15）

本住居址は、B・C－2グリッドに位置する。第88・90号住居址と重複関係を有し、第90号住居址を切り、第88号住居址に切られている。

東西437cm、南北は残存部で439cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、N－8.5°－Eを示す。住居址覆土は、2層に区分されるが、大半を第2層が占める。確認面からの壁高は、52～66cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置するが、遺存状態は悪い。おそらく、黄褐色（2.5YR5/4）粘土、軽石を用いて構築されていたものと思われる。

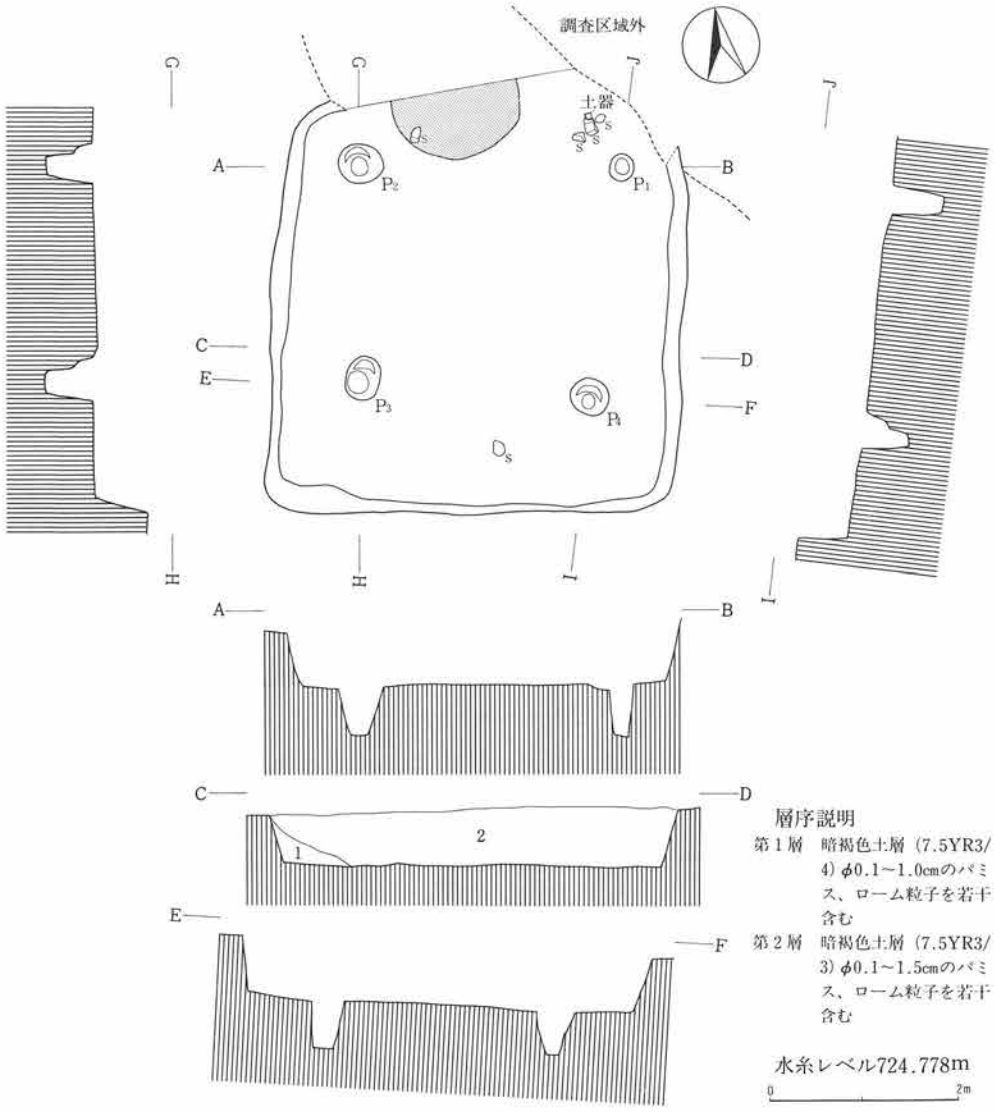
ピットは主柱穴と考えられる4基が検出された。

なお、周溝は検出されなかった。

遺物（第355・366・377図、図版66・76・86）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、鉄製品、黒曜石剝片が出土している。このうち、図示したものに須恵器杯、鉄製品と黒曜石の剝片がある。鉄製品は、刀子である。

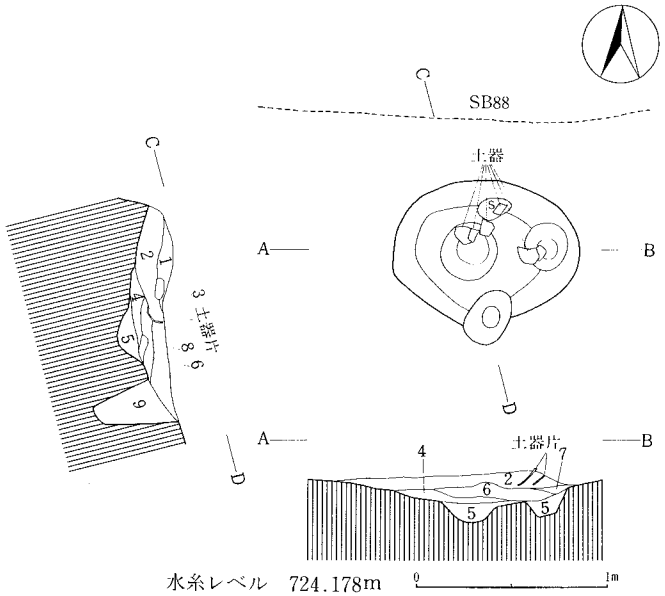
本住居址の所産期は、重複関係および出土土器片から奈良時代後半に比定される。



第217図　第89号住居址実測図

層序説明

第1層　暗褐色土層(7.5YR3/3)φ0.3cm前後のパミスを僅かに含む
第2層　暗褐色土層（10YR3/3）粘土粒子を僅かに含む
第3層　にぶい赤褐色土層(2.5YR5/4)粘土ブロック
第4層　褐色土層(7.5YR4/3)粘土粒子、焼土粒子を含む
第5層　にぶい赤褐色土層（5YR4/4）焼土を多く含む
第6層　にぶい黄褐色土層（10YR5/4）粘土粒子を多く含む
第7層　極暗赤褐色土層（5YR2/4）粘土粒子を多く含む
第8層　灰褐色土層（5YR4/2）灰を多く含む
第9層　黒褐色土層(10YR2/3)φ0.3cm前後のパミス、ローム粒子を含む



第218図　第89号住居址カマド実測図

87）第90号住居址

遺構（第219図、図版15）

本住居址は、B・C－2グリッドに位置する。第87・89号住居址、第44・45号掘立柱建物址と重複関係を有し、第87・89号住居址、第44・45号掘立柱建物址に切られている。

東西590cm、南北は残存部で515cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。

南北軸の方位は、N－19°－Wを示す。住居址覆土は、7層に区分される。確認面からの壁高は、40～58cmを測る。

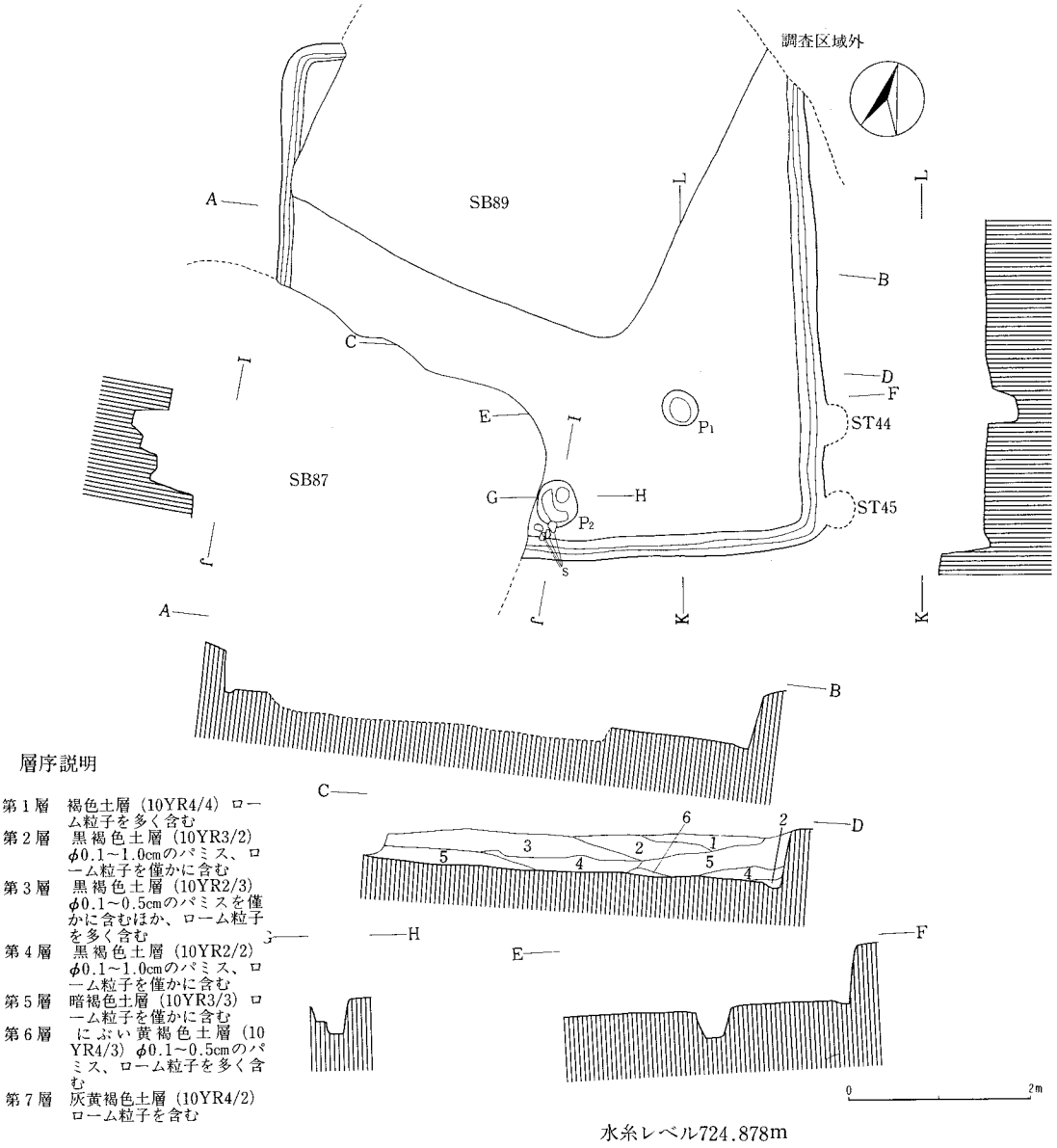
カマドは、おそらく、北壁中央部に設置されていたものと思われるが、第89号住居址に切られているため、不明である。

ピットは2基検出された。このうち、P_1が主柱穴、P_2が出入口部の施設に関連するものと考えられる。また、周溝は、残存部から推して全周していたものと思われる。

遺物（第355・366図、図版66）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、鉄製品が出土している。このうち、図示したものに土師器杯、鉄製品各1点がある。鉄製品は、釘であろう。

本住居址の所産期は、古墳時代後期中葉に比定される。

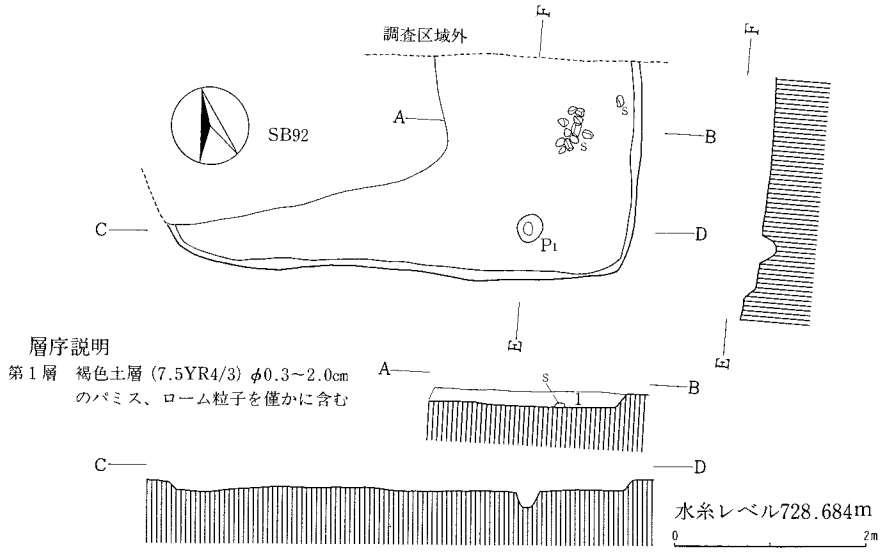


第219図　第90号住居址実測図

88）第91号住居址

遺構（第220図、図版15）

本住居址は、G－6グリッドに位置する。第92号住居址と重複関係を有し、第92号住居址に切られている。



第220図　第91号住居址実測図

東西490cm、南北は調査し得た範囲で236cmを測る。南北軸の方位は、N－17°－Eを示す。

住居址覆土は、褐色土層一層である。確認面からの壁高は、7～15cmを測る。

ピットは主柱穴と考えられる1基が検出された。周溝は、検出されなかった。

また、東壁寄りの部分で河床礫の集中個所が認められた。

遺物（第366・376図、図版76・85）

土師器片、黒色土器片、縄文土器片、鉄製品が出土している。このうち、図示したものに縄文土器片、鉄製品がある。縄文土器片は、後期の所産である。

鉄製品は、紡錘車の紡輪に似るが、径が小さく、用途は不明である。

本住居址の所産期は、重複関係から奈良時代後半以前と考えられる。

89）第92号住居址

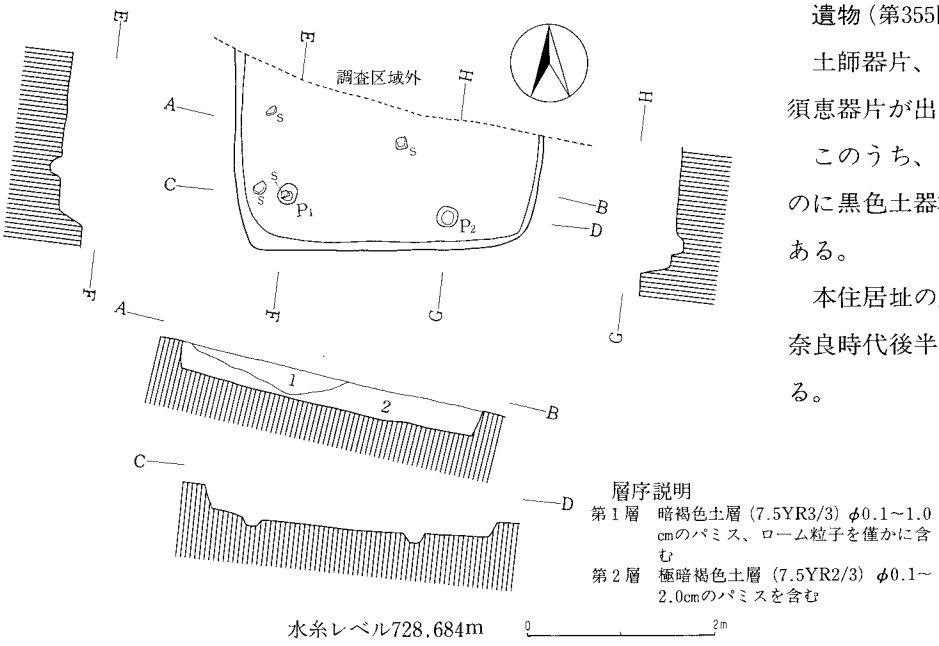
遺構（第221図、図版16）

本住居址は、G－6グリッドに位置する。第91号住居址と重複関係を有し、第91号住居址を切っている。

東西325cm、南北は調査し得た範囲で213cmを測る。南北軸の方位は、N－1°－Eを示す。

住居址覆土は、2層に区分されるが、大半を第2層の暗褐色土層が占める。確認面からの壁高は、16～31cmを測る。

ピットは主柱穴と考えられる2基が検出された。周溝は、検出されなかった。



第221図　第92号住居址実測図

遺物（第355図、図版66）

土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土している。

このうち、図示したものに黒色土器杯・高杯がある。

本住居址の所産期は、奈良時代後半に比定される。

90）第93号住居址

遺構（第222・223図、図版16）

本住居址は、G－6グリッドに位置する。第94号住居址と重複関係を有し、第94号住居址を切って構築されている。

東西452cm、南北430cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、N－10°－Eを示す。

住居址覆土は、一部撹乱を受けるが、4層に区分される。確認面からの壁高は、10～28cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置するが、遺存状況は悪い。おそらく、加工した軽石および第3層を主体として構築されていたものと思われる。

ピットは主柱穴と考えられる4基が検出された。

なお、周溝は、検出されなかった。

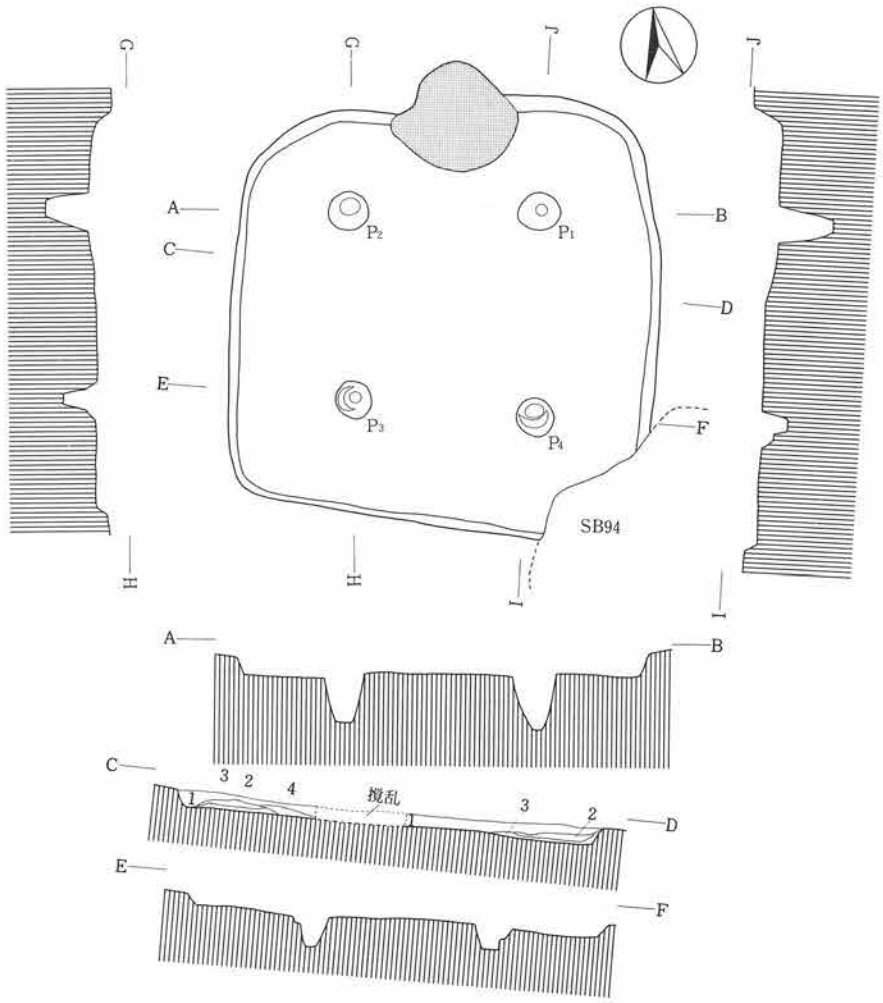
遺物（第355図、図版66）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、鉄滓のほか、自然遺物として炭化材が出土している。このうち、図示したものに須恵器杯・長頸壺がある。

須恵器杯は、２点とも底部糸切り未調整のものである。須恵器長頸壺は、焼成が悪く、地元窯の製品と考えられる。

炭化材は、カマド内から出土しており、詳細については後述する。

本住居址の所産期は、平安時代に比定される。



層序説明

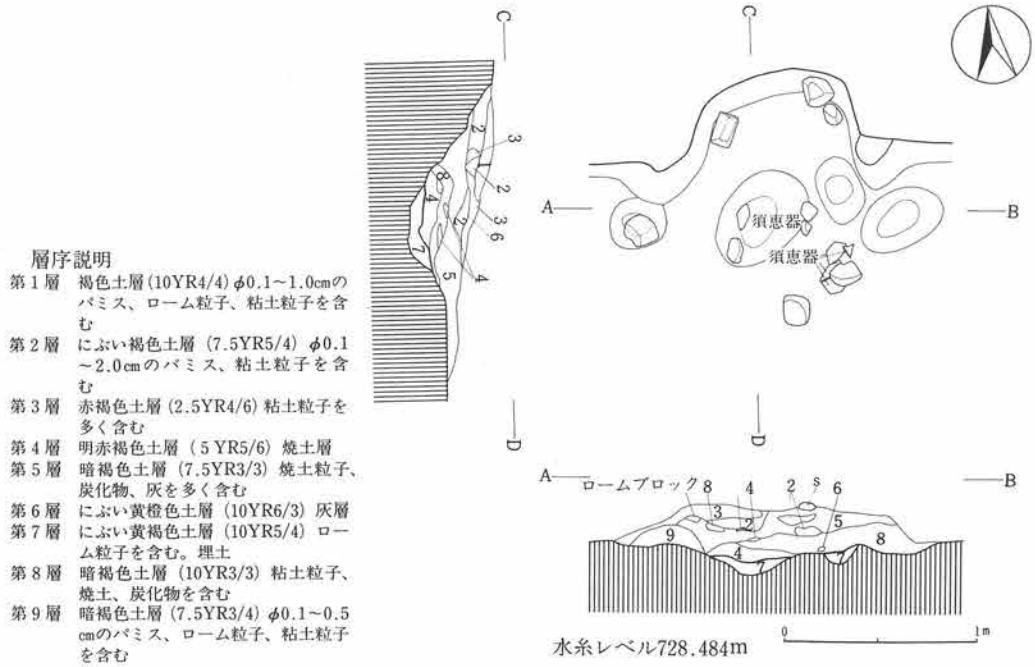
第１層　暗褐色土層（7.5YR3/4）φ0.1～1.0cmのパミス、ローム粒子を含む

第２層　明褐色土層（7.5YR5/6）φ0.1～1.0cmのパミスを僅かに含むほか、ローム粒子を多く含む

第３層　褐色土層（7.5YR4/4）φ0.1～1.0cmのパミス、ローム粒子を若干含む

第４層　暗褐色土層（7.5YR3/3）φ0.1～1.0cmのパミス、ローム粒子を含む

第222図　第93号住居址実測図



第223図　第93号住居址カマド実測図

91）第94号住居址

遺構（第224・225図、図版16）

本住居址は、G－6グリッドに位置する。第93号住居址と重複関係を有し、第93号住居址に切られている。

東西は調査し得た範囲で280cm、南北290cmを測り、平面プランは、おそらく、隅丸方形を呈するものと思われる。

カマドを中心とする主軸方位は、N－2°－Eを示す。住居址覆土は、3層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、6～19.5cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置するが、遺存状態は悪い。おそらく、焚口部に加工した軽石を用い、地山を掘り残して袖芯とし、粘土により構築されていたものと思われる。

ピットは総計2基検出された。このうち、P_1が主柱穴、カマド右袖脇のピットは、貯蔵穴の可能性がある。なお、周溝は、検出されなかった。

遺物（第355・356・367図、図版66・67・77）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、鉄製品が出土している。このうち、図示したものに黒色土

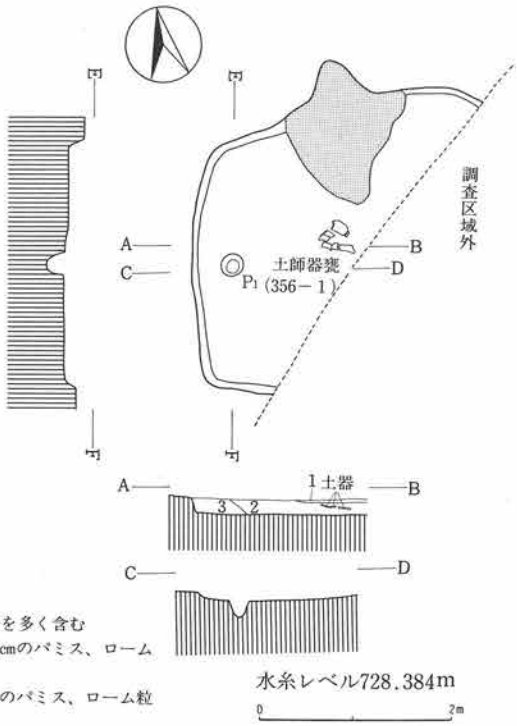
器皿、土師器甕、鉄製品がある。

黒色土器皿は、口辺部に「南」の墨書がなされる。混入品であろう。

土師器甕は、3点出土している。いずれも長胴の甕である。

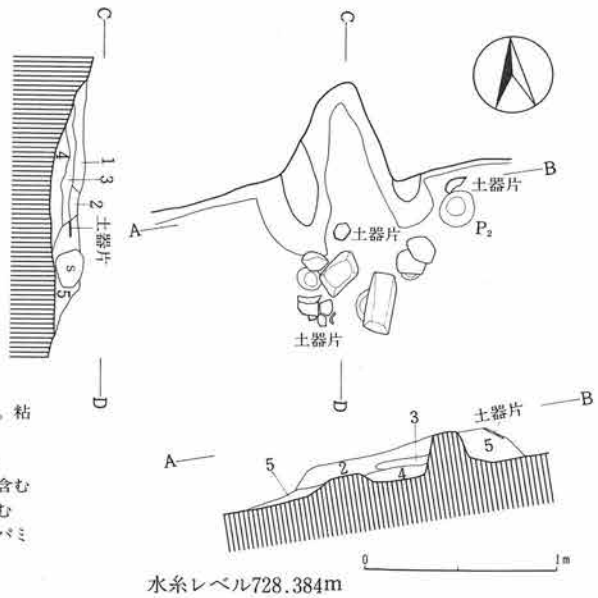
鉄製品(第367図1～4)は、同一個体の可能性が強いが、錆化が著しい。刀子と考えられる。

本住居址の所産期は、古墳時代後期中葉に比定される。



層序説明
第1層　褐色土層（10YR4/6）ローム粒子を多く含む
第2層　黒褐色土層(10YR2/3)φ0.1～0.5cmのパミス、ローム粒子を含む
第3層　褐色土層(10YR4/4)φ0.1～0.8cmのパミス、ローム粒子を含む

第224図　第94号住居址実測図



層序説明
第1層　褐色土層(7.5YR4/4)ローム粒子を含む。粘性はない
第2層　褐色土層（10YR4/4）ローム粒子を含む
第3層　暗褐色土層(7.5YR3/4)粒土粒子、灰を含む
第4層　暗赤褐色土層（5YR3/2）焼土、灰を含む
第5層　黒褐色土層（10YR3/2）φ0.2～0.5cmのパミス、ローム粒子を僅かに含む

第225図　第94号住居址カマド実測図

92）第95号住居址

遺構（第226・227図、図版16）

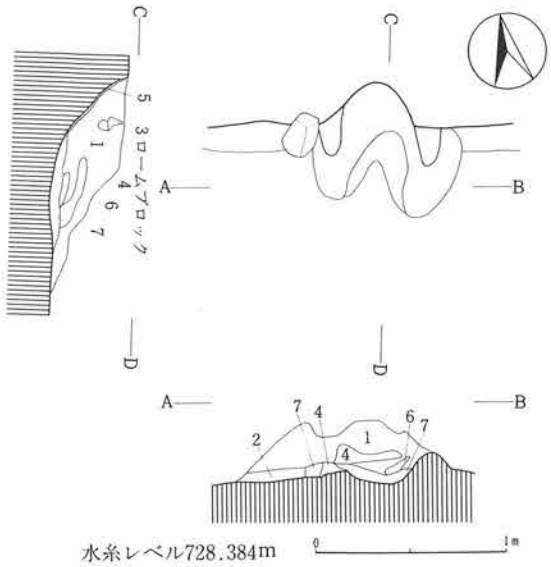
本住居址は、G－6グリッドに位置する。

第54号掘立柱建物址と重複関係を有し、第54号掘立柱建物址に切られている。

東西327cm、南北314cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、N－5.5°－Eを示す。

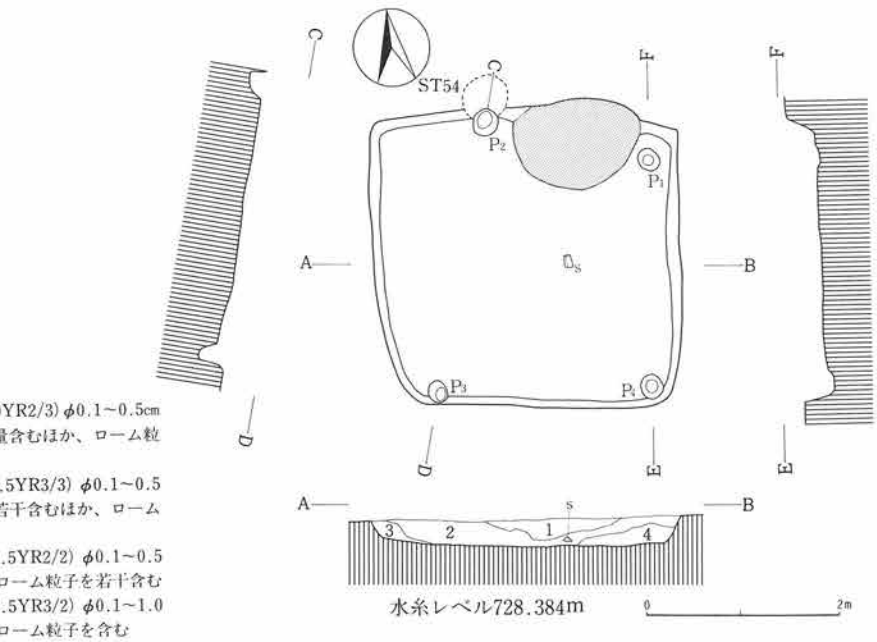
住居址覆土は、4層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、



層序説明

第1層　黒褐色土層（10YR3/2）ローム粒子、粘土粒子を含む
第2層　黒褐色土層（10YR2/2）ローム粒子を僅かに含む
第3層　暗赤褐色土層（2.5YR3/4）粘土粒子を多く含む
第4層　にぶい赤褐色土層（5YR5/4）粘土粒子を多く含む
第5層　にぶい黄褐色土層（10YR5/4）粘土。構築土
第6層　赤褐色土層（5YR4/8）粘土粒子を多く含む
第7層　暗褐色土層（10YR3/4）焼土灰、を含む

第226図　第95号住居址カマド実測図



層序説明

第1層　暗褐色土層（10YR2/3）φ0.1～0.5cmのパミスを少量含むほか、ローム粒子を含む
第2層　暗褐色土層（7.5YR3/3）φ0.1～0.5cmのパミスを若干含むほか、ローム粒子を含む
第3層　黒褐色土層（7.5YR2/2）φ0.1～0.5cmのパミス、ローム粒子を若干含む
第4層　黒褐色土層（7.5YR3/2）φ0.1～1.0cmのパミス、ローム粒子を含む

第227図　第95号住居址実測図

13～35cmを測る。

カマドは、北壁東寄りに位置するが、遺存状態は悪い。右袖は、地山を掘り残し、袖芯としている。構築土は、第5層などであろう。

ピットは総計4基検出された。P_2は、位置的に疑問が残るが、一応、他の3基とともに主柱穴として考えておく。なお、周溝は、検出されなかった。

遺物

土師器片が出土しているが、図示し得るものは皆無である。本住居址の所産期は、出土土器片から、古墳時代後期中葉に比定される。

93）第96号住居址

遺構（第228図、図版16）

本住居址は、G－6グリッドに位置する。第100号住居址と重複関係を有し、第100号住居址を切って構築されている。

東西332cm、南北は調査し得た範囲で205cmを測る。南北軸の方位は、N－2°－Eを示す。

住居址覆土は、2層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、15～38cmを測る。

ピットは主柱穴と考えられる2基が検出された。なお、周溝は、検出されなかった。

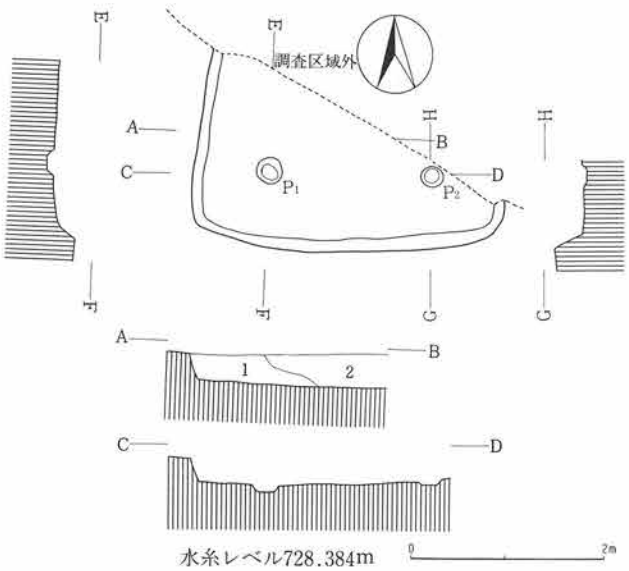
遺物（第356図、図版67）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、鉄滓が出土している。

このうち、図示したものに黒色土器杯、土師器杯がある。

土師器杯は、甲斐型土器で底部に「｜」の墨書が認められる。

本住居址の所産期は、出土土器片中に、黒色土器椀の破片が認められることから、平安時代に比定される。

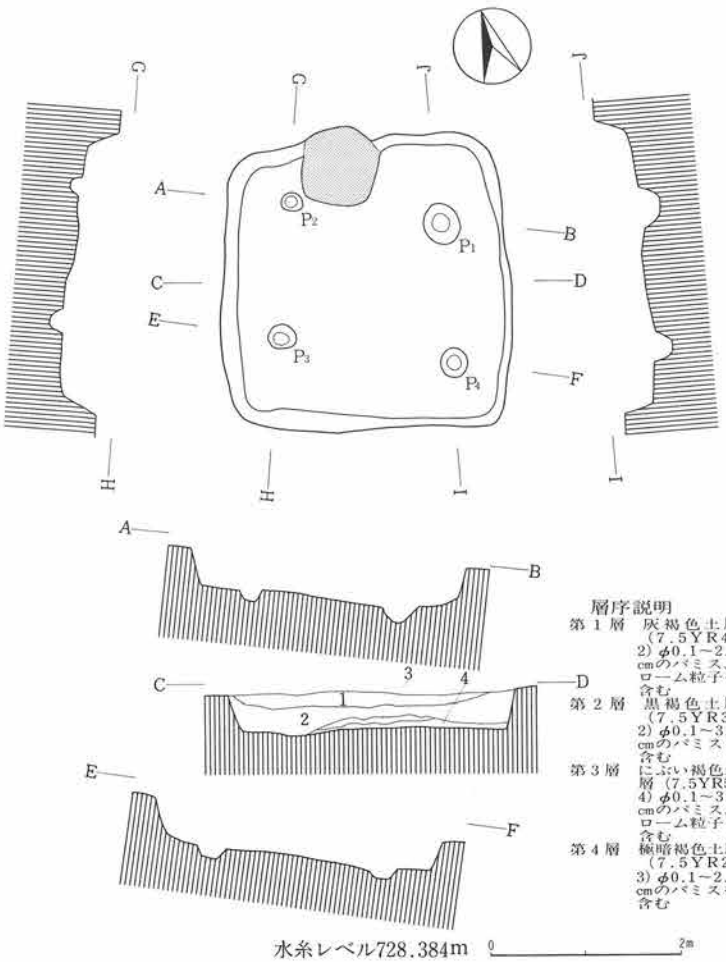


層序説明
第1層　黒褐色土層（7.5YR3/2）φ0.1～1.0cmのパミスを多く含む
第2層　暗褐色土層（7.5YR3/4）φ0.1～2.0cmのパミスを多く含む

第228図　第96号住居址実測図

94）第97号住居址

遺構（第229・230図、図版16）



第229図　第97号住居址実測図

本住居址は、G－6グリッドに位置する。

第99・100・117号住居址に重複関係を有し、第99・100・117号住居址を切って構築されている。

東西304cm、南北311cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、N－25°－Eを示す。

住居址覆土は、4層に区分される。確認面からの壁高は、30～42cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置するが、遺存状態は悪い。加工した軽石および暗褐色（10YR 3/4）粘土により構築されていたものと思われる。

ピットは主柱穴と考えられる4基が検出された。

なお、周溝は、検出されなかった。

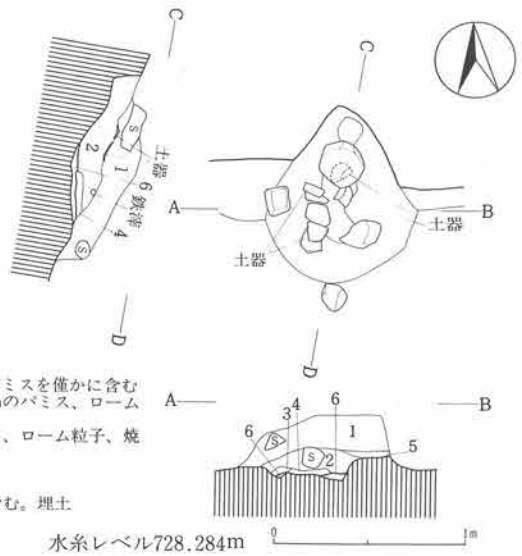
遺物（第356図、図版67）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、灰釉陶器片が出土している。このうち、図示したものに黒色土器杯・椀、灰釉陶器皿、土師器甕がある。黒色土器椀（第356図2）の底部には、「－」のヘラ記号が認められる。また、墨書土器（第356図4）が1点ある。黒色土器杯の外面に墨書されたもので、「家」であろう。

土師器甕（第356図５・６）は２点あり、６は、「コ」の字状を呈する口辺部を有するものである。

灰釉陶器皿（第356図３）は、転用硯として用いられている。大原２号窯期の所産であろう。

本住居址の所産期は、平安時代に比定される。



層序説明
第１層　暗褐色土層（10YR3/3）φ0.3～0.5cmのパミスを僅かに含む
第２層　にぶい黄褐色土層(10YR4/3)φ0.2～3.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第３層　褐色土層(10YR4/4)φ0.1～0.5cmのパミス、ローム粒子、焼土粒子を含む
第４層　明褐色土層（7.5YR5/6）焼土層
第５層　暗褐色土層（10YR3/4）粘土層（構築土）
第６層　灰黄褐色土層（10YR4/2）ローム粒子を含む。埋土

第230図　第97号住居址カマド実測図

95）第98号住居址

遺構（第231図、図版16）

本住居址は、Ｇ－６グリッドに位置する。第97号住居址と重複関係を有し、第97号住居址により切られている。

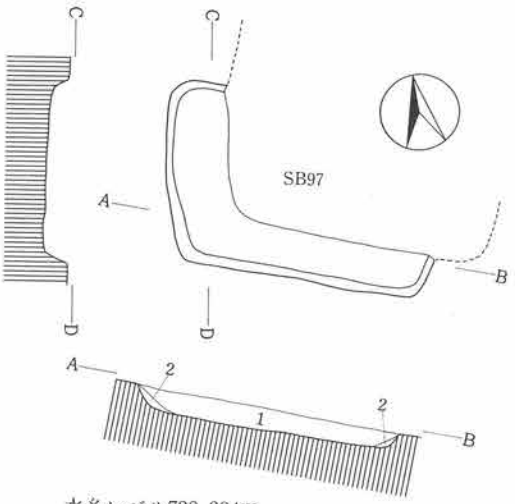
東西282cm、南北195cmを測り、平面プランは、隅丸長方形を呈する。

南北軸の方位は、Ｎ－20°－Ｅを示す。

住居址覆土は、２層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、15～21cmを測る。

カマドは、おそらく、北壁中央部に設置されていたものと思われるが、第97号住居址に切られているため不明である。

ピット、周溝は検出されなかった。



層序説明
第１層　暗褐色土層（10YR3/4）φ0.1～0.5cmのパミス、ローム粒子を僅かに含む
第２層　褐色土層（10YR4/4）φ0.1～0.5cmのパミスを僅かに含むほか、ローム粒子を多く含む

第231図　第98号住居址実測図

遺物

土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土しているが、図示し得るものは皆無である。

本住居址の所産期は、出土土器片中に、底部へラキリと糸切り未調整の須恵器杯の破片が認められることから、奈良時代後半に比定される。

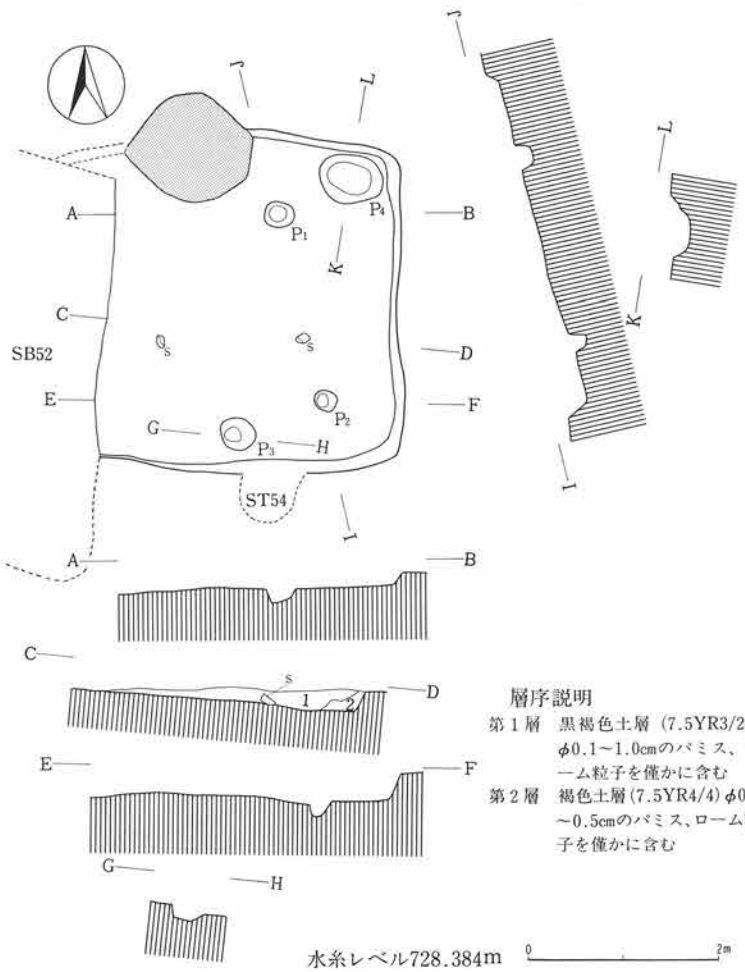
96）第99号住居址

遺構（第232・233図、図版16）

本住居址は、G－6グリッドに位置する。第52号住居址、第54号掘立柱建物址と重複関係を有し、第52号住居址を切り、第54号掘立柱建物址に切られている。

東西は残存部で310cm、南北355cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈するものと思われる。

カマドを中心とする主軸方位は、N－1°－Wを示す。住居址覆土は、2層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、11～22cmを測る。



第232図　第99号住居址実測図

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置するが、遺存状態は悪い。

ピットは総計4基検出された。P_1・P_2の2基のうちP_1は位置に疑問を残すが主柱穴、P_4が貯蔵穴、P_3が出入口部の施設に関連するものと思われる。

なお、周溝は、検出されなかった。

遺物（第356・367図、図版67・77）

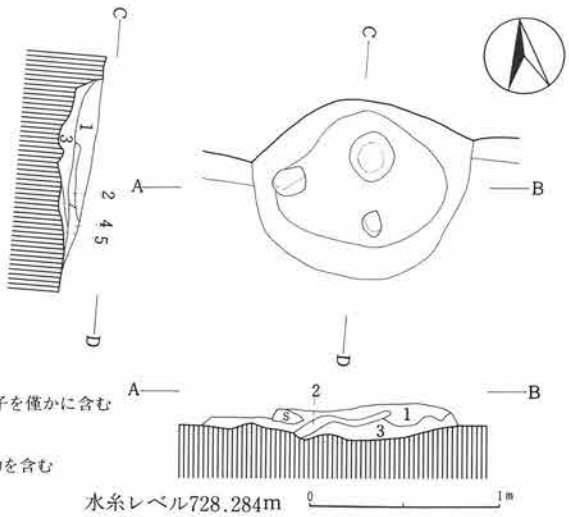
土師器片、黒色土器片、須恵器片、鉄製品のほか、鉄滓が住居址北部から出土している。このうち、図示したものに黒色土器杯・皿、土師器甕、鉄製品がある。

土師器甕（第356図5）は、口辺部が「コ」の字

状を呈するものである。

鉄製品（第367図５）は、刀子である。

本住居址の所産期は、平安時代に比定される。



層序説明
第１層　褐色土層（7.5YR4/4）φ0.1～0.3cmのパミス、粘土粒子を僅かに含む
第２層　にぶい赤褐色土層（５YR4/4）粘土粒子を多く含む
第３層　褐色土層（7.5YR4/6）粘土粒子、炭化物、灰を含む
第４層　にぶい赤褐色土層（５YR5/4）粘土粒子、焼土、炭化物を含む
第５層　黒褐色土層（５YR3/1）焼土、炭化物、灰を含む

第233図　第99号住居址カマド実測図

97）第100号住居址

遺構（第234図、図版17）

本住居址は、Ｇ－６グリッドに位置する。第96～98・117号住居址と重複関係を有し、第117号住居址を切り、第96～98号住居址に切られている。

東西504cm、南北431cmを測り、平面プランは、東西に長い隅丸長方形を呈する。

南北軸の方位は、Ｎ－7.5°－Ｅを示す。住居址覆土は、暗褐色土層一層である。確認面からの壁高は、14～28cmを測る。

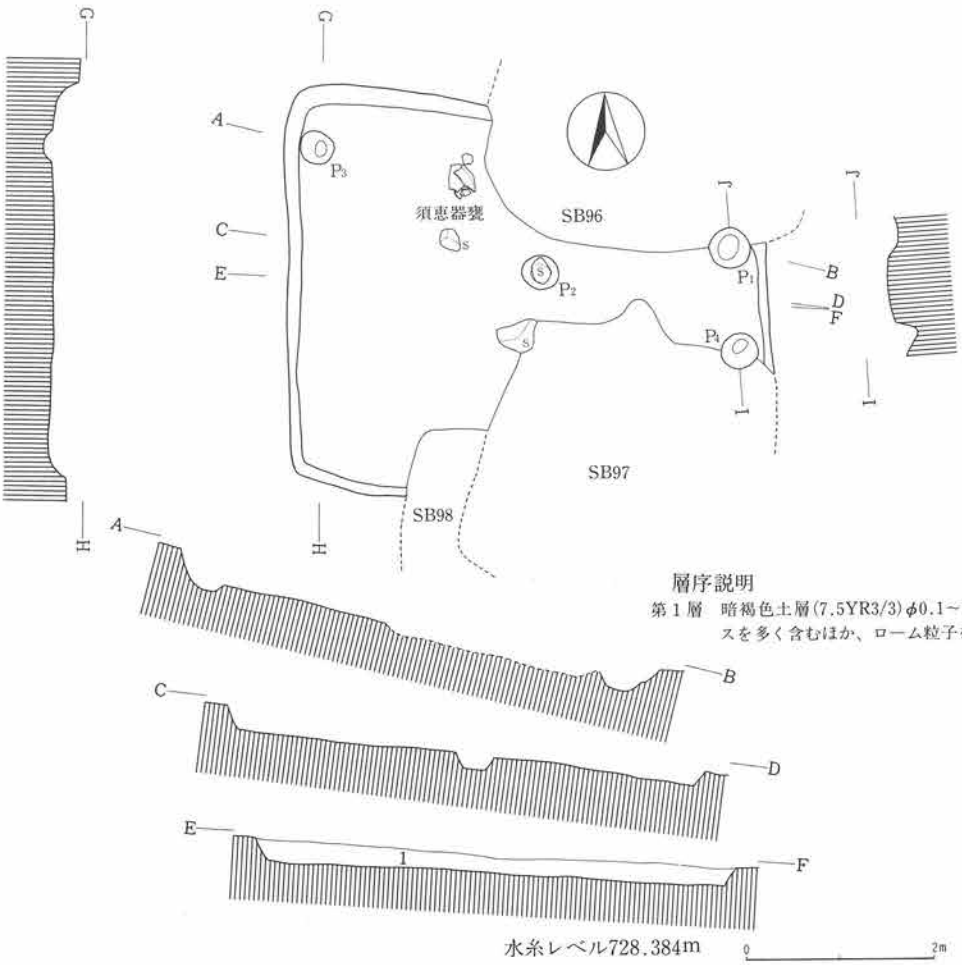
カマドは、おそらく、北壁中央部に設置されていたものと思われるが、第96号住居址に切られているため不明である。

ピットは総計４基検出されたが、主柱穴については不明確である。なお、周溝は、検出されなかった。

遺物

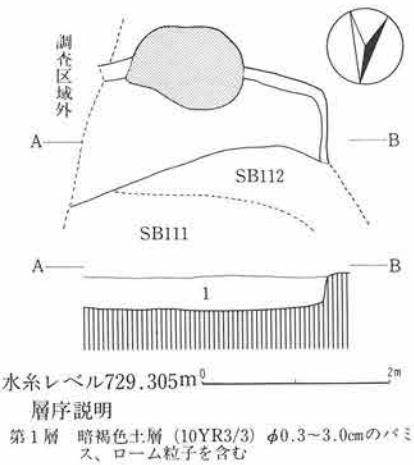
土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土しているが、図示し得るものは皆無である。

本住居址の所産期は、出土土器片および重複関係から奈良時代後半に比定される。



第234図　第100号住居址実測図

98）第101号住居址



第235図　第101号住居址実測図

遺構（第235・236図、図版17）

本住居址は、H－3グリッドに位置する。

第111・112号住居址と重複関係を有し、第111・112号住居址により切られている。

東西は調査し得た範囲で237cm、南北は残存部で154cmを測る。

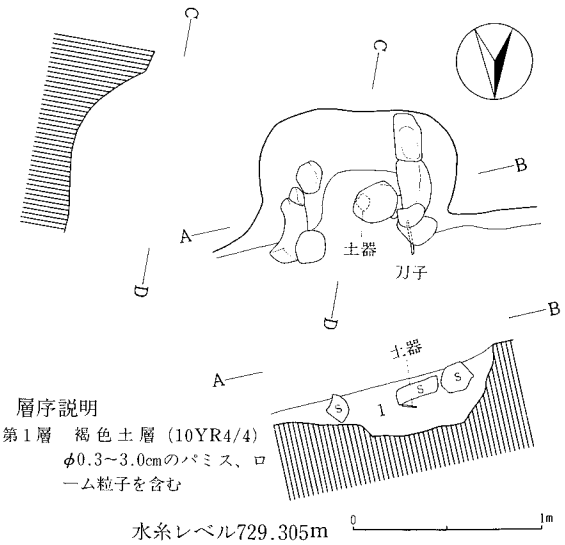
カマドを中心とする主軸方位は、S－3°－Eを示す。

住居址覆土は、ローム粒子およびφ0.3～3.0cmのパミスを含む暗褐色（10YR3/3）土層一層である。

確認面からの壁高は、27～36cmを測る。

カマドは、南壁に位置する。焼土等は認められなかったが、一応、カマドとして把えた。南壁部を突出するように掘り込み、加工した軽石を主体とした石組カマドであったと考えられる。

ピット、周溝は調査し得た範囲では検出されなかった。



第236図　第101号住居址カマド実測図

遺物（第367図、図版77）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、鉄製品が出土している。

このうち、図示し得たのは鉄製品１点である。

鉄製品（第367図６）は、刀子で、カマド部分から出土している。長さ、16.45cmを測る。

本住居址の所産期は、第112号住居址との重複関係から古墳時代後期中葉以前と考えられる。

99）第103号住居址

遺構（第237図、図版17）

本住居址は、Ｈ－４・５グリッドに位置する。第104号住居址と重複関係を有し、第104号住居址に切られている。

東西は調査し得た範囲で340cm、南北413cmを測り、平面プランは、おそらく、東西に長い隅丸長方形を呈するものと思われる。

南北軸の方位は、Ｎ－６°－Ｅを示す。住居址覆土は、一部撹乱を受けるが３層に区分される。

確認面からの壁高は、18～38cmを測る。

カマドは、おそらく、北壁中央部に設置されていたものと思われるが、第104号住居址に切られているため不明である。

ピットは総計３基検出された。このうち、P_1・P_2の２基が主柱穴と考えられる。

周溝は、調査し得た範囲内では検出されなかった。

遺物（第357・367図、図版68・77）

土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土している。このうち、図示したものに黒色土器鉢・高杯、石製品がある。石製品（第367図62）は、滑石製の臼玉である。

本住居址の所産期は、古墳時代後期中葉に比定される。

100）第104号住居址

遺構（第238・239図、図版17）

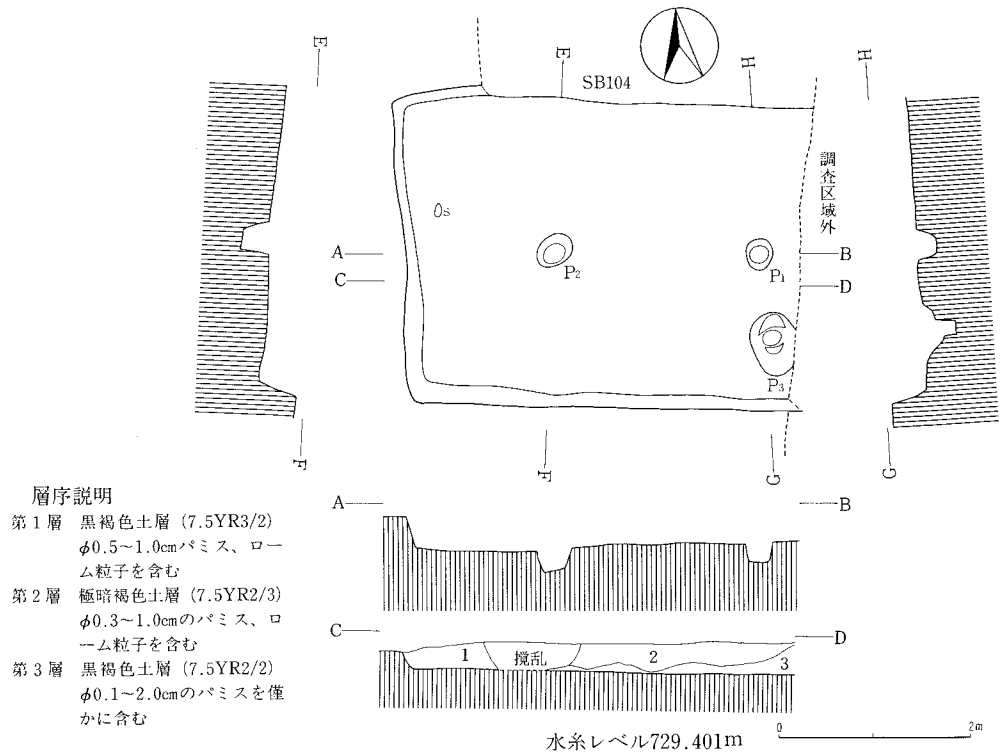
本住居址は、H－4グリッドに位置する。第103号住居址と重複関係を有し、第103号住居址を切って構築されている。

東西は調査し得た範囲で360cm、南北346cmを測り、平面プランは、おそらく、隅丸方形を呈するものと思われる。

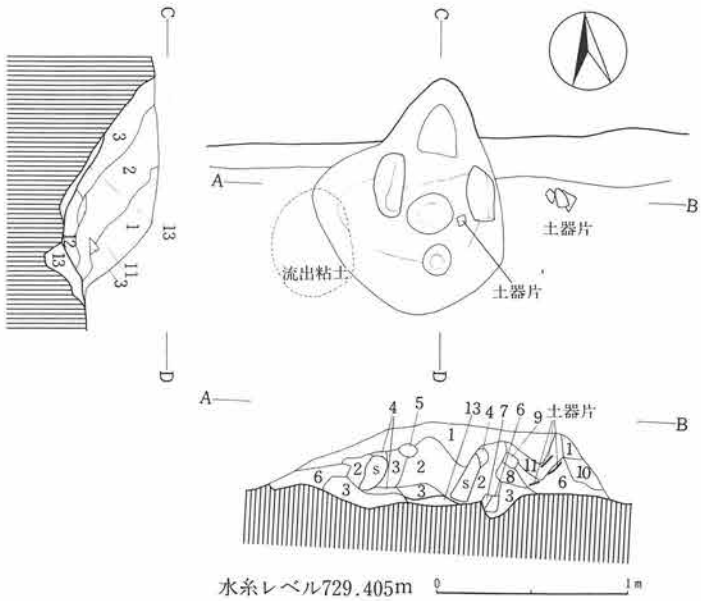
カマドを中心とする主軸方位は、N－3°－Eを示す。住居址覆土は、2層に区分される。

確認面からの壁高は、22～37cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。軽石を袖芯とし、第2～4層を主体として構築されて



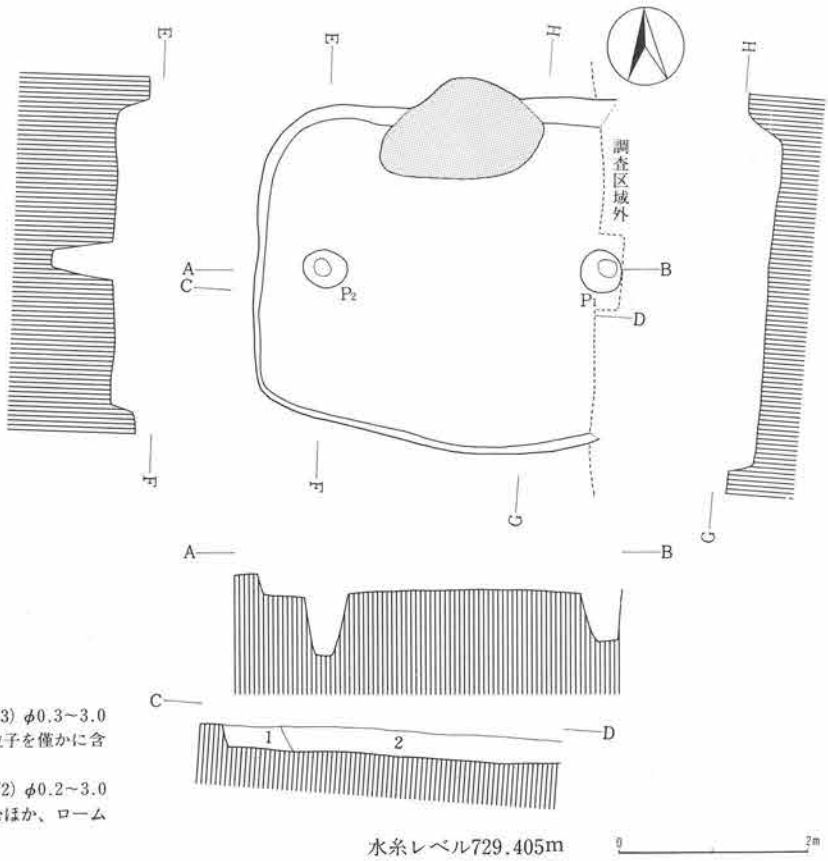
第237図　第103号住居址実測図



層序説明

第1層　暗褐色土層(10YR3/3)φ0.2～2.0cmのパミス、ローム粒子、粘土粒子、焼土を含む
第2層　にぶい褐色土層(7.5YR5/4)φ0.5cm前後のパミスを僅かに含むほか、粘土粒子を多く含む
第3層　にぶい赤褐色土層(5YR4/4)粘土粒子を含む
第4層　赤褐色土層(2.5YR4/8)粘土粒子を多く含む
第5層　黒色土層(5YR1.7/1)粘土粒子を僅かに含む
第6層　黒褐色土層(10YR3/2)φ0.1～3.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第7層　黄褐色土層(10YR5/8)ローム粒子を多く含む
第8層　にぶい黄橙色土層(10YR6/4)ローム粒子を多く含む
第9層　にぶい黄褐色土層(10YR5/4)粘土層
第10層　明黄褐色土層(10YR6/8)φ0.1～3.0cmのパミス、ローム粒子を含む。地山に相似
第11層　明褐灰色土層(7.5YR7/2)灰層
第12層　明褐色土層(7.5YR5/8)焼土層
第13層　暗褐色土層(7.5YR3/3)埋土

第238図　第104号住居址カマド実測図



層序説明
第1層　暗褐色土層（7.5YR3/3）φ0.3～3.0cmのパミス、ローム粒子を僅かに含む
第2層　黒褐色土層（7.5YR2/2）φ0.2～3.0cmのパミスを多く含むほか、ローム粒子を僅かに含む

第239図　第104号住居址実測図

いたものと思われる。

ピットは主柱穴と考えられる2基が検出された。なお、周溝は、検出されなかった。

遺物

土師器片のほか、自然遺物として炭化材が出土しているが、図示し得るものは皆無である。

なお、炭化材については後述する。

本住居址の所産期は、出土土器片から古墳時代後期に比定される。

101）第105号住居址

遺構（第240・241図、図版17）

本住居址は、H－4グリッドに位置する。第57号掘立柱建物址と重複関係を有し、第57号掘立柱建物址に切られている。

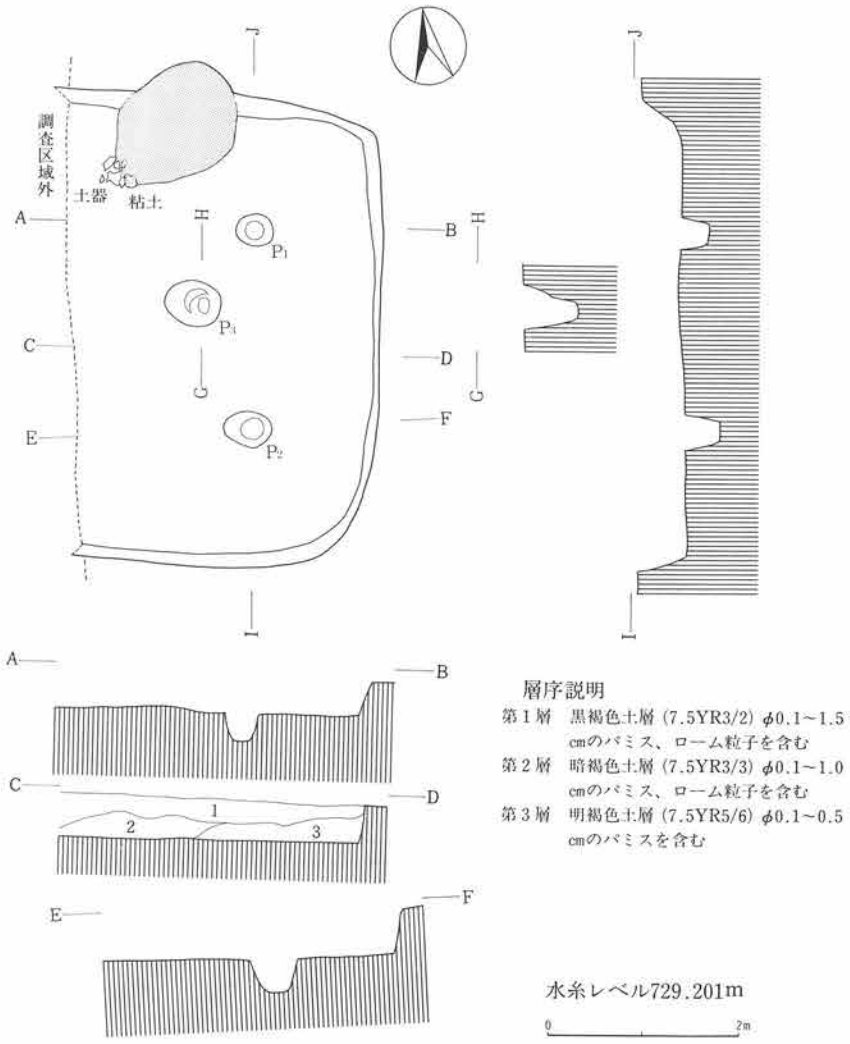
東西は調査し得た範囲で337cm、南北500cmを測り、平面プランは、おそらく、隅丸方形を呈するものと思われる。

カマドを中心とする主軸方位は、N－9°－Eを示す。住居址覆土は、3層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、32～51cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置するものと思われる。左袖は地山を掘り残し、右袖は加工した軽石を袖芯とし、第3層を主体として構築されていたものと考えられる。

ピットは総計3基検出された。このうち、P_1・P_2の2基が主柱穴であろう。なお、周溝は、調査範囲内では認められなかった。

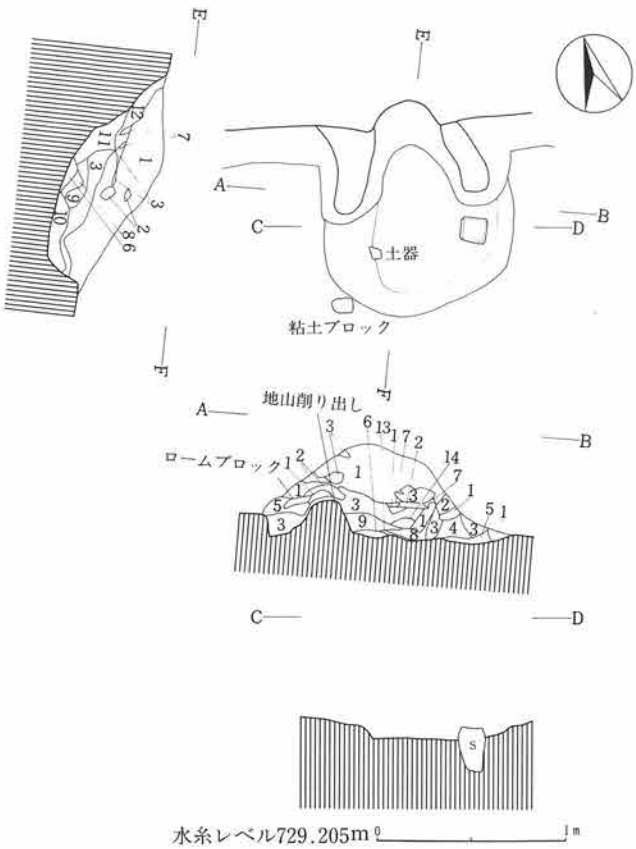
遺物（第357・367図、図版68・77）



第240図　第105号住居址実測図

土師器片、黒色土器片、須恵器片、鉄製品が出土している。このうち、図示したものに土師器杯・甕、鉄製品がある。鉄製品（第367図７）は、刀子である。

本住居址の所産期は、古墳時代後期後葉に比定される。



層序説明

第１層　褐色土層（10YR4/6）φ0.5cm前後のパミス、ローム粒子、粘土粒子を含む
第２層　黒褐色土層（10YR2/2）ローム粒子を僅かに含む
第３層　にぶい赤褐色土層（2.5YR4/4）粘土粒子を多く含む（構築土）
第４層　黄褐色土層（10YR5/6）黒色土を若干含む
第５層　褐色土層（7.5YR4/6）ローム粒子を含む
第６層　明褐灰色土層（7.5YR7/2）灰層
第７層　暗赤褐色土層（2.5YR3/2）粘土粒子を多く含む
第８層　黒褐色土層（10YR3/1）焼土、灰を含む
第９層　にぶい黄褐色土層（10YR5/4）粘土粒子を多く含む
第10層　にぶい赤褐色土層（５YR4/4）焼土、炭化物を含む
第11層　暗赤褐色土層（５YR3/3）焼土、炭化物、灰を含む
第12層　暗赤褐色土層（５YR3/4）粘土粒子、焼土、炭化物を含む
第13層　赤褐色土層（2.5YR4/6）焼土層
第14層　明褐色土層（7.5YR5/6）粘土粒子、炭化物を含む

第241図　第105号住居址カマド実測図

102）第106号住居址

遺構（第242・243図、図版17）

本住居址は、Ｈ－４グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

東西469cm、南北436cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。

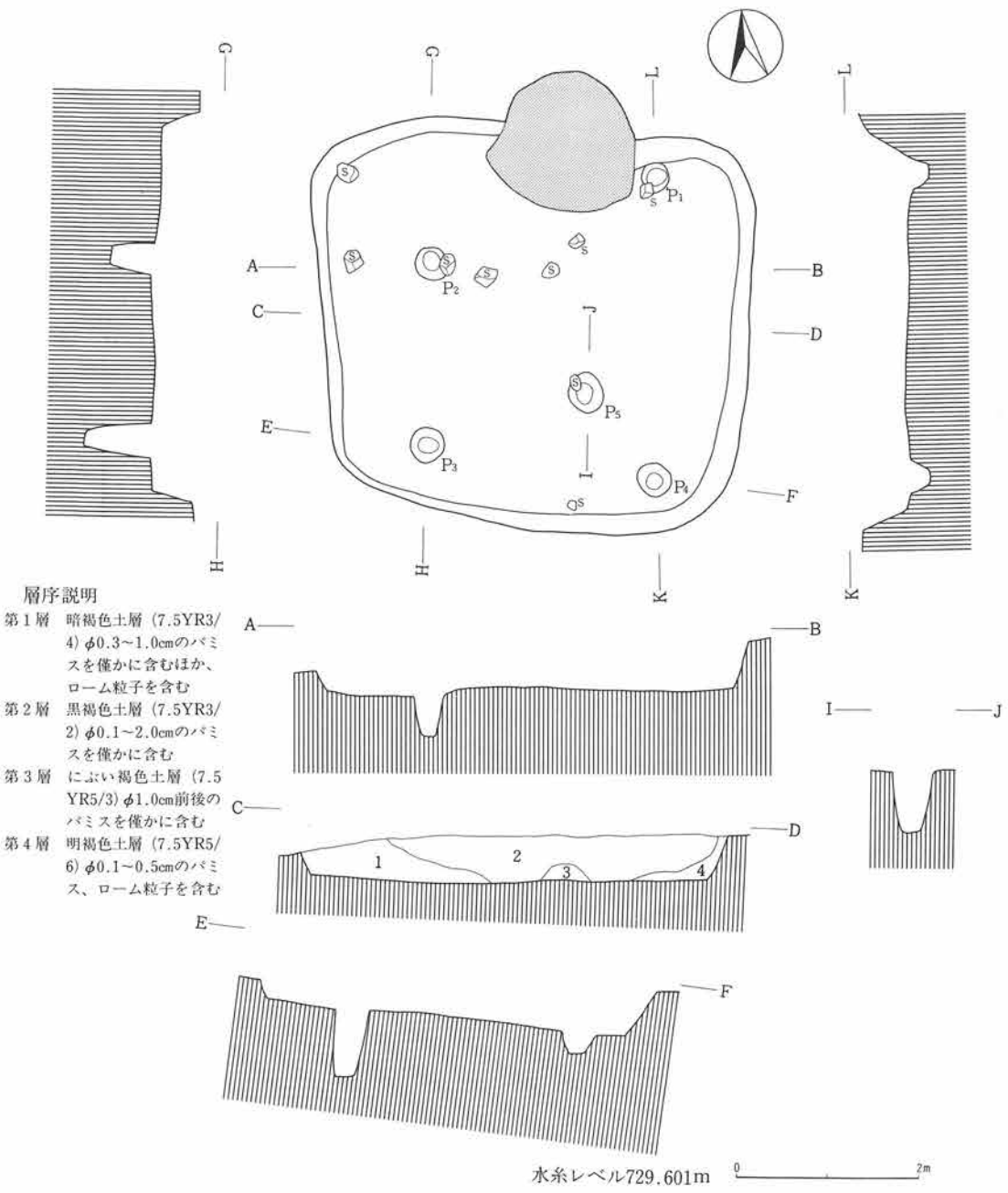
カマドを中心とする主軸方位は、Ｎ－７°－Ｅを示す。住居址覆土は、４層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、20～52cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置するが、遺存状態は悪い。地山を掘り残して袖芯とし、にぶい赤褐色（５YR5/4）土を用いて構築されていたものと思われる。また、軽石も出土していることから、構築材として使われていた可能性が強い。

ピットは総計５基検出された。位置に疑問を残すが、一応、P_1～P_4の４基が主柱穴と考えられ

る。なお、周溝は、検出されなかった。

遺物（第357・367図、図版68・77）



第242図　第106号住居址実測図

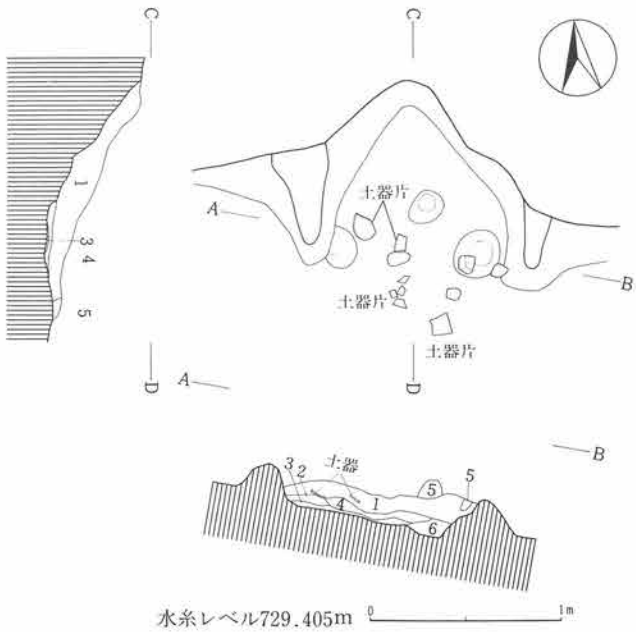
土師器片、黒色土器片、須恵器片、灰釉陶器片、鉄製品のほか、鉄滓がカマド内から出土している。このうち、図示したものに土師器杯・甕、黒色土器杯・椀、軟質須恵器杯、鉄製品がある。

墨書土器は4点あり、文字の判読できたものに「廣」(第357図9)、「足」(10)がある。

また、土師器甕にはロクロ調整されたもの(12)がある。

鉄製品(第367図8)は、1点で、紡軸の先端部と思われる。

本住居址の所産期は、平安時代に比定される。

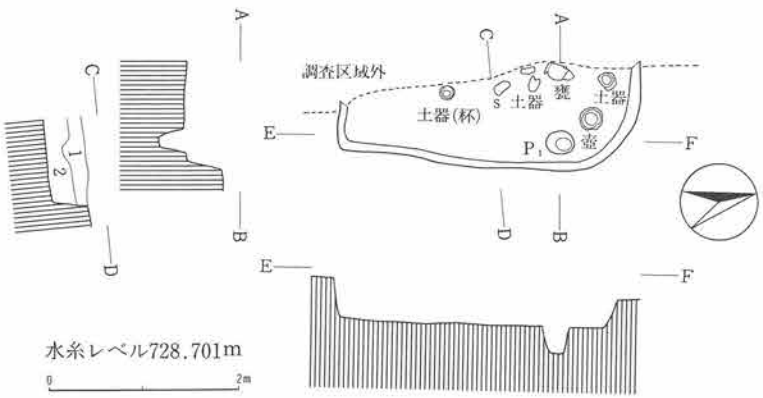


層序説明
第1層　褐色土層(7.5YR4/4)焼土粒子を僅かに含む
第2層　にぶい赤褐色土層(5YR4/4)焼土粒子を含む
第3層　明赤褐色土層(5YR5/8)焼土層
第4層　黒褐色土層(5YR3/1)灰を多く含む
第5層　にぶい赤褐色土層(5YR5/4)粘土粒子を含む(構築土)
第6層　褐色土層(10YR4/4)ローム粒子、炭を含む

第243図　第106号住居址カマド実測図

103) 第107号住居址

遺構(第244図、図版17)



層序説明
第1層　極暗褐色土層(7.5YR2/3)φ0.5~3.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第2層　暗褐色土層(7.5YR3/3)φ0.1~3.0cmのパミス、ローム粒子を含む

第244図　第107号住居址実測図

本住居址は、H－2グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

東西は調査し得た範囲で115cm、南北321cmを測る。南北軸の方位は、N－13°－Eを示す。

住居址覆土は、2層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、30～42cmを測る。カマドは、おそらく、北壁中央部に位置するものと思われ、調査区域内では認められなかった。

ピットは北東コーナー付近で1基検出された。一応、主柱穴と考えておきたい。

なお、周溝は、認められなかった。

遺物（第358・376図、図版69・85）

土師器片、黒色土器片、縄文土器片が出土している。このうち、図示したものに黒色土器杯、土師器甕、縄文土器片がある。土師器甕には、他地域の製品と考えられるもの(第358図2)がある。

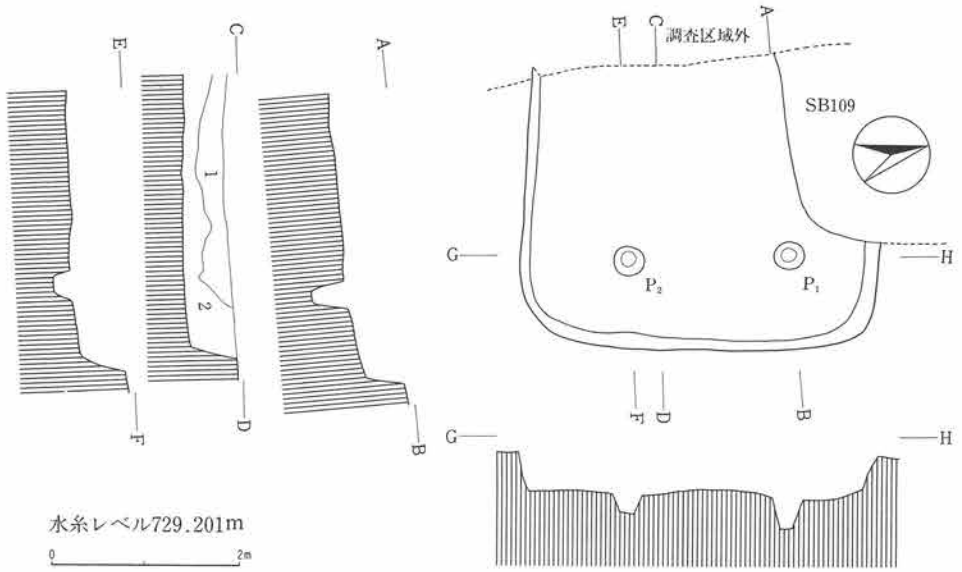
縄文土器片（第376図25）は、後期の所産であろう。

本住居址の所産期は、古墳時代後期後葉に比定される。

104）第108号住居址

遺構（第245図、図版17）

本住居址は、H－3グリッドに位置する。第109号住居址と重複関係を有し、第109号住居址に



層序説明
第1層　黒褐色土層（7.5YR3/2）φ0.1～1.0cmのパミス、ローム粒子を僅かに含む
第2層　黒褐色土層（7.5YR2/2）φ0.1～1.5cmのパミス、ローム粒子を含む

第245図　第108号住居址実測図

切られている。

東西は調査し得た範囲で315cm、南北378cmを測る。南北軸の方位は、N－13°－Eを示す。

住居址覆土は、2層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、35～47cmを測る。

カマドは、おそらく、北壁中央部に位置するものと思われるが、第109号住居址に切られているため不明である。

ピットは主柱穴と考えられる2基が検出された。なお、周溝は、検出されなかった。

遺物（第358・368図、図版69・78）

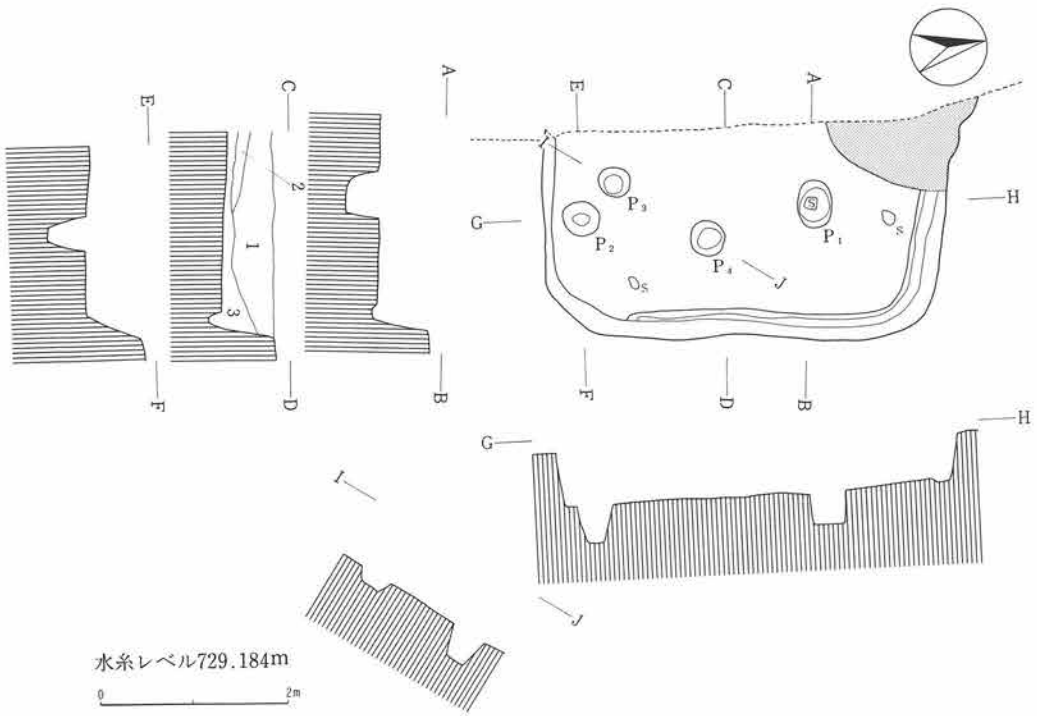
土師器片、黒色土器片、須恵器片、土製品が出土している。このうち、図示したものに須恵器杯、土製品がある。

須恵器杯（第358図1）は、底部糸切り未調整のものである。

土製品（第368図8）は、紡錘車で、丁寧なヘラミガキがなされる。重さ19.3gを量る。

本住居址の所産期は、奈良時代後葉に比定される。

105）第109号住居址



層序説明
第1層　極暗褐色土層（7.5YR2/3）φ0.3～1.0cmのパミス、ローム粒子を若干含む
第2層　黒褐色土層（7.5YR3/2）φ0.3～1.0cmのパミス、ローム粒子を若干含む
第3層　暗褐色土層（7.5YR3/3）φ0.1～1.0cmのパミスを若干含む

第246図　第109号住居址実測図

遺構（第246・247図、図版18）

本住居址は、H－3グリッドに位置する。

第108号住居址と重複関係を有し、第108号住居址を切って構築されている。

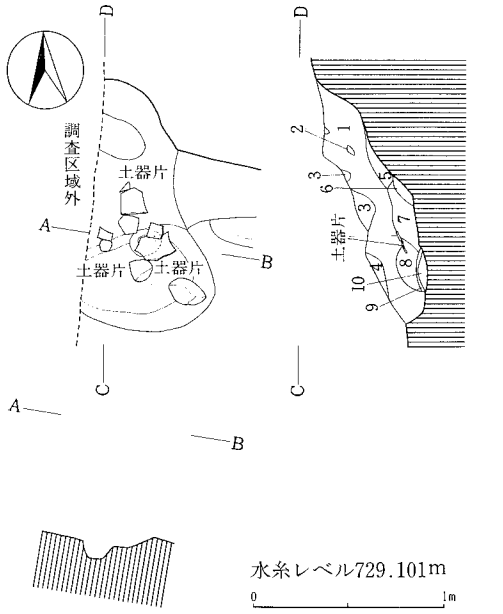
東西は調査し得た範囲で219cm、南北422cmを測り、平面プランは、おそらく、隅丸方形を呈するものと思われる。

カマドを中心とする主軸方位は、N－7°－Eを示す。住居址覆土は、3層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、46～57cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置するものと思われる。軽石および粘土により構築されていたと考えられる。

ピットは総計4基検出された。このうち、P_1・P_2が主柱穴と考えられる。

周溝は、北壁から東壁にかけて認められた。



層序説明
第1層　暗褐色土層（10YR3/3）φ0.1～0.3cmのパミス、ローム粒子、粘土粒子を含む
第2層　暗赤褐色土層（2.5YR3/3）粘土粒子を多く含む
第3層　にぶい黄褐色土層（10YR5/4）φ0.1～0.5cmのパミス、粘土粒子を僅かに含む
第4層　褐色土層（10YR4/6）ローム粒子を多く含むほか、粘土粒子を含む
第5層　暗褐色土層（7.5YR3/4）φ0.1～0.3cmのパミス、ローム粒子を含む
第6層　暗赤褐色土層（5YR3/2）ローム粒子、焼土粒子を含む
第7層　黒褐色土層（7.5YR3/2）粘土粒子、焼土粒子を含む
第8層　褐色土層（7.5YR4/3）粘土粒子を多く含む
第9層　にぶい褐色土層（7.5YR5/3）粘土粒子、灰を多く含む
第10層　灰褐色土層（7.5YR6/2）灰層

第247図　第109号住居址カマド実測図

遺物（第367図、図版77）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、灰釉陶器片、鉄製品のほか、自然遺物として炭化材、獣骨が南部から出土している。このうち、図示し得たものは鉄製品1点である。鉄製品は、鉄鏃と考えられる。なお、自然遺物については後述する。

本住居址の所産期は、出土土器片から平安時代に比定される。

106）第110号住居址

遺構（第248図、図版18）

本住居址は、H－1グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

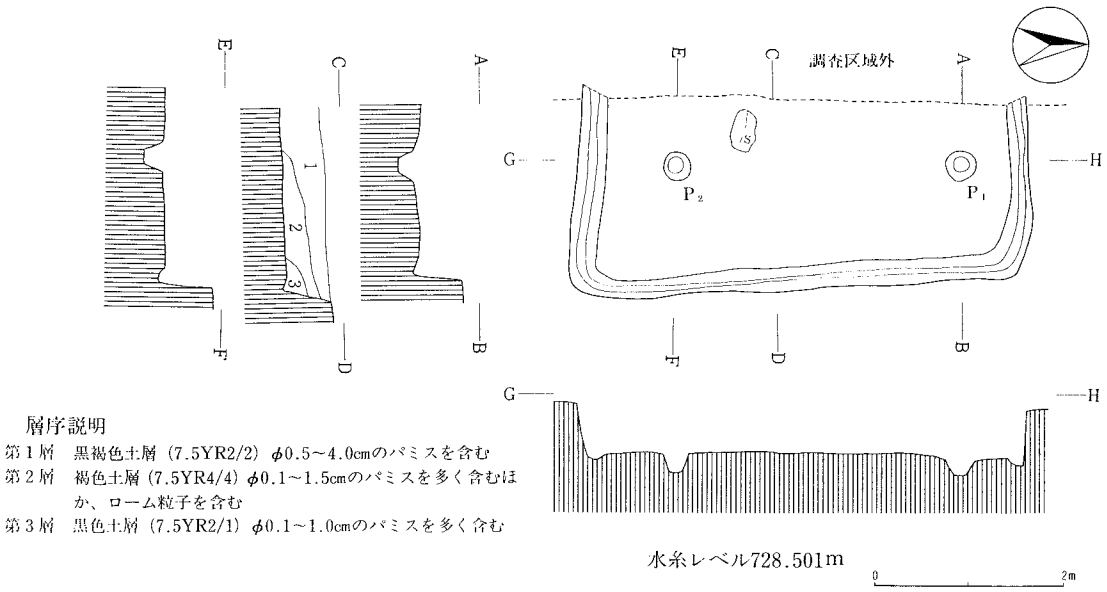
東西は調査し得た範囲で220cm、南北474cmを測る。南北軸の方位は、N－2°－Eを示す。

住居址覆土は、3層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、44～54cmを測る。

ピットは主柱穴と考えられる2基が検出された。周溝は、調査し得た部分から推して全周していたものと思われる。

遺物（第358図、図版69）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、灰釉陶器片が出土している。このうち、図示したものに土師器小型壺、小型甕がある。小型甕（第358図２）は、ロクロ調整がなされるもので混入品であろう。本住居址の所産期は、古墳時代後期中葉に比定される。



第248図　第110号住居址実測図

107）第111号住居址

遺構（第249・250図、図版18）

本住居址は、Ｈ－３グリッドに位置する。第101・112号住居址と重複関係を有し、第101・112号住居址を切って構築されている。

東西は調査し得た範囲で316cm、南北335cmを測り、平面プランは、おそらく、東西に長い隅丸長方形を呈するものと思われる。カマドを中心とする主軸方位は、Ｎ－１°－Ｗを示す。

住居址覆土は、２層に区分される。確認面からの壁高は、33～40cmを測る。

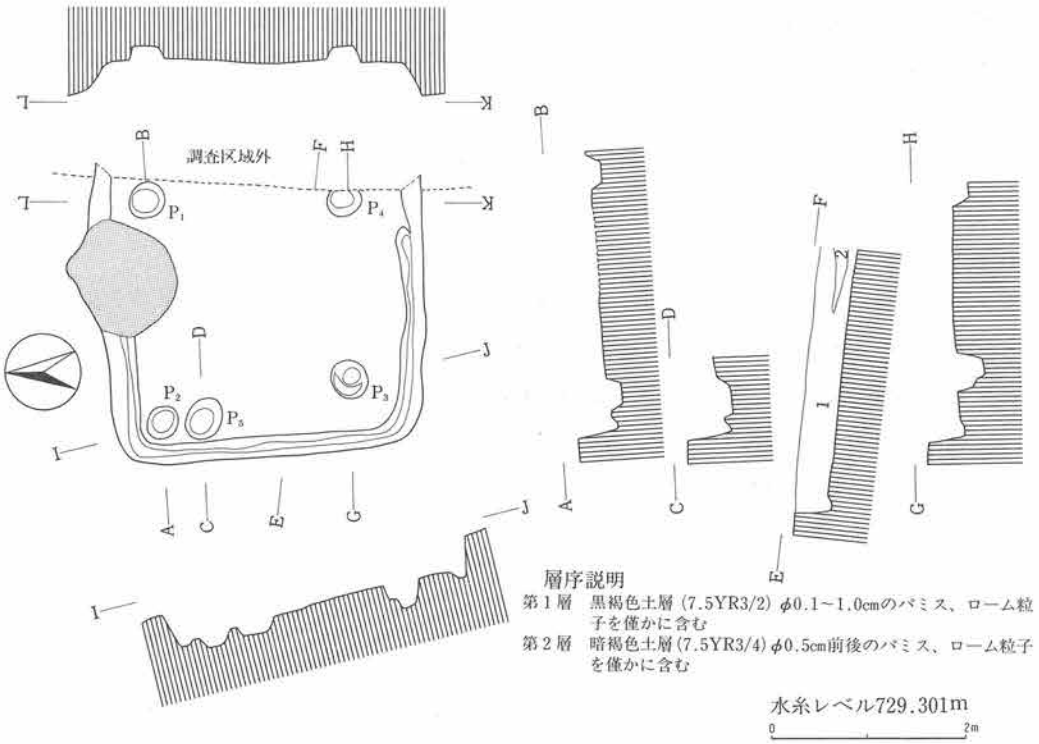
カマドは、北壁ほぼ中央部に位置するものと思われる。遺存状態は悪い。軽石および暗赤褐色（５YR3/4）粘土により構築されていたものと考えられる。

ピットは総計５基検出された。このうち、P_1～P_4の４基が主柱穴であろう。

周溝は、北壁西側から南壁にかけて認められた。

遺物（第358・372図、図版69・81）

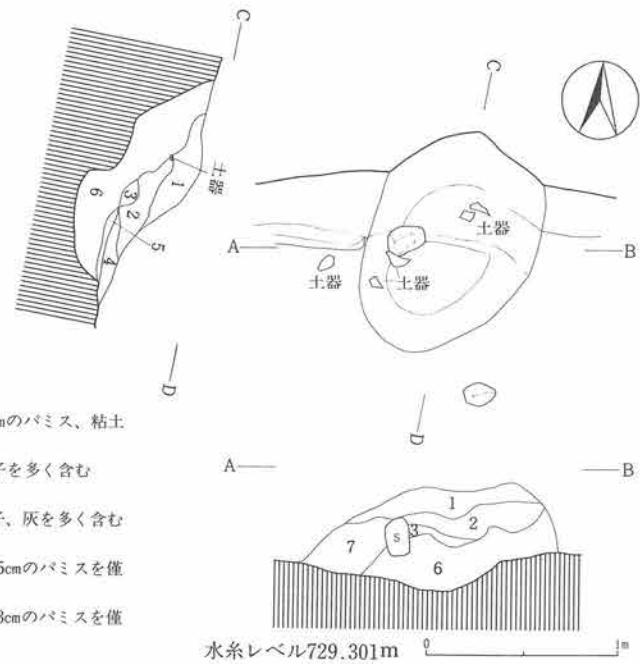
土師器片、黒色土器片、須恵器片、石製品が出土している。このうち、図示したものに墨書土器片、石製品各１点がある。墨書土器は、黒色土器杯の外面に「大」と墨書される。石製品は、



第249図　第111号住居址実測図

軽石を加工したもので、重さ65.7gを量る。用途は不明である。

本住居址の所産期は、出土土器片中に底部糸切り未調整とヘラキリの須恵器杯の破片が認められることから奈良時代後半に比定される。



第250図　第111号住居址カマド実測図.

108）第112号住居址

遺構（第251・252図、図版18）

本住居址は、H－3グリッドに位置する。第101・111・113号住居址と重複関係を有し、第101号住居址を切り、第111・113号住居址に切られている。

東西は調査し得た範囲で482cm、南北は残存部で473cmを測り、平面プランは、おそらく、隅丸方形を呈するものと思われる。

カマドを中心とする主軸方位は、N－34°－Wを示す。住居址覆土は、2層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、21～33cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置するものと思われる。第113号住居址に切られていることもあり、遺存状態は悪い。おそらく、褐色（10YR4/4）粘土を主体として構築されていたものと思われる。

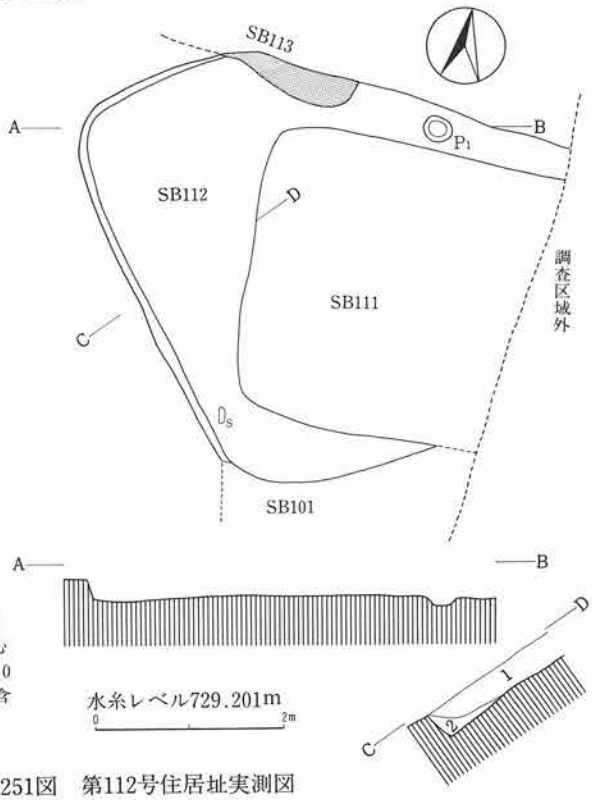
ピットは北東部で1基検出された。断定はできないが、一応、主柱穴と考えておきたい。

なお、周溝は、検出されなかった。

遺物

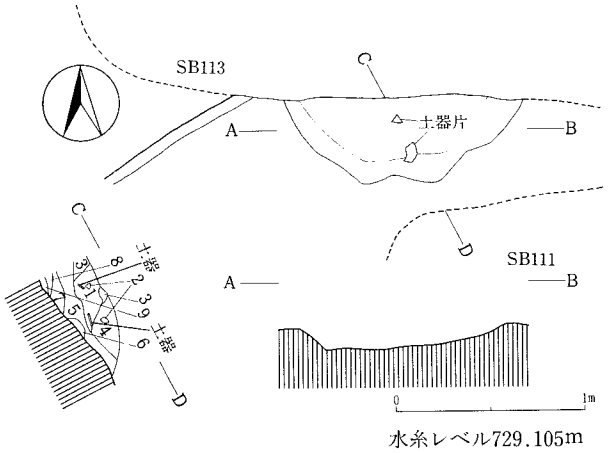
土師器片、黒色土器片が出土しているが、図示し得るものは皆無である。

本住居址の所産期は、出土土器片中に最大径を胴部に有する土師器長胴甕の破片が認められることから、古墳時代後期中葉に比定される。



層序説明
第1層　極暗褐色土層（7.5YR2/3）φ0.3～1.0cmのパミスを僅かに含む
第2層　灰褐色土層（7.5YR4/2）φ0.1～1.0cmのパミス、ローム粒子を僅かに含む

第251図　第112号住居址実測図



層序説明
第1層　褐色土層（10YR4/4）粘土層
第2層　にぶい赤褐色土層（5YR4/4）粘土粒子を多く含む
第3層　暗赤灰色土層（2.5YR3/1）粘土粒子を多く含む
第4層　褐色土層（7.5YR4/4）ローム粒子を僅かに含むほか、粘土粒子を多く含む
第5層　暗褐色土層（7.5YR3/4）ローム粒子、粘土粒子を含む
第6層　褐灰色土層（7.5YR5/1）灰層
第7層　暗赤褐色土層（5YR3/4）焼土、炭化物を含む
第8層　明赤褐色土層（5YR5/8）焼土層
第9層　褐色土層（7.5YR4/3）焼土粒子を含む

第252図　第112号住居址カマド実測図

109）第113号住居址

遺構（第253・254図、図版18）

本住居址は、H－3グリッドに位置する。第112号住居址と重複関係を有し、第112号住居址を切って構築されている。

東西497cm、南北527cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、N－5°－Eを示す。住居址覆土は、5層に区分される。

確認面からの壁高は、14～59cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置するが、遺存状態は悪い。おそらく、軽石を袖芯とし、粘土粒子を多く含む褐色（10YR4/6）土を用いて構築されていたものと思われる。

ピットは総計5基検出された。このうち、P_1～P_4が主柱穴、P_5が貯蔵穴と考えられる。

なお、周溝は、検出されなかった。

遺物（第358・367～369・375図、図版69・77～79・84）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、鉄製品、石製品、土製品のほか、鉄滓がカマド内から出土している。このうち、図示したものに須恵器杯・椀、鉄製品、石製品、土製品がある。

須恵器杯には、ヘラキリ未調整のもの（第358図1）とヘラキリ後手持ちヘラケズリがなされるもの（第358図2・3）がある。また、1の外面には墨書がなされるが、文字は不明である。

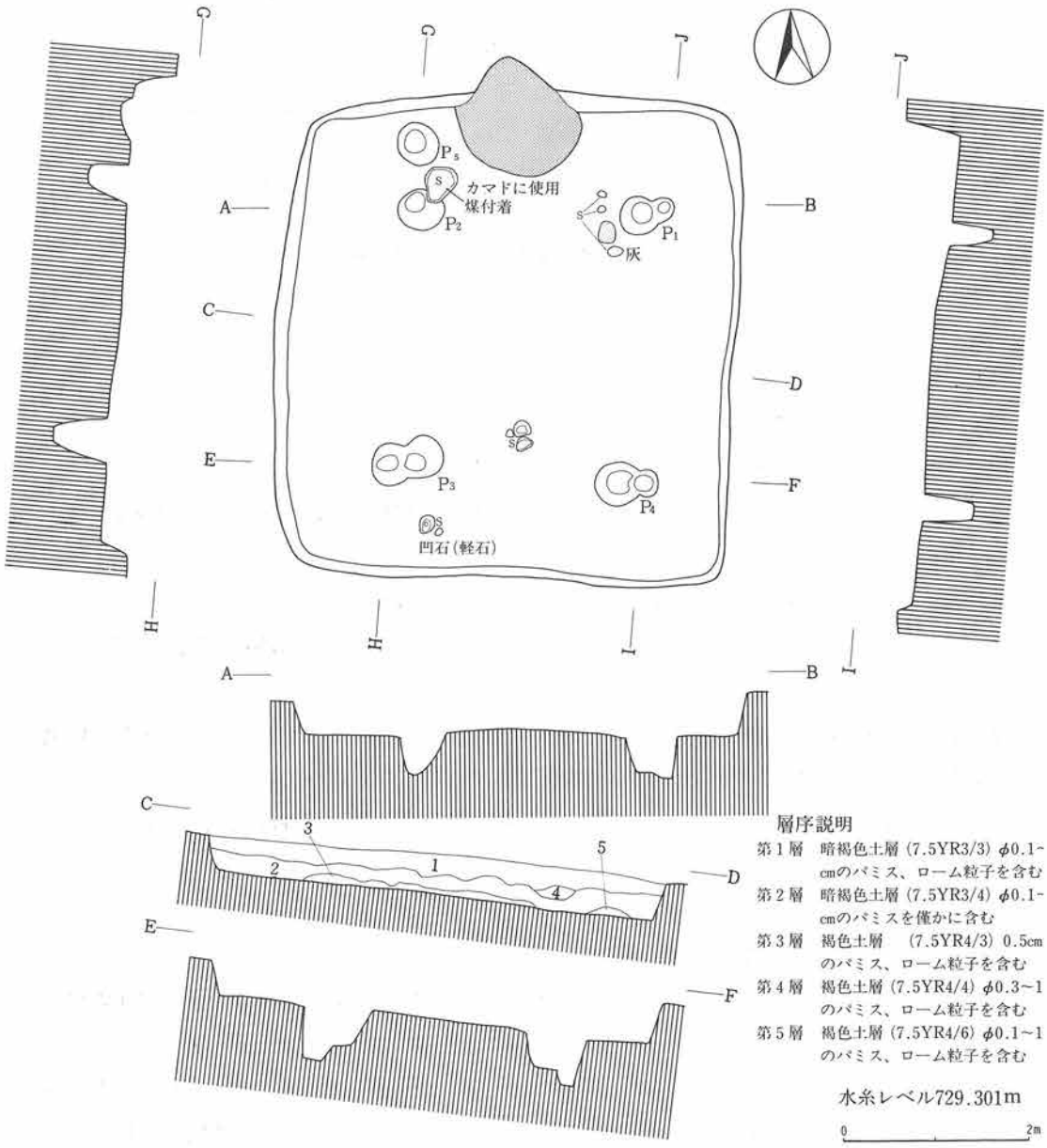
このほか、図示し得なかったが、甲斐型土器杯の破片も認められた。

鉄製品（第367図10）は、帯金具の鋲具と考えられる。

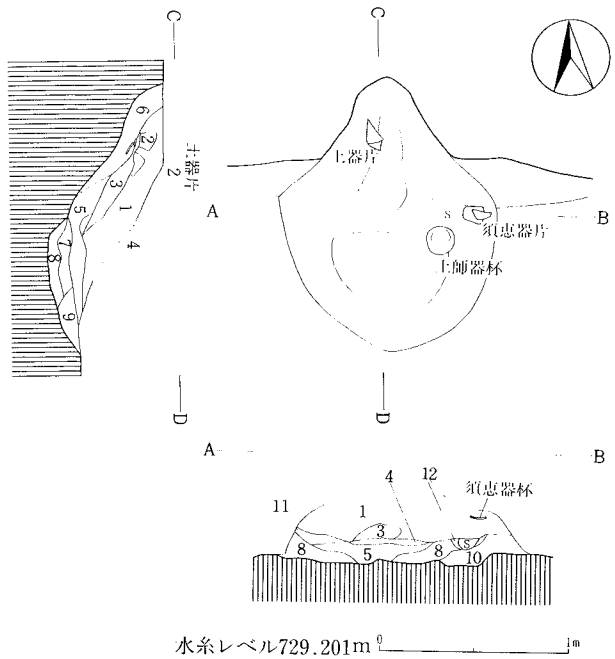
石製品、土製品は、軽石製と土製の紡錘車と軽石製の凹石で、紡錘車の重さは、軽石製が57.4ｇ、土製が61.5ｇを量る。

このほか図示し得なかったが、砂質凝灰岩製の砥石の破片も認められた。

本住居址の所産期は、奈良時代前半に比定される。



第253図　第113号住居址実測図



層序説明

第1層　暗褐色土層（7.5YR3/3）住居址覆土と同じ
第2層　にぶい赤褐色土層（5YR5/4）φ0.3cm前後のパミスを僅かに含むほか、粘土粒子を含む
第3層　褐色土層（7.5YR4/3）粘土粒子、焼土粒子を含む
第4層　暗褐色土層（10YR3/4）粘土粒子を含む
第5層　にぶい赤褐色土層（5YR4/4）粘土粒子、焼土粒子を含む
第6層　暗赤褐色土層（5YR3/4）φ0.3～0.5cmのパミス、ローム粒子、粘土粒子を含む
第7層　赤褐色土層（5YR4/8）焼土層
第8層　にぶい褐色土層（7.5YR5/4）焼土粒子、ローム粒子を含む
第9層　暗赤褐色土層（5YR3/3）焼土粒子を含む
第10層　褐色土層（10YR4/4）φ0.3cm前後のパミス、ローム粒子、粘土粒子を含む
第11層　暗赤褐色土層（5YR3/6）ローム粒子、粘土粒子、焼土粒子を含む
第12層　褐色土層（10YR4/6）粘土粒子を多く含む

第254図　第113号住居址カマド実測図

110）第114号住居址

遺構（第255図、図版18）

本住居址は、H－3グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

東西は調査し得た範囲で180cm、南北398cmを測る。南北軸の方位は、N－6°－Eを示す。

住居址覆土は、3層に区分される。確認面からの壁高は、35～42cmを測る。

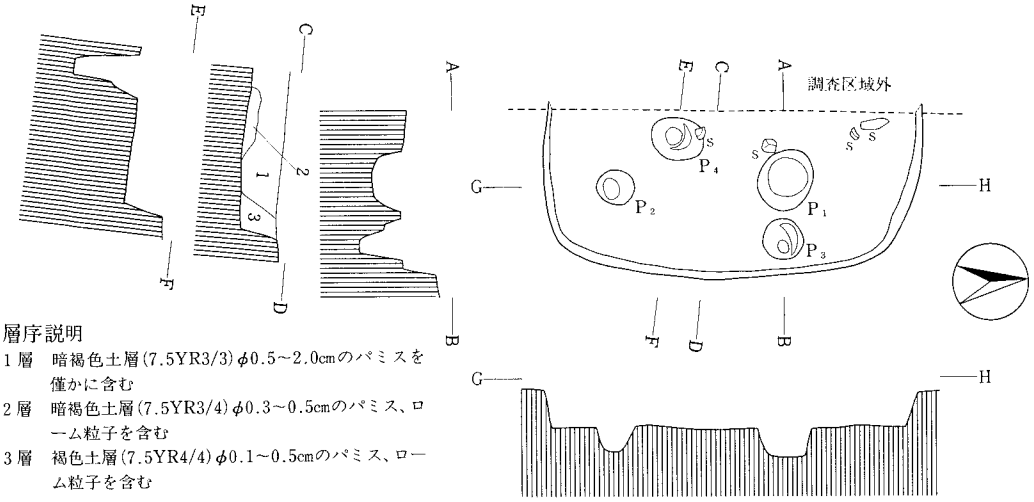
ピットは総計4基検出された。このうち、P_1・P_2の2基が主柱穴と考えられ、他の2基は、掘立柱建物址に伴うものかもしれない。

周溝は、検出されなかった。

遺物（第377図、図版86）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、灰釉陶器片、黒曜石の剝片が出土している。このうち、図示し得たものは、黒曜石の剝片1点である。

本住居址の所産期は、出土土器片中に「コ」の字形を呈する土師器甕の破片が認められることから平安時代に比定される。

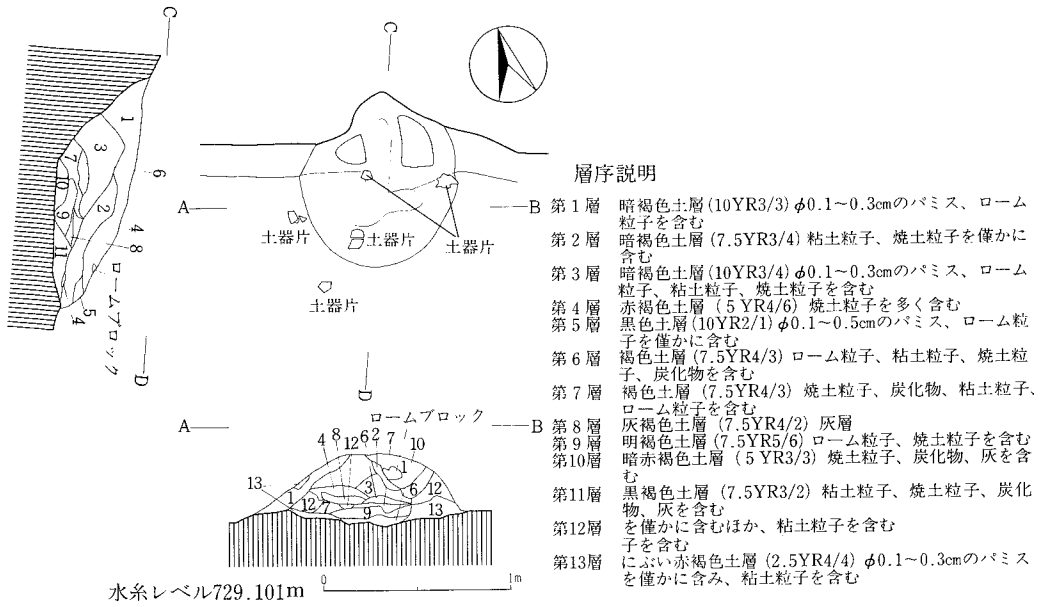


第255図　第114号住居址実測図

111）第115号住居址

遺構（第256・257図、図版18）

本住居址は、H－2グリッドに位置する。第70・85号掘立柱建物址と重複関係を有し、第70・85号掘立柱建物址に切られている。



第256図　第115号住居址カマド実測図

東西379cm、南北298cmを測り、平面プランは、東西に長い隅丸長方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、N－15.5°－Eを示す。住居址覆土は、4層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、31～56cmを測る。

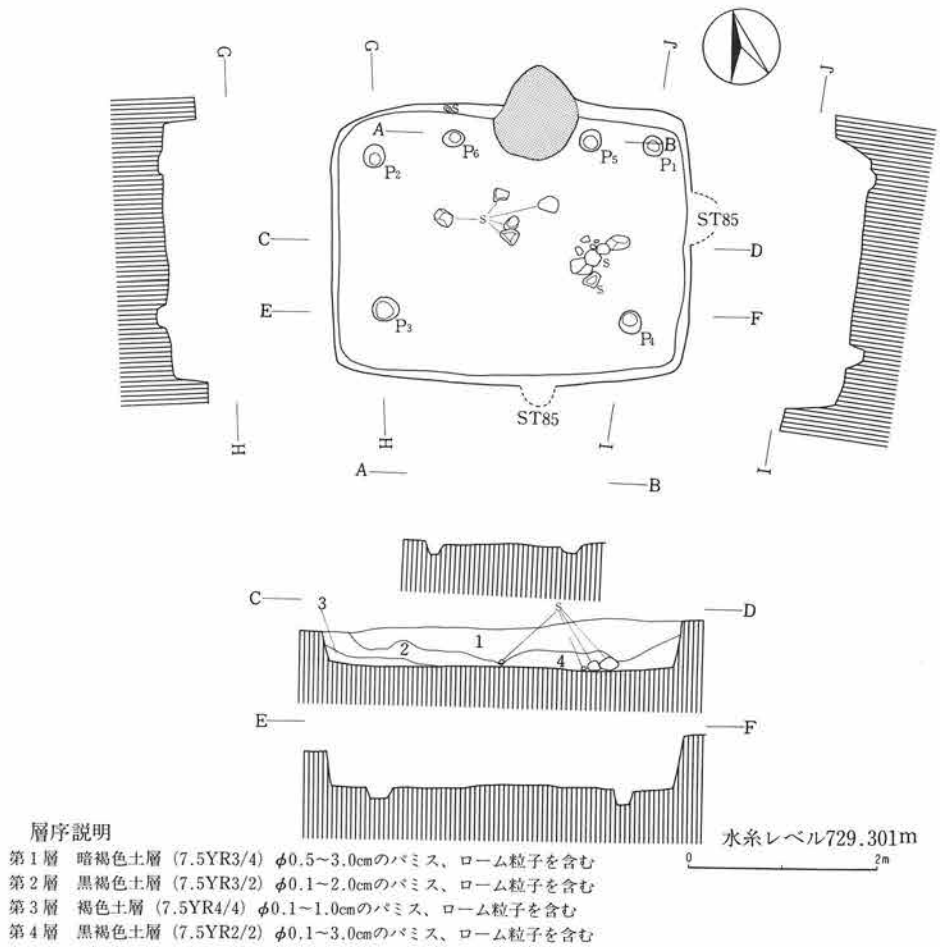
カマドは、北壁ほぼ中央部に位置するが、遺存状態は悪い。おそらく、軽石および第12・13層を構築土としていたものと思われる。

ピットは総計6基検出された。このうち、P_1～P_4が主柱穴と考えられる。

周溝は、検出されなかった。

遺物（第358・372・373図、図版69・81・82）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、石製品が出土している。このうち、図示したものに土師器



層序説明

第1層　暗褐色土層（7.5YR3/4）φ0.5～3.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第2層　黒褐色土層（7.5YR3/2）φ0.1～2.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第3層　褐色土層（7.5YR4/4）φ0.1～1.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第4層　黒褐色土層（7.5YR2/2）φ0.1～3.0cmのパミス、ローム粒子を含む

第257図　第115号住居址実測図

甕、石製品6点がある。石製品のうち、第372図9は中央部に凹みを持つもので、他は磨石と考えられる。

第372図8・第373図1の2点が安山岩、他は軽石である。

本住居址の所産期は、古墳時代後期後葉に比定される。

112）第116号住居址

遺構（第258・259図、図版18）

本住居址は、H－2グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

東西は調査し得た範囲で250cm、南北443cmを測り、平面プランは、おそらく、南北にやや長い隅丸長方形を呈するものと思われる。

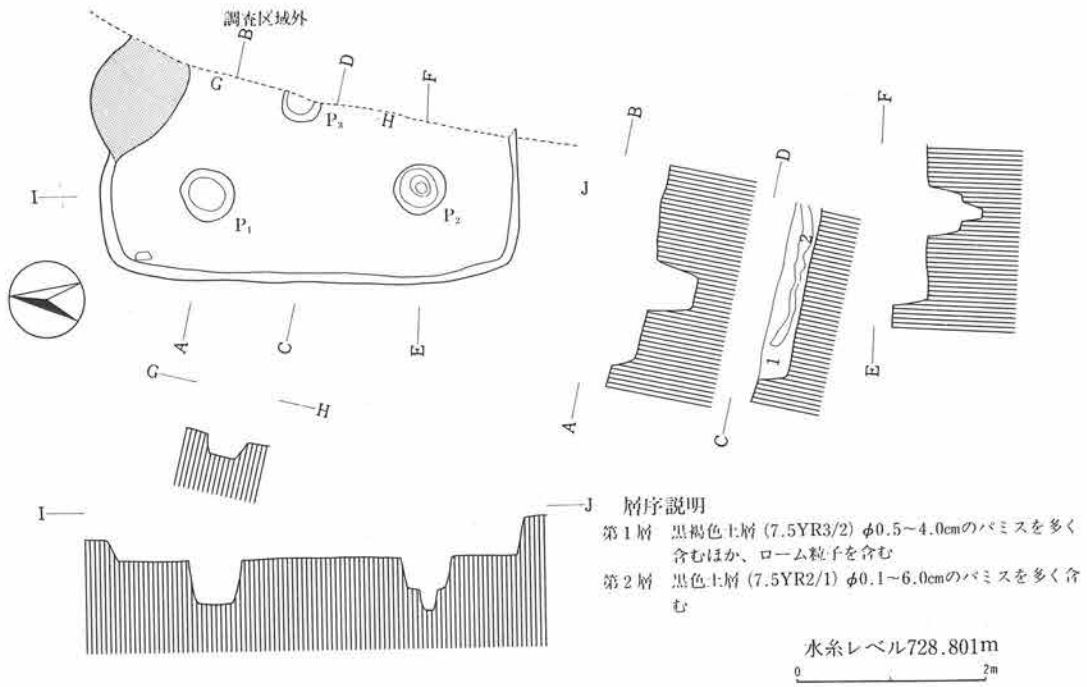
カマドを中心とする主軸方位は、N－7°－Wを示す。住居址覆土は、2層に区分される。

確認面からの壁高は、22～39cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置するものと思われる。第9層を袖構築土とし、第6層などを用いて構築されていたものと考えられる。

ピットは総計3基検出された。このうち、P_1・P_2の2基が主柱穴と考えられる。

なお、周溝は、検出されなかった。



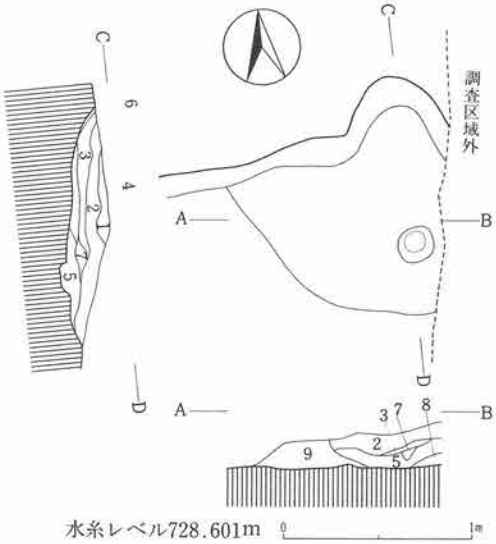
第258図　第116号住居址実測図

遺物（第358・373図、図版69・82）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、石製品が出土している。このうち、図示したものに土師器杯、石製品がある。

石製品（第373図５）は、軽石で砥石として用いられたものと思われる。

本住居址の所産期は、古墳時代後期中葉に比定される。



層序説明

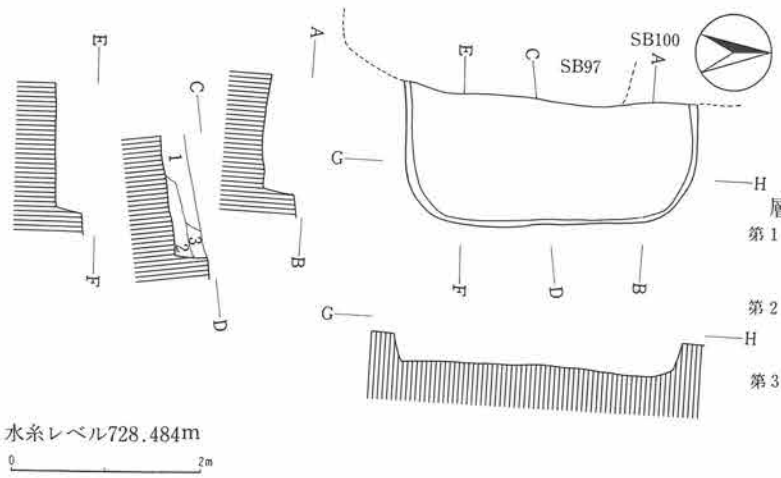
第１層　暗褐色土層(10YR3/3) φ0.1～1.0cmのパミス、ローム粒子を僅かに含む
第２層　暗褐色土層（7.5YR3/4）φ0.1～1.5cmのパミス、ローム粒子、粘土粒子を含む
第３層　暗褐色土層（7.5YR3/3）φ0.3～1.0cmのパミス、ローム粒子、粘土ブロックを含む
第４層　黒褐色土層（10YR2/3）粘土粒子、焼土粒子を含む
第５層　にぶい赤褐色土層（５YR4/4）φ0.1～1.0cmのパミス、ローム粒子、焼土を含む
第６層　にぶい赤褐色土層（５YR5/4）粘土粒子を多く含む
第７層　明赤褐色土層（2.5YR5/8）焼土粒子を多く含む
第８層　暗赤褐色土層（５YR3/4）粘土粒子、焼土粒子、灰を含む
第９層　暗褐色土層（10YR3/4）φ0.5cm前後のパミス、ローム粒子、粘土粒子を含む

第259図　第116号住居址カマド実測図

113）第117号住居址

遺構（第260図、図版19）

本住居址は、Ｇ－６グリッドに位置する。第97・98・100号住居址と重複関係を有し、第97・98・100号住居址に切られている。



層序説明

第１層　暗褐色土層（7.5YR3/3）φ0.1～1.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第２層　暗褐色土層（7.5YR3/4）φ0.1～1.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第３層　褐色土層（7.5YR4/4）φ0.5～1.0cmのパミス、ローム粒子を含む

第260図　第117号住居址実測図

東西は調査し得た範囲で139cm、南北308cmを測る。南北軸の方位は、N－1.5°－Wを示す。

住居址覆土は、3層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、28～34cmを測る。ピット、周溝は、検出されなかった。

遺物

土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土しているが、図示し得るものは皆無である。

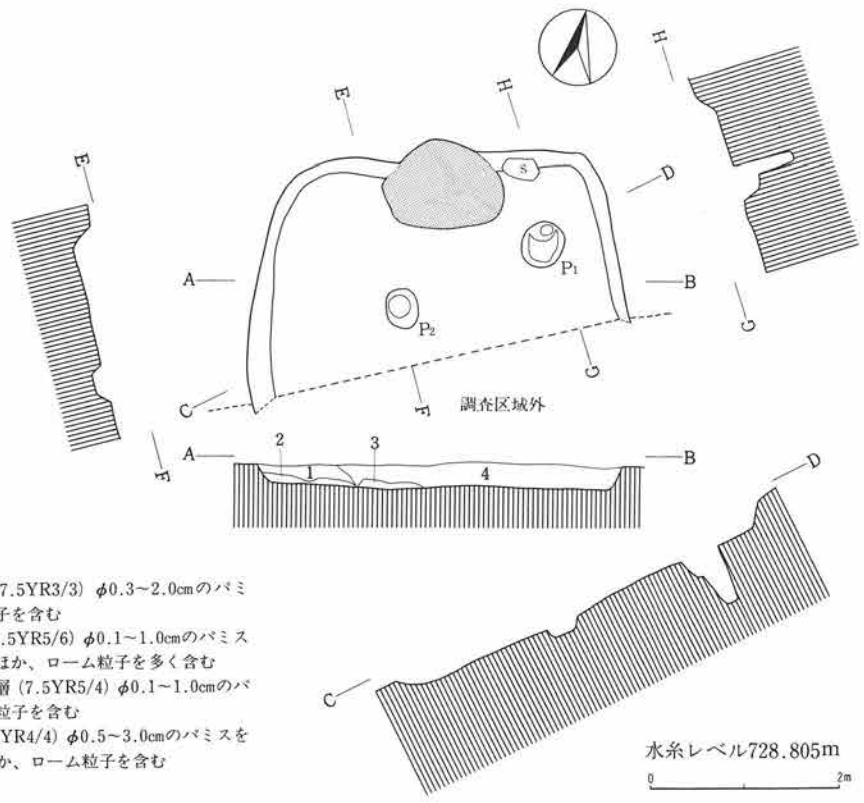
本住居址の所産期は、出土土器片および重複関係から古墳時代後期中葉に比定される。

114）第118号住居址

遺構（第261・262図、図版19）

本住居址は、H－4グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

東西406cm、南北は調査し得た範囲で240cmを測る。カマドを中心とする主軸方位は、N－17°－Wを示す。住居址覆土は、4層に区分される。確認面からの壁高は、16～24cmを測る。



層序説明

第1層　暗褐色土層（7.5YR3/3）φ0.3～2.0cmのパミス、ローム粒子を含む

第2層　明褐色土層（7.5YR5/6）φ0.1～1.0cmのパミスを僅かに含むほか、ローム粒子を多く含む

第3層　にぶい褐色土層（7.5YR5/4）φ0.1～1.0cmのパミス、ローム粒子を含む

第4層　褐色土層（7.5YR4/4）φ0.5～3.0cmのパミスを僅かに含むほか、ローム粒子を含む

第261図　第118号住居址実測図

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置するが、遺存状態は悪い。おそらく、軽石および粘土を主体として構築されていたものと思われる。

ピットは総計２基検出された。このうち、P_1が主柱穴と考えられる。

なお、周溝は、検出されなかった。

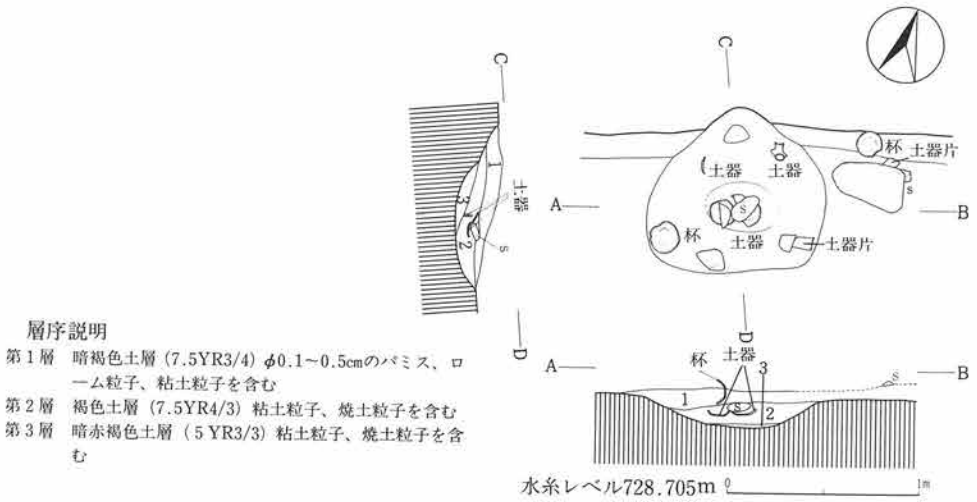
遺物（第359・369図、図版70・79）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、石製品が出土している。このうち、図示したものに黒色土器杯・椀・皿、土師器甕、須恵器杯、石製品がある。土器の多くが、カマドおよび周辺からの出土である。

墨書土器（第359図１）が１点あるが、文字は判読できない。

石製品（第369図２）は、砂質凝灰岩製の紡錘車で、重さ75.5ｇを量る。

本住居址の所産期は、平安時代に比定される。



層序説明
第１層　暗褐色土層（7.5YR3/4）φ0.1～0.5cmのパミス、ローム粒子、粘土粒子を含む
第２層　褐色土層（7.5YR4/3）粘土粒子、焼土粒子を含む
第３層　暗赤褐色土層（５YR3/3）粘土粒子、焼土粒子を含む

第262図　第118号住居址カマド実測図

(2)　掘立柱建物址

１）第１号掘立柱建物址

遺構（第263図）

Ｅ－５グリッドに位置する。第20号住居址と重複関係を有し、第20号住居址を切って構築されている。

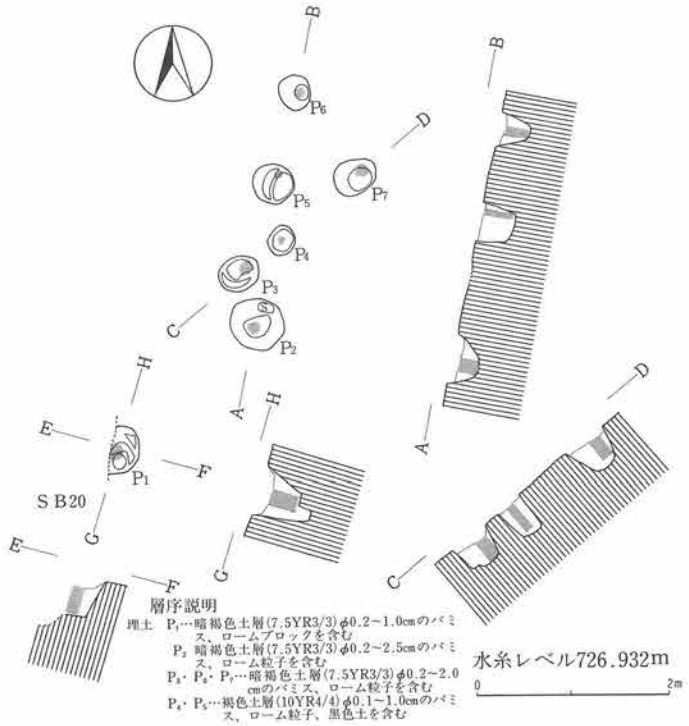
東西183cm、南北470cmを測る。７基のピットが検出された。２棟が重複している可能性が強いが、ここでは、一応、１棟として扱う。柱間は、東西30～100cm、南北80～154cmを測る。

南北軸の方位は、N－12°－Eを示す。

ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。また、P_7埋土では軽石が認められた。

遺物

P_1～P_3・P_7から土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土している。このうち、P_1から底部ヘラキリ未調整の須恵器杯の破片が出土していることおよび重複関係から、本遺構の所産期は、奈良時代以降と考えられる。



第263図　第１号掘立柱建物址実測図

２）第２号掘立柱建物址

遺構（第264図、図版19）

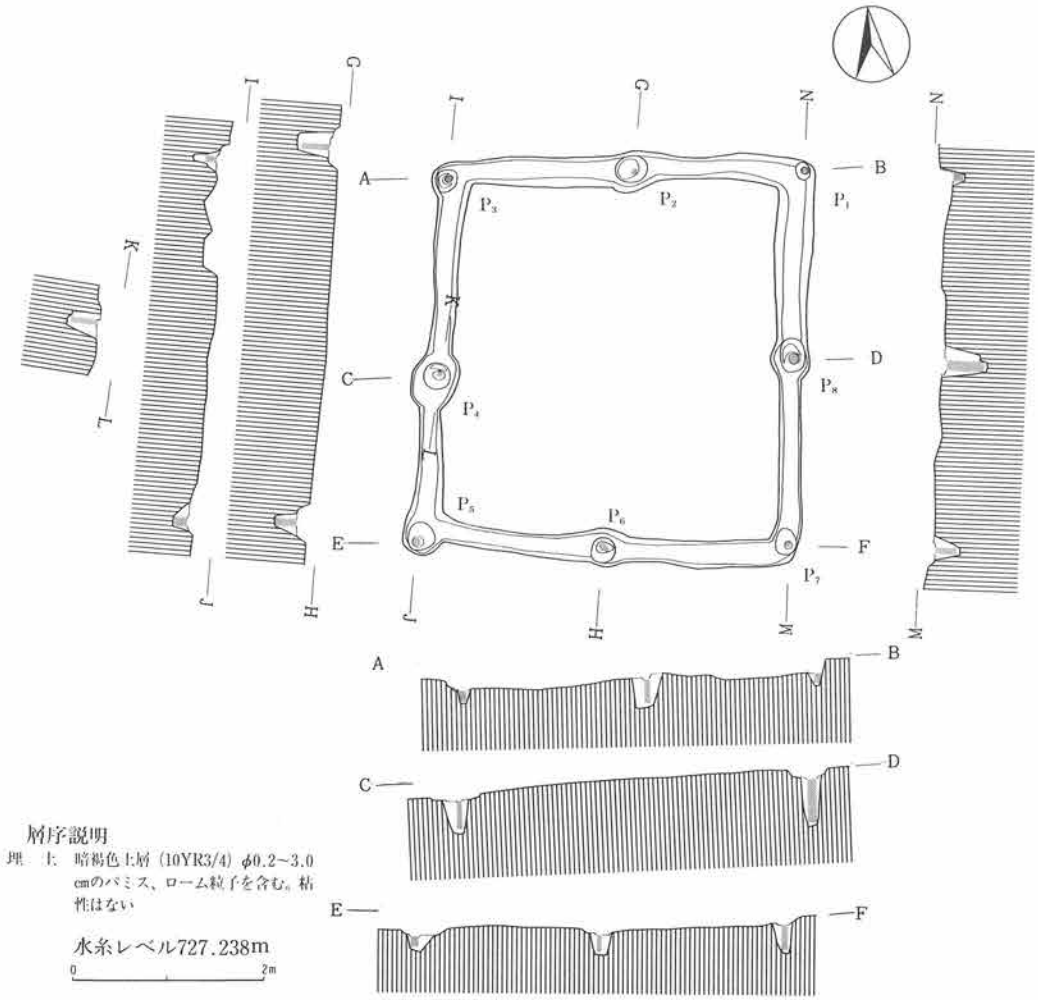
E－５グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

２間×２間の側柱式の掘立柱建物で、東西418cm、南北439cmを測り、平面プランは、正方形を呈する。柱間は、東西173～366cm、南北175～200cmを測る。

南北軸の方位は、N－５°－Eを示す。ピット掘形の平面プランは、溝持ちのものである。

遺物

土師器片、須恵器片が出土している。本遺構の所産期は、出土土器片から平安時代以降と考えられる。



第264図　第２号掘立柱建物址実測図

３）第３号掘立柱建物址

遺構（第265図、図版19）

Ｃ－３グリッドに位置する。第６号掘立柱建物址と重複関係を有し、第６号掘立柱建物址を切って構築されている。

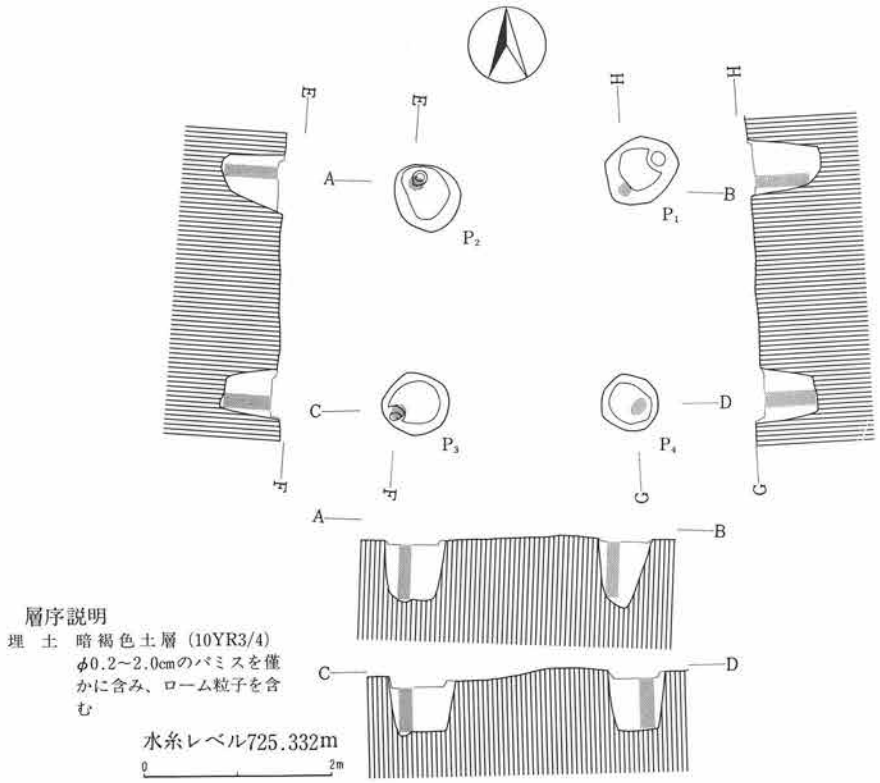
１間×１間の側柱式の掘立柱建物で、東西300cm、南北312cmを測り、平面プランは、正方形を呈する。柱間は、東西204～236cm、南北217～230cmを測る。

南北軸の方位は、Ｎ－１°－Ｗを示す。ピット掘形の平面プランは、楕円形である。

遺物

P_1・P_3から土師器片、黒色土器片が出土している。本遺構の所産期は、出土土器片および重複

関係から奈良時代以降に比定される。



第265図　第３号掘立柱建物址実測図

４）第４号掘立柱建物址

遺構（第266図、図版19）

Ｃ－４グリッドに位置する。第69・75号住居址と重複関係を有し、第69・75号住居址を切って構築されている。

１間×１間の側柱式の掘立柱建物で、東西375cm、南北186cmを測り、平面プランは、長方形を呈する。柱間は、東西278～283cm、南北92～132cmを測る。

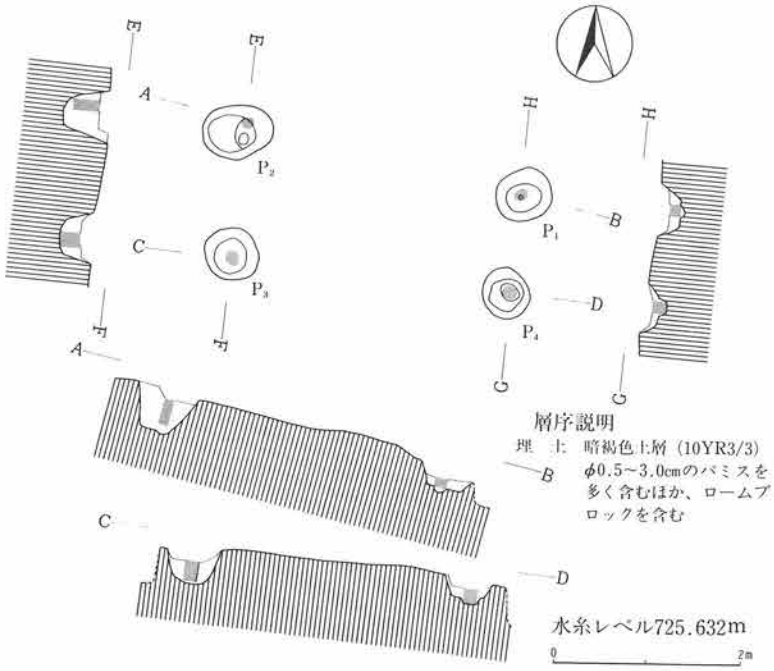
南北軸の方位は、Ｎ－７°－Ｅを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

P_3から土師器片が出土している。本遺構の所産期は、出土土器片および重複関係から、古墳時代後期中葉以降に比定される。

５）第５号掘立柱建物址

遺構（第267図、図版19）



第266図　第４号掘立柱建物址実測図

Ｃ－３・４グリッドに位置する。

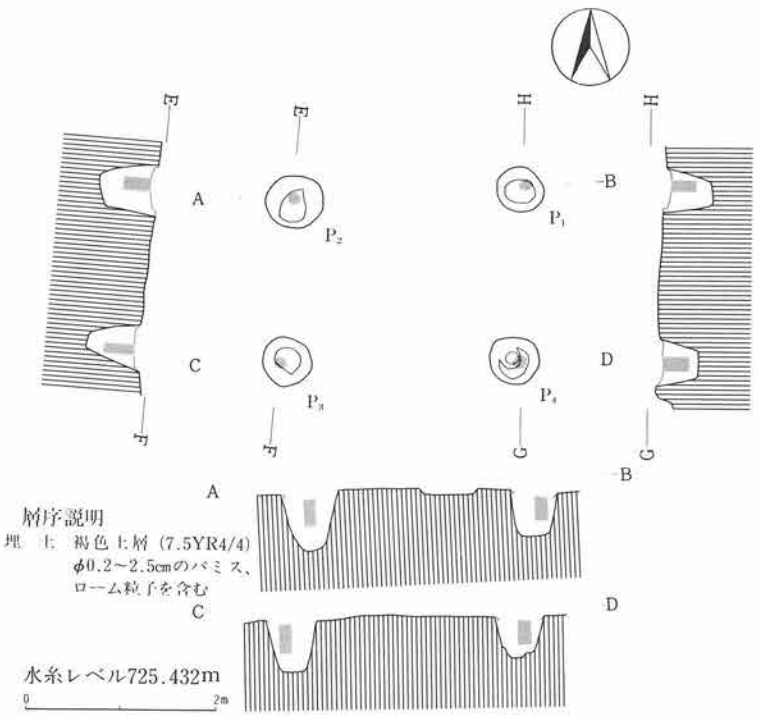
第12・13号掘立柱建物址と重複関係を有する。

１間×１間の側柱式の掘立柱建物で、東西296cm、南北231cmを測り、平面プランは、長方形を呈する。

柱間は、東西234～241cm、南北164～176cmを測る。

南北軸の方位は、Ｎ－４°－Ｗを示す。

ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。



第267図　第５号掘立柱建物址実測図

遺物

出土遺物は皆無である。

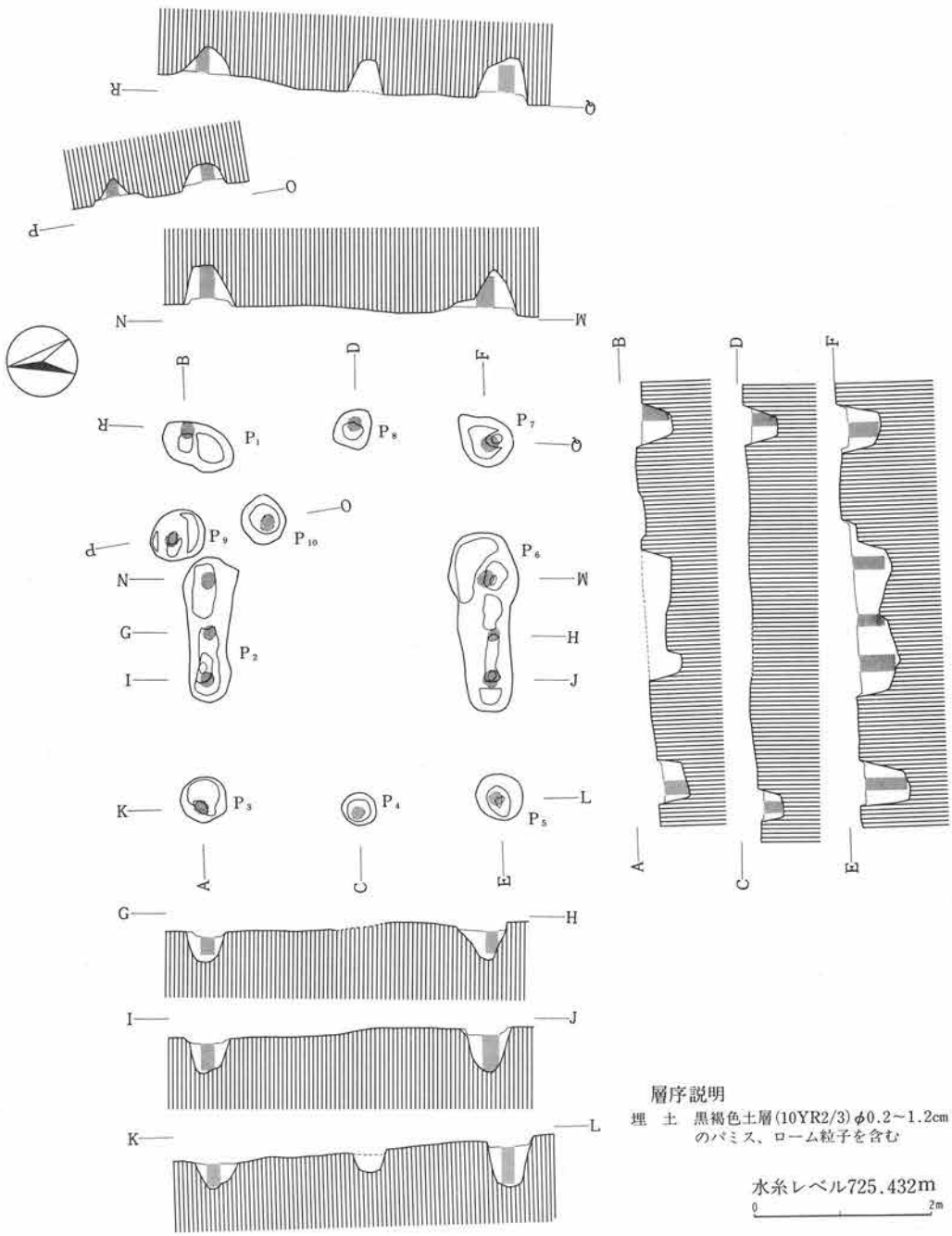
本遺構の所産期は、重複関係から奈良時代後葉以降と考えられる。

6）第6号掘立柱建物址

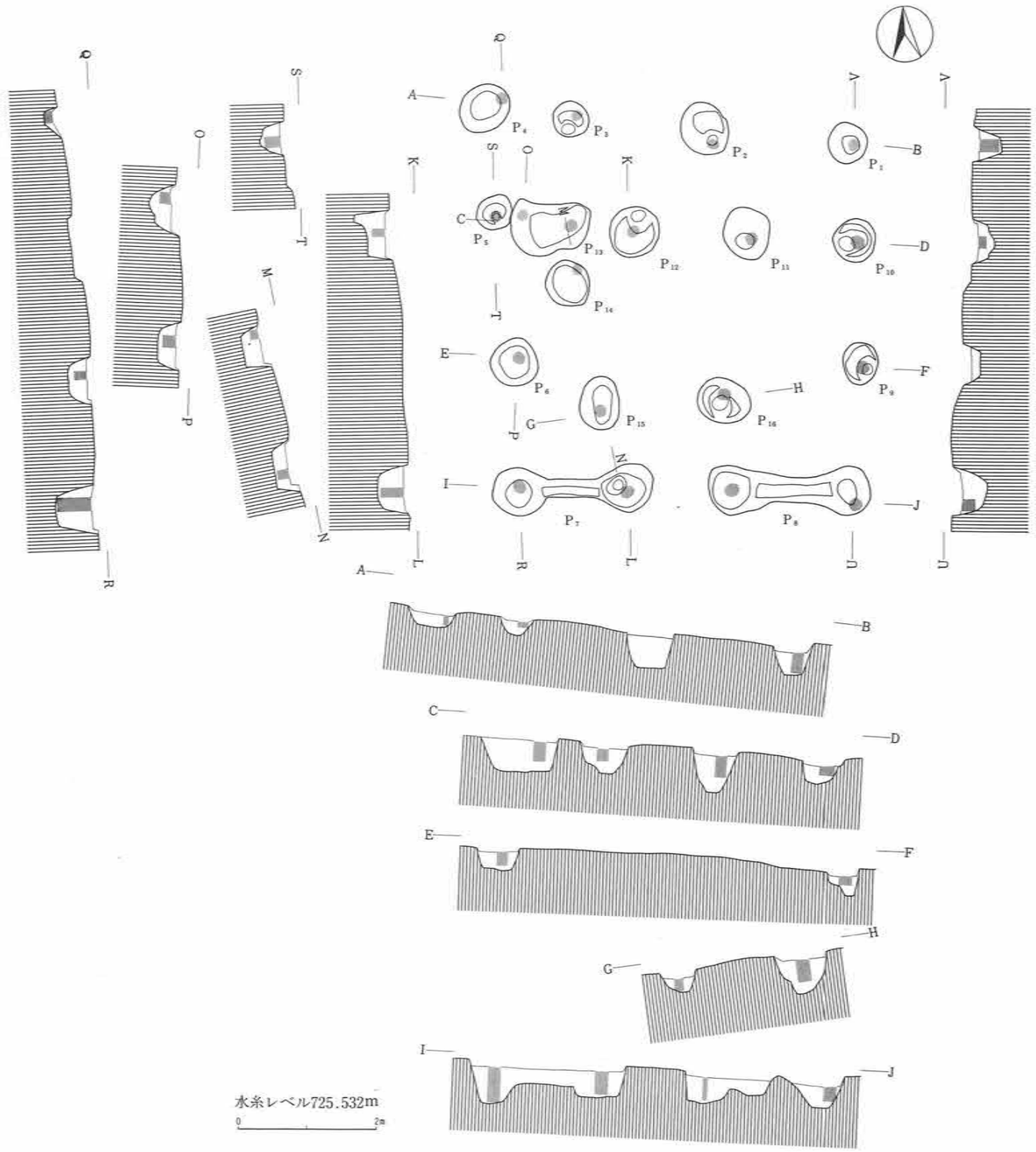
遺構（第268図、図版19）

C－3・4グリッドに位置する。第3号掘立柱建物址と重複関係を有する。

4間×2間の側柱式の掘立柱建物で、東西478cm、南北399cmを測り、平面プランは、長方形を



第268図　第6号掘立柱建物址実測図



第269図　第７号掘立柱建物址実測図

呈する。柱間は、東西33～136cm、南北139～310cmを測る。

南北軸の方位は、N－9°－Eを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形のほか、溝持ちのものも認められた。

遺物（第359図、図版70）

P_1～P_3・P_9から土師器片、須恵器片が出土している。このうち、図示したものにP_1出土の須恵器杯がある。本遺構の所産期は、出土土器片から平安時代以降と考えられる。

7）第7号掘立柱建物址

遺構（第269図、図版19）

C－3・4グリッドに位置する。第6号掘立柱建物址と重複関係を有する。

3間×3間の総柱式の掘立柱建物で、東西591cm、南北628cmを測り、平面プランは、正方形を呈する。柱間は、東西94～186cm、南北124～189cmを測る。

南北軸の方位は、N－4°－Eを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形のほか、溝持ちのものも認められた。

遺物

土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土している。このうち、P_8から武蔵型の土師器甕の破片が出土していることから、本遺構の所産期は、奈良時代前葉以降と考えられる。

8）第8号掘立柱建物址

遺構（第270図、図版20）

C－4グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

1間×1間の側柱式の掘立柱建物で、東西330cm、南北318cmを測り、平面プランは、正方形を呈する。柱間は、東西208～240cm、南北236～257cmを測る。

南北軸の方位は、N－1°－Eを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

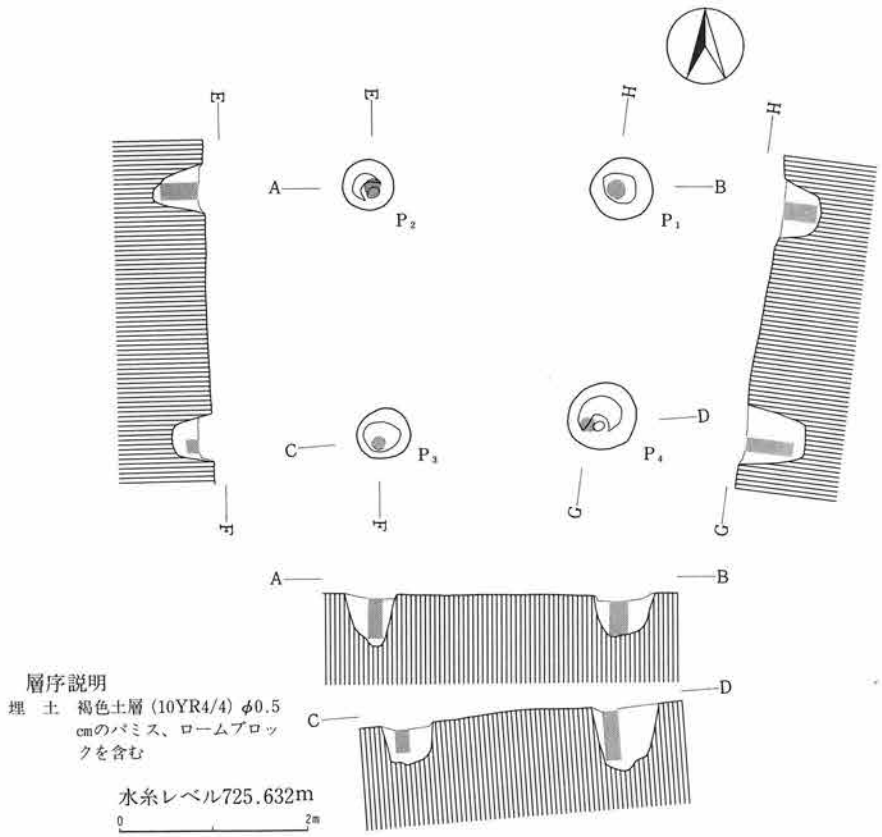
遺物

出土遺物は皆無である。本遺構の所産期は、他の遺構との関連から、一応、平安時代以降と考えておきたい。

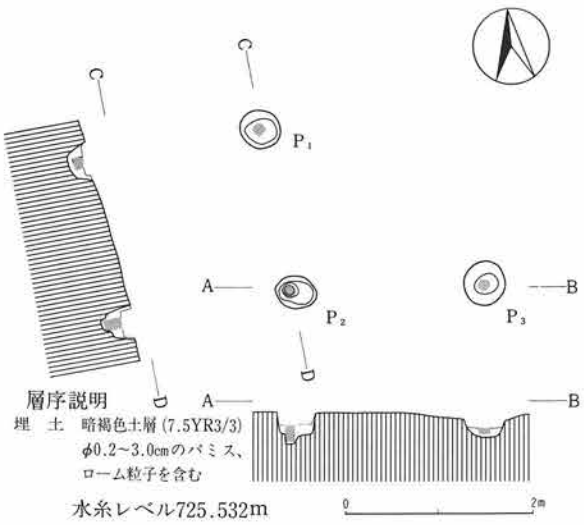
9）第9号掘立柱建物址

遺構（第271図）

C－304グリッドに位置する。第7号掘立柱建物址と重複関係を有する。



第270図　第８号掘立柱建物址実測図



第271図　第９号掘立柱建物址実測図

１間×１間の側柱式の掘立柱建物と考えられるが、３基のピットが検出されたにとどまる。

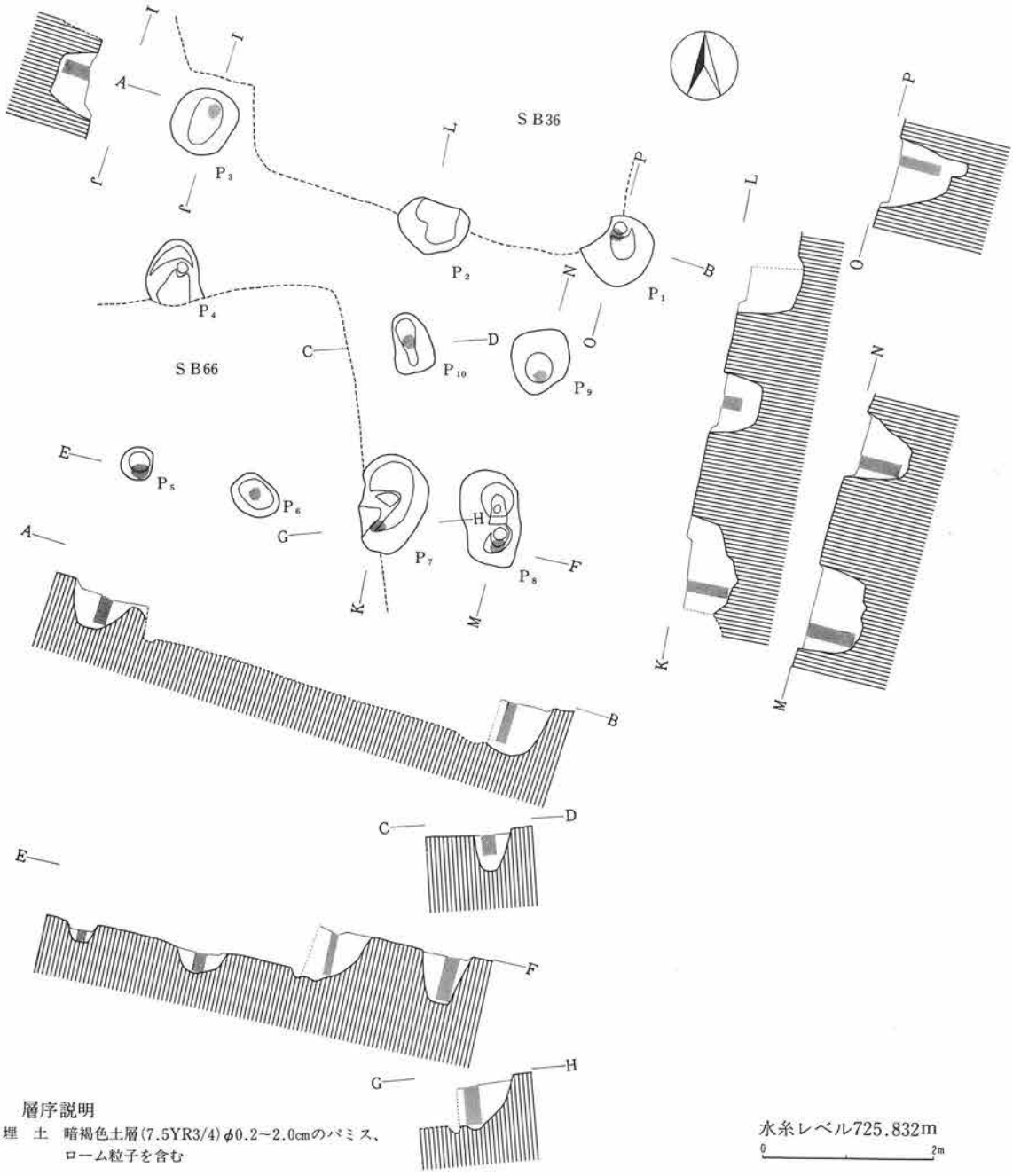
東西245cm、南北216cmを測り、平面プランは、長方形を呈するものと思われる。柱間は東西194cm、南北162cmを測る。

南北軸の方位は、N－7°－Wを示す。

ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

出土遺物は皆無である。本遺構の所産期は、他の遺構との関連から、一応、平安時代以降と考えられる。



第272図　第10号掘立柱建物址実測図

10）第10号掘立柱建物址

遺構（第272図、図版20）

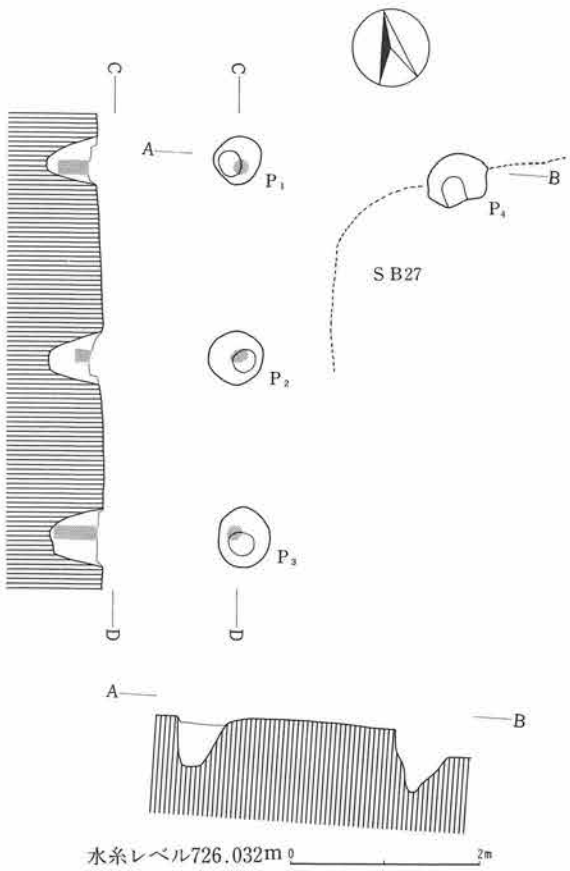
C・D－4グリッドに位置する。第36・66号住居址と重複関係を有し、第36・66号住居址を切って構築されている。

3間×2間の総柱式の掘立柱建物で、東西594cm、南北480cmを測り、平面プランは、長方形を呈する。柱間は、東西125～143cm、南北176～245cmを測る。

南北軸の方位は、N－16°－Eを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

P_1・P_2・P_5～P_7から土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土している。出土土器片中に、「コ」の字状の口辺部を有する土師器甕の破片が認められることおよび重複関係から、本遺構の所産期は、平安時代以降と考えられる。



第273図　第11号掘立柱建物址実測図

11）第11号掘立柱建物址

遺構（第273図）

D－4グリッドに位置する。

第27号住居址と重複関係を有し、第27号住居址を切って構築されている。

2間×2間の側柱式の掘立柱建物と考えられるが、検出されたのは4基のピットである。

東西290cm、南北457cm、柱間は、南北で174～186cmを測る。

南北軸の方位は、N－13°－Eを示す。

ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

出土遺物は皆無である。本遺構の所産期は、重複関係から古墳時代後期後半以降と考えられる。

12）第12号掘立柱建物址

遺構（第274図、図版20）

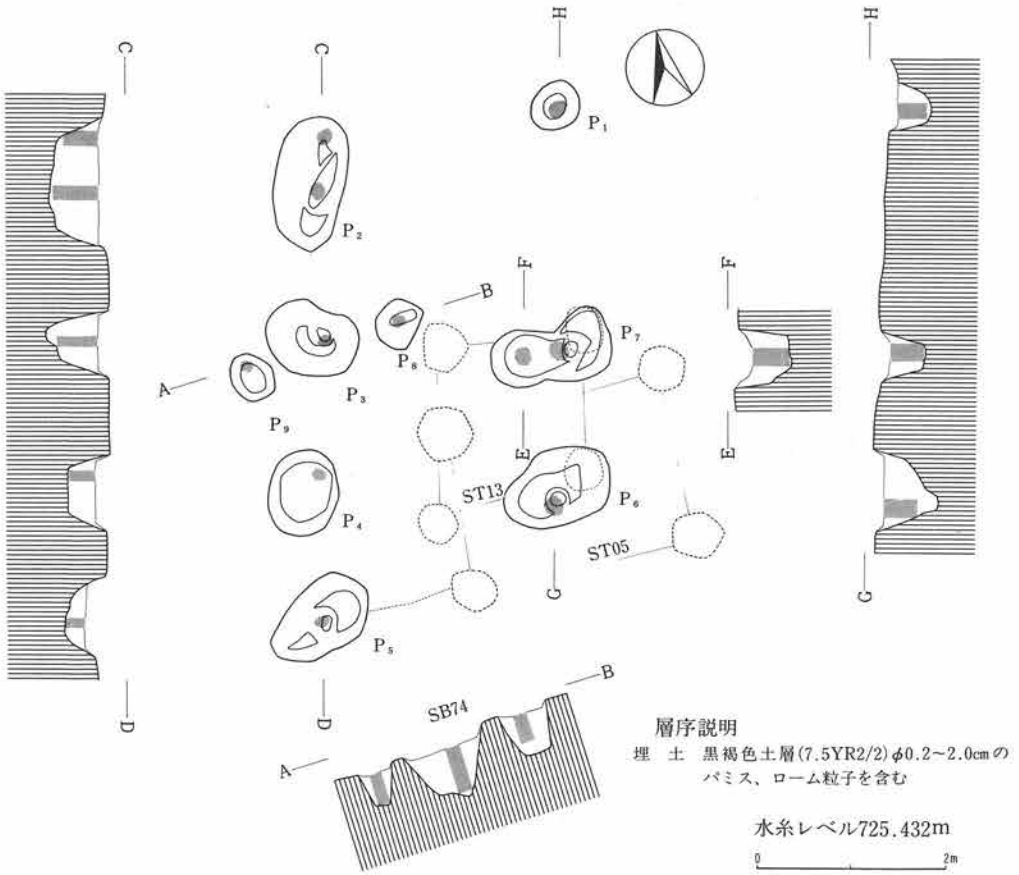
Ｃ－３・４グリッドに位置する。第５号掘立柱建物址と重複関係を有する。

１間×３間の側柱式の掘立柱建物で、東西405cm、南北580cmを測り、平面プランは、長方形を呈する。柱間は、東西230～280cm、南北130～236cmを測る。

南北軸の方位は、Ｎ－14°－Ｅを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形・双円形である。

遺物

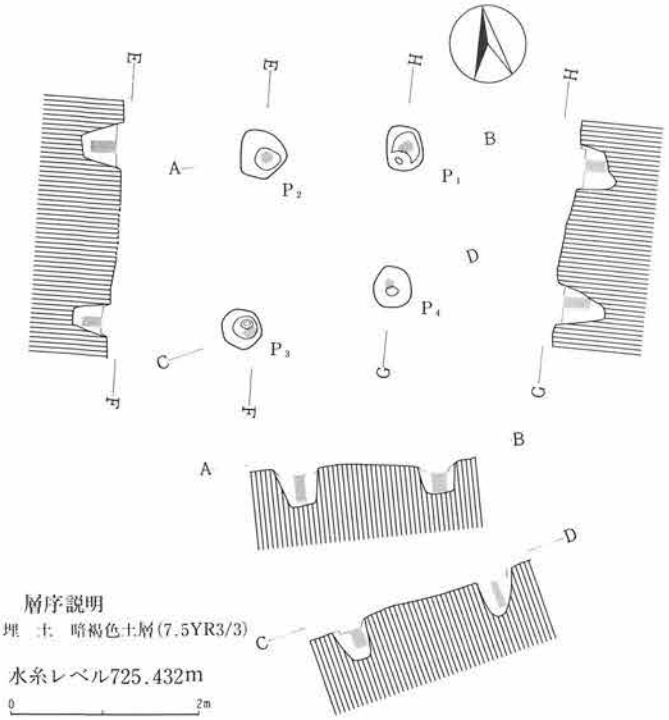
土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土している。本遺構の所産期は、出土土器片および重複関係から奈良時代以降と考えられる。



第274図　第12号掘立柱建物址実測図

13）第13号掘立柱建物址

遺構（第275図、図版20）



第275図　第13号掘立柱建物址実測図

C－3・4グリッドに位置する。

第5号掘立柱建物址と重複関係を有する。

1間×1間の側柱式の掘立柱建物で、東西204cm、南北234cmを測り、平面プランは、梯形を呈する。

柱間は、東西132～144cm、南北134～173cmを測る。

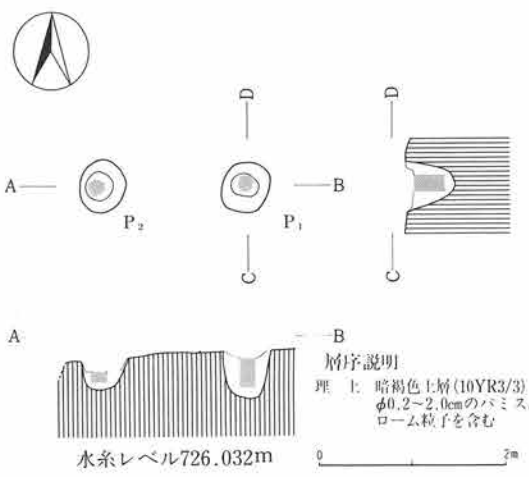
南北軸の方位は、N－15°－Eを示す。

ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土している。出土土器片中に、「コ」の字状に近い口辺部を有する土師器甕の破片が認められることから、本遺構の所産期は、奈良時代後葉以降に比定される。

14）第14号掘立柱建物址



第276図　第14号掘立柱建物址実測図

遺構（第276図）

D－4グリッドに位置する。

2基のピットが検出されたにとどまる。

東西200cm、柱間は、140cmを測る。

南北軸の方位は、N－2°－Wを示す。

ピット掘形の平面プランは、楕円形である。

遺物

土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土している。本遺構の所産期は、出土土器片から奈良時代以降と考えられる。

15）第15号掘立柱建物址

遺構（第277図）

E－4グリッドに位置する。

2基のピットが検出されたにとどまる。

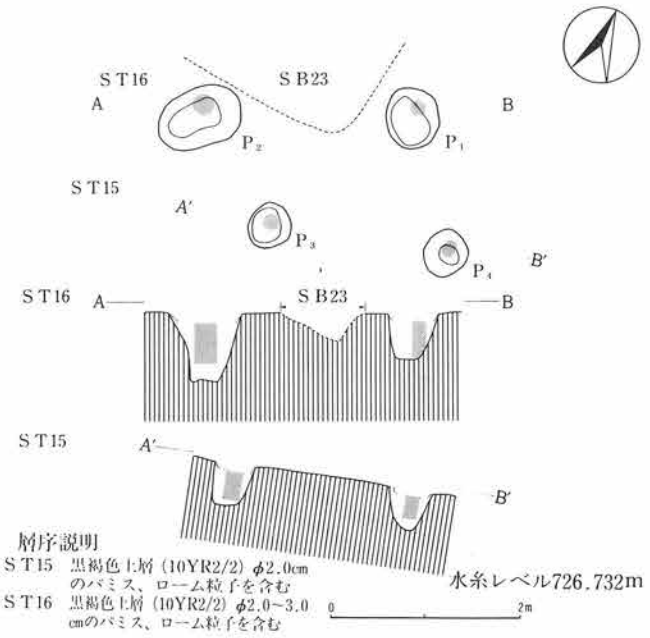
東西233cm、柱間は、173cmを測る。

南北軸の方位は、N－14°－Wを示す。

ピット掘形の平面プランは、楕円形である。

遺物

出土遺物は皆無である。本遺構の所産期は、他遺構との関連から奈良時代以降と考えられる。



第277図　第15・16号掘立柱建物址実測図

16）第16号掘立柱建物址

遺構（第277図）

E－4グリッドに位置する。第23号住居址と重複関係を有する。

2基のピットが検出されたにとどまる。東西293cm、柱間は、206cmを測る。

南北軸の方位は、N－23°－Wを示す。ピット掘形の平面プランは、楕円形である。

遺物

出土遺物は皆無である。本遺構の所産期は、他遺構との関連から、奈良時代以降と考えられる。

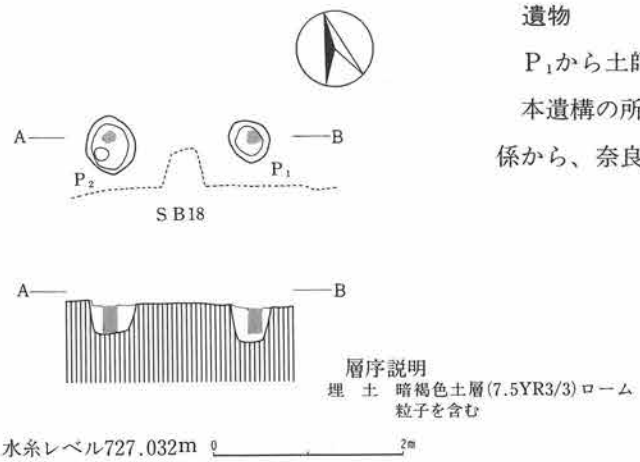
17）第17号掘立柱建物址

遺構（第278図）

E－5グリッドに位置する。第18号住居址と重複関係を有する。

2基のピットが検出されたにとどまる。東西191cm、柱間は、137cmを測る。

南北軸の方位は、N－17°－Eを示す。ピット掘形の平面プランは、楕円形である。



遺物

P_1から土師器片が出土している。

本遺構の所産期は、出土土器片および重複関係から、奈良時代後半以降と考えられる。

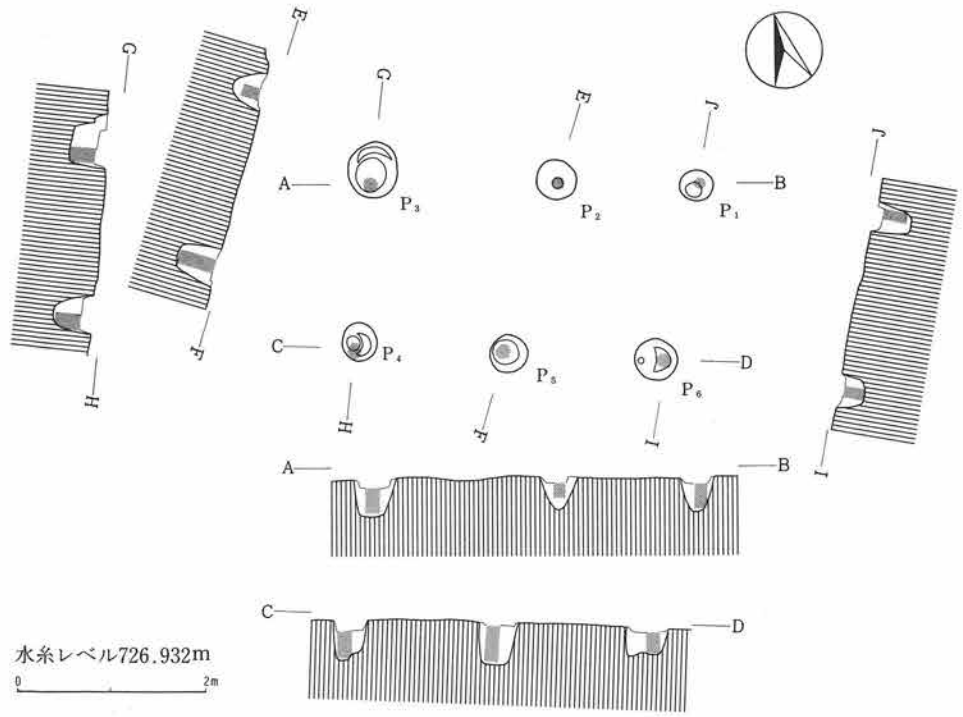
第278図　第17号掘立柱建物址実測図

18）第18号掘立柱建物址

遺構（第279図、図版20）

E－5グリッドに位置する。第20号住居址と重複関係を有する。

2間×1間の側柱式の掘立柱建物で、東西386cm、南北234cmを測り、平面プランは、長方形を呈する。柱間は、東西135～185cm、南北161～179cmを測る。



第279図　第18号掘立柱建物址実測図

南北軸の方位は、N－16°－Eを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

出土遺物は皆無である。本遺構の所産期は、重複関係から古墳時代後期後葉以降と考えられる。

19）第19号掘立柱建物址

遺構（第280図、図版20）

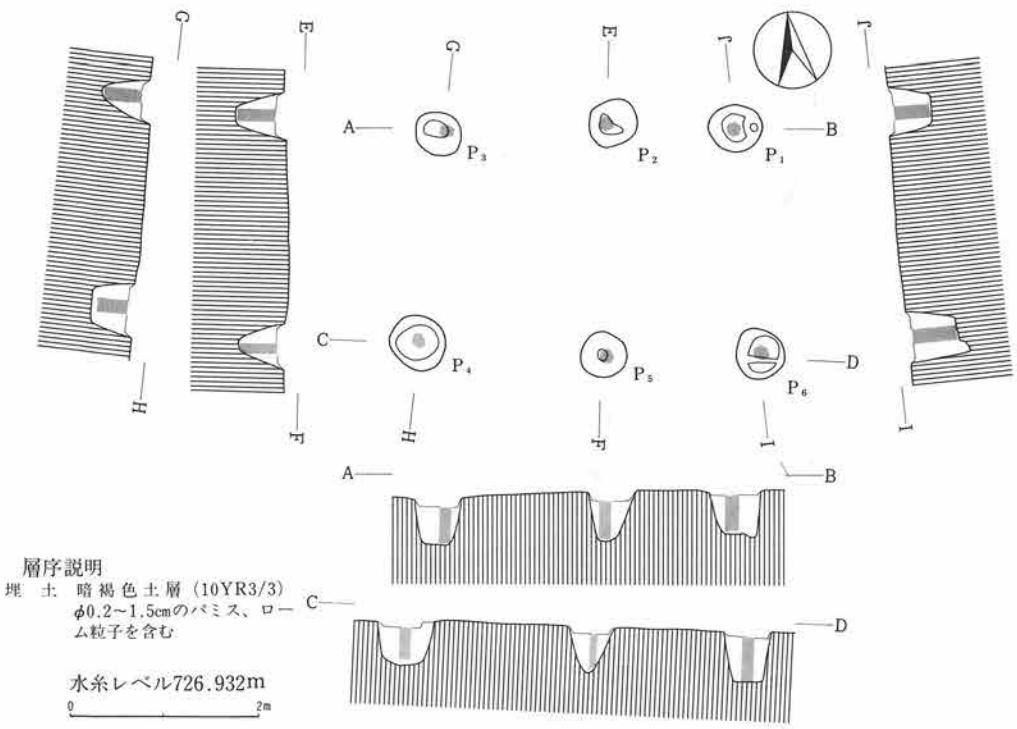
D－5グリッドに位置する。第26号掘立柱建物址と重複関係を有する。

2間×1間の側柱式の掘立柱建物で、東西418cm、南北296cmを測り、平面プランは、長方形を呈する。柱間は、東西120～188cm、南北211～234cmを測る。

南北軸の方位は、N－8°－Eを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

P_1・P_3～P_6から土師器片、黒色土器片が出土している。本遺構の所産期は、出土土器片から平安時代以降と考えられる。



第280図　第19号掘立柱建物址実測図

20）第20号掘立柱建物址

遺構（第281図、図版20）

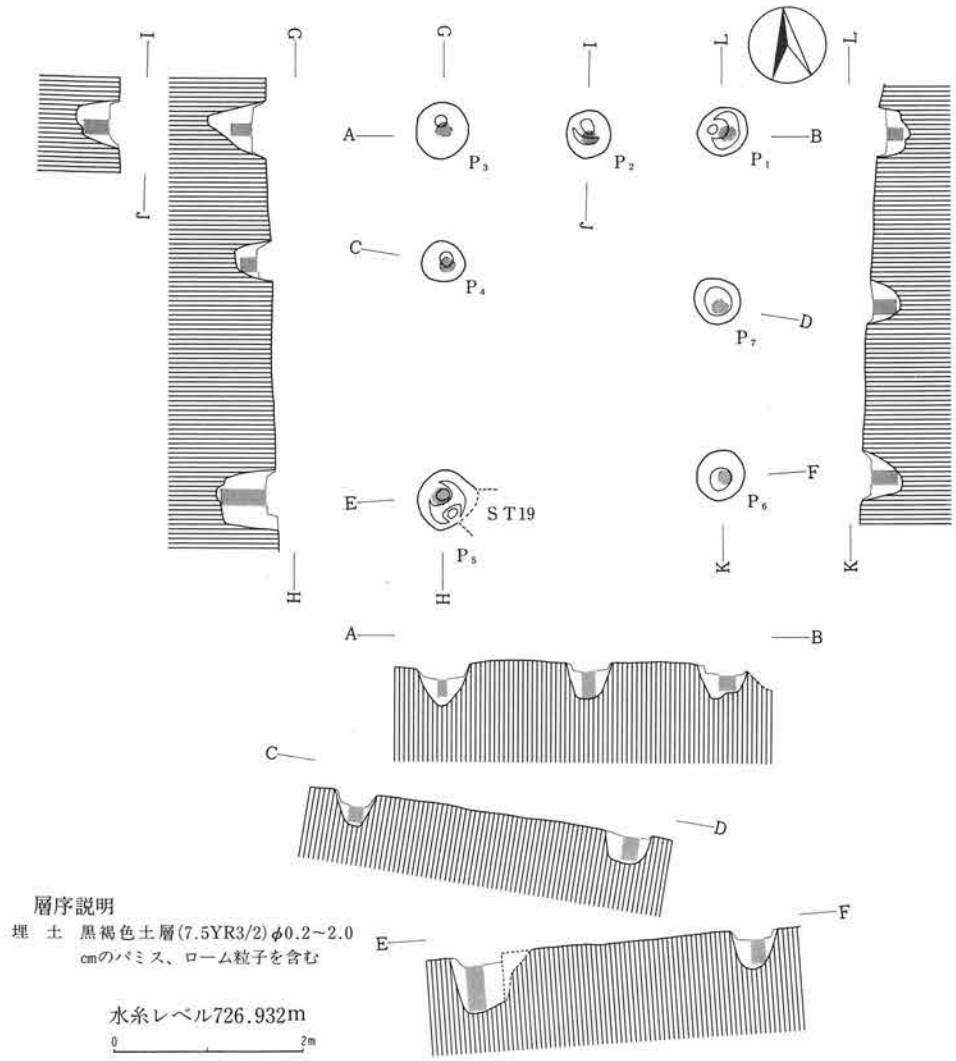
D－5グリッドに位置する。第21・24号掘立柱建物址と重複関係を有する。

2間×2間の側柱式の掘立柱建物で、東西351cm、南北455cmを測り、平面プランは、長方形を呈する。柱間は、東西129～284cm、南北129～228cmを測る。

南北軸の方位は、N－7°－Eを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

P_1・P_2・P_4・P_5から土師器片、須恵器片が出土している。本遺構の所産期は、出土土器片から平安時代以降と考えられる。



第281図　第20号掘立柱建物址実測図

21）第21号掘立柱建物址

遺構（第282図）

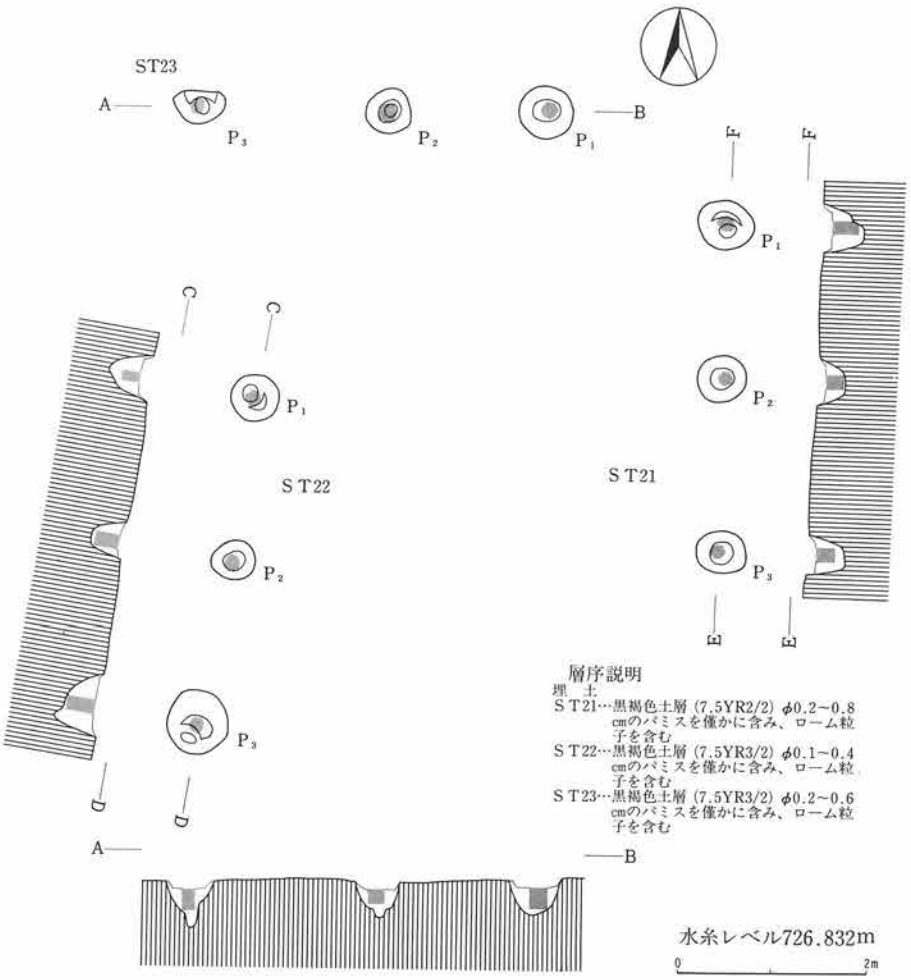
D－4・5グリッドに位置する。第20号掘立柱建物址と重複関係を有する。3基のピットが検出されたにとどまる。南北395cm、柱間は、150～170cmを測る。南北軸の方位は、N－1°－Eを示す。

ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物（第359図、図版70）

3基のピットから土師器片、黒色土器片が出土している。図示したものに、土師器甕底部がある。

本遺構の所産期は、出土土器片から奈良時代以降と考えられる。



第282図　第21～23号掘立柱建物址実測図

22）第22号掘立柱建物址

遺構（第282図）

D－5グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

3基のピットが検出されたにとどまる。南北408cm、柱間は、158～161cmを測る。

南北軸の方位は、N－8°－Eを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

P_2・P_3から土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土している。本遺構の所産期は、出土土器片

から奈良時代以降と考えられる。

23）第23号掘立柱建物址

遺構（第282図）

D－4グリッドに位置する。第38号住居址と重複関係を有し、第38号住居址を切っている。

3基のピットが検出されたにとどまる。南北420cm、柱間は、153～184cmを測る。

南北軸の方位は、N－1°－Wを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

P_2から土師器片、須恵器片が出土している。本住居址の所産期は、出土土器片および重複関係から古墳時代後期後葉以降と考えられる。

24）第24号掘立柱建物址

遺構（第283図）

D－4・5、E－4グリッドに位置する。第40号住居址と重複関係を有する。

2間×2間の側柱式の掘立柱建物と考えられるが、検出されたのは5基のピットである。

東西372cm、南北370cm、柱間は、東西160～134cm、南北138～141cmを測る。

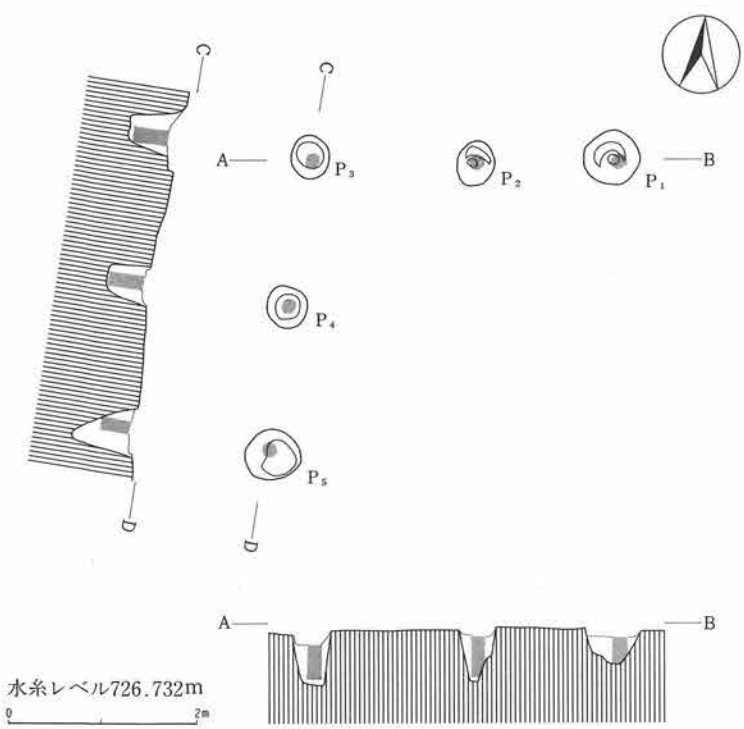
南北軸の方位は、N－4°－Eを示す。

ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

P_1・P_4・P_5から土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土している。

本遺構の所産期は、出土土器片中に底部ヘラキリ未調整の須恵器杯が認められることおよび重複関係から奈良時代以降と考えられる。



第283図　第24号掘立柱建物址実測図

25）第25号掘立柱建物址

遺構（第284図）

D・E－5グリッドに位置する。

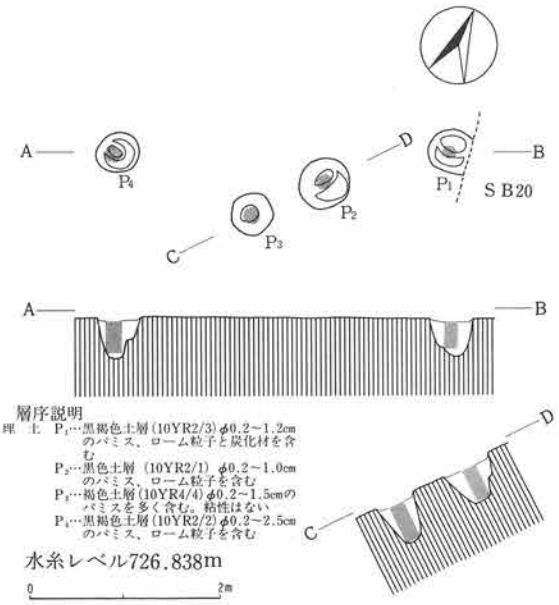
第20号住居址と重複関係を有する。

東西395cm、南北132cmを測る。4基のピットが検出された。2棟が重複している可能性が強いが、ここでは、一応、1棟として扱う。

柱間は、東西339cm、南北70cmを測る。

南北軸の方位は、N－23°－Wを示す。

ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。



第284図　第25号掘立柱建物址実測図

遺物

土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土している。

本遺構の所産期は、P_1から「コ」の字形を呈する土師器甕の破片が認められることおよび重複関係から平安時代以降と考えられる。

26）第26号掘立柱建物址

遺構（第285図）

D－5グリッドに位置する。第19号掘立柱建物址と重複関係を有し、第19号掘立柱建物址によって切られている。

東西277cm、南北614cmを測る。5基のピットが検出された。

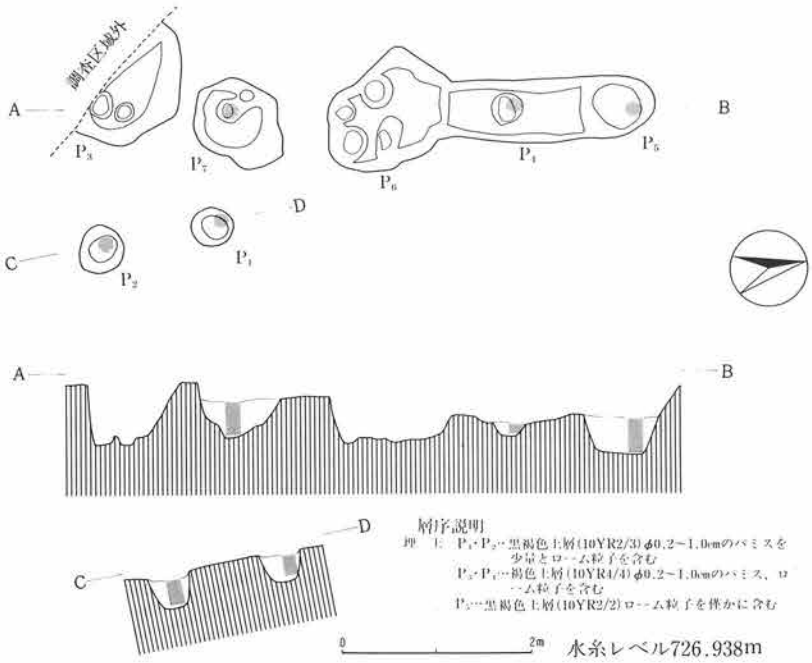
柱間は、東西102～124cm、南北95～109cmを測る。南北軸の方位は、N－10°－Eを示す。

ピット掘形の平面プランは、円形・不整形のほか、溝持ちのものが認められた。

遺物

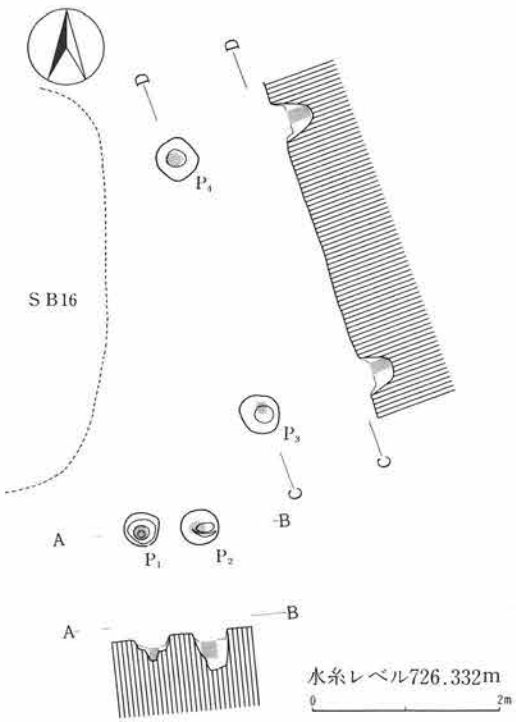
P_1～P_4から土師器片、黒色土器片が出土している。P_1では、畿内系暗文を有する土師器杯の破片が認められた。

本遺構の所産期は、出土土器片中に底部糸切り未調整の黒色土器杯の破片が認められることおよび重複関係から平安時代以降と考えられる。



第285図　第26号掘立柱建物址実測図

27）第27号掘立柱建物址



第286図　第27号掘立柱建物址実測図

遺構（第286図）

E－4グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

東西98cm、南北329cm、柱間は、東西43cm、南北265cmを測る。

南北軸の方位は、N－18°－Wを示す。

ピット掘形のプランは、円形・楕円形である。

遺物

P_2から土師器片が出土している。

本遺構の所産期は、出土土器片から古墳時代後期以降と考えられる。

層序説明
埋　土　P_1…黒褐色土層(10YR3/2)φ0.2～0.5cmのパミス、ローム粒子を含む
P_2…黒褐色土層(10YR3/1)φ0.2～0.5cmのパミス、ローム粒子を含む
P_3…黒色土層(7.5YR2/1)φ0.2～0.4cmのパミスを僅かに含む
P_4…暗褐色土層(10YR3/3)φ0.2～1.0cmのパミス、ローム粒子を含む

28）第28号掘立柱建物址

遺構（第287図）

D－4・5、E－4グリッドに位置する。第20・21・23・24号掘立柱建物址と重複関係を有する。

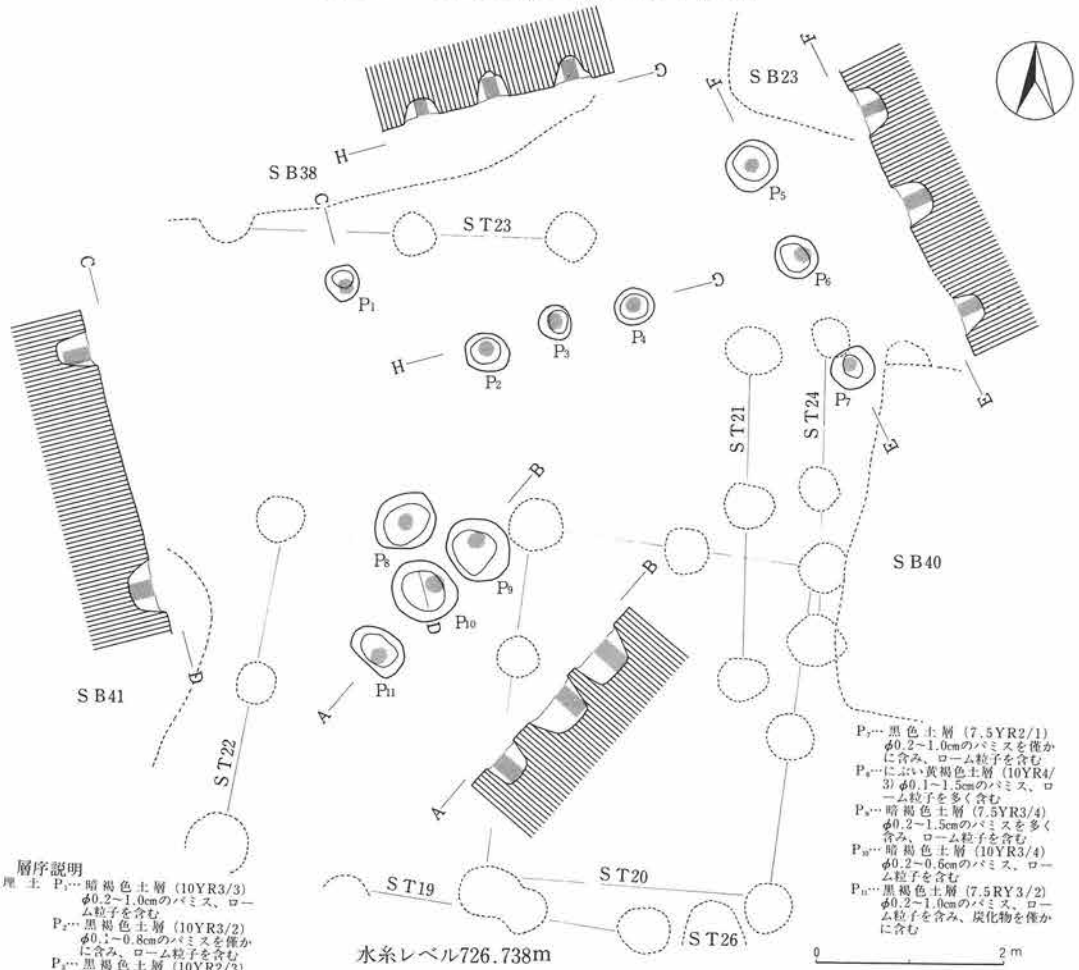
東西630cm、南北441cmを測る。11基のピットが検出された。数棟が重複している可能性が強いが、ここでは、一応、1棟として扱う。柱間は、東西60～431cm、南北54～241cmを測る。

南北軸の方位は、N－26°－Wを示す。

ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

P_1・P_8・P_{10}から土師器片、黒色土器片、須恵器片のほか、獣骨が出土している。本遺構の所産期は、出土土器片および重複関係から奈良時代以降と考えられる。



第287図　第28号掘立柱建物址実測図

29）第29号掘立柱建物址

遺構（第288図）

D・E－4・5グリッドに位置する。第20・40号住居址、第15・16・24号掘立柱建物址と重複関係を有する。

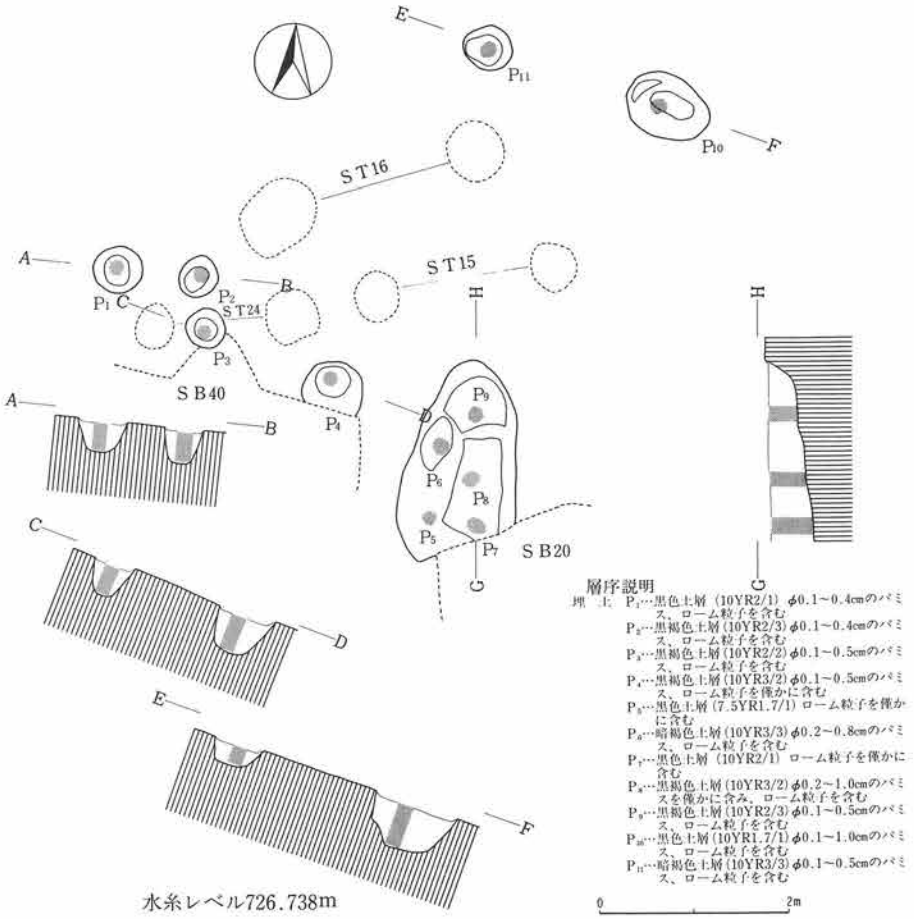
東西524cm、南北583cmを測る。7基のピットが検出された。数棟が重複している可能性が強いが、ここでは、一応、1棟として扱う。柱間は、東西32～172cm、南北33～364cmを測る。

南北軸の方位は、N－1°－Wを示す。

ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形のほか、布掘りに近いものがある。

遺物

土師器片、黒色土器片、須恵器片のほか、P_{10}から炭化材が出土しており、炭化材については後述する。本遺構の所産期は、出土土器片中に底部ヘラキリ未調整の須恵器杯底部破片が認められることおよび重複関係から奈良時代後葉以降と考えられる。



第288図　第29号掘立柱建物址実測図

30）第30号掘立柱建物址

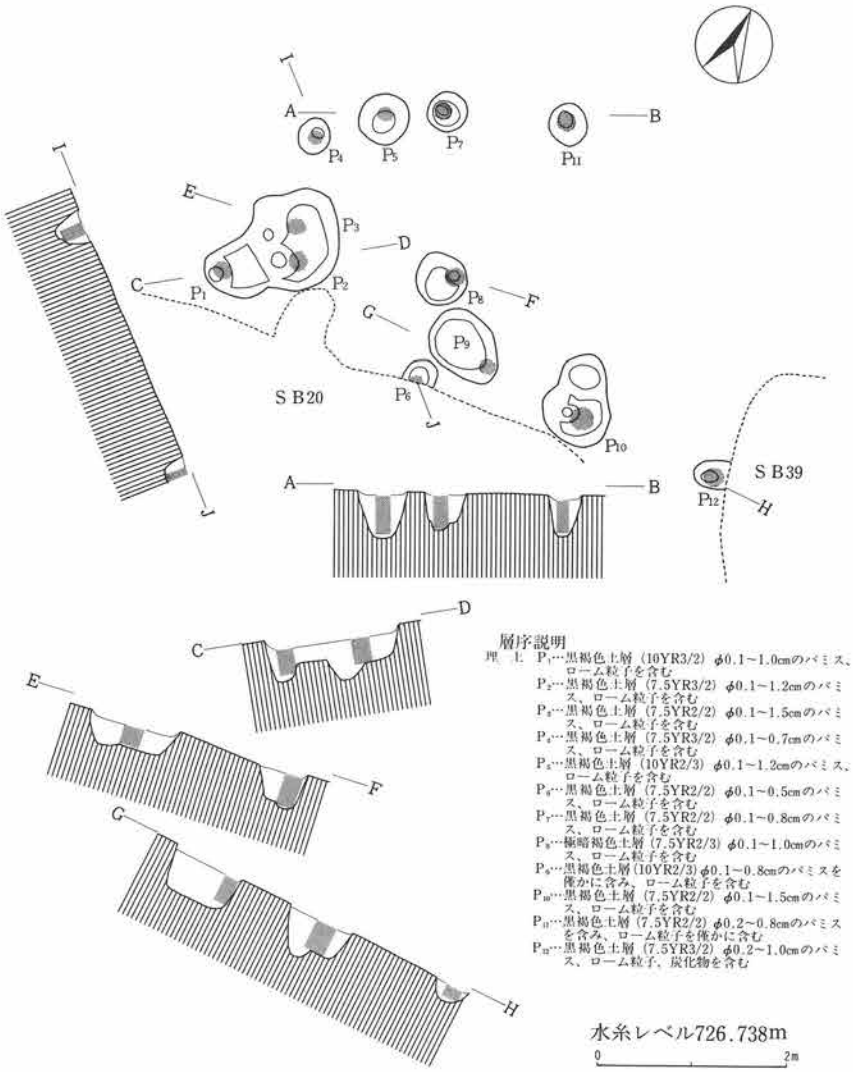
遺構（第289図）

Ｅ－４・５グリッドに位置する。第20・39号住居址と重複関係を有する。

東西600cm、南北368cmを測る。10基のピットが検出された。数棟が重複している可能性が強いが、ここでは、一応、１棟として扱う。柱間は、東西44～155cm、南北18～294cmを測る。

南北軸の方位は、Ｎ－28.5°－Ｗを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形・双円形である。

遺物（第377図、図版86）



第289図　第30号掘立柱建物址実測図

P_3・P_{10}・P_{11}から土師器片、須恵器片が、P_3から砂岩製の打製石斧が出土している。本遺構の所産期は、出土土器片中に「コ」の字形を呈する土師器甕の口辺部破片が認められることおよび重複関係から平安時代以降と考えられる。

31）第31号掘立柱建物址

遺構（第290図、図版20）

C－3グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

東西620cm、南北660cmを測る。18基のピットが検出された。数棟が重複している可能性が強いが、ここでは、一応、1棟として扱う。2間×2間あるいは3間×2間の側柱式の掘立柱建物が基本となるかもしれない。

柱間は、東西65～175cm、南北60～272cmを測る。南北軸の方位は、N－10°－Eを示す。

ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

P_2～P_4・P_6～P_9・P_{12}・P_{17}・P_{18}から土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土している。

本遺構の所産期は、奈良時代以降と考えられる。

32）第32号掘立柱建物址

遺構（第291図、図版20）

C－3グリッドに位置する。第37号掘立柱建物址と重複関係を有し、第37号掘立柱建物址を切って構築されている。

2間×2間の総柱式の掘立柱建物と考えられ、東西526cm、南北368cmを測り、平面プランは、長方形を呈する。柱間は、東西192～237cm、南北120～128cmを測る。

南北軸の方位は、N－6°－Eを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形・不整形である。

遺物

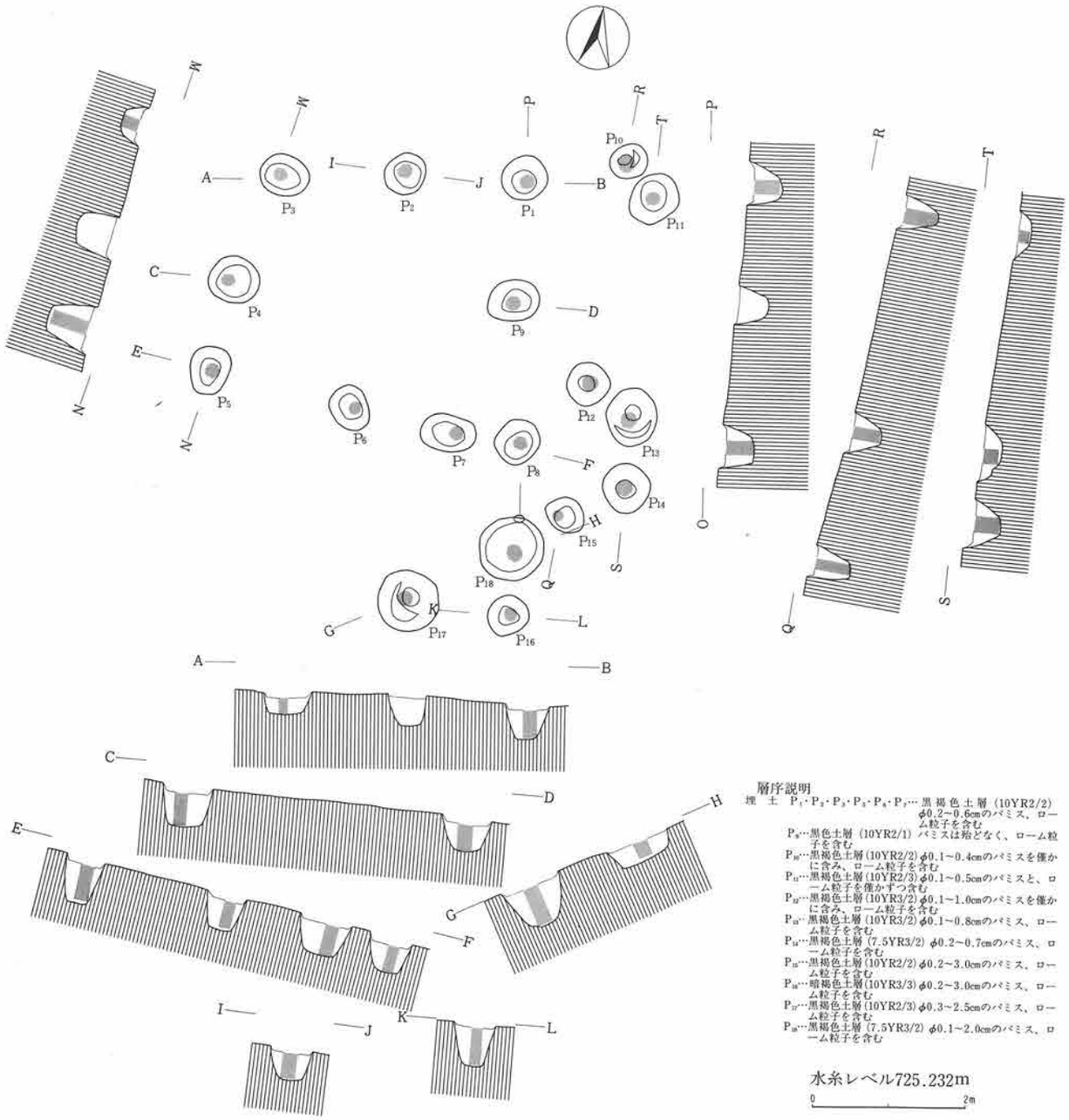
P_2・P_3・P_7から土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土している。本遺構の所産期は、出土土器片から奈良時代以降と考えられる。

33）第33号掘立柱建物址

遺構（第292図）

D・E－4グリッドに位置する。第21・23・25号住居址と重複関係を有する。

東西651cm、南北256cmを測る。7基のピットが検出された。数棟が重複している可能性が強い



層序説明

埋　土　P_1・P_2・P_3・P_5・P_6・P_7…黒褐色土層（10YR2/2）ϕ0.2～0.6cmのパミス、ローム粒子を含む

P_4…黒色土層（10YR2/1）パミスは殆どなく、ローム粒子を含む

P_{10}…黒褐色土層（10YR2/2）ϕ0.1～0.4cmのパミスを僅かに含み、ローム粒子を含む

P_{11}…黒褐色土層（10YR2/3）ϕ0.1～0.5cmのパミスと、ローム粒子を僅かずつ含む

P_{12}…黒褐色土層（10YR3/2）ϕ0.1～1.0cmのパミスを僅かに含み、ローム粒子を含む

P_{13}…黒褐色土層（10YR3/2）ϕ0.1～0.8cmのパミス、ローム粒子を含む

P_{14}…黒褐色土層（7.5YR3/2）ϕ0.2～0.7cmのパミス、ローム粒子を含む

P_{15}…黒褐色土層（10YR2/2）ϕ0.2～3.0cmのパミス、ローム粒子を含む

P_{16}…暗褐色土層（10YR3/3）ϕ0.2～3.0cmのパミス、ローム粒子を含む

P_{17}…黒褐色土層（10YR2/3）ϕ0.3～2.5cmのパミス、ローム粒子を含む

P_{18}…黒褐色土層（7.5YR3/2）ϕ0.1～2.0cmのパミス、ローム粒子を含む

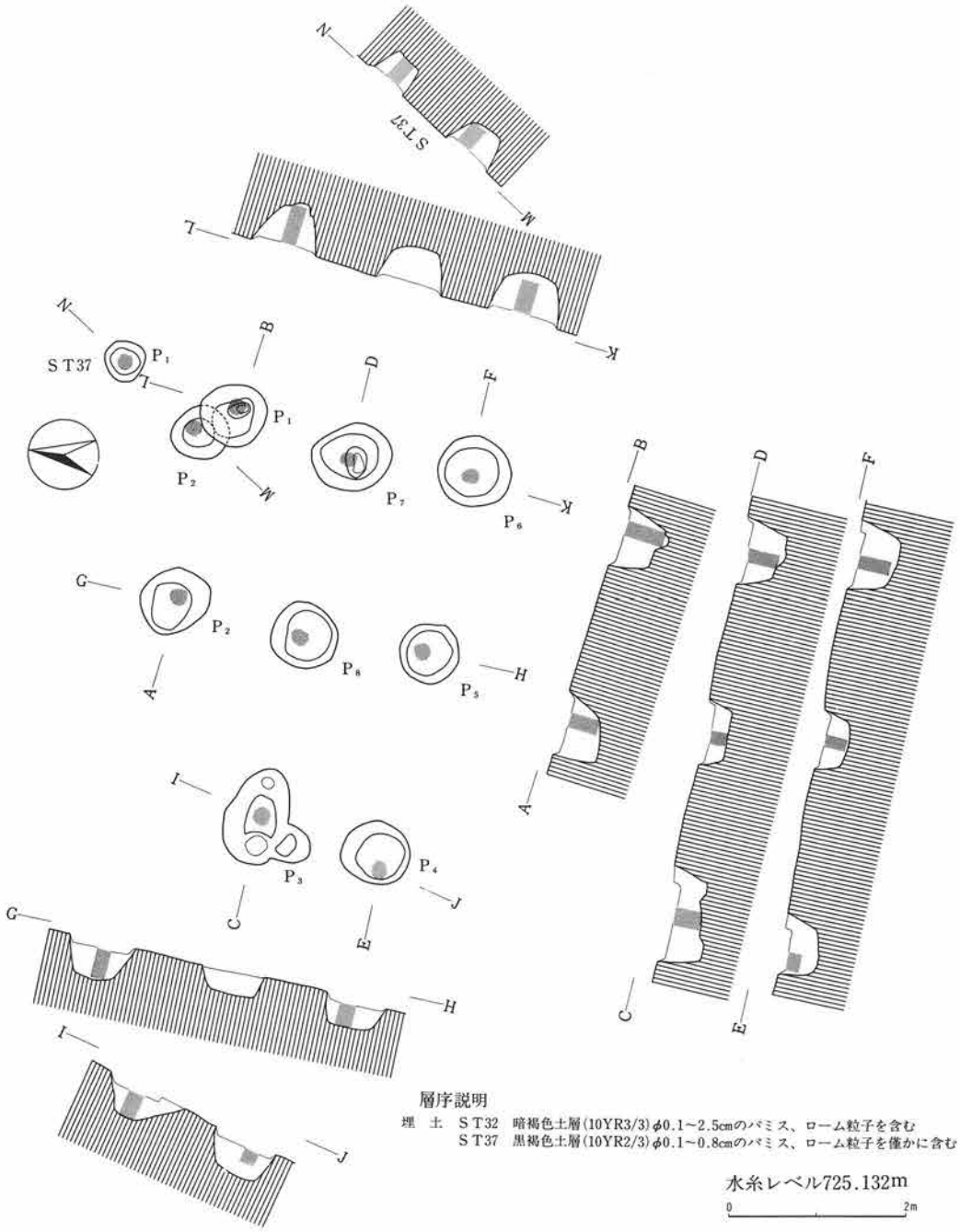
水糸レベル725.232m

0　2m

第290図　第31号掘立柱建物址実測図

が、ここでは、一応、１棟として扱う。柱間は、東西67～221cm、南北72～163cmを測る。

南北軸の方位は、Ｎ－２°－Ｗを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形のほか、溝持ちのものも認められた。



第291図　第32・37号掘立柱建物址実測図

遺物

P_1～P_4・P_6・P_8から土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土している。土師器片には、畿内系暗文を有する杯の破片も認められた。本遺構の所産期は、出土土器片および重複関係から奈良時代後半以降と考えられる。

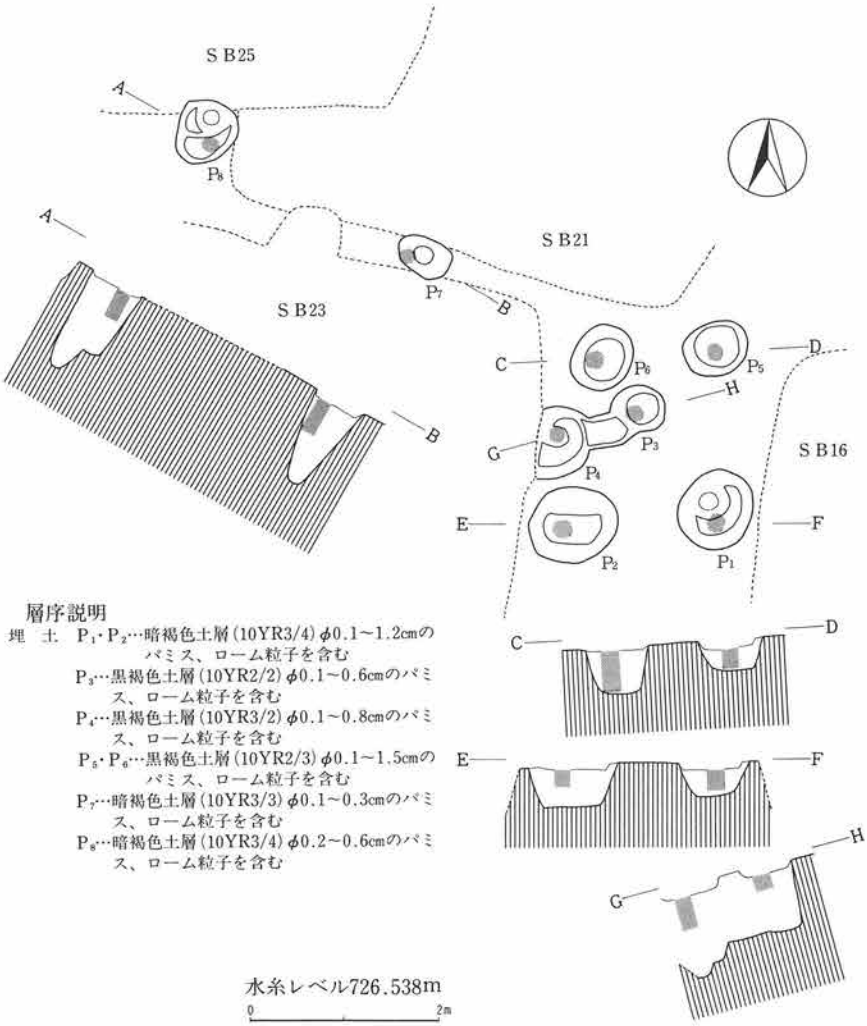
34）第34号掘立柱建物址

遺構（第293図）

D－4グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

東西1064cm、南北675cmを測る。11基のピットが検出された。数棟が重複している可能性が強いが、ここでは、一応、1棟として扱う。柱間は、東西102～344cm、南北83～572cmを測る。

南北軸の方位は、N－29°－Eを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。



第292図　第33号掘立柱建物址実測図

遺物

P_1・P_2・P_{11}から土師器片、須恵器片が出土している。本遺構の所産期は、出土土器片から奈良時代以降と考えられる。

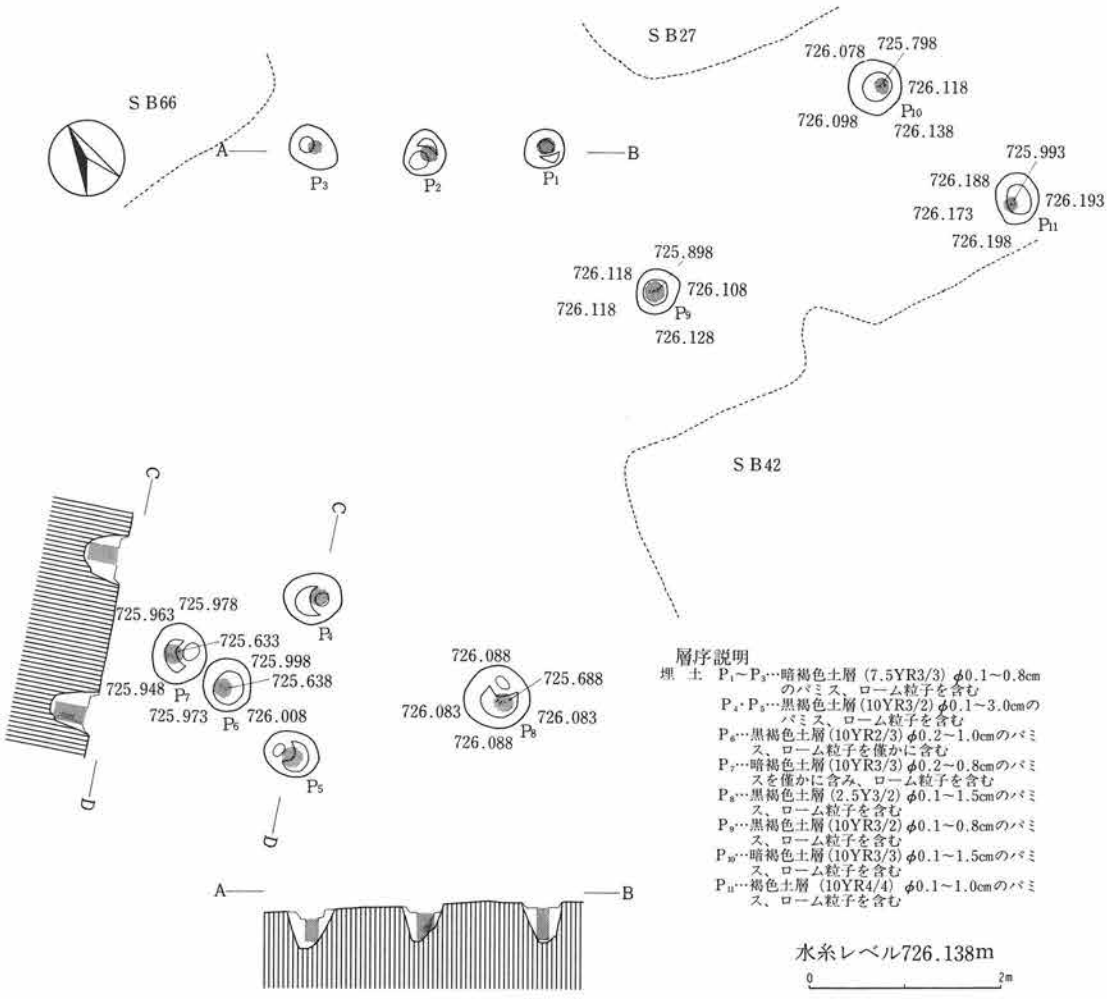
35）第35号掘立柱建物址

遺構（第294図）

D－4グリッドに位置する。第27号住居址、第36号掘立柱建物址と重複関係を有し、第27号住居址、第36号掘立柱建物址を切って構築されている。

2間×2間あるいは1間×2間の掘立柱建物と考えられるが、明確でない。東西228cm、南北551cm、柱間は、東西154～177cm、南北203～256cmを測る。

南北軸の方位は、N－33°－Wを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。



第293図　第34号掘立柱建物址実測図

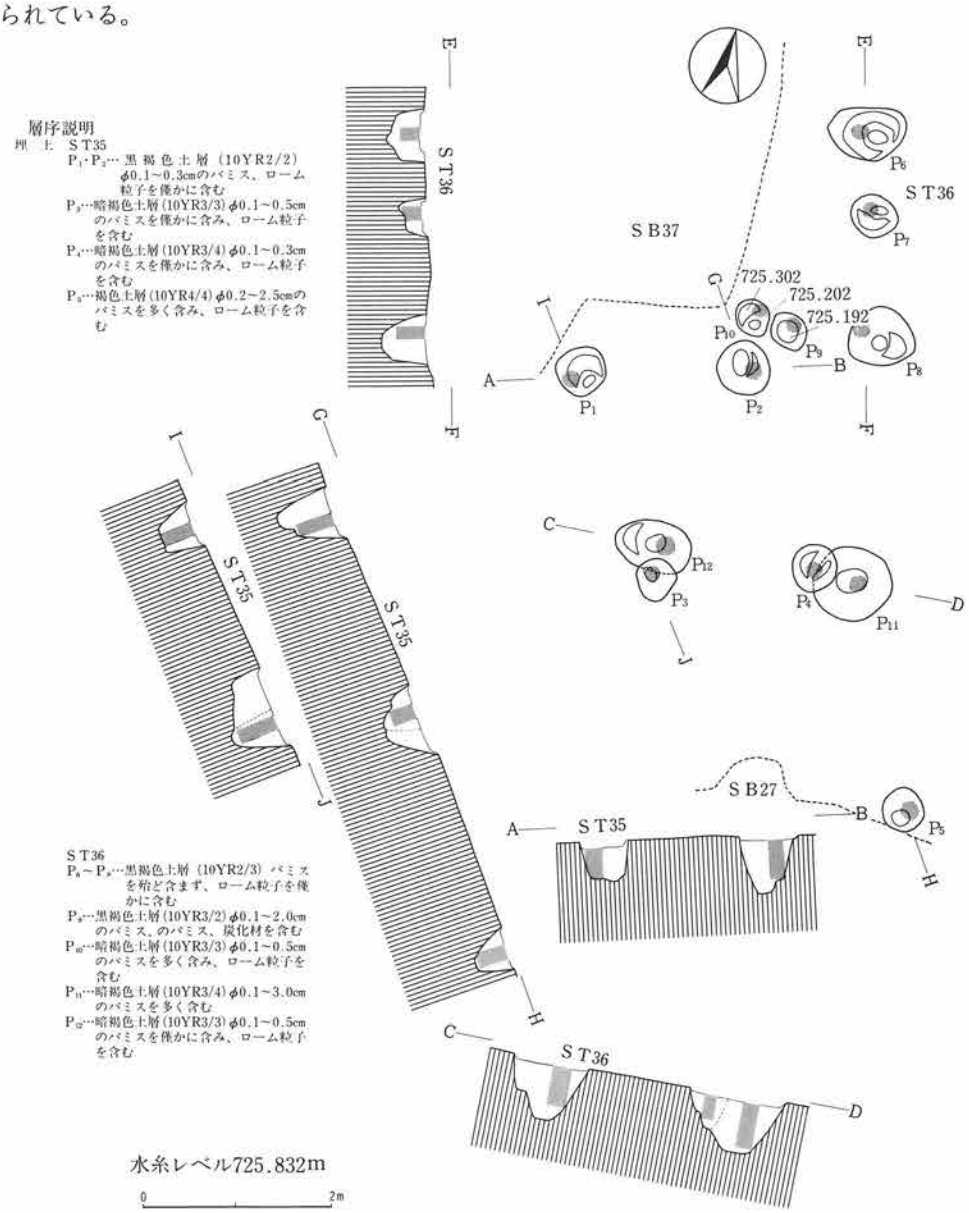
遺物

P_2・P_3・P_5から土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土している。本遺構の所産期は、出土土器片および重複関係から奈良時代以降と考えられる。

36）第36号掘立柱建物址

遺構（第294図）

D－3・4グリッドに位置する。第35号掘立柱建物址と重複関係を有し、第35号掘立柱建物址に切られている。



第294図　第35・36号掘立柱建物址実測図

東西190cm、南北275cmを測る。７基のピットが検出されたが、P_9・P_{10}については本址に伴うものか明確でない。柱間は、東西23～54cm、南北67～112cmを測る。

南北軸の方位は、N－13.5°－Wである。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

P_7・P_9～P_{11}から土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土している。本遺構の所産期は、出土土器片および重複関係から奈良時代以降と考えられる。

37）第37号掘立柱建物址

遺構（第291図）

C－３グリッドに位置する。第32号掘立柱建物址と重複関係を有し、第32号掘立柱建物址に切られている。

２基のピットが検出されたにとどまる。南北200cm、柱間は、120cmを測る。

南北軸の方位は、N－17°－Eを示す。ピット掘形の平面プランは、円形を呈する。

遺物

出土遺物は皆無である。本遺構の所産期は、重複関係から奈良時代以前と考えられる。

38）第38号掘立柱建物址

遺構（第295図、図版21）

B－２グリッドに位置する。第81号住居址と重複関係を有し、第81号住居址を切って構築されている。

２間×２間の側柱式の掘立柱建物と考えられるが、P_8～P_{10}も、ここに含めた。

東西381cm、南北345cmを測り、平面プランは、長方形を呈する。

柱間は、東西103～145cm、南北102～244cmを測る。南北軸の方位は、N－13°－Eを示す。

ピット掘形の平面プランは、楕円形のほか、溝持ちのものが認められた。

遺物

P_5・P_6から土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土している。本遺構の所産期は、出土土器片および重複関係から奈良時代以降と考えられる。

39）第39号掘立柱建物址

遺構（第296図、図版21）

B－２グリッドに位置する。第40・86号掘立柱建物址と重複関係を有し、第40号掘立柱建物址

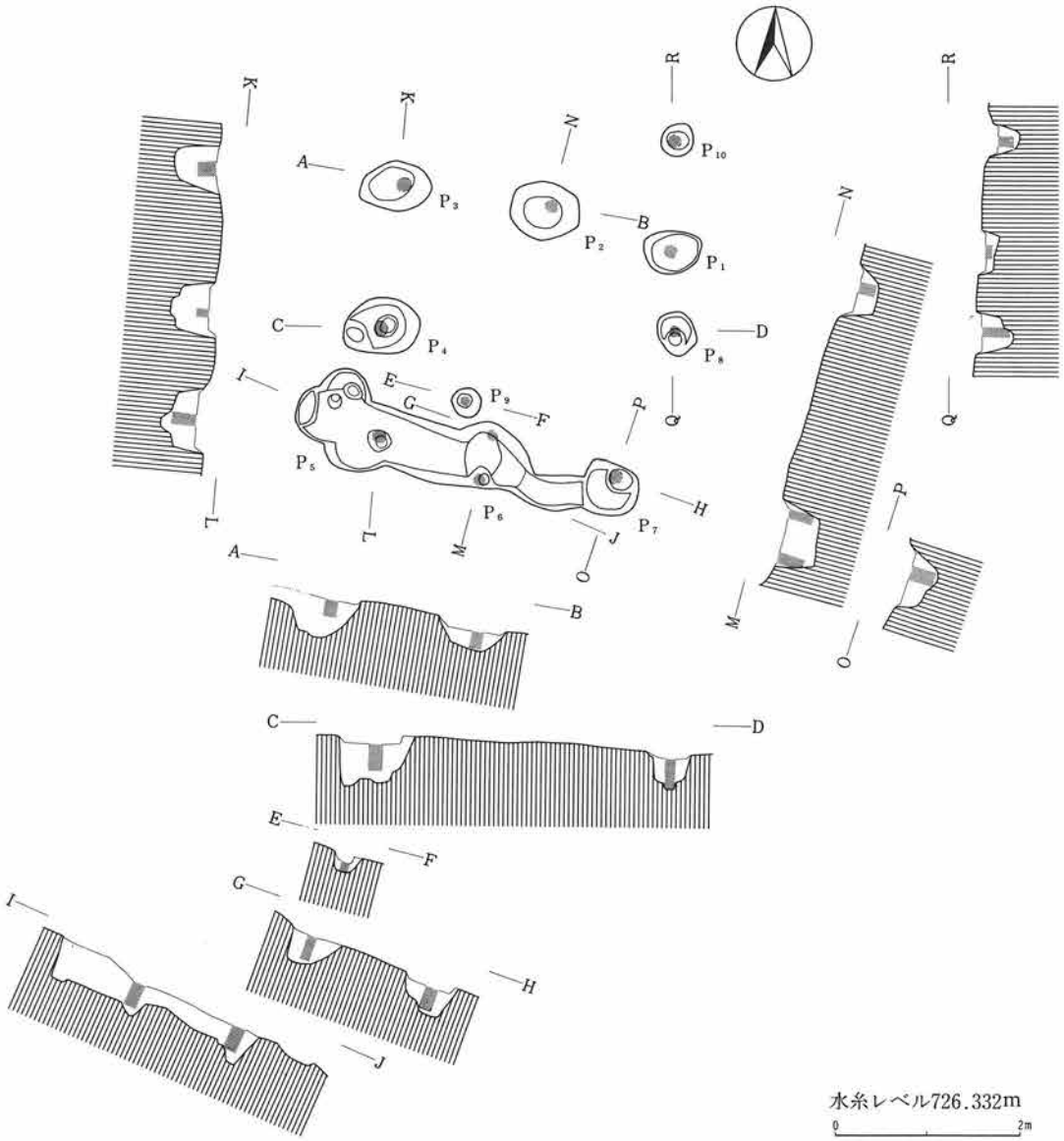
を切り、第86号掘立柱建物址に切られている。

2間あるいは1間×1間の側柱式の掘立柱建物で、東西208cm、南北205cmを測り、平面プランは、正方形を呈する。柱間は、東西53～144cm、南北120～148cmを測る。

南北軸の方位は、N－9°－Eを示す。ピット掘形の平面プランは、円形である。

遺物（第376図、図版85）

P_2・P_4から土師器片、黒色土器片、須恵器片、黒曜石製の石鏃が出土している。本遺構の所産



第295図　第38号掘立柱建物址実測図

期は、出土土器片および重複関係から奈良時代以降と考えられる。

40）第40号掘立柱建物址

遺構（第296図）

B－2グリッドに位置する。

第39号掘立柱建物址と重複関係を有し、第39号掘立柱建物址に切られている。

1間×1間の側柱式の掘立柱建物で、東西110cm、南北173cmを測り、平面プランは、梯形を呈する。

柱間は、東西50～58cm、南北84～119cmを測る。

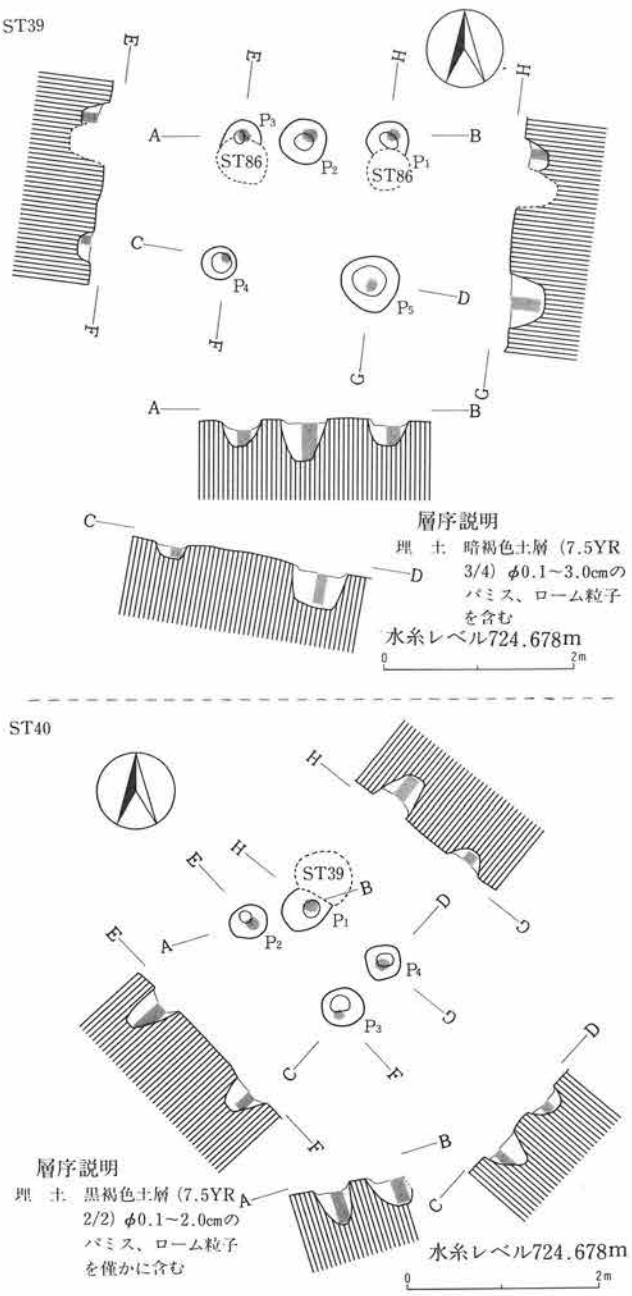
南北軸の方位は、N－42.5°－Wを示す。

ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

出土遺物は皆無である。

本遺構の所産期は、重複関係から奈良時代以前と考えられる。



第296図　第39・40号掘立柱建物址実測図

41）第41号掘立柱建物址

遺構（第297図）

B－2グリッドに位置する。

他遺構との重複関係はない。

3基のピットが検出されたにとどまる。東西365cm、柱間は、137～161cmを測る。南北軸の方位は、N－2°－Eを示す。

ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土している。本遺構の所産期は、出土土器片から平安時

代以降と考えられる。

42）第42号掘立柱建物址

遺構（第297図）

Ｂ－２グリッドに位置する。第88号住居址と重複関係を有し、第88号住居址を切って構築されている。東西430cm、柱間は、93～132cmを測る。南北軸の方位は、Ｎ－35°－Ｅを示す。

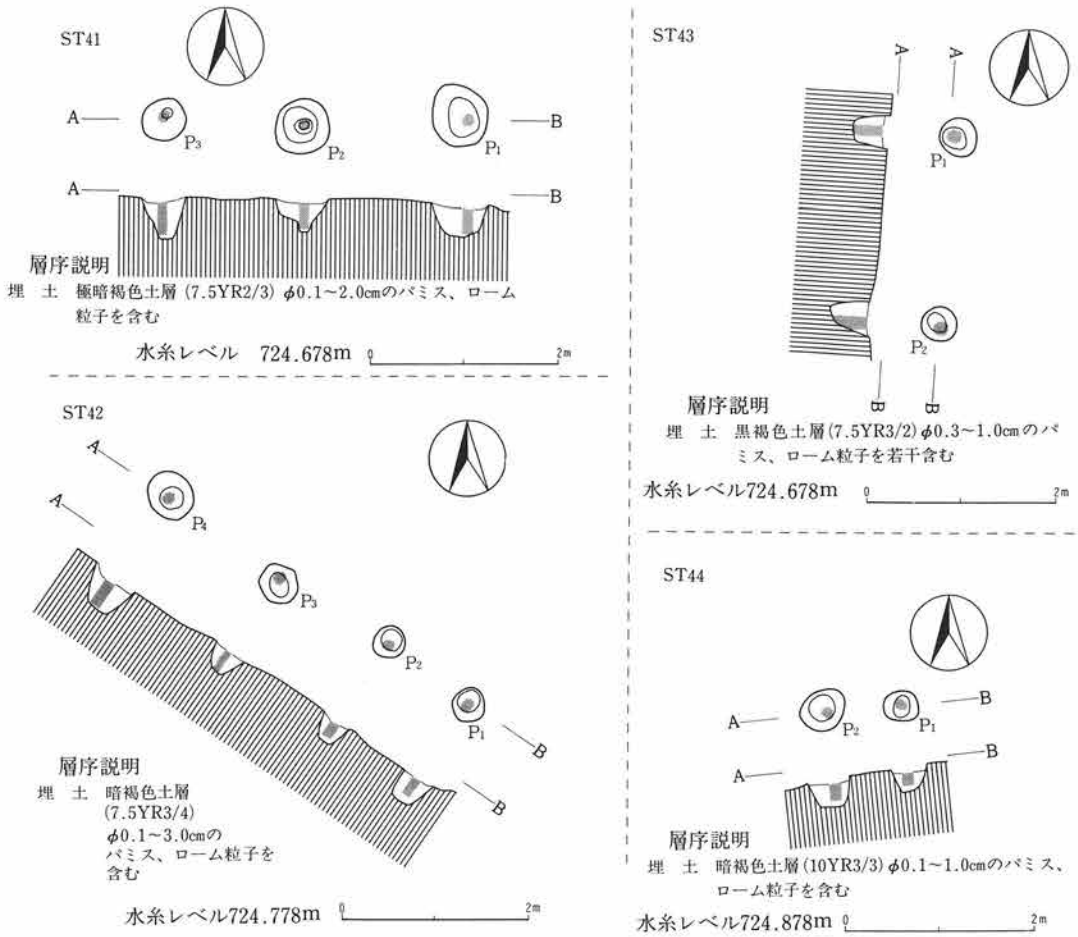
ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

出土遺物は皆無である。本遺構の所産期は、重複関係から平安時代以降と考えられる。

43）第43号掘立柱建物址

遺構（第297図）



第297図　第41～44号掘立柱建物址実測図

Ｂ－２グリッドに位置する。第87号住居址と重複関係を有し、第87号住居址を切って構築されている。東西237cm、柱間は、188cmを測る。

南北軸の方位は、Ｎ－４°－Ｅを示す。ピット掘形の平面プランは、楕円形である。

遺物

出土遺物は皆無である。本遺構の所産期は、重複関係から奈良時代以降と考えられる。

44）第44号掘立柱建物址

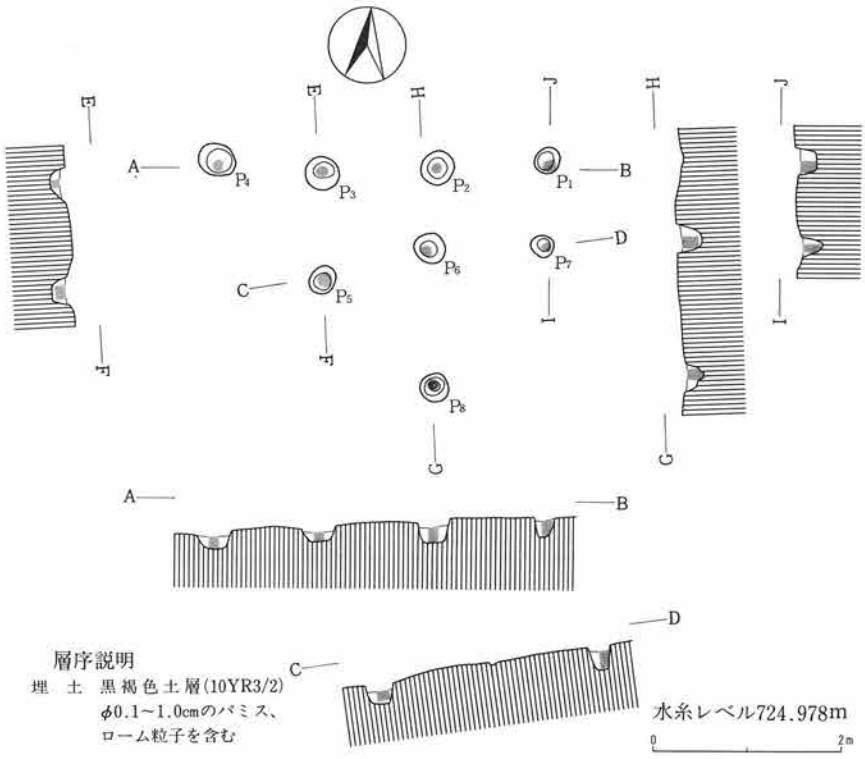
遺構（第297図）

Ｃ－２グリッドに位置する。第90号住居址と重複関係を有し、第90号住居址を切って構築されている。東西126cm、柱間は、66cmを測る。

南北軸の方位は、Ｎ－６°－Ｗを示す。ピット掘形の平面プランは、楕円形である。

遺物

P_1から黒色土器片、須恵器片が出土している。本遺構の所産期は、出土土器片および重複関係から奈良時代以降と考えられる。



第298図　第45号掘立柱建物址実測図

45）第45号掘立柱建物址

遺構（第298図、図版21）

Ｃ－２グリッドに位置する。第90号住居址と重複関係を有し、第90号住居址を切って構築されている。３間×２間の総柱式の掘立柱建物と考えられるが、８基のピットが検出されたにとどまる。東西381cm、南北267cm、柱間は、東西97～114cm、南北75～129cmを測る。

南北軸の方位は、Ｎ－5.5°－Ｗを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

P_1から須恵器片が出土している。

本遺構の所産期は、出土土器片および重複関係から平安時代以降と考えられる。

46）第46号掘立柱建物址

遺構（第299図）

Ｃ－３グリッドに位置する。

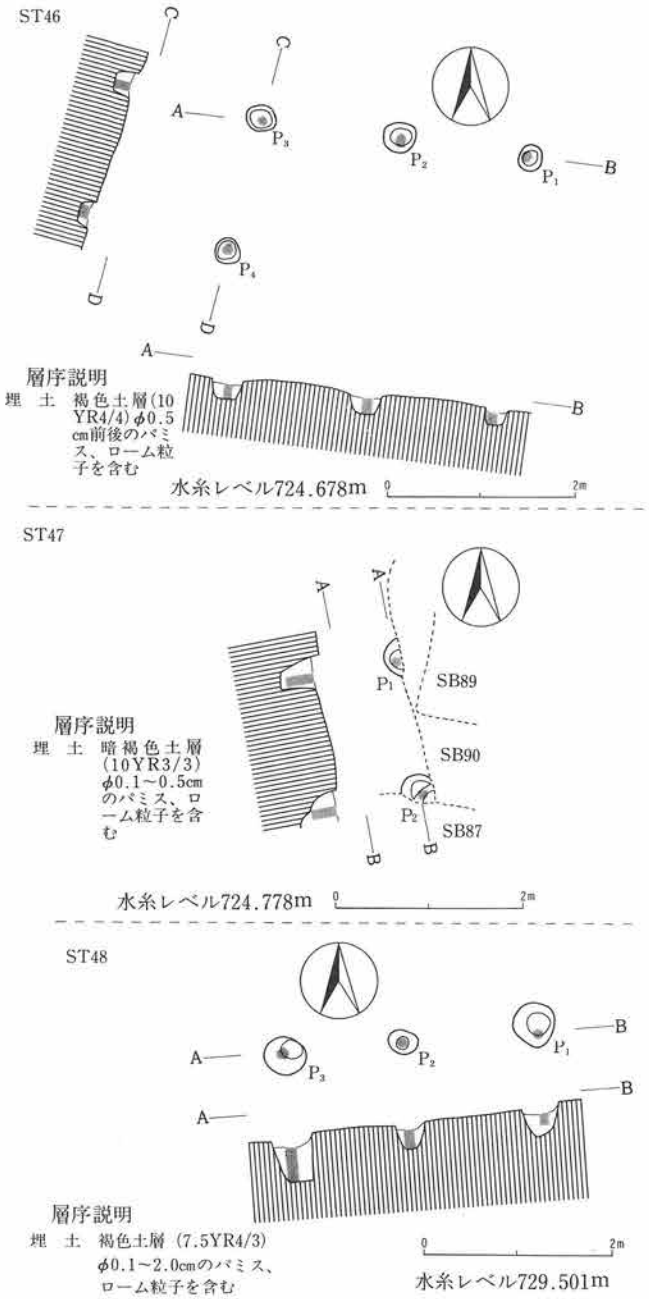
第85号住居址と重複関係を有し、第85号住居址を切って構築されている。

２間×１間の側柱式の掘立柱建物と考えられるが、４基のピットが検出されたにとどまる。

東西315cm、南北173cm、柱間は、東西122～136cm、南北173cmを測る。南北軸の方位は、Ｎ－７°－Ｅを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

出土遺物は皆無である。本遺構の所産期は、重複関係から古墳時代後期中葉以降と考えられる。



第299図　第46～48号掘立柱建物址実測図

47）第47号掘立柱建物址

遺構（第299図）

Ｂ－２グリッドに位置する。第87・90号住居址と重複関係を有し、第87・90号住居址に切られている。

南北180cm、柱間は、133cmを測る。南北軸の方位は、Ｎ－12°－Ｗを示す。

遺物

出土遺物は皆無である。本遺構の所産期は、古墳時代後期中葉以前と考えられる。

48）第48号掘立柱建物址

遺構（第299図）

Ｈ－４グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

東西310cm、柱間は、115～134cmを測る。南北軸の方位は、Ｎ－４°－Ｗを示す。

ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

出土遺物は皆無である。本遺構の所産期は、他遺構との関連から、一応、奈良時代以降と考えておきたい。

49）第49号掘立柱建物址

遺構（第300図）

Ｈ－４グリッドに位置する。第６号溝址と重複関係を有し、第６号溝址に切られている。

東西320cm、柱間は、128～146cmを測る。南北軸の方位は、Ｎ－９°－Ｅを示す。

ピット掘形の平面プランは、円形である。

遺物

出土遺物は皆無である。本遺構の所産期は、重複関係から平安時代以前と考えられる。

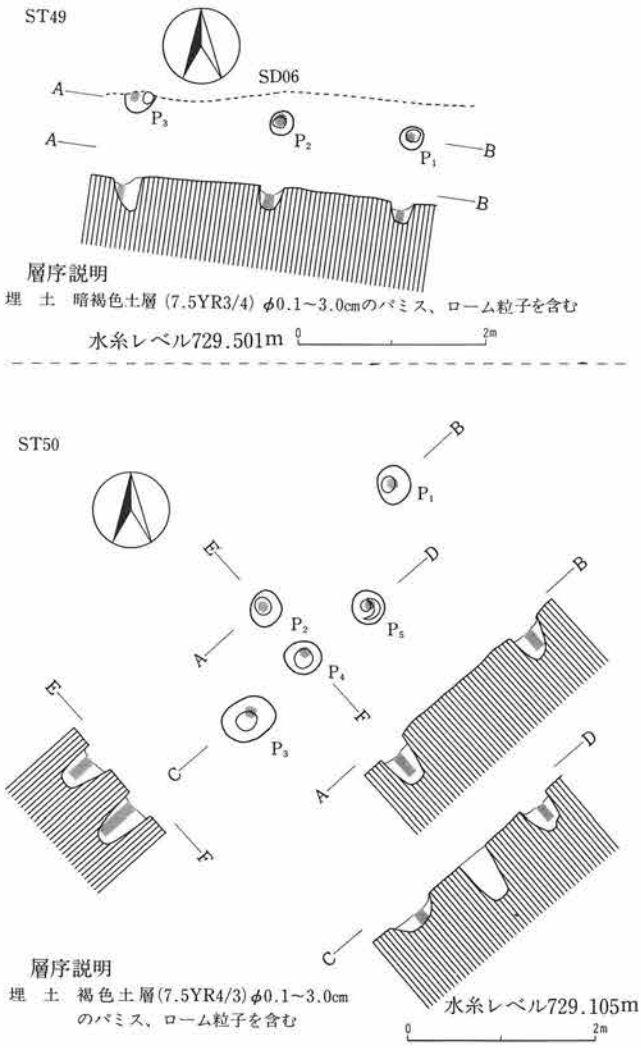
50）第50号掘立柱建物址

遺構（第300図）

Ｈ－５グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

東西338cm、南北100cm、柱間は、東西73～179cm、南北54cmを測る。

南北軸の方位は、Ｎ－45°－Ｅを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。



第300図　第49・50号掘立柱建物址実測図

遺物

出土遺物は皆無であり、本遺構の所産期についても明確でない。

51）第51号掘立柱建物址

遺構（第301図、図版21）

H－5グリッドに位置する。

他遺構との重複関係はない。

1間×1間の側柱式の掘立柱建物と考えられるが、P_5・P_6もここに含めた。

東西254cm、南北221cmを測り、平面プランは、梯形を呈する。

柱間は、東西165～191cm、南北149～159cmを測る。

南北軸の方位は、N－11.5°－Eを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

P_1から土師器甕の破片が出土している。本遺構の所産期は、出土土器片から奈良時代以降と考えられる。

52）第52号掘立柱建物址

遺構（第301図）

H－4グリッドに位置する。第57号掘立柱建物址と重複関係を有する。

東西170cm、柱間は、121cmを測る。南北軸の方位は、N－40°－Eを示す。

ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

出土遺物は皆無であり、本遺構の所産期についても明確でない。

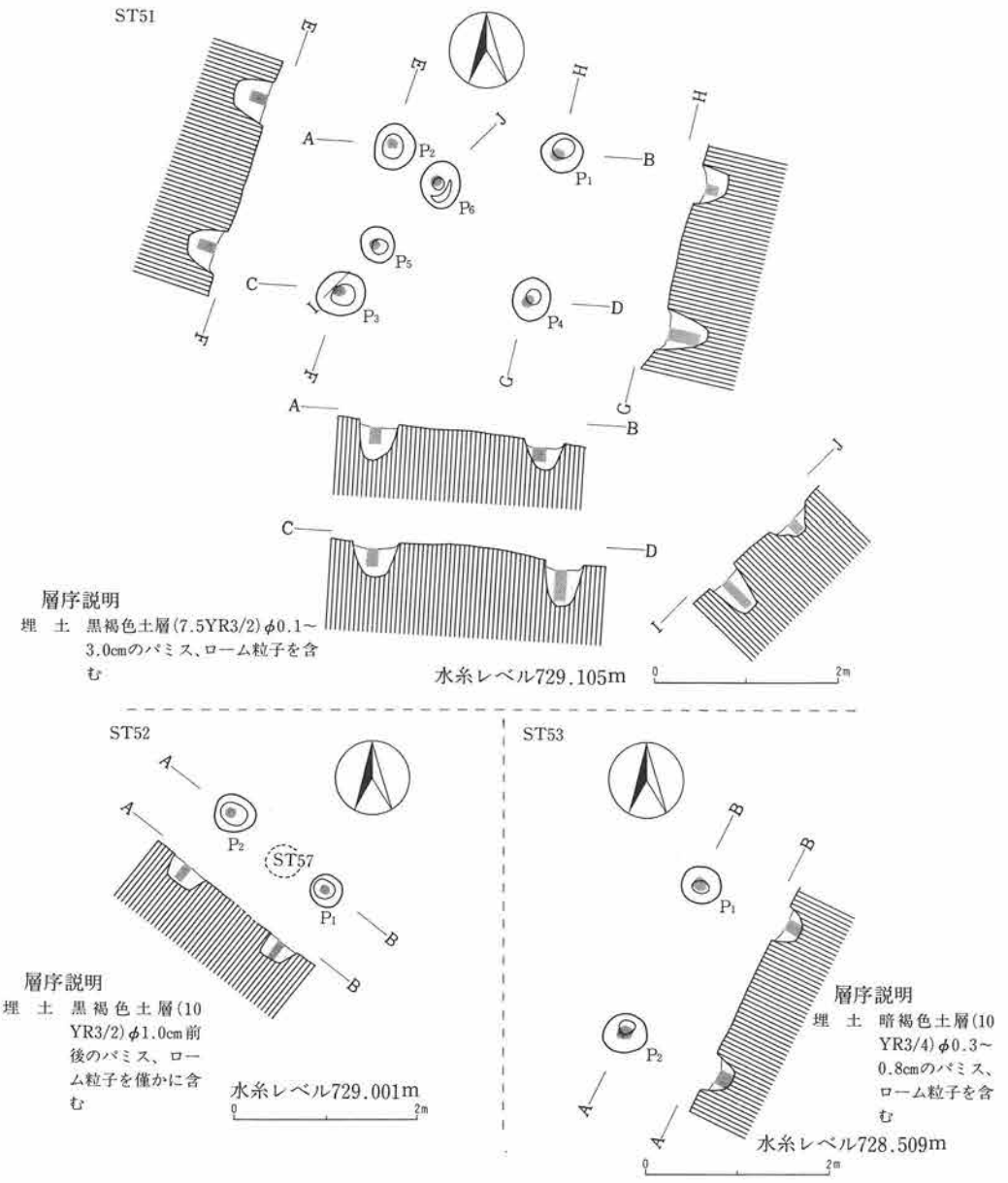
53）第53号掘立柱建物址

遺構（第301図）

G－6グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

南北223cm、柱間は、166cmを測る。南北軸の方位は、N－26°－Eを示す。

ピット掘形の平面プランは、円形である。

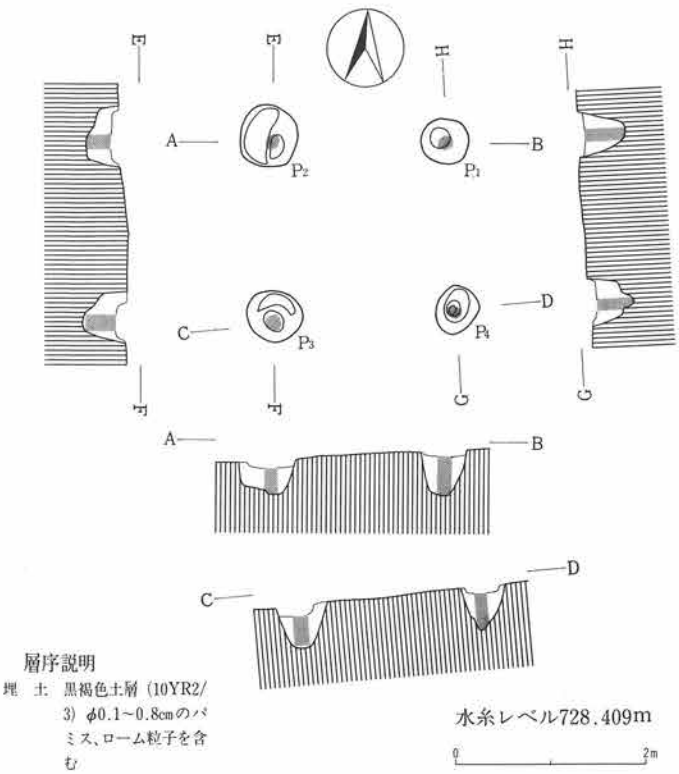


第301図　第51～53号掘立柱建物址実測図

遺物

P_1から土師器杯の破片、黒色土器杯の破片が出土している。本遺構の所産期は、出土土器片から平安時代以降と考えられる。

54）第54号掘立柱建物址



第302図　第54号掘立柱建物址実測図

遺構（第302図、図版21）

G－6グリッドに位置する。

第95・99号住居址と重複関係を有し、第95・99号住居址を切って構築されている。

1間×1間の側柱式の掘立柱建物で、東西246cm、南北250cmを測り、平面プランは、正方形を呈する。

柱間は、東西167～176cm、南北166～175cmを測る。

南北軸の方位は、N－4.5°－Wを示す。

ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

P_2・P_4から土師器片が出土している。本遺構の所産期は、出土土器片および重複関係から平安時代以降と考えられる。

55）第55号掘立柱建物址

遺構（第303図、図版21）

H－4グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

1間×1間の側柱式の掘立柱建物と考えられるが、P_5・P_6もここに含めた。

東西251cm、南北255cmを測り、平面プランは、正方形を呈する。柱間は、東西182～203cm、南北20～211cmを測る。南北軸の方位は、N－7°－Wを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

P_1・P_4から土師器片が出土している。本遺構の所産期は、出土土器片から奈良時代以降と考えられる。

56）第56号掘立柱建物址

遺構（第303図）

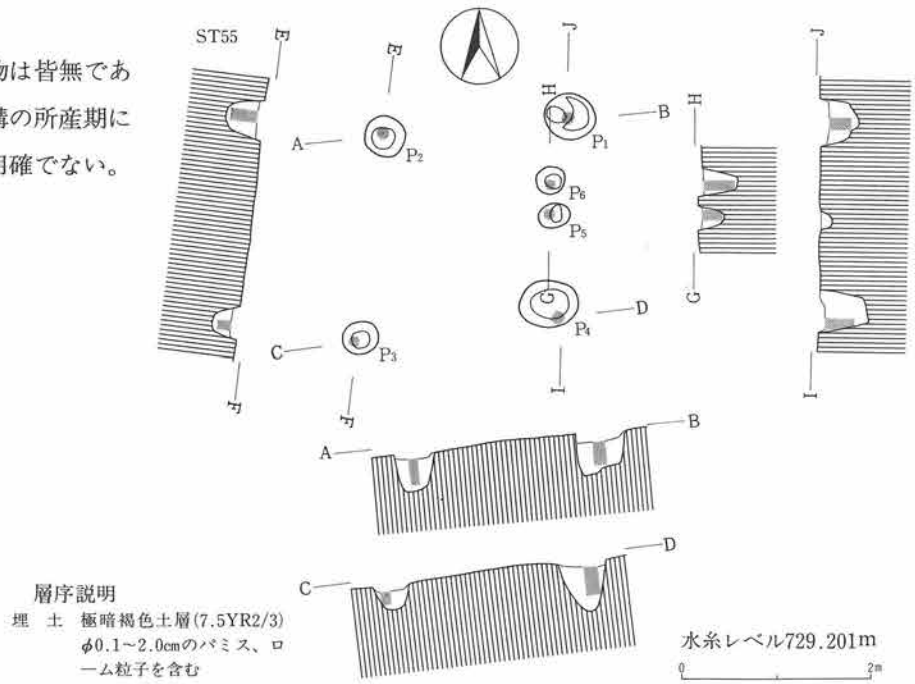
H－4グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

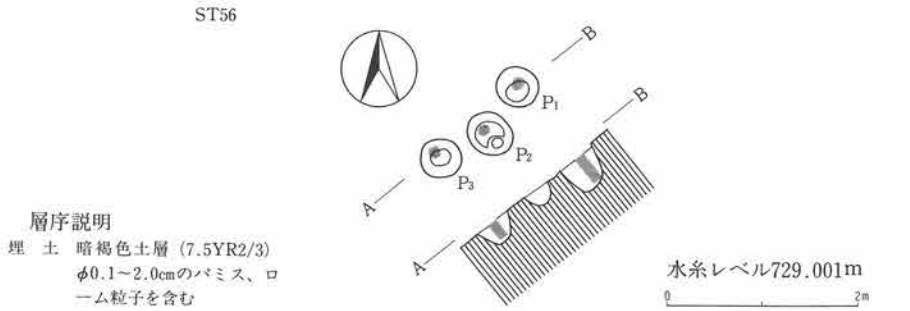
東西252cm、柱間は、44～47cmを測る。南北軸の方位は、N－38°－Wを示す。

ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

出土遺物は皆無であり、本遺構の所産期についても明確でない。





第303図　第55・56号掘立柱建物址実測図

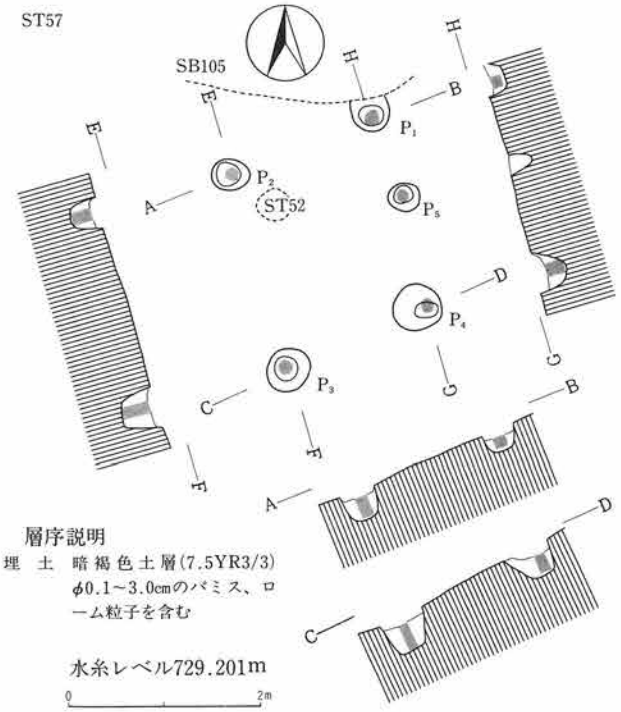
57）第57号掘立柱建物址

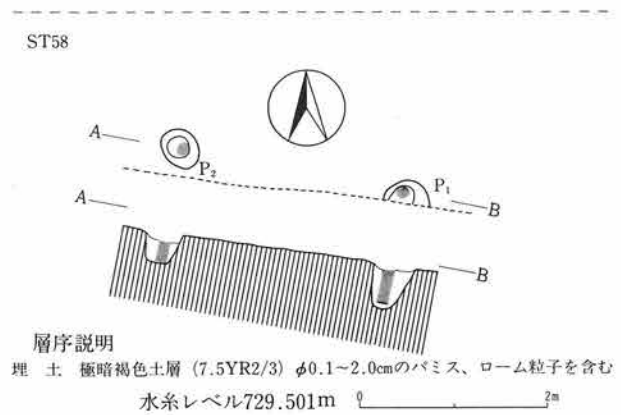
遺構（第304図、図版21）

H－4グリッドに位置する。第105号住居址、第52号掘立柱建物址、第6号溝址と重複関係を有し、第105号住居址、第6号溝址を切っている。

1間×1間あるいは2間の側柱式の掘立柱建物で、東西203cm、南北255cmを測り、平面プランは、長方形を呈する。柱間は、東西144～150cm、南北73～198cmを測る。

南北軸の方位は、N－20°－Wを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。





第304図　第57・58号掘立柱建物址実測図

遺物

出土遺物は皆無である。本遺構の所産期は、重複関係から平安時代以降と考えられる。

58）第58号掘立柱建物址

遺構（第304図）

H－4グリッドに位置する。

第6号溝址と重複関係を有し、第6号溝址に切られている。

東西290cm、柱間は、224cmを測る。南北軸の方位は、N－12°－Eを示す。ピット掘形の平面プランは、楕円形である。

遺物

P_2から土師器片が出土している。

本遺構の所産期は、古墳時代後期～平安時代に比定される。

59）第59号掘立柱建物址

遺構（第305図）

H－4グリッドに位置する。

他遺構との重複関係はない。

南北213cm、柱間は、155cmを測る。

南北軸の方位は、N－10°－Eを示

す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

出土遺物は皆無であり、本遺構の所産期についても明確でない。

60）第60号掘立柱建物址

遺構（第305図、図版21）

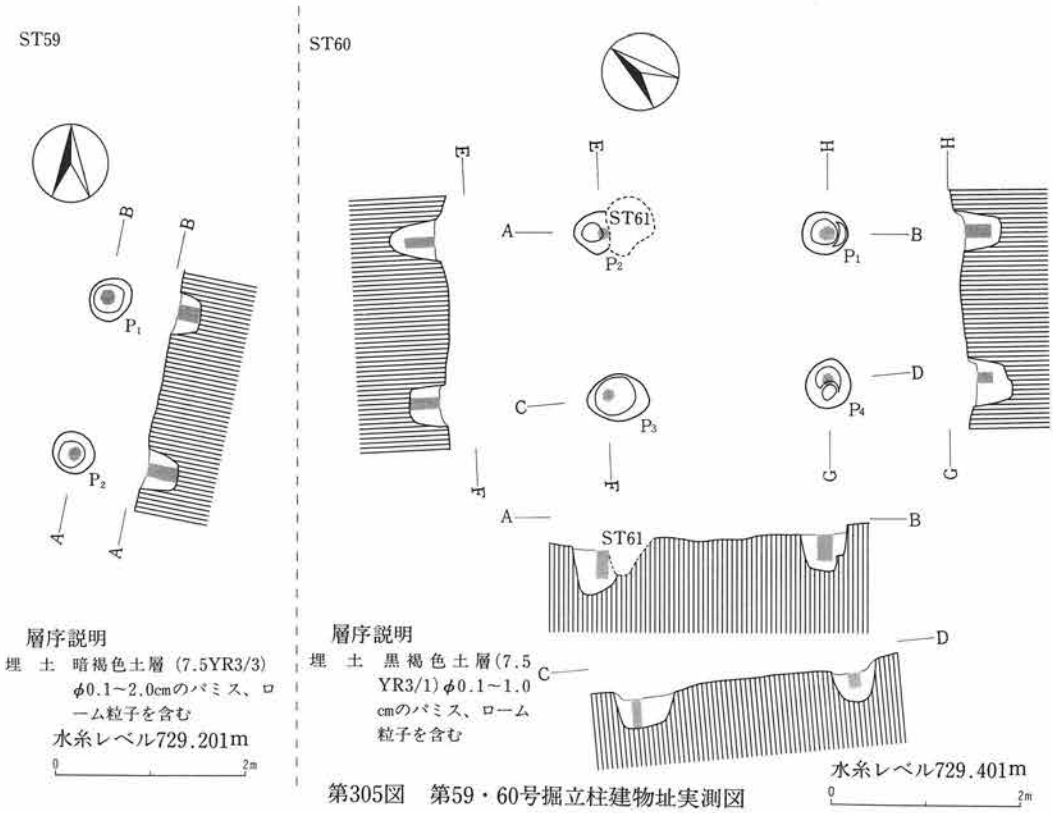
H－4グリッドに位置する。第61号掘立柱建物址と重複関係を有し、第61号掘立柱建物址を切って構築されている。

1間×1間の側柱式の掘立柱建物で、東西287cm、南北222cmを測り、平面プランは長方形を呈する。柱間は、東西217～218cm、南北141～158cmを測る。南北軸の方位は、N－50°－Eを示す。

ピット掘形の平面プランは、楕円形である。

遺物

P_4から土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土している。本遺構の所産期は、出土土器片から奈良時代以降と考えられる。



第305図　第59・60号掘立柱建物址実測図

61）第61号掘立柱建物址

遺構（第306図、図版22）

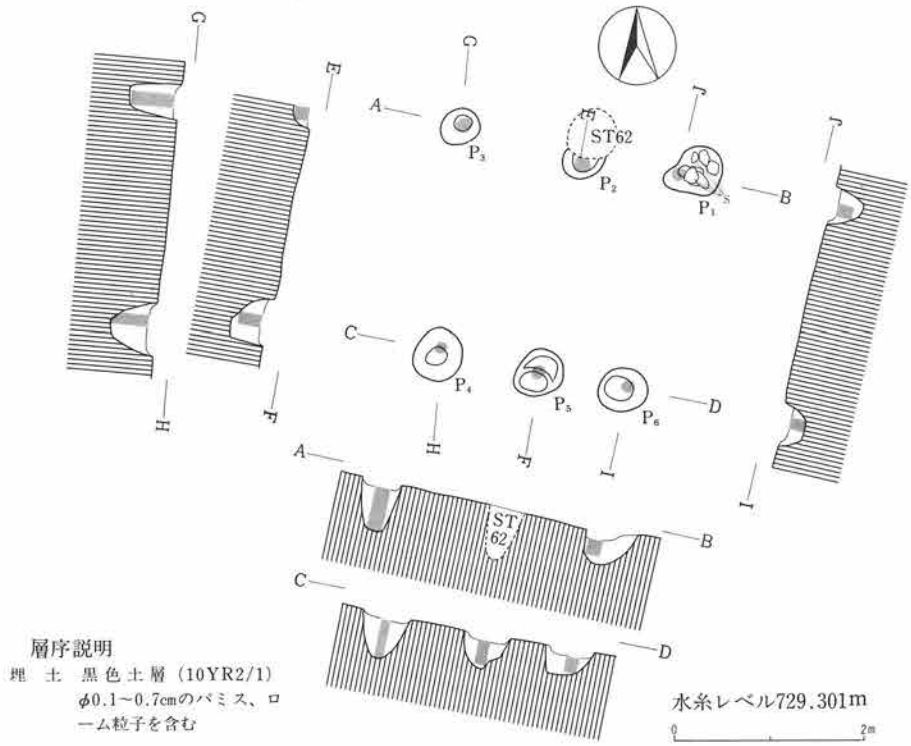
H－4グリッドに位置する。第60・62号掘立柱建物址と重複関係を有し、第62号掘立柱建物址を切り、第60号掘立柱建物址に切られている。

2間×1間の側柱式の掘立柱建物で、東西298cm、南北295cmを測り、平面プランは、正方形を呈する。柱間は、東西82～115cm、南北209～222cmを測る。南北軸の方位は、N－13°－Eを示す。

ピット掘形の平面プランは、楕円形である。

遺物

出土遺物は皆無である。本遺構の所産期は、重複関係から奈良時代以前と考えられる。



第306図　第61号掘立柱建物址実測図

62）第62号掘立柱建物址

遺構（第307図）

H－3・4グリッドに位置する。第61・64号掘立柱建物址と重複関係を有し、第61号掘立柱建物址を切って構築されている。

2間×2間の側柱式の掘立柱建物と考えられるが、4基のピットが検出されたにとどまる。

東西214cm、南北345cm、柱間は、東西158cm、南北123～136cmを測る。

南北軸の方位は、N－19°－Wを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

P_2から武蔵型の土師器甕の破片が出土している。本遺構の所産期は、出土土器片および重複関係から奈良時代以降と考えられる。

63）第63号掘立柱建物址

遺構（第307図）

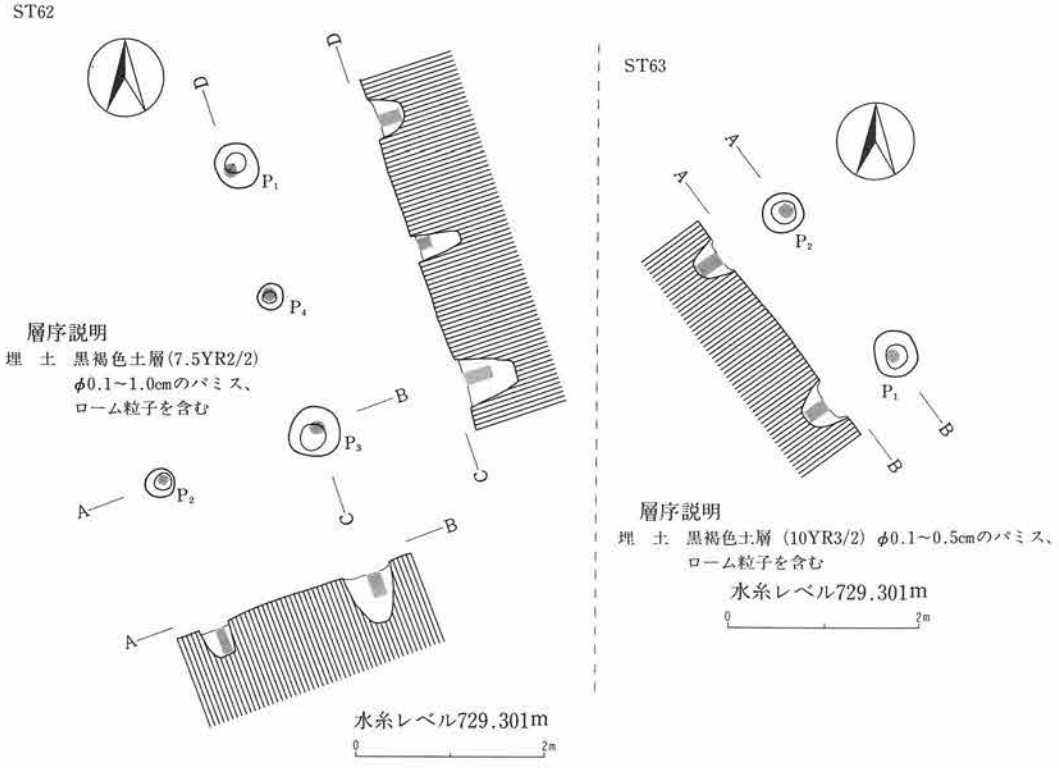
H－3グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

南北237cm、柱間は、176cmを測る。南北軸の方位は、N－36.5°－Eを示す。

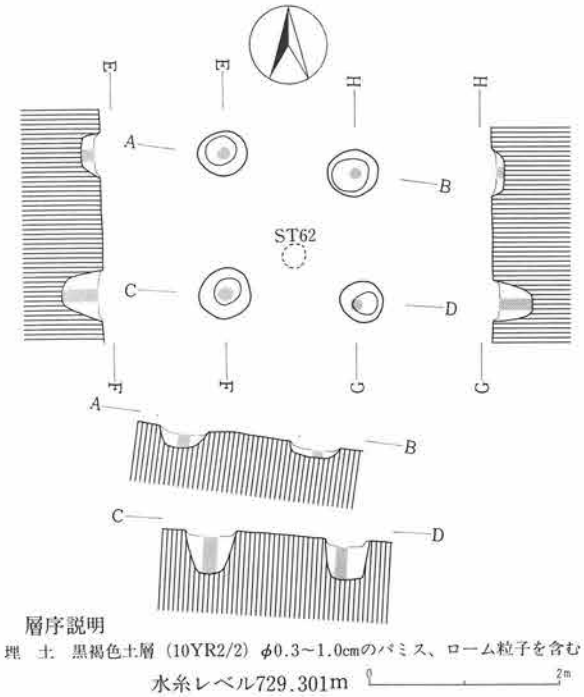
ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

出土遺物は皆無であり、本遺構の所産期についても明確でない。



第307図　第62・63号掘立柱建物址実測図



第308図　第64号掘立柱建物址実測図

64）第64号掘立柱建物址

遺構（第308図、図版22）

H－3グリッドに位置する。

第62号掘立柱建物址と重複関係を有するが、先後関係については不明である。

1間×1間の側柱式の掘立柱建物で、東西193cm、南北198cmを測り、平面プランは、正方形を呈する。

柱間は、東西122～126cm、南北126～134cmを測る。

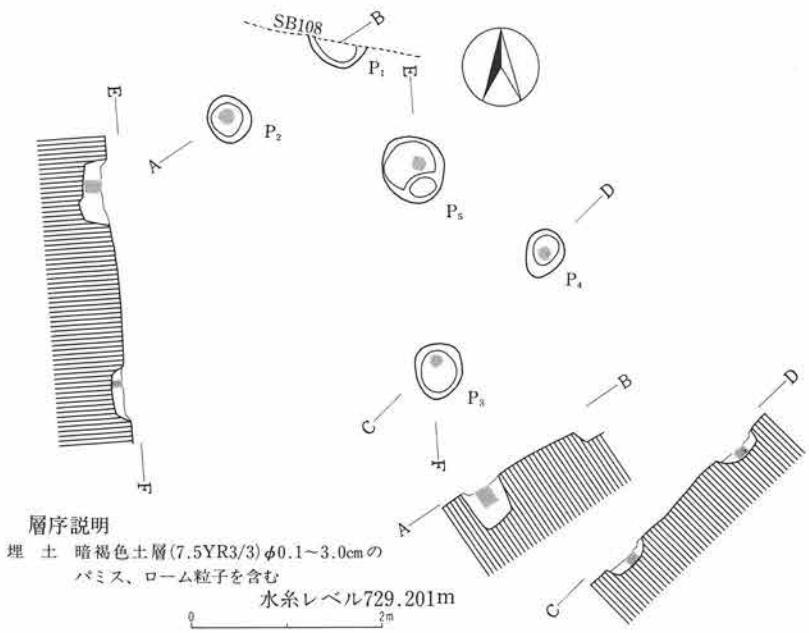
南北軸の方位は、N－1°－Wを示す。

ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

出土遺物は皆無であり、本遺構の所産期についても明確でない。

65）第65号掘立柱建物址



第309図　第65号掘立柱建物址実測図

遺構（第309図）

H－3グリッドに位置する。

第108号住居址と重複関係を有し、第108号住居址に切られている。

1間×1間の側柱式の掘立柱建物と考えられるが、P_5も含めた。

東西218cm、南北397cmを測り、平面プランは、長方形を呈する。

柱間は、東西147cm、南北324cmを測る。南北軸の方位は、N－40°－Wを示す。

ピット掘形の平面プランは、楕円形である。

遺物

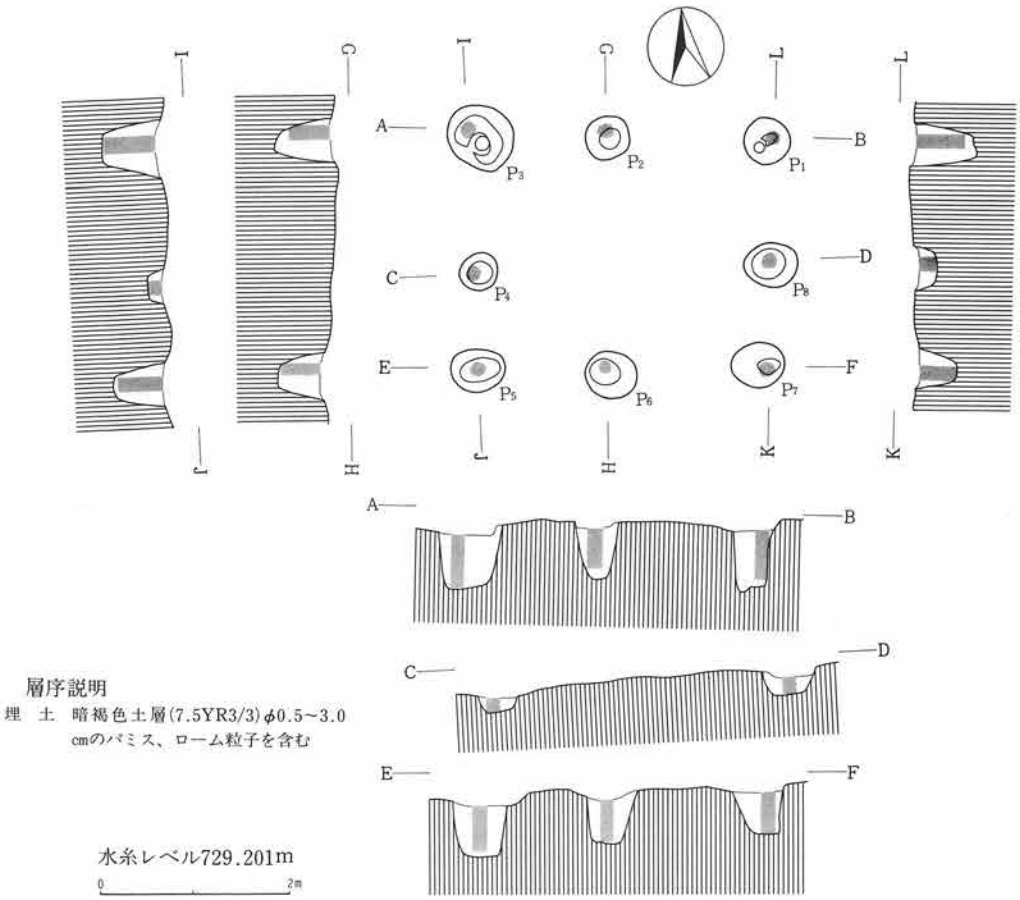
P_1・P_2から須恵器甕の破片、土師器甕の破片が出土している。本遺構の所産期は、出土土器片および重複関係から古墳時代後期～平安時代に比定される。

66）第66号掘立柱建物址

遺構（第310図、図版22）

H－3グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

2間×2間の側柱式の掘立柱建物で、東西363cm、南北304cmを測り、平面プランは、長方形を呈する。柱間は、東西120～298.5cm、南北86～235cmを測る。南北軸の方位は、N－8°－Eを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。



第310図　第66号掘立柱建物址実測図

遺物（第367図、図版77）

P_4から土師器長胴甕の破片、P_7から須恵器杯・甕の破片、鉄製品が出土している。鉄製品は、挂甲小札である。本遺構の所産期は、出土土器片から奈良時代以降と考えられる。

67）第67号掘立柱建物址

遺構（第311図）

H－3グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

南北240cm、柱間は、174cmを測る。南北軸の方位は、N－25°－Wを示す。

ピット掘形の平面プランは、円形である。

遺物

出土遺物は皆無であり、本遺構の所産期についても明確でない。

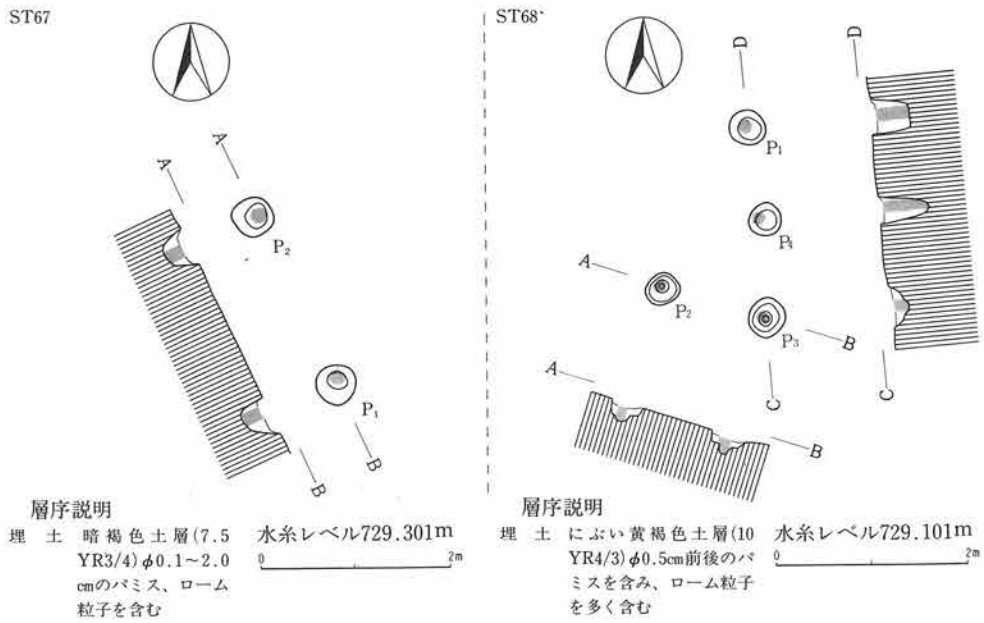
68）第68号掘立柱建物址

遺構（第311図）

H－3グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

2間×2間の側柱式の掘立柱建物と考えられるが、4基のピットが検出されたにとどまる。

東西151cm、南北244cm、柱間は、東西100cm、南北85～92cmを測る。南北軸の方位は、N－5°－Wを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。



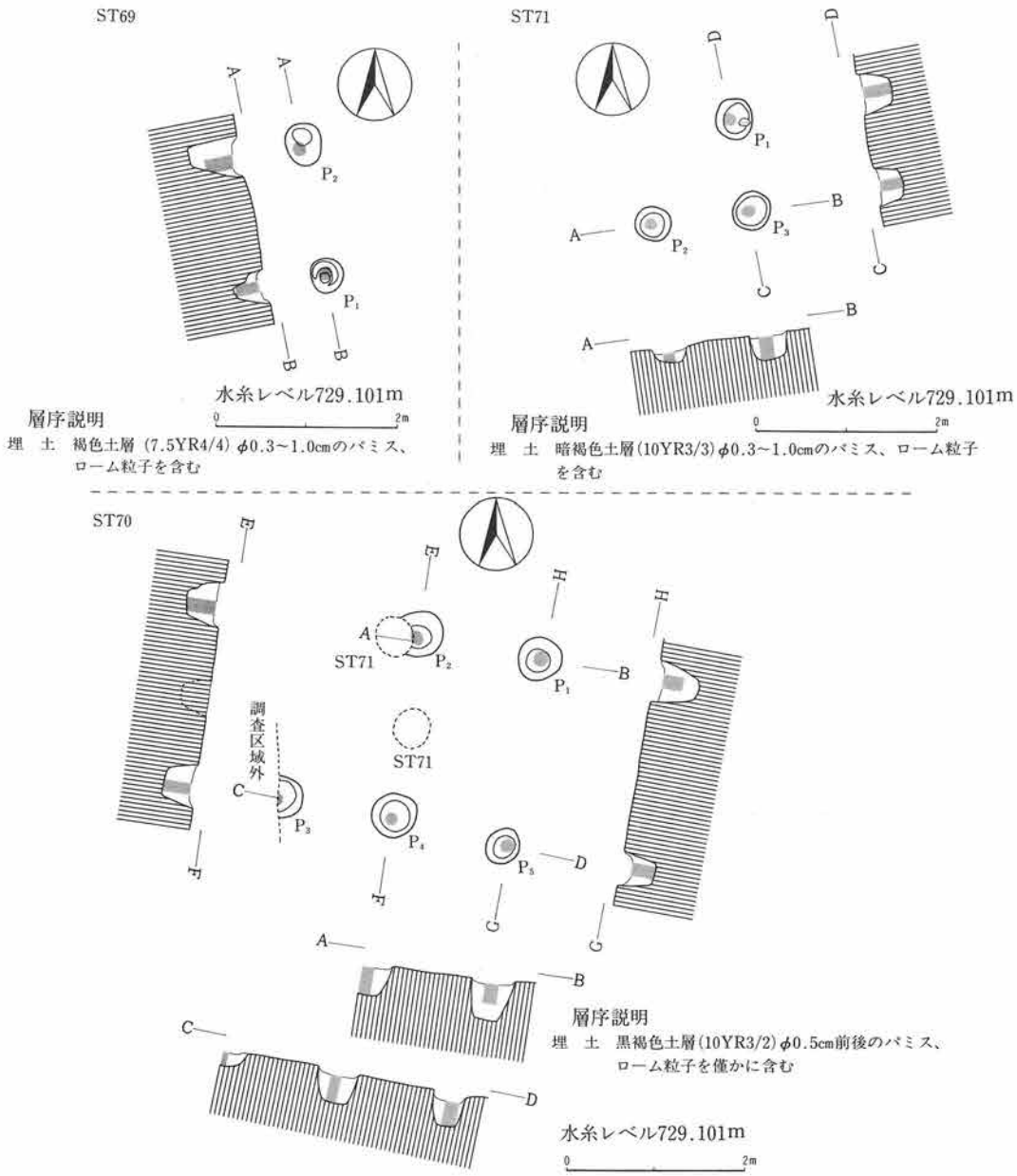
第311図　第67・68号掘立柱建物址実測図

遺物

P_2から土師器甕、須恵器蓋の破片が出土している。本遺構の所産期は、出土土器片から奈良時代以降と考えられる。

69）第69号掘立柱建物址

遺構（第312図）



第312図　第69～71号掘立柱建物址実測図

H－3グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

南北191cm、柱間は、127cmを測る。南北軸の方位は、N－11.5°－Wを示す。

ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

P_1・P_2から土師器甕、須恵器杯の破片が出土している。本遺構の所産期は、出土土器片から平安時代以降と考えられる。

70）第70号掘立柱建物址

遺構（第312図、図版22）

H－2グリッドに位置する。第115号住居址、第71号掘立柱建物址と重複関係を有し、第115号住居址を切り、第71号掘立柱建物址に切られている。

2間×1間の側柱式の掘立柱建物と考えられるが、5基のピットが検出されたにとどまる。

東西274cm、南北257cm、柱間は、東西114～124cm、南北189～196cmを測る。

南北軸の方位は、N－9°－Eを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

P_5から黒色土器杯の破片が出土している。本遺構の所産期は、出土土器片および重複関係から奈良時代後半以降と考えられる。

71）第71号掘立柱建物址

遺構（第312図）

H－2グリッドに位置する。第70号掘立柱建物址と重複関係を有し、第70号掘立柱建物址を切って構築されている。

1間×1間の側柱式の掘立柱建物と考えられるが、3基のピットが検出されたにとどまる。

東西152cm、南北150cm、柱間は、東西93cm、南北91cmを測る。南北軸の方位は、N－11°－Wを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

出土遺物は皆無である。本遺構の所産期は、重複関係から奈良時代後半以降と考えられる。

72）第72号掘立柱建物址

遺構（第313図、図版22）

H－2グリッドに位置する。第70・73・76号掘立柱建物址、第7号土坑と重複関係を有し、第

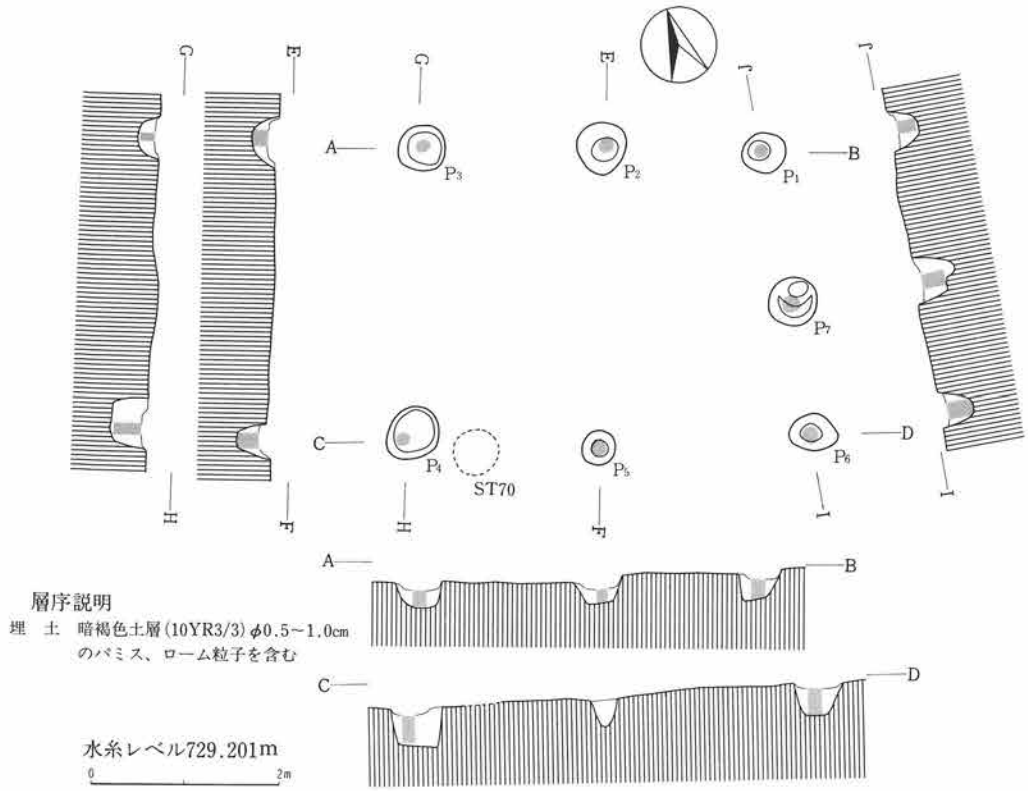
73号掘立柱建物址を切って構築されている。

2間×2間の側柱式の掘立柱建物と考えられるが、7基のピットが検出されたにとどまる。

東西476cm、南北364cmを測り、平面プランは、梯形を呈する。柱間は、東西149～209cm、南北122～297cmを測る。南北軸の方位は、N－20°－Eを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

P_1・P_2・P_5・P_6から土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土している。本遺構の所産期は、出土土器片から奈良時代後半以降と考えられる。



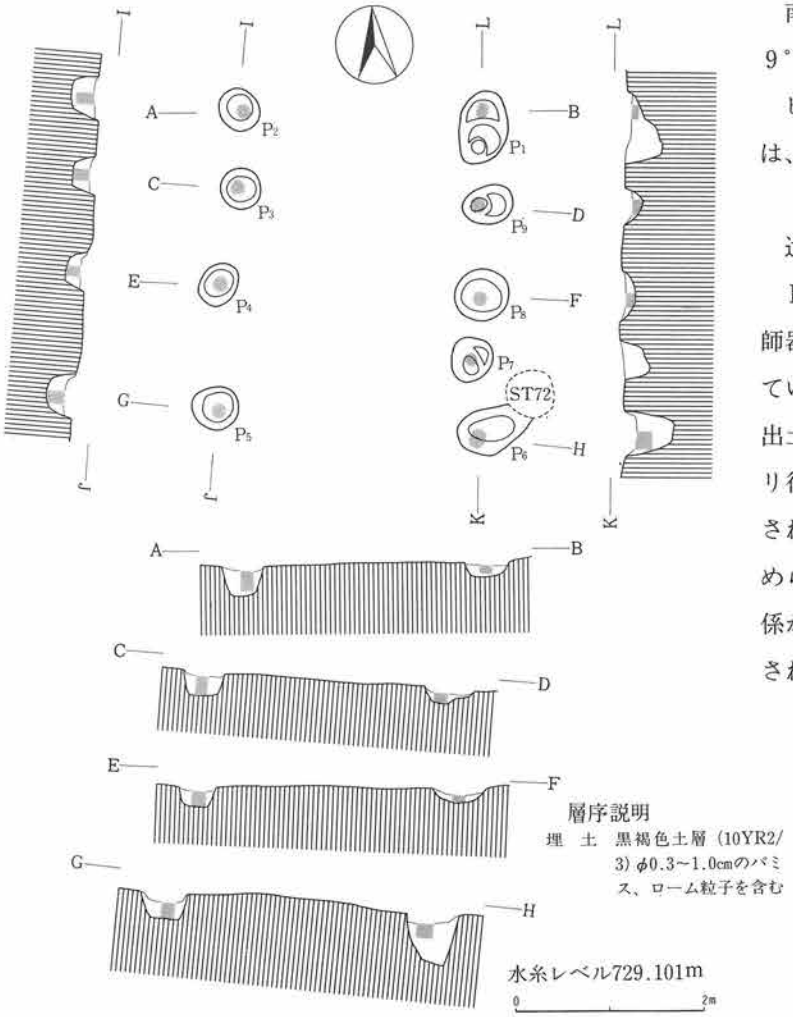
第313図　第72号掘立柱建物址実測図

73）第73号掘立柱建物址

遺構（第314図、図版22）

H－2グリッドに位置する。第72号掘立柱建物址と重複関係を有し、第72号掘立柱建物址に切られている。

1間×3間の側柱式の掘立柱建物と考えられ、東西359cm、南北389cmを測り、平面プランは、長方形を呈する。柱間は、東西236～258cm、南北66～131cmを測る。



第314図　第73号掘立柱建物址実測図

南北軸の方位は、N－9°－Eを示す。

ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

P_1・P_3・P_6・P_9から土師器片、須恵器片が出土している。本遺構の所産期は、出土土器片中に底部ヘラキリ後手持ちヘラケズリがなされる須恵器杯の破片が認められることおよび重複関係から奈良時代前半に比定される。

74）第74号掘立柱建物址

遺構（第315図）

H－2グリッドに位置する。第76号掘立柱建物址と重複関係を有する。

南北225cm、柱間は、170cmを測る。南北軸の方位は、N－12.5°－Wを示す。

ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

出土遺物は皆無であり、本遺構の所産期についても明確でない。

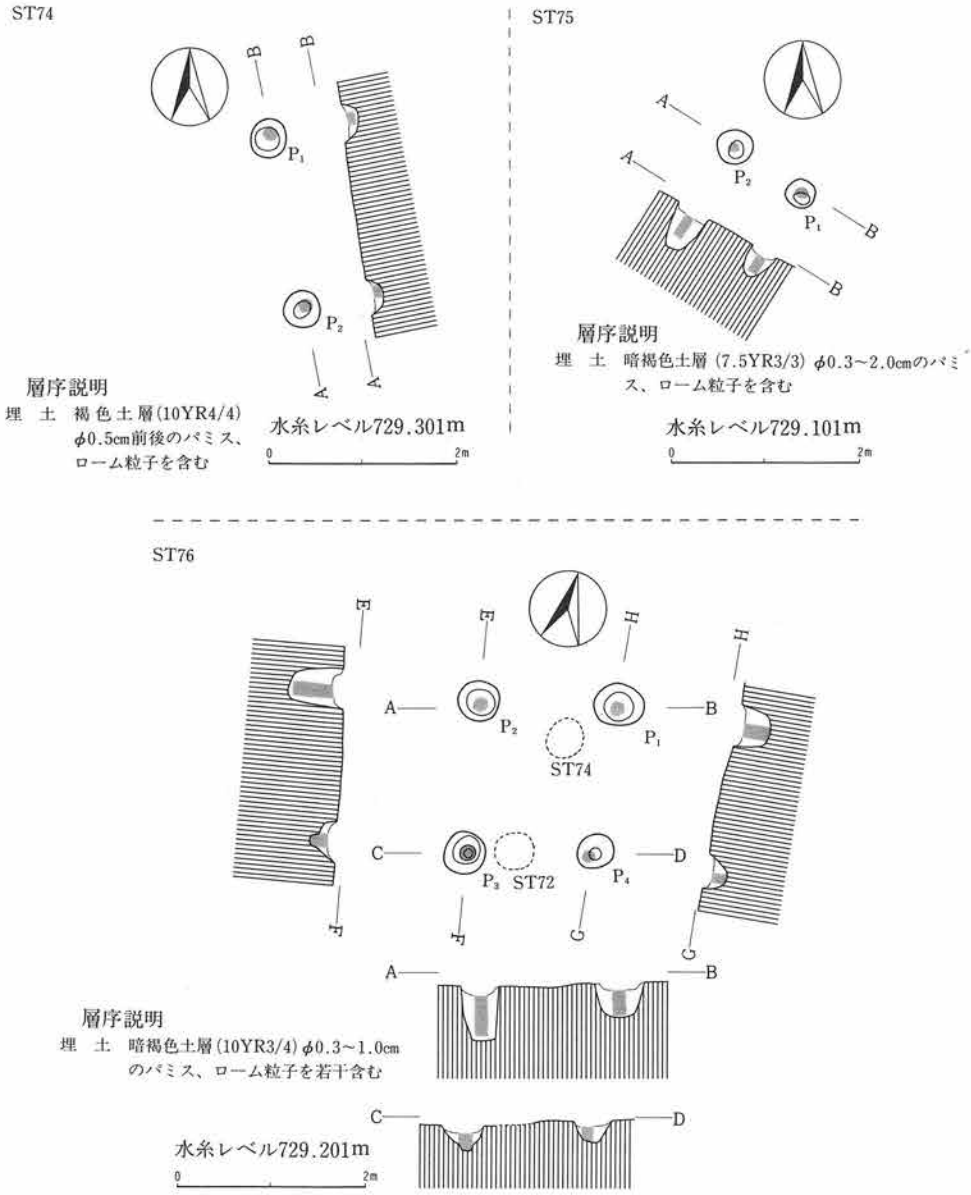
75）第75号掘立柱建物址

遺構（第315図）

H－4グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。東西120cm、柱間は、74cmを測る。南北軸の方位は、N－34°－Eを示す。ピット掘形の平面プランは、円形である。

遺物

出土遺物は皆無であり、本遺構の所産期についても明確でない。



第315図　第74～76号掘立柱建物址実測図

76）第76号掘立柱建物址

遺構（第315図、図版22）

H－2グリッドに位置する。第72・74号掘立柱建物址と重複関係を有する。

1間×1間の側柱式の掘立柱建物で、東西198cm、南北205cmを測り、平面プランは、正方形を呈する。柱間は、東西114～130cm、南北142～145cmを測る。南北軸の方位は、N－13°－Wを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

P_1・P_2から土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土している。本遺構の所産期は、出土土器片から奈良時代以降と考えられる。

77）第77号掘立柱建物址

遺構（第316図）

H－2グリッドに位置する。第78号掘立柱建物址、第5号土坑と重複関係を有する。

2間×2間の側柱式の掘立柱建物と考えられるが、5基のピットが検出されたにとどまる。

東西334cm、南北246cm、柱間は、東西116～127cm、南北76～97cmを測る。

南北軸の方位は、N－5°－Eを示す。ピット掘形の平面プランは、楕円形である。

遺物

出土遺物は皆無であり、本遺構の所産期についても明確でない。

78）第78号掘立柱建物址

遺構（第316図）

H－2グリッドに位置する。第77・83号掘立柱建物址と重複関係を有する。

南北379cm、柱間は、東西129～188cmを測る。南北軸の方位は、N－29°－Eを示す。

ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

出土遺物は皆無であり、本遺構の所産期についても明確でない。

79）第79号掘立柱建物址

遺構（第316図）

H－2グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。東西242cm、柱間は、70～86cmを測る。南北軸の方位は、N－5°－Eを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

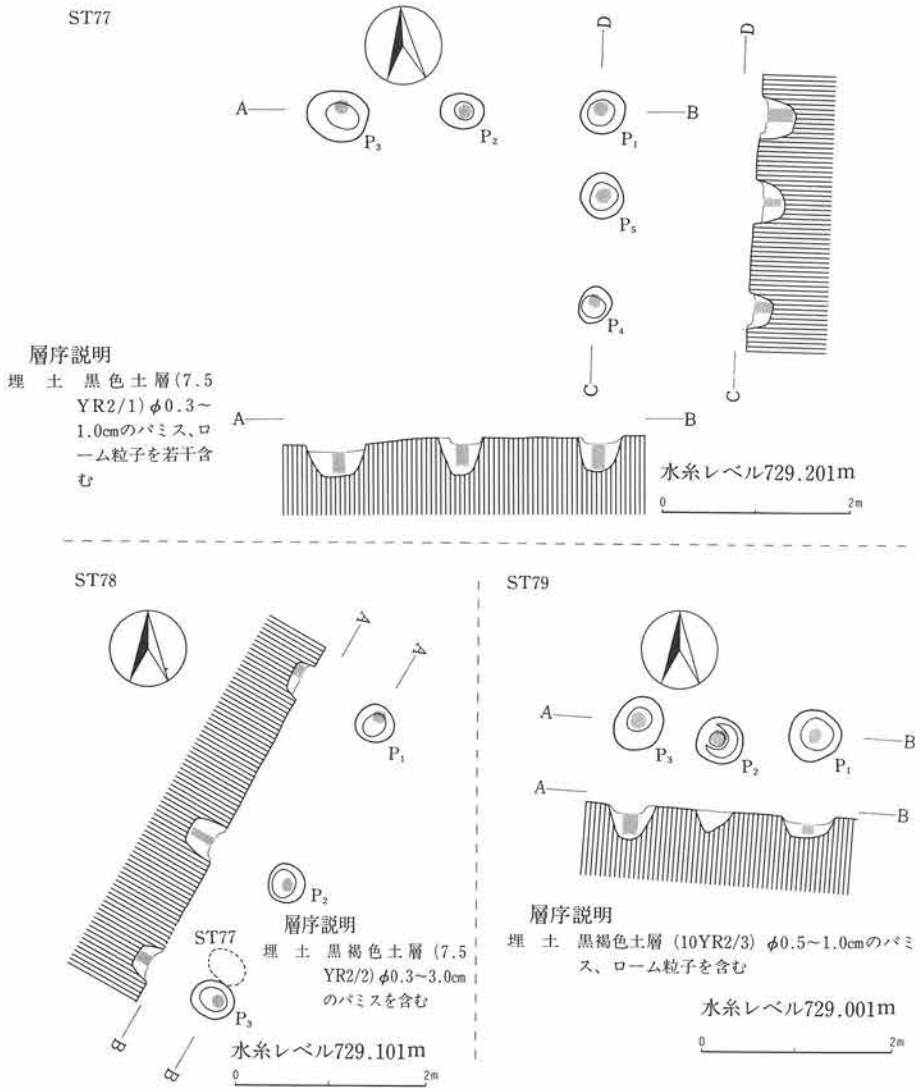
P_1～P_3から土師器片、黒色土器片が出土している。本遺構の所産期は、出土土器片から平安時代以降と考えられる。

80）第80号掘立柱建物址

遺構（第317図、図版22）

H－2グリッドに位置する。第83号掘立柱建物址、第6号土坑と重複関係を有し、第6号土坑に切られる。

1間あるいは2間×1間の側柱式の掘立柱建物で、東西305cm、南北223cmを測り、平面プラン



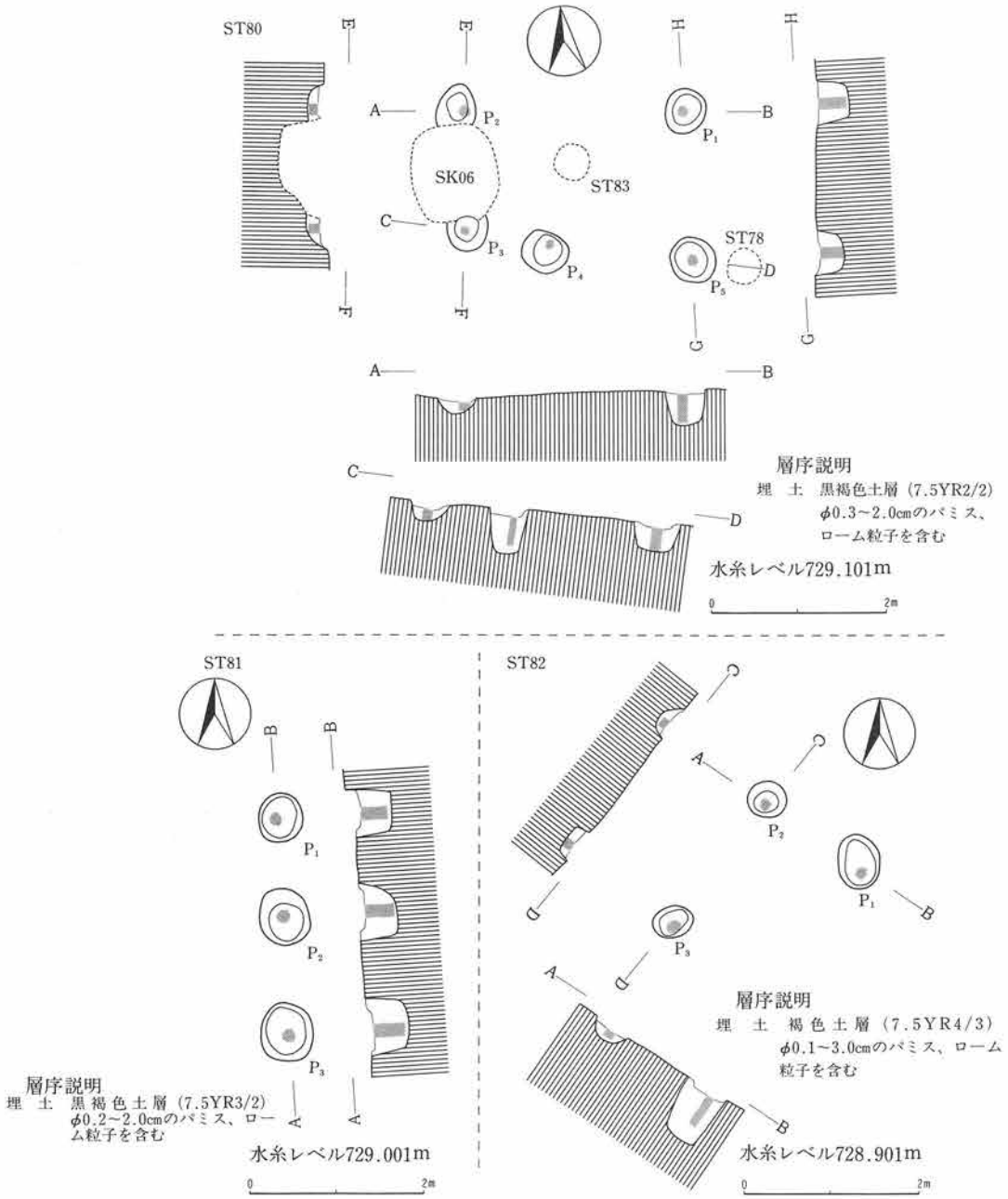
第316図　第77～79号掘立柱建物址実測図

は、梯形を呈する。柱間は、東西87～232cm、南北124～157cmを測る。

南北軸の方位は、N－5°－Eを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

出土遺物は皆無であり、本遺構の所産期についても明確でない。



第317図　第80～82号掘立柱建物址実測図

81）第81号掘立柱建物址

遺構（第317図）

Ｈ－２グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

南北305cm、柱間は、97～120cmを測る。南北軸の方位は、Ｎ－２°－Ｗを示す。

ピット掘形の平面プランは、楕円形である。

遺物

武蔵型の土師器甕の破片が出土しており、本遺構の所産期は、奈良時代以降と考えられる。

82）第82号掘立柱建物址

遺構（第317図）

Ｈ－２グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

１間×１間の側柱式の掘立柱建物と考えられるが、３基のピットが検出されたにとどまる。

東西176cm、南北218cm、柱間は、東西122cm、南北158cmを測る。南北軸の方位は、Ｎ－35.5°－Ｅを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

$Ｐ_1$から土師器甕、須恵器甕の破片が出土しているが、時期について特定できず、本遺構の所産期についても明確でない。

83）第83号掘立柱建物址

遺構（第318図、図版23）

Ｈ－２グリッドに位置する。第70・80号掘立柱建物址と重複関係を有する。

２間×２間の側柱式の掘立柱建物と考えられるが、６基のピットが検出されたにとどまる。

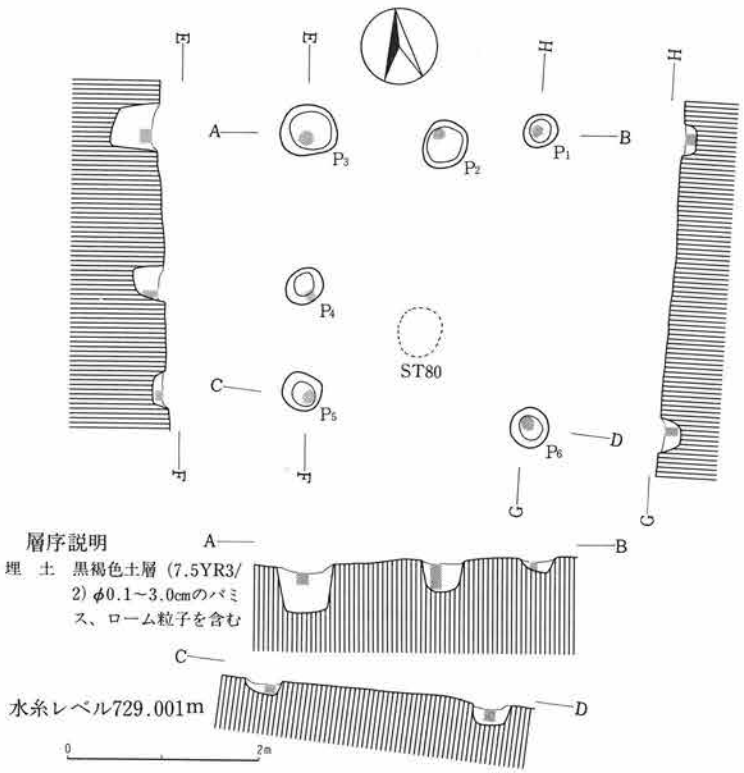
東西295cm、南北354cmを測り、平面プランは、長方形を呈する。柱間は、東西97～221cm、南北94～295cmを測る。南北軸の方位は、Ｎ－６°－Ｅを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物（第373図、図版82）

$Ｐ_1$から粘板岩製の砥石（第373図６）、$Ｐ_4$から須恵器甕の破片、$Ｐ_2$から武蔵型の土師器甕の破片が出土している。本遺構の所産期は、奈良時代以降と考えられる。

84）第84号掘立柱建物址

遺構（第319図）



第318図　第83号掘立柱建物址実測図

H－2グリッドに位置する。

他遺構との重複関係はない。

南北275cm、柱間は、74～127cmを測る。

南北軸の方位は、N－8°－Wを示す。

ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

P_1から須恵器甕の破片が出土しているが、時期を特定できず、本遺構の所産期についても明確でない。

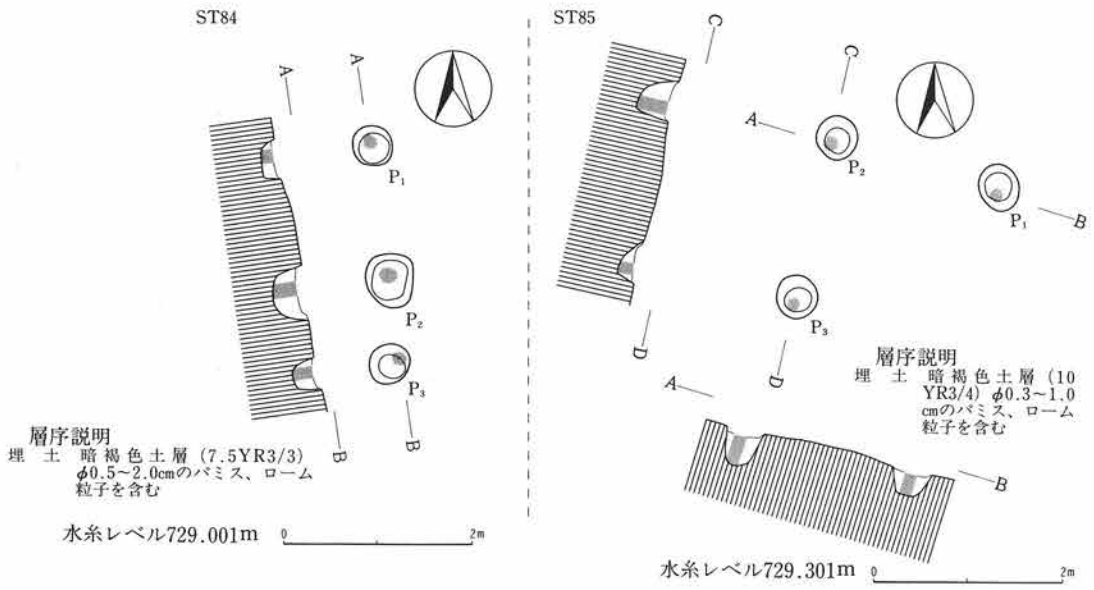
85）第85号掘立柱建物址

遺構（第319図）

H－2グリッドに位置する。

第115号住居址と重複関係を有し、第115号住居址を切って構築されている。

1間×1間の側柱式の掘立柱建物と考えられるが、3基のピットが検出されたにとどまる。



第319図　第84・85号掘立柱建物址実測図

東西224cm、南北220cm、柱間は、東西170cm、東西160cmを測る。南北軸の方位は、N－13.5°－Eを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

出土遺物は皆無である。本遺構の所産期は、重複関係から、古墳時代後期後葉以降と考えられる。

86）第86号掘立柱建物址

遺構（第320図、図版23）

B－2グリッドに位置する。

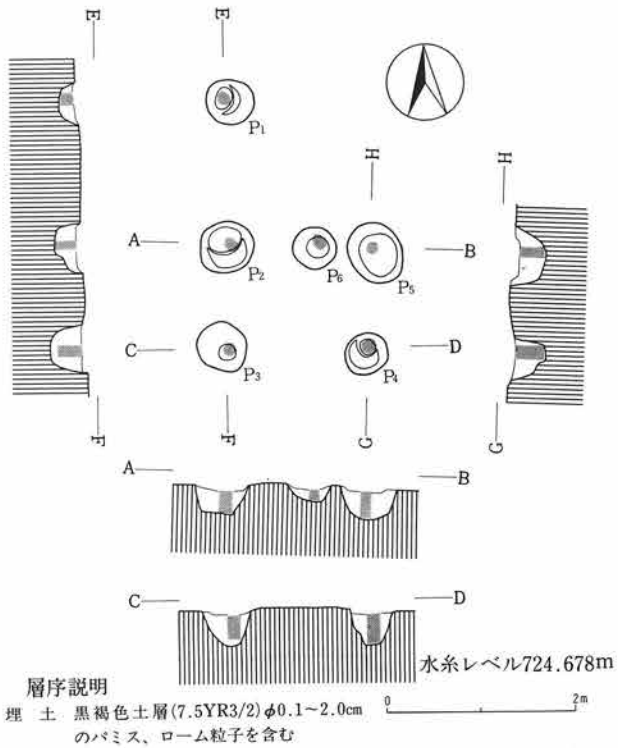
第39号掘立柱建物址と重複関係を有し、第39号掘立柱建物址を切っている。

1間×2間の側柱式の掘立柱建物と考えられ、東西211cm、南北311cmを測り、平面プランは、長方形を呈する。

柱間は、東西43～132cm、南北91～141cmを測る。南北軸の方位は、N－15°－Eを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

P_6から土師器甕、須恵器短頸壺の破片が出土している。本遺構の所産期は重複関係・出土土器から奈良時代以降と考えられる。



第320図　第86号掘立柱建物址実測図

(3) 溝　　址

1）第1号溝址

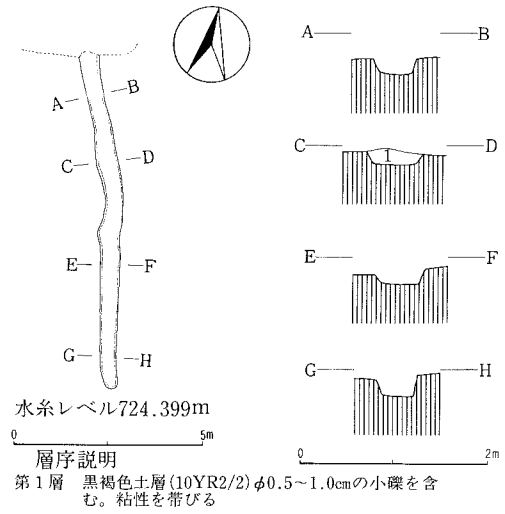
遺構（第321図、図版23）

A－1・2グリッドに位置する。第8号住居址と重複関係を有し、第8号住居址を切っている。

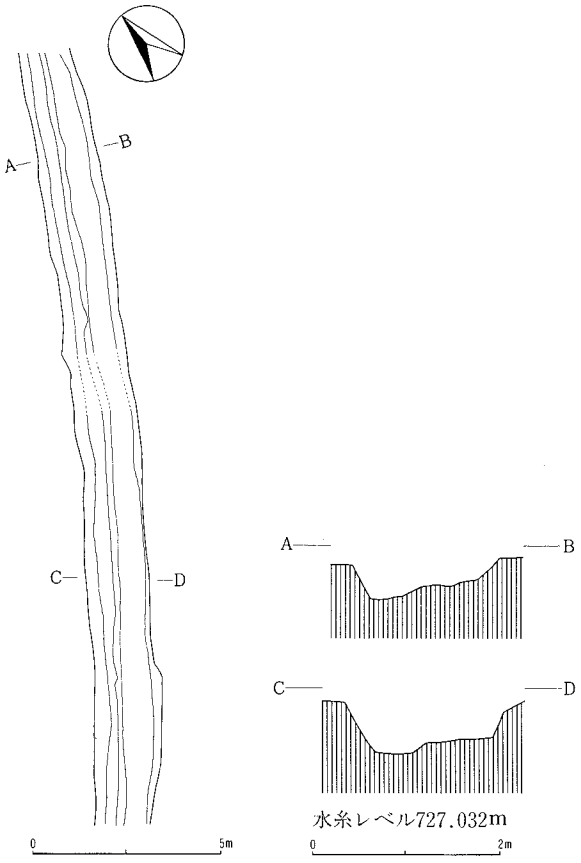
北から南にほぼ直線的に延びる遺構で、調査し得た部分は、約9mの範囲である。

遺構覆土は、黒褐色（10YR2/2）土層、1層で、水の流れた痕跡は認められなかった。

溝の掘形は、逆梯形状で、溝巾は34～60cm、深さ8～24cmを測る。



第321図　第1号溝址実測図



第322図　第2号溝址実測図

遺物

土師器片が出土しているが、総計7点と僅少である。

本遺構の所産期は、重複関係から平安時代以降と考えられる。

2）第2号溝址

遺構（第322図、図版23）

E－4・5グリッドに位置する。

第18・20・22・24・39・44号住居址と重複関係を有し、これらの住居址を切って構築されている。

北東から南西にほぼ直線的に延びる遺構で、調査区域内において調査された部分は、約20.9mの範囲である。

溝の掘形は、逆梯形状で、一部テラス状となる個所も認められた。

溝巾は140～180cm、深さ38～55cmを測る。

底面には砂の堆積はなく、水の流れた痕跡は認められなかった。

遺物

土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土しているが、図示し得るものはない。

本遺構の所産期は、重複関係・出土土器から平安時代以降と考えられる。

3）第3号溝址

遺構（第323図、図版23）

E－4・5グリッドに位置する。

第29・31～33号住居址と重複関係を有し、第29・31～33号住居址を切って構築されている。

北から南にほぼ直線的に延びる遺構で、調査区域内において調査された部分は、約22.7mの範囲である。

遺構覆土は、3層に区分されるが、大半を暗褐色（7.5YR3/4）土が占める。

溝の掘形は、逆梯形状を呈する。

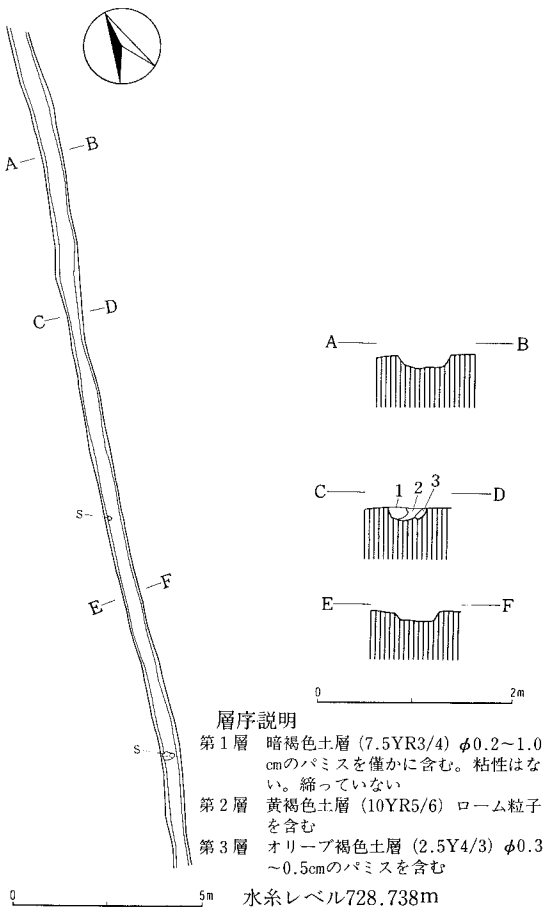
溝巾は42～65cm、深さ9～14cmを測る。

底面には砂の堆積はなく、水の流れた痕跡は認められなかった。

遺物

土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土しているが、図示し得るものはない。

本遺構の所産期は、重複関係・出土土器から平安時代以降と考えられる。



第323図　第3号溝址実測図

4）第4号溝址

遺構（第324図、図版23）

C－2グリッドに位置する。

第86号住居址と重複関係を有し、第86号住居址を切って構築されている。

「L」字形を呈し、調査区域内において調査された部分は、東西4.54m、南北6.29mの範囲である。遺構覆土は、7層に区分され、上部では砂利層が認められた。

溝の掘形は、逆梯形状を呈する。溝巾は60～100cm、深さ25～32cmを測る。

遺物

弥生時代後期～古墳時代初頭と考えられる甕の破片が1点出土している。

本遺構の所産期は、重複関係から平安時代以降と考えられる。

5）第5号溝址

遺構（第324図、図版23）

H－5グリッドに位置する。第4号土坑と重複関係を有し、第4号土坑を切っている。

東西にほぼ直線的に延びる遺構で、調査区域内において調査された部分は、約9.4mの範囲である。遺構覆土は、4層に区分されるが、大半を極暗褐色（7.5YR2/3）土が占める。

溝の掘形は、概ね逆梯形状である。溝巾は150～170cm、深さ61～68cmを測る。

底面には砂の堆積はなく、水の流れた痕跡は認められなかった。

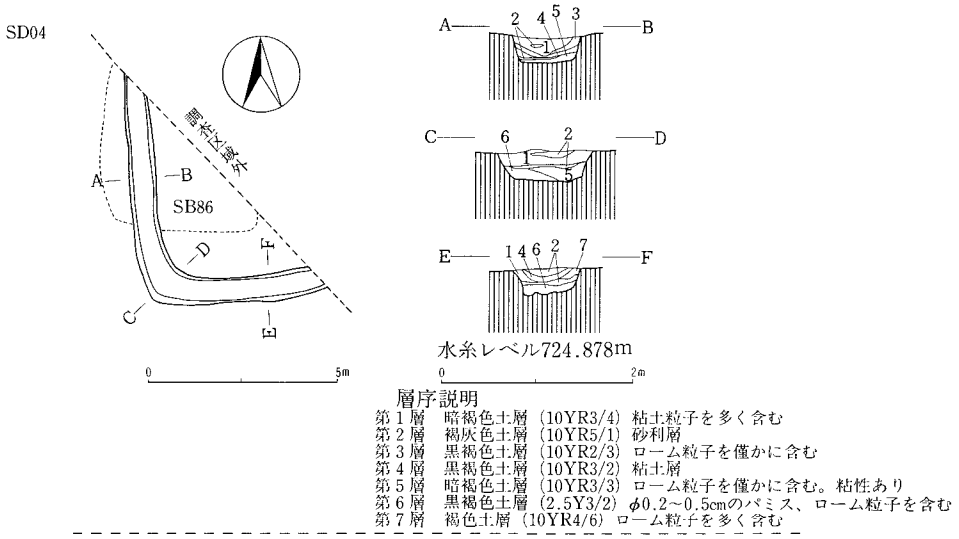
遺物

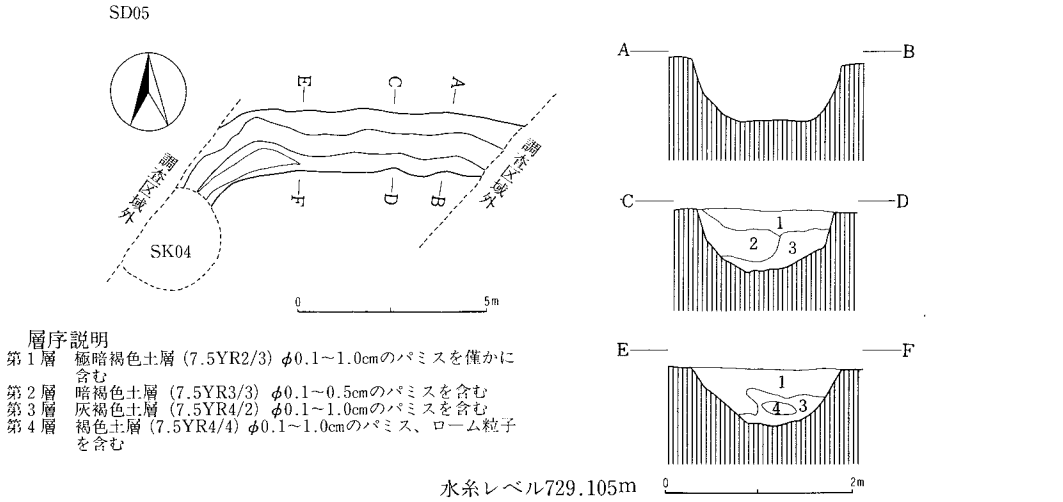
出土遺物は皆無である。本遺構の所産期は、重複関係から奈良時代後葉以降と考えられる。

6）第6号溝址

遺構（第325図、図版23）

H－4グリッドに位置する。第49・57・58号掘立柱建物址と重複関係を有し、第49・58号掘立





第324図　第4・5号溝址実測図

柱建物址を切り、第57号掘立柱建物址に切られている。

東西にほぼ直線的に延びる遺構で、調査区域内において調査された部分は、約7.78mの範囲である。遺構覆土は、6層に区分される。

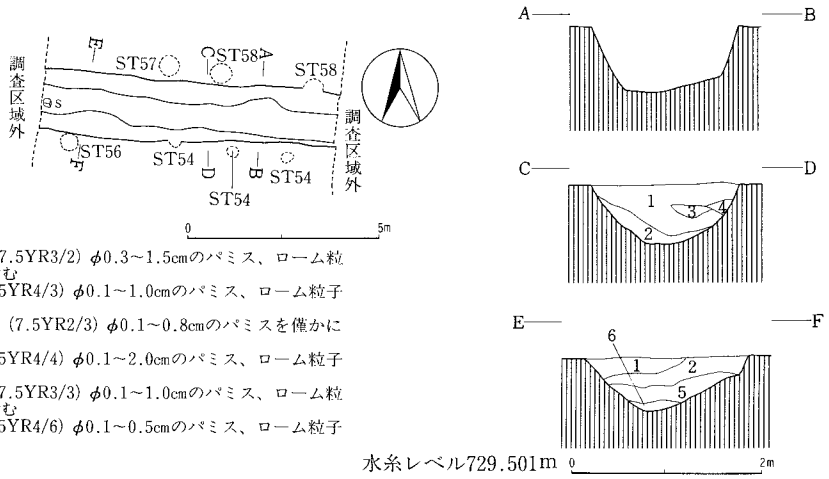
溝の掘形は、逆梯形状・U字形を呈する。溝巾は138～174cm、深さは57～70cmを測る。

底面には砂の堆積はなく、水の流れた痕跡は認められなかった。

遺物

土師器片、黒色土器片、須恵器片、灰釉陶器片が出土しているが、図示し得るものはない。

本遺構の所産期は、重複関係・出土土器から平安時代以降と考えられる。



層序説明

第1層　黒褐色土層（7.5YR3/2）φ0.3～1.5cmのパミス、ローム粒子を僅かに含む
第2層　褐色土層（7.5YR4/3）φ0.1～1.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第3層　極暗褐色土層（7.5YR2/3）φ0.1～0.8cmのパミスを僅かに含む
第4層　褐色土層（7.5YR4/4）φ0.1～2.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第5層　暗褐色土層（7.5YR3/3）φ0.1～1.0cmのパミス、ローム粒子を僅かに含む
第6層　褐色土層（7.5YR4/6）φ0.1～0.5cmのパミス、ローム粒子を含む

第325図　第6号溝址実測図

(4)　土　　坑

1）第1号土坑

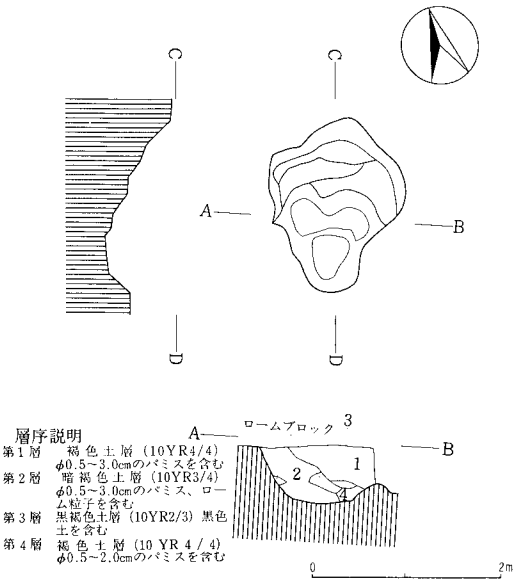
遺構（第326図、図版24）

E・F－5グリッドに位置する。第63号住居址と重複関係を有し、第63号住居址に切られている。

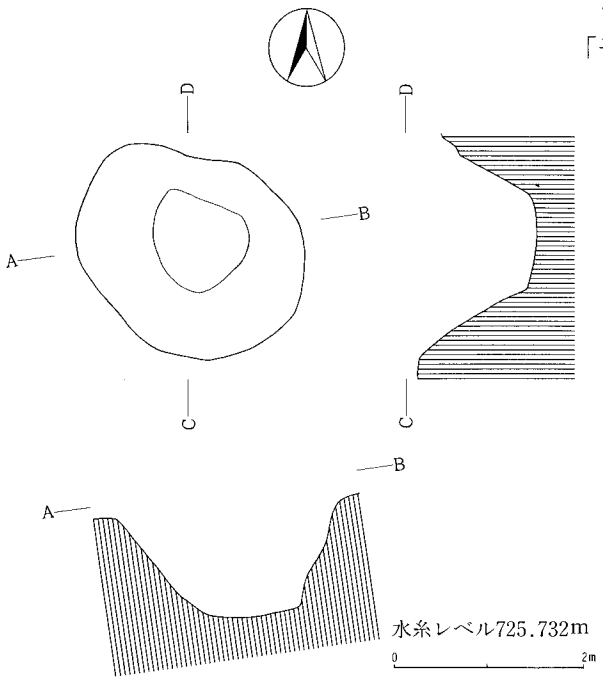
東西145cm、南北187cmを測り、平面プランは、不整形を呈する。長軸方位は、N－24°－Eを示す。遺構覆土は、4層に区分され、確認面からの深さは、71cmを測る。

遺物（第359図、図版70）

土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土している。このうち、図示したものに須恵器円面硯がある。円面硯は、復原実測したもので第23号住居址出土のものに胎土・文様とも相似する。本住居址の所産期は、重複関係・出土土器から平安時代に比定される。



第326図　第１号土坑実測図



第327図　第２号土坑実測図

２）第２号土坑

遺構（第327図）

Ｄ－３グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

東西243cm、南北215cmを測り、平面プランは、不整な楕円形を呈する。

長軸方位は、Ｎ－51°－Ｗを示す。

確認面からの壁高は、124cmを測る。

遺物（第359～361図、図版70～72）

土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土している。このうち、図示したものに土師器甑、黒色土器杯、須恵器蓋・杯・椀・小瓶・甕がある。土師器甑は、長胴の甕の胴下半部を転用したものである。

また、墨書土器（第360図１）が１点あり、「子」と判読した。

本遺構の所産期は、出土土器から奈良時代後葉に比定される。

３）第３号土坑

遺構（第328図）

Ｄ－３グリッドに位置する。

第37号住居址と重複関係を有し、第37号住居址を切って構築されている。

東西203cm、南北182cmを測り、平面プランは、不整な楕円形を呈する。

遺構覆土は、５層に区分され、自然堆積と考えられる。

長軸方位は、Ｎ－57°－Ｅを示す。

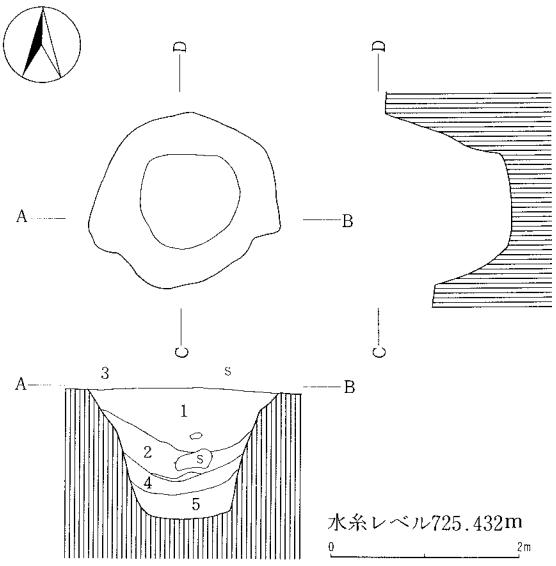
確認面からの深さは、141cmを測る。

遺物（第361・367図、図版72・77）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、石製品のほか、自然遺物としてタニシが第２～４層から出

土している。このうち、図示したものに黒色土器杯、須恵器杯・椀・甕、石製品がある。石製品（第367図63）は、滑石製の臼玉である。なお、タニシについては後述する。

本遺構の所産期は、重複関係・出土土器から奈良時代後葉に比定される。



層序説明
第1層　暗褐色土層(10YR3/3)φ0.5～2.0cmのパミスを含む
第2層　黒褐色土層(10YR2/3)第1層に比しパミスの良は少ない。タニシ混入
第3層　黒褐色土層(10YR2/2)灰層。タニシを少し含む
第4層　黒褐色土層(10YR3/2)φ0.5cmのパミスを含む。タニシ混入
第5層　黒褐色土層(7.5YR3/2)φ0.5～1.0cmのパミスを含み、ローム ブロックを僅かに含む

第328図　第3号土坑実測図

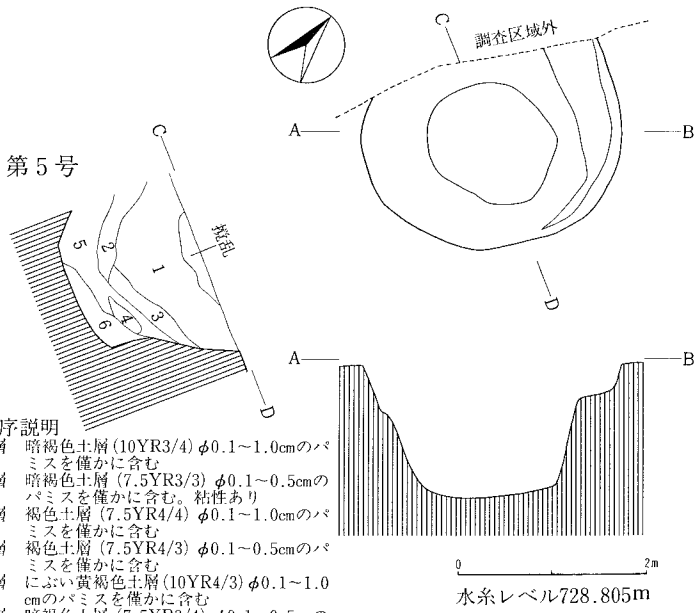
4）第4号土坑

遺構（第329図、図版24）

H－5グリッドに位置する。

第5号溝址と重複関係を有し、第5号溝址に切られている。

東西は調査し得た範囲で204cm、南北275cmを測り、平面プランは、楕円形を呈する。長軸方位は、N－13°－Eを示す。遺構覆土は、6層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの深さは、142cmを測る。



層序説明
第1層　暗褐色土層(10YR3/4)φ0.1～1.0cmのパミスを僅かに含む
第2層　暗褐色土層（7.5YR3/3）φ0.1～0.5cmのパミスを僅かに含む。粘性あり
第3層　褐色土層（7.5YR4/4）φ0.1～1.0cmのパミスを僅かに含む
第4層　褐色土層（7.5YR4/3）φ0.1～0.5cmのパミスを僅かに含む
第5層　にぶい黄褐色土層(10YR4/3)φ0.1～1.0cmのパミスを僅かに含む
第6層　暗褐色土層（7.5YR3/4）φ0.1～0.5cmのパミスを僅かに含む

第329図　第4号土坑実測図

遺物（第361・362・369図、図版72・73・79）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、石製品、人骨が出土している。このうち、図示したものに黒色土器杯、須恵器椀・長頸壺、石製品がある。黒色土器杯（第361図1）は、漆入れの容器として使用されていたと考えられ、内面にふた紙が認められた。このふた紙は漆紙文書であることが判明した。なお、詳細については後述する。石製品（第369図3）は、軽石製の紡錘車で、重さ148gを量る。

本遺構の所産期は、出土土器から奈良時代後葉に比定される。

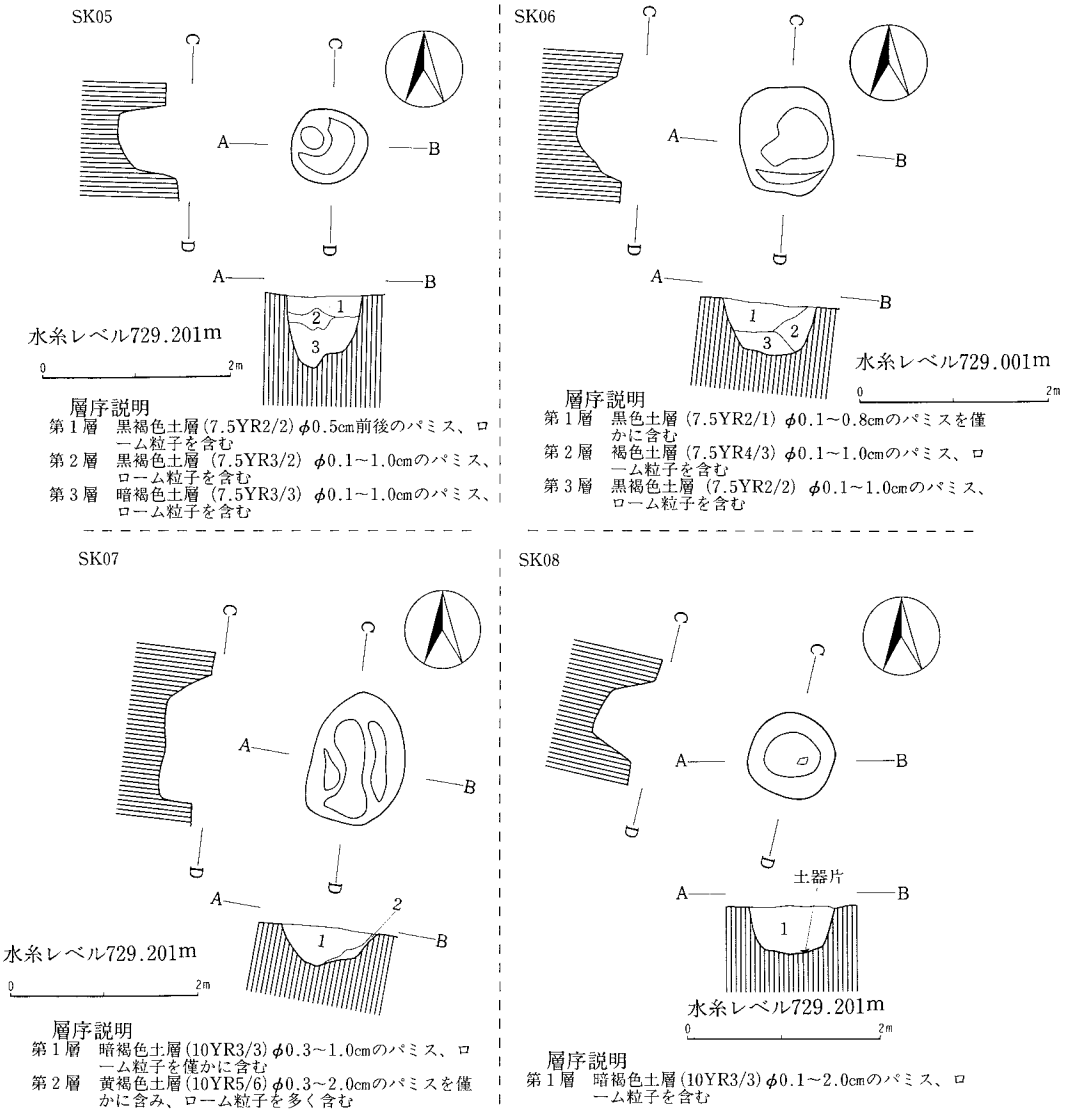
5）第5号土坑

遺構（第330図、図版24）

H－3グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。東西80cm、南北80cmを測り、平面プランは、円形を呈する。長軸方位は、N－4°－Eを示す。遺構覆土は、3層に区分される。確認面からの深さは、75cmを測る。

遺物（第359図、図版70）

土師器片、黒色土器片が出土している。図示したものに黒色土器杯がある。本遺構の所産期は、平安時代に比定される。



第330図　第5～8号土坑実測図

本遺構の所産期は、出土土器から平安時代以降と考えられる。

6）第6号土坑

遺構（第330図、図版24）

H－2グリッドに位置する。第80号掘立柱建物址と重複関係を有し、第80号掘立柱建物址を切っている。東西98cm、南北116cmを測り、平面プランは、楕円形を呈する。

長軸方位は、N－4°－Eを示す。遺構覆土は、3層に区分される。確認面からの深さは、54cmを測る。

遺物

出土遺物は皆無であり、本遺構の所産期についても明確でない。

7）第7号土坑

遺構（第330図、図版24）

H－2グリッドに位置する。第72号掘立柱建物址と重複関係を有する。

東西98cm、南北140cmを測り、平面プランは、楕円形を呈する。

長軸方位は、N－9°－Eを示す。遺構覆土は、2層に区分される。確認面からの深さは、42cmを測る。

遺物

出土遺物は皆無であり、本遺構の所産期についても明確でない。

8）第8号土坑

遺構（第330図、図版24）

H－2グリッドに位置する。第77号掘立柱建物址と重複関係を有する。

東西89cm、南北90cmを測り、平面プランは、不整な円形を呈する。

長軸方位は、N－10°－Eを示す。遺構覆土は、暗褐色（10YR3/3）土層、1層である。

確認面からの深さは、51cmを測る。

遺物

土師器片、黒色土器杯の破片が出土しているが、6片と僅少である。

本遺構の所産期は、出土土器片から古墳時代後期以降と考えられる。

(5) 遺構外出土遺物

遺物（第359・362・367・369・373・376・377図、図版70・73・77・79・82・85・86）

遺構外出土遺物で図示し得たものには、縄文土器、土師器、黒色土器、須恵器、土製品、石製品、鉄製品、銭貨がある。また、自然流路出土遺物もここで扱う。

土師器には、杯（第362図１）と小型甕（12）がある。土師器杯は、底部外面が手持ちヘラケズリされるもので、奈良時代の所産である。小型甕は、肩部から胴部外面がハケメ調整されるもので、古墳時代後期から奈良時代の所産であろう。

須恵器杯（第362図２～５）には、底部糸切り後外周手持ちヘラケズリされるもの（２）、糸切り未調整のもの（３・４）、ヘラキリ未調整のもの（５）がある。

須恵器円面硯（第362図６）は、Ｄ－５グリッドから出土したもので、在地窯産と考えられる。

また、第362図11は、須恵器杯を朱墨硯に転用したものである。

墨書土器（第362図７～10）は４点出土しており、いずれも黒色土器の外面に墨書がなされる。

このうち、10は「喜」と判読できたが、他の３点は不明である。

また、拓影図（第367図）では、縄文土器、弥生時代後期～古墳時代初頭の土器を示した。

縄文土器(27)は、後期の所産であろう。弥生時代後期～古墳時代初頭のものには、甕肩部破片（26）とＴ字文の施された壺頸部破片（28）がある。

土製品には、紡錘車（第369図５）と鞴羽口（第369図７）がある。

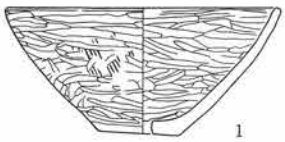
石製品には、打製石鏃（第376図７・８）、打製石斧（第377図11・12）、軽石製の凹石・石臼（第373図７・８）、滑石製勾玉（第367図67）と臼玉（第367図65・66）がある。打製石鏃はいずれも黒曜石製、打製石斧は粘板岩製（11）と砂岩製（12）である。

鉄製品（第367図）には、釘（12・13）、鉄鏃（15）、紡錘車の紡軸と考えられるもの（14）がある。

銭貨（第367図22）は、「富寿神宝」（弘仁９年（818））である。

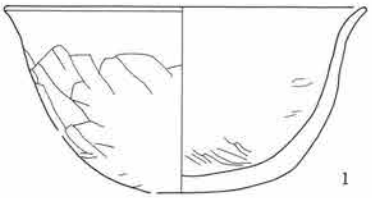
以上のほか、自然流路出土遺物で図示したものに、黒色土器高杯脚部（第359図１）と軽石製紡錘車（第369図４）、滑石製臼玉（第373図64）がある。紡錘車は、重さ150ｇを量る。

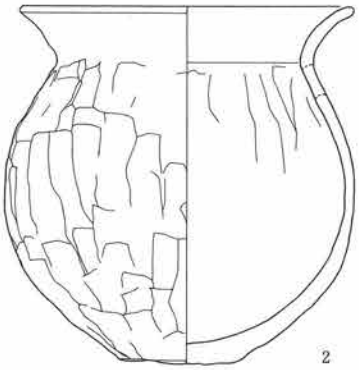
第1号住居址

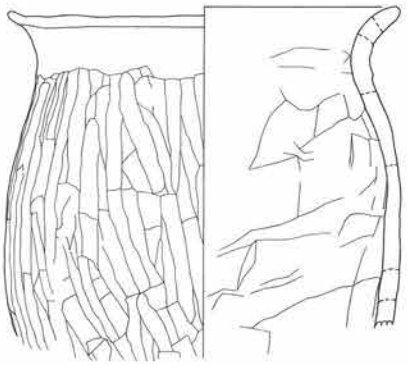


第2号住居址

第3号住居址

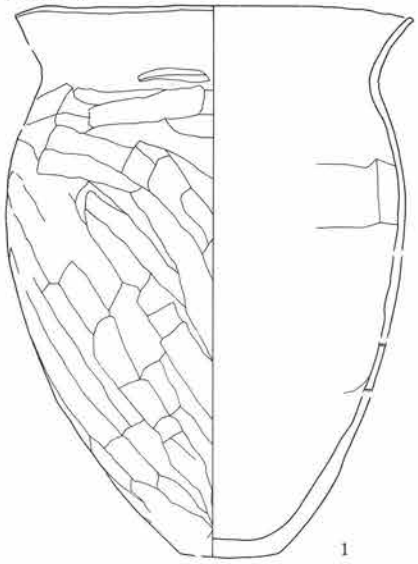


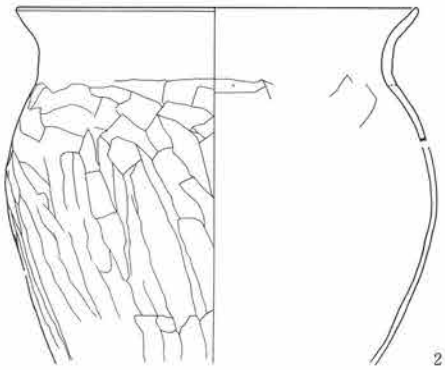




第4号住居址

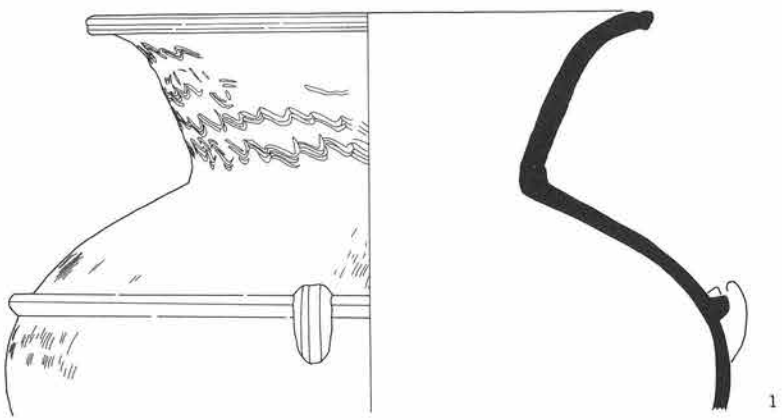
第5号住居址



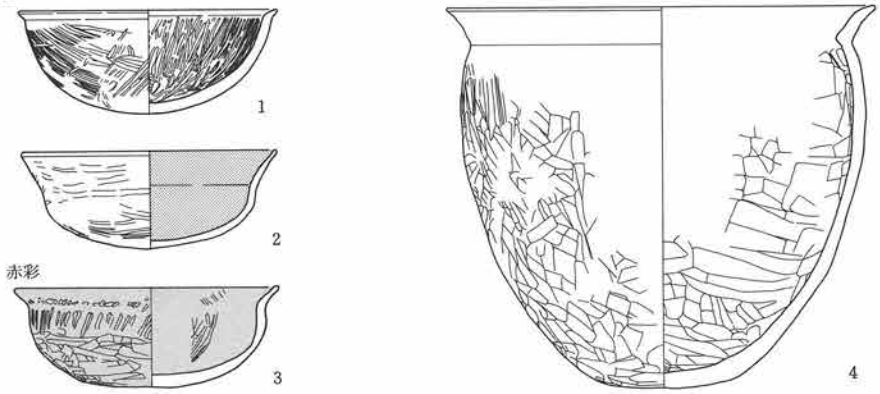


第331図　第1～5号住居址出土土器実測図

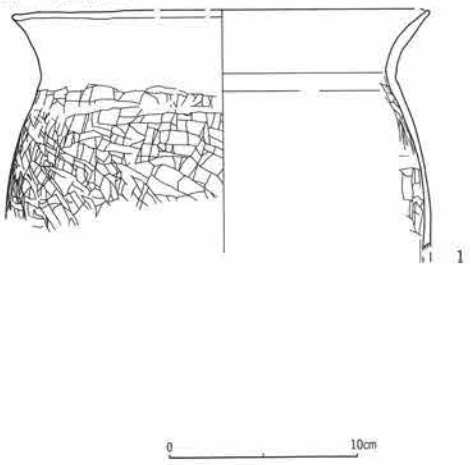
第5号住居址



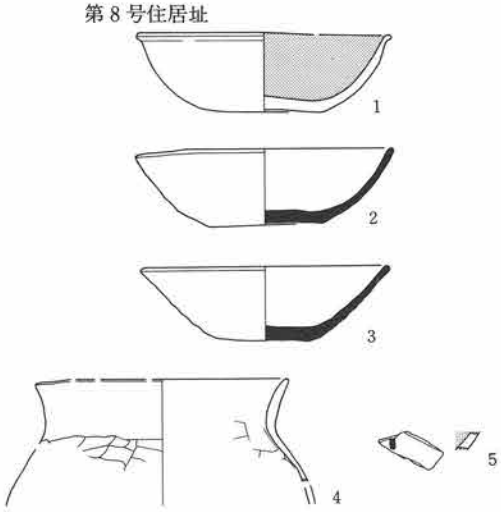
第6号住居址



第7号住居址

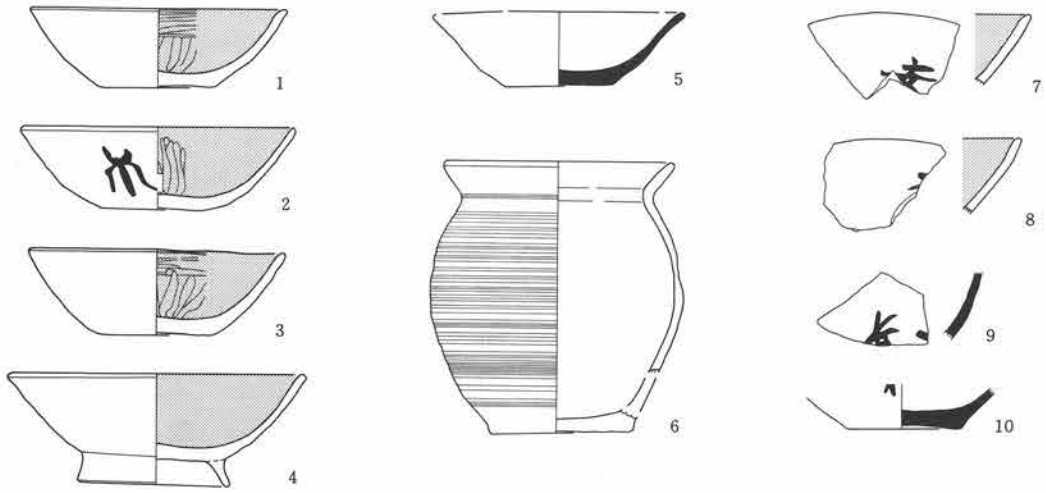


第8号住居址

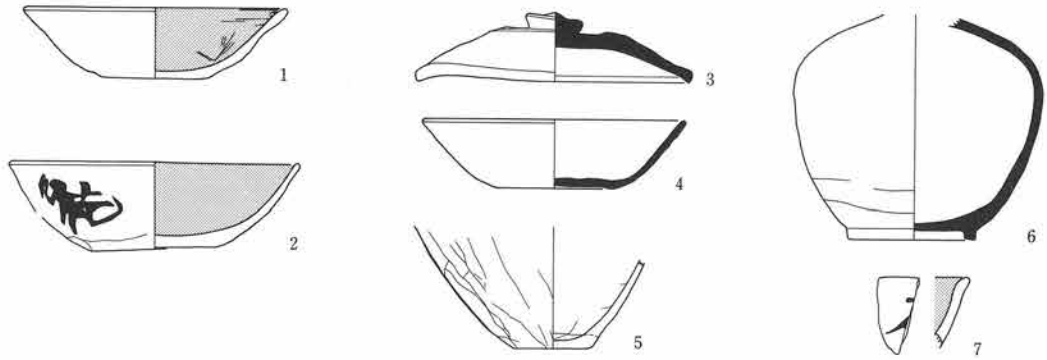


第332図　第5～8号住居址出土土器実測図

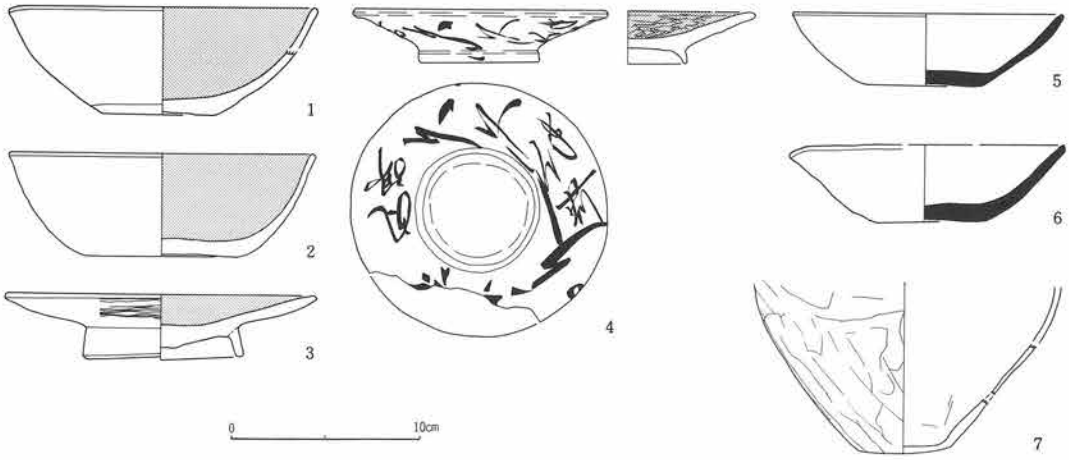
第9号住居址



第10号住居址

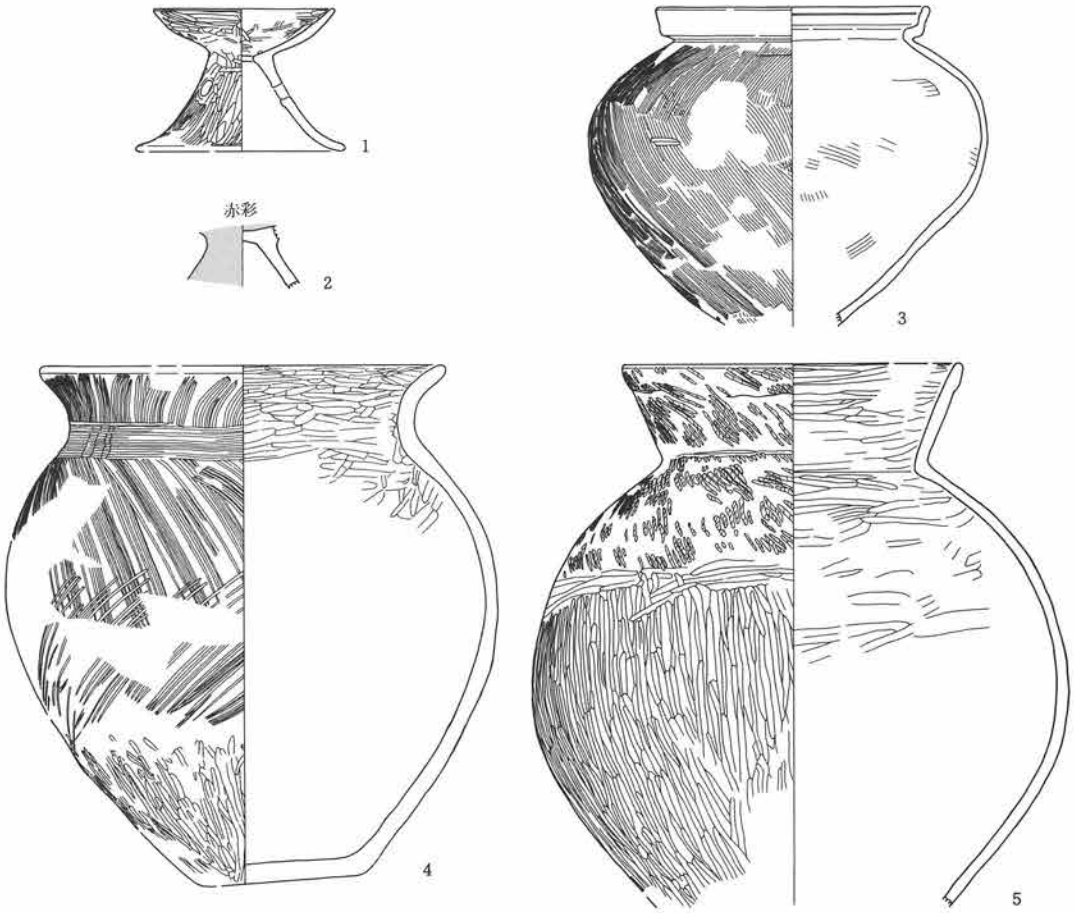


第11号住居址

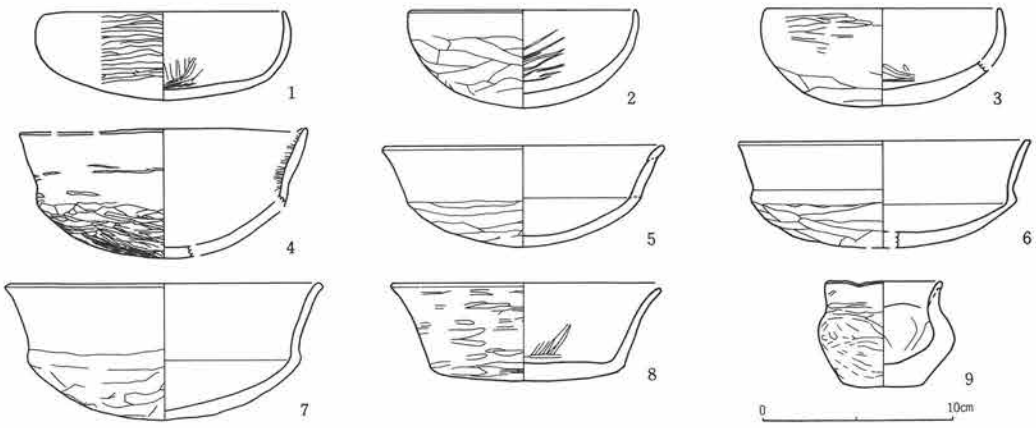


第333図　第9～11号住居址出土土器実測図

第13号住居址

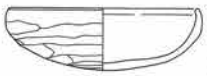


第14号住居址

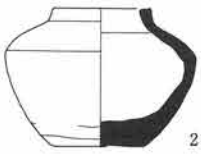


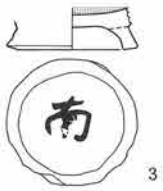
第334図　第13・14号住居址出土土器実測図

第16号住居址

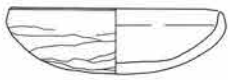


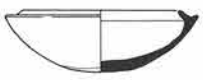
第19号住居址

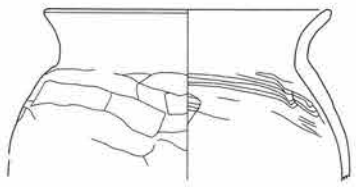


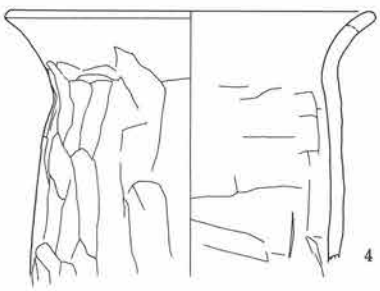


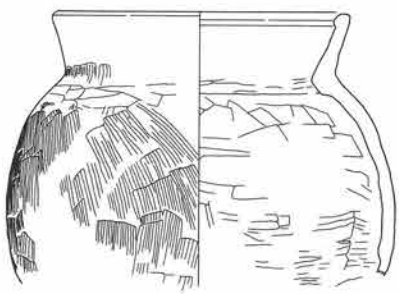
第20号住居址



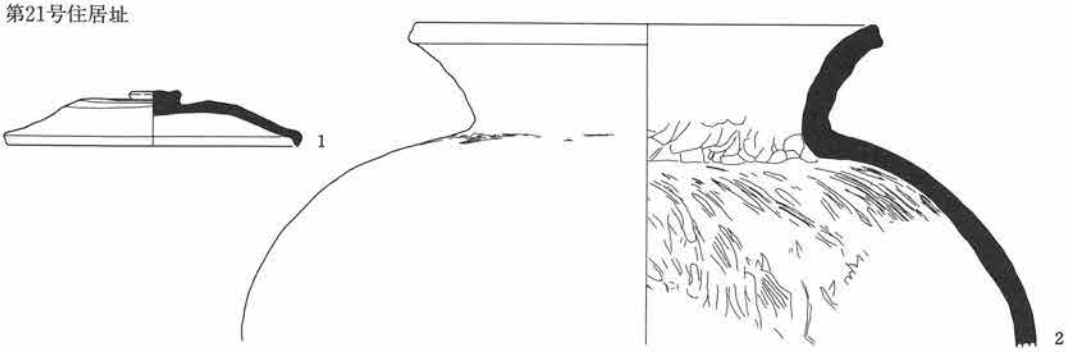








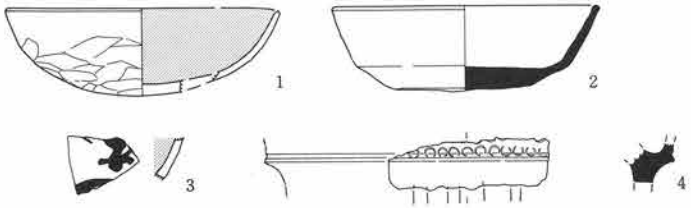
第21号住居址



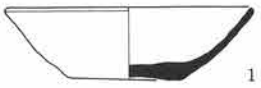
第22号住居址

第335図　第16・19～22号住居址出土土器実測図

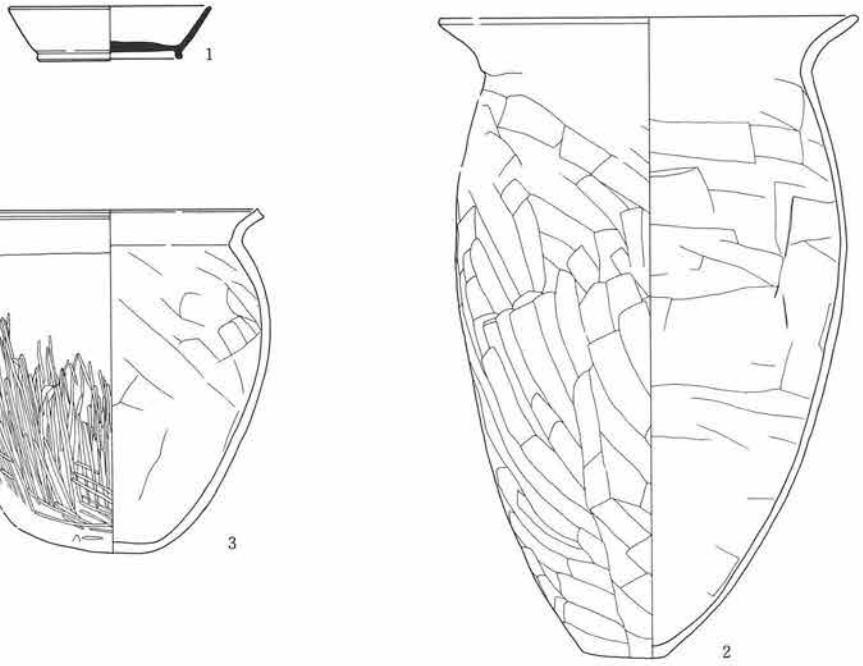
第23号住居址



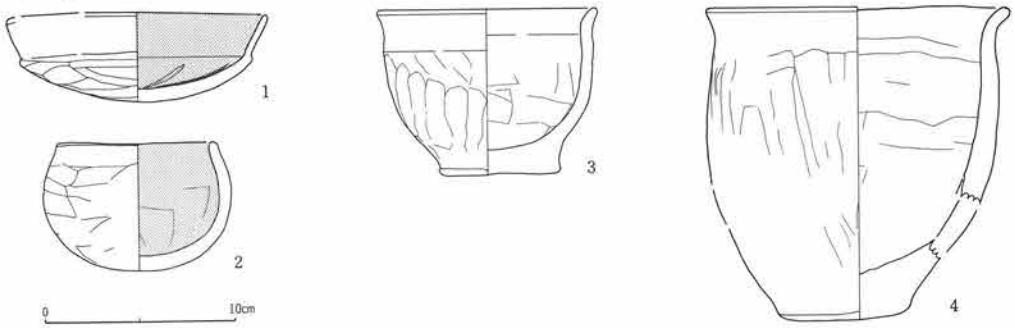
第24号住居址



第25号住居址

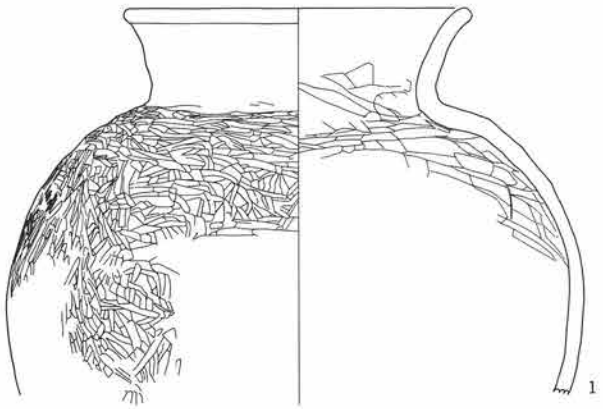


第26号住居址



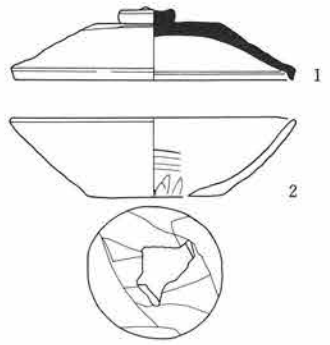
第336図　第23～26号住居址出土土器実測図

第26号住居址

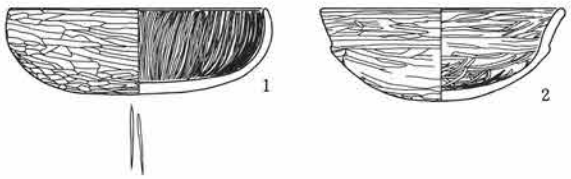


第28号住居址

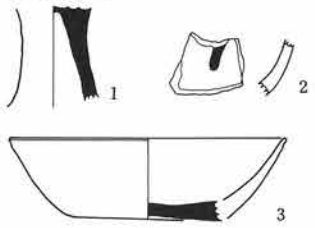
第29号住居址



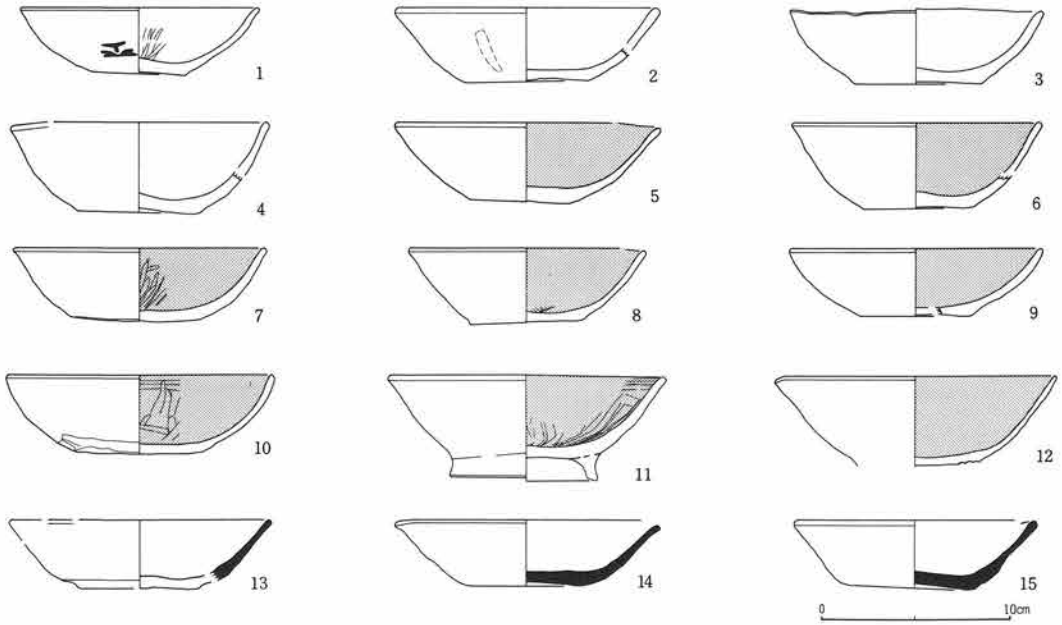
第30号住居址



第31号住居址

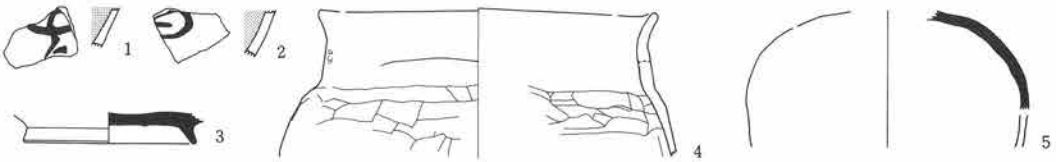


第32号住居址

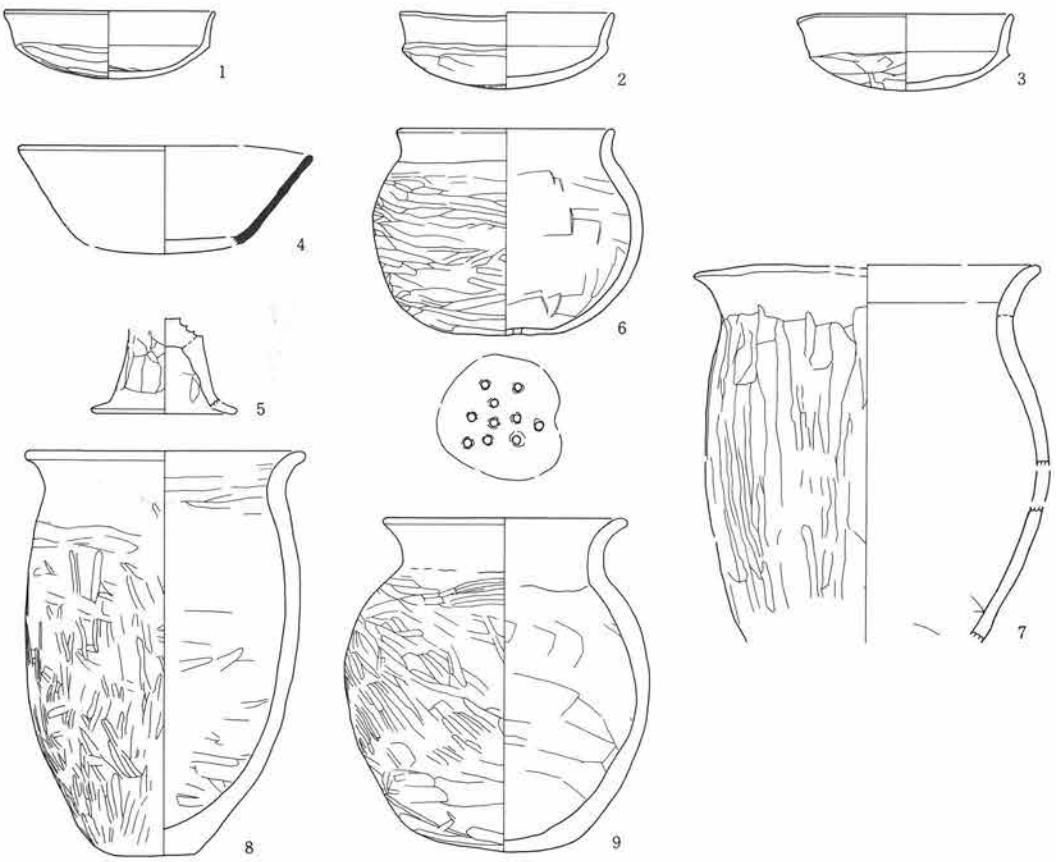


第337図　第26・28～32号住居址出土土器実測図

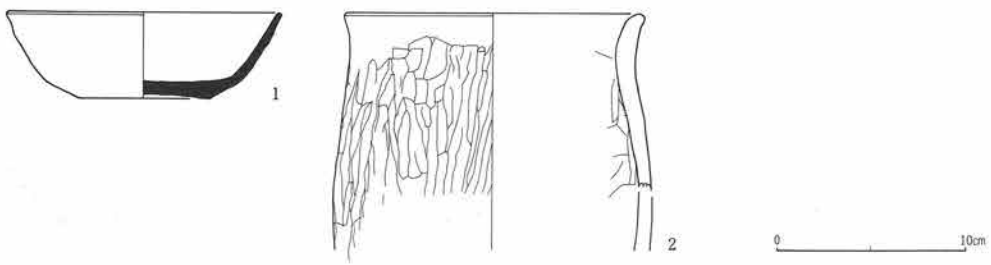
第32号住居址



第33号住居址



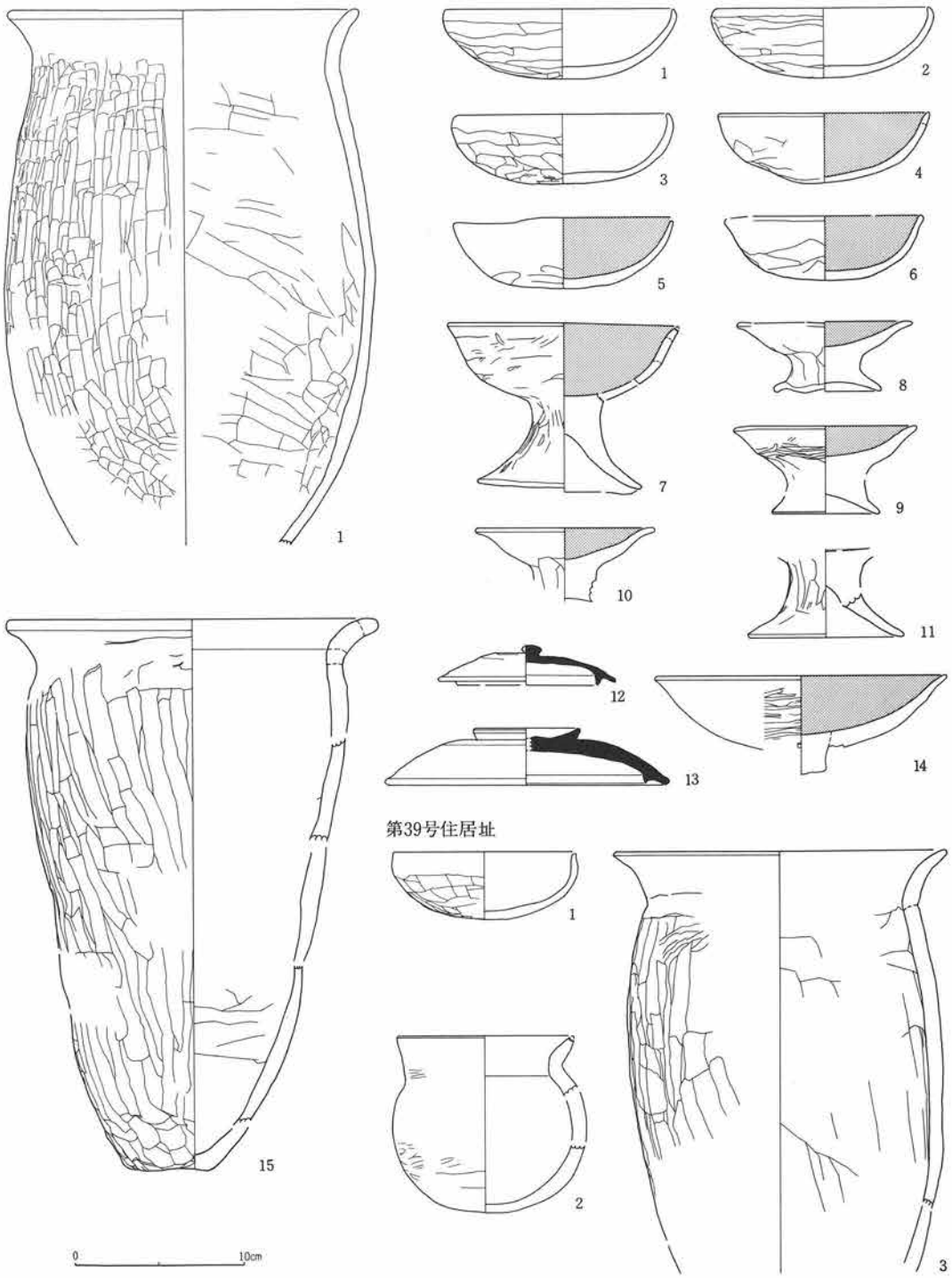
第37号住居址



第338図　第32・33・37号住居址出土土器実測図

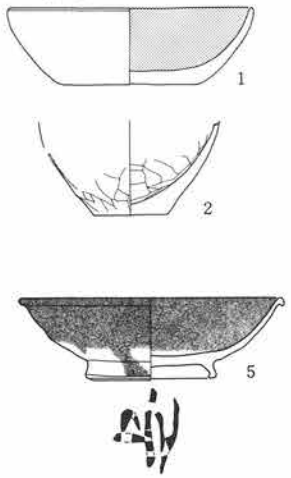
第37号住居址

第38号住居址

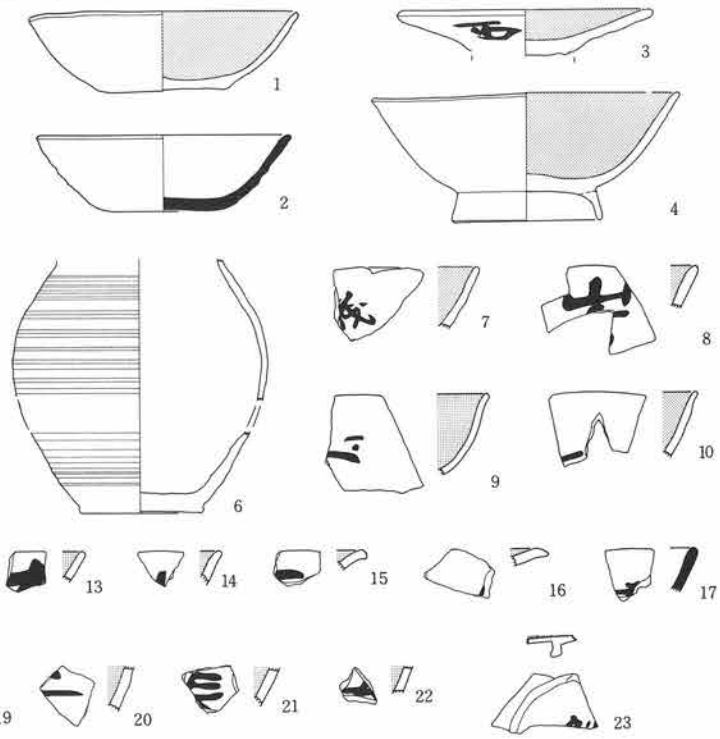


第339図　第37～39号住居址出土土器実測図

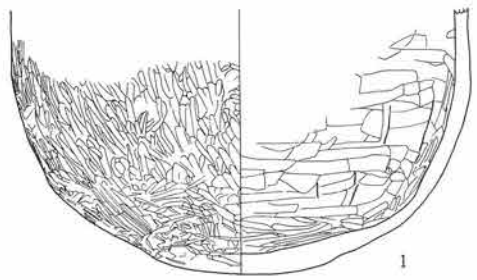
第40号住居址



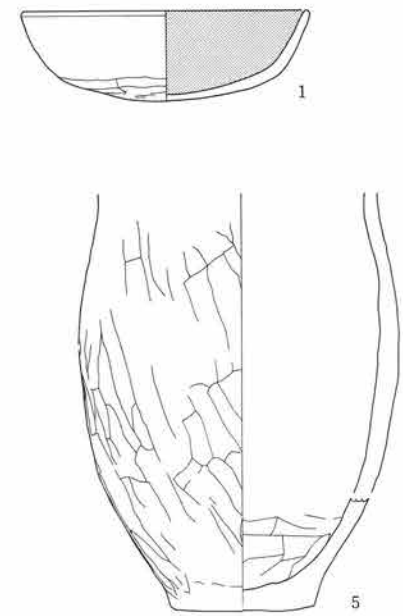
第41号住居址



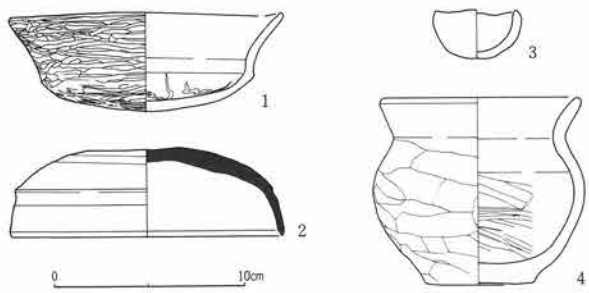
第42号住居址



第43号住居址

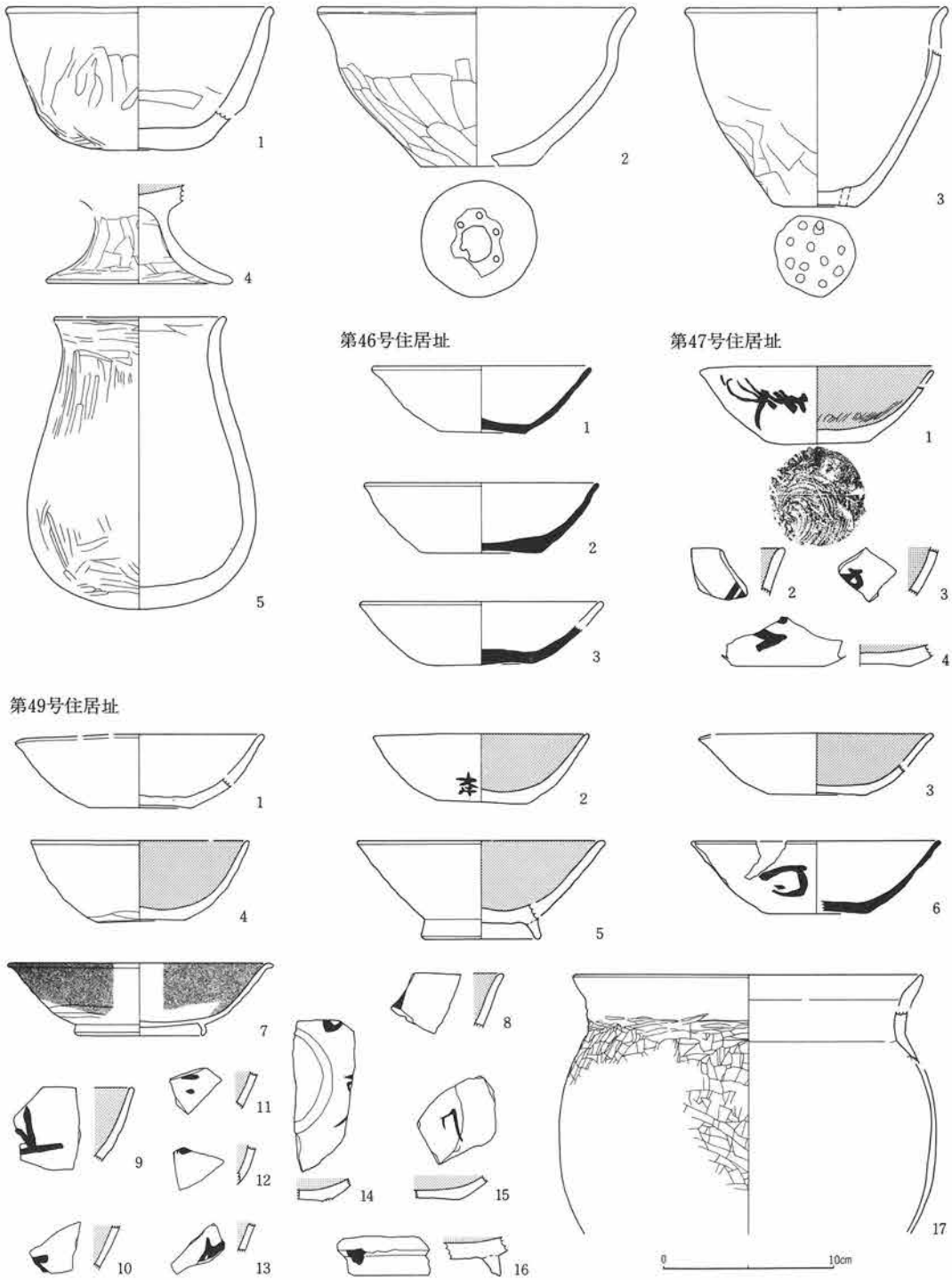


第44号住居址

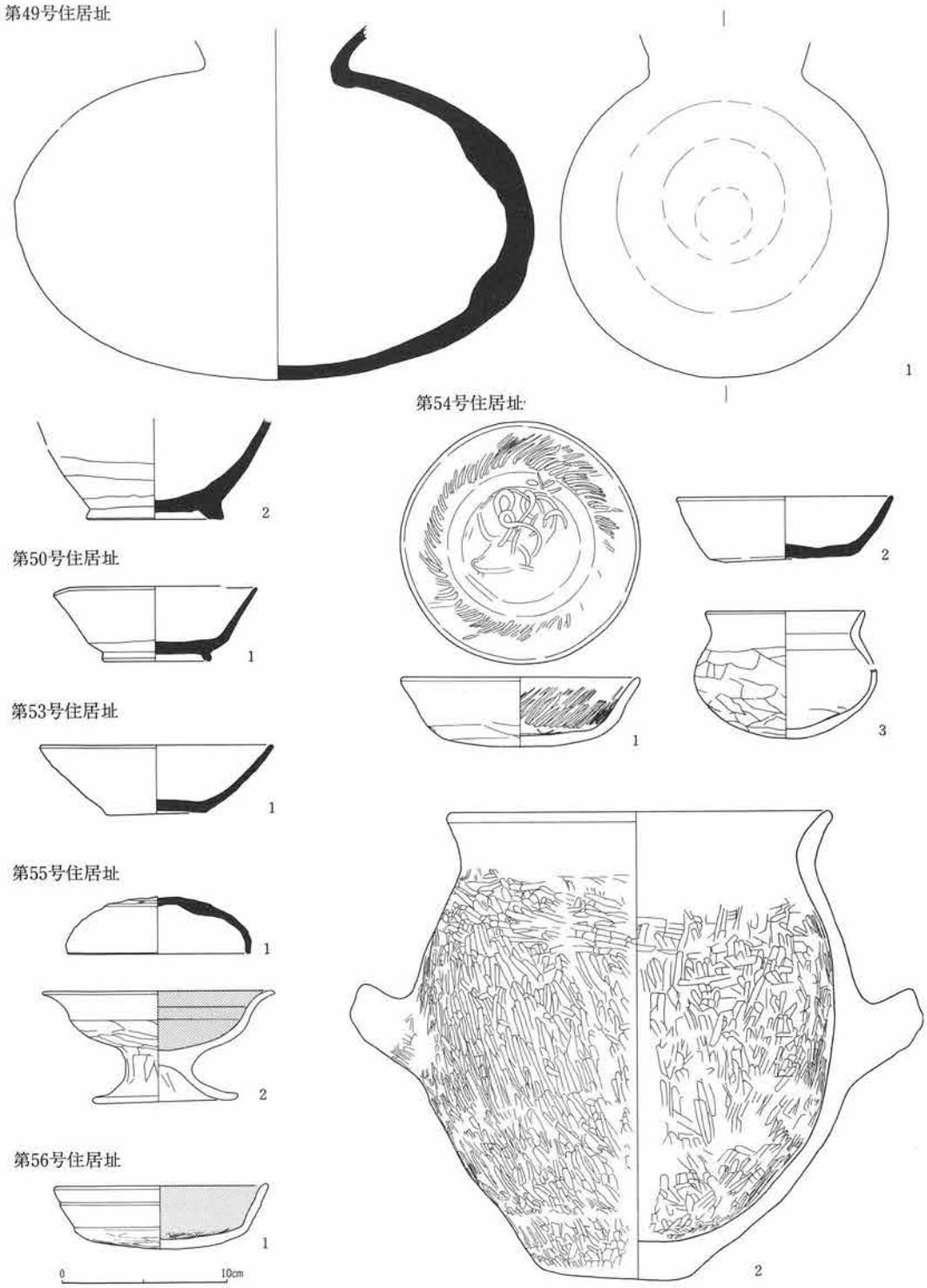


第340図　第40～44号住居址出土土器実測図

第45号住居址



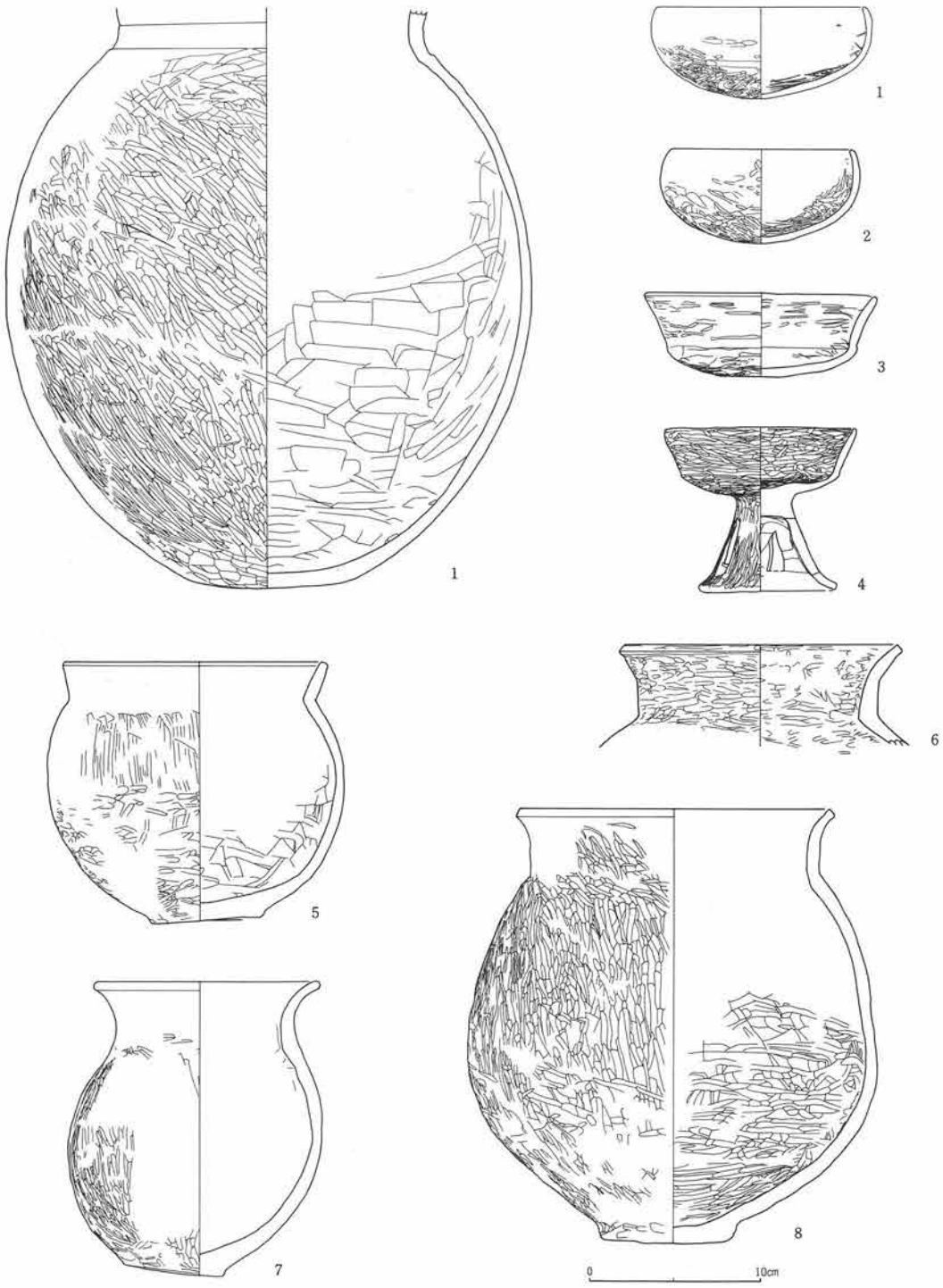
第341図　第45～47・49号住居址出土土器実測図



第342図　第49・50・53～56号住居址出土土器実測図

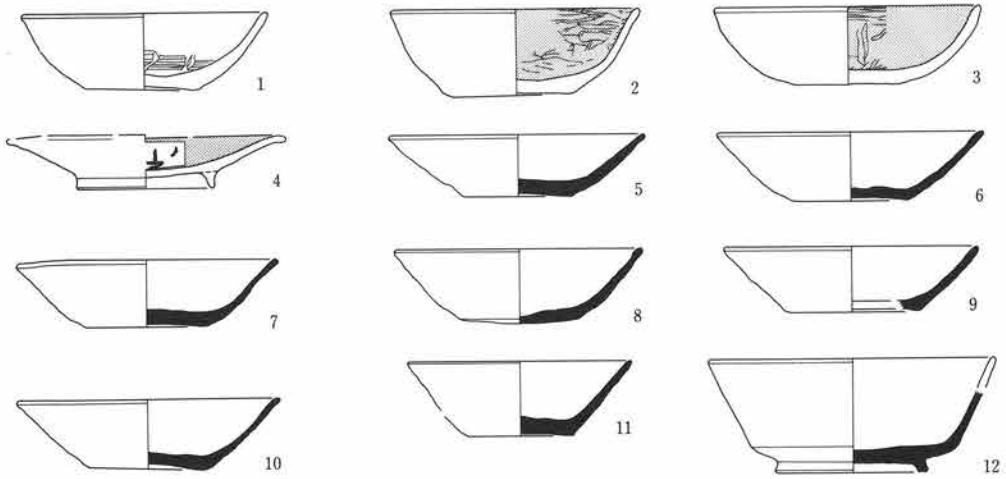
第56号住居址

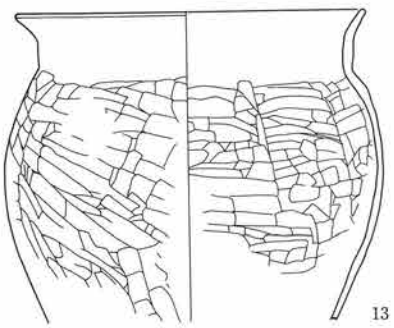
第60号住居址

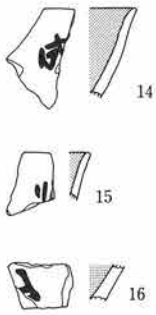


第343図　第56・60号住居址出土土器実測図

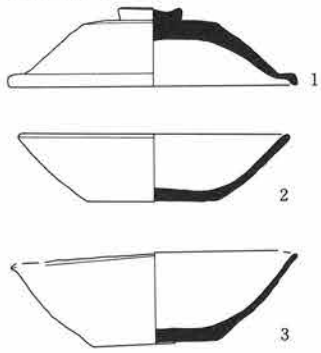
第62号住居址

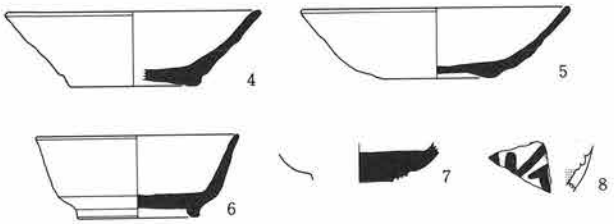




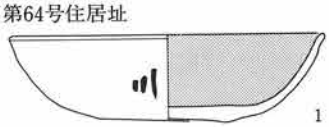


第63号住居址

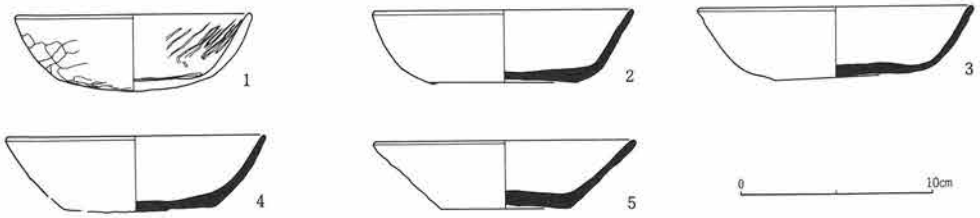




第64号住居址

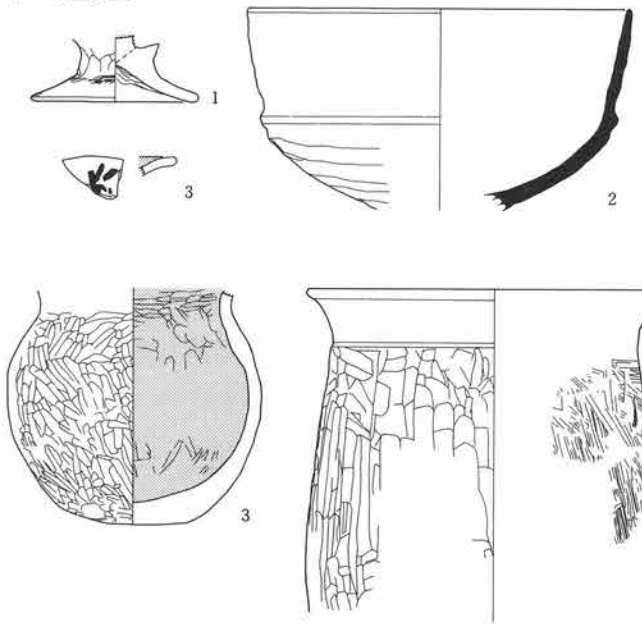


第65号住居址

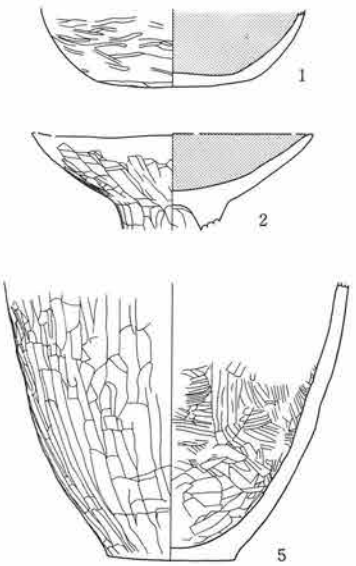


第344図　第62～65号住居址出土土器実測図

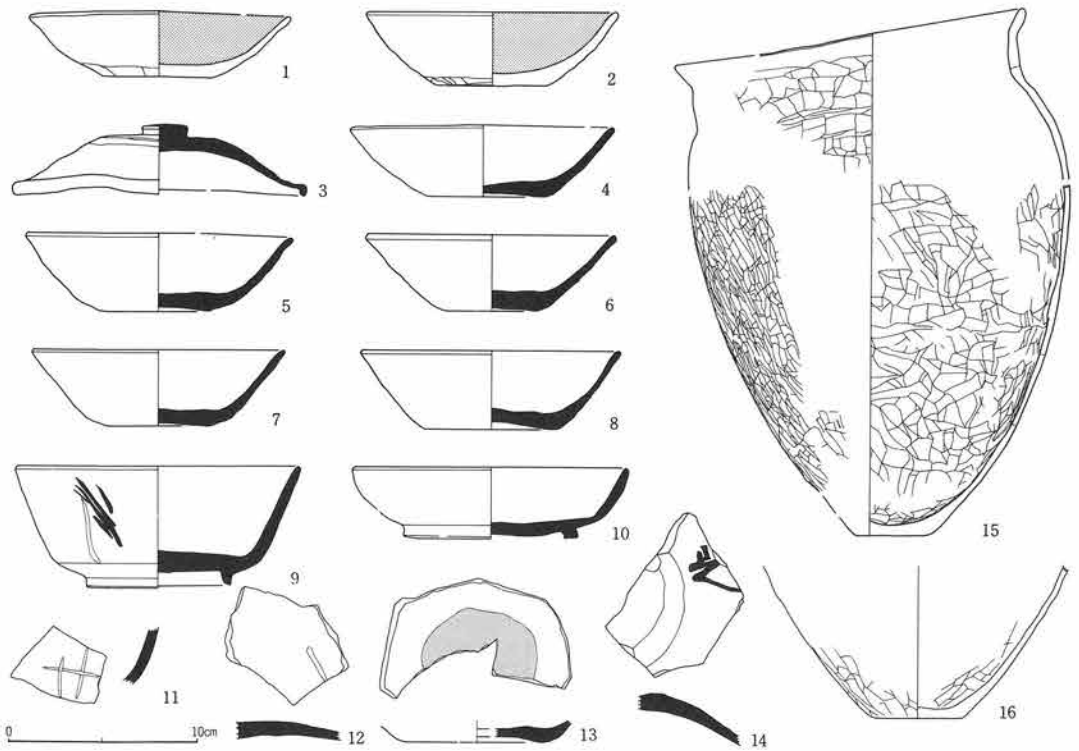
第65号住居址



第66号住居址

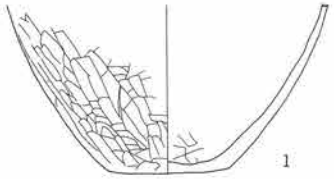


第67号住居址

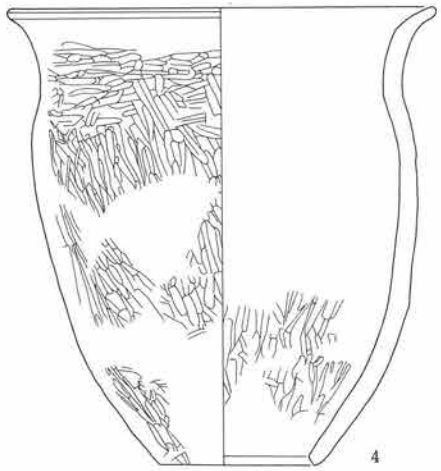


第345図　第65～67号住居址出土土器実測図

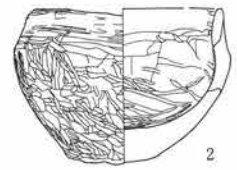
第67号住居址

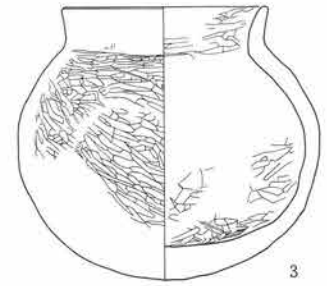


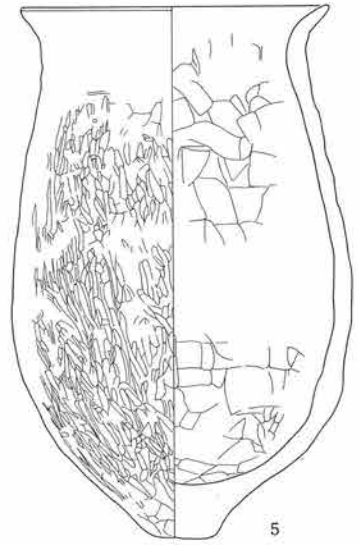
第68号住居址



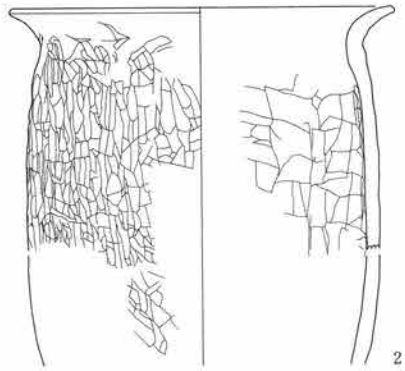
第69号住居址



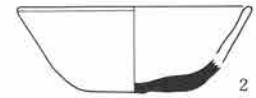


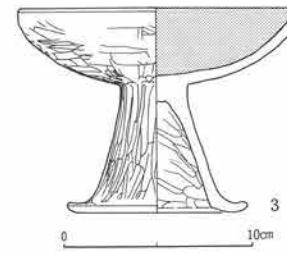


第70号住居址



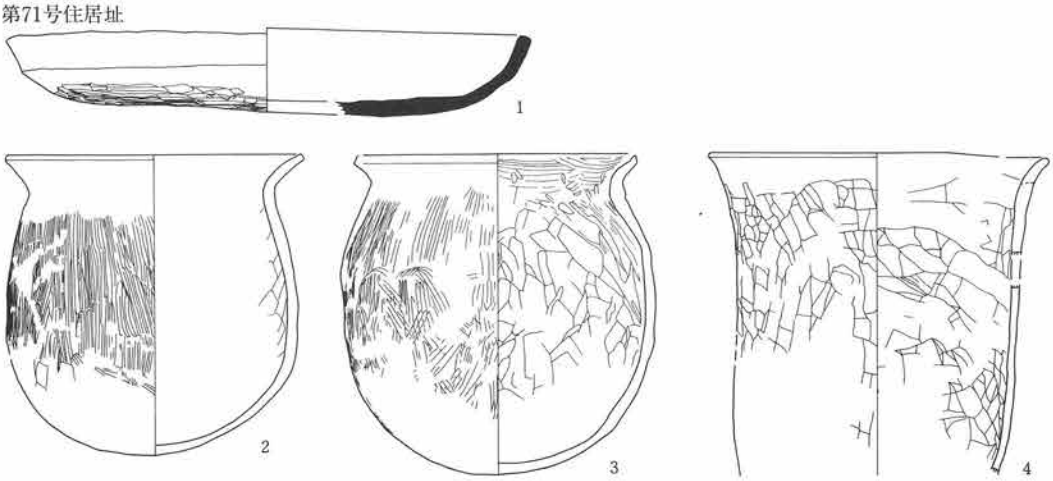
第71号住居址



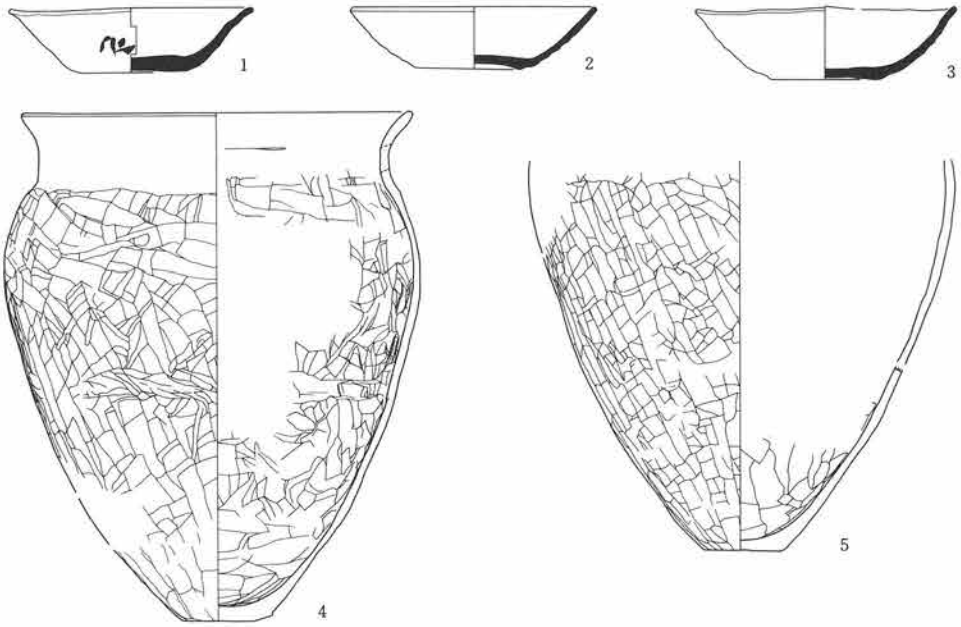


第346図　第67～71号住居址出土土器実測図

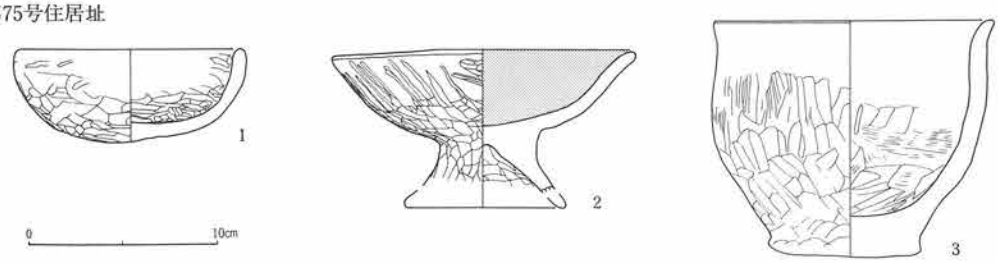
第71号住居址



第74号住居址



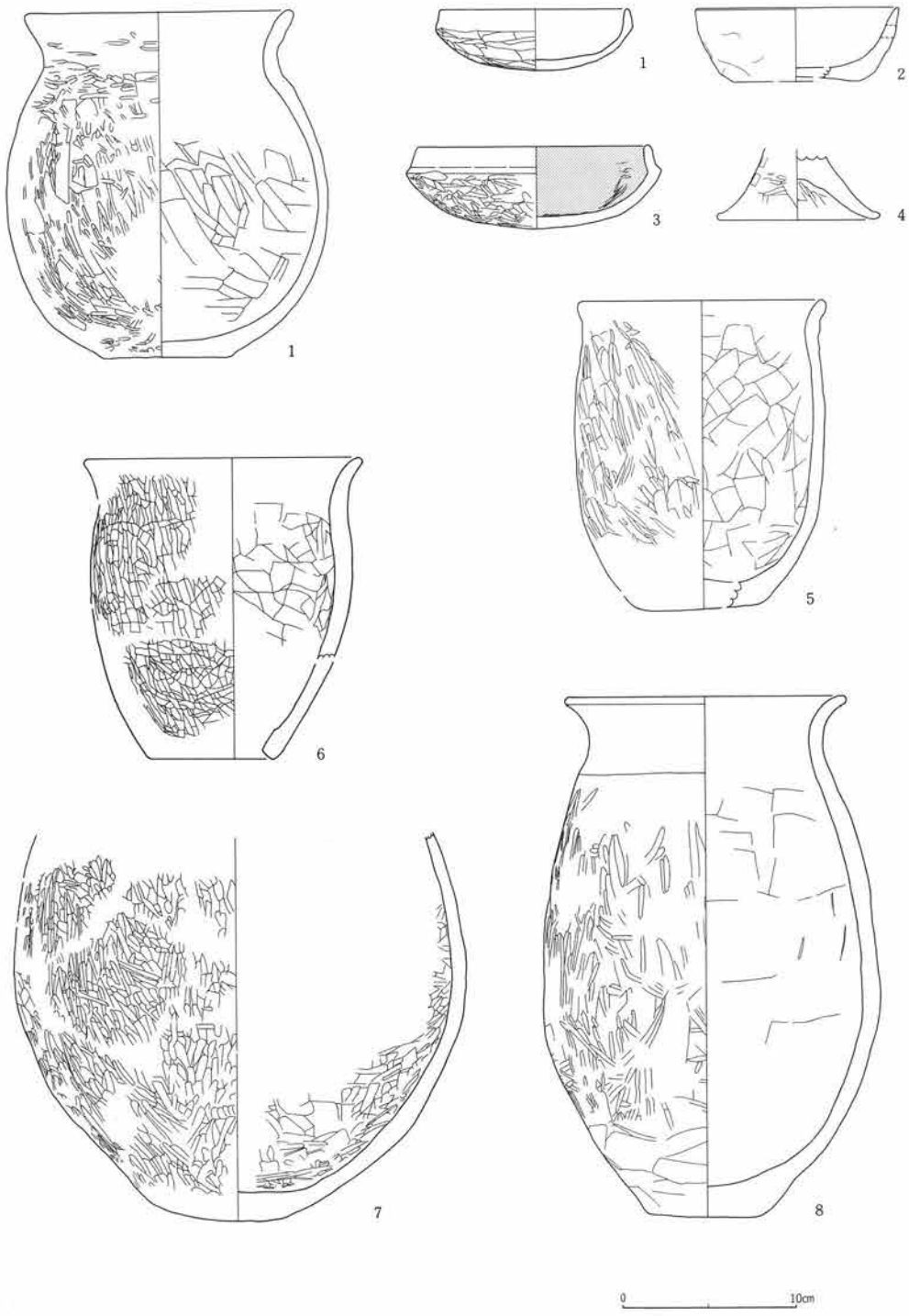
第75号住居址



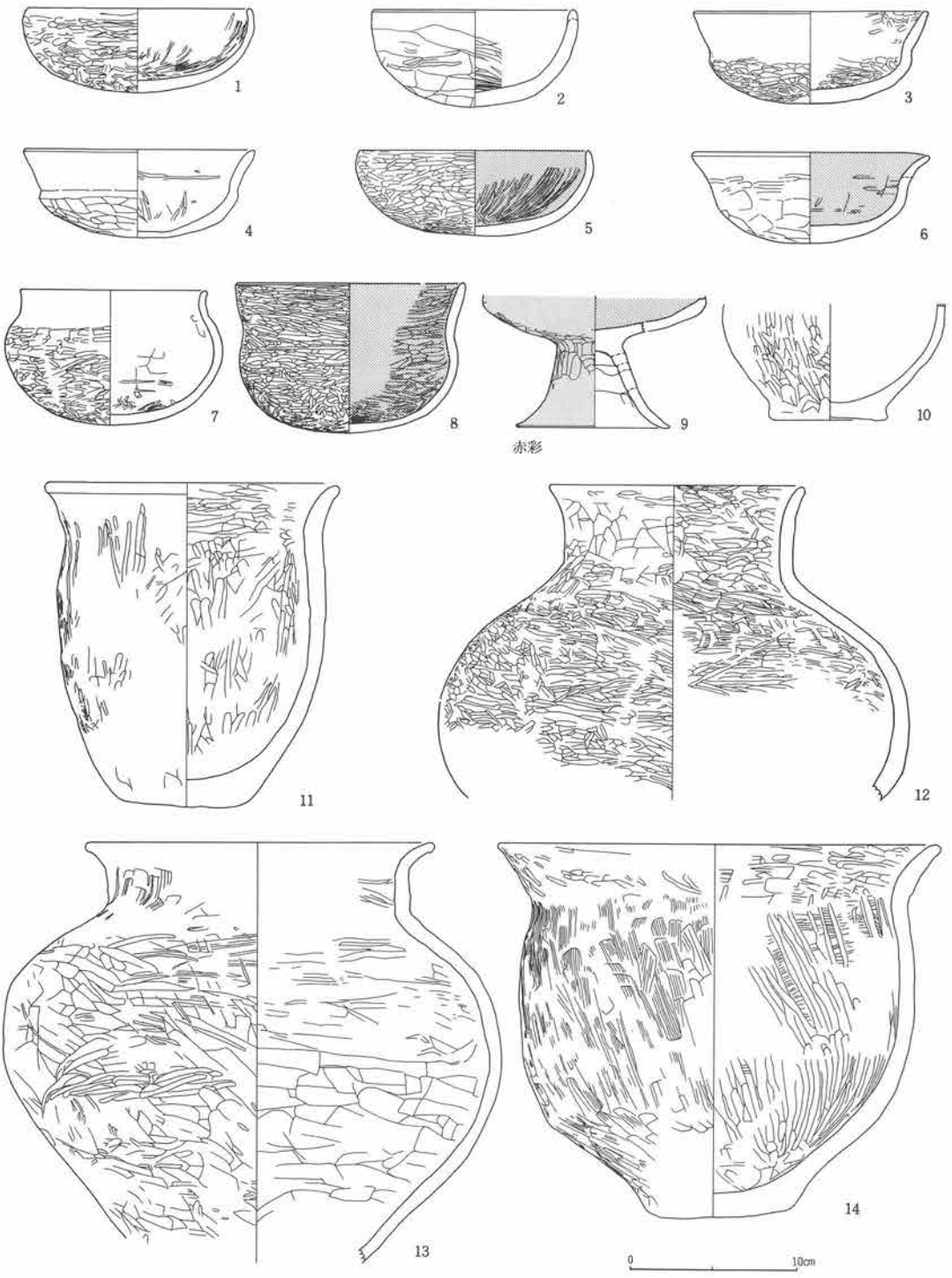
第347図　第71・74・75号住居址出土土器実測図

第75号住居址

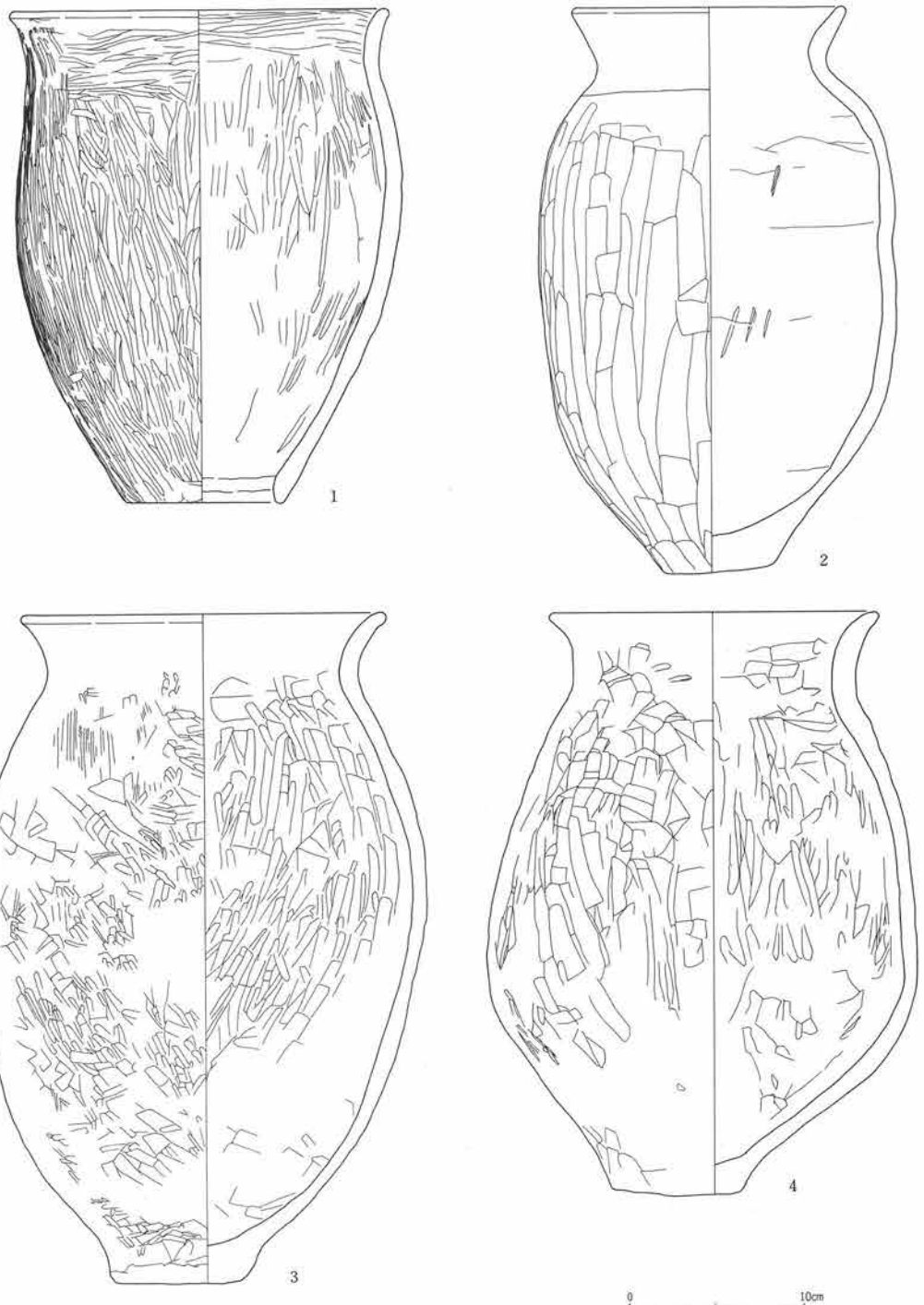
第76号住居址



第348図　第75・76号住居址出土土器実測図

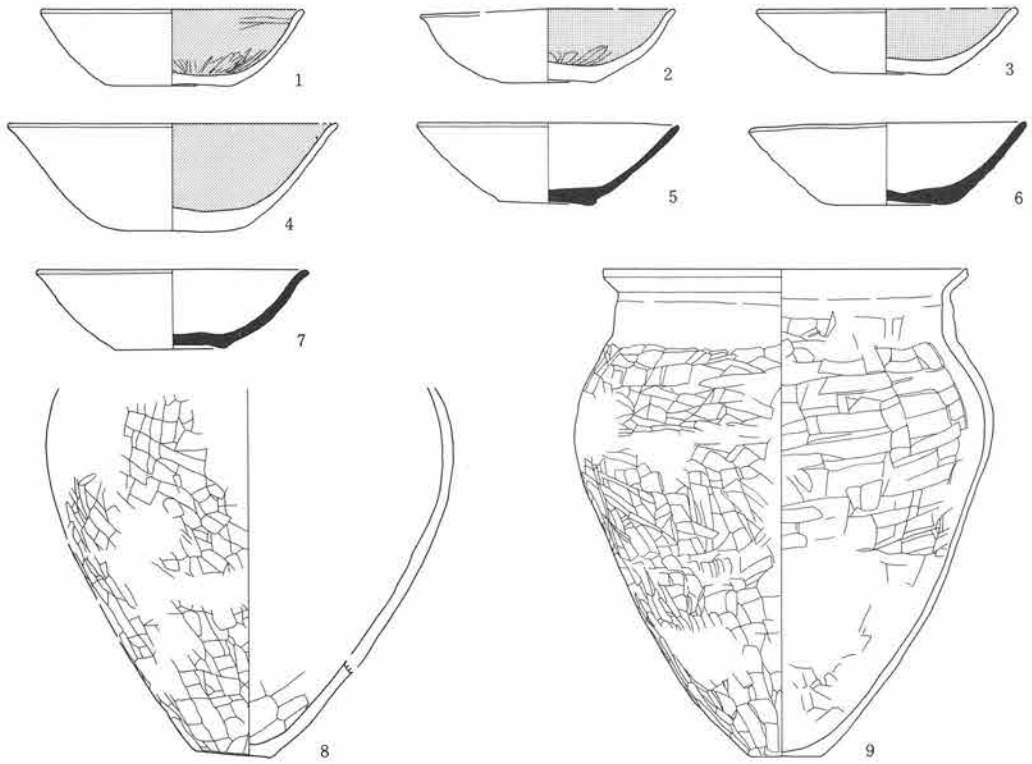


第349図　第77号住居址出土土器実測図

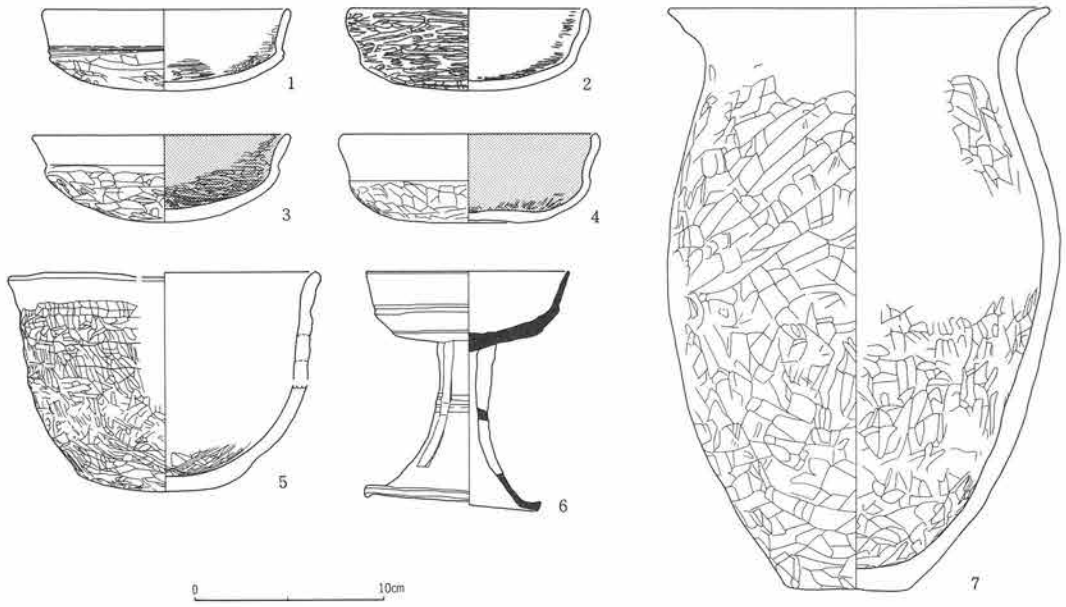


第350図　第77号住居址出土土器実測図

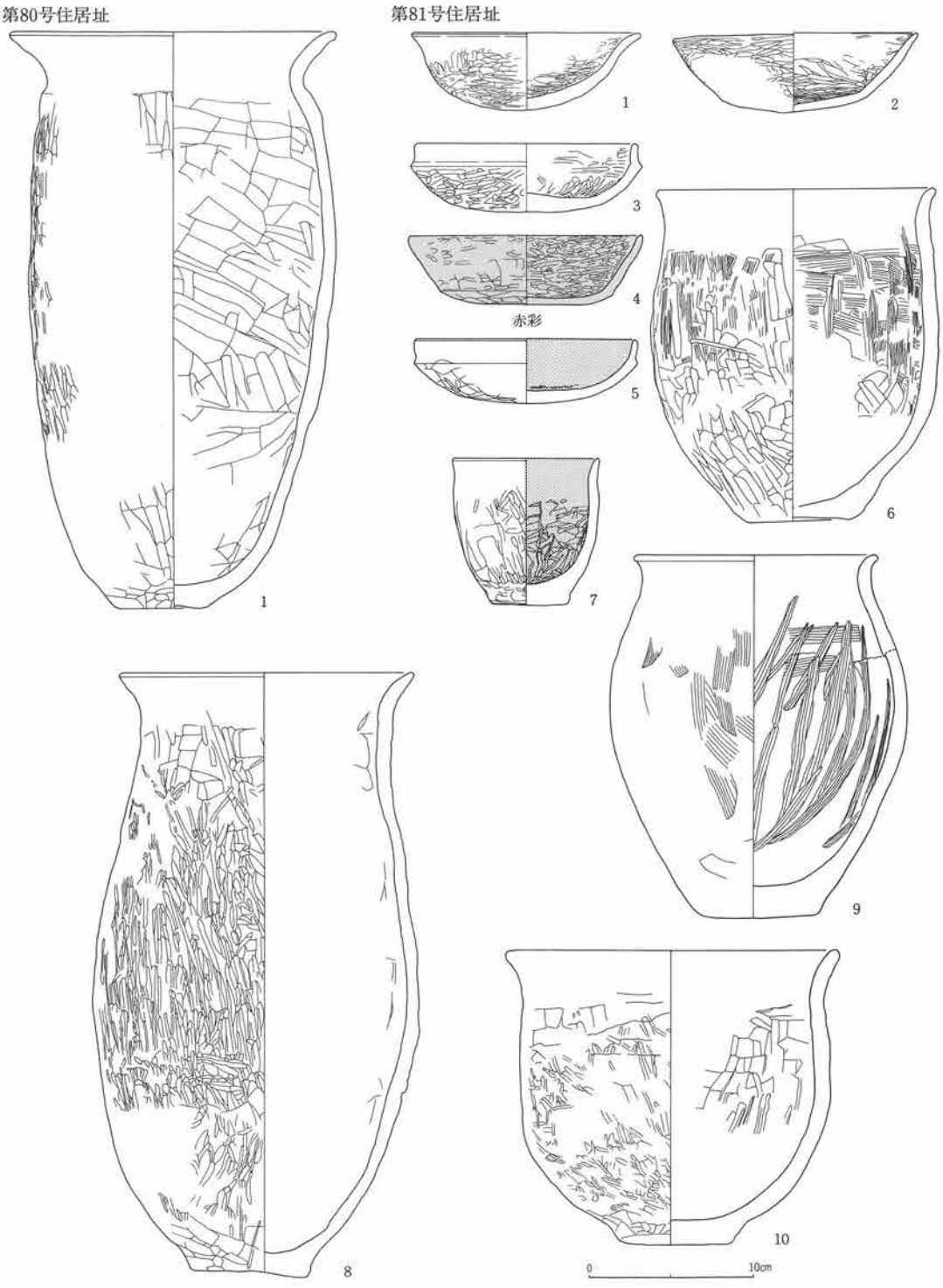
第78号住居址



第80号住居址

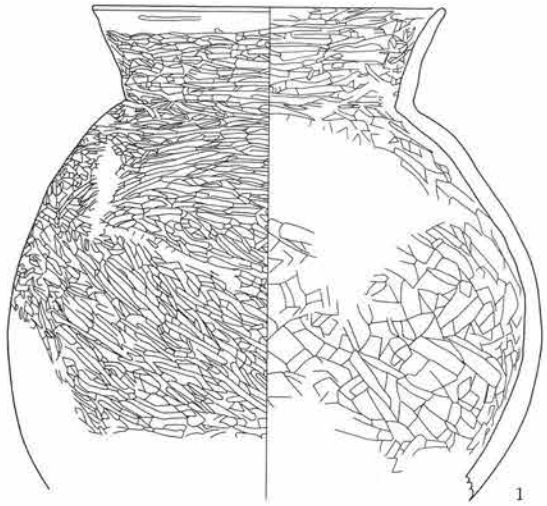


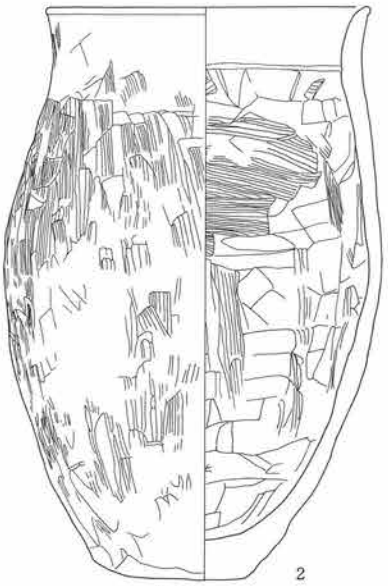
第351図　第78・80号住居址出土土器実測図



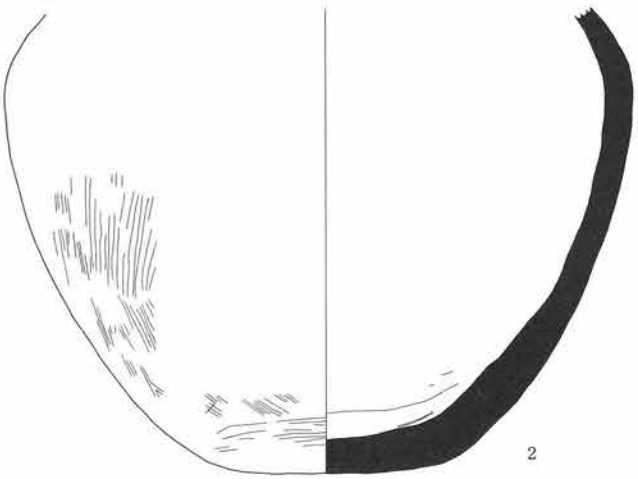
第352図　第80・81号住居址出土土器実測図

第81号住居址

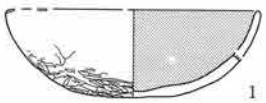




第83号住居址

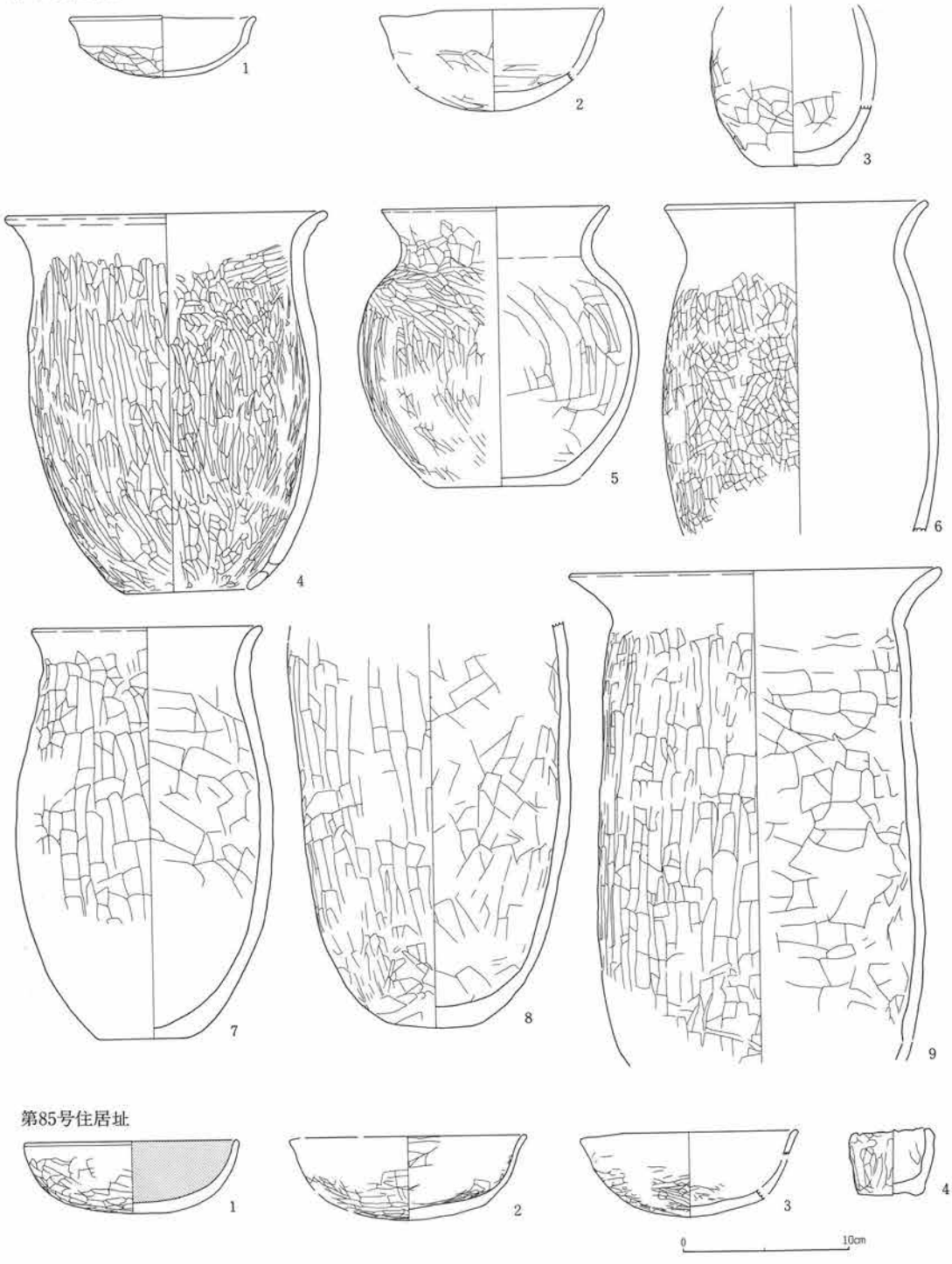


第82号住居址



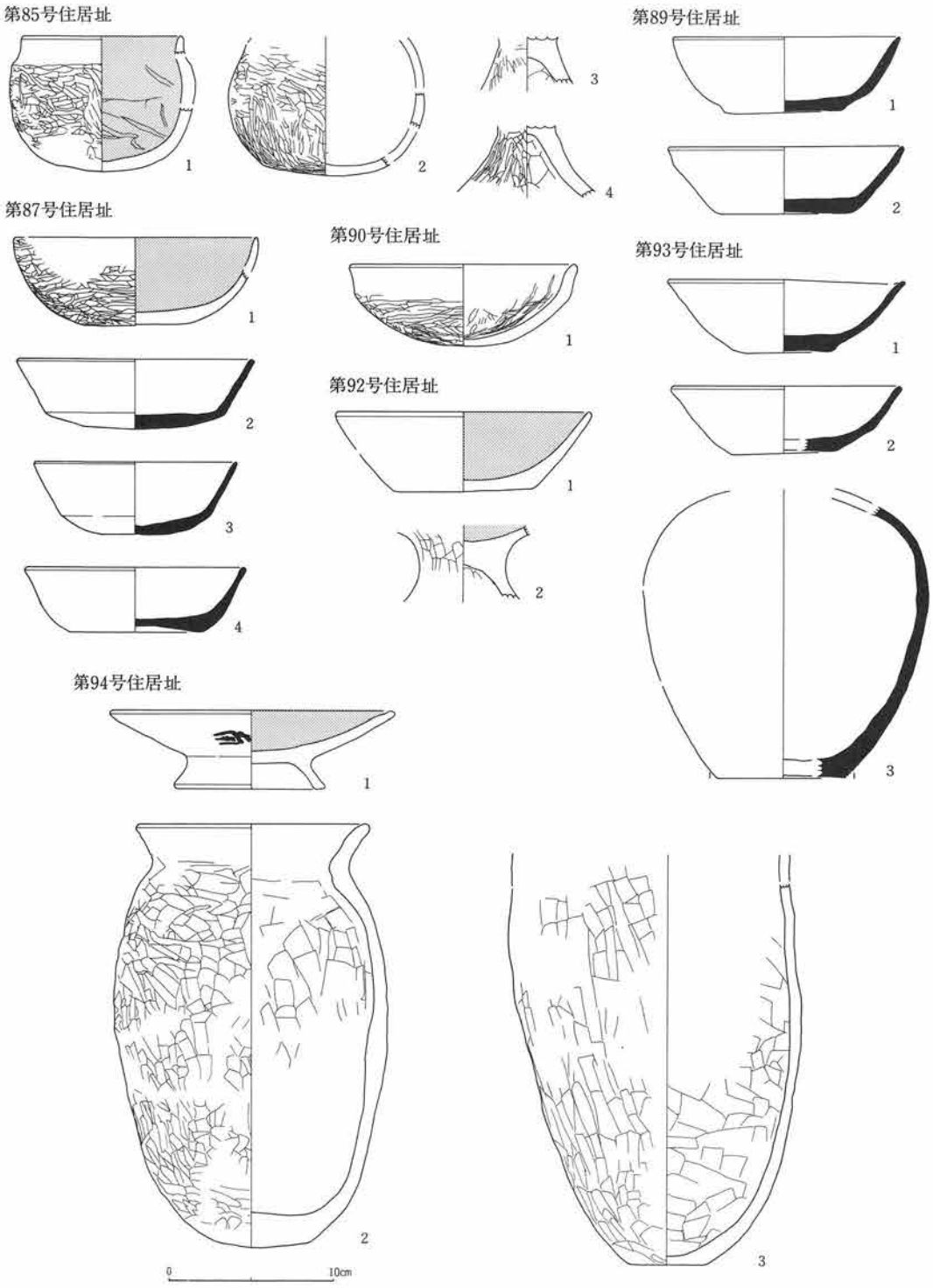
第353図　第81～83号住居址出土土器実測図

第84号住居址



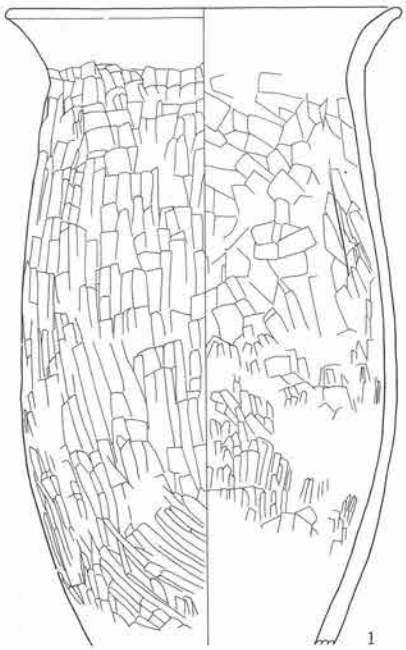
第85号住居址

第354図　第84・85号住居址出土土器実測図

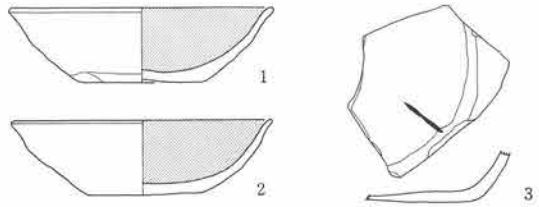


第355図　第85・87・89・90・92～94号住居址出土土器実測図

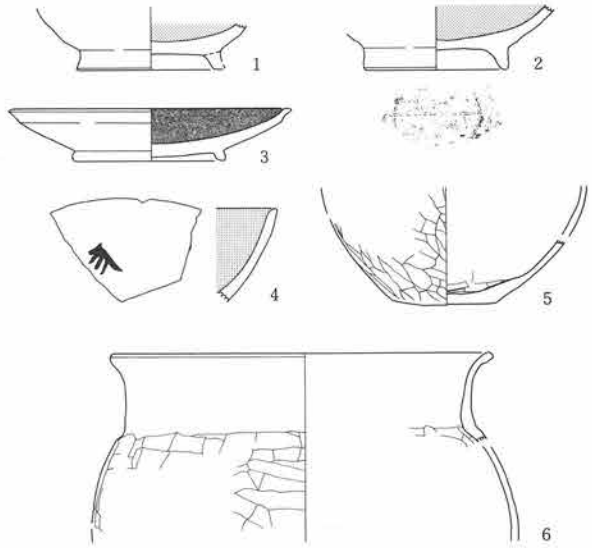
第94号住居址



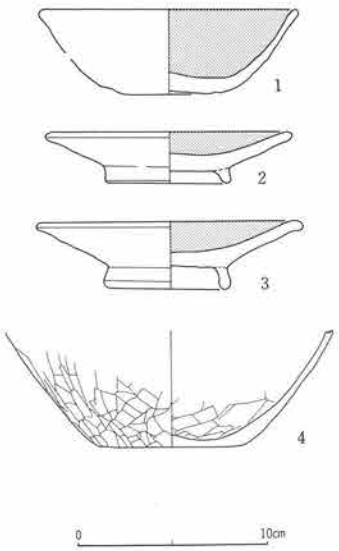
第96号住居址

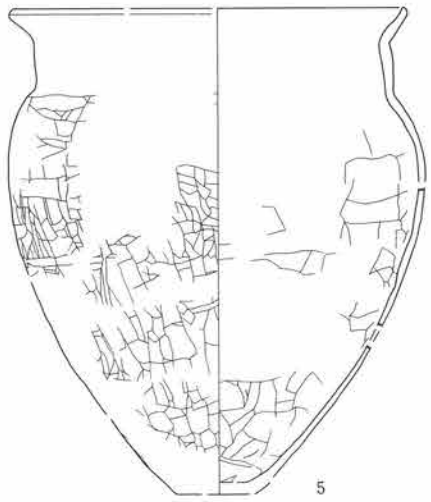


第97号住居址

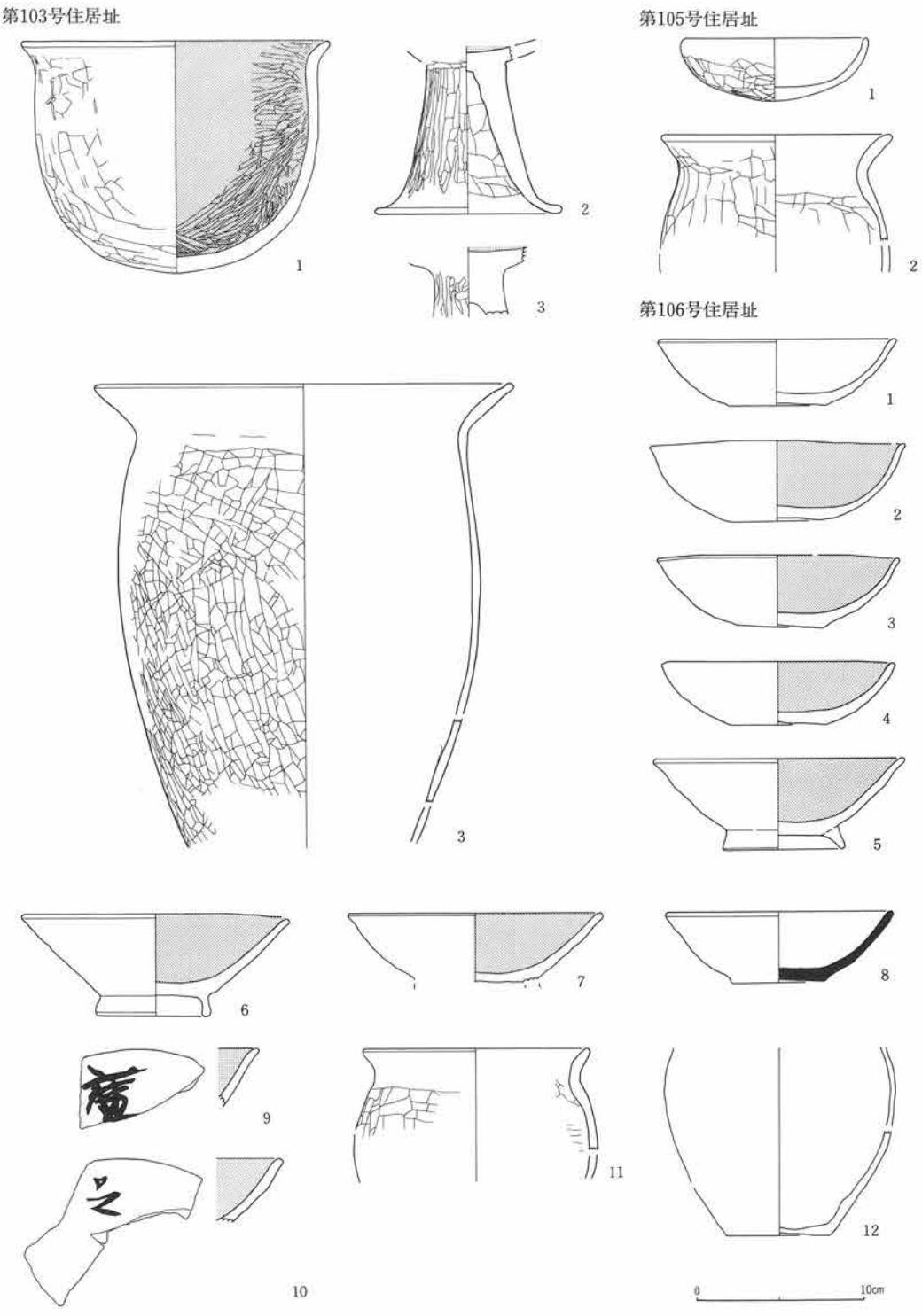


第99号住居址



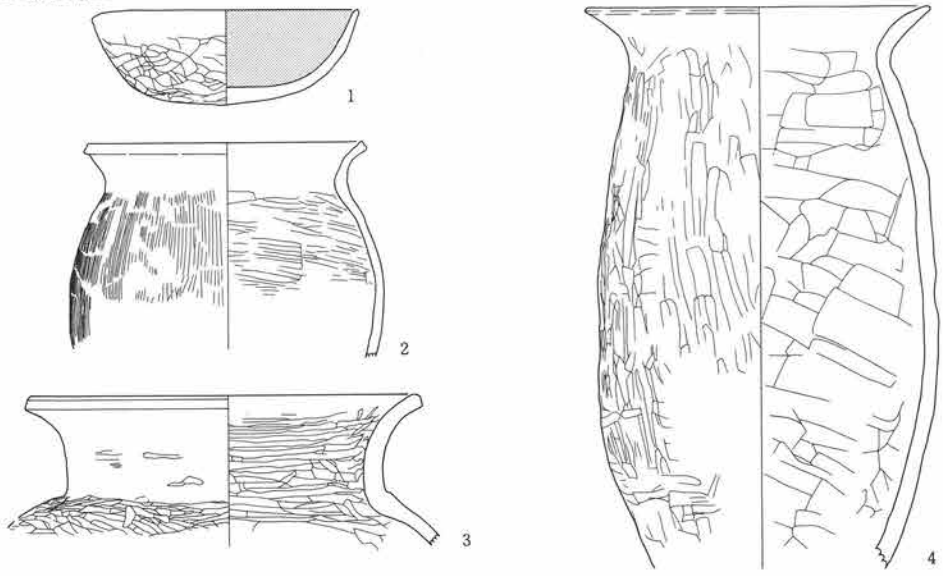


第356図　第94・96・97・99号住居址出土土器実測図



第357図　第103・105・106号住居址出土土器実測図

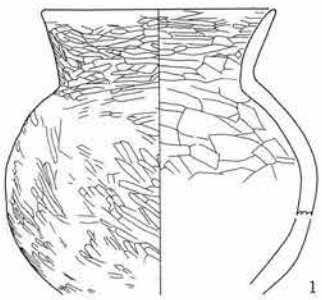
第107号住居址

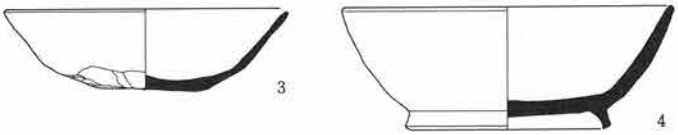


第108号住居址

第113号住居址

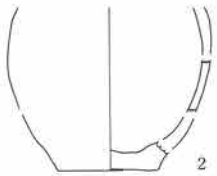
第110号住居址

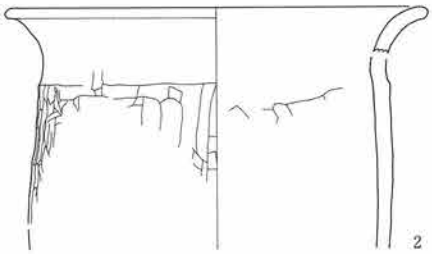




第115号住居址

第116号住居址

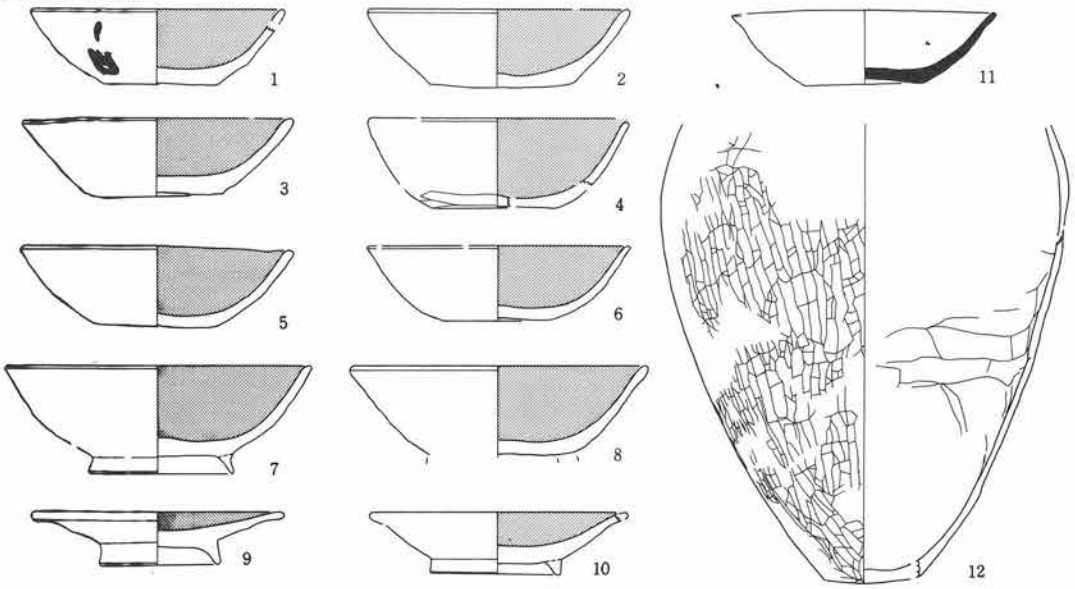




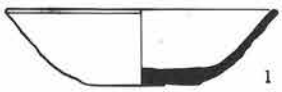
第111号住居址

第358図　第107・108・110・111・113・115・116号住居址出土土器実測図

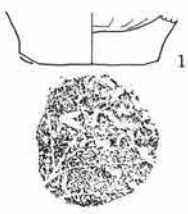
第118号住居址



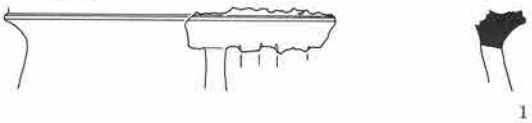
第６号掘立柱建物址



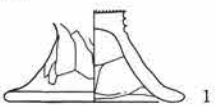
第21号掘立柱建物址



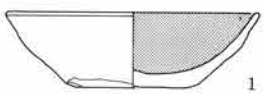
第１号土坑



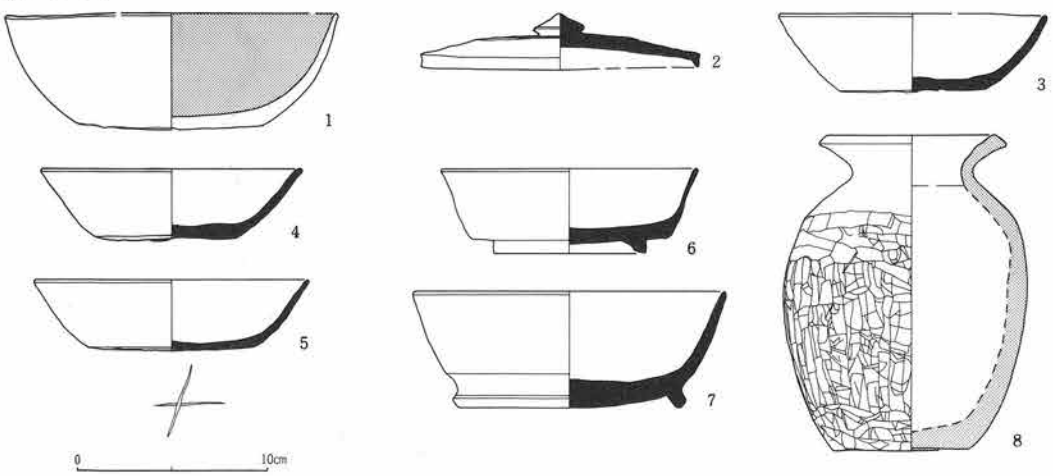
自然流路



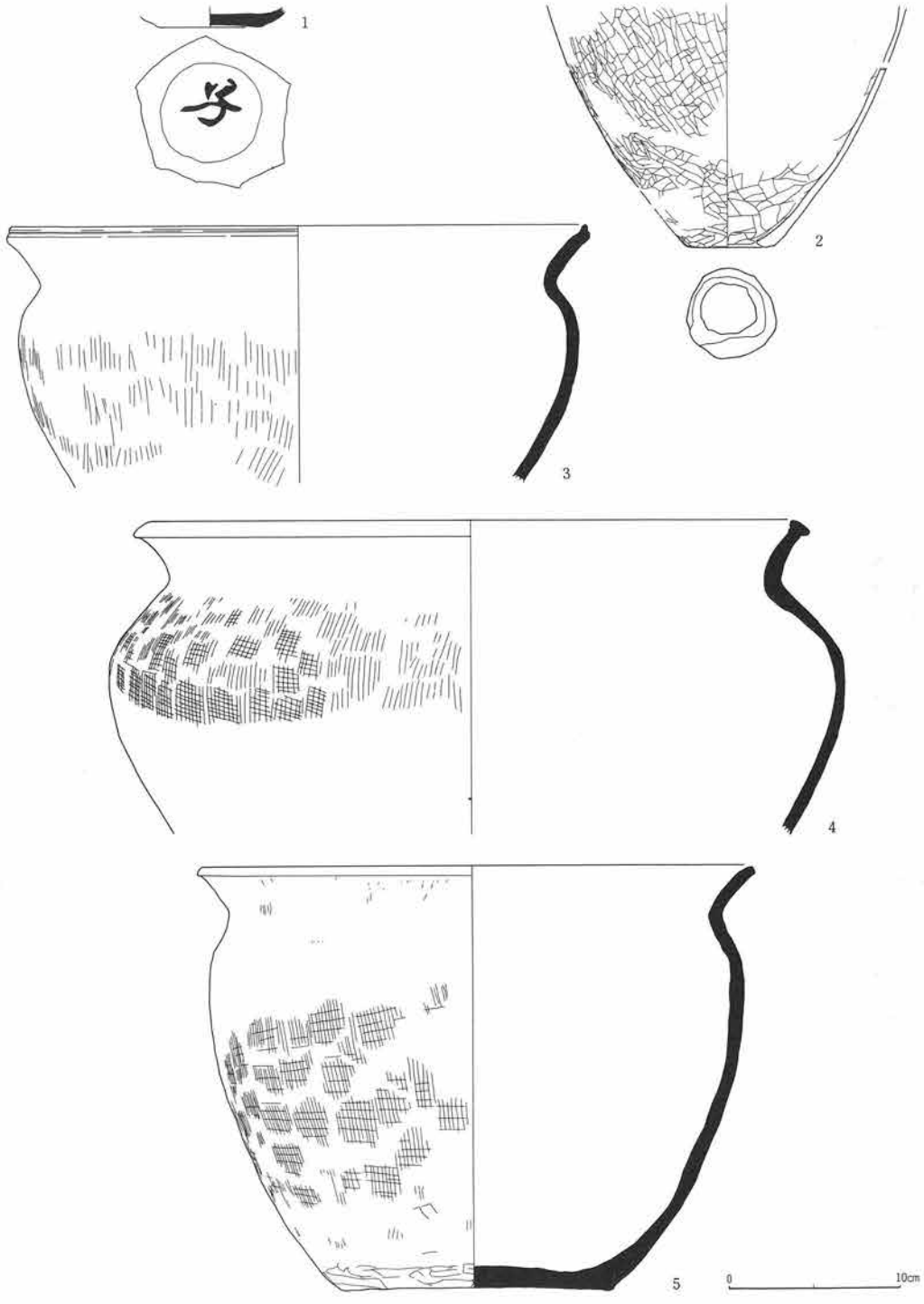
第５号土坑



第２号土坑

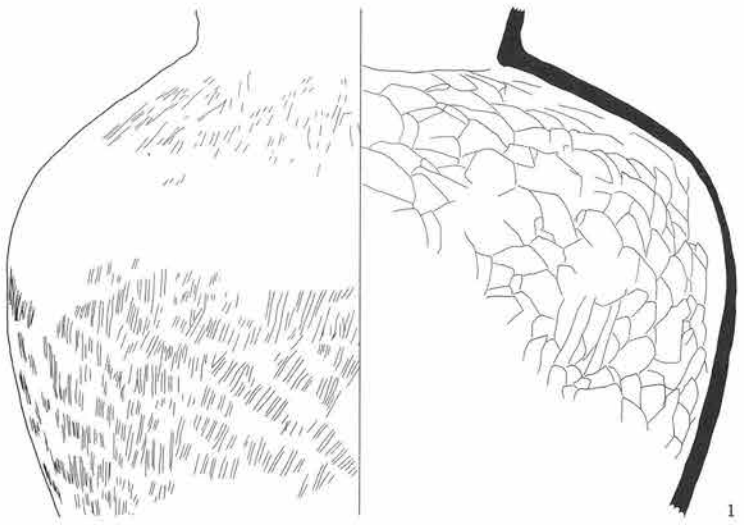


第359図　第118号住居址、第６・21号掘立柱建物址、自然流路、第１・２・５号土坑出土土器実測図

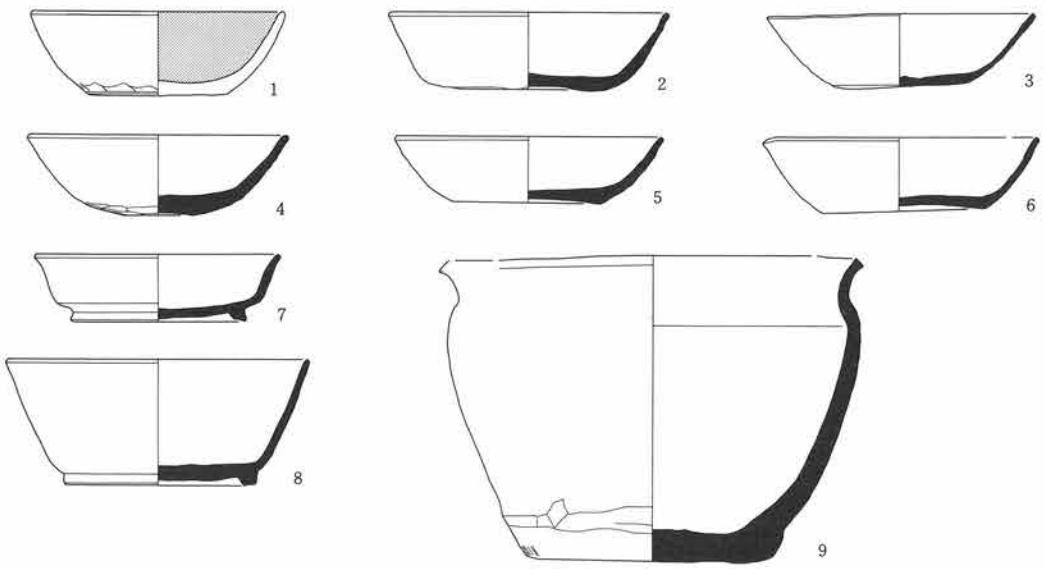


第360図　第２号土坑出土土器実測図

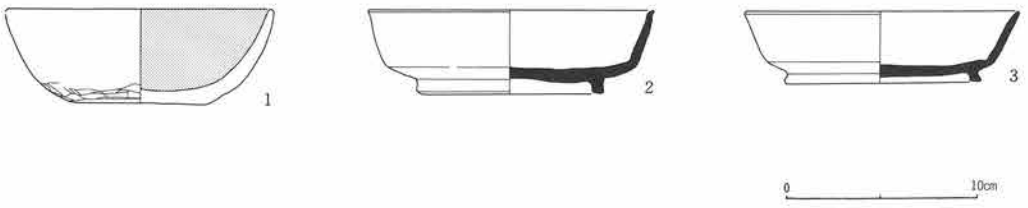
第２号土坑



第３号土坑



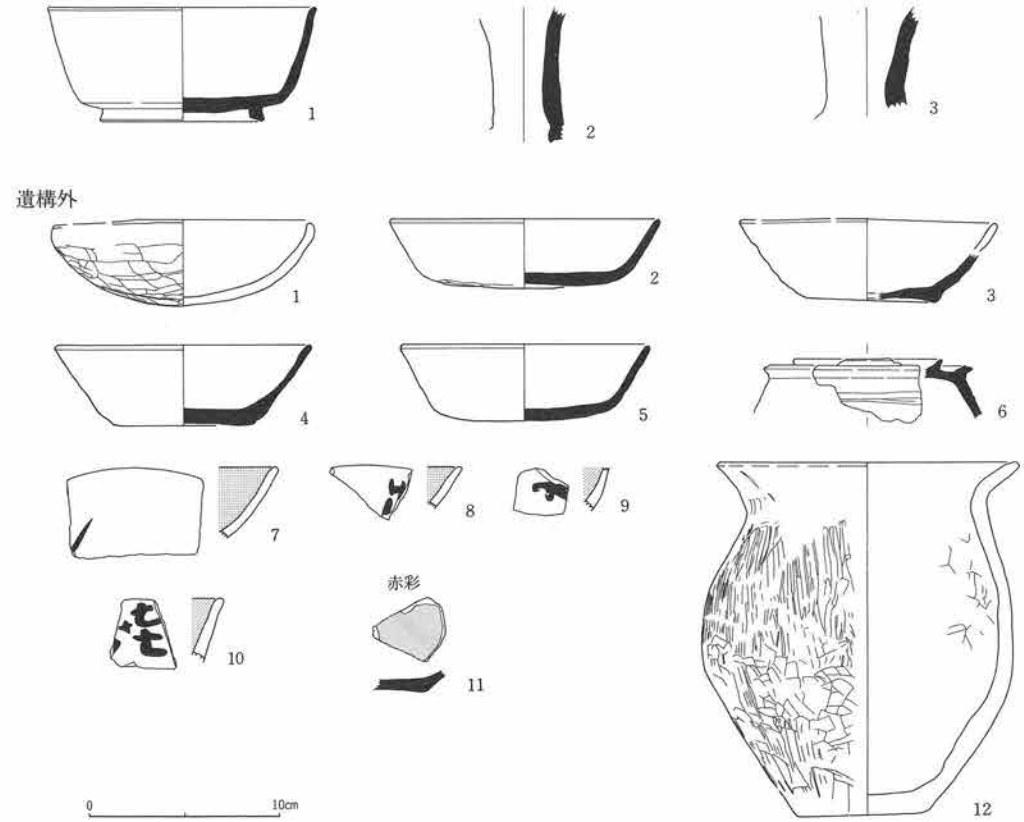
第４号土坑



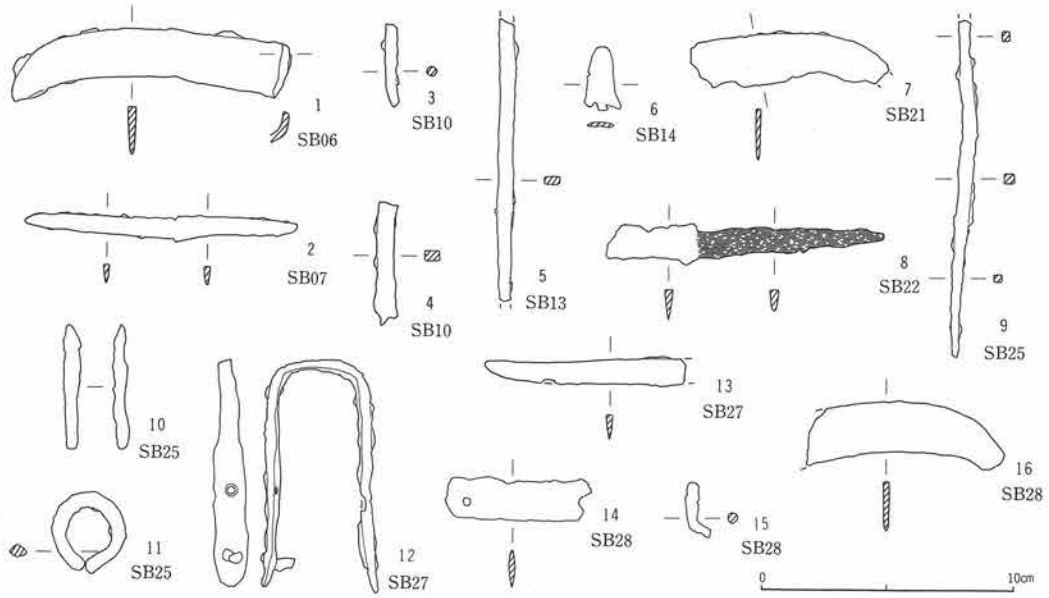
第361図　第２～４号土坑出土土器実測図

第４号土坑

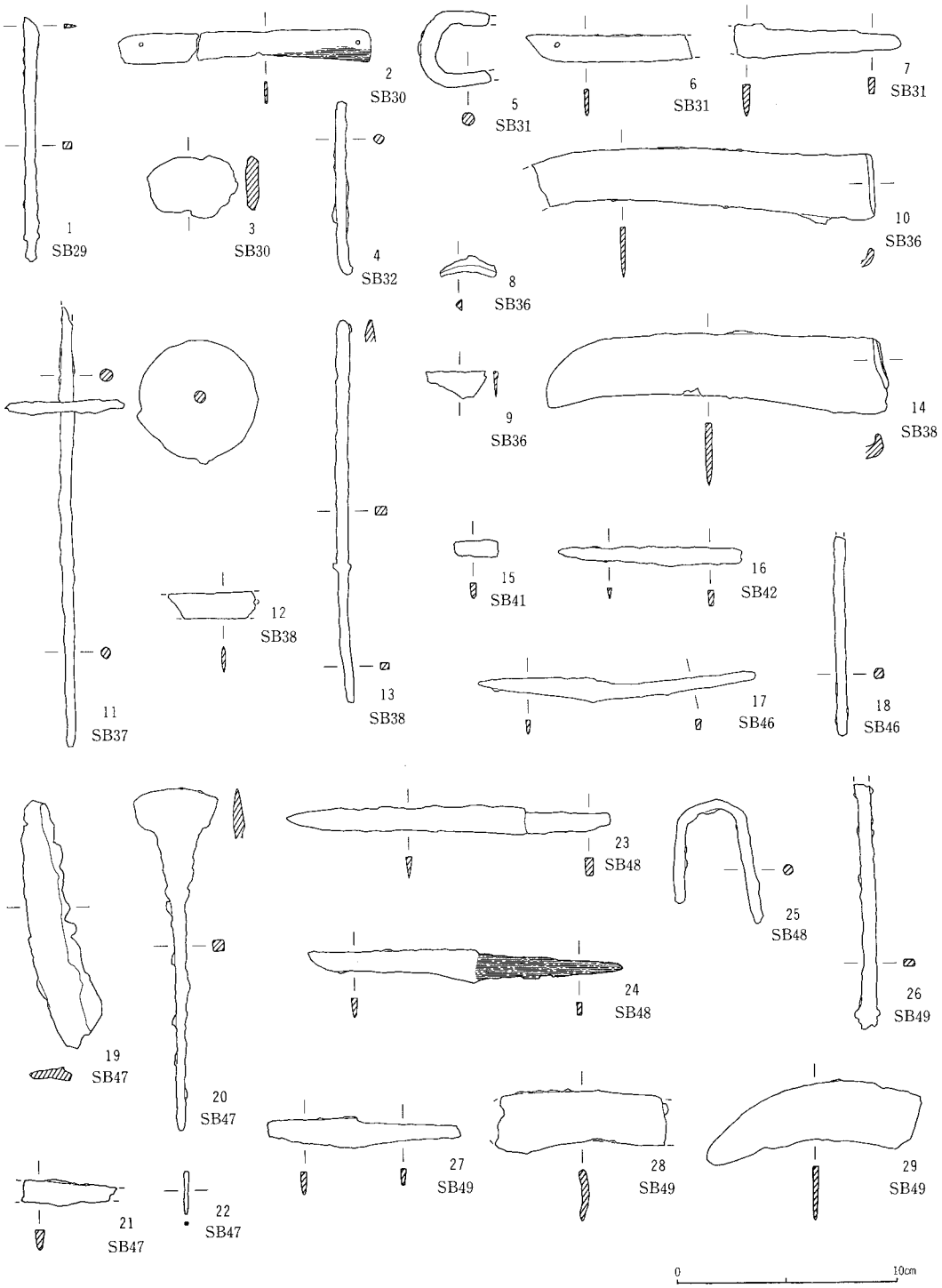
遺構外



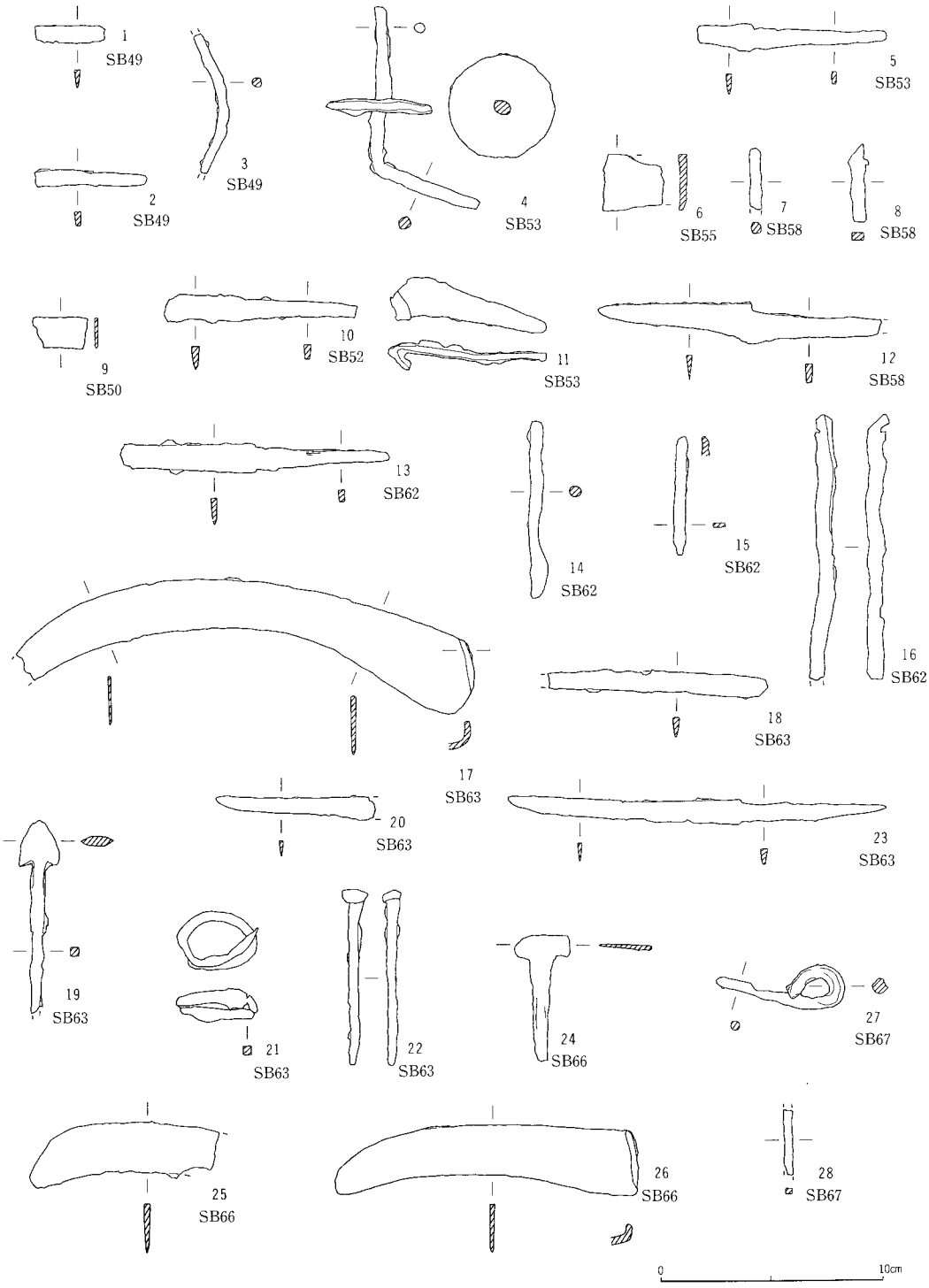
第362図　第４号土坑・遺構外出土土器実測図



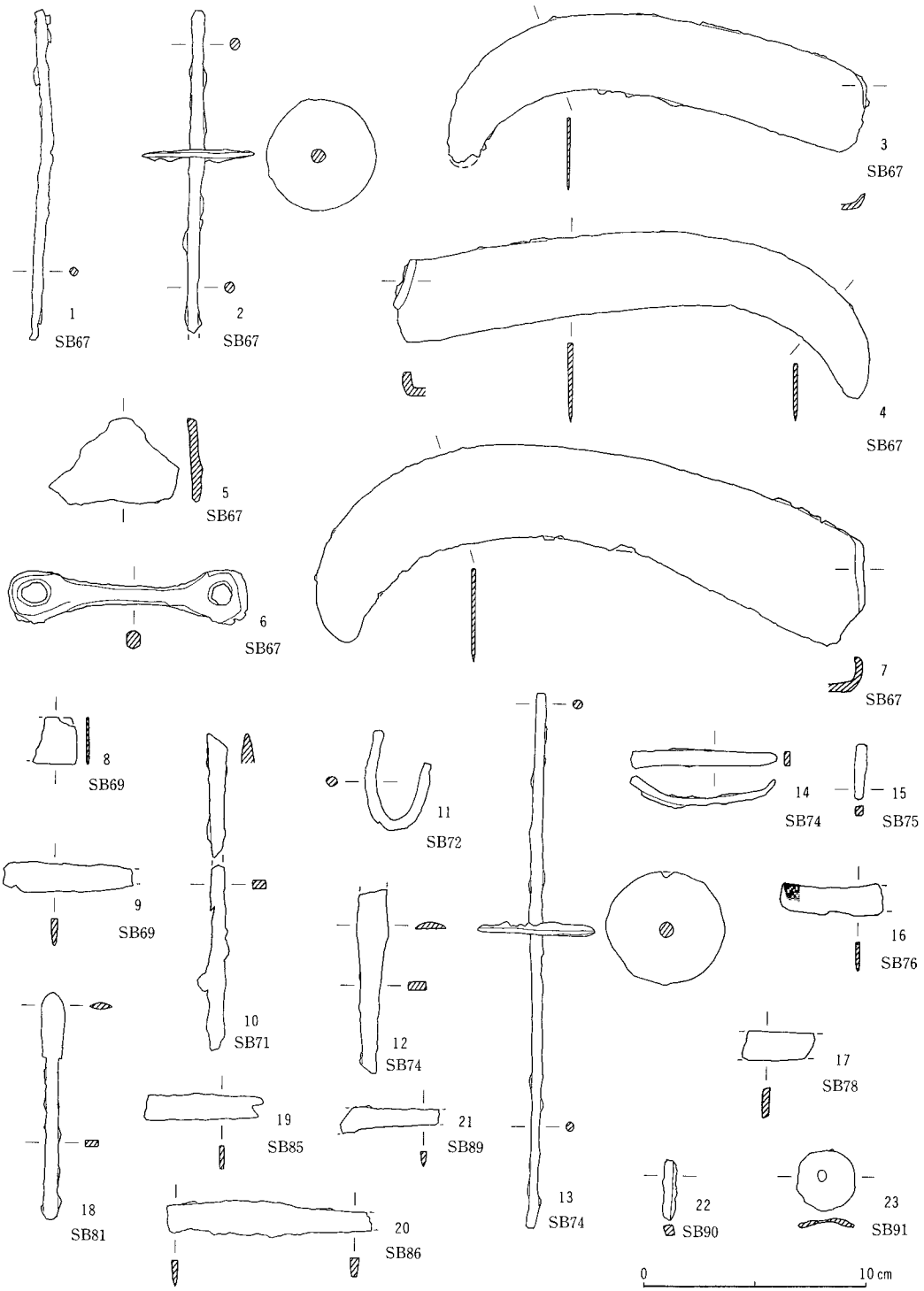
第363図　鉄製品実測図



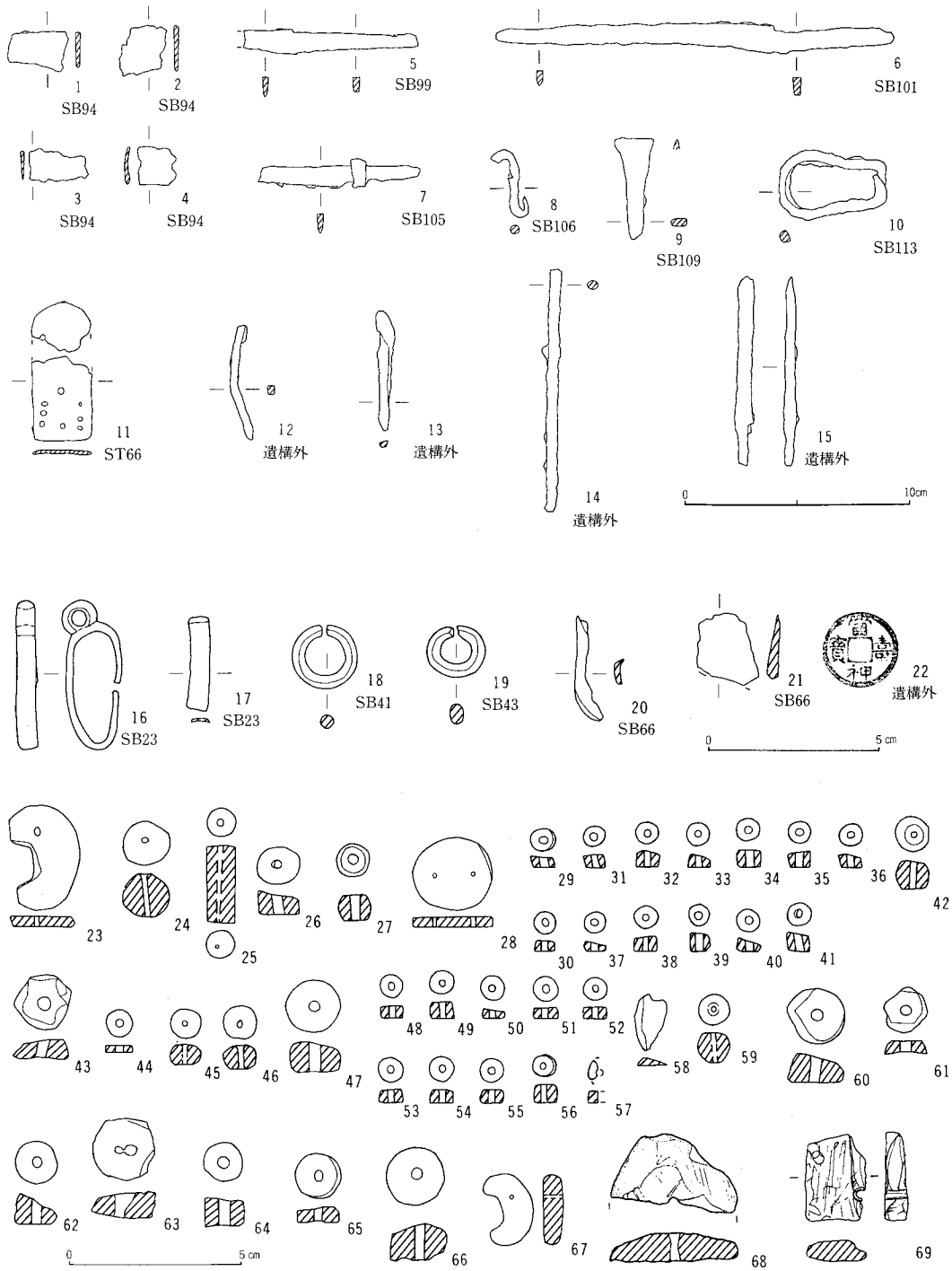
第364図　鉄製品実測図



第365図　鉄製品実測図

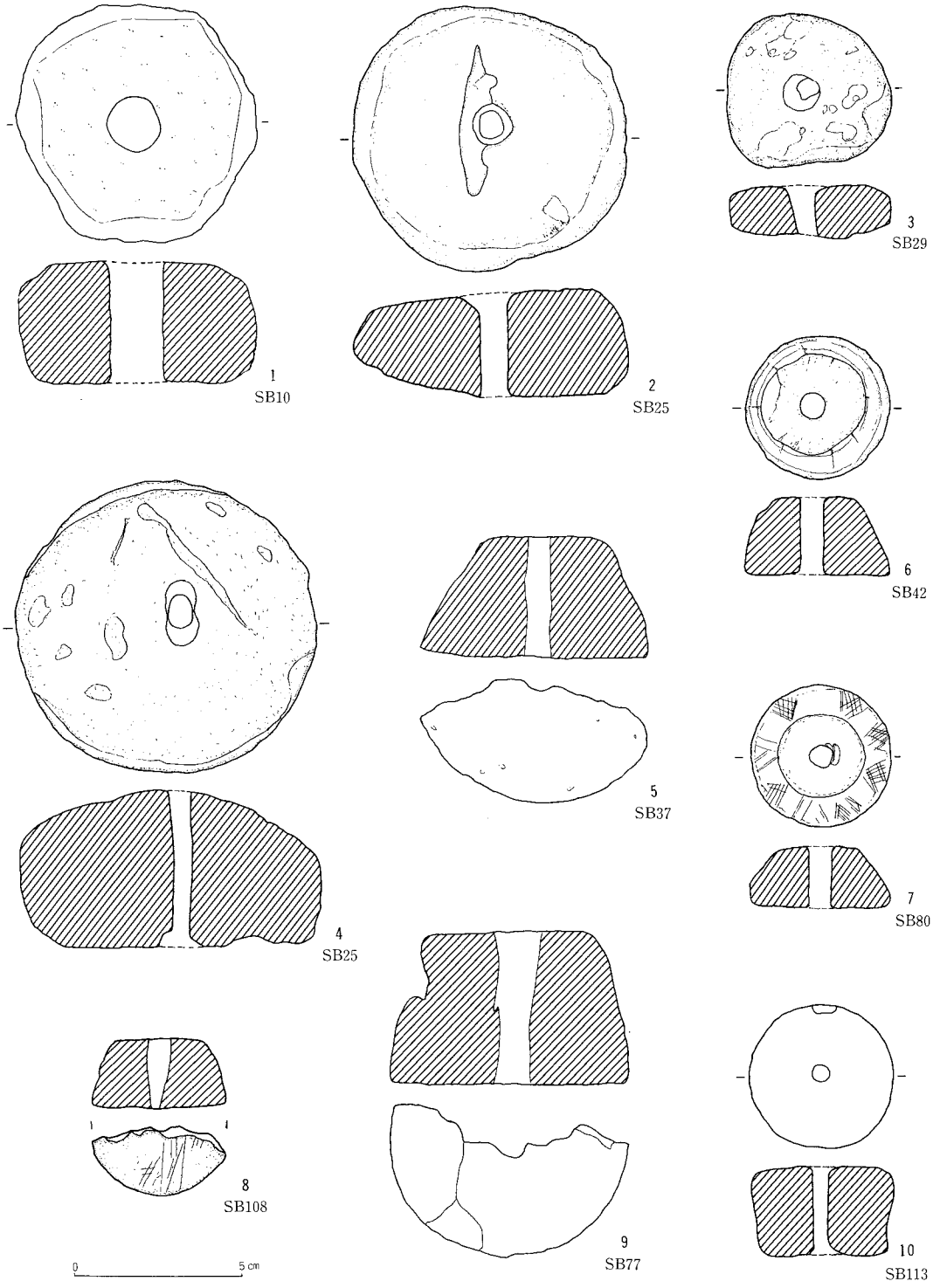


第366図　金属製品実測図

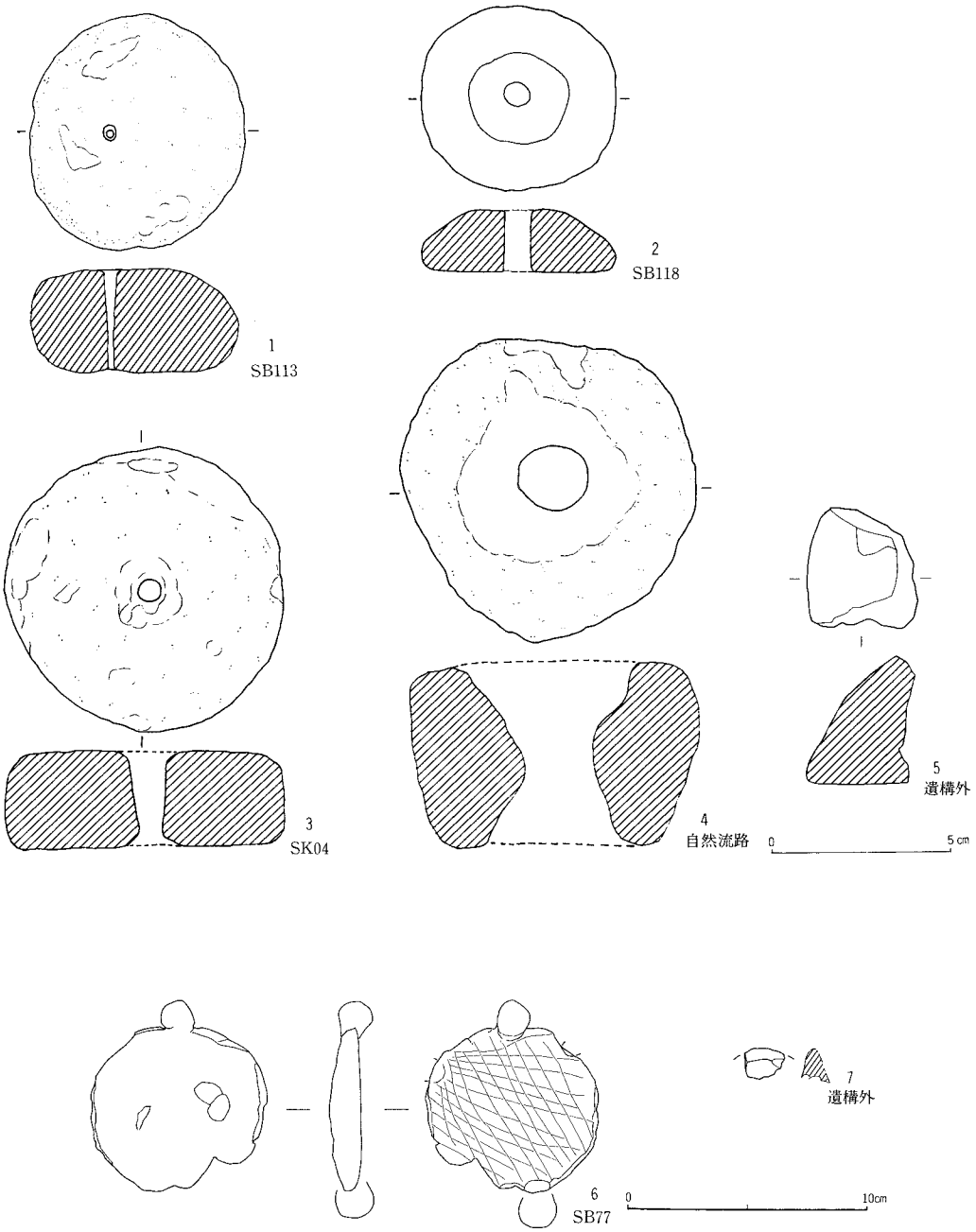


23－SB06　24－SB14　25－SB23　26－SB26　27－SB30　28～41－SB33　42－SB37　43－SB42　44－SB55　45～47
48～59－SB77　60－SB84　61－SB85　62－SB103　63－SK03　64－自然流路　65～67－遺構外　68－SB66　69－SB69
25－碧玉　24・42・45・46・59－土製　27－蛇紋岩　他は滑石製

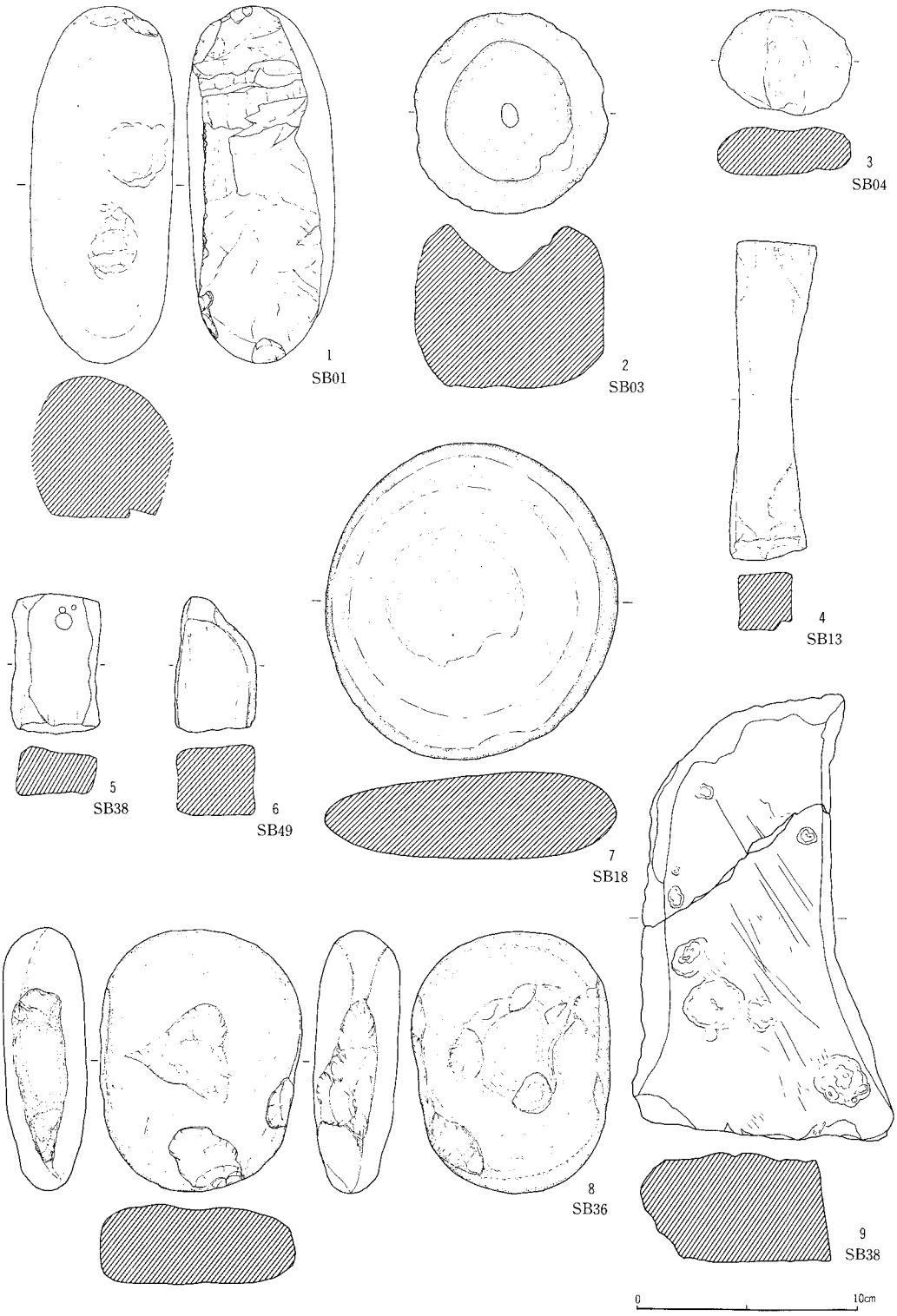
第367図　金属製品・土製品・石製品実測図



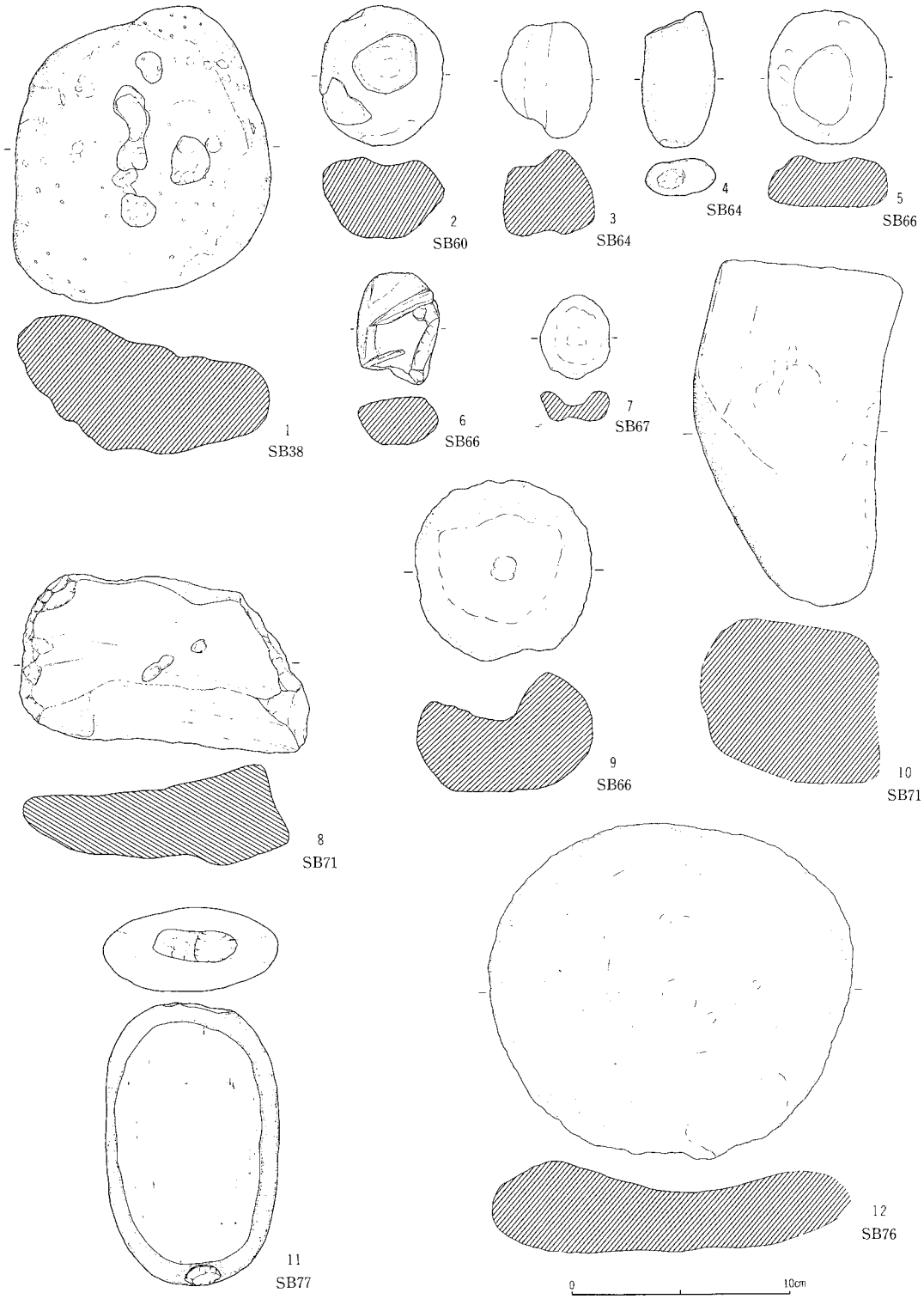
第368図　石製品・土製品実測図



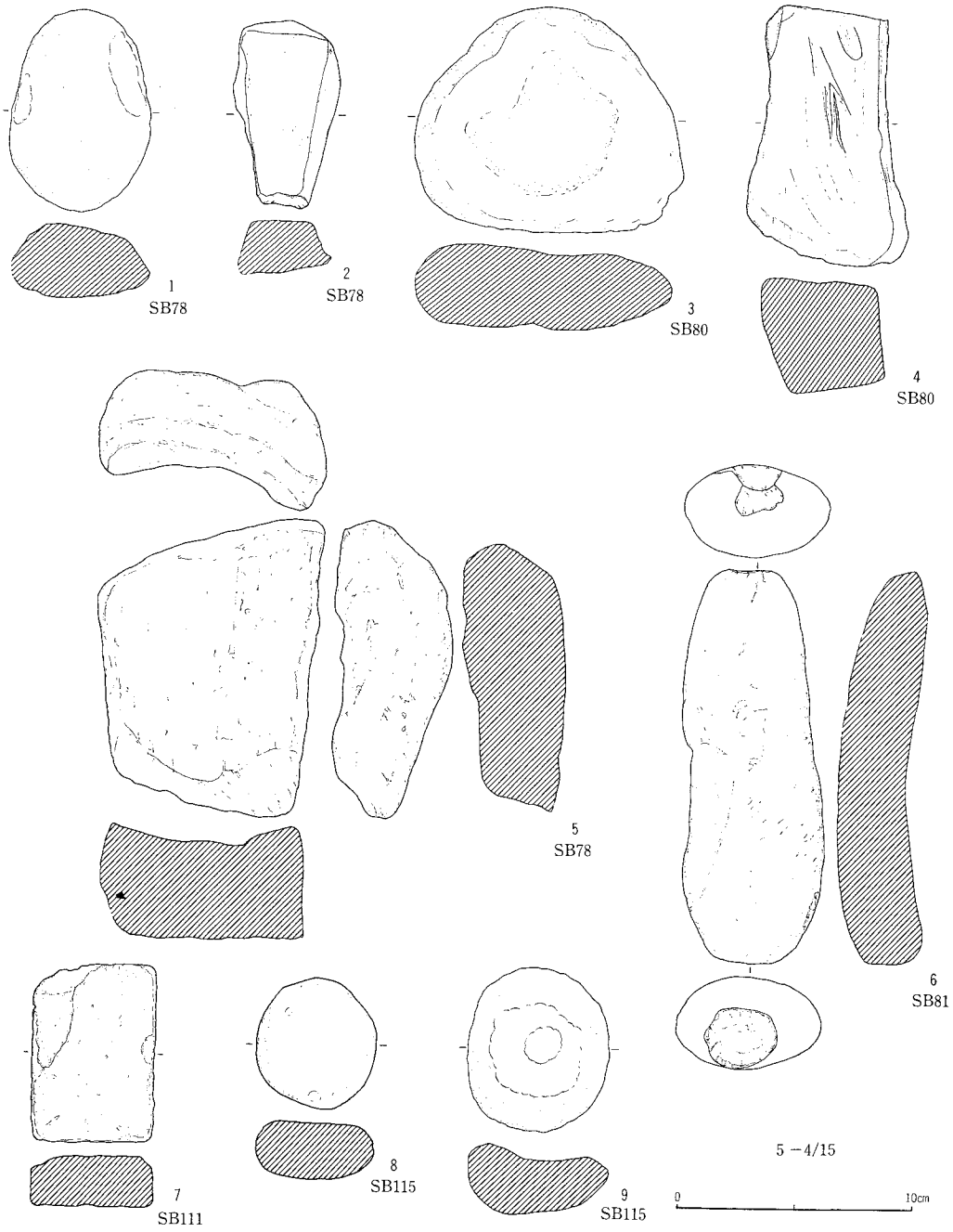
第369図　石製品・土製品実測図



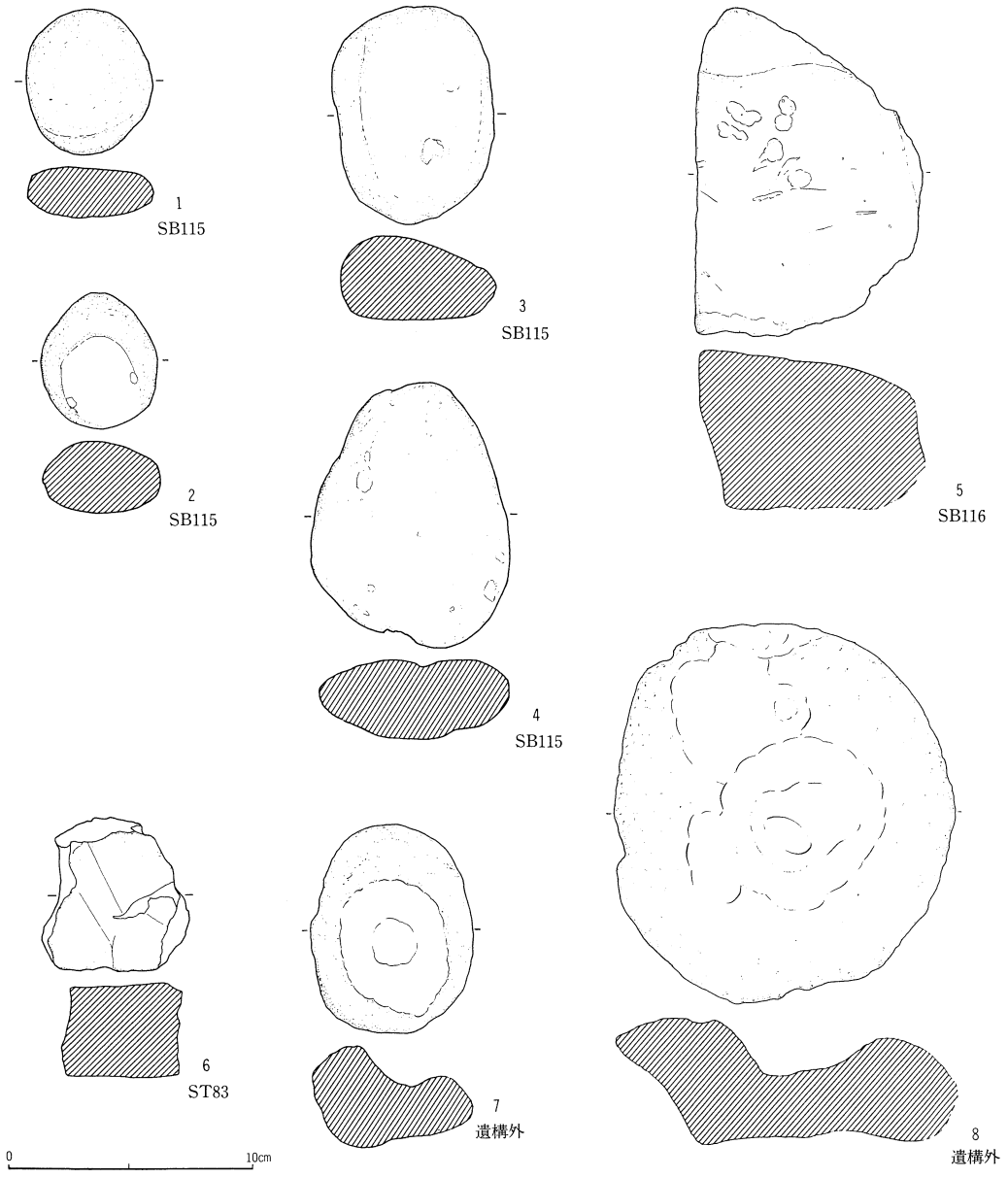
第370図　石製品実測図



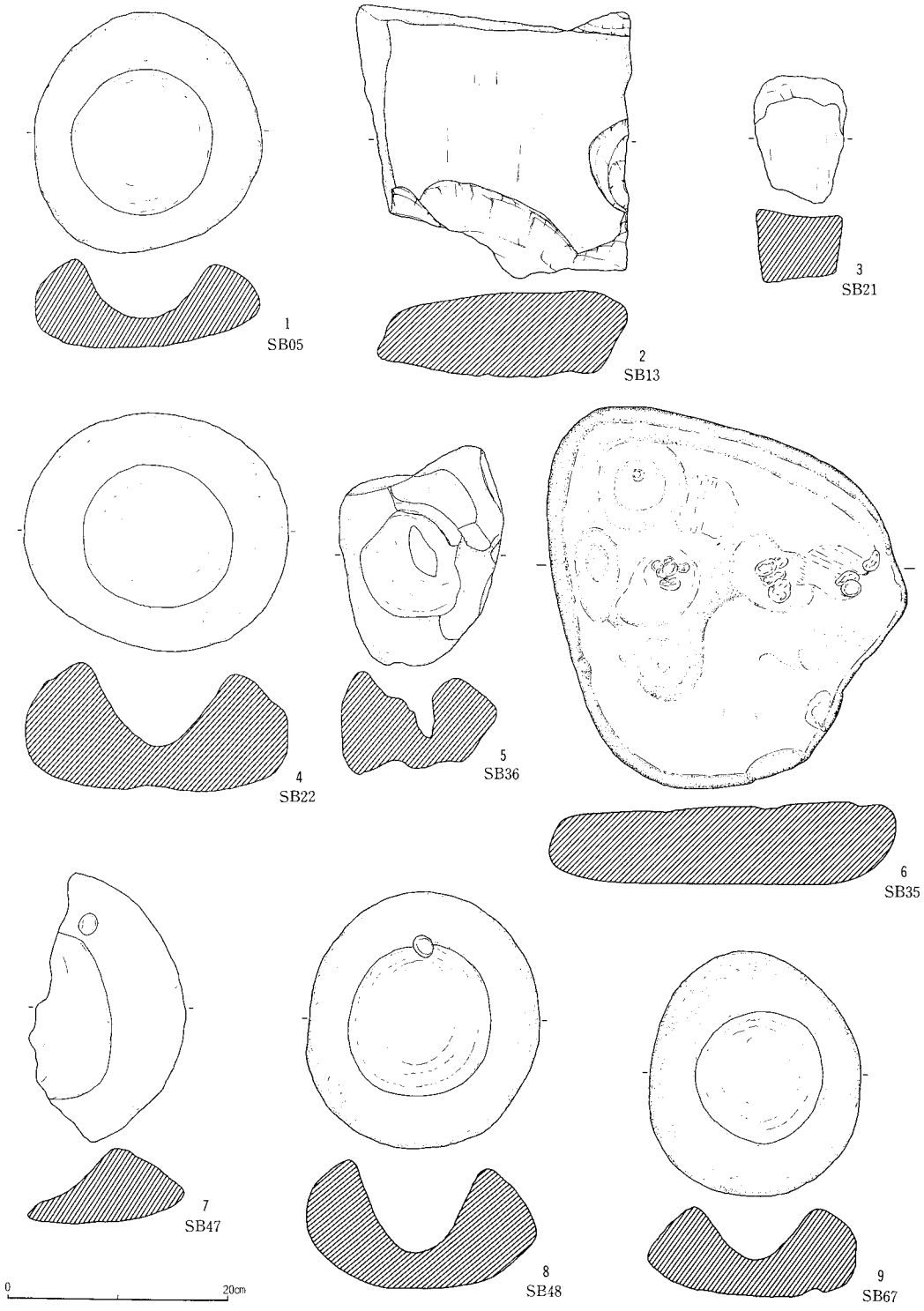
第371図　石製品実測図



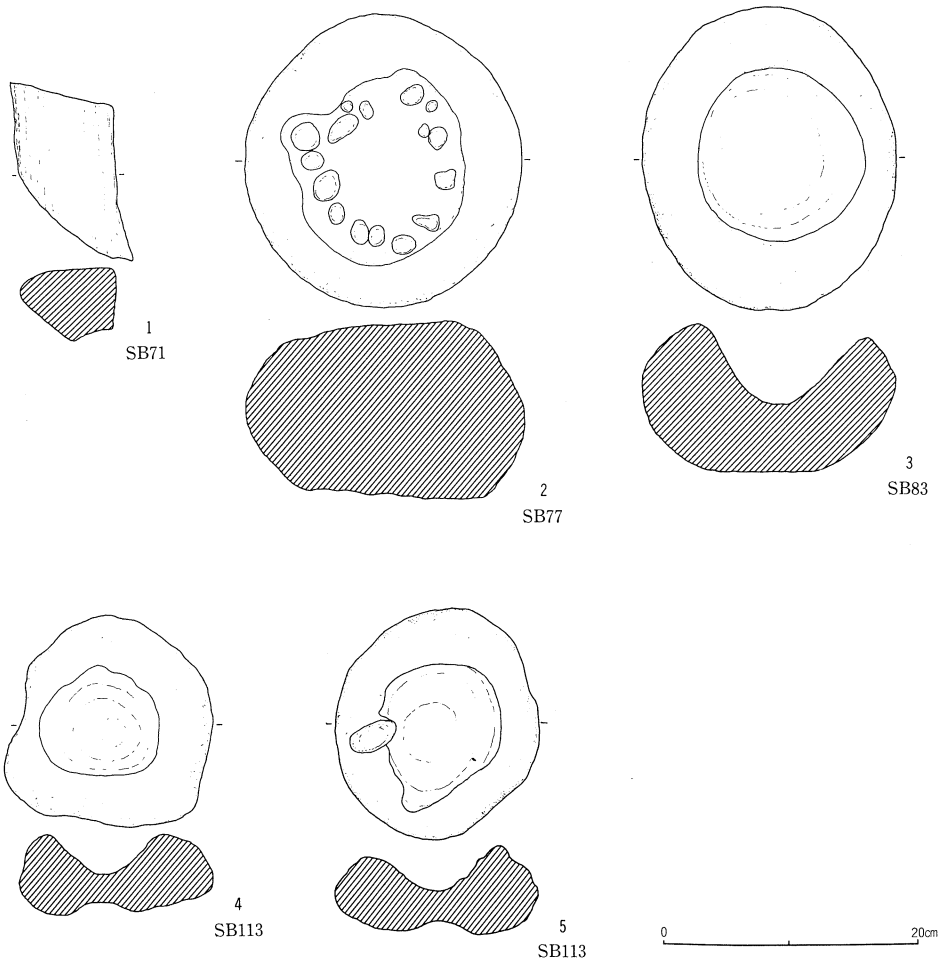
第372図　石製品実測図



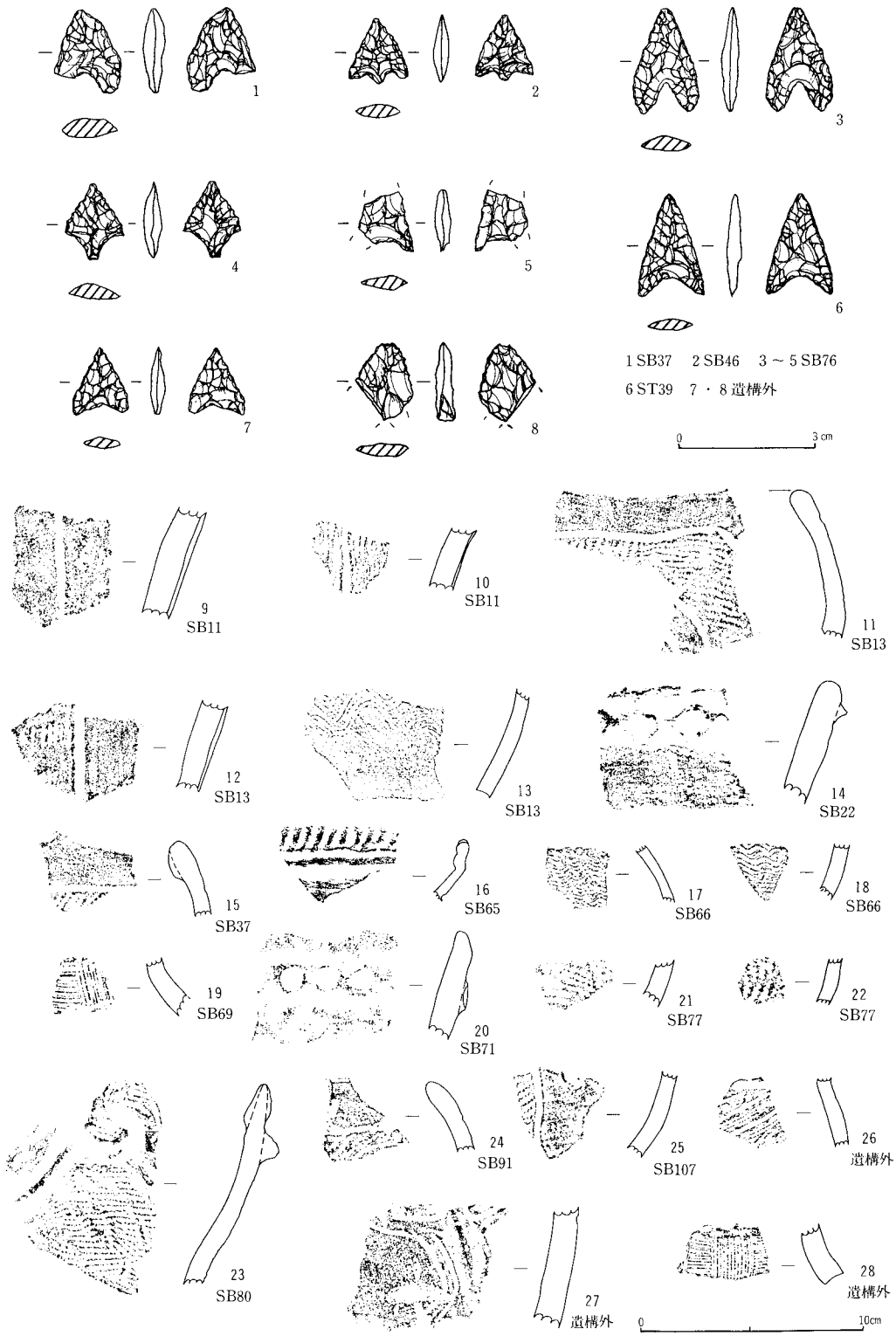
第373図　石製品実測図



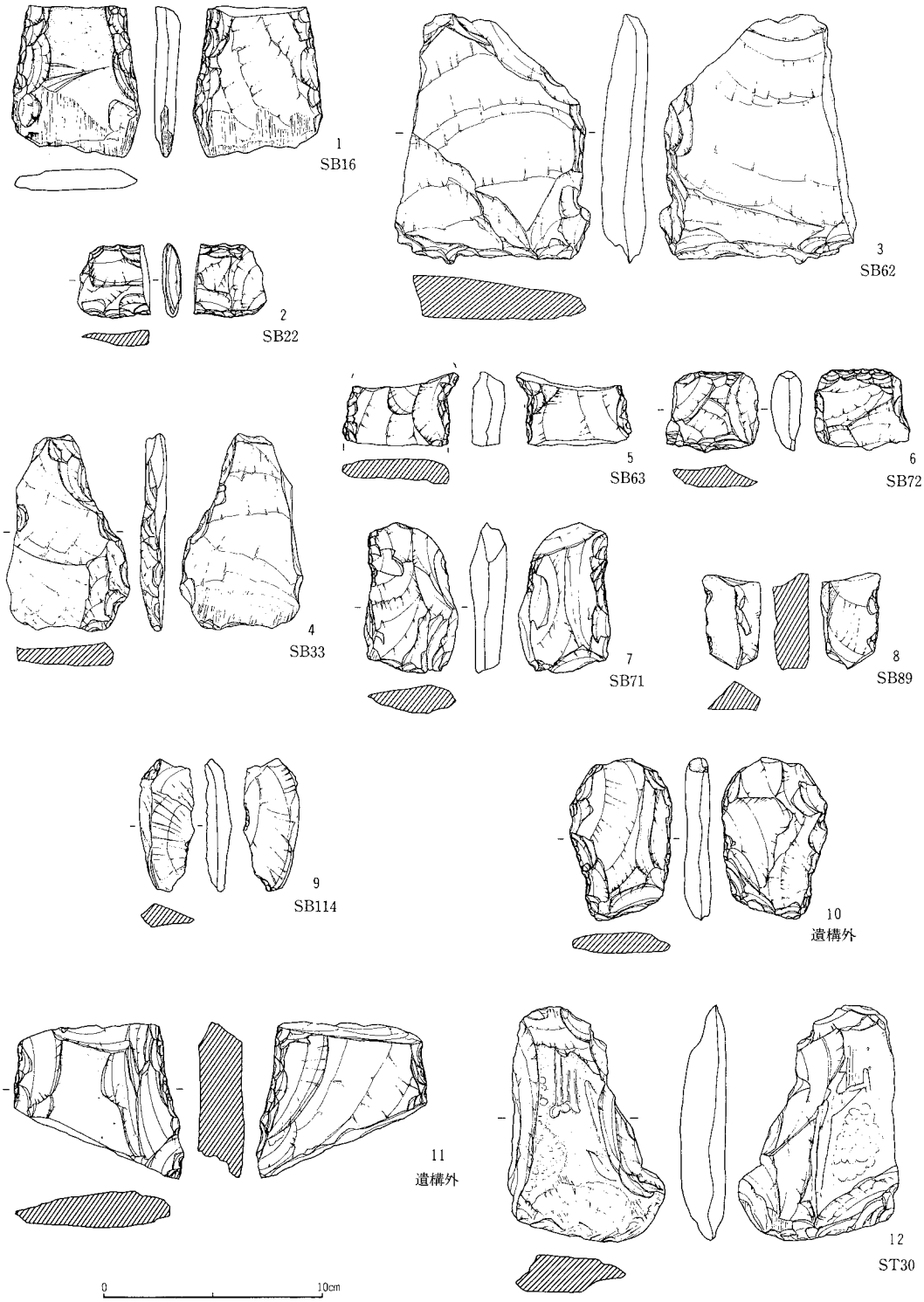
第374図　石製品実測図



第375図　石製品実測図



第376図　石鏃実測図・土器拓影図



第377図　石製品実測図

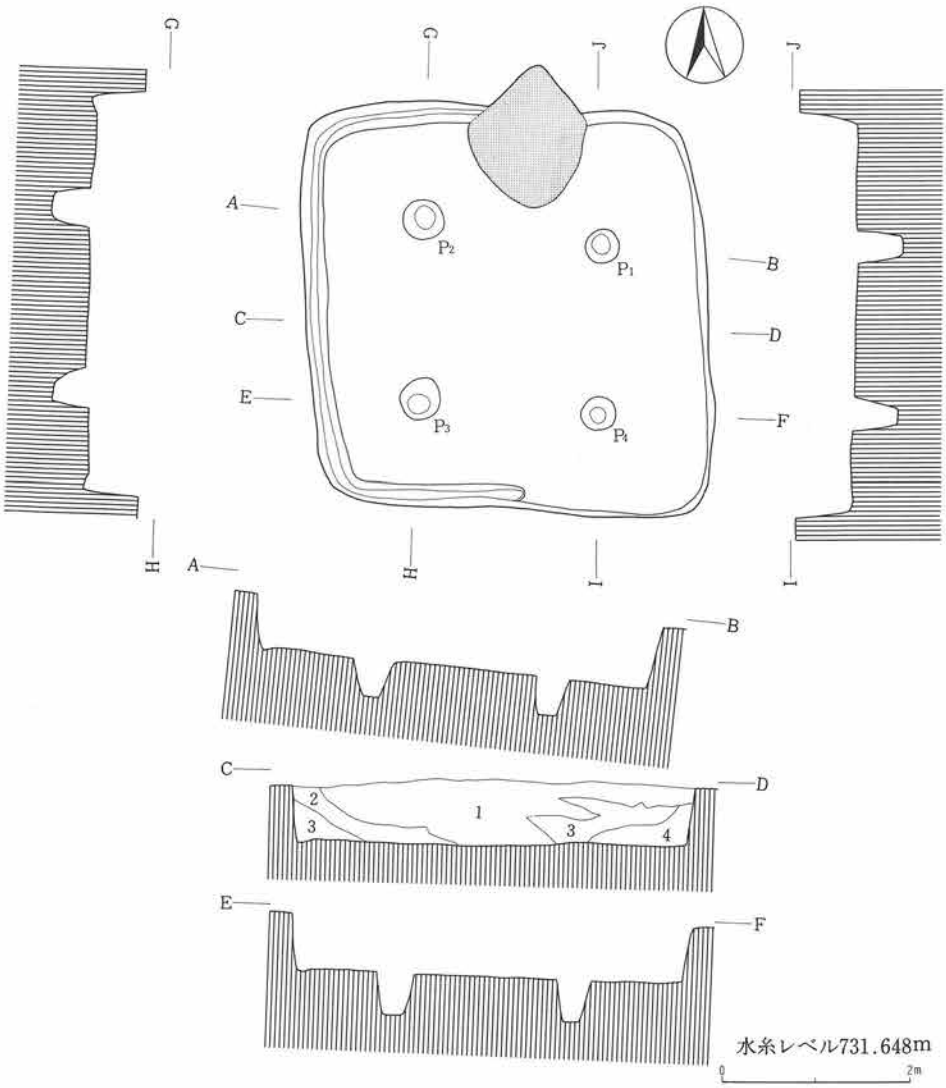
4　舟窪遺跡

(1)　竪穴住居址

1）第1号住居址

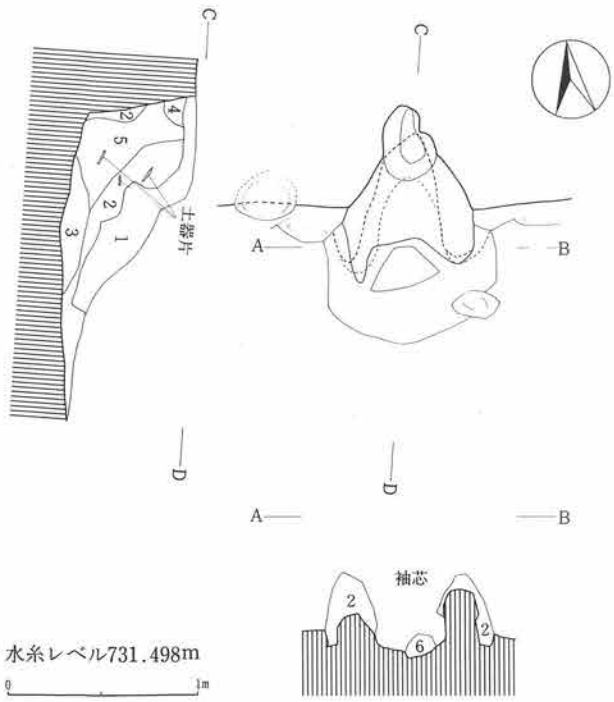
遺構（第378・379図、図版24）

本住居址は、B－2グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。



層序説明
第1層　黒褐色土層(7.5YR3/2)φ0.3～2.0cmのパミス、ローム粒子を僅かに含む
第2層　暗褐色土層(7.5YR3/4)φ0.2～2.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第3層　褐色土層(7.5YR4/4)φ0.2～1.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第4層　褐色土層(7.5YR4/6)φ0.2～1.0cmのパミス、ローム粒子を僅かに含む

第378図　第1号住居址実測図



層序説明
第1層　暗褐色土層(7.5YR3/4)φ0.5cm前後のパミスのほか、ローム粒子を若干含む。砂質
第2層　にぶい褐色土層(7.5YR5/4)粘土層
第3層　褐色土層(7.5YR4/4)　灰層。締っていない
第4層　明黄褐色土層(10YR6/8)地山に黒色土が混じる
第5層　暗褐色土層(7.5YR3/3)焼土粒子を含む。締っていない
第6層　明褐灰色土層(7.5YR7/2)粒子の非常に細かい粘土塊。支脚石の代用か？
※袖芯は地山の削り出し

第379図　第1号住居址カマド実測図

東西422cm、南北430cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、N－5.5°－Eを示す。住居址覆土は、4層に区分され、確認面からの壁高は、52～65cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。遺存状態は比較的良好であった。地山を掘り残し、袖芯とし、にぶい褐色（7.5YR5/4）粘土により構築されていた。また、火床部で明褐灰色（7.5YR7/2）の粘土塊が認められ、支脚石の代用として用いられたものかもしれない。

ピットは主柱穴と考えられる4基が検出され、周溝は、住居址西半分で認められた。

遺物（第437・441図、図版90・94）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、石製品が出土している。このうち、図示したものに土師器甕、カマド内から出土した砂岩製の打製石斧がある。本遺構の所産期は、古墳時代後期中葉に比定される。

2）第2号住居址

遺構（第380・381図、図版24）

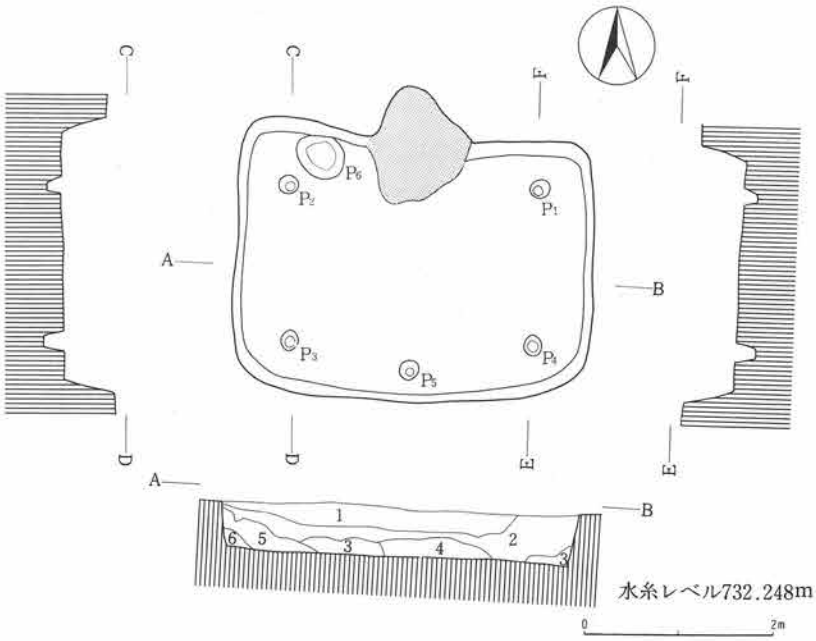
C－3グリッドに位置する。第3号住居址と重複関係を有し、第3号住居址を切っている。

東西373cm、南北280cmを測り、平面プランは、東西に長い隅丸長方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、N－0.5°－Eを示す。住居址覆土は、6層に区分され、確認面からの壁高は、46～53cmを測る。

カマドは、北壁に位置するが、遺存状態は悪い。おそらく、軽石・安山岩および明褐色(7.5YR5/6)粘土により構築されていたものと思われる。

ピットは総計6基検出された。このうち、P_1～P_4が主柱穴、P_6が貯蔵穴、P_5は出入口部の施設に関連するものであろう。なお、周溝は、検出されなかった。



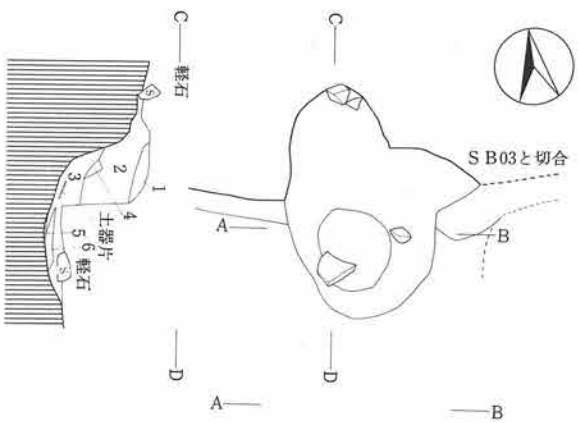
層序説明
第1層　暗褐色土層(7.5YR3/3)φ0.1～1.0cmパミス、ローム粒子を僅かに含む
第2層　褐色土層(7.5YR4/4)φ0.2～2.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第3層　褐色土層(7.5YR4/3)φ0.1～1.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第4層　暗褐色土層(10YR3/3)φ0.1～0.8cmのパミス、ローム粒子を僅かに含む
第5層　にぶい褐色土層(7.5YR5/3)φ0.2～1.0cmのパミス、ローム粒子を多く含む
第6層　黒色土層(7.5YR2/1)ローム粒子を僅かに含む

第380図　第2号住居址実測図

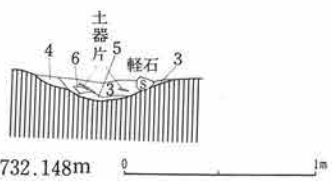
遺物（第437・441図、図版90・94）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、石製品が出土している。このうち、図示したものに黒色土器皿、軟質須恵器杯、土師器甕、打製石斧がある。

打製石斧は、砂岩製で重さ100ｇを量る。皿外面には墨書が認められるが文字は不明である。本住居址の所産期は、平安時代に比定される。



層序説明
第1層　暗褐色土層（7.5YR3/3）φ0.5cm前後のパミスを含む。住居址覆土
第2層　褐色土層（7.5YR4/4）φ焼土粒子を若干含む。締っていない
第3層　褐色土層（7.5YR4/6）焼土粒子を多量に含む
第4層　明褐色土層（7.5YR5/6）粘土層
第5層　赤褐色土層（2.5YR4/8）粘土層
第6層　暗褐色土層（7.5YR3/3）炭を含む。締っていない



第381図　第2号住居址カマド実測図

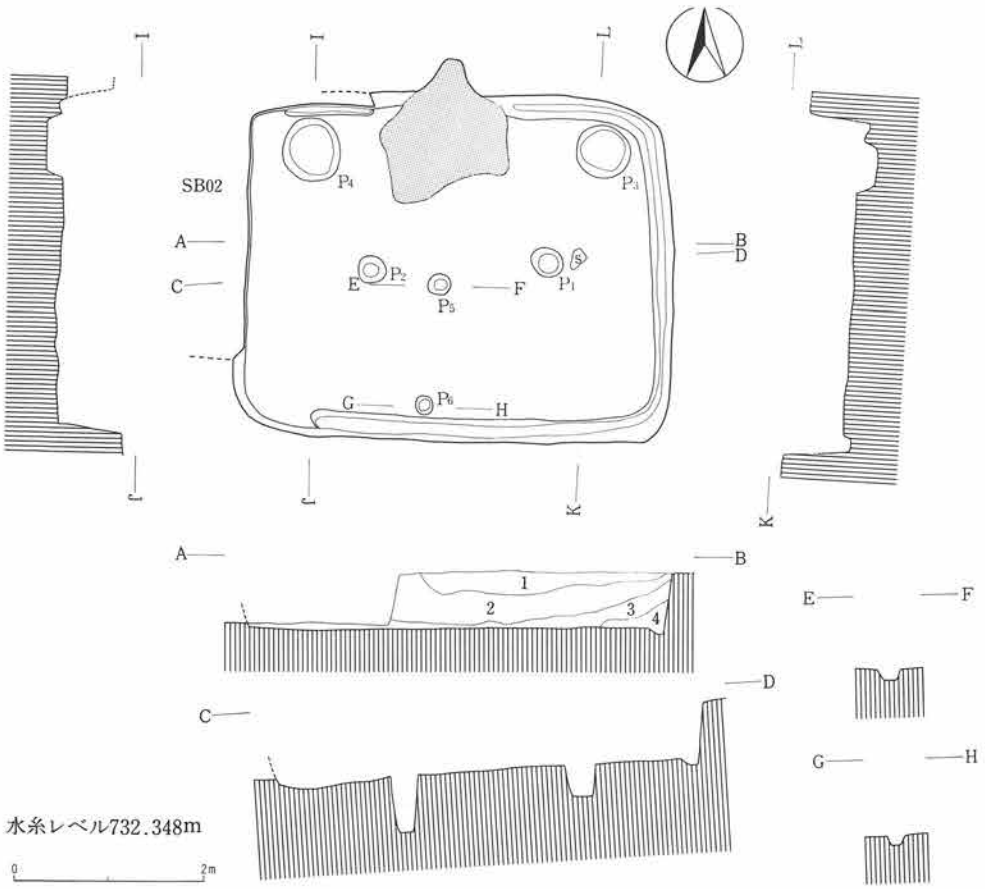
3）第3号住居址

遺構（第382・383図、図版25）

C－3グリッドに位置する。第2号住居址と重複関係を有し、第2号住居址に切られている。東西460cm、南北370cmを測り、平面プランは、東西に長い隅丸長方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、N－2°－Eを示す。住居址覆土は、4層に区分され、確認面からの壁高は、53～66cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。遺存状態は比較的良好であった。左袖は地山を掘り残して袖芯とし、右袖は第9・10層を用い芯とし、暗赤褐色（5YR3/4）土により構築されていた。ピットは総計6基検出された。このうち、P_1・P_2が主柱穴、P_3・P_4が貯蔵穴、P_6は出入口部の施設に関連するものと思われる。また、周溝は、カマド部分および西壁下を除いた範囲で認められた。

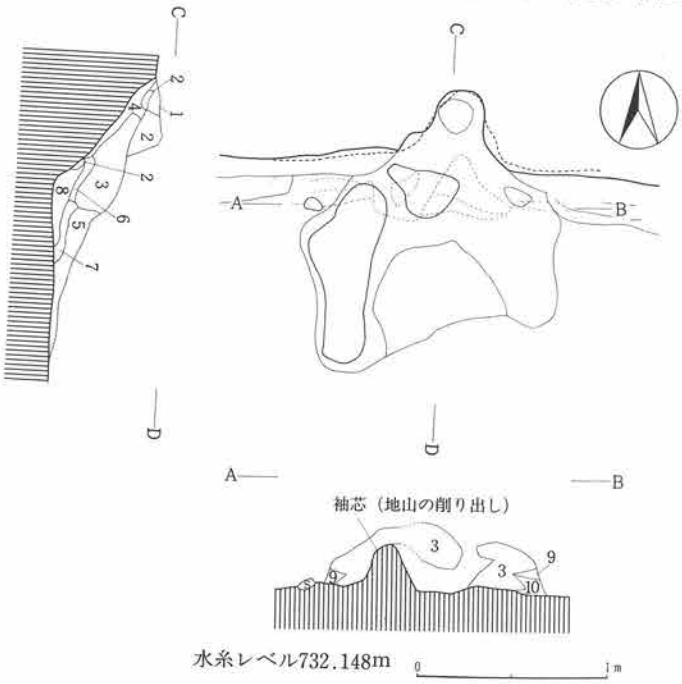


層序説明
第1層　黒褐色土層(7.5YR3/1)φ0.1～3.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第2層　暗褐色土層(7.5YR3/3)φ0.1～3.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第3層　暗褐色土層(7.5YR3/4)φ0.1～2.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第4層　黒色土層(7.5YR2/1)φ4.0cm前後のパミスを僅かに含み、ローム粒子を含む

第382図　第3号住居址実測図

遺物（第437図、図版90）

土師器片、黒色土器片が出土している。このうち、図示したものに土師器杯２点がある。本住居址の所産期は、古墳時代後期中葉に比定される。



層序説明

第１層　暗褐色土層(7.5YR3/3)φ0.5cm前後のパミスのほか、ローム粒子、粘土を含む
第２層　黒色土層(10YR2/1)φ1.0cm前後のパミスのほか、粘土を比較的多く含む
第３層　暗赤褐色土層(5YR3/4)粘土粒子(5YR5/4)を多量に含む
第４層　黒褐色土層(10YR2/3)φ0.5cm前後のパミスを僅かに含む。粒子は非常に細かい
第５層　にぶい赤褐色土層(5YR4/3)黒色土のほか、第３層の粘土を多量に含む
第６層　暗褐色土層(7.5YR3/4)粘土粒子、焼土粒子を少量含む。締っていない
第７層　褐色土層(7.5YR4/4)灰層。焼土を含む
第８層　にぶい赤褐色土層(5YR4/4)φ0.5cm前後のパミス、黒色土粒子を僅かに含むほか、粘土を含む。締っていない
第９層　黒褐色土層(10YR3/2)パミスをほとんど含まず、締っていない
第10層　暗褐色土層(10YR3/4)φ0.5cm前後のパミスのほか、ローム粒子、粘土粒子を僅かに含む

第383図　第３号住居址カマド実測図

４）第４号住居址

遺構（第384・385図、図版25）

Ｃ－３グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

東西は調査し得た範囲で405cm、南北368cmを測る。北壁部が、カマド部分より張り出している点、特異である。カマドを中心とする主軸方位は、Ｎ－13.5°－Ｗを示す。住居址覆土は、３層に区分され、確認面からの壁高は、25～34cmを測る。

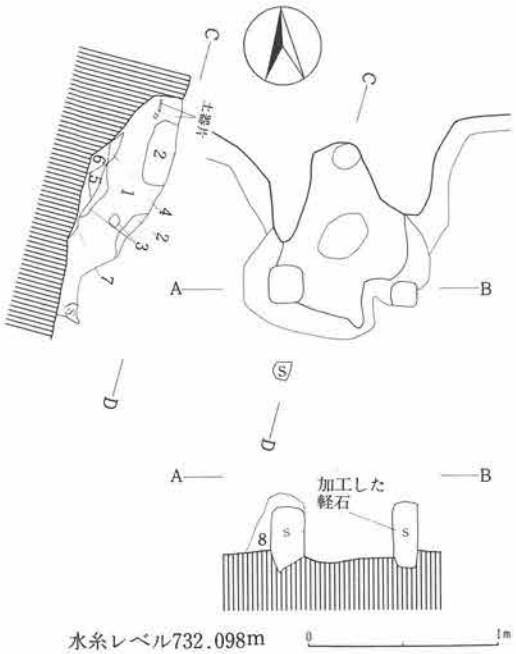
カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。遺存状態は比較的良好であった。両袖焚口部には加工した軽石を用い、褐色（7.5YR4/4）および橙色（7.5YR6/6）粘土により構築されていた。

ピットは総計３基検出された。このうち、P_1が主柱穴、P_3は速断できないが、貯蔵穴的な機能を有するものであろうか。なお、周溝は、調査範囲内では認められなかった。

遺物（第437図、図版90）

土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土している。このうち、図示したものに土師器杯・甕、黒色土器杯がある。黒色土器杯は、外面に「寺」の墨書がなされる。混入品であろう。

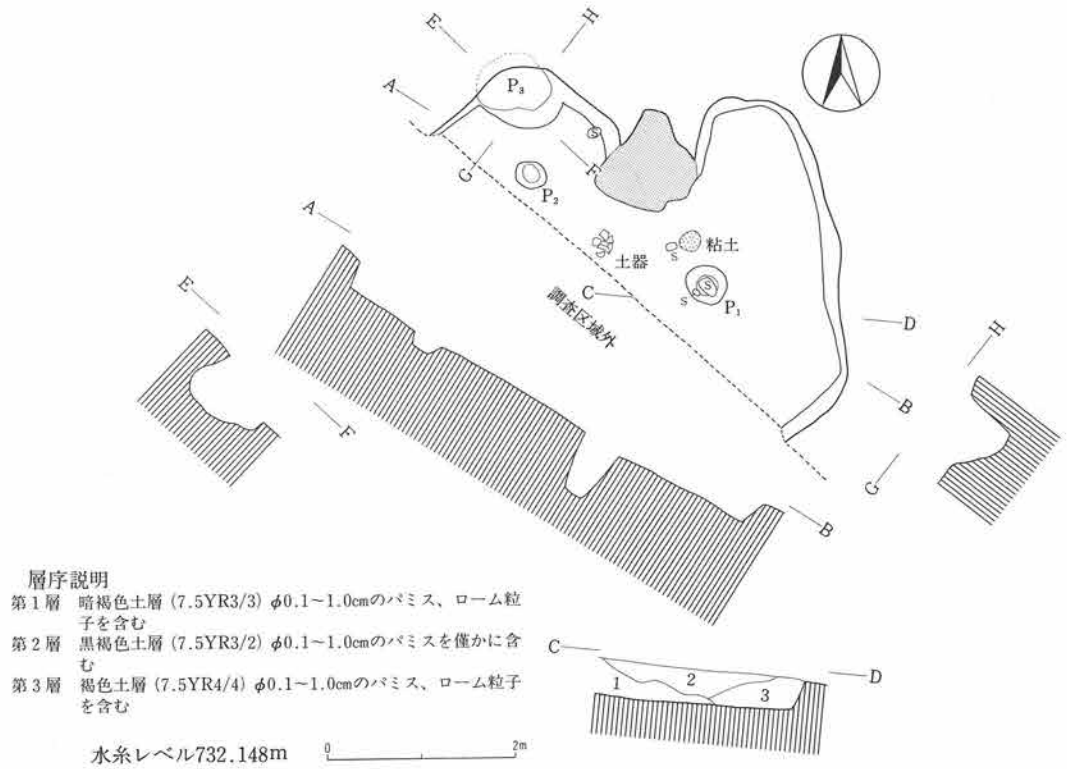
本住居址の所産期は、古墳時代後期中葉に比定される。



層序説明

第1層　褐色土層(7.5YR4/3)ローム粒子、粘土粒子を含む。締っていない
第2層　褐色土層(7.5YR4/4)粘土層。カマド構築土
第3層　にぶい黄橙色土層(10YR7/3)粘土層
第4層　灰黄褐色土層(10YR6/2)灰層
第5層　にぶい黄褐色土層(10YR5/4)灰層
第6層　にぶい黄橙色土層(10YR6/4)粘土層
第7層　赤褐色土層(2.5YR4/8)焼土層
第8層　橙色土層(7.5YR6/6)粘土層（カマド袖部構築土）

第384図　第4号住居址カマド実測図



層序説明

第1層　暗褐色土層（7.5YR3/3）φ0.1～1.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第2層　黒褐色土層（7.5YR3/2）φ0.1～1.0cmのパミスを僅かに含む
第3層　褐色土層（7.5YR4/4）φ0.1～1.0cmのパミス、ローム粒子を含む

第385図　第4号住居址実測図

5）第5号住居址

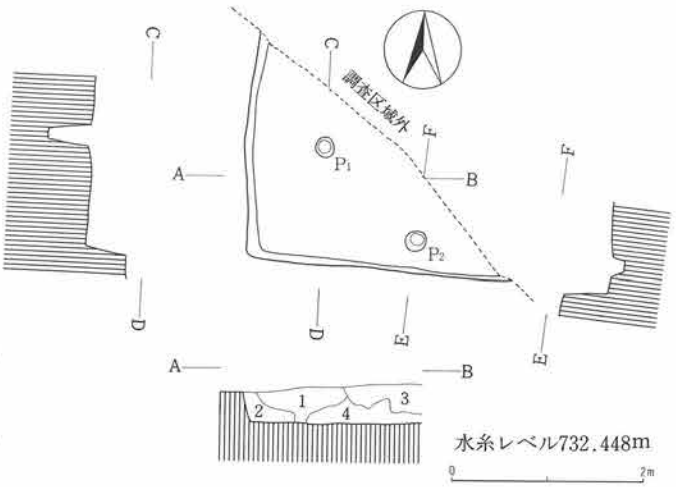
遺構（第386図、図版25）

D－3グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。調査し得た範囲で、東西238cm、南北280cmを測る。南北軸の方位は、N－4°－Eを示す。住居址覆土は、4層に区分され、確認面からの壁高は、31～45cmを測る。ピットは総計2基検出された。このうち、P_1が主柱穴、P_2が出入口部の施設に関連するものと思われる。

遺物

土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土しているが、図示し得るものは皆無である。

本住居址の所産期は、出土土器片から奈良時代前葉に比定される。



層序説明
第1層　黒褐色土層（7.5YR3/2）φ0.1～1.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第2層　褐色土層（7.5YR4/3）φ0.1～1.5cmのパミス、ローム粒子を含む
第3層　極暗褐色土層（7.5YR2/3）φ0.1～1.0cmのパミス、ローム粒子を僅かに含む
第4層　褐色土層（7.5YR4/4）φ0.1～1.0cmのパミス、ローム粒子を含む

第386図　第5号住居址実測図

6）第6号住居址

遺構（第387・388図、図版25）

E－4グリッドに位置する。第10号掘立柱建物址と重複関係を有し、第10号掘立柱建物址に切られている。東西325cm、南北313cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。

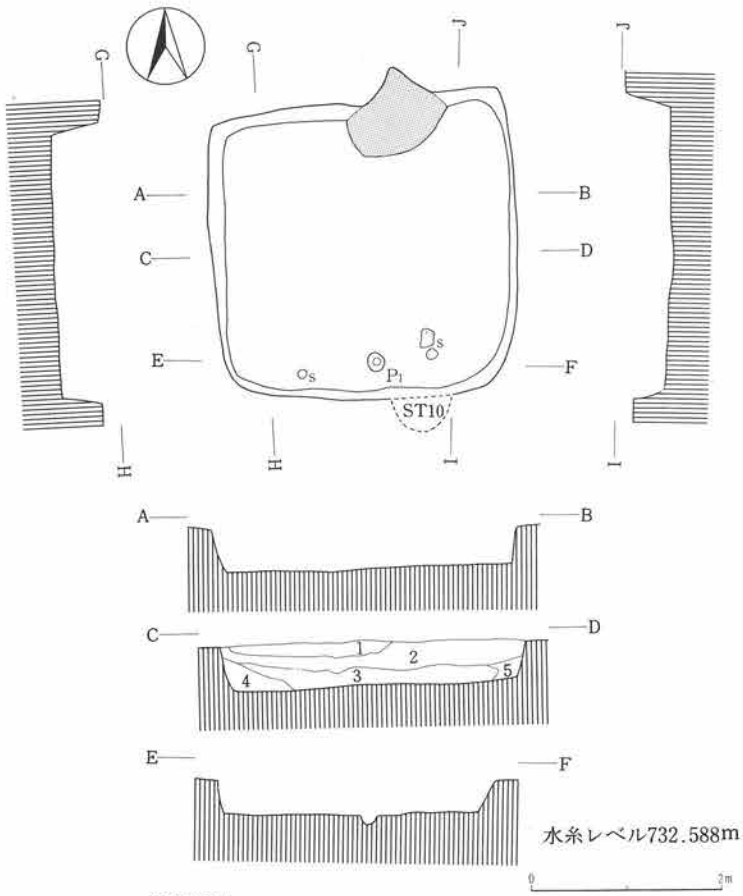
カマドを中心とする主軸方位は、N－5°－Wを示す。住居址覆土は、5層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、25～49cmを測る。

カマドは北壁東寄りに位置するが、遺存状態は悪い。地山を掘り残して袖芯とし、明褐色（7.5YR5/6）土により構築されていたものと思われる。

ピットは出入口部に関連すると考えられる1基が検出されたにとどまり、周溝は、検出されなかった。

遺物

土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土しているが、量は少なく、図示し得るものも皆無である。本遺構の所産期は、出土土器片中に受部を有する小型で浅い須恵器杯の破片が認められることから古墳時代後期後葉に比定される。



層序説明

第1層　極暗褐色土層(7.5YR2/3)φ0.1～2.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第2層　黒褐色土層(7.5YR2/2)φ0.1～1.5cmのパミス、ローム粒子を含む
第3層　暗褐色土層(7.5YR3/3)φ0.1～2.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第4層　暗褐色土層(7.5YR3/4)φ0.1～1.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第5層　褐色土層(7.5YR4/3)φ0.1～0.5cmのパミス、ローム粒子を含む

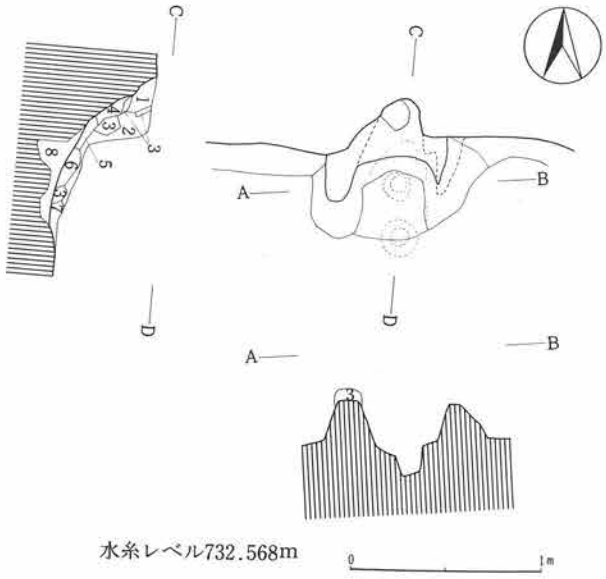
第387図　第6号住居址実測図

7）第7号住居址

遺構（第389・390図、図版25）

E－4グリッドに位置する。第9号掘立柱建物址と重複関係を有し、第9号掘立柱建物址により切られている。東西405cm、南北357cmを測り、平面プランは、隅丸長方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、N－8°－Wを示す。住居址覆土は、6層に区分され、自然堆



層序説明
第１層　褐色土層(7.5YR4/4)φ0.5cm前後のパミスのほか、炭化物を僅かに含み、締っている
第２層　暗褐色土層(7.5YR3/4)φ0.5cm前後のパミスのほか、粘土粒子を含む
第３層　明褐色土層(7.5YR5/6)粘土層
第４層　黒褐色土層(7.5YR2/2)僅かに炭化物を含む。粒子は非常に細かい
第５層　暗褐色土層(7.5YR3/3)焼土粒子、炭化物を含む。締っていない
第６層　明赤褐色土層(5YR5/8)焼土層
第７層　褐色土層(10YR4/6)焼土粒子、灰を含む。締っていない
第８層　埋土

第388図　第６号住居址カマド実測図

積と考えられる。

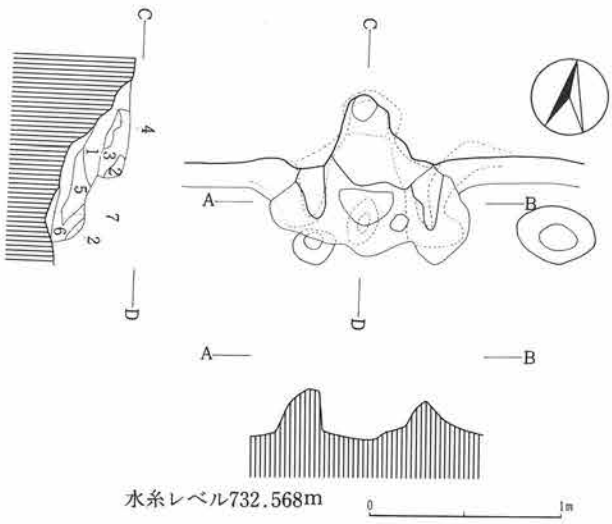
確認面からの壁高は、23～42cmを測る。

カマドは北壁ほぼ中央部に位置するが遺存状態は悪い。おそらく、地山を掘り残して袖芯とし、赤褐色（2.5YR4/6）粘土により構築されていたものと思われる。

ピットは総計５基検出された。

このうち、P_1～P_4が主柱穴、P_5は規模が小さいが、位置から推して貯蔵穴であろう。

なお、周溝は検出されなかった。



層序説明
第１層　黒褐色土層（10YR2/2）φ0.3～0.8cmのパミス、ローム粒子を含む
第２層　赤褐色土層(2.5YR4/6)粘土層
第３層　黒褐色土層（7.5YR2/2）φ0.3～1.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第４層　褐色土層(10YR4/4)φ1.0cm前後のパミス、ローム粒子を多く含む
第５層　暗赤褐色土層(5YR3/2)第２層の粘土とφ1.0cm前後のパミス、ローム粒子を多く含む
第６層　暗褐色土層（7.5YR3/3)ローム粒子、灰を含む
第７層　赤褐色土層(５YR4/6)焼土層

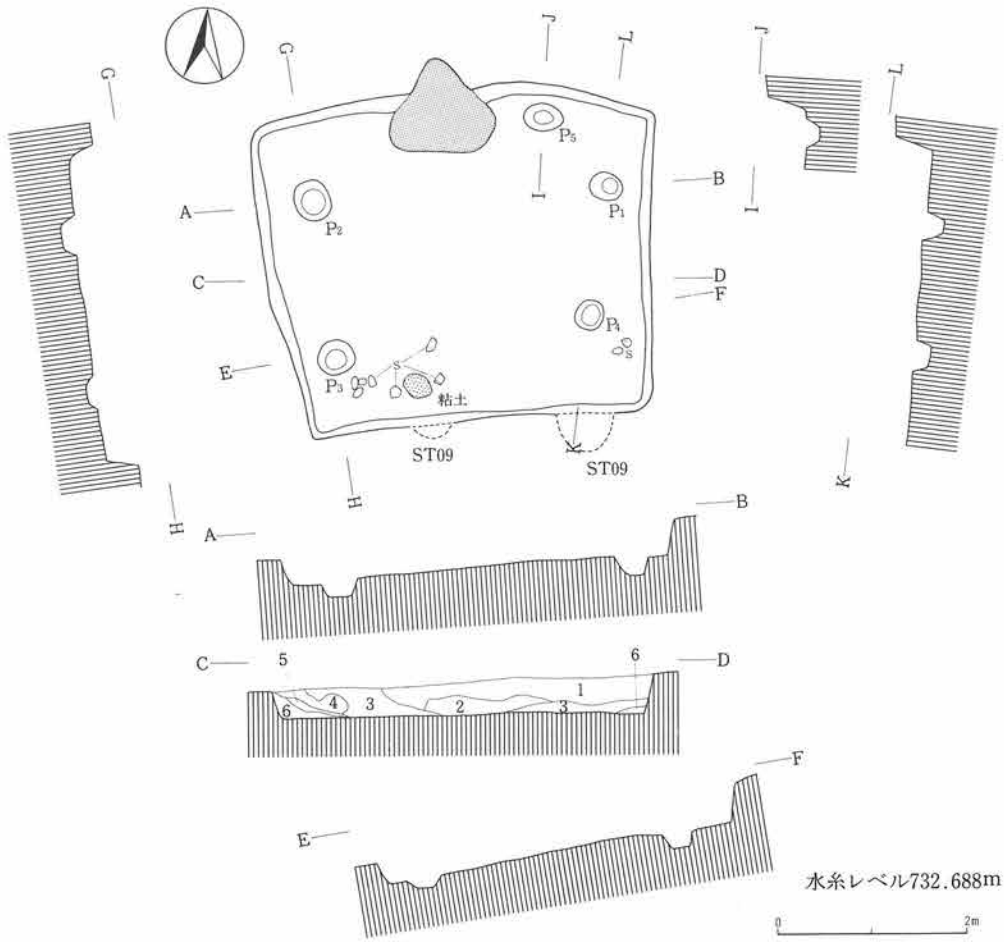
第389図　第７号住居址カマド実測図

遺物（第437図、図版90）

土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土している。

このうち、図示したものに土師器杯・長胴甕・球胴甕、銅製品がある。杯は、器高３cm前後と浅い。

本住居址の所産期は、古墳時代後期後葉に比定される。



層序説明
第1層　黒褐色土層(10YR2/3)φ0.1～1.0cmのパミス、ローム粒子を含み、締っている
第2層　にぶい黄褐色土層(10YR4/3)φ0.1～1.5cmのパミス、ローム粒子を多く含む
第3層　黒褐色土層(10YR3/2)φ0.1～0.8cmのパミス、ローム粒子を含む
第4層　暗褐色土層(10YR3/3)パミスをほとんど含まず、ローム粒子を含む
第5層　褐色土層(10YR4/6)φ0.1～0.5cmのパミスを僅かに含み、ローム粒子を多く含む
第6層　褐色土層(10YR4/4)φ0.1～0.8cmのパミス、ローム粒子を含む

第390図　第7号住居址実測図

8）第8号住居址

遺構（第391図、図版25）

E－4グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

調査し得た範囲で、東西148cm、南北118cmを測る。南北軸の方位は、N－6.5°－Eを示す。

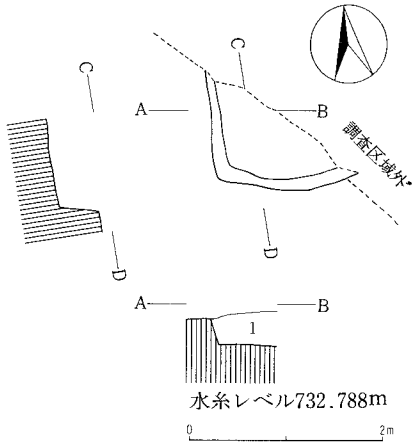
住居址覆土は、暗褐色（10YR3/4）土層1層で、確認面からの壁高は、28～39cmを測る。

ピット、周溝は検出されなかった。

遺物

土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土しているが、図示し得るものは皆無である。

本住居址の所産期は、出土土器片中に、「コ」の字状に近い口辺部を有する土師器甕の破片が認められることから奈良時代後葉に比定される。



層序説明
第1層　暗褐色土層(10YR3/4)φ0.3cm前後のパミス、ローム粒子を含む

第391図　第8号住居址実測図

9）第9号住居址

遺構（第392図、図版25）

E－4グリッドに位置する。

第10号住居址と重複関係を有し、第10号住居址を切って構築されている。

東西463cm、南北519cmを測り、平面プランは、南北に長い隅丸長方形を呈する。

南北軸の方位は、N－1°－Wを示す。住居址覆土は、3層に区分され、自然堆積と考えられる。

確認面からの壁高は、36～60cmを測る。カマドは、おそらく、北壁中央部に位置すると思われ、調査区域内では認められなかった。ピットは総計4基検出された。このうち、P_1～P_3が主柱穴と考えられる。なお、周溝は、認められなかった。

遺物（第437・441図、図版90・94）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、鉄製品、石製品が出土している。このうち、図示したものに須恵器杯、鉄製品がある。須恵器杯は、底部糸切り未調整のものであるが、他に図示し得なかったもので、ヘラキリ未調整のものも認められた。

鉄製品（第441図）には、刀子（1・2）、釘（4）、紡錘車の紡軸と考えられるもの（3）がある。

石製品（第441図13）は、砂岩製の打製石斧で、重さ90gを量る。

本住居址の所産期は、奈良時代中葉に比定される。

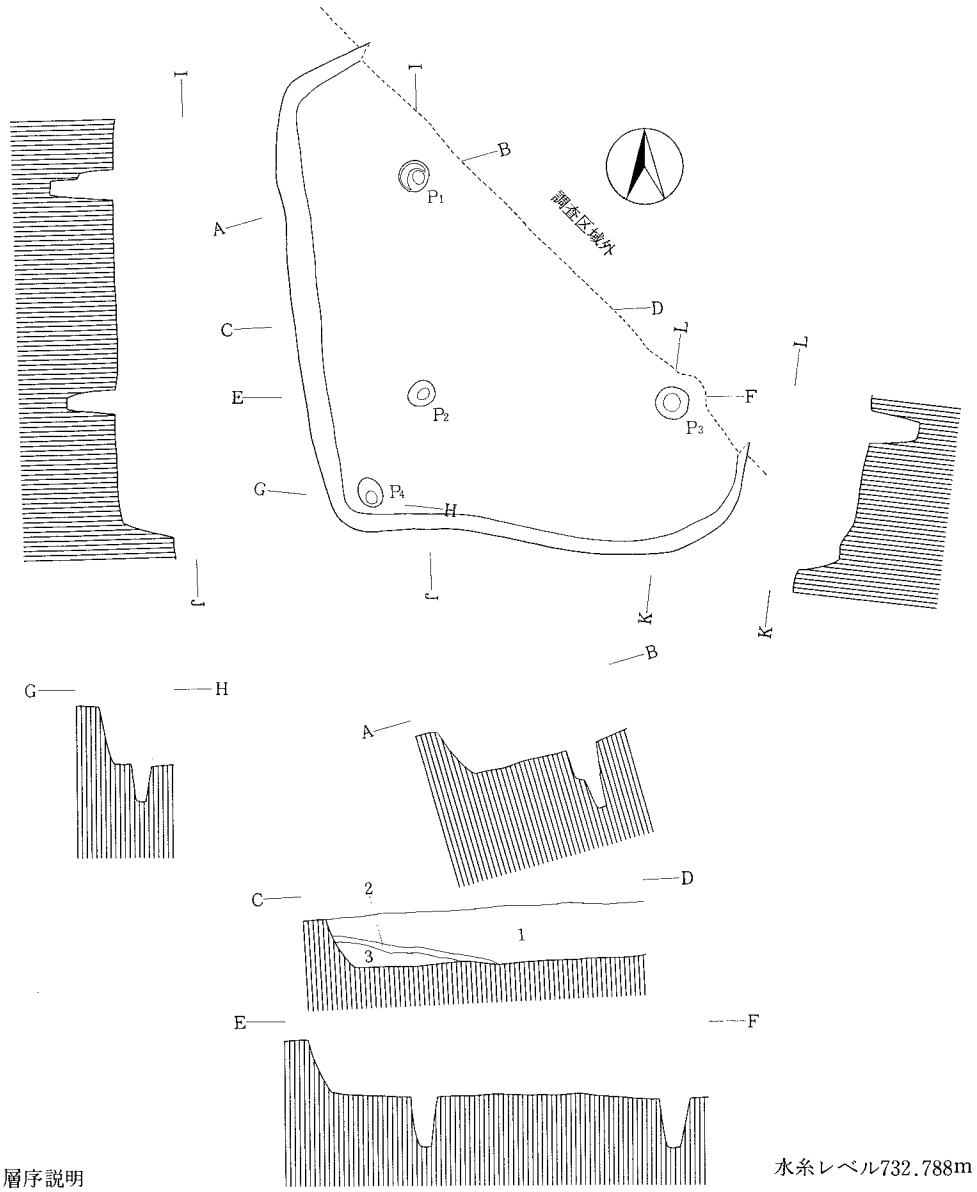
10）第10号住居址

遺構（第393図、図版25）

E－4グリッドに位置する。第9号住居址と重複関係を有し、第9号住居址に切られている。

東西438cm、南北は残存部で460cmを測り、平面プランは、おそらく、隅丸方形プランを呈するものと思われる。南北軸の方位は、N－1.5°－Eを示す。住居址覆土は、3層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、35～48cmを測る。

カマドは、北壁中央部に位置するものと思われるが、第10号住居址に切られているため、不明



層序説明
第1層　暗褐色土層（7.5YR3/4）φ0.1～3.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第2層　褐色土層（7.5YR4/3）φ0.1～2.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第3層　暗褐色土層（7.5YR3/3）φ0.1～3.0cmのパミス、ローム粒子を含む

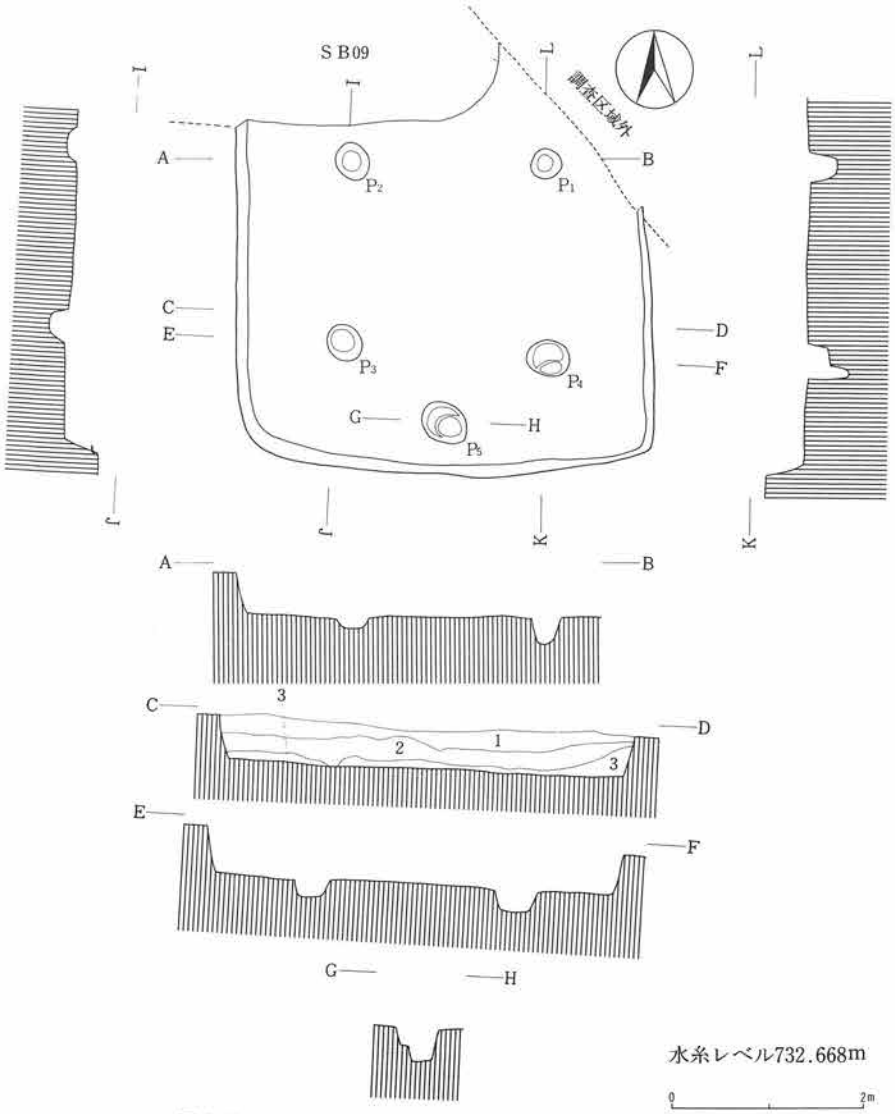
第392図　第9号住居址実測図

である。ピットは総計5基検出され、このうち、P_1～P_4が主柱穴、P_5が出入口部の施設に関連するものと思われる。なお、周溝は、検出されなかった。

遺物

土師器片、黒色土器片が出土しているが、図示し得るものは皆無である。

本遺構の所産期は、重複関係および出土土器片から奈良時代前葉に比定される。



層序説明

第1層　黒褐色土層(7.5YR3/2)φ0.1～2.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第2層　暗褐色土層(7.5YR3/3)φ0.1～3.0cmのパミスを多く含み、ローム粒子を含む
第3層　暗褐色土層(7.5YR3/4)φ0.1～1.0cmのパミス、ローム粒子を含む

第393図　第10号住居址実測図

11）第11号住居址

遺構（第394・395図、図版26）

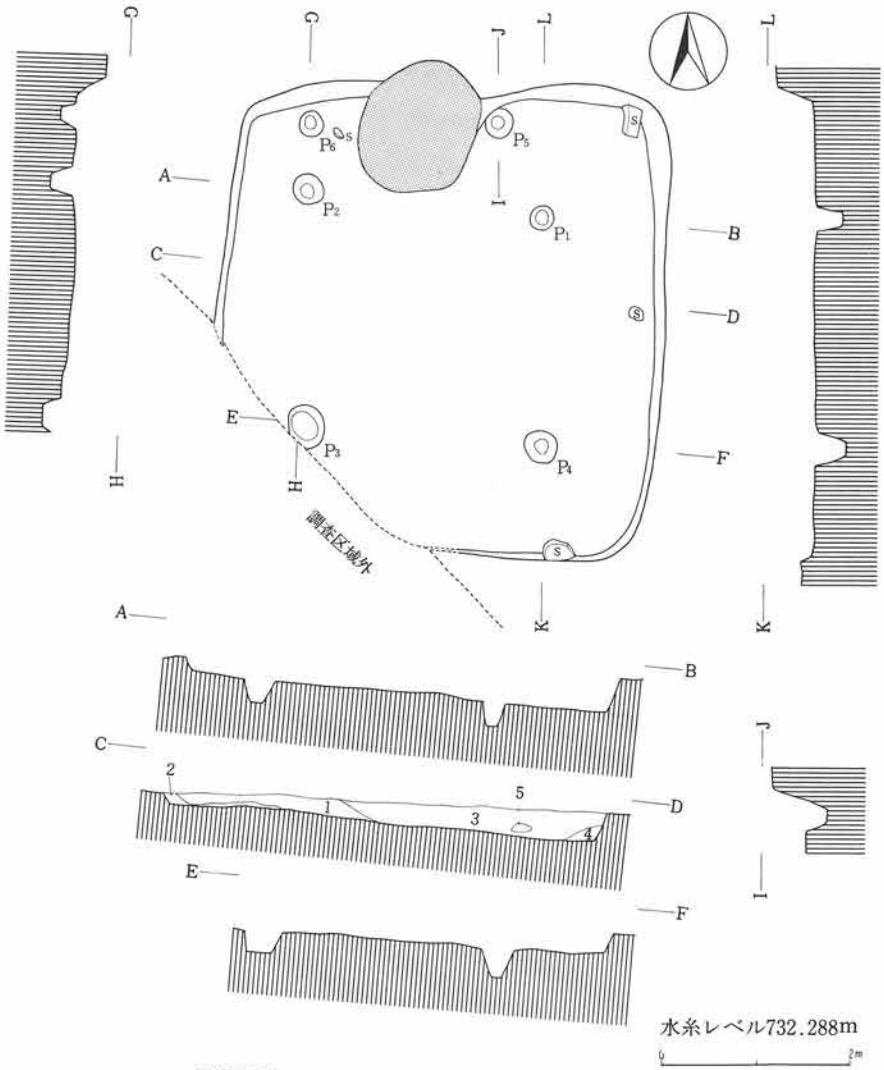
E－5グリッドに位置する。第20号住居址と重複関係を有し、第20号住居址を切って構築されている。東西480cm、南北511cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、N－8°－Eを示す。住居址覆土は、5層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、12～37cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置するが遺存状態は悪い。おそらく、軽石および粘土により構築されていたと思われる。ピットは総計6基検出された。このうち、P_1～P_4が主柱穴と考えられる。周溝は、検出されなかった。

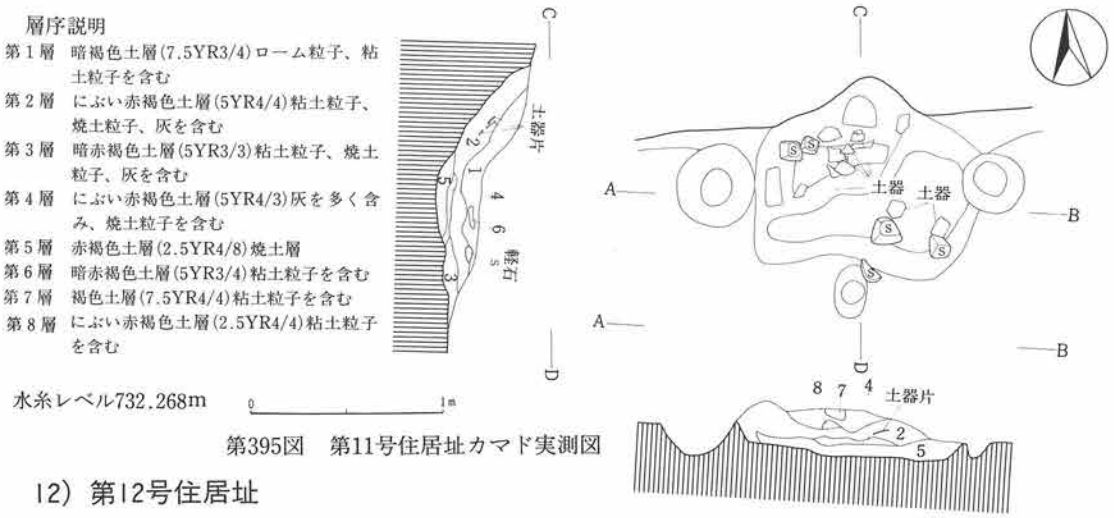
遺物（第437・438図、図版90・91）

土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土している。このうち、図示したものに須恵器杯、土師器甕がある。本住居址の所産期は奈良時代中葉に比定される。



層序説明
第1層　黒褐色土層(7.5YR3/2)φ1.0cm前後のパミスを僅かに含む
第2層　褐色土層(7.5YR4/3)φ0.1～0.5cmのパミス、ローム粒子を含む
第3層　暗褐色土層(7.5YR3/4)φ0.1～1.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第4層　灰褐色土層(7.5YR4/2)φ0.1～1.0cmのパミスを含む
第5層　褐色土層(7.5YR4/4)φ0.1～0.5cmのパミス、ローム粒子を含む

第394図　第11号住居址実測図



第395図　第11号住居址カマド実測図

12）第12号住居址

遺構（第396・397図、図版26）

E・F－4・5グリッドに位置する。第21号住居址、第7号掘立柱建物址と重複関係を有し、第21号住居址を切り、第7号掘立柱建物址に切られている。

東西636cm、南北610cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、N－5°－Eを示す。住居址覆土は、8層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、60～80cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。地山を掘り残して袖芯とし、暗褐色(10YR3/3)土を主体として構築されていたものと思われる。ピットは総計4基検出された。いずれも主柱穴と考えられる。周溝は、東壁北部から西壁にかけて巡らされていた。

遺物（第438・441図、図版91・94）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、石製品が出土している。このうち、図示したものに土師器杯・小型甕・甕、黒色土器杯・高杯、須恵器杯、石製品がある。

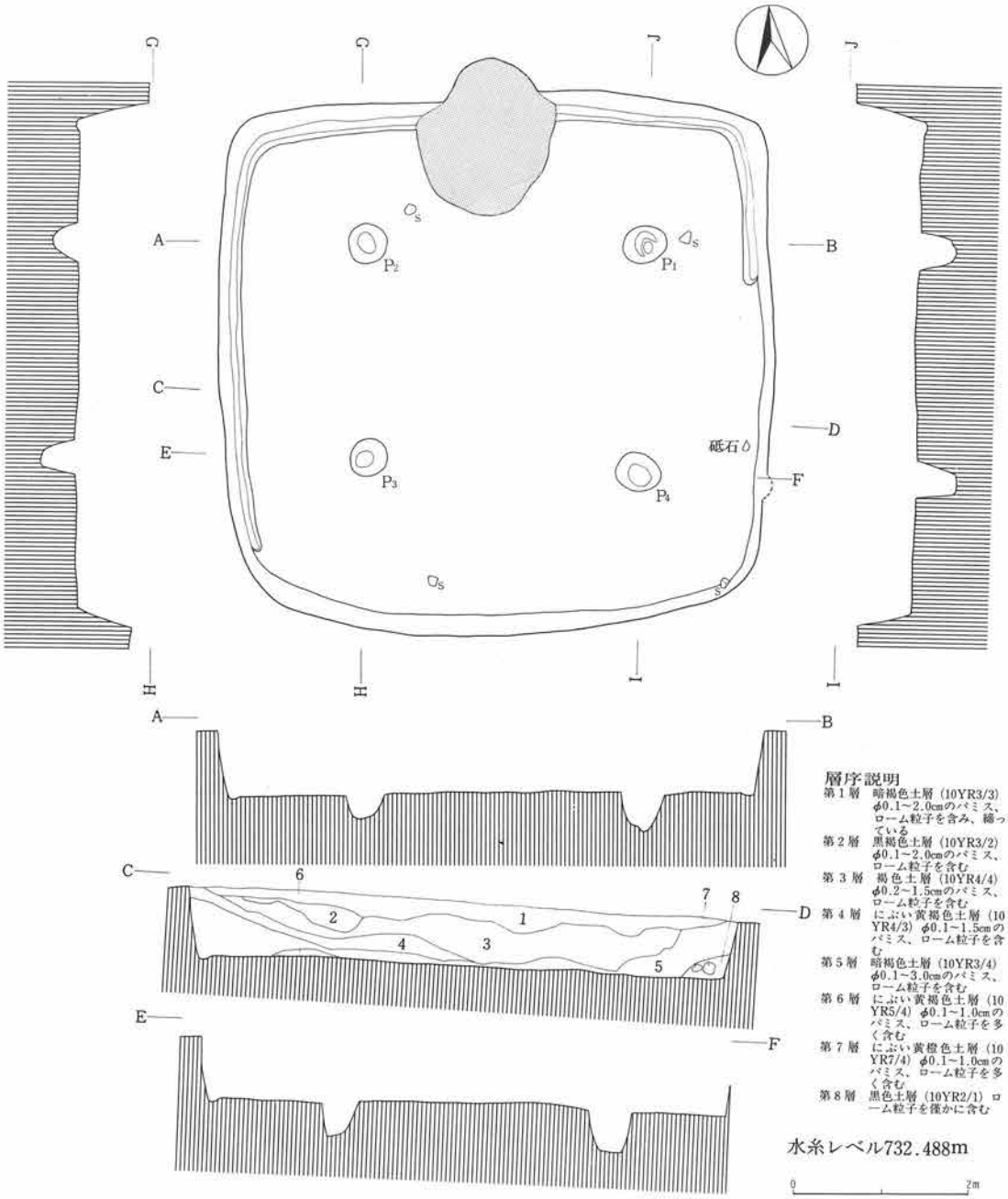
土師器甕（第438図6・7）には、球胴を呈するもの（6）と長胴のもの（7）がある。7は、最大径を口縁部に有する。2・4は後出的要素が強く、混入品であろう。また、4は外面に「之」の墨書がなされる。石製品（第441図）には、砂岩製の砥石（14）と打製石斧（15）がある。重さは、それぞれ275g、80gを量る。

本遺構の所産期は、古墳時代後期後葉に比定される。

13）第13号住居址

遺構（第398・399図、図版26）

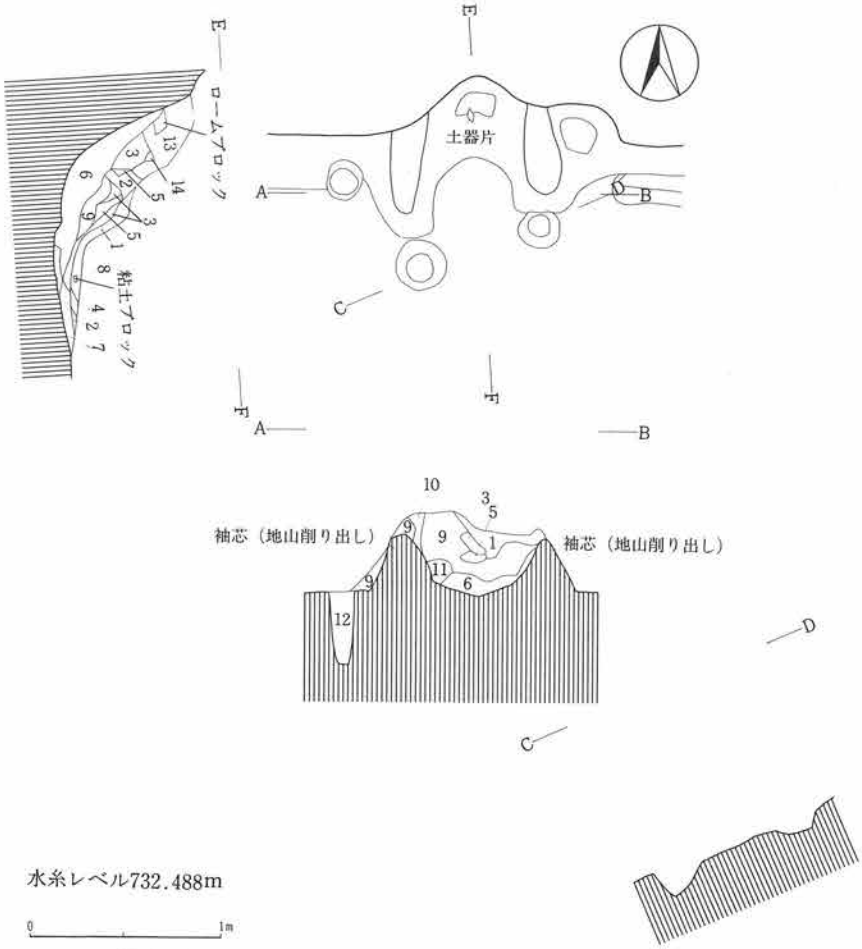
E－5グリッドに位置する。第15号住居址と重複関係を有し、第15号住居址を切って構築されている。東西404cm、南北460cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。



第396図　第12号住居址実測図

カマドを中心とする主軸方位は、N－12.5°－Wを示す。住居址覆土は、暗褐色土層１層である。確認面からの壁高は、３～33cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置するが遺存状態は悪い。おそらく、加工した軽石および粘土により構築されていたものと思われる。



層序説明

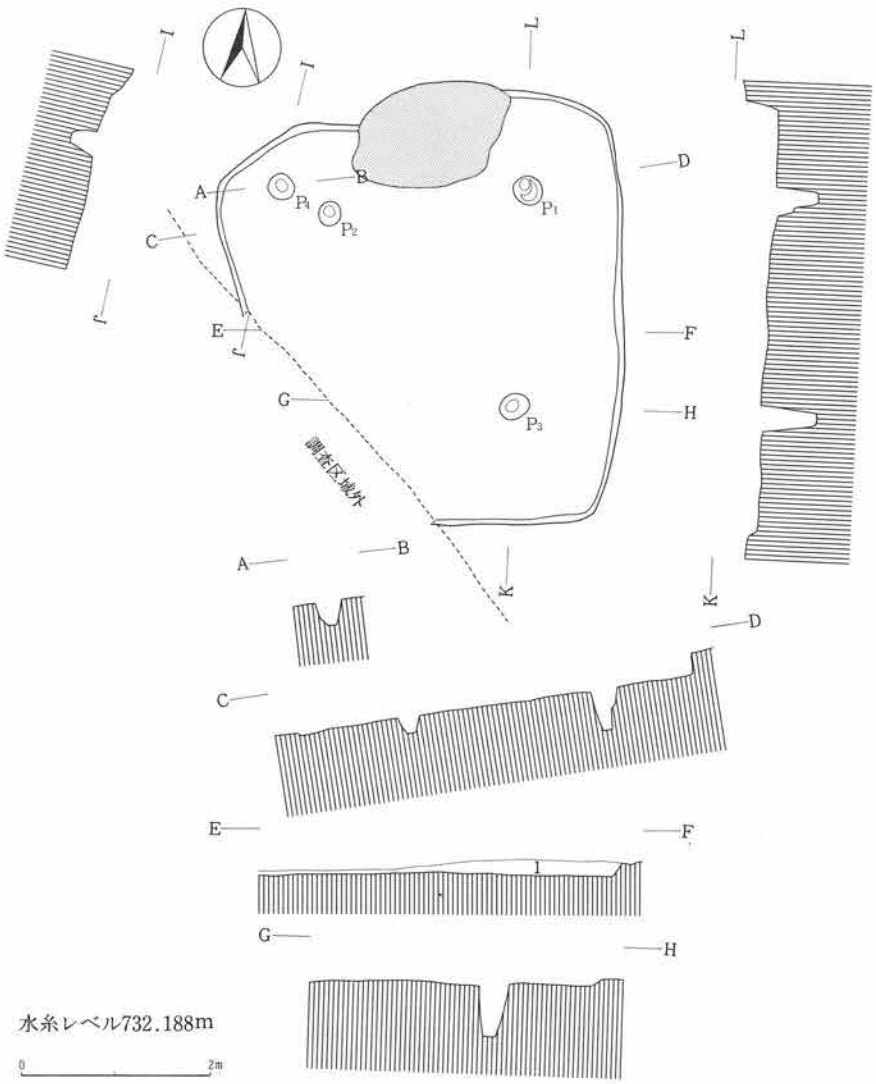
第1層　暗褐色土層（7.5YR3/3）粘土ブロック（5YR5/3）を含む
第2層　褐色土層（7.5YR4/4）粘土粒子を含む
第3層　にぶい赤褐色土層(5YR5/4)φ0.3cm前後のパミス、ローム粒子を僅かに含む
第4層　黒色土層(7.5YR2/1)ローム粒子を僅かに含む
第5層　明赤褐色土層（5YR5/6）ローム粒子を多く含み、粘土粒子を含む
第6層　にぶい赤褐色土層（5YR4/4）粘土粒子、焼土粒子、灰を含む
第7層　にぶい赤褐色土層（5YR4/3）ローム粒子、粘土粒子、焼土粒子を含む
第8層　明赤褐色土層(5YR5/8)焼土層
第9層　暗褐色土層（10YR3/3）φ0.1～0.3cmのパミス、粘土粒子を含む
第10層　黒褐色土層（10YR2/3）ローム粒子を含む
第11層　暗赤褐色土層（5YR3/2）焼土、炭化物を含む
第12層　褐色土層(10YR4/4)φ0.1～0.5cmのパミス、ローム粒子、焼土粒子を含む
第13層　黒褐色土層（10YR3/2）ローム粒子、粘土粒子を含む
第14層　褐色土層（7.5YR4/6）ローム粒子、粘土粒子を含む

第397図　第12号住居址カマド実測図

ピットは総計4基検出された。このうち、P_1～P_3の3基が主柱穴と考えられる。
なお、周溝は、検出されなかった。

遺物（第439・441図、図版92・94）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、鉄製品、石製品のほか、自然遺物として炭化材がカマド内



層序説明

第１層　暗褐色土層(10YR3/3)φ0.3～2.0cmのパミス、ローム粒子を僅かに含む

第398図　第13号住居址実測図

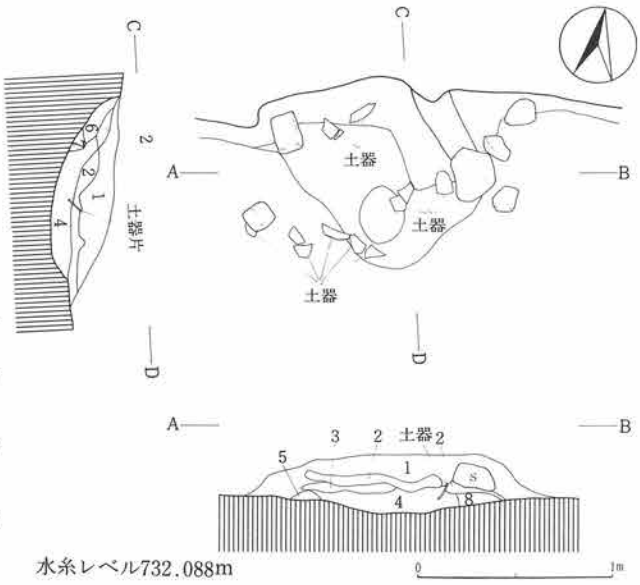
から出土している。このうち、図示したものに黒色土器杯、須恵器蓋・杯・長頸壺、鉄製品、石製品がある。なお、炭化材については、後述する。

黒色土器杯（第439図１・２）は、２点とも底部手持ちヘラケズリがなされる。須恵器杯（第439図４・５）は、いずれも底部糸切り未調整である。

鉄製品（第441図５）は、刀子で柄の部分に木質部が残存している。

石製品（第441図18）は、砂岩製の打製石斧で、重さ135ｇを量る。

本住居址の所産期は、平安時代初めに比定される。



層序説明
第1層　暗褐色土層(10YR3/3)住居址覆土と同じ
第2層　褐色土層(7.5YR4/4)粘土粒子を多く含む
第3層　暗赤褐色土層(5YR3/4)粘土粒子、焼土粒子を含む
第4層　明褐色土層(7.5YR5/6)焼土、炭化物、灰を含む
第5層　にぶい黄褐色土層(10YR5/4)地山に近似
第6層　暗褐色土層(10YR3/4)粘土粒子を僅かに含む
第7層　赤褐色土層(5YR4/6)焼土層
第8層　暗褐色土層(10YR3/3)φ0.1～0.3cmのパミスを含み、締っている

第399図　第13号住居址カマド実測図

14）第14号住居址

遺構（第400・401図、図版26）

E・F－5グリッドに位置する。第15号住居址と重複関係を有し、第15号住居址を切って構築されている。

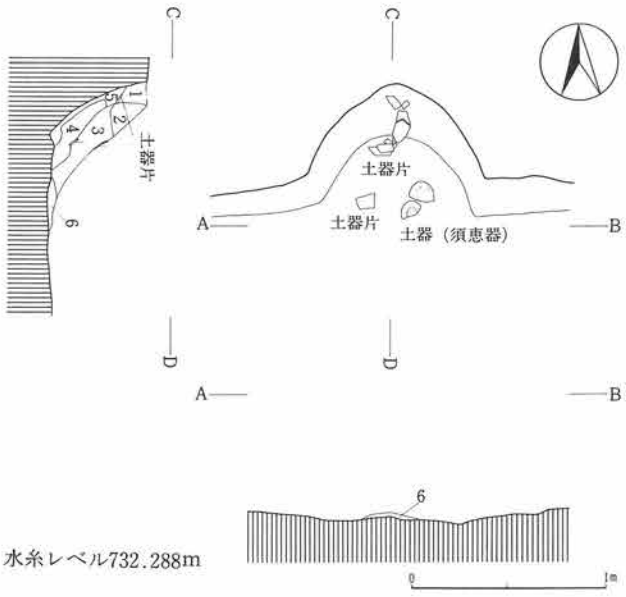
東西397cm、南北327cmを測り、平面プランは、隅丸長方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、N－3°－Eを示す。

住居址覆土は、3層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、26～41cmを測る。

カマドは、北壁東寄りに位置するが遺存状態は悪い。

ピットは主柱穴と考えら



層序説明
第1層　褐色土層(7.5YR4/3)粘土粒子、炭化物を含む
第2層　褐色土層(7.5YR4/6)粘土粒子を多く含む
第3層　にぶい黄褐色土層(10YR5/4)φ0.5～2.0cmのパミス、ローム粒子、粘土粒子、炭化物を含む
第4層　暗赤褐色土層(5YR3/2)焼土、炭化物、灰を含む
第5層　にぶい赤褐色土層(5YR5/4)粘土粒子を含む
第6層　にぶい赤褐色土層(2.5YR4/4)焼土層

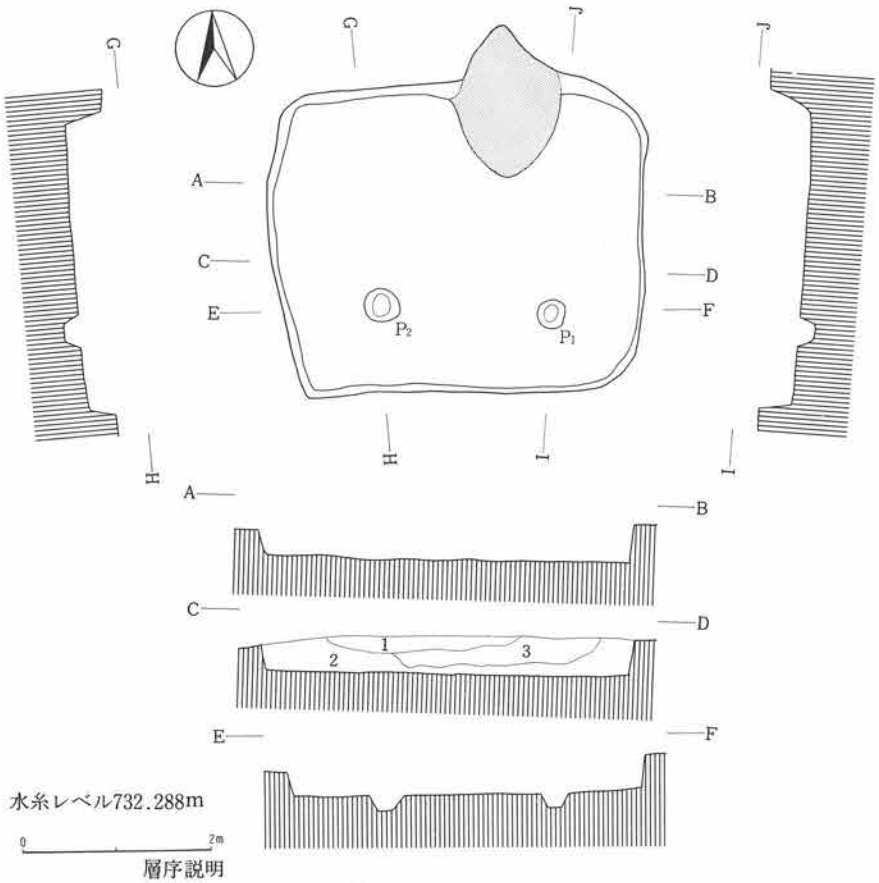
第400図　第14号住居址カマド実測図

れる２基が検出された。なお、周溝は、検出されなかった。

遺物（第439図、図版92）

土師器片、黒色土器片、須恵器片のほか、自然遺物として炭化材が出土している。このうち、図示したものに須恵器杯・椀がある。なお、炭化材については、後述する。

本住居址の所産期は、奈良時代前葉に比定される。



層序説明

第１層　暗褐色土層(7.5YR3/3)φ0.3～2.0cmのパミス、ローム粒子を僅かに含む
第２層　褐色土層(7.5YR4/4)φ0.1～2.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第３層　褐色土層(7.5YR4/6)φ1.0cm前後のパミスを僅かに含み、ローム粒子を含む

第401図　第14号住居址実測図

15）第15号住居址

遺構（第402・403図、図版26）

Ｅ・Ｆ－５グリッドに位置する。第13・14号住居址と重複関係を有し、第13・14号住居址により切られている。東西570cm、南北は残存部で457cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈するものと思われる。カマドを中心とする主軸方位は、Ｎ－16°－Ｅを示す。住居址覆土は、２層に区分

され、確認面からの壁高は、16～31cmを測る。

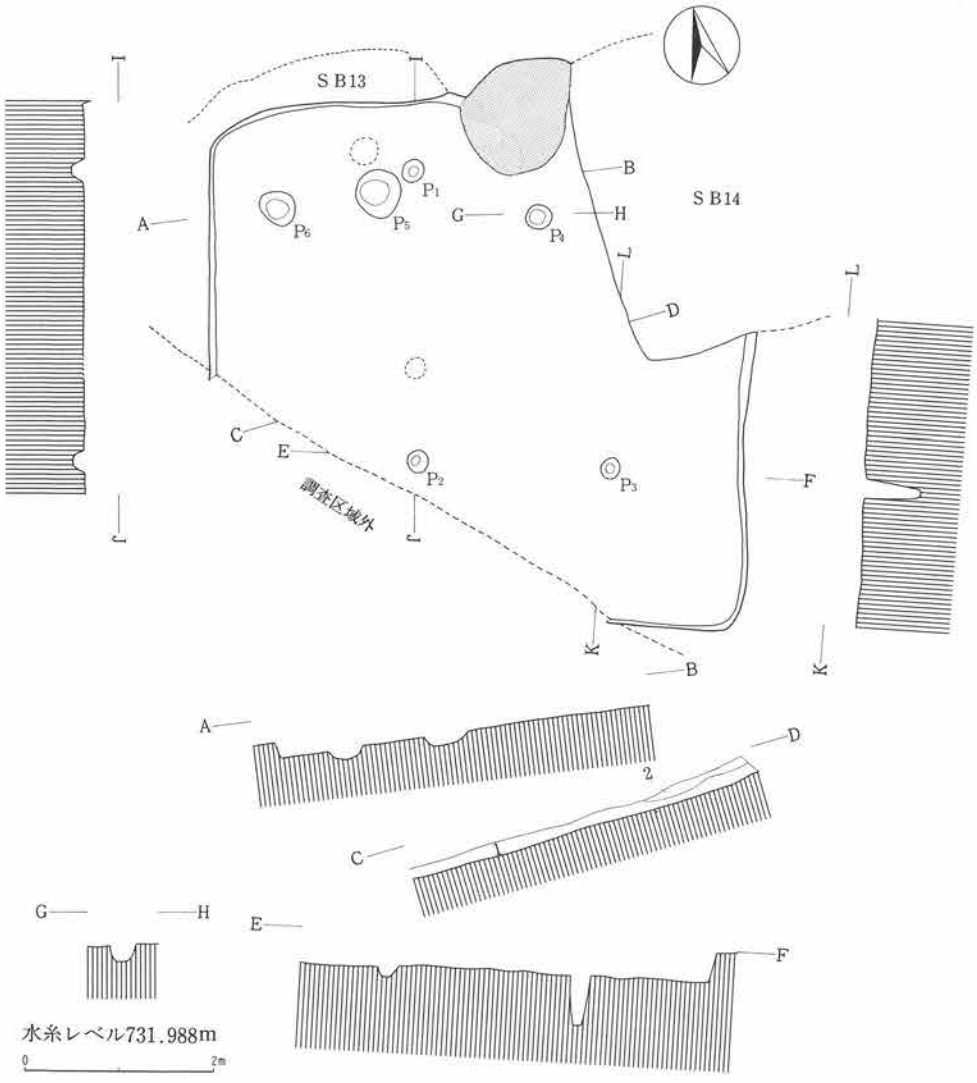
カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。左袖は地山を掘り残し、右袖は地山を掘り残した上に第10・11層を載せ、袖芯とし、第２・８層により構築されていたものと思われる。

ピットは総計６基検出された。このうち、P_1～P_3の３基が主柱穴と考えられる。

なお、周溝は、検出されなかった。

遺物（第441図、図版94）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、土製品、石製品のほか、自然遺物として炭化材がカマド内



層序説明

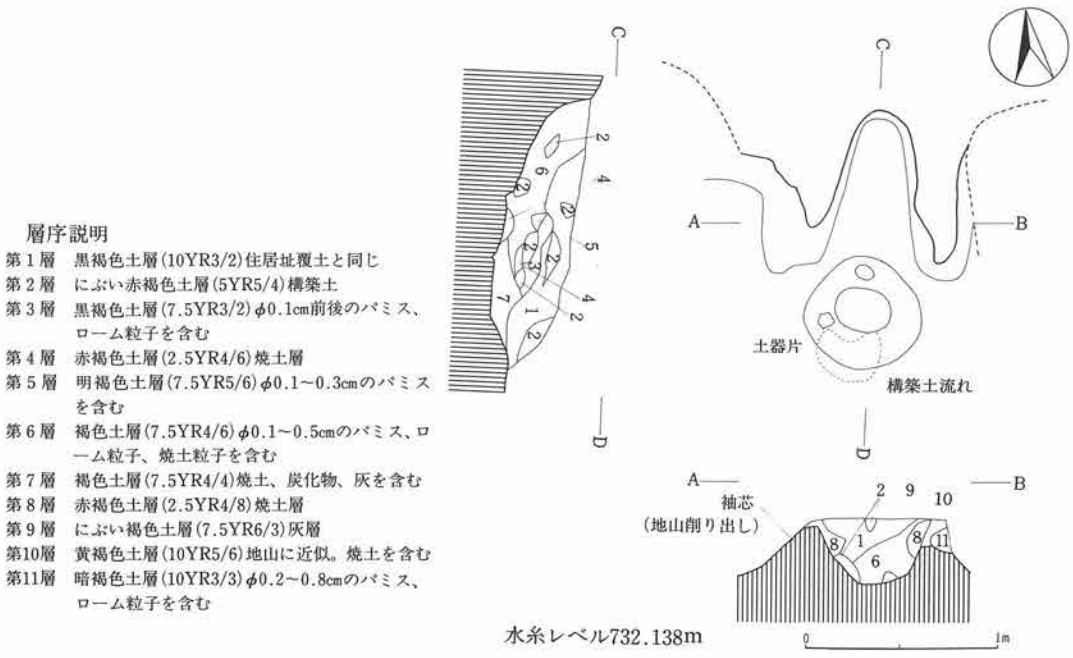
第１層　黒褐色土層(10YR3/2)φ0.3～0.5cmのパミス、ローム粒子を僅かに含む

第２層　褐色土層（10YR4/4）φ0.3～1.0cmのパミスを僅かに含み、ローム粒子を多く含む

第402図　第15号住居址実測図

から出土している。このうち、図示したものに土製品、石製品があり、炭化材については後述する。土製品（第441図７）は、丸玉である。石製品（第441図16）は、砂岩製の打製石斧で重さ30ｇを量る。なお、カマド内出土の炭化材については後述する。

本住居址の所産期は、古墳時代後期に比定される。



層序説明
第１層　黒褐色土層(10YR3/2)住居址覆土と同じ
第２層　にぶい赤褐色土層(5YR5/4)構築土
第３層　黒褐色土層(7.5YR3/2)φ0.1cm前後のパミス、ローム粒子を含む
第４層　赤褐色土層(2.5YR4/6)焼土層
第５層　明褐色土層(7.5YR5/6)φ0.1～0.3cmのパミスを含む
第６層　褐色土層(7.5YR4/6)φ0.1～0.5cmのパミス、ローム粒子、焼土粒子を含む
第７層　褐色土層(7.5YR4/4)焼土、炭化物、灰を含む
第８層　赤褐色土層(2.5YR4/8)焼土層
第９層　にぶい褐色土層(7.5YR6/3)灰層
第10層　黄褐色土層(10YR5/6)地山に近似。焼土を含む
第11層　暗褐色土層(10YR3/3)φ0.2～0.8cmのパミス、ローム粒子を含む

第403図　第15号住居址カマド実測図

16）第16号住居址

遺構（第404・405図、図版26）

Ｆ－５グリッドに位置する。第32号掘立柱建物址と重複関係を有し、第32号掘立柱建物址に切られている。東西539cm、南北475cmを測り、平面プランは、東西に長い隅丸長方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、Ｎ－17°－Ｅを示す。住居址覆土は、５層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、42～57cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。袖部は、黒色（7.5YR2/1）土を基盤土とし、にぶい赤褐色（５YR5/4）土により構築されていた。

ピットは総計８基検出された。このうち、P_1～P_4が主柱穴と考えられる。

周溝は、西壁下で認められた。

遺物（第439・441図、図版92・94）

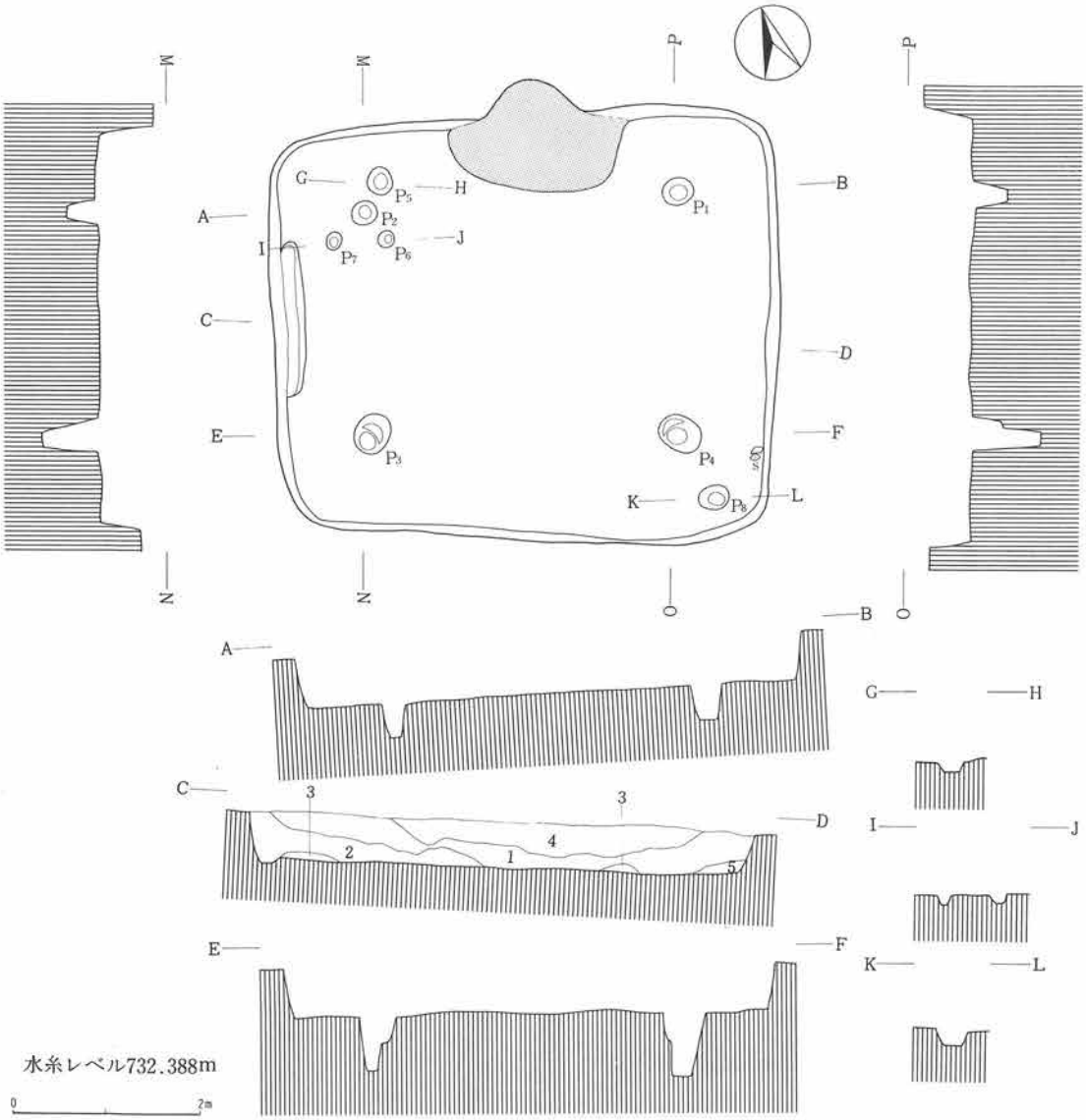
土師器片、黒色土器片、須恵器片、石製品、鉄製品が出土している。このうち、図示したもの

に土師器杯・小型壺、黒色土器高杯、石製品、鉄製品がある。

土師器杯（第439図１）は、素縁で、器高3.65cmと浅い。鉄製品（第441図６）は、鉄鏃である。

石製品（第441図９・10）は、いずれも凝灰岩製の砥石で、同一個体の可能性がある。10には穿孔がなされ、携帯用のものであろう。重さは、９が10ｇ、10が25ｇを量る。

本住居址の所産期は、古墳時代後期後葉に比定される。



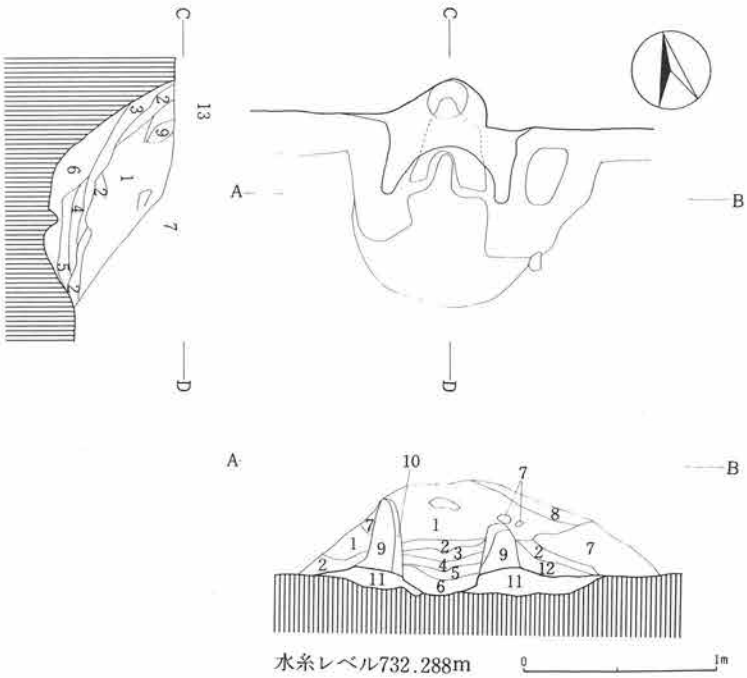
層序説明

第１層　暗褐色土層（7.5YR3/3）φ0.1～2.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第２層　暗褐色土層（7.5YR3/4）φ0.1～2.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第３層　黒色土層（7.5YR2/1）φ0.1～3.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第４層　褐色土層（7.5YR4/3）φ0.1～3.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第５層　褐色土層（7.5YR4/6）φ0.1～0.5cmのパミス、ローム粒子を含む

第404図　第16号住居址実測図

層序説明

第１層　黒褐色土層(10YR3/2)φ1.0cm前後のパミス、ローム粒子、粘土粒子を含む
第２層　にぶい赤褐色土層(2.5YR5/4)粘土粒子を含む
第３層　にぶい赤褐色土層(2.5YR4/3)粘土粒子、灰を含む
第４層　にぶい褐色土層(7.5YR5/3)灰層
第５層　明赤褐色土層(5YR5/8)焼土層
第６層　黒褐色土層(10YR2/2)φ0.3cm前後のパミス、ローム粒子、焼土粒子を含む
第７層　にぶい黄褐色土層(10YR4/3)ローム粒子を含む
第８層　黒色土層(7.5YR1.7/1)φ0.3～1.0cmのパミス、ローム粒子を僅かに含む
第９層　にぶい赤褐色土層(5YR5/4)構築土
第10層　赤褐色土層(2.5YR4/6)第９層が焼けたもの
第11層　黒色土層(7.5YR2/1)φ0.5cm前後のパミス、ローム粒子を含む。埋土
第12層　にぶい赤褐色土層(5YR5/3)φ0.1～0.7cmのパミス、ローム粒子、粘土粒子を含む
第13層　暗赤褐色土層(2.5YR3/3)粘土粒子を多く含む



第405図　第16号住居址カマド実測図

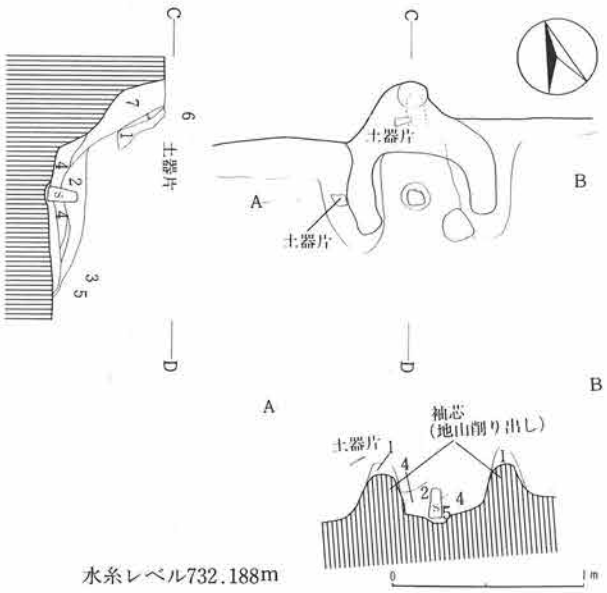
17）第17号住居址

遺構（第406・407図、図版26）

Ｆ－５グリッドに位置する。第５号掘立柱建物址と重複関係を有し、第５号掘立柱建物址によ

層序説明

第１層　にぶい褐色土層(7.5YR5/4)構築土。赤褐色(2.5YR4/6)の粘土ブロックを含む
第２層　褐色土層(7.5YR4/4)粘土粒子、灰を含む
第３層　赤褐色土層(2.5YR4/6)焼土を含む
第４層　にぶい赤褐色土層(5YR4/3)粘土粒子、焼土、灰を含む
第５層　にぶい赤褐色土層(5YR4/4)ローム粒子、焼土、灰を含む
第６層　暗赤褐色土層(2.5YR3/2)粘土粒子を多く含む
第７層　にぶい黄褐色土層(10YR4/3)φ0.3～2.0cmのパミス、ローム粒子、粘土粒子を含む



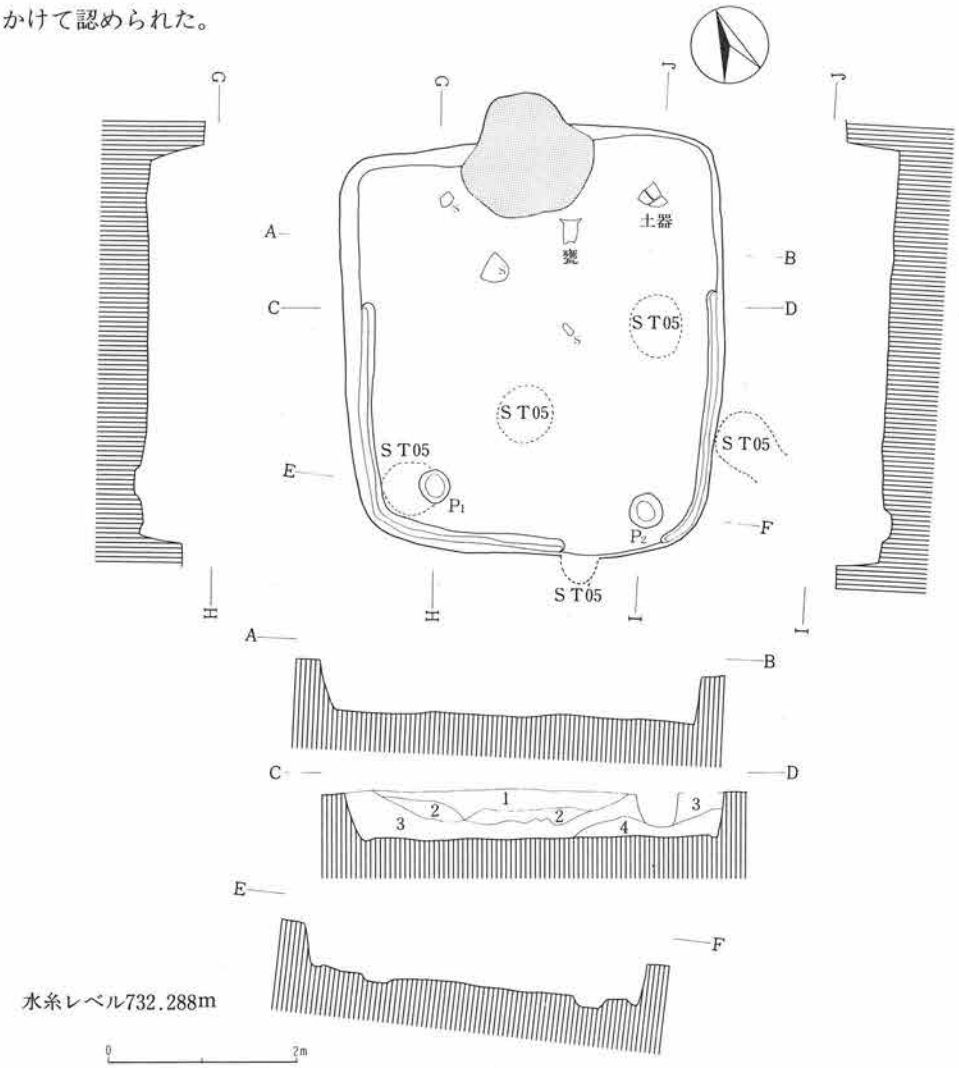
第406図　第17号住居址カマド実測図

り切られている。東西400cm、南北434cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、N－17°－Eを示す。住居址覆土は、4層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、41～54cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。遺存状態は比較的良好であった。地山を掘り残して袖芯とし、にぶい褐色（7.5YR5/4）土により構築されていた。また、火床部では軽石を加工した支脚石が認められた。

ピットは主柱穴と考えられる2基が検出された。また、周溝は、住居址南部で東壁下から西壁下にかけて認められた。



層序説明

第1層　暗褐色土層（7.5YR3/3）φ0.3～2.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第2層　褐色土層（7.5YR4/3）φ0.1～2.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第3層　黒褐色土層（7.5YR3/2）φ0.1～3.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第4層　褐色土層（7.5YR4/4）φ0.1～1.0cmのパミス、ローム粒子を含む

第407図　第17号住居址実測図

遺物（第439・441図、図版92・94）

土師器片、石製品のほか、自然遺物として炭化材がカマド内から出土している。このうち、図示したものに土師器杯・小型甕・甕、石製品が出土している。

土師器杯（第439図１）は、畿内系暗文を有するもので、飛鳥II～III期のものであろう。

石製品（第441図８・17）には、翡翠製の丸玉（８）と安山岩製の多凹石（17）がある。

本住居址の所産期は、古墳時代後期後葉に比定される。

18）第18号住居址

遺構（第408・409図、図版26）

Ｆ－５グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

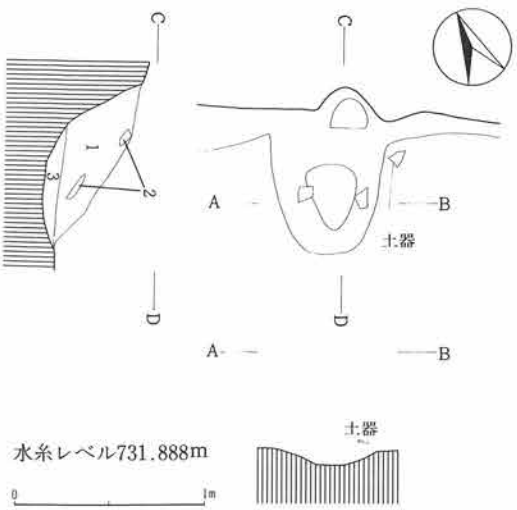
東西290cm、南北318cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。カマドを中心とする主軸方位は、Ｎ－22°－Ｅを示す。住居址覆土は、４層に区分され、自然堆積と考えられる。

確認面からの壁高は、21～42cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置するが、遺存状態は悪い。おそらく、加工した軽石などを用いて構築されていたものと思われる。火床部は、焼土・炭化物を含むにぶい黄褐色（10YR4/3）土により充塡されていた。

ピットは総計５基検出された。このうち、P_3・P_4が主柱穴と考えられる。

なお、周溝は、検出されなかった。



層序説明
第１層　黒褐色土層(10YR2/3)φ0.3～0.7cmのパミス、ローム粒子を僅かに含む
第２層　明赤褐色土層(2.5YR5/6)φ0.3cm前後のパミス、粘土粒子を含む
第３層　にぶい黄褐色土層(10YR4/3)φ0.3～1.0cmのパミス、ローム粒子を含み、焼土、炭化物を僅かに含む

第408図　第18号住居址カマド実測図

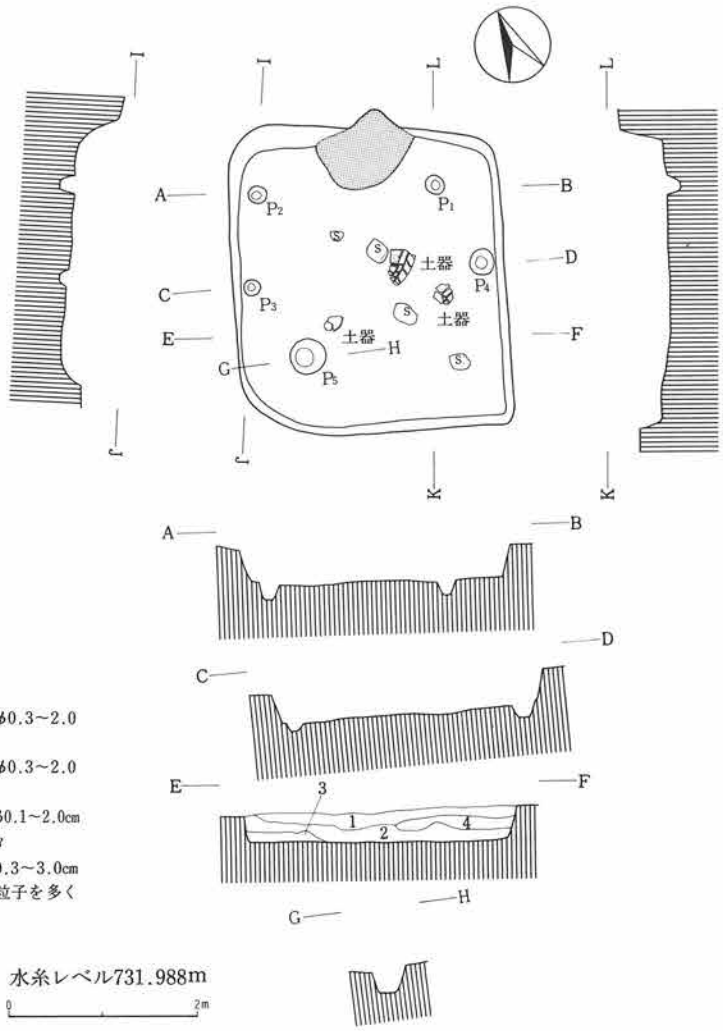
遺物（第440図、図版93）

土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土している。このうち、図示したものに黒色土器杯、土師器甕がある。

黒色土器杯（１～３）は、外稜口辺を有するもの（１）と素縁のもの（２・３）とがある。

土師器甕は、いずれも最大径を口縁部に有する。

本住居址の所産期は、古墳時代後期後葉に比定される。



層序説明

第１層　黒褐色土層(7.5YR2/2)φ0.3～2.0cmのパミスを僅かに含む

第２層　黒褐色土層(7.5YR3/1)φ0.3～2.0cmのパミスを含む

第３層　極暗褐色土層(7.5YR2/3)φ0.1～2.0cmのパミス、ローム粒子を含む

第４層　褐色土層(7.5YR4/6)φ0.3～3.0cmのパミスを含み、ローム粒子を多く含む

水糸レベル731.988m

0　2m

第409図　第18号住居址実測図

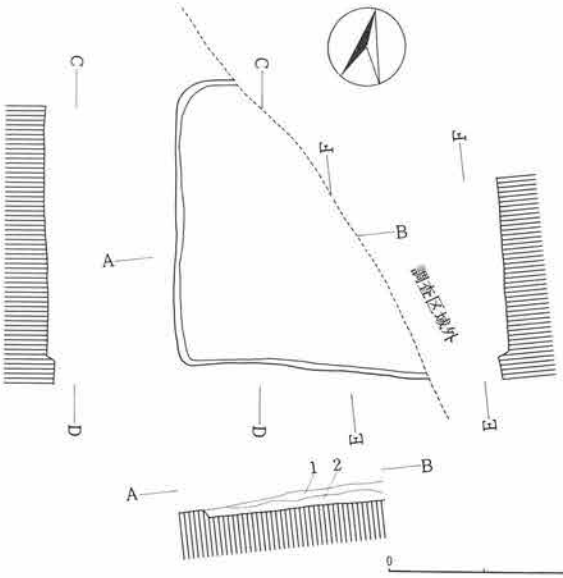
19）第19号住居址

遺構（第410図、図版27）

Ｇ－５グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

東西は調査し得た範囲で254cm、南北301cmを測り、平面プランは、おそらく、隅丸方形を呈するものと思われる。

住居址覆土は、２層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、８～12cmを測る。南北軸の方位は、Ｎ－11.5°－Ｗを示す。なお、カマド、炉址、周溝等の施設は、検出されなかった。



遺物

出土遺物は皆無であり、本住居址の所産期についても明確でない。

層序説明
第１層　暗褐色土層(10YR3/3)φ0.3～1.0cmのパミス、ローム粒子を僅かに含む
第２層　にぶい黄褐色土層(10YR5/4)φ0.3～1.0cmのパミスを僅かに含み、ローム粒子を多く含む

水糸レベル732.588m

第410図　第19号住居址実測図

20）第20号住居址

遺構（第411・412図、図版27）

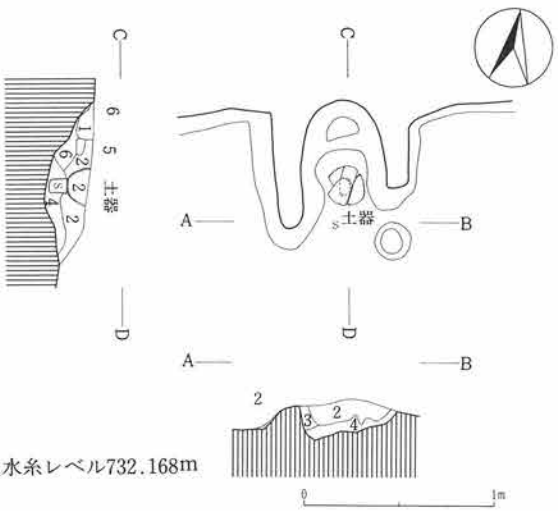
Ｅ－５グリッドに位置する。第11号住居址と重複関係を有し、第11号住居址により切られている。東西・南北とも調査し得た範囲で、それぞれ、321cm、317cmを測る。

カマドを中心とする主軸方位は、Ｎ－15°－Ｗを示す。

住居址覆土は、２層に区分され、確認面からの壁高は、８～12cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置するが遺存状態は悪い。おそらく、地山を掘り残して袖芯とし、第２層を主体として構築されていたものと思われる。また、火床部では支脚石の上に第440図３の土器が載った状態で検出された。

ピットは総計２基検出された。このうち、P_1が貯蔵穴、P_2が主柱穴と考えられる。なお、周溝は、検出されなかった。



層序説明
第１層　暗赤褐色土層(2.5YR3/3)ローム粒子を僅かに含み、粘土粒子を多く含む
第２層　暗褐色土層(7.5YR3/4)粘土粒子、焼土粒子を含む
第３層　暗赤色土層(7.5R3/6)粘土粒子を多く含む
第４層　赤褐色土層(2.5YR4/8)焼土層
第５層　暗赤褐色土層(2.5YR3/6)粘土粒子を多く含む（構築土）
第６層　暗褐色土層(10YR3/4)ローム粒子、焼土粒子を含む

第411図　第20号住居址カマド実測図

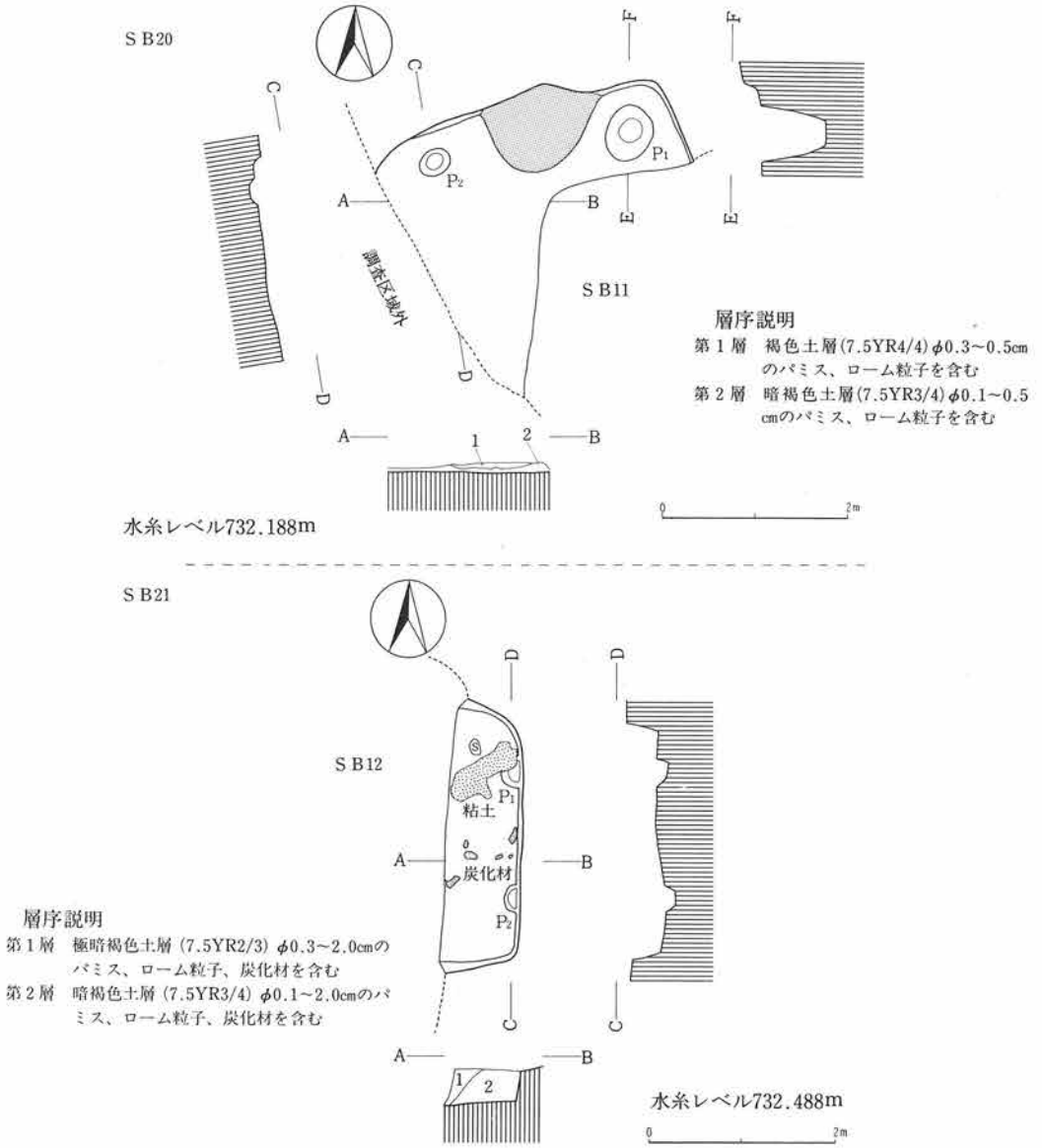
遺物（第440図、図版93）

図示したものに、土師器杯・甑・甕がある。本住居址の所産期は、古墳時代後期後葉に比定される。

21）第21号住居址

遺構（第412図、図版27）

F－5グリッドに位置する。第12号住居址、第7・8号掘立柱建物址と重複関係を有し、第12



第412図　第20・21号住居址実測図

号住居址、第７・８号掘立柱建物址により切られている。東西は残存部で83cm、南北289cmを測る。南北軸の方位は、Ｎ－１°－Ｅを示す。住居址覆土は、２層に区分され、確認面からの壁高は、30～34cmを測る。ピットは主柱穴と考えられる２基が東壁下で認められた。また、本住居址は焼失住居と考えられ、炭化材が認められた。

遺物

炭化材が出土したのみで、土器片は認められなかった。なお、炭化材については後述する。

本住居址の所産期は、重複関係から古墳時代後期後葉以前と考えられる。

(2) 掘立柱建物址

１）第１号掘立柱建物址

遺構（第413図、図版27）

Ｆ－６グリッドに位置する。第２号掘立柱建物址と重複関係を有する。

東西425cm、南北388cmを測り、平面プランは、長方形を呈する。２間×２間の側柱式の掘立柱建物と考えられ、柱間は、東西144～367cm、南北138～329cmを測る。南北軸の方位は、Ｎ－８°－Ｗを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

P_6・P_7から土師器片、黒色土器片が出土しているが３点と僅少である。本遺構の所産期は、出土土器片から奈良時代以降と考えられる。

２）第２号掘立柱建物址

遺構（第414図、図版27）

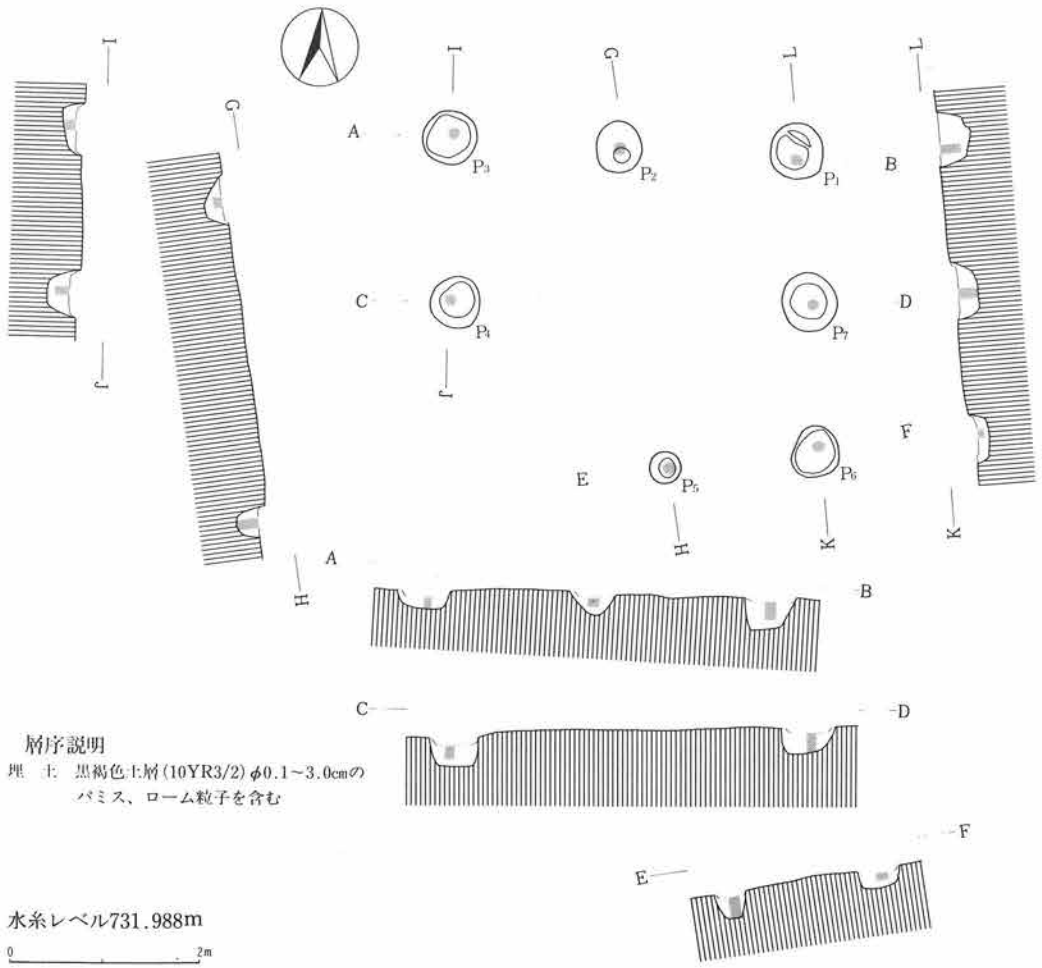
Ｆ－５・６グリッドに位置する。第１号掘立柱建物址と重複関係を有する。

東西267cm、南北255cmを測り、平面プランは、正方形を呈する。１間×１間の側柱式の掘立柱建物と考えられ、柱間は、東西195～208cm、南北196～206cmを測る。南北軸の方位は、Ｎ－21°－Ｅを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

P_4から外稜口辺を有すると考えられる黒色土器杯の破片が１点出土している。

本遺構の所産期は、出土土器片から古墳時代後期中葉以降と考えられる。



第413図　第１号掘立柱建物址実測図

３）第３号掘立柱建物址

遺構（第415図、図版27）

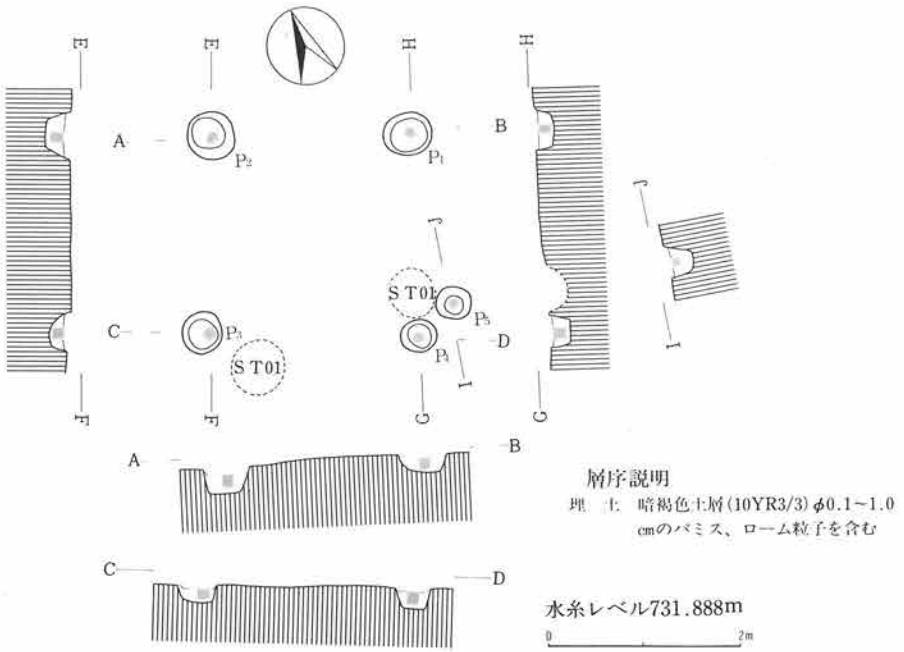
Ｆ－５・６グリッドに位置する。第21号掘立柱建物址と重複関係を有し、第21号掘立柱建物址を切って構築されている。東西402cm、南北408cmを測り、平面プランは、正方形を呈する。

２間×２間の総柱式の掘立柱建物で、柱間は、東西145～198cm、南北148～175cmを測る。

南北軸の方位は、Ｎ－４°－Ｗを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

P_6～P_8から土師器片、須恵器片が出土している。本遺構の所産期は、出土土器片から奈良時代中葉以降と考えられる。



第414図　第２号掘立柱建物址実測図

４）第４号掘立柱建物址

遺構（第415図）

Ｆ－４グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。２基のピットが検出されたのみで、全体の形状は不明である。東西260cm、柱間は、212cmを測り、南北軸の方位は、Ｎ－14.5°－Ｅを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

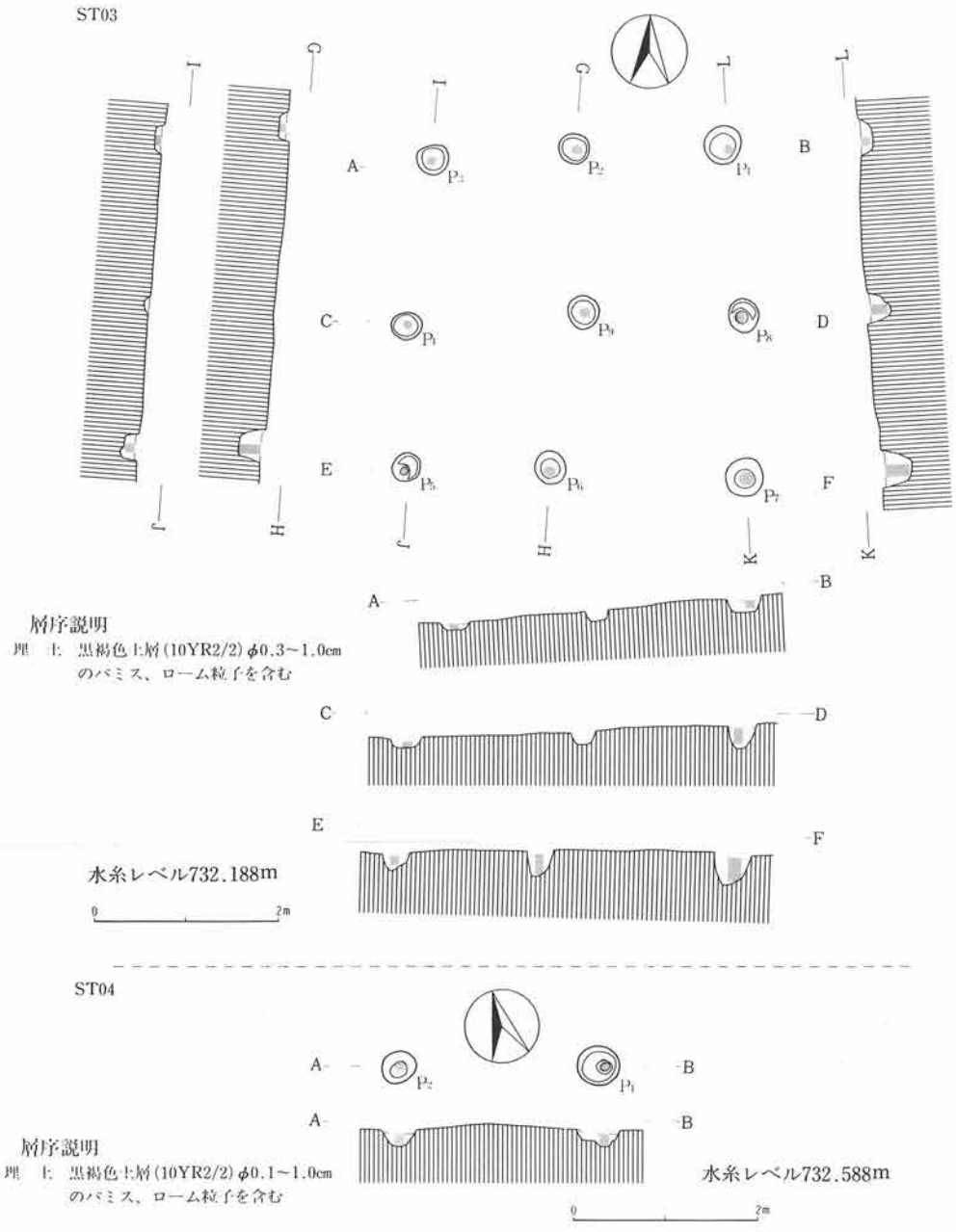
出土遺物は皆無であり、本遺構の所産期についても明確でない。

５）第５号掘立柱建物址

遺構（第416図、図版27）

Ｆ－５グリッドに位置する。第17号住居址と重複関係を有し、第17号住居址を切って構築されている。東西545cm、南北411cmを測り、平面プランは、長方形を呈する。３間×２間の側柱式の掘立柱建物と考えられ、柱間は、東西120～160cm、南北121～303cmを測る。

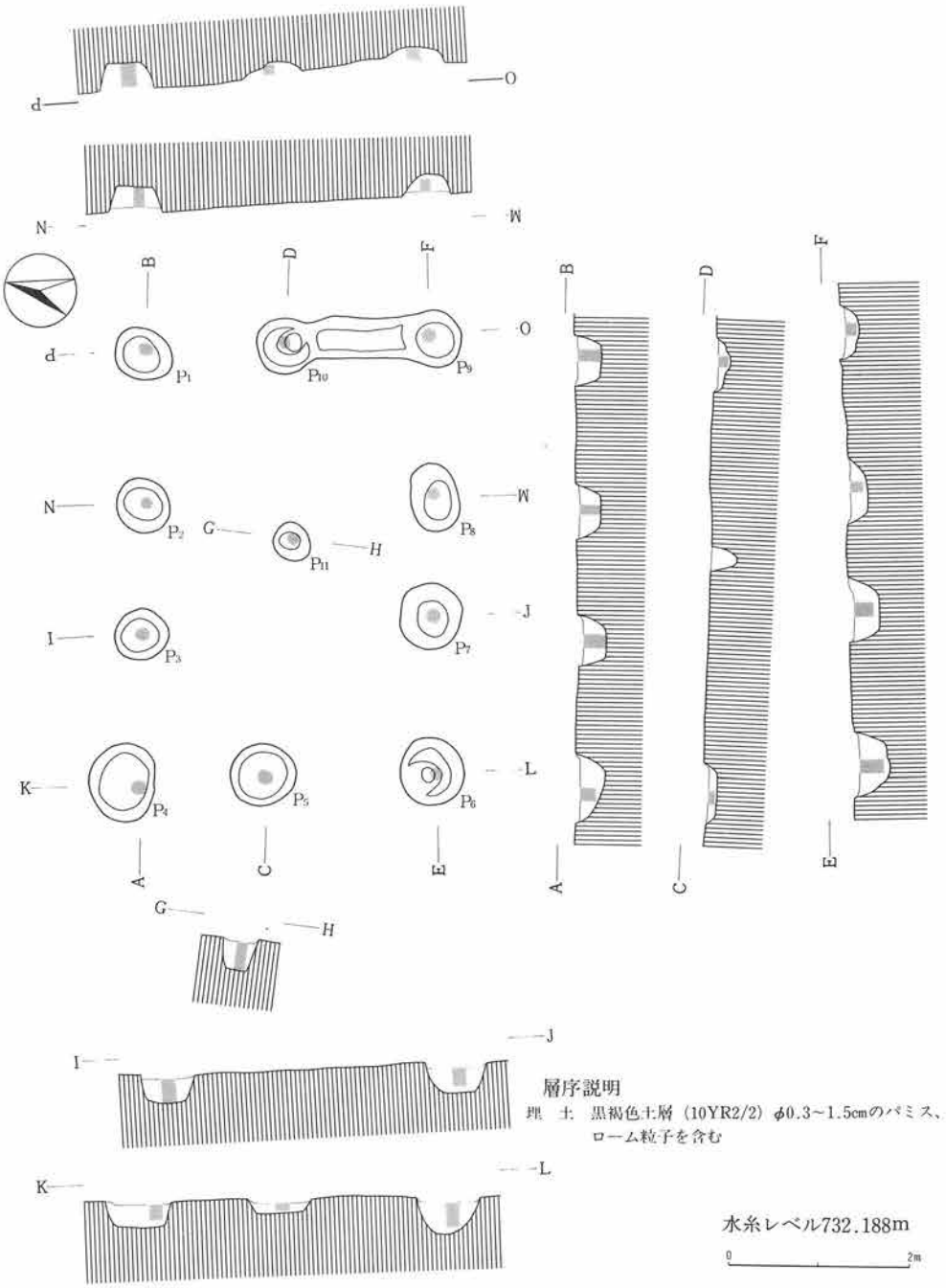
南北軸の方位は、Ｎ－12°－Ｗを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形のほか、溝持ちのものも認められた。



第415図　第３・４号掘立柱建物址実測図

遺物

P_2・P_7から土師器片、須恵器片が出土している。本遺構の所産期は、出土土器片および重複関係から奈良時代前葉以降と考えられる。



第416図　第５号掘立柱建物址実測図

６）第６号掘立柱建物址

遺構（第417図、図版27）

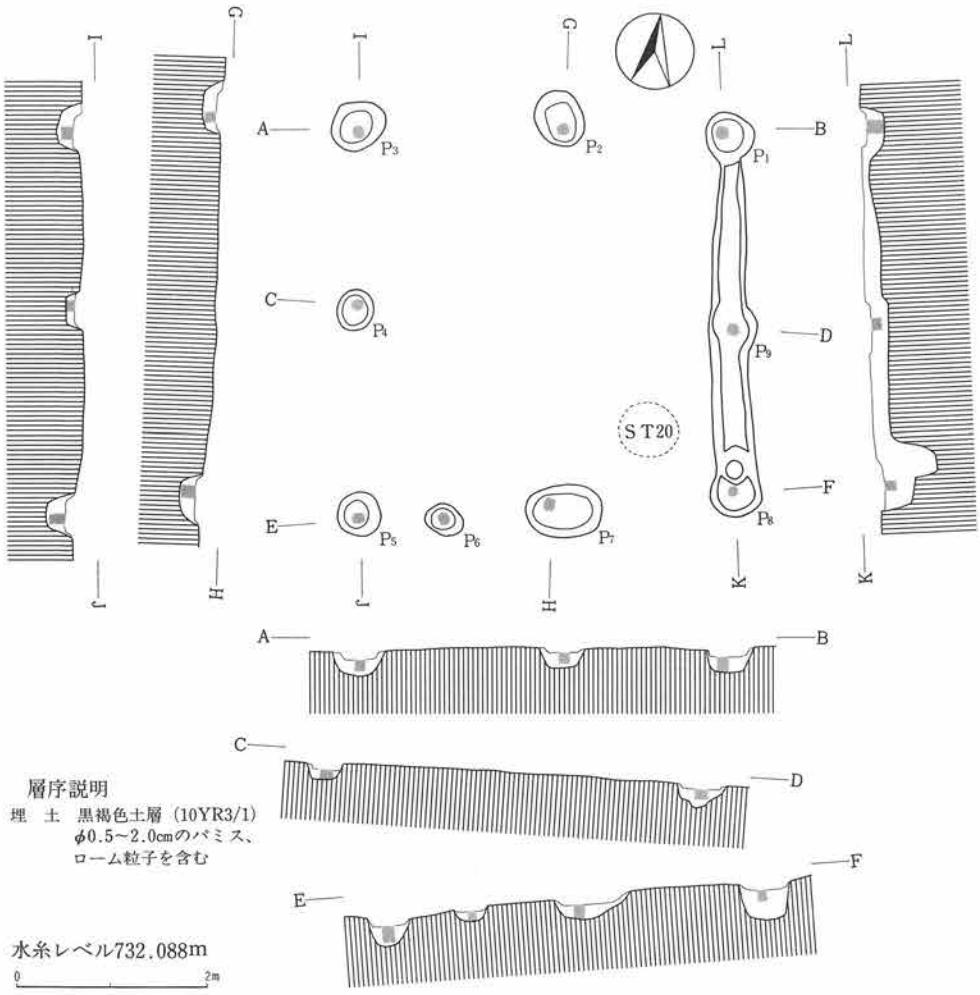
Ｆ－５グリッドに位置する。第20号掘立柱建物址と重複関係を有する。

東西446cm、南北472cmを測り、平面プランは、正方形を呈する。２間×２間の側柱式の掘立柱建物と考えられ、柱間は、東西76～203cm、南北158～383cmを測る。

南北軸の方位は、Ｎ－９°－Ｗを示す。ピット掘形の平面プランは、楕円形のほか、溝持ちのものも認められた。

遺物

出土遺物は皆無である。本遺構の所産期は、他の遺構との関連から、一応、奈良時代以降と考えておきたい。



第417図　第６号掘立柱建物址実測図

７）第７号掘立柱建物址

遺構（第418図、図版28）

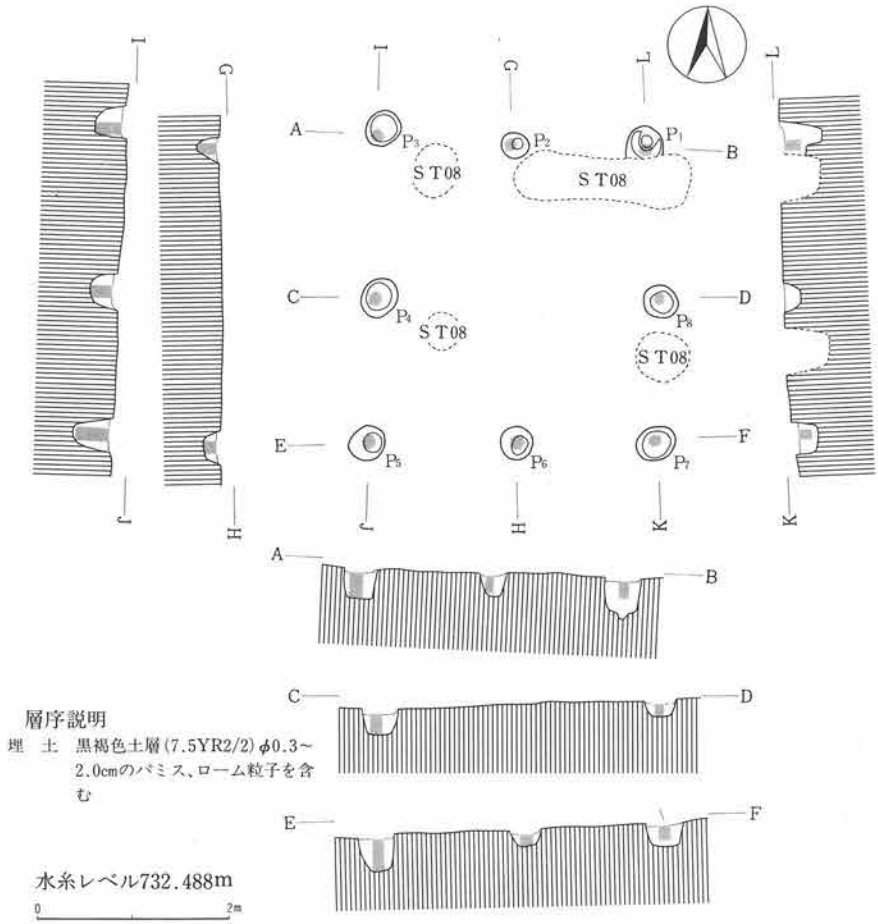
F－5グリッドに位置する。第12･21号住居址、第8号掘立柱建物址と重複関係を有し、第12･21号住居址を切り、第8号掘立柱建物址に切られている。

東西344cm、南北367cmを測り、平面プランは、正方形を呈する。2間×2間の側柱式の掘立柱建物で、柱間は、東西127～286cm、南北135～301cmを測る。

南北軸の方位は、N－3°－Wを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

P_3から土師器片、須恵器片が出土している。本遺構の所産期は、出土土器片および重複関係から奈良時代以降と考えられる。



第418図　第7号掘立柱建物址実測図

8）第8号掘立柱建物址

遺構（第419図、図版28）

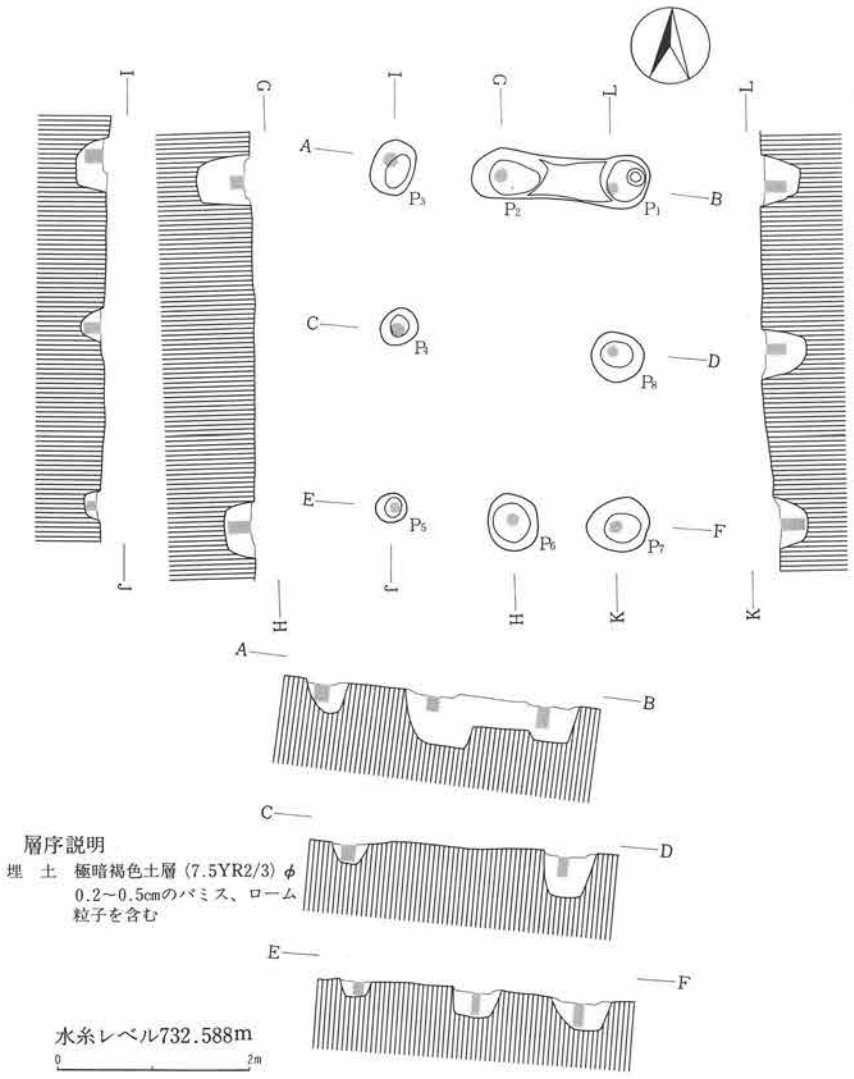
F－5グリッドに位置する。第21号住居址、第7号掘立柱建物址と重複関係を有し、第21号住

居址、第7号掘立柱建物址を切って構築されている。

東西291cm、南北426cmを測り、平面プランは、長方形を呈する。2間×2間の側柱式の掘立柱建物で、柱間は、東西94～213cm、南北159～351cmを測る。南北軸の方位は、N－3.5°－Wを示す。ピット掘形の平面プランは、楕円形のほか、溝持ちのものも認められた。

遺物

P_1・P_4～P_7から土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土している。本遺構の所産期は、出土土器片および重複関係から奈良時代以降と考えられる。



第419図　第8号掘立柱建物址実測図

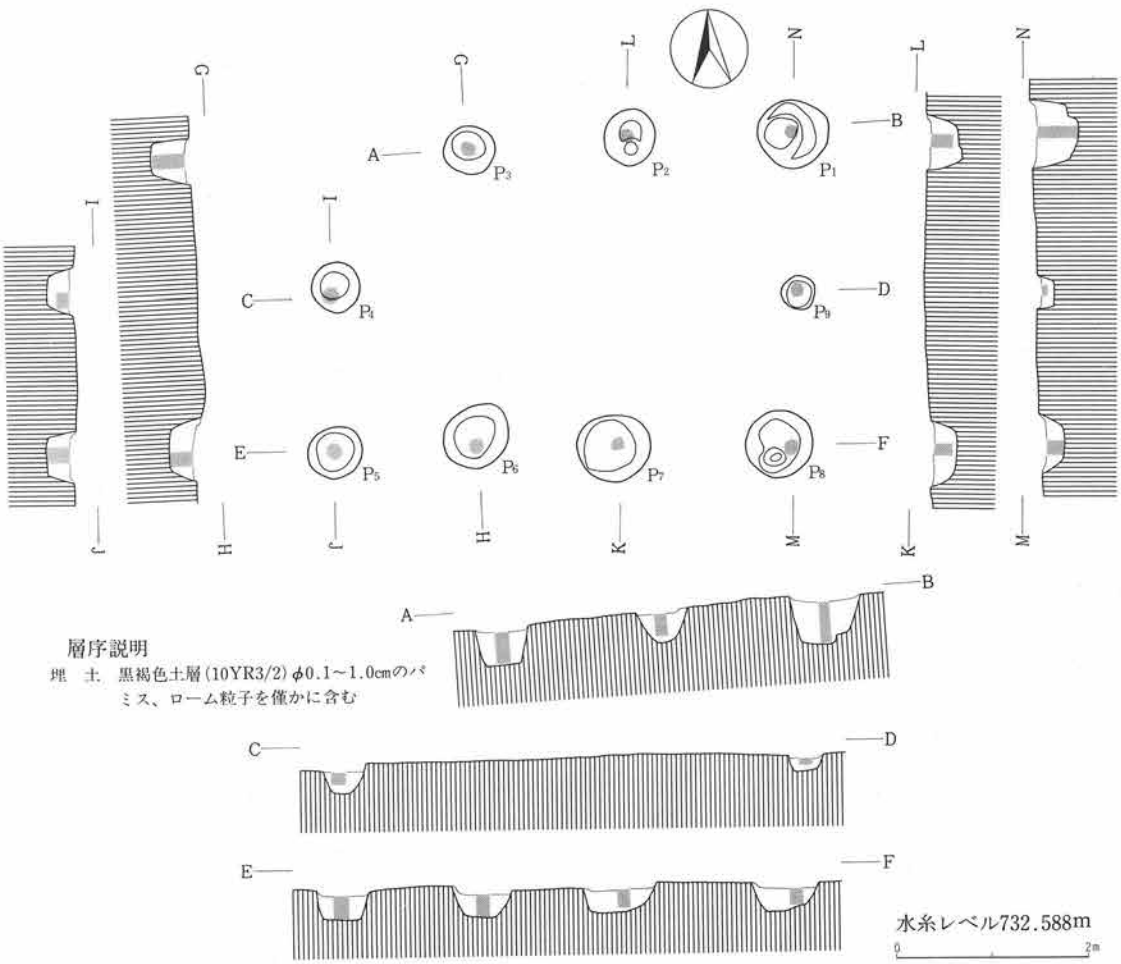
9）第9号掘立柱建物址

遺構（第420図、図版28）

E－4グリッドに位置する。第7号住居址、第16号掘立柱建物址と重複関係を有し、このうち、第7号住居址を切って構築されている。東西528cm、南北399cmを測り、平面プランは、長方形を呈する。2間×2間の側柱式の掘立柱建物で、西に廂を持つ。柱間は、東西133～425cm、南北146～311cmを測る。南北軸の方位は、N－2.5°－Eを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

P_1・P_3・P_6・P_7から土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土している。本遺構の所産期は、出土土器片および重複関係から奈良時代以降と考えられる。



第420図　第9号掘立柱建物址実測図

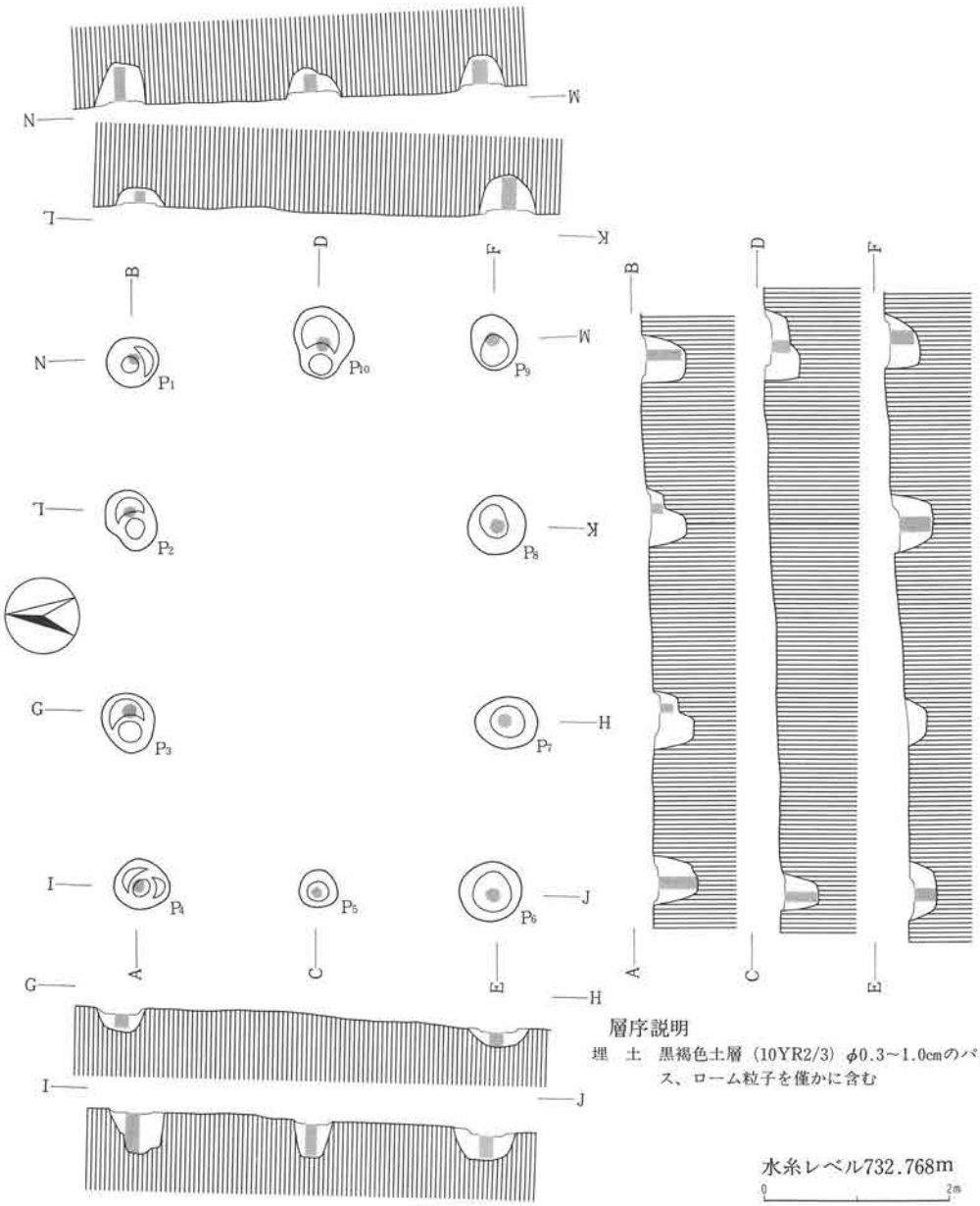
10）第10号掘立柱建物址

遺構（第421図、図版28）

E－4グリッドに位置する。第6号住居址、第25号掘立柱建物址と重複関係を有し、このうち、第6号住居址を切っている。東西655cm、南北465cmを測り、平面プランは、長方形を呈する。

3間×2間の側柱式の掘立柱建物で、柱間は、東西152～579cm、南北165～385cmを測る。

南北軸の方位は、N－2.5°－Wを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。



第421図　第10号掘立柱建物址実測図

遺物

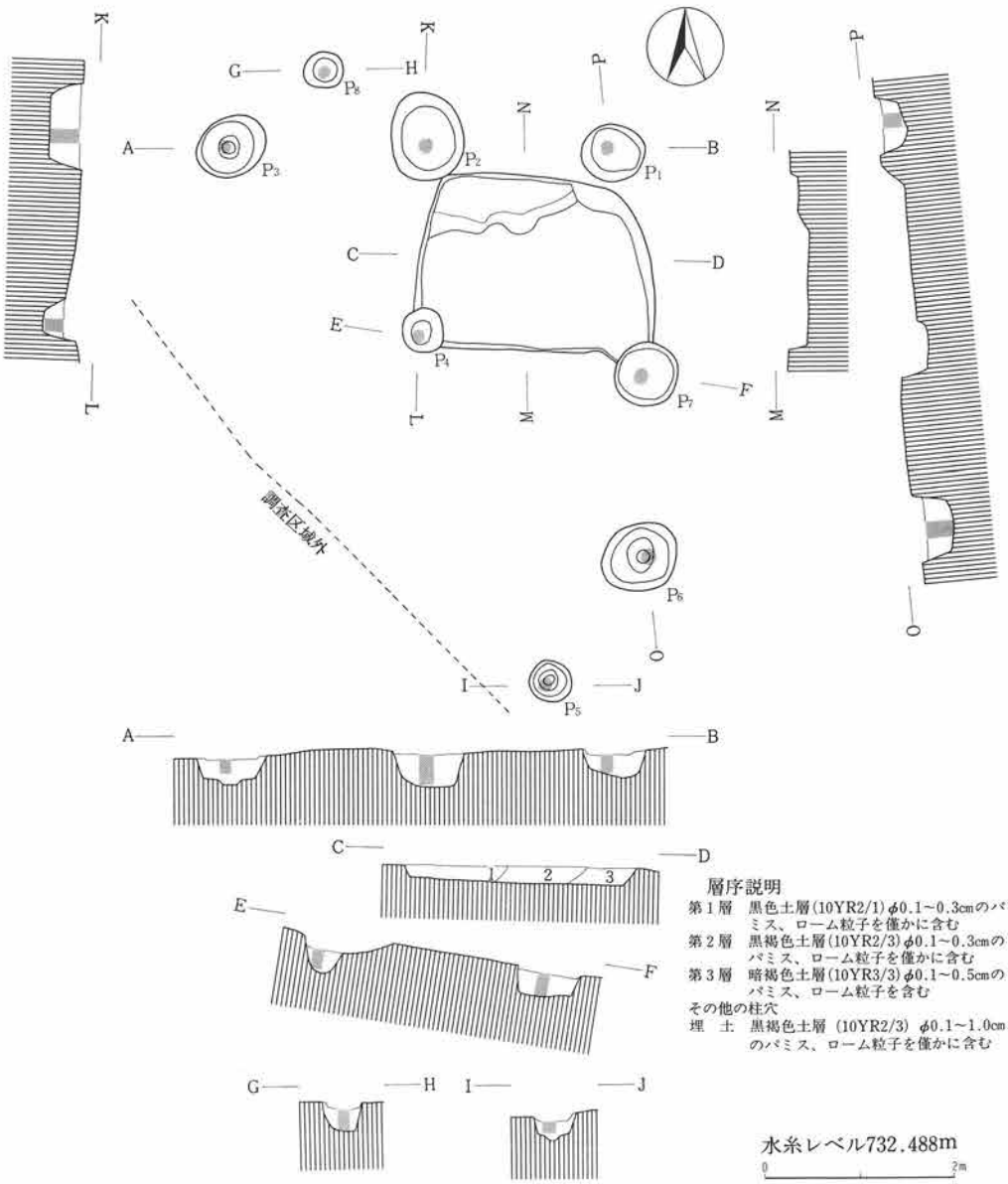
P_7から内耳土器片が１点出土していることから、中世の掘立柱建物と考えられる。

11）第11号掘立柱建物址

遺構（第422図）

Ｅ－４グリッドに位置する。第12号掘立柱建物址と重複関係を有する。

東西473cm、南北615cmを測る。２棟の掘立柱建物が重複している可能性があり、２間×２間の



第422図　第11号掘立柱建物址実測図

側柱式の掘立柱建物が基本となるものと思われ、内部に東西254cm、南北185cm、深さ約19cmを測る竪穴状遺構が確認された。竪穴状遺構北側では平坦なテラスが認められ、堅緻であった。

柱間は、東西178～197cm、南北174～228cmを測る。南北軸の方位は、N－1°－Eを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

P_6から土師器片、黒色土器片が出土している。

本遺構の所産期は、出土土器片から古墳時代後期以降と考えられる。

12）第12号掘立柱建物址

遺構（第423図、図版28）

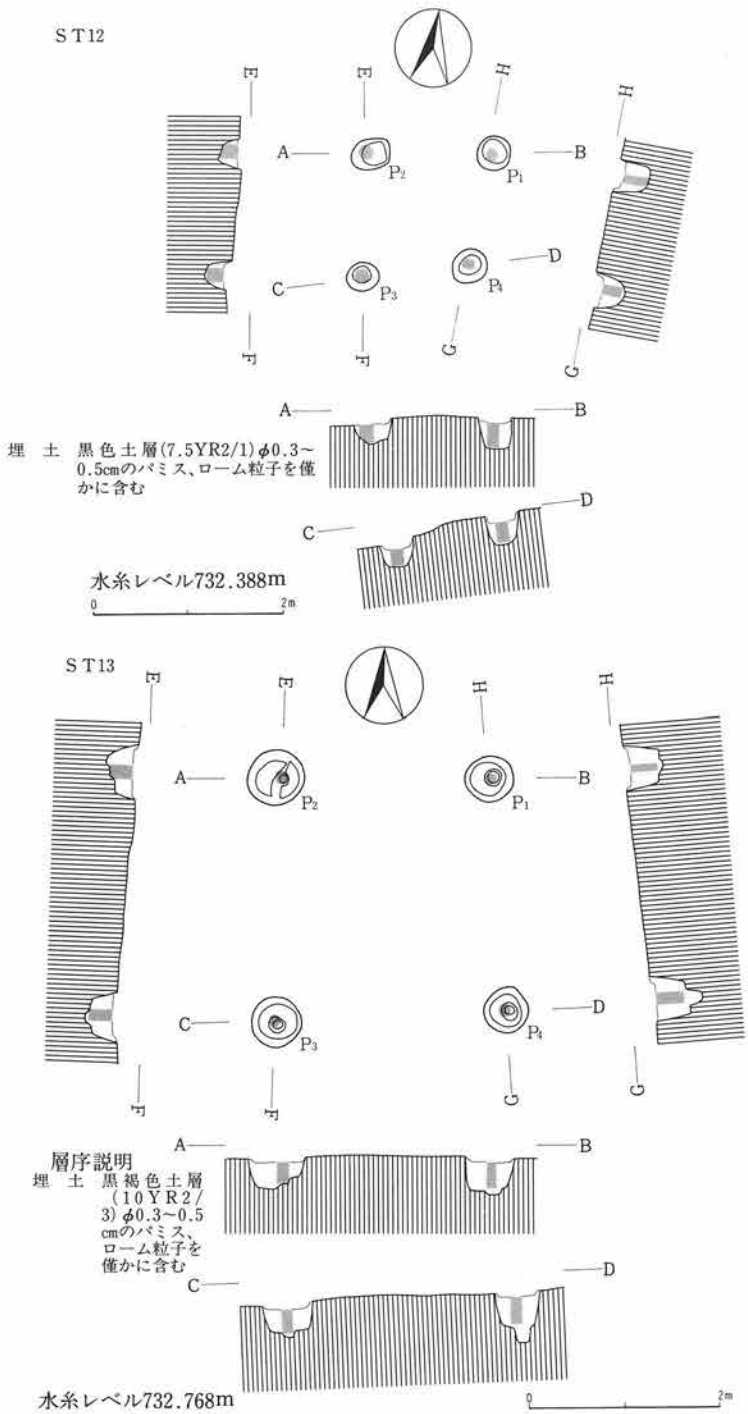
E－4グリッドに位置する。第11号掘立柱建物址と重複関係を有する。

東西167cm、南北161cmを測り、平面プランは、梯形を呈する。1間×1間の側柱式の掘立柱建物で、柱間は、東西98～118cm、南北106～116cmを測る。

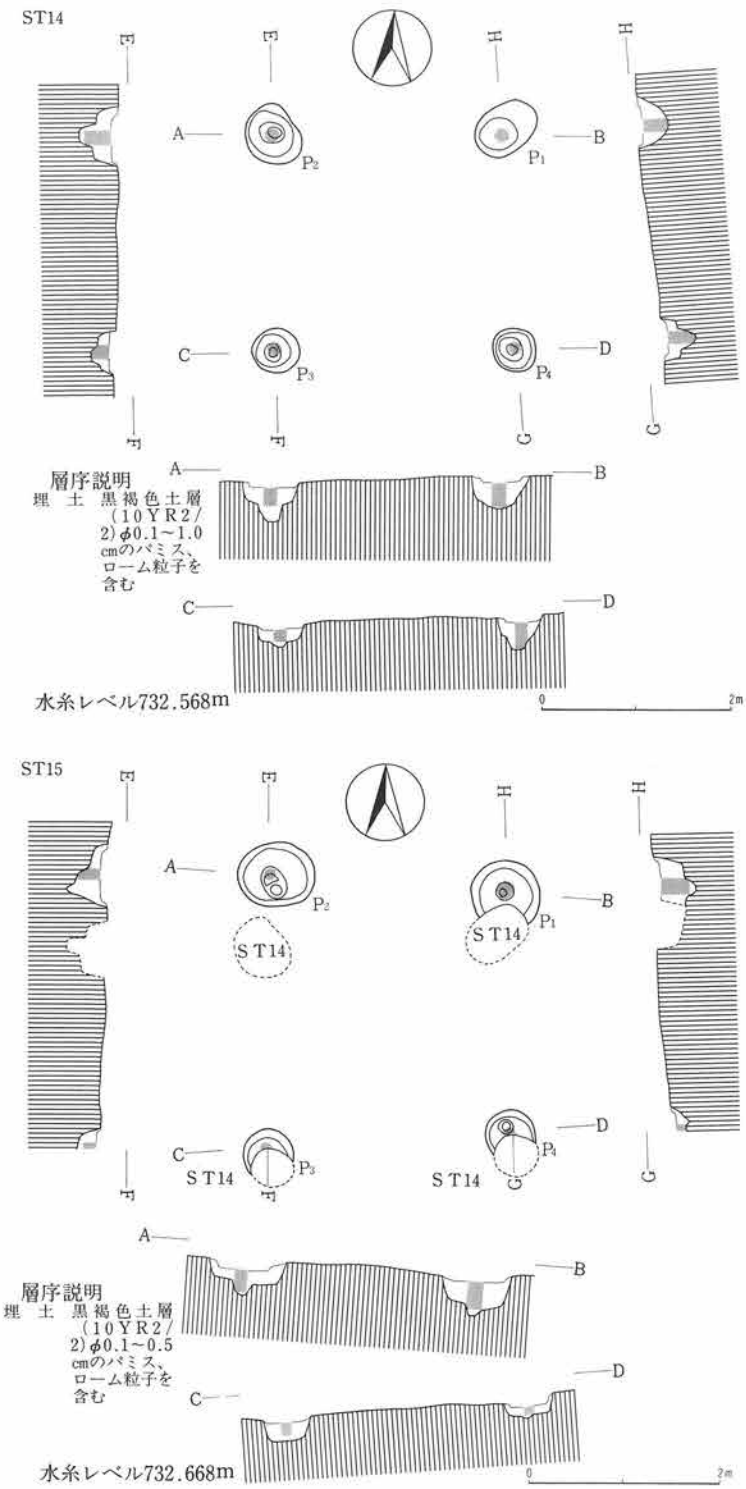
南北軸の方位は、N－7°－Wを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

P_1・P_2から土師器片、黒



第423図　第12・13号掘立柱建物址実測図



第424図　第14・15号掘立柱建物址実測図

色土器片、須恵器片が出土している。本遺構の所産期は、出土土器片から奈良時代前葉以降と考えられる。

13）第13号掘立柱建物址

遺構（第423図、図版28）

E－4グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

東西293cm、南北316cmを測り、平面プランは、梯形を呈する。1間×1間の側柱式の掘立柱建物で、柱間は、東西207～230cm、南北233～243cmを測る。

南北軸の方位は、N－4°－Wを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

出土遺物は皆無であり、本遺構の所産期についても明確でない。

14）第14号掘立柱建物址

遺構（第424図）

D－4グリッドに位置する。第15号掘立柱建物址と重複関係を有し、第15号掘立柱建物址を切って構築されている。

東西305cm、南北286cmを

測り、平面プランは、正方形を呈する。1間×1間の側柱式の掘立柱建物で、柱間は東西228～237cm、南北211～212cmを測る。南北軸の方位は、N－3°－Wを示す。

ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

出土遺物は皆無である。本遺構の所産期は、重複関係から古墳時代後期～奈良時代以降と考えられる。

15）第15号掘立柱建物址

遺構（第424図、図版28）

D－4グリッドに位置する。第14号掘立柱建物址と重複関係を有し、第14号掘立柱建物址に切られている。東西314cm、南北352cmを測り、平面プランは、梯形を呈する。

1間×1間の側柱式の掘立柱建物で、柱間は東西232～242cm、南北240～277cmを測る。

南北軸の方位は、N－2°－Wを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

P_3から球胴を呈する甕の破片が出土している。本遺構の所産期は、出土土器片から古墳時代後期～奈良時代以降と考えられる。

16）第16号掘立柱建物址

遺構（第425図、図版28）

E－4グリッドに位置する。第9号掘立柱建物址と重複関係を有する。東西420cm、南北348cmを測り、平面プランは、長方形を呈する。2間×2間の側柱式の掘立柱建物で、柱間は、東西141～345cm、南北128～295cmを測る。南北軸の方位は、N－5°－Eを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

P_1・P_2から土師器片、黒色土器片が出土している。本遺構の所産期は、出土土器片から古墳時代後期以降と考えられる。

17）第17号掘立柱建物址

遺構（第426図）

D－4グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。東西324cm、南北291cmを測る。

1間×1間の側柱式の掘立柱建物と考えられるが、3基のピットが検出されたにとどまる。

柱間は、東西260cm、南北225cmを測る。南北軸の方位は、N－0.5°－Wを示す。
ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

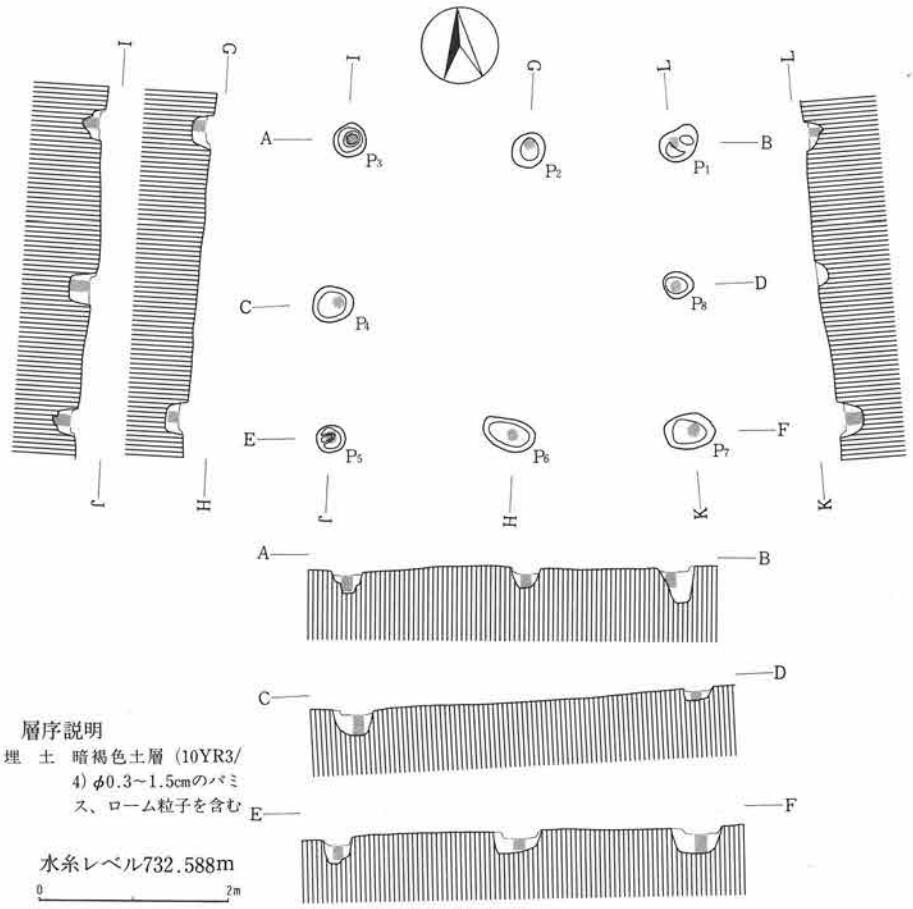
遺物

出土遺物は皆無であり、本遺構の所産期についても明確でない。

18）第18号掘立柱建物址

遺構（第426図、図版28）

D－4グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。東西265cm、南北265cmを測り、平面プランは、正方形を呈する。1間×2間の側柱式の掘立柱建物で、柱間は、東西196～219cm、南北97～114cmを測る。南北軸の方位は、N－12°－Wを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。



第425図　第16号掘立柱建物址実測図

遺物

出土遺物は皆無であり、本遺構の所産期についても明確でない。

19）第19号掘立柱建物址

遺構（第427図）

F－5グリッドに位置する。

他遺構との重複関係はない。

2基のピットが検出されたにとどまり、東西223cm、柱間は、164cmを測る。南北軸の方位は、N－40°－Wを示す。ピット掘形の平面プランは、楕円形である。

遺物

P_2から黒色土器杯の破片が1点出土している。本遺構の所産期は、古墳時代後期後葉以降と考えられる。

20）第20号掘立柱建物址

遺構（第427図）

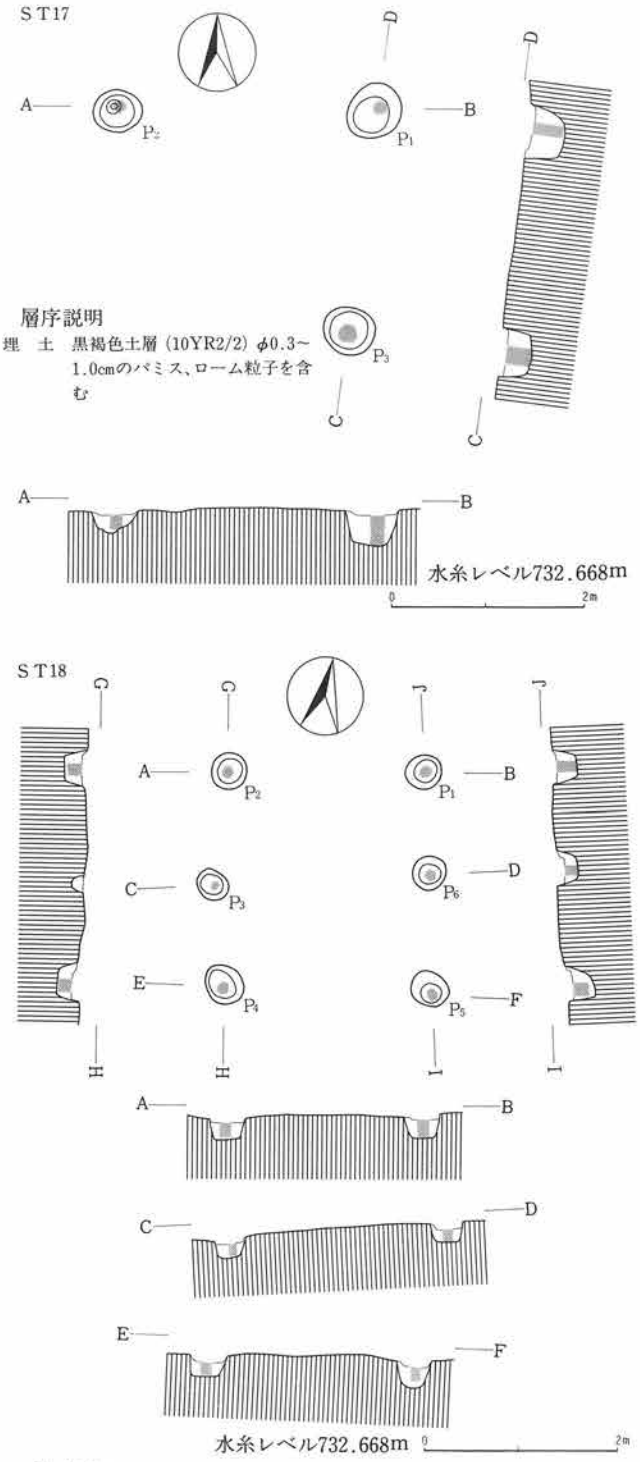
F－5グリッドに位置する。

第6号掘立柱建物址と重複関係を有する。2基のピットが検出されたにとどまり、東西441cm、柱間は、353cmを測る。南北軸の方位は、N－5°－Wを示す。

ピット掘形の平面プランは、楕円形である。

遺物

P_2から底部ヘラキリ未調整の須恵器杯の破片と底部糸切り未調



第426図　第17・18号掘立柱建物址実測図

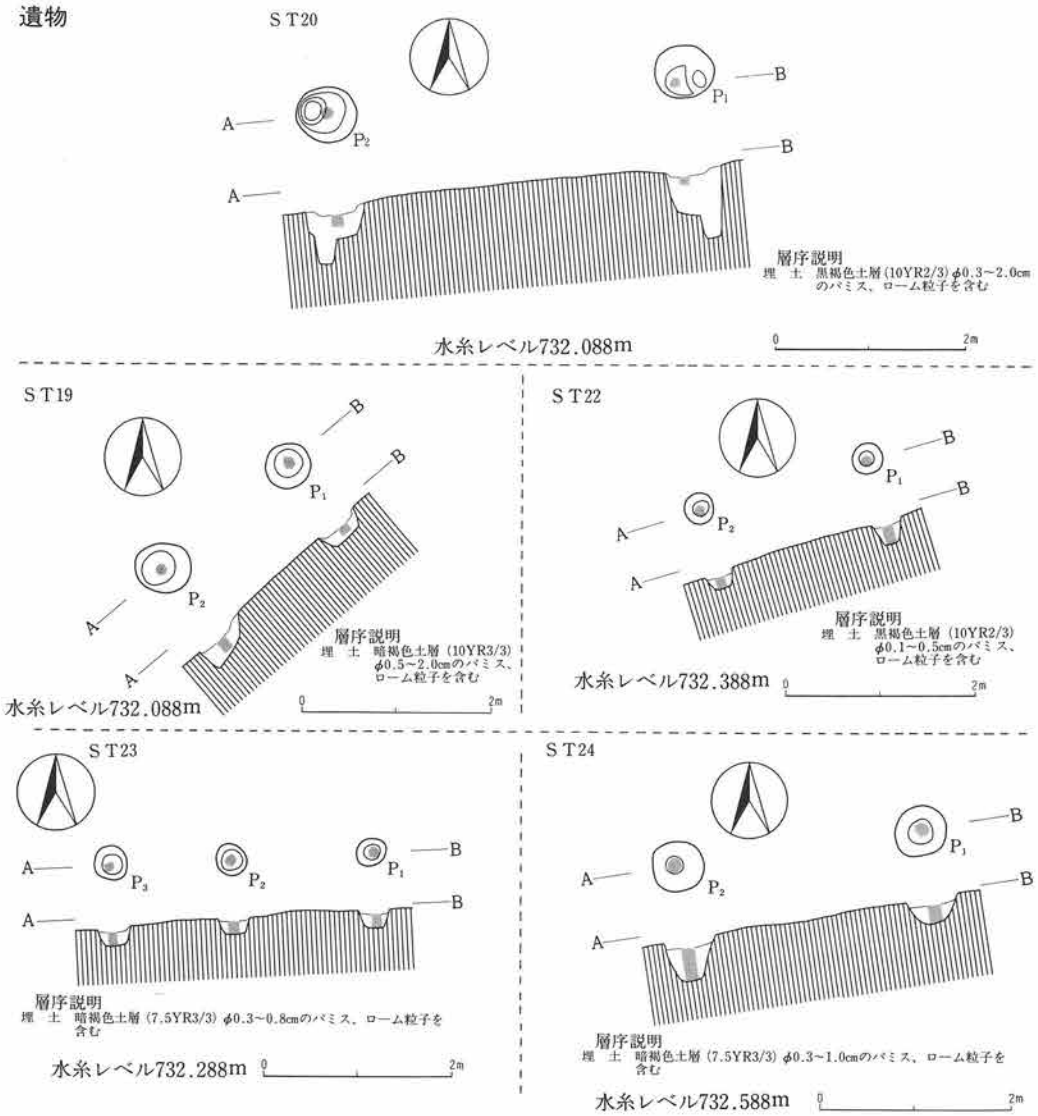
整の黒色土器杯の破片が出土している。本遺構の所産期は、平安時代以降と考えられる。

21）第21号掘立柱建物址

遺構（第428図、図版29）

Ｆ－５グリッドに位置する。第３号掘立柱建物址と重複関係を有し、第３号掘立柱建物址に切られている。東西456cm、南北413cmを測り、平面プランは、長方形を呈する。２間×２間の側柱式の掘立柱建物で、柱間は、東西95～364cm、南北136～352cmを測る。南北軸の方位は、Ｎ－13°－Ｗを示す。ピット掘形の平面プランは、楕円形・不整形のほか、溝持ちのものも認められた。

遺物



第427図　第19・20・22～24号掘立柱建物址実測図

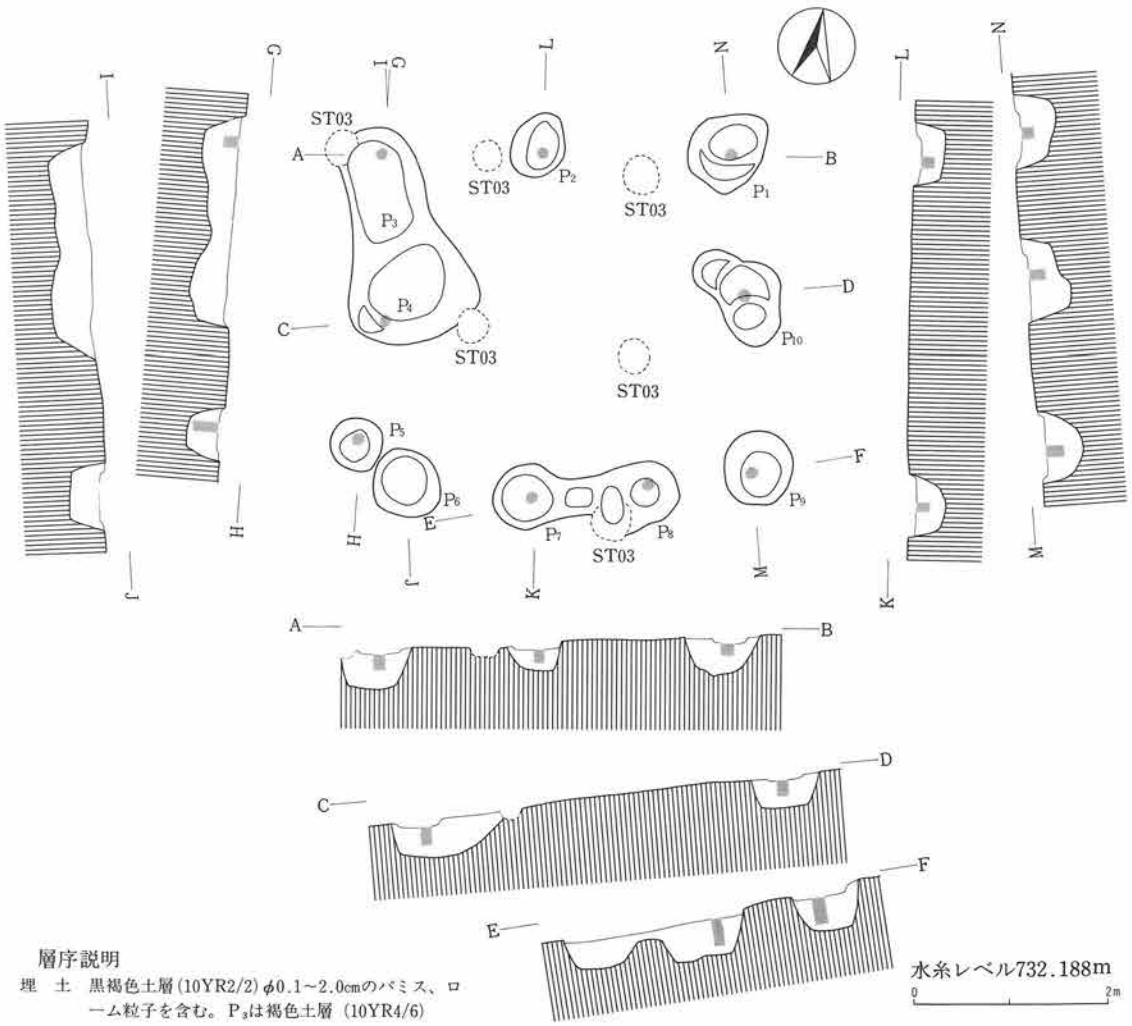
P_3・P_5・P_8・P_9から土師器片、黒色土器片が出土している。本遺構の所産期は、出土土器片から奈良時代以降に比定される。

22）第22号掘立柱建物址

遺構（第427図）

Ｆ－５グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。２基のピットが検出されたにとどまり、東西218cm、柱間は173cmを測る。南北軸の方位は、Ｎ－16°－Ｗを示す。ピット掘形の平面プランは、円形である。

遺物



第428図　第21号掘立柱建物址実測図

出土遺物は皆無であり、本遺構の所産期については明確でない。

23）第23号掘立柱建物址

遺構（第427図）

Ｅ－５グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。３基のピットが検出されたにとどまり、東西310cm、柱間は118～140cmを測る。南北軸の方位は、Ｎ－2.5°－Ｗを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

出土遺物は皆無であり、本遺構の所産期についても明確でない。

24）第24号掘立柱建物址

遺構（第427図）

Ｅ・Ｆ－４グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。２基のピットが検出されたにとどまり、東西313cm、柱間は250cmを測る。南北軸の方位は、Ｎ－８°－Ｗを示す。ピット掘形の平面プランは、円形である。

遺物

P_2から須恵器甕の破片が１点出土している。本遺構の所産期は、出土土器片から奈良時代以降と考えられる。

25）第25号掘立柱建物址

遺構（第429図、図版29）

Ｅ－４グリッドに位置する。第10号掘立柱建物址と重複関係を有する。東西348cm、南北295cmを測り、平面プランは、長方形を呈する。総計11基のピットが検出されたが、１間×２間の側柱式の掘立柱建物を基本とするものと思われる。柱間は、東西276～279cm、南北98～112cmを測る。南北軸の方位は、Ｎ－９°－Ｅを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

P_3～P_5から土師器片、黒色土器片が出土している。本遺構の所産期は、出土土器片から奈良時代以降と考えられる。

26）第26号掘立柱建物址

遺構（第430図）

Ｅ－４グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。東西310cm、南北480cmの範囲で６基のピットが検出されたが明確なまとまりはない。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

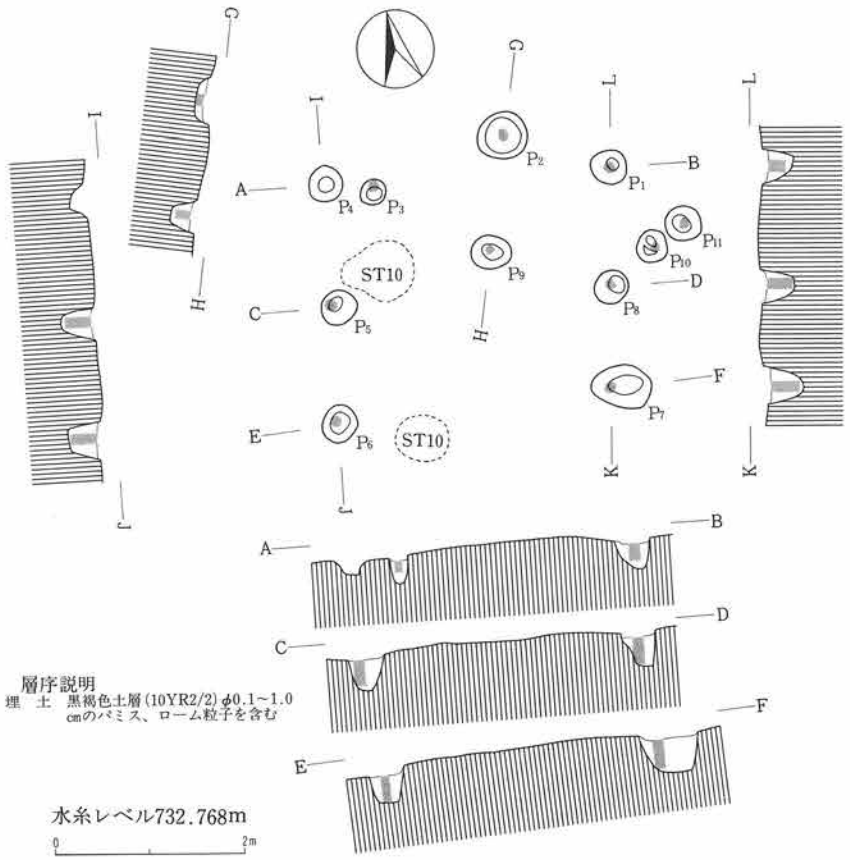
出土遺物は皆無であり、本遺構の所産期についても明確でない。

27）第27号掘立柱建物址

遺構（第430図）

Ｅ－４グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。３基のピットが検出されたにとどまり、東西386cm、柱間は129～192cmを測る。南北軸の方位は、Ｎ－４°－Ｅを示す。ピット掘形の平面プランは、楕円形である。

遺物



第429図　第25号掘立柱建物址実測図

出土遺物は皆無であり、本遺構の所産期についても明確でない。

28）第28号掘立柱建物址

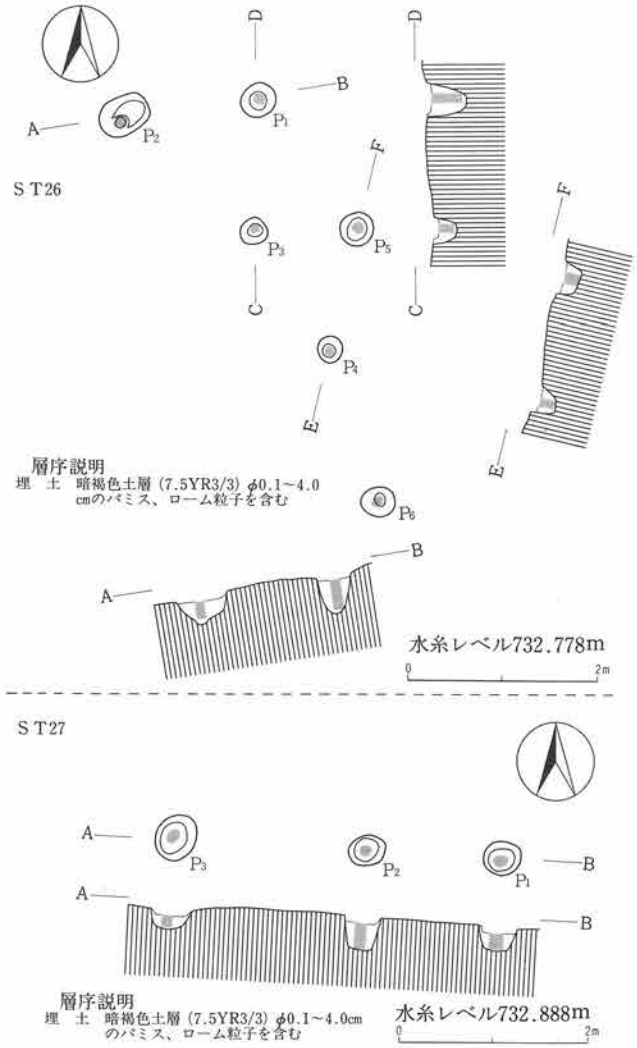
遺構（第431図）

Ｅ－４グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。東西358cm、南北113cmを測るが、全体については不明である。柱間は東西70～219cmを測る。南北軸の方位は、Ｎ－４°－Ｗを示す。

ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

出土遺物は皆無であり、本遺構の所産期についても明確でない。



第430図　第26・27号掘立柱建物址実測図

29）第29号掘立柱建物址

遺構（第431図）

Ｄ－４グリッドに位置する。

他遺構との重複関係はない。

２基のピットが検出されたにとどまり、東西221cm、柱間は132cmを測る。

南北軸の方位は、Ｎ－10°－Ｅを示す。ピット掘形の平面プランは、楕円形である。

遺物

出土遺物は皆無であり、本遺構の所産期についても明確でない。

30）第30号掘立柱建物址

遺構（第431図、図版29）

Ｃ－３グリッドに位置する。

他遺構との重複関係はない。

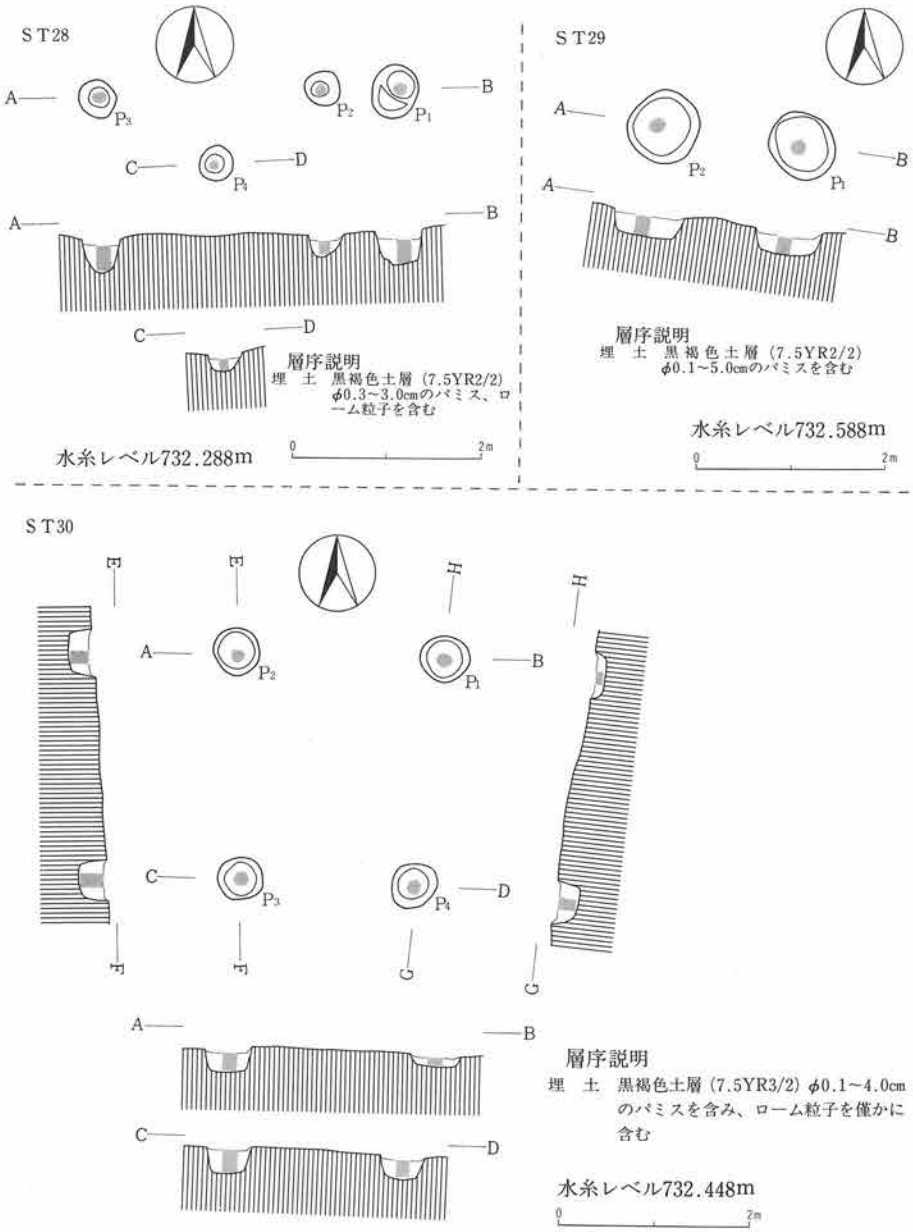
東西271cm、南北292cmを測り、平面プランは、梯形を呈する。

１間×１間の側柱式の掘立柱建物で、柱間は、東西167～202cm、

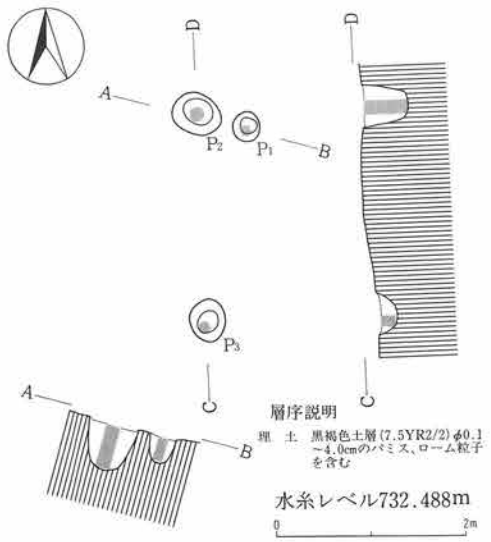
南北222～227cmを測る。南北軸の方位は、N－1°－Eを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

P_4から外稜口辺を有すると考えられる土師器杯の破片が1点出土している。本遺構の所産期は、出土土器片から古墳時代後期中葉以降と考えられる。



第431図　第28～30号掘立柱建物址実測図



第432図　第31号掘立柱建物址実測図

31）第31号掘立柱建物址

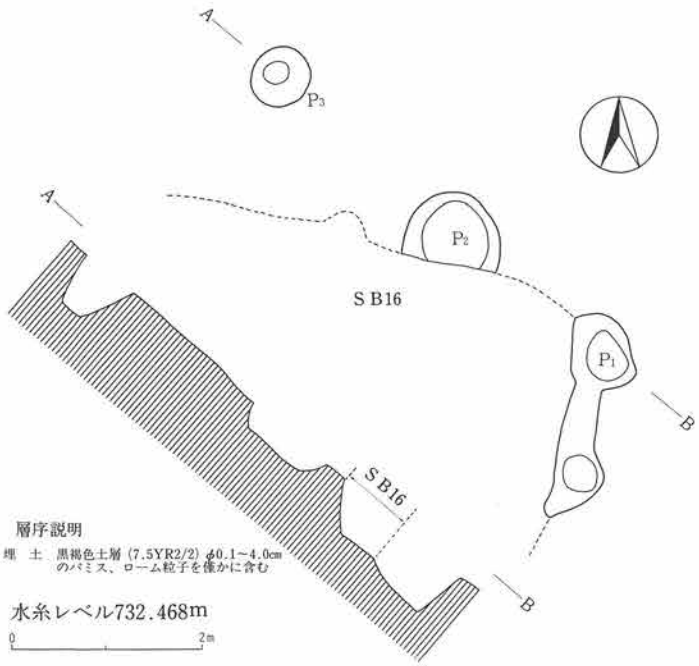
遺構（第432図）

Ｃ－３グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。３基のピットが検出されたにとどまり、東西95cm、南北265cm、柱間は東西41cm、南北212cmを測る。南北軸の方位は、Ｎ－１°－Ｗを示す。ピット掘形の平面プランは、楕円形である。

遺物

P_1から土師器片、須恵器片が出土している。

本遺構の所産期は、出土土器片から奈良時代以降と考えられる。



第433図　第32号掘立柱建物址実測図

32）第32号掘立柱建物址

遺構（第433図）

Ｆ－５グリッドに位置する。第16号住居址と重複関係を有し、第16号住居址を切っている。

東西520cm、南北217cmを測る。南北軸の方位は、Ｎ－40°－Ｗを示す。

ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形のほか、溝持ちのものも認められた。

遺物

P_1から土師器片、須恵器片が出土している。本遺構の所産期は、出土土器片から平安時代以降と考えられる。

33）第33号掘立柱建物址

遺構（第434図）

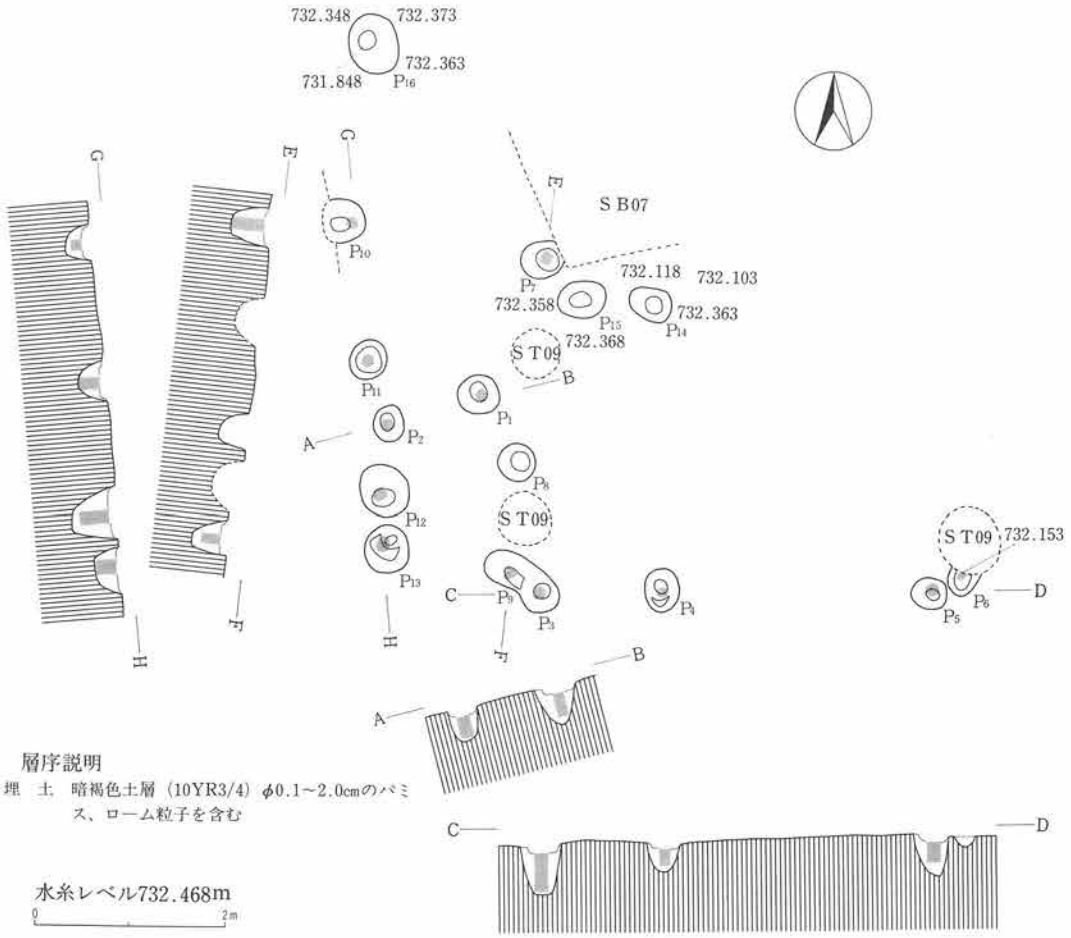
Ｅ－４グリッドに位置する。第７号住居址、第９・11号掘立柱建物址と重複関係を有する。

東西648cm、南北660cmの範囲で15基のピットが検出されたが、明確なまとまりはない。

ピット掘形の平面プランは、楕円形・双円形である。

遺物

出土遺物は皆無である。重複関係では第７号住居址との先後関係が明確でないため、本遺構の所産期は、一応、奈良時代と考えておきたい。



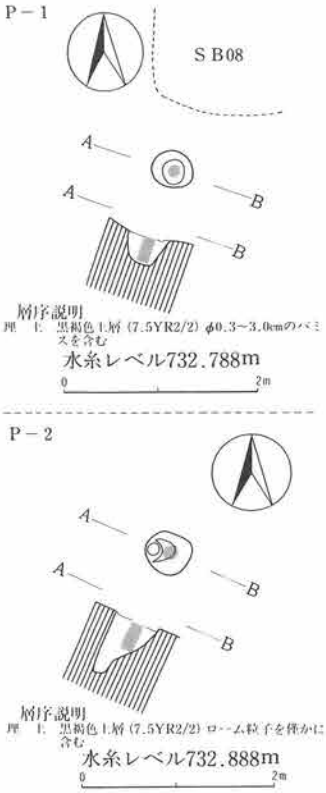
第434図　第33号掘立柱建物址実測図

(3)　ピ　ッ　ト

1）第１号ピット

遺構（第435図）

E－４グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。東西45cm、南北39cmを測り、平面プ



第435図　第１・２号ピット実測図

ランは楕円形を呈する。掘立柱建物のピットと思われるが、他のピットは検出されなかった。

遺物

出土遺物は皆無であり、所産期についても明確でない。

２）第２号ピット

遺構（第435図）

Ｄ－４グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

東西50cm、南北46cmを測り、平面プランは、楕円形を呈する。

掘立柱建物のピットと思われるが、他のピットは検出されなかった。

遺物

出土遺物は皆無であり、所産期についても明確でない。

(4)　土　　坑

１）第１号土坑

遺構（第436図、図版29）

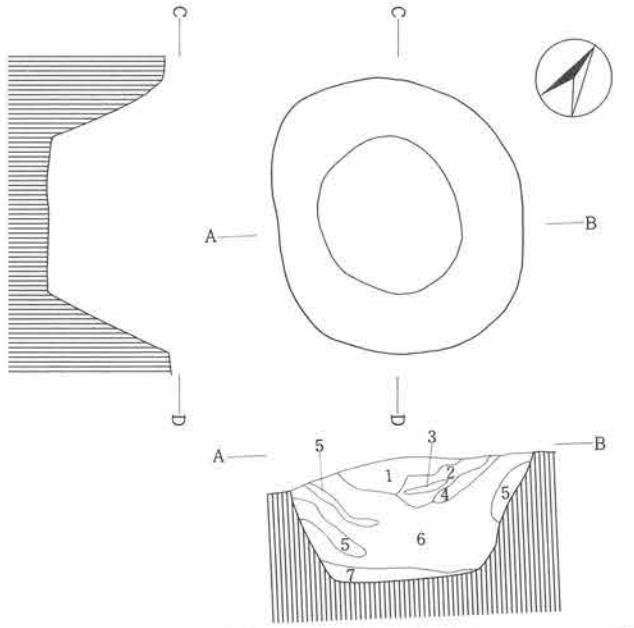
Ｄ－４グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

東西290cm、南北282cm、平面プランは、楕円形を呈する。確認面からの深さは、130cmを測る。

長軸方位は、Ｎ－48°－Ｗを示す。遺構覆土は、７層に区分されるが、大半を第６層が占める。自然堆積と考えられる。

遺物（第440図、図版93）

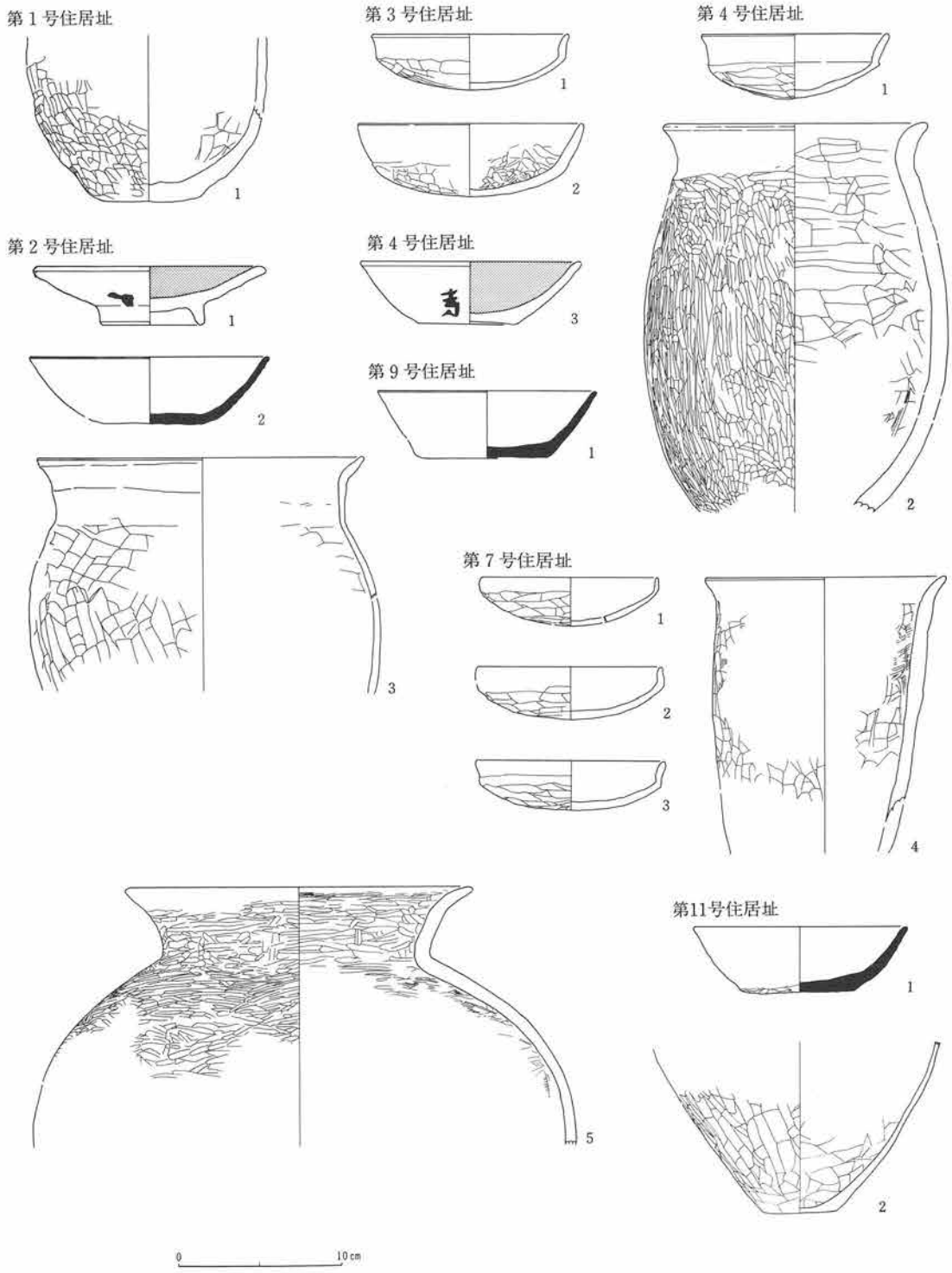
土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土している。このうち、図示したものに須恵器長頸壺がある。出土土器片中には、このほか、図示し得なかったが、かえりを有する須恵器蓋の破片も認められた。本遺構の所産期は、出土土器片から奈良時代初めと考えられる。



層序説明

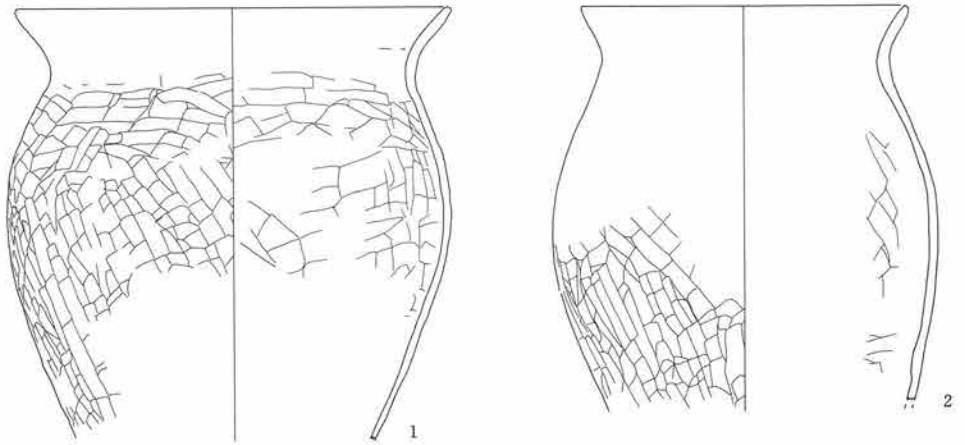
第１層　にぶい黄褐色土層(10YR5/4)φ0.1～1.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第２層　黒褐色土層(10YR2/3)φ0.1～0.5cmのパミス、ローム粒子を含む
第３層　黄褐色土層(10YR5/6)φ0.1～1.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第４層　にぶい黄褐色土層(10YR4/3)φ0.1～0.5cmのパミス、ローム粒子を僅かに含む
第５層　にぶい黄褐色土層(10YR5/3)φ0.1～1.0cmのパミス、ローム粒子を僅かに含む
第６層　黒褐色土層(10YR2/2)φ0.1～2.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第７層　暗褐色土層(10YR3/3)φ0.1～0.5cmのパミス、ローム粒子を僅かに含む

第436図　第１号土坑実測図

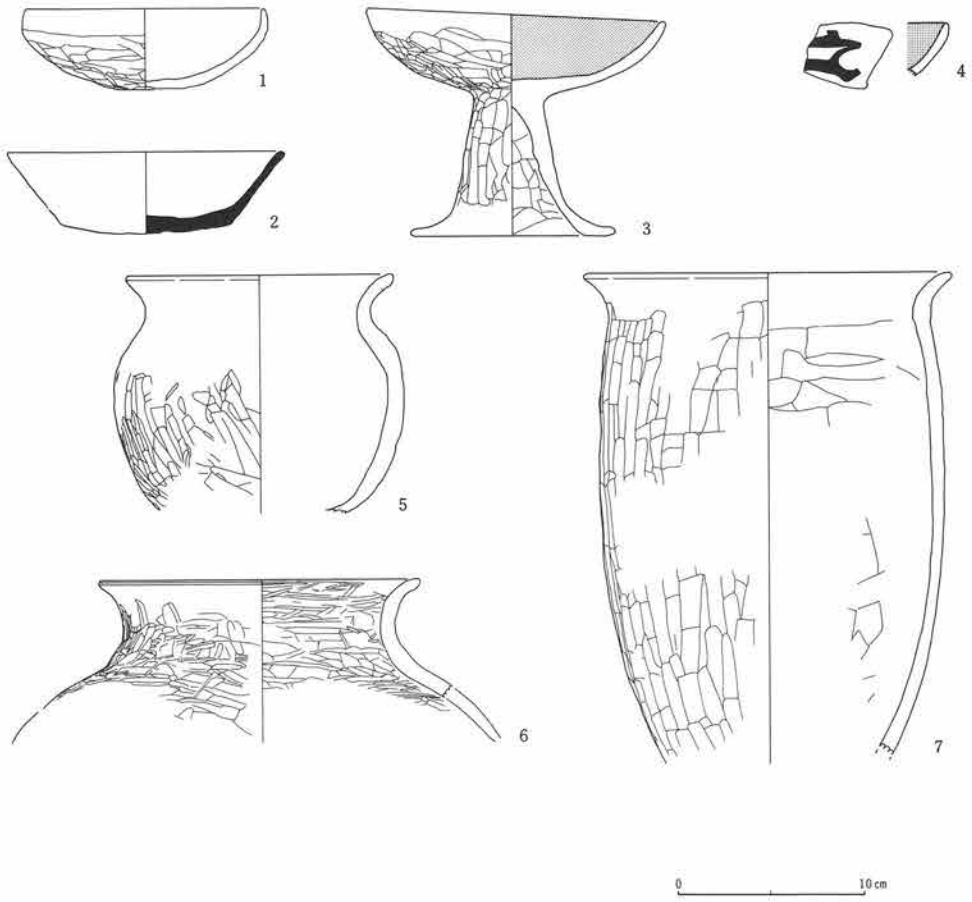


第437図　第1～4・7・9・11号住居址出土土器実測図

第11号住居址

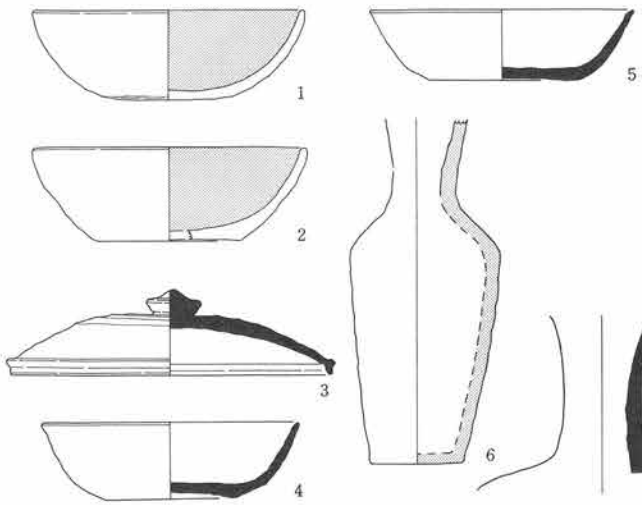


第12号住居址

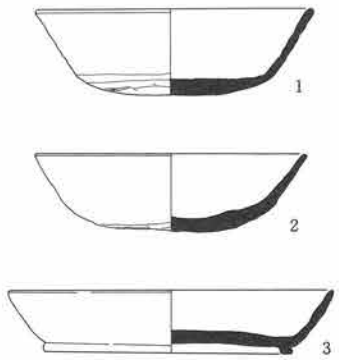


第438図　第11・12号住居址出土土器実測図

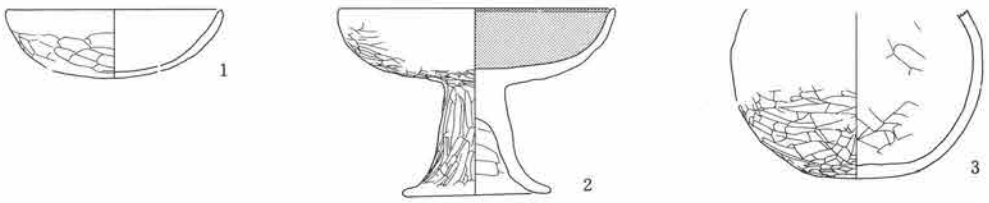
第13号住居址



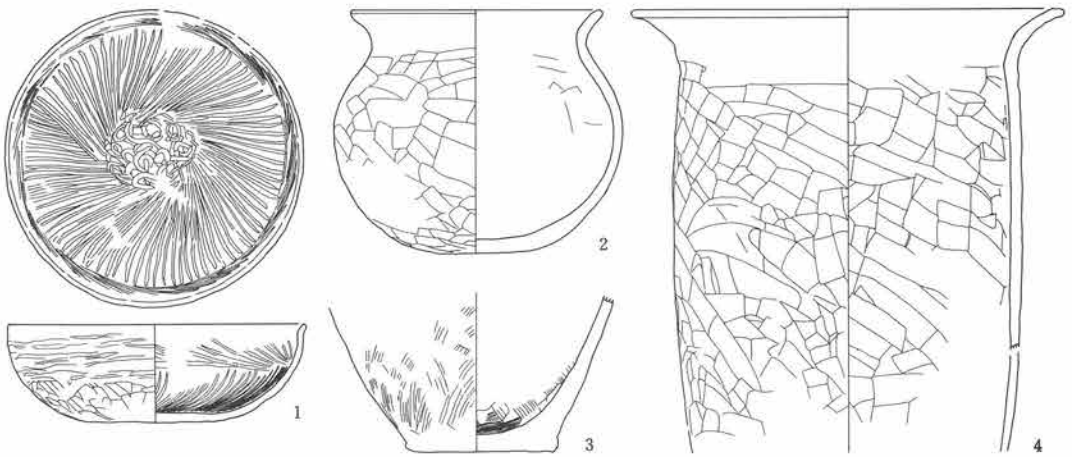
第14号住居址



第16号住居址

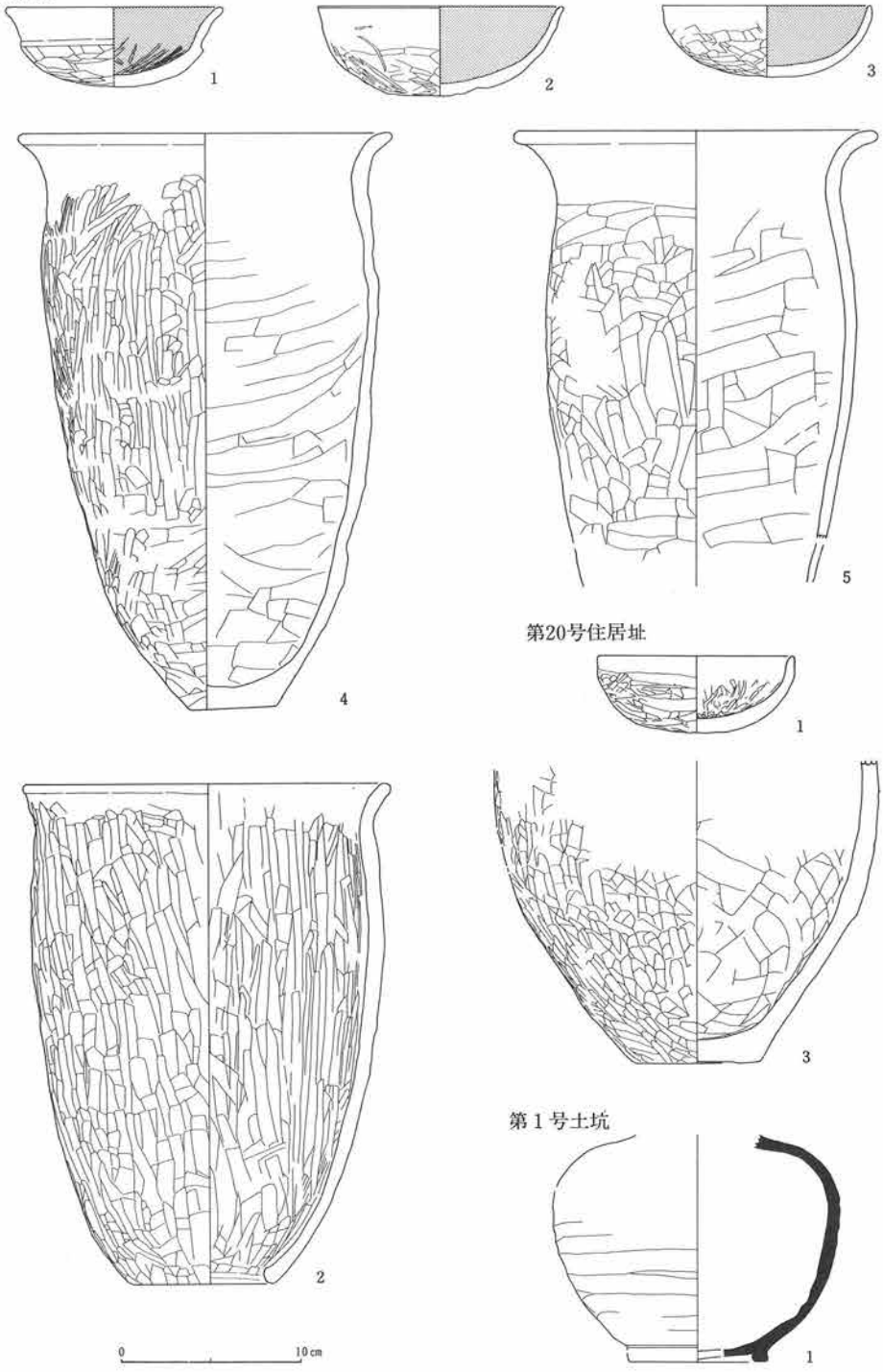


第17号住居址

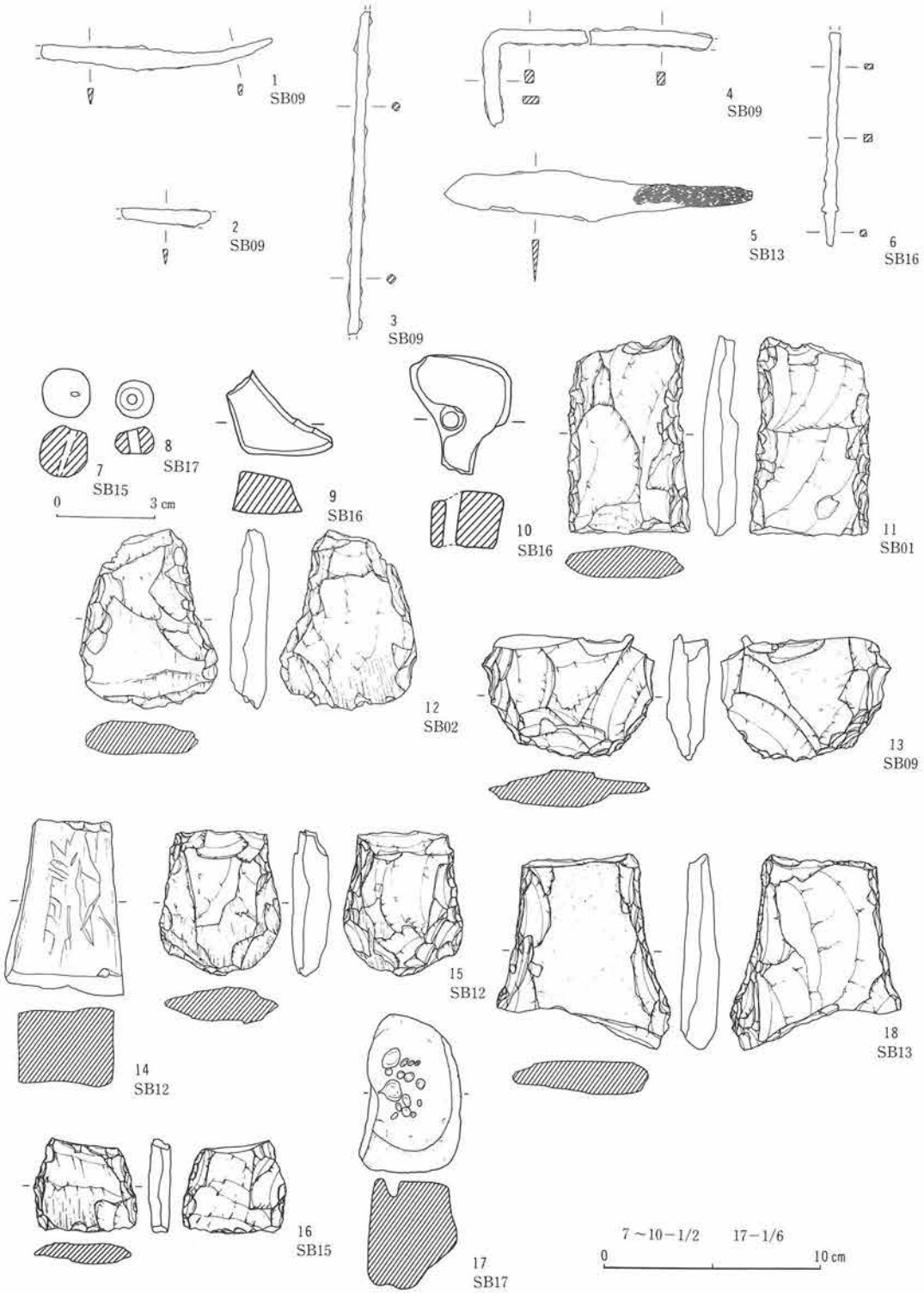


第439図　第13・14・16・17号住居址出土土器実測図

第18号住居址



第440図　第18・20号住居址、第１号土坑出土土器実測図

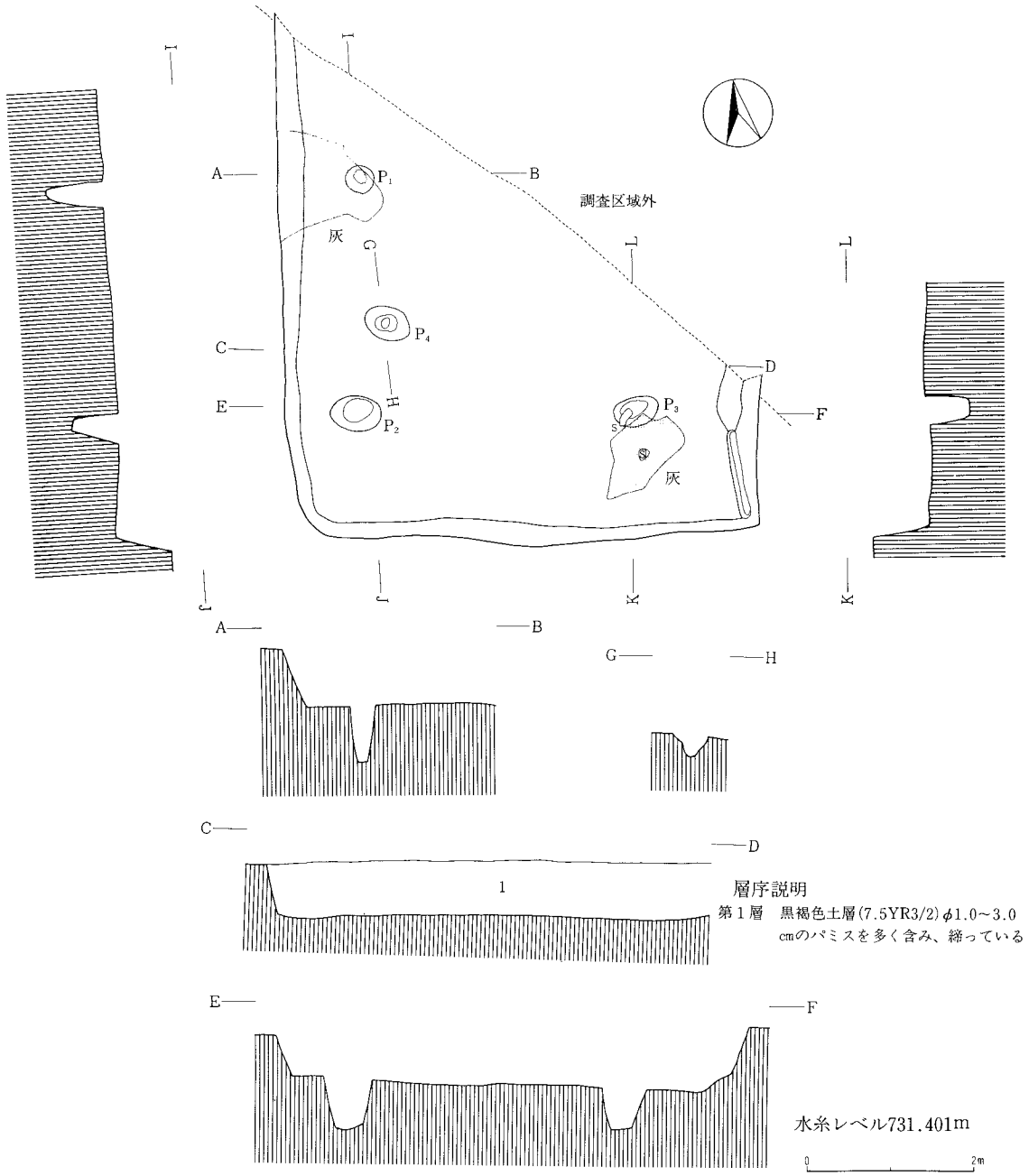


第441図　鉄製品・土製品・石製品実測図

5　大塚原遺跡

(1)　竪穴住居址

1）第1号住居址



第442図　第1号住居址実測図

遺構（第442図、図版29）

本住居址は、Ｃ－２グリッドに位置する。第15号住居址と重複関係を有し、第15号住居址を切って構築されている。東西557cm、南北は調査し得た範囲で625cmを測り、平面プランは、おそらく、南北にやや長い隅丸長方形を呈するものと思われる。南北軸の方位は、Ｎ－８°－Ｅを示す。

住居址覆土は、黒褐色（7.5YR3/2）土１層で、確認面からの壁高は、48～75cmを測る。

カマドは、北壁部に位置するものと思われ、調査範囲内では認められなかった。

ピットは総計４基検出された。このうち、P_1～P_3の３基が主柱穴と考えられる。周溝は、東壁下、南東コーナー付近で認められた。

また、本住居址は焼失住居と考えられ、灰、炭化材が認められた。

遺物（第535・542～544図、図版95・102～104）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、鉄製品、石製品のほか、自然遺物として炭化材が出土している。このうち、図示したものに黒色土器杯、須恵器杯、土師器甕、鉄製品、石製品がある。

土師器甕（第535図８）は、小型の台付甕の脚台部である。鉄製品（第542図）には、鉄鏃（１）、毛抜き形鉄製品（２）、紡錘車の紡軸と考えられるもの（３）、鎌（５・６）がある。

石製品には、砥石（第543図９～12）、磨石（第544図１）がある。砥石は、９が砂岩製で、他は凝灰岩製で、重さは、９－490ｇ、10－250ｇ、11－210ｇ、12－360ｇを量る。

なお、炭化材については後述する。本住居址の所産期は、奈良時代後葉に比定される。

２）第２号住居址

遺構（第443・444図、図版29）

本住居址は、Ｂ－２グリッドに位置する。第11・21号住居址と重複関係を有し、第11・21号住居址を切って構築されている。東西518cm、南北613cmを測り、平面プランは、南北に長い隅丸長方形を呈する。カマドを中心とする主軸方位は、Ｎ－3.5°－Ｅを示す。住居址覆土は、３層に区分されるが、第１層が大半を占める。確認面からの壁高は、35～65cmを測る。

カマドは北壁ほぼ中央部に位置するが遺存状態は悪い。おそらく、加工した軽石を主体として構築されていたものと思われる。

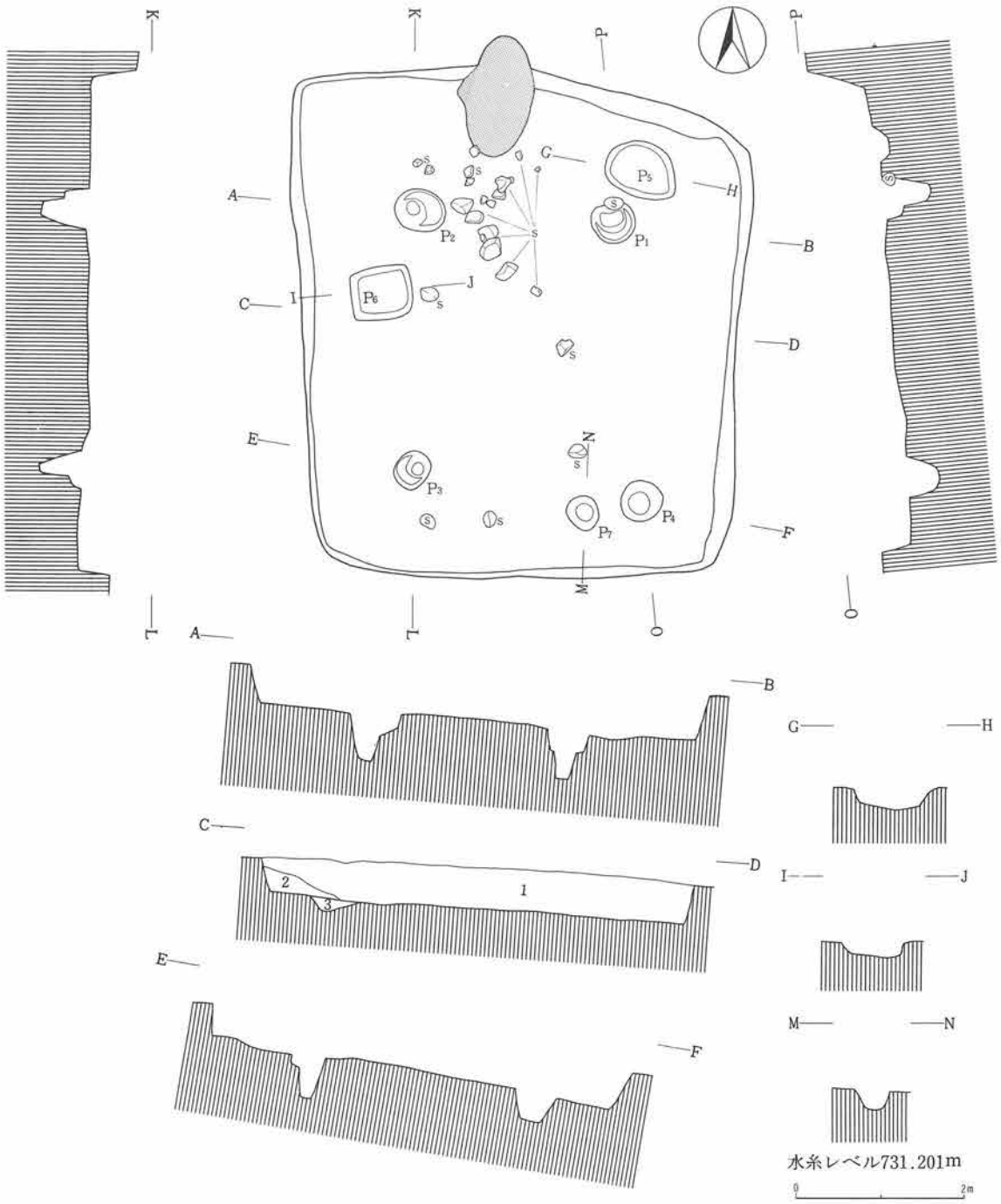
ピットは総計７基検出された。このうち、P_1～P_4が主柱穴、P_5が貯蔵穴、P_7が出入口部の施設に関連するものと考えられる。なお、周溝は、検出されなかった。

遺物（第535・542図、図版95・102）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、鉄製品、鉄滓のほか、青色顔料が出土している。

このうち、図示したものに須恵器蓋・杯・円面硯、黒色土器杯、鉄製品がある。

鉄製品（542図）には、工具と考えられるもの（７）、鉄鏃（８・10）、錐（９）、刀子（11・12）が



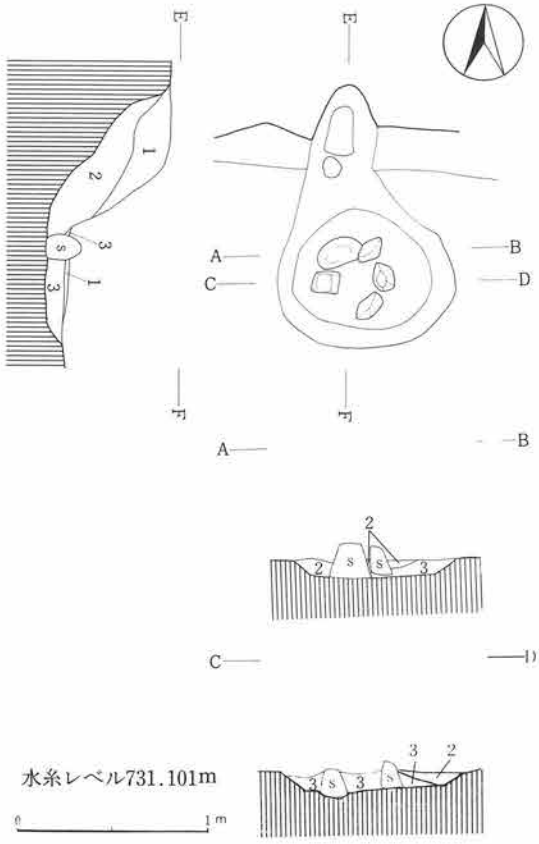
層序説明

第1層　暗褐色土層(7.5YR3/3)φ0.5～3.0cmのパミスを含む
第2層　黒褐色土層(7.5YR3/2)φ0.3～2.0cmのパミスを僅かに含む
第3層　黒褐色土層(7.5YR2/2)φ0.3～1.0cmのパミスを僅かに含む

第443図　第2号住居址実測図

ある。青色顔料はP_6から出土しており、一応、本住居址に伴うものと判断したが、詳細については後述する。

本住居址の所産期は、奈良時代後葉に比定される。



第444図　第2号住居址カマド実測図

3）第3号住居址

遺構（第445・446図、図版29）

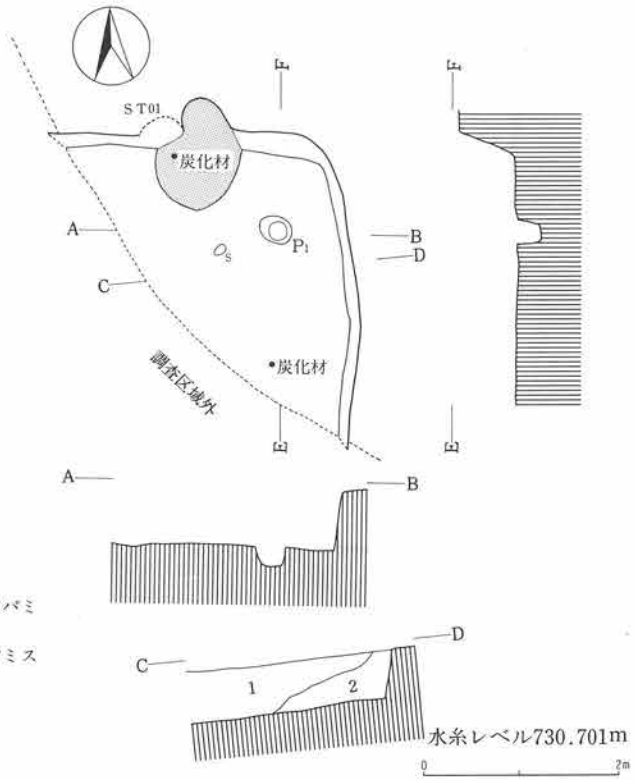
本住居址は、A－2グリッドに位置する。第1号掘立柱建物址と重複関係を有し、第1号掘立柱建物址により切られている。東西・南北とも調査し得た範囲で、300cm、345cmを測り、平面プランは、おそらく、隅丸方形を呈するものと思われる。カマドを中心とする主軸方位は、N－4.5°－Eを示す。住居址覆土は、2層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、51～63cmを測る。カマドは、北壁に位置するが、遺存状態は悪い。火床部では、焚口部の天井石として用いられたと考えられる軽石が検出された。

ピットは主柱穴と考えられる1基が住居址北東部において検出されたが、周溝は認められなかった。

遺物

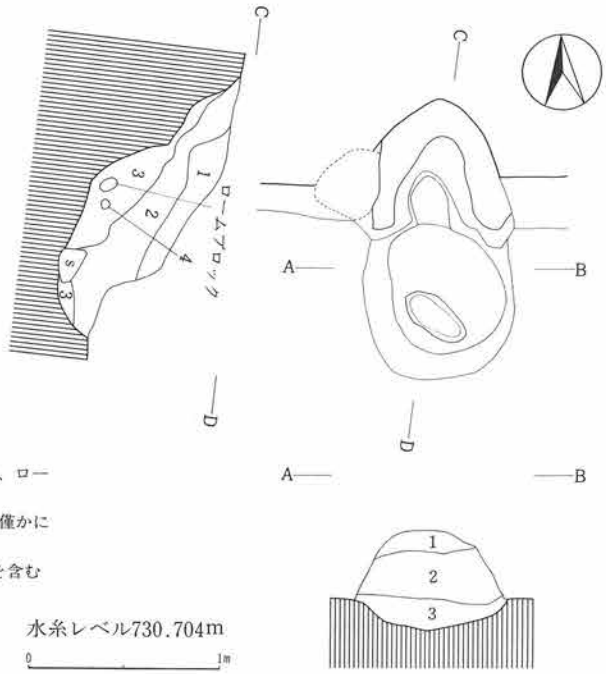
土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土しているが、図示し得るものは皆無である。なお、自然遺物として、炭化材が出土しており、炭化材については後述する。

本住居址の所産期は、出土土器片から古墳時代後期後葉に比定される。



層序説明
第1層　暗褐色土層(7.5YR3/3)φ0.5～3.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第2層　黒色土層(7.5YR2/1)φ0.5～5.0cmのパミスを僅かに含む

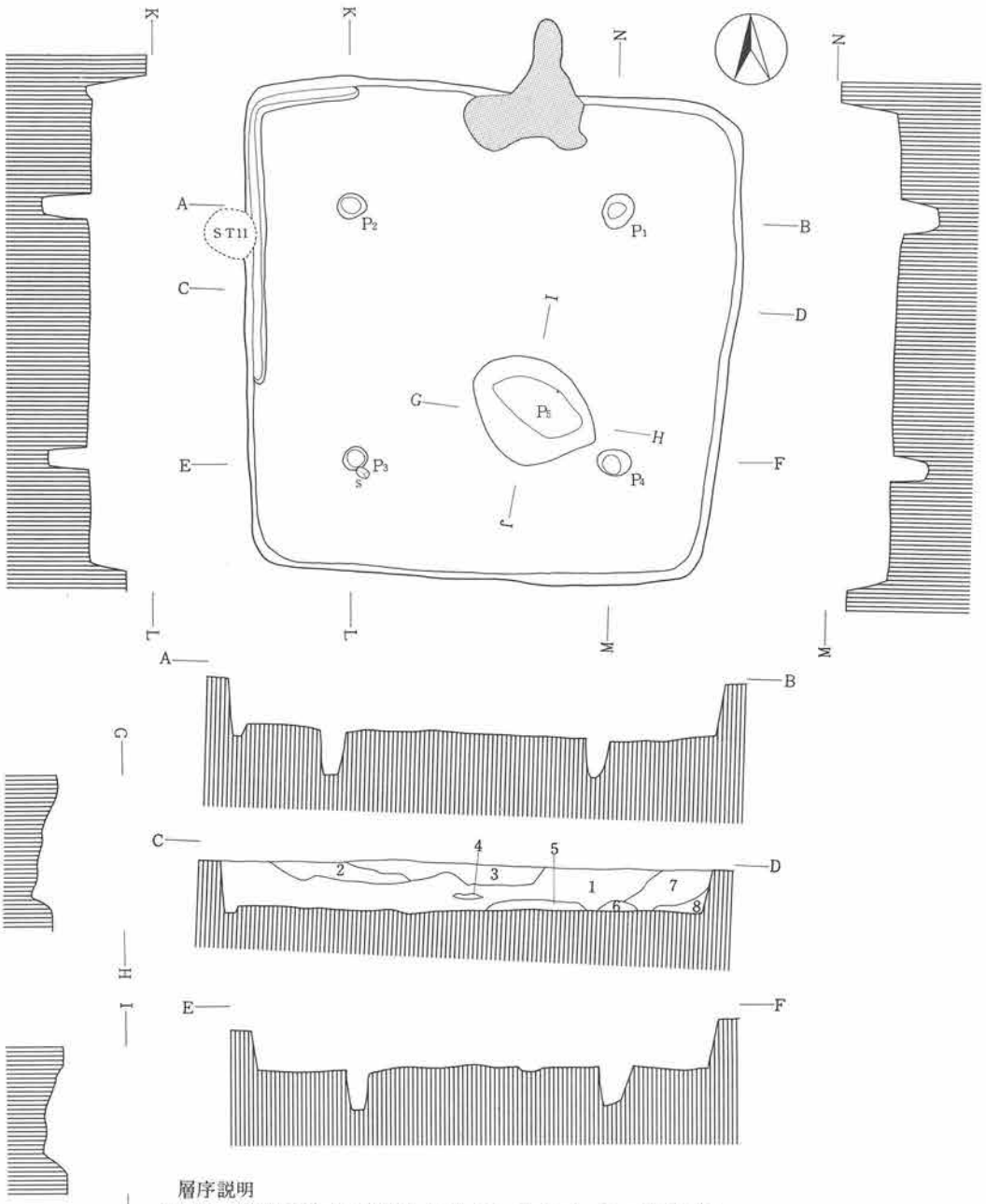
第445図　第3号住居址実測図



層序説明
第1層　黒褐色土層(10YR3/2)φ0.1～0.5cmのパミス、ローム粒子を僅かに含む
第2層　黒褐色土層(10YR2/2)粘土粒子、焼土粒子を僅かに含む
第3層　黒褐色土層(7.5YR3/1)粘土粒子、焼土粒子を含む
第4層　黄褐色土層(10YR5/6)粘土ブロック

第446図　第3号住居址カマド実測図

4）第4号住居址



層序説明

第1層　極暗褐色土層（7.5YR2/3）φ0.3～3.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第2層　黒褐色土層（7.5YR3/2）φ0.5～2.0cmのパミスを含む
第3層　暗褐色土層（7.5YR3/3）φ0.5～2.0cmのパミス、ローム粒子を多く含む
第4層　褐色土層（7.5YR4/6）ローム粒子を含む
第5層　黒褐色土層（7.5YR2/2）φ0.1～2.0cmのパミスを含む
第6層　黒褐色土層（7.5YR2/2）φ0.1～5.0cmのパミスを含む
第7層　暗褐色土層（7.5YR3/3）φ0.1～2.0cmのパミスを含む
第8層　黒色土層（7.5YR2/1）φ0.5cm前後のパミスを僅かに含む

水糸レベル731.201m

0　2m

第447図　第4号住居址実測図

遺構（第447・448図、図版29）

本住居址は、A・B－1・2グリッドに位置する。第2・11・30号掘立柱建物址と重複関係を有し、第2・11・30号掘立柱建物址に切られている。東西558cm、南北566cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。カマドを中心とする主軸方位は、N－3°－Eを示す。住居址覆土は、8層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、40～62cmを測る。

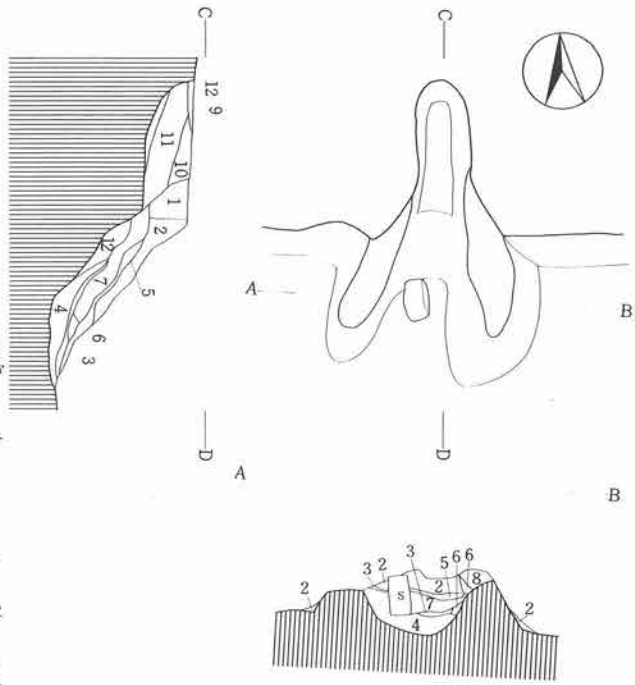
カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。地山を掘り残して袖芯とし、第2・8層および加工した軽石を用いて構築されていたものと思われる。

ピットは総計5基検出された。このうち、P_1～P_4が主柱穴と考えられる。周溝は、西壁下から北壁下にかけて認められた。

遺物（第535・544・545図、図版95・104・105）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、弥生土器片、石製品のほか、自然遺物として炭化材がカマド内から出土している。このうち、図示したものに須恵器椀、墨書土器片、弥生土器片、石製品がある。墨書土器片は、黒色土器杯の外面に2文字が墨書されるが、文字は不明である。弥生土器片は、後期の甕の破片である。石製品は、住居址北部出土の砂岩製の打製石斧で、重さ90gを量る。なお、炭化材については後述する。

本住居址の所産期は、奈良時代後葉に比定される。



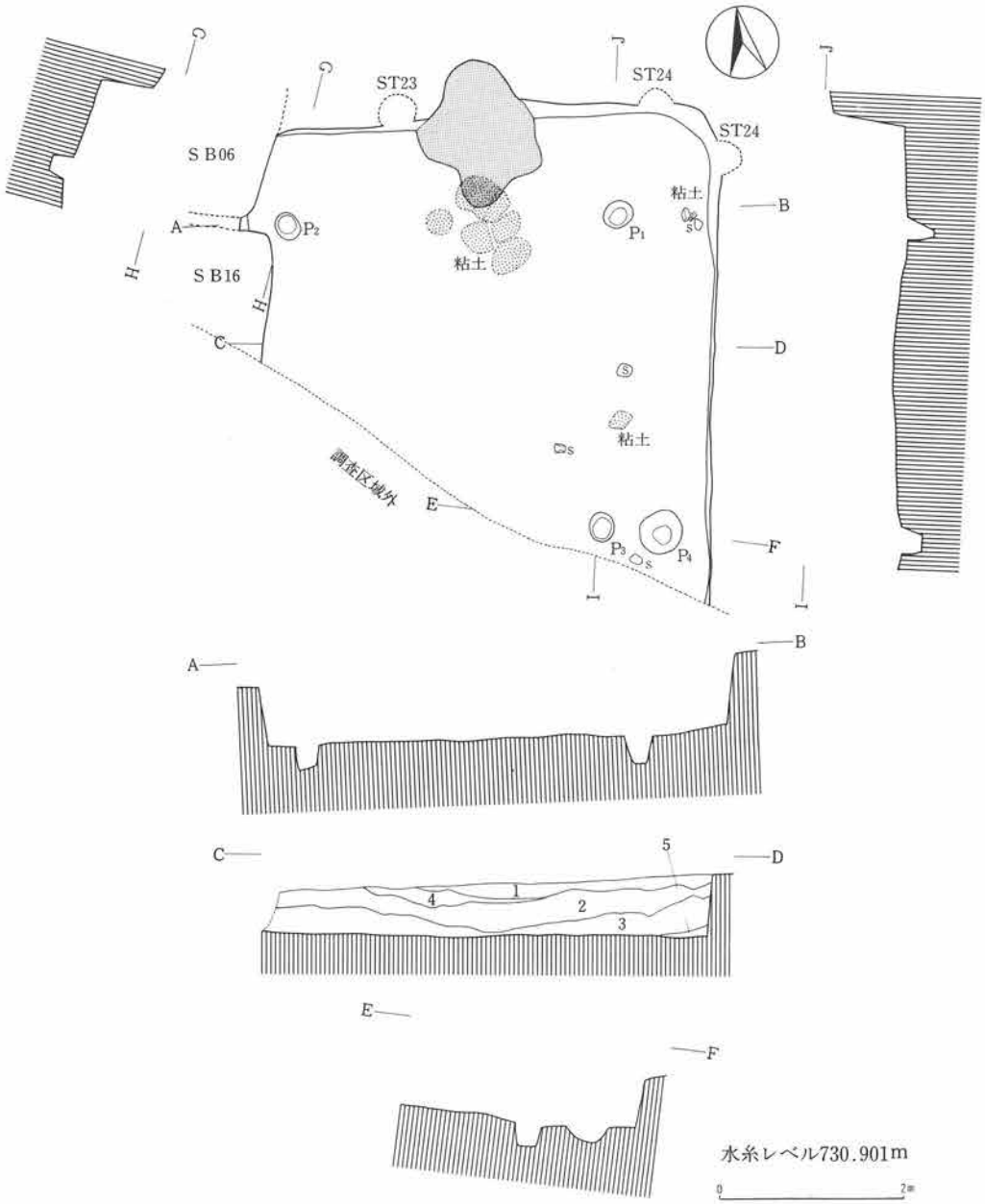
層序説明

第1層　暗褐色土層(7.5YR3/3)粘土、焼土を多く含む
第2層　灰黄褐色土層(10YR4/2)粘土、焼土を多く含む
第3層　灰黄褐色土層(10YR5/2)灰層。粘性あり
第4層　赤褐色土層(5YR4/8)焼土層
第5層　黒褐色土層(10YR2/3)ローム粒子を僅かに含む
第6層　にぶい褐色土層(7.5YR5/4)焼土を含む
第7層　にぶい黄褐色土層(10YR4/3)灰を若干含む
第8層　にぶい黄橙色土層(10YR6/3)粘土粒子を含む
第9層　にぶい赤褐色土層(5YR5/4)粘土粒子を多く含む
第10層　暗褐色土層(10YR3/3)粘土粒子、焼土を僅かに含む
第11層　黒褐色土層(10YR2/3)粘土粒子を僅かに含む
第12層　にぶい黄褐色土層(10YR4/3)ローム粒子を多く含む

第448図　第4号住居址カマド実測図

5）第5号住居址

遺構（第449・450図、図版30）



層序説明

第1層　暗褐色土層（7.5YR3/3）φ2.0cm前後のパミスを含む
第2層　黒褐色土層（7.5YR2/2）φ1.0～7.0cmのパミスを含む
第3層　暗褐色土層（7.5YR3/4）φ0.5～8.0cmのパミスを含む
第4層　褐色土層（7.5YR4/4）φ0.5～1.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第5層　黒褐色土層（7.5YR2/2）φ0.5cm前後のパミスを含む

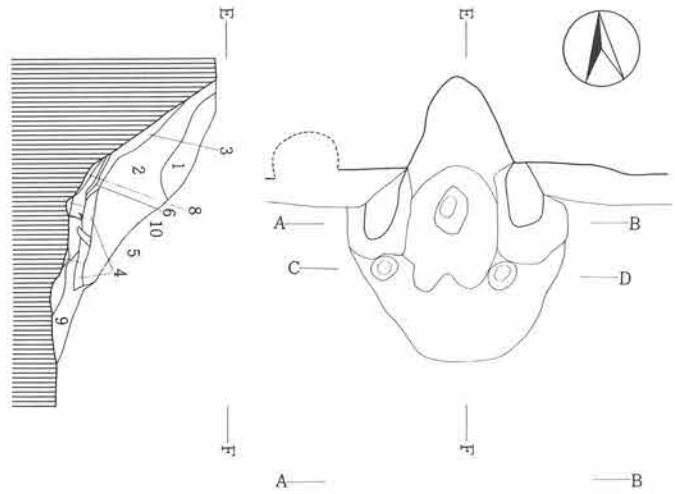
第449図　第5号住居址実測図

本住居址は、Ｂ－２グリッドに位置する。第６・16号住居址、第23・24号掘立柱建物址と重複関係を有し、第６・16号住居址、第23・24号掘立柱建物址により切られている。東西527cm、南北は調査し得た範囲で550cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈するものと思われる。カマドを中心とする主軸方位は、Ｎ－7.5°－Ｅを示す。住居址覆土は、５層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、58～81cmを測る。カマドは、北壁ほぼ中央部に位置し、にぶい褐色(7.5YR5/4)土を用いて構築されていた。ピットは総計４基検出された。このうち、P_1～P_3が主柱穴と考えられる。

なお、周溝は、検出されなかった。

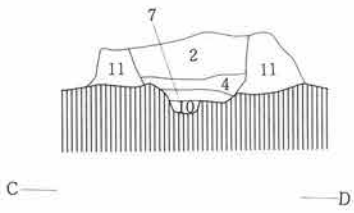
遺物（第535・542図、図版95・102）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、鉄製品のほか、自然遺物として獣骨が出土している。このうち、図示したものに土師器椀・小型甕・甕、黒色土器高杯、鉄製品がある。土師器椀（第535図１）は、いわゆる黒彩土器である。鉄製品（第542図14）は、火打ち金具と考えられる。なお、獣骨については後述する。本住居址の所産期は、古墳時代後期後葉に比定される。



層序説明

第１層　にぶい黄橙色土層(10YR6/3)粘土粒子を多く含む
第２層　褐色土層(7.5YR4/3)粘土粒子を含む
第３層　黒褐色土層(7.5YR3/2)ローム粒子を含む
第４層　極暗赤褐色土層(５YR2/3)粘土粒子、炭化物を含む
第５層　褐色土層(10YR4/4)灰を若干含む
第６層　褐灰色土層(7.5YR4/1)灰層。粘性あり
第７層　にぶい橙色土層(7.5YR6/4)灰層
第８層　明褐灰色土層(7.5YR7/2)灰層。炭化物を含む
第９層　にぶい赤褐色土層(2.5YR5/4)粘土粒子を含む
第10層　にぶい赤褐色土層(５YR5/4)焼土層
第11層　にぶい褐色土層(7.5YR5/4)粘性。構築土



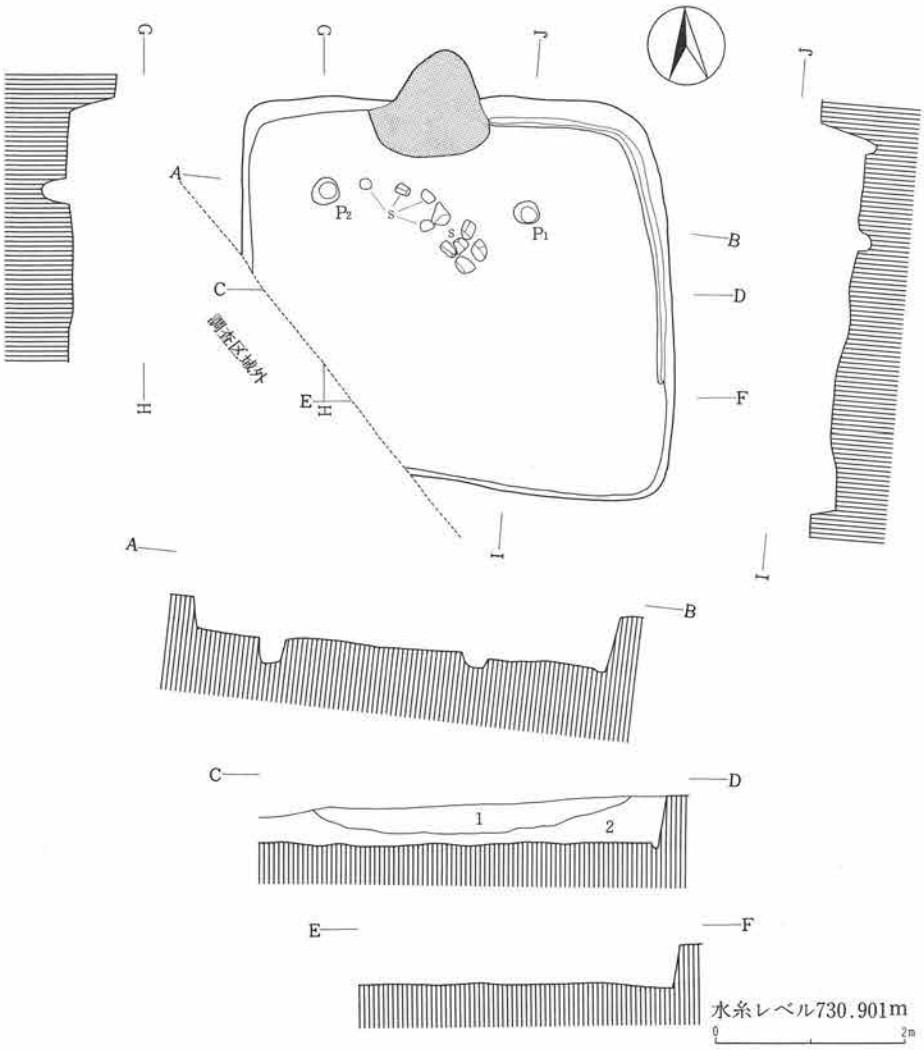
第450図　第５号住居址カマド実測図

6）第6号住居址

遺構（第451・452図、図版30）

本住居址は、A・B－2グリッドに位置する。第5・7号住居址と重複関係を有し、第5・7号住居址を切って構築されている。東西450cm、南北420cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。カマドを中心とする主軸方位は、N－5°－Eを示す。住居址覆土は、2層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、26～57cmを測る。

カマドは北壁ほぼ中央部に位置するが遺存状態は悪い。おそらく、加工した軽石を主体として構築されていたものと思われる。ピットは主柱穴と考えられる2基が検出された。



層序説明
第1層　暗褐色土層（7.5YR3/3）φ1.0～3.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第2層　暗褐色土層(7.5YR3/4)φ1.0～2.0cmのパミスを多く含む

第451図　第6号住居址実測図

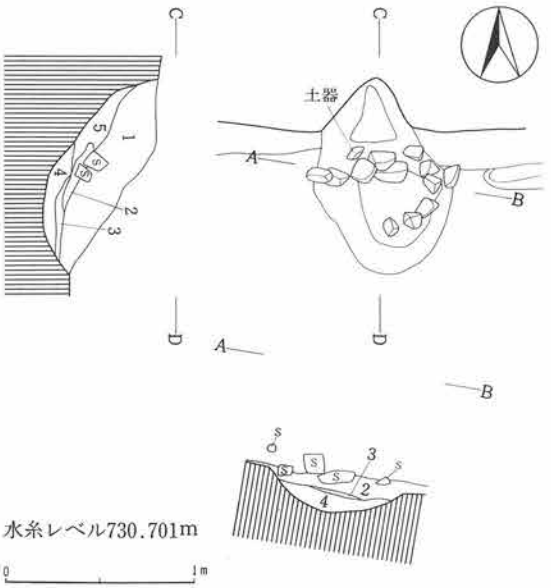
周溝は、北壁下から東壁下にかけて認められた。

遺物（第536・542・544図、図版96・102・104）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、灰釉陶器片、鉄製品、石製品が出土している。このうち、図示したものに黒色土器杯・椀、須恵器杯・椀、鉄製品、石製品がある。墨書土器は4点あり、いずれも黒色土器外面に墨書される。

3は「山」と判読したが、他は不明である。鉄製品（第542図15）は、紡錘車の紡輪と考えられる。石製品（第544図3）は、軽石製の磨石である。

本住居址の所産期は、平安時代に比定される。



層序説明
第1層　暗褐色土層(7.5YR3/3)住居址覆土と同じものに焼土が若干混じる
第2層　暗褐色土層(7.5YR3/4)焼土を含む
第3層　褐色土層(7.5YR4/3)焼土、灰を多く含む
第4層　明赤褐色土層(5YR5/8)焼土層
第5層　暗赤褐色土層(5YR3/4)粘土粒子、焼土を多く含む

第452図　第6号住居址カマド実測図

7）第7号住居址

遺構（第453・454図、図版30）

本住居址は、A・B－2グリッドに位置する。第6・8号住居址と重複関係を有し、第8号住居址を切り、第6号住居址に切られている。東西575cm、南北525cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。カマドを中心とする主軸方位は、N－3°－Wを示す。

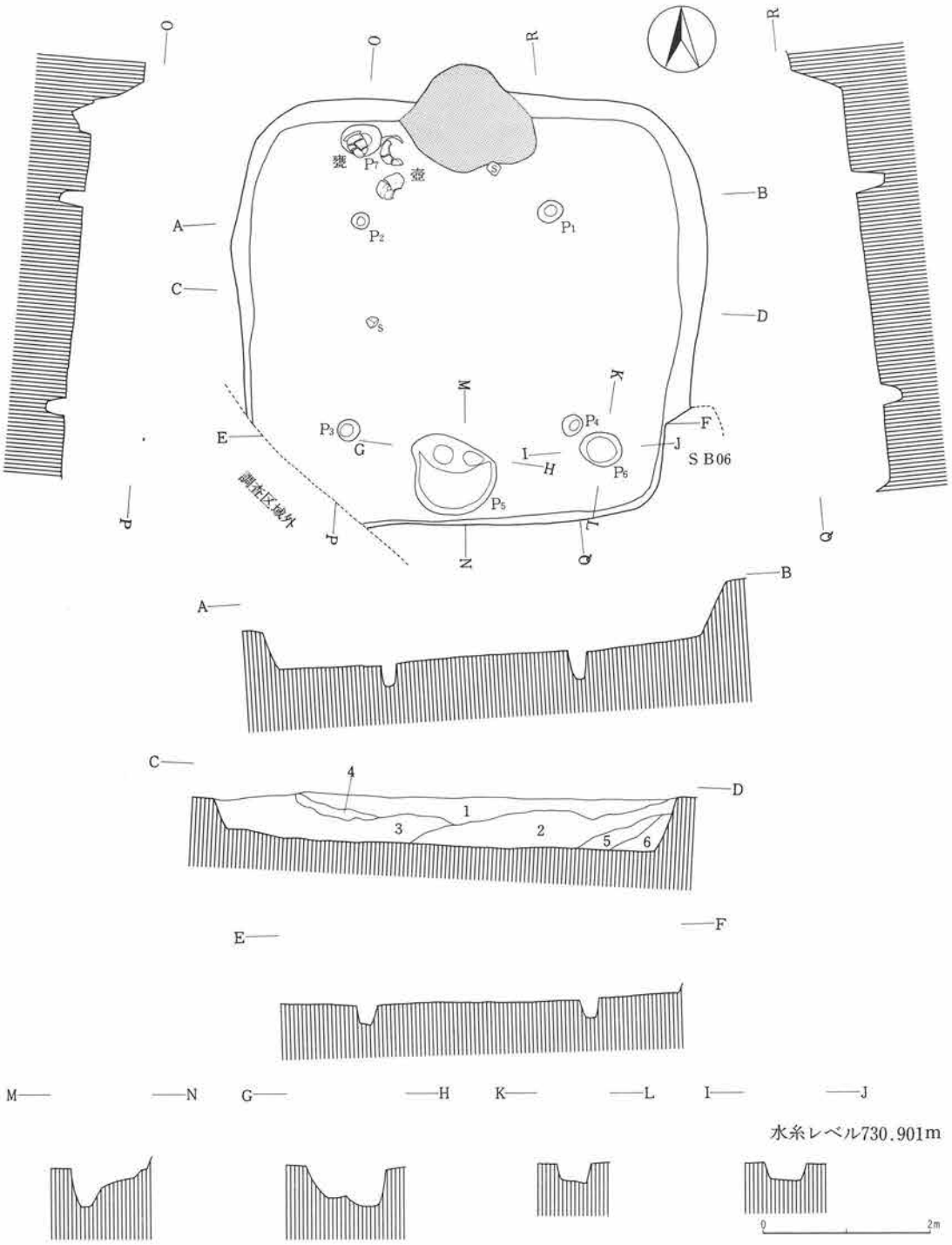
住居址覆土は、6層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は36～67cmを測る。

カマドは北壁ほぼ中央部に位置するが遺存状態は悪く、火床部が確認された程度である。

ピットは総計7基検出された。このうち、P_1～P_4が主柱穴、P_7が貯蔵穴と考えられる。

遺物（第536・543図、図版96・103）

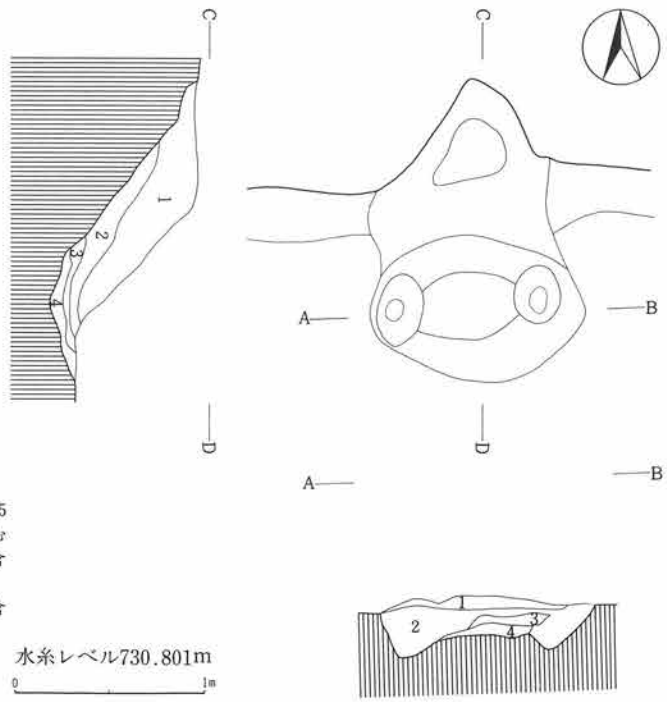
土師器片、黒色土器片、須恵器片、銅製品、石製品のほか自然遺物として炭化材がカマド内から出土している。図示したものに須恵器杯・甕・土師器甕、銅製品、石製品がある。銅製品（第543図7）は、刀装具の一部と考えられる。石製品（第543図5）は、翡翠製の勾玉である。なお、炭化材については後述する。本住居址の所産期は、奈良時代前葉に比定される。



層序説明

第1層　黒褐色土層（7.5YR3/2）φ0.5～1.0cmのパミスを僅かに含む
第2層　暗褐色土層（7.5YR3/4）φ0.5～1.0cmのパミスを含む
第3層　暗褐色土層（7.5YR3/3）φ0.5～2.0cmのパミスを含む
第4層　褐色土層（7.5YR4/4）φ0.5～1.0cmのパミスを僅かに含む
第5層　黒褐色土層（7.5YR2/2）φ0.5～1.5cmのパミスを含む
第6層　暗褐色土層（10YR3/4）φ0.5～3.0cmのパミスを多く含む

第453図　第7号住居址実測図



層序説明

第１層　暗褐色土層(7.5YR3/3)住居址覆土にφ0.5cm前後のパミスと、粘土粒子を僅かに含む

第２層　暗褐色土層(7.5YR3/4)粘土、炭化物を含む

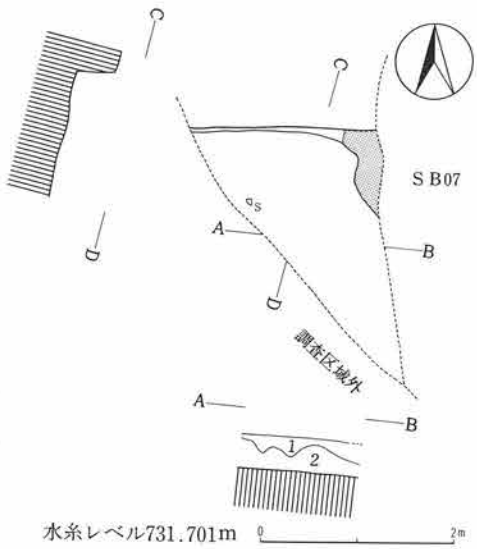
第３層　にぶい黄褐色土層(10YR5/4)灰を多く含み、焼土、炭化物を若干含む

第４層　明赤褐色土層(５YR5/6)焼土層

第454図　第７号住居址カマド実測図

８）第８号住居址

遺構（第455・456図、図版30）



層序説明

第１層　暗褐色土層(7.5YR3/3)φ0.5cm前後のパミスを僅かに含む

第２層　黒褐色土層(7.5YR2/2)φ0.5～1.0cmのパミスを僅かに含む

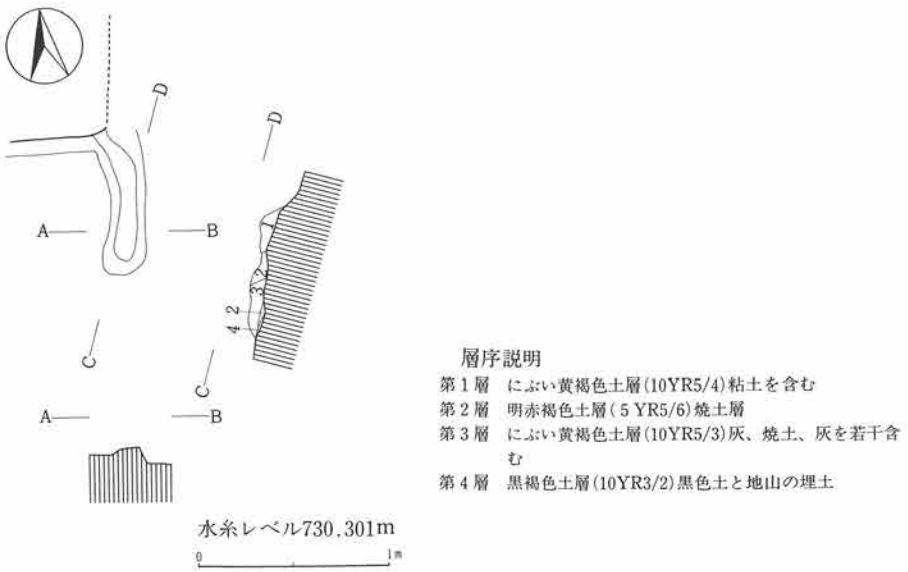
第455図　第８号住居址実測図

本住居址は、A－2グリッドに位置する。第7号住居址と重複関係を有し、第7号住居址に切られている。東西・南北とも調査し得た範囲で、それぞれ、195cm、274cmを測る。

カマドを中心とする主軸方位は、N－3°－Eを示す。住居址覆土は、2層に区分され、確認面からの壁高は、39cm前後を測る。カマドは、北壁ほぼ中央に位置するものと思われるが、遺存状態は悪い。地山を掘り残して、袖芯としていた。なお、ピット、周溝は検出されなかった。

遺物（第536図、図版96）

土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土しているが、4片と少なく、図示し得たものは須恵器蓋1点である。本住居址の所産期は、古墳時代後期後葉に比定される。



第456図　第8号住居址カマド実測図

9）第9号住居址

遺構（第457・458図、図版30）

本住居址は、B－2グリッドに位置する。第25号住居址と重複関係を有し、第25号住居址を切って構築されている。東西358cm、南北319cmを測り、平面プランは、東西にやや長い隅丸長方形を呈する。カマドを中心とする主軸方位は、N－2°－Wを示す。住居址覆土は、6層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、60～81cmを測る。

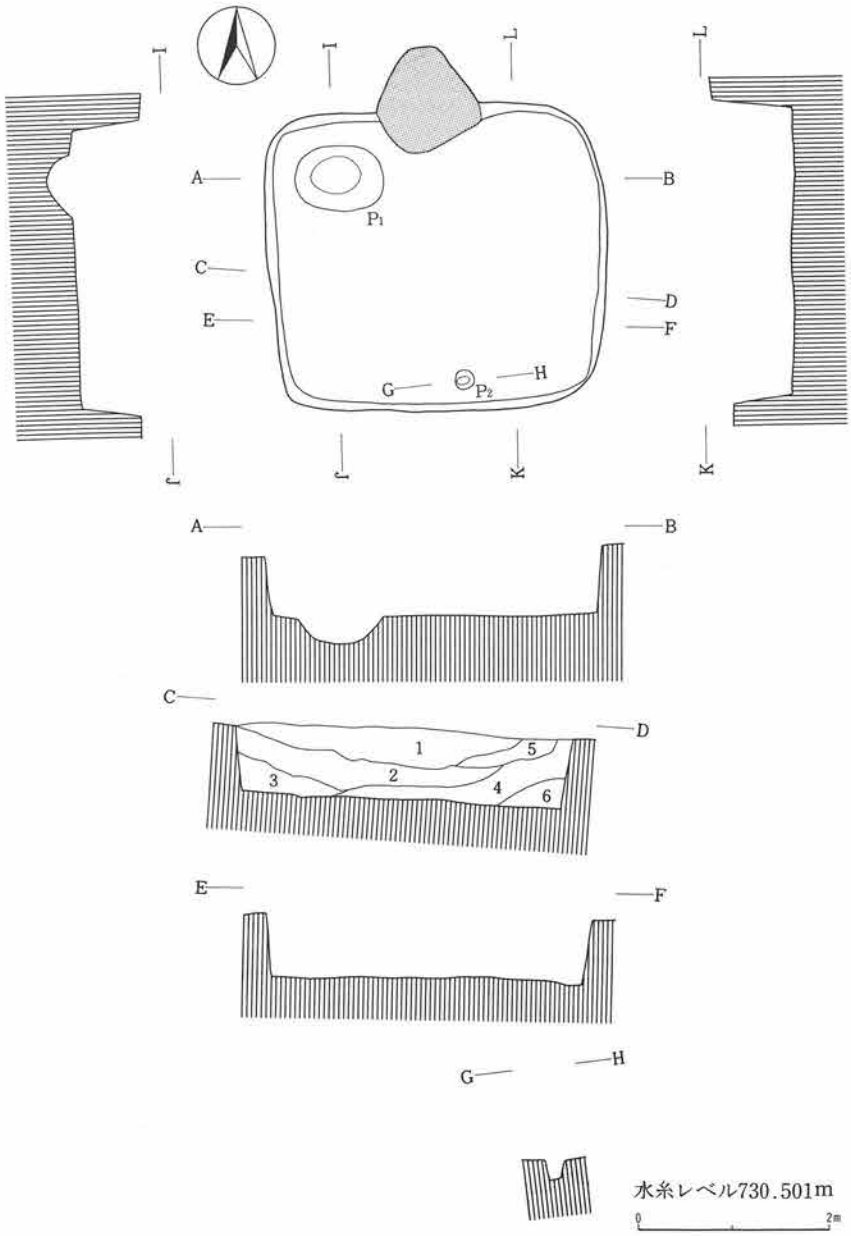
カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。軽石および第2層を主体として構築されていたものと思われる。また、火床部では加工した軽石の支脚石が認められた。

ピットは総計2基検出された。このうち、P_1が貯蔵穴、P_2が出入口部の施設に関連するものと思われる。

遺物（第543図、図版103）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、石製品のほか、自然遺物として炭化材が出土している。

このうち、図示し得たものは、石製品１点である。石製品は、軽石製の紡錘車で、重さ120ｇを

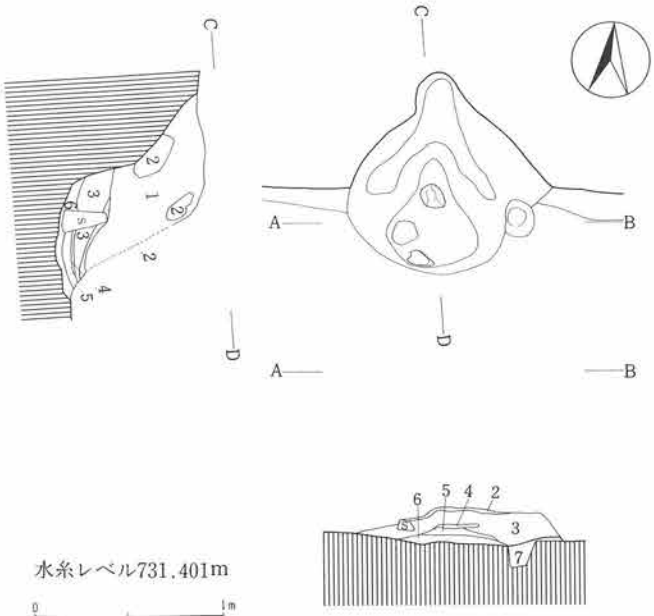


層序説明

第１層　黒褐色土層（10YR3/2）φ0.2～7.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第２層　褐色土層（7.5YR4/3）φ0.1～3.0cmのパミスを含む
第３層　暗褐色土層（7.5YR3/3）φ0.1～3.0cmのパミスを含む
第４層　黒褐色土層（7.5YR3/2）φ0.1～4.0cmのパミスを含む
第５層　褐灰色土層（7.5YR4/1）φ0.5～1.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第６層　極暗褐色土層（7.5YR2/3）φ0.5～1.0cmのパミスを含む

第457図　第９号住居址実測図

量る。なお、炭化材については後述する。本住居址の所産期は、奈良時代中葉に比定される。

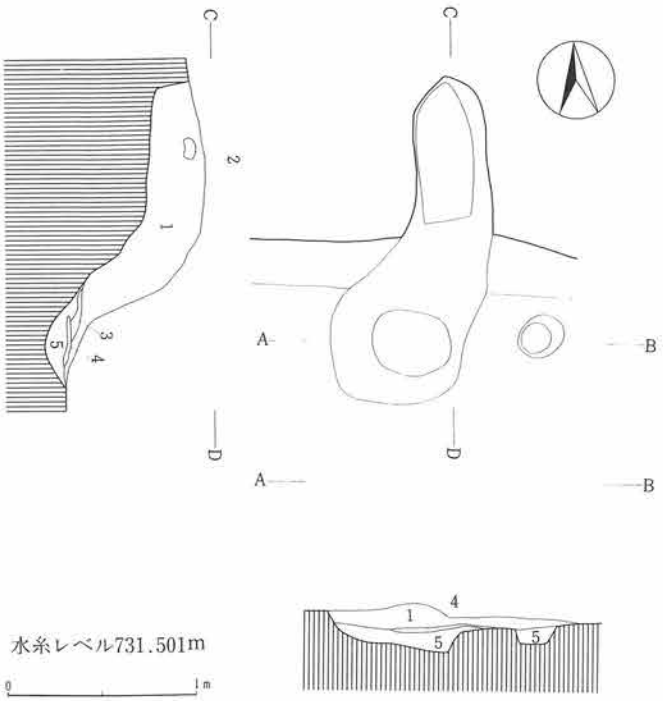


層序説明

第1層　褐色土層(10YR4/4)φ0.1cm前後のパミス、ローム粒子、粘土粒子を含む
第2層　にぶい橙色土層(2.5YR6/3)粘土粒子を多く含む
第3層　にぶい黄褐色土層(10YR4/3)φ0.5cm前後のパミス、ローム粒子、粘土粒子を含む
第4層　黒褐色土層(5YR3/1)炭化物、灰を含む
第5層　赤褐色土層(5YR4/8)焼土層
第6層　暗褐色土層(7.5YR3/3)φ0.3～1.0cmのパミス、ローム粒子、焼土を含む
第7層　黒褐色土層(7.5YR2/2)φ0.5cm前後のパミス、ローム粒子を含む

第458図　第9号住居址カマド実測図

10）第10号住居址



層序説明

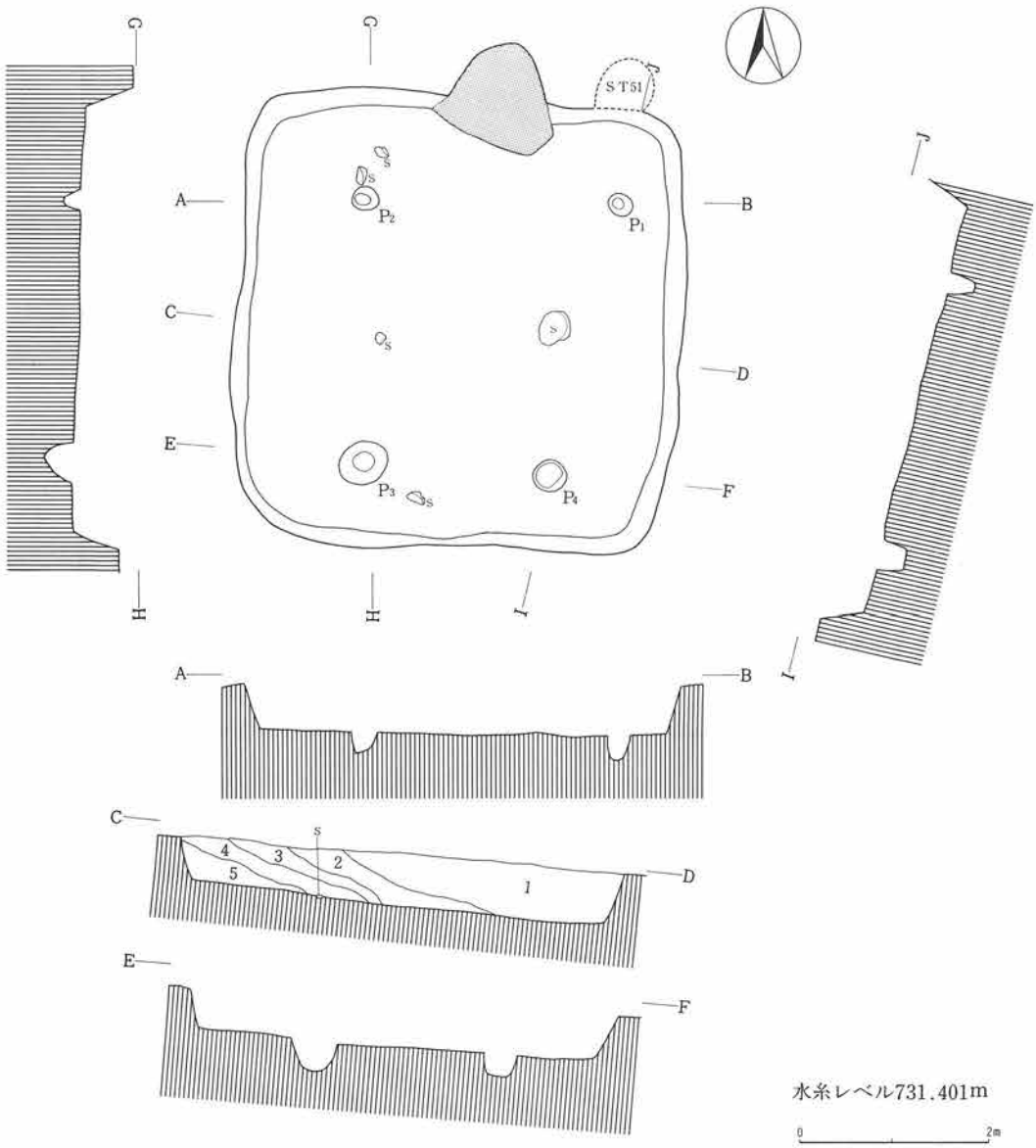
第1層　暗褐色土層(10YR3/4)φ0.3～0.5cmのパミス、ローム粒子を若干含む
第2層　にぶい黄褐色土層(10YR5/3)粘土ブロック
第3層　にぶい黄褐色土層（10YR5/4）灰層。炭化物を含む
第4層　明褐色土層(7.5YR5/8)焼土層
第5層　にぶい黄褐色土層(10YR4/3)焼土粒子、灰を僅かに含む

第459図　第10号住居址カマド実測図

遺構（第459・460図、図版30）

本住居址は、Ｂ－２グリッドに位置する。第20号住居址、第44・48号掘立柱建物址と重複関係を有し、第20号住居址、第44号掘立柱建物址を切り、第48号掘立柱建物址に切られている。

東西475cm、南北500cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。カマドを中心とする主軸方



層序説明

第１層　暗褐色土層（7.5YR3/4）φ0.1～3.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第２層　暗褐色土層（7.5YR3/3）φ0.5～2.0cmのパミスを含む
第３層　褐色土層（7.5YR4/3）φ0.5～3.0cmのパミスを含む
第４層　褐色土層（7.5YR4/4）φ0.5～1.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第５層　黒褐色土層（7.5YR3/2）φ0.5～2.0cmのパミスを含む

第460図　第10号住居址実測図

位は、N－1°－Eを示す。住居址覆土は、5層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、40～54cmを測る。カマドは、北壁ほぼ中央部に位置するが遺存状態は悪く、僅かに火床部が認められた程度である。ピットは総計4基検出された。このうち、P_1は位置に疑問を残すが、4基とも主柱穴と考えておきたい。なお、周溝は検出されなかった。

遺物（第536・543図、図版96・103）

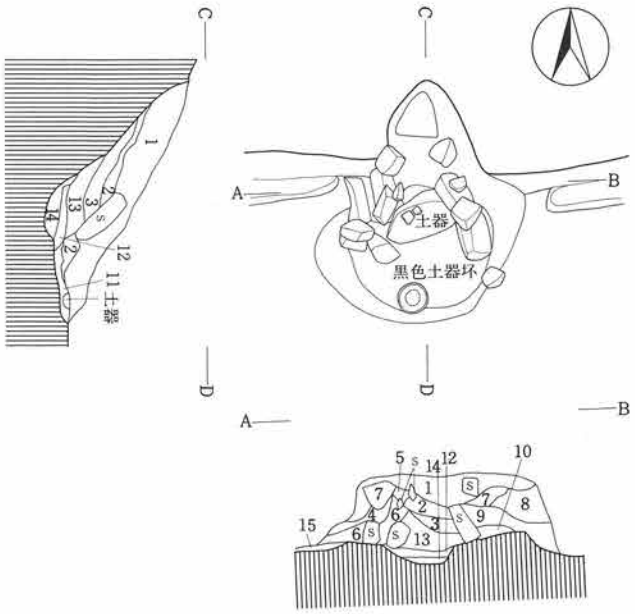
土師器片、黒色土器片、須恵器片、石製品が出土している。このうち、図示したものに須恵器杯・椀、黒曜石製の石鏃がある。第536図5は、須恵器椀の底部を転用硯として用いている。

本住居址の所産期は、奈良時代後葉から平安時代前葉に比定される。

11）第11号住居址

遺構（第461・462図、図版30）

本住居址は、B－2グリッドに位置する。第2・20号住居址と重複関係を有し、第20号住居址を切り、第2号住居址に切られている。東西442cm、南北474cmを測り、平面プランは、隅丸長方形を呈する。カマドを中心とする主軸方位は、磁北を示す。住居址覆土は、2層に区分され、確認面からの壁高は、52～71cmを測る。カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。軽石および第4・6層を主体として構築されていたものと思われる。ピットは主柱穴と考えられる4基が検出された。また、周溝は、東壁下北側からカマド部分を除く北壁下および西壁下にかけて認められた。



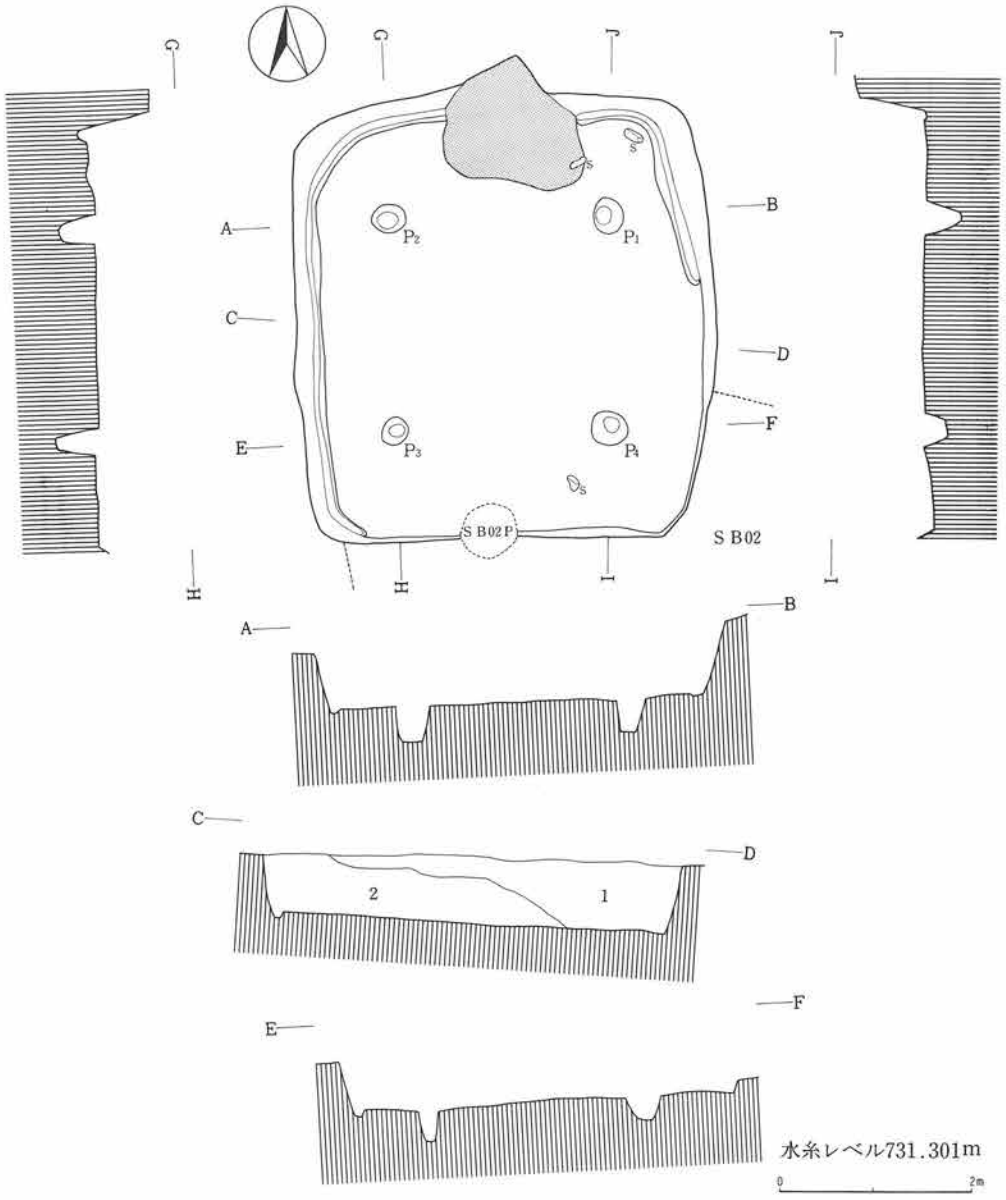
層序説明

第1層	暗褐色土層(7.5YR3/3)粘土粒子、焼土粒子を含む
第2層	にぶい黄褐色土層(10YR5/4)粘土、炭化物を含む
第3層	極暗赤褐色土層(5YR2/3)粘土粒子、焼土を多く含む
第4層	褐色土層(10YR4/4)粘土粒子を多く含む
第5層	暗赤褐色土層(5YR3/6)焼土層
第6層	灰黄褐色土層(10YR4/2)ローム粒子を含む
第7層	暗褐色土層(10YR3/3)粘土粒子、焼土を含む
第8層	にぶい黄褐色土層(10YR4/3)φ0.3cm前後のパミス、ローム粒子、粘土粒子を含む
第9層	暗褐色土層(10YR3/4)φ0.3cm前後のパミス、ローム粒子を僅かに含む
第10層	黒褐色土層(5YR2/2)焼土を多く含む
第11層	褐色土層(7.5YR4/4)焼土層
第12層	にぶい褐色土層(7.5YR5/3)灰層
第13層	黒褐色土層(7.5YR3/2)焼土を含む
第14層	暗赤褐色土層(5YR3/4)焼土を多く含み、炭化物を含む
第15層	暗褐色土層(7.5YR3/4)φ0.1～3.0cmのパミスを含む

第461図　第11号住居址カマド実測図

遺物（第536・537図、図版96・97）

土師器片、黒色土器片、須恵器片のほか、自然遺物として炭化材が北東コーナー付近から出土している。このうち、図示したものに黒色土器杯、須恵器杯・椀、土師器甕がある。なお、炭化材については後述する。本住居址の所産期は、奈良時代後葉に比定される。



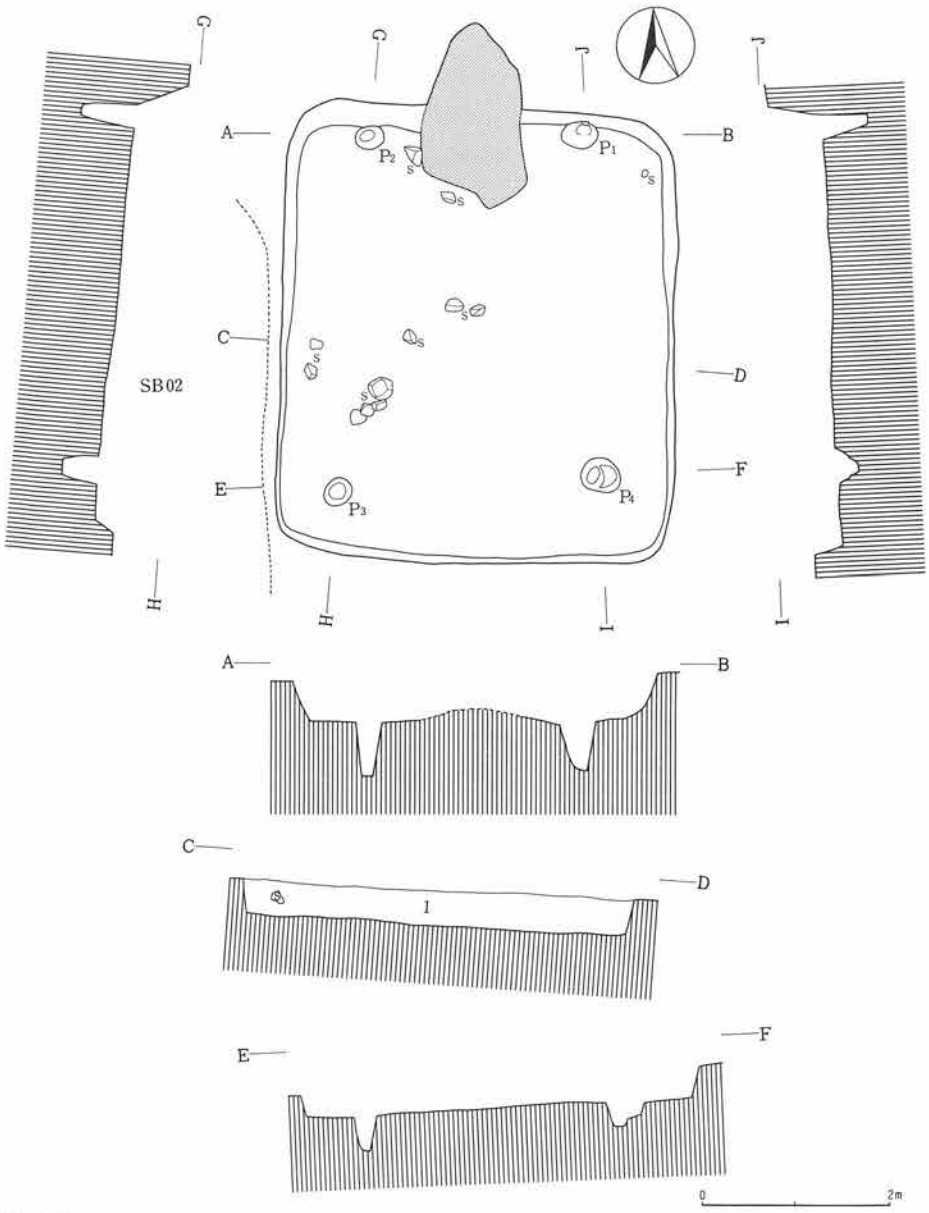
層序説明
第1層　極暗褐色土層(7.5YR2/3)φ0.1～3.0cmのパミスを含み、ローム粒子を僅かに含む
第2層　暗褐色土層(7.5YR3/3)φ0.1～3.0cmのパミスを含む

第462図　第11号住居址実測図

12）第12号住居址

遺構（第463・464図、図版30）

本住居址は、Ｂ－２グリッドに位置する。第13・21号住居址と重複関係を有し、第13・21号住居址を切って構築されている。東西413cm、南北484cmを測り、平面プランは、南北に長い隅丸長方形を呈する。カマドを中心とする主軸方位は、Ｎ－４°－Ｅを示す。住居址覆土は、黒褐色土層



層序説明
第１層　黒褐色土層(10YR2/3)φ0.2～3.0cmのパミスを僅かに含む

水糸レベル731.301m

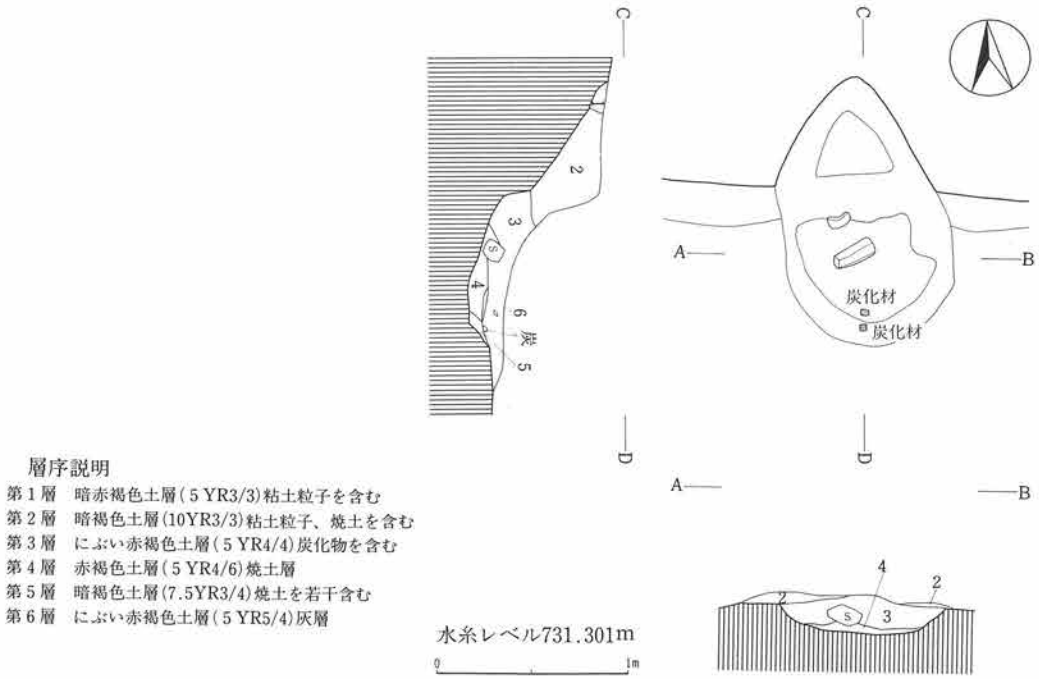
第463図　第12号住居址実測図

1層である。確認面からの壁高は、20～56cmを測る。カマドは、北壁ほぼ中央部に位置するが遺存状態は悪い。ピットは主柱穴と考えられる4基が検出された。なお、周溝は、検出されなかった。

遺物（第537図、図版97）

土師器片、黒色土器片、須恵器片のほか、自然遺物として炭化材が出土している。このうち、図示したものに須恵器蓋・杯・長頸壺、土師器甕がある。なお、炭化材については後述する。

本住居址の所産期は、奈良時代後葉に比定される。

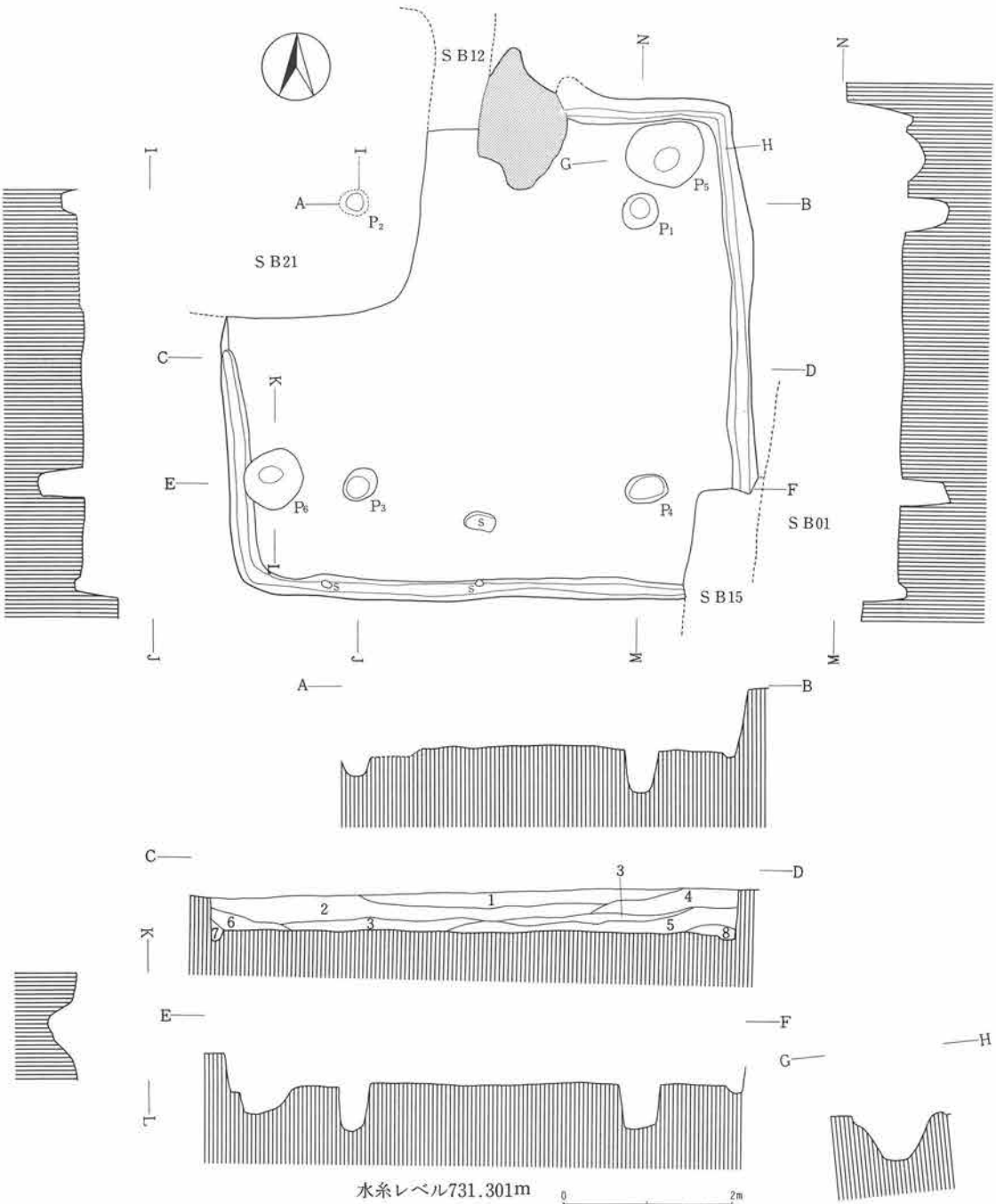


第464図　第12号住居址カマド実測図

13）第13号住居址

遺構（第465・466図、図版31）

本住居址は、B・C－2グリッドに位置し、第12・15・21号住居址と重複関係を有し、第12・15・21号住居址に切られている。東西627cm、南北604cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。カマドを中心とする主軸方位は、N－1°－Wを示す。住居址覆土は、8層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、39～74cmを測る。カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。地山を掘り残し、袖芯とし、加工した軽石および橙色（2.5YR6/6）土を主体として構築されていた。ピットは総計6基検出された。このうち、P_1～P_4が主柱穴、P_5が貯蔵穴と考えられ



層序説明

第1層　暗褐色土層（10YR3/3）φ0.3～1.0cmのパミスを僅かに含み、締っている
第2層　褐色土層（10YR4/4）φ0.3～1.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第3層　黒褐色土層（10YR2/2）φ0.3～1.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第4層　暗褐色土層（10YR3/4）φ0.1～0.5cmのパミス、ローム粒子を含む
第5層　黒褐色土層（10YR3/2）φ0.1～1.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第6層　黒褐色土層（10YR2/3）φ0.1～0.7cmのパミス、ローム粒子を含む
第7層　褐色土層（10YR4/6）φ0.1～3.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第8層　褐色土層（7.5YR4/3）φ0.1～3.0cmのパミス、ローム粒子を含む

第465図　第13号住居址実測図

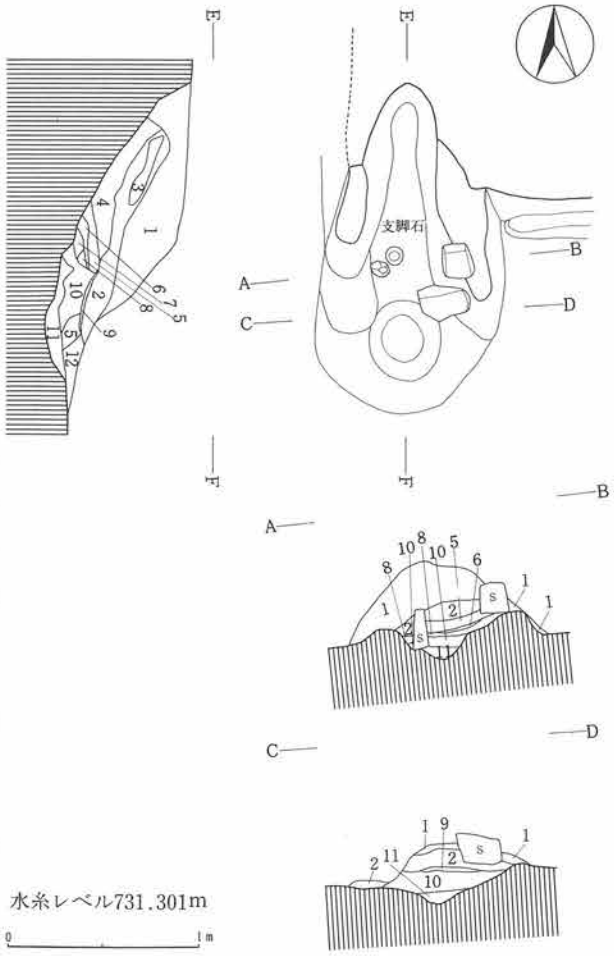
る。また、周溝は、残存部から推して全周していたものと思われる。

遺物（第537・538・543図、図版97・98・103）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、石製品、土製品のほか、自然遺物として炭化材がカマド内から出土している。このうち、図示したものに土師器杯・高杯・鉢・台付甕・甕、石製品、土製品がある。

石製品は、滑石製臼玉、土製品は丸玉である。なお、炭化材については後述する。

本住居址の所産期は、古墳時代後期中葉に比定される。



層序説明

第１層　にぶい黄褐色土層(10YR4/3)φ0.5～1.0cmのパミス、粘土粒子を含む
第２層　橙色土層(2.5YR6/6)φ0.3cm前後のパミスを僅かに含み、粘土粒子を多く含む
第３層　にぶい黄橙色土層(10YR6/4)φ0.1～0.5cmのパミスを僅かに含み、粘土粒子を多く含む
第４層　褐色土層(7.5YR4/4)ローム粒子、粘土粒子を含む
第５層　にぶい赤褐色土層(2.5YR5/3)灰層
第６層　橙色土層(５YR6/6)粘土粒子、焼土粒子を含む
第７層　暗褐色土層(10YR3/3)炭化物、灰を多く含む
第８層　明赤褐色土層(５YR5/8)粘土粒子、焼土、灰を含む
第９層　黒色土層(N1.5/)炭化物を多く含む
第10層　灰白色土層(7.5YR8/2)灰層
第11層　赤褐色土層(５YR4/8)焼土層
第12層　極暗褐色土層(7.5YR2/3)粘土粒子、焼土、炭化物、灰を含む

第466図　第13号住居址カマド実測図

14）第14号住居址

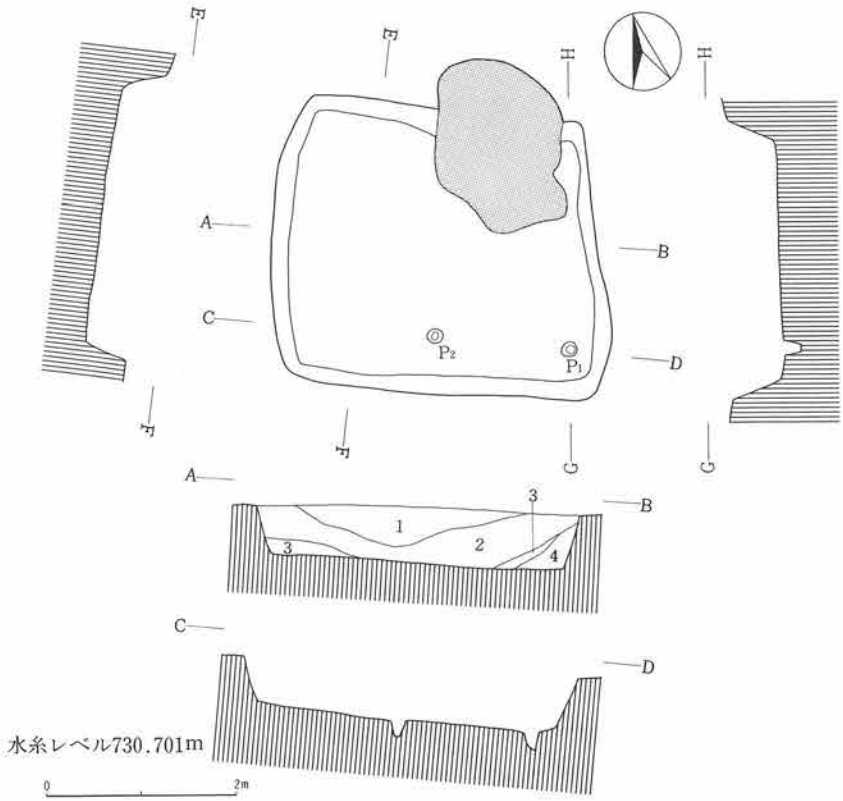
遺構（第467・468図、図版31）

本住居址は、Ｂ－３グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。東西350cm、南北305cm

を測り、平面プランは、東西にやや長い隅丸長方形を呈する。カマドを中心とする主軸方位は、N－12°－Eを示す。住居址覆土は、4層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、43～57cmを測る。カマドは、北壁東部に位置する。地山を掘り残し、袖芯とし、明黄褐色(10YR6/6)土を主体として構築されていたものと思われる。ピットは2基検出されたが、主柱穴は明確でない。P_2は、出入口部の施設に関連するものかもしれない。なお、周溝は検出されなかった。

遺物（第538図、図版98）

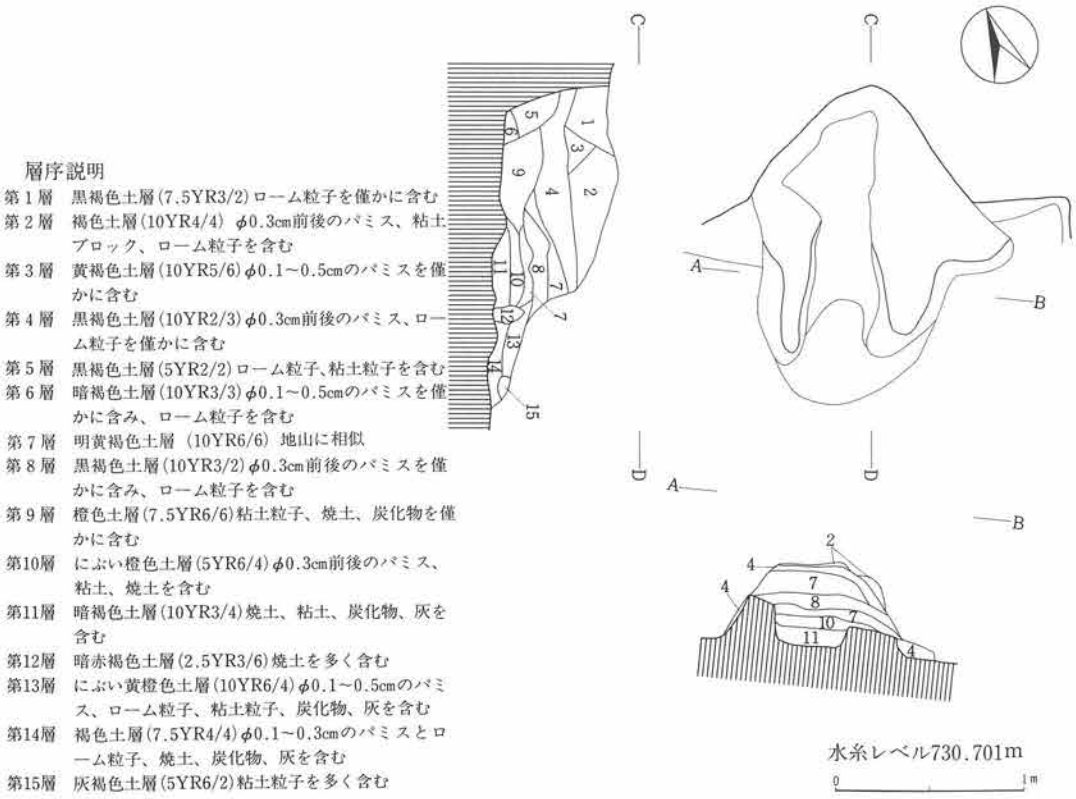
土師器片、黒色土器片、須恵器片のほか、自然遺物として炭化材が出土している。このうち、図示したものに土師器無頸壺・甕がある。土師器無頸壺（第538図1）は、復原後略完形となったもので、算盤玉状の胴部と丸底気味の底部を有する。土師器甕（第538図2）は、口辺部から肩部において部分的にハケメが認められるが、他は細かいヘラナデである。なお、炭化材については後述する。本住居址の所産期は、古墳時代後期中葉に比定される。



層序説明

第1層　黒褐色土層（7.5YR3/2）φ0.5～3.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第2層　黒褐色土層（7.5YR2/2）φ0.5～3.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第3層　黒色土層(7.5YR1.7/1)φ0.5cm前後のパミスを少々含む
第4層　暗褐色土層(7.5YR3/3)φ1.0cm前後のパミスを僅かに含み、ローム粒子を含む

第467図　第14号住居址実測図



第468図　第14号住居址カマド実測図

15）第15号住居址

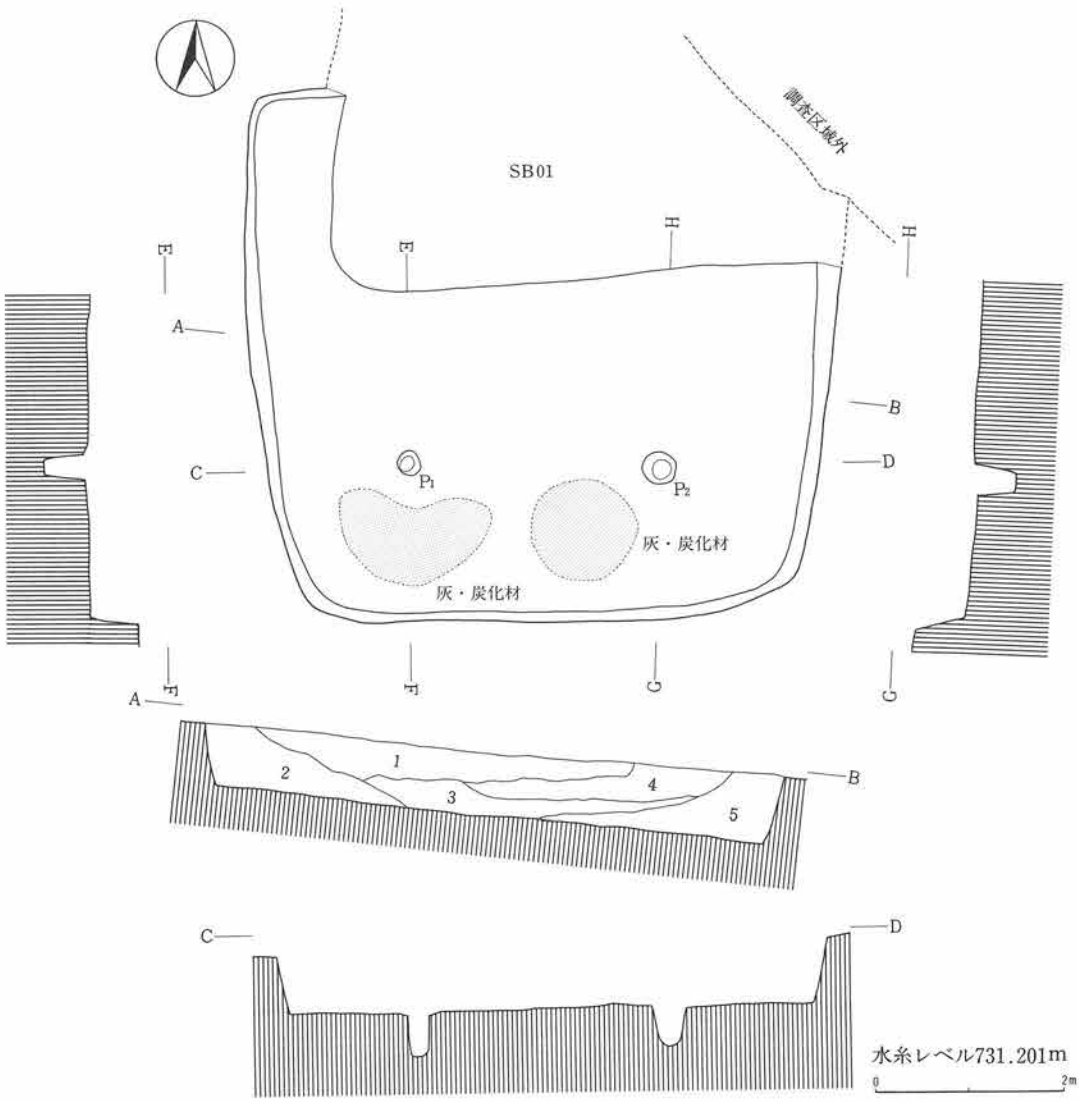
遺構（第469図、図版31）

本住居址は、C－2グリッドに位置する。第1・13号住居址と重複関係を有し、第13号住居址を切り、第1号住居址に切られている。東西611cm、南北570cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。住居址覆土は、5層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、51～72cmを測る。南北軸の方位は、磁北を示す。カマドは、北壁部に設置されていたものと思われるが、第1号住居址に切られているため、不明である。ピットは主柱穴と考えられる2基が検出された。なお、周溝は、認められなかった。また、本住居址は焼失住居と考えられ、南部で灰、炭化材が認められた。

遺物

土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土しているが、図示し得るものはない。なお、住居址南部出土の炭化材については後述する。

本住居址の所産期は、出土土器片および重複関係から奈良時代に比定される。



層序説明
第1層　黒褐色土層（7.5YR2/2）φ0.5～2.0cmのパミスを含む
第2層　暗褐色土層（7.5YR3/3）φ0.5～3.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第3層　黒褐色土層（7.5YR3/2）φ0.5～2.0cmのパミスを含む
第4層　暗褐色土層（7.5YR3/4）φ0.5～1.0cmのパミスを含む
第5層　極暗褐色土層（7.5YR2/3）φ0.5～1.0cmのパミス、ローム粒子を含む

第469図　第15号住居址実測図

16）第16号住居址

遺構（第470図、図版31）

本住居址は、B－2グリッドに位置する。第5号住居址と重複関係を有し、第5号住居址を切って構築されている。東西・南北とも調査し得た範囲で、それぞれ、271cm、170cmを測る。

南北軸の方位は、N－14°－Eを示す。住居址覆土は、暗褐色土層1層で、確認面からの壁高

は、39～42cmを測る。ピットは総計2基検出された。

主柱穴は、このうちP_1を、考えておきたい。

なお、周溝は、検出されなかった。

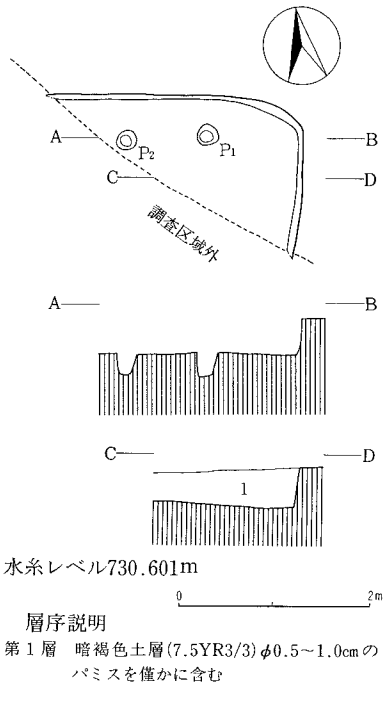
遺物（第538・542図、図版98・102）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、鉄製品が出土している。このうち、図示したものに須恵器杯、鉄製品がある。このほか、図示し得なかったが、「コ」の字状を呈する口辺部の土師器甕の破片が認められた。

須恵器杯（第538図1）は、底部糸切り未調整のものである。

鉄製品（第542図16）は、鉄鏃と考えられる。

本住居址の所産期は、奈良時代後葉から平安時代前葉に比定される。



第470図　第16号住居址実測図

17）第17号住居址

遺構（第471図、図版31）

本住居址は、C－3グリッドに位置する。第18・30号住居址と重複関係を有し、第18・30号住居址を切って構築されている。東西・南北とも調査し得た範囲で、それぞれ、405cm、517cmを測り、平面プランは、おそらく、南北に長い隅丸長方形を呈するものと思われる。

南北軸の方位は、N－4°－Eを示す。住居址覆土は、2層に区分され、確認面からの壁高は、25～38cmを測る。カマドは、北壁部に設置されていたものと思われ、調査し得た範囲内では認められなかった。ピットは総計4基検出された。このうちP_1～P_3の3基が主柱穴と考えられる。

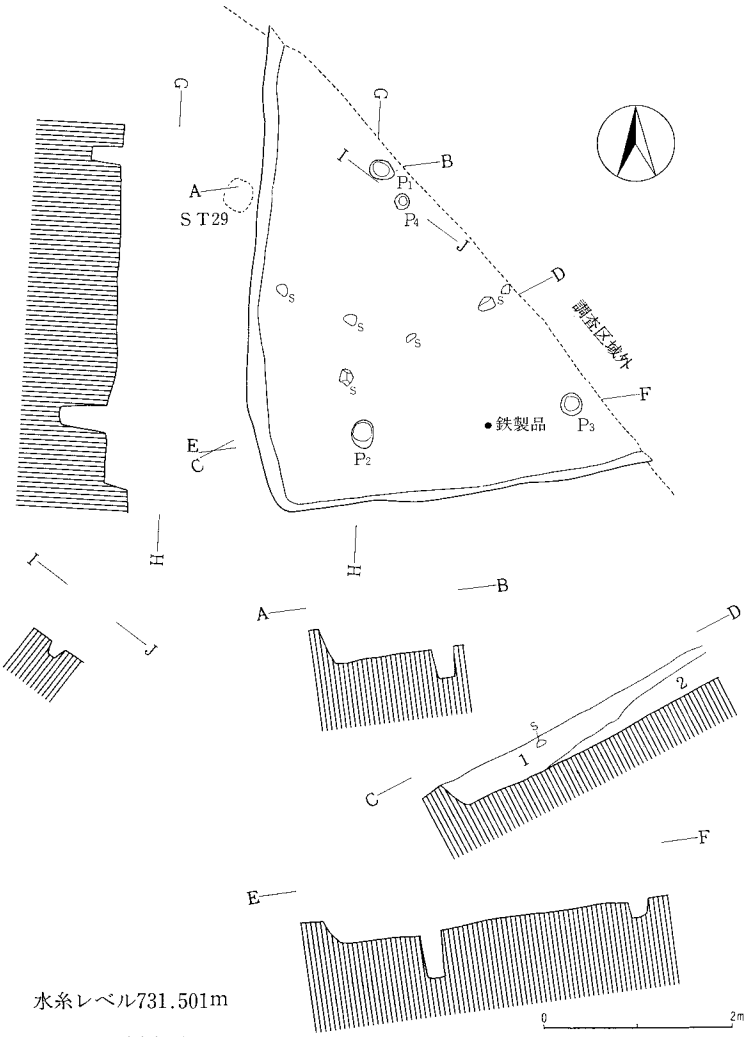
なお、周溝は、検出されなかった。

遺物（第538・542・544図、図版98・102・104）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、灰釉陶器片、鉄製品、石製品、鉄滓が出土している。このうち、図示したものに黒色土器杯・椀、鉄製品、石製品がある。黒色土器杯には、墨書土器2点（第538図4・5）があるが、文字は不明である。

鉄製品（第542図）には、紡錘車の紡軸（17）、工具と考えられるもの（18）、鉄鏃（19・20）がある。石製品（第544図5）は、石臼である。

本住居址の所産期は、平安時代に比定される。



層序説明
第1層　暗褐色土層(7.5YR3/3)φ0.5～3.0cmのパミスを僅かに含む
第2層　極暗褐色土層(7.5YR2/3)φ0.5～3.0cmのパミスを僅かに含む

第471図　第17号住居址実測図

18）第18号住居址

遺構（第472・473図、図版31）

本住居址は、C－3グリッドに位置する。第17号住居址と重複関係を有し、第17号住居址に切られている。東西475cm、南北305cmを測り、平面プランは、東西に長い隅丸長方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、N－10°－Wを示す。住居址覆土は、10層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、42～60cmを測る。カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。

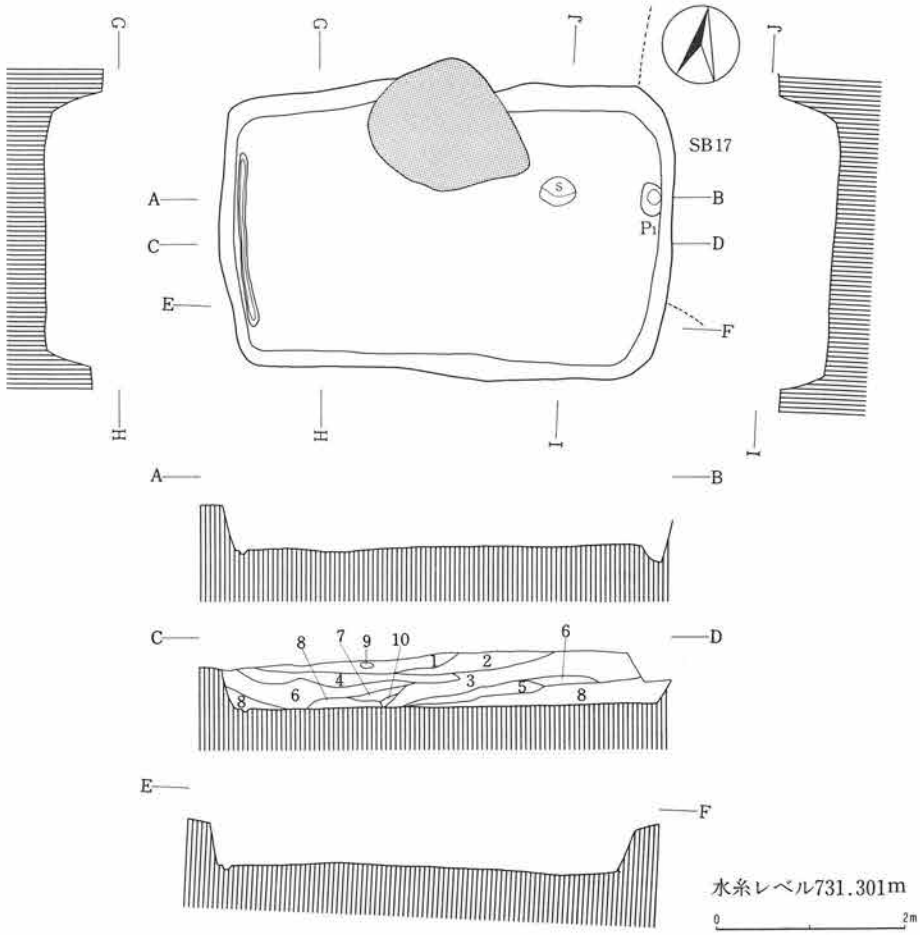
地山を掘り残して、袖芯とし、第2・3層を用いて構築されていた。ピットは主柱穴と考えられる1基が東壁下で検出された。周溝は、西壁下で認められた。

遺物（第539図、図版99）

土師器片、黒色土器片、須恵器片のほか、自然遺物として炭化材がカマド内から出土している。

このうち、図示したものに土師器甑・甕がある。土師器甑（第539図１）は、復原後略完形となったもので、一対の把手を有する。また、胴下半部には焼成前の穿孔が２個所に施される。

おそらく、底部に置く敷物用の受けであろう。同様の例は、先述した竹花遺跡第84号住居址出土の甑（第354図４）にも認められる。



層序説明

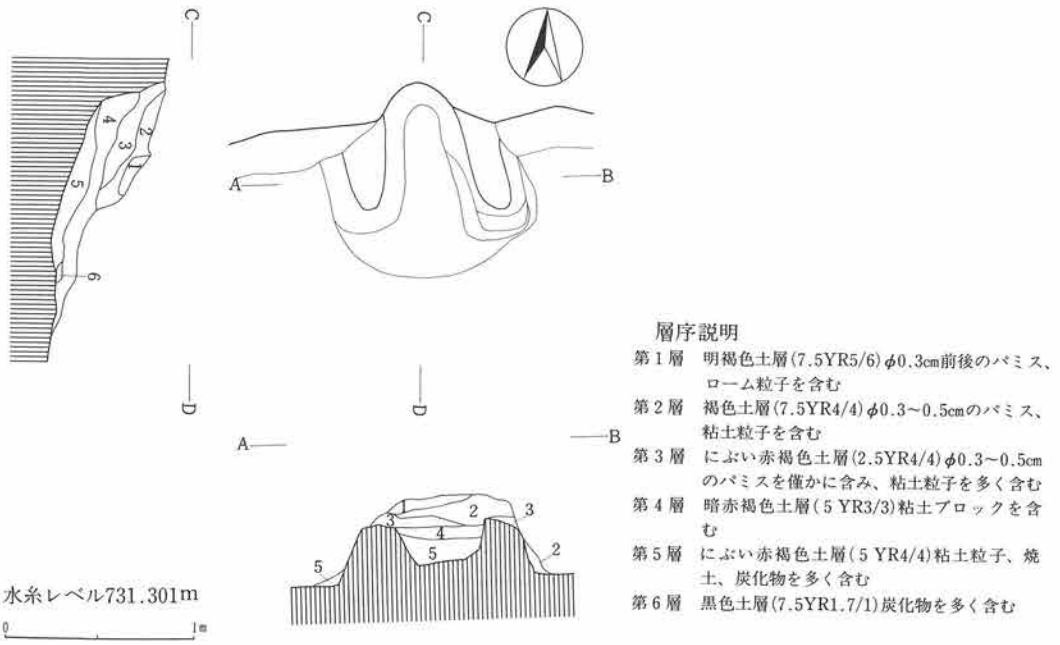
第１層　暗褐色土層（10YR3/4）φ0.3～2.5cmのパミス、ローム粒子を含み、締っている
第２層　黒褐色土層（10YR3/2）φ0.1～1.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第３層　暗褐色土層（7.5YR3/4）φ0.1～1.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第４層　にぶい黄橙色土層（10YR6/4）φ0.3～3.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第５層　明黄褐色土層（10YR6/6）φ0.5～1.0cmのパミスを含む。地山に近似
第６層　黒褐色土層（10YR2/3）φ0.1～4.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第７層　明褐色土層（7.5YR5/6）φ0.2～1.0cmのパミスを含む
第８層　暗褐色土層（10YR3/3）φ0.1～2.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第９層　にぶい赤褐色土層（2.5YR4/4）φ0.2～0.5cmのパミスを僅かに含む
第10層　にぶい赤褐色土層（2.5YR5/4）φ0.1～1.0cmのパミスを僅かに含む

第472図　第18号住居址実測図

土師器甕（第539図２）は、口辺部～胴上部の約1/2が残存している。肩部～胴部外面はヘラケズリ後ヘラミガキがなされる。球形胴を呈する甕である。

なお、カマド内出土の炭化材については、後述する。

本住居址の所産期は、古墳時代後期中葉に比定される。



層序説明

第１層　明褐色土層(7.5YR5/6)φ0.3cm前後のパミス、ローム粒子を含む
第２層　褐色土層(7.5YR4/4)φ0.3～0.5cmのパミス、粘土粒子を含む
第３層　にぶい赤褐色土層(2.5YR4/4)φ0.3～0.5cmのパミスを僅かに含み、粘土粒子を多く含む
第４層　暗赤褐色土層(５YR3/3)粘土ブロックを含む
第５層　にぶい赤褐色土層(５YR4/4)粘土粒子、焼土、炭化物を多く含む
第６層　黒色土層(7.5YR1.7/1)炭化物を多く含む

第473図　第18号住居址カマド実測図

19）第19号住居址

遺構（第474・475図、図版31）

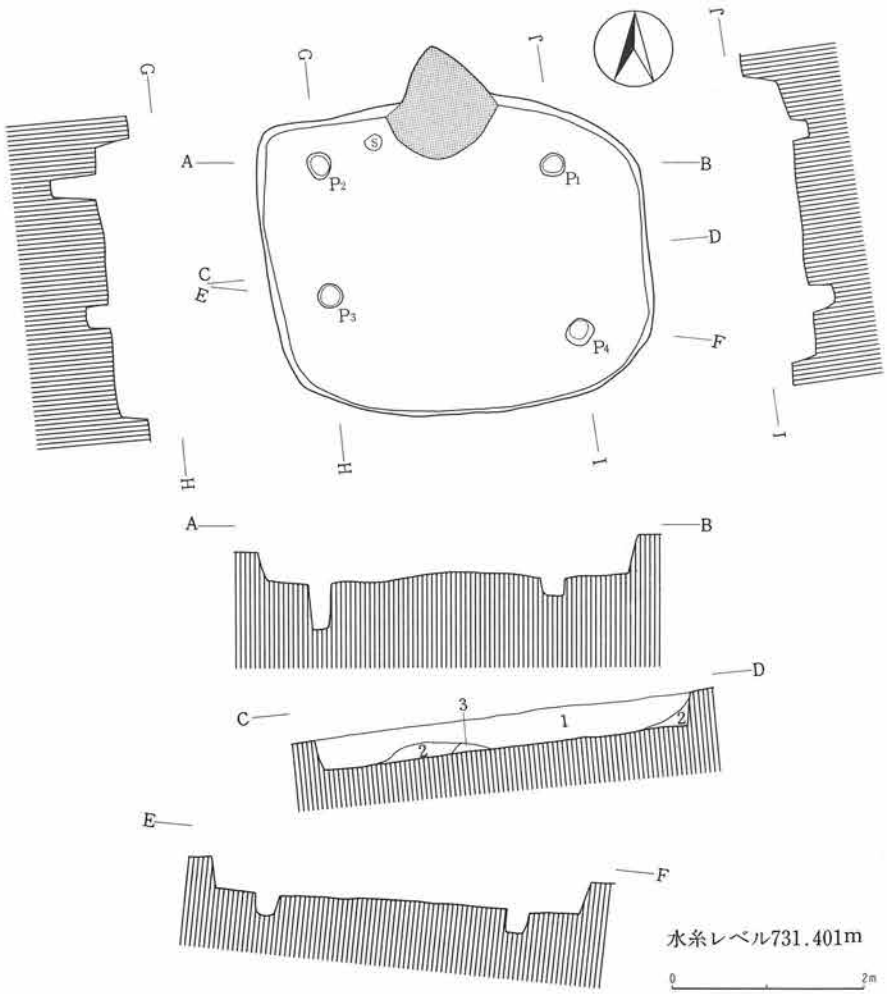
本住居址は、Ｄ－３グリッドに位置する。第23号住居址と重複関係を有し、第23号住居址を切って構築されている。東西400cm、南北333cmを測り、平面プランは、東西に長い隅丸長方形を呈する。カマドを中心とする主軸方位は、Ｎ－1.5°－Ｗを示す。住居址覆土は、３層に区分され、確認面からの壁高は、27～41cmを測る。カマドは、北壁ほぼ中央部に位置するが遺存状態は悪い。

ピットは主柱穴と考えられる４基が検出された。なお、周溝は、検出されなかった。

遺物（第539図、図版99）

土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土している。このうち、図示したものに黒色土器杯、須恵器杯・椀、土師器甕がある。須恵器杯は２点とも、底部糸切り未調整である。また、須恵器椀は、第27号住居址出土土器片との接合資料である。

本住居址の所産期は、奈良時代後葉に比定される。



層序説明
第1層　暗褐色土層(7.5YR3/3)φ0.5～2.0cmのパミスを僅かに含む
第2層　褐色土層(7.5YR4/4)φ0.5cm前後のパミスを僅かに含む
第3層　黒褐色土層(7.5YR2/2)φ0.3～5.0cmのパミスを僅かに含む

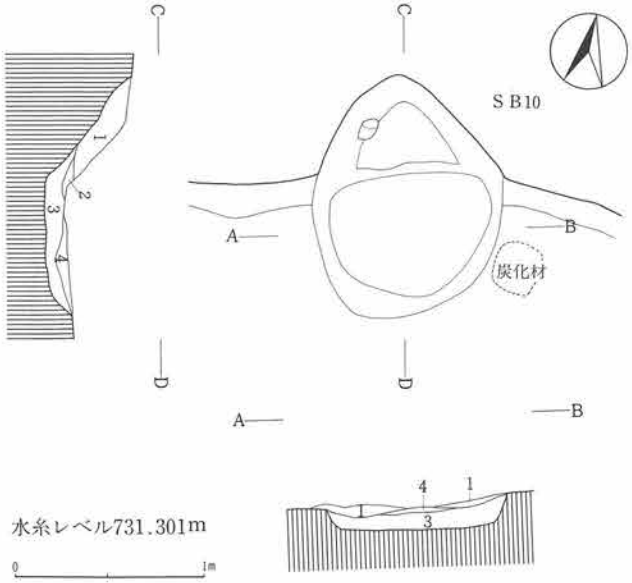
第474図　第19号住居址実測図

20）第20号住居址

遺構（第476・477図、図版31）

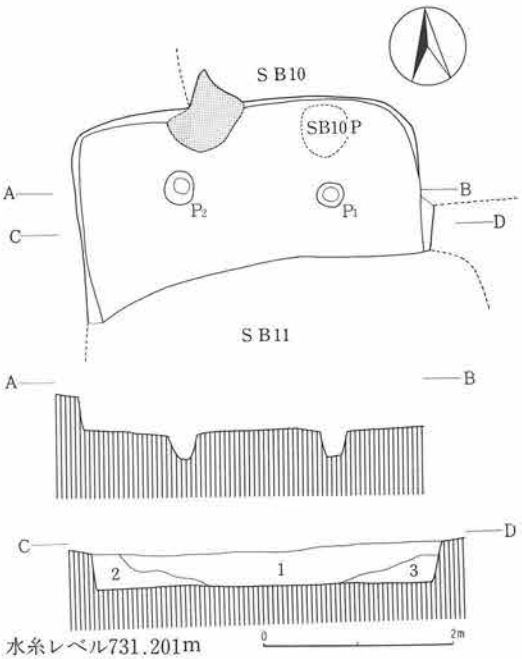
本住居址は、B－2グリッドに位置する。第10・11号住居址と重複関係を有し、第10・11号住居址に切られている。東西365cm、南北219cmを測り、平面プランは、おそらく、隅丸方形を呈するものと思われる。カマドを中心とする主軸方位は、N－1°－Wを示す。住居址覆土は、3層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、36～42cmを測る。

カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。第10号住居址に切られていることもあり、遺存状態は悪い。ピットは主柱穴と考えられる2基が検出された。なお、周溝は認められなかった。



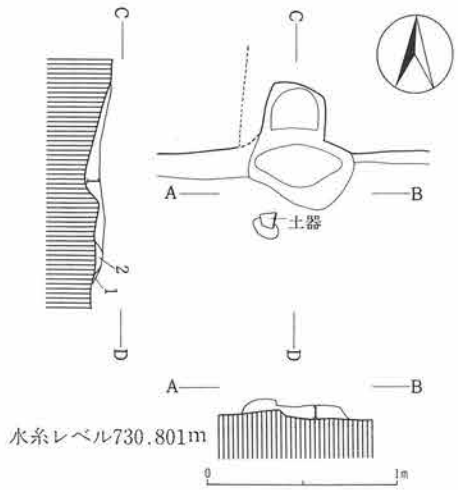
層序説明
第１層　暗褐色土層(10YR3/3)φ0.1～1.0cmのパミスを僅かに含む
第２層　にぶい赤褐色土層(5YR5/4)粘土粒子、焼土粒子、灰を含む
第３層　褐色土層(10YR4/4)粘土粒子、焼土粒子、炭化物を含む
第４層　暗褐色土層(10YR3/4)焼土、炭化物を僅かに含む

第475図　第19号住居址カマド実測図



層序説明
第１層　黒色土層(7.5YR2/1)φ0.1～2.0cmのパミスを含む
第２層　褐色土層(7.5YR4/4)φ0.5～1.0cmパミスを僅かに含む
第３層　暗褐色土層(7.5YR3/4)φ0.1～3.0cmのパミスを僅かに含む

第476図　第20号住居址実測図



層序説明
第１層　にぶい赤褐色土層（５YR4/4）粘土粒子、焼土粒子を含む
第２層　にぶい橙色土層（５YR6/4）粘土粒子を含む

第477図　第20号住居址カマド実測図

遺物

土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土しているが、図示し得るものは皆無である。本住居址

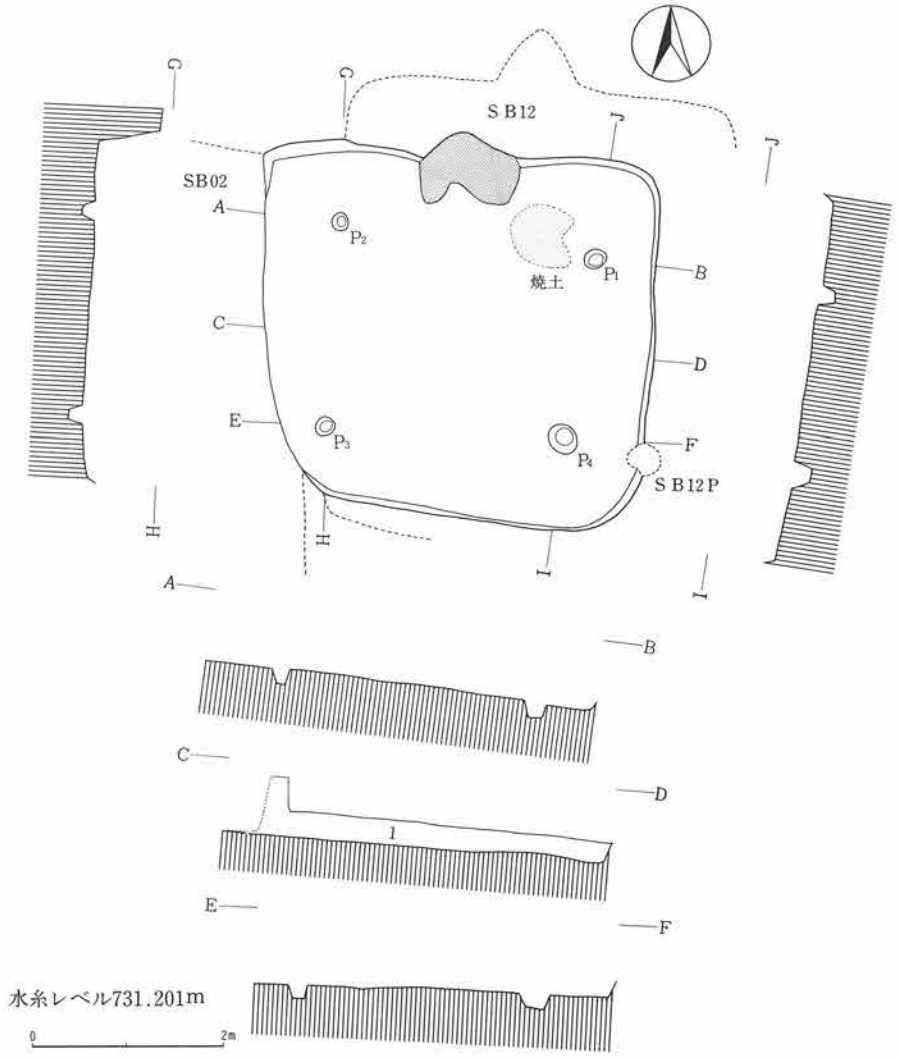
の所産期は、出土土器片および重複関係から奈良時代中葉に比定される。

21）第21号住居址

遺構（第478・479図、図版32）

本住居址は、Ｂ－２グリッドに位置する。第２・12号住居址と重複関係を有し、第２・12号住居址に切られている。東西415cm、南北396cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、Ｎ－９°－Ｅを示す。住居址覆土は、極暗褐色土層１層である。確認面からの壁高は、63～64cmを測る。カマドは、北壁ほぼ中央部に位置するが遺存状態は



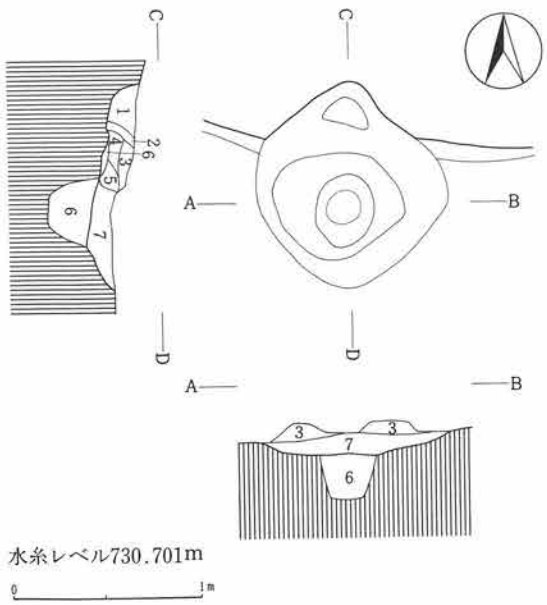
層序説明
第１層　極暗褐色土層（7.5YR2/3）φ0.5～4.0cmのパミス、ローム粒子を含む

第478図　第21号住居址実測図

悪い。ピットは主柱穴と考えられる4基が検出された。なお、周溝は、認められなかった。

遺物

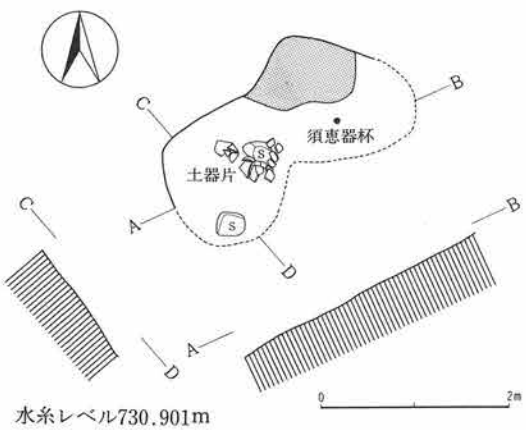
土師器片、黒色土器片、須恵器片のほか、自然遺物として炭化材がカマド内から出土しているが、図示し得るものは皆無である。なお、炭化材については後述する。本住居址の所産期は、出土土器片中に底部へラキリ後手持ちへラケズリされる須恵器杯の破片が認められることから奈良時代中葉に比定される。



層序説明

第1層　褐色土層(10YR4/4)ローム粒子、粘土粒子を僅かに含む
第2層　にぶい黄褐色土層(10YR5/4)ローム粒子を含む
第3層　にぶい赤褐色土層(5YR5/4)粘土粒子、焼土粒子を含む
第4層　赤褐色土層(5YR4/6)焼土、炭化物、灰を含む
第5層　明褐色土層(7.5YR5/8)焼土層
第6層　暗褐色土層(7.5YR3/4)φ0.1～1.0cmのパミス、ローム粒子を含む。埋土
第7層　暗褐色土層(7.5YR3/3)粘土粒子、焼土粒子を含む

第479図　第21号住居址カマド実測図



第480図　第22号住居址実測図

22）第22号住居址

遺構（第480・481図、図版32）

本住居址は、D－3・4グリッドに位置する。

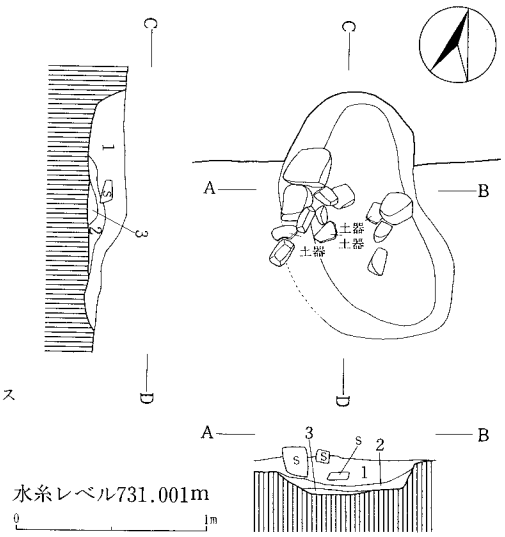
他遺構との重複関係はない。

大半は残存しておらず、調査し得たのは東西278cm、南北140cmの範囲である。

カマドを中心とする主軸方位は、N－22°－Wを示す。カマドは、北壁ほぼ中央部に位置すると思われる。加工した軽石のほか安山岩を用いて構築されていたものと考えられる。なお、ピット、周溝は確認されなかった。

遺物（第539・540・545図、図版99・100・105）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、縄文土器片が出土している。このうち、図示したものに須恵器杯・甕・横瓶、土師器甕、縄文土器片がある。縄文土器片は、前期の所産であろう。本住居址の所産期は奈良時代後葉に比定される。



層序説明
第1層　暗褐色土層(10YR3/3)ローム粒子を多く含み、φ0.5cm前後のパミスを僅かに含む
第2層　褐色土層(10YR4/4)粘土粒子を含み、ローム粒子を僅かに含む
第3層　明褐色土層(7.5YR5/6)焼土粒子を多く含む

第481図　第22号住居址カマド実測図

23）第23号住居址

遺構（第482図、図版32）

本住居址は、D－3グリッドに位置する。第19・27号住居址と重複関係を有し、第27号住居址を切り、第19号住居址に切られている。東西306cm、南北は残存部で244cmを測る。

南北軸の方位は、N－4°－Wを示す。住居址覆土は、3層に区分され、自然堆積と考えられる。

確認面からの壁高は、28～43cmを測る。なお、カマド、ピット、周溝等の施設は検出されなかった。

遺物

土師器片、黒色土器片が出土しているが、量は少なく、図示し得るものも皆無である。

本住居址の所産期は、不明確ではあるが、一応、奈良時代と考えておきたい。

24）第24号住居址

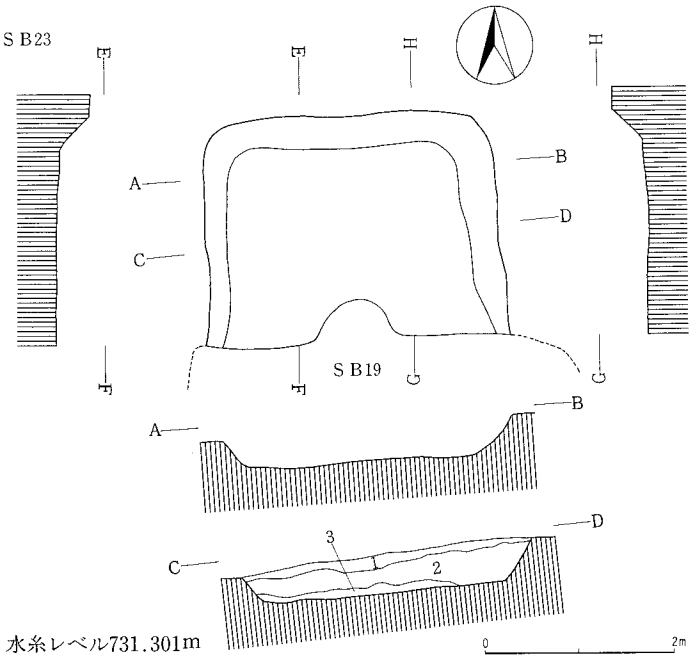
遺構（第482図、図版32）

本住居址は、D－3グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。大半が調査区域外にかかり、調査し得たのは、東西368cm、南北232cmの範囲である。南北軸の方位は、N－6°－Eを示す。住居址覆土は、3層に区分され、確認面からの壁高は、27～34cmを測る。

ピットは主柱穴と考えられる1基が検出された。なお、周溝は、検出されなかった。

遺物

土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土しているが、量は少なく、図示し得るものは皆無である。本住居址の所産期は、出土土器片から平安時代前葉に比定される。

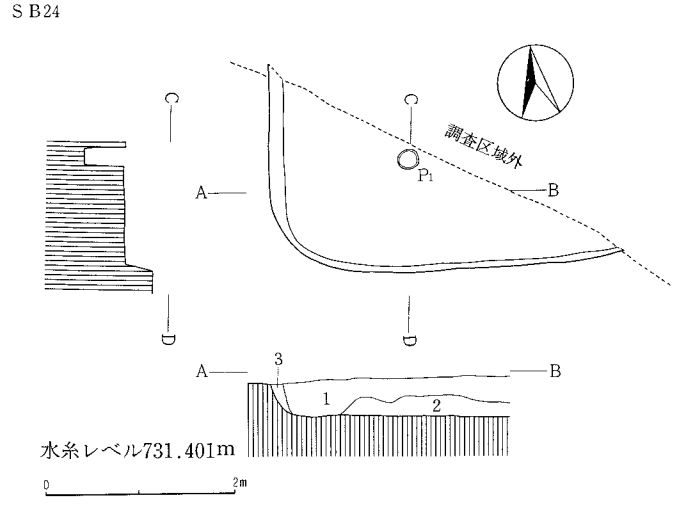


層序説明

第1層　褐色土層(7.5YR4/3)φ0.5~1.0cmのパミスを僅かに含み、締っている

第2層　暗褐色土層(7.5YR3/3)φ1.5cm前後のパミスを僅かに含む

第3層　褐色土層(7.5YR4/4)φ1.0cm前後のパミスを僅かに含む



層序説明

第1層　黒褐色土層(7.5YR3/2)φ0.5cm前後のパミスを僅かに含む

第2層　暗褐色土層(7.5YR3/4)φ0.1~0.5cmのパミス、ローム粒子を含む

第3層　褐色土層(7.5YR4/6)φ0.5cm前後のパミス、ローム粒子を含む

第482図　第23・24号住居址実測図

25）第25号住居址

遺構（第483図、図版32）

本住居址は、B－2グリッドに位置する。第9号住居址、第48・49号掘立柱建物址と重複関係

を有し、第49号掘立柱建物址を切り、第９号住居址、第48号掘立柱建物址に切られている。

東西308cm、南北403cmを測り、平面プランは、南北に長い隅丸長方形を呈する。

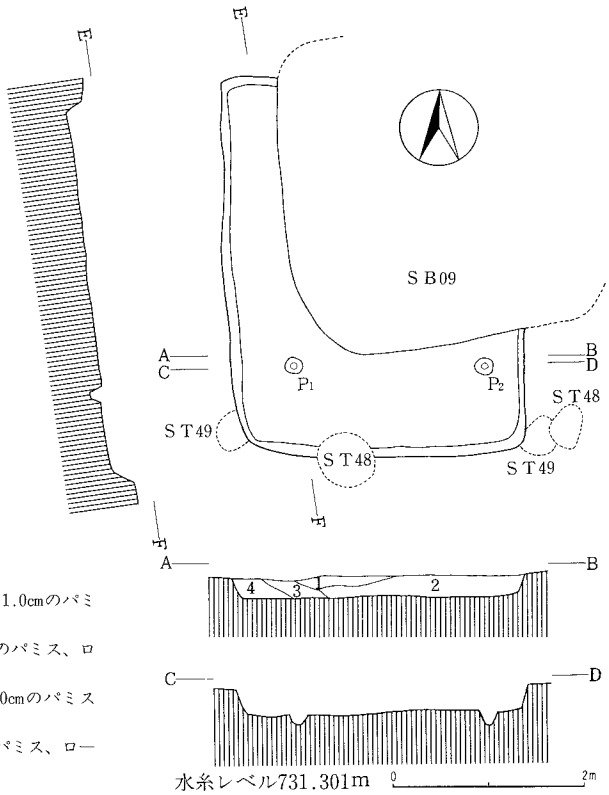
南北軸の方位は、Ｎ－１°－Ｗを示す。住居址覆土は、４層に区分され、自然堆積と考えられる。

確認面からの壁高は、17～24cmを測る。ピットは主柱穴と考えられる２基が検出された。

なお、周溝は、検出されなかった。

遺物

土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土しているが、図示し得るものは皆無である。本住居址の所産期は、出土土器片および重複関係から、一応、奈良時代と考えておきたい。



層序説明

第１層　にぶい黄褐色土層(10YR5/4)φ0.2～1.0cmのパミス、ローム粒子を多く含む

第２層　暗褐色土層(10YR3/3)φ0.1～3.0cmのパミス、ローム粒子を僅かに含む

第３層　極暗褐色土層(7.5YR2/3)φ0.5～2.0cmのパミスを僅かに含む

第４層　褐色土層(10YR4/4)φ0.3～2.5cmのパミス、ローム粒子を多く含む

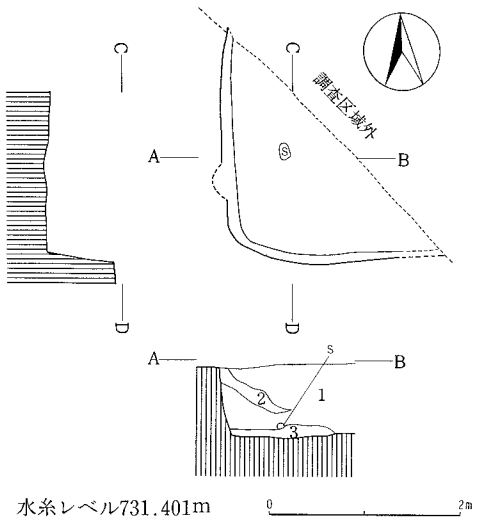
第483図　第25号住居址実測図

26）第26号住居址

遺構（第484図、図版32）

本住居址は、Ｃ－３グリッドに位置する。第27～29号掘立柱建物址と重複関係を有し、第28号掘立柱建物址を切り、第27・29号掘立柱建物址に切られている。大半が調査区域外にかかり、調査し得たのは、東西224cm、南北256cmの範囲である。南北軸の方位は、Ｎ－１°－Ｗを示す。

住居址覆土は、３層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、72cm前後を測る。なお、ピット、周溝は、検出されなかった。



遺物

土師器片、須恵器片が出土しているが、４点と少なく、図示し得るものは皆無である。

本住居址の所産期は、不明確ながら、一応、奈良時代と考えておきたい。

層序説明
第１層　褐色土層（7.5YR4/3）φ0.5～2.0cmのパミスを僅かに含む
第２層　黒色土層（7.5YR2/1）φ0.5～1.0cmのパミスを含む
第３層　暗褐色土層（7.5YR3/4）φ0.5～2.0cmのパミスを僅かに含む

第484図　第26号住居址実測図

27）第27号住居址

遺構（第485図、図版32）

本住居址は、Ｄ－３グリッドに位置する。第23号住居址、第１号溝址と重複関係を有し、第23号住居址、第１号溝址に切られている。大半が調査区域外にかかり、調査し得たのは、東西306cm、南北228cmの範囲である。南北軸の方位は、Ｎ－２°－Ｗを示す。住居址覆土は、２層に区分され、確認面からの壁高は、44～55cmを測る。なお、ピット、周溝は、検出されなかった。

遺物

土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土しているが、図示し得るものは皆無である。本住居址の所産期は、出土土器片および重複関係から、一応、奈良時代と考えておきたい。

28）第28号住居址

遺構（第485図、図版32）

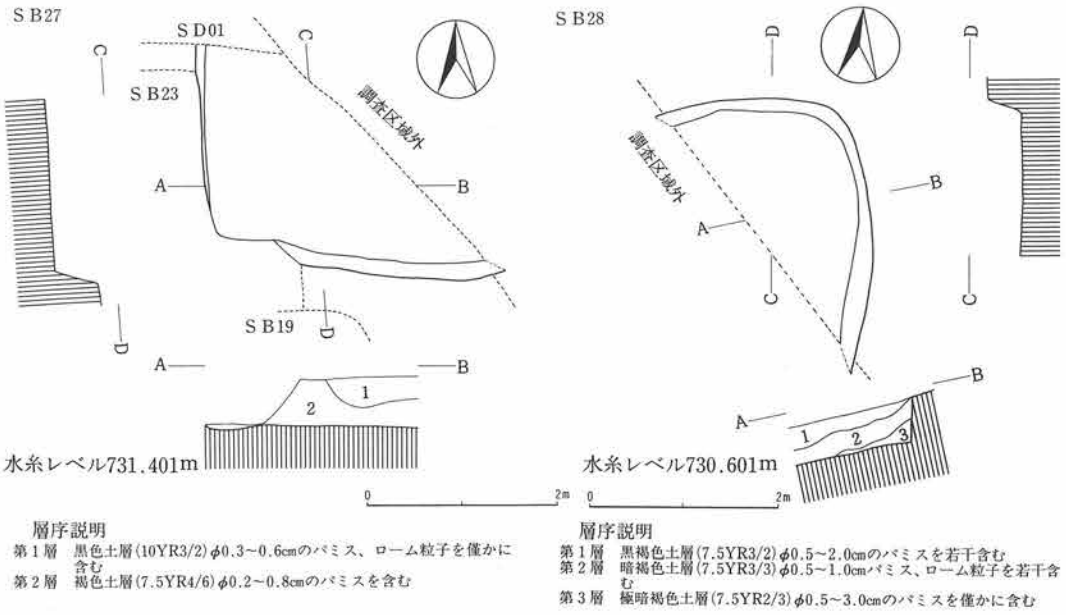
本住居址は、Ｃ－３グリッドに位置する。第29号住居址と重複関係を有し、第29号住居址を切って構築されている。大半が調査区域外にかかり、調査し得たのは、東西210cm、南北294cmの範囲である。南北軸の方位は、Ｎ－10°－Ｗを示す。住居址覆土は、３層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、36～47cmを測る。なお、ピット、周溝は、検出されなかった。

遺物（第540図、図版100）

土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土している。このうち、図示したものに土師器杯、須恵器杯がある。土師器杯（第540図１）は、畿内系暗文を有するもので、飛鳥Ⅱ期に比定される。

須恵器杯（第540図２）は、底部糸切り未調整のもので混入品の可能性が強い。

本住居址の所産期は、古墳時代後期後葉に比定される。



第485図　第27・28号住居址実測図

29）第29号住居址

遺構（第486・487図、図版33）

本住居址は、Ｃ－３グリッドに位置する。第28号住居址、第２号溝址と重複関係を有し、第28号住居址、第２号溝址により切られている。東西353cm、南北293cmを測り、平面プランは、東西に長い隅丸長方形を呈する。

カマドを中心とする主軸方位は、Ｎ－８°－Ｎを示す。住居址覆土は、３層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、34～68cmを測る。

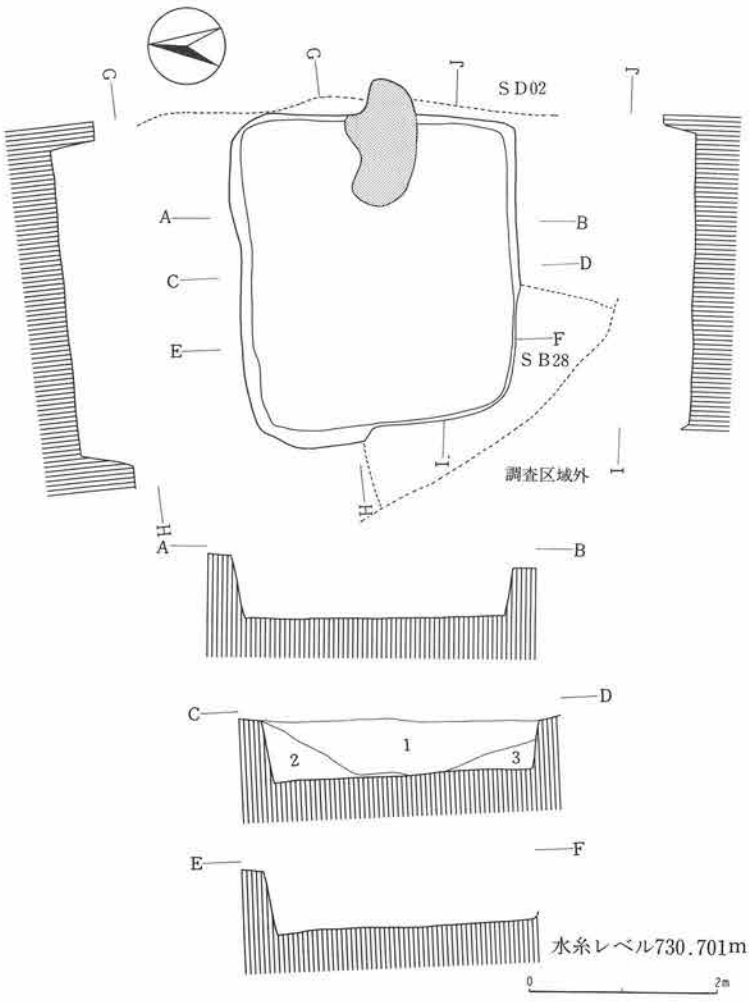
カマドは、東壁ほぼ中央部に位置する。地山を掘り残して袖芯とし、赤褐色（2.5YR4/8）土により構築されていた。

なお、ピット、周溝等の施設は検出されなかった。

遺物

土師器片が出土しているが、量は少なく、図示し得るものは皆無である。

本住居址の所産期は、出土土器片および重複関係から古墳時代後期に比定される。



層序説明
第1層　褐色土層(7.5YR4/4)φ0.5～1.0cmのパミス、ローム粒子を僅かに含み、炭化物を含む
第2層　明褐色土層(7.5YR5/6)φ0.5～2.0cmのパミス、ローム粒子を多く含み、炭化物を含む
第3層　黒褐色土層(7.5YR2/2)φ0.5～2.0cmのパミスを僅かに含む

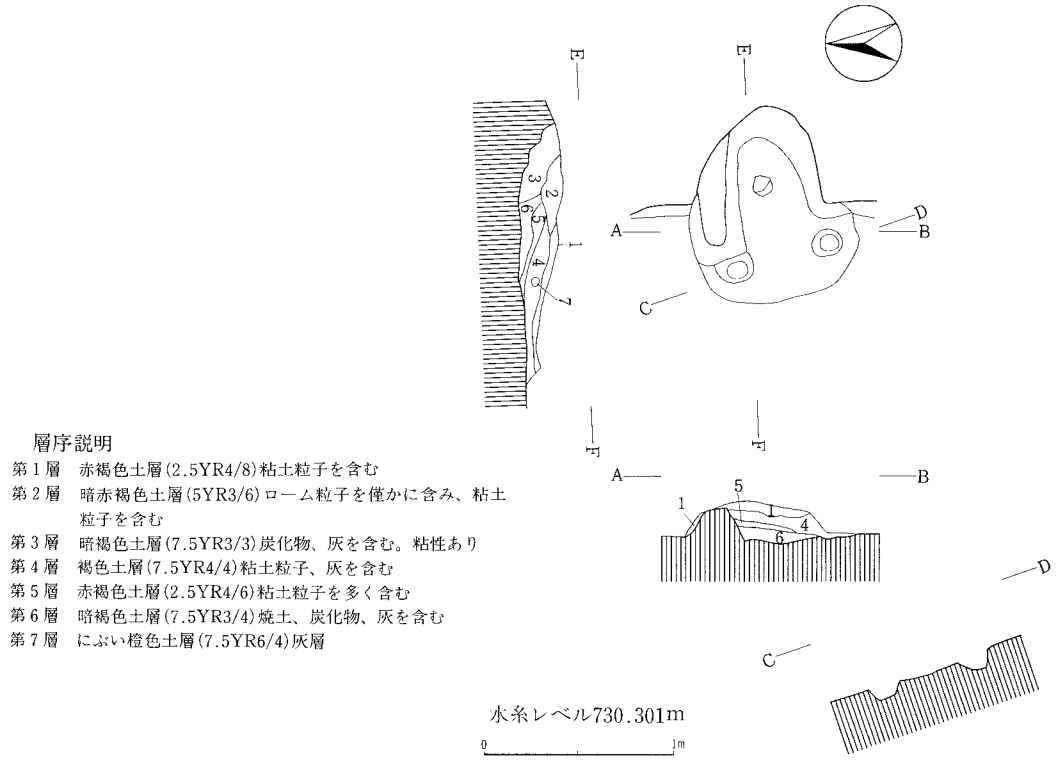
第486図　第29号住居址実測図

30）第30号住居址

遺構（第488図、図版33）

本住居址は、C－3グリッドに位置する。第17号住居址、第39号掘立柱建物址と重複関係を有し、第17号住居址、第39号掘立柱建物址に切られている。東西450cm、南北444cmを測り、平面プランは、隅丸方形を呈する。南北軸の方位は、N－3.5°－Wを示す。

住居址覆土は、4層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、27～69cmを測る。カマドは、おそらく、北壁ほぼ中央部に位置するものと思われるが、調査区域外にかかっているため不明である。ピットは主柱穴と考えられる2基が検出された。なお、周溝は認められな



第487図　第29号住居址カマド実測図

かった。

遺物（第540・541図、図版100・101）

土師器片、黒色土器片が出土している。このうち、図示したものに土師器甑・椀・甕がある。

土師器甑(1)は、小型甕を転用したもので、底部に焼成後の穿孔がなされる。

本住居址の所産期は、古墳時代後期後葉に比定される。

31）第31号住居址

遺構（第489図、図版33）

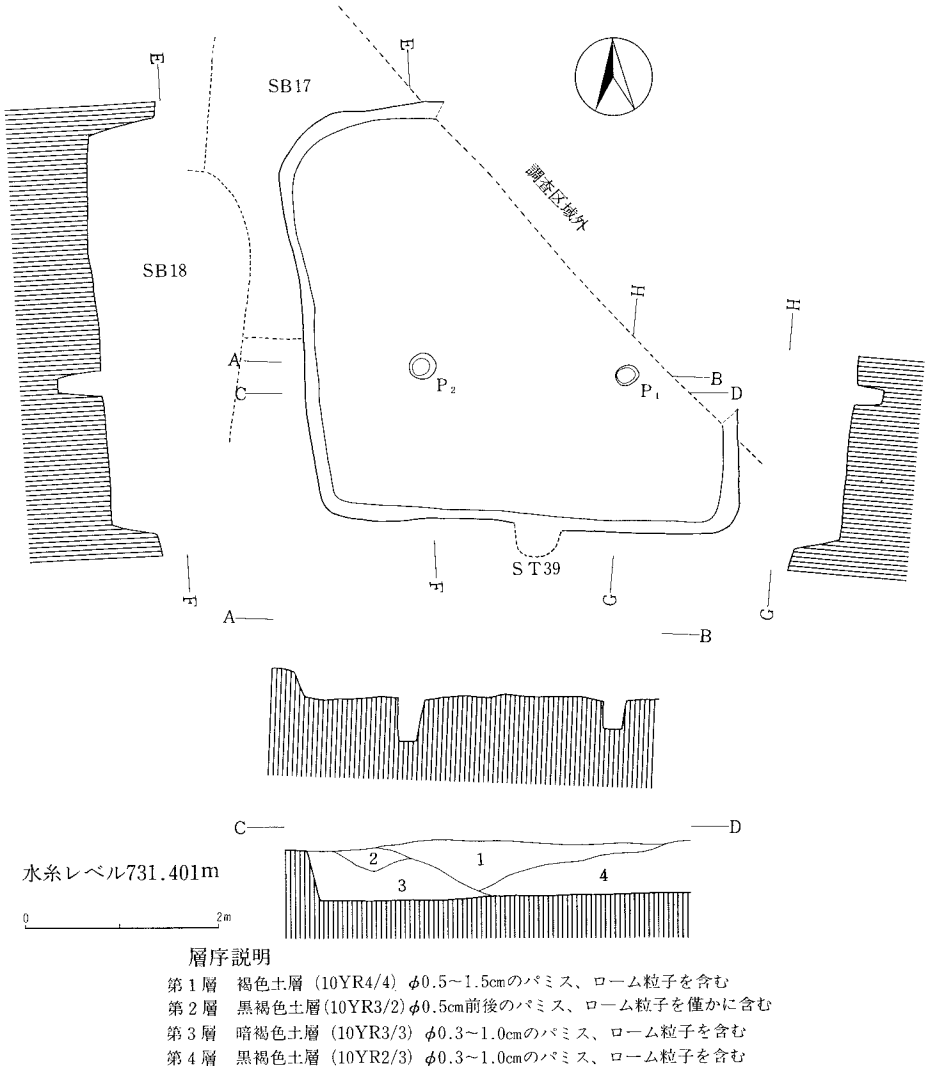
本住居址は、C－2グリッドに位置する。第32号住居址と重複関係を有し、第32号住居址を切って構築されている。東西は調査し得た範囲で111cm、南北380cmを測る。

南北軸の方位は、N－11°－Eを示す。住居址覆土は、2層に区分され、自然堆積と考えられる。

確認面からの壁高は、47～66cmを測る。ピットは主柱穴と考えられる2基が検出された。

なお、周溝は、検出されなかった。

遺物（第543・544図、図版103・104）



第488図　第30号住居址実測図

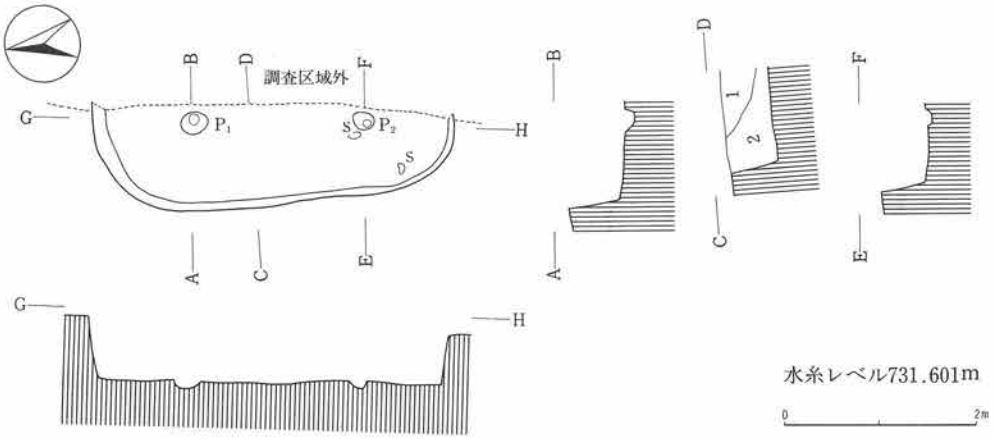
土師器片、黒色土器片、須恵器片、鉄製品、石製品が出土している。このうち、図示したものに鉄製品、石製品がある。鉄製品（第543図1）は、轡である。石製品（第544図6）は、砂質凝灰岩製の打製石斧で、重さ35gを量る。

本住居址の所産期は、奈良時代後葉に比定される。

32）第32号住居址

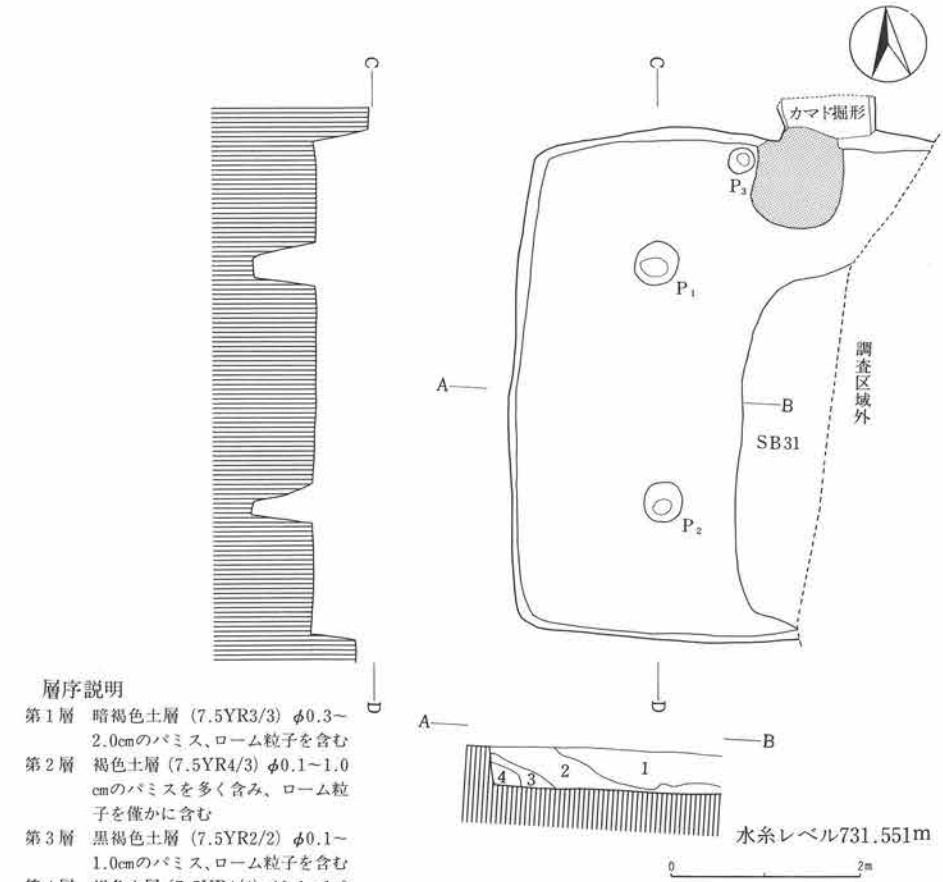
遺構（第490・491図、図版33）

本住居址は、C－2グリッドに位置する。第31・33号住居址と重複関係を有し、第31・33号住居址に切られている。東西は調査し得た範囲で420cm、南北544cmを測り、平面プランは、おそらく、隅丸方形を呈するものと思われる。カマドを中心とする主軸方位は、N－2°－Eを示す。



層序説明
第1層　暗褐色土層（7.5YR3/4）φ0.3～3.0cmのパミスを含む
第2層　褐色土層（7.5YR4/3）φ0.3～3.0cmのパミスを含む

第489図　第31号住居址実測図



層序説明
第1層　暗褐色土層（7.5YR3/3）φ0.3～2.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第2層　褐色土層（7.5YR4/3）φ0.1～1.0cmのパミスを多く含み、ローム粒子を僅かに含む
第3層　黒褐色土層（7.5YR2/2）φ0.1～1.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第4層　褐色土層（7.5YR4/4）φ0.1～1.0cmのパミス、ローム粒子を含む

第490図　第32号住居址実測図

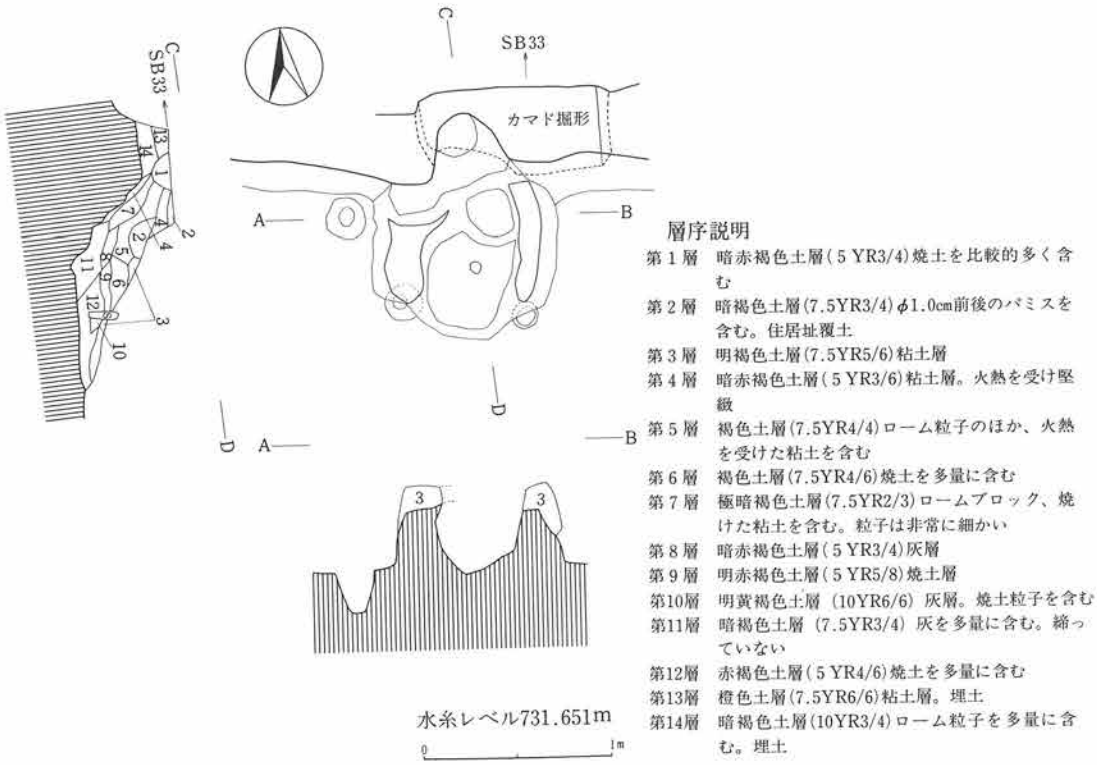
住居址覆土は、４層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、40～58cmを測る。カマドは、北壁ほぼ中央部に位置するものと思われる。地山を掘り残して袖芯とし、明褐色（7.5YR5/6）粘土を用いて構築されていた。焚口部両側には石が用いられていたと考えられ、板取り痕が確認された。また、火床部では、加工した軽石製の支脚石が認められた。

ピットは総計３基検出された。このうち、P_1・P_2の２基が主柱穴と考えられる。なお、周溝は認められなかった。

遺物（第543・544図、図版103・104）

土師器片、黒色土器片、須恵器片、鉄製品、石製品が出土している。このうち、図示したものに鉄製品、石製品がある。鉄製品（第543図２）は、紡錘車である。石製品（第544図７）は、凝灰岩製の砥石で、重さ150ｇを量る。

本住居址の所産期は、奈良時代後葉に比定される。



第491図　第32号住居址カマド実測図

33）第33号住居址

遺構（第492図、図版33）

本住居址は、Ｃ－２グリッドに位置する。第32号住居址と重複関係を有し、第32号住居址を切

って構築されている。東西・南北とも調査し得た範囲で、それぞれ、331cm、166cmを測る。

南北軸の方位は、N－2°－Wを示す。

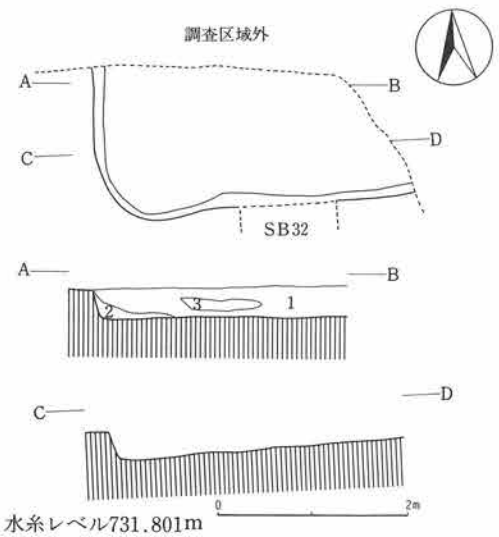
住居址覆土は、3層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、29cm前後を測る。

なお、ピット、周溝は、検出されなかった。

遺物（第541図、図版101）

土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土している。このうち、図示したものに黒色土器杯の破片がある。外面に「案」の墨書がなされる。

本住居址の所産期は、平安時代に比定される。



水糸レベル731.801m

層序説明
第1層　褐色土層(7.5YR4/3)φ0.1～1.0cmのパミスを含む
第2層　暗褐色土層(7.5YR3/4)φ0.1～1.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第3層　褐色土層(7.5YR4/4)φ0.1～3.0cmのパミス、ローム粒子を含む

第492図　第33号住居址実測図

34）第34号住居址

遺構（第493・494図、図版33）

本住居址は、B－2グリッドに位置する。第50号掘立柱建物址と重複関係を有し、第50号掘立柱建物址により切られている。東西386cm、南北348cmを測り、平面プランは、東西に長い隅丸長方形を呈する。カマドを中心とする主軸方位は、N－1°－Wを示す。

住居址覆土は、3層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、17～23cmを測る。カマドは、北壁ほぼ中央部に位置する。赤褐色（2.5YR4/6）土を用いて構築されていた。

ピットは総計8基検出された。このうち、P_1～P_4が主柱穴と考えられる。

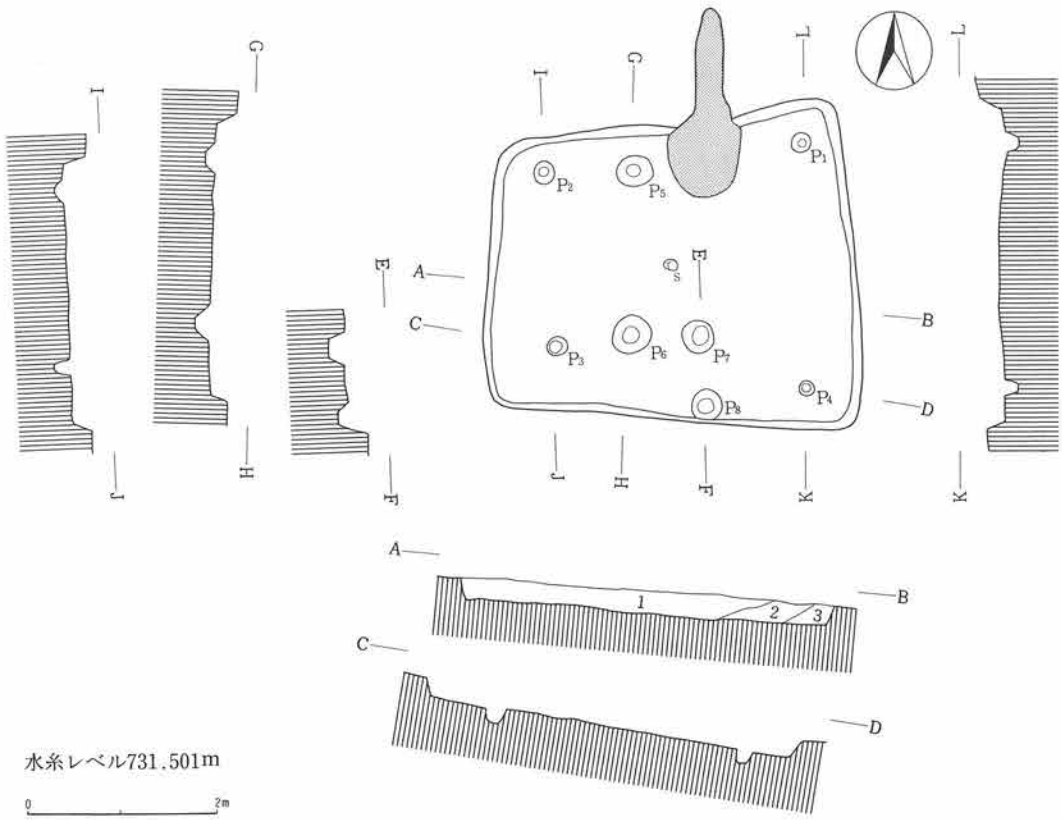
なお、周溝は、検出されなかった。

遺物（第544図、図版104）

石製品のほか、自然遺物として炭化材がカマド内から出土している。

石製品（第544図8）は、カマド内から出土した、砂質凝灰製の砥石と考えられ、重さ35gを測る。なお、炭化材については後述する。

本住居址の所産期は、出土土器片がないため、不明確ではあるが、住居址の形状から、一応、古墳時代後期と考えておきたい。



層序説明
第1層　黒褐色土層(7.5YR2/2)φ0.1～3.0cmのパミス、ローム粒子を含む
第2層　褐色土層(7.5YR4/3)φ0.1～2.0cmのパミスを含む
第3層　黒褐色土層(7.5YR3/1)φ0.1～1.0cmのパミス、ローム粒子を含む

第493図　第34号住居址実測図

35）第35号住居址

遺構（第495図、図版33）

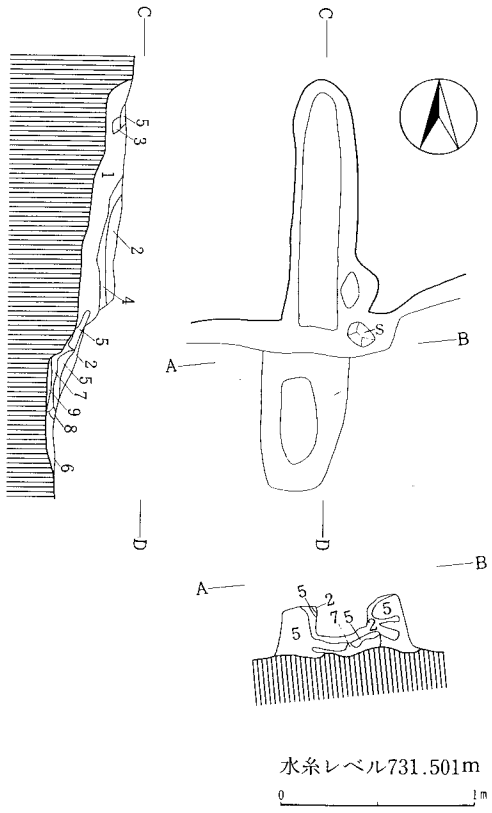
本住居址は、B－1グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

東西は調査し得た範囲で380cm、南北840cmを測る大型の住居址で、平面プランは、おそらく、隅丸方形を呈するものと思われる。南北軸の方位は、N－1°－Wを示す。

住居址覆土は、3層に区分され、自然堆積と考えられる。確認面からの壁高は、21～34cmを測る。カマドは、おそらく、北壁ほぼ中央部に位置するものと思われ、調査区域内では認められなかった。ピットは主柱穴と考えられる2基が検出された。なお、周溝は、検出されなかった。

遺物（第541図、図版101）

土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土している。このうち、図示したものに土師器甑、黒色土器高杯がある。土師器甑（第541図1）は、完形品である。鉢形を呈し、底部に1孔を有する。



層序説明

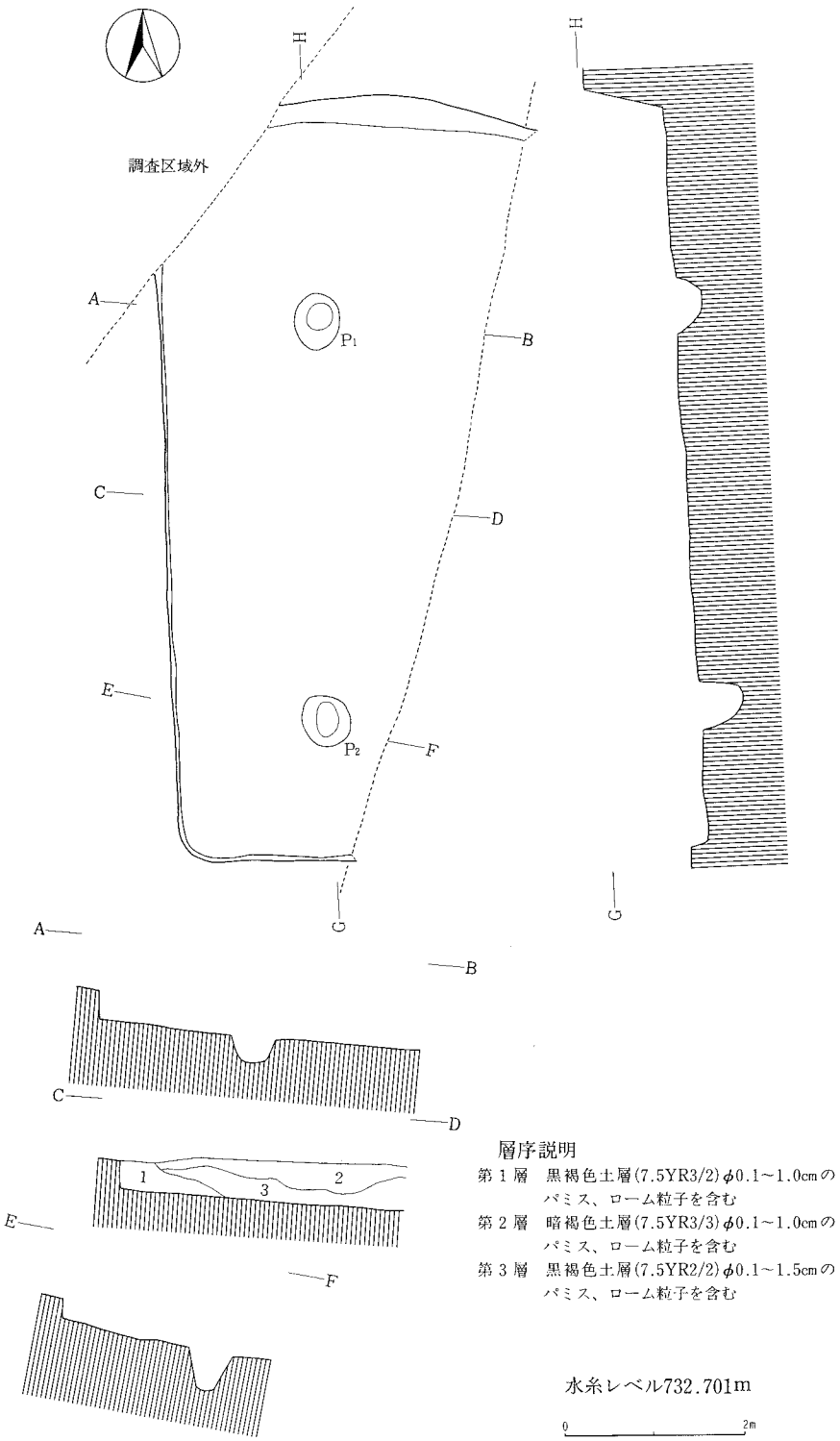
第１層　暗褐色土層(7.5YR3/3)φ0.1～0.5cmのパミス、ローム粒子を含む
第２層　黒褐色土層(10YR3/2)φ0.1～0.5cmのパミス、ローム粒子を含む
第３層　黒褐色土層(7.5YR2/2)ローム粒子、粘土粒子を含む
第４層　黄褐色土層(10YR5/6)φ0.1～2.0cmのパミス、ローム粒子を多く含む
第５層　赤褐色土層(2.5YR4/6)構築土
第６層　黒褐色土層(10YR2/3)粘土粒子、焼土粒子を含む
第７層　暗赤灰色土層(2.5YR3/1)焼土、炭化物、灰を含む
第８層　褐色土層(10YR4/6)ローム粒子を含む
第９層　明褐色土層(7.5YR5/6)焼土層

第494図　第34号住居址カマド実測図

調整は、外面は口辺部ヨコナデ、胴部から底部がヘラナデ、内面は口辺部ヨコナデ、胴部から底部がヘラナデ後部分的にヘラミガキである。

黒色土器高杯（第541図２・３）は２点あり、柱状の脚部を有するもの（２）と脚部が「ハ」の字状に開くと考えられるもの（３）がある。

本住居址の所産期は、古墳時代後期中葉に比定される。



第495図　第35号住居址実測図

(2) 掘立柱建物址

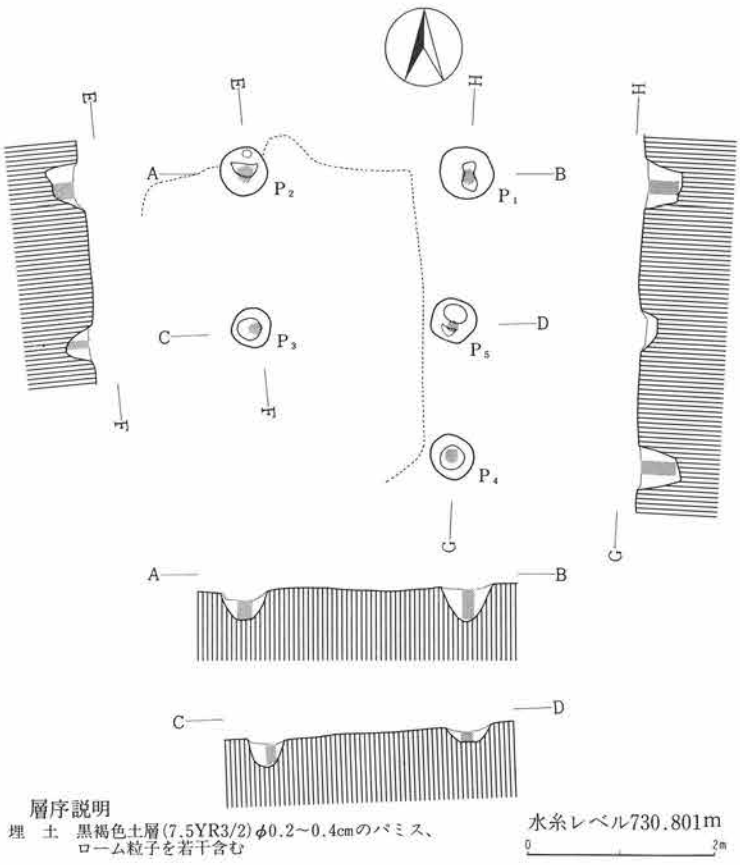
1）第1号掘立柱建物址

遺構（第496図、図版33）

A－2グリッドに位置する。第3号住居址と重複関係を有し、第3号住居址を切って構築されている。東西286cm、南北354cmを測り、平面プランは、長方形を呈する。1間×2間の側柱式の掘立柱建物と考えられるが、5基のピットが検出されたにとどまる。柱間は、東西193～219cm、南北125～148cmを測る。南北軸の方位は、N－2°－Eを示す。ピット掘形の平面プランは楕円形である。

遺物

出土遺物は皆無である。本遺構の所産期は、重複関係から古墳時代後期後葉以降と考えられる。

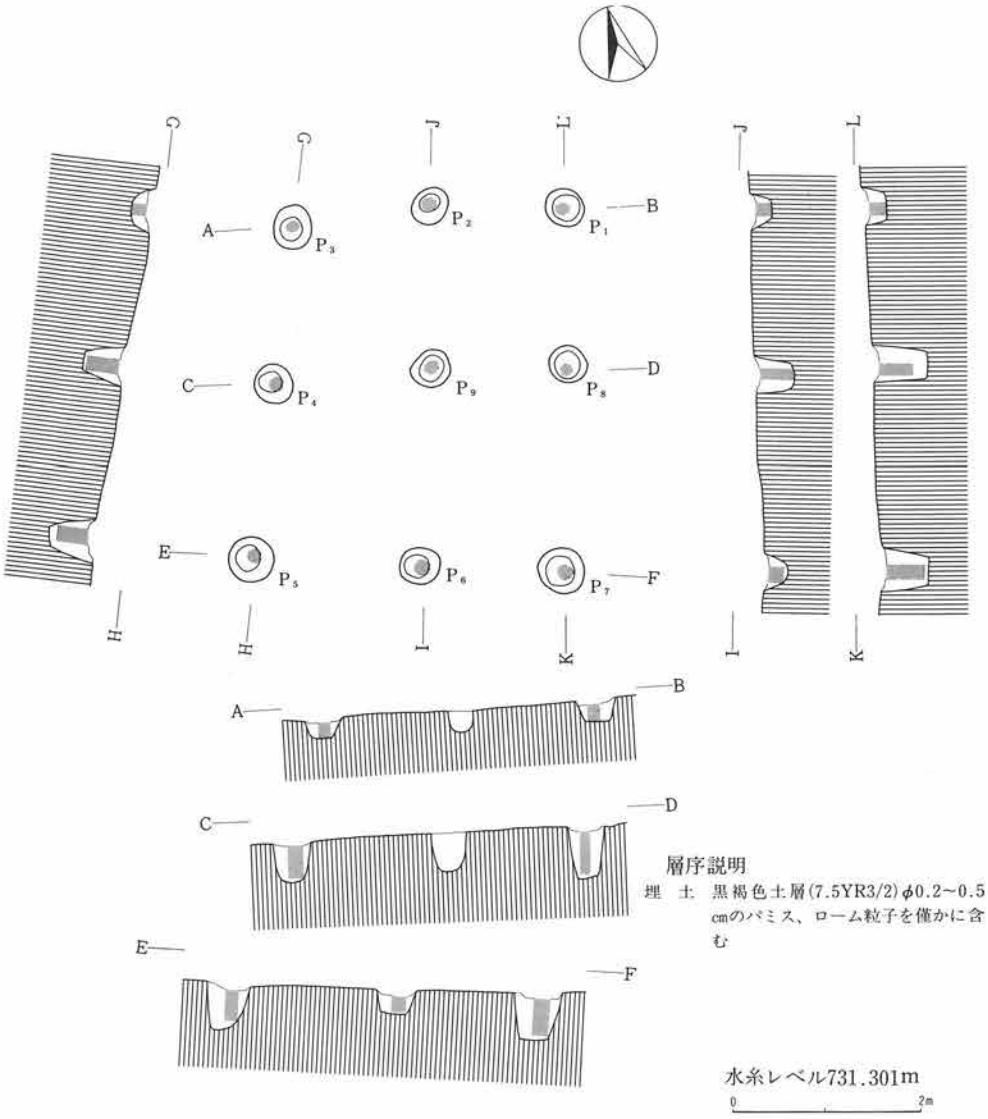


第496図　第1号掘立柱建物址実測図

2）第2号掘立柱建物址

遺構（第497図、図版34）

A－1・2グリッドに位置する。第4号住居址、第11・30号掘立柱建物址と重複関係を有し、第4号住居址、第11号掘立柱建物址を切って構築されている。東西375cm、南北431cmを測り、平面プランは、梯形を呈する。2間×2間の総柱式の掘立柱建物で、柱間は、東西123～163cm、南北155～202cmを測る。南北軸の方位は、N－16°－Eを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。



第497図　第2号掘立柱建物址実測図

遺物

P_4・P_7から土師器片が出土している。本遺構の所産期は、出土土器片および重複関係から平安時代と考えられる。

3）第3号掘立柱建物址

遺構（第498図）

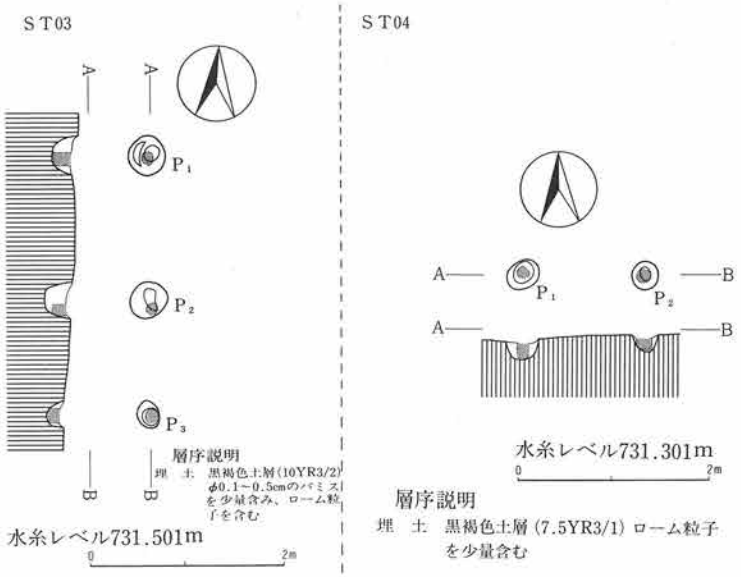
B－1グリッドに位置する。第12号掘立柱建物址と重複関係を有する。

3基のピットが検出されたにとどまる。

南北312cm、柱間は、98～146cmを測る。

南北軸の方位は、N－4°－Wを示す。

ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。



第498図　第3・4号掘立柱建物址実測図

遺物

P_2から土師器片、黒色土器片が出土している。本遺構の所産期は、出土土器片中に球胴を呈する土師器甕の底部破片が認められることから、古墳時代後期～奈良時代以降と考えられる。

4）第4号掘立柱建物址

遺構（第498図）

B－1グリッドに位置する。第5号掘立柱建物址と重複関係を有する。

2基のピットが検出されたにとどまる。東西160cm、柱間は、113cmを測る。

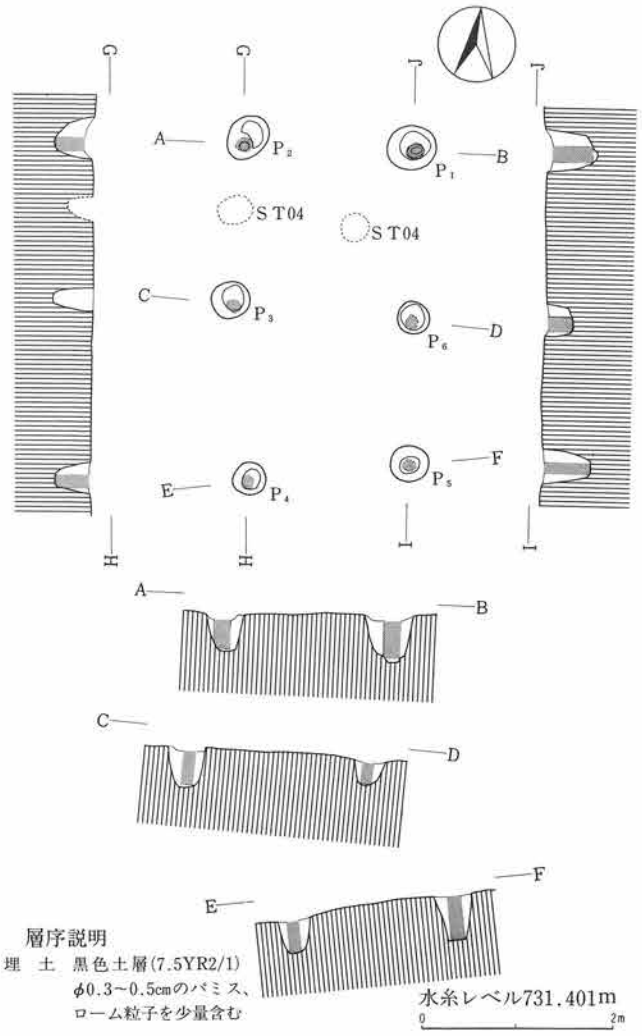
南北軸の方位は、N－2.5°－Eを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

出土遺物は皆無であり、本遺構の所産期についても明確でない。

5）第5号掘立柱建物址

遺構（第499図、図版34）



第499図　第５号掘立柱建物址実測図

B－１・２グリッドに位置する。

第４号掘立柱建物址と重複関係を有する。

東西232cm、南北405cmを測り、平面プランは、長方形を呈する。

１間×２間の側柱式の掘立柱建物で、柱間は、東西159～175cm、南北139～173cmを測る。

南北軸の方位は、N－6°－Wを示す。

ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

P_6から土師器片が出土している。

本遺構の所産期は、出土土器片中に器壁が厚く、長胴を呈する土師器甕の破片が認められることから、古墳時代後期以降と考えられる。

６）第６号掘立柱建物址

遺構（第500図）

A－１グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。２基のピットが検出されたにとどまる。東西285cm、柱間は、215cmを測る。南北軸の方位は、N－44°－Wを示す。

ピット掘形の平面プランは、円形である。

遺物

P_1から土師器片、須恵器片が出土している。本遺構の所産期は、出土土器片から古墳時代後期後葉以降と考えられる。

7）第7号掘立柱建物址

遺構（第500図）

A－1グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

東西225cm、南北209cmを測り、平面プランは、正方形を呈するものと思われる。1間×1間の側柱式の掘立柱建物と考えられ、柱間は東西167cm、南北154cmを測る。

南北軸の方位は、N－9°－Wを示す。

ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物（第541図、図版101）

P_3から外稜口辺を有する土師器杯が出土している。

本遺構の所産期は、古墳時代後期後葉と考えられる。

8）第8号掘立柱建物址

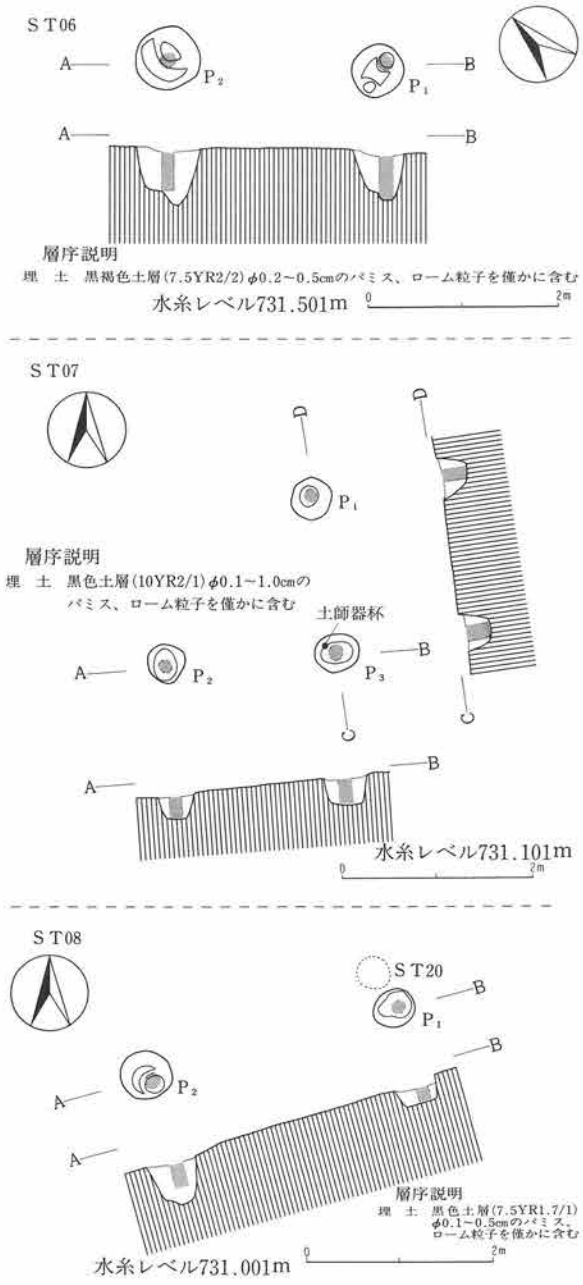
遺構（第500図）

A－1・2グリッドに位置する。第20号掘立柱建物址と重複関係を有する。

2基のピットが検出されたにとどまり、東西322cm、柱間258cmを測る。

南北軸の方位は、N－16°－Wを示す。

ピット掘形の平面プランは、楕円形である。

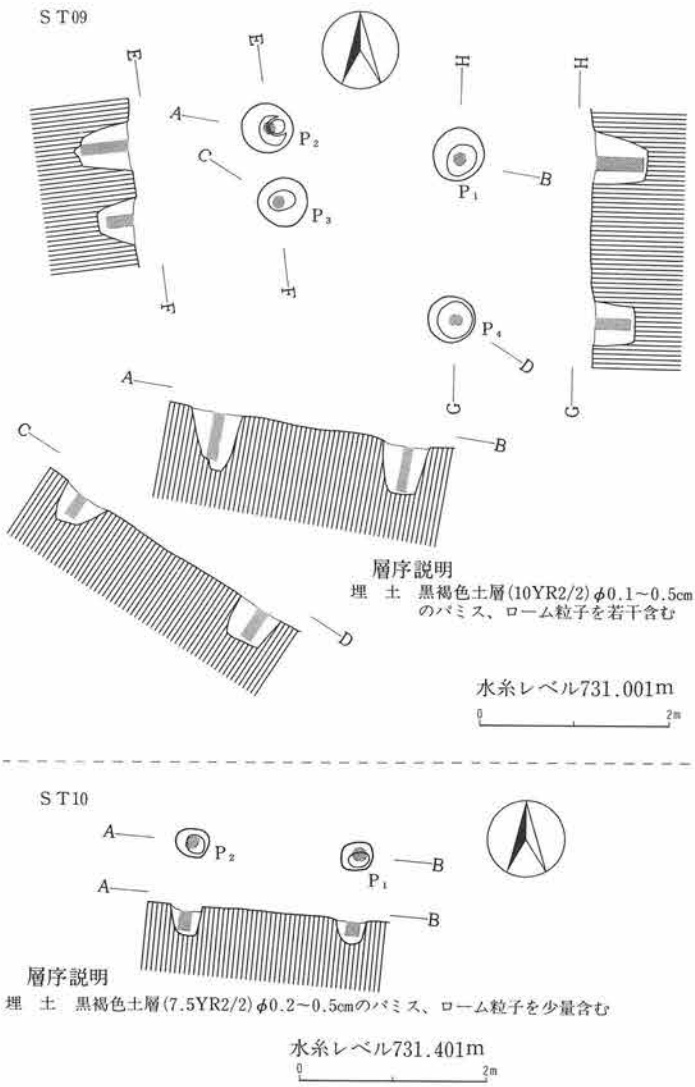


第500図　第6～8号掘立柱建物址実測図

遺物（第545図、図版105）

縄文土器片、土師器片が出土している。このうち、図示したものに縄文土器片（545図5～10・17）がある。いずれも、前期の所産であろう。

本遺構の所産期は、古墳時代後期以降と考えられる。



第501図　第９・10号掘立柱建物址実測図

９）第９号掘立柱建物址

遺構（第501図）

Ａ－２グリッドに位置する。

他遺構との重複関係はない。

東西256cm、南北230cmを測り、平面プランは、梯形を呈する。

１間×１間の側柱式の掘立柱建物と考えられ、柱間は、東西191～213cm、南北67～159cmを測る。

南北軸の方位は、Ｎ－９°－Ｅを示す。

ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

土師器片、須恵器片が出土している。本遺構の所産期は、出土土器片中に、底部糸切り未調整の須恵器杯の破片が認められることから、奈良時代後期後葉以降と考えられる。

10）第10号掘立柱建物址

遺構（第501図）

Ｂ－１グリッドに位置する。

他遺構との重複関係はない。２基のピットが検出されたにとどまる。

東西210cm、柱間は、165cmを測る。南北軸の方位は、Ｎ－3.5°－Ｅを示す。

ピット掘形の平面プランは、楕円形である。

遺物

出土遺物は皆無であり、本遺構の所産期についても明確でない。

11）第11号掘立柱建物址

遺構（第502図、図版34）

A－1・2グリッドに位置する。

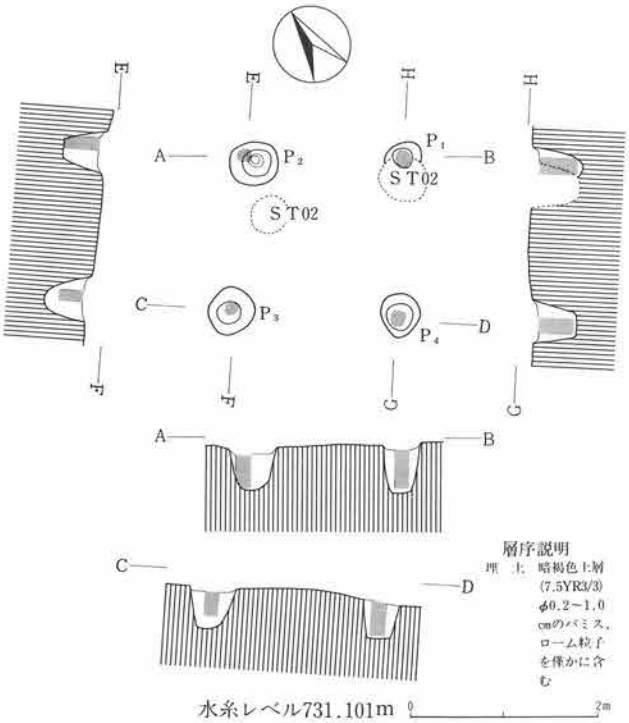
第4号住居址、第2号掘立柱建物址と重複関係を有し、第4号住居址を切り、第2号掘立柱建物址に切られている。

東西224cm、南北208cmを測り、平面プランは、方形を呈する。

1間×1間の側柱式の掘立柱建物で、柱間は、東西152～161cm、南北150～153cmを測る。

南北軸の方位は、N－33°－Eを示す。

ピット掘形の平面プランは、楕円形である。



第502図　第11号掘立柱建物址実測図

遺物

P_4から土師器長胴の甕の破片が出土している。本遺構の所産期は、出土土器片および重複関係から奈良時代後葉～平安時代と考えられる。

12）第12号掘立柱建物址

遺構（第503図、図版34）

A・B－1グリッドに位置する。第3号掘立柱建物址と重複関係を有する。

東西490cm、南北404cmを測り、平面プランは、梯形を呈する。

2間×2間の側柱式の掘立柱建物で、柱間は、東西170～404cm、南北135～320cmを測る。

南北軸の方位は、N－14°－Eを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

出土遺物は皆無であり、本遺構の所産期についても明確でない。

13）第13号掘立柱建物址

遺構（第504図）

A－2グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。2基のピットが検出されたにとどま

り、東西145cm、柱間は85cmを測る。南北軸の方位は、N－5°－Eを示す。

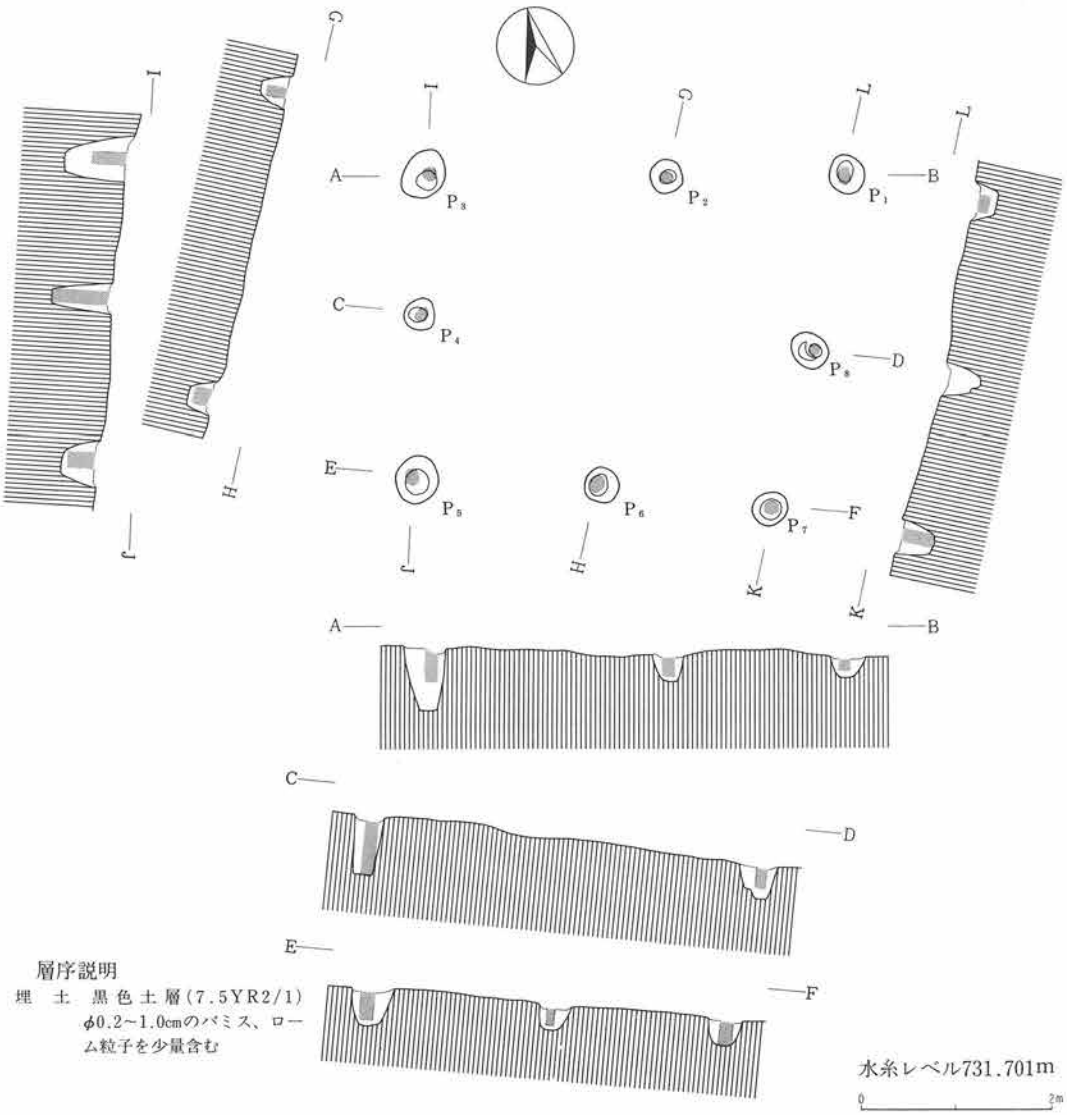
ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

出土遺物は皆無であり、本遺構の所産期についても明確でない。

14）第14号掘立柱建物址

遺構（第504図）



第503図　第12号掘立柱建物址実測図

A－1グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。3基のピットが検出されたにとどまり、東西385cm、柱間は145～155cmを測る。南北軸の方位は、N－7°－Eを示す。

ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

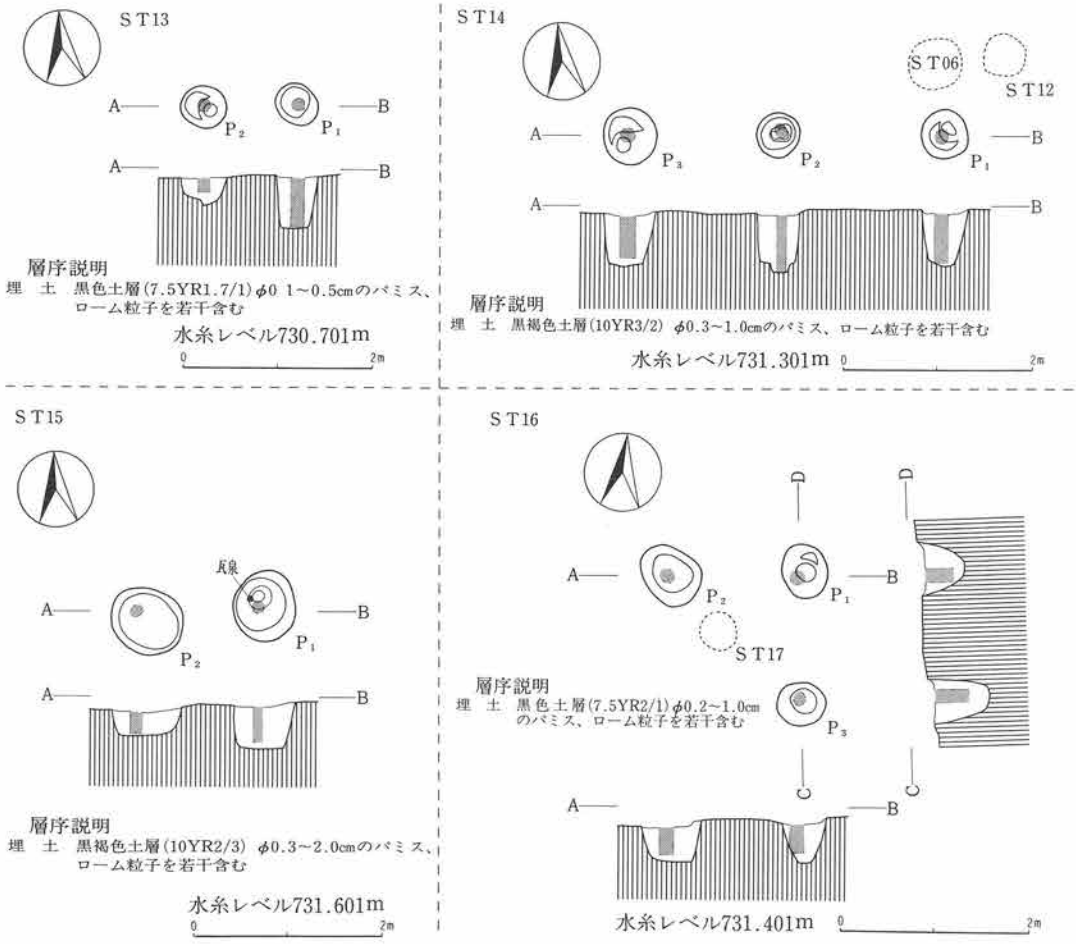
遺物

P_3から土師器球胴の甕の破片が出土している。本遺構の所産期は、出土土器片から古墳時代後期以降と考えられる。

15）第15号掘立柱建物址

遺構（第504図）

A－1グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。2基のピットが検出されたにとどまり、東西194cm、柱間は114cmを測る。南北軸の方位は、N－2°－Eを示す。

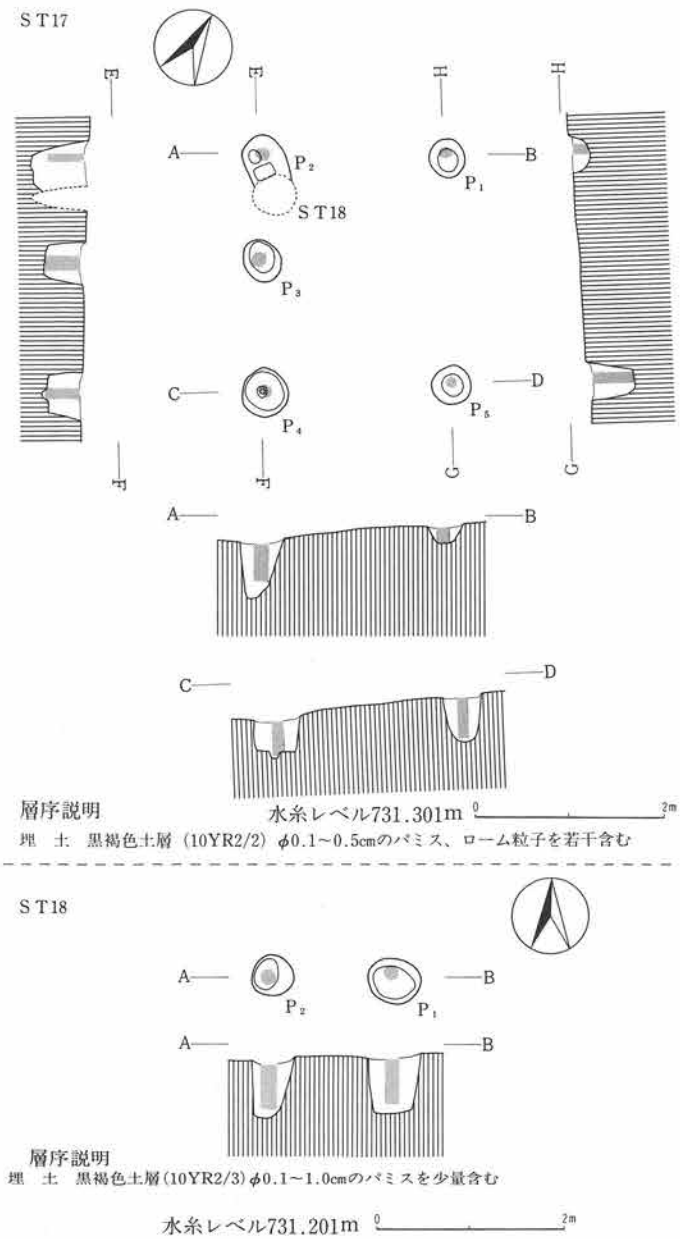


第504図　第13～16号掘立柱建物址実測図

ピット掘形の平面プランは、楕円形である。

遺物（第541図、図版101）

P_1から略完形の須恵器瑕が出土している。本遺構の所産期は、古墳時代後期後葉に比定される。



第505図　第17・18号掘立柱建物址実測図

16）第16号掘立柱建物址

遺構（第504図）

A－1グリッドに位置する。第17号掘立柱建物址と重複関係を有する。

東西195cm、南北191cmを測る。1間×1間の側柱式の掘立柱建物と考えられるが、3基のピットが検出されたにとどまる。柱間は、東西121cm、南北114cmを測る。

南北軸の方位は、N－7°－Wを示す。ピット掘形の平面プランは、楕円形である。

遺物

土師器片、須恵器片が出土している。本遺構の所産期は、出土土器片中に、底部ヘラキリ後手持ちヘラケズリの須恵器杯の破片、素縁で浅い土師器杯の破片が認められることから奈良時代中葉以降と考えられる。

17）第17号掘立柱建物址

遺構（第505図、図版34）

A－1グリッドに位置する。第16・18号掘立柱建物址と

重複関係を有し、第18号掘立柱建物址に切られている。東西243cm、南北301cmを測り、平面プランは、長方形を呈する。１間×２間の側柱式の掘立柱建物と考えられるが、５基のピットが検出されたにとどまる。柱間は、東西178～185cm、南北97～234cmを測る。南北軸の方位は、N－28°－Wを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

P_2から土師器片、黒色土器片が出土している。本遺構の所産期は、出土土器片から古墳時代後期以降と考えられる。

18）第18号掘立柱建物址

遺構（第505図）

Ａ－１グリッドに位置する。第17号掘立柱建物址と重複関係を有し、第17号掘立柱建物址を切って構築されている。２基のピットが検出されたにとどまり、東西180cm、柱間は115cmを測る。

南北軸の方位は、N－3°－Wを示す。ピット掘形の平面プランは、楕円形である。

遺物

P_2から土師器長胴の甕の破片が１点出土している。本遺構の所産期は、出土土器片および重複関係から古墳時代後期以降と考えられる。

19）第19号掘立柱建物址

遺構（第506図）

Ａ－１・２グリッドに位置する。第20号掘立柱建物址と重複関係を有する。

東西435cm、南北342cmを測り、平面プランは、長方形を呈する。

２間×３間の側柱式の掘立柱建物で、柱間は、東西173～405cm、南北45～263cmを測る。

南北軸の方位は、N－3°－Wを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

出土遺物は皆無であり、本遺構の所産期についても明確でない。

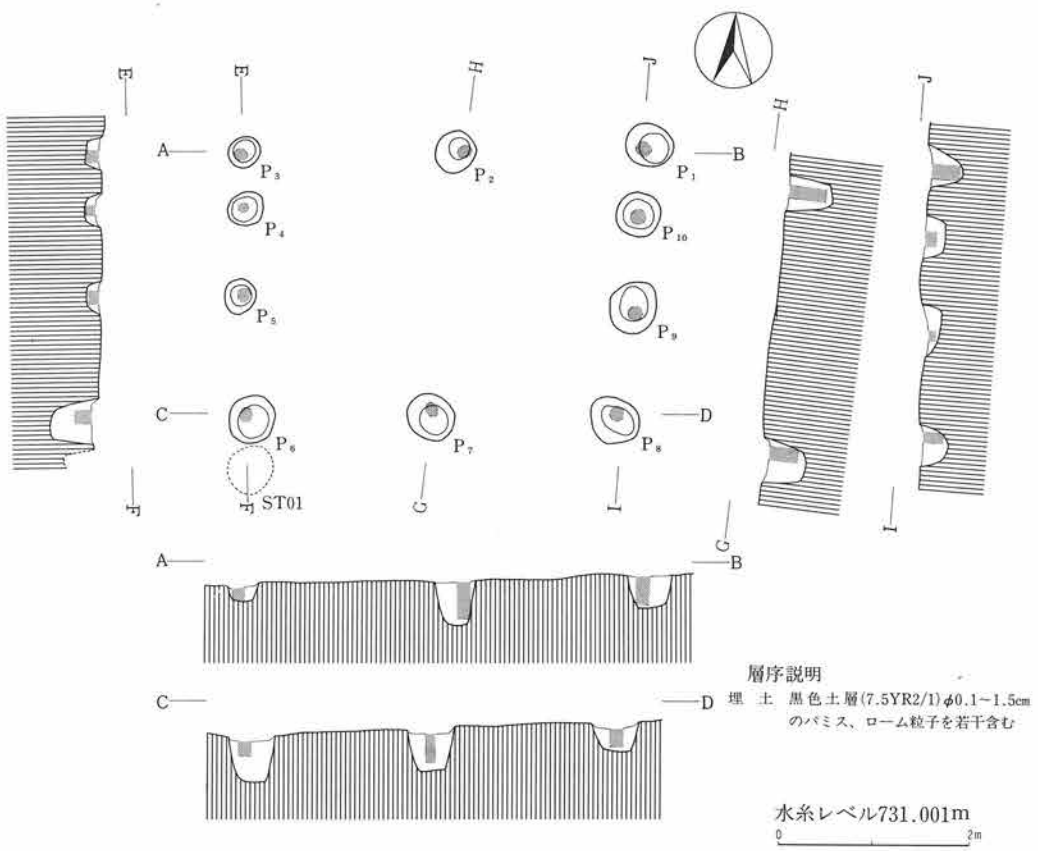
20）第20号掘立柱建物址

遺構（第507図、図版34）

Ａ－１・２グリッドに位置する。第８・19号掘立柱建物址と重複関係を有する。

東西388cm、南北355cmを測り、平面プランは、長方形を呈する。

２間ないしは３間×２間の側柱式の掘立柱建物と考えられ、柱間は東西81～330cm、南北



第506図　第19号掘立柱建物址実測図

117～306cmを測る。南北軸の方位は、N－1°－Wを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

出土遺物は皆無であり、本遺構の所産期についても明確でない。

21）第21号掘立柱建物址

遺構（第508図、図版34）

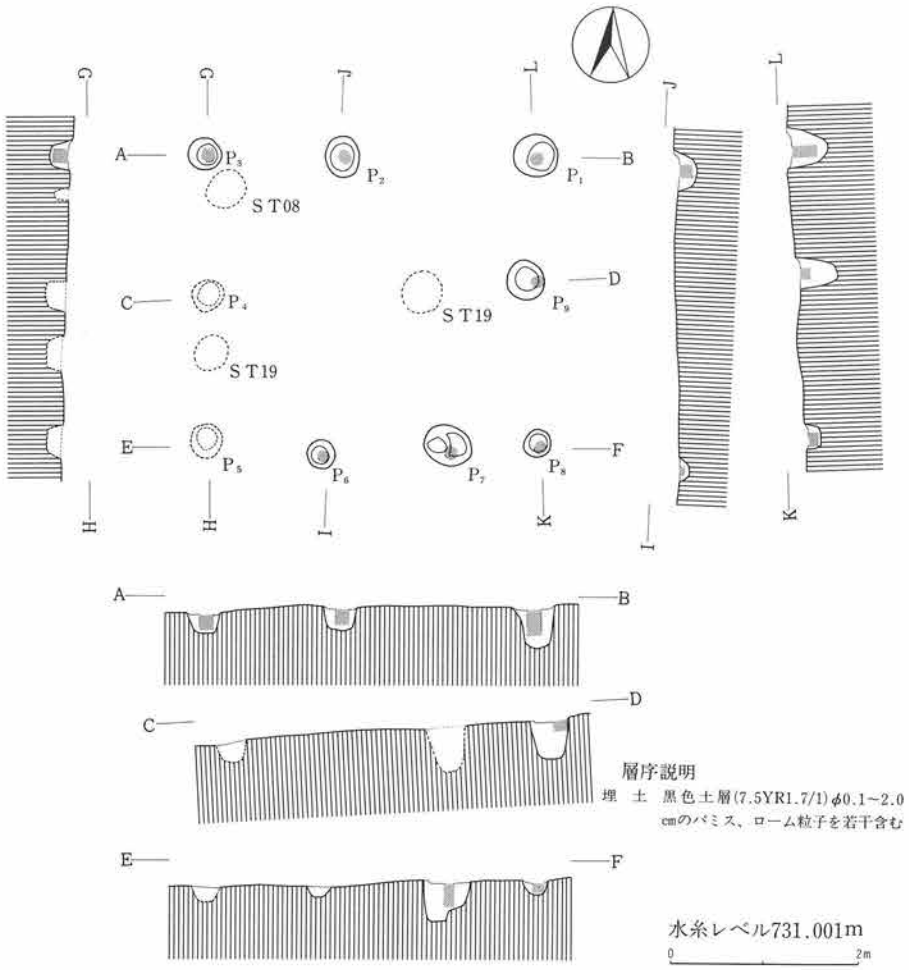
A－1・2グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

東西177cm、南北209cmを測り、平面プランは、梯形を呈する。

1間×1間の側柱式の掘立柱建物で、柱間は、東西106～120cm、南北132～154cmを測る。

南北軸の方位は、N－19°－Wを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物



第507図　第20号掘立柱建物址実測図

P_3から土師器片、須恵器片が出土している。本遺構の所産期は、出土土器片から古墳時代後期以降と考えられる。

22）第22号掘立柱建物址

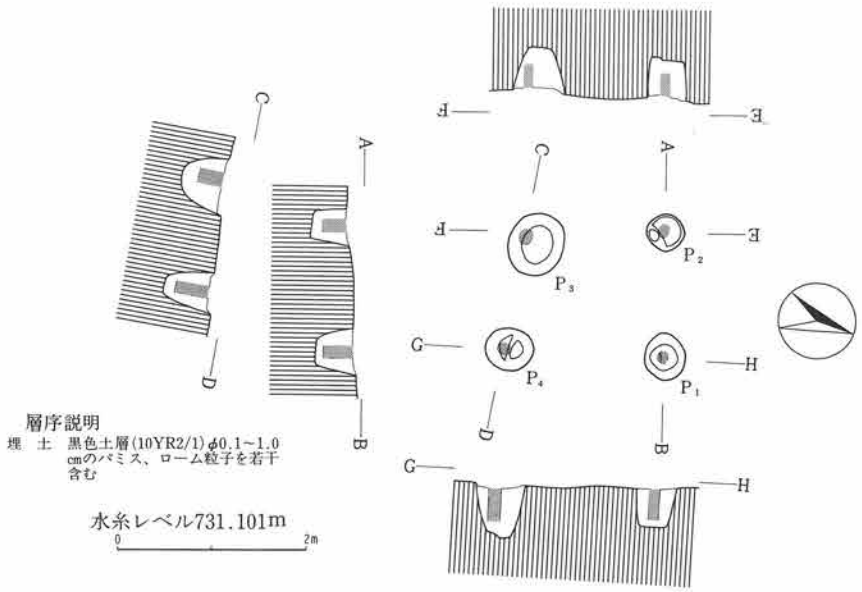
遺構（第509図、図版34）

B－2グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。東西235cm、南北196cmを測り、平面プランは、梯形を呈する。

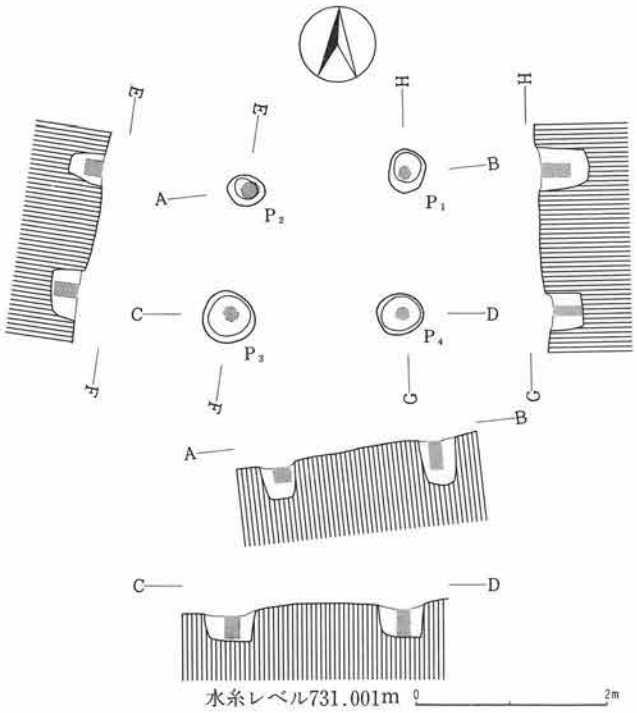
1間×1間の側柱式の掘立柱建物で、柱間は、東西149～167cm、南北117～136cmを測る。

南北軸の方位は、N－3°－Wを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物



第508図　第21号掘立柱建物址実測図



層序説明
埋　土　暗褐色土層（7.5YR3/3）φ0.2～1.5cmのパミス、ローム粒子を若干含む

第509図　第22号掘立柱建物址実測図

出土遺物は皆無であり、本遺構の所産期についても明確でない。

23）第23号掘立柱建物址

遺構（第510図、図版35）

Ｂ－２グリッドに位置する。

第５号住居址、第24号掘立柱建物址と重複関係を有し、第５号住居址を切って構築されている。

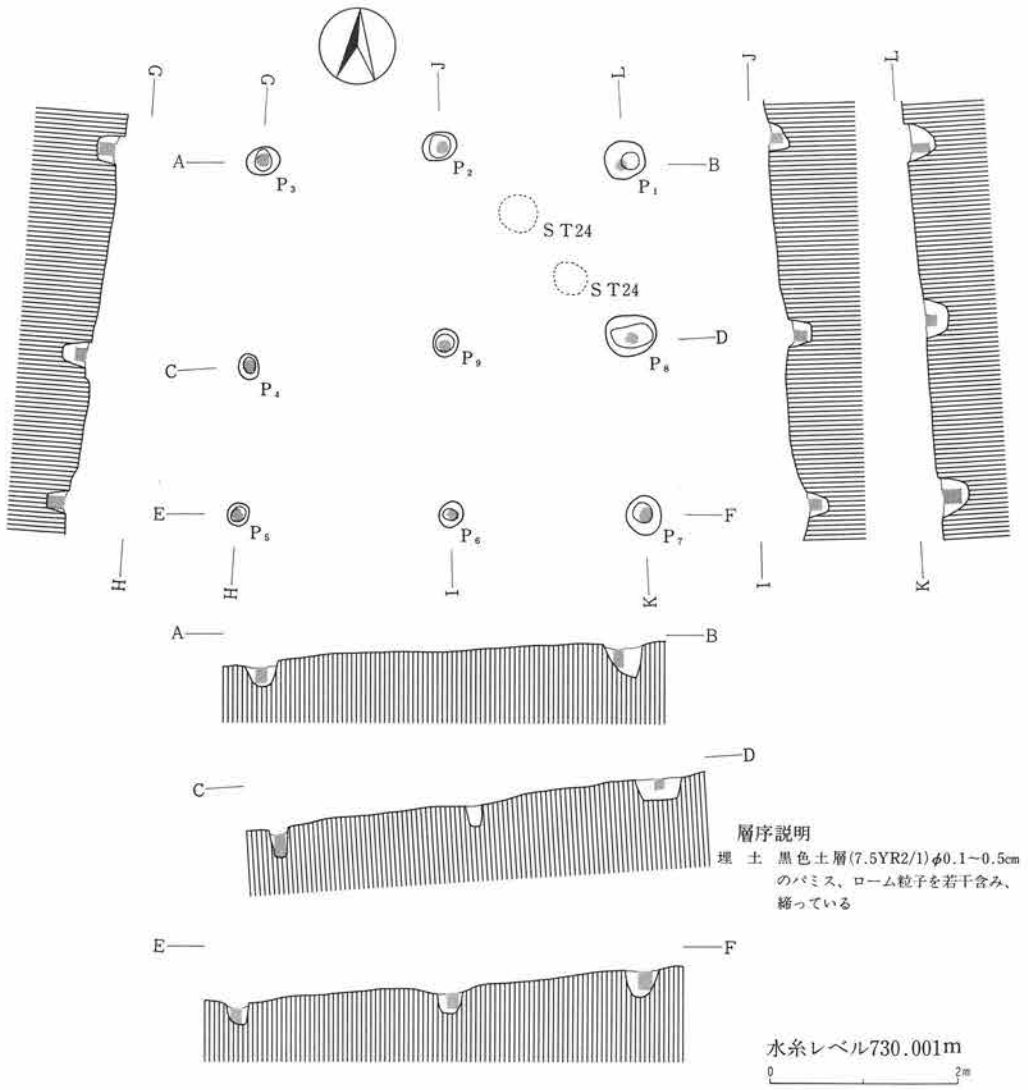
東西457cm、南北423cmを測り、平面プランは、梯形を呈する。

２間×２間の総柱式の掘立柱建物で、柱間は、東西175～218cm、南北145～206cmを測る。

南北軸の方位は、Ｎ－６°－Ｗを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

出土遺物は皆無である。本遺構の所産期は、重複関係から古墳時代後期後葉以降と考えられる。



第510図　第23号掘立柱建物址実測図

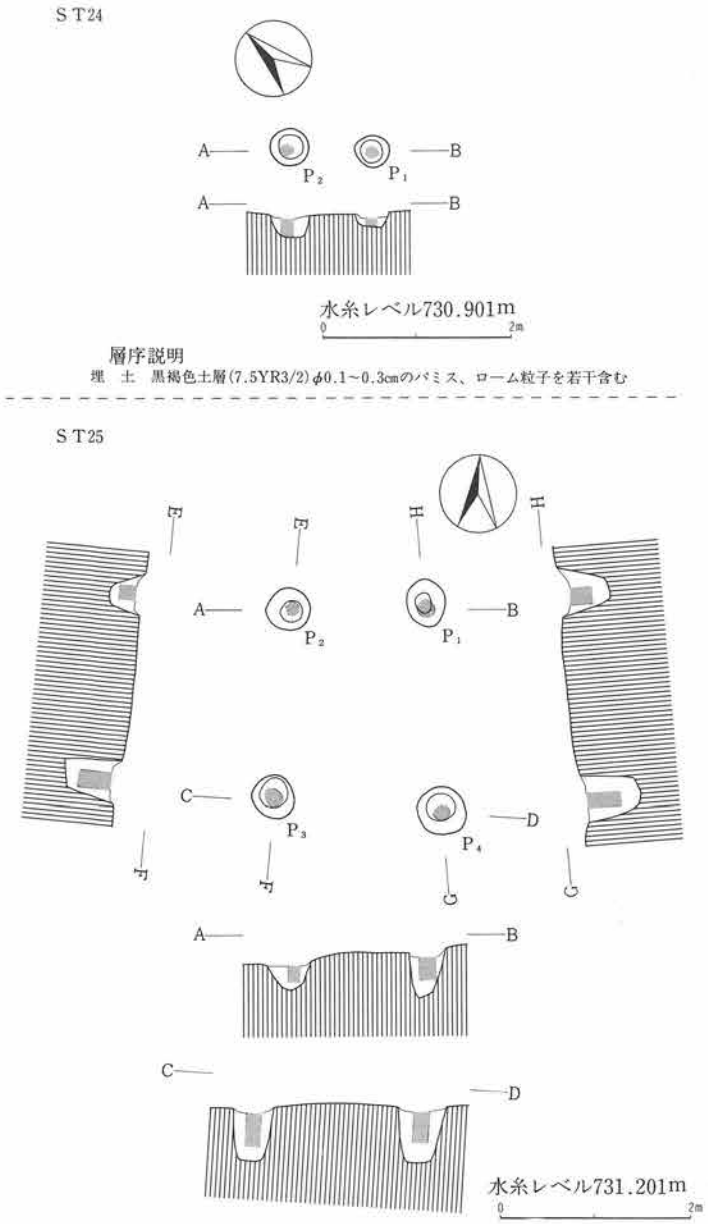
24）第24号掘立柱建物址

遺構（第511図）

Ｂ－２グリッドに位置する。第５号住居址、第23号掘立柱建物址と重複関係を有し、第５号住居址を切って構築されている。

２基のピットが検出されたにとどまり、東西126cm、柱間は、76cmを測る。

南北軸の方位は、Ｎ－43°－Ｗを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。



第511図　第24・25号掘立柱建物址実測図

遺物

出土遺物は皆無である。

本遺構の所産期は、重複関係から古墳時代後期後葉以降と考えられる。

25）第25号掘立柱建物址

遺構（第511図、図版35）

B－2グリッドに位置する。

第31号掘立柱建物址と重複関係を有し、第31号掘立柱建物址を切って構築されている。

東西230cm、南北272cmを測り、平面プランは、梯形を呈する。

1間×1間の側柱式の掘立柱建物で、柱間は、東西125～161cm、南北185～200cmを測る。南北軸の方位は、N－7°－Wを示す。

ピット掘形の平面プランは、楕円形である。

遺物

須恵器片が出土している。

本遺構の所産期は、奈良時代後葉以降と考えられる。

26）第26号掘立柱建物址

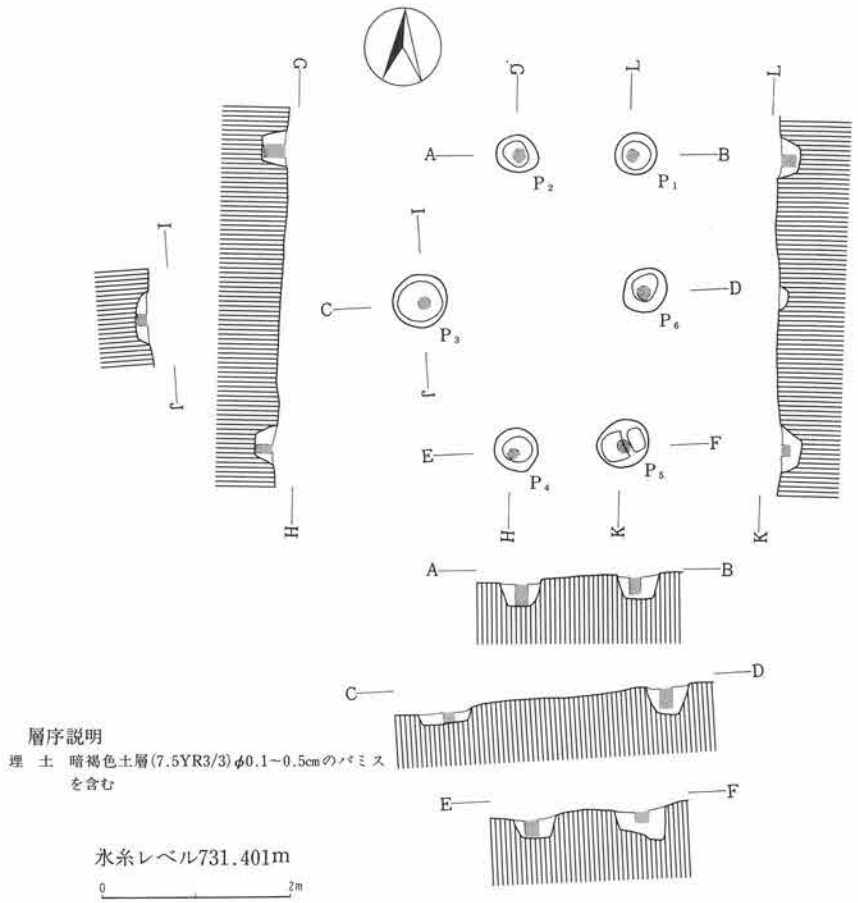
遺構（第512図、図版35）

C－3グリッドに位置する。第27・28号掘立柱建物址、第2号溝址と重複関係を有し、第2号溝址を切って構築されている。東西288cm、南北359cmを測る。1間ないし2間×2間の側柱式の掘立柱建物と考えられ、柱間は東西102～216cm、南北131～304cmを測る。

南北軸の方位は、N－3.5°－Wを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

出土遺物は皆無である。本遺構の所産期は、重複関係から平安時代以降と考えられる。



第512図　第26号掘立柱建物址実測図

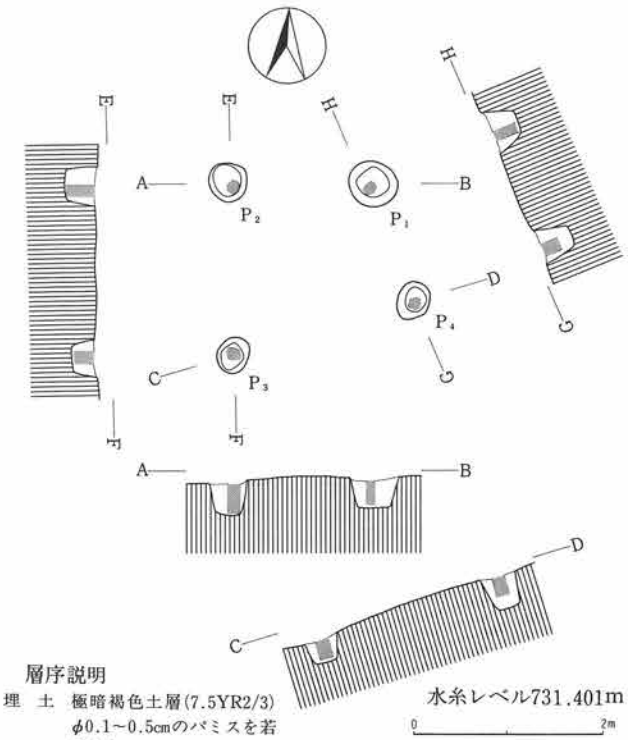
27）第27号掘立柱建物址

遺構（第513図、図版35）

Ｃ－３グリッドに位置する。第26号住居址、第28号掘立柱建物址と重複関係を有し、第26号住居址、第28号掘立柱建物址を切って構築されている。東西235cm、南北225cmを測り、平面プランは、梯形を呈する。１間×１間の側柱式の掘立柱建物で、柱間は東西130～184cm、南北119～164cmを測る。南北軸の方位は、Ｎ－3.5°－Ｗを示す。ピット掘形の平面プランは楕円形である。

遺物

土師器片、須恵器片が出土している。本遺構の所産期は、出土土器片中に底部ヘラキリ後手持ちヘラケズリの須恵器杯の破片が認められることから奈良時代中葉以降と考えられる。



第513図　第27号掘立柱建物址実測図

28）第28号掘立柱建物址

遺構（第514図、図版35）

Ｃ－３グリッドに位置する。

第26号住居址、第27号掘立柱建物址と重複関係を有し、第26号住居址を切り、第27号掘立柱建物址に切られている。

東西256cm、南北288cmを測り、平面プランは、梯形を呈する。

１間×１間の側柱式の掘立柱建物で、柱間は東西147～195cm、南北177～233cmを測る。

南北軸の方位は、Ｎ－５°－Ｗを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

出土遺物は皆無である。本遺構の所産期は、重複関係から奈良時代前葉～中葉と考えられる。

29）第29号掘立柱建物址

遺構（第515図）

Ｃ－３グリッドに位置する。第26・27号住居址と重複関係を有し、第26・27号掘立柱建物址を切って構築されている。２基のピットが検出されたにとどまり、南北226cm、柱間174cmを測る。

南北軸の方位は、Ｎ－13°－Ｅを示す。ピット掘形の平面プランは、楕円形である。

遺物

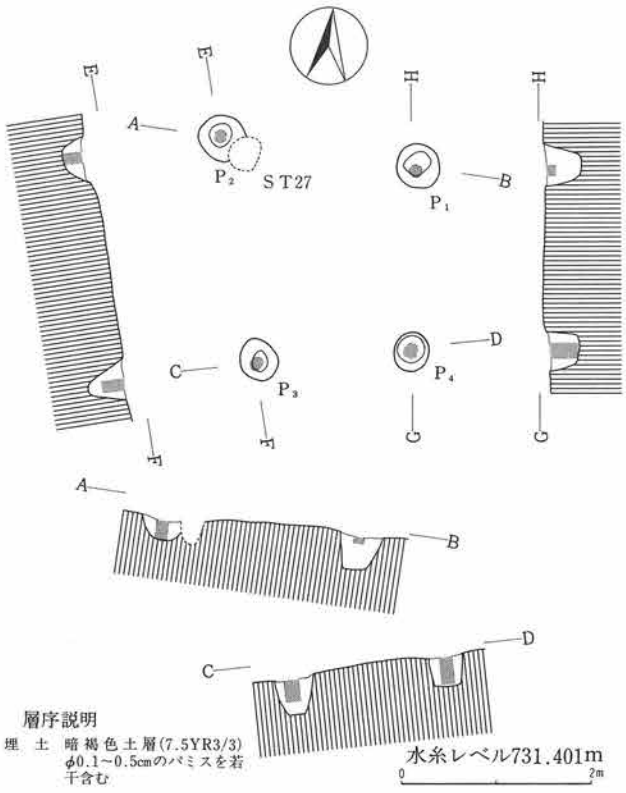
出土遺物は皆無である。本遺構の所産期は、重複関係から奈良時代以降と考えられる。

30）第30号掘立柱建物址

遺構（第515図）

Ａ－１グリッドに位置する。第４号住居址と重複関係を有し、第４号住居址に切られている。

２基のピットが検出されたにとどまり、東西197cm、柱間は、130cmを測る。



第514図　第28号掘立柱建物址実測図

南北軸の方位は、N－2°－Wを示す。ピット掘形の平面プランは、楕円形である。

遺物

土師器片、須恵器片が出土している。本遺構の所産期は、出土土器片中に底部ヘラキリ後手持ちヘラケズリの須恵器杯の破片が認められることおよび重複関係から奈良時代中葉と考えられる。

31）第31号掘立柱建物址

遺構（第516図、図版35）

B－2グリッドに位置する。第25・47号掘立柱建物址と重複関係を有し、第47号掘立柱建物址を切り、第25号掘立柱建物址に切られている。東西385cm、南北373cmを測り、平面プランは、長方形を呈する。2間×2間の側柱式の掘立柱建物と考えられるが、7基のピットが検出されたにとどまる。柱間は、東西124～174cm、南北126～308cmを測る。

南北軸の方位は、N－6°－Wを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

P_1・P_7から土師器片、黒色土器片が出土している。本遺構の所産期は、出土土器片中にロクロ調整の黒色土器杯の破片が認められることから奈良時代後葉以降と考えられる。

32）第32号掘立柱建物址

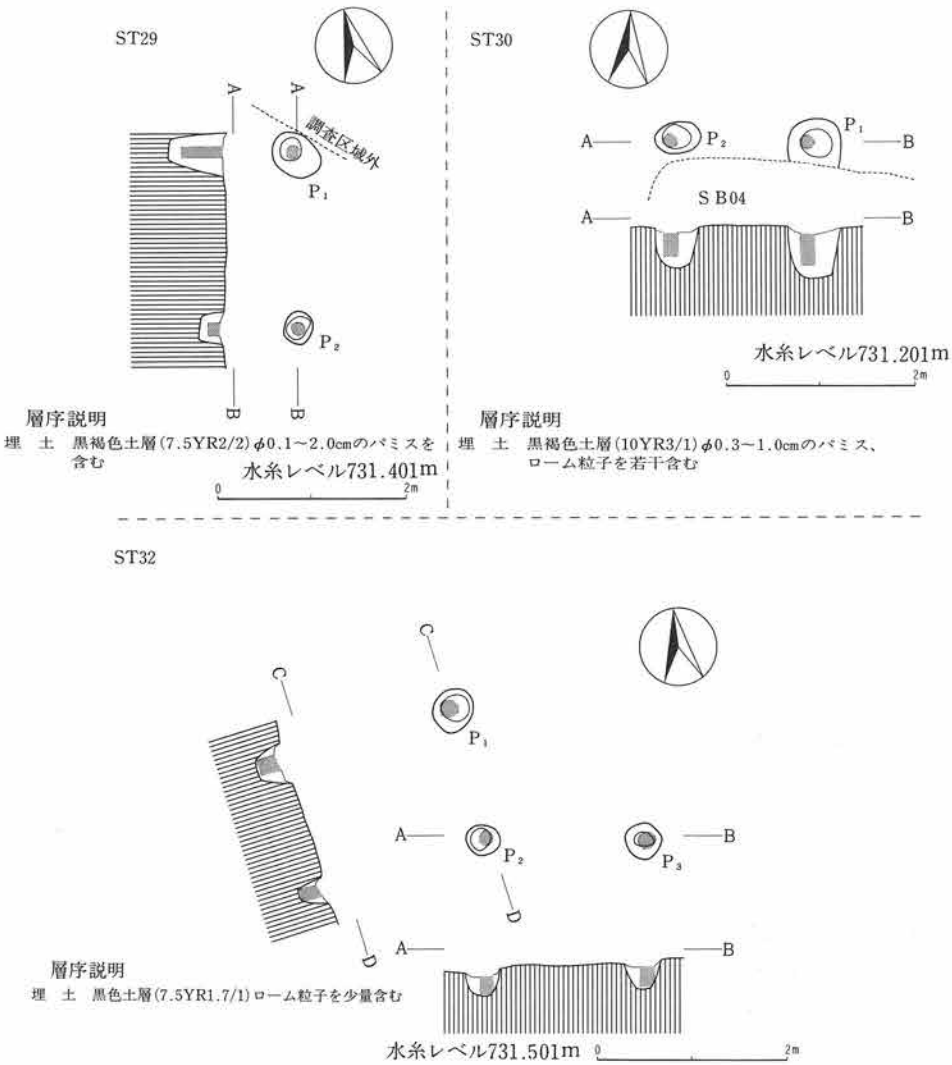
遺構（第515図）

Ｂ－２グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。東西207cm、南北180cmを測る。

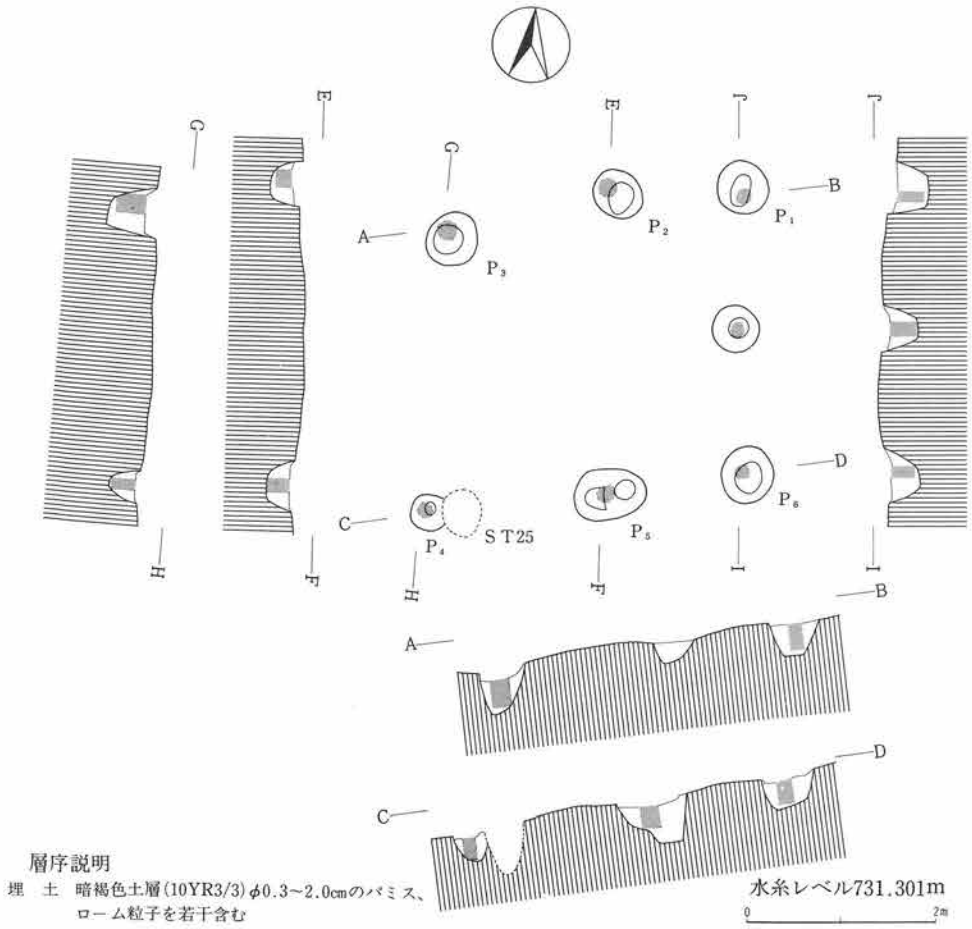
１間×１間の側柱式の掘立柱建物と考えられるが、３基のピットが検出されたにとどまる。

柱間は、東西153cm、南北126cmを測る。南北軸の方位は、Ｎ－8.5°－Ｗを示す。

ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。



第515図　第29・30・32号掘立柱建物址実測図



第516図　第31号掘立柱建物址実測図

遺物

出土遺物は皆無であり、本遺構の所産期は明確でない。

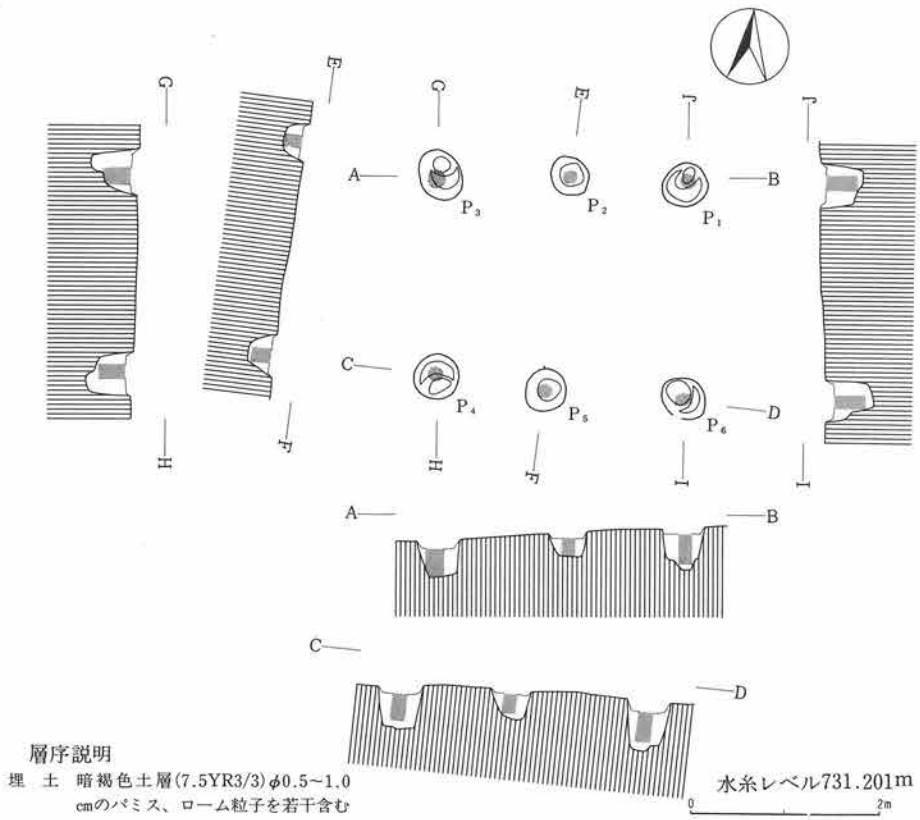
33）第33号掘立柱建物址

遺構（第517図、図版35）

C・D－3グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。東西308cm、南北275cmを測り、平面プランは、長方形を呈する。2間×1間の側柱式の掘立柱建物で、柱間は、東西101～127cm、南北191～218cmを測る。南北軸の方位は、N－4.5°－Wを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

出土遺物は皆無であり、本遺構の所産期は明確でない。



第517図　第33号掘立柱建物址実測図

34）第34号掘立柱建物址

遺構（第518図、図版35）

Ｃ－３グリッドに位置する。第35号掘立柱建物址と重複関係を有し、第35号掘立柱建物址を切って構築されている。東西274cm、南北375cmを測り、平面プランは、梯形を呈する。

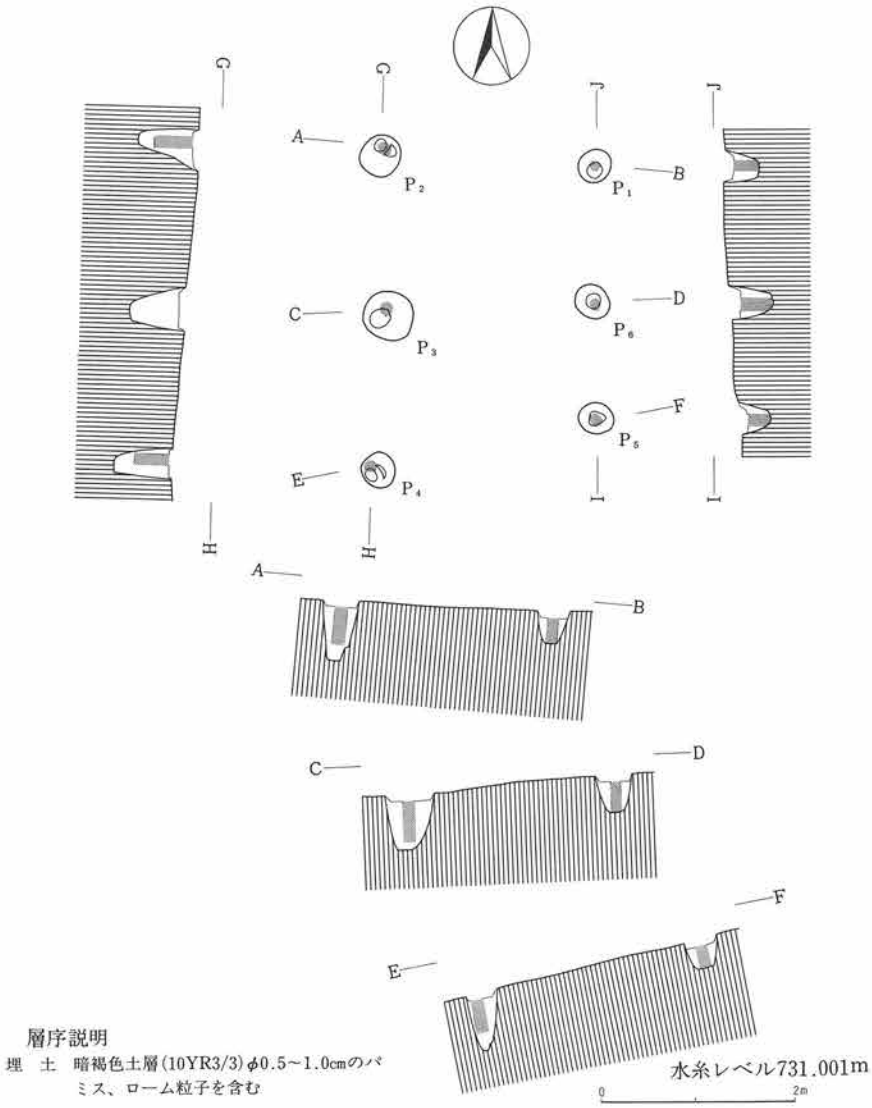
１間×２間の側柱式の掘立柱建物で、柱間は、東西210～233cm、南北110～155cmを測る。

南北軸の方位は、Ｎ－1.5°－Ｗを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

P_6・P_{11}から土師器片、須恵器片が出土している。

本遺構の所産期は、出土土器片中に軟質須恵器杯の破片が認められることから、平安時代以降と考えられる。



第518図　第34号掘立柱建物址実測図

35）第35号掘立柱建物址

遺構（第519図、図版35）

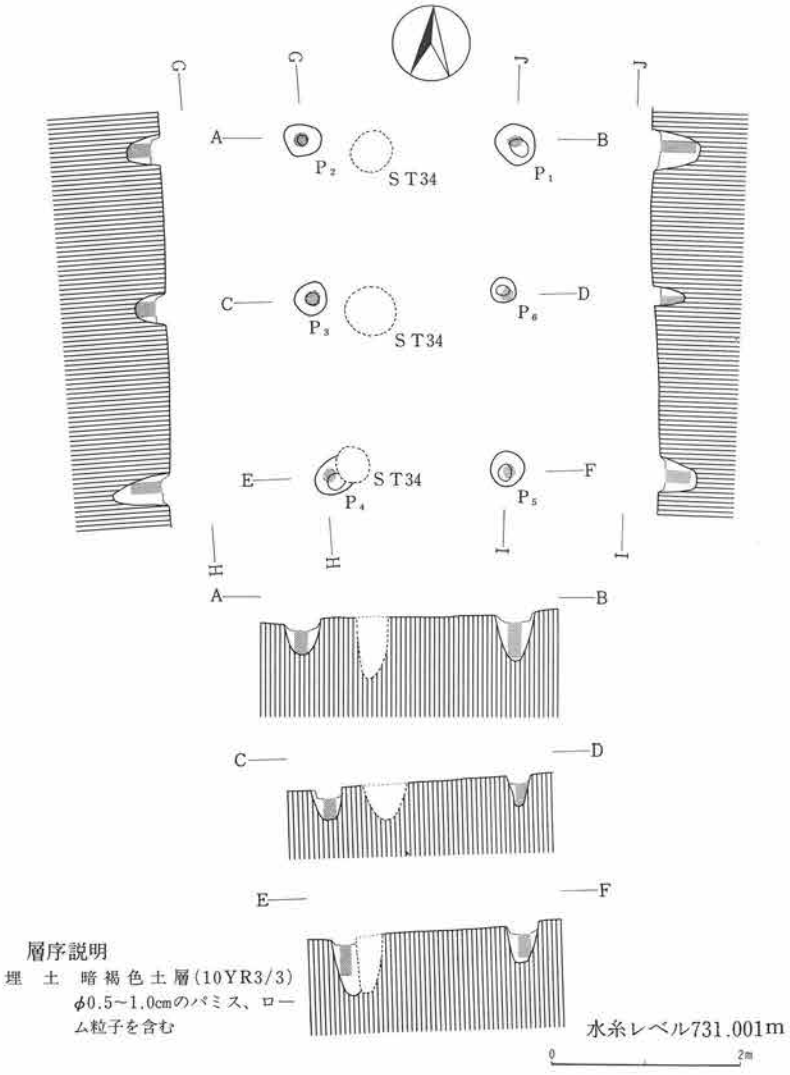
Ｃ－３グリッドに位置する。第34号掘立柱建物址と重複関係を有し、第34号掘立柱建物址に切られている。東西264cm、南北396cmを測り、平面プランは、梯形を呈する。

１間×２間の側柱式の掘立柱建物で、柱間は、東西176～210cm、南北150～175cmを測る。

南北軸の方位は、Ｎ－7.5°－Ｗを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

出土遺物は皆無であり、本遺構の所産期は、重複関係から平安時代以前と考えられる。



第519図　第35号掘立柱建物址実測図

36）第36号掘立柱建物址

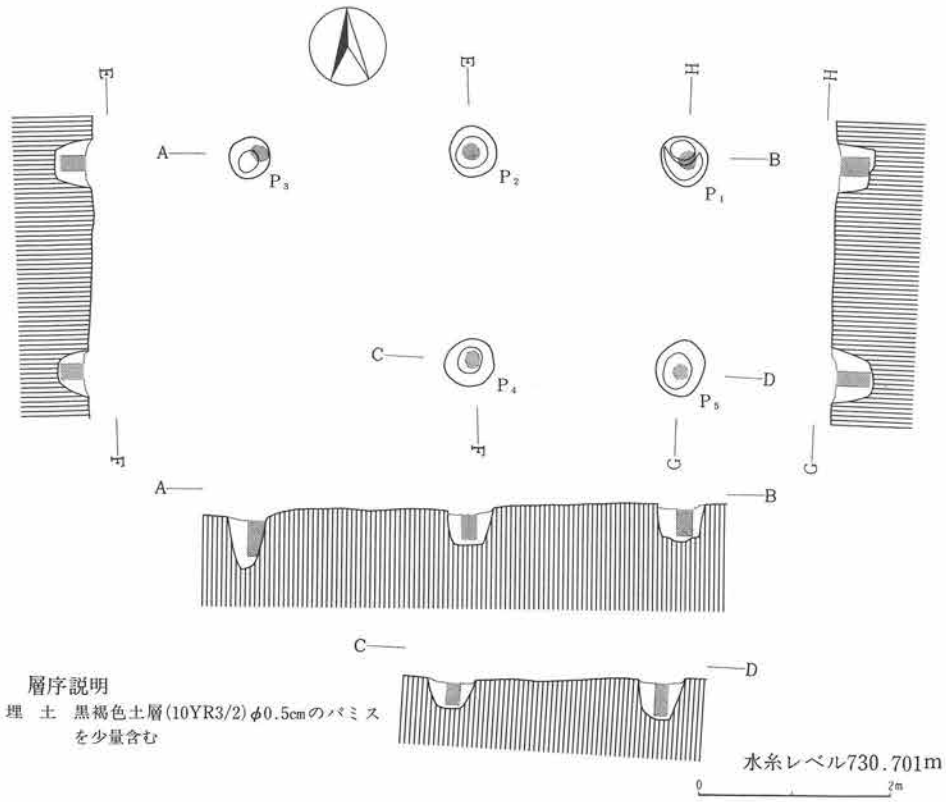
遺構（第520図、図版35）

Ｂ・Ｃ－３グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。東西505cm、南北277cmを測り、平面プランは、長方形を呈するものと思われる。２間×１間の側柱式の掘立柱建物と考えられ、柱間は、東西203～212cm、南北204～208cmを測る。南北軸の方位は、Ｎ－４°－Ｅを示す。

ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土している。本遺構の所産期は、出土土器片中に底部ヘラキリ後手持ちヘラケズリの須恵器杯の破片が認められることから奈良時代中葉以降と考えられる。



第520図　第36号掘立柱建物址実測図

37）第37号掘立柱建物址

遺構（第521図）

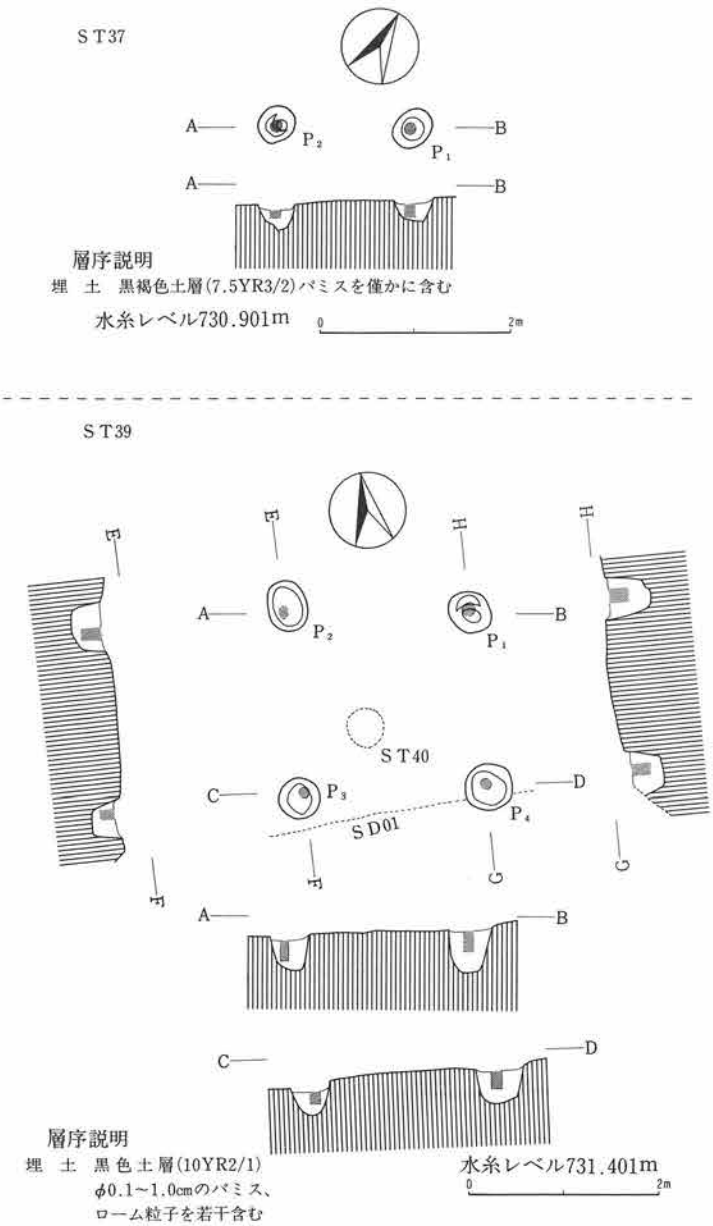
C－3グリッドに位置する。第38号掘立柱建物址と重複関係を有する。2基のピットが検出されたにとどまり、東西185cm、柱間は129cmを測る。

南北軸の方位は、N－28°－Wを示す。ピット掘形の平面プランは、楕円形である。

遺物

土師器片が出土している。

本遺構の所産期は、出土土器片中に外稜口辺を有する土師器杯の破片が認められることから古墳時代後期後葉以降と考えられる。



第521図　第37・39号掘立柱建物址実測図

38）第38号掘立柱建物址

遺構（第522図、図版36）

Ｃ－３グリッドに位置する。

第37号掘立柱建物址と重複関係を有する。東西350cm、南北387cmを測り、平面プランは、正方形を呈する。２間×２間の側柱式の掘立柱建物で、柱間は東西110～277cm、南北140～317cmを測る。

南北軸の方位は、Ｎ－14°－Ｅを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

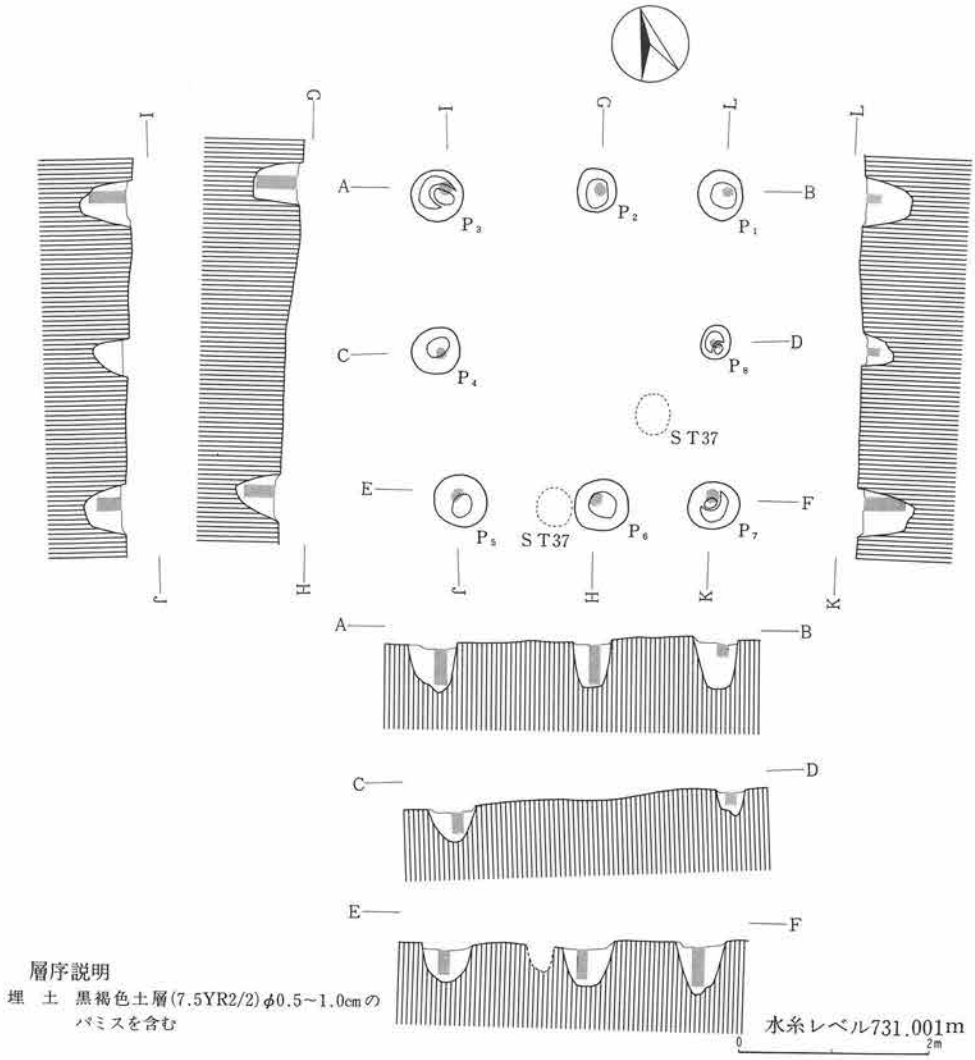
遺物

須恵器杯の破片が出土している。本遺構の所産期は、出土土器片から奈良時代後葉と考えられる。

39）第39号掘立柱建物址

遺構（第521図、図版36）

Ｃ－３グリッドに位置する。第30号住居址、第40号掘立柱建物址、第１号溝址と重複関係を有し、第30号住居址、第１号溝址を切っている。東西248cm、南北253cmを測り、平面プランは、正方形を呈する。１間×１間の側柱式の掘立柱建物で、柱間は、東西181～184cm、南北173～181cm



第522図　第38号掘立柱建物址実測図

を測る。南北軸の方位は、N－12°－Eを示す。ピット掘形の平面プランは、楕円形である。

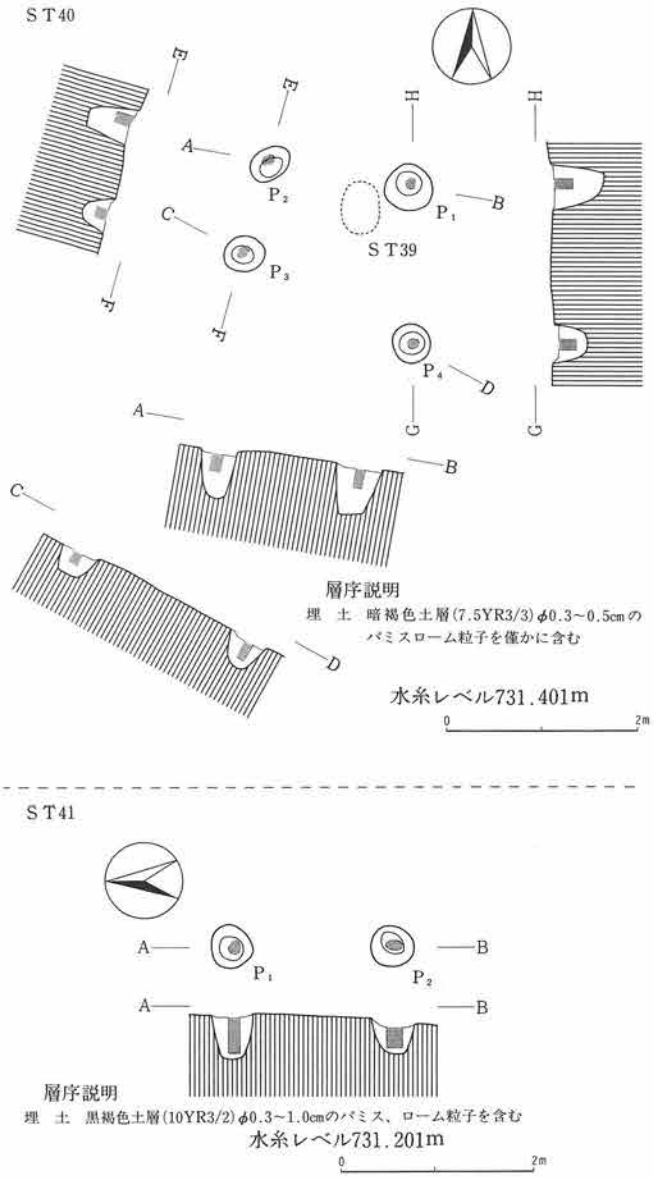
遺物

出土遺物は皆無である。本遺構の所産期は、重複関係から平安時代以降と考えられる。

40）第40号掘立柱建物址

遺構（第523図）

C－3グリッドに位置する。第39号掘立柱建物址と重複関係を有する。東西243cm、南北213cmを測り、平面プランは、梯形を呈する。1間×1間の側柱式の掘立柱建物で、柱間は、東西140～194cm、南北91～160cmを測る。



第523図　第40・41号掘立柱建物址実測図

南北軸の方位は、N－2°－Wを示す。ピット掘形の平面プランは、楕円形である。

遺物

出土遺物は皆無であり、本遺構の所産期についても明確でない。

41）第41号掘立柱建物址

遺構（第523図）

C－3グリッドに位置する。

他遺構との重複関係はない。

2基のピットが検出されたにとどまり、南北216cm、柱間は155cmを測る。

南北軸の方位は、N－1°－Eを示す。ピット掘形の平面プランは、楕円形である。

遺物

出土遺物は皆無であり、本遺構の所産期についても明確でない。

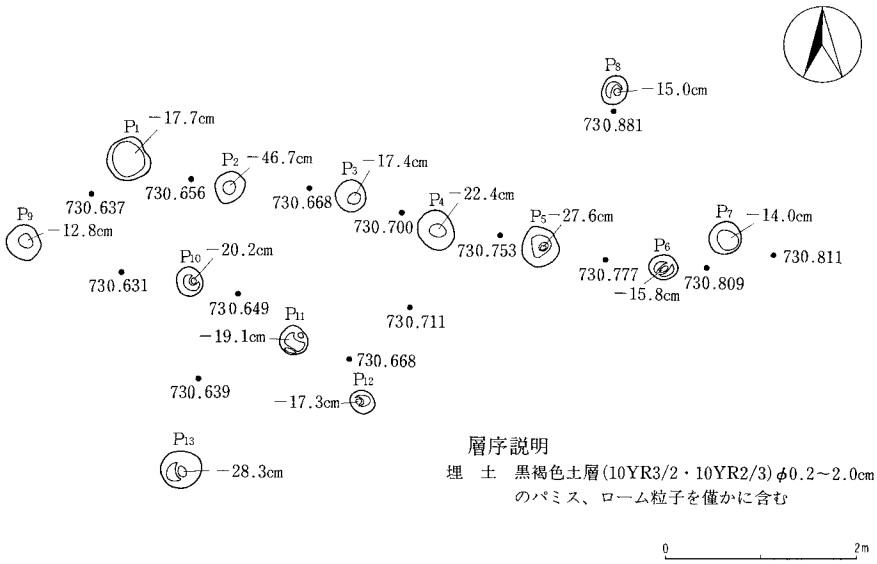
42）第42号掘立柱建物址

遺構（第524図）

B－2・3グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。明確なまとまりがなく、ピット群とされるべきものであるが、一応、掘立柱建物址に含めた。なお、図中の深さは確認面からのものを示した。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

土師器片、黒色土器片が出土している。このうち、P_7出土土器片には、黒色土器皿の破片が認められた。



第524図　第42号掘立柱建物址実測図

43）第43号掘立柱建物址

遺構（第525図）

Ｂ－２グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。２基のピットが検出されたにとどまり、東西230cm、柱間は、185cmを測る。

南北軸の方位は、Ｎ－８°－Ｅを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土している。本遺構の所産期は、出土土器片中にロクロ調整の黒色土器杯の破片が認められることから奈良時代後葉以降と考えられる。

44）第44号掘立柱建物址

遺構（第525図）

Ｂ－２グリッドに位置する。第10号住居址と重複関係を有し、第10号住居址に切られている。

東西203cm、南北191cmを測る。１間×１間の側柱式の掘立柱建物と考えられるが、３基のピットが検出されたにとどまる。柱間は、東西135cm、南北137cmを測る。

南北軸の方位は、Ｎ－11°－Ｅを示す。ピット掘形の平面プランは、楕円形である。

遺物

土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土している。本住居址の所産期は、出土土器片および重複関係から奈良時代後葉以前と考えられる。

45）第45号掘立柱建物址

遺構（第525図）

Ｃ－２・３グリッドに位置する。第15号住居址と重複関係を有し、第15号住居址に切られている。東西165cm、南北168cmを測る。１間×１間の側柱式の掘立柱建物と考えられるが、３基のピットが検出されたにとどまる。柱間は、南北106cmを測る。

南北軸の方位は、Ｎ－35°－Ｗを示す。ピット掘形の平面プランは、楕円形である。

遺物

出土遺物は皆無である。本遺構の所産期は、重複関係から奈良時代以前と考えられる。

46）第46号掘立柱建物址

遺構（第526図）

Ｃ－３グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

明確なまとまりがなく、ピット群とされるべきものであるが、一応、掘立柱建物址に含めた。

ピットの規模、深さは多様である。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土している。本遺構の所産期は、出土土器片から平安時代以降と考えられる。

47）第47号掘立柱建物址

遺構（第527図）

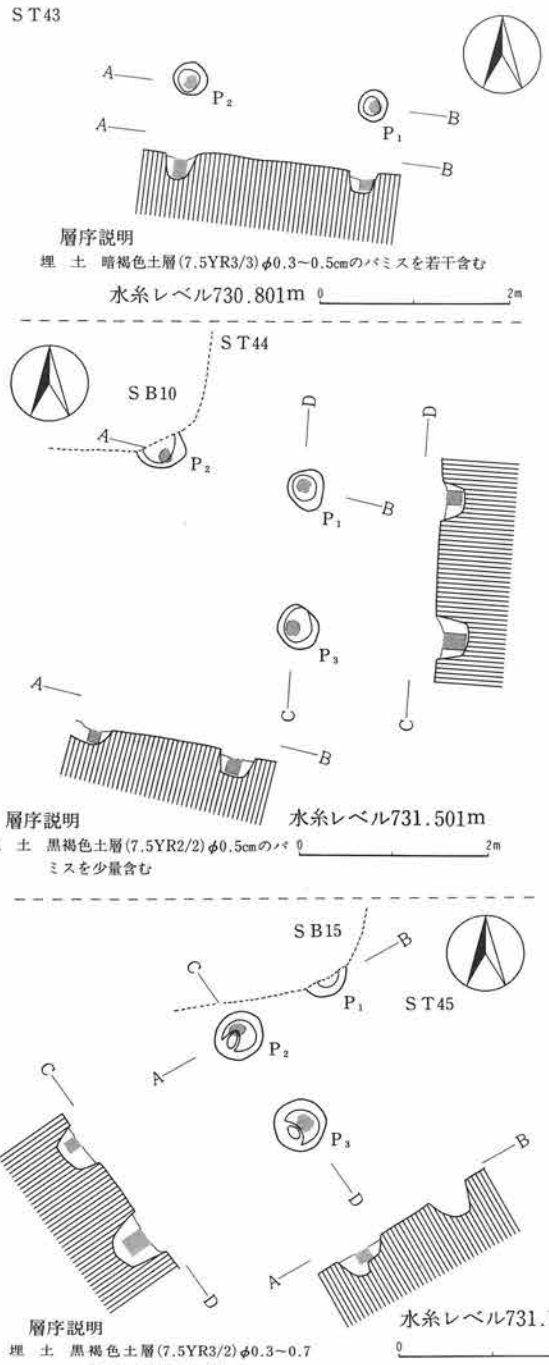
Ａ・Ｂ－２グリッドに位置する。第４号住居址、第31号掘立柱建物址と重複関係を有し、第４号住居址、第31号掘立柱建物址に切られている。

３基のピットが検出されたにとどまり、東西430cm、柱間は、165～184cmを測る。

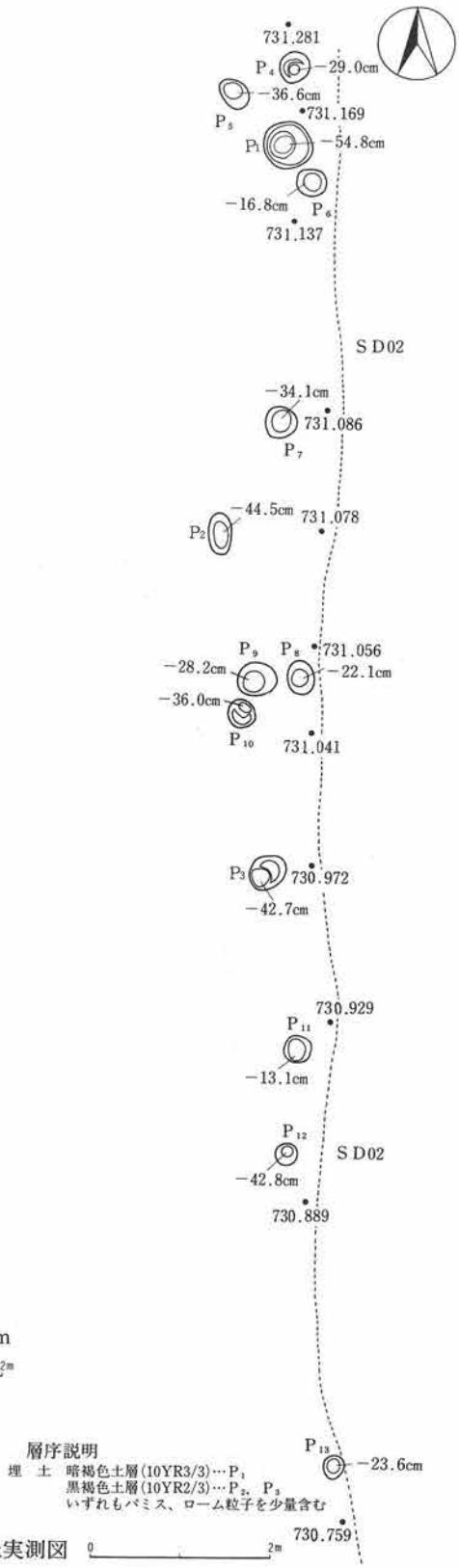
南北軸の方位は、Ｎ－７°－Ｗを示す。ピット掘形の平面プランは、楕円形である。

遺物

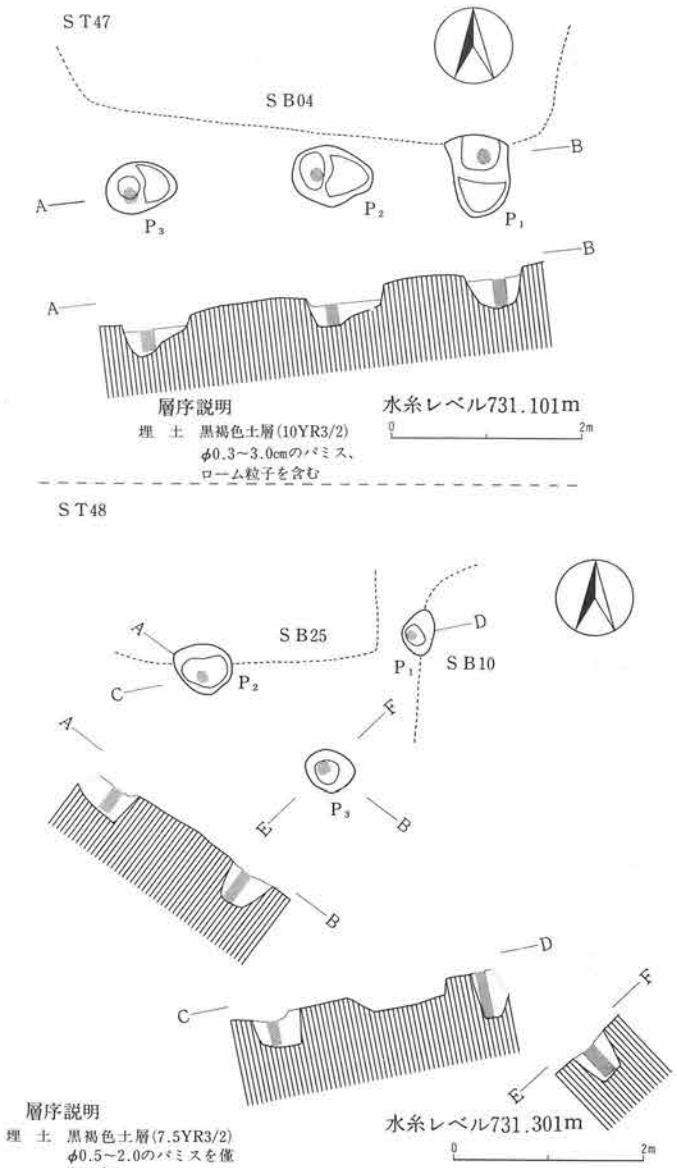
出土遺物は皆無である。本遺構の所産期は、重複関係から奈良時代後葉以前と考えられる。



第525図　第43～45号掘立柱建物址実測図



第526図　第46号掘立柱建物址実測図



第527図　第47・48号掘立柱建物址実測図

48）第48号掘立柱建物址

遺構（第527図）

Ｂ－２グリッドに位置する。

第10・25号住居址、第49号掘立柱建物址と重複関係を有し、第10・25号住居址、第49号掘立柱建物址を切って構築されている。

東西274cm、南北230cmを測る。１間×１間の側柱式の掘立柱建物と考えられるが、３基のピットが検出されたにとどまる。

柱間は216cm、南北149cmを測る。

南北軸の方位は、Ｎ－11°－Ｗを示す。

ピット掘形の平面プランは、楕円形である。

遺物

出土遺物は皆無である。

本遺構の所産期は、重複関係から奈良時代後葉以降と考えられる。

49）第49号掘立柱建物址

遺構（第528図）

Ｂ－２グリッドに位置する。第25号住居址、第48号掘立柱建物址と重複関係を有し、第25号住居址を切り、第48号掘立柱建物址に切られている。東西355cm、南北389cmを測る。

３間×１間の側柱式の掘立柱建物と考えられるが、６基のピットが検出されたにとどまる。

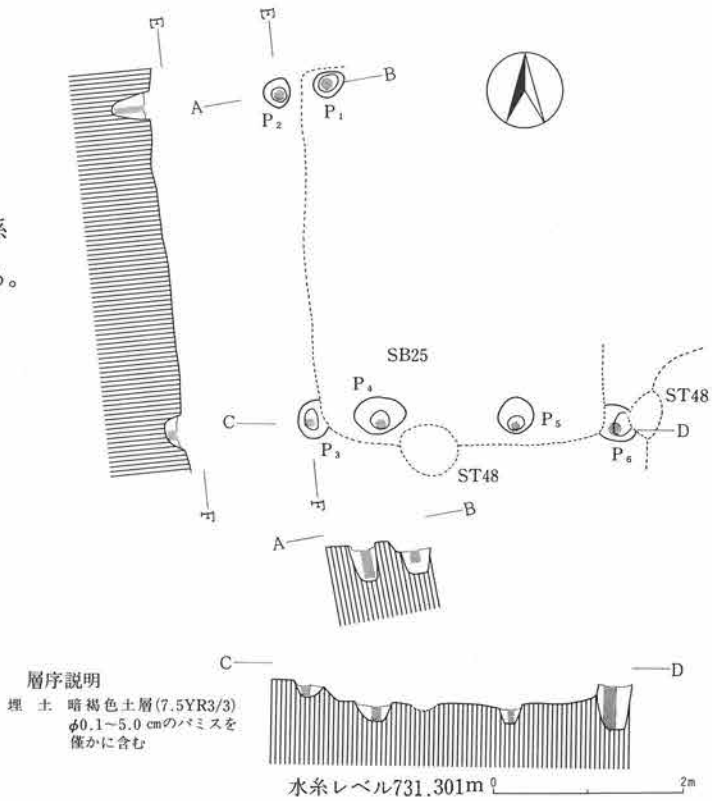
柱間は、東西40～134cm、南北342～358cmを測る。南北軸の方位は、Ｎ－５°－Ｗを示す。

ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

出土遺物は皆無である。

本遺構の所産期は、重複関係から奈良時代以降と考えられる。



第528図　第49号掘立柱建物址実測図

50）第50号掘立柱建物址

遺構（第529図、図版36）

Ｂ－２グリッドに位置する。第34号住居址と重複関係を有し、第34号住居址を切って構築されている。東西330cm、南北440cmを測り、平面プランは、長方形を呈する。

２間×２間の総柱式の掘立柱建物で、柱間は、東西103～145cm、南北153～194cmを測る。

南北軸の方位は、Ｎ－１°－Ｅを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

土師器片、須恵器片が出土している。本遺構の所産期は、出土土器片および重複関係から平安時代以降と考えられる。

51）第51号掘立柱建物址

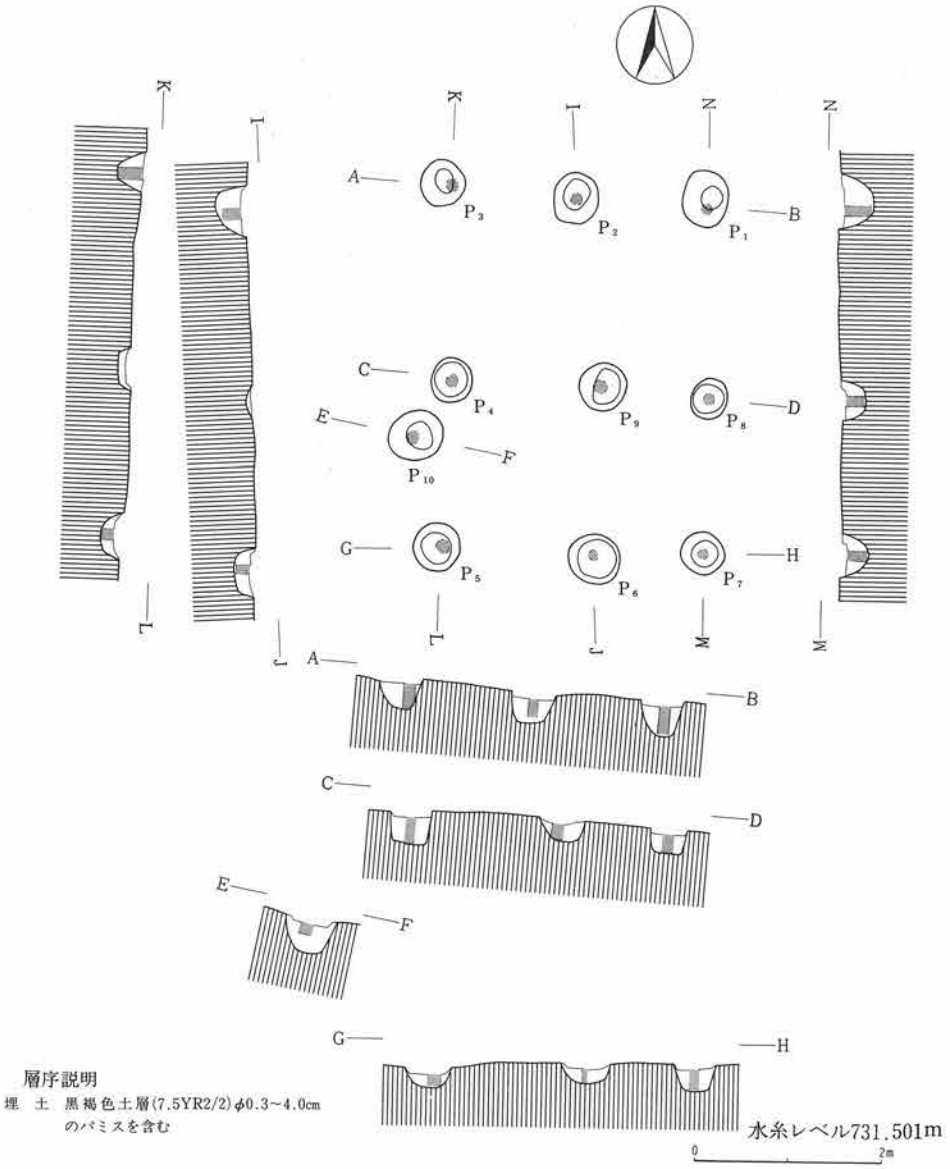
遺構（第530図）

Ｂ－２グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。

3基のピットが検出されたにとどまる。東西193cm、南北196cm、柱間は、東西120cm、南北130cmを測る。南北軸の方位は、N－8°－Wを示す。ピット掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

遺物

P_3から奈良時代に比定される須恵器蓋の破片が1点出土していることから、本遺構の所産期は奈良時代以降と考えられる。



第529図　第50号掘立柱建物址実測図

52）第52号掘立柱建物址

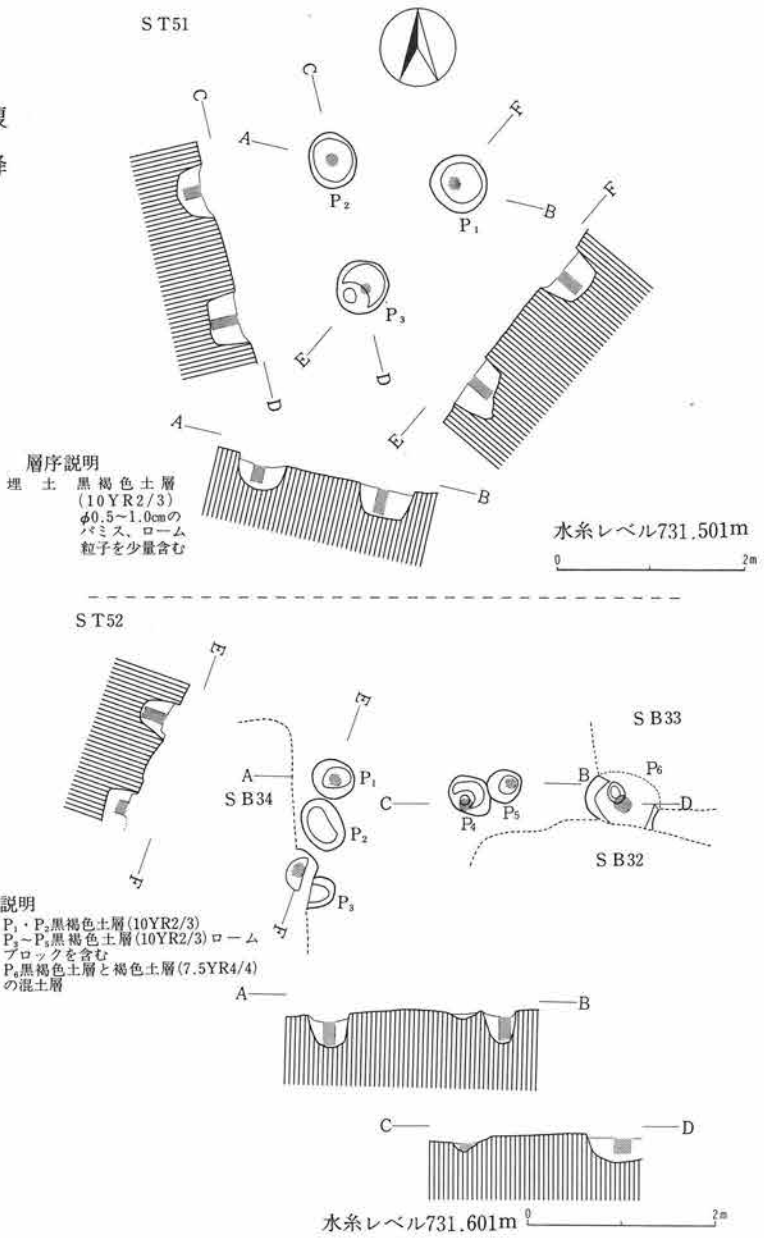
遺構（第530図）

Ｂ・Ｃ－２グリッドに位置する。第32・34号住居址と重複関係を有し、第32・34号住居址を切って構築されている。東西373㎝、南北159㎝を測る。柱間は、東西40～174㎝、南北91㎝を測る。南北軸の方位は、Ｎ－３°－Ｅを示す。ピット掘形の平面プランは、楕円形である。

遺物

出土遺物は皆無である。

本遺構の所産期は、重複関係から奈良時代後葉以降と考えられる。



第530図　第51・52号掘立柱建物址実測図

(3) 溝　　址

1）第1号溝址

遺構（第531図、図版36）

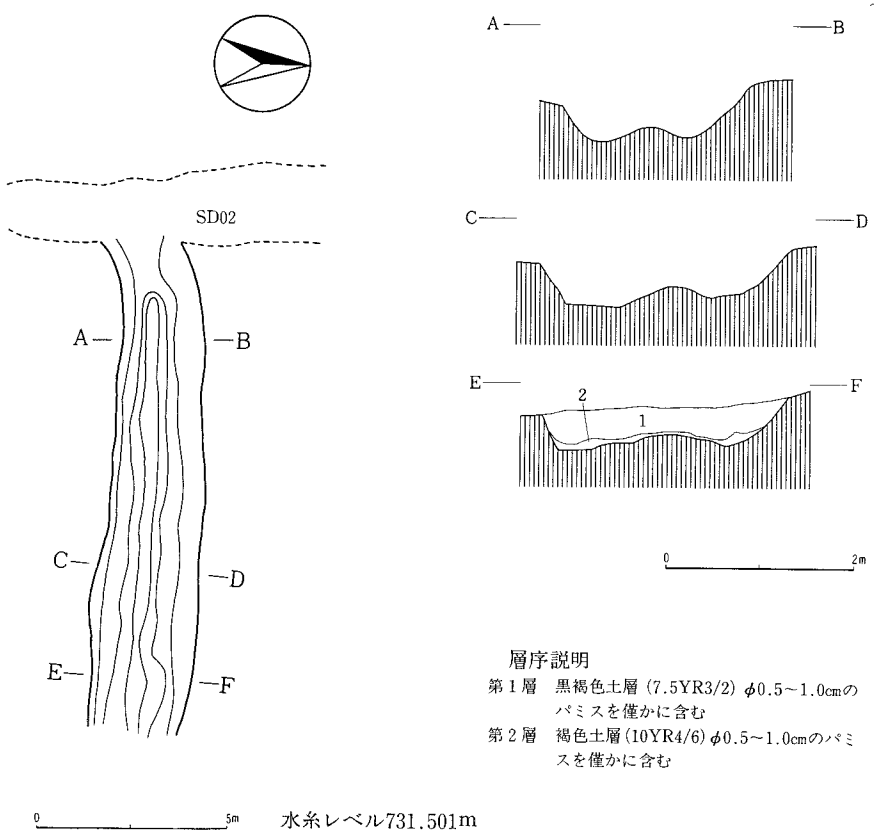
C・D－3グリッドに位置する。第27号住居址、第39号掘立柱建物址、第2号溝址と重複関係を有し、第27号住居址を切り、第39号掘立柱建物址に切られている。

東西にほぼ直線的に延びる遺構で、調査区域内において調査された部分は、約133mの範囲である。遺構覆土は2層に区分されるが、うち第1層の黒褐色土層（7.5YR3/2）が大半を占める。

溝巾は205～290cm、深さ38～59cmを測る。なお、底面には砂の堆積はなく、水の流れた痕跡は認められなかった。

遺物

土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土しているが、図示し得るものは皆無である。本遺構の



第531図　第1号溝址実測図

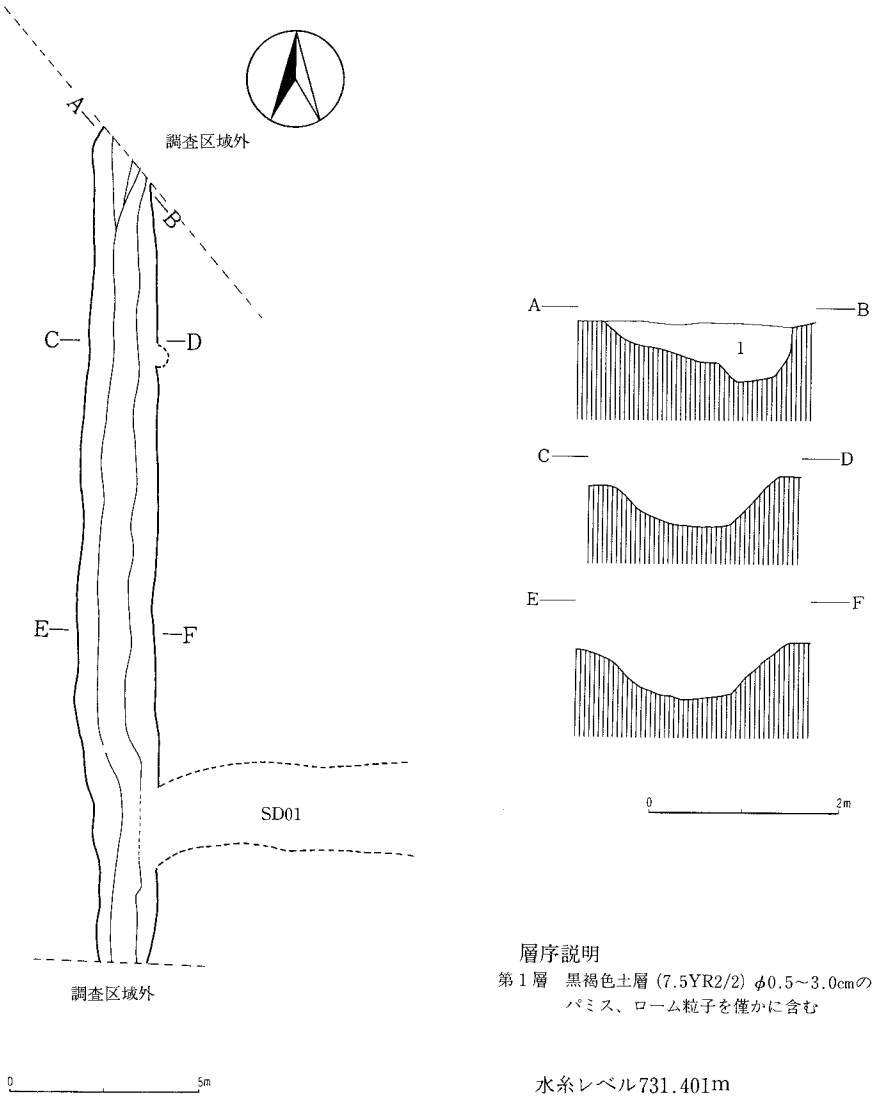
所産期は、出土土器片および重複関係から奈良時代前葉には開削され、奈良時代末には、ほとんど埋まったものと考えられる。

2）第2号溝址

遺構（第532図、図版36）

C－2・3グリッドに位置する。第29号住居址、第1号溝址と重複関係を有し、第29号住居址を切っている。第1号溝址との先後関係については不明である。

南北にほぼ直線的に延びる遺構で、調査区域内において調査された部分は、約223mの範囲であ



第532図　第2号溝址実測図

る。遺構覆土は、黒褐色土層（7.5YR2/2）、１層である。溝巾は150～215cm、深さ52～63cmを測る。なお、底面には砂の堆積はなく、水の流れた痕跡は認められなかった。

遺物

土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土しているが図示し得るものは皆無である。本遺構の所産期は、重複関係および出土土器片中に黒色土器椀の破片が認められることから、古墳時代後期後葉以降に開削され、平安時代にはほとんど埋まったものと考えられる。

３）第３号溝址

遺構（第533図、図版36）

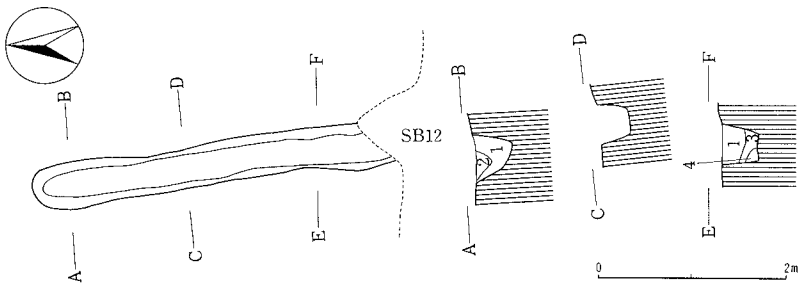
Ｂ－２グリッドに位置する。第12号住居址と重複関係を有し、第12号住居址に切られている。南北にほぼ直線的に延びる遺構で、調査された部分は、約390cmの範囲である。

遺構覆土は４層に区分される。溝巾は41～50cm、深さ33～42cmを測る。

溝の掘形は、逆梯形状である。なお、底面に水の流れた痕跡は認められなかった。

遺物

出土遺物は皆無である。本遺構の所産期は、重複関係から奈良時代後葉以前と考えられる。



層序説明

第１層　極暗褐色土層（7.5YR2/3）φ0.5～1.0cmのパミスを少量含む
第２層　暗褐色土層（7.5YR3/3）φ1.0～1.5cmのパミスを少量含む
第３層　にぶい橙色土層（7.5YR6/4）φ0.1～0.3cmのパミスを少量含み、ローム粒子を多く含む
第４層　褐色土層（7.5YR4/4）φ0.5～1.0cmのパミスを少量含む

第533図　第３号溝址実測図

(4)　土　　坑

１）第１号土坑

遺構（第534図、図版36）

Ｂ－２グリッドに位置する。第31号掘立柱建物址と重複関係を有する。東西85cm、南北81cmを

測り、平面プランは、楕円形を呈する。長軸方位は、E－38°－Nを示す。遺構覆土は、暗褐色土層1層で深さ37cmを測る。

遺物

出土遺物は皆無であり、本遺構の所産期についても明確でない。

2）第2号土坑

遺構（第534図、図版36）

B－1グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。東西132cm、南北293cmを測り、平面プランは、不整な楕円形を呈する。南北軸の方位は、N－6°－Eを示す。遺構覆土は、5層に区分され、深さ93cmを測る。

遺物

出土遺物は皆無であり、本遺構の所産期についても明確でない。

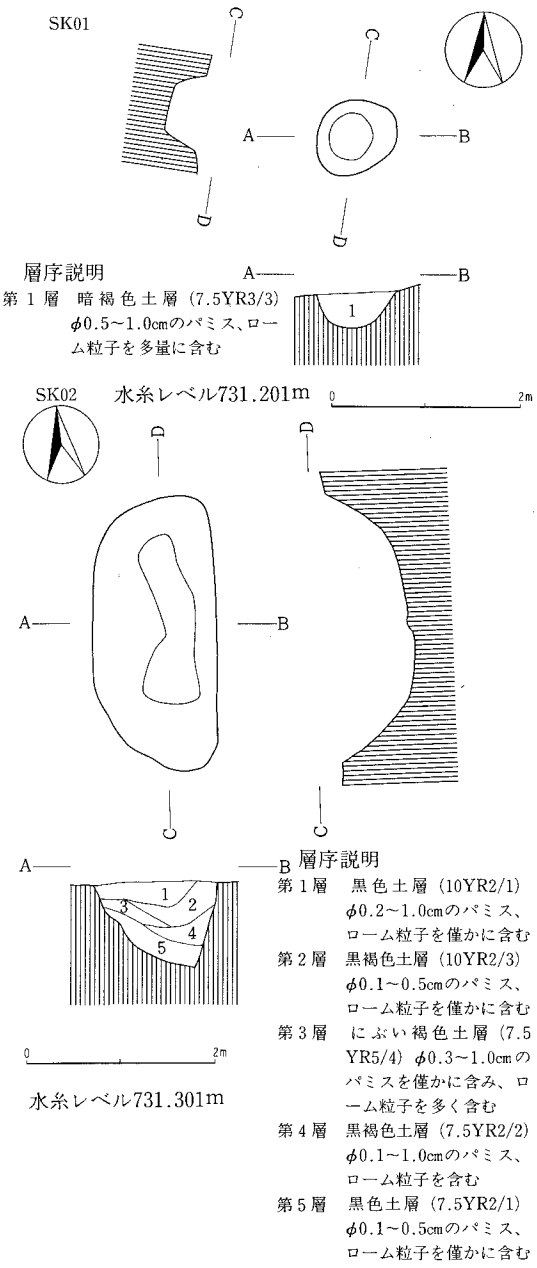
(5) 遺構外出土遺物

遺物（第541・543・545図、図版101・103～105）

遺構外出土遺物で図示したものに、縄文土器片、土師器杯、石製品がある。

縄文土器片（第545図11～16、18～26）は、自然流路出土のもの（15）を含んでいる。

いずれも前期の所産である。



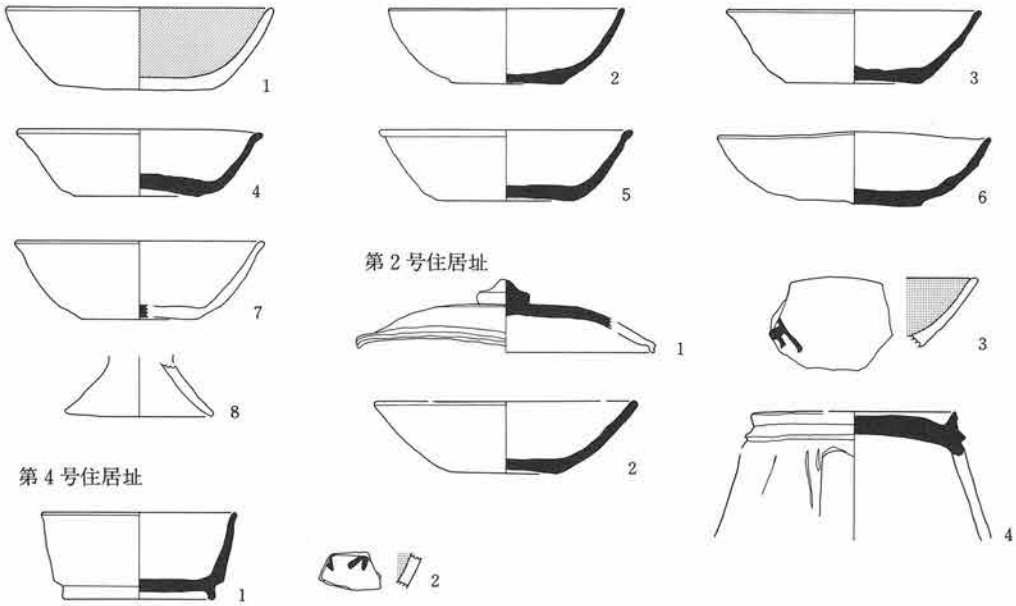
第534図　第1・2号土坑実測図

土師器杯（第541図1）は、復原作業の段階で所属不明となったものである。外稜口辺を有する丸底の杯で約1/2を欠く。古墳時代後期中葉に比定される。

石製品には、黒曜石製の打製石鏃（第543図3）と砂岩製の打製石斧（第544図9）がある。

打製石斧は、重さ40gを量る。

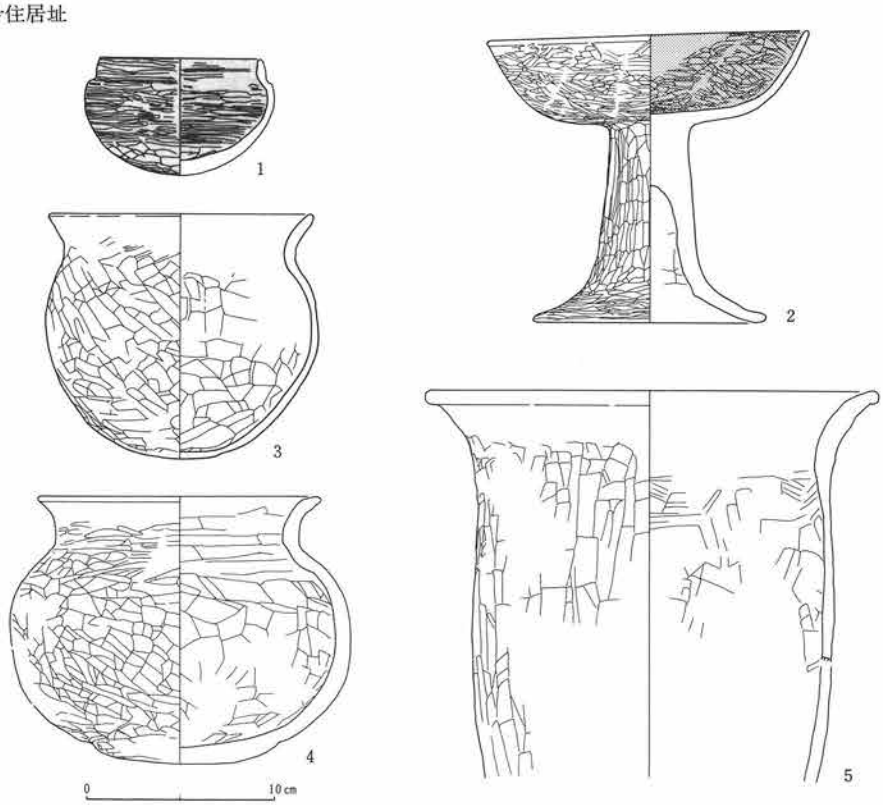
第1号住居址



第2号住居址

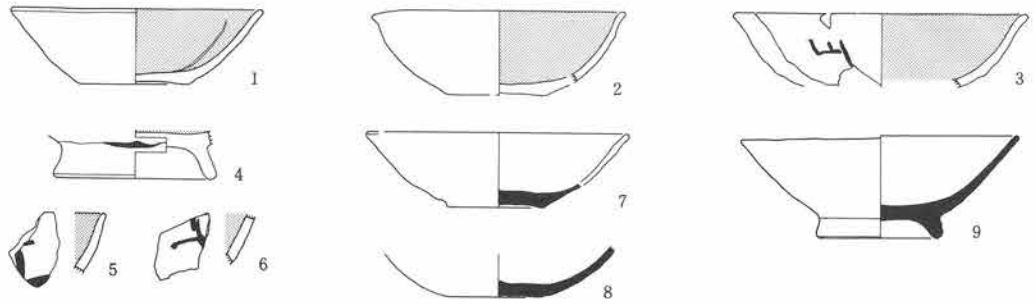
第4号住居址

第5号住居址

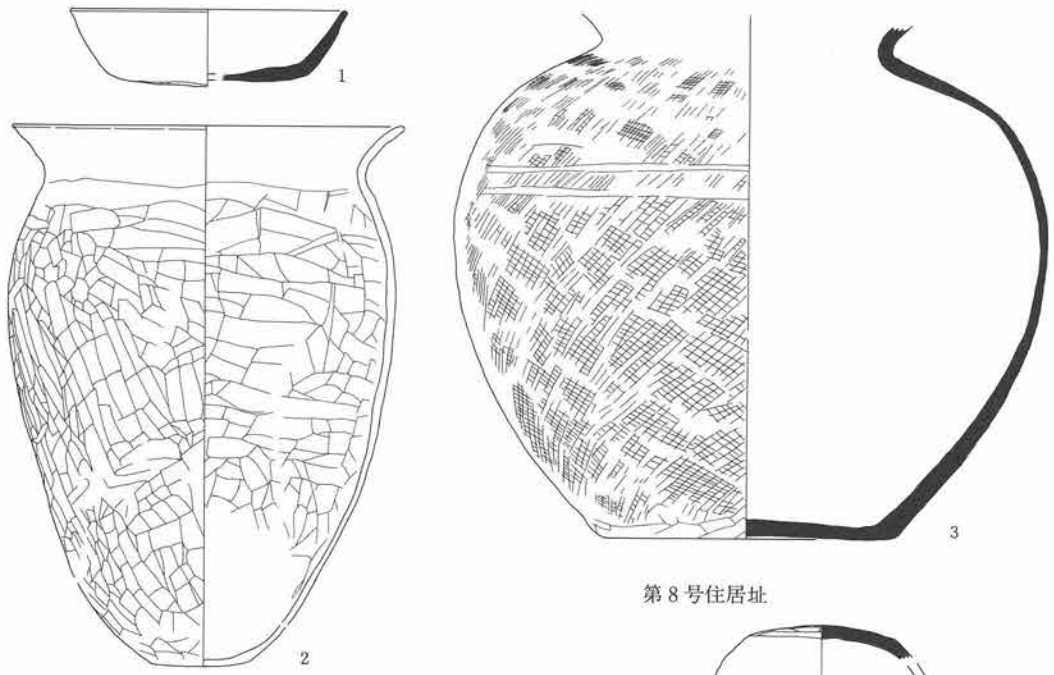


第535図　第1・2・4・5号住居址出土土器実測図

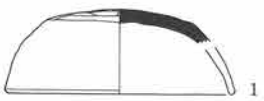
第6号住居址



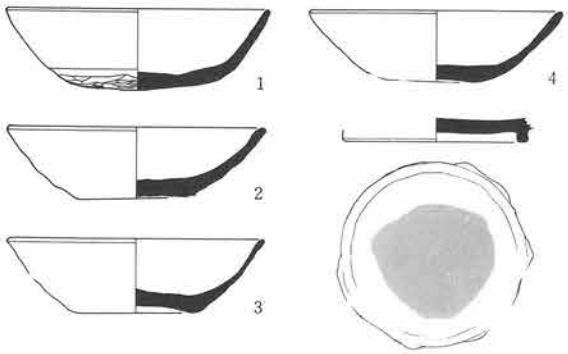
第7号住居址



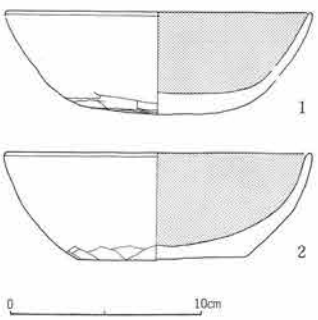
第8号住居址



第10号住居址

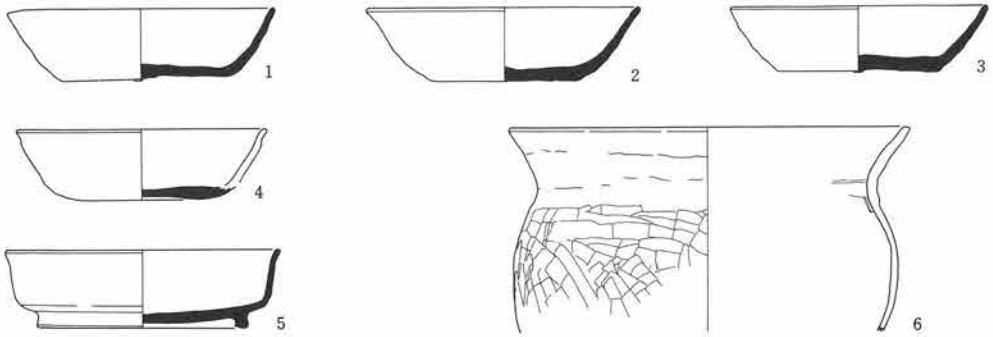


第11号住居址

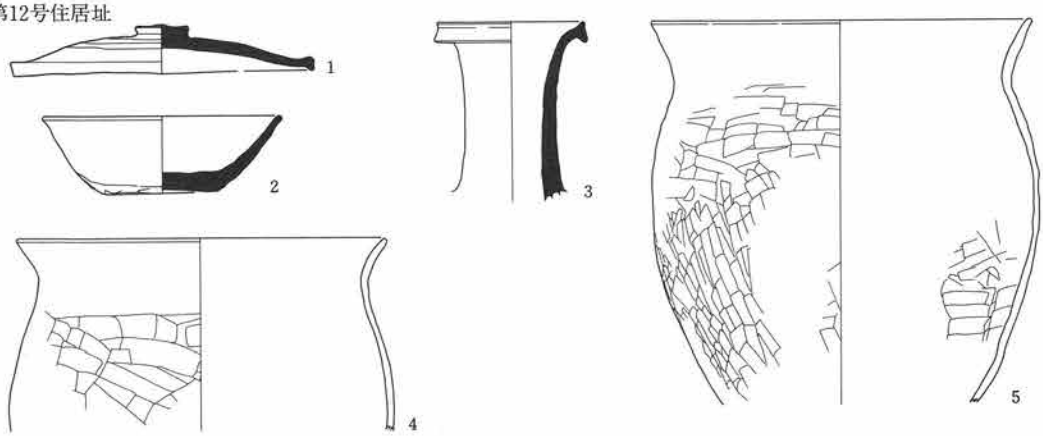


第536図　第6～8・10・11号住居址出土土器実測図

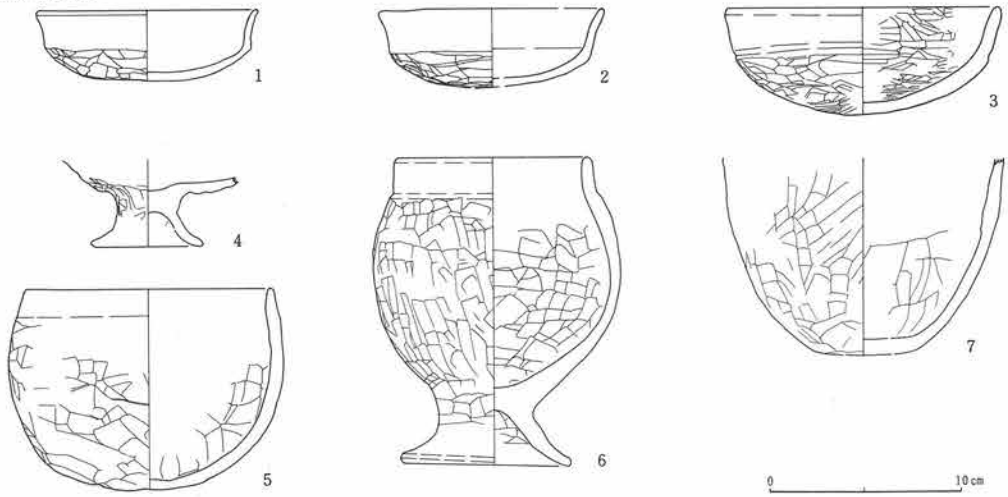
第11号住居址



第12号住居址

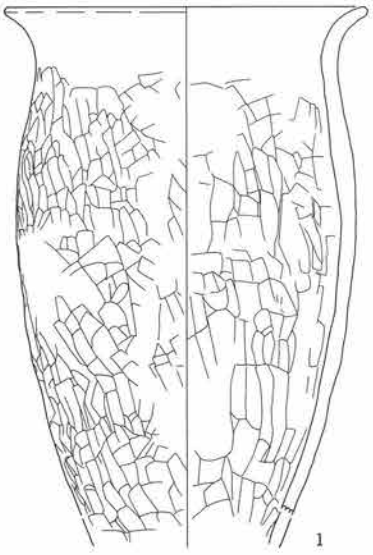


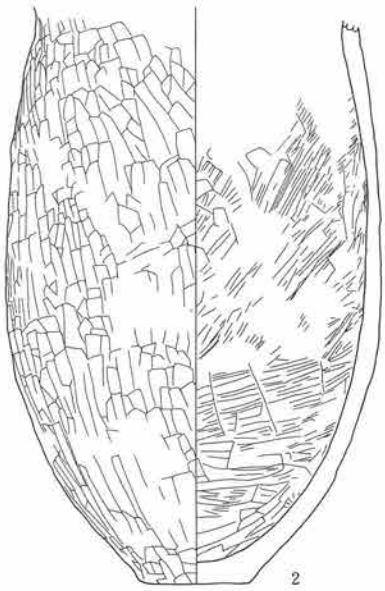
第13号住居址



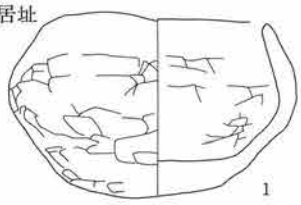
第537図　第11～13号住居址出土土器実測図

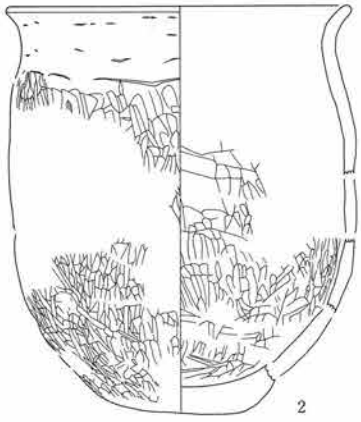
第13号住居址





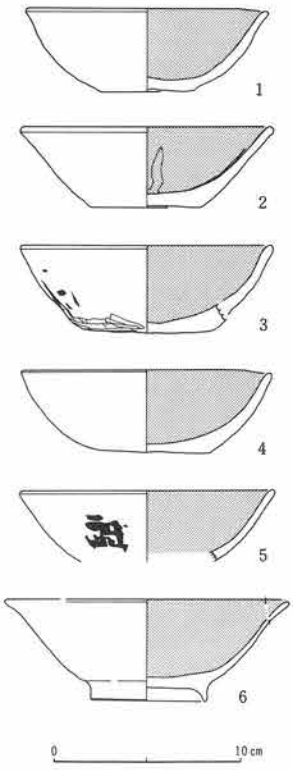
第14号住居址





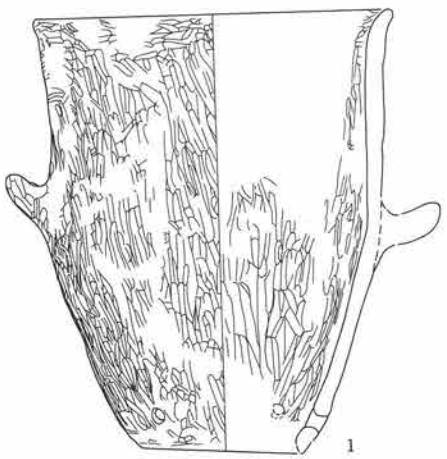
第16号住居址

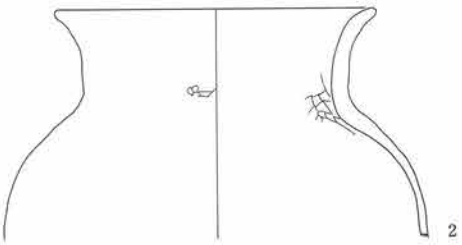
第17号住居址



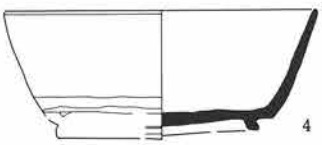
第538図　第13・14・16・17号住居址出土土器実測図

第18号住居址

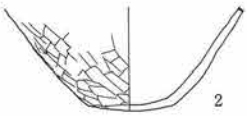


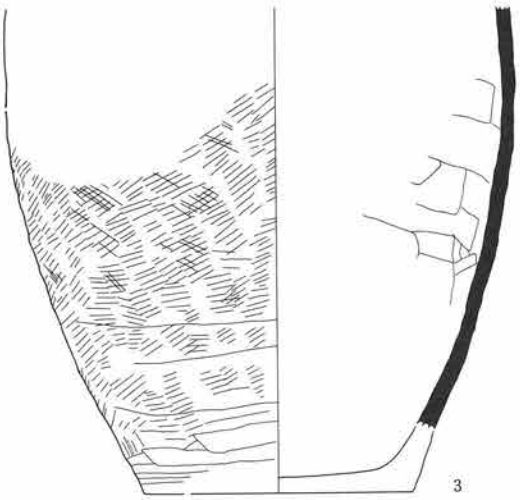


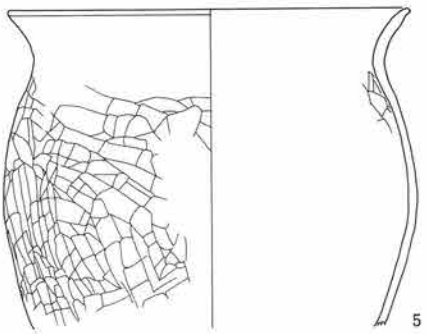
第19号住居址



第22号住居址

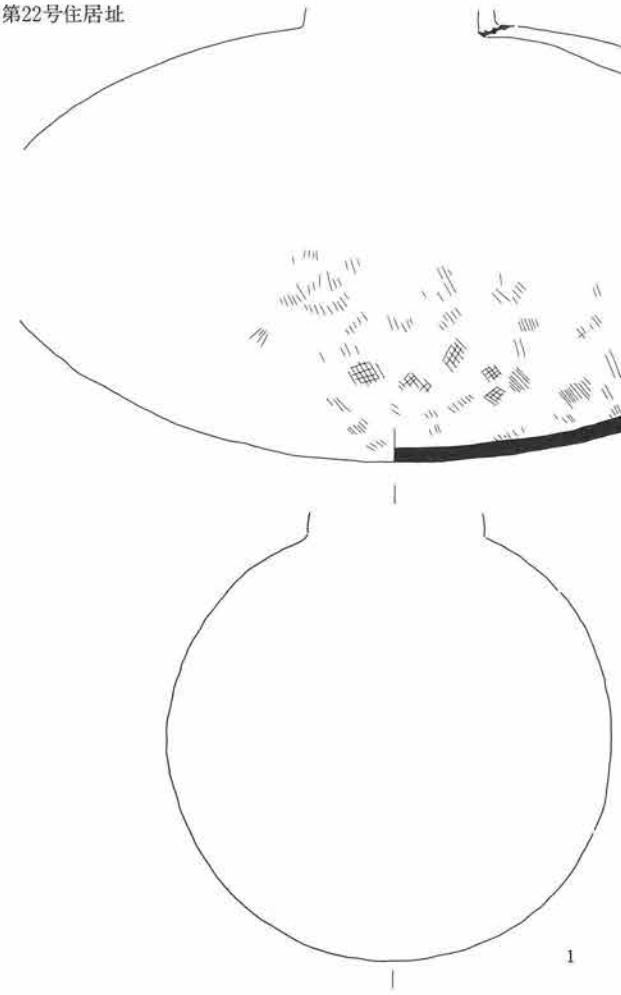




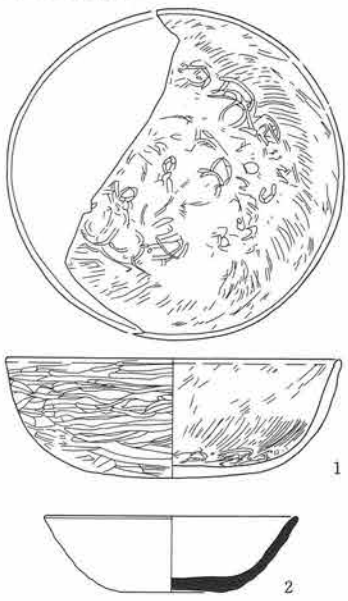


第539図　第18・19・22号住居址出土土器実測図

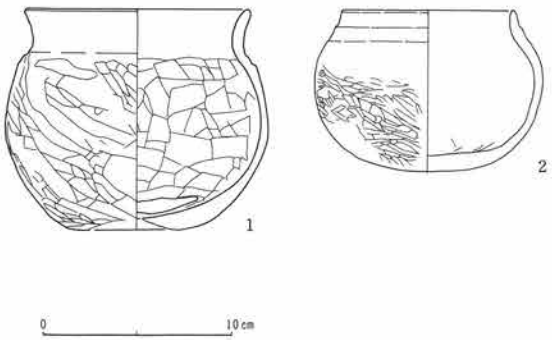
第22号住居址



第28号住居址

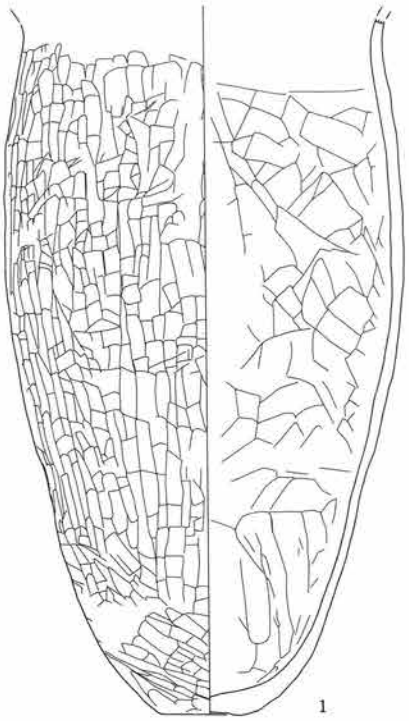


第30号住居址

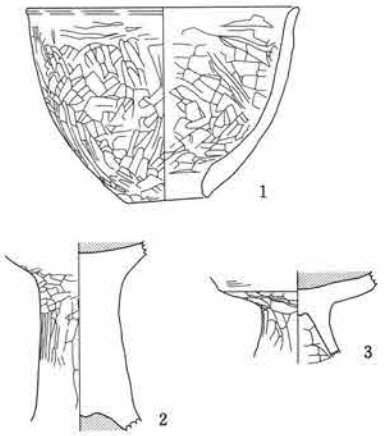


第540図　第22・28・30号住居址出土土器実測図

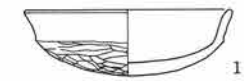
第30号住居址



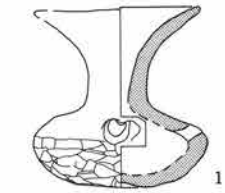
第35号住居址



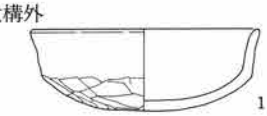
第７号掘立柱建物址



第15号掘立柱建物址

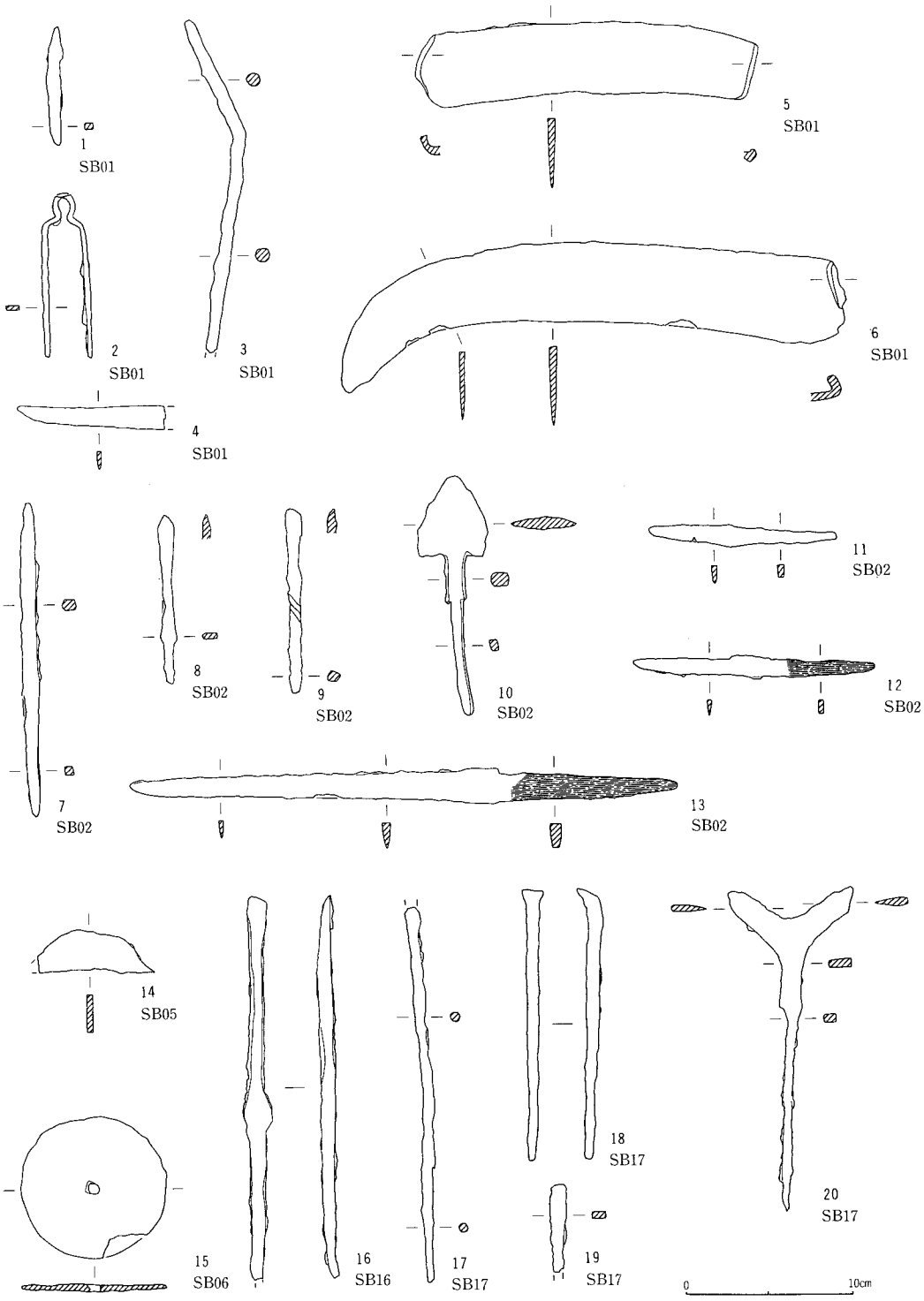


遺構外

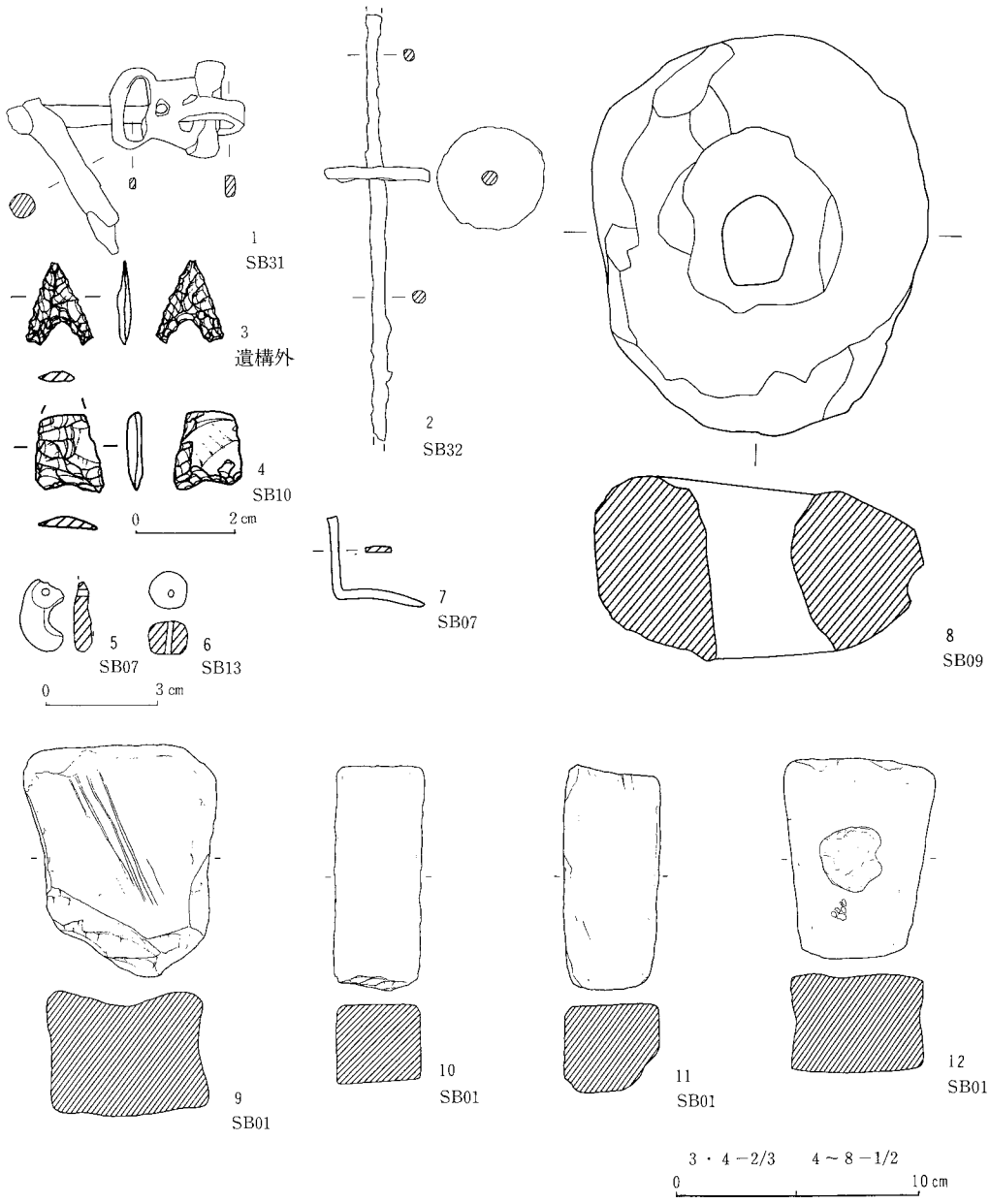


第33号住居址

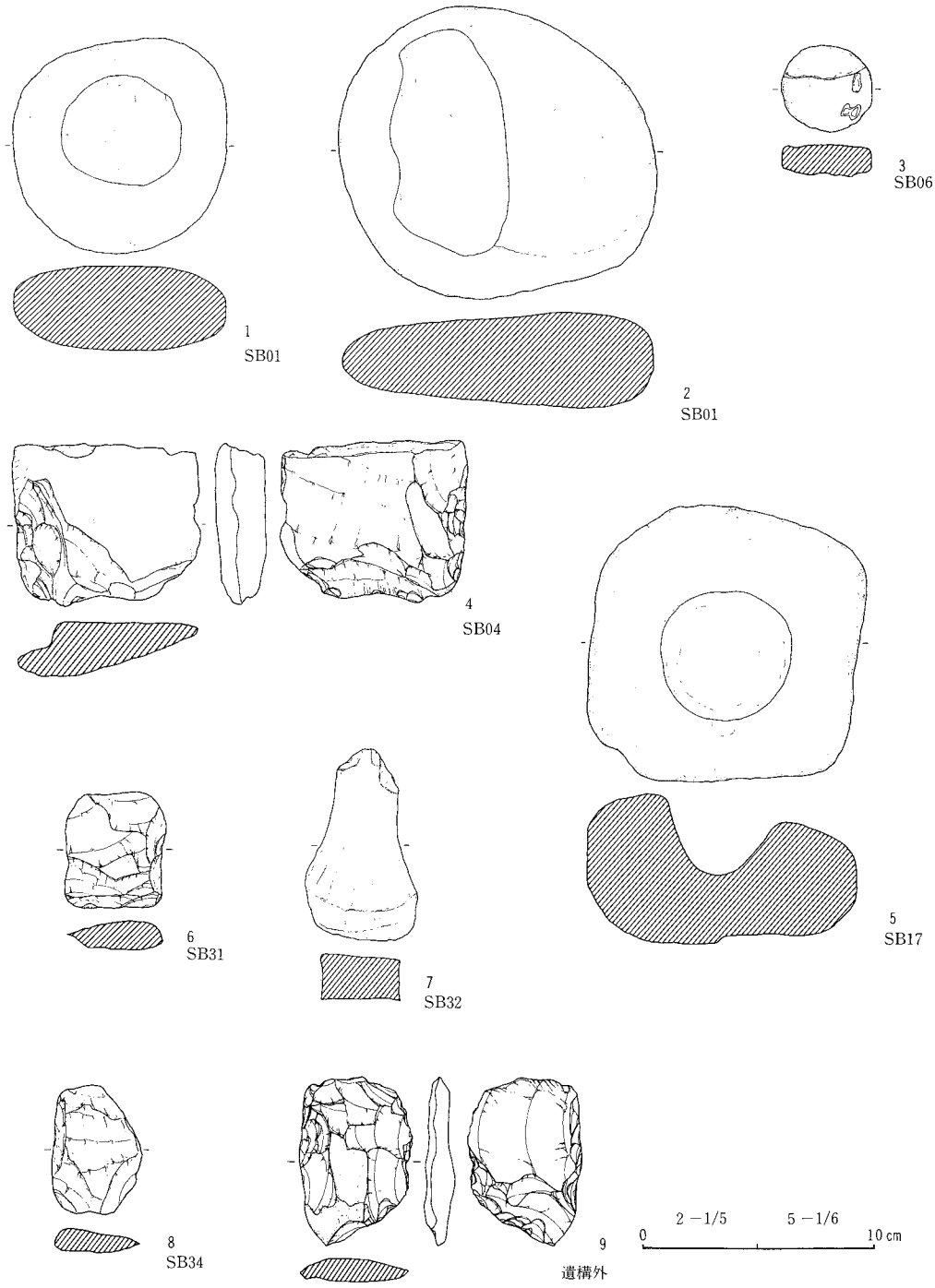
第541図　第30・33・35号住居址、第７・15号掘立柱建物址、遺構外出土土器実測図



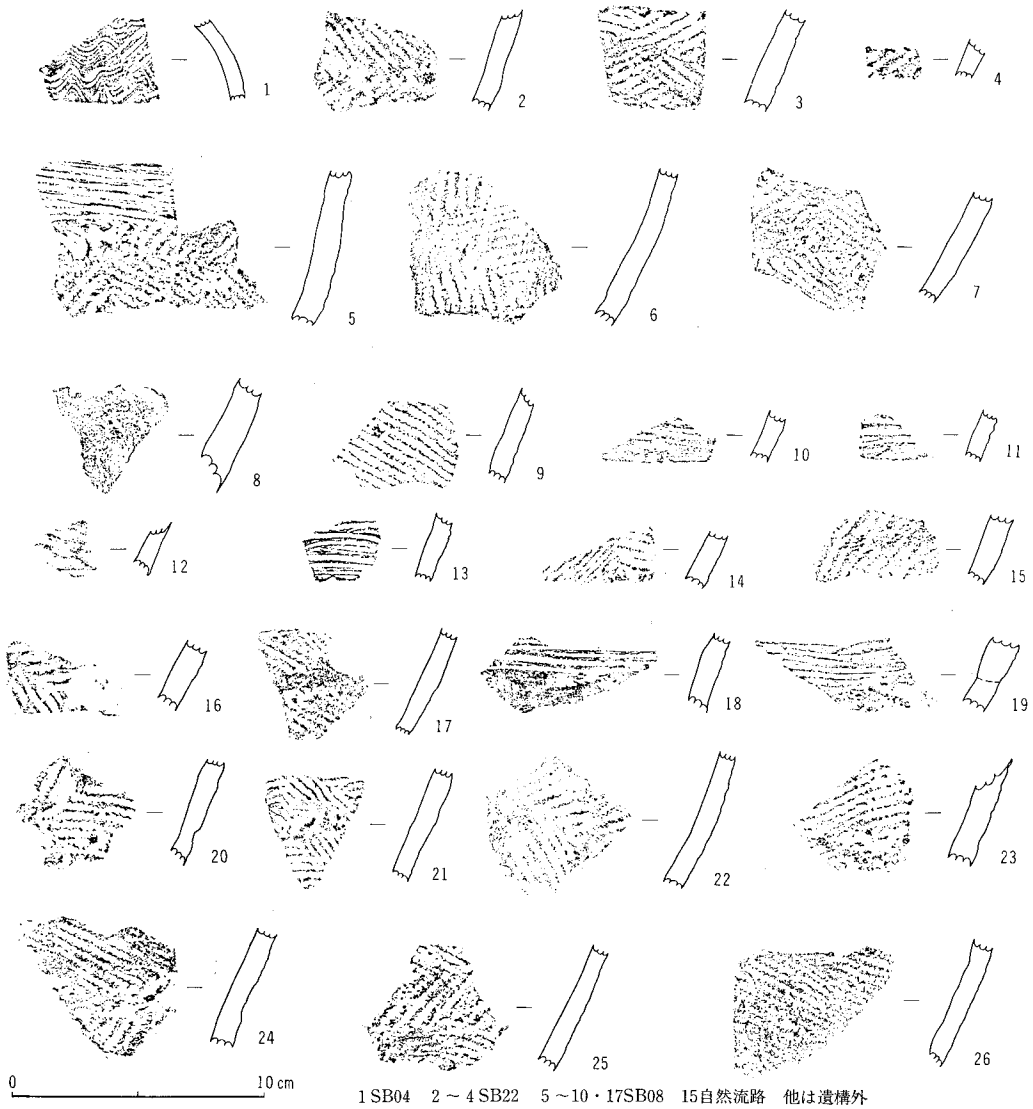
第542図　鉄製品実測図



第543図　金属製品・石製品実測図



第544図　石製品実測図



1 SB04　2～4 SB22　5～10・17SB08　15自然流路　他は遺構外

第545図　土器拓影図

V　総　　括

東下原・大下原・竹花・舟窪・大塚原遺跡において検出された各々の遺構・遺物については前述した。検出された遺構には、竪穴住居址、掘立柱建物址、溝址、土坑などがある。

一方、出土遺物には、土師器・黒色土器・須恵器・鉛釉陶器・灰釉陶器、石製品、土製品、金属製品、銭貨などがある。

これらの遺構・遺物が主体をなすのは、古墳時代後期から平安時代といえる。

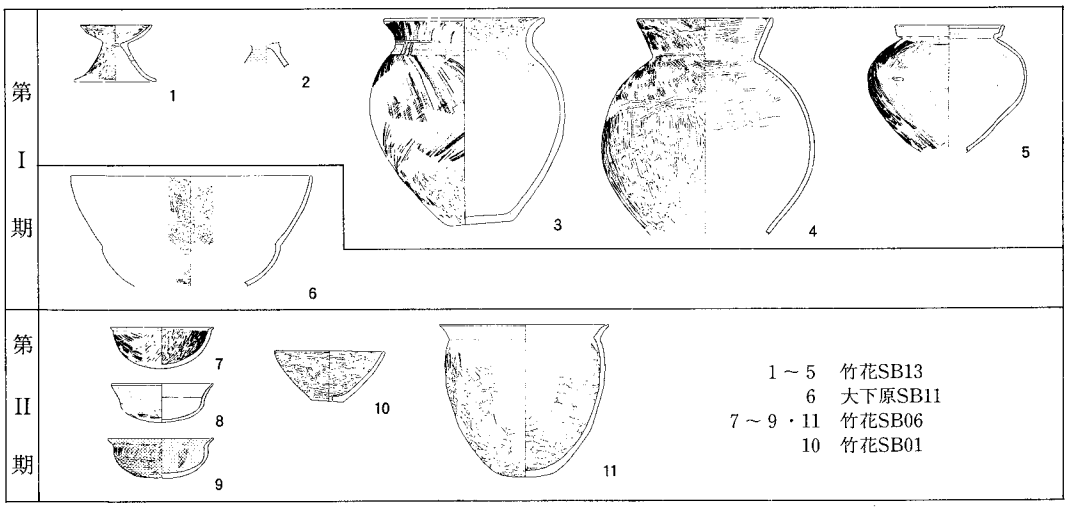
以下、五遺跡の遺構・遺物について一瞥することにしたい。

(1)　土器群の様相

東下原・大下原・竹花・舟窪・大塚原遺跡からは、竪穴住居址を中心に土器が出土している。

土器群には、縄文土器片・弥生土器片、中世の内耳土器片、青磁[1]、近世の陶器[2]なども散見されるが、ここでは主体をなす古墳時代後期から平安時代の土器の分類、編年的位置付けを行ない、その様相に述べることにしたい。なお、古墳時代前・中期については出土資料が少ないため、編年的位置付けだけにとどめておく。

古墳時代前期は、小型精製土器群のあり方により、二分される。前半と考えられるものには、竹花遺跡第13号住居址出土資料がある。小型器台が伴出する段階で、他の小型精製土器群については不明である。第13号住居址では、在地系土器のほか、S字状口縁台付甕、縄文の施文された甕といった外来系土器が認められた。先年調査された、小諸市和田原遺跡第１・３～６号住居址



第546図　第Ⅰ・Ⅱ期の土器

出土資料に併行するか、やや後出するものと考えられる。(3)

後半と考えられるものには、大下原遺跡第11号住居址出土資料があるが、図示し得たものは、大型の精製鉢1点である。小型丸底土器が確実に伴う段階で、布留式新段階のものであろう。

中期では、第1・6号住居址出土資料がある。内稜口辺を有する杯のほか、甕、甑がある。甑は、小型で鉢形を呈するものである。資料が少ないが、中期でも新しい様相を示しているものと言えよう。

以上、古墳時代前・中期の土器について見てきたが、続いて後期以降の土器について触れる。

土師器

杯A類　外稜口辺を有するもので内面の調整により二分した。

Ⅰ類（8～12・55・58・60～67・113・120・121）　内面をヘラミガキもしくは暗文を施すもの。外面はヘラミガキがなされる。

Ⅱ類（6・7・56・57・59・109～112・114～118・203）　内面をヨコナデするもの。底部外面はヘラケズリされるものが多い。

B類　素縁のもので、口辺部は内弯もしくは直立気味に立ち上がる。丸底。A類と同じく、内面調整により二分した。

Ⅰ類（13～19・122・123）　内面をヘラミガキもしくは暗文を施すもの。外面はヘラミガキがなされる。

Ⅱ類（68～70・166～170・197～202）　内面をヨコナデするもの。底部外面はヘラケズリがなされる。

C類（119）　素縁のもので口辺部は外反する。

D類（165・195・196・247・295）　いわゆる畿内系暗文を有するものである。底部内面にラセン文、口辺部に斜放斜文が2段施されるもの（Ⅰ類）、1段のもの（Ⅱ類）に区分される。

E類（400）　いわゆる甲斐型の杯で、口辺部ヘラミガキ、内面には細い放射状の暗文が施される。図示し得たものは、破片実測した1点のみであるが、他に大塚原遺跡第1号住居址で破片が認められた。

F類（455～461）　ロクロ調整されるもの。内面に暗文を施すものもある。平底で、底部は糸切り未調整である。

高杯（20・124）

全体の器形を窺えるものは20一例である。須恵器模倣のものである。

甕A類　長胴の甕で、調整、最大径の位置により細分した。

Ⅰ類　肩部外面以下、縦方向のヘラケズリがなされる。最大径を胴部に有するもの（a――24～27・79～85・134・136・140・172）と口縁部に有するもの（b――137～139・141・171・173～175・205～209）に区分した。

Ⅱ類　ハケメ調整に加え、ヘラケズリが行なわれるもの。内面のみハケメ調整が行なわれるも

のもここに含めた。Ⅰ類と同じく最大径の位置により、a（86・87）・b（135）に二分した。

B類　いわゆる武蔵型の甕で、外面調整は、口辺部から肩部上面をヨコナデした後、肩部から下部をヘラケズリしている。ヘラケズリは、肩部付近では横方向に近く、胴部～底部では横方向に近くなっている。A類に比して、器壁は0.5cm前後と薄い。口辺部の形状は、「く」の字状から「コ」の字状に変化することが知られ、「く」の字状を呈するもの（Ⅰ類――176・210・211・224・248・296・297・322・351）と「コ」の字状を呈するもの（Ⅱ類――352・401～403・462～464）とに大別した。

C類（28～30・88・89・142・143・177・212）　球胴を呈するもので、口辺部は「く」の字状に外反する。壺とも言える器形であるが、ここでは甕に含めた。また、器形にも若干のバラエティが認められるが、ここでは一括して扱った。

小型甕　器形・法量等により細分すべきであるが、調整がほとんど共通するものについては最大径の位置により大別した。

A類（36・37・91・93～95・97・146）　短い口辺部が外反し、最大径を口縁部に有する。

B類　最大径を胴部に有するもの。平底（Ⅰ類――31～35・96・147）と丸底（Ⅱ類――92・144・145・148・149・178・217）がある。

C類（180・213～215・216・225）　口縁端部をつまみ上げた形状で丸底のもの。なお、口縁端部内面を肥厚させるもの（213）も含めた。ハケメ調整される。

D類（150）　口辺部が直立気味に立ち上がり、低い脚台を付けるもの。

E類（249・298・404・467）　甕B類の小型品。脚台を有するものも認められる。

F類（465・466）　ロクロ調整されるもの。

土師器では、以上のほか、把手付鉢・甑・鉢・椀・手づくね土器・黒彩土器（66・126）がある。

黒色土器

黒色土器　本調査で出土したものは、内面を黒色処理したいわゆる内黒土器が圧倒的である。

内外面を黒色処理したものは量的には少なく、図示し得たものは、竹花遺跡第22号住居址出土（449）の1点のみである。杯・椀・皿・鉢・高杯・小型甕などがある。

杯

A類（3・49～51・103～105・157・158・187～189・222・223）　素縁で非ロクロ調整されるもの。丸底と平底（223）がある。

B類（2・42～48・102）　外稜口辺を有し、非ロクロ調整のもの。丸底。

C類（246・290～294・317～320・342～347・372～392・424～444）　ロクロ調整されるもの。暗文を施したものもある。平底。

椀（398・399・450～454）　ロクロ調整され、高台を有するもの。

皿（348～350・393～397・445～448）　ロクロ調整され、高台を有するもの。

高杯　土師器高杯よりも量は多い。杯部に稜を有するもの（A類）と稜が認められないもの（B

類）があり、さらに短脚のもの（Ⅰ）と長脚のもの（Ⅱ）に細分した。

ＡⅠ類――106・160・192・193、ＡⅡ類――4、ＢⅠ類――190・191、ＢⅡ類――107・159・161・162・194

黒色土器には、以上のほか、椀・鉢・小型甕がある。

須恵器

蓋Ａ類　天井部が丸く、杯Ａ類とセットとなるもの。口径により12cmを越えるもの（Ⅰ類――1・100）と10cm前後のもの（Ⅱ類――99・101・153・154）とに区分した。

Ｂ類　宝珠形つまみを有する。かえりを有するもの（Ⅰ――183）、かえりの認められないもの（Ⅱ――229・257～259・302・303・328～330・357・406）がある。ＢⅠ類で図示し得たものは、口径が10cm以下のもの１点である。

Ｃ類（184）　環状のつまみを有する。

杯Ａ類（155）　丸底で器受部を有するもの。

Ｂ類　平底あるいは平底気味となるもので、切り離し手法により底部ヘラキリのもの（Ⅰ――185・218～220・230～240・262・267・269・270・273・278・279・281・310）と糸切りされるもの（Ⅱ――260・261・263～266・268・271・272・274～277・280・282・304～309・311～315・331～340・358～368・407～419）とに大別した。

椀　高台を有するもの。口径により、15cm以下のもの（Ａ類――221・241・242・283～287・341・369・370・420・421）と15cm以上のもの（243～245・288・289・316）とに大別した。

須恵器には、このほか、盤・高杯・𤭯・長頸壺・横瓶・四耳壺・甕などがある。また、緑釉陶器[4]、灰釉陶器[5]も出土しているが割愛した。

以上の土器群を、須恵器の変遷を軸にして、土器群の変遷を第□図に示した。以下、土器の変遷について述べることにしたい。

第Ⅲ期　古墳時代後期で、田辺昭三氏の編年[6]で、ＭＴ15型式、中村浩[7]氏のⅡ型式２段階にあたる。土師器杯は、ＡⅠ・ＢⅠ類が大半を占める。土師器、黒色土器の食器類は、概して丁寧なヘラミガキがなされる。土師器では、甕ＡⅠａ・Ｃ類、小型甕Ａ・ＢⅠ類、高杯、甑、椀、鉢、手づくね土器、黒色土器では、杯Ａ・Ｂ類、椀、高杯ＡⅡ類がある。

第Ⅳ期　ＴＫ209型式、Ⅱ型式５段階の須恵器が伴出する。土師器杯Ａ・Ｂ類では内面をヨコナデするⅡ類が増加する。また、Ａ類の外稜部はより底部近くに移る。杯類は概して、前時期より浅くなる。土師器甕Ａ類は、Ⅰａ・Ⅱａであるが、前時期のものと比較するとよりスリムな感を受ける。また、ハケメ調整されるものは、小型甕も含め、図示した中では第81号住居址に集中しており、時間的な差異よりも住居址による差異と考えた方が妥当かもしれない。以上のほか、土師器では、甕Ｃ類・小型甕Ａ・ＢⅠ・ＢⅡ類、甑、椀、鉢、把手付鉢、黒色土器では、杯Ａ・Ｂ類、高杯、椀、鉢がある。稀少な例では、黒彩土器杯と把手付鉢がある。把手付鉢（151）は、知見する範囲では、松本平（松本市千鹿頭北遺跡[8]で３例）、善光寺平（長野市塩崎遺跡[9]で３例、田中沖遺

跡[10]で1例)のほか、佐久市前田遺跡[11]で2点出土している。特に、集中して出土している傾向は注意される。また、機能面では壺とする見解があるが、本例は明らかに二次焼成を受けており、貯蔵具と煮沸具の機能を有していたものと思われる。

第Ⅴ期　ＴＫ209型式、II型式5段階の須恵器が伴出する。土師器杯ではＡII類が目立つようになる。長胴の甕では、ＡＩｂ類が現われる。また、前時期に続き、黒彩土器も認められ、諏訪・甲斐との関連が窺われる。手づくね土器も該期までは確実に残るようだ。なお、土師器甕Ｃ類は図示し得るものがないが、他遺跡の例からすると少なくとも第Ｘ期まで続くものと思われる。

甑では、大形のもの（133）のほか、小形のものが増える。鉢形（131･132）のものと小型甕の形状を呈するもの（129･130）がある。以上のほか、土師器では杯ＡＩ・ＢＩ・Ｃ類、甕ＡＩａ・IIｂ類、小型甕Ａ・ＢＩ・BII・Ｄ類、椀、鉢、黒色土器では杯Ａ類、高杯ＡＩ・BII類、鉢がある。黒色土器杯（102）はＡ類に含めたが、武蔵地方の有段口縁杯に似る[12]。

第Ⅵ期　ＴＫ217型式、II型式6段階の須恵器が伴出する。須恵器蓋Ａ類、杯Ａ類は10cm以下と小型化する。土師器杯は、AII・BII類が主体で、ＤＩ類も認められる。甕は、AIIｂ類が主体をなす。土師器では、このほか、甕Ｃ類、小型甕BII・Ｃ類、高杯、黒色土器では、杯Ａ類、高杯ＡＩ・BII類、鉢がある。

第Ⅶ期　伴出する須恵器は、ＴＫ217型式の一部、III型式1・2段階のものである。2時期に細分される余地を多分に残すが、ここでは一括した。須恵器蓋は、宝珠形つまみを有するＢＩ類が出現する。土師器杯は、AII・BII類のほか、Ｃ・ＤＩ類がある。甕は、AIIｂ類が主体をなすが、新たにＢＩ類が出現する。土師器では、このほか、甕Ｃ類、小型甕BII・Ｃ類、甑、黒色土器では、杯Ａ・Ｂ類、高杯ＡＩ・BII類がある。特に、器高が極端に低い192は、特徴的である。

第Ⅷ期　ＴＫ217型式の一部、III型式3段階にあたる。第Ⅶ期と第IX期から区分したもので、一時期としたが、資料は少ない。須恵器蓋のかえりの消失前の段階である。土師器杯は、図示し得るものがないが、BII類が認められる。また、甕ＢＩ類のほか、ＡＩｂ類も残存する可能性がある。このほか、土師器では、小型甕Ｂ・Ｃ類、黒色土器杯Ａ類に平底のものが現われる。また、須恵器では椀が出現する。

第IX期　ＭＴ21型式の大半、IV型式1・2段階にあたるものと考えられる。須恵器では蓋内面のかえりが見られなくなり、杯ＢＩ類は底部手持ちヘラケズリがなされるものが多い。また、短頸壺（251）は外面タテヘラケズリされるもので、土師器工人との交流が窺われる。量的に少ない器種と考えられ、同様な形態を持つものは、関口Ｂ遺跡第9号住居址（古墳時代後期後半）から出土している。

土師器杯ではＤII類が認められ、甕ＢＩ類は器高が前時期と比べ低くなるようだ。黒色土器では杯Ｃ類が出現する。

第Ｘ期　IV型式3段階にあたるものと思われる。須恵器杯ではＢII類が主体となるが、糸切り後外周ヘラケズリされるものが特徴的といえる。椀にはＡ・Ｂ類があり、法量の分化が認められ

る。土師器では杯DII類、甕BI類があるが、主体となる杯の形態は不明である。黒色土器では杯C類、高杯、小型甕が、須恵器では長頸壺、甕、鉢がある。

第XI期　IV型式4段階にあたる。須恵器では蓋BII類、杯BII類、椀B類、長頸壺、甕、横瓶、円面硯が、土師器では甕BI類、黒色土器では、杯C類、高杯がある。

第XII期　V型式1段階にあたる。新たな器種として、黒色土器皿が登場する。次期のものと比べて大ぶりで、外面をヘラミガキするもの（348）がある。土師器甕は、BII類となる。黒色土器杯CII類では、底部糸切り未調整のものも認められる。須恵器では、蓋BII類、杯BII類のほか、長頸壺、短頸壺、四耳壺がある。鋳師屋遺跡群の例からすると、灰釉陶器が認められる段階と考えられる。

第XIII期　V型式2段階、灰釉陶器の編年では黒笹14号窯式期にあたる。土師器甕BII類の口辺部はよりシャープな「コ」の字形となる。黒色土器では、椀が現われる。土師器杯では、E類が認められる。須恵器では、蓋BII類、杯BII類、椀A・B類があるが、貯蔵具については図示し得るものがない。御牧原台地での須恵器生産の衰退に関連するものであろう。

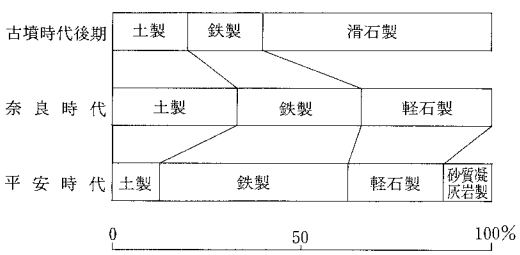
第XIV期　黒笹90号窯式・光ケ丘1号窯式期の灰釉陶器椀・皿が伴出する。食器類では土師器杯F類のほか、黒色土器では量は少ないが両面を黒色処理したもの（449）も認められる。土師器甕BII類は、前時期のものと比べ、シャープさは消える。小型甕ではE類のほかカキ目調整されたF類が該期から現われる。須恵器では蓋BII類、杯BII類、椀B類のほか、長頸壺もこの時期まで残るようだ。また、椀では皿を深くしたような器形をもつもの（421）が認められる。

以上、土器の変遷を見てきたが、その年代について触れる[13]と、第III・IV期が6世紀中葉～末葉、第V～VII期が7世紀代、第VIII～XI期が8世紀代、第XII・XIII期が9世紀前半、第XIV期が9世紀後半と考えられる。

(2)　石製品・金属製品・土製品

石製品には、縄文時代の石器のほか、石製模造品・磨石・砥石・紡錘車・石臼などがある。

砥石は竹花遺跡で11点、舟窪遺跡で3点、大塚原遺跡で6点、計20点出土している。材は、砂岩、凝灰岩、砂質凝灰岩のほか軽石も用いられている。小型で穿孔された携帯用のものから、住居内に置かれて使用されたと考えられる大型品と多様である。

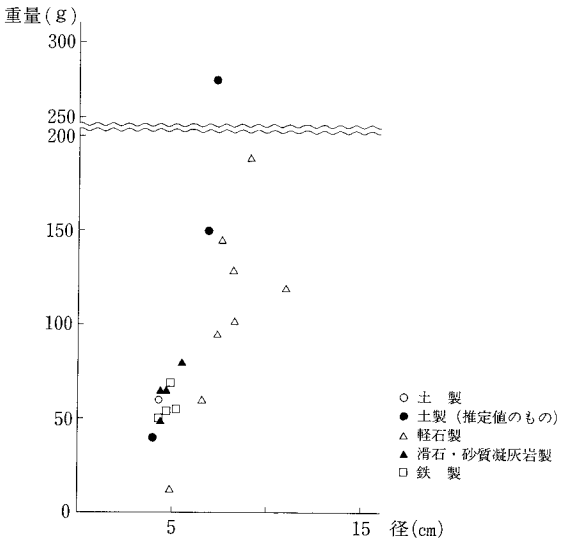


第547図　紡錘車の材の変遷

石臼は比較的多く3遺跡で14点出土している。石材は、安山岩、軽石を用いている。時代的には古墳時代後期～平安時代で、特に平安時代が多い。粉食も行われたことが窺える[14]。

紡錘車は、遺構外のものを除き、総計19点出土している。滑石製、軽石製、砂質凝灰岩製のもののほか、土製・鉄製のものがあるが、ここ

では一括して扱う。各々の大きさについては第548図に示した。なお、径については平面が楕円形のものは長径を、断面台形のものは底径を計測した。また、鉄製紡錘車については軸も含めた全体の重さである。時期的には遺構外出土の土製1点を除き古墳時代後期から平安時代である。



第548図　紡錘車の大きさ

大きさからすると、3グループに大別することができる。一方、材の変遷（第547図）からすると鉄製紡錘車は、関口B遺跡で知られるように古墳時代後期から出現するが、平安時代に最も多い。滑石製は古墳時代後期で消える。加工の問題と鉄製紡錘車の出現に関連するものであろう。軽石製のものは、奈良時代から現われるが、関口B遺跡の例からするとやや遡り古墳時代の終わり頃からのようである。砂質凝灰岩は古墳時代後期から平安時代にかけて主に砥石に用いられる軟かい石材で、紡錘車に用いられるのは稀少例といえる。

石製模造品には、勾玉、鏡、臼玉がある。臼玉は、0.6～0.7cm前後で造りが丁寧なものと径1.3～1.8cm前後の粗製のものの二種に大別される。後者は、第VI期から出現するようだ。

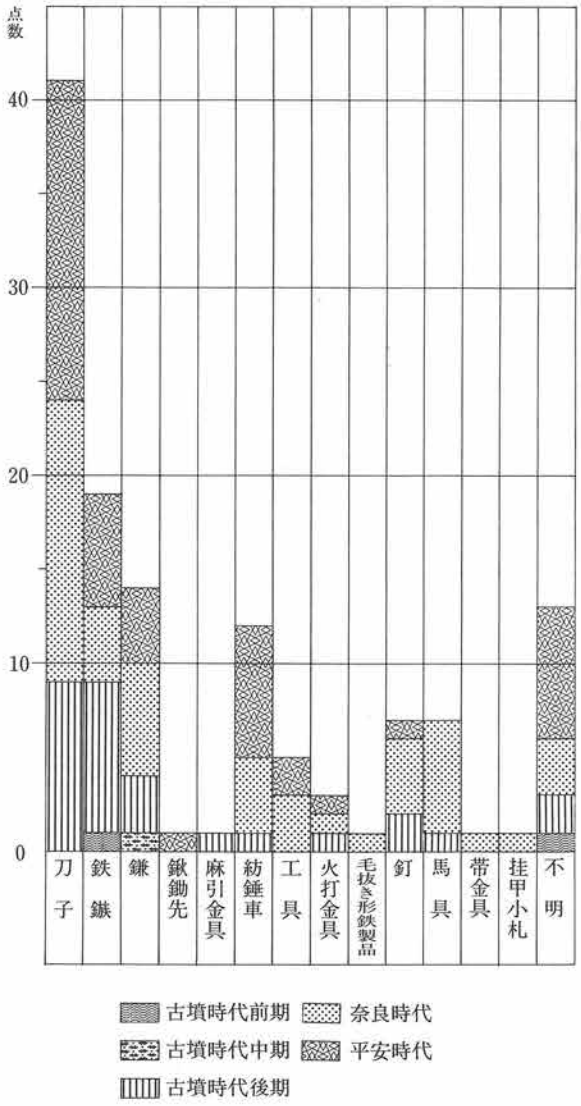
玉類では、勾玉、管玉、丸玉がある。勾玉は竹花遺跡遺構外、大塚原遺跡第7号住居址、管玉は竹花遺跡第6号住居址、丸玉は舟窪遺跡第13号住居址から出土している。石材には、碧玉、硬玉、滑石が用いられている。竹花遺跡第41・43号住居址の耳飾と合わせて注意される。住居址に伴わないものもあるが、有力農民層の出現と把えて良いのかもしれない。

また、遺構外出土ではあるが大下原遺跡で未製品が2点出土している。古墳時代前期の住居址と関連する可能性がある。このほか、石錘と考えられるものが2点出土している。

金属製品のうち鉄製品は、竹花遺跡を中心に多種が出土している。種別では、刀子・鉄鏃・鎌・鍬鋤先・麻引金具・紡錘車・工具・火打金具・毛抜き形鉄製品・釘・馬具・帯金具・挂甲小札がある。このうち、確定できた数の内訳は刀子41点、鉄鏃19点、鎌14点、紡錘車11点、馬具7点、釘7点、工具5点(うち錐1点)、火打金具3点、鍬鋤先、麻引金具、毛抜き形鉄製品、帯金具、桂甲小札1点である。刀子は古墳時代後期から現われ、時代が下るにつれ増加する傾向が窺える。

遺存率の問題もあるが、一棟で2点以上保有する住居が奈良時代から現われる。

鉄鏃は古墳時代前期からあり、圭頭鏨式、五角形式、雁又式、方頭斧箭式などが認められるが[15]、量的には圭頭鏨式が多い。住居址別では、大下原遺跡第13号住居址の2点、後は各1点である。



第549図　鉄製品の種別

鎌は古墳時代中期に現われる。複数を保有する例では、奈良時代の竹花遺跡第67号住居址の3点、大塚原遺跡第1号住居址の2点、平安時代の竹花遺跡第49号住居址の2点が目につく。

馬具は竹花遺跡第25・27・31・48・67号住居址、大塚原遺跡第31号住居址から出土している。

内訳は、鐙金具――第27号住居址、轡及びその一部と考えられるもの――第25・48・67号住居址、大塚原遺跡第31号住居址、鋲具と考えられるもの――竹花遺跡第31号住居址である。

第27号住居址が古墳時代後期と古く、他は奈良時代である。関口B遺跡でも古墳時代後期の第9・18号住居址から轡、鐙金具が出土している。

関口B遺跡第9号住居址は、本遺跡では第Ⅴ期にあたり、若干古いが、いずれにせよ、馬の骨が出土していることも合わせ、少なくとも古墳時代後期には集落において馬と関わる生活が展開されていたと考えられよう。

このほか、金属製品では、竹花遺跡第113号住居址から帯金具の鋲具、同・第23・66号住居址、大塚原遺跡第7号住居址から刀装具、竹花遺跡第41・43号住居址から耳飾、同・第29号掘立柱建物址から挂甲小札が出土している。刀装具のうち、竹花遺跡第23号住居址出土の足金具（第367図16）は時期により変遷することが知られ[16]、7世紀中葉頃のものと考えられる。刀装具についてはセットではないが、刀を佩用する居住者がいた可能性が強い。

挂甲小札は、市内では関口B遺跡第7号住居址から1点出土している。

銭貨は、竹花遺跡から富寿神宝（弘仁9年、811年鋳造）が1点出土している。県内では飯田市恒川遺跡、松本市三間沢左岸遺跡に次いで三例目である。

土製品には土製模造鏡、丸玉、鞴羽口があるが、ここでは土製模造鏡を中心に触れておきたい。

県内の土製模造鏡は、長野市駒沢新町、更埴市城の内、坂城町百々目利遺跡などから出土しているが[17]、鈴鏡を模したものはない。一方、鈴鏡は飯田市姫塚古墳、同・番神塚古墳から七鈴式、同・神送塚古墳、同・丸塚古墳、長野市観音塚古墳から六鈴式、中野市金鎧山古墳、下高井郡山ノ内町横倉地区、飯田市正清寺古墳、同・高松７号古墳、同・座光寺地区から五鈴式、飯田市南条天神塚（雲彩寺）古墳から四鈴式がそれぞれ出土している。特に伊那地方は、群馬県下などとともに濃密な分布域の一つとされている[18]。

次に鈴鏡を模した土製鏡を全国的にみると、３遺跡５例が知られている[19]。東から見ていくと、千葉県館山市沼つとるば遺跡で四鈴鏡、五鈴鏡、七鈴鏡が各１点出土している[20]。このうち、径のわかるものは、四鈴鏡が12.2cm、七鈴鏡が13cmである。沼つとるば遺跡は、祭祀遺跡で祭祀遺物が再積したものと考えられている。土製品が多く、このほかにも土師器杯８・土製鏡破片２・土製有孔円板50・土製勾玉３・土製管玉１・土製平玉１・土製丸玉83・土製鐸３・土製鈴釧１・土製鈴鏡または土製鈴釧の鈴３、手づくね土器などがあり、石製品は滑石製臼玉１点である。森谷ひろみ氏は、祭祀集団が鈴を好んだことに注意されている。

２遺跡目は、栃木県矢板市上長井遺跡で六鈴鏡が単独出土している[21]。径は、7.8～8.3cmを測る。竹花遺跡とは施文面が異なるが、鏡背面にヘラ描きの沈線が施される。鈴の表現は、写真で判断するかぎり、つとるば例、竹花例と同じく粘土を貼付している。

３遺跡目は、かなり距離を置き、福岡県福岡市大又遺跡で、竪穴状遺構の土製鏡４点とは別に土製六鈴鏡が１点出土している[22]。報文で判断する限り、６号住居跡の遺構外からの出土である。小型品で径4.2cmを測る。鈴の表現はこれまでの例と異なり、縁辺部をひねり出して作出している。

次に鈴鏡自体について見ておく。田中　琢氏によれば[23]、全国で140面ほどが出土しているといい、最も鈴が多い十鈴鏡は二面、九鈴鏡は未発見で、以下八鈴鏡から四鈴鏡までとされる。面数が圧倒的に多いのは、五鈴鏡と六鈴鏡で、五鈴鏡は全鈴鏡の40％を越え、ついで六鈴鏡が35％ほ

第550図　鈴鏡と土製模造鏡の分布（田中琢1979に加筆）

どあって、両者を合わせると、75%を越え、その他は、七鈴鏡、四鈴鏡、八鈴鏡の順に少なくなり、いずれも10%に満たないという。現時点での土製鈴鏡は先述したように六鈴鏡が3点、七鈴鏡、五鈴鏡、四鈴鏡各1点で、点数は少ないがほぼ似たような傾向が窺えるといってよいかもしれない。一方、分布では宮城県南部から宮崎県にいたる範囲に分布するが、密度は同じでなく、日本列島を畿内と東国、西国に大きく三分割してみると、7割までが東国出土とされる。そして、おおまかにみて、船載鏡と倭鏡、そして倭鏡のうちの鈴鏡のそれぞれの製作、伝播は、この順序で最成期があったとみてよく、東国の鏡の出現率にみられる傾向は、鈴鏡がこの地方で愛好されたことをしめすとみることもできるが、時代がくだるとともに、東国へ搬入される鏡の比率がたかまっていったことを明らかにしているものといえるであろう。鈴鏡自体の分布からすると東国に多く、中でも群馬県が圧倒的に多いとされるが、群馬県において鈴鏡を模した土製鏡の出土例はないとのことである[24]。竹花例については、一応、群馬県との関連を考えておく。いずれにせよ、他遺跡の例を含め、鈴鏡の集中する地域と離れ、いわば外郭域で出土している点注意されよう。

続いて時期について見ておきたい。鈴鏡自体の製作は5世紀に始まり、5世紀で終えたと考えられているが、使用は長期間に及んだ場合も多かったようだ[25]。竹花遺跡第77号住居址は、実年代の明確な決め手を欠くが6世紀中葉を考えても大過ないものと思われる。したがって、鈴鏡の製作が終わった後も鈴鏡が使われていたとすれば、鈴鏡を模した土製模造鏡を用いた祭祀もまた行なわれていたのであろう。上長井出土の土製六鈴鏡について書かれた山越　茂氏の「祭祀品として五世紀に出現してくる石製模造品や六世紀に登場してくる土製模造品は、形状的に類似させるというよりも、模造した原形が知られればよかったのかも知れない。即ち、土製鈴鏡を製作する場合でも、鈴鏡そのものに類似させるということよりも、鈴鏡を模したものであるということが重要であったのではないかと思われるところである。」という指摘は示唆に富むと言える。

鈴鏡の使用例、使用者を窺うことのできるものに埼玉県稲荷山古墳、佐久市北西ノ久保17号古墳出土埴輪に代表される鈴鏡を腰につけた巫女[26]の埴輪がある。鈴鏡を巫女の使うものと規定するなら、第77号住居では巫女により土製模造鏡を用いた祭祀が執り行なわれていたのかもしれない。

土製丸玉は、竹花遺跡第14・37・66・77号住居址、大塚原遺跡第13号住居址で出土している。

時期的には、第III・V～VII期で認められる。

(3)　文字関係資料

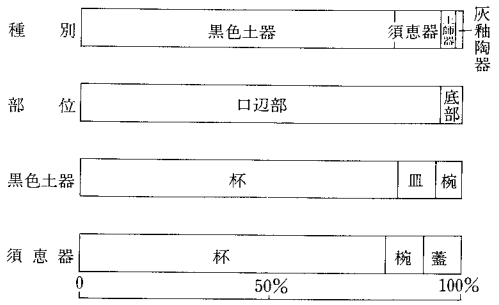
文字関係資料には、漆紙文書、墨書土器のほか、円面硯、転用硯がある。このうち、漆紙文書については、平川　南先生により詳細な論考を賜っており、ここでは墨書土器を中心に述べることにしたい。なお、墨書文字については、平川先生、書家佐藤静峰氏にご教示を賜わった。

調査対象となった5遺跡のうち、墨書土器が認められなかったのは、大下原遺跡のみである。これは、対象地区に該期の住居址が認められなかったことによるのが多分であろう。

さて、墨書土器の点数は第2表に示した。時期的には、奈良時代の第VII期から平安時代の第XVI

期の範囲であるが第XV期が最も多い。対象面積の差もあるが、竹花遺跡が75点と圧倒的に多くなっている。次に遺構別にみると竪穴住居址からの出土が全体の95％を占めている。住居址毎では、竹花遺跡第41号住居址が19点と多く、第49号住居址の11点がこれに続く。では、器種別ではどうであろうか。岡田正彦氏が指摘されたように[27]黒色土器が全体の82％と圧倒し、須恵器(軟質須恵器を含む) 12％、土師器４％、灰釉陶器２％の順となる。器形では、黒色土器――杯83％、皿10％、椀７％、須恵器――杯80％、椀10％、蓋10％で、土師器は杯、灰釉陶器は椀である。

墨書部位は、体部外面のものが圧倒的で、黒色土器椀、灰釉陶器椀の底部外面のものが三例ある。灰釉陶器はその性格によるものであろう。



第551図　墨書土器の種類

第２表　文字関係資料一覧表

	遺跡名	遺構	器種器形	部位	文字
1	東下原	遺構外	黒色土器杯	口辺部	凪
2	竹花	SB 04	〃		光
3		〃			不明
4		SB 08	〃		〃
5		SB 09	〃		安
6			軟質須恵器杯		□身
7			黒色土器杯		不明
8			〃		〃
9			軟質須恵器杯		〃
10		SB 10	黒色土器杯		〃
11			〃		〃
12		SB 11	黒色土器皿		久蟬久久伴？新久□
13		SB 19	黒色土器椀	底部	南
14		SB 23	黒色土器杯	口辺部	不明
15			須恵器円面硯	—	—
16		SB 31	土師器杯	口辺部内面	不明
17		SB 32	〃	口辺部	〃
18			〃	〃	〃
19			黒色土器杯	〃	〃
20			〃	〃	子
21		SB 41	黒色土器皿	〃	西
22			灰釉陶器椀	底部	不明
23			黒色土器杯	口辺部	茂
24			〃	〃	不明
25			〃	〃	川
26			〃	〃	不明
27			〃	〃	之
28			〃	〃	不明
29			〃	〃	〃
30			黒色土器皿	〃	〃
31			須恵器杯	〃	〃
32			黒色土器皿	〃	〃
33			須恵器杯	〃	〃
34			〃	〃	〃
35			黒色土器杯	口辺部	不明
36			〃	〃	〃
37			〃	〃	〃
38			〃	〃	〃
39			〃	底部	〃
40		SB 47	黒色土器杯	口辺部	□家
41			〃	〃	不明
42			〃	〃	〃
43		SB 49	〃	〃	大井
44			軟質須恵器杯	〃	寸？
45			黒色土器杯	〃	下
46			〃	〃	不明
47			〃	〃	〃
48			〃	〃	〃
49			〃	〃	〃
50			〃	〃	〃

	遺跡名	遺構	器種器形	部位	文字
51	竹花		黒色土器杯	口辺部	不明
52			黒色土器椀	〃	〃
53			〃	〃	〃
54		SB 62	黒色土器皿	〃	〃
55			黒色土器杯	〃	成
56			〃	〃	不明
57			〃	〃	〃
58		SB 63	〃	〃	〃
59		SB 64	〃	〃	川もしくは三
60		SB 67	須恵器杯	底部	朱墨硯
61			〃 椀	口辺部	足・刻書
62			軟質須恵器杯	〃	刻書
63			須恵器蓋	〃	刻書
64			須恵器杯		朱墨硯
65			須恵器蓋	〃	光
66		SB 74	須恵器杯	〃	不明
67		SB 94	黒色土器皿	〃	南
68		SB 96	土師器杯	底部	｜
69		SB 97	黒色土器杯	口辺部	家
70		SB 99	黒色土器杯	口辺部	不明
71		SB 105	黒色土器椀	〃	〃
72			〃	〃	〃
73			黒色土器杯	〃	廣
74			〃	〃	足
75		SB 111	〃	〃	大？
76		SB 118	〃	〃	不明
77		SK 01	須恵器円面硯	—	—
78		SK 02	須恵器杯	底面	子
79		遺構外	黒色土器杯	口辺部	不明
80			〃	〃	〃
81			〃	〃	〃
82			〃	〃	喜
83			須恵器円面硯	—	一
84			須恵器杯		朱墨硯
85	舟窪	SB 02	黒色土器皿	口辺部	不明
86		SB 04	黒色土器杯	〃	寺
87		SB 12	〃	〃	之
88		SB 14	須恵器椀	底部	転用硯
89	大塚原	SB 02	黒色土器杯	口辺部	不明
90			須恵器円面硯	—	—
91		SB 04	黒色土器杯	口辺部	2文字不明
92		SB 06	〃	〃	山
93			黒色土器椀	〃	不明
94			黒色土器杯	〃	〃
95			〃	〃	〃
96		SB 10	須恵器椀	底部	転用硯
97		SB 17	黒色土器杯	口辺部	不明
98			〃	〃	〃
99		SB 33	〃	〃	案

1個体に記された文字数は、竹花遺跡第11号住居址出土の黒色土器皿に記された「久郷久久伴？弥久□」という8文字が図抜ける。平川　南先生のご教示によれば習書とのことである。2文字と考えられるものには、竹花遺跡第9号住居址「□身」、同・第47号住居址「□家」、同・第49号住居址「大井」、大塚原遺跡第4号住居址「□□」がある。判読できた文字には、以上のほか、「凪」（東下原遺跡）、「寺」、「之」（舟窪遺跡）、「案」（大塚原遺跡）、「光」、「安」、「南」、「子」、「西」、「茂」、「川」、「之」、「寸」？、「下」、「成」、「川」もしくは「三」、「足」、「丨」、「家」、「廣」、「大」？、「喜」（竹花遺跡）がある。

さて、これらの文字の意味について少し触れておきたい。まず、地名に関するものとして「大井」があり、「大井郷」を示すものと考えられる。「大井」と書かれた土器はこれまで2点が見つかっており、1点は佐久市長土呂の渋右衛門遺跡から須恵器高盤の底部内面に刻書されたものが出土している。岡田正彦氏は、「大井郷は『和名類聚抄』記載の佐久郡八郷中のひとつであり、与良　清氏はその範囲を現佐久市岩村田・横根・平尾・安原・新子田地域と推定しているが、本遺物出土の長土呂地区は含めていない。前者五地域は大井郷を実証する根拠が希薄であるのに対し、長土呂地籍は一点とは言え郷名を示す遺物が出土し、その確率は高いと言わねばなるまい。」とされている[28]。もう一点は、竹花遺跡から東方約3㎞に位置する御代田町根岸遺跡H－3号住居址出土の黒色土器杯に墨書されたものである。時期的には本例より1段階古く遡るものと考えられる。「大井」のうち「井」の文字がもう一つ鮮明でないが、調査者の堤　隆氏は、大井郷の北端を構成する集落として位置付けられる可能性がでてきたとされている[29]。

長野県史[30]では、大井郷について次のように述べられている。「○大井郷　平安時代末期に成立した大井荘は、多くの関係資料をのこしているが、大井郷はその前身であろう。大井荘ははじめの中心は岩村田（佐久市）にあり、しだいにその範囲を周辺に拡大していったことがあきらかなので、大井郷もその本郷を岩村田地域におき、その周辺一帯を郷域としていたと推定される。大井は大堰と同義なので、あるいは千曲川の支流の湯川と関係ある郷名かもしれない」本郷とされる岩村田地域と竹花遺跡とは直線距離にして約3.8㎞の距離である。一方、竹花遺跡と根岸遺跡に共通する点は、遺跡の北側に共通の田切りを有する点である。巾約500mと広く、現在は信越線がこの谷の中を通っている。したがって、郷を規定する条件の一つに地形があるとするなら、これら2遺跡は堤氏の指摘されたように大井郷の北辺域を規定するものと考えてよいのではないだろうか。ここではその指摘に含め、今後の課題としておく。

このほか、「□家」は施設、単字句のものについては断定できるものは少ないが、「足」が人名、「南」、「西」は方位に関連するものと考えられる。

一方、複数の遺構から同一字句の墨書土器が出土した例では、「光」――竹花遺跡第4・67号住居址、「子」――同・第32号住居址、第2号土坑、「南」――同・第19・94号住居址、「足」――同・第67・105号住居址がある。また、隣接した遺跡では、「之」――竹花遺跡第41号住居址、舟窪遺跡第12号住居址がある。文字は異なっているが、第67号住居址が第4・105号住居址と関連してい

る点は注意されよう。

円面硯は、竹花遺跡から３点、大塚原遺跡で１点出土している。このうち、竹花遺跡第23号住居址、同・第１号土坑出土例が古い様相を示しており、時間巾を有しているものと考えられる。

(4)　自然遺物について

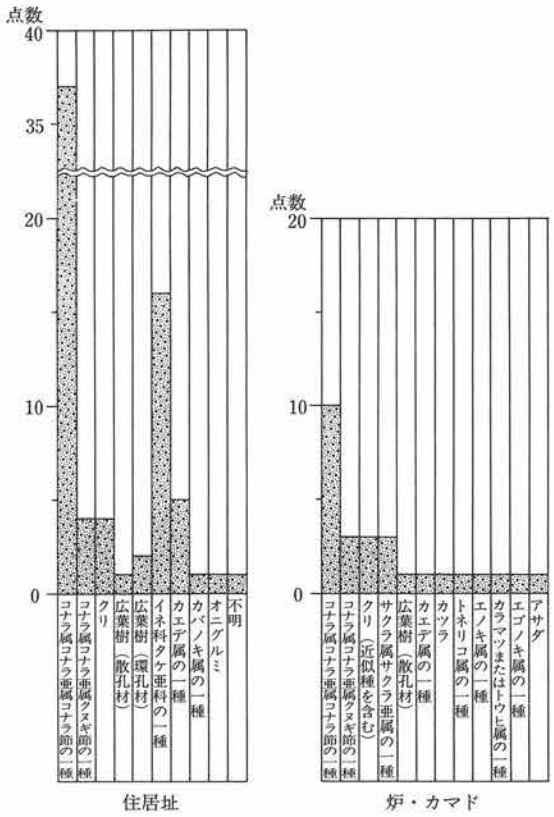
炭化材、炭化種子、獣骨についての詳細は付編に後述する。まず、炭化材については、点数が多く、カマド出土のものと焼失住居で建築材と判断されるものを中心に同定を依頼した。したがって、出土炭化材全てには行なっていないが、おおよその傾向は窺うことができよう。

まず、カマド出土の炭化材については薪として用いられたとして良いだろう。付編７の表１から出土材の樹種別に表化したものを第552図に示した。遺存状況により差異も考えられるが、一応その傾向を知ることができる。中でもコナラ属のコナラ節が99点中47点47.5％と大半を占める。この傾向は、関口Ａ・Ｂ遺跡と同様の傾向を示している。関口Ａ・Ｂ遺跡でも触れたが、コナラ節の材は炭材として優れていることから、薪材として意識的に選択されたのかもしれない。

一方、建築材でもコナラ属のコナラ節が圧倒的である。この傾向は少なくとも古墳時代前期前半まで遡ることができ、市内和田原遺跡第６号住居址では54点中樹皮１点を除き53点と高い比率を占める。さらに、同時期と考えられる第１・４・５号住居址試料を加えると82点中74点となる。

樹種の差異により残存率は異なるという指摘を考慮したとしても、コナラ節が古墳時代～平安時代において市内東南部地域で顕著である点は一つの傾向として指摘できよう。

炭化材の出土例の比率



第552図　遺構毎の樹種分布

をみると、建築材、燃料用（カマド出土）を通じてコナラ節が非常に多く、建築材で全体の51.4％、薪材で37％である。その他の広葉樹全体で建築材では25％、カマド出土が59％である。また、イネ科のものは尾根材に使われたのであろう。

なお、関口Ｂ遺跡では針葉樹であるスギが知られたほか、クヌギ節のものが多かった点、今回と若干様相を異にしている。

以上のことから考えると、集落周辺は日照がよく標高からも落葉広葉樹の生育に適した環境で、特にコナラやクヌギは周辺に多くの採集に便利であったと思われる。

果実類では、モモ、スモモ、オニグルミがある。このうち、モモは、近隣の遺跡では、佐久市市道遺跡（古墳時代後期）で出土例が知られている[31]。また、モモとクルミは、『延喜式』によれば、信濃国からの貢進が定められているという[32]。一方、獣骨類は竹花遺跡の20棟の住居址、１棟の掘立柱建物址、３基の土坑のほか、大塚原遺跡第５号住居址から出土しており、時代的には古墳時代後期から平安時代にあたる。

さて、金子浩昌先生によれば、ウマ、ウシ、ニホンジカ、イノシシなどがあるという。

牛山佳幸氏によれば、奈良時代頃から肉食の風習が次第にすたれたが、調の品目や信濃貢上の中男作物には、以前として雉の腊とよばれる干し肉がみえ、また伊那評から鹿肉が大贄として、更級郡からは雉肉が地子として貢進されたことを示す木簡が、それぞれ藤原宮跡と長岡宮跡から出土しているという[33]。また、信濃の中男作物には猪膏、脯も見える。竹花遺跡出土のニホンシカ、イノシシもこうした中男作物と同様のものがある点注意される。

さらに、牛山氏は鋳師屋遺跡群から鉄鏃とともに獣骨も出土していることから、肉食や狩猟の禁令が地方にまで徹底していたかどうかは疑わしく、鋳師屋遺跡群のように官衙的な性格をもった集落でも、付近の山野で捕獲された鹿や猪の肉が、ときには人々の食膳をにぎわしていただろうとされている。今回の調査では住居址数に比して鉄鏃は19点と少ないが、獣骨の出土は鉄鏃が武器であるとともに狩猟用具であることを示すものであろう。

ウマに関しては、先述したように馬具が竹花・大塚原遺跡から出土しており、遅くても古墳時代後期には馬との関わりが集落でも開始されたと言える。

魚貝類では、竹花遺跡第59号住居址からカジキ類の椎体片、第３号土坑からマルタニシ[34]が出土している。特に、カジキ類の出土は、内陸部では稀有な例といえる。おそらく、骨の付いた状態で食料として搬入されたものと思われ、海岸部、特に、回遊魚をも漁撈の対象とする地域との交流を窺える[35]。

(5)　遺構の変遷

(1)で述べた土器の変遷を基に時期を確定できた遺構を中心に、その移り変わりについて触れることにしよう。なお、出土遺物が僅少もしくは皆無で時期の特定が困難な竪穴住居址、掘立柱建物址については主軸方位を考慮し行ない、時期別の一覧を第３表に示した。以下、各遺跡のあり

方について見ることにしたい。

東下原遺跡――古墳時代後期第IV～VI期に５棟の竪穴住居址のほか掘立柱建物址が認められた後、第XII期まで空白となる。あるいは、第２～４号掘立柱建物址が奈良時代に位置するかもしれない。

大下原遺跡――第Ⅰ期後半に２棟の竪穴住居が認められるが、大半は第Ⅴ・VI期に集中する。

東下原遺跡とは同一の台地上に位置するが、時期的なあり方に差異が認められる。おそらく、同一の台地上においても、移動が行なわれたのであろう。

竹花遺跡――第Ⅰ期前半と第II期の竪穴住居があるが、継続が確実に認められるのは第III期からである。第II章２でも述べたように、第Ⅰ期のほか第II期も含め、数棟のグループが存在するのが一つの特徴と言えるかもしれない。第VII・VIII期で住居址数が減少するが、第IX期に入り建物数が再び増加する。特に掘立柱建物址はこの時期から確実に認められる。また、井戸の形状に良く似た特異な土坑も出現する。この種の土坑については以前にも触れたが[36]、出土遺物から推してゴミ捨て穴と考えられる。おそらく、掘立柱建物の増加に関連するものと思われる。

他地域の土器では第IV期に黒彩土器、第Ⅴ期で北武蔵の有段口縁杯、第VII期・VIII期で畿内系甕、第IX・Ⅹ期で畿内系杯、第XII期で駿東型甕（付図１－132）、第XII期で甲斐型杯が見られる。

文字関係資料では、他遺跡と比べ圧倒的に多いと言える。墨書土器は第IX期から現われるが、特に第XIV期に集中する。先述したように、「大井」の墨書も少なくとも該期の大井郷の北域を示すものと考えられる。また、第Ⅹ期の第４号土坑からは漆紙文書が出土しており、少なくともこの時期に漆工房があったことが知れる。円面硯の出土と合わせ、注意されよう。

竹花遺跡は第XIV期までの遺構が検出されているが、それ以降のものは第20号掘立柱建物址１棟程度にすぎない。

舟窪遺跡――位置的には竹花遺跡と大塚原遺跡の中間地帯となる。北側（竹花遺跡側）と南側（大塚原遺跡側）では遺構分布の密度が異なり、北側では粗で南側が密となっている。

遺構の増減はあるものの第Ⅴ期から第XIII期まで継続する。掘立柱建物は第Ⅴ期から認められ、２～３棟の竪穴住居に１棟の側柱式建物が付属するという傾向が窺われる。また、２間×２間といった側柱式の掘立柱建物が出現するのは奈良時代に入ってからと言える。また、掘立柱建物には、竪穴状遺構を伴うものがあり、類例は鋳物師屋遺跡[37]で知られている。

第XV期以降では、中世と考えられる２間×３間の側柱式の掘立柱建物が認められるにすぎない。

第17号住居址から硬玉製丸玉、第18号住居址から畿内系杯が出土している。

大塚原遺跡――第IV期から第XV期まで断続的に継続する。調査区中央部では遺構の分布が密といえる。掘立柱建物は第Ⅴ期から現われる。竪穴住居との関連では舟窪遺跡と似た傾向が窺われる。

第VIII・第IX期に２本の溝が開削される。集落内において他の建物群とを区画するものとも考えられるが明確でない。第VII期で畿内系の杯、第XI期で円面硯・甲斐型杯の破片が出土している。

以上、東下原・大下原・竹花・舟窪・大塚原遺跡の遺構・遺物について一督してきた。御多忙中にも関わらず、玉稿、御教示を頂いた先生方の意に反し、拙ない総括になってしまい、お詫び申し上げる。最後に、寒風の中の大下原遺跡の調査から始まり、炎天下での竹花遺跡の調査を経て再び寒風下での舟窪・大塚原遺跡の調査に参加された皆さん、一つでも多くの土器に物を語らせようと整理作業にあたられた皆さん、佐久建設事務所、地元関係各位、玉稿・ご教示を頂いた先生方・関係機関に厚く御礼申し上げ総括としたい。

註

(1) 市川隆之氏のご教示によれば、竜泉窯産の椀で、12世紀後半のものである。

(2) 竹花遺跡では、18～19世紀の瀬戸美濃の製品が主体に見られ、18世紀末～19世紀前半の在地窯産の製品も僅かに認められる。市川隆之氏のご教示による。

(3) 小諸市教委員会　1989　『和田原・鎌田原』

(4) 竹花遺跡第1号土坑から近江産の小片が1点出土しており、10世紀前半の年代が考えられる。原　明芳氏のご教示による。

(5) 原　明芳氏のご教示によれば、猿投窯産の椀・皿が多いのが特徴的といえる。

(6) 田辺昭三　1966　『陶邑古窯址群Ⅰ』　平安学園考古学クラブ　同　1981　『須恵器大成』角川書店

(7) 中村　浩　1980　『陶邑』Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ　大阪文化財センター　同　1981　『和泉陶邑窯の研究』　柏書房　同　1985　『古代窯業史の研究』　柏書房

(8) 松本市教育委員会　1989　『松本市千鹿頭北遺跡』

(9) 長野市教育委員会・長野市遺跡調査会　1979　『塩崎遺跡群――塩崎小学校地点遺跡の第2次調査報告――』　同　1980　『四ッ屋遺跡・徳間遺跡・塩崎遺跡群』

(10) 長野市教育委員会・長野市遺跡調査会　1980　『田中沖遺跡』

(11) 佐久市教育委員会　1989　『前田遺跡（第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ次）』

(12) 田中広明　1992　「武蔵地域の鬼高式土器」　『考古学ジャーナル』No.342　ニュー・サイエンス社

(13) 年代観は、註(6)・(7)の文献のほか、次の文献によった。前川　要　1984　「猿投窯における灰釉陶器生産最末期の様相」　『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅲ

(14) 牛山佳幸　1989　「第3章　律令政治の展開と信濃　第4節　奈良時代の生活」　『長野県史　通史編　第1巻　原始・古代』　長野県史刊行会

(15) 津野　仁　1990　「古代・中世の鉄鏃」　『物質文化』54　物質文化研究会

(16) 臼杵　勲　1990　「武器」　『考古学ジャーナル』No.321　ニュー・サイエンス社

(17) 岩崎卓也　1988　「Ⅴ　信仰と葬制　3　古墳時代の信仰と葬制　(1)　信仰」　『長野県史考古資料編　全1巻(4)　遺構・遺物』　長野県史刊行会

(18) 岩崎卓也　1988　「Ⅲ　生産と生活の道具　4　古墳時代の道具　(5)　青銅鏡」　『長野県史考古資料編　全1巻(4)　遺構・遺物』　長野県史刊行会

(19) 国立歴史民俗博物館編　1985 『国立歴史民俗博物館研究報告第７集　共同研究「古代の祭祀と信仰」本篇・付篇』

(20) 森谷ひろみ　1971 「千葉県館山市沼つとるば祭祀遺跡の発掘結果からみた遺跡付近の小地誌」『千葉大学教養部研究報告』Ｂ－４　神尾明正　1976 「古代祭祀遺跡にみられる安房国の地域性」『千葉大学教養部研究報告』Ｂ－９　椙山林継　1985 「安房における鐸鈴のまつり」（前揚註(19)の文献本篇所収）　杉江　敬　1993 「安房からみた伊豆諸島」　『考古学ジャーナル』No.367　ニュー・サイエンス社

(21) 山越　茂　1976 「49　上長井出土の土製六鈴鏡」　栃木県史編さん委員会　『栃木県史資料編　考古１』

(22) 上野精志　1973 「第３　大又遺跡」　『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』　福岡県教育委員会

(23) 田中　琢　1979 『日本の原始美術８　古鏡』　講談社

(24) 水田　稔氏、田野倉武男氏の御教示による。

(25) 埴輪では、若松良一氏によると、第５期（６世紀後葉）の埼玉県生出塚埴輪窯跡出土品の鈴鏡の表現は、本来円盤の外側に付けるべき円形浮文を中側に付けているのは、既に鈴鏡の使用がすたれたことを示すものとされている。若松良一　1992 「２　埴輪の種類と編年　３人物・動物埴輪」　『古墳時代の研究９　古墳III　埴輪』　雄山閣

(26) 埼玉県教育委員会　1980 『埼玉県稲荷山古墳』
佐久市教育委員会　1987 『北西ノ久保』

(27) 岡田正彦　1973 「墨書・刻書土器小考」　『信濃』　第25巻第４号　同　1978 「信濃の墨書・刻書土器」　『中部高地の考古学』　長野県考古学会

(28) 前掲註(27)の文献による。

(29) 御代田町教育委員会　1989 『根岸遺跡』

(30) 黒坂周平　1989 「第３章　律令政治の展開と信濃　第２節　律令制度と信濃　４　信濃の郡と郷」『長野県史　通史編　第１巻　原始・古代』　長野県史刊行会

(31) 佐久市教育委員会　1976 『市道』

(32) 関根真隆　1969 『奈良朝食生活の研究』　吉川弘文館

(33) 前掲註(14)の文献に同

(34) 関根真隆氏によれば、今日のカワニナやタニシなど淡水産巻貝の総名としてミナ（蜷）が用いられていたという（前掲註(32)の文献）。なお、タニシは食用と考えられ、現在でもタニシ汁などとして食している。廃棄率は、70％と高いものの、特に、カルシウム類の含有率が高い点、注目される。香川　綾監修　1994 『四訂食品成分表』女子栄養大学出版部

食品名	可食部100g あたり																											廃棄率	備考
	エネルギー	水分	たんぱく質	脂質	炭水化物 糖質	炭水化物 繊維	灰分	無機 カルシウム	無機 リン	無機 鉄	無機 ナトリウム	無機 カリウム	無機 マグネシウム	無機 亜鉛	無機 銅	ビタミン A レチノール	ビタミン A カロチン	ビタミン A 効力	ビタミン E 効力	ビタミン D	ビタミン B_1	ビタミン B_2	ビタミン ナイアシン	ビタミン C	コレステロール	食塩相当量	食物繊維 水溶性	食物繊維 不溶性	食物繊維 総量		
	kcal	kj	(……g……)					(……mg……)						(…ug…)		(…ug…)		IU	mg	IU	(……mg……)				mg	(……g……)				%	
たにし Vivipara 生 Raw	80	335	78.8	13.0	1.1	3.6	0	3.5	1300	140	19.4	23	70			15	960	580			0.11	0.32	2.0	0						※70	※貝殻

(35) 当時は、マグロ類をシビと呼んでいたという(前掲註(32)の文献)。当地へは、おそらく、塩漬、乾物としてのほか、柳沢光義氏のご教示によれば、糀漬なども考えられるという。ちなみに、県内での鹹水産の魚貝類の出土例は、古墳時代後期の更埴市城の内遺跡で、マイワシ・マダイ・スズキが、奈良～平安時代の塩尻市平出遺跡でサルボウが認められている。

宮下健司　1988「Ⅶ　自然科学と考古学　(1)　長野県における考古学の成果　動物遺存体」『長野県史　考古資料編　全1巻(4)　遺構・遺物』　長野県史刊行会

(36) 小諸市教育委員会　1991　『関口A・関口B（第2次）・下柏原』

(37) 小諸市教育委員会　1988　『鋳物師屋』

第3表　時代・時期別遺構一覧表

時代	時期	時期区分	東下原遺跡	大下原遺跡	竹花遺跡	舟窪遺跡	大塚原遺跡
古墳時代	前期	Ⅰ			SB 13・35・72		
				SB 07・11			
	中期	⋮					
		Ⅱ			SB 01・06		
	後期	⋮					
		Ⅲ			SB 03・14・30・31・44・60・75・77		
		Ⅳ	SB 01～03		SB 26・45・68・69・76・80・81・90・94(95・97・117)		SB 18・29・35 ST 05
		Ⅴ	SB 05・ST 05	SB 01・02・04・05・08・10 ST 01・03・09	SB 33・56・66・82・84・85・116	SB 01・03・04 (21) ST 18・30	SB03・05・08・13・30・34 ST07(18・21)
		Ⅵ	SB 06	SB 03・06・09・13 ST 02・04	SB 20・37・39・43・55・59・103・105・107(42)	SB 06(12)	SB28(27) ST 15
		Ⅶ			SB 16・38・70・71・104・115(27)	SB 07・15～18・20 ST 02	SB 14
奈良時代		Ⅷ			SB 23・25・54・87	SB 05	
		Ⅸ		SB 12	SB 28・50・51・100・113 ST 07・31・32・40・61・64・70・73・85 SK 02	SB10・14・19 ST01・05～07 12・15～17・21	SB 07・20・21・25 ST 01
		Ⅹ			SB 18・21・40・48・63・65・89・91・98・111(73) ST 03・05・18・66・71・76・77・80・81 SK 03・04	SB09・11 ST08・09・13・14・20	SB01・04・09・11・12・23・26・32 ST16・19・22・23・33・38
		Ⅺ			SB 24・46・86・92・108 ST 39(46)	SB 13	SB 02・10・16・19・22・31・33 ST 02・25・34・39・50(12)
平安時代		Ⅻ			SB 05・07・10～12・17・19・64・74・88・93ST 04・06・08・09・13(46)	SB 08	
		ⅩⅢ	SB 04(01)		SB 08・36・58・67・78・79・83・96・97・99・118(101) ST 20・30	SB06・17(SK01)	
		ⅩⅣ			SB 04・09・22・29・32・41・47・49・52・58・62・106・109・ST10・54		SB 06・07
				ST 57		ST 10	

※（ ）は不明確なもの

第4表　出土土器一覧表

東下原遺跡

第1号住居址

挿図番号	種別・器形	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
25—1	黒色土器杯	13.6 4.2 ●	口辺部は内弯する 丸底	口辺部　ヨコナデ 底部　ヘラケズリ後ヘラミガキ	ヘラミガキ後黒色処理	完形 にぶい黄橙色 (10YR7/4)
25—2	土師器甕	— (5.0) ●	丸底	ハケメ、ヘラケズリ	ヘラナデ	橙色(2.5YR7/6)
25—3	土師器甕	— (5.3) ●	丸底	ヘラケズリ後ヘラナデ	ヘラナデ	にぶい橙色(5YR6/4)

第2号住居址

25－1	土師器杯	13.3 4.95 ●	外面ににぶい稜を有し、口辺部は僅かに外反する　丸底	口辺部　ヨコナデ 底部　ヘラケズリ後ヘラミガキ	ヘラミガキ	口辺部の約1/2欠く 褐灰色(10YR4/1)
25－2	土師器杯	12.4 4.3 ●	外面に稜を有し、口辺部は外反する 丸底	口辺部　ヨコナデ 底部　手持ちヘラケズリ	ヨコナデ	1/2強存 橙色(5YR7/6)
25－3	土師器杯	11.45 4.2 ●	口辺部は直立気味に立ち上がる 丸底	口辺部ヨコナデ 底部　手持ちヘラケズリ	ヨコナデ	約1/2存 にぶい橙色 (7.5YR7/4)
25－4	黒色土器杯	— (3.7) ●	丸底	ヘラミガキ	ヘラミガキ後黒色処理	口辺部を欠く にぶい橙色 (7.5YR7/3)
25－5	黒色土器高杯	— (7.4) —	脚部は「ハ」の字状に開く	ヘラミガキ	ヘラミガキ後黒色処理	杯部、脚裾部を欠く 橙色(5YR6/6)
25－6	黒色土器杯	12.6 4.3 5.2	口辺部は外反気味となる 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ヘラミガキ後黒色処理	口辺部の約1/2欠く にぶい橙色 (7.5YR7/4)
25－7	土師器小型甕	9.95 (9.5) —	口辺部は直立気味に立ち上がる 球胴を有する	口辺部　ヨコナデ　肩部～胴部ヘラナデ後ササラ状工具によるナデ　部分的にヘラミガキ	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラナデ	底部を欠く にぶい橙色 (7.5YR6/4)
25—8	土師器壺	13.8 (16.1) —	口辺部は外反する 最大径を胴中央部に有する	口辺部～胴下部　ヘラミガキ	口辺部　ヘラミガキ 肩部　ヘラナデ 胴部　ヘラナデ後粗いヘラミガキ	約1/2存 にぶい橙色(5YR7/4)

第3号住居址

25－1	土師器杯	12.2 3.65 ●	外面ににぶい稜を有し、口辺部は外反する 丸底	口辺部　ヨコナデ 底部　手持ちヘラケズリ後ヘラナデ	ヨコナデ	略完形 にぶい黄橙色 (10YR6/3)
25－2	土師器杯	14.4 5.2 ●	外面に稜を有し、口辺部は外反する 丸底	口辺部　ヨコナデ 底部　手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ	復原後略完形 明褐灰色(7.5YR7/2)
25－3	土師器甑	11.5 10.2 ●	口辺部は直立気味に立ち上がる　丸底	口辺部　ヨコナデ 体部～底部　ヘラケズリ後ヘラナデ	ヘラケズリ	約1/2存　にぶい橙色(7.5YR7/4)底部に少なくとも8孔を有する
25－4	土師器短頸壺	7.6 5.05 5.9	口辺部は外反する	ヨコナデ 底部　手持ちヘラケズリ	ヨコナデ	略完形 にぶい黄橙色 (10YR7/3)

挿図番号	種別・器形	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
25－5	土師器甕	17.8 33.6 5.0	口辺部は外反する 最大径を口縁部に有する 底部は丸底気味となる	口辺部　ヨコナデ 肩部～底部　ヘラケズリ後ヘラナデ	口辺部　ヨコナデ 肩部～底部　ヘラナデ	復原後略完形 にぶい黄橙色 (10YR7/3)

第4号住居址

25－1	土師器杯	14.5 (3.7) —	口辺部は僅かに外反する	ロクロナデ	ロクロナデ	底部を欠く にぶい橙色 (7.5YR6/4)

第5号住居址

25－1	土師器杯	12.2 3.75 ●	外面ににぶい稜を有し、口辺部は外傾する 丸底	口辺部　ヨコナデ 底部　手持ちヘラケズリ	剥落により不明	略完形 にぶい黄橙色 (10YR7/4)
25－2	黒色土器椀	14.25 6.0 6.7	口辺部は僅かに外反する	ロクロナデ 底部　糸切り後高台を貼付する	ヘラミガキ後黒色処理	口辺部の約1/3欠く 橙色(5YR7/6)

第6号住居址

25－1	土師器小型甕	12.5 (7.0) —	口辺部は外反する	口辺部～肩部　ヨコナデ 胴部　ヘラケズリ	口辺部　ヨコナデ 胴部　ヘラナデ	口辺部～胴部約1/2存 にぶい橙色 (7.5YR6/4)
25－2	土師器甕	— (7.0) 6.1	丸底気味の平底	ヘラケズリ	ヘラナデ	にぶい橙色(5YR6/4)

遺構外

25－1	黒色土器椀	15.0 6.15 7.8	口辺部は外反する	ロクロナデ 底部　糸切り後高台を貼付する	暗文様のヘラミガキ後黒色処理	口辺部の約1/2欠く にぶい橙色 (7.5YR7/4)
25－2	黒色土器杯	13.2 3.9 4.6	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ヘラミガキ後黒色処理	口辺部の約1/3欠く にぶい橙色(7.5YR7/4) 外面に「凪」？の墨書

大下原遺跡

第2号住居址

64－1	黒色土器杯	10.9 4.65 ●	素縁で口辺部は内弯気味に立ち上がる 丸底	口辺部　ヨコナデ後部分的にヘラミガキ 底部　手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ後黒色処理	口辺部の約1/3欠く にぶい橙色 (7.5YR7/4)

第5号住居址

64－1	須恵器蓋	6.4 3.6 11.2	天井部は平らとなる 口辺部は外傾する	天井部　ヘラキリ後回転ヘラケズリ ロクロナデ	ロクロナデ	約1/2存 褐灰色(10YR6/1)
64－2	須恵器蓋	5.6 4.7 12.7	口辺部は内弯気味となる	天井部　ヘラキリ後ヘラナデ ロクロナデ	ロクロナデ	略完形 にぶい橙色 (7.5YR7/4)

第９号住居址

挿図番号	種別・器形	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
64－１	土師器甕	18.5 25.25 (7.0)	口辺部は外反する 最大径を胴中央部に有する	口辺部～底部　ヘラミガキ	口辺部　ヘラミガキ 頸部～底部　ヘラナデ	口辺部、底部の大半を欠く 橙色(2.5YR6/6)

第11号住居址

64－１	土師器鉢	― (14.7) ―	内面に稜を有し、口辺部は内弯気味に立ち上がる	ハケメ後ヘラミガキ	ヘラミガキ	全体の約1/6から復原実測 にぶい橙色(5YR6/3)

第13号住居址

64－１	土師器杯	10.6 3.6 ●	外面ににぶい稜を有し、口辺部は内傾する丸底	口辺部　ヨコナデ 底部　手持ちヘラケズリ	ヨコナデ	約2/3存 橙色(5YR6/6)
64－２	須恵器蓋	4.1 3.6 11.6	口辺部は内傾気味となる	天井部　ヘラキリ後ヘラナデ ロクロナデ	ロクロナデ	約1/3欠く 緑灰色(7.5GY6/1)
64－３	黒色土器高杯	14.0 11.0 (10.2)	口辺部は内弯気味に立ち上がる 脚部は柱状となる	杯部　ヘラケズリ 脚部　ヘラケズリ後ヘラミガキ	杯部　ヘラミガキ後黒色処理 脚部　ヘラケズリ	杯部約1/2、脚裾部の大半を欠く にぶい黄橙色(10YR7/4)
64－４	土師器甕	20.7 (21.95) ―	口辺部は外反する 最大径を口縁部に有する	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラケズリ後ヘラナデ	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラナデ	胴部の約1/2、底部を欠く にぶい橙色(7.5YR7/4)

第５号溝址

64－１	土師器甕	13.35 (18.0) ―	口辺部は外反する 最大径を胴中央部に有する	口辺部　ヨコナデ 頸部　ヘラナデ 胴部　ヘラミガキ	口辺部　ヨコナデ 頸部～胴部　ヘラナデ	頸部に２孔（焼成前） 口辺部の約1/3、底部を欠く 浅黄橙色(10YR8/4)

竹花遺跡

第１号住居址

331－１	土師器甑	14.2 6.85 4.1	口辺部は内弯気味に立ち上がる 底部に１孔を有する	ハケメ後ヘラミガキ	ヘラミガキ	略完形 にぶい褐色 (7.5YR5/4)

第２号住居址

331－１	須恵器蓋	● 3.5 14.35	扁平な宝珠形つまみを有する	ロクロナデ	ロクロナデ	体部の約3/4欠く オリーブ灰色 (2.5GY6/1)

第３号住居址

331－１	土師器鉢	18.7 9.9 ●	口辺部は外反する 丸底	口辺部　ヨコナデ 胴部～底部　ヘラケズリ	口辺部　ヨコナデ 胴部～底部　ヘラミガキ	口辺部～体部の約1/3欠く にぶい黄橙色(10YR6/3)
331－２	土師器甕	17.2 (19.1) 5.4	口辺部は「く」の字状に外反する 最大径を胴中央部に有する	口辺部　ヨコナデ 肩部～底部　ヘラケズリ	口辺部　ヨコナデ 肩部～底部　ヘラナデ	復原後略完形 底部二次焼成を受け表面剝落　にぶい橙色 (5YR6/4)

挿図番号	種別・器形	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
331—3	土師器甕	20.0 (18.9) ——	口辺部は外反する	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラナデ	口辺部　ヨコナデ 頸部～胴部　ヘラナデ	口縁部～胴部の一部と胴下半部を欠く にぶい橙色(7.5YR7/4)

第4号住居址

331—1	黒色土器杯	16.3 5.1 7.5	口辺部は外傾する 平底	ロクロナデ 底部　手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ後黒色処理	復原実測 にぶい橙色(7.5YR7/4) 外面に「光」の墨書
331—2	黒色土器杯	—— (2.5) ——		ロクロナデ	ヘラミガキ後黒色処理	橙色(5YR6/6) 外面に墨書　文字不明

第5号住居址

331—1	土師器甕	20.8 29.35 5.25	口辺部は「く」の字状に外反する 最大径を胴上部に有する	口辺部　ヨコナデ 肩部～底部　ヘラケズリ	口辺部　ヨコナデ 肩部～底部　ヘラナデ	全体の約2/3存 にぶい橙色(5YR7/4)
331—2	土師器甕	20.8 19.0 ——	口辺部は「コ」の字状を呈する 最大径を胴上部に有する	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラケズリ	口辺部　ヨコナデ 肩部～底部　ヘラナデ	胴部の約1/2、底部を欠く にぶい橙色(5YR6/4)
332—1	須恵器四耳壺	29.2 21.35 ——	口辺部は「く」の字状に外反する 肩部に突帯と2対の耳状の突起を付す	口辺部　櫛描波状文 肩部～胴部　タタキ	口辺部　ロクロナデ 肩部～胴部　ヘラナデ	約1/2存 灰色(N6/)

第6号住居址

332—1	土師器杯	13.6 5.55 ●	内稜口辺を有する 丸底	口辺部　ヨコナデ 底部　ヘラミガキ	口辺部　ヨコナデ 底部　ヘラミガキ	略完形 橙色(5YR7/6)
332—2	黒色土器杯	13.35 5.25 ●	口辺部は外反する 丸底	口辺部　ヨコナデ後ヘラミガキ 底部　ヘラケズリ後ヘラミガキ	ヘラミガキ後黒色処理	約1/2存 にぶい赤褐色 (5YR5/3)
332—3	土師器杯	13.8 5.3 ●	内稜口辺を有する 丸底	口辺部　ヘラミガキ 底部　手持ちヘラケズリ 赤色塗彩	暗文様のヘラミガキ 赤色塗彩	約1/2存 にぶい黄橙色 (10YR7/4)
332—4	土師器甕	17.5 20.3 6.0	口辺部は「く」の字状に外反する 最大径を口縁部に有する	口辺部　ヨコナデ 肩部　ハケメ 胴部～胴下半部ヘラナデ 底部　ヘラケズリ	口辺部　ヨコナデ 肩部～底部　ササラ状工具によるナデ	口辺部～胴部の約3/4欠く にぶい橙色(5YR6/4)

第7号住居址

332—1	土師器甕	21.8 (13.55) ——	口辺部は「く」の字状に外反する	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラケズリ	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラナデ	口辺部～胴部の約1/4、胴下部を欠く にぶい橙色(5YR7/4)

第8号住居址

332—1	黒色土器杯	13.2 4.3 5.3	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ヘラミガキ後黒色処理	口辺部の約1/4欠く にぶい橙色 (7.5YR7/4)
332—2	軟質須恵器杯	13.5 4.15 6.0	口辺部は外傾する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	口辺部の約1/3欠く 灰白色(2.5Y7/1)
332—3	軟質須恵器杯	12.9 4.0 4.9	口辺部は外反気味となる 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	略完形 灰白色(5Y7/1)

挿図番号	種別・器形	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
332—4	土師器小型甕	13.25 (6.7) —	口辺部は「く」の字状に外反する	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラケズリ	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラナデ	胴部以下を欠く 灰黄褐色(10YR4/2)
332—5	黒色土器杯	— (1.0) —		ロクロナデ	ヘラミガキ後黒色処理	にぶい黄橙色 (10YR7/3) 外面に墨書　文字不明

第9号住居址

333—1	黒色土器杯	13.3 4.25 5.8	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ヘラミガキ後黒色処理	完形 にぶい黄橙色 (10YR7/4)
333—2	黒色土器杯	14.2 4.45 5.05	口辺部は外傾する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ヘラミガキ後黒色処理	完形 にぶい橙色 (7.5YR7/4) 外面に墨書　文字不明
333—3	黒色土器杯	13.3 4.6 5.7	口辺部は外反気味となる 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ヘラミガキ後黒色処理	完形 にぶい黄橙色 (10YR7/4)
333—4	黒色土器椀	15.4 6.0 7.7	口辺部は外反気味となる	ロクロナデ 底部　糸切り後高台を貼付する	ヘラミガキ後黒色処理	復原後完形 にぶい黄橙色 (10YR7/4)
333—5	須恵器杯	12.75 4.05 5.45	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	口辺部の約1/2欠く 灰色(7.5Y6/1)
333—6	土師器小型甕	11.7 14.6 7.4	口辺部は外反気味となる 最大径を胴中央部に有する	肩部～胴部　カキメ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	約1/2欠く にぶい橙色 (7.5YR6/4)
333—7	黒色土器杯	— (3.75) —	口辺部は外反する	ロクロナデ	ヘラミガキ後黒色処理	にぶい黄橙色 (10YR7/3) 外面に「安」の墨書
333—8	黒色土器杯	— (4.05) —	口辺部は外反する	ロクロナデ	ヘラミガキ後黒色処理	にぶい橙色(5YR6/4) 外面に墨書　文字不明
333—9	軟質須恵器杯	— (3.55) —		ロクロナデ	ロクロナデ	灰黄色(2.5Y7/2) 外面に「□身」の墨書
333—10	軟質須恵器杯	— (2.4) 5.8	平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	口辺部を欠く 灰白色(5Y7/2) 外面に墨書　文字不明

第10号住居址

333—1	黒色土器杯	13.7 3.8 5.5	口辺部は外反気味となる 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ヘラミガキ後黒色処理	口辺部の約1/3欠く にぶい橙色 (7.5YR6/4)
333—2	黒色土器杯	15.1 4.8 6.65	口辺部は外反気味となる 平底	ロクロナデ 底部　糸切り後手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ後黒色処理	口辺部の約1/3欠く にぶい黄橙色(10YR6/4) 外面に墨書　文字不明
333—3	須恵器蓋	● 3.7 14.1	扁平な宝珠形つまみを有する	天井部　回転ヘラケズリ 糸切り後つまみを付す ロクロナデ	ロクロナデ	約1/2存 灰色(7.5Y5/1)
333—4	須恵器杯	13.5 3.7 5.95	口辺部は外反気味となる 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	口辺部の約1/3欠く 灰色(5Y6/1)
333—5	土師器甕	— (6.5) 4.0	平底	ヘラケズリ	ヘラナデ	口辺部～胴部を欠く 橙色(5YR6/6)

挿図番号	種別・器形	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
333—6	須恵器長頸壺	— (12.0) 6.6	最大径を胴部ほぼ中央に有する	ロクロナデ 胴下半部　回転ヘラケズリ 底部　糸切り後高台を貼付する	ロクロナデ	口辺部～頸部を欠く 焼成不良 灰オリーブ色(5Y6/2)
333—7	黒色土器杯	— (3.8) —	口辺部は外反する	ロクロナデ	ヘラミガキ後黒色処理	にぶい黄橙色 (10YR7/4) 外面に墨書　文字不明

第11号住居址

333—1	黒色土器杯	16.1 5.8 5.9	口辺部は外反気味となる 平底	ロクロナデ 底部　糸切り後回転ヘラケズリ	ヘラミガキ後黒色処理	口辺部の約1/2欠く にぶい黄橙色 (10YR7/3)
333—2	黒色土器杯	15.9 5.5 7.9	口辺部は僅かに外反する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ヘラミガキ後黒色処理	略1/2存 にぶい橙色(5YR6/4)
333—3	黒色土器皿	16.2 3.5 8.1	口辺部は外反する	ロクロナデ後部分的にヘラミガキ 底部　糸切り後手持ちヘラケズリ　高台を貼付する	ヘラミガキ後黒色処理	完形 にぶい黄橙色 (10YR7/4)
333—4	黒色土器皿	13.0 2.85 6.2	口辺部は外反する	ロクロナデ 底部　糸切り後高台を貼付する	ヘラミガキ後黒色処理	口辺部の約1/4欠く 外面に「久郷久久伴？弥久□」の墨書　習書 にぶい橙色(7.5YR7/4)
333—5	軟質須恵器杯	13.95 3.9 6.15	口辺部は外傾する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	復原後略完形 灰色(7.5Y6/1)
333—6	須恵器杯	14.0 4.2 5.6	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	口辺部の約1/2欠く 灰白色(5Y7/1)
333—7	土師器甕	— (9.2) 4.85	平底	ヘラケズリ	ヘラナデ	胴下半部～底部存 にぶい橙色(5YR6/3)

第13号住居址

334—1	土師器 小型器台	9.4 7.6 10.7	脚部は「ハ」の字状に開く 脚部に3孔を有する	器受部　ヘラミガキ 脚部　ハケメ後ヘラミガキ	器受部　ヘラミガキ 脚部　ヘラナデ部分的にハケメ 脚裾部　ヨコナデ	復原後略完形 にぶい橙色 (7.5YR7/4)
334—2	土師器高杯	— (3.35) —	脚部は「ハ」の字状に開く	ヘラミガキ後赤色塗彩	ヘラナデ	にぶい黄橙色 (10YR6/3)
334—3	土師器台付甕	14.2 (17.05) —	口辺部は「S」字状を呈する 最大径を胴上部に有する	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　櫛歯状工具による調整	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ハケメ	脚部を欠く にぶい黄橙色 (10YR7/4)
334—4	土師器甕	20.8 27.75 8.0	口辺部は外反する 最大径を胴中央部に有する	口辺部　櫛描文 頸部　簾状文 胴部　櫛描斜走文 胴下半部　ヘラミガキ	口辺部～底部　ヘラミガキ	胴部の約1/2欠く 橙色(5YR7/6)
334—5	土師器甕	17.7 (28.9) —	折り返し口縁を有する 口辺部は「く」の字状に外反する 最大径を胴中央部に有する	口辺部～肩部　縄文 胴部　ヘラミガキ	口辺部～胴部　ヘラミガキ	胴下半部を欠く にぶい橙色 (7.5YR7/4)

第14号住居址

334—1	土師器杯	12.65 3.7 ●	口辺部は内弯する 丸底	ヘラミガキ	ヘラミガキ	口辺部の約1/5欠く 橙色(7.5YR7/6)
334—2	土師器杯	11.65 5.25 ●	口辺部は内弯気味に立ち上がる 丸底	口辺部　ヨコナデ 底部　手持ちヘラケズリ	ヨコナデ後暗文様のヘラミガキ	約1/2存 橙色(5YR6/6)

挿図番号	種別・器形	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
334—3	土師器杯	12.3 5.3 ●	口辺部は内弯気味に立ち上がる 丸底	口辺部　ヨコナデ後粗いヘラミガキ 底部　手持ちヘラケズリ後粗いヘラミガキ	ヘラミガキ	口辺部の約1/2欠く 橙色(5YR6/6)
334—4	土師器杯	15.0 6.9 ●	口辺部は外反気味となる 外面に稜を有する 丸底	口辺部　ヨコナデ後ヘラミガキ 底部　手持ちヘラケズリ後ヘラミガキ	ヘラミガキ	約1/2存 橙色(2.5YR6/6)
334—5	土師器杯	14.5 5.4 ●	口辺部は外反する 外面ににぶい稜を有する 丸底	口辺部　ヨコナデ 底部　手持ちヘラケズリ	ヨコナデ後粗いヘラミガキ	復原後略完形 橙色(5YR6/6)
334—6	土師器杯	15.25 5.7 ●	口辺部は外反する 外面に稜を有する 丸底	口辺部　ヨコナデ 底部　手持ちヘラケズリ	ヨコナデ	約1/2存 橙色(5YR6/6)
334—7	土師器杯	16.4 7.3 ●	口辺部は外反する 外面に稜を有する 丸底	口辺部　ヨコナデ 底部　手持ちヘラケズリ	ヨコナデ	口辺部の約3/4欠く にぶい橙色 (7.5YR6/4)
334—8	土師器杯	13.9 5.25 ●	口辺部は外反する 外面に稜を有する 丸底	口辺部　ヨコナデ後ヘラミガキ　底部　手持ちヘラケズリ後ヘラミガキ	ヨコナデ後ヘラミガキ	口辺部の約1/2欠く にぶい赤褐色 (5YR5/4)
334—9	土師器ミニチュア土器	5.95 5.65 4.3	小型甕のミニチュア	口辺部　ヨコナデ後粗いヘラミガキ 肩部～底部　ヘラナデ後粗いヘラミガキ	口辺部　ヨコナデ後粗いヘラミガキ 肩部～底部　ヘラナデ後粗いヘラミガキ	略完形 にぶい橙色 (7.5YR7/4)

第16号住居址

335—1	土師器杯	9.9 3.3 ●	口辺部は内弯する 丸底	口辺部　ヨコナデ 底部　手持ちヘラケズリ	ヨコナデ	復原後略完形 にぶい橙色 (7.5YR6/4)

第19号住居址

335—1	須恵器蓋	● 3.1 13.0	扁平な宝珠形つまみを有する	天井部　回転ヘラケズリ ロクロナデ	ロクロナデ	復原完形 灰色(7.5Y5/1)
335—2	須恵器短頸壺	5.1 7.4 4.85	口辺部は内傾する 最大径を肩部に有する	口辺部～胴部　ロクロナデ 胴下半部　回転ヘラケズリ	ロクロナデ	約3/4存 口辺部～肩部外面に自然釉付着 灰色(5Y6/1)
335—3	黒色土器椀	— (2.25) 6.85		ロクロナデ 底部　糸切り後高台を貼付する	ヘラミガキ後黒色処理	口辺部を欠く にぶい橙色(5YR7/3) 底部に「南」の墨書

第20号住居址

335—1	土師器杯	12.1 3.5 ●	口辺部は内弯気味に立ち上がる 丸底	口辺部　ヨコナデ 底部　手持ちヘラケズリ	ヨコナデ	口辺部の一部、底部の約1/3欠く 橙色(5YR6/6)
335—2	須恵器杯	(8.3) 3.3 ●	たちあがりは内傾し非常に低い 丸底	口辺部～体部　ロクロナデ 底部　回転ヘラケズリ	ロクロナデ	1/2弱存　復原実測 灰色(5Y5/1)
335—3	土師器甕	14.8 (9.1) —	口辺部は外反する	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラケズリ	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ハケメ	胴下半部を欠く にぶい橙色 (7.5YR6/4)
335—4	土師器甕	19.0 (13.65) —	口辺部は外反する 最大径を口縁部に有する	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラケズリ	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラナデ	胴下半部を欠く 橙色(7.5YR7/6)
335—5	土師器甕	15.1 (14.9) —	口辺部は内弯気味に立ち上がる 口縁部内面は肥厚する	口辺部　ヨコナデ 頸部　ハケメ 肩部　ハケメ後ヘラナデ 胴部　ハケメ	口辺部　ヨコナデ 頸部　ハケメ 肩部　ヘラナデ 胴部　ハケメ	口辺部の大半、胴下半部を欠く にぶい褐色(7.5YR5/3)

第21号住居址

挿図番号	種別・器形	法　量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備　　考
335—1	須恵器蓋	● 2.95 15.25	扁平な宝珠形つまみを有する	天井部 糸切り後回転ヘラケズリ ロクロナデ	ロクロナデ	口辺部の約1/3欠く 灰色(7.5Y6/1)
335—2	須恵器甕	24.0 17.0 —	口辺部は「く」の字状に外反する 球胴を有する	口辺部　ロクロナデ 肩部　タタキメ後ハケメ	口辺部　ロクロナデ 頸部　ヘラナデ 肩部　青海波文後ヨコナデ	口辺部の約1/3、胴部以下を欠く 灰白色(N7/)

第22号住居址

335—1	黒色土器皿	13.1 2.5 7.35	口辺部は外反気味となる	ロクロナデ 底部　糸切り後高台を貼付する	ヘラミガキ後黒色処理	口辺部の一部を欠く 橙色(7.5YR7/6)
335—2	黒色土器椀	— (2.3) 6.2		口辺部　ヘラミガキ後黒色処理 高台部　部分的にヘラミガキ、黒色処理 底部　糸切り後高台を貼付する	ヘラミガキ後黒色処理	口辺部を欠く 灰オリーブ色(5Y6/2)
335—3	土師器甕	14.05 (10.7) —	口辺部は外反する	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラケズリ	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラナデ	口辺部の約2/3、肩部～胴部の約1/4存 にぶい橙色(5YR6/4)

第23号住居址

336—1	黒色土器杯	16.25 4.7 ●	口辺部は外傾する 丸底	口辺部　ヨコナデ 底部　手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ後黒色処理	約3/4存 にぶい黄橙色 (10YR7/4)
336—2	須恵器杯	13.6 4.6 7.1	口辺部は外傾する	ロクロナデ 底部　ヘラキリ未調整	ロクロナデ	完形 黄灰色(2.5Y6/1)
336—3	黒色土器杯	— (2.35) —		ロクロナデ	ヘラミガキ後黒色処理	にぶい黄橙色 (10YR7/3) 外面に墨書　文字不明
336—4	須恵器円面硯	— (2.05) —	残存部で4個の透孔を有する	ロクロナデ 脚台上部　竹管文	ロクロナデ	復原実測 胎土・文様ともSK01出土資料に極似 灰色(N5/)

第24号住居址

336—1	須恵器杯	12.6 3.9 5.75	口辺部は外傾する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	口辺部の約1/4欠く 灰白色(5Y7/2)

第25号住居址

336—1	須恵器椀	10.5 2.9 7.4	口辺部は外傾する	ロクロナデ 底部　回転ヘラケズリ後高台を貼付する	ロクロナデ	約1/2存 外面に自然釉付着 灰色(N6/)
336—2	土師器甕	(21.6) 34.65 4.3	口辺部は「く」の字状に外反する 最大径を胴上部に有する	口辺部　ヨコナデ 肩部～底部　ヘラケズリ	口辺部　ヨコナデ 肩部～底部　ヘラナデ	口辺部の大半を欠く 橙色(2.5YR7/6)
336—3	土師器小型甕	15.7 18.3 ●	口縁端部をつまみ上げる 口辺部は「く」の字状に外反する 最大径を胴上部に有する	口辺部　ヨコナデ 肩部　ヘラナデ 胴下半部～底部　ヘラによるハケメ様の調整	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴上部　ヘラナデ 胴下部～底部　ヘラケズリ	復原後略完形 灰白色(2.5Y8/2)

第26号住居址

挿図番号	種別・器形	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
336—1	黒色土器杯	13.5 4.8 ●	口辺部は外傾する 外面に稜を有する	口辺部　ヨコナデ 底部　手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ後暗文 黒色処理	口辺部の約1/2欠く にぶい赤褐色(5YR5/3)
336—2	黒色土器椀	8.1 6.85 ●	口辺部は内傾する 丸底	口辺部　ヨコナデ 肩部～底部　手持ちヘラケズリ	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴上部　ヘラナデ 胴下部～底部　ヘラミガキ 黒色処理	略完形 にぶい橙色(5YR6/3)
336—3	土師器小型甕	11.2 8.85 6.0	口辺部は外反する 最大径を口縁部に有する	口辺部　ヨコナデ 肩部～底部　ヘラナデ	口辺部～肩部　ヨコナデ 胴部～底部　ヘラケズリ	略完形 にぶい褐色 (7.5YR5/3)
336—4	土師器小型甕	15.45 16.7 6.9	口辺部は外反する 最大径を口縁部に有する	口辺部　ヨコナデ 肩部～底部　ヘラナデ	口辺部　ヨコナデ 頸部～底部　ヘラナデ	復原後略完形 二次焼成を受ける にぶい黄橙色(10YR6/3)
337—1	土師器甕	17.8 (20.6) ——	口辺部は外反する 球胴を呈すると思われる	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラミガキ	口辺部　ヨコナデ 頸部～胴部　ヘラナデ	胴下半部を欠く にぶい橙色 (7.5YR7/4)

第28号住居址

337—1	須恵器杯	13.45 3.6 10.0	口辺部は外反する	ロクロナデ 底部　ヘラキリ後回転ヘラケズリ	ロクロナデ	約1/2存 灰色(N6/)

第29号住居址

337—1	須恵器蓋	● 3.9 14.6	扁平な宝珠形つまみを有する	天井部　回転ヘラケズリ ロクロナデ	ロクロナデ	完形 オリーブ灰色 (2.5GY6/1)
337—2	土師器甑	15.0 4.3 7.1	口辺部は外傾する 平底 底部に焼成後の穿孔	ロクロナデ 底部　糸切り後手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ	口辺部の約1/2欠く 杯の甑への転用 にぶい橙色(7.5YR6/4)

第30号住居址

337—1	土師器杯	13.5 3.6 ●	素縁で口辺部は内弯する 丸底	ヘラミガキ	ヘラミガキ	復原後略完形 底部外面にヘラ記号 にぶい橙色(5YR7/4)
337—2	土師器杯	12.7 4.95 ●	口辺部は外反する 外面に稜を有する 丸底	口辺部　ヨコナデ後粗いヘラミガキ 底部　手持ちヘラケズリ後粗いヘラミガキ	ヘラミガキ	略完形 橙色(5YR6/6)

第31号住居址

337—1	須恵器高杯	—— (5.4) ——		ロクロナデ	ロクロナデ	杯部、脚裾部を欠く 灰色(7.5Y5/1)
337—2	土師器杯	—— (3.05) ——		ロクロナデ	ヘラミガキ	にぶい褐色 (7.5YR6/3) 内面に墨書？
337—3	須恵器杯	14.5 4.4 7.85	口辺部は外傾する 平底	ロクロナデ 底部　ヘラキリ未調整	ロクロナデ	口辺部の約2/3を欠く 灰白色(7.5Y7/1)

第32号住居址

挿図番号	種別・器形	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
337－1	土師器杯	12.4 3.6 4.85	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ヘラミガキ	復原後略完形 にぶい橙色(7.5YR7/4) 外面に墨書　文字不明
337－2	土師器杯	13.5 4.0 6.35	口辺部は外傾する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	口辺部の約1/2欠く にぶい黄橙色(10YR7/4) 外面に墨書？
337－3	土師器杯	13.2 4.1 6.7	口辺部は外反気味となる 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	略完形 にぶい黄橙色 (10YR7/4)
337－4	土師器杯	13.4 4.9 6.15	口辺部は外反気味となる 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ヘラミガキ	口辺部の約2/3欠く 橙色(5YR7/6)
337－5	黒色土器杯	13.25 4.35 6.6	口辺部は外反気味となる 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ヘラミガキ後黒色処理	口辺部の約1/2欠く にぶい黄橙色 (10YR7/4)
337－6	黒色土器杯	12.85 4.65 5.75	口辺部は外反気味となる 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ヘラミガキ後黒色処理	口辺部の約1/2欠く にぶい橙色 (7.5YR7/4)
337－7	黒色土器杯	13.1 3.9 6.95	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り後手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ後黒色処理	復原後ほぼ完形 にぶい黄橙色 (10YR7/4)
337－8	黒色土器杯	12.25 4.1 5.65	口辺部は外反気味となる 平底	ロクロナデ 底部　糸切り後手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ後黒色処理	口辺部の約1/3欠く にぶい黄橙色 (10YR7/4)
337－9	黒色土器杯	13.2 3.6 5.85	口辺部は内弯気味に立ち上がる 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ヘラミガキ後黒色処理	口辺部の約1/2欠く にぶい褐色 (7.5YR6/3)
337－10	黒色土器杯	13.95 4.25 6.75	口辺部は内弯気味に立ち上がる 平底	ロクロナデ 底部　糸切り後手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ後黒色処理	復原完形 にぶい橙色 (7.5YR6/4)
337－11	黒色土器椀	19.35 5.7 7.55	口辺部は外反する	ロクロナデ 底部　糸切り後高台を貼付する	ヘラミガキ後黒色処理	口辺部の約1/2欠く にぶい橙色 (7.5YR7/4)
337－12	黒色土器椀	14.75 (4.8) —	口辺部は外傾する	ロクロナデ 底部　糸切り後高台を貼付する	ヘラミガキ後黒色処理	口辺部の約1/2、高台部を欠く 橙色(5YR7/6)
337－13	須恵器杯	13.6 3.7 6.4	口辺部は外傾する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	約1/2存 灰色(7.5Y6/1)
337－14	軟質須恵器杯	13.7 3.55 5.7	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	口辺部の約1/3欠く 灰白色(2.5Y7/1)
337－15	須恵器杯	12.45 3.75 6.4	口辺部は外傾する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	口辺部の約1/3欠く 灰色(5Y6/1)
338－1	黒色土器杯	— (2.7) —		ロクロナデ	ヘラミガキ後黒色処理	にぶい橙色 (7.5YR6/4) 外面に「子」の墨書
338－2	黒色土器杯	— (2.5) —		ロクロナデ	ヘラミガキ後黒色処理	にぶい橙色(5YR7/4) 外面に墨書　文字不明
338－3	須恵器椀	— (1.7) 9.0		ロクロナデ 底部　糸切り後高台を貼付する	ロクロナデ	口辺部を欠く 灰色(N6/)

挿図番号	種別・器形	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
338—4	土師器甕	17.6 (8.0) —	口辺部は「コ」の字状を呈する	口辺部ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラケズリ	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ササラ状工具によるナデ	胴部～底部を欠く にぶい橙色 (7.5YR6/4)
338—5	須恵器長頸壺	— (7.3) —		ロクロナデ	ロクロナデ	胴部の約1/2存 オリーブ灰色 (5GY5/1)

第33号住居址

338—1	土師器杯	11.0 3.65 ●	口辺部は外反する 外面に稜を有する 丸底	口辺部　ヨコナデ 底部　手持ちヘラケズリ	口辺部　ヨコナデ 底部　ヘラナデ後ヨコナデ	復原後略完形 橙色(5YR7/6)
338—2	土師器杯	11.0 4.1 ●	口辺部は外反する 外面に稜を有する 丸底	口辺部　ヨコナデ 底部　手持ちヘラケズリ	ヨコナデ	約2/3存 にぶい橙色(5YR7/4)
338—3	土師器杯	11.1 4.1 ●	口辺部は外反する 外面に稜を有する 丸底	口辺部　ヨコナデ 底部　手持ちヘラケズリ	ヨコナデ	約1/3存 橙色(5YR7/6)
338—4	須恵器杯	15.2 (5.3) —	口辺部は外傾する	ロクロナデ	ロクロナデ	口辺部の約1/3、底部を欠く 灰色(7.5Y6/1)
338—5	黒色土器高杯	— (5.1) (7.15)	「ハ」の字状に開く短い脚部を有する	脚部　ヘラケズリ 脚裾部　ヨコナデ	杯部　ヘラミガキ後黒色処理 脚部　ヘラケズリ 脚裾部　ヨコナデ	杯部と脚裾部の大半を欠く 橙色(7.5YR7/6)
338—6	土師器甑	11.1 11.05 5.8	口辺部は外反する 最大径を胴中央部に有する 底部に焼成前の10孔を有する	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラケズリ後ヘラミガキ 胴下半部～底部　ヘラケズリ	口辺部　ヨコナデ 肩部～底部　ヘラナデ	略完形 にぶい黄橙色 (10YR7/3)
338—7	土師器甕	17.85 (20.1) —	口辺部は外反する	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラケズリ後ヘラミガキ	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラナデ	残存部のうちの約1/3欠く にぶい橙色(5YR6/4)
338—8	土師器甕	14.4 21.6 4.2	口辺部は外反する 最大径を口縁部に有する	口辺部～肩部　ヨコナデ 胴部～底部　ヘラナデ後粗いヘラミガキ	口辺部～胴中央部　ヘラナデ後粗いヘラミガキ 胴下半部～底部　ヘラナデ	復原後略完形 橙色(7.5YR6/6)
338—9	土師器小型甕	12.5 17.75 ●	口辺部は外反する 最大径を胴中央部に有する	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラケズリ後ヘラミガキ 胴下半部～底部　ヘラケズリ	口辺部　ヘラミガキ 肩部～底部　ヘラナデ	略完形 灰黄褐色 (10YR6/2)

第37号住居址

338—1	須恵器杯	14.3 4.6 6.9	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	口辺部の約1/3欠く 灰白色(7.5Y7/1)
338—2	土師器甕	15.4 (13.25) —	口辺部は外反するが外反度は弱い	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラナデ	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラナデ	残存部のうち約1/3を欠く にぶい黄橙色(10YR7/4)
339—1	土師器甕	20.4 (32.0) —	口辺部は外反するが外反度は弱い 最大径を胴中央部に有する	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラケズリ	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラナデ	口辺部～胴部の一部、底部を欠く 橙色(2.5YR7/6)

第38号住居址

339—1	土師器杯	13.3 4.2 ●	口辺部は内弯気味に立ち上がる 丸底	口辺部　ヨコナデ 底部　手持ちヘラケズリ	ヨコナデ	復原完形 にぶい橙色 (7.5YR7/4)
339—2	土師器杯	12.6 4.2 ●	口辺部は内弯する 丸底	口辺部　ヨコナデ 底部　手持ちヘラケズリ	ヨコナデ	約1/2存 にぶい黄橙色 (10YR6/4)

挿図番号	種別・器形	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
339—3	土師器杯	12.4 4.2 ●	口辺部は内弯する 丸底	口辺部　ヨコナデ 底部　手持ちヘラケズリ	ヨコナデ	口辺部の約1/3欠く にぶい橙色 (7.5YR7/4)
339—4	黒色土器杯	12.4 4.25 ●	口辺部は外傾気味となる 丸底	口辺部　ヨコナデ 底部　手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ後黒色処理	口辺部の約1/3欠く にぶい黄橙色 (10YR6/4)
339—5	黒色土器杯	12.8 4.3 ●	口辺部は外傾気味となる 丸底	口辺部　ヨコナデ 底部　手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ後黒色処理	口辺部の約2/3欠く にぶい橙色 (7.5YR7/3)
339—6	黒色土器杯	11.55 3.85 ●	口辺部は僅かに外反する 丸底	口辺部　ヨコナデ 底部　手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ後黒色処理	口辺部の約1/2欠く にぶい橙色(5YR7/4)
339—7	黒色土器高杯	13.45 10.15 8.85	口辺部は外反する 脚部は「ハ」の字状に開く	杯部　ヘラミガキ 脚部　ヘラケズリ後ヘラミガキ	杯部　ヘラミガキ後黒色処理 脚部　ヨコナデ	杯部約1/2、脚裾部約1/4を欠く 橙色(5YR6/6)
339—8	黒色土器高杯	9.95 4.25 6.0	口辺部は外反する 短い脚部を有する	杯口辺部　ヨコナデ 杯下部～脚部　ヘラケズリ 脚裾部　ヨコナデ	杯部　黒色処理 脚部　ヨコナデ	口辺部の一部と脚裾部の約1/2欠く 橙色(2.5YR6/6)
339—9	黒色土器高杯	10.6 5.25 6.1	口辺部は外反する 短い脚部を有する	杯部　ヘラミガキ 脚部　ヘラケズリ	杯部　ヘラミガキ後黒色処理 脚部　ヘラナデ	口辺部の約1/2、脚部の約2/3を欠く にぶい橙色(5YR6/4)
339—10	黒色土器高杯	10.3 (4.4) —	口辺部は外反する 短い脚部を有する	杯口辺部　ヨコナデ 杯下部～脚部　ヘラケズリ	杯部　ヘラミガキ後黒色処理 脚部　ヨコナデ	口辺部の約3/4、脚裾部を欠く にぶい橙色(5YR7/3)
339—11	黒色土器高杯	— (5.3) 9.1	脚部は「ハ」の字状に開く	脚部　ヘラケズリ後ヘラミガキ	杯部　ヘラミガキ後黒色処理 脚部　ヨコナデ	口辺部、脚部の約1/3欠く にぶい橙色(5YR6/4)
339—12	須恵器蓋	● 2.4 (10.3)	宝珠形つまみを有する 内面にかえりを有しかえりは口端部より下方へ突出する	天井部　回転ヘラケズリ ロクロナデ	ロクロナデ	1/2弱存 灰色(7.5Y6/1)
339—13	須恵器蓋	(6.1) 3.4 (16.3)	環状のつまみを有する　内面にかえりを有する	天井部　回転ヘラケズリ ロクロナデ	ロクロナデ	約1/4存　復原実測 灰色(10Y5/1)
339—14	黒色土器高杯	17.15 (5.9) —	口辺部は外反する	ヘラミガキ	ヘラミガキ後黒色処理	脚部を欠く 橙色(7.5YR6/6)
339—15	土師器甕	21.7 33.0 4.3	口辺部は外反する 最大径を口縁部に有する	口辺部　ヨコナデ 肩部～底部　ヘラケズリ	口辺部　ヨコナデ 肩部～底部　ヘラナデ	約1/2存 橙色(5YR6/6)

第39号住居址

339—1	土師器杯	10.8 4.05 ●	口辺部は外反気味に立ち上がる 丸底	口辺部　ヨコナデ 底部　手持ちヘラケズリ	ヨコナデ	約2/3存 にぶい橙色(5YR7/4)
339—2	土師器小型壺	10.3 10.6 ●	口辺部は「く」の字状に外反する 最大径を胴中央部に有する　丸底	口辺部～底部　ヘラミガキ	口辺部　ヘラミガキ 肩部～底部　ヘラナデ	口辺部の約1/2、胴部の約1/4欠く 橙色(5YR6/6)
339—3	土師器甕	19.5 25.3 —	口辺部は「く」の字状に外反する	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラケズリ	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラナデ	口辺部の約1/3、底部欠く にぶい橙色(7.5YR6/4)

第40号住居址

340—1	黒色土器杯	12.7 4.1 7.25	口辺部は内弯気味に立ち上がる 平底	ロクロナデ 底部　手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ後黒色処理	口辺部の約1/3欠く 橙色(5YR7/6)

挿図番号	種別・器形	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
340—2	土師器甕	— (5.05) 3.75	平底	ヘラケズリ	ヘラナデ	にぶい褐色 (7.5YR5/3)

第41号住居址

340—1	黒色土器杯	13.95 4.35 6.2	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ヘラミガキ後黒色処理	口辺部の約1/7欠く にぶい橙色 (7.5YR7/4)
340—2	須恵器杯	13.1 4.1 5.8	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	復原完形 灰白色(2.5Y7/1)
340—3	黒色土器皿	12.8 (2.45) —	口辺部は外反する	ロクロナデ 底部　糸切り後高台を貼付する	ヘラミガキ後黒色処理	高台部を欠く 橙色(7.5YR7/6) 外面に「西」の墨書
340—4	黒色土器椀	16.0 6.95 7.6	口辺部は外反する	ロクロナデ 底部　糸切り後高台を貼付する	ヘラミガキ後黒色処理	復原後略完形 浅黄橙色 (7.5YR8/6)
340—5	灰釉陶器椀	13.7 4.4 6.3	口辺部は外反する	ロクロナデ 底部　回転ヘラケズリ後高台を貼付する	ロクロナデ	復原後略完形 灰白色(N8/) 底面に墨書　文字不明
340—6	土師器小型甕	— (13.6) 6.35	胴中央部に最大径を有する	肩部～底部　カキ目 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	肩部～底部の約1/2存 にぶい橙色(5YR6/4)
340—7	黒色土器杯	— (3.3) —	口辺部は外反する	ロクロナデ	ヘラミガキ後黒色処理	にぶい黄橙色 (10YR6/4) 外面に「茂」の墨書
340—8	黒色土器杯	— (2.3) —	口辺部は外反する	ロクロナデ	ヘラミガキ後黒色処理	にぶい橙色 (7.5YR7/4) 外面に墨書　文字不明
340—9	黒色土器杯	— (4.35) —	口辺部は外反する	ロクロナデ	ヘラミガキ後黒色処理	にぶい橙色 (7.5YR7/4) 外面に「川」の墨書
340—10	黒色土器杯	— (3.5) —	口辺部は外反する	ロクロナデ	ヘラミガキ後黒色処理	浅黄橙色(7.5YR8/6) 外面に墨書　文字不明
340—11	黒色土器杯	— (3.8) —	口辺部は外反する	ロクロナデ	ヘラミガキ後黒色処理	にぶい橙色 (7.5YR7/4) 外面に「之」？の墨書
340—12	須恵器杯	— (2.35) —	口辺部は外反する	ロクロナデ	ロクロナデ	灰色(7.5Y6/1) 外面に墨書　文字不明
340—13	黒色土器杯	— (1.65) —	口辺部は外傾する	ロクロナデ	ヘラミガキ後黒色処理	にぶい橙色 (7.5YR7/4) 外面に墨書　文字不明
340—14	黒色土器杯	— (1.8) —	口辺部は外反する	ロクロナデ	ヘラミガキ後黒色処理	にぶい黄橙色 (10YR7/4) 外面に墨書　文字不明
340—15	黒色土器皿	— (1.05) —	口辺部は外反する	ロクロナデ	ヘラミガキ後黒色処理	にぶい橙色 (7.5YR7/4) 外面に墨書　文字不明
340—16	黒色土器皿	— (0.95) —	口辺部は外反する	ロクロナデ	ヘラミガキ後黒色処理	にぶい橙色 (7.5YR7/4) 外面に墨書　文字不明
340—17	須恵器杯	— (2.3) —	口辺部は外傾する	ロクロナデ	ロクロナデ	灰黄色(2.5Y7/2) 外面に墨書　文字不明

挿図番号	種別・器形	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
340—18	黒色土器杯	— (2.95) —		ロクロナデ	ヘラミガキ後黒色処理	にぶい黄橙色 (10YR7/4) 外面に墨書　文字不明
340—19	須恵器杯	— (2.6) —		ロクロナデ	ロクロナデ	淡黄色(5Y8/3) 外面に墨書　文字不明
340—20	黒色土器杯	— (2.95) —		ロクロナデ	ヘラミガキ後黒色処理	にぶい黄橙色 (10YR7/4) 外面に墨書　文字不明
340—21	黒色土器杯	— (2.1) —		ロクロナデ	ヘラミガキ後黒色処理	橙色(7.5YR7/6) 外面に墨書　文字不明
340—22	黒色土器杯	— (1.45) —		ロクロナデ	ヘラミガキ後黒色処理	にぶい橙色 (7.5YR7/4) 外面に墨書　文字不明
340—23	灰釉陶器椀	— (1.15) —		ロクロナデ	ロクロナデ	灰白色(2.5Y7/1) 底部外面に墨書　文字不明

第42号住居址

340—1	土師器甕	— (14.1) 9.5	球胴を呈する 底部は丸底気味で突出する	ヘラミガキ	ヘラナデ	口辺部～胴上部を欠く にぶい橙色 (7.5YR7/4)

第43号住居址

340—1	黒色土器杯	14.85 4.8 ●	口辺部は外傾する 丸底	口辺部　ヨコナデ	ヘラミガキ後黒色処理	約4/5存 にぶい橙色 (7.5YR7/4)

第44号住居址

340—1	土師器杯	14.2 5.3 ●	口辺部は外反する 外面に稜を有する 丸底	口辺部　ヨコナデ後ヘラミガキ 底部　手持ちヘラケズリ後ヘラミガキ	ヘラミガキ後暗文「〆」	口辺部の約1/3欠く にぶい赤褐色 (5YR5/4)
340—2	須恵器蓋	5.2 4.8 14.2	外面に稜を有する	天井部　回転ヘラケズリ ロクロナデ	ロクロナデ	口辺部～天井部の約1/3欠く 灰褐色(7.5YR6/2)
340—3	土師器手づくね土器	4.25 2.6 ●	口辺部は内弯気味に立ち上がる 丸底	ヘラナデ	ヘラナデ	完形 橙色(7.5YR6/6)
340—4	土師器小型甕	10.15 10.0 5.65	口辺部は「く」の字状に外反する 最大径を胴中央部に有する	口辺部　ヨコナデ 肩部～底部　ヘラケズリ	口辺部～肩部　ヨコナデ 胴部～底部　ハケメ	口辺部の約1/3欠く にぶい赤褐色 (5YR5/4)
340—5	土師器甕	— (22.3) 7.35	長胴を呈する	肩部～底部　ヘラケズリ	肩部～底部　ヘラナデ	口辺部～肩部、胴部の約1/2欠く にぶい橙色(5YR7/3)

第45号住居址

341—1	土師器鉢	15.5 8.6 8.05	口辺部は外反する 最大径を口縁部に有する	口辺部～肩部　ヨコナデ 胴部～底部　ヘラナデ	口辺部～肩部　ヨコナデ 胴部～底部　ヘラナデ	口辺部の約1/3欠く 橙色(2.5YR6/6)
341—2	土師器甑	18.4 9.6 6.7	口辺部は外反する 最大径を口縁部に有する	口辺部　ヨコナデ 肩部～底部　ヘラナデ	口辺部　ヨコナデ 肩部～底部　ヘラナデ	完形 焼成後孔径を広げる 浅黄橙色(7.5YR8/4)

挿図番号	種別・器形	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
341—3	土師器甑	15.15 12.0 4.25	口辺部は外反する 最大径を口縁部に有する	口辺部～肩部　ヨコナデ 胴部～底部　ヘラケズリ	口辺部～胴上部　ヨコナデ 胴下部～底部　ヘラナデ	口辺部の大半を欠く 底部に12孔(うち1孔は未通、内面から穿孔) 橙色(2.5YR6/6)
341—4	黒色土器高杯	— 5.95 10.8	脚部は「ハ」の字状に開く	脚部　ヘラケズリ	杯部　ヘラミガキ後黒色処理 脚部　ヘラケズリ	口辺部、脚裾部の約1/3欠く にぶい橙色(7.5YR6/4)
341—5	土師器小型壺	8.0 17.5 ●	口辺部は外反する 最大径を胴下部に有する　丸底	口辺部～底部　ヘラミガキ	口辺部～底部　ヘラミガキ	口縁端部の約1/2欠く 浅黄橙色(10YR8/3)

第46号住居址

341—1	須恵器杯	12.8 4.1 5.05	口辺部は外傾する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	約1/2存 灰色(N6/)
341—2	須恵器杯	(13.7) 4.2 7.4	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	口辺部の約2/3を欠く 灰白色(N7/)
341—3	軟質須恵器杯	14.2 3.85 5.75	口辺部は外反気味となる 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	約1/2存 灰白色(2.5Y8/1)

第47号住居址

341—1	黒色土器杯	13.6 4.65 6.0	口辺部は外反気味となる 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	暗文後黒色処理	口辺部の約1/2欠く にぶい黄橙色(10YR7/3) 外面に「□家」の墨書 底部にヘラ記号
341—2	黒色土器杯	— (2.85) —	口辺部は外反する	ロクロナデ	ヘラミガキ後黒色処理	にぶい黄橙色 (10YR7/4) 外面に墨書　文字不明
341—3	黒色土器杯	— (2.9) —		ロクロナデ	ヘラミガキ後黒色処理	にぶい橙色(5YR6/4) 外面に墨書　文字不明
341—4	黒色土器杯	— (2.95) —	平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ヘラミガキ後黒色処理	にぶい橙色 (7.5YR7/4) 外面に墨書　文字不明

第49号住居址

341—1	土師器杯	14.4 4.45 6.05	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	口辺部の約1/2欠く SB58との接合資料 にぶい橙色(7.5YR7/3)
341—2	黒色土器杯	12.7 4.2 5.4	口辺部は外傾する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ヘラミガキ後黒色処理	口辺部の約1/3欠く 明褐灰色(7.5YR7/2) 外面に「大井」の墨書
341—3	黒色土器杯	13.55 4.7 5.8	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ヘラミガキ後黒色処理	口辺部の約2/3欠く 橙色(7.5YR7/6)
341—4	黒色土器杯	12.8 4.9 5.2	口辺部は外傾する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り後手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ後黒色処理	口辺部の約1/4欠く にぶい橙色(5YR7/4)
341—5	黒色土器椀	14.6 5.9 6.75	口辺部は外反する	ロクロナデ 底部　糸切り後ヘラケズリ　高台を貼付する	ヘラミガキ後黒色処理	1/2弱存 橙色(5YR7/6)
341—6	軟質須恵器杯	(14.55) 4.35 (6.2)	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	口辺部の約1/3存 灰黄色(2.5Y7/2) 外面に「寸」？の墨書

挿図番号	種別・器形	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
341－7	灰釉陶器椀	15.2 4.35 7.4	口辺部は外反する	ロクロナデ 底部　回転ヘラケズリ　高台を貼付する	ロクロナデ	口辺部の約1/4、底部の約3/4存 灰白色(2.5Y7/1)
341－8	黒色土器杯	— (3.25) —	口辺部は外反する	ロクロナデ	ヘラミガキ後黒色処理	にぶい橙色 (7.5YR7/3) 外面に墨書　文字不明
341－9	黒色土器杯	— (4.45) —	口辺部は外反する	ロクロナデ	ヘラミガキ後黒色処理	にぶい橙色(5YR7/4) 外面に「下」の墨書
341－10	黒色土器杯	— (2.7) —		ロクロナデ	ヘラミガキ後黒色処理	にぶい黄橙色 (10YR7/4) 外面に墨書　文字不明
341－11	黒色土器杯	— (2.25) —		ロクロナデ	ヘラミガキ後黒色処理	橙色(7.5YR7/6) 外面に墨書　文字不明
341－12	黒色土器杯	— (2.45) —		ロクロナデ	ヘラミガキ後黒色処理	にぶい黄橙色 (10YR7/4) 外面に墨書　文字不明
341－13	黒色土器杯	— (1.65) —		ロクロナデ	ヘラミガキ後黒色処理	にぶい橙色 (7.5YR7/4) 外面に墨書　文字不明
341－14	黒色土器椀	— (1.35) —		ロクロナデ 底部　糸切り後高台を貼付する	ヘラミガキ後黒色処理	にぶい黄橙色 (10YR7/4) 外面に墨書　文字不明
341－15	黒色土器杯	— (1.45) (2.6)	平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ヘラミガキ後黒色処理	にぶい橙色(7.5YR7/3) 底部外面に墨書　文字不明
341－16	黒色土器椀	— (2.3) —		ロクロナデ 底部　糸切り後高台を貼付する	ヘラミガキ後黒色処理	にぶい橙色 (7.5YR6/4) 外面に墨書　文字不明
341－17	土師器甕	20.4 15.5 —	口辺部は「コ」の字状を呈する	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラケズリ	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラナデ	口辺部～胴部の約1/2、胴下半部を欠く にぶい赤褐色(5YR5/4)
342－1	須恵器横瓶	— (21.65) ●		口辺部　ロクロナデ 胴部　ヘラケズリ	ロクロナデ	口辺部、胴部の一部を欠く 灰色(10Y5/1)
342－2	須恵器長頸壺	— (6.15) 8.15		胴部　ロクロナデ 胴下半部　回転ヘラケズリ 底部　糸切り後外周回転ヘラケズリ　高台を貼付する	ロクロナデ	口辺部～胴上部を欠く 焼成不良 にぶい橙色(7.5YR6/4)

第50号住居址

342－1	須恵器椀	12.2 4.6 5.3	口辺部は外反気味となる	ロクロナデ 底部　回転ヘラケズリ後高台を貼付する	ロクロナデ	口辺部の約1/3欠く 緑灰色(10G5/1)

第53号住居址

342－1	軟質須恵器杯	13.9 4.3 6.15	口辺部は外反気味となる 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	口辺部の約1/2欠く 灰黄色(2.5Y7/2)

第54号住居址

342－1	土師器杯	14.3 4.2 ●	口辺部は外反する 丸底	口辺部　ヨコナデ 底部　手持ちヘラケズリ	口辺部　斜放射文 底部　ラセン文	完形 にぶい橙色 (7.5YR7/3)

挿図番号	種別・器形	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
342—2	須恵器杯	12.8 4.0 7.6	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 底部　ヘラキリ未調整	ロクロナデ	約1/2存 外面に自然釉付着 オリーブ灰色 (2.5GY6/1)
342—3	土師器小型甕	10.4 7.75 ●	口辺部は「く」の字状に外反する 丸底	口辺部～肩部　ヨコナデ 胴部～底部　ヘラケズリ	口辺部～肩部　ヨコナデ 胴部～底部　ヘラナデ	口辺部の約2/3、肩部の約1/3欠く にぶい橙色(5YR6/4)

第55号住居址

342—1	須恵器蓋	3.2 3.5 10.9	口辺部は外反気味となる	天井部　回転ヘラケズリ ロクロナデ	ロクロナデ	略完形 灰黄色(2.5Y7/2)
342—2	黒色土器高杯	13.7 6.9 8.3	口辺部は外反する 「ハ」の字状に開く短い脚部を有する	口辺部　ヨコナデ 杯下部～脚部　ヘラケズリ 脚裾部　ヨコナデ	杯部　ヘラミガキ後黒色処理 脚部　ヘラケズリ後ヨコナデ 脚裾部　ヨコナデ	復原後略完形 明黄褐色 (10YR7/6)

第56号住居址

342—1	黒色土器杯	12.75 4.0 ●	口辺部に一条の沈線を有し外反する 外面に稜を有する　丸底	口辺部　ヨコナデ 底部　手持ちヘラケズリ	口辺部　ヨコナデ 底部　暗文様のヘラミガキ	約1/2存 褐灰色(10YR6/1)
342—2	土師器鉢	(22.75) 28.75 9.05	口辺部は「く」の字状に外反する 胴中央部に一対の把手を有する	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラミガキ	口辺部～底部　ヘラミガキ	口辺部の大半を欠く 橙色(5YR7/6)
343—1	土師器甕	—— 34.6 9.05	卵球胴を有する 底部は丸底気味となる	口辺部　ヨコナデ 肩部～底部　ヘラミガキ	口辺部　ヨコナデ 肩部～底部　ヘラナデ	口辺部、胴部の約1/2欠く にぶい橙色(7.5YR7/4)

第60号住居址

343—1	土師器杯	12.15 5.45 ●	口辺部は内弯する 丸底	口辺部　ヨコナデ 底部　ヘラケズリ後ヘラミガキ	ヨコナデ後粗いヘラミガキ	口辺部の約1/2欠く にぶい赤褐色 (2.5YR4/4)
343—2	土師器杯	12.1 5.6 ●	口辺部は内弯する 丸底	口辺部　ヨコナデ 底部　ヘラケズリ後ヘラミガキ	ヘラミガキ	口辺部の約2/5欠く 明赤褐色(2.5YR5/6)
343—3	土師器杯	13.35 5.05 ●	口辺部は外反する 外面に稜を有する 丸底	口辺部　ヨコナデ後ヘラミガキ 底部　手持ちヘラケズリ後ヘラミガキ	ヨコナデ後ヘラミガキ	略完形 橙色(5YR6/6)
343—4	土師器高杯	11.0 9.9 7.85	杯部外面ににぶい稜を有する　脚部は「ハ」の字状に開き3個の透孔を有する	口辺部～脚裾部　ヘラミガキ	杯部　ヘラミガキ 脚部　ヘラケズリ 脚裾部　ヨコナデ	口辺部、脚裾部の一部を欠く にぶい橙色(5YR6/3)
343—5	土師器小型甕	15.25 15.5 6.45	口辺部は「く」の字状に外反する 最大径を胴中央部に有する	口辺部　ヨコナデ 胴上部　ハケメ 胴下部～底部　ヘラナデ後粗いヘラミガキ	口辺部　ハケメ後ヨコナデ 肩部～底部　ヘラナデ	約2/3存 にぶい橙色 (7.5YR7/4)
343—6	土師器甕	16.05 (6.1) ——	口辺部は外反する 球胴を呈すると思われる	口辺部～肩部　ヘラミガキ	口辺部～肩部　ヘラミガキ	胴部以下を欠く 明赤褐色(5YR5/6)
343—7	土師器小型甕	12.9 17.65 6.85	口辺部は外反する 最大径を胴中央部に有する	口辺部　ヨコナデ 肩部～底部　ヘラミガキ	口辺部　ヨコナデ 肩部～底部　ヘラナデ	約1/2存 にぶい褐色 (7.5YR6/3)
343—8	土師器甕	18.2 25.9 7.2	口辺部は外反する 最大径を胴下部に有する	口辺部～底部　ヘラミガキ	口辺部～底部　ヘラミガキ	口辺部の大半を欠く にぶい橙色(5YR6/4)

第62号住居址

挿図番号	種別・器形	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
344－1	土師器杯	12.8 4.15 6.05	口辺部は外傾する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ヘラミガキ	口辺部の約2/3欠く にぶい黄橙色 (10YR7/3)
344－2	黒色土器杯	12.9 4.7 6.05	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り後手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ後黒色処理	復原後略完形 二次焼成を受ける にぶい橙色(7.5YR6/4)
344－3	黒色土器杯	13.7 4.2 5.5	口辺部は外反気味となる 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ヘラミガキ後黒色処理	約1/2存 にぶい褐色 (7.5YR6/3)
344－4	黒色土器皿	14.3 2.9 7.05	口辺部は外反する	ロクロナデ 底部　糸切り後手持ちヘラケズリ　高台を貼付する	ヘラミガキ後黒色処理	口辺部の約1/4、高台部の約1/2欠く にぶい橙色(7.5YR6/4) 外面に墨書　文字不明
344－5	須恵器杯	13.3 3.3 5.6	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	口辺部の約1/2欠く 灰色(N6/)
344－6	須恵器杯	13.8 3.7 5.7	口辺部は外反気味となる 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	略1/2存 灰色(7.5Y6/1)
344－7	須恵器杯	13.55 3.6 6.5	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	口辺部の約1/2欠く 灰白色(5Y7/1)
344－8	須恵器杯	12.9 4.0 6.3	口辺部は外反気味となる 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	口辺部の約3/4欠く 灰白色(2.5Y7/1)
344－9	軟質須恵器杯	13.1 3.95 (6.8)	口辺部は外傾する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	口辺部の約1/5、底部を欠く 灰黄色(2.5Y7/2) SB63との接合資料
344－10	軟質須恵器杯	13.75 3.8 6.15	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	口辺部の約1/3欠く 灰白色(N7/1)
344－11	須恵器杯	(11.7) 4.0 5.5	口辺部は外傾する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	口辺部の大半を欠く 緑灰色(7.5GY6/1)
344－12	須恵器椀	(14.8) 6.1 7.7	口辺部は外傾する	ロクロナデ 底部　糸切り後高台を貼付する	ロクロナデ	口辺部の大半を欠く 灰色(5Y6/1)
344－13	土師器甕	18.4 (16.5) ―	口辺部は「コ」の字状を呈する	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラケズリ	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラナデ	口辺部～胴部の約1/3、胴下半部を欠く にぶい橙色(5YR7/4)
344－14	黒色土器杯	― (4.8) ―	口辺部は外反する	ロクロナデ	ヘラミガキ後黒色処理	にぶい橙色 (7.5YR7/4) 外面に「成」の墨書
344－15	黒色土器杯	― (2.6) ―	口辺部は外反する	ロクロナデ	ヘラミガキ後黒色処理	にぶい橙色 (7.5YR6/4) 外面に墨書　文字不明
344－16	黒色土器杯	― (2.0) ―		ロクロナデ	ヘラミガキ後黒色処理	にぶい黄橙色 (10YR7/4) 外面に墨書　文字不明

第63号住居址

344－1	須恵器蓋	● 4.1 14.9	扁平な宝珠形つまみを有する	天井部　回転ヘラケズリ ロクロナデ	ロクロナデ	約1/2存 オリーブ灰色 (2.5GY6/1)

挿図番号	種別・器形	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
344—2	須恵器杯	13.9 3.6 6.8	口辺部は外傾する 平底	ロクロナデ 底部　ヘラキリ未調整	ロクロナデ	口辺部の約1/4欠く 灰白色(10YR7/1) SB62との接合資料
344—3	須恵器杯	14.8 5.0 6.45	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	口辺部の約1/3欠く 灰白色（2.5Y7/1）
344—4	須恵器杯	13.3 4.0 6.7	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	1/2弱存 灰色(5Y6/1)
344—5	軟質須恵器杯	13.9 3.8 5.95	口辺部は外傾する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	完形 灰色(5Y6/1)
344—6	須恵器椀	10.6 4.4 6.3	口辺は外反する	ロクロナデ 底部　糸切り後外周回転ヘラケズリ　高台を貼付する	ロクロナデ	約1/2存 オリーブ灰色 (2.5GY6/1)
344—7	青磁椀	— (2.05) —		ロクロナデ	ロクロナデ	底部の約1/2存 釉　オリーブ灰色 (10Y6/2) 胎土　灰白色(5Y8/2)
344—8	黒色土器杯	— (2.45) —		ロクロナデ	ヘラミガキ後黒色処理	にぶい黄橙色 (10YR7/4) 外面に墨書　文字不明

第64号住居址

344—1	黒色土器杯	16.2 4.7 6.45	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り後外周手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ後黒色処理	約1/2存 にぶい黄橙色(10YR7/3) 外面に「川」もしくは「三」の墨書

第65号住居址

344—1	土師器杯	12.3 4.1 ●	口辺部は外傾する 丸底	口辺部　ヨコナデ 底部　手持ちヘラケズリ	口辺部　ヨコナデ後斜放射文 底部　ヨコナデ後ラセン文	約2/5存　復原実測 にぶい橙色(5YR7/4)
344—2	須恵器杯	13.7 3.9 8.0	口辺部は外反気味となる 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	復原後略完形 灰色(5Y5/1)
344—3	須恵器杯	14.2 3.9 6.45	口辺部は外反気味となる 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	復原後略完形 灰色(5Y5/1)
344—4	須恵器杯	13.4 4.05 7.8	口辺部は外反気味となる 平底	ロクロナデ 底部　ヘラキリ未調整	ロクロナデ	約1/2存 灰色(7.5Y6/1)
344—5	須恵器杯	(13.7) 3.65 6.8	口辺部は外傾する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	口辺部の約3/4欠く 復原実測 オリーブ灰色 (2.5GY6/1)
345—1	黒色土器高杯	— (3.5) 8.3	「ハ」の字状に開く短い脚部を有する	脚部　ヘラケズリ 脚裾部　ヘラミガキ	杯部　ヘラミガキ後黒色処理 脚部　ヘラケズリ	杯部、脚裾部の約2/3欠く にぶい黄橙色(10YR7/4)
345—2	須恵器高杯	(19.9) (10.8) —	口辺部は外傾する 外面に稜を有する	口辺部　ロクロナデ 底部　回転ヘラケズリ	ロクロナデ	1/2弱存 灰色(5Y6/1)
345—3	黒色土器皿	— (2.3) —	口辺部は外反する	ロクロナデ	ヘラミガキ後黒色処理	にぶい橙色 (7.5YR6/4)

第66号住居址

挿図番号	種別・器形	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
345—1	黒色土器杯	— (4.2) ●	丸底	ヘラケズリ後ヘラミガキ	ヘラミガキ後黒色処理	口辺部を欠く にぶい黄橙色 (10YR7/3)
345—2	黒色土器高杯	14.5 (5.2) —	口辺部は外傾する	口辺部　ヨコナデ 底部～脚部　ヘラケズリ	杯部　ヘラミガキ後黒色処理 脚部　ヘラケズリ	杯部の約1/4、脚部欠く にぶい赤褐色 (5YR5/4)
345—3	黒色土器 小型甕	— (12.55) 6.65	底部は丸底気味となる	頸部　ヨコナデ 肩部～底部　ヘラミガキ	頸部～底部　ヘラミガキ後黒色処理	口辺部を欠く にぶい橙色(5YR6/4) 胴部内面に白色の付着物
345—4	土師器甕	19.4 (17.7) —	口辺部は外反する	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラケズリ	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ハケメ	約1/2存 にぶい橙色 (7.5YR6/4)
345—5	土師器甕	— (14.85) 6.65	平底	ヘラケズリ	胴部　ハケメ 底部　ヘラナデ	口辺部～胴上部を欠く にぶい赤褐色 (2.5YR5/4)

第67号住居址

345—1	黒色土器杯	13.6 3.6 5.85	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り後手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ後黒色処理	口辺部の約1/5欠く にぶい橙色(5YR7/3)
345—2	黒色土器杯	12.9 3.95 5.95	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り後手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ後黒色処理	口辺部の約1/3欠く にぶい橙色 (7.5YR7/3)
345—3	須恵器蓋	● 3.8 15.3	扁平な宝珠形つまみを有する	天井部　回転ヘラケズリ ロクロナデ	ロクロナデ	復原後ほぼ完形 青灰色(5B5/1)
345—4	須恵器杯	13.6 3.8 6.2	口辺部は外傾する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	口辺部の約1/4欠く 灰色(7.5Y5/1)
345—5	須恵器杯	13.9 4.2 5.2	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	口辺部の約1/3欠く 灰黄色(2.5Y7/2)
345—6	須恵器杯	12.9 4.1 4.7	口辺部は外反気味となる 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	口辺部の約3/4欠く 灰白色(N7/1)
345—7	須恵器杯	13.2 4.05 5.3	口辺部は外反気味となる 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	口辺部の約3/4欠く オリーブ灰色 (2.5GY6/1)
345—8	須恵器杯	13.5 4.2 6.9	口辺部は外反気味となる 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	口辺部の約1/2欠く SB65との接合資料 灰白色(5Y7/1) 朱墨付着？
345—9	須恵器椀	14.8 6.5 7.55	口辺部は外反気味となる	ロクロナデ 底部　糸切り後手持ちヘラケズリ　高台を貼付する	ロクロナデ	完形　灰白色(5Y7/2) 外面に「足」の墨書とヘラ記号？
345—10	須恵器椀	14.3 3.8 9.0	口辺部は内弯気味に立ち上がる	ロクロナデ 底部　糸切り後外周回転ヘラケズリ　高台を貼付する	ロクロナデ	口辺部の大半を欠く 灰色(5Y6/1)
345—11	軟質須恵器杯	— (3.1) —		ロクロナデ	ロクロナデ	灰色(7.5Y6/1) 外面に刻書もしくはヘラ記号
345—12	須恵器蓋	— (1.25) —		天井部　回転ヘラケズリ ロクロナデ	ロクロナデ	灰色(7.5Y5/1) 外面に刻書もしくはヘラ記号

挿図番号	種別・器形	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
345—13	須恵器杯	— (1.2) —	平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	底部の約1/2存 明オリーブ灰色 (2.5GY7/1) 朱墨硯に転用
345—14	須恵器蓋	— (2.75) —		天井部　回転ヘラケズリ ロクロナデ	ロクロナデ	灰色(7.5Y6/1) 外面に「光」の墨書
345—15	土師器甕	(18.3) 28.1 3.85	口辺部は「コ」の字状を呈する	口辺部　ヨコナデ 頸部～底部　ヘラケズリ 後部分的に細いヘラナデ	口辺部　ヨコナデ 肩部～底部　ヘラナデ	口辺部の大半、胴部の約1/4を欠く にぶい橙色(5YR7/4)
345—16	土師器甕	— (8.1) 4.55	平底	ヘラケズリ	ヘラナデ	にぶい褐色 (7.5YR6/3)
346—1	土師器甕	— (9.0) 6.3	平底	ヘラケズリ	ヘラナデ	にぶい橙色(5YR6/4) SB69との接合資料

第68号住居址

346—1	土師器杯	14.4 4.85 ●	口辺部は外反する 丸底	口辺部　ヨコナデ後ヘラミガキ 底部　手持ちヘラケズリ後ヘラミガキ	ヘラミガキ	口辺部の約1/4欠く にぶい橙色 (7.5YR7/4)

第69号住居址

346—1	黒色土器杯	12.7 3.8 ●	口辺部は外反する 外面ににぶい稜を有する　丸底	口辺部　ヨコナデ後部分的にヘラミガキ 底部　手持ちヘラケズリ後粗いヘラミガキ	ヘラミガキ	1/2弱存 灰褐色(7.5YR5/2)
346—2	土師器椀	9.7 8.3 4.55	口辺部は直立気味に立ち上がる 最大径を肩部に有する	口辺部　ヨコナデ後粗いヘラミガキ 胴部～底部　ヘラケズリ後粗いヘラミガキ	口辺部　ヨコナデ後部分的にヘラミガキ 胴部～底部　ヘラナデ後部分的にヘラミガキ	約1/3欠く 橙色(5YR6/6)
346—3	土師器小型壺	10.4 14.65 ●	口辺部は外反する 最大径を胴中央部に有する丸底	口辺部　ヨコナデ 肩部～底部　ヘラミガキ	口辺部～底部　ヘラミガキ	約1/2存 にぶい橙色 (7.5YR7/4)
346—4	土師器甕	22.3 24.4 8.15	口辺部は外反する 最大径を口縁部に有する 底部に1孔を有する	口辺部　ヨコナデ 頸部～底部　ヘラミガキ	口辺部～底部　ヘラミガキ	全体の約1/2存 浅黄橙色 (7.5YR8/4)
346—5	土師器甕	15.95 28.4 2.8	口辺部は外反する 最大径を胴下半部に有する	口辺部　ヨコナデ 肩部～底部　ヘラナデ後ヘラミガキ	口辺部　ヨコナデ 肩部～底部　ヘラナデ	約3/4存 橙色(5YR7/6)

第70号住居址

346—1	須恵器杯	13.5 3.75 6.15	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	口辺部の約1/3欠く オリーブ灰色 (2.5GY6/1)
346—2	土師器甕	19.9 (19.1) —	口辺部は外反する 最大径を口縁部に有する	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラケズリ 後部分的に細いヘラナデ	口辺部～肩部　ヨコナデ 胴部　ヘラナデ	胴下半部を欠く 浅黄色(2.5Y7/3)

第71号住居址

346—1	土師器杯	11.4 3.95 ●	口辺部は外反する 丸底	口辺部　ヨコナデ 底部　手持ちヘラケズリ	ヨコナデ後暗文	約1/2存 明赤褐色 (2.5YR5/6)
346—2	須恵器杯	12.2 4.65 5.3	口辺部は外反する	ロクロナデ 底部　ヘラキリ未調整	ロクロナデ	口辺部の約2/5存 灰白色(2.5Y8/1)

挿図番号	種別・器形	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
346—3	黒色土器高杯	14.5 10.9 8.4	口辺部は内弯気味に立ち上がる 脚部は「ハ」の字状に開く	口辺部　ヨコナデ 底部　ヘラケズリ 脚部　ヘラケズリ後ヘラミガキ 脚裾部　ヘラミガキ	杯部ヘラミガキ後黒色処理 脚部　ヘラケズリ 脚裾部　ヨコナデ	杯部約1/2、脚裾部の大半を欠く 浅黄橙色(7.5YR8/6)
347—1	須恵器皿	26.7 4.8 13.5	口辺部は外反する 平底	口辺部　ロクロナデ 底部　回転ヘラケズリ	ロクロナデ	口辺部の約1/4、底部中央を欠く 灰白色(N7/1)
347—2	土師器小型甕	15.6 16.05 ●	口辺部は「く」の字状に外反する 丸底	口辺部　ヨコナデ 肩部～底部　ハケメ	口辺部　ハケメ 肩部　指頭痕 肩部～底部　ハケメ後ヘラケズリ	約1/2存 灰白色(2.5Y8/2)
347—3	土師器小型甕	(14.5) (17.1) ●	口辺部は「く」の字状に外反し、口縁端部は直立気味となる　丸底	口辺部　ヨコナデ 肩部～底部　ハケメ	口辺部　ハケメ 肩部～底部　ハケメ後ヘラケズリ	口辺部～胴下半部の約1/2、底部を欠く SB76との接合資料 灰白色(10YR8/2)
347—4	土師器甕	17.5 (17.2) —	口辺部は外反する 最大径を口縁部に有する	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラケズリ	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラナデ	胴下半部を欠く にぶい黄橙色 (10YR7/3)

第74号住居址

347—1	須恵器杯	13.7 3.5 5.6	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	完形 灰色(7.5Y6/1) 外面に墨書　文字不明
347—2	須恵器杯	12.6 3.35 5.5	口辺部は外反気味となる 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	口辺部の約2/3欠く 灰色(5Y5/1)
347—3	須恵器杯	13.35 3.9 5.55	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	口辺部の一部を欠く 黄灰色(2.5Y6/1)
347—4	土師器甕	20.4 27.1 4.8	口辺部は「コ」の字状を呈する 最大径を肩部に有する	口辺部　ヨコナデ 肩部～底部　ヘラケズリ	口辺部　ヨコナデ 肩部～底部　ヘラナデ	復原後略完形 にぶい橙色(5YR6/4)
347—5	土師器甕	— (20.75) 4.1	平底	ヘラケズリ	ヘラナデ	口辺部～胴上部、胴下部の約1/2欠く にぶい褐色(7.5YR6/3)

第75号住居址

347—1	土師器杯	11.7 4.95 ●	口辺部は直立気味に立ち上がる 丸底	口辺部　ヨコナデ後粗いヘラミガキ 底部　手持ちヘラケズリ後部分的にヘラミガキ	ヘラミガキ	口辺部の大半を欠く 橙色(2.5YR6/6)
347—2	黒色土器高杯	15.65 (8.4) (8.3)	口辺部は外反する「ハ」の字状に開く短い脚部を有する	口辺部　ヨコナデ後暗文様のヘラミガキ 底部～脚部　ヘラケズリ	杯部　ヘラミガキ後黒色処理 脚部　ヘラケズリ部分的にハケメ	杯部の約1/2、脚裾部を欠く にぶい橙色(5YR7/4)
347—3	土師器小型甕	14.4 12.6 7.8	口辺部は外反する 最大径を口縁部に有する　平底	口辺部　ヨコナデ 肩部　ハケメ 胴部～底部　ヘラナデ	口辺部～肩部　ヨコナデ 胴上部　ハケメ 胴下部～底部　ヘラナデ	口辺部～肩部の約1/2欠く にぶい橙色(7.5YR7/3)
348—1	土師器小型甕	15.0 20.15 7.2	口辺部は外反する 最大径を胴中央部に有する	口辺部　ヨコナデ後粗いヘラミガキ 肩部～底部　ヘラケズリ後粗いヘラミガキ	口辺部　ヨコナデ 肩部～底部　ヘラナデ	約2/3存 橙色(2.5YR6/6)

第76号住居址

348—1	土師器杯	10.7 3.55 ●	口辺部は直立気味に立ち上がる 丸底	口辺部　ヨコナデ 底部　手持ちヘラケズリ	ヨコナデ	口辺部の約1/4欠く にぶい橙色(5YR7/4)
348—2	土師器杯	(11.3) (4.3) (7.1)	口辺部は外反する 平底	口辺部　ヨコナデ 底部　ヘラナデ	ヨコナデ	1/2弱存 にぶい赤褐色 (5YR5/4)

挿図番号	種別・器形	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
348－3	黒色土器杯	13.2 4.85 ●	口辺部は内傾する 外面に稜を有する 丸底	口辺部　ヨコナデ 底部　手持ちヘラケズリ後粗いヘラミガキ	口辺部　ヨコナデ 底部　ヘラミガキ	約1/2存 にぶい赤褐色 (5YR5/4)
348－4	黒色土器高杯	― (4.15) (8.7)	「ハ」の字状に開く短い脚部を有する	脚部　ヘラミガキ 脚裾部　ヨコナデ	杯部　ヘラミガキ後黒色処理 脚部　ヘラケズリ 脚裾部　ヨコナデ	杯部と脚裾部の大半を欠く にぶい橙色(5YR6/4)
348－5	土師器小型甕	13.7 18.0 (6.4)	口辺部は外反する 最大径を胴中央部に有する	口辺部　ヨコナデ 肩部～底部　ヘラケズリ後粗いヘラミガキ	口辺部　ヨコナデ 肩部～底部　ヘラナデ	口辺部の約1/2、底部の約3/4欠く にぶい橙色(5YR6/4)
348－6	土師器甑	15.7 17.5 7.05	口辺部は外反する 最大径を口縁部に有する 底部に1孔を有する	口辺部　ヨコナデ 肩部～底部　ヘラケズリ後ヘラナデ	口辺部　ヨコナデ 肩部～底部　ヘラナデ	約2/3存 橙色(2.5YR6/6)
348－7	土師器甕	― (22.5) 7.5	球胴を呈する 丸底気味の底部を有する	ヘラミガキ	ヘラナデ	口辺部～肩部を欠く にぶい黄橙色 (10YR7/3)
348－8	土師器甕	15.75 30.25 6.4	口辺部は外反する 最大径を胴下半部に有する	口辺部　ヨコナデ 肩部～底部　ヘラケズリ後ヘラミガキ	口辺部　ヨコナデ 肩部～底部　ヘラナデ	胴下半部の約1/3欠く にぶい橙色(5YR7/4)

第77号住居址

349－1	土師器杯	13.3 5.1 ●	口辺部は内弯する 丸底	口辺部　ヨコナデ後ヘラミガキ 底部　手持ちヘラケズリ後ヘラミガキ	暗文様のヘラミガキ	口辺部の約1/3欠く にぶい黄橙色 (10YR7/3)
349－2	土師器杯	11.75 5.9 ●	口辺部は直立気味となる 丸底	口辺部　ヨコナデ 底部　ヘラケズリ後部分的にヘラミガキ	ヨコナデ後ヘラミガキ	略完形 にぶい橙色 (7.5YR6/4)
349－3	土師器杯	13.6 5.6 ●	口辺部は外反する 丸底	口辺部　ヨコナデ後粗いヘラミガキ 底部　ヘラミガキ	口辺部　ヨコナデ後粗いヘラミガキ 底部　ヘラミガキ	1/2弱存 にぶい赤褐色 (5YR5/3)
349－4	土師器杯	13.6 5.3 ●	口辺部は外反する 外面に稜を有する 丸底	口辺部　ヨコナデ 底部　手持ちヘラケズリ	口辺部　ヨコナデ 底部　ヨコナデ後暗文	復原後略完形 にぶい赤褐色 (5YR5/4)
349－5	黒色土器杯	13.45 5.1 ●	口辺部は内弯気味となる 丸底	口辺部　ヨコナデ後ヘラミガキ 底部　ヘラケズリ後ヘラミガキ	暗文様のヘラミガキ後黒色処理	口辺部を若干欠く にぶい橙色 (7.5YR7/4)
349－6	黒色土器杯	13.8 5.5 ●	口辺部は外反する 丸底	口辺部　ヨコナデ後部分的にヘラミガキ 底部　ヘラケズリ	口辺部　ヨコナデ後部分的にヘラミガキ 底部　ヘラナデ後部分的にヘラミガキ　黒色処理	復原後略完形 明赤褐色 (2.5YR5/6)
349－7	土師器椀	11.0 8.15 ●	口辺部は外反する 丸底	口辺部～肩部　ヨコナデ後粗いヘラミガキ 底部　ヘラケズリ後粗いヘラミガキ	口辺部～肩部　ヨコナデ後粗いヘラミガキ 底部　ヘラミガキ	約2/3存 にぶい赤褐色 (2.5YR5/4)
349－8	黒色土器椀	13.35 9.1 ●	口辺部は外傾気味となる 丸底	口辺部　ヘラミガキ 胴部～底部　ヘラケズリ後ヘラミガキ	ヘラミガキ後黒色処理	約3/4存 にぶい橙色 (7.5YR6/4)
349－9	黒色土器高杯	― (8.0) (9.0)	脚部は「ハ」の字状に開く	口辺部　ヨコナデ 杯底部　ヘラケズリ 脚部　ハケメ後ヘラケズリ 脚裾部　ヨコナデ　赤色塗彩	杯部　ヘラミガキ後黒色処理 脚部　ハケメ後ヘラナデ	杯部、脚裾部の大半を欠く にぶい橙色(7.5YR7/4)
349－10	土師器小型甕	― (7.0) 6.45	平底	ヘラナデ後粗いヘラミガキ	ヘラナデ	にぶい赤褐色 (2.5YR5/4)
349－11	土師器小型甕	17.3 19.55 7.0	口辺部は外反する 最大径を口縁部に有する	口辺部　ヨコナデ後粗いヘラミガキ 肩部～底部　ヘラケズリ後粗いヘラミガキ	口辺部～底部　ヘラミガキ	復原後略完形 橙色(2.5YR6/6)
349－12	土師器甕	15.1 (18.85) ―	口辺部は外反する 扁球胴を有する	口辺部　粗いヘラミガキ 肩部～胴部　ヘラミガキ	口辺部　ヨコナデ後粗いヘラミガキ 肩部　ヘラナデ 胴部　ヘラミガキ	胴下半部を欠く にぶい橙色 (7.5YR7/3)

挿図番号	種別・器形	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
349—13	土師器甕	20.45 (25.3) ——	口辺部は外反する 扁球胴を有する	口辺部　ヨコナデ 頸部～肩部　ハケメ 胴部　ヘラナデ	口辺部　ヨコナデ 肩部　ハケメ 胴部　ヘラナデ	底部を欠く 橙色(2.5YR7/6)
349—14	土師器甕	26.0 22.5 8.0	口辺部は外反する 最大径を口縁部に有する	口辺部　粗いヘラミガキ 頸部～底部　ハケメ後粗いヘラミガキ	口辺部　ヘラミガキ 肩部～胴部上部　ハケメ後ヘラミガキ 胴下部～底部　ヘラミガキ	復原後略完形 橙色(5YR6/6)
350—1	土師器甑	21.2 28.55 9.0	口辺部は外反する 底部に1孔を有する	口辺部　ヨコナデ後ヘラミガキ 頸部～底部　ヘラミガキ	口辺部～底部　ヘラミガキ	復原後完形 にぶい橙色 (7.5YR7/4)
350—2	土師器甕	15.2 32.75 6.0	口辺部は「く」の字状に外反する 最大径を胴中央部に有する	口辺部～頸部　ヨコナデ 肩部～底部　ヘラケズリ	口辺部　ヨコナデ 肩部～底部　ヘラナデ	完形 にぶい橙色 (7.5YR7/4)
350—3	土師器甕	20.45 38.55 7.05	口辺部は「く」の字状に外反する 最大径を胴中央部に有する	口辺部　ヨコナデ 肩部　ハケメ 胴部～底部　ヘラナデ後粗いヘラミガキ	口辺部　ヨコナデ 頸部～底部　ヘラナデ後粗いヘラミガキ	復原後略完形 にぶい橙色(5YR6/4)
350—4	土師器甕	18.35 33.7 7.55	口辺部は外反する 最大径を胴下半部に有する	口辺部　ヨコナデ 肩部～底部　ヘラナデ	口辺部　ヨコナデ 頸部～底部　ヘラナデ	復原後略完形 橙色(2.5YR7/6)

第78号住居址

351—1	黒色土器杯	13.7 4.1 6.4	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ヘラミガキ後黒色処理	口辺部の一部を欠く にぶい橙色(5YR7/4)
351—2	黒色土器杯	13.2 4.0 5.05	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ヘラミガキ後黒色処理	略完形 にぶい橙色(5YR7/3)
351—3	黒色土器杯	13.35 3.55 5.9	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ヘラミガキ後黒色処理	略完形 にぶい橙色(5YR7/4)
351—4	黒色土器杯	17.2 5.7 6.55	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ヘラミガキ後黒色処理	口辺部の約1/9欠く 浅黄橙色(7.5YR8/4)
351—5	須恵器杯	13.6 4.4 5.1	口辺部は外傾する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	略完形 灰白色(5Y7/2)
351—6	軟質須恵器杯	14.2 4.4 6.35	口辺部は外反気味となる 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	口辺部の一部を欠く 灰白色(5Y7/1)
351—7	軟質須恵器杯	14.05 4.3 5.8	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	約3/4存 灰白色(5Y7/2)
351—8	土師器甕	—— (19.7) 3.95	平底	ヘラケズリ	ヘラナデ	胴上部～胴部の約1/2存 にぶい橙色(5YR6/4)
351—9	土師器甕	18.95 26.0 3.75	口辺部は「コ」の字状を呈する 最大径を胴上部に有する	口辺部～頸部　ヨコナデ 肩部～底部　ヘラケズリ	口辺部　ヨコナデ 頸部～底部　ヘラナデ	復原後略完形 橙色(2.5YR7/6)

第80号住居址

351—1	土師器杯	12.9 4.3 ●	口辺部は外反する 外面に稜を有する 丸底	口辺部　ヨコナデ 底部　手持ちヘラケズリ後部分的にヘラミガキ	ヘラミガキ	約1/2存 にぶい橙色 (7.5YR7/4)
351—2	土師器杯	12.2 4.45 ●	口辺部は内弯気味に立ち上がる 外面ににぶい稜を有する 丸底	口辺部　ヨコナデ 底部　ヘラケズリ後ヘラミガキ	ヘラミガキ	口辺部の約1/3欠く 黒彩土器 にぶい橙色(7.5YR6/4)

挿図番号	種別・器形	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
351—3	黒色土器杯	13.5 4.65 ●	口辺部は外反する 外面に稜を有する 丸底	口辺部　ヨコナデ 底部　手持ちヘラケズリ後粗いヘラミガキ	ヘラミガキ	口辺部の約1/2欠く にぶい褐色 (7.5YR5/3)
351—4	黒色土器杯	13.2 4.75 ●	口辺部は内弯気味に立ち上がる 外面ににぶい稜を有する 丸底	口辺部　ヨコナデ 底部　手持ちヘラケズリ後部分的にヘラミガキ	口辺部　ヨコナデ 底部　ヘラミガキ	口辺部の約1/2欠く にぶい橙色(5YR6/4)
351—5	土師器鉢	16.2 11.7 8.7	口辺部は外反する 最大径を口縁部に有する	口辺部　ヨコナデ 肩部～底部　ヘラナデ後細いヘラナデ	横方向のヘラミガキ 後縦方向の暗文様のヘラミガキ	口辺部～胴部の約3/4欠く 橙色(2.5YR6/6)
351—6	須恵器高杯	10.5 12.8 8.9	口辺部は外反する 脚部に3個の長方形の透孔を有する	ロクロナデ	ロクロナデ	杯部の約1/2欠く 灰色(N6/)
351—7	土師器甕	19.8 31.1 6.15	口辺部は外反する 最大径を胴中央部に有する	口辺部　ヨコナデ 肩部～底部　ヘラケズリ	口辺部～肩部　ヨコナデ 胴部～底部　ヘラナデ	口辺部～胴中央部の約1/3欠く にぶい橙色(5YR7/4)
352—1	土師器甕	19.4 35.25 5.45	口辺部は「く」の字状に外反する	口辺部　ヨコナデ 肩部～底部　ヘラケズリ	口辺部～頸部　ヨコナデ 肩部～底部　ヘラナデ	約2/3存 にぶい橙色 (7.5YR7/3)

第81号住居址

352—1	土師器杯	13.45 4.75 ●	口辺部は外反する 丸底	口辺部　ヨコナデ後部分的にヘラミガキ 底部　手持ちヘラケズリ後ヘラミガキ	ヘラミガキ	口辺部の約1/4欠く にぶい赤褐色 (2.5YR5/4)
352—2	土師器杯	14.4 4.9 ●	口辺部は外反する 丸底	ヘラミガキ	ヘラミガキ	略完形 内外面部分的に剥落 にぶい橙色(7.5YR7/4)
352—3	土師器杯	13.1 4.25 ●	口辺部は直立気味に立ち上がる 外面に稜を有する　丸底	口辺部　ヨコナデ 底部　手持ちヘラケズリ後ヘラミガキ	ヘラミガキ	口辺部の約2/3欠く 明赤褐色(5YR5/6) 底部外面にヘラ記号？
352—4	土師器杯	13.95 4.2 ●	口辺部は内弯気味となる 外面ににぶい稜を有する 丸底	口辺部　ヨコナデ後部分的にヘラミガキ 底部　手持ちヘラケズリ 赤色塗彩	ヘラミガキ 赤色塗彩	復原後略完形 にぶい橙色 (7.5YR7/4)
352—5	黒色土器杯	13.15 3.95 ●	口辺部は直立気味に立ち上がる 外面に稜を有する　丸底	口辺部　ヨコナデ 底部　手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ	口辺部の大半を欠く にぶい赤褐色 (5YR4/3)
352—6	土師器小型甕	16.3 20.4 5.8	口辺部は外反する 最大径を胴中央部に有する	口辺部　ヨコナデ 胴上部　ハケメ 胴下部　ヘラケズリ	口辺部　ヨコナデ 胴部～底部　ハケメ部分的にヘラナデ	胴下部の約1/3欠く にぶい橙色 (7.5YR7/4)
352—7	黒色土器 小型甕	(8.6) 9.0 4.45	口辺部は外反する 最大径を口縁部に有する	口辺部　ヨコナデ 肩部～底部　ヘラケズリ後ヘラミガキ	口辺部～肩部　ヨコナデ 胴部～底部　ヘラナデ後ヘラミガキ 黒色処理	口辺部の大半を欠く 胎土に僅か金雲母を含む にぶい赤褐色(5YR5/4)
352—8	土師器甕	17.4 36.85 6.9	口辺部は外反する 最大径を胴下半部に有する	口辺部　ヨコナデ 肩部～底部　ヘラケズリ後ヘラミガキ	口辺部　ヨコナデ 肩部～底部　ヘラナデ後粗いヘラミガキ	約2/3存 にぶい橙色(5YR7/4)
352—9	土師器甕	14.25 22.1 6.9	口辺部は外反する 最大径を胴中央部に有する	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴上部　ハケメ 胴下部　ヘラナデ	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴下部　ハケメ 底部　ヘラナデ	完形 にぶい黄橙色 (10YR7/4)
352—10	土師器甕	19.45 17.9 6.7	口辺部は外反する 最大径を口縁部に有する	口辺部　ヨコナデ 肩部～底部　ヘラナデ後粗いヘラミガキ	口辺部　ヨコナデ 肩部～底部　ヘラナデ後粗いヘラミガキ	約2/3存 にぶい橙色(5YR7/4)
353—1	土師器甕	18.35 26.3 ——	口辺部は「く」の字状に外反する球形胴を有する	口辺部～胴部　ヘラミガキ	口辺部　ヘラミガキ 肩部～胴部　ヘラナデ	胴下半部を欠く 橙色(5YR7/6)
353—2	土師器甕	16.65 30.6 7.4	口辺部は外反する 最大径を胴中央部に有する	口辺部　ヨコナデ後部分的にハケメ 肩部～底部　ハケメ 底部　ヘラ描き木ノ葉底	口辺部　ヨコナデ 頸部～胴上部　ハケメ 胴下部～底部　ヘラナデ	復原後略完形 浅黄橙色 (7.5YR8/4)

挿図番号	種別・器形	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
353—3	土師器甕	17.9 34.35 5.95	口辺部は外反する 最大径を胴中央部に有する	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴上部　ハケメ 胴下部～底部　ヘラナデ 後ヘラミガキ	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴下部　ハケメ 底部　ヘラナデ	約1/2存 にぶい橙色 (7.5YR7/4)

第82号住居址

353—1	黒色土器杯	13.35 4.7 ●	口辺部は内弯気味に立ち上がる 丸底	口辺部　ヨコナデ 底部　手持ちヘラケズリ後粗いヘラミガキ	ヘラミガキ後黒色処理	口辺部の約3/5を欠く にぶい橙色 (7.5YR7/4)

第83号住居址

353—1	須恵器杯	(13.6) 4.0 6.9	口辺部は内弯気味に立ち上がる 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	口辺部の約2/3欠く 浅黄色(5Y7/3)
353—2	須恵器甕	— (24.8) 11.0		タタキメ	ヘラナデ	約1/3存 灰白色(7.5Y7/1) SB62・63との接合資料

第84号住居址

354—1	土師器杯	11.1 3.8 ●	口辺部は外反する 外面に稜を有する 丸底	口辺部　ヨコナデ 底部　手持ちヘラケズリ	ヨコナデ	口辺部の約1/4欠く 橙色(2.5YR7/6)
354—2	土師器杯	13.2 6.2 ●	口辺部は外反気味となる 丸底	口辺部　ヨコナデ 底部　手持ちヘラケズリ	ヘラナデ後部分的にヘラミガキ	口辺部の約1/2欠く にぶい橙色 (7.5YR6/4)
354—3	土師器小型甕	— (9.8) 4.5	平底	ヘラケズリ	ヘラナデ	口辺部～肩部、胴部の約2/3欠く にぶい橙色(5YR6/4)
354—4	土師器甑	19.15 23.1 7.4	口辺部は外反する 最大径を口縁部に有する 胴下半部に2孔、底部に1孔を有する	口辺部　ヨコナデ 肩部～底部　ヘラミガキ	ヘラミガキ	口辺部の約2/3欠く にぶい黄橙色 (10YR7/3)
354—5	土師器小型甕	13.4 17.0 7.7	口辺部は外反する 最大径を胴中央部に有する	口辺部　ヨコナデ 頸部　ヘラナデ 肩部～底部　ヘラミガキ	口辺部　ヨコナデ 肩部～底部　ヘラナデ	底部を欠く にぶい橙色 (7.5YR7/4)
354—6	土師器甕	15.45 20.2 —	口辺部は外反する 最大径を胴中央部に有する	口辺部～肩部　ヨコナデ 胴部　ヘラナデ	口辺部　ヨコナデ 頸部　ヘラナデ 胴部　ハケメ	口辺部の大半と胴部の約1/2欠く にぶい橙色(7.5YR6/4)
354—7	土師器甕	13.53 25.05 5.3	口辺部は外反する 最大径を胴中央部に有する	口辺部　ヨコナデ 肩部～底部　ヘラケズリ	口辺部　ヨコナデ 肩部～底部　ヘラナデ	略完形 胴部～底部外面は二次焼成を受け表面剥落 橙色(2.5YR7/6)
354—8	土師器甕	— (24.6) 5.6	底部は丸底気味となる	ヘラケズリ	ヘラナデ	口辺部～胴上部を欠く にぶい橙色 (7.5YR7/3)
354—9	土師器甕	22.0 (30.0) —	口辺部は外反する 最大径を口縁部に有する	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラケズリ	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラナデ	胴下半部を欠く にぶい橙色 (7.5YR7/4)

第85号住居址

354—1	黒色土器杯	12.7 4.4 ●	口辺部は外反気味となる 丸底	口辺部　ヨコナデ 底部　手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ後黒色処理	口辺部の約1/6欠く にぶい黄橙色 (10YR7/3)
354—2	土師器杯	14.05 5.15 ●	口辺部は外反する 丸底	口辺部　ヨコナデ 底部　手持ちヘラケズリ	ヘラナデ後粗いヘラミガキ	約3/4存354—3、355—2と同一胎土、調整 にぶい黄橙色(10YR7/4)

挿図番号	種別・器形	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
354—3	土師器杯	13.1 5.2 ●	口辺部は外反する かなり歪曲する 丸底	口辺部　ヨコナデ 底部　手持ちヘラケズリ	ヘラナデ後粗いヘラミガキ	約1/2存 にぶい黄橙色 (10YR7/4)
354—4	土師器手づくね土器	4.1 4.1 3.6	口辺部は内傾する 平底	ヘラナデ	ヘラナデ	完形 にぶい黄橙色 (10YR7/4)
355—1	黒色土器椀	9.5 8.3 ●	口辺部は直立気味となる 丸底	口辺部　ヨコナデ 肩部～底部　ヘラケズリ後ヘラミガキ	ヘラナデ後部分的にヘラミガキ 黒色処理	約2/3存 にぶい橙色(5YR6/4) 二次焼成を受ける
355—2	土師器椀	— (8.45) ●	丸底	細いヘラナデ後部分的にヘラミガキ	ヘラナデ	約1/2存 にぶい黄橙色 (10YR7/4)
355—3	土師器高杯	— (3.35) —	脚部は「ハ」の字状に開く	ハケメ後粗いヘラミガキ	ヘラケズリ	にぶい橙色 (7.5YR7/4)
355—4	土師器高杯	— (4.35) —	脚部は「ハ」の字状に開く	ヘラミガキ	ヘラケズリ	にぶい褐色 (7.5YR5/4)

第87号住居址

355—1	黒色土器杯	14.65 5.4 6.3	口辺部は内弯気味に立ち上がる 平底	ヘラミガキ 底部　手持ちヘラケズリ後ヘラミガキ	ヘラミガキ後黒色処理	口辺部の大半を欠く 橙色(7.5YR6/6)
355—2	須恵器杯	14.0 4.25 6.1	口辺部は外反気味となる	ロクロナデ 底部　ヘラキリ後ナデ	ロクロナデ	口辺部の約2/3欠く 灰色(5Y6/1)
355—3	須恵器杯	12.1 4.45 4.1	口辺部は外反気味となる	ロクロナデ 底部　ヘラキリ後ナデ	ロクロナデ	口辺部の約3/4欠く 灰色(5Y5/1)
355—4	須恵器杯	13.1 3.95 8.0	口辺部は外反気味となる 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	1/2弱存 灰色(7.5Y6/1)

第89号住居址

355—1	須恵器杯	12.4 4.7 7.1	口辺部は外反気味となる 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	口辺部の約1/2欠く 灰色(7.5Y6/1)
355—2	須恵器杯	13.85 4.1 7.6	口辺部は外傾する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り後外周手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	口辺部の約1/3欠く 灰色(7.5Y5/1)

第90号住居址

355—1	土師器杯	13.2 5.0 ●	口辺部は外反する 外面ににぶい稜を有する　丸底	口辺部　ヨコナデ 底部　手持ちヘラケズリ後ヘラミガキ	暗文様のヘラミガキ	口辺部の約1/3欠く にぶい赤褐色 (5YR5/4)

第92号住居址

355—1	黒色土器杯	15.0 4.9 8.3	口辺部は外傾する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り後手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ後黒色処理	口辺部の約1/2欠く にぶい橙色 (7.5YR6/4)
355—2	黒色土器高杯	— (4.45) —		ヘラケズリ	杯部　ヘラミガキ後黒色処理 脚部　ヘラケズリ	にぶい橙色 (7.5YR7/4)

第93号住居址

挿図番号	種別・器形	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
355—1	須恵器杯	13.9 4.5 5.35	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	約2/3存 灰白色(5Y7/1)
355—2	須恵器杯	13.45 4.2 6.6	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	約1/2存 灰白色(5Y7/1)
355—3	須恵器長頸壺	— (17.6) —	最大径を胴中央部に有する 高台部を欠く	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	胴部全体の約1/2存 にぶい橙色(7.5YR7/4) 焼成不良

第94号住居址

355—1	黒色土器皿	17.0 4.8 8.6	口辺部は外反する	ロクロナデ 部分的にヘラミガキ	ヘラミガキ後黒色処理	口辺部の約1/2欠く にぶい黄橙色(10YR7/4) 外面に「南」の墨書
355—2	土師器甕	13.7 (25.85) ●	口辺部は「く」の字状に外反する 最大径を胴中央部に有する	口辺部　ヨコナデ 肩部～底部　ヘラケズリ	口辺部　ヨコナデ 肩部～底部　ヘラケズリ	胴下半部～底部の約1/2欠く にぶい橙色(7.5YR7/4)
355—3	土師器甕	— (25.0) 4.6	平底	ヘラケズリ	ヘラナデ	約2/3存 にぶい橙色 (7.5YR7/3)
356—1	土師器甕	20.5 (34.0) —	口辺部は外反する 最大径を口縁部に有する	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラケズリ	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラナデ	底部を欠く にぶい橙色 (7.5YR7/3)

第96号住居址

356—1	黒色土器杯	13.6 4.0 6.1	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り後手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ後黒色処理	口辺部の1/2弱存 浅黄橙色(7.5YR8/3)
356—2	黒色土器杯	13.35 4.0 6.0	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り後手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ後黒色処理	口辺部の約1/5欠く にぶい橙色(5YR6/4)
356—3	土師器杯	— (2.75) —	平底	口辺部　ヘラミガキ 底部　手持ちヘラケズリ後ヘラミガキ	口辺部　ヘラミガキ 底部　暗文様のヘラミガキ	甲斐型土器 にぶい橙色(5YR7/3) 底部外面に「｜」の墨書

第97号住居址

356—1	黒色土器椀	— (3.35) 7.6		ロクロナデ 底部　糸切り後高台を貼付する	ヘラミガキ後黒色処理	口辺部を欠く にぶい橙色 (7.5YR7/4)
356—2	黒色土器椀	— (2.4) 7.35		ロクロナデ 底部　糸切り後高台を貼付する	ヘラミガキ後黒色処理	口辺部を欠く にぶい橙色(7.5YR7/4) 底部外面にヘラ記号
356—3	灰釉陶器皿	14.3 2.8 7.7	口辺部は外反する	口辺部　ロクロナデ 底部　回転ヘラケズリ後高台を貼付する	ロクロナデ	復原後略完形 灰白色(2.5Y7/1) 転用硯
356—4	黒色土器杯	— (5.0) —	口辺部は外傾気味となる	ロクロナデ	ヘラミガキ後黒色処理	にぶい橙色 (7.5YR6/4) 外面に「家」？の墨書
356—5	土師器甕	— (6.3) 5.4	平底	ヘラケズリ	ヘラナデ	口辺部～胴部下半部を欠く にぶい橙色(7.5YR6/4)

挿図番号	種別・器形	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
356—6	土師器甕	19.9 (10.0) —	口辺部は「コ」の字状を呈する	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラケズリ	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラナデ	にぶい橙色(5YR7/4)

第99号住居址

356—1	黒色土器杯	13.4 4.55 4.65	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ヘラミガキ後黒色処理	口辺部の約3/4欠く にぶい橙色(7.5YR7/3) 外面に墨書？
356—2	黒色土器皿	(12.4) 2.75 6.25	口辺部は外反する	ロクロナデ 底部　糸切り後高台を貼付する	ヘラミガキ後黒色処理	口辺部の大半を欠く にぶい黄橙色 (10YR6/4)
356—3	黒色土器皿	13.55 3.65 6.05	口辺部は外反する	ロクロナデ 底部　糸切り後高台を貼付する	ヘラミガキ後黒色処理	完形 橙色(7.5YR6/6)
356—4	土師器甕	— (6.2) 7.6	平底	ヘラケズリ	ヘラナデ	にぶい赤褐色 (5YR5/3)
356—5	土師器甕	20.6 25.9 4.1	口辺部は「コ」の字状を呈する 最大径を胴上部に有する	口辺部　ヨコナデ 肩部～底部　ヘラケズリ	口辺部　ヨコナデ 肩部～底部　ヘラナデ	口辺部の大半、胴下部～底部の約1/4欠く 橙色(2.5YR7/6)

第103号住居址

357—1	黒色土器鉢	(18.0) 14.0 ●	口辺部は外反する 最大径を口縁部に有する　丸底	口辺部　ヨコナデ 肩部～底部　ヘラケズリ	ヘラミガキ後黒色処理	約1/3存 にぶい黄橙色 (10YR7/3)
357—2	黒色土器高杯	— (10.5) 10.5	脚部は「ハ」の字状に開く	脚部　ヘラケズリ後ヘラミガキ 脚裾部　ヨコナデ	杯部　ヘラミガキ後黒色処理 脚裾部　ヘラケズリ 脚裾部　ヨコナデ	杯部、脚裾部の約1/2欠く 橙色(7.5YR7/6)
357—3	黒色土器高杯	— (4.15) —		ヘラケズリ後ヘラミガキ	杯部　ヘラミガキ後黒色処理 脚部　ヘラケズリ	にぶい橙色(5YR7/4)

第105号住居址

357—1	土師器杯	10.8 3.8 ●	口辺部は内弯気味に立ち上がる 丸底	口辺部　ヨコナデ 底部　手持ちヘラケズリ	ヨコナデ	口辺部の約1/2欠く にぶい赤褐色 (5YR5/4)
357—2	土師器小型甕	13.4 8.3 —	口辺部は「く」の字状に外反する	口辺部　ヨコナデ後ヘラケズリ 頸部～胴部　ヘラケズリ	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラナデ	胴下半部を欠く にぶい橙色 (7.5YR6/4)
357—3	土師器甕	24.4 (27.9) —	口辺部は外反する 最大径を口縁部に有する	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラケズリ	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラナデ	1/2弱存 にぶい橙色 (7.5YR7/4)

第106号住居址

357—1	土師器杯	(13.9) 4.0 5.85	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	口辺部の約2/3欠く にぶい橙色 (7.5YR7/3)
357—2	黒色土器杯	14.9 4.9 5.4	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ヘラミガキ後黒色処理	約1/2存 にぶい褐色 (7.5YR5/3)
357—3	黒色土器杯	14.25 4.4 5.35	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ヘラミガキ後黒色処理	口辺部の約1/10欠く にぶい橙色(5YR6/4)

挿図番号	種別・器形	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
357—4	黒色土器杯	13.5 3.8 6.55	口辺部は外反気味となる 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ヘラミガキ後黒色処理	口辺部の約1/2欠く にぶい黄橙色 (10YR6/4)
357—5	黒色土器椀	14.75 5.5 6.95	口辺部は外反する	ロクロナデ 底部　糸切り後高台を貼付する	ヘラミガキ後黒色処理	口辺部の約1/3欠く にぶい橙色(7.5YR7/3) 外面に墨書　文字不明
357—6	黒色土器椀	15.65 6.2 6.5	口辺部は外反する	ロクロナデ 底部　糸切り後高台を貼付する	ヘラミガキ後黒色処理	口辺部、高台部の一部を欠く にぶい橙色(7.5YR7/4)
357—7	黒色土器椀	14.8 (4.15) —	口辺部は外反する	ロクロナデ 底部　糸切り後高台を貼付する	ヘラミガキ後黒色処理	高台部を欠く 外面に墨書　文字不明 にぶい褐色(7.5YR6/3)
357—8	軟質須恵器杯	13.3 4.3 5.45	口辺部は外傾する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	約1/2存 灰黄色(2.5Y7/2)
357—9	黒色土器杯	— (3.5) —	口辺部は外反する	ロクロナデ	ヘラミガキ後黒色処理	にぶい黄橙色 (10YR7/4) 外面に「廣」の墨書
357—10	黒色土器杯	— (3.8) —	口辺部は外反する	ロクロナデ	ヘラミガキ後黒色処理	にぶい橙色 (7.5YR6/4) 外面に「足」の墨書
357—11	土師器小型甕	13.05 (8.1) —	口辺部は外反する	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラケズリ	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ハケメ	胴下半部を欠く にぶい橙色(5YR7/4)
357—12	土師器小型甕	— (11.3) 6.2	平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	口辺部～肩部、胴部の約2/3欠く にぶい橙色(5YR7/4)

第107号住居址

358—1	黒色土器杯	13.85 5.1 ●	口辺部は外反する 丸底	口辺部　ヨコナデ 底部　手持ちヘラケズリ後部分的にヘラミガキ	ヘラミガキ後黒色処理	口辺部の約1/2欠く にぶい橙色 (7.5YR6/4)
358—2	土師器小型甕	14.4 (11.5) —	口辺部は「く」の字状に外反する 口縁端部は直立気味となる	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ハケメ	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ハケメ	胴下半部を欠く にぶい黄橙色 (10YR7/2)
358—3	土師器甕	20.3 (8.1) —	口辺部は外反する 球胴を呈すると思われる	口辺部　ヨコナデ後部分的にヘラミガキ 肩部　ヘラミガキ	口辺部　ヘラミガキ 肩部　ヘラケズリ	口辺部の一部、胴下半を欠く にぶい橙色 (7.5YR7/4)
358—4	土師器甕	18.0 (30.0) —	口辺部は「く」の字状に外反する	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラナデ	口辺部　ヨコナデ 頸部～胴部　ヘラナデ	口辺部と胴部の一部、底部を欠く にぶい橙色(7.5YR7/4)

第108号住居址

358—1	須恵器杯	(13.0) 3.6 5.1	口辺部は外反気味となる 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	口辺部の約2/3欠く 灰色(10Y6/1)

第110号住居址

358—1	土師器小型壺	12.2 (15.2) —	口辺部は外反する 最大径を胴中央部に有する	口辺部～胴部　ヘラミガキ	口辺部　ヘラミガキ 肩部～胴部　ヘラナデ	胴下半部を欠く 橙色(2.5YR7/6)
358—2	土師器小型甕	— (8.7) 5.2	平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	にぶい橙色 (7.5YR6/4)

第111号住居址

挿図番号	種別・器形	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
358—1	黒色土器杯	— (1.6) —		ロクロナデ	ヘラミガキ後黒色処理	にぶい橙色 (7.5YR6/4) 外面に「大」？の墨書

第113号住居址

358—1	須恵器杯	13.95 4.15 9.8	口辺部は外反気味となる	ロクロナデ 底部　ヘラキリ未調整	ロクロナデ	略完形 淡黄色(2.5Y8/3) 外面に墨書　文字不明
358—2	須恵器杯	13.9 4.3 ●	口辺部は外反する 丸底	ロクロナデ 底部　ヘラキリ後手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	口辺部の約1/6欠く 灰白色(5Y8/2)
358—3	須恵器杯	14.7 4.4 4.85	口辺部は外反気味となる	ロクロナデ 底部　ヘラキリ後手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	復原後略完形 灰白色(2.5Y8/2)
358—4	須恵器椀	17.3 6.5 10.1	口辺部は外傾する	ロクロナデ 底部　回転ヘラケズリ後高台を貼付する	ロクロナデ	口辺部約2/3、底部約1/2欠く 灰白色(5Y7/1)

第115号住居址

358—1	土師器小型甕	— 5.75 5.5	底部は中央部が凹みドーナツ状となる	ヘラナデ	ヘラナデ	褐灰色(7.5YR6/1)
358—2	土師器甕	21.7 (12.9) —	口辺部は外反する 最大径を口縁部に有する	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラケズリ	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラナデ	胴下部を欠く にぶい黄橙色 (10YR7/2)

第116号住居址

358—1	土師器杯	11.55 4.55 ●	口辺部は外反する 外面に稜を有する	口辺部　ヨコナデ後部分的にヘラミガキ 底部　ヘラケズリ	ヘラミガキ	口辺部の約1/4欠く にぶい褐色 (7.5YR5/3)

第118号住居址

359—1	黒色土器杯	13.1 4.05 5.85	口辺部は外傾する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ヘラミガキ後黒色処理	口辺部の約1/2欠く にぶい橙色(7.5YR7/4) 外面に墨書　文字不明
359—2	黒色土器杯	13.55 4.2 7.3	口辺部は外傾する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ヘラミガキ後黒色処理	約5/6存 にぶい橙色 (7.5YR6/4)
359—3	黒色土器杯	14.05 4.25 6.25	口辺部は外反気味となる 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ヘラミガキ後黒色処理	復原後略完形 にぶい橙色(5YR6/3)
359—4	黒色土器杯	13.4 4.8 6.5	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り後手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ後黒色処理	口辺部の約2/3欠く にぶい橙色(5YR7/4)
359—5	黒色土器杯	13.95 4.4 5.6	口辺部は外反気味となる 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ヘラミガキ後黒色処理	約1/2存 にぶい黄橙色 (10YR7/3)
359—6	黒色土器杯	13.55 4.0 5.5	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ヘラミガキ後黒色処理	口辺部の約1/2欠く にぶい橙色 (7.5YR6/4)

挿図番号	種別・器形	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
359—7	黒色土器椀	(15.8) 5.75 7.45	口辺部は外反気味となる	ロクロナデ 底部　糸切り後高台を貼付する	ヘラミガキ後黒色処理	口辺部の大半を欠く にぶい橙色(5YR7/4)
359—8	黒色土器椀	15.3 (5.0) —	口辺部は外反する	ロクロナデ 底部　糸切り後高台を貼付する	ヘラミガキ後黒色処理	口辺部の約1/5、高台部を欠く にぶい橙色(7.5YR7/4)
359—9	黒色土器皿	12.95 2.9 5.15	口辺部は外反する	ロクロナデ 底部　糸切り後高台を貼付する	ヘラミガキ後黒色処理	口辺部、高台部の一部欠く にぶい赤褐色(5YR5/4)
359—10	黒色土器皿	(13.3) 3.35 6.6	口辺部は外反する	ロクロナデ 底部　糸切り後高台を貼付する	ヘラミガキ後黒色処理	口辺部の大半を欠く にぶい橙色 (7.5YR6/4)
359—11	軟質須恵器杯	13.7 4.0 6.25	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	口辺部の約1/2欠く にぶい橙色 (7.5YR7/4)
359—12	土師器甕	— (24.45) 5.15	平底	ヘラケズリ	ヘラナデ	約1/2存 にぶい橙色(5YR6/4)

第6号掘立柱建物址

359—1	須恵器杯	14.2 4.05 6.0	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	口辺部の約1/2強欠く 灰色(5Y6/1) P_1出土

第21号掘立柱建物址

359—1	土師器甕	— (2.8) 7.2	平底	ヘラナデ 底部　木葉痕	ヘラナデ	にぶい橙色(5YR6/4)

自然流路

359—1	黒色土器高杯	— (4.85) 8.8	脚部は「ハ」の字状に開く	脚部　ヘラケズリ 脚裾部　ヨコナデ	脚部　ヘラケズリ 脚裾部　ヨコナデ	杯部を欠く 浅黄橙色 (10YR8/4)

第1号土坑

359—1	須恵器円面硯	— (4.35) —	残存部で4個の長方形の透孔を有する	ロクロナデ 脚台上部　竹管文	ロクロナデ	復原実測 灰色(N5/)

第2号土坑

359—1	黒色土器杯	17.4 6.2 9.6	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 底部　ヘラキリ後手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ後黒色処理	口辺部の約1/2欠く 橙色(7.5YR7/6)
359—2	須恵器蓋	● 3.0 14.4	扁平な宝珠形つまみを有する	天井部　回転ヘラケズリ ロクロナデ	ロクロナデ	口辺部の約1/5欠く 灰色(N5/)
359—3	須恵器杯	13.9 4.2 7.75	口辺部は外反気味となる	ロクロナデ 底部　ヘラキリ未調整	ロクロナデ	略完形 灰色(7.5Y6/1)
359—4	須恵器杯	13.55 3.85 6.5	口辺部は外反する	ロクロナデ 底部　ヘラキリ後手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	口辺部の約1/2欠く 灰色(N6/)

挿図番号	種別・器形	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
359—5	須恵器杯	14.3 3.8 8.8	口辺部は外反する	ロクロナデ 底部　ヘラキリ後手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	口辺部の約1/2欠く 灰色(5Y6/1) 底部外面にヘラ記号
359—6	須恵器椀	13.3 4.5 7.8	口辺部は外反する	ロクロナデ 底部　ヘラキリ後手持ちヘラケズリ　高台を貼付する	ロクロナデ	口辺部の約3/4欠く 灰白色(7.5Y7/1)
359—7	須恵器椀	16.2 6.2 11.5	口辺部は外傾する	ロクロナデ 底部　ヘラキリ後手持ちヘラケズリ　高台を貼付する	ロクロナデ	略1/2存 外面に自然釉付着 灰色(N5/)
359—8	須恵器小瓶	8.8 16.8 7.15	口辺部は外反する 最大径を胴中央部に有する	口辺部～肩部　ロクロナデ 胴部～底部　手持ちヘラケズリ後部分的にヘラナデ 底部　手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	口辺部の約1/2、胴部の約1/5欠く 青灰色(10BG5/1)
360—1	須恵器杯	— (1.2) 5.9	平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	口辺部を欠く 灰白色(5Y7/1) 底部外面に「子」の墨書
360—2	土師器甑	— (14.4) 4.9	底部に1孔を有する平底	ヘラケズリ後細いヘラナデ	ヘラナデ	甕の転用 胎土にパミスを含むにぶい褐色(7.5YR6/3)
360—3	須恵器甕	33.5 (15.2) —	口辺部は「く」の字状に外反する 最大径を口縁部に有する	口辺部　ロクロナデ 肩部～胴部　タタキ後ロクロナデ	口辺部　ロクロナデ 頸部　タタキ後ロクロナデ 肩部～胴部　ヘラナデ	復原実測 灰色(10Y5/1)
360—4	須恵器甕	37.7 (18.55) —	口辺部は「く」の字状に外反する 最大径を口縁部に有する	口辺部　ロクロナデ 肩部～胴部　タタキ	口辺部　ロクロナデ 肩部～胴部　当て具痕	復原実測 灰白色(5Y7/1)
360—5	須恵器甕	32.05 25.1 15.8	口辺部は「く」の字状に外反する 最大径を口縁部に有する平底	口辺部～肩部　ロクロナデ 胴部　タタキ 底部　ヘラケズリ	口辺部～肩部　ロクロナデ 胴部～底部　ヘラナデ	1/2弱存 灰白色(10Y7/1)
361—1	須恵器甕	— (27.2) —	最大径を胴部に有する	口辺部　ロクロナデ 肩部～胴部　タタキ	口辺部　ロクロナデ 肩部～胴部　当て具痕	口辺部、胴下部を欠く 暗緑灰色(5G3/1)

第3号土坑

361—1	黒色土器杯	(13.1) 4.5 7.2	口辺部は外傾する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り後手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ後黒色処理	口辺部の約2/3欠く にぶい黄橙色 (10YR7/3)
361—2	須恵器杯	14.4 4.2 8.35	口辺部は外反する	ロクロナデ 底部　ヘラキリ後手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	復原後略完形 灰色(7.5Y6/1)
361—3	須恵器杯	13.9 4.0 7.1	口辺部は外傾する 平底	ロクロナデ 底部　ヘラキリ未調整	ロクロナデ	復原完形 オリーブ灰色 (5GY6/1)
361—4	須恵器杯	(13.5) 4.3 3.7	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り後外周手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	口辺部の約3/4欠く 灰色(7.5Y6/1)
361—5	須恵器杯	13.85 3.6 7.7	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	復原後略完形 オリーブ灰色 (2.5GY5/1)
361—6	須恵器杯	14.2 4.1 8.45	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	口辺部の約1/3欠く 外面に自然釉付着 灰色(7.5Y4/1)
361—7	須恵器椀	12.8 3.6 9.05	口辺部は外反する	ロクロナデ 底部　回転ヘラケズリ後高台を貼付する	ロクロナデ	復原後略完形 灰色(N5/)
361—8	須恵器椀	15.8 6.75 9.95	口辺部は外反する	ロクロナデ 底部　糸切り後回転ヘラケズリ　高台を貼付する	ロクロナデ	復原後略完形 灰色(N6/)

挿図番号	種別・器形	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
361－9	須恵器甕	21.5 16.4 13.0	口辺部は外反する 最大径を口縁部に有する　平底	口辺部～胴部　ロクロナデ 胴下部　タタキ後回転ヘラケズリ	ロクロナデ	口辺部の約1/4欠く 灰色(7.5Y6/1)

第4号土坑

361－1	黒色土器杯	(13.9) 5.1 6.8	口辺部は外傾気味となる 平底	ロクロナデ 底部　糸切り後手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ後黒色処理	口辺部の大半を欠く 橙色(5YR6/6) 漆入
361－2	須恵器椀	14.8 4.5 9.1	口辺部は外反する	ロクロナデ 底部　糸切り後外周回転ヘラケズリ　高台を貼付する	ロクロナデ	口辺部の約1/2欠く 暗青灰色(5B4/1)
361－3	須恵器椀	(14.25) 3.85 10.2	口辺部は外反する	ロクロナデ 底部　回転ヘラケズリ後高台を貼付する	ロクロナデ	口辺部の約2/3欠く 灰色(5Y6/1)
362－1	須恵器椀	(14.0) 6.1 8.4	口辺部は外反する	ロクロナデ 底部　回転ヘラケズリ後高台を貼付する	ロクロナデ	口辺部の約2/3欠く 灰色(N5/)
362－2	須恵器長頸壺	― (7.25) ―		ロクロナデ	ロクロナデ	外面に自然釉付着 三段成形 灰色(N6/)
362－3	須恵器長頸壺	― (5.95) ―		ロクロナデ	ロクロナデ	青灰色(5B6/1)

第5号土坑

359－1	黒色土器杯	13.0 4.0 5.9	口辺部は外反する	ロクロナデ 底部　糸切り後手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ後黒色処理	1/2弱存 にぶい橙色 (7.5YR7/4)

遺構外

362－1	土師器杯	13.4 4.6 ●	口辺部は内弯する 丸底	口辺部　ヨコナデ 底部　手持ちヘラケズリ	ヨコナデ	約2/3存 橙色(5YR6/6)
362－2	須恵器杯	14.0 4.7 9.2	口辺部は外反気味となる	ロクロナデ 底部　糸切り後外周手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	1/2弱存 オリーブ灰色 (2.5GY6/1)
362－3	須恵器杯	(13.3) 4.5 6.8	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	口辺部の約3/4欠く 灰白色(5Y7/1)
362－4	須恵器杯	(13.3) 4.3 7.4	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	1/2弱存 明オリーブ灰色 (2.5GY7/1)
362－5	須恵器杯	12.8 4.1 8.8	口辺部は外反する	ロクロナデ 底部　ヘラキリ未調整	ロクロナデ	約1/2存 にぶい橙色 (7.5YR6/4)
362－6	須恵器円面硯	(7.8) (3.2) ―		ロクロナデ	ロクロナデ	復原実測 灰色(5Y5/1)
362－7	黒色土器杯	― (3.8) ―	口辺部は外反気味となる	ロクロナデ	ヘラミガキ後黒色処理	にぶい黄橙色 (10YR7/3) 外面に墨書　文字不明
362－8	黒色土器杯	― (2.25) ―	口辺部は外反する	ロクロナデ	ヘラミガキ後黒色処理	橙色(5YR6/6) 外面に墨書　文字不明

挿図番号	種別・器形	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
362－9	黒色土器杯	― (2.3) ―		ロクロナデ	ヘラミガキ後黒色処理	にぶい橙色 (7.5YR7/4) 外面に墨書　文字不明
362－10	黒色土器杯	― (3.4) ―	口辺部は外反する	ロクロナデ	ヘラミガキ後黒色処理	にぶい黄橙色 (10YR7/4) 外面に「喜」の墨書
362－11	須恵器杯	― (1.2) (2.9)	平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	朱墨硯に転用 灰色(5Y6/1)
362－12	土師器甕	15.6 17.8 (6.7)	口辺部は「く」の字状に外反する 最大径を胴中央部に有する	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴上部　ハケメ 胴下部～底部　ハケメ後ヘラナデ	口辺部　ヨコナデ 胴部～底部　ヘラナデ	1/2弱存 にぶい黄橙色 (10YR7/3)

舟窪遺跡

第1号住居址

437－1	土師器甕	― (9.0) 5.7	平底	ヘラケズリ	ヘラナデ	にぶい橙色 (5YR7/3)

第2号住居址

437－1	黒色土器皿	13.35 3.6 6.0	口辺部は外反気味となる	ロクロナデ 底部　糸切り後高台を貼付する	ヘラミガキ後黒色処理	口辺部と高台部の約1/4欠く 浅黄橙色(7.5YR8/4) 外面に墨書　文字不明
437－2	軟質須恵器杯	14.35 4.15 5.9	口辺部は外反気味となる 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	口辺部の約3/4を欠く 灰色(7.5Y6/1)
437－3	土師器甕	19.7 (14.35) ―	口辺部は「コ」の字状に外反する	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラケズリ	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラナデ	胴下半を欠く にぶい橙色(5YR7/4)

第3号住居址

437－1	土師器杯	11.75 3.45 ●	外面に稜を有し、口辺部は外反する 丸底	口辺部　ヨコナデ 底部　手持ちヘラケズリ	ヨコナデ	口辺部の約1/2欠く 橙色(2.5YR7/6)
437－2	土師器杯	13.4 4.5 ●	外面ににぶい稜を有し、口辺部は内弯気味となる 丸底	口辺部　ヨコナデ 底部　手持ちヘラケズリ	口辺部　ヨコナデ 底部　ヘラミガキ	1/2弱存 橙色(7.5YR7/6)

第4号住居址

437－1	土師器杯	11.65 4.0 ●	外面に稜を有し、口辺部は僅かに外反する 丸底	口辺部　ヨコナデ 底部　手持ちヘラケズリ	ヨコナデ	口辺部の約1/3欠く 橙色(5YR7/8)
437－2	土師器甕	15.5 (23.95) ―	口辺部は外反する 最大径を胴中央部に有する	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラミガキ	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部ヘラナデ	口辺部の約1/4、胴部の約1/3、底部を欠く 橙色(5YR7/6)
437－3	黒色土器杯	13.2 3.85 5.8	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ヘラミガキ後黒色処理	口辺部の約1/3欠く 橙色(7.5YR7/6) 外面に「寺」の墨書

第７号住居址

挿図番号	種別・器形	法　量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備　　考
437－１	土師器杯	10.6 3.0 ●	口辺部は直立気味に立ち上がる 丸底	口辺部　ヨコナデ 底部　手持ちヘラケズリ	ヨコナデ	約1/2存 橙色(5YR7/6)
437－２	土師器杯	11.0 3.25 ●	口辺部は直立気味に立ち上がる 丸底	口辺部　ヨコナデ 底部　手持ちヘラケズリ	ヨコナデ	約1/2存 にぶい橙色(5YR7/4)
437－３	土師器杯	11.3 3.05 ●	外面に稜を有し、口辺部は外反気味となる 丸底	口辺部　ヨコナデ 底部　手持ちヘラケズリ	ヨコナデ	口辺部の約1/2欠く 橙色(5YR7/6)
437－４	土師器小型甕	14.45 (13.8) ──	口辺部は外傾する 最大径を口縁部に有する	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラケズリ	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ハケメ	約1/2存 橙色(7.5YR7/6)
437－５	土師器甕	(21.2) (16.0) ──	口辺部は外反する 球形胴を有する	口辺部～胴部　ヘラミガキ	口辺部　ヘラミガキ 肩部～胴部　ハケメ 後ヘラミガキ	にぶい黄橙色 (10YR7/4)

第９号住居址

437－１	須恵器杯	(13.1) 4.15 7.5	口辺部は外傾する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	1/2弱存 緑灰色(10GY6/1)

第11号住居址

437－１	須恵器杯	12.8 4.15 7.3	口辺部は外反気味となる 平底	ロクロナデ 底部　ヘラキリ後ヘラナデ	ロクロナデ	口辺部の約1/2欠く 灰色(N6/)
437－２	土師器甕	23.0 (23.25) ──	口辺部は「く」の字状に外反する　最大径を胴部ほぼ中央に有する	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラケズリ	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラナデ	胴下半を欠く にぶい橙色 (7.5YR6/4)
438－１	土師器甕	(17.15) 21.75 ──	口辺部は「く」の字状に外反するが、外反度は弱い	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラケズリ	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラナデ	口辺部の大半、胴部の約2/3欠く 橙色(2.5YR7/6)
438－２	土師器甕	── (10.55) 4.5	平底	ヘラケズリ	ヘラナデ	にぶい橙色(5YR6/4)

第12号住居址

438－１	土師器杯	12.6 3.35 ●	口辺部は内弯する 丸底	口辺部　ヨコナデ 底部　手持ちヘラケズリ 指頭痕	口辺部　ヨコナデ 底部　ヘラミガキ	略完形 にぶい橙色(5YR6/4)
438－２	須恵器杯	14.35 4.4 9.1	口辺部は外反する	ロクロナデ 底部　ヘラキリ後手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	口辺部の大半を欠く 灰白色(2.5Y8/2)
438－３	黒色土器高杯	15.6 12.3 10.2	口辺部は内弯気味に立ち上がる　脚部は「ハ」の字状に開く	口辺部　ヨコナデ 杯部～脚部　ヘラケズリ 脚裾部　ヨコナデ	杯部　ヘラミガキ後黒色処理 脚部　ヘラケズリ 脚裾部　ヨコナデ	口辺部の約1/4欠く 浅黄橙色 (7.5YR8/6)
438－４	黒色土器杯	── (2.85) ──	口辺部は内弯気味となる	ロクロナデ	ヘラミガキ後黒色処理	橙色(7.5YR7/6) 外面に「之」の墨書
438－５	土師器小型甕	14.1 (12.8) ──	口辺部は外反する 最大径を胴部ほぼ中央部に有する	口辺部～肩部　ヨコナデ 胴部　ヘラナデ	ヨコナデ	口辺部の一部、底部を欠く にぶい橙色(7.5YR6/4)

挿図番号	種別・器形	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
438－6	土師器甕	16.9 (8.4) ——	口辺部は「く」の字状に外反する 球胴を呈すると思われる	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部ヘラナデ	ヘラナデ後ヘラミガキ	橙色(5YR6/6)
438－7	土師器甕	19.2 (26.35) ——	口辺部は外反する 最大径を口縁部に有する	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部ヘラケズリ	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラナデ	口辺部～胴部の約1/3、底部を欠く にぶい橙色(7.5YR6/4)

第13号住居址

439－1	黒色土器杯	14.1 4.8 6.85	口辺部は内弯気味に立ち上がる 平底	ロクロナデ 底部　糸切り後手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ後黒色処理	1/2弱存 にぶい橙色 (7.5YR7/4)
439－2	黒色土器杯	14.2 5.0 7.5	口辺部は内弯気味に立ち上がる 平底	ロクロナデ 底部　手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ後黒色処理	1/2弱存 橙色(5YR7/6)
439－3	須恵器蓋	● 4.65 16.8	宝珠形つまみを有する	天井部　回転ヘラケズリ ロクロナデ	ロクロナデ	約1/2存 灰色(N6/)
439－4	須恵器杯	13.4 4.15 6.85	口辺部は外傾気味となる 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	略完形 淡黄色(2.5Y8/3)
439－5	須恵器杯	13.75 3.8 7.8	口辺部は外反気味となる 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	略完形 灰白色(10Y7/1)
439－6	須恵器長頸壺	—— (18.4) 4.8	細い胴部を有し、最大径を肩部に有する	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	灰色(5Y6/1)
439－7	須恵器長頸壺	—— (9.5) ——		ロクロナデ	ロクロナデ	灰白色(10YR7/1)

第14号住居址

439－1	須恵器杯	14.4 4.6 ●	口辺部は外傾気味となる	ロクロナデ 底部　ヘラキリ後ヘラナデ	ロクロナデ	口辺部の約1/3欠く 灰色(7.5Y6/1)
439－2	須恵器杯	14.2 4.2 ●	口辺部は外傾気味となる	ロクロナデ 底部　ヘラキリ未調整	ロクロナデ	口辺部の大半を欠く オリーブ灰色 (2.5GY5/1)
439－3	須恵器椀	17.0 3.4 13.0	口辺部は外傾気味となり底部に短い高台を貼付する	ロクロナデ 底部　手持ちヘラケズリ後高台を貼付する	ロクロナデ	口辺部の約1/3欠く 外面に自然釉が付着 灰色(N6/)　転用硯？

第16号住居址

439－1	土師器杯	11.25 3.65 ●	口辺部は内弯気味となる 丸底	口辺部　ヨコナデ 底部　手持ちヘラケズリ	ヨコナデ	約1/2存 橙色(5YR7/6)
439－2	黒色土器高杯	14.3 10.0 7.4	口辺部は外反気味となる 脚部は「ハ」の字状に開き 脚裾部は外反する	口辺部　ヨコナデ 杯部・脚部　ヘラケズリ後ヘラミガキ 脚裾部　ヨコナデ	杯部　ヘラミガキ後黒色処理 脚部　ヘラケズリ 脚裾部　ヨコナデ	口辺部約1/2、脚裾端部を欠く 浅黄橙色(10YR8/4)
439－3	土師器小型壺	—— (9.0) ●	丸底	ヘラナデ	ヘラナデ	橙色(5YR6/6)

第17号住居址

挿図番号	種別・器形	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
439－1	土師器杯	15.55 5.25 ●	口辺部は外反する 丸底	口辺部　ヘラミガキ 底部　ヘラナデ	口辺部　斜放射文 底部　ラセン文	復原後略完形 橙色(5YR6/6)
439－2	土師器小型甕	13.1 13.0 5.1	口辺部は「く」の字状に外反する 最大径を胴中央部に有する	口辺部　ヨコナデ 肩部～底部　ヘラケズリ	口辺部　ヨコナデ 肩部～底部　ヘラナデ	口辺部の約1/4、胴部の1/3を欠く にぶい橙色(7.5YR7/3)
439－3	土師器甕	― (8.35) 7.2	平底	ハケメ	ハケメ	にぶい橙色(5YR7/4)
439－4	土師器甕	22.3 (23.6) ―	口辺部は外反する 最大径を口縁部に有する	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラケズリ	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラナデ	底部を欠く にぶい橙色 (7.5YR7/4)

第18号住居址

440－1	黒色土器杯	11.7 4.5 ●	外面に稜を有し、口辺部は外反する 丸底	口辺部　ヨコナデ 底部　手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ後黒色処理	完形 にぶい橙色 (7.5YR7/4)
440－2	黒色土器杯	13.4 5.05 ●	素縁で口辺部は外反気味となる	口辺部　ヨコナデ 底部　手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ後黒色処理	略完形 にぶい黄橙色 (10YR7/4)
440－3	黒色土器杯	11.5 4.0 ●	素縁で口辺部は内弯気味となる 丸底	口辺部　ヨコナデ 底部　手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ後黒色処理	略完形 にぶい橙色 (7.5YR6/4)
440－4	土師器甕	20.3 32.35 4.8	口辺部は外反する 最大径を口縁部に有する	口辺部　ヨコナデ 肩部～底部　ヘラナデ	口辺部　ヨコナデ 肩部～底部　ヘラナデ	口辺部～肩部の約1/2欠く にぶい黄橙色(10YR7/2)
440－5	土師器甕	19.35 (24.05) ―	口辺部は外反する 最大径を口縁部に有する	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラケズリ	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラナデ	口辺部～胴部の約1/4、底部を欠く にぶい橙色(7.5YR7/4)

第20号住居址

440－1	土師器杯	10.75 4.3 ●	外面ににぶい稜を有し、口辺部は外反する 丸底	口辺部　ヨコナデ 底部　手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ	完形 橙色(2.5YR6/6)
440－2	土師器甑	19.8 4.3 ●	口辺部は外反する 最大径を口縁部に有する 底部に1孔を有する	口辺部　ヨコナデ 頸部～底部　ヘラケズリ	口辺部　ヨコナデ 頸部～底部　ヘラナデ	完形 橙色(2.5YR6/8)
440－3	土師器甕	― (16.9) 6.9	平底	ヘラナデ	ヘラナデ	にぶい褐色 (7.5YR6/3)

第1号土坑

440－1	灰釉陶器 長頸壺	― (12.7) 7.6	最大径を肩部に有する	肩部　ロクロナデ 胴部　回転ヘラケズリ	ロクロナデ	頸部、胴部～底部の約1/3欠く 灰白色(2.5Y7/1)

大塚原遺跡

第1号住居址

挿図番号	種別・器形	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
535—1	黒色土器杯	14.0 4.45 8.0	口辺部は外反気味となる 平底	ロクロナデ 底部　糸切り後手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ後黒色処理	口辺部の約1/2欠く にぶい褐色 (7.5YR6/3)
535—2	須恵器杯	12.3 4.05 5.95	口辺部は内弯気味となる 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	口辺部の約1/2欠く 灰色(N5/)
535—3	須恵器杯	13.3 4.95 7.2	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	復原後完形 青灰色(5BG5/1)
535—4	須恵器杯	12.8 3.6 6.55	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	口辺部の約1/3欠く 灰白色(5Y7/1)
535—5	須恵器杯	13.25 3.8 7.35	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ	ロクロナデ	口辺部の約1/5欠く 灰色(10Y6/1)
535—6	須恵器杯	14.4 4.0 6.75	口辺部は僅かに外反する 歪曲品	ロクロナデ 底部　ヘラキリ未調整	ロクロナデ	復原後完形 底部内面に炭化物付着 灰オリーブ色(5Y6/2)
535—7	須恵器杯	13.0 4.2 6.25	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	口辺部約3/4、底部1/4欠く 灰白色(N7/)
535—8	土師器台付甕	— (3.2) 7.65	脚部は「ハ」の字状に開く	ヨコナデ	ヨコナデ	脚部の約1/2存 にぶい橙色(5YR6/4)

第2号住居址

535—1	須恵器蓋	● 3.9 15.7	扁平な宝珠形つまみを有する	天井部　回転ヘラケズリ ロクロナデ	ロクロナデ	約1/2存 灰黄色(2.5Y6/2)
535—2	須恵器杯	13.75 4.9 5.4	口辺部は外傾する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	口辺部の約1/2欠く 灰白色(5Y7/2)
535—3	黒色土器杯	— (3.7) —		ロクロナデ	ヘラミガキ後黒色処理	浅黄橙色(7.5YR8/4) 外面に墨書　文字不明
535—4	須恵器円面硯	10.7 (7.9) —	梯形を呈し、脚台部に3個以上の長方形の透孔を有する	ロクロナデ	ロクロナデ	硯面部の約1/4、脚台部の大半を欠く 灰色(7.5Y5/1)

第4号住居址

535—1	須恵器椀	10.2 4.65 7.9	口辺部は外反する	ロクロナデ 底部　回転ヘラケズリ後高台を貼付する	ロクロナデ	1/2弱存 緑灰色(10GY6/1)
535—2	黒色土器杯	— (2.0) —		ロクロナデ	ヘラミガキ後黒色処理	外面に2文字の墨書文字不明 にぶい橙色(5YR6/4)

第5号住居址

535—1	土師器椀	8.5 6.25 ◐	外面に稜を有し、口辺部は内弯する 丸底	口辺部～胴部　ヘラミガキ 底部　手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ	略完形　黒彩土器 にぶい橙色 (7.5YR7/4)

挿図番号	種別・器形	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
535—2	黒色土器高杯	16.85 15.6 12.0	口辺部は外傾する柱状の脚部を有し、脚裾部は外方に開く	杯部～脚部　ヘラミガキ	杯部　ヘラミガキ後黒色処理 脚部　ヘラケズリ 脚裾部　ヨコナデ	復原後略完形 にぶい橙色 (7.5YR7/4)
535—3	土師器甕	13.8 13.1 ●	口辺部は外反する丸底	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラケズリ	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラナデ	口辺部～胴部の約1/4欠く にぶい橙色(5YR7/4)
535—4	土師器小型甕	14.8 14.3 8.3	口辺部は外反する肩球胴を有し、最大径を胴中央部に有する	口辺部　ヨコナデ 頸部～胴下半部　ヘラナデ 底部　ヘラケズリ	口辺部　ヨコナデ 頸部～底部　ヘラナデ	復原後略完形 赤褐色(10R5/4)
535—5	土師器甕	23.6 (20.85) —	口辺部は外反する最大径を口縁部に有する	口辺部　コヨナデ 肩部～胴部　ヘラケズリ	口辺部　ヨコナデ 肩部ハケメ　胴部ヘラナデ	胴下半部～底部を欠く 浅黄橙色(7.5YR8/4)

第6号住居址

536—1	黒色土器杯	13.0 4.0 5.65	口辺部は外反する平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	暗文 黒色処理	口辺部の1/6を欠く にぶい橙色 (7.5YR7/4)
536—2	黒色土器杯	13.1 4.5 5.25	口辺部は外反する平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ヘラミガキ後黒色処理	約1/2存 にぶい橙色 (5YR6/4)
536—3	黒色土器椀	— (2.55) 8.25		ロクロナデ 底部　糸切り後高台を貼付する	ヘラミガキ後黒色処理	口辺部を欠く にぶい橙色(5YR7/4) 外面に墨書　文字不明
536—4	黒色土器椀	— (2.55) 8.3		ロクロナデ 底部　糸切り後高台を貼付する	ヘラミガキ後黒色処理	にぶい橙色(5YR7/4) 外面に墨書　文字不明
536—5	黒色土器杯	— (3.2) —		ロクロナデ	ヘラミガキ後黒色処理	にぶい黄橙色(10YR7/4) 外面に墨書　文字不明
536—6	黒色土器杯	— (2.7) —		ロクロナデ	ヘラミガキ後黒色処理	にぶい橙色(7.5YR7/4) 外面に墨書　文字不明
536—7	須恵器杯	(13.4) 4.0 5.05	口辺部は外反する平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	口辺部の大半を欠く 灰白色(5Y7/2)
536—8	須恵器杯	— (4.8) 2.75	平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	口辺部を欠く 灰白色(5Y7/2)
536—9	須恵器椀	14.3 5.45 6.05	口辺部は外反気味となる	ロクロナデ	ロクロナデ 重ね焼き痕	口辺部の約1/2欠く 灰黄色(2.5Y7/2)

第7号住居址

536—1	須恵器杯	14.3 4.1 9.3	口辺部は外反する	ロクロナデ 底部　ヘラキリ後手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	1/2弱存 灰色(7.5Y6/1)
536—2	土師器甕	20.35 27.7 5.0	口辺部は外反する最大径を胴上部に有する	口辺部　ヨコナデ 肩部～底部　ヘラケズリ	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラナデ	口辺部の一部、胴下半～底部の約1/2欠く 橙色(5YR6/6)
536—3	須恵器甕	— (27.8) 14.75	最大径を胴中央部に有する 平底	肩部～胴下部　タタキ 底部　ヘラケズリ	ヨコナデ	口辺部を欠く 灰色(10Y6/1)

第８号住居址

挿図番号	種別・器形	法　量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備　　考
536－１	須恵器蓋	● 4.5 11.6	口辺部は内弯気味となる	天井部　回転ヘラケズリ ロクロナデ	ロクロナデ	口辺部の約1/2欠く 灰白色(N7/)

第10号住居址

536－１	須恵器杯	13.7 4.3 ●	口辺部は外傾する 丸底	ロクロナデ 底部　ヘラキリ後手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	口辺部の約1/3を欠く 緑灰色(7.5GY5/1)
536－２	須恵器杯	13.3 3.85 6.35	口辺部は外反気味となる 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	完形 灰白色(5Y7/2)
536－３	須恵器杯	13.3 3.95 6.1	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	口辺部の約3/5欠く 青灰色(10BG)
536－４	須恵器杯	13.0 3.8 5.0	口辺部は外傾する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	口辺部の約1/3存 黄灰色(2.5Y5/1)
536－５	須恵器椀	― (1.3) 9.3		ロクロナデ 底部　糸切り後回転ヘラケズリ　高台を貼付する	ロクロナデ	口辺部を欠く 転用硯(底部外面) 灰白色(5Y7/2)

第11号住居址

536－１	黒色土器杯	15.9 5.7 8.7	口辺部は内弯気味に立ち上がる 平底	ロクロナデ 底部　手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ後黒色処理	口縁部を若干欠く にぶい橙色 (7.5YR7/4)
536－２	黒色土器杯	15.9 5.4 7.0	口辺部は内弯気味に立ち上がる	ロクロナデ 底部　手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ後黒色処理	口辺部の大半を欠く にぶい橙色(5YR6/3)
537－１	須恵器杯	13.9 3.9 8.9	口辺部は外反気味となる 平底	ロクロナデ 底部　ヘラキリ未調整	ロクロナデ	口辺部の約1/5を欠く 灰白色(5Y7/1)
537－２	須恵器杯	14.1 4.0 7.25	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	口辺部を僅かに欠く 灰オリーブ色 (5Y6/2)
537－３	須恵器杯	13.25 3.6 8.45	口辺部は内傾気味となる 平底	ロクロナデ 底部　ヘラキリ未調整	ロクロナデ	口辺部の約1/5を欠く 灰色(10Y5/1)
537－４	須恵器杯	13.1 3.8 6.2	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	口辺部の約4/5欠く 緑灰色(10GY5/1)
537－５	須恵器椀	14.5 4.25 11.0	口辺部は外反する	ロクロナデ 底部　回転ヘラケズリ後高台を貼付する	ロクロナデ	口辺部の約1/6欠く 灰褐色(5YR5/2)
537－６	土師器甕	20.95 (11.0) ―	口辺部は外反する	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラケズリ	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラナデ	口辺部～胴部の1/2存 橙色(2.5YR7/6)

第12号住居址

537－１	須恵器蓋	● 2.65 15.95	扁平な宝珠形つまみを有する	天井部　回転ヘラケズリ 体部　ロクロナデ	ロクロナデ	体部の約1/4欠く 灰色(10Y5/1)

挿図番号	種別・器形	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
537－2	須恵器杯	12.55 4.2 5.9	口辺部は外反気味となる 平底	ロクロナデ 底部　糸切り後外周ヘラケズリ	ロクロナデ	口辺部の約1/3欠く 灰色(5Y6/1)
537－3	須恵器長頸壺	7.65 (9.7) —		ロクロナデ	ロクロナデ	肩部以下を欠く 灰色(N5/)
537－4	土師器甕	19.85 (20.6) —	口辺部は「く」の字状に外反する	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラケズリ	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラナデ	口辺部～胴部の約1/2存 にぶい橙色(5YR6/3)
537－5	土師器甕	19.6 (10.3) —	口辺部は「く」の字状に外反する	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラケズリ	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラナデ	口辺部～胴部の約1/2弱存 にぶい橙色(5YR6/4)

第13号住居址

537－1	土師器杯	11.65 3.8 ●	外面に稜を有し、口辺部は外反する	口辺部　ヨコナデ 底部　手持ちヘラケズリ	ヨコナデ	完形 橙色(5YR7/6)
537－2	土師器杯	11.7 (4.25) ●	外面に稜を有し、口辺部は外反する	口辺部　ヨコナデ 底部　手持ちヘラケズリ	ヨコナデ	約3/4存 橙色(2.5YR7/8)
537－3	土師器杯	14.1 5.8 ●	外面ににぶい稜を有し、口辺部は外反気味となる　丸底	口辺部　ヘラミガキ 底部　ヘラケズリ後ヘラミガキ	ヘラミガキ	約3/4存 にぶい黄橙色 (10YR6/3)
537－4	土師器高杯	— (4.65) 5.7	短い脚部を有する	杯部　ヨコナデ 脚部　ヘラケズリ 脚裾部　ヨコナデ	杯部　ヨコナデ 脚部　ヘラナデ 脚裾部　ヨコナデ	口辺部、脚裾部の約2/3欠く にぶい橙色(7.5YR7/4)
537－5	土師器鉢	13.0 10.8 ●	口辺部は直立気味に立ち上がる 丸底	口辺部　ヨコナデ 胴部～底部　ヘラケズリ	口辺部　ヨコナデ 胴部～底部　ヘラナデ	約2/3存 灰黄褐色 (10YR6/2)
537－6	土師器台付甕	10.0 16.65 8.7	口辺部は内傾気味に立ち上がる 最大径を胴中央部に有する　短い脚部を有する	口辺部・脚部　ヨコナデ 肩部～胴下半分　ヘラケズリ 脚部　ヨコナデ	口辺部　ヨコナデ 肩部～底部　ヘラナデ 脚部　ヘラケズリ 脚裾部　ヨコナデ	完形 にぶい橙色 (7.5YR7/4)
537－7	土師器甕	— (10.65) 5.0	平底	ヘラケズリ	ヘラナデ	口辺部～胴部を欠く にぶい褐色 (7.5YR6/3)
538－1	土師器甕	19.0 (29.15) —	口辺部は外反する 最大径を口縁部に有する	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラケズリ	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラナデ	口辺部の約1/2、底部を欠く にぶい黄橙色(10YR7/2)
538－2	土師器甕	— (31.0) 5.4	平底	肩部～底部　ヘラケズリ	肩部～胴下部　ハケメ 底部　ヘラナデ	胴部の一部、口辺部を欠く 橙色(7.5YR7/6)

第14号住居址

538－1	土師器無頸壺	11.8 10.0 8.0	算盤玉状の胴部を有する	口辺部　ヨコナデ 胴部　ヘラナデ後部分的にヘラミガキ 底部　ヘラケズリ	口辺部　ヨコナデ 胴部～底部　ヘラナデ	復原後略完形 にぶい橙色 (2.5YR6/4)
538－2	土師器甕	18.0 21.9 (8.6)	口辺部は外反する	口辺部～肩部　ヨコナデ部分的にハケメ 胴部～底部　ヘラナデ	口辺部　ヨコナデ 頸部～底部　ヘラナデ後部分的にヘラミガキ	全体の約1/2欠く 赤橙色(10R6/6)

第16号住居址

538－1	須恵器杯	11.7 4.0 5.4	口辺部は外反気味となる 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	口辺部の約1/6欠く 明オリーブ灰色 (5GY7/1)

第17号住居址

挿図番号	種別・器形	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
538－1	黒色土器杯	13.15 4.35 5.75	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	暗文　黒色処理	復原後完形 にぶい橙色(5YR7/4)
538－2	黒色土器杯	12.7 4.5 4.95	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ヘラミガキ後黒色処理	口辺部の約1/8欠く にぶい黄橙色 (10YR7/4)
538－3	黒色土器杯	13.2 4.5 6.1	口辺部は外反気味となる 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	黒色処理	口縁部の約1/2欠く にぶい黄橙色 (10YR6/4)
538－4	黒色土器杯	14.2 4.7 6.85	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り後手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ後黒色処理	口辺部の約2/3欠く にぶい橙色(5YR6/3) 外面に墨書　文字不明
538－5	黒色土器杯	13.45 (3.8) —	口辺部は外反する	ロクロナデ	ヘラミガキ後黒色処理	口辺部の約1/3存 浅黄橙色(10YR8/4) 外面に墨書　文字不明
538－6	黒色土器椀	15.1 5.5 6.0	口辺部は外反する	ロクロナデ 底部　糸切り後高台を貼付する	ヘラミガキ後黒色処理	約1/2存 にぶい黄橙色 (10YR7/3)

第18号住居址

539－1	土師器甑	18.8 23.8 8.5	胴部はほぼ中央部に1対の把手を有する 胴下半部に2孔(焼成前)を有する　底部に1孔を有する	口辺部～底部　ヘラミガキ	口辺部～底部　ヘラミガキ	復原後略完形 にぶい橙色 (7.5YR7/3)
539－2	土師器甕	16.6 (12.4) —	頸部は直立気味に立ち上がり、口辺部は外反する	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラケズリ後ヘラミガキ	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラナデ	口辺部～胴上部の約1/2弱存 浅黄橙色(7.5YR8/4)

第19号住居址

539－1	黒色土器杯	12.8 5.4 7.9	口辺部は外反気味となる 平底	ロクロナデ 底部　手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ後黒色処理	1/2弱存 にぶい黄橙色 (10YR7/4)
539－2	須恵器杯	12.95 3.75 7.4	口辺部は外傾する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	略完形 褐灰色(7.5YR6/1)
539－3	須恵器杯	— (1.75) 7.15	平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	口辺部を欠く 褐灰色(7.5YR6/1)
539－4	須恵器椀	16.5 6.9 10.55	口辺部は外反気味となる	ロクロナデ 底部　回転ヘラケズリ後高台を貼付する	ロクロナデ	口辺部約1/4、底部約1/2欠く SB27との接合資料 灰色(5Y5/1)
539－5	土師器甕	21.15 (17.15) —	口辺部は「く」の字状に外反する 最大径を胴中央部に有する	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラケズリ	口辺部　ヨコナデ 肩部～胴部　ヘラナデ	口辺部～胴部の1/2弱存 にぶい橙色(7.5YR7/4)

第22号住居址

539－1	須恵器杯	11.6 4.4 5.4	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	口辺部の約1/2欠く 灰黄褐色 (10YR6/2)
539－2	土師器甕	— (5.5) 4.55	平底	ヘラケズリ	ヘラナデ	胴下半部～底部の約3/4存 にぶい橙色(7.5YR6/4)

挿図番号	種別・器形	法量	器形の特徴	調整（外面）	調整（内面）	備考
539－3	須恵器甕	— (26.0) 14.1	平底	タタキ 底部　ヘラケズリ	ヘラケズリ	約1/2存　外面に自然釉付着 暗緑灰色(7.5GY3/1)
540－1	須恵器横瓶	— (24.3) ●		タタキ	ヘラケズリ	外面に自然釉付着 灰色(7.5Y6/1)

第28号住居址

540－1	土師器杯	17.7 6.45 ●	口縁端部は肥厚する 丸底	杯部　ヘラケズリ後ヘラミガキ 底部　ヘラケズリ	口辺部　2段の斜放射文 底部　ラセン文	口辺部の約1/2欠く にぶい橙色 (5YR6/4)
540－2	須恵器杯	13.3 4.1 5.5	口辺部は外反する 平底	ロクロナデ 底部　糸切り未調整	ロクロナデ	口辺部の約2/3欠く 明緑灰色(10GY7/1)

第30号住居址

540－1	土師器甑	11.8 11.9 7.0	口辺部は外反する 最大径を胴部中央部に有する 底部に1孔を有する（焼成後）	口辺部～肩部　ヨコナデ 胴部　ヘラケズリ後部分的にヘラナデ 底部　ヘラケズリ	口辺部　ヨコナデ 胴部～底部　ヘラナデ	略完形 小型甕の転用甑 にぶい黄橙色(10YR7/3)
540－2	土師器椀	8.55 8.7 ●	口辺部は直立気味に立ち上がる 丸底	口辺部　ヨコナデ 肩部～底部　ヘラケズリ後ヘラミガキ	口辺部　ヨコナデ 肩部～底部ヘラナデ後部分的にヘラミガキ	口辺部の大半、肩部～底部の約1/2欠く にぶい黄橙色 (10YR7/3)
541－1	土師器甕	— (37.85) 4.35	最大径を口縁部に有すると思われる	口辺部　ヨコナデ 肩部～底部　ヘラケズリ	口辺部　ヨコナデ 肩部～底部　ヘラナデ	口辺部を欠く 浅黄橙色 (10YR8/3)

第33号住居址

541－1	黒色土器杯	— (2.95) —		ロクロナデ	ヘラミガキ後黒色処理	にぶい橙色 (7.5YR7/4) 外面に「案」の墨書

第35号住居址

541－1	土師器甑	14.25 10.55 4.2	口辺部は外反する 最大径を口縁部に有する 底部に1孔を有する	口辺部　ヨコナデ 胴部～底部　ヘラナデ	口辺部　ヨコナデ 胴部～底部　ヘラナデ 後部分的にヘラミガキ	完形 浅黄橙色 (10YR8/3)
541－2	黒色土器高杯	— (10.2) —	脚部は柱状となる	ヘラミガキ	杯部　ヘラミガキ後黒色処理　脚部　ヘラナデ後黒色処理	杯部、脚裾部を欠く 浅黄橙色 (7.5YR8/4)
541－3	黒色土器高杯	— (4.95) —	脚部は「ハ」の字状に開く	口辺部　ヨコナデ 杯部底部～脚部　ヘラケズリ	杯部　ヘラミガキ後黒色処理 脚部　ヘラケズリ	杯口辺部、脚下半部を欠く にぶい橙色(5YR6/4)

第7号掘立柱建物址

541－1	土師器杯	10.7 3.55 ●	外面に稜を有し、口辺部は外反する	口辺部　ヨコナデ 底部　手持ちヘラケズリ	ヨコナデ	口辺部の約1/3欠く 橙色(5YR7/6)

第15号掘立柱建物址

541－1	須恵器𤭯	8.7 14.75 ●	口辺部は「ハ」の字状に外反する 扁球胴を有する	ロクロナデ 胴下半～底部　手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	略完形 灰色(10Y5/1)

遺構外

541－1	土師器杯	11.9 4.4 ●	外面に稜を有し、口辺部は外反する	口辺部　ヨコナデ 底部　手持ちヘラケズリ	ヨコナデ	約1/2存 にぶい橙色(5YR7/4)

付編１

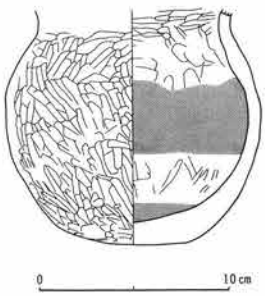
竹花遺跡第66号住居址出土土器付着物の組成分析結果について

浅麓環境施設組合

１．はじめに

小諸市教育委員会より、竹花遺跡第66号住居址出土土器内面に付着する白色の物質についての分析依頼があった。

土器は、古墳時代後期の黒色土器の小型甕で、胴部内面では、厚さ約0.1cm、幅約４cmで一周するほか、底部内面にも遺存している(第１図網点部分)。土器外面は、火熱を受けており、煮沸具として用いられている。



第１図　土器実測図

２．外　観

固いが脆い白色湯垢(スケール)状物質で、内周部は概ね均一な厚さで付着している。内周上部には波状の縞模様が認められ、比較的容易に土器内面から剥離する。また、顕微鏡観察によれば、層をなしており、空隙部を有する粗い粒子状結晶の集合体である。

３．含有物質等測定結果

後述の分析結果報告書のとおり

(1)　含有物質割合の推定

推定物質	含有割合(%)
ケイ酸（SiO_2）	47.4
酸化アルミニウム（Al_2O_3）	27.7
炭酸カルシウム（$CaCO_3$）	5.1
炭酸マグネシウム（$MgCO_3$）	1.7
その化（結晶水等）	18.1

(2)　物質名

含水アルミナけい酸塩を主成分とする無機物質の集合体である。

分析結果報告書

依頼日；平成４年３月１日

試料名；竹花遺跡土器付着物

試料番号；１－CO。103。100。339

採取日；平成４年３月１日

付記；単位は乾燥重量比

試験項目	測定値	試験方法
ふっ素イオン（F－）	0.1＞wt%	イオンクロマト法
塩素イオン（Cl－）	0.8 wt%	イオンクロマト法
臭素イオン（Br－）	0.1＞wt%	イオンクロマト法
硝酸イオン（NO 3－）	0.1＞wt%	イオンクロマト法
硫酸イオン（SO4.2－）	0.1＞wt%	イオンクロマト法
ナトリウムイオン（Na＋）	0.6 wt%	イオンクロマト法
カリウムイオン（K＋）	0.8 wt%	イオンクロマト法
ケイ素（Si）	22.2 wt%	JIS K0101. 44. 3
アルミニウム（Al）	14.7 wt%	原子吸光光度法
カルシウム（Ca）	2.0 wt%	イオンクロマト法
マグネシウム（Mg）	0.5 wt%	イオンクロマト法
クロム（Cr）	0.1＞wt%	原子吸光光度法
鉛（Pb）	0.1＞wt%	原子吸光光度法
鉄（Fe）	0.3 wt%	原子吸光光度法
りん（P）	0.2 wt%	JIS K0102. 46. 3
強熱減量	18.0 wt%	JIS K0102. 14. 5

注）測定値に記号（＞）が付されたものは測定値下限以下（＜は上限超過）を示す

付編２

竹花遺跡第40号住居址出土炭化米の同定・計測結果報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

宮ノ反Ａ遺跡群竹花遺跡（小諸市大字御影新田竹花所在）は、繰矢川左岸の段丘状に立地する。

これまでの発掘調査により、古墳時代前期から奈良時代の竪穴住居址・掘立柱建物址などが検出されている。とくに平安時代の竪穴住居址（第40号住居址）のカマド付近から、炭化米が大量に検出された。炭化米は完形で保存の良いものが比較的多い。

今回、小諸市教育委員会により、検出された炭化米の計測に関する調査依頼があった。当社では、採取された試料中に炭化米以外の種類が含まれているか否かを調べるために種子同定を行い、併せて炭化米の形質の特徴を捉えるために、完形個体について大きさの計測を行った。

１．試　料

試料は、送付試料（５式）すべてを対象にして同定を行った。とくに炭化米については、保存が良いものについて大きさの計測を併せて行った。

２．分析方法

同定は肉眼あるいは双眼実体顕微鏡下で行った。測定は、破損が無くイネの胚乳の形質（楕円形で、胚の脱落した痕跡が明瞭に見られ、表面には数本の隆起構造がみられる）を明瞭にとどめているもの157個を選別して行った。計測は、ノギスを用いて長さ・幅・厚みについて測定した。

また、現生種との比較を行うために現代品種のひとつである「朝の光」（1992年秋、埼玉県北本市採取）の玄米についても同様に計測した。

３．結果および考察

同定の結果、全ての個体がイネの胚乳（炭化米）であり、他の種実は混入していなかった。なお、計測の結果については図１・２に示す。形状は多少ばらつきは見られるが、長さは4.3～4.4㎜、幅は2.6～3.0㎜、厚みは1.9㎜程度のものが多い。佐藤（1988）の分類によれば、そのほとんどが短粒で極小の範疇に入る。このような形状は一般的に栽培されている現生種の大きさに比べると明らかに小さいが、炭化の際に萎縮・変形を受けている可能性もあるので、一概には比較できない。

炭化米および今回測定した現生種について長さと幅の相関をみると、明らかに炭化米の方がば

らつきが大きい。これは、比熱時およびその後の経年変化による変形・萎縮などの影響によるものであろう。これらの形状は、長さについては明らかに炭化米の方が小さいが、幅については大きな変化は見られない。先にも述べたように、炭化の際の萎縮や変形も多少はあるだろうが、佐藤(1988)の結果などを考慮すると、当時の米は現在よりも多少小さく、丸みをおびていた可能性がある。なお、本遺跡に距離的に近い鋳物師屋遺跡でも炭化米が検出され、これに関する調査が行われている(氏原, 1988)。本遺跡のものと比較してみると、鋳物師屋遺跡の方が多少ばらつきが大きいものの、大きさや長さと幅の相関関係が類似する。このように2つの遺跡の炭化米の形状はよく一致し、類縁の種類の可能性もあるが、この点については推測の域を出ない。

〈引用文献〉

佐藤敏也 (1988) 弥生のイネ. 弥生文化の研究 2「生業」, p.97-111.,雄山閣.

氏原暉男 (1988) 鋳物師屋遺跡出土の炭化米について. 小諸市教育委員会 「鋳物師屋」, p.113-115.

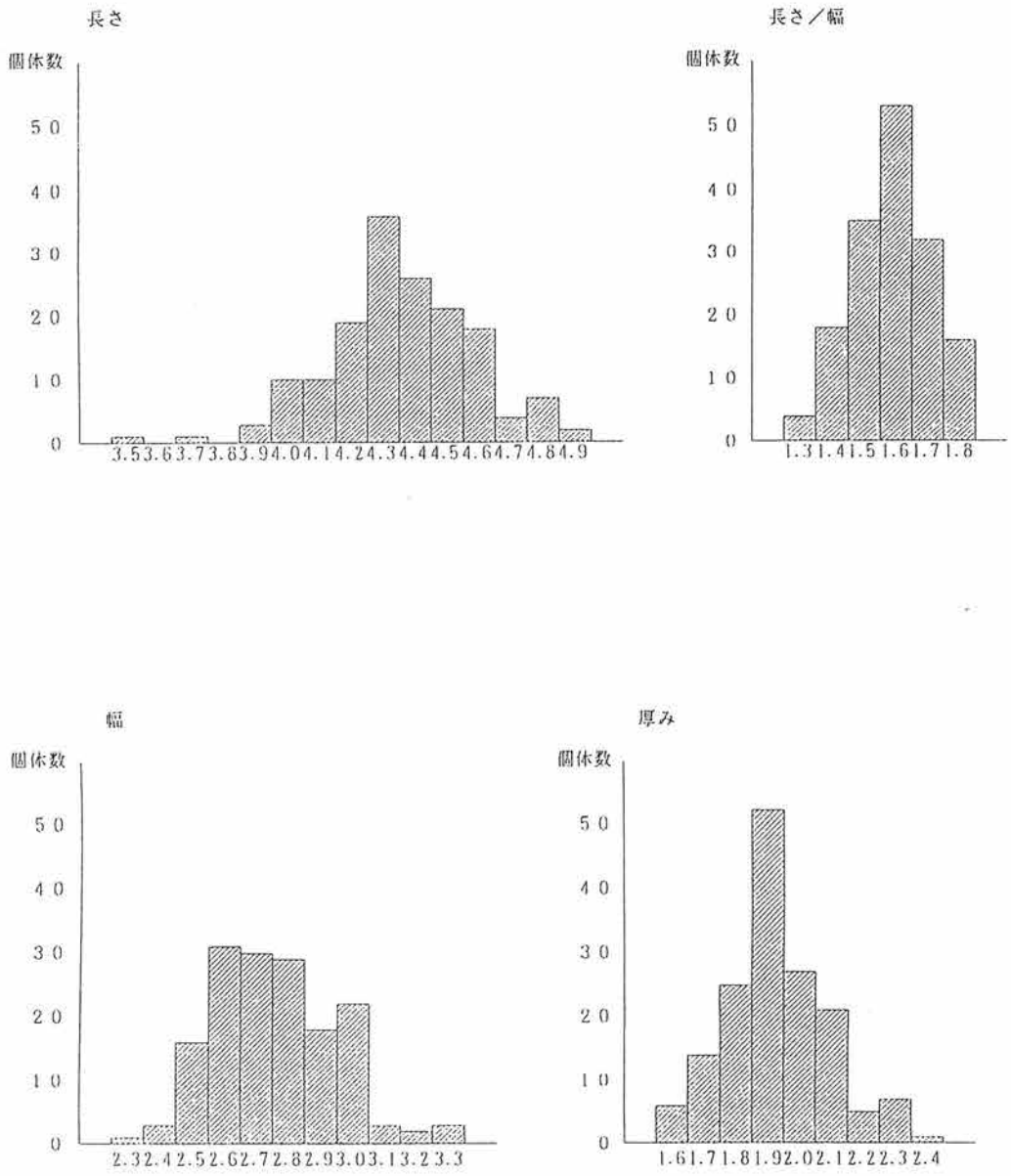
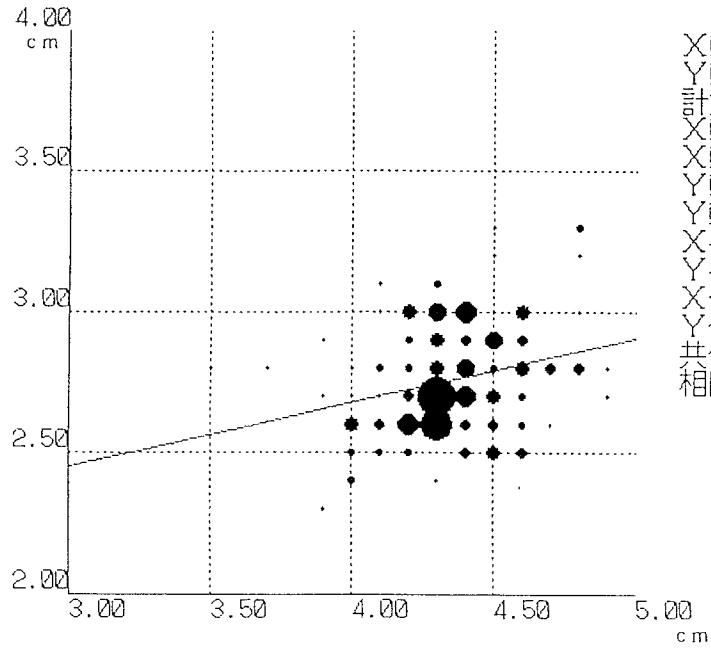


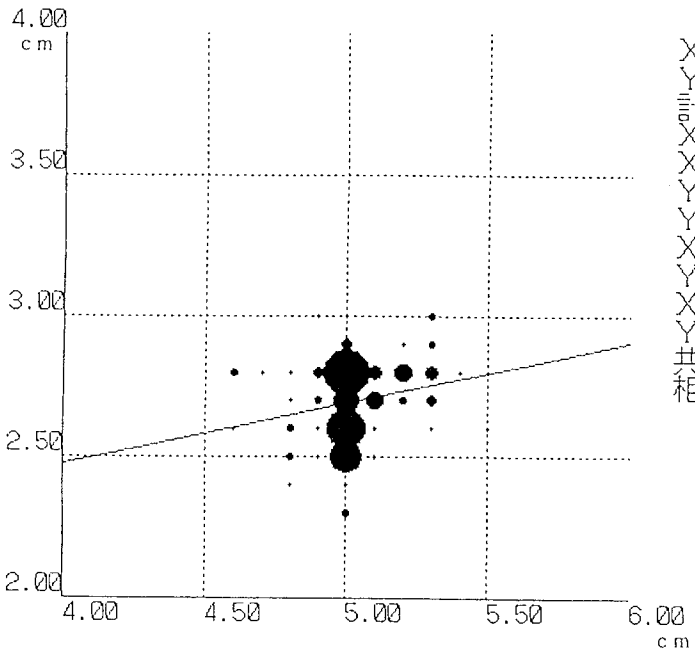
図1　炭化米の度数分布図

炭化米



X軸名称	長さ
Y軸名称	幅
計測数	158
X軸最大値	4.9
X軸最小値	3.5
Y軸最大値	3.3
Y軸最小値	2.3
X平均値	4.36
Y平均値	2.76
X分散	0.05
Y分散	0.04
共分散	0.01
相関系数	0.270

現生種（朝の光）



X軸名称	長さ
Y軸名称	幅
計測数	100
X軸最大値	5.5
X軸最小値	4.6
Y軸最大値	3.0
Y軸最小値	2.3
X平均値	5.04
Y平均値	2.70
X分散	0.03
Y分散	0.02
共分散	0.01
相関系数	0.253

図2　炭化米および現生種の相関図
上段が炭化米、下段が現生種を示す。図中の直線は回帰直線、●の大きさは同一な形状をもった個体数を示す。

付編３

大塚原遺跡第２号住居址出土の青色物質の素材について

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

大塚原遺跡（小諸市御影新田所在）は、千曲川の支流である繰矢川左岸の台地上に立地する。

これまでの発掘調査により、古墳時代～平安時代の集落址が確認されている。

今回の発掘調査により、平安時代に構築された住居址（第２号住居址）から青色物質が検出された。この青色物質は、住居床面から10cmほど上位で土器や礫などに付着せずに単独の状態で検出された。青色物質が本住居址に伴うものなのか現時点では不明である。

小諸市教育委員会では、検出された青色物質の素材を明らかにするために、当社に分析調査を依頼した。当社では、同教育委員会と分析調査に関する協議を行った結果、Ｘ線回折分析を行い、青色物質の素材を明らかにすることとした。

１．試料および分析方法

試料は、第２号住居址から出土した青色物質（試料名：Ｈ－２　No.９）である。試料を肉眼で観察したかぎりでは、日本画材などで用いられる岩顔料とされているものと類似している。

今回実施したＸ線回折分析では、青色物質の表面から針先でごく微量採取し、ガラス板状に固定して下記の条件で行った。試料は最小限に止めたため、回折された結果はガラスの線がブロード回折線で高く検出されている。しかし、試料の回折線はシャープなピークとして検出されるので、鉱物の同定は可能である。

―回折条件―

使用器種：理学電気㈱製ロータフレックス

電流：100mA，電圧：40kV，対陰極：Cu，スリット系：１°-１°-0.3mm，

回折速度：８°/min，時定数：2-70°--0.2sec，11-40°--0.1sec，

チャート速度：80mm/min，フルスケール：２-70°--4000，11-40°--2000.

―添付チャートの鉱物略号―

La：ラズライト，　Ne：霞石.

２．Ｘ線回折分析結果

青色物質は単一鉱物ではなく、ラズライトまたは藍方石を主とするラピス・ラズリと霞石の混合物の粉末と判断される。

試料が微量であるため、回折線は主に2θで20～30°の間に検出され、これ以外の区間における回折は微弱である。

確実に青色物質からの回折線と考えられるものを第1表に表示し、試料の回折線に対応する鉱物の主な回折線と比較して、第1図に図示した。

第1表および第1図でみられるように、標準的な回折線と試料の回折線の間にはわずかな差がみられ、低角側に0.12～0.15°シフトした関係にある。

回折線がシフトする原因は、1）ガラス板に塗布したために、2θがわずかに大きくなる，2）方ソーダ石族鉱物の化学組成の変化（固溶体）が考えられる。今回は微量の試料で分析を行っているため、ガラス板塗布による影響は0.05°以内と思われるので、参照鉱物との化学組成の違いによる影響の方が大きいと考えられる。このことについては、試料に微量の標準物質（例えば石英）を添加して再試験することにより確かめることができよう。

ここまでの段階では、もっとも回折線が近似するラズライトが青色物質である、不純物として霞石を伴うと判断し、原料物質はラピス・ラズリと推定した。

表1　試料および参照鉱物のX線回折線（資料以外は主な回折線）

青色物質（H-2 No.9）			藍方石		ラズライト		霞　石	
2θ	d(Å)	I/I_0	d(Å)	I/I_0	d(Å)	I/I_0	d(Å)	I/I_0
13.60	6.5	24	6.47	16	6.43	40		
19.35	4.58	20	4.55	4	4.54	18		
21.65	4.10	17					4.21	35
23.00	3.86	20					3.87	60
23.80	3.74	100	3.72	100	3.71	100		
28.28	3.15	90					3.294	40
29.32	3.04	48					3.027	100
30.85	2.90	28			2.87		2.905	35
33.92	2.64	20			2.62			

参照鉱物のデータ
藍方石（hauynite：JCPOS 20-1087）
ラズライト（lazurite：JCPOS 17-749）
霞石（nepheline：JCPOS 9-338）

3．X線回折で推定される鉱物について

・ラズライト（lazurite）

いわゆるラピス・ラズリ（lapis-lazuli）を構成する鉱物で、方ソーダ石族に属し、準長石類の一種に扱われている。肉眼的に青紫色を呈する美麗な鉱物で、標準的には（Na，Ca）$_8$（Si，Al）$_{12}$ O_{24}（（Na，Ca）$_8$（$AlSiO_4$）$_6$（S，SO_4，Cl）$_{1-2}$）の化学組成を有するが、天然にはCaやNaをKが置換したり、SをClが置換することがあり、方ソーダ石（sodalite $Na_4Al_3Si_3O_{12}Cl$）・ノゼアン（黝方石　nosean $Na_8Al_6Si_6O_{24}SO_4$）・藍方石（hauyne or hauynite（Na，Ca）$_8$（Si，Al）$_{12}O_{24}$（SO_4）$_2$）と一連のグループを作る。これらはいずれも青色の鉱物で、X線回折線試験では上記の4鉱物はいずれも等軸晶系で、類似した回折線を有する。分析試料の回折線は、ラズライトにもっとも近似した値を示し、次いで藍方石の回折線が近い値を示すが、他の2鉱物の回折線は異なった値を有している。この種の鉱物が顔料として利用された記録は少ない。E. S. Dana（1915）およびR. L. Bate and J. A. Jackson（1980）によると、ラズライトを主成分鉱物とする濃色のラピス・ラズリは装飾用材料、モザイク原料・貴石に用いられているほかに、粉末化して「ウルトラマリン」として顔料に使用され、耐久性が特徴となっている。現在の貴石としてのラピス・ラズリは、方ソーダ石または霞石を原料として人工的に合成されたものもある。

・霞石（nepheline）

代表的な準長石族の鉱物で、$Na_3KAl_4Si_4O_{16}$の化学組成を有する。霞石閃長岩や霞石玄武岩などの構成鉱物で、アルカリ火成岩類に限って産出する。わが国では山陰地方の玄武岩に含まれる。

ラピス・ラズリは霞石閃長岩中、あるいは特殊な接触交代鉱床やペグマタイト鉱床中に産出するが、わが国で産出した例を知られていない。おそらく未発見であろう。試料はラズライトと霞石の混合物となっていることから霞石閃長岩に伴って産出した可能性が高い。いずれの成因によるものにしても、試料となっている青色物質は海外から渡来したものと考えられる。

4．一般的な天然青色顔料鉱物について

天然の岩石・鉱物を砕いた青色顔料は一般に「岩群青」と呼ばれ、数種類ある。比較的知られているものは次の通りである。このうち藍銅鉱は日本画などの画材に用いられたようであるが、現在はほとんどコバルトを主材とした合成群青である。今回の分析で検討対象とした鉱物を掲げておく。

・銅藍　covellite CuS

六方晶系の鉱物で、非常に薄い薄片では透明～半透明で一軸性＋、多色性が顕著（青—白）。銅鉱床の酸化帯に産する。

・藍銅鉱　azurite Cu_3（OH）$_2$（CO_3）$_2$

単斜晶系で天青色である。透明～半透明で、薄片で淡青色～青色の多色性を有する。酸に溶解し、熱湯で分解する。銅鉱床の酸化帯に産する。青色顔料（岩群青）として多用された。

・ラピス・ラズリ　lapis-lazuli

数種の鉱物の混合物で構成される岩石で、鉱物名ではない。ラピス・ラズリを構成する主な鉱物は、藍方石（アウイン　hauyneまたはhauynite　$(Na, Ca)_8 (Si, Al)_{12}O_{24} (SO_4)_2$）・方ソーダ石(sodalite $Na_8(Al_6Si_6O_{24})Cl_2$)・ノゼアン(黝方石　nosean $Na_8Al_6Si_6O_{24}SO_4$)・ラズライト(la-zurite　$(Na, Ca)_8 (AlSiO_4)_6 (S, SO_4, Cl)_{1-2}$）の4種。主産地はアフガニスタン・シベリア・チリ・ビルマなどである。アフガニスタンを産地とするラピス・ラピリがもっとも有名で、紀元前3,500年から知られている。なお、ラピス・ラズリは1）ラズライトの古い鉱物名や2）インド産の青色蛇紋岩の岩石名に用いられたことがあるが、現在はこれらには使用しない。なお、ラズライト（lazurite）は天藍石（lazulite）とは別種の鉱物である。

・天藍石　lazulite　$(Mg, Fe) Al_2 (PO_4)_2 (OH)_2$

単斜晶系の鉱物でガラス光沢を有する青色の透明～半透明で、多色性が顕著である。高アルミナ含有の高度変成岩またはその中の石英脈に産する。古くから青色顔料として価値が認められていた。

・トルコ石　turquoise　$CuAl_6 (PO_4)_4 (OH)_8 \cdot 4H_2O$

三斜晶系の鉱物でスカイブルーのものがもっとも珍重される貴石である。高アルミナ火成岩の変質帯に産する。エジプト・ロシア・オーストラリアが主産地となっている。

5．総　括

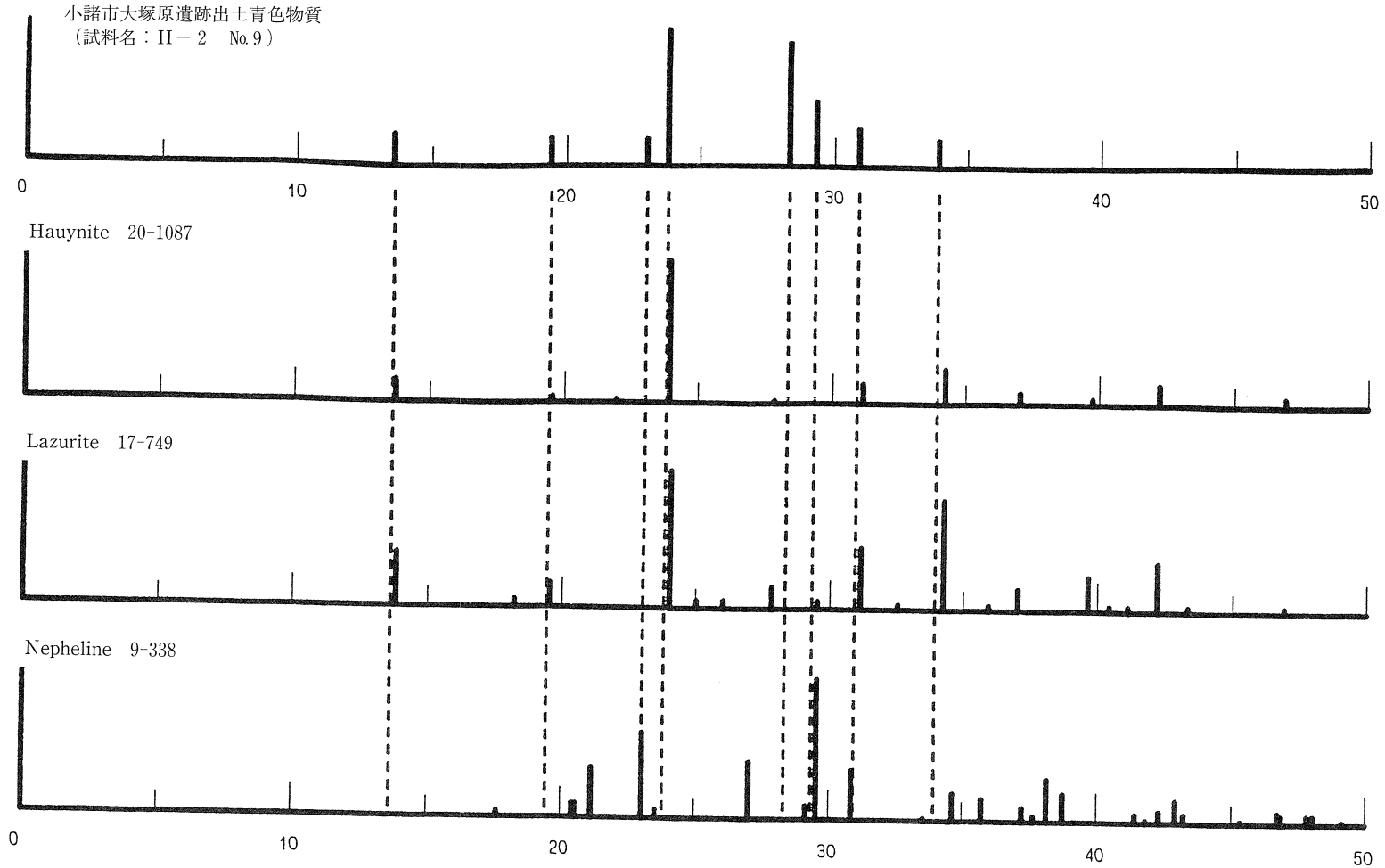
X線回折分析の結果、第2号住居址から検出された青色物質はラズライトに回折線が近似し、その原料物質はラピス・ラズリと推定された。とくにラピス・ラズリは、現時点で国内で産出された例は無い。主にアフガニスタンやシベリアなどが産地としてあげられる。したがって、本住居址から検出された青色物質は、国内で産出したものではないと考えられる。

青色物質が検出された第2号住居址は、平安時代に構築されたと考えられている。しかし、この時代に海外から青色物質が持ち込まれたと現時点で断定することは難しい。本物質が住居床面よりやや上位で検出されたことなどを考慮すれば、第2号住居址に伴うものではなく、平安時代以降のものとも推測できる。また、本物質が顔料として用いられたか否かについても、現時点では不明である。ここでは青色物質の素材を明らかにすることにとどめて、今後の発掘調査成果を考慮した上で、時代性や用途などについて慎重に検討するべきと考える。

〈参考文献〉

E. D. Dana,　1915,　Discriptive Mineralogy, John Wiley & Sons, Inc. London.

R. L. Bate and J. A. Jackson (Ed),　1980,　Glossary of Geology 2nd Edition, American Geological Institute, Virginia.



第1図　試料および参照鉱物のX線回折線

付編 4

土器に塗付された黒色物質の成分分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

大塚原遺跡と竹花遺跡では、これまでの発掘調査により古墳時代後期の集落が確認されている。とくに、大塚原遺跡の第5号住居址と竹花遺跡の第80号住居址からは、黒色物質が塗付された土器が検出された。発掘調査所見では、この黒色物質は漆ではないかと推測されている。

今回の分析調査では、土器に塗付された黒色物質の由来を明らかにするために、赤外分光分析（IR）による成分分析を実施することとした。

1．試　料

試料は、大塚原遺跡の第5号住居址（古墳時代後期）出土の椀形土器に塗付された黒色物質（試料名：KM20）と竹花遺跡の第80号住居址（古墳時代後期）から検出された杯に塗付された黒色物質（試料名：K4）である。これらの黒色物質は、発掘調査所見より漆と推測されていることから、今回は現代の漆原液を対照試料として、成分の比較検討を試みた。赤外分光分析の分析点数は合計3点である。

2．方　法

土器に塗付された黒色物質を削り、分析に供した。また、漆原液は、風乾処理後に得られる膜状固形物を分析に供した。なお、黒色物質の抽出は当社にて行ったが、極めて薄く塗付されているために、純粋に黒色物質のみを抽出することは困難であった。しかし、分析の際には黒色物質のみを極力抽出し、分析することにつとめた。

分析については、株式会社分析センターの協力を得た。赤外分光分析(IR)の装置等を以下に示す。

装　　置：島津製作所製　IR-460型.

測定範囲：4000～400cm^{-1}.

測定方法：KBrミクロ錠剤法.

3．結果および考察

標本試料とした漆原液の風乾物のIRスペクトルを図1に示すとともに、これに認められる特徴的な吸収ピークの帰属結果を表1に示す。また、椀型土器に塗付された黒色物質(試料名：KM20)

と杯に塗付された黒色物質（試料名：K４）のIRスペクトルを図２･図３に示すとともに、これに認められる特徴的な吸収ピークの帰属結果を表２に示す。この赤外分光分析結果に基づいて、黒色物質の由来について検討した。

表１．漆風乾物のIRスペクトル帰属結果

吸収ピークNo.*)	吸収波数(Cm^{-1})	推定される官能基
①	3400	O-H基
②	2900	C-H基(脂肪族アルキル基)
③	1730	C=O基（エステル結合）
④	1620	N—H基あるいはN-O基
⑤	1460	C--H基（脂肪族アルキル基）
⑥	1060	C-O基（水酸基）

*）図１のIRスペクトルに対応.

表２．KM 20およびK４のIRスペクトル帰属結果

吸収ピークNo.*)	吸収波数(Cm^{-1})	推定される官能基
①	3400	O—H基（水）
②	1630	C-H-C
③	1050	Si-O基（けい酸塩）
④	800	Si-O基（けい酸塩）
⑤	460	Si-O基（けい酸塩）

*）図２・３のIRスペクトルに対応.

試料名KM20とＫ４のIRスペクトルは、極めて類似していることから、これらの主成分はほぼ同様と考えられる。これらのIRスペクトルに最も強く認められた吸収は、Si－O基に起因していると考えられ、スペクトル全体の形状から無機けい酸塩化合物であることが考えられる。一方、漆風乾物に認められた吸収ピークは、黒色物質のIRスペクトル中に見出すことはできなかった。すなわち、KM20およびＫ４試料中に漆成分の存在を確認することはできなかった。

また、漆を加熱して炭化物を作り、その赤外分光分析結果とも比較したが、黒色物質との類似性は認められなかった。黒色物質中に検出された無機けい酸塩化合物は、一般的な土壌とIRスペクトルの形状と類似することから、試料を抽出する際に削られた土器の胎土に由来する可能性がある。

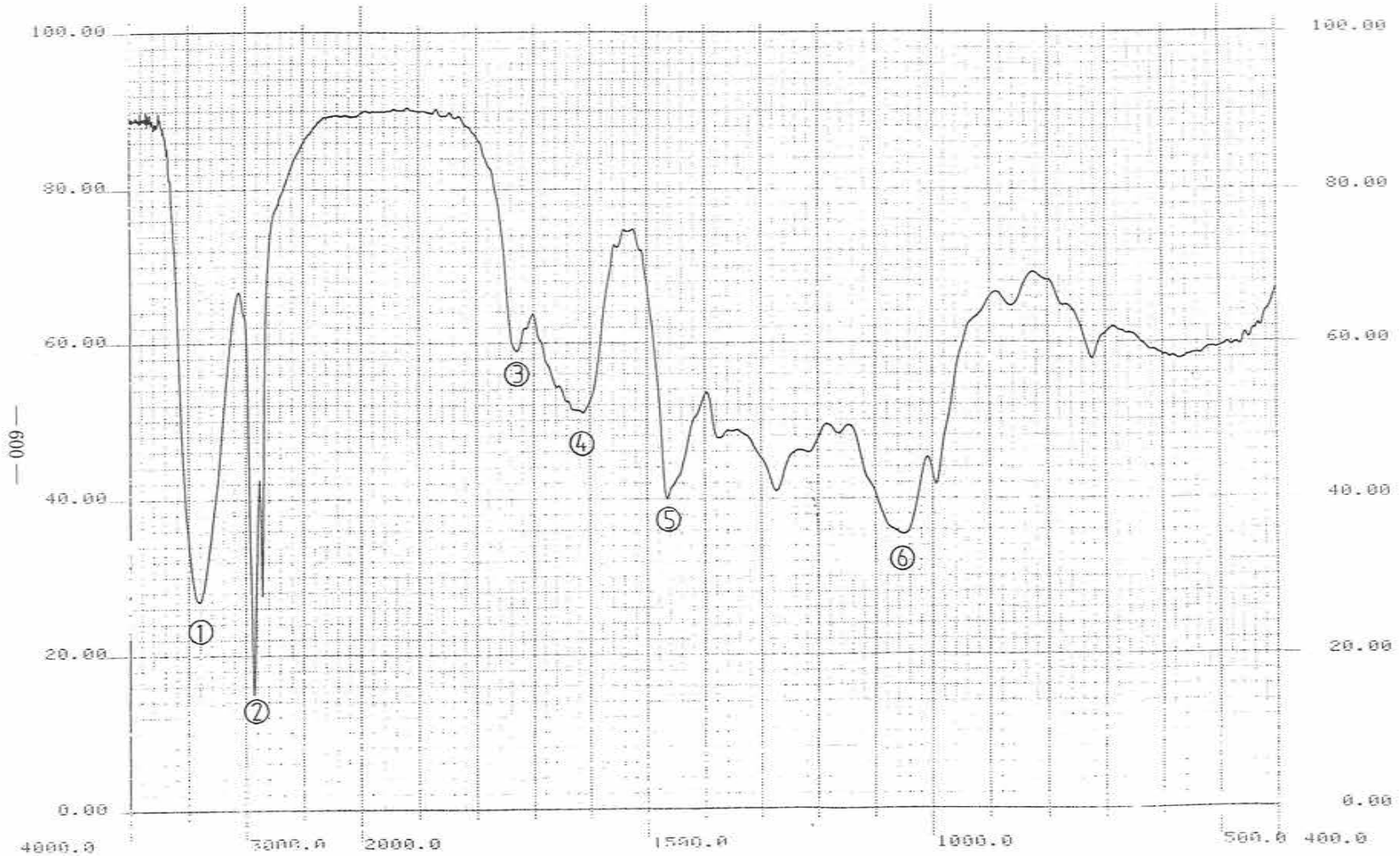


図1　漆風乾物の赤外吸収スペクトル

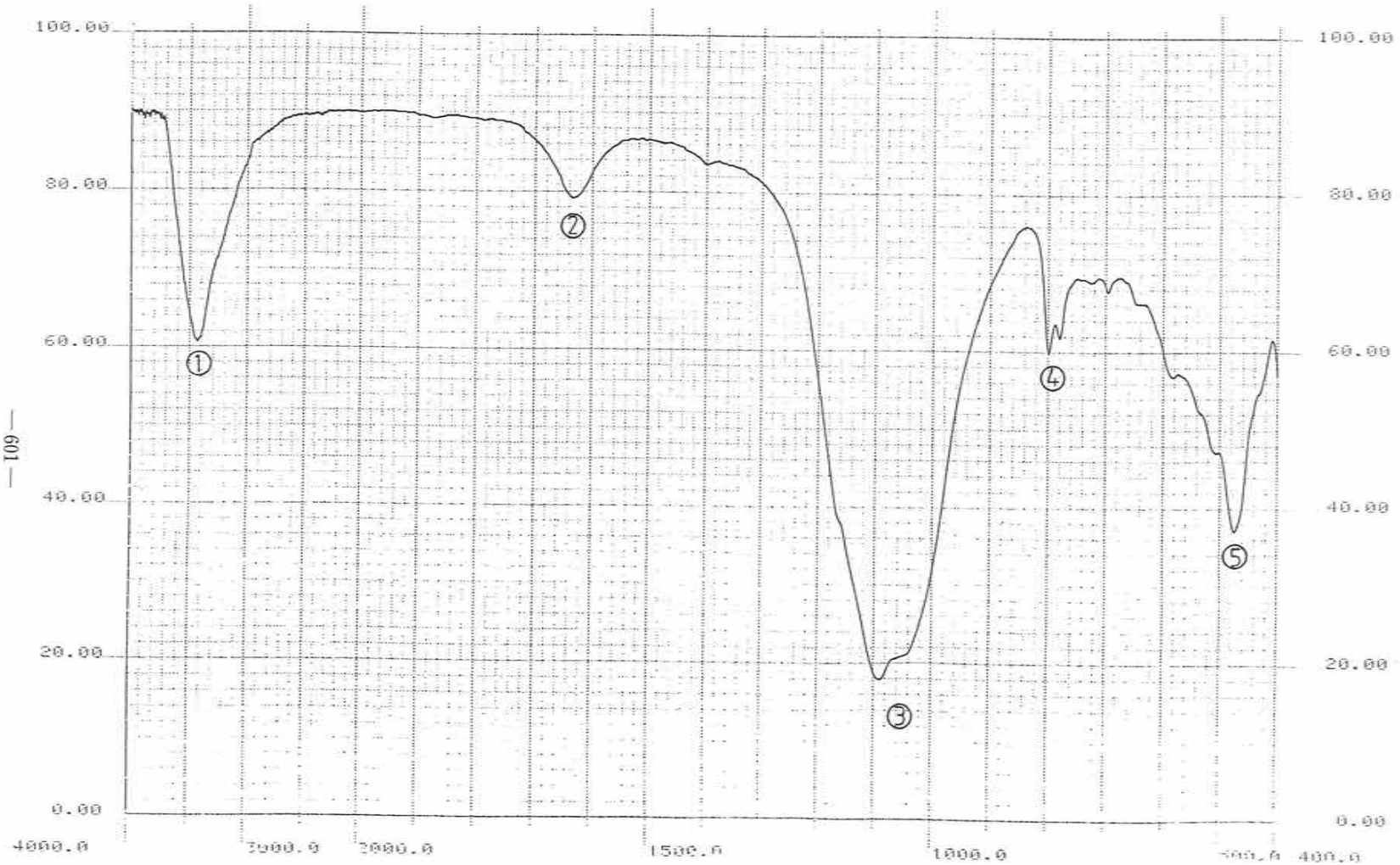


図2　KM20の赤外吸収スペクトル

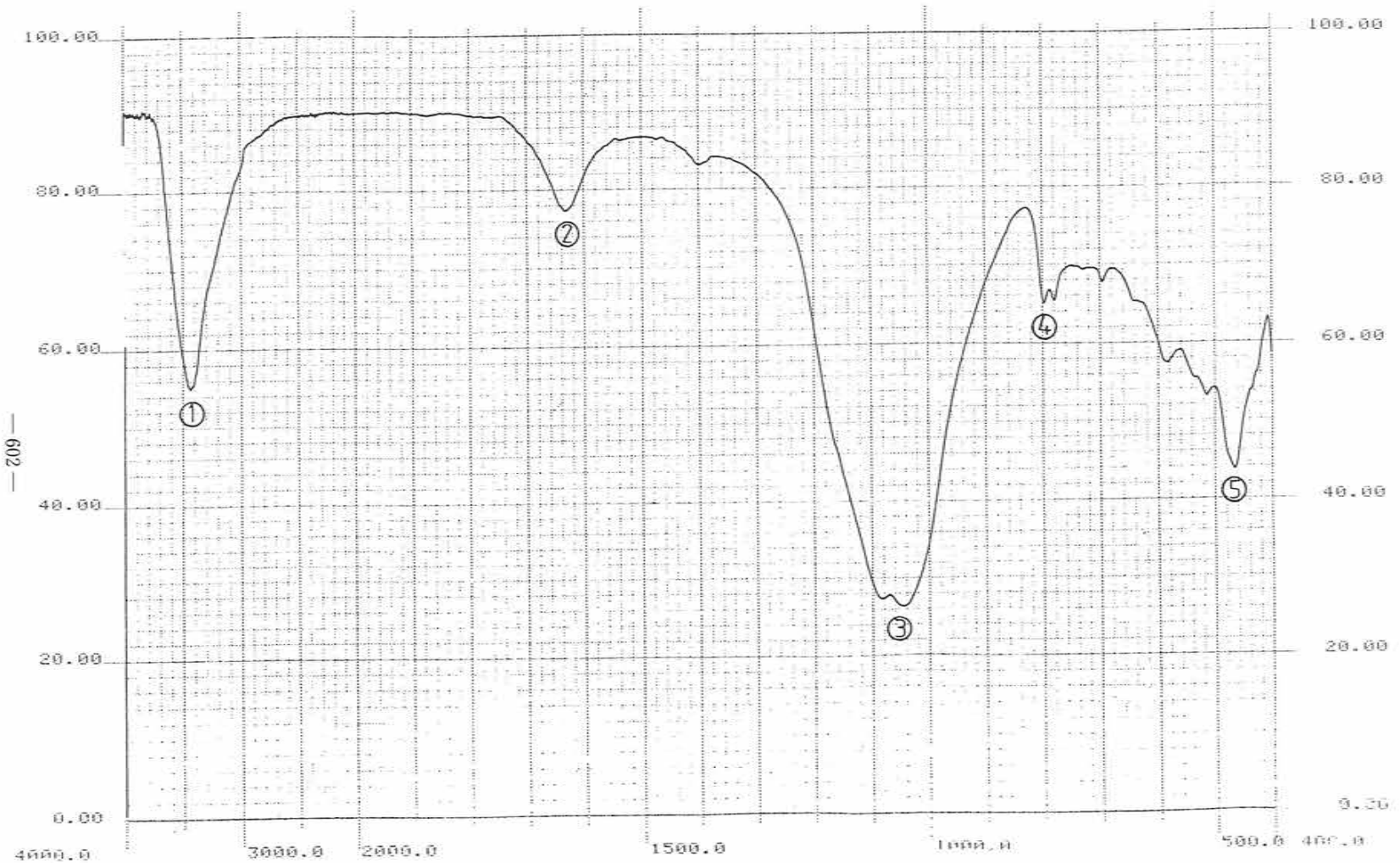


図3　K４の赤外吸収スペクトル

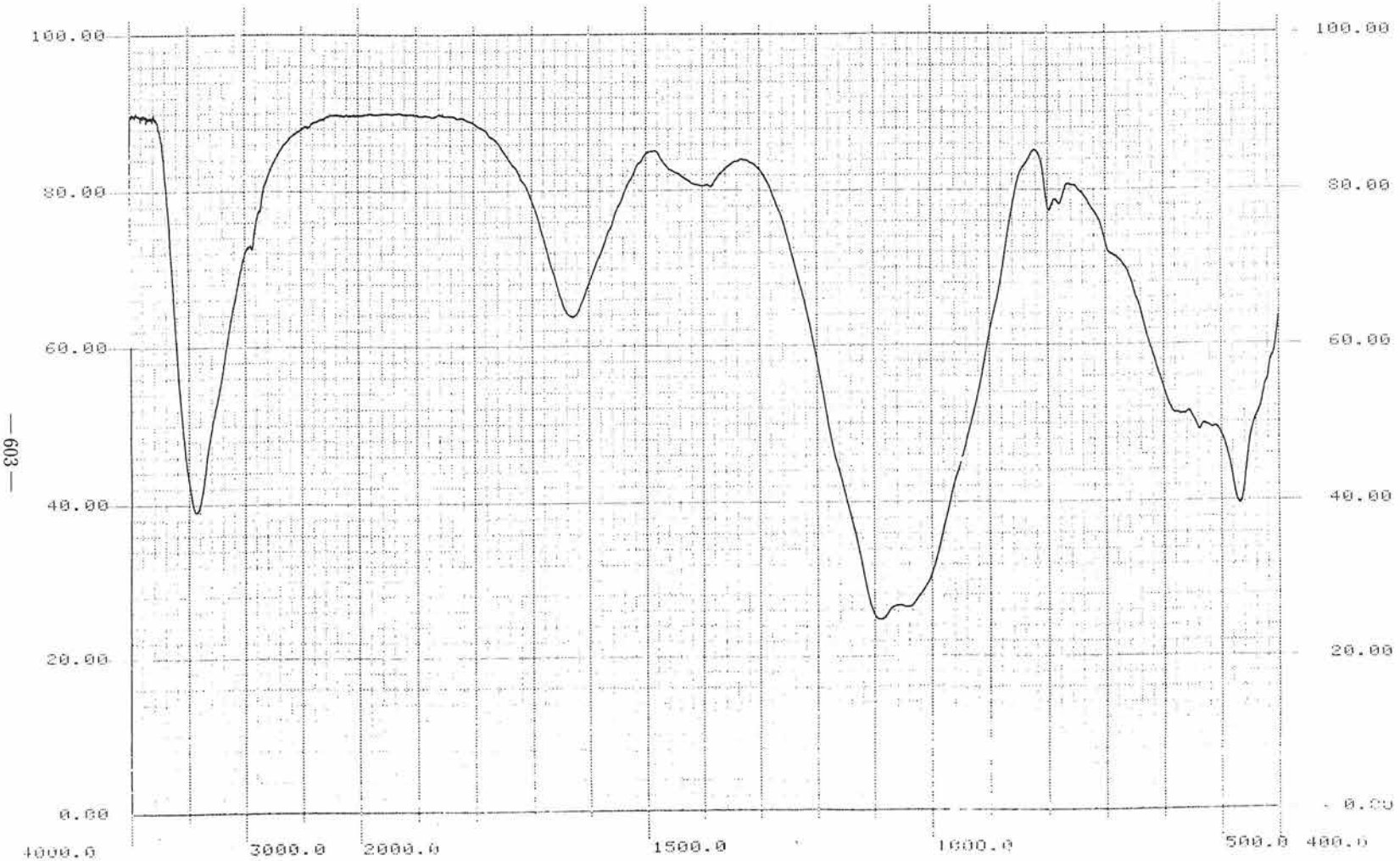


図4　土壌の赤外吸収スペクトル

付編5

大下原遺跡第8号住居址・竹花遺跡第4号住居址から検出された赤色物質の素材について

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

小諸市教育委員会より、大下原遺跡および竹花遺跡から出土した赤色物質の素材を明らかにするための分析調査依頼があった。今回の分析調査では、X線回折分析を応用し、赤色物質の素材を明らかにすることとした。

1．試　料

大下原遺跡（小諸市大字平原字大下原所在）と竹花遺跡（同市大字御影新田竹花所在）は、繰矢川左岸の段丘上に立地する。大下原遺跡では、古墳時代後期の集落址が確認され、第8号住居址床面直上から赤色物質が検出された。竹花遺跡は、古墳時代前期と平安時代の集落址が確認され、平安時代の第4号住居址から赤色物質が検出されている。両住居址の赤色物質は、いずれも土器などの遺物に付着した状態ではなく、単独で検出された。各試料名は、大下原遺跡の第8号住居址が「MOSII　H－8」、竹花遺跡の第4号住居址が「MSTH　H－4」である。

2．分析方法

（1）試料調製

試料には土壌がかなり混在していたので、純粋な赤色物質を数mg採取した。これをガラス板にすり付け、アセトン1滴を滴下して試料を固定した。

（2）測定

調製された試料について次の条件でX線回折分析を行った。なお、Scanning Rangeについては予備操作をしてピークの認められる部分だけで行った。

装置：島津制作所製XD－3A

Target：Cu（Kα）	Scanning Speed：2°／min
Filter：Ni	Chart Speed：2 cm／min
Voltage：30KVP	Divergency：1°
Current：30mA	Recieving Slit：0.3㎜
Count Full Scale：5,000C/S	Scanning Range：5～45°
Time Constant：1.0sec	

（3）同定

測定された回折線の回折角度、原子面間隔および相対強度を計算し、それに該当する化合物または鉱物をX線粉末回折線総合解析プログラム（五十嵐，未公表）により検索した。

3．結果および考察

X線回折チャートと検出鉱物を図1・2に示す。主要ピークは、両試料とも33.1、35.6、24.1、40.8°であり、予測される鉱物はヘマタイト（hematite；Fe_2O_3）だけである（図3）。したがって、両赤色物質ともに素材はヘマタイトを主成分とするベンガラと判断される。また、大下原遺跡の赤色物質（試料名：MOSII　H－8）は回折線のピークが明瞭に表れることから、かなり結晶度の良いベンガラであると判断できる。一方、竹花遺跡の赤色物質（試料名：MSTH　H－4）は回折線のピークの表れ方が明瞭でないことから、結晶度の悪いベンガラであると判断できる。この原因については、経年による保存状態も考慮しておくことが必要である。

〈引用文献〉

足立吟也（1980）6章粉末X線回折法．機器分析のてびき3，p.64-76，化学同人．

日本粘土学会編（1987）粘土ハンドブック第二版．1289p.，技報堂出版．

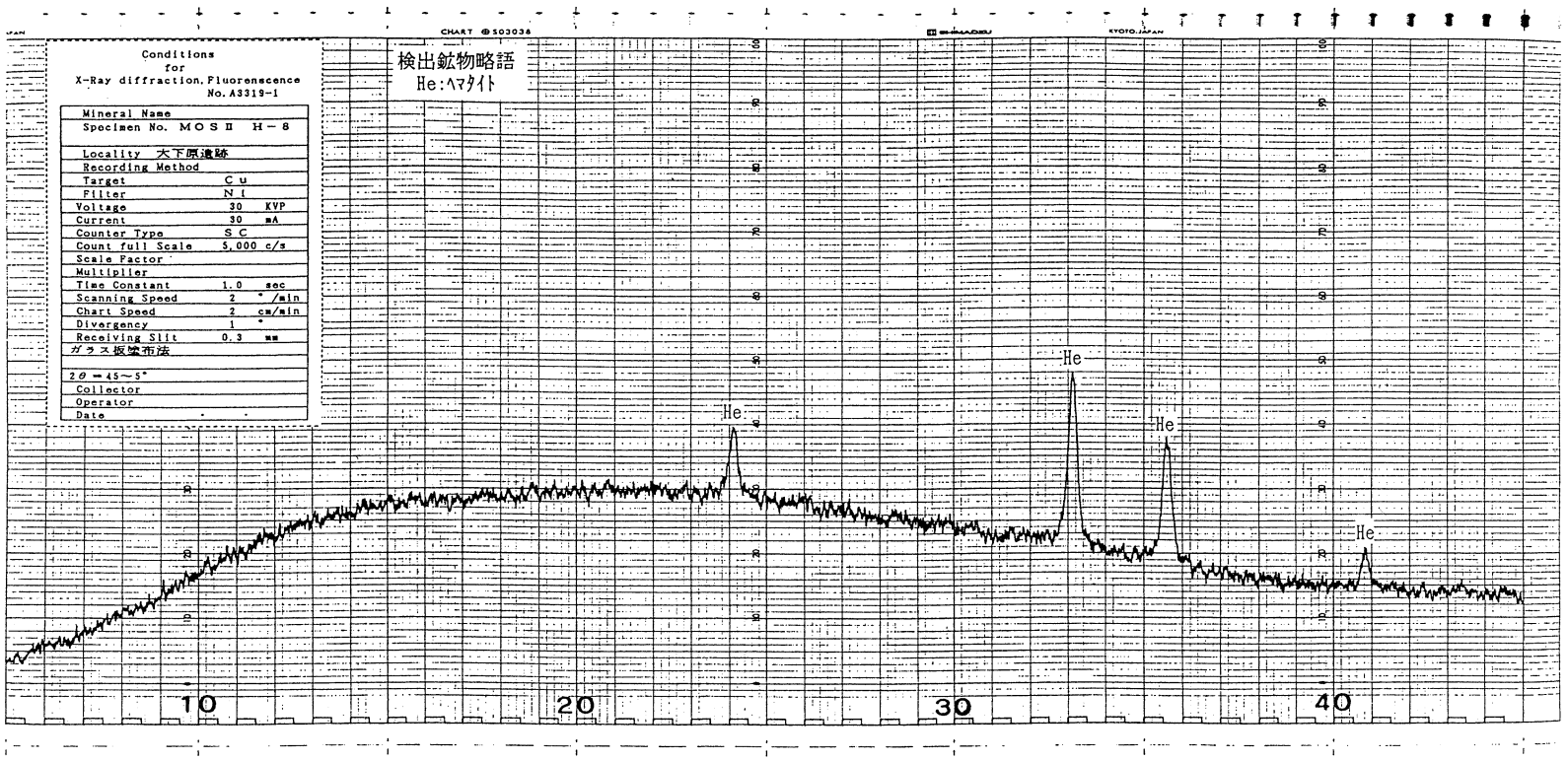


図１　大下原遺跡（MOSII　H－８試料）のX線回折チャートと検出鉱物

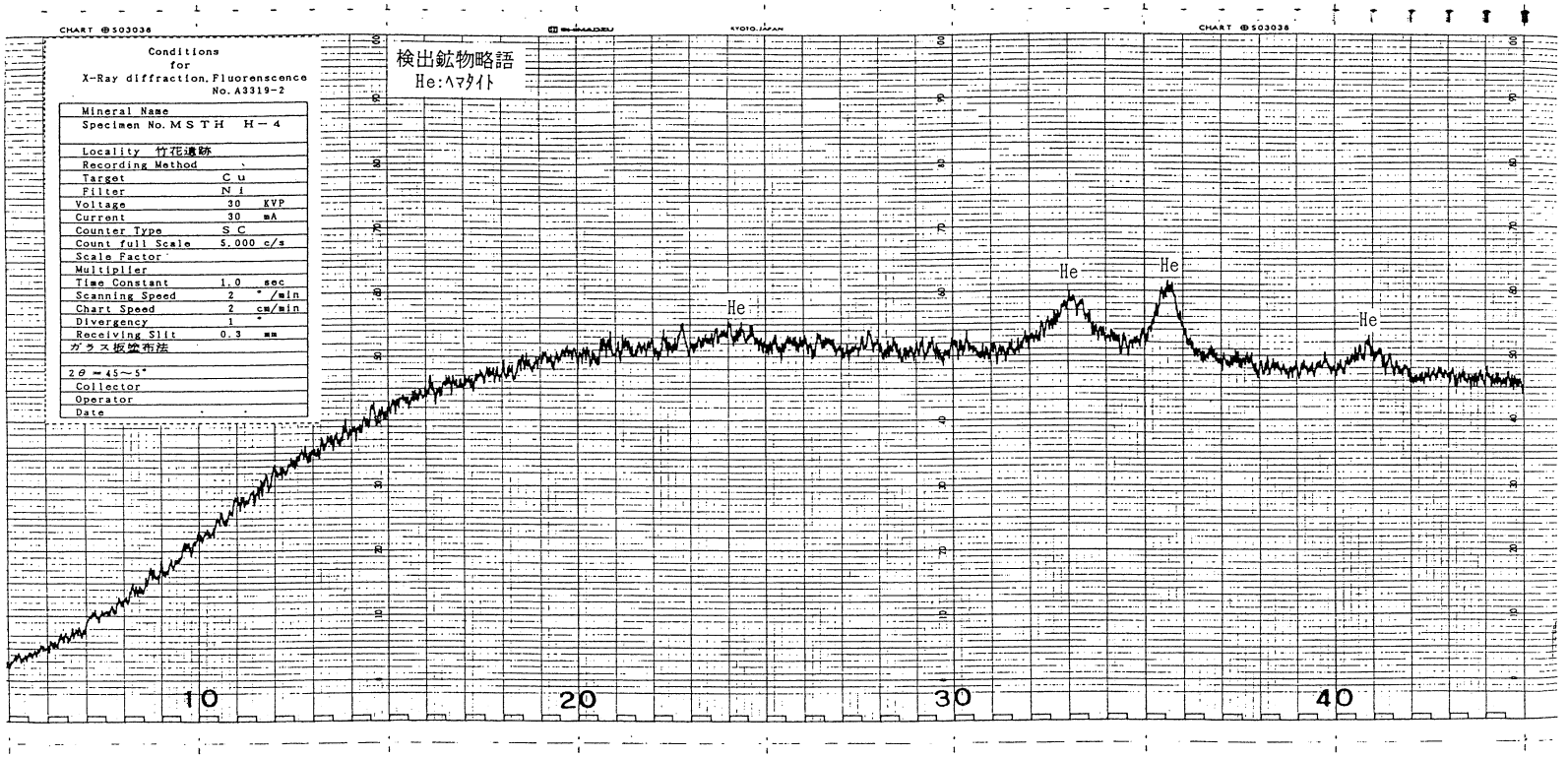


図２　竹花遺跡（MSTH　H－４試料）のX線回折チャートと検出鉱物

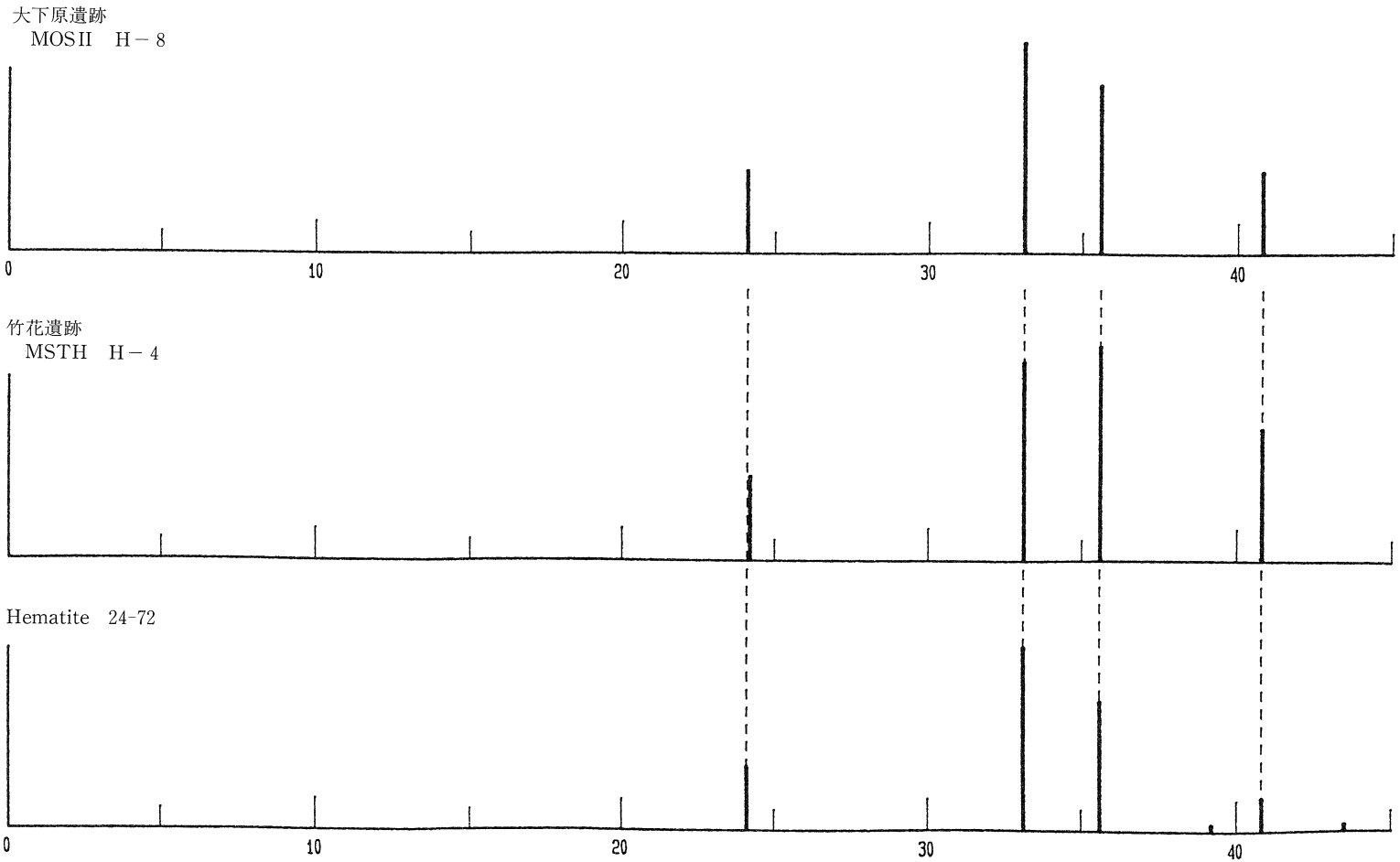

大下原遺跡
MOSII　H－8
0
10
20
30
40
竹花遺跡
MSTH　H－4
Hematite　24-72
0
10
20
30
40

図3　同定グラフ

付編6

竹花遺跡・大塚原遺跡出土動物遺体の種類

早稲田大学　金子浩昌

1．試　料

試料は、古墳時代中期～奈良・平安時代の住居跡（竹花遺跡：H－10・14・16・22・32・37・44・46・47・49・53・59・63・66・67・71・78・83・85・109；大塚原遺跡：H－5）、掘立柱建物跡（竹花遺跡：ST－28）から検出された獣骨片と奈良時代の土坑（竹花遺跡：第2号土坑・第3号土坑・第4号土坑）から検出された骨片・貝片である（表1）。

2．同定結果

（1）竹花遺跡

a．獣骨

・ウマ　Equus caballus

試料名：H－47 No.5：左右下顎骨

現存する標本は遊離した歯とかなり破損した顎骨からなるが、元は左右の完存した下顎骨が埋存していたものと思われる。

乳切歯右側ｉ1，乳切歯左側ｉ1．2と切歯ｌ1，2。乳臼歯dm2・3、萌出した直後のＰ4，Ｐ3と未萌出のＰ2，3、Ｍ2，3がついていた顎骨である。

歯の萌出状況から年齢は3歳から4歳であり、性別は雌であろう。

試料名：H－67　S：右側上顎臼歯Ｐ3

試料名：H－67　N：右側上顎臼歯Ｐ4

試料名：H－109　S：左側上顎臼歯Ｍ1

試料名：ST－28　Ｐ1：左側下顎臼歯Ｍ1

試料名：H－46　S：左側下顎臼歯Ｍ2

試料名：H－63　No.6：左側下顎臼歯Ｍ3

試料名：H－49　No.2：左側下顎臼歯Ｍ2

試料名：H－22　No.2：右側下顎臼歯Ｐ4

試料名：H－49　No.6：右側下顎臼歯Ｐ4

試料名：H－67　No.6：右側下顎臼歯Ｍ2，3

・ウシ　Bos taurus

試料名：H－49　N：左側上顎前臼歯Ｐ3

試料名：H－65　N：左側上顎臼歯M２

試料名：H－63　S：左側上顎臼歯M３

咬耗は初期段階で、年齢は２歳前後と考えられる。

試料名：H－67　４：左側下顎前臼歯P４

試料名：H－67　S：左側下顎臼歯M２，３

「H－67　４」と「H－67　S」の下顎歯は同一個体のもので、M３の咬耗の進んだ老年ウシである。

試料名：H－85：左側下顎臼歯M３　破片

・イノシシ　Sus scrofa

試料名：H－14　No.１：左側下顎切歯I2

試料名：H－14　No.１：雄の左側下顎犬歯　破損。若い個体のものと思われる。

・ニホンジカ　Cervus nipon

試料名：H－85：左側鹿角部分（第二枝）

試料名：H－85：末節骨。火を受けて灰白色を呈している。

・ヒト　Homo sapiens

試料名：４号土坑：大腿骨部分

・その他の獣骨破片

試料名：H－44　カマド：焼骨片（肩甲骨片）

試料名：H－47：黒く焼けた獣骨片

試料名：H－63　カマド：灰白色に焼けた骨片

試料名：H－85：ウシの下顎骨片。H－67　Sの歯に付くものと思われる。

試料名：２号土坑　No.１：ウシ、ウマ破片

試料名：３号土坑：ウシ、ウマ椎骨破片

b．魚類

試料名：H－59　N：カジキ類椎体片

c．貝類

試料名：３号土坑：マルタニシ　Cipangopuludina chinensis malleata

現在数えられる個数20。完存する標本はないが、埋存していたときは完存する標本も多かったと思われる。殻高60㎜位を最高に大小の殻がみられた。

（２）大塚原遺跡

a．ウシ　Bos taurus

資料名：H－５　V　No.６：未萌出歯の破片

3．竹花遺跡・大塚原遺跡の動物遺体について

・獣類

a．ウマ

遊離した歯、下顎骨などがあり、標本の数はもっとも多い。先ず、「H－47　No.5」の下顎骨であるが、平安時代の住居跡から検出された。年齢は3歳から4歳未満の若い個体の下顎骨であり、これ1個のみがあったことになる。埋存時にはおそらく完存する状態であったのであろう。若しこの下顎骨が住居と何らかの関係があったとすれば、この下顎骨にも意味があったものなのであろう。祭祀的な目的のために使われたことは充分考えられる。ただ、このような解体された顎骨をみていると、殺牛殺馬の習俗といっても実際はこのような解体された骨の一部がその都度使われたのが実情ではなかったろうか。

他に遊離した歯があるが、それらも祭祀に使われていたものの一部ではなかろうか。本遺跡のウマは少なくとも3個体はあったとみられる。

これらの馬歯をもつウマの大きさであるが、歯のみからはからだの大きさを推定することは難しいが、おそらく日本在来馬の中型あるいはやや小さい個体であったろう。

b．ウシ

ウマに比べると少ない。H－67の下顎臼歯には骨体の一部が残されており、上述のウマの下顎骨と同じ扱い方をされたものであろう。上顎歯があるところから、頭蓋骨があったことも考えられる。それぞれ別個体のものであり、2個体もしくは3個体はあったと考えられる。

c．イノシシとニホンジカ

狩猟獣であろう。イノシシの犬歯やニホンジカの角片が出土しているのは、これらの部分が道具の一部として使われていたことを示すのであろう。また、カマド中から焼骨が出土しているが、骨を割り調理していた際に骨片が火中に落ちたのではないかと思われる。

・魚類

カジキマグロ類の椎骨であるが、出土例としても珍しいものである。

・貝類

マルタニシが一括して出土している。本遺跡近くの池沼で採られたものであろう。内陸部の遺跡で、こうした貝種がまとまって出土する例を幾つか見ているが、貝塚を形成する程に大量のものが集められていることはないようである。つまり食用としては数が少ないように思われる。このような収集と埋め込みは、何か別の目的があったのではないかと思われる。例えば祭祀的な意味がなかったであろうか。

表１　竹花遺跡・大塚原遺跡出土動物遺体の同定結果

遺跡名	試料名	時代性	同定結果	個数
竹花遺跡	H-10 N	平安時代	ウシもしくはウマの骨片	2
	H-14 No.1	古墳時代後期	イノシシ雄の左側下顎犬歯破片	1
			イノシシ左側下顎切歯I 2	1
			ウシもしくはウマの骨片	多数
	H-14 カマド	古墳時代後期	ウシもしくはウマの骨片	5
	H-16 No.3	奈良時代	ウシもしくはウマの骨片	多数
	H-22 No.2	平安時代	ウマ右側下顎臼歯P 4	1
	H-32	平安時代	ウシもしくはウマの骨片	3
	H-37 トレンチ	古墳時代後期	ウシもしくはウマの骨片	9
	H-44 カマド	古墳時代後期	肩甲骨片	1
	H-46 S	平安時代	ウマ左側下顎臼歯M 2	1
	H-47	平安時代	黒く焼けた獣骨片	5
	H-47 No.4	平安時代	ウシもしくはウマの骨片	多数
	H-47 No.5	平安時代	ウマ下顎骨片	10
			ウマ右側乳切歯i 1	1
			ウマ左側乳切歯i 1	1
			ウマ左側乳切歯i 2	1
			ウマ切歯I 1	1
			ウマ切歯I 2	1
			ウマ乳切歯dm 2	1
			ウマ乳切歯dm 3	1
			ウマ臼歯P 3	1
			ウマ臼歯P 3	1
			ウマ未萌出臼歯P 2	1
			ウマ未萌出臼歯P 3	1
			ウマ未萌出臼歯M 2	1
			ウマ未萌出臼歯M 3	1
			ウマ下顎骨片（歯の一部もあり）	多数
	H-49 No.2	平安時代	ウマ右側下顎臼歯P 4	1
			ウシもしくはウマの骨片	3
	H-49 No.6	平安時代	ウマ右側下顎臼歯P 4	1
	H-49 N	平安時代	ウシ左側上顎前臼歯P 3	1
	H-53 カマドNo.1	平安時代	ウシもしくはウマの骨片	6
	H-53	平安時代	ウシもしくはウマの骨片	4
	H-53 No.4	古墳時代後期	ウシもしくはウマの骨片	多数
	H-59 N	平安時代前期	カジキ類椎体片	1
	H-63 No.6	奈良時代	ウマ左側下顎臼歯P 4	1
	H-63 カマド	奈良時代	焼けている骨片	1
	H-63 S	奈良時代	ウシ左側上顎臼歯M 3	1
	H-65 N	古墳時代後期	ウシ左側上顎臼歯M 2	1
	H-66 No.6	古墳時代後期	ウシもしくはウマの骨片	多数
	H-67 No.4	奈良時代	ウシ左側下顎前臼歯P 4	1
			ウシもしくはウマの骨片	多数
	H-67 No.6	奈良時代	ウシ右側下顎臼歯M 2	1
			ウシ右側下顎臼歯M 3	1
			ウシもしくはウマの骨片	12
	H-67 N	奈良時代	ウマ右側上顎臼歯P 4	1
	H-67 S	奈良時代	ウマ右側上顎臼歯P 3	1
			ウシ左側下顎臼歯M 2	1
			ウシ左側下顎臼歯M 3	1
	H-71	古墳時代後期～奈良時代	ウシもしくはウマの骨片	4
	H-78 No.5	平安時代	ウシもしくはウマの骨切	4
	H-83	奈良時代	ウシもしくはウマの骨切	2
	H-85	古墳時代後期	ウシ左側下顎臼歯M 3 の破片	1
			ニホンジカ左側鹿角部分	1
			ニホンジカ末節骨片	1
			ウシもしくはウマの骨片	3
	H-109 S	平安時代前期	ウマ左側上顎臼歯M 1	1
	ST-28 P_1	奈良時代	ウマ左側下顎臼歯M 1	1
			ウシもしくはウマの骨片	2
	第２号土坑No.1	奈良時代	ウシもしくはウマの骨片	9
	第３号土坑	奈良時代	ウシもしくはウマの椎骨破片	1
			ウシもしくはウマの骨片	2
			マルタニシ	多数
	第４号土坑	奈良時代（８世紀前半）	ヒト大腿骨	1
大塚原遺跡	H-5 No.6	古墳時代後期	ウシ未萌出歯の破片	2

付編７

過去の植物利用について

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

佐久盆地では、これまでにも縄文時代から奈良・平安時代までの住居跡から検出されており、主として炭化材を対象とした調査から、過去の植物利用について検討が行われてきた（パリノ・サーヴェイ株式会社，1988ａ，1988ｂ，1989ａ，1989ｂ，1989ｃ，1991，1992，1993，1994ａ，1994ｂ）。その結果、各時代とも住居構築材にコナラ節やクヌギ節などの木材を多用していたらしいことが明らかとなってきている。今回の調査では、東下原遺跡、大下原遺跡、竹花遺跡、舟窪遺跡、大塚原遺跡の各遺構から検出された炭化材、種子、灰化物の分析・同定を通じて、過去の植物利用に関する検討を行う。

１．住居構築材・燃料材の用材選択

（１）試料

試料は、東下原遺跡、大下原遺跡、竹花遺跡、舟窪遺跡、大塚原遺跡の住居跡から検出された、構築材や燃料材と考えられる炭化材97点である。このうち、試料番号が付されていない試料が、竹花遺跡と舟窪遺跡にそれぞれ１点ずつ認められた。２点の試料については、各遺跡の最後の試料番号にダッシュ（'）を付したものを試料番号とした。なお、各試料の詳細は同定結果とともに表１に示した。

（２）方法

試料を乾燥させたのち、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の割断面を作製し、走査型電子顕微鏡（無蒸着・反射電子検出型）で観察・同定した。

（３）結果

同定結果を表１に示す。試料のうち、No.85は骨、No.92は種子であった。そのため、樹種同定試料からは外し、種子は後述する種子同定試料に含めた。また、樹種の特定には至らなかった５点の試料については、広葉樹（環孔材）（No.30，47）、広葉樹（散孔材）（No.53，91'）、不明（No.101）とした。その他の試料は、針葉樹１種類（カラマツまたはトウヒ属の一種）、広葉樹12種類（オニグルミ、カバノキ属の一種、アサダ、コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種、コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種、クリ、エノキ属の一種、カツラ、サクラ属サクラ亜属の一種、カエデ属の一種、エゴノキ属の一種、トネリコ属の一種）とイネ科タケ亜科の一種が同定された。この中には、１試料中に複数の種類が含まれていたものがあるが、それらは試料番号に小文字のアルファベットを付して表記した。

表1　樹種同定結果(1)

番号	遺跡名	遺構	時代	用途	樹種名
1	東下原遺跡	SB 02 P_2	古墳時代後期	構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種
2		S	古墳時代後期	構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種
4	大下原遺跡	SB 01 カマド	古墳時代後期	燃料材	カツラ
5		SB 01 C-1	古墳時代後期	構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
6		SB 01 C-2	古墳時代後期	構築材	イネ科タケ亜科の一種
7		SB 01 C-3	古墳時代後期	構築材	イネ科タケ亜科の一種
8		SB 01 C-4	古墳時代後期	構築材	イネ科タケ亜科の一種
9		SB 01 C-5	古墳時代後期	構築材	イネ科タケ亜科の一種
10		SB 01 C-6	古墳時代後期	構築材	イネ科タケ亜科の一種
11		SB 01 C-7	古墳時代後期	構築材	イネ科タケ亜科の一種
12		SB 08 カマド	古墳時代後期	燃料材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種
13		SB 09 カマド	古墳時代後期後半～奈良時代	燃料材	トネリコ属の一種
14		SB 13 カマド	古墳時代後期	燃料材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
15	竹花遺跡	SB 01 No.1	古墳時代中期	構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種
16		SB 01 No.2	古墳時代中期	構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
17		SB 01 No.3	古墳時代中期	構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
19		SB 05 P_3	奈良時代後葉～平安時代	構築材	クリ
20		SB 06 炉	古墳時代中期	燃料材	エノキ属の一種
21		SB 06 P_1	古墳時代中期	構築材	カバノキ属の一種
22		SB 07 カマド	奈良時代	燃料材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
23 a		SB 11 カマドNo.1	平安時代	燃料材	カラマツまたはトウヒ属の一種
23 b		SB 11 カマドNo.1	平安時代	燃料材	クリ
23 c		SB 11 カマドNo.1	平安時代	燃料材	エゴノキ属の一種
25		SB 35 No.1	古墳時代初頭	構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
26		SB 35 No.2	古墳時代初頭	構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
27		SB 35 No.3	古墳時代初頭	構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
28		SB 35 No.4	古墳時代初頭	構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
29		SB 35 No.5	古墳時代初頭	構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
30		SB 35 No.6	古墳時代初頭	構築材	広葉樹（環孔材）
31		SB 35 No.7	古墳時代初頭	構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
32		SB 35 No.8	古墳時代初頭	構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
33		SB 35 No.9	古墳時代初頭	構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
34		SB 35 No.10	古墳時代初頭	構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
35		SB 35 No.11	古墳時代初頭	構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
36		SB 35 No.12	古墳時代初頭	構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
37		SB 38 No.1	古墳時代後期	構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
38		SB 44 No.2	古墳時代後期	構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
39		SB 44 P_2	古墳時代後期	構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
40		SB 47 No.3	平安時代	構築材	イネ科タケ亜科の一種
44		SB 60 No.1	古墳時代後期	構築材	クリ
47		SB 66 No.5	古墳時代後期	構築材	広葉樹（環孔材）
48		SB 67 No.1	奈良時代	構築材	イネ科タケ亜科の一種
49		SB 70 No.1	古墳時代後期	構築材	イネ科タケ亜科の一種
50		SB 70 No.2	古墳時代後期	構築材	イネ科タケ亜科の一種
51		SB 70 No.3	古墳時代後期	構築材	イネ科タケ亜科の一種
53		SB 74 カマド	平安時代	燃料材	広葉樹（散孔材）
54		SB 77 No.1	古墳時代後期	構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
55		SB 77 No.2	古墳時代後期	構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
56		SB 77 No.3	古墳時代後期	構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
57		SB 77 No.4	古墳時代後期	構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
58		SB 77 No.5	古墳時代後期	構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種
59		SB 77 No.6	古墳時代後期	構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
60		SB 77 No.7	古墳時代後期	構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
61		SB 77 No.8	古墳時代後期	構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
62		SB 77 No.9	古墳時代後期	構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
63		SB 77 No.10	古墳時代後期	構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
64		SB 77 No.11	古墳時代後期	構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
65		SB 77 No.12	古墳時代後期	構築材	イネ科タケ亜科の一種
66		SB 77 No.13	古墳時代後期	構築材	イネ科タケ亜科の一種
67		SB 80 No.1	古墳時代後期	構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
68		SB 80 No.2	古墳時代後期	構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
69		SB 80 No.3	古墳時代後期	構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
70		SB 80 No.4	古墳時代後期	構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
71		SB 80 No.5	古墳時代後期	構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
72		SB 80 No.6	古墳時代後期	構築材	イネ科タケ亜科の一種
73		SB 80 No.7	古墳時代後期	構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種

表1　樹種同定結果(2)

74	竹花遺跡	SB 80 P_4	古墳時代後期	構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
75		SB 84 カマド	古墳時代後期	燃料材	サクラ属サクラ亜属の一種
76		SB 85 カマド	古墳時代後期	燃料材	アサダ
78		SB 93 カマド	平安時代	燃料材	クリ近似種
79		SB 104カマド	古墳時代後期	燃料材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
80		ST 29 C10	奈良時代後葉	構築材	オニグルミ
80′		SB 109S	平安時代以降	構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
83 a	舟窪遺跡	SB 13 カマド	平安時代	燃料材	カエデ属の一種
83 b		SB 13 カマド	平安時代	燃料材	サクラ属サクラ亜属の一種
84		SB 14 カマド	奈良時代	燃料材	クリ
86		SB 17 カマド	古墳時代後期	燃料材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
87		SB 21 C-1	古墳時代後期後葉以前	構築材	カエデ属の一種
88		SB 21 C-2	古墳時代後期後葉以前	構築材	カエデ属の一種
89		SB 21 C-3	古墳時代後期後葉以前	構築材	カエデ属の一種
90		SB 21 C-4	古墳時代後期後葉以前	構築材	カエデ属の一種
91		SB 21 C-5	古墳時代後期後葉以前	構築材	カエデ属の一種
91′		SB 21 C-6	古墳時代後期後葉以前	構築材	広葉樹（散孔材）
93	大塚原遺跡	SB 01 N	奈良時代後葉	構築材	クリ
94		SB 03 C-1	古墳時代後期	構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
95		SB 03 C-2	古墳時代後期	構築材	クリ
96		SB 04 カマド	奈良時代	燃料材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
97		SB 07 カマド	奈良時代	燃料材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種
98 a		SB 09 カマド	奈良時代	燃料材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
98 b		SB 09 カマド	奈良時代	燃料材	サクラ属サクラ亜属の一種
99		SB 11 C-1	奈良時代	構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
101		SB 12 C-1	奈良時代	構築材	不明
102		SB 12 カマド	奈良時代	燃料材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
103		SB 13 カマド	古墳時代後期	燃料材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
104		SB 14 C-1	古墳時代後期	構築材	イネ科タケ亜科の一種
105		SB 15	奈良時代	構築材	イネ科タケ亜科の一種
106		SB 18 カマド	古墳時代後期	燃料材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
107		SB 22 カマド	奈良時代	燃料材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
108		SB 34 カマド	古墳時代後期	燃料材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種

各種類の主な解剖学的特徴や現生種の一般的な性質を以下に記す。なお、和名・学名等は、主として「原色日本植物図鑑　木本編〈I・II〉」(北村・村田, 1971, 1979) にしたがい、一般的性質などについては「木の辞典　第1巻～17巻」(平井, 1979-1982) も参考にした。

・カラマツまたはトウヒ属の一種 (*Larix kaempferi* (Lamb.) Carriere or *Picea* sp.) マツ科

垂直樹脂道および水平樹脂道が認められる。分野壁孔は小型の半縁壁孔である。放射組織は単列、1～20細胞高のものと、水平樹脂道を含む紡錘形のものがある。

以上の特徴から、マツ科のカラマツ、トウヒ属のいずれかと考えられるが、両種を分けるには至らなかった。

・オニグルミ (*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *sieboldiana* (Maxim.) Kitamura) クルミ科

散孔材で年輪界付近でやや急に管径を減少させる。管孔は単独および2～4個が複合、横断面では楕円形、管壁は薄い。道管は単穿孔を有し、壁孔は密に交互状に配列する。放射組織は同性～異性III型、1～4細胞幅、1～40細胞高。年輪界は明瞭。

オニグルミは、北海道から九州までの川沿いなどに生育する落葉高木である。材の硬さは中程度、加工は容易で狂いが少なく、保存性は低い。銃床として、洋の東西を通じて広く用いられる。ほかに各種器具・家具材などの用途も知られている。

・カバノキ属の一種（*Betula* sp.）カバノキ科

散孔材で、管孔は放射方向に２～４個が複合、横断面では楕円形、管壁は薄い。道管は階段穿孔を有し、段(bar)数は20～30、壁孔は密に対列状～交互状に配列する。放射組織は同性、１～４細胞幅、１～30細胞高であまり目立たない。年輪界はやや不明瞭。

カバノキ属は、シラカンバ（*Betula platyphylla* Sukatchev var. *japonica*（Miq.）Hara）、ダケカンバ（*B. ermanii* Cham.）など11種が自生し、主として本州中北部・北海道の山地・高山・寒冷地などに生育する落葉高木～低木である。このうちミズメ（*B. grossa* Sieb. et Zucc.）は日本固有種で、本州（岩手県以南）・四国・九州の山地に生育する。ミズメの材は重硬・強靱で、加工は困難ではなく、各種の道具・器具材、木地・家具材などに用いられる。

・アサダ（*Ostrya japonica* Sarg.）カバノキ科

散孔材で、管孔は単独または放射方向に２～４個が複合、横断面では楕円形、管壁は薄い。道管は単穿孔を有し、内壁にらせん肥厚が認められる。壁孔は交互状に配列する。放射組織は(同性～）異性III型、１～４細胞幅、１～30（50）細胞高。年輪界はやや不明瞭。

アサダは北海道（中南部）・本州・四国・九州に分布する落葉高木である。材は重硬で、割裂性は小さく、加工は困難である。器具・家具・機械・建築材などに用いられ、強度を必要とする用途に適している。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種（*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris* sp.）ブナ科

環孔材で孔圏部は１～３列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら放射状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～20細胞高のものと複合放射組織とがある。年輪界は明瞭。

クヌギ節は、コナラ亜属（落葉ナラ類）の中で、果実（いわゆるドングリ）が２年目に熟するグループで、クヌギ（*Quercus acutissima* Carruthers）とアベマキ（*Q. variabilis* Blume）の２種がある。クヌギは本州（岩手・山形県以南）・四国・九州に、アベマキは本州（山形・静岡県以西）・四国・九州（北部）に分布するが、中国地方に多い。クヌギは樹高15mになる高木で、材は重硬である。古くから薪炭材として利用され、人里近くに萌芽林として造林されることも多く、薪炭材としては国産材中第一の重要材である。このほかに器具・杭材、椙木などの用途が知られれる。アベマキはクヌギによく似た高木で、樹皮のコルク層が発達して厚くなる。材質はクヌギに似るが、さらに重い。用途もクヌギと同様であるが、樹皮が厚いため薪材にはむかず、炭材としてもクヌギ・コナラより劣るとされる。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種(*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus* sp.)ブナ科

環孔材で孔圏部は１～２列、孔圏外では急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～20細胞高のものと複合放射組織とがある。年輪界は明瞭。

コナラ節は、コナラ亜属（落葉ナラ類）の中で、果実（いわゆるドングリ）が１年目に熟するグル

ープで、モンゴリナラ（*Quercus mongolica* Fischer ex Turcz.）とその変種ミズナラ（*Q. mongolica* Fischer ex Turcz. var. *grosseserrata* (Bl.) Rehder et Wilson)、コナラ（*Q. serrrata* Murray)、ナラガシワ（*Q. aliena* Blume)、カシワ（*Q. dentata* Thunberg)、といくつかの変・品種を含む。モンゴリナラは北海道・本州（丹波地方以北）に、ミズナラ・カシワは北海道・本州・四国・九州に、ナラガシワは本州（岩手・秋田県以南）・四国・九州に分布する。コナラは樹高20mになる高木で、古くから薪炭材として利用され、植栽されることも多かった。材は重硬で、加工は困難、器具・機械・樽材などの用途が知られ、薪炭材としてはクヌギに次ぐ優良材である。

・クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）ブナ科

環孔材で孔圏部は1～4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。年輪界は明瞭。

クリは北海道南西部・本州・四国・九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木である。材はやや重硬で、強度は大きく、加工はやや困難であるが耐朽性が高い。土木・建築・器具・家具・薪炭材などの用途が知られている。

・エノキ属の一種（*Celtis* sp.）ニレ科

環孔材で孔圏部は1～3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性III型、1～15細胞幅、1～50細胞高で鞘細胞をもつ。年輪界は明瞭。

エノキ属にはエゾエノキ（*Celtis jezoensis* Koidzumi)、エノキ（*C. sinensis* Persoon)、コバノチョウセンエノキ（*C. biondii* Pampanini)、クワノハエノキ（*C. boninensis* Koidzumi）の4種がある。エゾエノキとエノキは、本州・四国・九州に普通にみられる。コバノチョウセンエノキは本州（近畿地方以西）・四国・九州・琉球に、クワノハエノキは山口県・九州西部・琉球・小笠原に希に生育する。エノキの材はやや重硬で、強度はやや小さい。耐久性も低く、材質的に劣るため、雑用材・薪炭材などの用途があるだけである。

・カツラ（*Cercidiphyllum japonicum* Sieb. et Zucc.）カツラ科

散孔材で、管孔は単独または2～3個が複合、分布密度は高い。晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性II型、1～2細胞幅、1～30細胞高。年輪界はやや不明瞭。

カツラは北海道から九州に自生する落葉高木である。カツラ属にはこのほか、本州北中部の亜高山帯に分布するヒロハカツラ（*C. magnificum*〈Nakai〉Nakai）がある。カツラの材はやや軽軟で、割裂性は大きく、加工は容易、強度・保存性は低い。大径木が多く、欠点が少ないため、各種の道具・器具・木地・家具・建築・彫刻材などに用いられる有用材の一つである。

・サクラ属サクラ亜属の一種（*Prunus* subgen. *Cerasus* sp.）バラ科

環孔性を帯びた散孔材で、管壁厚は中庸、横断面では角張った楕円形、単独または2～8個が

複合、晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性III型、1～3細胞幅、1～30細胞高。年輪界はやや不明瞭。

サクラ亜属には、ヤマザクラ（*Prunus jamasakura* Sieb. ex Koidzumi）やミヤマザクラ（*P. maximowiczii* Ruprecht）など11種類が自生し、多くの変・品種がある。いずれも落葉性高木～低木で、琉球を除く全土に分布する。このうち、ヤマザクラの材は、中程度～やや重硬・強靱で、加工は容易、保存性は高い。各種器具材をはじめ、機械・家具・楽器・建築・薪炭材など様々な用途が知られている。

・カエデ属の一種（*Acer* sp.）カエデ科

散孔材で、道管は単独および2～3個が複合、晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列～交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1～5細胞幅、1～30細胞高。細胞壁の厚さが異なる2種類の木繊維が、木口面で不規則な紋様をなす。年輪界はやや不明瞭。

カエデ属には、イタヤカエデ（*Acer mono* Maxim. subsp. *marmoratum*（Nicholson）Kitamura）やイロハモミジ（*A. palmatum* Thunb.）など約25種が自生し、また多くの品種があり植栽されることも多い。属としては琉球を除くほぼ全土に分布する落葉高木～低木である。一般に材はやや重硬・強靱で、加工はやや困難、保存性は中程度である。器具・家具・建築・装飾・施作・薪炭材などに用いられる。

・エゴノキ属の一種（*Styrax* sp.）エゴノキ科

散孔材で、横断面では楕円形、2～4個が複合または単独で、年輪界付近で管径を減ずる。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性II型、1～3細胞幅、1～20細胞高。年輪界や不明瞭。

エゴノキ属にはエゴノキ（*Styrax japonica* Sieb. et Zucc.）、ハクウンボク（*S. obassia* Sieb. et Zucc.）、コハクウンボク（*S. shirasawana* Makino.）の3種がある。エゴノキは北海道（渡島）・本州・四国・九州・琉球に、ハクウンボクは北海道（北見・石狩以南）・本州・四国・九州に、コハクウンボクは本州（栃木県以南）・四国・九州に分布する落葉高木～低木である。材はやや重硬で割裂しにくく、加工はやや容易、施作・器具・薪炭材などに用いられる。

・トネリコ属の一種（*Fraxinus* sp.）モクセイ科

環孔材で孔圏部は2～3列、孔圏外で急激に管径を減じのち漸減する。道管は単穿孔を有し、壁孔は小型で密に交互状に配列する。放射組織は同性、1～3細胞幅、1～40細胞高であるが、とくに20細胞高前後のものが多い。年輪界は明瞭。

トネリコ属には、シオジ（*Fraxinus spaethiana* Lingelsh.）、トネリコ（*F. japonica* Blume）、アオダモ（*F. serrata*（Nakai）Murata）など約8種が自生する。このうちヤマトアオダモ（*F. longicuspis* Sieb. et Zucc.）・マルバアオダモ（*F. Sieboldiana* blume）・アオダモは北海道・本州・四国・九州に、ヤチダモ（*F. mandshurica* Rupr. var. *japonica* Maxim.）は北海道・本州

（中部地方以北）に、トネリコは本州（中部地方以北）に、シオジは本州（関東地方以西）・四国・九州に分布する。いずれも落葉高木である。材の性質は種によって異なるが、一般には中庸～やや重硬で、靱性があり、加工は容易で、建築・器具・家具・施作・薪炭材などの用途が知られる。

・イネ科タケ亜科の一種（Gramineae subfam. Bambusoideae sp.）

維管束が基本組織の中に散在する不斉中心柱をもつ。

タケ亜科は、タケ・ササ類であるが解剖学的特徴では区別できない。

（4）考察

樹種同定を行った試料は、住居構築材と燃料材に大別できる。住居構築材の樹種を見ると、全体的にコナラ節が多い（表2）。これは佐久盆地で行われた、弥生時代末から平安時代までの住居構築材の樹種同定結果（パリノ・サーヴェイ株式会社，1988a，1988b，1989a，1989b，1989c，1991，1992，1994a）と調和的であり、本地域においてコナラ節の木材が住居構築材に多用されていたことが推定される。住居構築材は、使用時の大きさや重量を考えると、遠方から搬入したのではなく、遺跡周辺に生育している樹木の中から住居構築材として適した強度、大きさ（径・長さ）・形状を有するものを選択して利用したことが推定され、本遺跡周辺ではコナラ節が普通に見られる植生環境であったことが考えられる。また、タケ亜科がコナラ節に次いで多く見られるが、タケ亜科の材質から、垂木や柱材に使用したとは考えられない。壁や屋根に葺いたもの等の可能性がある。

表2　構築材の樹種構成

樹種名＼時代・遺跡	古墳初頭	古墳後期				奈良		平安	時代不詳	合計
	竹花	東下原	大下原	竹花	大塚原	竹花	大塚原	竹花	舟窪	
オニグルミ						1				1
カバノキ属								1		1
クヌギ節		2		2						4
コナラ節	11		1	22	1		1	1		37
クリ				1	1		1	1		4
カエデ属									5	5
環孔材	1			1						2
散孔材									1	1
タケ亜科			6	6	1	1	1	1		16
不明							1			1
合　計	12	2	7	32	3	2	4	4	6	72

ところで、本地域では郷土遺跡における縄文時代の住居構築材の樹種同定結果から、縄文時代の構築材にはクリが多く、古墳時代以降の木材利用と比較して違いがあることを指摘している（パリノ・サーヴェイ株式会社，1993）。一方、御代田町下弥堂遺跡では、縄文時代前期初頭の住居跡から検出された構築材にコナラ節が多く、弥生時代末以降の樹種構成と同様の結果が得られている（パリノ・サーヴェイ株式会社，1994b）。このことから、同時代であっても木材の選択は遺跡によって異なっていた可能性がある。しかし、縄文時代の資料は、この2例以外には知られておらず、今後さらに資料の蓄積が必

表3　燃料材の樹種構成

樹種名＼時代・遺跡	古墳中期	古墳時代後期				奈良時代			平安時代		合計
	竹花	大下原	竹花	舟窪	大塚原	竹花	舟窪	大塚原	竹花	舟窪	
カラマツ・トウヒ属									1		1
アサダ			1								1
クヌギ節		1			1			1			3
コナラ節		1	1	1	2	1	1	4			10
クリ									2		3
エノキ属	1										1
カツラ		1									1
サクラ亜属			1					1		1	3
カエデ属										1	1
エゴノキ属									1		1
トネリコ属		1									1
散孔材									1		1
合　計	1	4	3	1	3	1	1	6	5	2	27

クリ近似種はクリに含めた

要である。

燃料材でも、構築材に多かったコナラ節が多く見られ（表３）、コナラ節の木材が構築材以外に燃料材としても多用されていたことが推定される。また、同定された樹種数は、不明も含めて12種類になり、様々な木材が燃料材として利用されていたことを示している。このことから、燃料材としてとくに選択される樹木があったのではなく、周辺に生育している樹木を伐採、利用していたことが推定される。

２．食用植物について

（１）試料

試料は、東下原遺跡、竹花遺跡、大塚原遺跡から検出された種実遺体10点である。各試料の詳細については、同定結果とともに表４に示す。

（２）方法

双眼実体顕微鏡下でその形態的特徴から種類を同定した。

（３）結果

結果を表４に示す。以下に形態的特徴について記す。

・オニグルミ（*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *sieboldiana* (Maxim.) Kitamura）クルミ科クルミ属

核の破片が検出された。褐灰色で大きさは１～２㎝程度。内果皮は厚く堅い。表面は荒いしわ状となり、裏面には子葉が入るくぼみがある。

・モモ（*Prunus parsica* Batsch.）バラ科サクラ属

核（内果皮）が検出された。褐色で大きさは２㎝程度。核の形は楕円形でやや偏平である。下端には丸く大きな臍点がある。一方の側面にのみ縫合線が顕著に見られ、表面は不規則な線状のくぼみがあり全体としてあらいしわ状に見える。

・スモモ（*Prunus salicina* Lindl.）バラ科サクラ属

核（内果皮）が検出された。黒褐色で大きさは１㎝程度。核の形は楕円形で、偏平である。下端

表４　種実遺体同定結果

No.	遺跡名	遺構名	時代・時期	同定結果
1	東下原遺跡	SB 03 カマド	古墳時代後期	モモ
24	竹花遺跡	SB 21 S	奈良時代後半	オニグルミ
41		SB 48 N	奈良時代後半	モモ
42		SB 49	平安時代	モモ
43		SB 53 カマド	平安時代	オニグルミ
45		SB 62	平安時代	スモモ
46		SB 65	奈良時代	イネ
52		SB 74 カマド	平安時代	モモ
77		SB 85 N	古墳時代後期	オニグルミ
92	大塚原遺跡	SB 01 C-1	奈良時代後半	サクラ属の一種

には、丸く大きな臍点がありへこんでおり、上端は丸い。一方の側面にのみ、縫合線が顕著に見られる。表面は炭化が著しく不明瞭である。

・サクラ属の一種（*Prunus* sp.）バラ科

核（内果皮）が検出された。褐色で大きさは1.5cm程度。核の形は楕円形でやや偏平である。下端には丸く大きな臍点があり、上端は鋭く尖る。一方の側面にのみ縫合線が顕著に見られる。表面は炭化が著しく不明瞭である。今回の調査では、サクラ属のモモとスモモが同定されているが、本試料はそのどちらとも形態が異なる。形態や大きさはウメに似るが、表面の観察が行えなかったため、種の特定には至らなかった。

・イネ（*Oryza sativa* L.）イネ科イネ属

炭化した頴（籾）が互いに癒着した状態で検出された。籾一つあたりの大きさは５㎜程度。表面には細かい突起が縦方向に配列している。

（４）考察

今回検出された種実は、いずれも古くから食用にされてきた種類である。このうち、オニグルミをのぞく種類は栽培のために渡来したといわれている。

オニグルミは生食可能なことから古くから食用として利用されていたと見られ、各地で多くの検出例が知られている。オニグルミは、本州の山野では沢沿いなどにごく普通に見られる種類であることから、平易に入手可能であったと推測される。

モモは渡来した植物といわれ、古いものでは長崎県伊木力遺跡から検出された縄文時代前期の核が知られているが（粉川，1988）、検出例・個体数が増加するのは弥生時代以降である。モモは古くから人々に利用され、花の観賞や果実や種子を食用にすることから、今回検出されたモモも当時食用などのため栽培されていたものと考えられる。モモの品種は非常に多く、江戸時代には花の観賞用モモは約200種類以上、果実用でも40種類以上あったといわれている（堀田，1980）。江戸時代以前に食べられていたとされる古い形質のモモの核は、小さくて丸みがあるといわれており（堀田，1980）、今回の形態もこれに近い。遺跡から出土したモモの核に関しては、金原ほか（1992）が奈良県布留遺跡で行った調査から、畿内地方で少なくとも５種類の形態があり、時代・時期により出土する核の形態が異なることを指摘している。しかし、この結果は畿内の１遺跡で得られた結果であり、ここで分類された核の形態やその出現時期が全国の遺跡に当てはまるとはいえないが、将来的には、地域別に集計された資料を比較することにより、過去の流通や文化の伝播を検討する上で重要な資料となることが期待できる。

スモモも食用のために渡来した種類であるとされ、記紀の中にもスモモ（李）に関する記述がみられる。しかし、スモモは長野県野尻湖では更新世から化石が検出されており（野尻湖植物グループ，1984）、古い時代には日本に自生していたと考えられる。遺跡などから検出されるスモモと野尻湖産のスモモでは核の形態が異なることから、歴史時代のものは渡来した可能性があるが、その関係については現段階では不明である。

籾は複数が癒着した状態で検出されており、火熱を受けていると考えられる。炭化米は、竹花遺跡第40号住居址、鋳物師屋遺跡などから報告されているが(氏原, 1988)、今回のものは癒着が著しく、個々の粒が判別できないため、形状に関する比較検討はできなかった。

3．竹花遺跡の第3号土坑（SK03）から検出された灰層（SK03灰）について

（1）試料

試料は、竹花遺跡の第3号土坑から採取された灰1点（試料名：SK03灰）である。

（2）方法

試料は、ポリタングステン酸ナトリウム(比重2.6)による重液分離を行い、植物珪酸体を分離・濃集し、乾燥させマッフル炉で650℃の1時間試料を焼き灰化させ、検鏡し易い濃度に希釈した後、カバーガラスに滴下し、乾燥させる。これを、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。

検鏡は光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現するイネ科植物の葉部（葉身と葉鞘）の短細胞に由来する植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身の機動細胞に由来する植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、同定・計数する。なお、同定には、近藤・佐瀬（1986）の分類を参考にする。また、イネ科植物が灰で検出される場合、短細胞列・機動細胞列といった珪化組織片で認められる例もある(佐瀬, 1982；大越, 1985)。このため、組織片についても注目した。

結果は、検出された植物珪酸体の種類と個数を一覧表で示した。

（3）結果

結果を表5に示す。短細胞珪酸体・機動細胞珪酸の検出個数が少なく、組織片もイネ属が僅かにしか認められない。

検出された種類は、キビ族・タケ亜科・ヨシ属・ウシクサ族ススキ属・イチゴツナギ亜科が検出される。また、栽培種のイネ属の産状が目立つ。

表5　第3号土坑の植物珪酸体分析結果

種類（Taxa）　試料名	SK03灰
イネ科葉部短細胞珪酸体	
イネ族イネ属	5
キビ族	12
タケ亜科	1
ヨシ属	2
ウシクサ族ススキ属	7
イチゴツナギ亜科	2
不明キビ型	31
不明ヒゲシバ型	1
不明ダンチク型	16
イネ科葉身機動細胞珪酸体	
イネ族イネ属	15
タケ亜科	2
ウシクサ族	1
不明	15
合　計	
イネ科葉部短細胞珪酸体	77
イネ科葉身機動細胞珪酸体	33
検出個数	110
組織片	
イネ属頴珪酸体	1
イネ属機動細胞列	1

（4）考察

今回の調査対象とした試料は、奈良時代とされる第3号土坑から採取された灰（SK03灰）である。この土坑は、上下の層からタニシが出土していることから、ゴミ穴と考えられている。

したがって、灰は土坑内で焼かれたものに由来するかもしくは他から搬入され投棄されたものかの2つの可能性が考えられる。しかし灰中に土壌と混じりあっていることや焼土がみられないことから、後者の可能性が高いように思

われる。

灰像分析の結果、植物珪酸体が検出されたが、灰中に土壌も混じっていることから土壌中に混入していたものか上位からの落ち込みの可能性もあり、一概に灰がイネ科植物由来であったとは言えない。しかし、本土坑覆土中に栽培種のイネ属に由来する珪酸体や組織片が検出されることから、植物遺体が埋積している可能性がある。その他の検出されたイネ科植物に関しても、土坑埋積時当時に周辺に生育していた種類を構成する要素であった可能性がある。

今後、このような分析を行う場合には、他の土坑覆土や土坑外の堆積土等との植物珪酸体組成の比較を行うことにより、詳細な検討が可能になると思われる。

〈引用文献〉

平井信二（1979-1982）木の事典　第１巻～第17巻．かなえ書房．

堀田　満（1980）モモ・ビワ．「植物の生活誌」，p.136-142，平凡社．

金原正明・粉川昭平・太田三喜（1992）モモ核を中心とする古代有用植物の変遷．日本文化財科学会第９回大会研究発表要旨集，p.76-77．

北村四郎・村田　源（1971，1979）原色日本植物図鑑　木本編〈Ⅰ・Ⅱ〉．453p.,545p.，保育社．

粉川昭平（1988）穀物以外の植物食．金関　恕・佐原　眞編「弥生文化の研究２　生業」，p.112-115，雄山閣．

近藤錬三・佐瀬　隆（1986）植物珪酸体分析，その特性と応用．第四紀研究，25，p.31-64．

野尻湖植物グループ（1984）野尻湖層と貫ノ木層の植物遺体．地団研専報，27，p.107-116．

大越昌子（1985）プラント・オパール分析．「平賀遺跡　平賀遺跡群発掘調査報告書」，p.803-815，平賀遺跡群調査会．

パリノ・サーヴェイ株式会社（1988ａ）十二遺跡出土炭化材の樹種同定．「鋳師屋遺跡群　十二遺跡　―長野県北佐久郡御代田町十二遺跡発掘調査報告書―」，p.393-399，御代田町教育委員会．

パリノ・サーヴェイ株式会社（1988ｂ）鋳物師屋遺跡出土炭化材同定．小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第11集「鋳師屋遺跡群　鋳物師屋　―長野県小諸市鋳物師屋遺跡発掘調査報告書―」，p.116-117，小諸市教育委員会．

パリノ・サーヴェイ株式会社（1989ａ）根岸遺跡出土炭化材の樹種同定．「長野県北佐久郡御代田町大字御代田所在　鋳師屋遺跡群　根岸遺跡発掘調査報告書」，p.291-293，御代田町教育委員会．

パリノ・サーヴェイ株式会社（1989ｂ）和田原遺跡出土炭化材同定．小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第13集「和田原遺跡群　鎌田原　―長野県小諸市和田原・鎌田原遺跡発掘調査報告書―」，p.83-88，小諸市教育委員会．

パリノ・サーヴェイ株式会社（1989ｃ）広畑遺跡出土炭化材の樹種同定．「広畑遺跡　―長野県北佐久郡御代田町広畑遺跡発掘調査報告書―」，p.35-40，御代田町教育委員会．

パリノ・サーヴェイ株式会社（1991）関口Ａ・Ｂ遺跡出土炭化材の樹種同定．小諸市埋蔵文化財発掘調査

報告書第15集「関口Ａ・関口Ｂ・柏原遺跡群下柏原　―長野県小諸市関口Ａ・関口Ｂ・下柏原遺跡発掘調査報告書―」，p.245-254，小諸市教育委員会．

パリノ・サーヴェイ株式会社（1992）下芝宮遺跡・下聖端遺跡炭化材同定報告．佐久市埋蔵文化財調査報告第９集「国道141号線関係遺跡　長野県佐久市長土呂国道141号線関係遺跡発掘調査報告書（本文編）芝宮遺跡群下芝宮遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ、芝宮遺跡群上高山遺跡、周防畑遺跡群下北原遺跡、近津遺跡群上宮原遺跡、下蟹沢遺跡、長土呂遺跡群上大林遺跡、長土呂遺跡群下聖端遺跡Ⅰ・Ⅱ」，p.355-391，佐久市教育委員会・佐久市埋蔵文化財センター．

パリノ・サーヴェイ株式会社（1993）郷土遺跡出土炭化材の同定．小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第16集「郷土遺跡　―長野県小諸市郷土遺跡発掘調査報告書―」，p.52-57，小諸市教育委員会．

パリノ・サーヴェイ株式会社(1994ａ)Ｈ－４号住居址から出土した炭化構築材の樹種．「塩野西遺跡群　塚田遺跡　―長野県北佐久郡御代田町塚田遺跡発掘調査報告書―」，p.344-353，長野県御代田町教育委員会．

パリノ・サーヴェイ株式会社（1994ｂ）炭化材の樹種同定および放射性炭素年代測定報告．「下弥堂　―縄文前期初頭の集落遺跡調査―」，p.146-150，長野県御代田町教育委員会．

佐瀬　隆（1982）古墳時代住居址の炉に関する焼土について，―植物起源粒子の植物珪酸体からみて―．東京都埋蔵文化財センター調査報告書第２集，「多摩ニュータウン遺跡(第３分冊)」，p.303-308，(財)東京都埋蔵文化財センター．

氏原暉男（1988）鋳物師屋遺跡出土の炭化米について．小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第11集　「鋳師屋遺跡群　鋳物師屋　―長野県小諸市鋳物師屋遺跡発掘調査報告書―」，p.113-115，小諸市教育委員会．

離する。

三　内容の検討

A面は文字数が少なく内容を明らかにすることは難しいが、文字の大きさに対し行間が広いことが注意される(行間にもう一行存在することを想定できないであろう)。この点において、正倉院等に現存する古代の文書・帳簿類と比較した場合、文書の方に近い数値である。参考として宝亀三年二月二五日丈部浜足解(『大日古』六―273、本文の文字)約一・八センチメートル、行間約三・五センチメートル)、天平感宝元年六月二七日秦姓弟兄解(『大日古』十―664、本文の文字)約一・八センチメートル、行間約三・五センチメートル)を挙げておく。

次に記載内容を検討する。「布度」で一単語とするとこの語の用例は見られないが音で「フト」と読む可能性がある。この場合「布」の字に「ぬの」の意はなくなるが、数量の単位が段であることからすれば、田積の可能性も存するものの、布の長さと考えられる。もしそうであれば「布度玖段」は「フトヌノ」の略か、「ヌノフト」と表記したかのいずれかであろう。フトヌノ(太布)とは、太い糸で荒く織った布のことである。また別の可能性としては「布」を「ヌノ」と訓じ、「度」を「わたす」と訓じる解釈もありうる。類例として次の資料が参考となろう。

城山遺跡出土三二号木簡(釈文は『静岡県史』資料編四、一九八九年、九四四頁による)

月生二日家度稲册八×　　×□[束之]度　(三一七)×一九×八　〇五一型式

「家度稲…」は「家に稲をわたす」と解釈できるが、これと同じ用例であるとすれば本文書も「布九段をわたす」と解すことができる。但し、物品名と数量の間に動詞が入ることがこの解釈の難点である。いずれにしても情報量が少なく、他の解釈も成り立ち得るので断定的なことは避けておきたい。

B面はさらに文字が少なく、内容的には不明であるが、行間に文字と平行に線が一本引かれていることが注意される。この線は太く、ラフに引かれており、界線とは考えにくいが、性格は全く不明である。

B面（A面と天地逆）

□□□□

1.3（閒小□

0.6（

1.3

第二断片

文字は漆の付着していない面に正位で確認できる（A′面とする）。

A′面

□度玖

A面の「度玖」とA′面の「度玖」は全く同じ形であり重なっていた時の位置も全く重なる。また、第一断片に第二断面の繊維が付着しているところがある（図三）。このことは、漆が固化する以前に両断片が重なっていた時、相互に繊維が付着するとともに、第一断片の墨痕が第二断片にうつったのであろう。

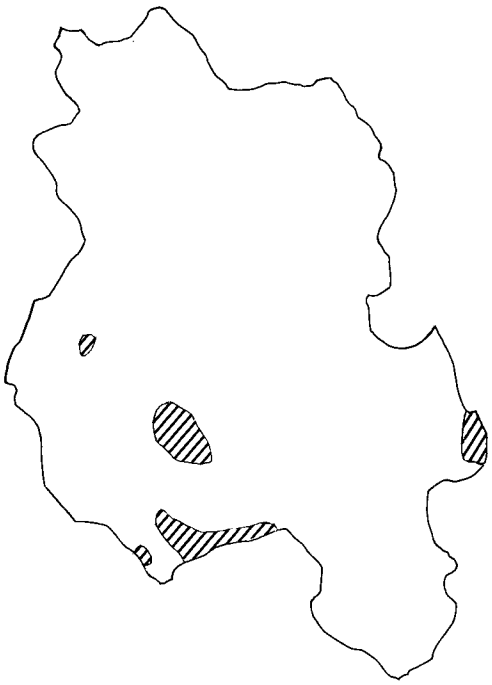
このことから、本文書の廃棄後の過程は以下のように復元できる。

1　直径一三～一四センチメートルの円形の範囲に漆が付着した紙を、漆付着面を外側にして、文字の行とほぼ平行に、中央から半分に折る。

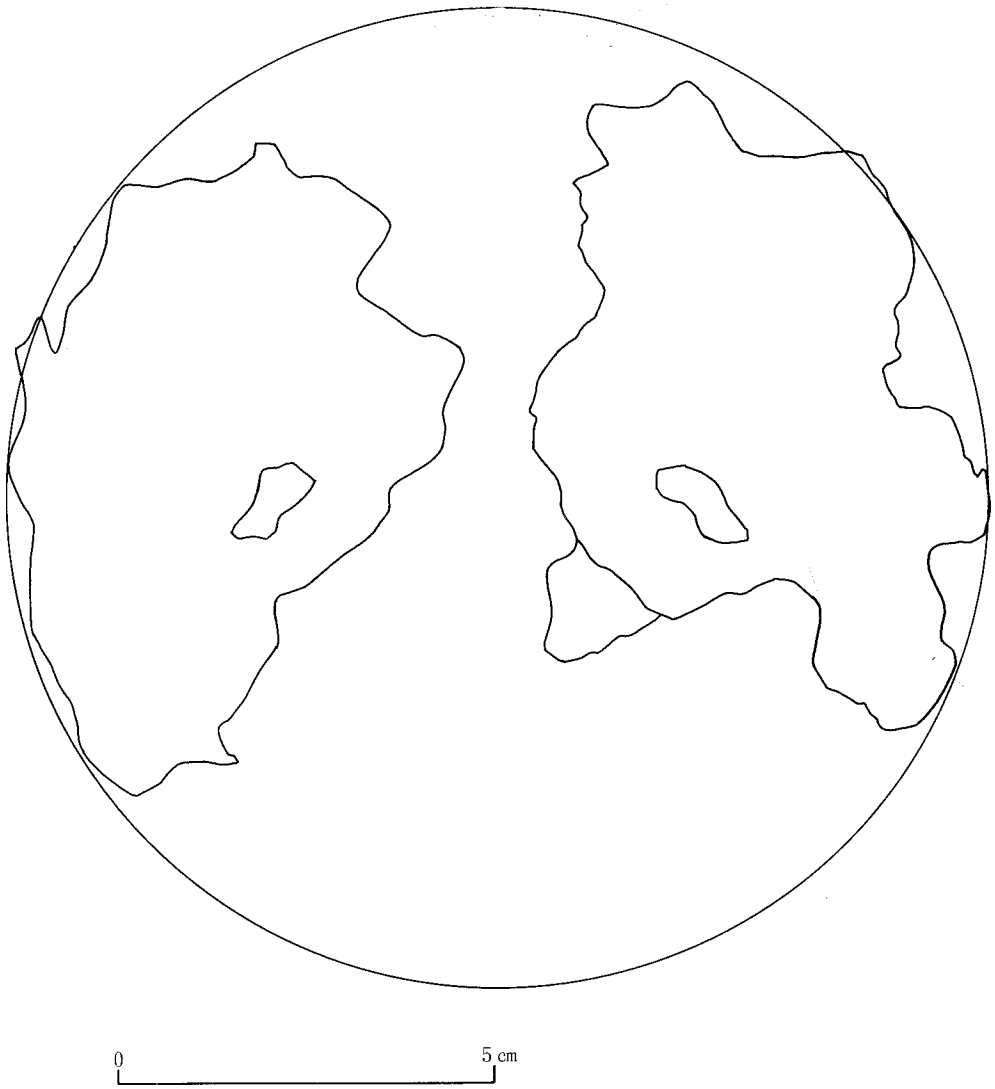
2　上面（第一断片のA面）の漆をそぎ落とす。

3　漆が固化する以前に第一断片の墨影が第二断片にうつった。

4　下面（第二断片の側）についた漆が土器内面の形に固化した後土器と分



第3図　第1断片に第2断片の繊維が付着した部分



第2図　漆フタ紙の復原図

付編8

竹花遺跡第4号土坑出土の漆紙文書について

国立歴史民俗博物館教授　平川　南
東京大学大学院生　古尾谷知浩

一　形　態

本文書は黒色土器杯内面に硬化した漆の上に紙が二枚重なった状態で出土した。漆の形状は杯形の土器の底部内面の形を残しており、土器に入ったままの状態で固化したものである。二枚の紙は漆付着面を外側にして重ねられている（上面に出ている方を第一断片、漆に密着した方を第二断片とする。図一）。第一断片に付着した漆（外側の面に付着）は丁寧にそぎ落とされていて、第二断片の状況とは異なるものの、両者とも空気にさらされていた面の状況が酷似しており、本来同一の紙であったものを、漆付着面を外側にして折りたたんだものと推定される。各断片の大きさは、残存径で長径一〇・三センチメートル、短径六・四センチメートルであり、復元的に展開した場合の漆フタ紙の直径は、約一三～一四センチメートルとなる（図二）。

二　釈文と行間等の計測（単位センチメートル）

第一断片

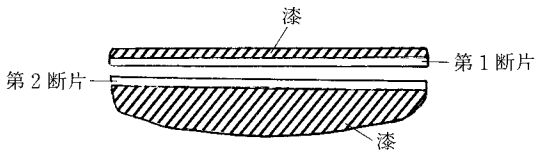
文字は表裏に確認できる。漆付着面をA面、反対面をB面とする。A面は漆の付着していない面（すなわちB面）から左文字として確認した。

A面

□
□布）1.6
□度）1.9
□玖）1.3
□段）1.3
1.3（飯　□
1.2（依

1.71.81.9

3.5



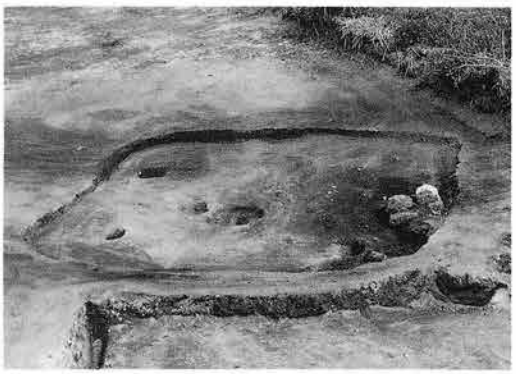
第1図　模式図

図　　版

第 1 号住居址

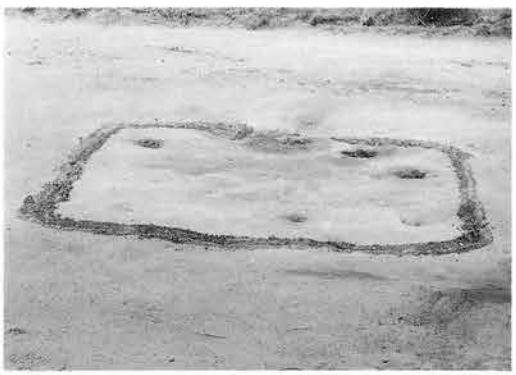
第 2 号住居址

第 3 号住居址

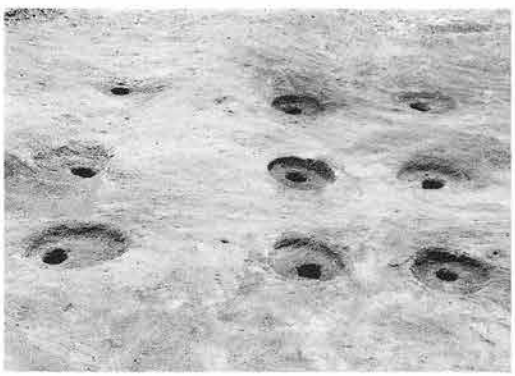


第 4 号住居址

第 5 号住居址



第 6 号住居址



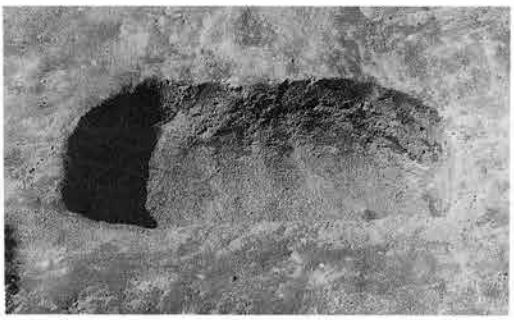
第 1 号掘立柱建物址

第 2 号掘立柱建物址

図版 2

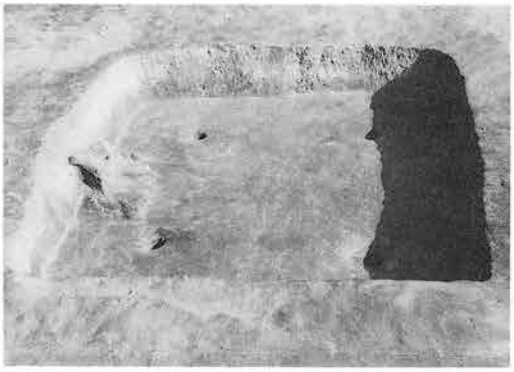
東下原遺跡

第 1 号溝址



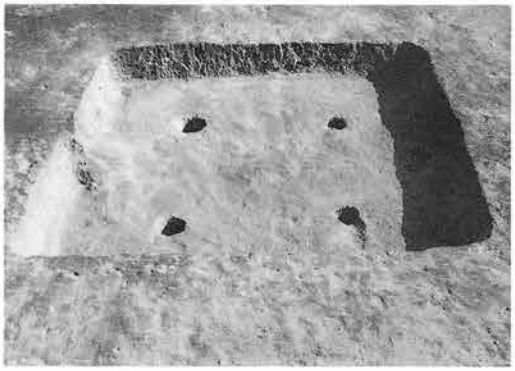
第 1 号土坑

大下原遺跡



第 1 号住居址

第 2 号住居址

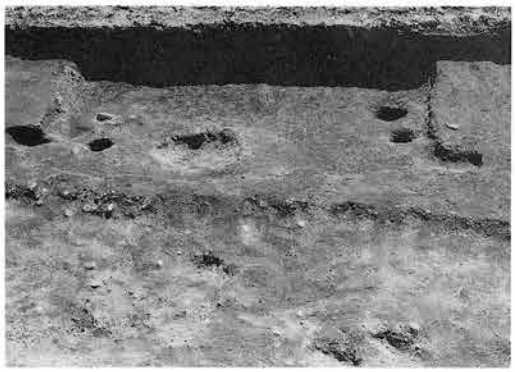


第 3 号住居址

第 4 号住居址

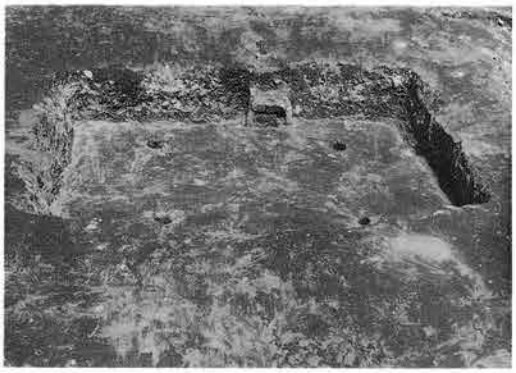
第 5 号住居址

第 6 号住居址



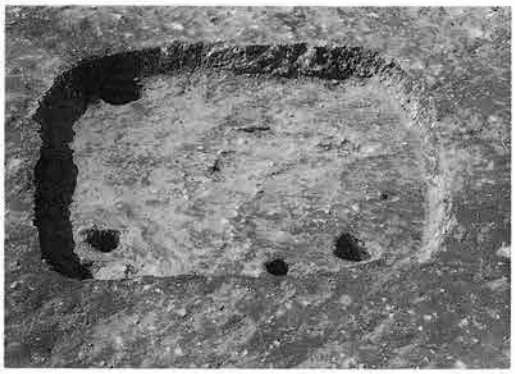
第 7 号住居址

第 8 号住居址



第 9 号住居址

第10号住居址



第11号住居址

第12号住居址

第13号住居址

第 1 号掘立柱建物址

大下原遺跡

第 2 号掘立柱建物址

第 3 号掘立柱建物址

第 4 号掘立柱建物址

第 9 号掘立柱建物址

第 1 号溝址（南）

第 1 号溝址（中央）

第 1 号溝址（北）

第 2 号溝址

大下原遺跡

第 3 号溝址

第 4 号溝址

第 5 号溝址

第 1 号土坑

竹花遺跡

第 1 号住居址

第 2 号住居址

第 3 号住居址

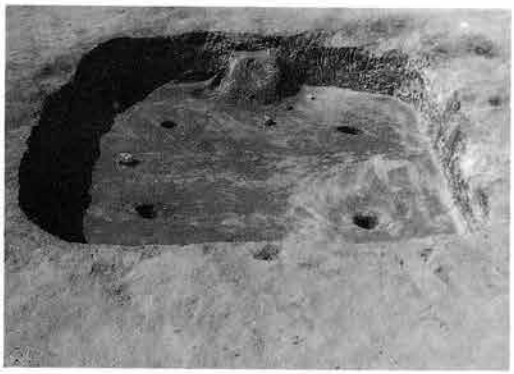
第 4 号住居址

図版 6

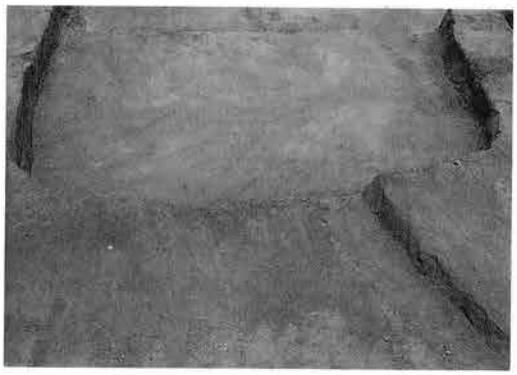
竹花遺跡

第 5 号住居址

第 6 号住居址

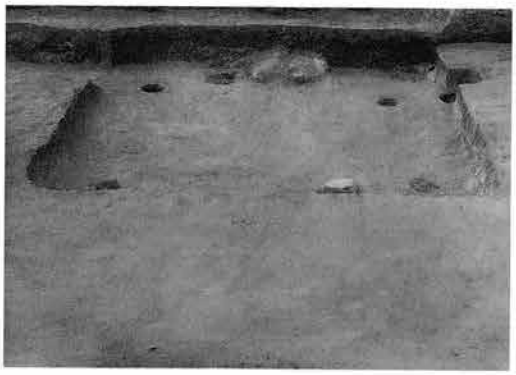


第 7 号住居址

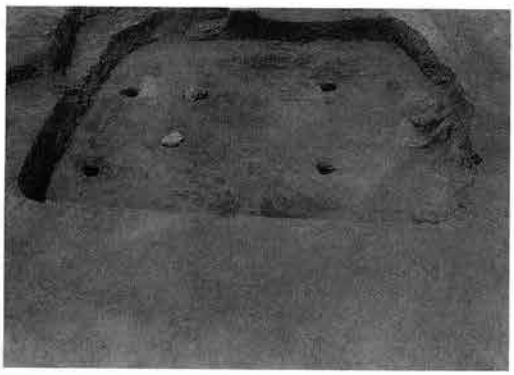


第 8 号住居址

第 9 号住居址



第10号住居址



第11号住居址

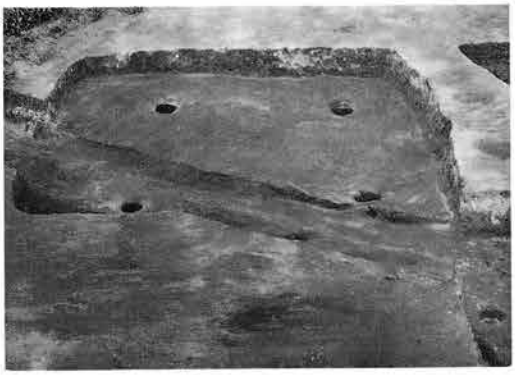
第12号住居址

第13号住居址

第14号住居址

第16号住居址

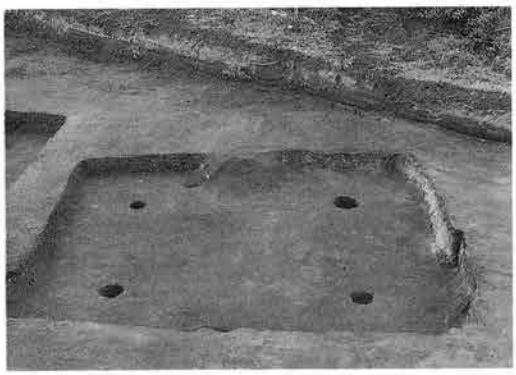
第17号住居址



第18号住居址

第19号住居址

第20号住居址



第21号住居址

竹花遺跡

第22号住居址

第23号住居址

第24号住居址

第25号住居址

第26号住居址

第27号住居址

第28号住居址

第29号住居址

第30号住居址

第31号住居址

第32号住居址

第33号住居址

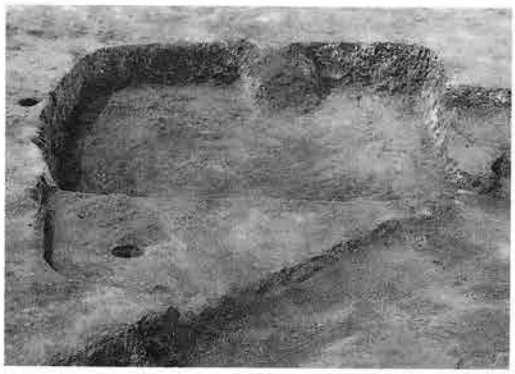
第35号住居址

第36号住居址

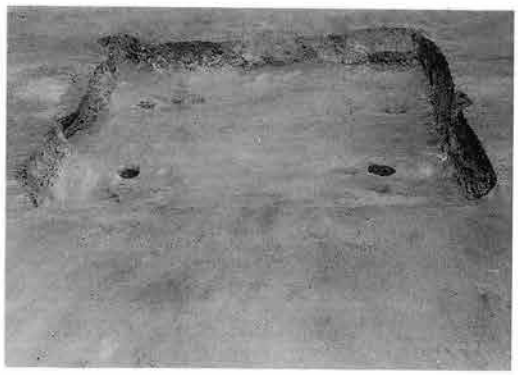
第37号住居址

第38号住居址

竹花遺跡



第39号住居址

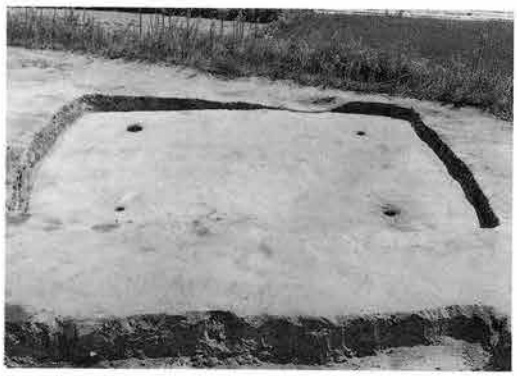


第40号住居址

第41号住居址

第42号住居址

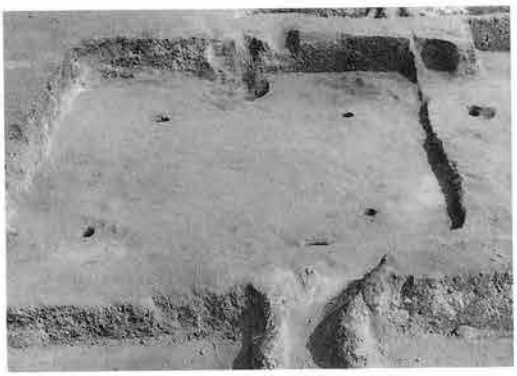
第44号住居址



第45号住居址

第46号住居址

第47号住居址



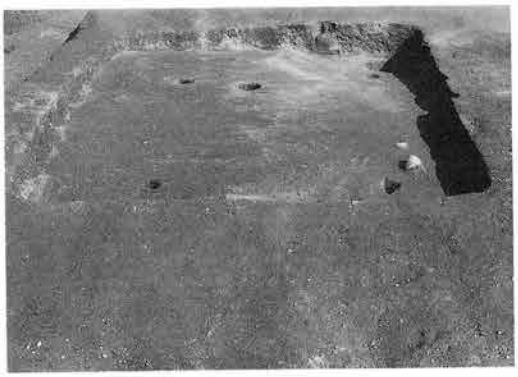
第48号住居址

第49号住居址

第50号住居址

第51号住居址

第52号住居址

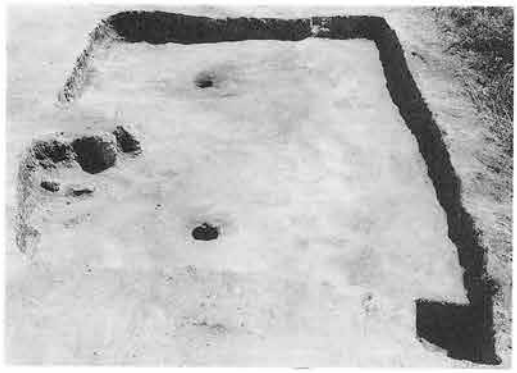


第53号住居址

第54号住居址

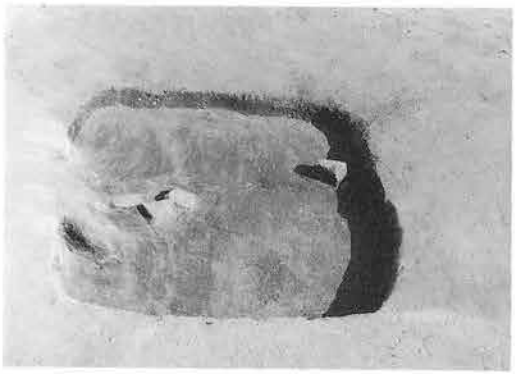
第55号住居址

竹花遺跡

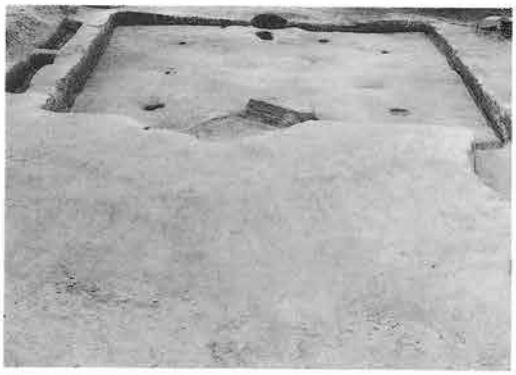


第56号住居址

第58号住居址

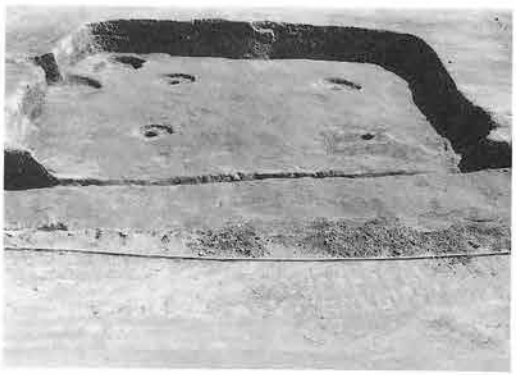


第59号住居址



第60号住居址

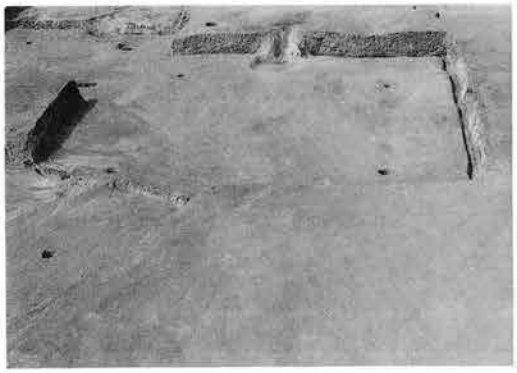
第62号住居址



第63号住居址

第64・30・68号住居址（左から）

第65号住居址



第66号住居址

第67号住居址

第69号住居址

第70号住居址

第71号住居址

第72号住居址

第73号住居址

第74号住居址

竹花遺跡

第76号住居址

第77号住居址

第78号住居址

第79号住居址

第80号住居址

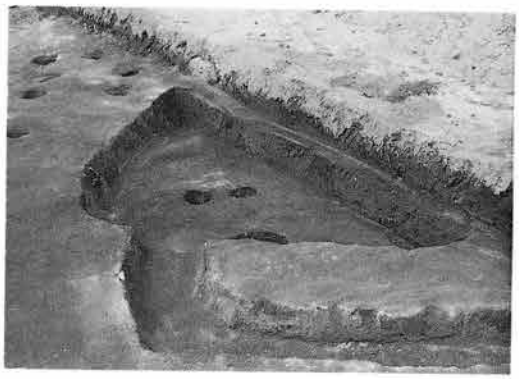
第81号住居址

第82号住居址

第83号住居址

第84号住居址

第85号住居址



第86号住居址

第87号住居址

第88号住居址

第89号住居址

第90号住居址

第91号住居址

竹花遺跡

第92号住居址

第93号住居址

第94号住居址

第95号住居址

第96号住居址

第97号住居址

第98号住居址

第99号住居址

第100号住居址

第101号住居址

第103号住居址

第104号住居址

第105号住居址

第106号住居址

第107号住居址

第108号住居址

竹花遺跡

第109号住居址

第110号住居址

第111号住居址

第112号住居址

第113号住居址

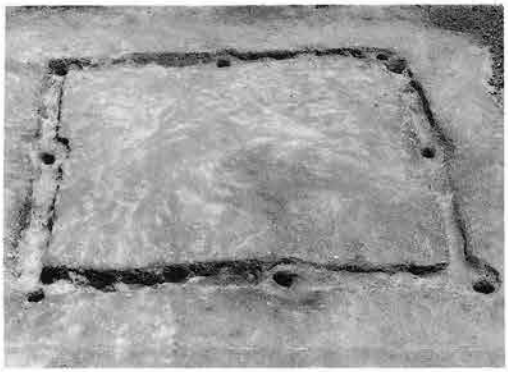
第114号住居址

第115号住居址

第116号住居址

第117号住居址

第118号住居址



第 2 号掘立柱建物址

第 3 号掘立柱建物址

第 4 号掘立柱建物址

第 5 号掘立柱建物址

第 6 号掘立柱建物址

第 7 号掘立柱建物址

竹花遺跡

第 8 号掘立柱建物址

第10号掘立柱建物址

第12・13号掘立柱建物址

第18号掘立柱建物址

第19号掘立柱建物址

第20号掘立柱建物址

第31号掘立柱建物址

第32号掘立柱建物址

第38号掘立柱建物址

第39号掘立柱建物址

第45号掘立柱建物址

第51号掘立柱建物址

第54号掘立柱建物址

第55号掘立柱建物址

第57号掘立柱建物址

第60号掘立柱建物址

竹花遺跡

第61号掘立柱建物址

第64号掘立柱建物址

第66号掘立柱建物址

第70号掘立柱建物址

第72号掘立柱建物址

第73号掘立柱建物址

第76号掘立柱建物址

第80号掘立柱建物址

第83号掘立柱建物址

第86号掘立柱建物址

第１号溝址

第２号溝址

第３号溝址

第４号溝址

第５号溝址

第６号溝址

図版24

竹花遺跡

第1号土坑

第4号土坑

第5号土坑

第6号土坑

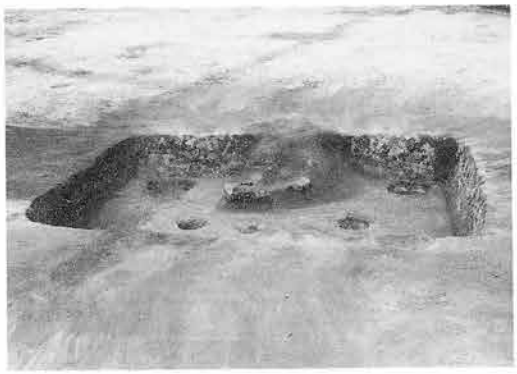
第7号土坑

第8号土坑

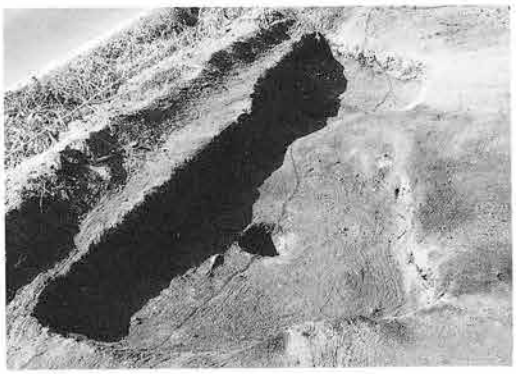
舟窪遺跡

第1号住居址

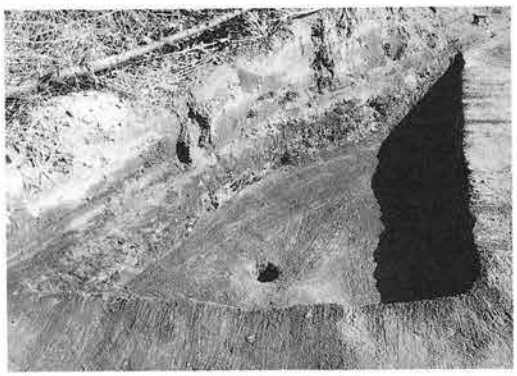
第2号住居址



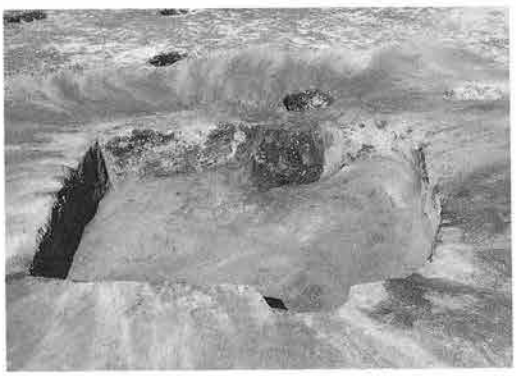
第３号住居址



第４号住居址



第５号住居址

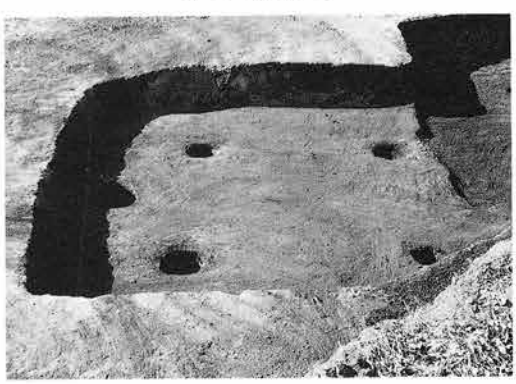


第６号住居址

第７号住居址

第８号住居址

第９号住居址



第10号住居址

図版26

舟窪遺跡

第11号住居址

第12号住居址

第13号住居址

第14号住居址

第15号住居址

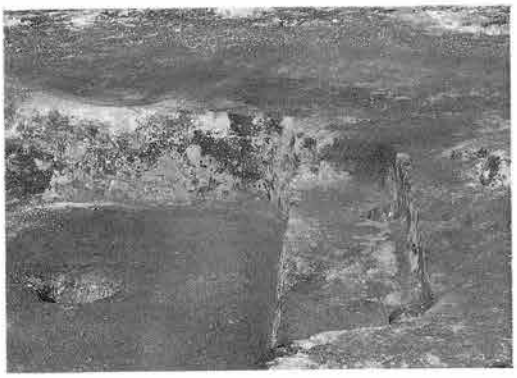
第16号住居址

第17号住居址

第18号住居址

第19号住居址

第20号住居址



第21号住居址

第１号掘立柱建物址

第２号掘立柱建物址

第３号掘立柱建物址

第５号掘立柱建物址

第６号掘立柱建物址

舟窪遺跡

第７・８号掘立柱建物址

第９号掘立柱建物址

第10号掘立柱建物址

第12号掘立柱建物址

第13号掘立柱建物址

第15号掘立柱建物址

第16号掘立柱建物址

第18号掘立柱建物址

舟窪遺跡

第21号掘立柱建物址

第25号掘立柱建物址

第30号掘立柱建物址

第１号土坑

大塚原遺跡

第１号住居址

第２号住居址

第３号住居址

第４号住居址

大塚原遺跡

第 5 号住居址

第 6 号住居址

第 7 号住居址

第 8 号住居址

第 9 号住居址

第10号住居址

第11号住居址

第12号住居址

第13号住居址

第14号住居址

第15号住居址

第16号住居址

第17号住居址

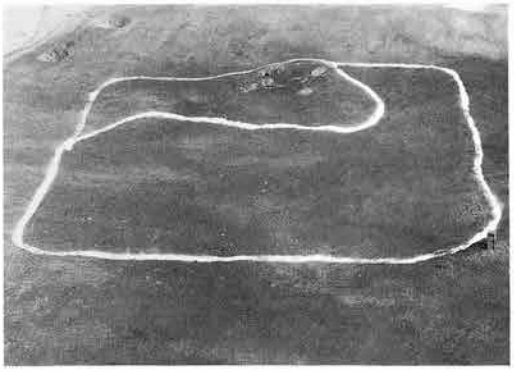
第18号住居址

第19号住居址

第20号住居址

大塚原遺跡

第21号住居址



第22号住居址

第23号住居址

第24号住居址

第25号住居址

第26号住居址

第27号住居址

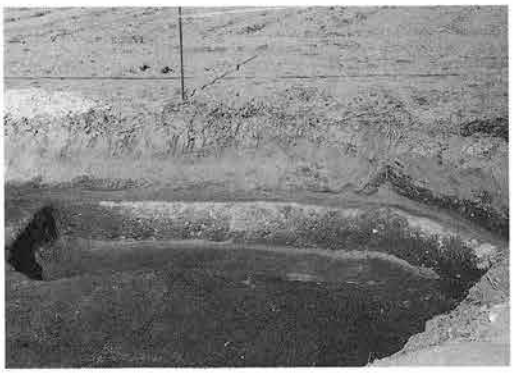
第28号住居址

第29号住居址

第30号住居址

第31号住居址

第32号住居址



第33号住居址

第34号住居址

第35号住居址

第１号掘立柱建物址

大塚原遺跡

第２号掘立柱建物址

第５号掘立柱建物址

第11号掘立柱建物址

第12号掘立柱建物址

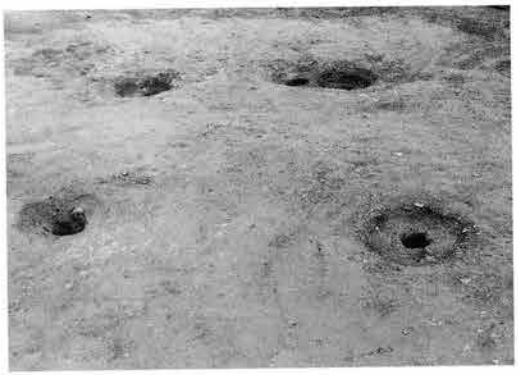
第17号掘立柱建物址

第20号掘立柱建物址

第21号掘立柱建物址

第22号掘立柱建物址

第23号掘立柱建物址



第25号掘立柱建物址

第26号掘立柱建物址

第27・28号掘立柱建物址

第31号掘立柱建物址

第33号掘立柱建物址

第34・35号掘立柱建物址

第36号掘立柱建物址

大塚原遺跡

第38号掘立柱建物址

第39号掘立柱建物址

第50号掘立柱建物址

第１号溝址

第２号溝址

第３号溝址

第１号土坑

第２号土坑

第1号住居址

25-1

25-2

25-3

25-7

第2号住居址

25-1

25-3

25-4

25-8

25-3

25-4

25-2

25-5

25-6

第3号住居址

25-1

25-2

25-5

第4号住居址

25-1

第5号住居址

25-1

25-2

第1～5号住居址出土土器

図版38

第 6 号住居址

25-1

25-2

遺構外

25-1

25-2

26-1

26-2

26-3

26-4

26-5

26-6

26-7

26-8

26-9

26-10

26-11

出土遺物

27-1

27-2

27-3

27-4

27-5

27-6

27-7

27-8

27-9

27-10

27-11

27-12

出土遺物

図版40

第２号住居址

64-1

第５号住居址

64-1

64-2

第９号住居址

64-1

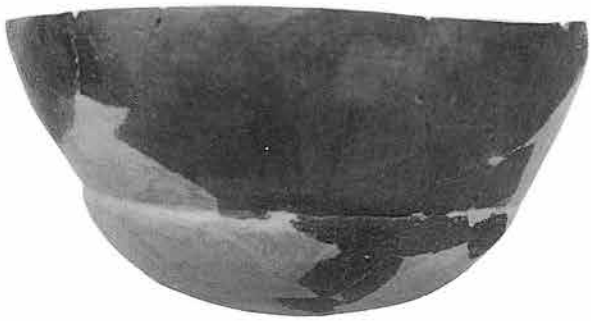
第13号住居址

64-1

64-2

64-3

第11号住居址



64-1

64－4

第５号溝址

64-1

第２・５・９・11・13号住居址、第５号溝址出土土器

65-1

65-2

65-3

65-4

65-5

65-6

65-7

65-8

65-12

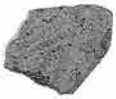
65-13

65-9

65-10

65-11

65-14


65-15

65-16

65-17

65-18

65-19

65-20

65-21

65-22

65-23

65-24

出土遺物

図版42

第1号住居址

331-1

第2号住居址

331-1

第3号住居址

331-1

331-2

331-3

第4号住居址

331-1

331-2

第5号住居址

331-1

331-2

第1～5号住居址出土土器

第5号住居址

332-1

第6号住居址

332-1

332-2

332-3

332-4

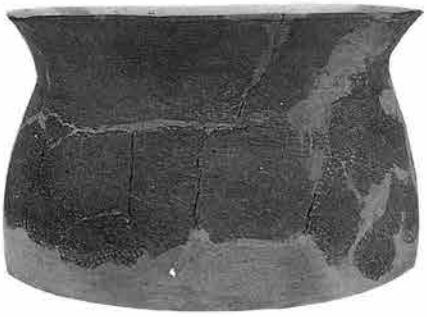
第8号住居址

332-1

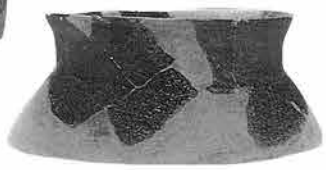
332-2

332-3

第7号住居址



332-1



332-4

332-5

第5～8号住居址出土土器

図版44

第9号住居址

333-1

333-2

333-3

333-4

第10号住居址

333-1

333-2

第11号住居址

333-1

333-2

333-3

333-5

333-6

333-3

333-4

333-5

333-4

333-7

333-8

333-9

333-10

333-6

333-7

333-5

333-6

333-7

第9～11号住居址出土土器

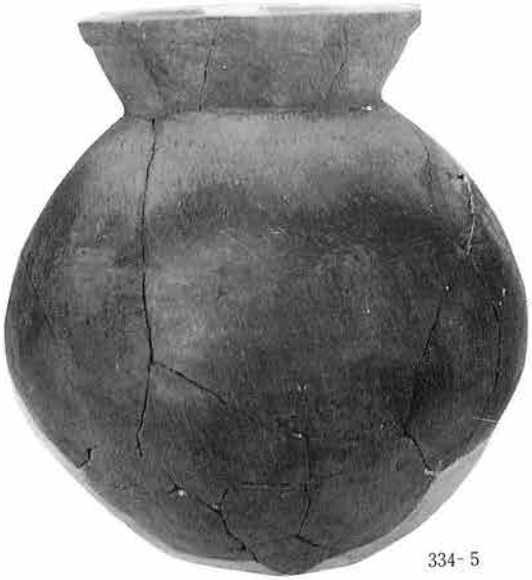
第13号住居址

334-1

334-2

334-3

334-4



334-5

第14号住居址

334-1

334-2

334-3

334-4

334-5

334-6

334-7

334-8

334-9

第13・14号住居址出土土器

図版46

第16号住居址

335-1

第19号住居址

335-1

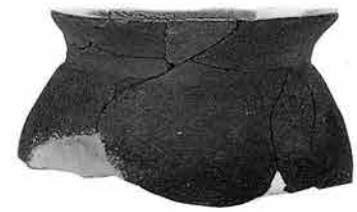
335-2

335-3

第20号住居址

335-1

335-2



335-3

335-4

335-5

第21号住居址

335-1

335-2

第22号住居址

335-1

335-2

335-3

第16・19～22号住居址出土土器

第23号住居址

336-1

336-2

336-3

336-4

第24号住居址

336-1

第25号住居址

336-1

336-3

336-2

第26号住居址

336-1

336-2

336-3

336-4

第23～26号住居址出土土器

図版48

第26号住居址

337-1

第28号住居址

337-1

第29号住居址

337-1

337-2

第30号住居址

337-2

337-1

第31号住居址

337-1

337-2

337-3

第32号住居址

337-1

337-2

337-3

337-4

337-5

337-6

337-7

337-8

337-9

337-10

337-11

337-12

337-13

337-14

337-15

第26・28～32号住居址出土土器

第32号住居址

338-1

338-2

338-3

338-4

338-5

第33号住居址

338-1

338-2

338-3

338-4

338-5

338-6

338-7

338-8

338-9

第37号住居址

338-1

338-2

第32・33・37号住居址出土土器

図版50

第37号住居址

339-1

339-15

第38号住居址

339-1

339-2

339-3

339-4

339-5

339-6

339-7

339-8

339-9

339-10

339-11

339-12

339-14

339-13

第39号住居址

339-1

339-2

339-3

第37～39号住居址出土土器

第40号住居址

340-1

340-2

340-5

第41号住居址

340-1

340-2

340-3

340-4

340-6

340-7

340-8

340-9

340-10

340-11

340-12

340-13

340-14

340-15

340-16

340-17

340-18

340-19

340-20

340-21

340-22

340-23

第42号住居址

340-1

第43号住居址

340-1

340-5

第44号住居址

340-1

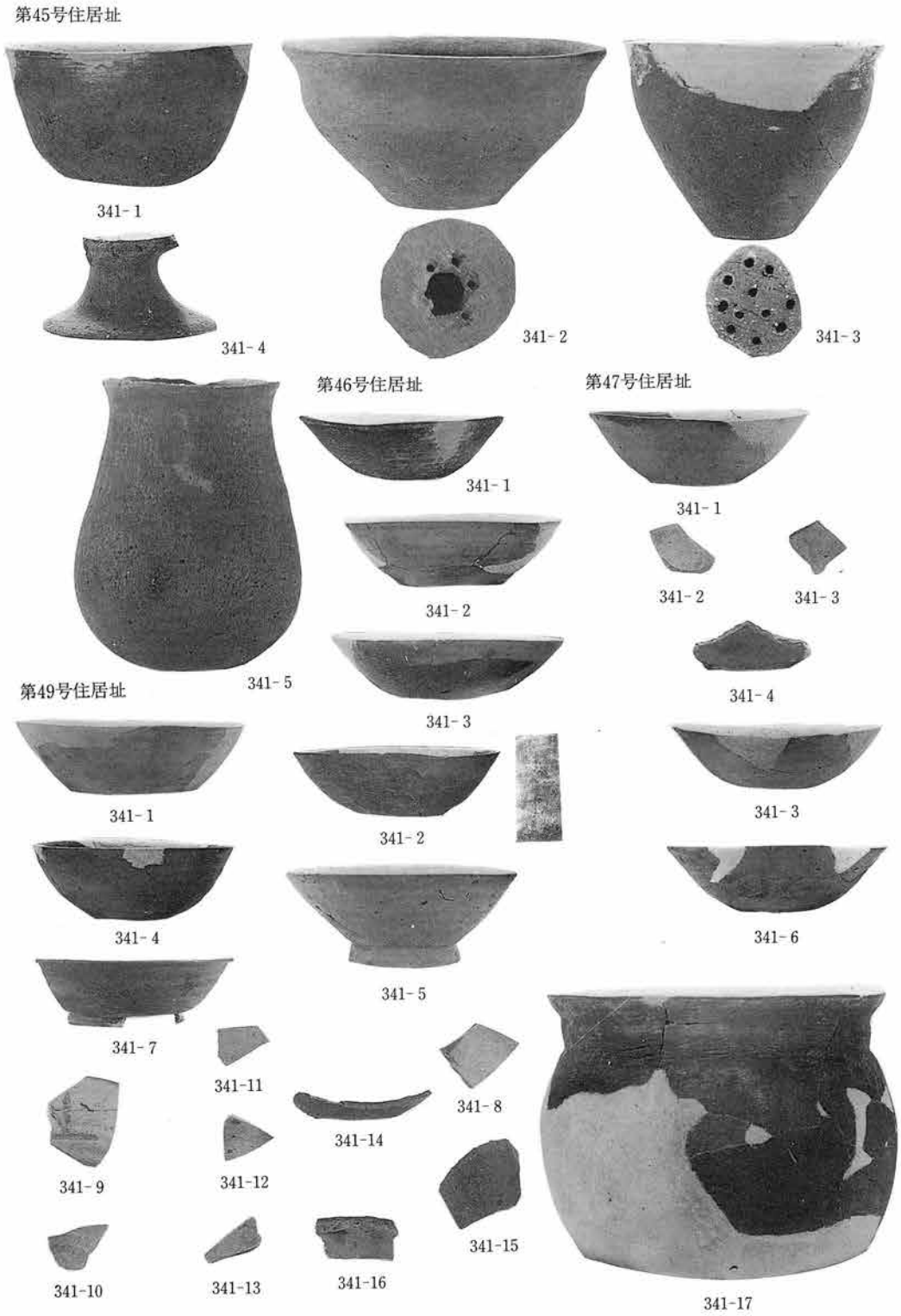
340-2

340-3

340-4

第40～44号住居址出土土器

図版52



第45～47・49号住居址出土土器

第49号住居址

342-1

342-2

第50号住居址

342-1

第53号住居址

342-1

第54号住居址

342-1

342-2

342-3

第55号住居址

342-1

342-2

342-2

第56号住居址

342-1

第49・50・53～56号住居址出土土器

図版54

第56号住居址

343-1

343-5

343-7

第60号住居址

343-1

343-2

343-3

343-4

343-6

343-8

第56・60号住居址出土土器

第62号住居址

344-1

344-2

344-3

344-4

344-5

344-6

344-7

344-8

344-9

344-10

344-11

344-12

344-13

344-14

344-15

344-16

第63号住居址

344-1

344-2

344-5

344-3

344-4

第64号住居址

344-1

344-6

344-7

344-8

第65号住居址

344-1

344-2

344-3

344-4

344-5

第62～65号住居址出土土器

図版56

第65号住居址

345-1

345-3

345-3

345-2

345-4

第66号住居址

345-1

345-2

345-5

第67号住居址

345-1

345-2

345-3

345-4

345-5

345-6

345-7

345-8

345-15

345-9

345-10

345-13

345-14

345-16

345-11

345-12

第65～67号住居址出土土器

第67号住居址

346-1

第68号住居址

346-1

346-4

第69号住居址

346-1

346-2

346-3

346-5

第70号住居址

346-1

346-2

第71号住居址

346-1

346-2

346-3

第67～71号住居址出土土器

図版58

第71号住居址

347-1

347-2

347-3

347-4

第74号住居址

347-1

347-2

347-3

347-4

347-5

第75号住居址

347-1

347-2

347-3

第71・74・75号住居址出土土器

第75号住居址

348-1

第76号住居址

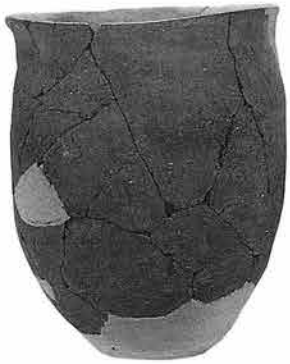
348-1

348-2

348-3

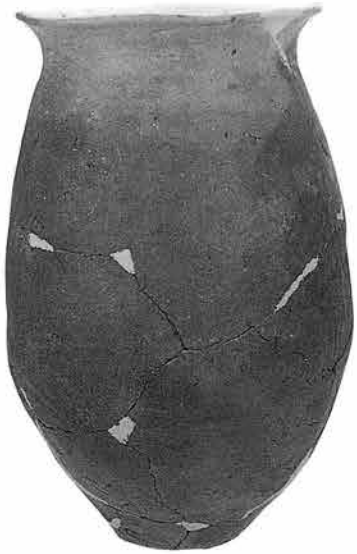
348-4

348-6



348-5

348-7



348-8

第75・76号住居址出土土器

図版60

349-1

349-2

349-3

349-4

349-5

349-6

349-7

349-8

349-9

349-10

349-11

349-12

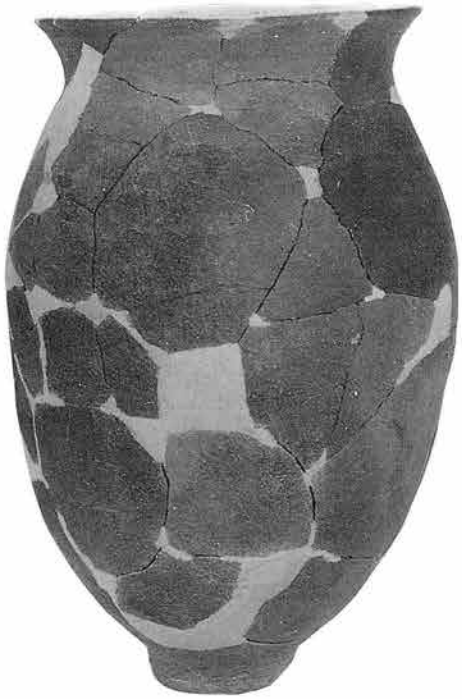
349-13

349-14

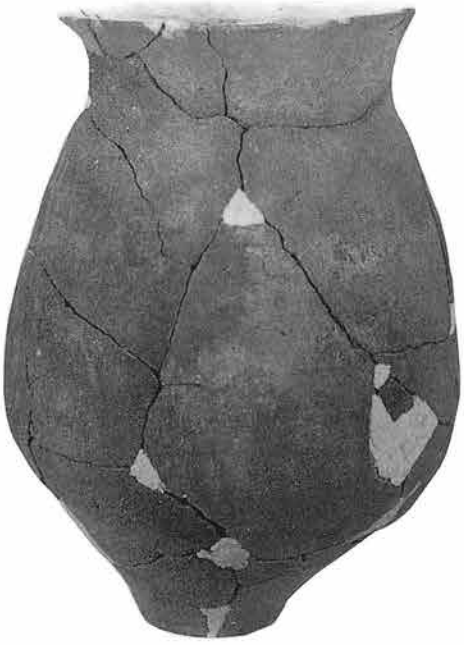
第77号住居址出土土器

350-1

350-2



350-3



350-4

第77号住居址出土土器

図版62

第78号住居址

351-1

351-2

351-3

351-4

351-5

351-6

351-7

351-8

351-9

第80号住居址

351-1

351-2

351-3

351-4

351-5

351-6

351-7

第78・80号住居址出土土器

第80号住居址

352-1

352-8

第81号住居址

352-1

352-2

352-3

352-4

352-5

352-6

352-7

352-9

352-10

第80・81号住居址出土土器

図版64

第81号住居址

353-1

353-2

第82号住居址

353-1

第83号住居址

353-1

353-3

353-2

第81～83号住居址出土土器

第84号住居址

354-1

354-2

354-3

354-4

354-5

354-6

354-7

354-8

354-9

第85号住居址

354-1

354-2

354-3

354-4

第84・85号住居址出土土器

図版66

第85号住居址

355-1

355-2

355-3

355-4

第89号住居址

355-1

355-2

第87号住居址

355-1

355-2

355-3

355-4

第90号住居址

355-1

第92号住居址

355-1

355-2

第93号住居址

355-1

355-2

355-3

第94号住居址

355-1

355-2

355-3

第85・87・89・90・92～94号住居址出土土器

第94号住居址

356-1

第97号住居址

356-1

356-2

356-4

356-3

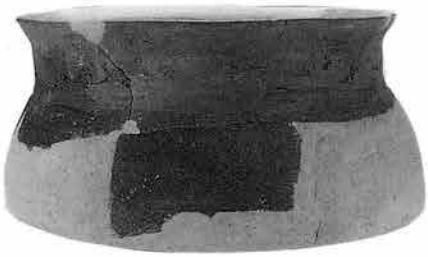
356-5

第96号住居址

356-1

356-2

356-3



356-6

第99号住居址

356-1

356-2

356-3

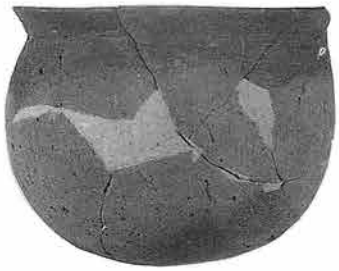
356-4

356-5

第94・96・97・99号住居址出土土器

図版68

第103号住居址



357-1

357-2

357-3

第105号住居址

357-1

357-2

第106号住居址

357-1

357-2

357-3

357-4

357-5

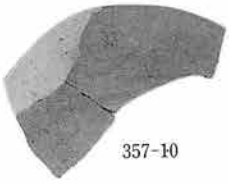
357-3

357-6

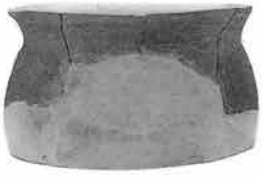
357-7

357-8

357-9



357-10



357-11

357-12

第103・105・106号住居址出土土器

第107号住居址

358-1

358-2

358-3

358-4

第108号住居址

358-1

第110号住居址

358-1

358-2

第113号住居址

358-1

358-2

358-3

358-4

第115号住居址

358-1

358-2

第116号住居址

358-1

第111号住居址

358-1

第107・108・110・111・113・115・116号住居址出土土器

図版70

第118号住居址

359-1

359-2

359-11

359-3

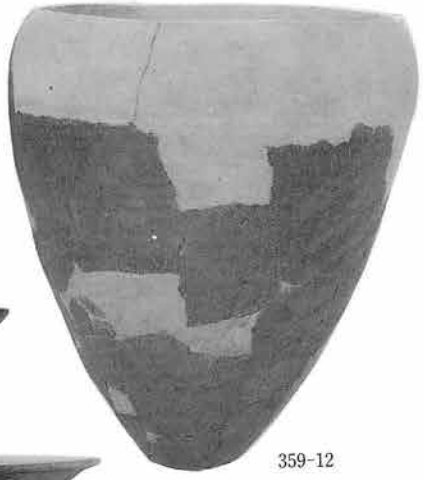
359-4

359-5

359-6

359-7

359-8


359-12

359-9

359-10

第６号掘立柱建物址

359-1

第１号土坑

359-1

自然流路

359-1

第21号掘立柱建物址

359-1

第５号土坑

359-1

359-3

第２号土坑

359-1

359-2

359-4

359-6

359-5

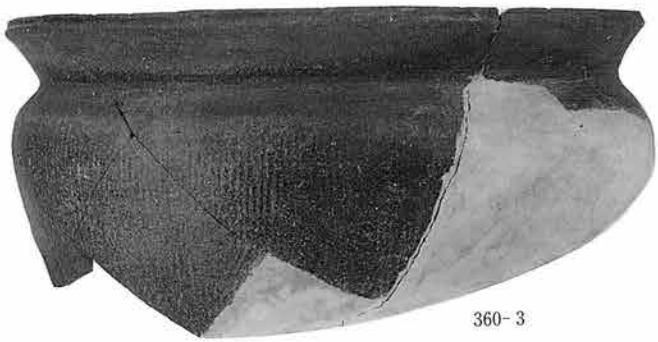
359-7

359-8

第118号住居址、第６・21号掘立柱建物址、自然流路、第１・２・５号土坑出土土器

360-1

360-2



360-3

360-4

360-5

第2号土坑出土土器

図版72

第2号土坑

361-1

第3号土坑

361-1

361-2

361-3

361-4

361-5

361-6

361-7

361-8

361-9

第4号土坑

361-1

361-2

361-3

第2～4号土坑出土土器

第4号土坑

362-1

362-2

362-3

遺構外

362-1

362-2

362-3

362-4

362-5

362-6

362-7

362-8

362-9

362-12

362-10

362-11

363-1

363-3

363-5

363-6

363-7

363-9

363-2

363-4

363-8

363-10

363-12

363-13

363-11

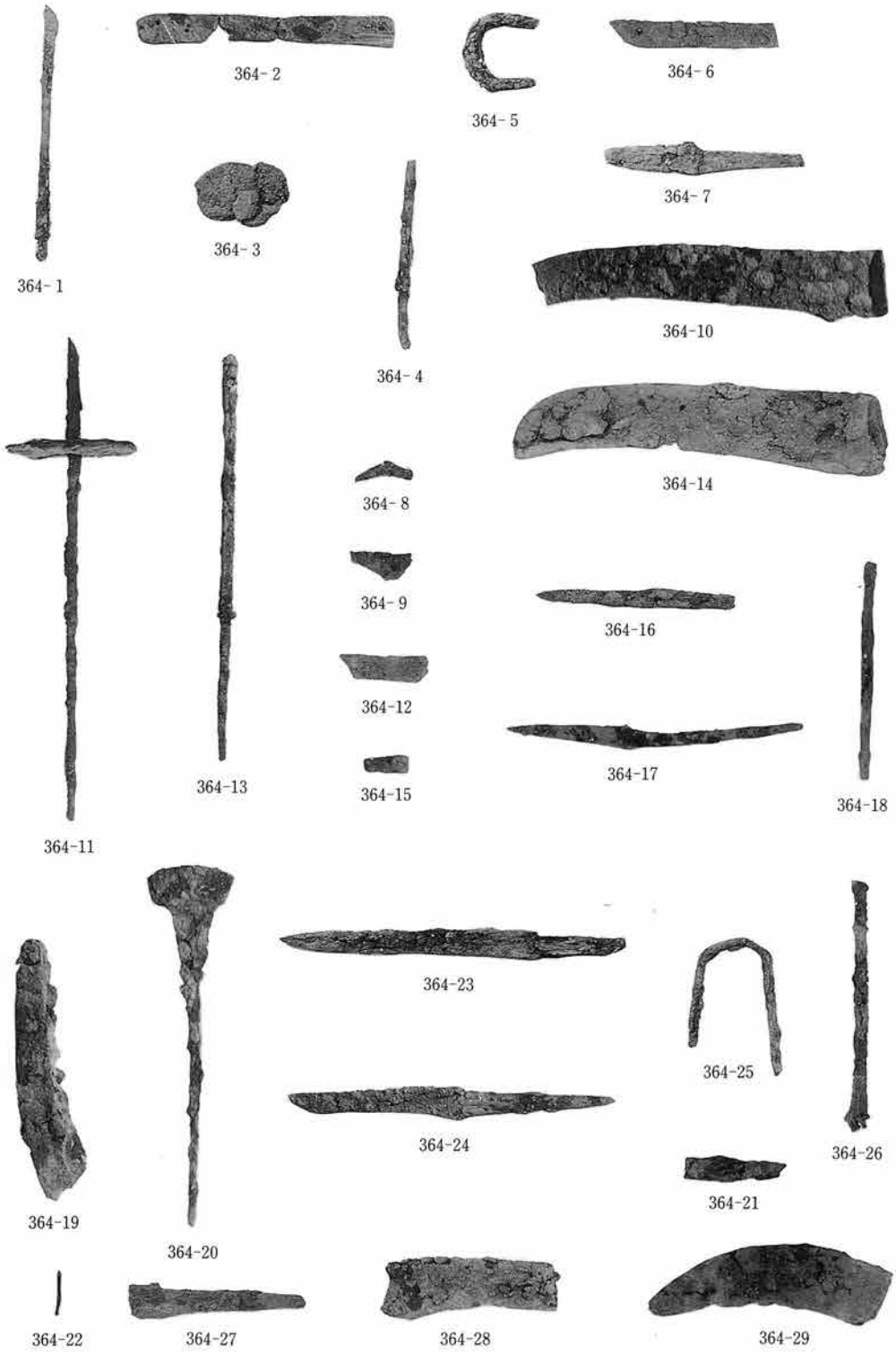
363-14

363-15

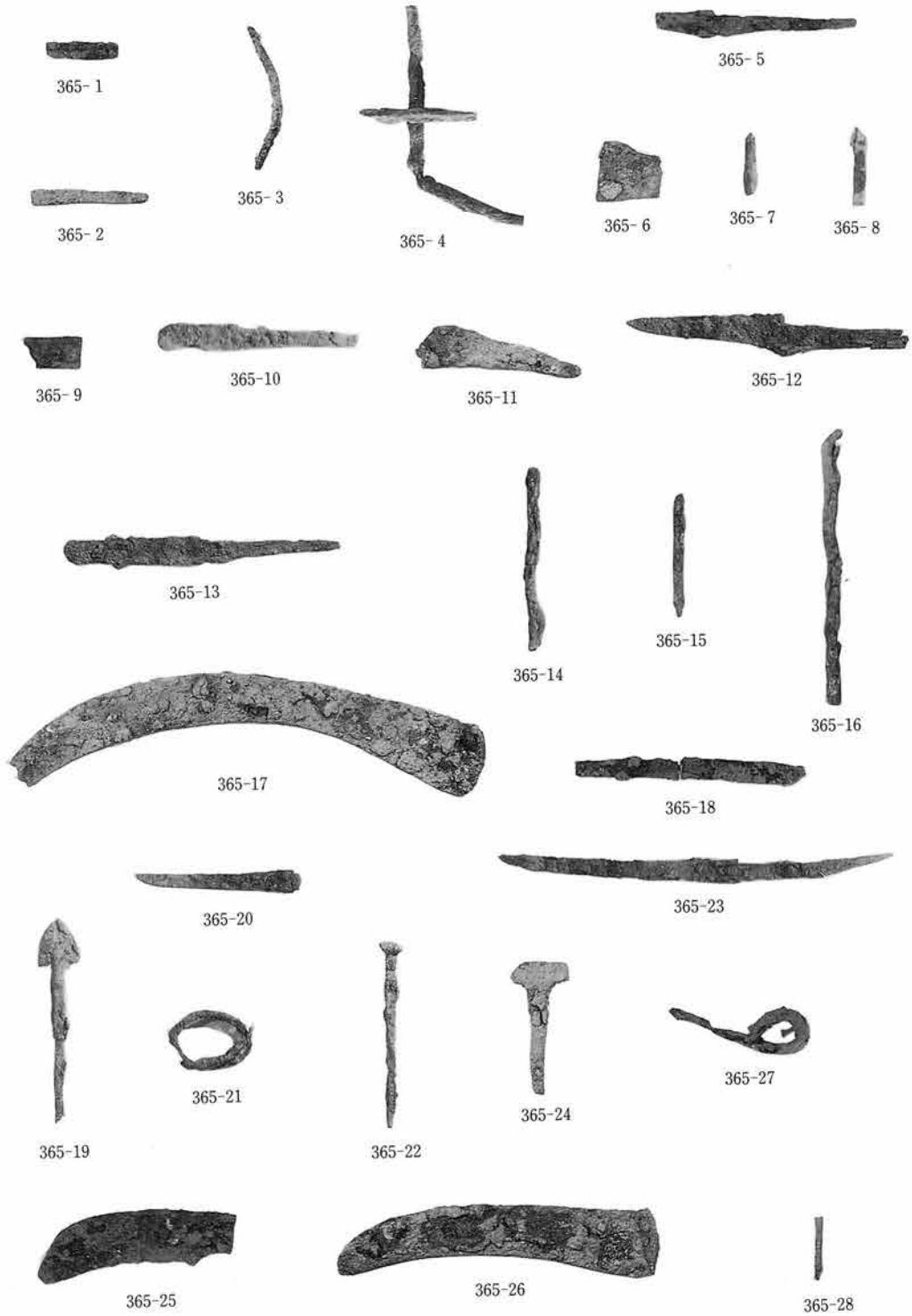
363-16

出土遺物

図版74

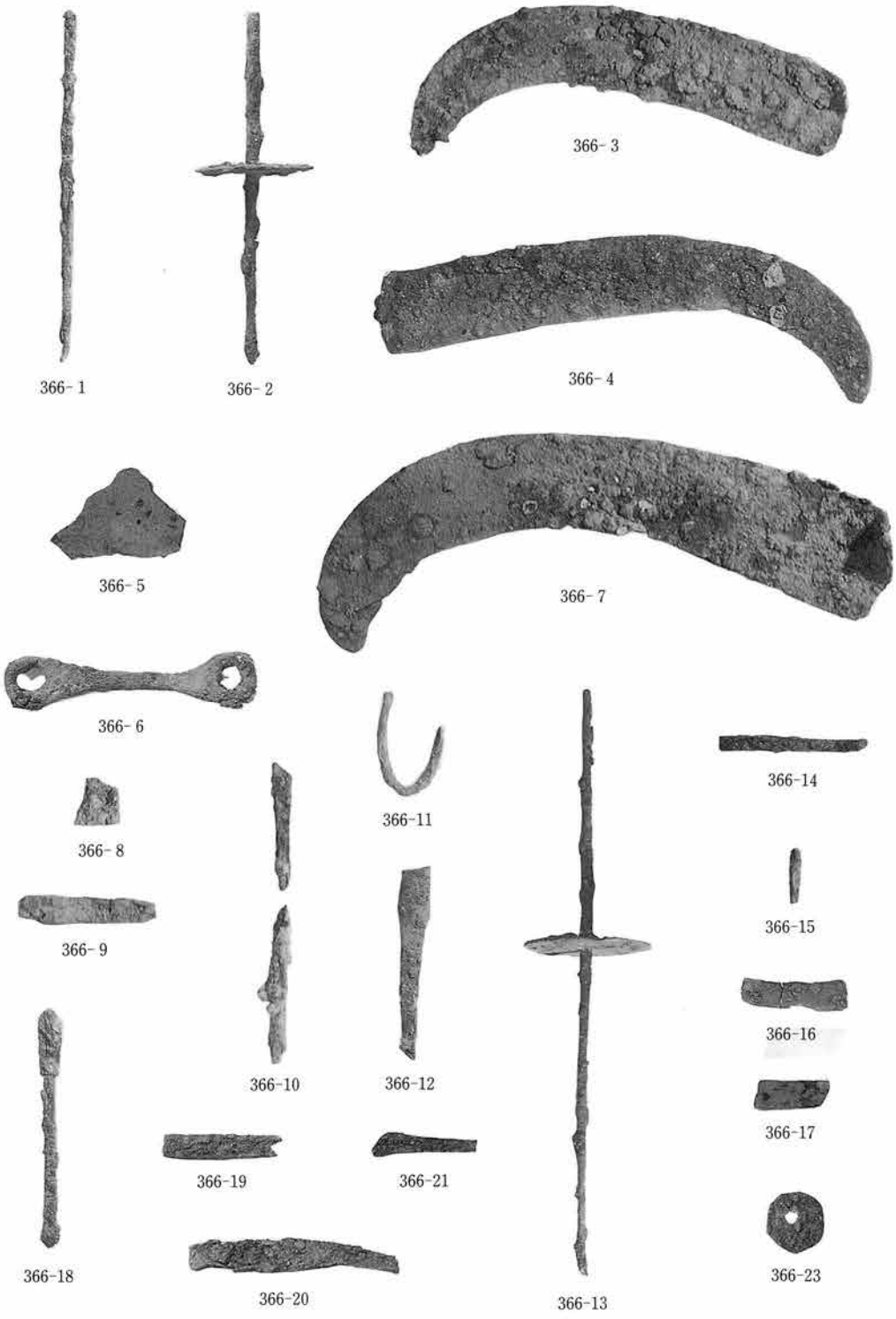

364-1
364-2
364-3
364-4
364-5
364-6
364-7
364-8
364-9
364-10
364-11
364-12
364-13
364-14
364-15
364-16
364-17
364-18
364-19
364-20
364-21
364-22
364-23
364-24
364-25
364-26
364-27
364-28
364-29

鉄 製 品

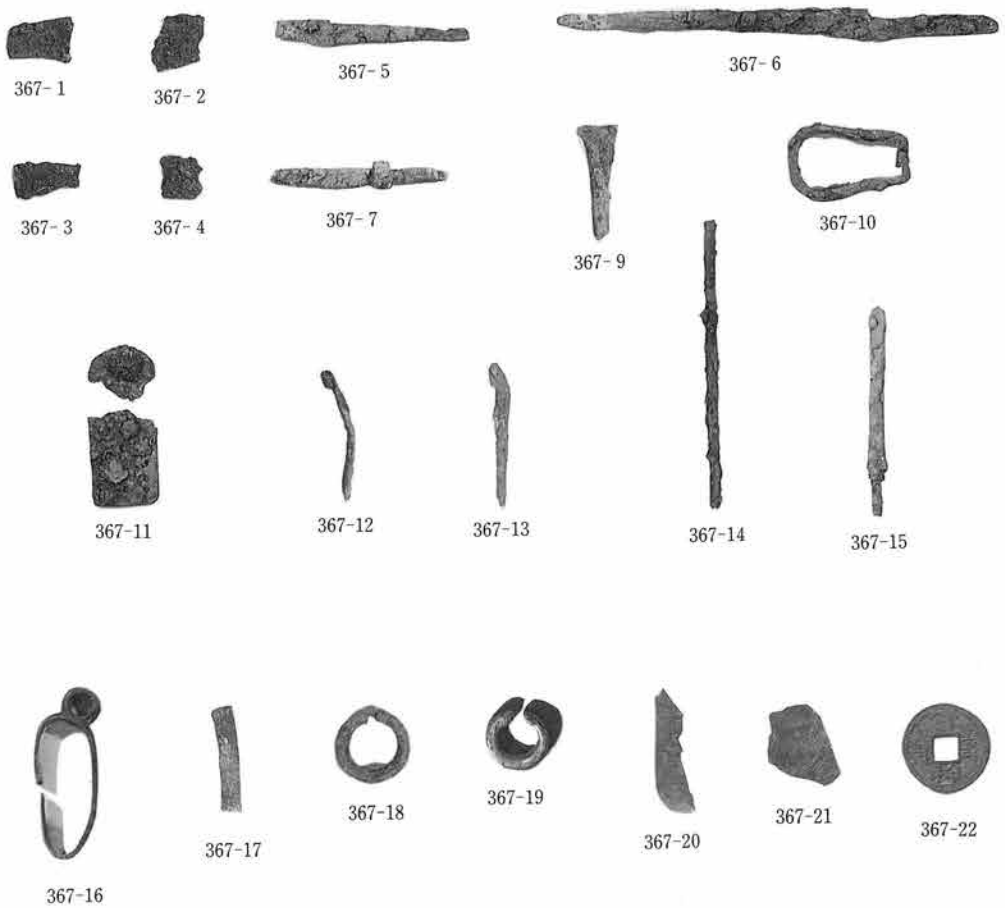

365-1
365-2
365-3
365-4
365-5
365-6
365-7
365-8
365-9
365-10
365-11
365-12
365-13
365-14
365-15
365-16
365-17
365-18
365-20
365-23
365-19
365-21
365-22
365-24
365-27
365-25
365-26
365-28

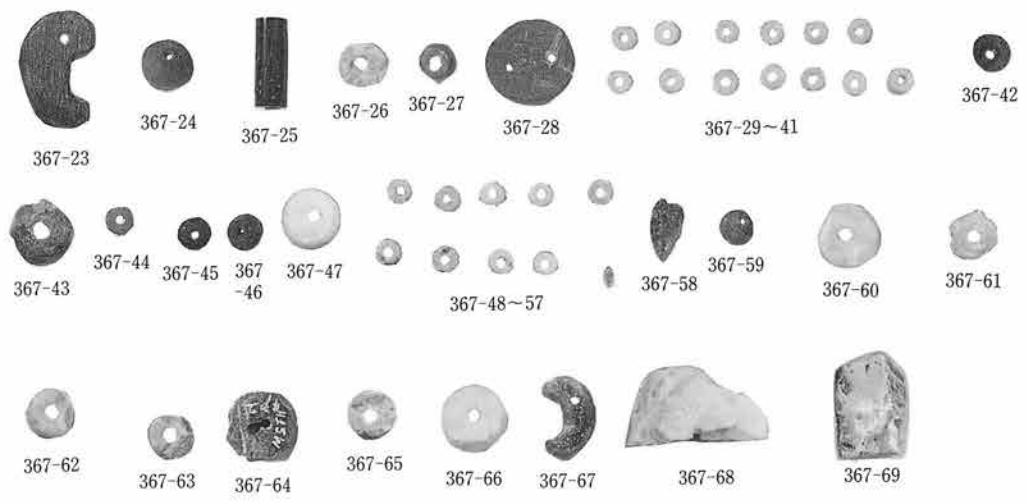
鉄製品

図版76


366-1
366-2
366-3
366-4
366-5
366-6
366-7
366-8
366-9
366-10
366-11
366-12
366-13
366-14
366-15
366-16
366-17
366-18
366-19
366-20
366-21
366-23

鉄製品


367-1
367-2
367-5
367-6
367-3
367-4
367-7
367-9
367-10
367-11
367-12
367-13
367-14
367-15
367-16
367-17
367-18
367-19
367-20
367-21
367-22


367-23
367-24
367-25
367-26
367-27
367-28
367-29～41
367-42
367-43
367-44
367-45
367-46
367-47
367-48～57
367-58
367-59
367-60
367-61
367-62
367-63
367-64
367-65
367-66
367-67
367-68
367-69

出土遺物

図版78

368-1

368-2

368-3

368-4

368-5

368-6

368-7

368-8

368-9

368-10

石製品・土製品

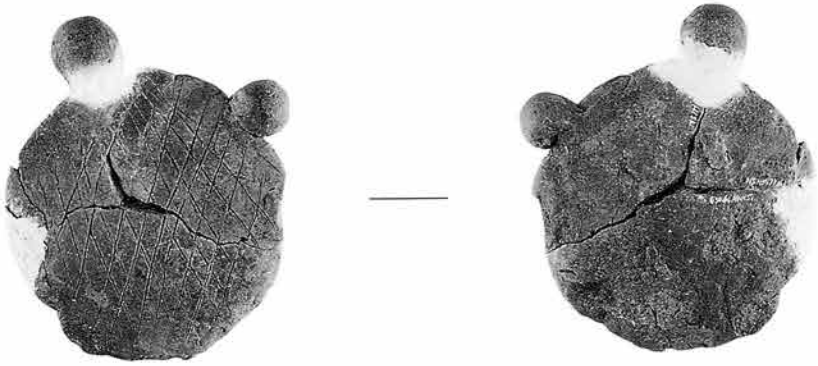
369-1

369-2

369-5

369-3

369-4



369-6

図版80

370-1

370-2

370-3

370-5

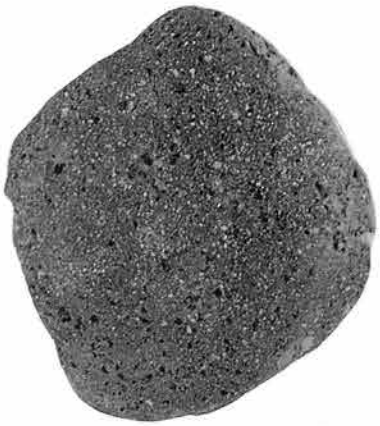
370-6

370-7

370-4

370-8

370-9



371-1

371-2

371-3

371-4

371-5

371-6

371-7

石 製 品

371-8

371-9

371-10

371-11

371-12

372-1

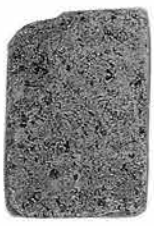
372-2

372-3

372-4

372-5

372-6



372-7

372-8

372-9

石製品

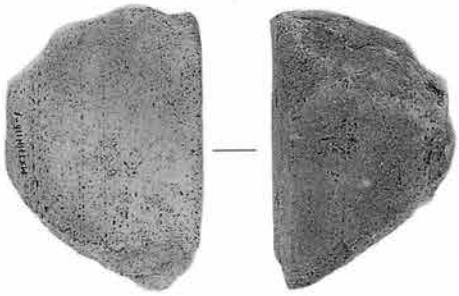
図版82

373-1

373-2

373-3

373-4

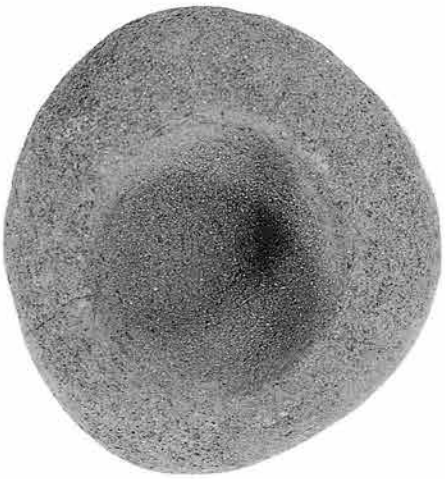


373-5

373-6

373-7

373-8



374-1

374-2

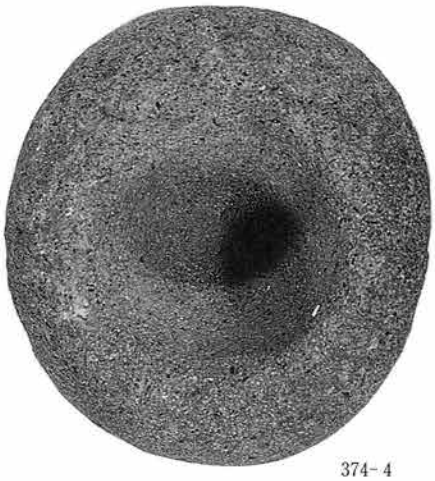
石製品

374-3

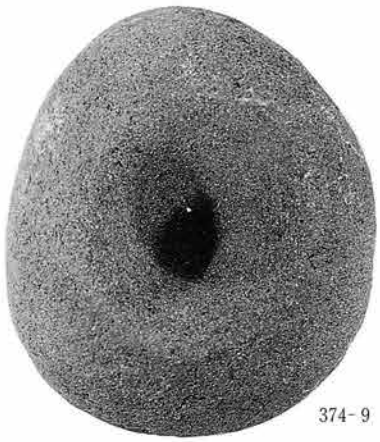
374-5

374-7

374-6



374-4



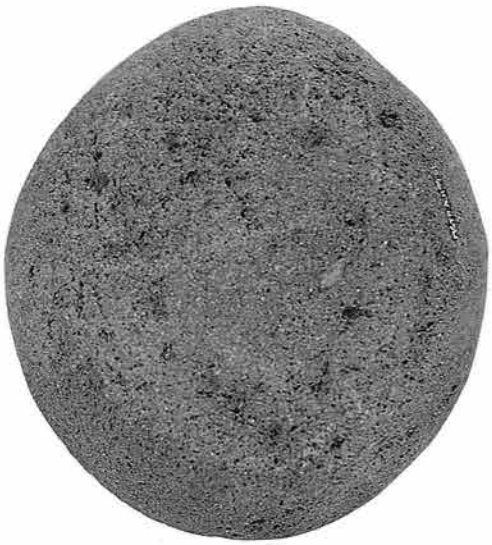
374-9

374-8

石 製 品

図版84

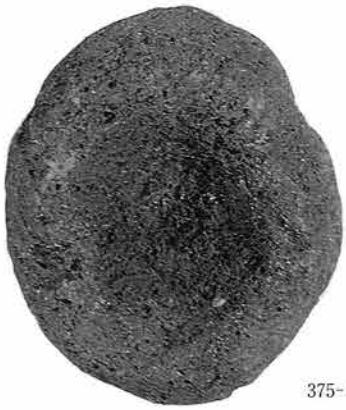
375-1



375-2

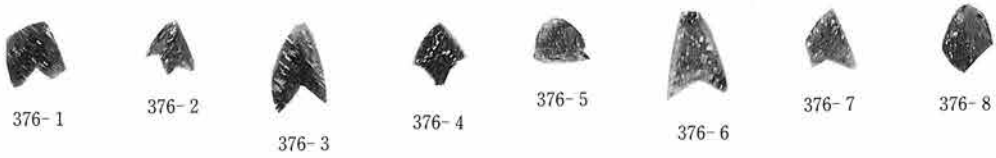
375-3

375-4



375-5

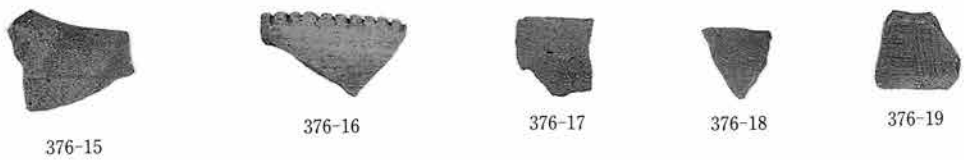
石 製 品



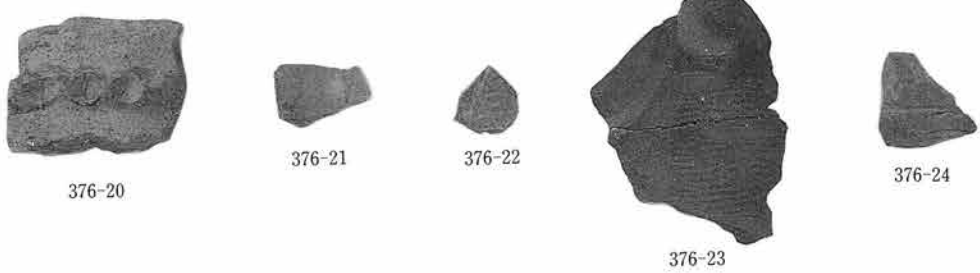
376-1 376-2 376-3 376-4 376-5 376-6 376-7 376-8

376-9 376-10 376-11

376-12 376-13 376-14



376-15 376-16 376-17 376-18 376-19



376-20 376-21 376-22 376-23 376-24

376-25 376-26 376-27 376-28

出土遺物

図版86

377-1

377-3

377-2

377-5

377-6

377-4

377-7

377-8

377-9

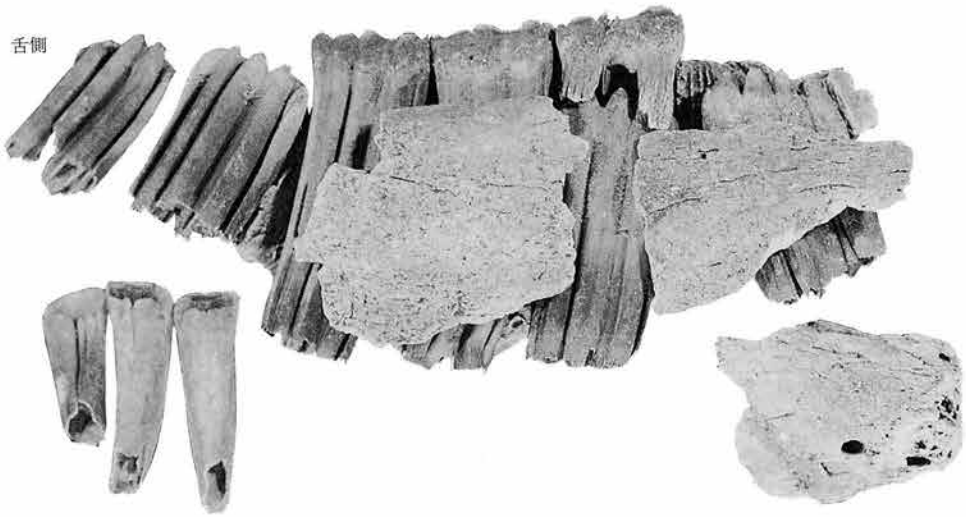
377-12

377-10

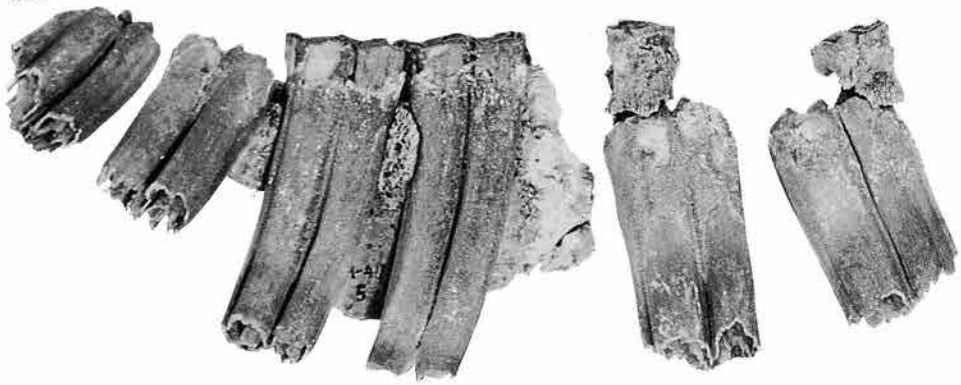
377-11

石　器

L　舌側



R　頬側



ウマ（SB47No. 5）

ウシ

SB63S

SB65

SB49N

SB67No. 4

SB67S

動物遺体

ウマ

SB63№6

SB46

ST28P$_1$

SB109

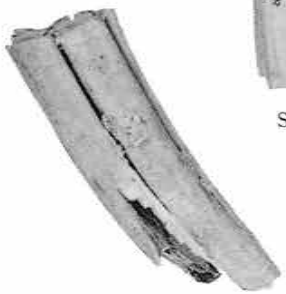
SB67(N)

SB67(S)

SB67№6

SB49№6

SB22№2



SB49

ヒト
SK04

鹿角
SB85

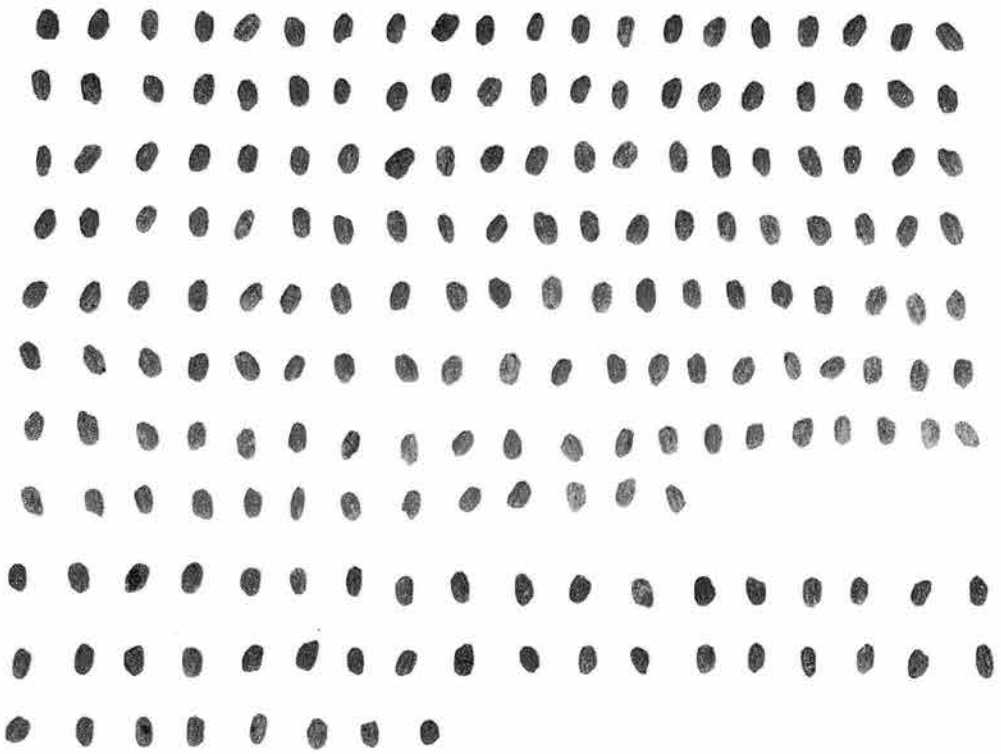
イノシシ雄
左側下顎犬歯破片
SB14

イノシシ左側
下顎切歯
SB14

カジキ類椎体
SB59

マルタニシ
SK03

動物遺体



第40号住居址出土炭化米（一部）

図版90

第1号住居址

437-1

第2号住居址

437-1

437-2

437-3

第3号住居址

437-1

437-2

第4号住居址

437-3

第9号住居址

437-1

第7号住居址

437-1

437-2

437-3

第4号住居址

437-1

437-2

437-4

437-5

第11号住居址

437-1

437-2

第1～4・7・9・11号住居址出土土器

第11号住居址

438-1

438-2

第12号住居址

438-1

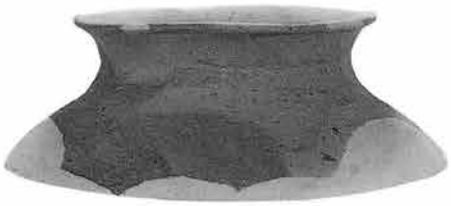
438-2

438-3

438-4

438-5

438-7



438-6

第11・12号住居址出土土器

図版92

第13号住居址

439-1

439-5

439-2

439-6

439-7

439-3

439-4

第14号住居址

439-1

439-2

439-3

第16号住居址

439-1

439-2

439-3

第17号住居址

439-1

439-2

439-3

439-4

第13・14・16・17号住居址出土土器

第18号住居址

440-1

440-2

440-3

440-4

440-5

第20号住居址

440-1

440-2

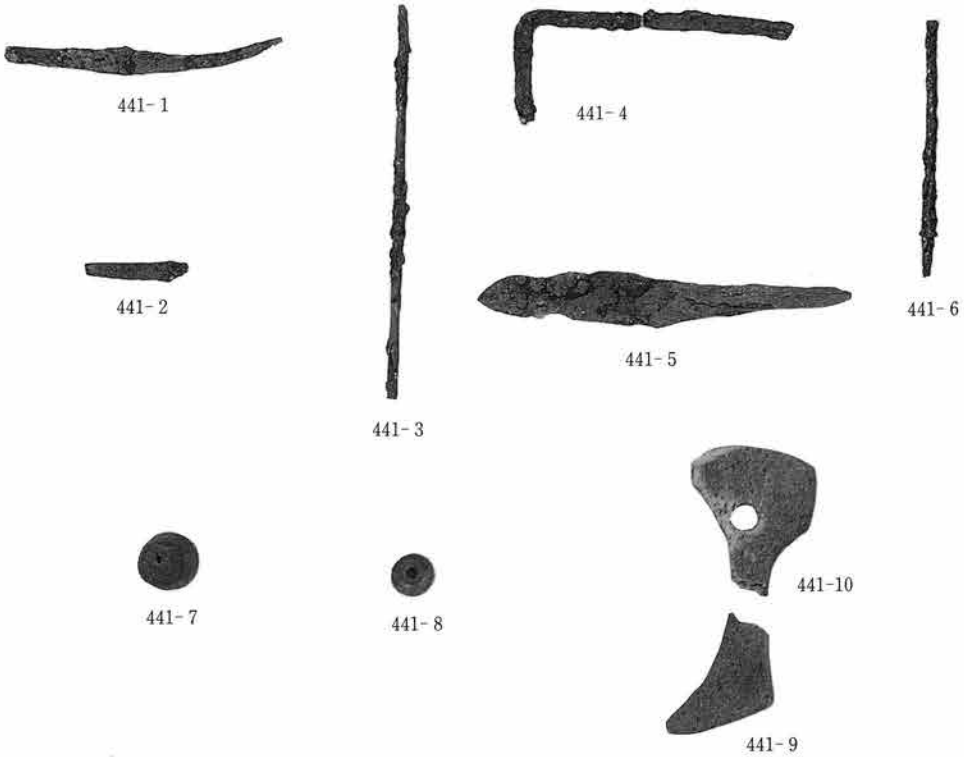
440-3

第1号土坑

440-1

第18・20号住居址、第1号土坑出土土器

図版94


441-1
441-2
441-3
441-4
441-5
441-6
441-7
441-8
441-9
441-10
441-11
441-12
441-13
441-14
441-15
441-16
441-17
441-18

出土遺物

第1号住居址

535-1

535-2

535-3

535-4

535-5

535-6

535-7

535-8

第4号住居址

535-1

535-2

第2号住居址

535-1

535-2

535-3

535-4

第5号住居址

535-1

535-2

535-3

535-4

535-5

第1・2・4・5号住居址出土土器

図版96

第6号住居址

536-1

536-2

536-3

536-4

536-5

536-6

536-7

536-8

536-9

第7号住居址

536-1

536-2

536-3

第8号住居址

536-1

第10号住居址

536-1

536-2

536-3

536-4

536-5

第11号住居址

536-1

536-2

第6～8・10・11号住居址出土土器

第11号住居址

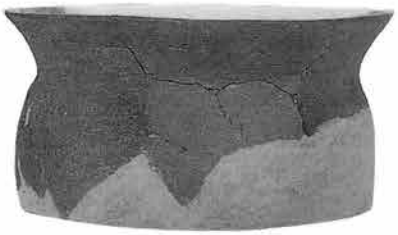
537-1

537-2

537-3

537-4

537-5



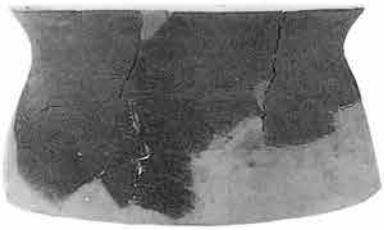
537-6

第12号住居址

537-1

537-2

537-3



537-4

537-5

第13号住居址

537-1

537-2

537-3

537-4

537-5

537-6

537-7

第11～13号住居址出土土器

図版98

第13号住居址

538-1

538-2

第14号住居址

538-1

538-2

第16号住居址

538-1

第17号住居址

538-1

538-2

538-3

538-4

538-5

538-6

第13・14・16・17号住居址出土土器

第18号住居址

539-1

第22号住居址

539-1

539-2

539-3

539-2

第19号住居址

539-1

539-2

539-3

539-4

539-5

第18・19・22号住居址出土土器

第22号住居址

540-1

第28号住居址

540-1

540-2

第30号住居址

540-1

540-2

第22・28・30号住居址出土土器

第30号住居址

541-1

第35号住居址

541-1

541-2

541-3

第33号住居址

541-1

第7号掘立柱建物址

541-1

第15号掘立柱建物址

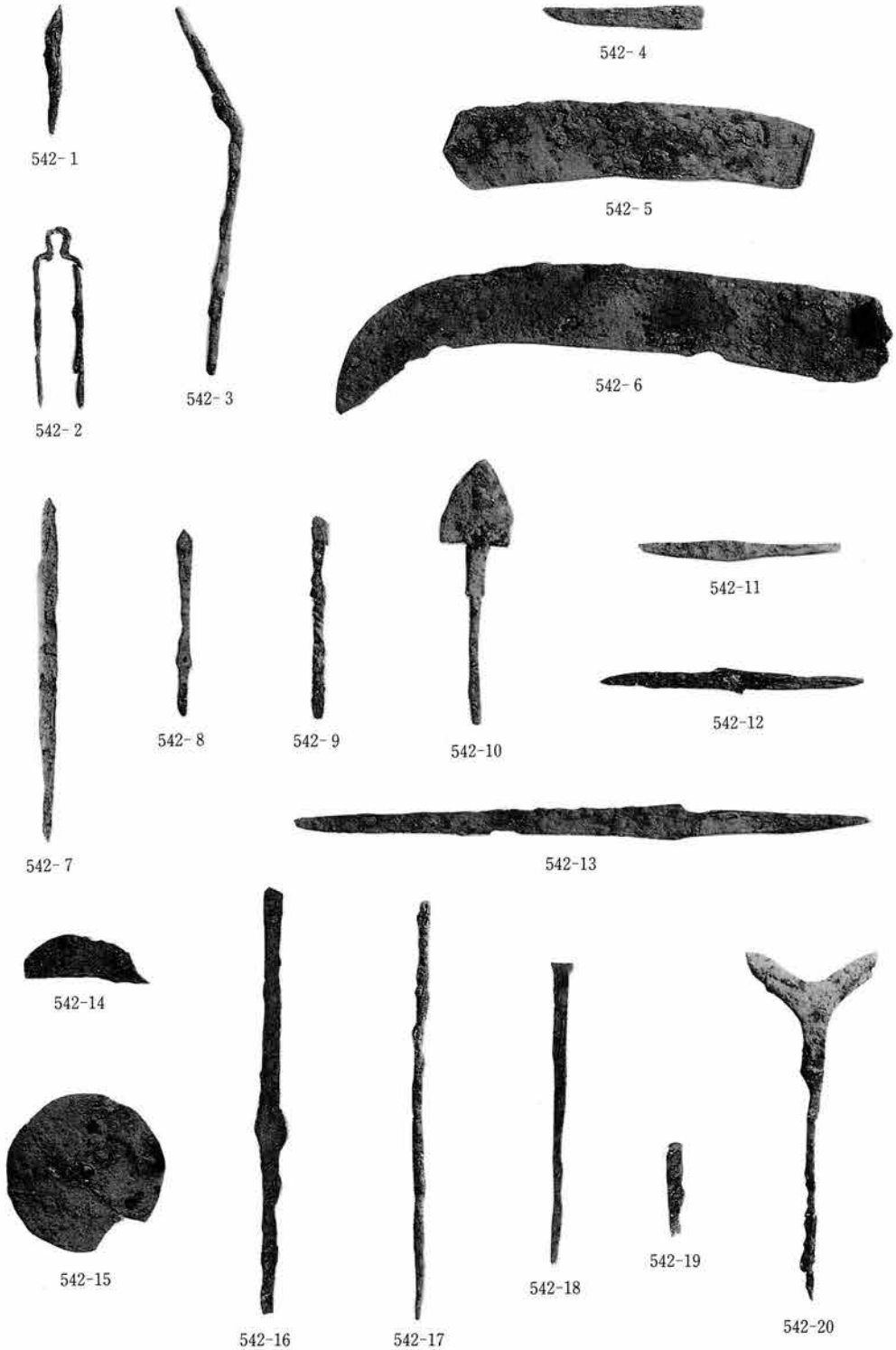
541-1

遺構外

541-1

第30・33・35号住居址、第7・15号掘立柱建物址、遺構外出土土器

図版102


542-1
542-2
542-3
542-4
542-5
542-6
542-7
542-8
542-9
542-10
542-11
542-12
542-13
542-14
542-15
542-16
542-17
542-18
542-19
542-20

鉄製品

543-1

543-2

543-8

543-3

543-4

543-5

543-6

543-7

543-9

543-10

543-11

543-12

金属製品・石製品

544-1

544-2

544-3

544-4

544-5

544-6

544-7

544-8

544-9

石 製 品

545-1

545-2

545-3

545-4

545-5

545-6

545-7

545-8

545-9

545-10

545-11

545-12

545-13

545-14

545-15

545-16

545-17

545-18

545-19

545-20

545-21

545-22

545-23

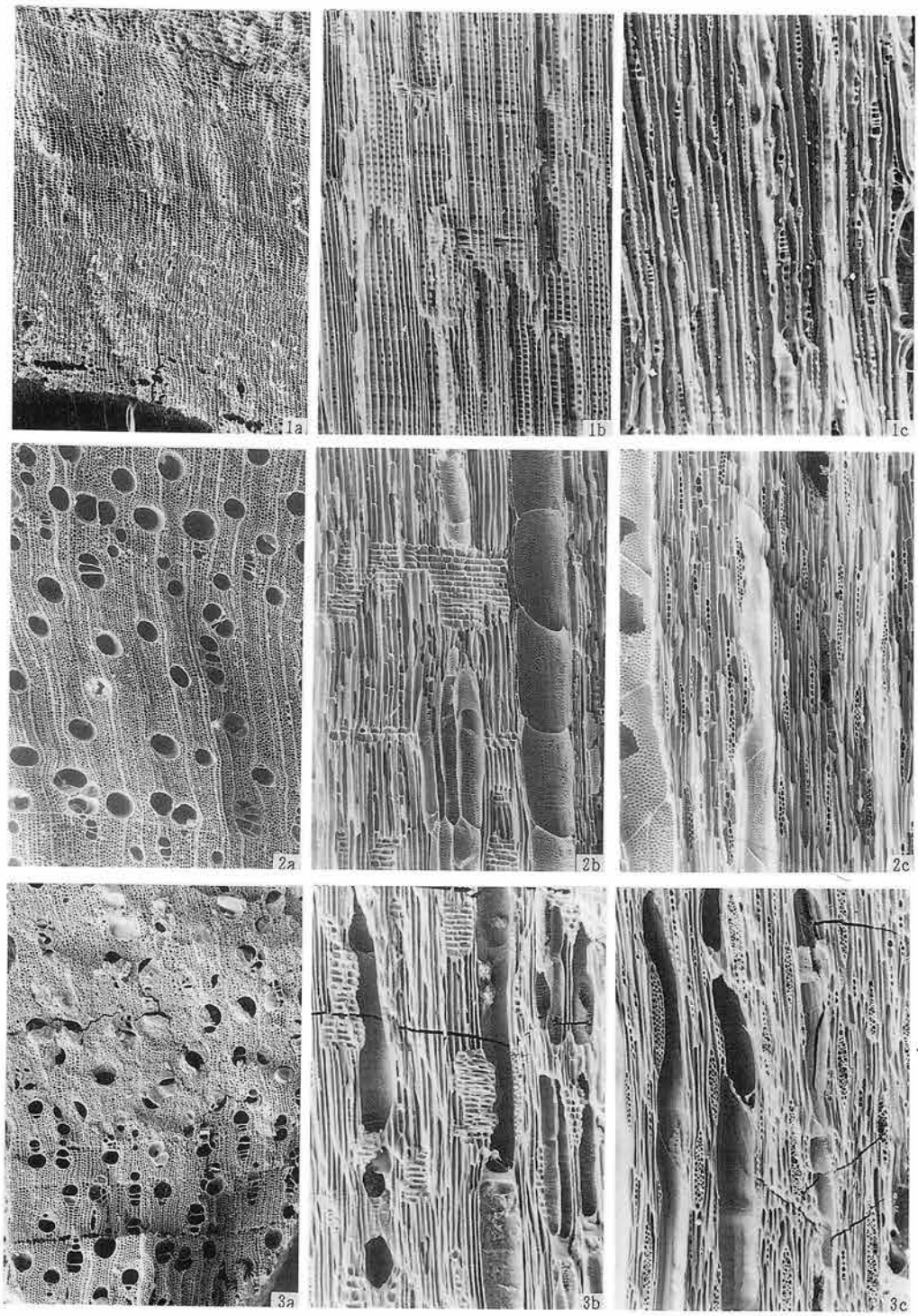
545-24

545-25

545-26

縄文土器片・弥生土器片

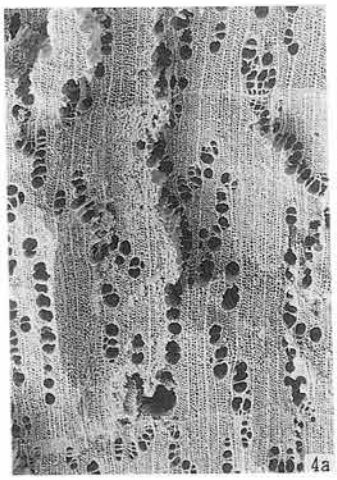
図版106

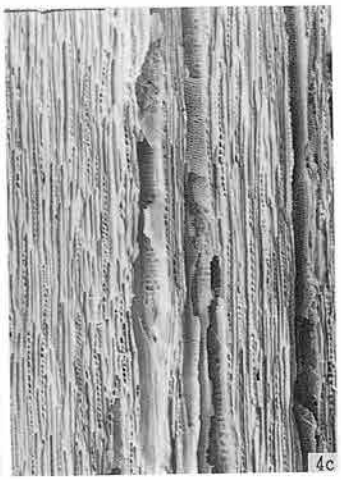


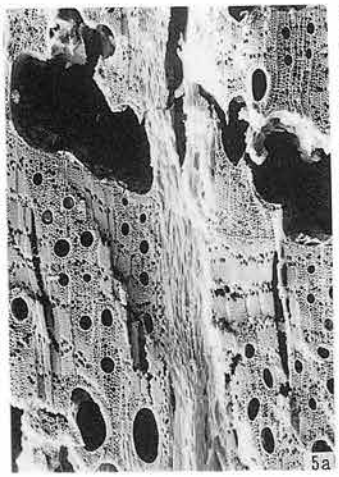
1．カラマツまたはトウヒ属の一種（No.23a）
2．オニグルミ（No.80）
3．カバノキ属の一種（No.21）
a：木口，b：柾目，c：板目

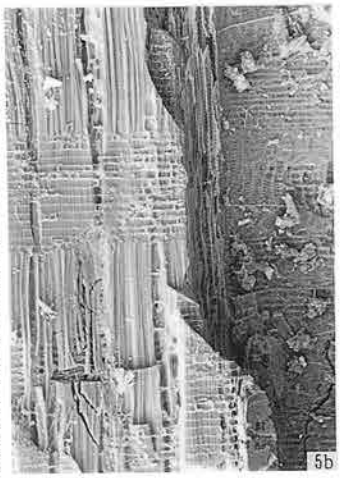
200μm：a
200μm：b,c

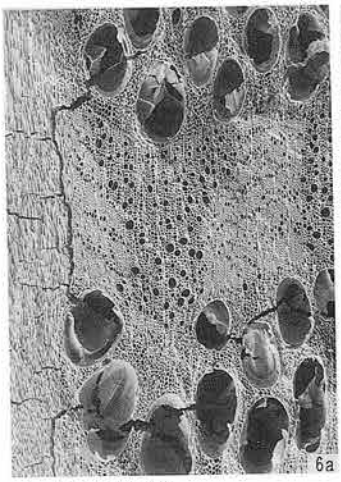
材の顕微鏡写真(1)

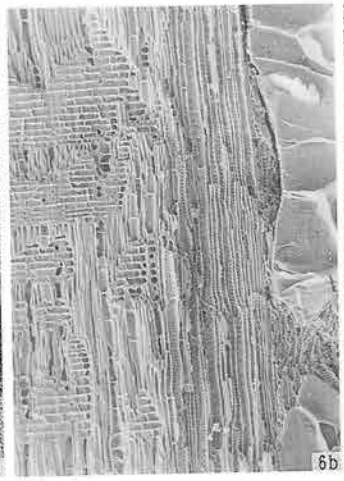


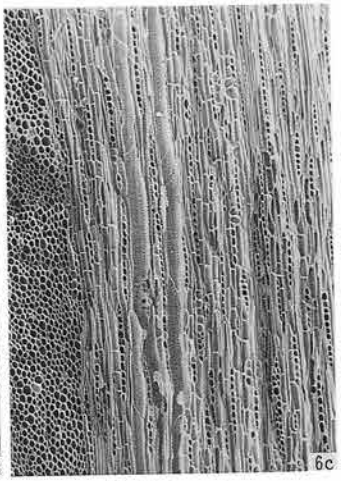








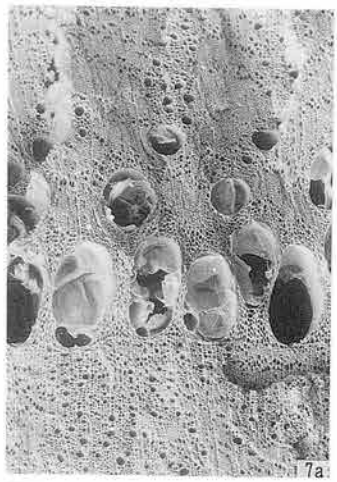


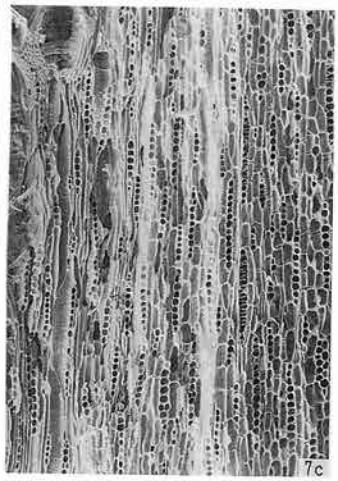


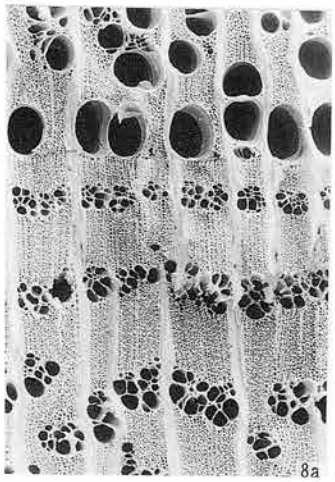
4．アサダ（No.76）
5．コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種（No.58）
6．コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種（No.67）
a：木口，b：柾目，c：板目

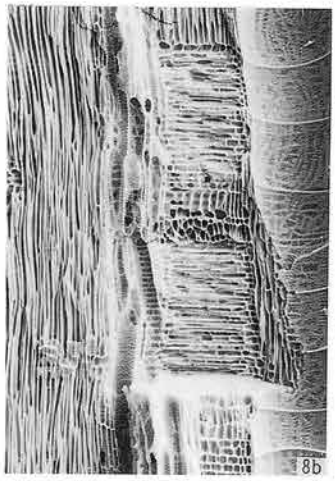
200μm：a
200μm：b,c

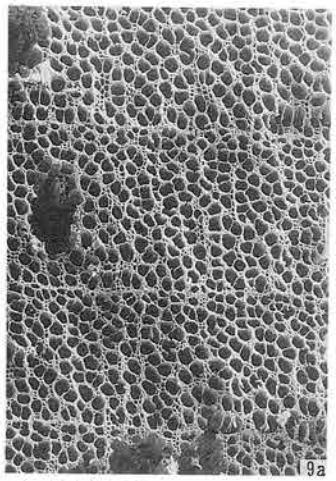
材の顕微鏡写真(2)







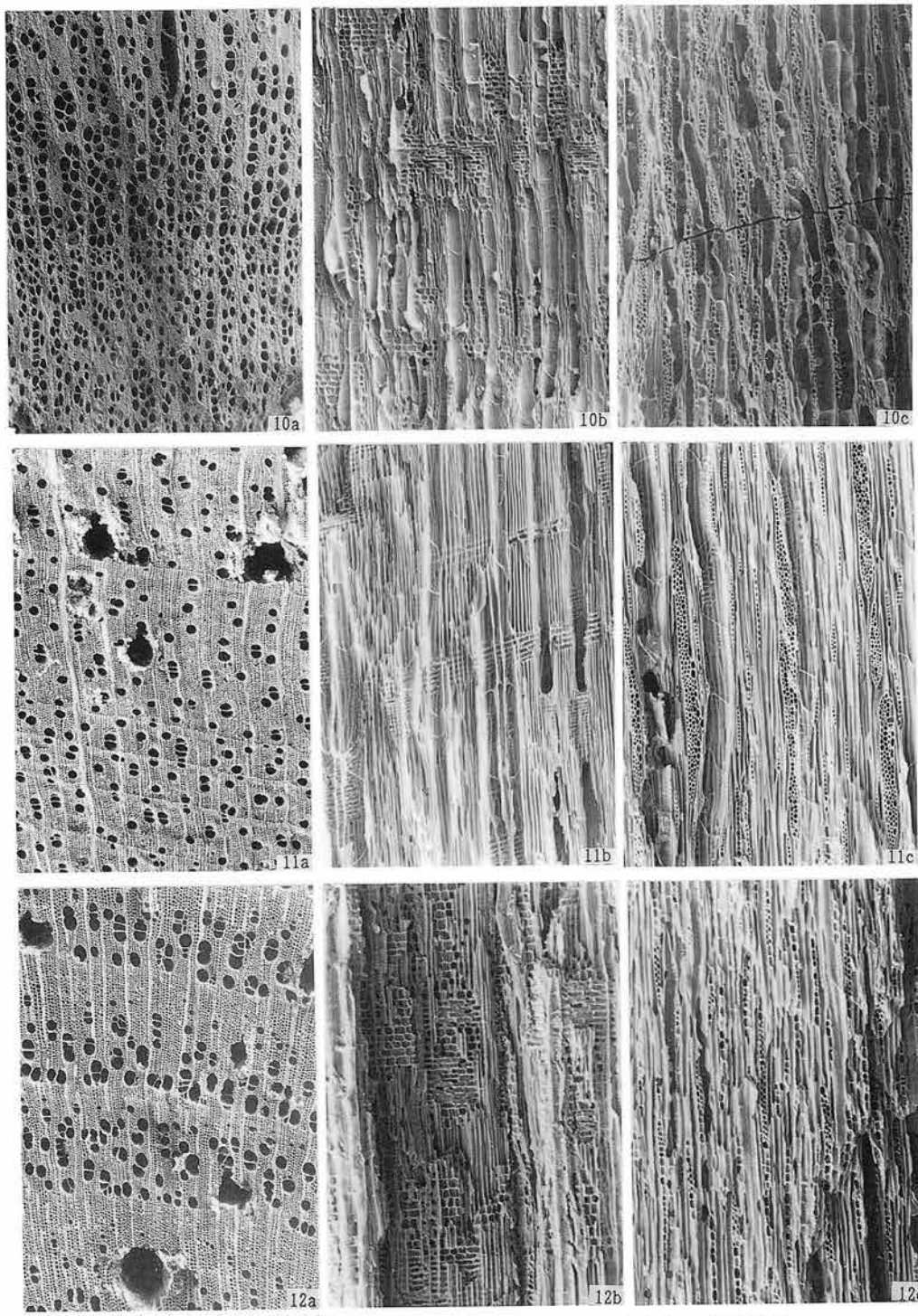




7．クリ（No.44）
8．エノキ属の一種（No.20）
9．カツラ（No.4）
a：木口，b：柾目，c：板目

200μm：a
200μm：b,c

材の顕微鏡写真(3)

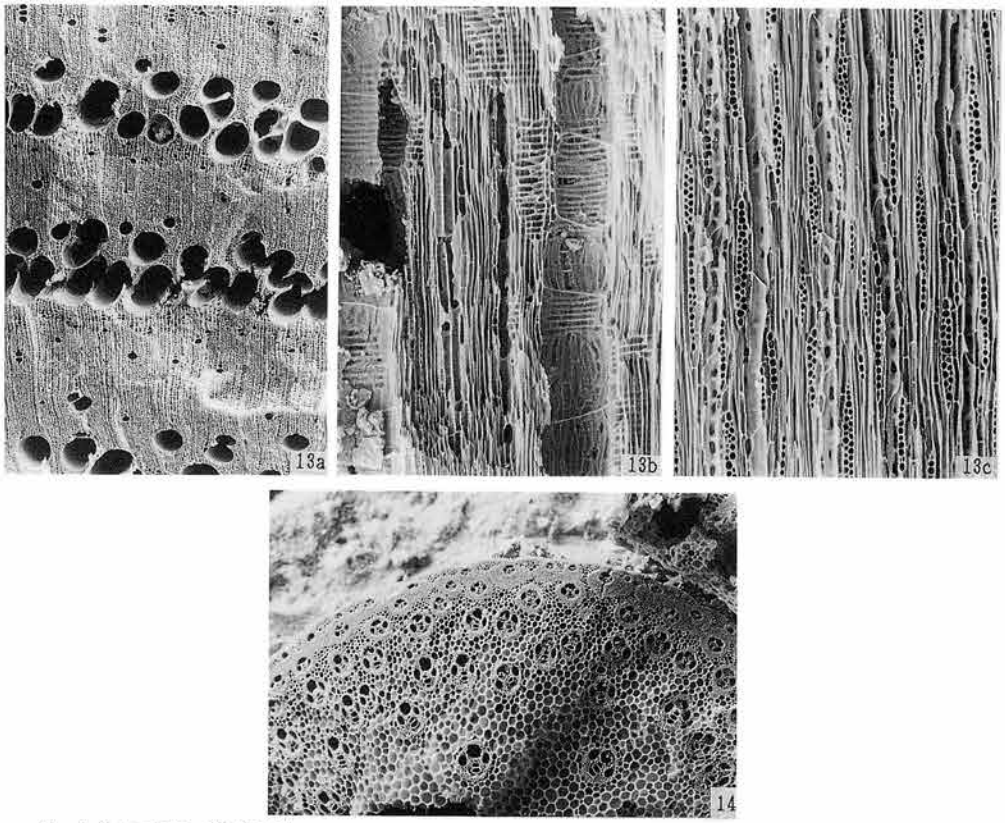


10. サクラ属サクラ亜属の一種（No.75）
11. カエデ属の一種（No.91）
12. エゴノキ属の一種（No.23c）
a：木口，b：柾目，c：板目

200μm：a
200μm：b,c

材の顕微鏡写真(4)

図版110



13. トネリコ属の一種 (No.13)
14. イネ科タケ亜科の一種 (No.48)
a：木口，b：柾目，c：板目，14：横断面

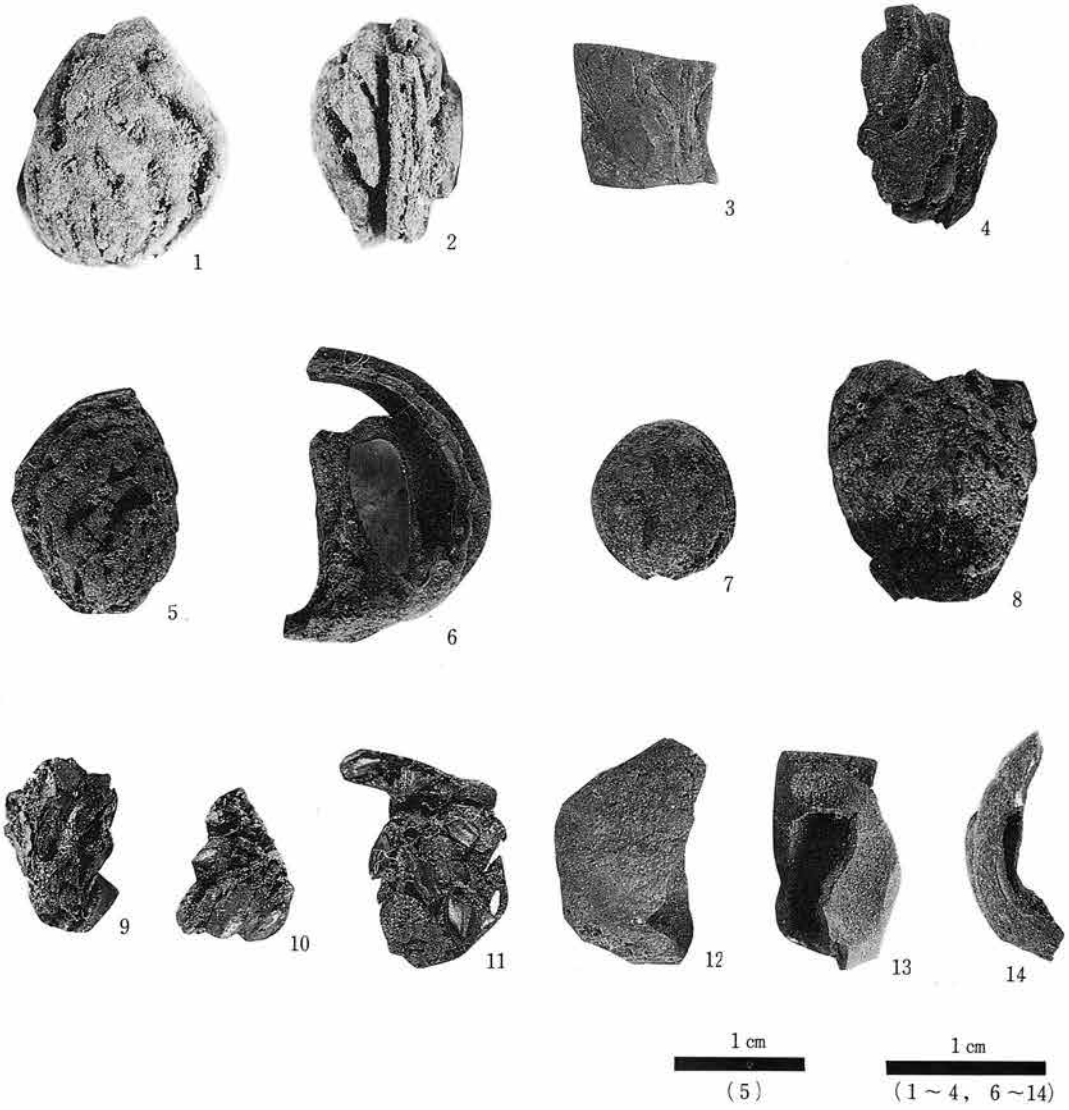
200μm：a,14
200μm：b,c

材の顕微鏡写真(5)

1・2 イネ（胚乳；炭化米）

1mm

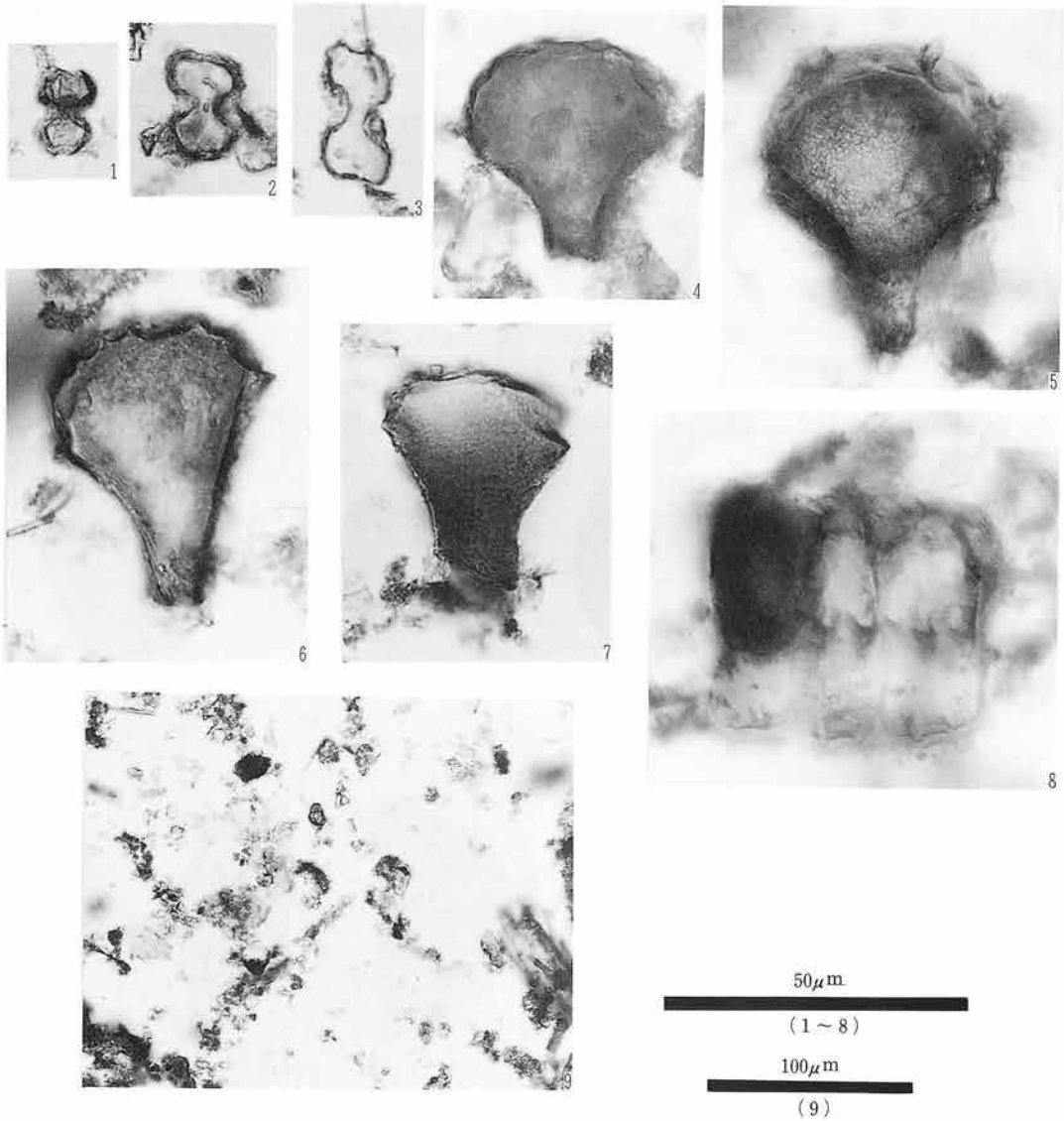
種実遺体(1)



1・2．モモ（東下原遺跡；SB03カマド）
3．オニグルミ（竹花遺跡；SB21S）
4．モモ（竹花遺跡；SB48N）
5．モモ（竹花遺跡；SB49）
6．オニグルミ（竹花遺跡；SB53カマド）
7．スモモ（竹花遺跡；SB62）
8．モモ（竹花遺跡；SB74カマド）
9～11．イネ（竹花遺跡；SB65）
12～14．オニグルミ（竹花遺跡；SB85N）

種実遺体(2)

図版112



1．イネ属短細胞珪酸体（SK03灰）
2．キビ族短細胞珪酸体（SK03灰）
3．ススキ属短細胞珪酸体（SK03灰）
4．イネ属機動細胞珪酸体（SK03灰）
5．イネ属機動細胞珪酸体（SK03灰）
6．イネ属機動細胞珪酸体（SK03灰）
7．タケ亜科機動細胞珪酸体（SK03灰）
8．イネ属機動細胞珪酸体列（SK03灰）
9．状況写真（SK03灰）

三子塚遺跡群　　宮ノ反A遺跡群　　大塚原遺跡群

東下原・大下原・竹花・舟窪・大塚原

――長野県小諸市東下原・大下原・竹花・舟窪・大塚原遺跡発掘調査報告書――

平成6年3月　発行

編　集　長野県小諸市教育委員会

発　行　長野県小諸市教育委員会
佐久建設事務所

印　刷　ほおずき書籍株式会社

1・9・32・39——竹花SB44　2～5・11・18・19・22・23・25～27・29・30・36・37——竹花SB77　6・7・12～14・38——竹花SB14　8——竹花SB31　10・16・17・20・28・33・35——竹花SB60　15——竹花SB30　21・24・31——竹花SB03　34——竹花SB75

40——竹花SB65　41・45・46・61・66・73・82・83——竹花SB80　42・53・88・91・97——竹花SB26　43・78・81・94——竹花SB76　44・70・71——竹花SB67　47・54・62～65・84・86・87・89・95・96——竹花SB81　48・50・51——舟窪SB18　49——東下原SB01　52・55・56・68・90・226——東下原SB02　57・58・76・79・98——東下原SB03　59——東下原SB05　60——竹花SB60　67——竹花SB70　69——竹花SB39　72・74・80・92——竹花SB69　75——大塚原SB18　77——大塚原SB35　85——竹花SB94　93——竹花SB75

99・100・107——大下原SB05　101——大塚原SB08　102・143・151——竹花SB56　103——大下原SB02　104——竹花SB82　105——竹花SB107　106・146——竹花SB75　108・119・152——竹花SB85　109～111・129・130・134・136・144——竹花SB33　112・133・137・147——竹花SB84　113——竹花SB116　114・120——舟窪SB03　115・140——舟窪SB04　116——大塚原ST17　117・118・121・124・128・138・141・150——大塚原SB13　122——舟窪SB20　123——竹花SB75　125・131・132・145——竹花SB45　126・139・148・149——大塚原SB05　127——大塚原SB30　135——竹花SB66　142——竹花SB09

153・159・167——大下原SB13　154・160——竹花SB35　155——竹花SB20　156——大塚原ST05　157——竹花SB43　158・174・180——竹花SB107　161・170・175・177・181——舟窪SB12　162・169——舟窪SB16　163——竹花SB103　164——竹花SB66　165——大塚原SB28　166・176・179——竹花SB105　168・171——竹花SB20　172——竹花SB37　173・178——竹花SB39　182——大塚原SB14

183・184・187～193・198～200・205——竹花SB38　185・186・194・196・208・215・216——竹花SB71　195・217——舟窪SB17　197——竹花SB16　201～203・212——舟窪SB07　204——舟窪SB20　206・211——舟窪SB18　207——竹花SB70　209——舟窪SB07　210——舟窪SB17　213・214——竹花SB20

218・222・227——竹花SB23　219・220・223——竹花SB87　221・224・225——竹花SB25　228——竹花SK01

229・238～240・242・244・246・250・251・253～256——竹花SK02　230——竹花SB28　231・247・249——竹花SB54　232～235・243——竹花SB113　236・237・245——舟窪SB14　241——竹花SB50　248・252——大塚原SB07

257——竹花SB02　258・301——竹花SB21　259——大塚原SB12　260～263・295——竹花SB65　264・265——竹花SB89　266——竹花SB108　267～271・285・288・293・300——竹花SK03　272——舟窪SB04　273・296——舟窪SB11　274～278・292・298——大塚原SB01　279～281・286・290・291・297——大塚原SB11　282・299——大塚原SB12　283——大塚原SB04　284・287・289・294——竹花SK04

302・307・308・318・319・323・324——舟窪SB13　303・309・327——大塚原SB02　304——竹花SB24　305・306——竹花SB46　310～313——大塚原SB10　314・316・320・322——大塚原SB19　315・325・326——大塚原SB22　317・321——竹花SB92

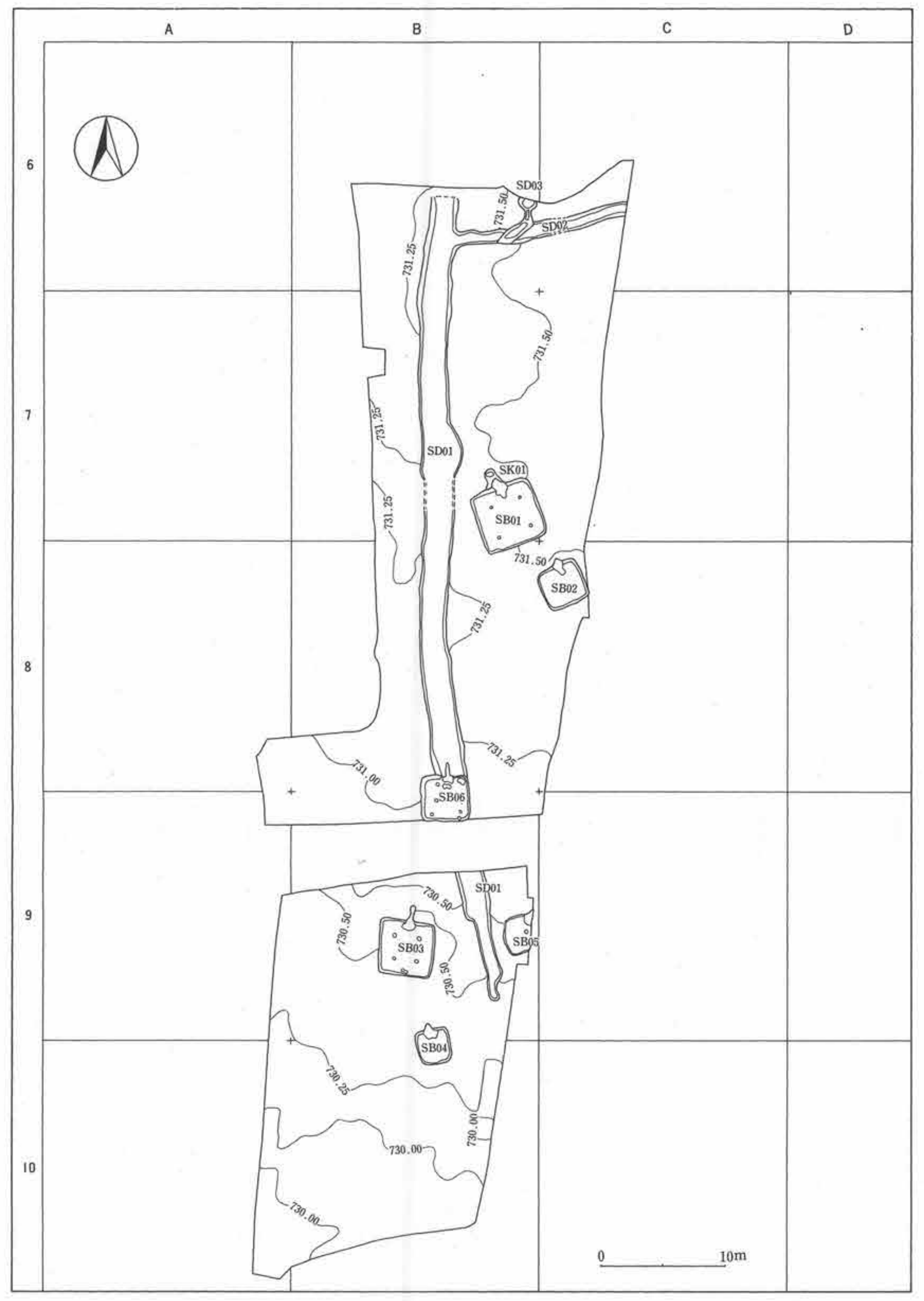
328・331・342～344・354——竹花SB10　329・353——竹花SB19　330・334～336・341——竹花SB63　332・333・345・346・348・349——竹花SB11　337～339・352——竹花SB74　340・355——竹花SB93　347——竹花SB64　350——竹花SB94　351・356——竹花SB05

357・360～364・369・370・373・374・401——竹花SB67　358・359・372・404——竹花SB08　365～367・375～378・402——竹花SB78　368・382～387・395・396・398——竹花SB118　371——竹花SB97　379・380・400——竹花SB96　381・393・394・403——竹花SB99　388～392・399——大塚原SB17　397——舟窪SB02　405——舟窪SK01

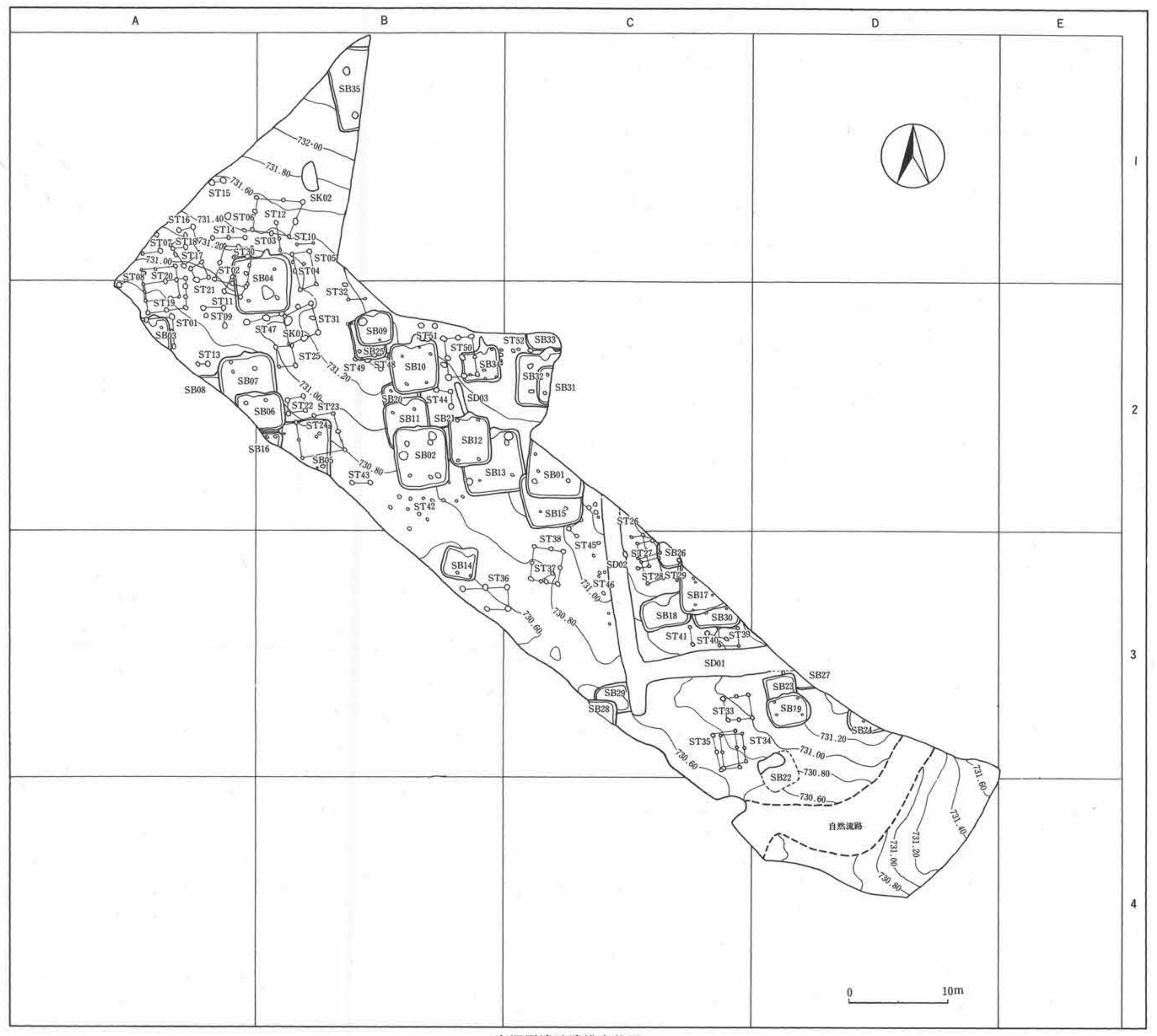
406・468——竹花SB29　407・425～427・450・465——竹花SB09　408・409・428～433・451・455～458・462・469——竹花SB32　410・422・434・446・452・466——竹花SB41　411・423・436～438・459・463——竹花SB49　412～418・420・439・440・447・448・460・464——竹花SB62　419・441～443・453・454・461・467——竹花SB106　421・444——大塚原SB06　424——竹花SB04　435——竹花SB47　445・449——竹花SB22

付図１　第Ⅲ期～第Ⅳ期の土器

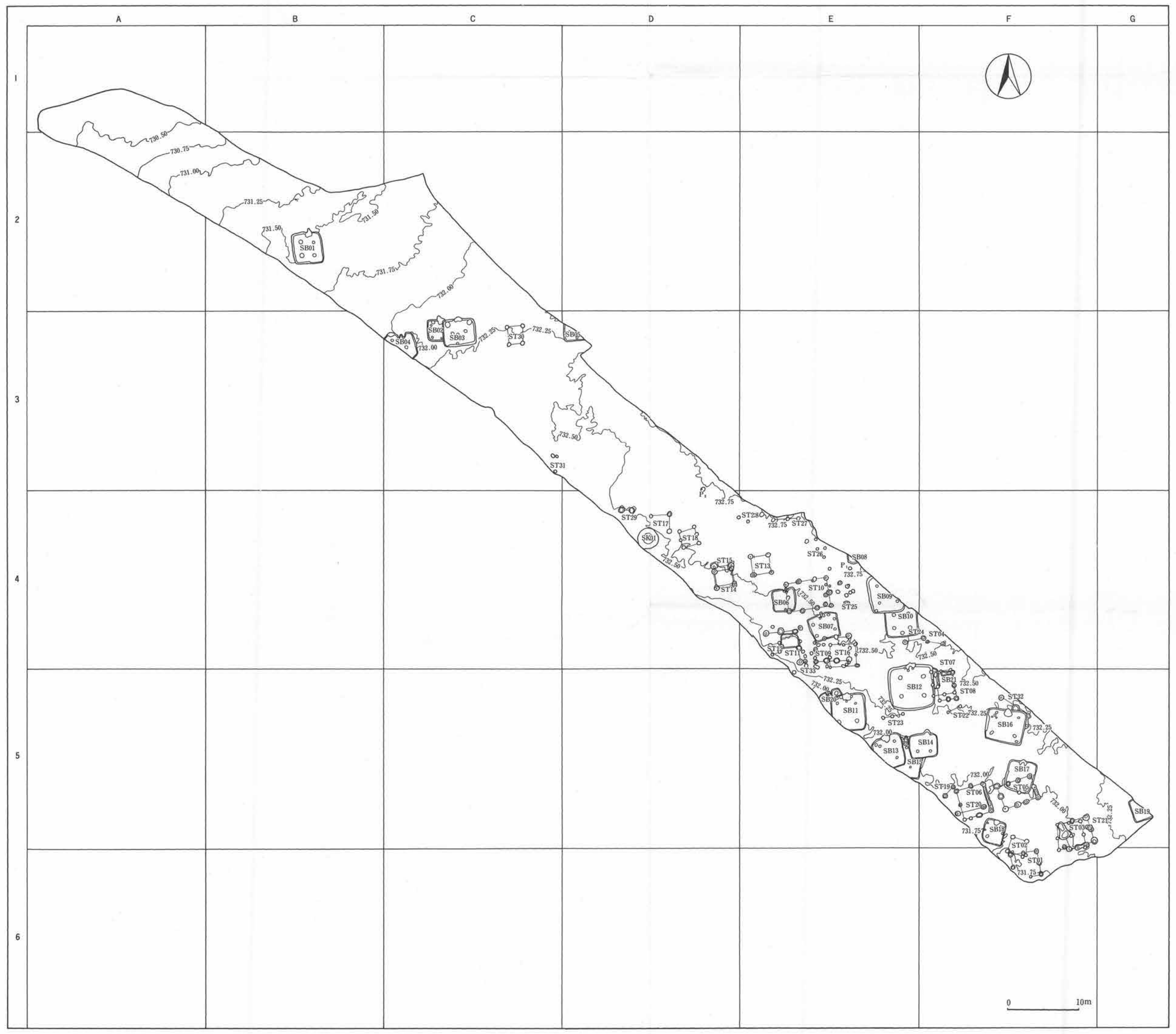
大下原遺跡遺構全体図（第２次）



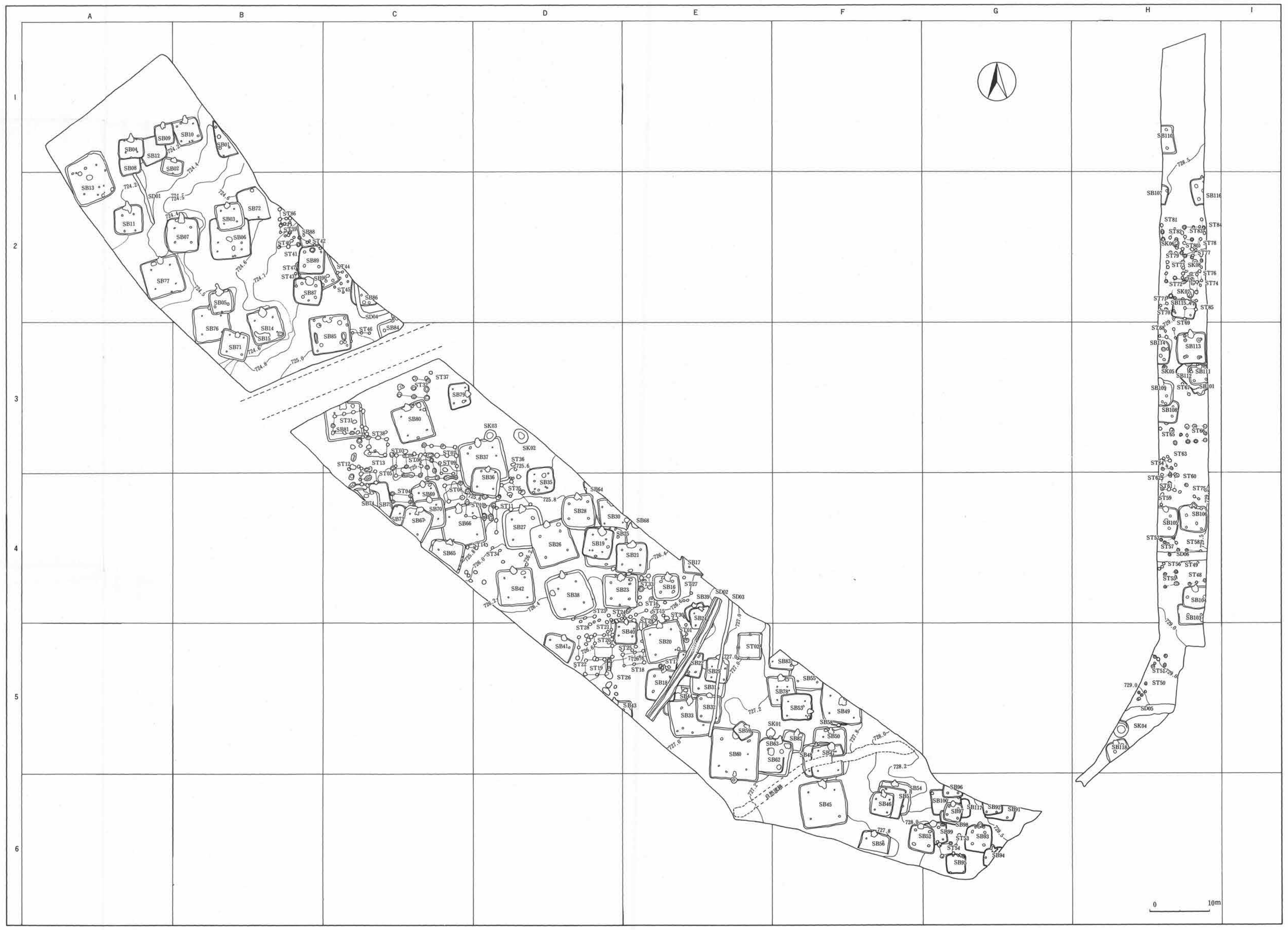
大下原遺跡遺構全体図（第１次）



大塚原遺跡遺構全体図



舟窪遺跡遺構全体図



竹花遺跡遺構全体図

付図２　大下原・竹花・舟窪・大塚原遺跡遺構全体図